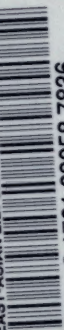


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03058 7836

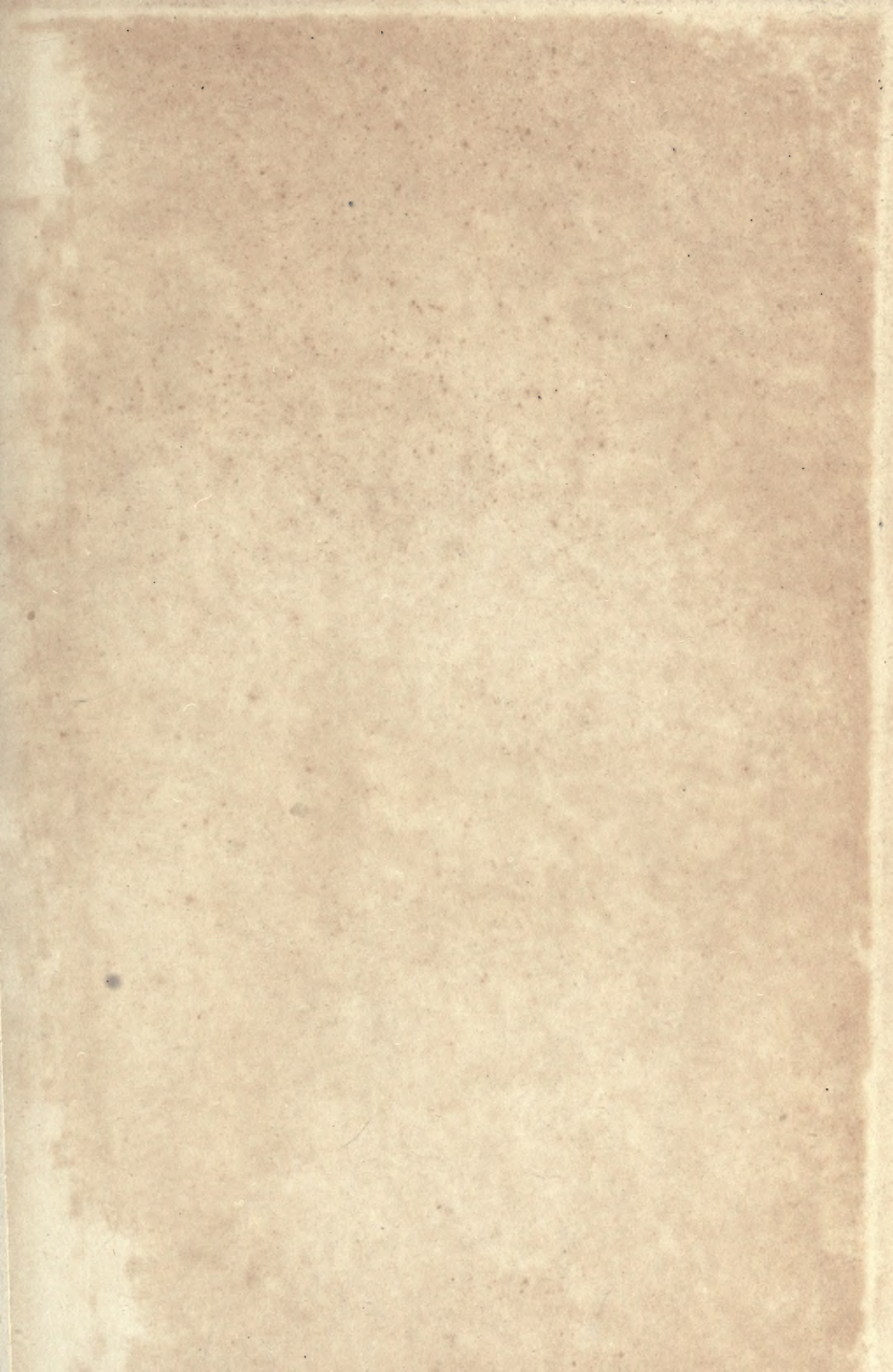


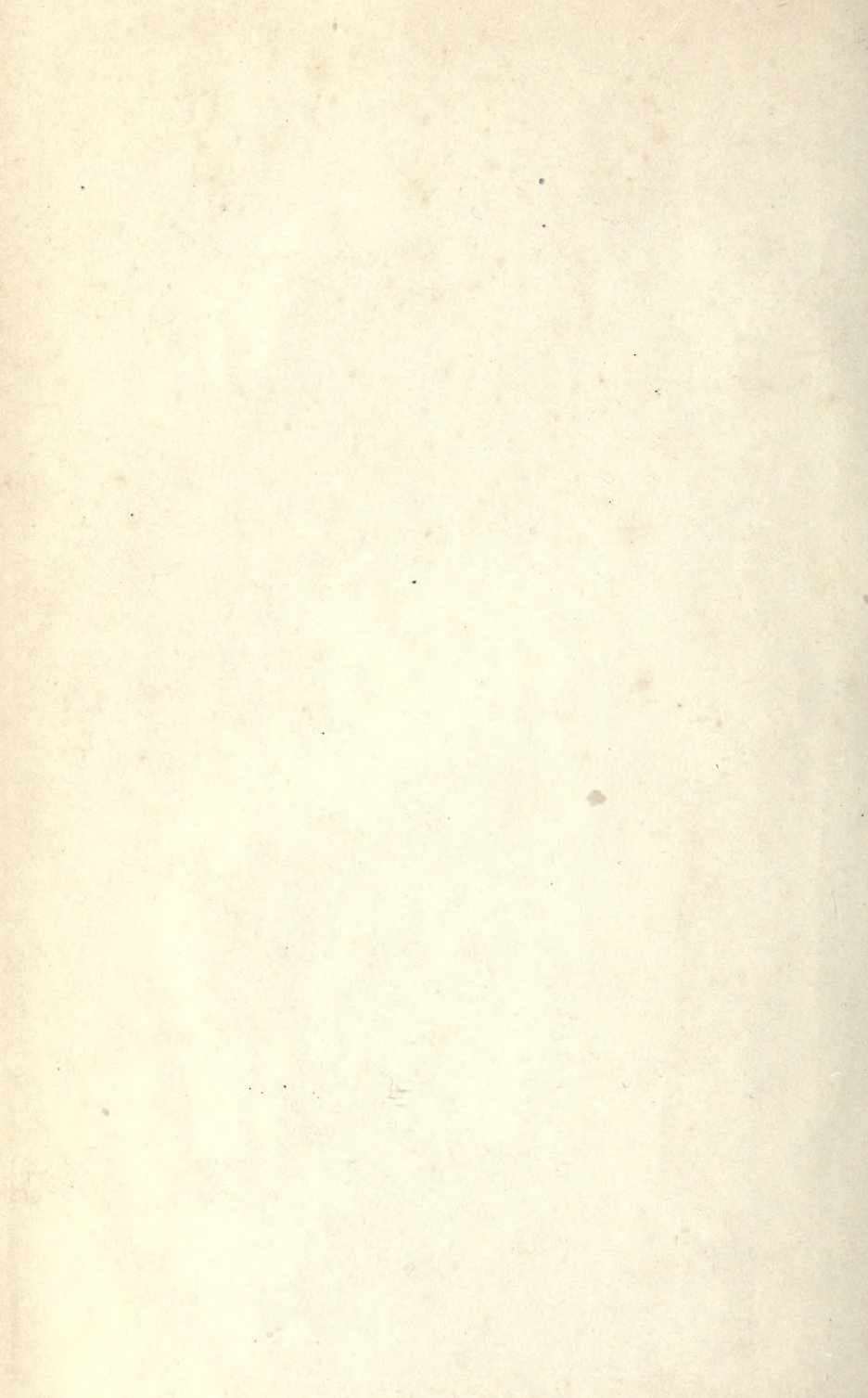
UNIVERSITY OF TORONTO
LIBRARY

WILLIAM H. DONNER
COLLECTION

*purchased from
a gift by*

THE DONNER CANADIAN
FOUNDATION





發賣演

內長書院村友會振

東京市小石川區神田三十二番地

電話三三二〇〇番

發行演

古事蹟演肝付會

內長書院村友會振
東京市小石川區神田三十二番地

前編卷

麻田 恒

東京市小石川區神田三十二番地

後編卷

川 島 肇

發行卷

藤 田 泰一

昭和六年四月五日發行

昭和六年四月一日印刷

（東京市小石川區神田三十二番地）

昭和六年七月一日印刷
昭和六年七月五日發行

(普及版古事類苑 全六十冊)

(白石製本所 製本)

發行者 後藤亮一

發行者 川俣馨一

印刷者 和田助一

東京市芝區金杉新濱町十二番地

東京市小石川區竹早町三十二番地
内外書籍株式會社內

振替東京三一七〇〇番

發行所 古事類苑刊行會

東京市小石川區竹早町三十二番地

發賣所 内外書籍株式會社

振替口座東京 八九六〇番
電話小石川(四) 一〇五四番
三三六九番

單式印刷株式會社印刷

明治三十四年七月二十一日印刷
明治三十四年七月二十五日發行

版權所有



神宮司廳

被免至重科之族者不可然之由被定、次強盜并重科之輩、雖被禁獄、申出其身、可進關東之山、可被仰六波羅者、次依違地頭之咎、所召置之庄官百姓等事、自今以後不可、誠早可、追出居住所云云、

〔吾妻鏡^四〕^十建長二年四月五日庚子、評定之次、式部兵衛太郎光政、去夜於御前依現無禮事、可被處罪科否、雖有其沙汰、所被相有也、但可誠、向後由被仰付式部大夫入道光西云云、

〔太平記〕長崎新左衛門尉意見事附阿新殿事

執事長崎入道ガ子息新左衛門尉高資、進出テ申ケルハ、^略○中 古典ニモ、君視臣如土芥、則臣視君如

寇讎ト云ヘリ、事停滯シテ武家追罰ノ宣旨ヲ下サレナバ、後悔ストモ益有ベカラズ、只速ニ君ヲ遠國ニ遷シ進セ、大塔宮ヲ疏黃ガ島ヘ流奉リ、隱謀ノ逆臣資朝俊基ヲ誅セラルハ、ヨリ外ノ事有ベカラズ、武家ノ安泰萬世ニ及ベシトコソ存候ヘト、居長高ニ成テ申ケル間、當座ノ頭人評定衆權勢ニヤ阿ケン、又愚案ニヤ落ケン、皆此義ニ同ジケレバ、道蘊^略○二再往ノ忠言ニ及バズ、肩ヲ擧テ退出ス、サル程ニ、君ノ御謀叛ヲ申勸ケルハ、源中納言具行、右少辨俊基、日野中納言資朝也、各死罪ニ行ルベシト、評定一途ニ定テ、先去年ヨリ佐渡國ヘ流サレテオハスル資朝卿ヲ斬奉ベシト、其國ノ守護本間山城入道ニ被下知、

〔庭訓往來〕侍所者謀叛殺害山海兩賊強竊二盜放火刃傷打擲蹂躪勾引路次狼藉鬪靜喧嘩等也、管領執事奉行人檢斷所司代賦訴狀於右筆之時、以小舍人或下部等召出犯人於侍所記錄申詞、依言色體嫌疑、糺明犯否之時、所犯已無所遁者、則召籠之、或及推問拷問拷訊等尋搜之、尋究與同黨類等、可斷罪者被誅之、可誠者禁獄之、可流刑者被記流帳、此外火印追放以下、隨辜輕重、其人是非、可被行之、^略○中 恐々謹言

八月七日

散位長谷部

謹上 大丞殿

擊折傷以上、若盜及強姦、雖傍人皆得捕繫、以送官司、若餘犯不言請而輒捕繫者、笞卅、殺傷人者、以故殺傷論、本犯應死而殺者、遠流、名例律云、其犯罪以造意爲首、隨從者減一等、家人共犯、止坐尊長、賊盜律云、造意雖不行、仍爲首者、

據考斯等文、承春惡行之科責、不可廻踵、尤令告知隨近坊里、且可經次第沙汰、歟、而稱爲刃傷人群黨、無是非於社頭咫尺、令殺害之條、亂吹之企、背憲章、設科條、歟、被尋決可、被加所當之刑哉、

一同與黨人亂入承春住坊、科條可爲何樣哉、云々、賊盜律云、謀殺人者、徒二年、擅興律云、擅發兵廿人以上、杖一百五十人、徒一年、五十人加一等、名例律云、其犯罪以造意爲首、隨從者減一等、若家人共犯、止坐尊長、又條云、二罪以上俱發、以重者論者、

就斯等之文法、原亂入之造意、祐春被刃傷之間、爲散彼阿黨、及此企、歟、擅發兵令發向者、可謂謀殺之結構哉、然者於造意輩者、不道二年之徒刑、歟、隨從之族、減一等、可有科坐、歟、○中略

以前條々大概勘注如件、

貞治三年五月十三日 大判事兼明法博士左衛門大尉石見權介坂上大宿禰明宗

幕府斷罪例

〔吾妻鏡十六〕正治二年二月二日戊午、今日出御、御所侍仰波多野三郎盛通、被生虜、勝木七郎則宗、依爲景時餘黨也、是多年奉昵近羽林○源賴家之侍也、相撲達者、筋力越人之壯士也、盛通進出則宗之後懷之、則宗振拔右手拔腰刀、欲突盛通之處、山次郎重忠折節在傍、雖不動座、捧左手取加則宗之拳於

刀膊不放之、其腕早折畢、仍魂惘然而輒被虜也、卽給則宗於義盛、義盛於御所侍問子細、則宗中云、景時可管領鎮西之由、有可賜宣旨事、早可來會于京都之旨、觸遣九州之一族云云、契約之趣、不等閑之間、送狀於九國輩畢、但不知其實之由中之義、盛披露此趣之處、暫可預置之由、所被仰也、六日壬戌、今日則宗罪名并盛通賞事、有其沙汰、廣元朝臣善信宣衡行光等奉行之、

〔吾妻鏡三十三〕曆仁二年○延應元年六月廿六日癸巳、今日評定犯科人事、於輕罪之輩者、被行赦之時、雖

爲之如何、次御膳落失之由、載宮寺解狀此事專可勘申之處、都不勘之、棄毀大祀神御之物者、以盜論、依此律條者、非無犯八虐之科歟、而創而不載罪名、疑殆尤甚、若存不可有罪之由歟、可被尋問歟、次所載勘文之延曆格說稱、宜有犯事須科決、先解任決、謂云々、雖引其文、不決解任之法、似無其詮歟、此等之相違、短慮易迷、重可被尋決歟、凡勘文之體、似有所寬宥、神慮難測、具被尋究兩博士可被決歟、其上下仰法家之輩、可令進別勘文歟、凡當宮事異他、代々沙汰之趣、嚴肅非輕殊極、淵量可有沙汰、無偏無黨、被行刑法者、定叶宗廟之熙鑒歟、

〔師守記〕貞治三年五月十三日丙子、御問條々、

一北野社祠官承春與問祐春、於夏堂

神殿南端
延經云々

成口論祐春、於當座數箇所被疵、承春於東棟門外爲

他人被殺害訖、且祐春被疵之刻、血散灑神殿之垂簾、大床以下、供花之神器云々、此條起自承春之所行之上者、其身雖令死亡、科條猶可及師匠親類哉云々、衛禁律云、闖入大社門者、徒一年、越垣者、徒二年、中社、小社、遞減三等、神部不覺、減二等、監神又減一等、闖謂不應入而入、古答云、大社者伊勢神宮也、大倭住吉、紀伊、出雲、智形等之屬爲中社、自餘爲小社、闖謂律云、闖毆殺人者、絞、以刃及故殺者、斬、又條云、若亂毆傷、不知先後輕重、以謀首及初闖者爲重罪、又條云、刃傷徒二年、名例律云、當條雖有罪名、所爲重者自從重者、

就斯等之文、訪科坐之法、刃傷之根源、起於闖亂歟、非謀殺之企哉、但謂其所者、神殿也、顯彼輩者爲祠官、忘肅敬之禮、插濫惡之情、忽於社壇成闖亂、及刃傷、令犯穢神殿以下神器之條、希代之惡行也、當條雖有罪名、所爲重者自從重、可科斷歟、而於承春者、依此所犯被殺戮之上者、其科難及師匠親類哉、是則謀反大逆之外、無緣坐法之故也、

一承春殺害下手人雖未及露顯尋沙汰之日、定不可有其隱歟、科條可爲何樣哉云々、捕亡令云、有盜賊及被傷殺者、則告隨近官司坊里、聞告之處、率隨近兵及夫從發處尋蹤、登共追捕、捕亡律云、被人毆

〔平戸記〕寛元二年十一月一日戊戌今日有八幡奉幣云々是被謝申俗別當兼盛闢諍事也。六日癸卯今日八幡恒例御神事依光資一黨之訴訟藏人次官顯雅往反是彼一黨俗別當兼盛被停止其職可從神事之由云々不然者不可叶之由言上之故也而未被告罪名之間其罪科難被左右也然而依彼訴遂被仰其由至所領等皆以被收公之由遂被下御教書了如此沙汰之間日景推移及申刻有評定吉田中納言予^{經高平}大藏卿等候其座件事財主顯惠法印讓彼庄預所職於顯清顯清弟子顯延得其讓顯惠弟子定勝法印一期之間無相違而定勝入滅之後其弟子定譽僧都改定也仍顯延先年依訴申^{顯惠讓狀云弟子等改此事者可處證}顯延訴訟重々經沙汰被裁斷之而定譽入滅之後其弟子定顯律師改之仍又訴申之定顯改之時文曆比改以前之沙汰被仰下依此事訴申歟大藏卿可付文曆後符之由申之子顯惠讓狀難被棄之尤是龜鏡不可依彼符爲宗法意申之吉田中納言大旨同之然而領家預所各別之儀領家申狀難被棄之由申之彼是不一定然而大旨ハ件讓狀顯延有道理之由被定了大藏卿書之彼卿頗有引汲定顯之氣仍右筆之所有加言之狀等仍猶被書直彌以遲引及乘燭云々先是顯雅持參兼盛罪名勘文大藏卿依仰讀申之返給顯雅可奏之由被仰了仗議八日十三日之間云々廿日丁巳今夜八幡宮訴申兼盛罪名事可有仗議也法家勘文先日外記所持來也

明法博士等勘申石清水八幡宮言上兼盛罪名事

右大臣

^{兼平}○藤原

定申云法家勘申之趣頗多不審不動御膳落失之事偏舉殿內忿爭之罪如何若稱非

大幣不入八虐歟漢汗行潦之薦豈敢爲輕哉其上入宗席無愼心臨祭祀及闕傷其罪不詳歟猶仰法家之輩可被召別勘文但至神社之訴者非常之斷又非無例宜在時儀^{略中}

中納言藤原朝臣定申云勘文之旨不審太多不引可引之本條不動可引之重科疑難之趣大略如人定申就中宣下之旨與勘奏狀先以參差如宣下狀者可勘申兼盛打傷光資面流血之罪名歟而所載勘文者兼盛與光資闢諍罪名云々就之雖設殿人之罪條曾不引流血之正條輕重之間可謂懸隔

斷罪

鎌倉室町時代ノ斷罪ハ一定ノ法ナク時ニ臨ミ事ニ隨ヒ其宜シキヲ權リテ處置セシガ如シ

斷罪制度

〔新編追加^{侍所}〕一侍所政所勾引人人賣事

件族任本條可處罪科也而鎌倉中并諸國市廛間多有專此業之輩云々至諸國者仰守護地頭等僥可斷罪於鎌倉中者可被捺火印於其面

〔吾妻鏡^{三十九}〕寶治二年五月廿日丁卯謀叛人出舉事其一類所從者不及沙汰至百姓等分者早可致辨之由可有御成敗者且所被仰遣六波羅也

〔吾妻鏡^{四十九}〕正元二年六月四日庚子就檢斷事今日有被定之條且被仰遣六波羅也所謂一國々守護人召進犯科人事

右召進關東無謂任被定置之旨可被沙汰之由可令相觸守護人但寄事於左右守護人致非據沙汰之由訴申之時者可令尋成敗矣

一可召關東犯科人事

右於訴重科張本者任先例可召進之至輕罪者於六波羅可有尋沙汰矣

〔建武以來追加〕一寺社本所領事^{文和元十一十五御沙汰}

嚴密可遵行之子細去七月以來載兩度事書之上就面々訴雖被成御教書寄事於世上物慾云守護云使節尙緩怠之間多以不事行云々難逃其咎但無勸錄者定有未盡之後訴歟所詮且取調先日散狀召出守護代并論人等尋究進行難誣之旨趣陳謝無謂者准先例可勘申罪名亦有殊會尺者隨事體加糺決宜經評議之由可仰五方之引付

思キヤ我敷島ノ道ナラデ浮世ノ事ヲ間ルベシトハ、常葉駿河守此歌ヲ見テ、感歎肝ニ銘ジケレバ、泪ヲ流シテ理ニ伏ス、東使兩人モ是ヲ讀テ、諸共ニ袖ヲ浸シケレバ、爲明ハ水火ノ責ヲ通レテ、答ナキ人ニ成ニケリ、

〔結城戰場物語〕めのどの女房をも強間有べしとて奉行がいで、とふやうは、やかに女房、今度の御むほんにくみの人数はたれ／＼にてましますぞ、さてのこりのわか君はいづくにまのびましますぞ、有のまゝに申せ、すこしもいつはりの有ならば、水火のせめにあはすべし、いかにいかにととふ、

〔吾妻鏡〕文治二年閏七月十日辛卯左馬頭飛脚到來狀云、搦前伊豫守○義源小舍人童五郎丸、召問子細之處、至于去六月廿日之比、隱居山上候之旨所申上候、如件白狀者、叡山惡僧俊章、承意仲敷等、令同心與力者、仍相觸其由於座主并嚴法印訖、又所經奏聞也者、

〔増鏡十四卷の別〕そのころなが月ばかり、元正まだまの、めのほごに、よの中いみじくさわざの、

元年

しる、なに事にかとさきけば、みの、國の兵にて、土岐の十郎○頼貞とかや、またたちみの藏人などい

ふものども、まのびのぼりて、四條わたりに立やごりたる事、有人にかくれておりけるを、はやう又つげゑらすものありければ、にはかにその所へ六はらよりをしよせてからめどるなりけり、あらはれぬぞや思ひけん、かのものどもは、やがてはらきりつ又別當資朝、藏人内記俊基、おなじやうに武家へとられて、きびしくたづねとひまもりさはぐ、ごのおこりは、御門○後醍醐醒世をみだり給はんとて、かの武士どもをめしたるなりとぞいひあつかふめる、さてその宣旨なしたる人ひとて、此ふたりをもあづまへくだしていましむべしとぞきこゆる、

今昔銀ノ鍛冶ニ□□ノ延正ト云フ者有ケリ延利ガ父惟明ガ祖父也其ノ延正ヲ召シテ廳ニ被下ニケリ尙妬ク思食ケレバ吉ク誠ヨト仰セ給テ廳ニ大キナル壺ノ有ケルニ水ヲ一物入レテ其シニ延正ヲ入レテ頸許ヲ指出シテ被置タリケリ十一月ノ事ナレバ篩ヒ迷フ事无限シ漸ク夜深更ル程ニ延正ガ音ノ有ル限リ舉テ叫ブ廳ハ院ノ御マス御所ニ糸近カリケレバ此奴ガ叫ブ音現ハニ聞ケリ延正叫々云ナル様世ノ人努々穴賢大波法皇ノ御邊ニ不參入ナ糸恐ク難堪キ事也ケリ只下衆ニテ可有キ也ケリ此事聞持テヤヲキス叫ビケルヲ院聞シ食テ此奴痛ク申シタリ物云ヒニコソ有ケレト被仰テ忽ニ召出シテ祿ヲ給テ被免ニケリ然レバ延正本ヨリ物云ヒ也ケレバ物云ヒノ德見タル者カナトゾ人云ケル

〔中右記〕嘉保二年六月廿九日予申殿下關白遷宮行事所召物全不進濟仰云儘放苛法使可令勘濟或閉門覆井可致責者

○按ズルニ此二條ハ共ニ刑ニハアラザレドモ附載シテ參照トス

火責

〔太平記〕僧徒六波羅召捕事

二條中將爲明卿ハ略中指タル嫌疑ノ人ニテハ無リシカドモ寂慮ノ趣ヲ尋テ問ン爲ニ召捕レテ齋藤某ニ是ヲ預ラル略中先京都ニテ尋沙汰有テ白狀有ラバ關東ヘ註進スベシトテ檢斷ニ仰テ已ニ噉問ノ沙汰ニ及ントス六波羅ノ北ノ坪ニ炭ヲオコス事錢湯爐壇ノ如ニシテ其上ニ青竹ヲ破リテ數雙ベ少シ隙ヲアケケレバ猛火炎ヲ吐テ烈々タリ朝夕難色左右ニ立雙テ兩方ノ手ヲ引張テ其上ヲ步セ奉ント支度シタル有様ハ只四重五逆ノ罪人ノ熾熱大熾熱ノ炎ニ身ヲ焦シ牛頭馬頭ノ呵責ニ逢ランモ角コソ有ラメト覺エテ見ニモ肝ハ消ヌベシ爲明卿是ヲ見給テ硯ヤ有ト尋ラレケレバ白狀ノ爲カトテ硯ニ料紙ヲ取添テ奉リケレバ白狀ニハアラデ一首ノ歌ヲゾ書レケル

になさせ給ふうへは、何の不足の御座有べきと、たゞさめんとなきいたる、奉行人數是を見て、さあらばいそぎいためてとへ、承ると申て、きりにて、びざをもませらる、其外七十餘度のがうもんは、目もあてられぬまだひなりや、ありて女房は、物申さんと申、まばらくがうもんをさむ、あらむぎむや、この女房、高聲に念佛十返ばかりとなへ、みづからまたをくひきりて、かしこへこそは捨にけれ、

〔保元物語〕謀反人各召捕事

刑法かぎり有事なれば、七十五度のがうゑんをいたすに、初はこゑをあげてさけびけれども、後にはいきたえてものいはず、日こそおほきに七月十五日、今日しもかゝるつみに行るゝ事こそむざんなれ、

〔運歩色葉集〕（賀セウジン）拷訊

〔羅筆往來〕夜討強盜之倫、竊盜海賊之族、行左遷流罪、可及禁獄死罪、經拷訊者、暫可被相勞、贖咎之後、被赦免者、先規也、

○按ズルニ庭訓往來ニモ拷訊ノ事アリ、斷罪篇ノ雜載條ニ引ケリ、

〔碧山日錄〕寛正二年三月廿二日癸亥、客曰、南禪寺、近日有僧爲黨火結讐者、所居源相公、○足利義政聽之、

欲捕囚其徒、而不知之、仍命大衆於土地祠前、俾署爲惡者名、以其多爲驗也、名之爲無名之判也、遣大史監之、遂裏其署名、致於源相公、又司寺務之西堂三人、以菊圃爲首、同謁公、以啓署名、而二僧之名、多者之有也、乃召其僧、名曰鱗、曰琳、下獄、隨罪、其夜有餘黨人大雲、殺西堂菊圃、而截其頭、聆者爲之悲嘆、廿八日己巳、獄官多賀某、決南禪二囚僧之罪、以數升水、其口噴之、吞之、其苦萬端、然竟不言所作之答云、

〔今昔物語 二十八〕銀鍛治延正蒙花山院勘當語第十三

〔二水記〕永正十四年九月十七日、伏見殿御所侍、有生島右京亮云者、強問之、盜人、同類之由、令白狀云云、仍闔閣搦取之、既及強問云々、伏見殿中有馳走、先不可有聊爾者之由、被申、武家御返答之趣、當時堅御成敗之處、已同類之由、白狀之上、不可及力之由、被申了、不便至極也、今夜令強問、無申旨、連日四ヶ度令強問、申旨無之云々、虛名歷體也、不便次第、言語道斷也、

〔切支丹來朝實記〕切支丹宗門ハ、永祿十一年より天正十三年迄凡十八年の間繁昌しけるが、秀吉公天下と成り、終に此宗旨を破滅し給ふ、略○中因茲此時切支丹宗門と云は破滅せり、彼のはびゆんは肥前國へ逃下り、後天草にて宗門を弘め、かうすもうは遠江國へ下り、四年過て、泉州堺夷町中濱といふ所に市橋庄介と名を改め、外醫と成り居住す、扱しゆもんは越前へ逃隠れしが、是も四年過て、堺東濱と云所に島田清庵と改め、本道の醫師と成りて居住す、然るに天正十六年九月のころ、略○中先年切支丹破却せし時徒黨しけるは、びゆん、ごうすもふ、しゆもん、三人の行方しれず、奴原是に極れりと、きびしく拷問なされければ、ごうすもふ、しゆもんなるよし、白狀致しけり、略○中則兩人共に粟田口にて仕置に仰付られけり、

〔備前文明亂記〕檜村與三兵衛ガ下人、密ニ申シケルハ、夜前ノ火事ハ頼ミタル與三兵衛ガ籌ノ由、始ヨリノ巧ノ發リドモヲ、一々次第ニ告知ラセケル間、是非ナク檜村兄弟ヲ搦捕拷問スル處ニ、白狀歴然タリ、是ニ依テ終ニ彼兄弟ヲ斬戮ス、

〔結城戰場物語〕かくて京都にもつきしかば、御實檢ありて後、めのどの女房をも強問有べしとて、奉行がいで、ごふやうは、やかに女房今度の御むほんに、くみの人數はたれゝにてましますぞ、さてのこりのわか君は、いづくにまのびましますぞ、有のまゝに申せず、こしもいつはりの有ならば、水火のせめにあはすべし、いかにゝごどふめのどの女房うけ給はり、さん候、御むほんのくみ人數は、女の身に候へば、さらにまらず候、さて若君とては、只二人御座有しを、かやう

云、是僧達濫行、魚食等不儀事共爲被糺明也、人供下部被嗽問、就白狀僧四五人又被召捕、寺家周章不能是非云々、

〔東寺百合古文書^{十四}〕廿一口評定引付應永卅一
甲辰 六月三日 違害除之

一 實相寺牛盜事

實相寺前御房築地之内、近年以外馬牛放樹已下被煩問、別當已下口諸會實相寺前馬牛事有之者、三百文沙汰科息分、可取馬牛之由、近年被定畢、然歟冬彦太郎事、五月晦日彼御房前放畢、仍牛取留可沙汰科料之由被問答畢、種々申問先牛御房中ニ被留畢、然六月一日夜、牛俄失畢、仍自或廳内々告示云、此牛彦太郎被下主密々盜取之由申問、仍寺家被訴問及評議畢、實盜犯歟之由主方へ被尋之處、無其儀之由申畢、然實不煩被口問、六月六日於御影堂可及剛文之由衆議畢、然而六日公文所來申云、歟冬老者共別參申歟申ス其子細は、剛文事承畢、可致沙汰歟之處、自然起請文後、万一聊凶事出來者、彼等罪科可爲必定歟、然者兩三人逐電勿論事思は、被與隆之至哉之由、剛文之儀被聞者、可畏入之由申之、然者涯分百多科料可進之由員數一樣、然者可進之、以此分涯分可申沙汰之由公文所媒介申問、此分披露之處、被聞請文之儀、以科料分一樣分被落居畢、

〔建内記〕永享十一年六月廿六日壬寅、傳聞自和州吉野 囚人法師并山到來、爲飯尾肥前守爲種等奉行、於淨蓮華王院先日兩日被拷問之、大覺寺殿御在所不知之云々、於墳墓之地拷問難堪事也、尤可被優古賢者歟奉行人就住持所緣、依便宜申行之條、太自由歟、

〔建内記〕嘉吉元年六月十八日癸未、傳聞先日鎌倉故持氏卿子息首京着之時、令供奉結城ノナニガシトテ、御乳父ト稱シテ奉付テ京着了、御首實否及拷問申狀之趣不分明云々、又說爲實首去十四日於河原被切首了云々、

此僧達ヲ嗽問セヨトテ、侍所ニ渡シテ、水火ノ責ヲ致ケル、文觀房暫ガ程ハ、イカニ問レケレ共落給ハザリケルガ、水問重ケレバ、身モ疲レ、心モ弱クナリケルニヤ、勅定ニ依テ、調伏ノ法行タリシ條子細ナシト白狀セラレケリ、其後忠圓房ヲ嗽問セントス、此僧正天性臆病人ニテ、未責先ニ主上醒醒後山門ヲ御語アリシ事、大塔宮御振舞、俊基隱謀ナンド、有モアラヌ事マデモ、殘所ナク白狀一卷ニ載ラレタリ、此上ハ何ノ疑カ有ベキナレ、共同罪人ナレバ、問ベキニ非ズ、圓觀上人ヲモ明日問奉ベキト評定アリケル、其夜相模入道高北條ノ夢ニ、比叡山東坂本ヨリ、狼共二三千群來テ、此上人ヲ守護シ奉ル體ニテ並居タリト見給、夢ノ告、只事ナラズト思ハレケレバ、未明ニ預人ノ許ヘ使者ヲ遣シ、上人嗽問事暫閣ベシト被下知處ニ、預人遮テ、相模入道方ニ來テ申ケルハ、上人嗽問事、此曉既ニ其沙汰ヲ致候ハン爲ニ、上人ノ御方ヘ參テ候ヘバ、燭ヲ挑テ觀法定坐セラレテ候、其御影後ノ障子ニ移テ、不動明王貌ニ見サセ給候ツル間、驚存テ先事ノ子細ヲ申シ入爲ニ參テ候也トゾ申ケル、夢想ト云示現ト云、只人ニアラズトテ、嗽問沙汰ヲ止メラレケリ、

〔太平記十三〕北山殿謀叛事

竹林院中納言公重卿宗公馳參ジテ被申ケルハ、西園寺大納言公宗、隱謀ノ企有テ、臨幸ヲ勸申由、只今或方ヨリ告示候、是ヨリ急ギ還幸成テ、橋本中將俊季并春衡、文衡入道ヲ被召テ、仔細ヲ御尋候ベシト被申ケレバ、略中則中院中將定平ニ、結城判官親光、伯耆守長年ヲ差副テ、西園寺大納言公宗卿、橋本中將俊季并文衡入道ヲ召取テ參レトゾ被仰下ケル、略中公宗卿ト文衡入道トヲ召捕奉リテ、夜中ニ京ヘゾ歸ケル、大納言殿ヲバ定平朝臣ノ宿所ニ、一間ナル所ヲ攻籠ノ如クニ拊テ押籠奉ル、文衡入道ヲバ、結城判官ニ被預、夜晝三日マデ、上ツ下ツ被拷問ケルニ、無所殘白狀シケレバ、則六條河原ヘ引出シテ首ヲ被刎ケリ、

〔看聞日記〕應永二十三年六月廿日、傳聞今日相國寺人供行者下部等百四五十人、侍所一色召捕云

仰下したりければ、腰居悦て、かしらにうちかつぎて、いざり出けるをみて、實犯なりけり、かたはの身なれ共かくしてぬすみてけるささとりて、科にをこなはれけり、ゆゑしかりけるはかりごとなり、

〔運歩色葉集〕穿鑿

〔甲陽軍鑑八〕山縣三郎兵衛同心北地と申、伊勢牢人、身上十六貫取者也、知行所惡所なりとて、山縣三郎兵衛に種々訴訟をいたすを、大場民部左衛門と申、山縣賂人、北地他國者なりとあなづり、山縣に申きかせず候、扱又北地、各中のよき傍輩共に申きかせ、置文をして腹をきる、時○中山縣三郎兵衛迷惑いたし、既に改易たるべきに、原隼人佐三枝勘解由左衛門、曾禰與市助三人の居所にて、熊野の牛王のうらに誓紙を仕る、北地五郎左衛門、訴訟之旨不存由申上る、其後信玄公聞召分られ、さらばとて、其頼まれたる山縣が内の者、太場民部左衛門をよべとありて、右二人、原曾禰、三枝を以て御尋ある、則又長坂長閑跡部大炊に、目付衆二人、横目衆二人さしそへられ、委尋給ひ、其上にても、うろんにおぼしめし、岩間大藏左衛門を召て、物かげでこれをきけと被仰付御穿鑿なり、山縣申上るごとく、何の口も、大場無念にて、山縣に申きかせざるに付て、大場一類、盡御成敗也、山縣三郎兵衛御奉公申たるうち、是ほど迷惑なる事終に是なし、

〔運歩色葉集〕拷問

〔庭訓往來〕所犯已無所遁者、則召籠之、或及推問、拷問、拷訊等、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿三年

○安貞元年

三月九日戊午、隱岐院

鳥羽

三宮稱有巧奸謀之輩、伴黨四五人也、前濱

邊於民屋、波多野中務二郎經朝生虜進之、金窪左衛門尉、平三郎左衛門尉、奉仰拷問之處、伊豆前司所從爲百姓之由進申狀云云、

〔太平記〕三人僧徒關東下向事

出同篇分可申之由衆議治定畢、

同十四日 連署除之

一所司代多賀豐後申云、於賊物屋內雜具者任寺家法不可綺申也、論人既罷出之上者召給訴人可致糺明之間、是非共可被給之、若有御難認者進人可給之由申旨披露之處、依出論人可給訴人由申條尤候間、相副兩雜掌可被出之由衆議治定畢、○中略

同十九日 連署除之

一所司代所爲禮令隨身貳百疋罷向之處、則令對面申、而今茂盜人之間事檢斷賊物、屋內以下事全非綺申候、懸疑人罷出可令糺明之由申之間、可被給訴人之由申入許候也、然ニ不審雖尤候、差無所見之間、不能糺明、無爲ニ致成敗候畢、萬一後日ニ露顯之子細候者承可致其沙汰云々、次吉田所へ百疋令隨身畢、

内問

〔葉黃記〕寶治二年八月廿五日己亥、官人章宗、章種、章時、章澄、久茂等來、於門下有内問事、散禁之輩遣獄所、其中有七十餘之老翁、依入實科被宅出之處、諸預難給獄所歟、然而重犯也、宿置之又殺害人嫌疑等召問之、於門前問之、子細乍立久茂注之、依無道者、章澄雖爲申次、子細予○檢非違使別直尋當藤原定國聞之畢、

〔古今著聞集〕卷十二中納言兼光卿建久二年十二月廿八日に檢非違使別當に成て、廳務ここにおほく沙汰ありけるに、賤者の小屋に、ちいさき釜のうせたりけるを、隣なりける腰居がぬすみたりける云つぎ有て、賊物をさがし出したるに、腰居申けるは、手もちてこそわざりありき候へ、手をはなれてはいかでか取侍るべき、他人ぞ盜をきて侍らんと陳じければ、まことに申所理也と沙汰有けれど、ぬすまれたる者の訴訴つよくて、大理の門前に召出して、内問有けり、相論事ゆかざりけるに、別當謀をめぐらして、此腰居申所不便なり、たゞ此釜を腰居にとらすべしと

云、或相語病人、愈衆病、或非盲目者、令開眼目、種々事、彼法師等所行之由、露顯之間、被召捕、被糺問之間、令白狀云々、

〔看聞日記〕永享三年十一月十日、抑聞今日院廳、資行侍所赤松

召捕云々、是新御臺御方違御出路頭、

資行參會、狼藉之體にて見物申、其外緩急之事共達上聞之間、侍所ニ被仰搦取云々、十二日抑定

直以使申、資行事罪科者、土岐一族誠大伊勢國司北畠同心謀反人也、國司被誅之後、爲僧形洛中

隱居、資行宿所近邊、隱居申通之由、露顯土岐一族ニ被仰搦捕被誅了、資行も被召之間、推量風氣之

由申不參、廣橋有可尋事之由申、度々喚之間、參之處、侍所待儲於路頭、召捕伊勢許へ渡之可被糺問

云々、御臺參會ハ以前歟、依此題目被召捕云々、仙洞後小松へ此由被申、思食儲之由被仰云々、十五

日、抑治部卿經時朝臣、依資行事、十二日逐電云々、資行糺問彼朝臣同心之由、白狀申、仍逐電云々、不

便且不思議事也、

〔東寺百合古文書〕百十五

〔廿一口評定引付〕寛正四年發末

五月四日、連署除之

一昨夜侍所へ入小盜、色々物取之、就其金阿之事、聊有不審子細、仍召取之可預御糺明之由申之間、

差遣公人之處、不見之間、則引退畢、略中

同十二日、連署除之

一就侍所盜人糺明金阿之、付公文於所司代之間、以公人彌九郎可召給訴人之由申之旨、致披露之

處、任自往古例爲寺家可致糺明也、其段可有預御心得之由、以兩雜掌可被仰之由治定畢、

同十三日

連署除之
利評定過分廿二也

一彼盜犯事、任先規於寺家可致糺明之由、被仰于所司代方之處、於檢斷賊物等者可爲寺家御計、至

糺明者、任大法所司代可存知之間、急可被給訴人之由、御返事申之通、兩雜掌披露之處、猶重年預罷

四郎大夫伺御旨面縛之處懷中帶一尺餘打刀殆如寒氷又覽其背魚鱗覆眼上彌知食有害心者之間被推問之名謂申言上總五郎兵衛尉也爲奉度幕下數日經廻鎌倉中云云即下賜于義盛（和可）召尋同意輩之旨被仰舍之云云二月廿四日丁卯於武藏國六連海邊囚人上總五郎兵衛尉忠光梟首（略）推問之間申云更無同類但越中次郎兵衛尉盛繼去年之比隱居丹波國彼同存會稽之志歟於當時者難知在所曾不定一所云云

〔吾妻鏡二十九〕貞永二年（元年）天福八月十八日早旦武州（北條）爲奉幣于江島明神出給之處前濱有

死人是被害者也（略）有犯科者否可搜求其內家山被仰下之間諸人奔走而名越邊或男洗直

垂袖其滴血也成惟岩平左衛門尉生虜之相具參御所推問之刻所犯之條無所遁是博奔人也仍殊

可停止其業之由下知云云

〔吾妻鏡四十八〕正嘉二年八月十八日甲午諏方刑部左衛門入道被召置之雖被加推問敢不承伏所

本執仍召取所從男（太即高）被推問之任法之處氣不能言結句相誘之主人已令獻白狀畢爭可論申哉

之由奉行入雖盡問答伴男云主人者兼而願糾問之耻辱仍申歟於上臈之身者更不痛其耻任實正

所論申也但主人白狀之上不及重御問歟云云

〔吾妻鏡二十一〕建曆三年（元年）建保二月十五日丙戌千葉介成胤生虜法師一人進相州（北條）是叛逆

之輩中使也（略）中相州即被上啓此子細如前大膳大夫有評議被渡山城判官行村之方可糾問其實

否之旨被仰出（略）

〔新抄四〕文永四年二月六日甲子殺害基範之犯人左衛門尉某究問之我傍輩左衛門尉重保（信基側臣青侍）

所爲云々仍被召彼重保者也

〔看聞日記〕應永廿三年十月十四日聞桂地藏奉仕阿波法師并與黨七人自公方被召捕被禁獄云々彼法師非阿波國住人近鄉者也與黨同心之者共數十人種々回謀計地藏并ニ狐ヲ奉付顯奇得云

古事類苑

法律部三十

中編

推鞠

鎌倉室町時代ニハ、推鞠拷訊ノ制、往古ノ如ク備ハラズ、其時ニ臨ミテ適宜ニ之ヲ行ヒシモノ、如シ而シテ水責、火責等ノ酷法ハ、益々行ハレシニ似タリ、

〔庭訓往來〕召出犯人於侍所^略○中或及推問。拷問。拷訊等尋搜之、

推問

〔庭訓往來抄〕犯人ヲ宛行フ様ノ事、先過人ヲ召籠置テ、一ニハ推問トハ先オシトフ也、子細ヲ不^レ謂^ルザ^レ時梯ニ載テ水ヲクル、ナリ、又小蛇ヲ口ヨリイル、也、二ニハガウ問トハ張付ニスル也、其後廿ノ爪ヲ起ス也、又錐ニテ脚ヲモム也、三ニハ拷訊トハ火頂ト云鐵ノ鉢ヲアカク燒テ犯人ノ頂ニ覆フ也、首ヲ則チ燒ケ碎ル也、

〔吾妻鏡六〕文治二年正月廿九日戊申豫州^{源經義}在所、子今不聞、而猶有可被推問事、可進靜女之由被仰北條殿云云、

〔吾妻鏡九〕文治五年十二月廿八日癸丑、平泉內無量光院供僧一人^{公助}爲囚人參着是慕泰衡之跡、欲奉反關東之由依有風聞所被召禁也、今日以景時^原○梶被推問子細之處、件僧謝申云、師資相承之間、清衡已下四代歸依續佛法惠命也、^略○下

〔吾妻鏡十二〕建久三年正月廿一日甲午、渡御于新造御堂地、犯土之間連土石匹夫等之中、有左眼盲之男、幕下覽恠之、彼者自何國誰人進哉之由被尋仰、仍景時^原○梶雖相尋之不分明、被召寄御前佐貫

幕府斷罪例

難載

一一八九

一一九〇

古事類苑

法律部三十

中編

推鞠

推問

一一七五

糾問

一一七六

內問

一一七八

穿鑿

一一七九

拷問

同

拷訊

一一八三

水責

同

火責

一一八四

口供

一一八五

雜載

同

斷罪

斷罪制度

一一八六

朝廷斷罪例

一一八七

同○天正十
年四月

十一日、信長公東國法度仰置レントテ、羽林信忠卿二位法印ニ評議有テ條子書立給

ヘリ、中略

一訴事出來之時深ク可被盡淵底也、溺欲之輩ハ不聞理非之當否、而或計賄賂之多少論親疏遠近、又ハ憚權威之所在、如此則誰カ可成安堵之思乎、是以彌初條之旨可有納得虞萬ノ訴、聽訟者賢人ノ事、無訴者聖人ノ化、以可被其心得事、

〔義演准后日記〕慶長二年六月五日、護摩如常、天台ト眞言相論之事、德善院へ訴訟、大覺寺宮ヨリ覺勝院、東寺ヨリ光明院、寶菩提院、當寺ヨリ演賀律師、是ハ則門跡ヨリ使者也、山上年預返事未一途、十六日、德善院僧正へ、被訴訟、東寺并大覺寺當寺ヨリ今日使者書付遣之、返答云、於禁中可被糺明云々、先以珍重、十一月廿五日、大佛千僧會、眞言導師大覺寺宮出仕云々、天台導師妙法院宮云云、當月ハ天台宗第一、自宗第二番也、于今訴訟不究、

從朝政勤仕内裏大番總可致忠節也。朝政可沙汰事者謀叛殺害人事也。相交國務不可成敗人民訴訟。凡觸事不可煩國中住人之旨被仰含云云。

〔小槻季繼記〕太政大臣實基公檢非違使別當ノ時、八歲男子ヲ二人ノ女面々ニ我子ノ由ヲ稱シケル間、法曹輩計申云、任法意旨三人ガ血ヲ出テ流水ニ流トキ眞實ノ骨肉ノ血末ニテニ成リ、他人ノ血氣ハ末ニテ別ナリ、如此可沙汰之由計申之處、大理云、八歲者可出血之條尤不便事也。今度沙汰之時彼三人并諸官等可參之山被仰テ、其日遂不被決雌雄、後沙汰日彼三人諸官等令參之時、數刻之後大理出座被仰云、件女性兩人シテ此男子ヲ引テ引取タラムヲ母ト可用ヨシ被計ケル時、二人シテ此子ヲ引ケルニ被引テ損ゼントスル時ハ、一人ノ女ハ放チ、今一人ハ只引勝ントス、如此スル事度々、其時大理云、放ツル女ハ實母也、イタハルニヨリテ如此放モノ也、今一人ハ無勞心、只勝タント思心計ニテ引也云々、無相違放ツル女ハ母也、當座被引ハ荒ニハ似タレドモ思慮ノ深トコロ也、實基公ハ法曹ニ達スル人也。

〔業陰比事上〕黃弱叱嬖

前漢潁川太守黃霸本郡有富室兄弟同居弟婦懷妊其長姪亦懷妊胎傷匿之弟婦生男長姪輒奪取以爲己子論爭三年訴於霸霸使人抱兒於庭中乃使婦音弟、惟婦曰姪競取之既而俱至姪持之甚猛弟婦恐有傷於手而情甚悽慘霸乃叱長姪曰汝貪家財欲得此子寧慮意頓有所傷乎此事審矣姪伏罪出風俗通。

〔建内記〕嘉吉元年十月十九日壬子南都傳奏事近年不被置之仍寺社訴訟相積歟可被定其仁之山及御沙汰被仰中山宰相中將定親、就雜事近日旁傳奏之間被仰云々之處固辭所詮任先規予可存知由勅定之旨關白給使者木幡中將雅豐朝臣承之難治非一事申子細了。

〔信長記十五〕信長公東國御進發并勝賴父子討死之事

事之成就或寄付神社佛寺或寄付權門勢家之輩者永不可有勅許剩可停止向後訴訟之趣入道殿被仰也至此條者事已一定了。○中但到諸訴之決斷如被仰下真實可有施行者又是德政之最要也
 【吾妻鏡 三十三】延應二年○仁治元年十二月廿一日庚辰今朝前武州○北條泰時相具評定衆等令參右大將家法華堂被修佛事莊嚴房僧都行勇爲導師是依爲故隱岐次郎左衛門入道行阿初七日忌景也凡向後於評定以下携公事輩之沒後者必可勵追善之由及衆談云云、

【沙石集 六】爲母有忠孝人事

一鎌倉ノ故相州禪門ノ内ニ祇候ノ女房有ケリ腹アシクタテシカリケルガ或時成長ノ子息ノ同ジクツカフマツリケルヲイサカノ事ニヨリテ腹ヲ立テ打タントシケルホドニ物ニケツマヅキテタクタフレテイヨハラヲスエカ子テ禪門ニ子息ソレガシワラハラ打テ侍ト訴申ケレバ不思議ノ事也トテ彼俗ヲ召テ實ニ母ヲ打タルニヤ母シカト申也ト問ル實ニ打テ侍ト申禪門返々奇恠ナリ不當也トシカリテ所領ヲ召シ流罪ニ定ニケリ事ニガシクナリケル上腹モヤウヤクキテ漫猿ク覺エケレバ母又禪門ニ申ケルハ腹ノ立マニコノ俗ワレヲ打タリト申上テ侍リツレドモマコトハサル事ハ候ハズヲトナゲナク彼ヲ打タントシタタフレテ侍ツル子タサニコソ申候ツレマメヤカニ御勘當候ハン事ハアサマシク候ユルサセ給ヘトケシカラズウチナキ申ケレバサラバメセトテ召テ子細ヲタヅ子ラル實ニハカデカ母ヲウチ候ベキト申スサテハナドハジメヨリアリノマニ申サマリケルト禪門申サレケレバ母ガ打タリト申サン上ハ我身コソトガニモシヅミ候ハメ母ヲ虚誑ノ者ニハイカバナシ候ベキト申ケレバイミシキ至孝ノ志フカキ者也トテ大ニ感ジテ別ノ所領ヲソヘテ給ハリコトニ不便ノ者ニオモハレケリ末代ノ人ノ心ニハアリガタクコソ、

【吾妻鏡 十六】建久十年十二月廿九日丁亥以小山左衛門尉朝政補播磨國守護職畢住國家人等相

右就訴陳狀擬有其沙汰之處兩方出和與狀畢如有時去年正安元十二月十九日狀者自弘安六年至于去年永仁十箇年分稱令對捍雖番訴陳以和與之儀用途三十八貫文明春二月十日以前可沙汰送實總方且自當年當村有時知行分大神田所當并司名以下所務於實總知行之時者不可致對捍云々取證如實綱同月廿日狀者自弘安六年至去年分對捍由實綱雖致訴訟用途三拾八貫文可沙汰渡次自當年之濟物并所務於實總知行者不可有違亂有限所出物付作人不可令致對捍之由有時出狀之間令停止訴訟云々此上者不及異儀互守彼狀可致沙汰矣者依鎌倉殿仰下知如件

正安二年三月廿八日

陸奥守平朝臣華押宣時北

相模守平朝臣華押貞時北

〔朽木文書〕和與

佐々木四郎右衛門尉行綱女子尼心阿代淨圓與同出羽五郎義信代光圓相論近江國高島本庄

案主職并後一條地頭職事

右案主職後一條地頭職者心阿帶關東安堵御下文御下知并六波羅御下知次第手繼等相傳知行之處建武四年正月廿日義信欲彼所務之條無謂之由訴申之處義信又備關東安堵外題證文等知行之由論之既雖及三問三答訴陳義信爲一族可有和與之由被申之間以別儀於後一條者永代所口渡于義信也至案主職同名田者心阿永代可令領掌者也向後更不可有變改之儀仍和與之狀如件

曆應貳年九月十一日

沙彌淨圓華押

沙彌光圓華押

〔平戶記〕延應二年二月廿日乙卯殿下築原以勘解由次官兼親入道參即依召參御前被仰云中略朝務事先取要可有沙汰其條々可有宣下也諸人訴訟早付職事可奏聞任道理可有裁報其中又爲

雜載

右重虎所帶西信讓狀等爲僞書之由、重俊訴申之間、被召決處、如去月廿四日和、與狀者西浦者可爲重虎處分、東浦者可爲重俊分、於後家並自餘兄弟等分者、本知行不可有相違之由觀之、云々、此上不及子綱早任代々御下文、且兩方守和與狀、相互無違亂可致沙汰之狀、依仰下知如件、

建長六年三月八日

相模守平朝臣華押○北條時賴

陸奥守平朝臣華押○北條重時

〔尺素往來〕神明寄進、佛陀施入、他人和與、庶子割分之地者、不可有悔還改動之儀、

〔式目抄三〕和與ハ、アマナイ與ル也、財寶ニテモアレ、田地ニテモアレ、眞箇發氣シテヤルヲ和與ト云、

〔東寺百合古文書エ一之九山城〕東寺領若狹國太良庄領家雜掌尙慶與地頭若狹次郎忠兼代良祐令和

與條々事

一勸農事、帶寶治御下知、雜掌年來致沙汰之不及子綱矣、

一百姓名爲六名事、和與上者不及改沙汰矣、

一助國名事、於下地者任先例、令停止地頭終畢、年々抑留物由事、和與之上者、於半分遂結解不日不

紕返之、向後更不可有違亂矣、○中略

右條々及止訴訟、雖番訴陳所令和與也、於向後者相互固守此旨、不可違犯、若背此之狀致違亂者、且

被悔返和與分、且可被處別罪科也、仍爲後日和與之狀如件、

永仁二年四月日

地頭代僧良祐在判

雜掌僧尙慶在判

〔香取文書〕香取社領下總國加符村領主又四郎實總與一分地頭多田小四郎有時相論年貢以下事

バ、兩三人ヲ呼心根見ントテ提絃ヲ燒テ、手水カケテ進ラセヨト云シカバ、始ハ蒲冠者參テ手ヲ燒、アト云テ退ヌ、二番ニ小野冠者來テ、是モ手アツシトテ除ヌ、三番ニ九郎冠者ノ白直垂ニ袖ノ露結肩ニ懸テ、彼燒タル提絃ヲ取テ、顔モ損セズ、聲モ出サズ始ヨリ終マデ手水ヲ懸通シタル者也トアルハ、頼朝義經ガ度量ヲ試ミタルモノナレドモ、是亦鐵火ノ類ヒナラン、

〔甲陽軍鑑第十八〕信州岩村田法花宗の僧公事之事

假初ながら出家の儀は私さばきならずして、代官衆の人をそへ、甲府の四奉行へあぐる奉行きき給ひ、出家の非におとさんとすれば、何にても證據なし、百姓無理と申さんには様子あやふし、是程少分なる義に、鐵火をばみだけの鐘と申にもあらず、色々批判せらるれ共、奉行四人の分別に不叶して、無據上へ披露いたさる、

〔玉露叢三〕慶長十九年三月廿八日ニ、駿府熊野ノ森ニ於テ火起。請ヲ取ル、右是ハ兄ヲ害スルノ由論アルニ付テ也、彦坂九兵衛光政奉ハル、

〔吾妻鏡十七〕建仁二年五月二日己巳、兄弟相論事、於向後者付是非可被抑和平之由、今日被定之、

〔太平記三十五〕北野通夜物語事附青砥左衛門事

此太守○北條泰時ノ前ニ訴訟ノ人來レバツク、ト兩人ノ顔ヲ守テ云ク、泰時天下ノ政ヲ司テ、人

ノ心ニ無奸曲事ヲ存ズ、然バ廉直ノ中ニ無論、一方ハ定テ奸曲ナルベシ、何ノ日兩方證文ヲ持テ來ルベシ、奸謀ノ人ニ於テハ、忽ニ罪科ニ可申行、奸智ノ者一人國ニアレバ、萬人ノ禍ト成リ、天下

ノ敵何事カ如之、疾々可歸給トテ被立ケリ、此體ヲ見ルニ、僻事アラバ聽而イカナル目ニモ可被合トテ、各歸テ後兩方談合シテ、或ハ和談シ、或ハ僻事ノ方ハ私ニ負テ論所ヲ去渡シケル、

〔忽那家古文書〕左衛門尉重俊與舍弟左衛門尉重虎相論亡父左馬允國重法師四名跡伊豫國忽那

島付松吉名地頭職事

云々

〔建武以來追加〕一江州田上柚庄與同國牧庄山堺相論湯起請文言事

兩方載號根本堺勝示之名計可被書之歟

永享十一年五月廿日

右衛門尉貞政 右衛門尉爲秀 民部丞貞基 大和守貞連 肥前守爲種

〔建武以來追加〕一常在光寺與朝倉六郎繁清檜葉近江守滿清相論近江國田上内堺湯起請失事

右湯起請失之淺深者依版示奸曲之多少者歟爰收庄者及伍拾町捐之至柚庄者參拾町餘捐之云

云湯起請之失亦隨是者哉所詮兩方雖爲多少有失上者望申堺共以難有御許容上者於彼在所者

爲闕所可有他之御計歟如明德之御判之御教書者論所之山在之歟然者任彼御教書之旨可有御

成敗歟

永享十一年六月八日

滿親在判爲種同 増悦同 之忠同 元尙同

〔甲陽軍鑑十七品第四十七〕長沼長助長八親敵討事附増城源八郎と同長助長八公事之事

増城源八其まゝ置給へ共三年目河中島合戰に殊外にげておのれが事をば指置剩傍輩のふる

や總次郎と申者臆病を仕たると支對決有て終に實否究まらず鐵火をどれとの事なれども信

玄公仰出しに旗本の侍に直に鐵火をどらすれば下輩なる仕置なれば兩方代を出してどらせ

よと上意にて雙方より被官をいたし職衆と横目廿人衆頭四人を指そへ八幡宮の庭にて鐵火

をどり増城被官取まくる

○按ズルニ鐵火ノ法ハ詳ナラザレドモ是モ亦上代探湯ノ遺法ナランカ源平盛衰記四十六ニ鎌倉殿仰ケルハ九郎ガ心金ハ怖シキ者ナリ西國討手ノ大將軍ニ誰ヲカ立ベキト思シカ

邊土飢饉、忽及餓死云々、是米商人所行也、露顯之間、張本六人、餘黨數十人被召捕、嚴密沙汰云々、十日、抑去月以來、洛中邊土飢饉及餓死、是米商人所行之由、露顯之間、去五日、米商人張本六人、侍所召捕、糺明、被書湯起請、皆有其失、糺問之間、白狀、諸國米塞運送之通路、是所持之米爲沾却也、又飢渴祭三ヶ度行云々、與黨商人も皆被召捕、張本六人被籠舍、可被斬云々、所司代依此事失面目、職辭退云々、洛中飢饉以外也、自公方被定法、可米於沾却之由、被觸云々、十九日、米商人被召捕、張本六人之内、門次郎元乞食也、唐紙師等三人、今日被刎首云々、京都米如元本復云々、珍重也、

追聞三人被討事、未無其儀、例之虛說也、

〔看聞日記〕永享八年三月廿二日、山前觀音寺山相論事、今朝奉行飯尾、伺申之處、兩方令書湯起請、依

其失、可落居之由、被仰出云々、五月十九日、抑山前百姓與觀音寺百姓今日被書湯起請、於成佛寺、

近衛賴川三福寺末寺書之、奉行飯尾肥前、同大和以下、四五人檢知、定直同檢知、兩方取孔子、當方百姓取之、願

阿山前古老先書起請、燒灰吞之、次沸湯之中、石を取上、やすくと取之、更無違失、次觀音寺百姓男

起請、同前、次取石事之體、臆したる風情也、然而石は取上、是も無爲也、兩人寺ニ召置、明後日檢知可

落居云々、此五六年山相論、于今不落居之處、公方嚴密、可書湯起請之由、依仰如此沙汰畢、當坐先無

爲、始終如何、今夜庭田隣壁、富長逐電、其跡へ奉行入替、檢知云々、何事乎不知云々、廿一日、起請書

人、三ヶ日之間、奉行出合、檢知之處、兩人手更不損、無子細云々、兩方有道理歟、不審事也、廿四日、鄉

秋參對面、定直參、山前湯起請事、兩方無異失之由、飯尾公方伺申之間、此上者可被如何候哉、ともか

くも可爲御意之由、以飯尾奉被盡御沙汰之條、爲悅、兩方無其失之上者、可被中分歟、ともかくも可

爲上裁之由、御返事申了、閏五月六日、山前山相論落居、被成御教書、珍重也、

〔看聞日記〕永享十年三月十五日、抑聞流人與七丁、遠國へ今朝流遣云々、誰人不知、先日赤松家人頼

藤と云物、四人被書湯起請、三人忽手、燒損、切腹云々、是あや御料資任、犯罪科云々、實犯雖不審、切腹

長祿二年五月十八日

左衛門尉三善爲衛民部丞藤原親基、右衛門尉藤原種基、左衛門尉三善元連散位三善貞有和泉守清原貞秀、河內守藤原國通散位三善之種、加賀守三善之清、沙彌妙金丹後前司平秀興、沙彌玄良、下野前司三善貞基、下總前司三善爲數、沙彌常忍、

〔今川記五なかに日誌〕

一新井溝近年相論する事毎度に及べり、所詮他人之知行を通す上は、或替地、或は井料勿論也、然ば奉行人をたて、速に井溝の分限をはからふべし、奉行人にいたりては、以罰文、私なき様に可沙汰也、

湯起請

〔薩戒記〕應永卅二年八月廿日

丙戌後開今日侍男一人參内裏女房紀伊局主上稱光申云内侍所刀

子三條、年八

年來自南朝後醍醐院御曾孫當時御座嵯峨成龜得其語於内侍所致祈禱於當今者已

奉呪詛事勿論也、殊今御惱之間得理此事我爲彼刀子之官女之夫之故所存知也、爲君存忠令披露

也云々、紀伊局即奏聞主上太令驚御被申院小松後又被仰遣入道内府禪門足利仰武家侍所令尋

問事子細即被召取彼三條又内府之諸大夫前治部少輔經貞被搦之件經貞者彼三條之女刀子コア

が夫也、仍爲三條之掣之故云々、件侍男者元右中將有定朝臣青侍號金河也或說彼式部爲經貞

掣云々、仍召集彼等被糺問件式部申狀非直言之由、三條陳也、仍式部爲證文自懷中取出折紙是自

南朝御祈禱事被仰遣折紙云々、各披見之處、無實云々、但於件折紙者雖無實自南朝相語三條於内

侍所祈禱事實事也、年來之儀、今已露顯、八十餘老女存不忠、不可說之次第也、略中件式部猶吐噓言

之由風聞之間、可行死刑之由、入道殿有命而被存忠之故、三條之謀、又南朝就望露顯了、爲後人之誡、

於式部者被行賞、於自餘者可有札明之由、自内院被仰云々、廿三日己丑、參宿直之内侍所刀子奉

呪詛哉否事、與式部相共可有湯起請之沙汰云々、

〔看聞日記〕永享三年七月六日、抑開米商買之者六人侍所召捕糺問、被書湯起請云々、此事此間洛中去月以來

〔建武以來追加〕伺事條々 永正八十二六

一 追評定云、嘉祿四八五、齋藤兵衛入道奉行、

諸人相論事、證文顯然之時者、不及子細、證文不明者可被敍用證人申狀、又證文顯然之時者、證人申狀不能敍用歟、又證文與證人共以不分明者、可及起請文歟、證文證人顯然之時者、不及起請文也、

〔式目抄〕起請

本朝誓言山來事、略但白川鳥羽後白川三代御起請在之式目起請、尤宜於御沙汰書起請事、始

自後嵯峨院於記錄所書之於文殿書之、

〔滿濟准后日記〕永享四年三月廿九日、今日同被仰出山名事、駿河守護今河上總守相續仁體事、末子千代秋九之由、內々被聞食及間、此者事、母關東上杉治部少輔姉妹云々、幸ニ嫡子以下兄弟數輩在之、聞此等堅固幼少七八歲者ニ可申付條、併別心様ニ可罷成歟、不可然候由先度以山名狀、上意趣具申下了、此御返事、昨日廿八日自山名方同今河方申、山名使者山口、今河使者三浦安藝云々、來申旨同、今河罰狀等、此門路持參申趣嫡子事、如仰可申付處、此者事以外無正體、始終奉公、且以不可叶條、見限了、

〔蜷川家記〕敬白起請文事

一 御成敗ノ趣、萬一不叶理致、子細在之、バ、不貽心底言上仕、縱於當坐雖不存寄、有思案仕出ノ旨、バ、不謂違期可申上之、但至堅固不辨越度者、非沙汰之限事、次就公事、不可存無沙汰事、

一 雖爲他人奉行、御裁許之篇目相違之由承及を可申披之旨、對申沙汰奉行、人可申之事、付就御沙汰公事、篇一

右兩條令違犯、日本國中大小神祇八幡大菩薩山王二十一社天滿大自在天神御罰各可罷蒙候、仍起請文如件、

起請文

弟弟子の琳切、大方我宗の學問仕よせ、更級へ歸兄弟子の善万坊と公事を申せ共、下にてすまざる子細は、弟子兄善万坊申儀、既に圓藏院末期に及び、我等に跡職譲とある手形給ること、證人を僧俗ともに出す、其上師匠遠行の後寺退轉の所を建立仕るうへは、いかに我等無智の僧なり共、此寺の儀はそれがしまゝに仕べし、琳切にせん、約束なりといふ共、前判を破後判とあれば、旁もつて此寺は此僧が寺なりと、無智の善万坊が申分是なり、扱又琳切申は、師匠死去の後寺退轉の建立は尤なれ共、此琳切が近所に罷在、其方に跡を取おかせ、よき時分に寺をこらんと申さば、何と連々師匠の約束にても寺とらんとは申にくき儀なれ共、大和國へ參候へば、何をも存せず候、其上此琳切が遠國へ參るも、遊山にてはなし、一宗の立派をも少しは存て出家道をたて、此寺になをらんと思ふは、人間惑の塵埃なり、學問の眞似をも仕るは、ほんかうまやうに爲る事存命の間はいかに出家にても各如此、又前判を破後判とある、是は尤の事なれど、我等遠國へ參り、十ヶ年に及び便宜なき故死したると師匠も思ひ給へばこそ、其方へ手形を渡され候へ、我等いきて有儀を知給は、圓藏院をいかで其方へゆづり給ふべき、それは我等死したると思給ひての事也、いくよりも申ごとく、我等學問の儀仕候て、師匠の死目にあはぬ内の儀、一ツも役にたち申まじきと云儀にて、甲府へまいり、めやすをあげ、御藏のまへにて、弟子あに善万坊弟子おどうと琳切兩僧の公事有○下

〔吾妻鏡三十〕文暦二年

○嘉祿元年

七月二日癸亥、所職所帶并堺相論事、爲非據者、可被召所領、無所領者、

可被處罪科旨、兩方召起請文之後、可糺明之由被定、且被仰六波羅云云、

〔吾妻鏡三十三〕延應二年

○仁治元年十二月十六日乙亥、就地頭所務以下事被定條々、○中

一諸社神官并神人等、令書起請時於他社不可書由事、

於京都令書者、不嫌自他社、於北野可書也、

所詮於子今御披露令姓引之間數度雖被相屈之爲同篇然者文書出帶被成御奉書之由預御狀、□□□然者爲御法條可被成、□□□□□□恐々

六月五日

親俊

諏訪若狹守殿御所

七月廿八日己亥木島娘ヤ々女申事、高屋池上兩人以請文申之子細者、御雜色中島田地相論也、去年三問三答番無披露之間、文書出帶雖被成御下知、不能出候間、對木島被成御下知了、奉行諏訪若狹守。

〔蟻川親俊日記〕頭人御加判

綾小路正清者、竹山相論事既雖及訴陳隣町之衆以下、口入趣御兩所御禮之通、令披露候處、然者任賣券狀候旨可被令領知旨、對竹山可被成下御下知候由、頭人申立候。

十二月〇天文十九年廿八日

松田對馬守殿

飯尾中務大夫殿

〔甲陽軍鑑第十八品第四十八〕信州更級出家公事之事

一天文廿三年甲寅五月三日の公事、信州更級に眞光寺と申律宗の寺に、圓藏院と云住持兩人の弟子を持兄弟子を善万坊と云て、一文不知の坊主なり、弟弟子は琳切と云て、是は又師匠圓藏院が跡をつがせんと、兼て約束故學問に出ず、まかも律宗の事なれば、大和國の奈良にて學問仕故、八年あまり音信なし、其跡にて圓藏院遠行なり、かの院老耄故乎、無智の弟子なれ共、善万坊其時四十七八なれば、尤年齡よしとて、其寺を譲とある手形を遺弟弟子は、其比廿五六歳なれども、久敷便宜なれば、死たるもえらすとある事にて、兼々約束のちがうたるも少しは道理なり、さる間

中地口役之時、鳴社納所注進等分、仍載在所歟、此外證文曾以不載在所、以何支證、乾長兩所可致、知行之由申哉、不足同日之論事候、元任文書可被申沙汰之狀如件、

應永卅二年十二月廿七日

常寂

清和泉守殿

追申

元應正中支證雖不出帶正文兩局務書狀分明之上者何事候哉、

先日万里小路右中辨招引、被示云、仕人等申、先年故廣橋儀同三司御書書寫して可借給之由、頻申之於訴狀、可借預之由、被仰候間雖相撰之於此亭者、遂不見出候間、高大史許寫留歟之由申遣之間、今日案文一通送之、仍書寫間、今日借進入頭右中辨畢於彼正文者、飯尾美濃許預置之由申之畢、

〔政所賦銘引付〕一應屋修理亮範中檢大與等飯加九廿七文、明十四三廿六、洛中商賈紙座事先祖相傳無其隱、然件支證共、

一條道場玉壽庵入置質物之處、彼庵ヨリ村上左京亮預置候紛失之由、玉壽庵證狀有之、然下京橘屋與申者、令出帶件支證申給御奉書之段、无是非次第也可預御札明云々、

合奉行布野州同五月三三分、清式大與奏又有座中望申子細取信與奏、

〔蛭川親俊日記〕天文七年三月廿三日丁酉書狀云、田上永正與香山彦三郎地子相論之事、具令披露之處、三問三答之趣、注書多、香山帶沾券狀、非正判之旨、憶指申之間、於無證判者可被成御下知、□□恐々、

三月廿三日

親俊

松田豐前守殿

諏訪神左衛門殿御所

〔蛭川親俊日記〕天文七年六月十一日癸丑、就木島與中島田地相論之儀、去年以來及三問三答之處、

隱居歟以子息之小兒

童丸

被恩補之、喝食男者、細川典厩元勝

加扶持、故細川爲烏帽子子之故也、民

部少輔入道當管領扶持、元來含兒代々扶持之故也、雖入部不可渡地下之由風聞、於京都可有落居

歟之由謳歌、夜々物怨事也、先日民部少輔舍弟兒寛隆爲大將已下向、不經本路廻閑路云々、當管

領手少々爲兵士歟云々、此守護職事志波民部少輔以父入道恩補之跡時定院殿足利義持御當管

領已後出訴訟之時、召出文書一見以後、不示是非、令安堵富樫龜童之間、志波民部少輔令鬱憤、下向

賀州、可押領之由支度之、然而面々止了云々、爰富樫兒事入部之時、就越前之近國、可加扶持之由、管

領相觸志波令鬱憤、及異儀不可出一人之軍勢之由返答云々、無爲入部不定歟、國中多屬喝食

男歟云々、

〔康富記〕文安四年五月十七日戊申、或仁語云、加賀國守護職事、富樫次郎童名龜丸并叔父安高兩人

半國宛可知行之由、管領之沙汰落居云々、此間相論不止、度々合戰也、次郎者前管領畠山扶持也、

安高者當管領細川京兆元勝扶持也、

〔富樫記〕寛正ノ比ノ富樫介ヲ泰高ト號、此人中年ヨリ病身ニテ在京叶ハズ、隱居シテ中務大輔

泰成家督ヲ繼ギ、文明長祿ノ比在京シテ公方義利ノ近習ニ有ケルガ、早世有テ其子政親若

輩ナレバ、家督相續ノ政道如何ト申ス人多カリケル、然ル處ニ泰高病氣本復シテ、再任アルベ

キ由、永享四年ノ比京都ノ管領細川右京大夫勝元朝臣ヲ憑ミ申サレ、既ニ上意モ宜シカリシ

ヲ、富樫家ノ老臣モ畠山尾張守持國ヲ頼申、政親ヲ引立守護ヲ望ミ訴訟申ケレバ、則又政親ニ

被仰付ケリ、因茲祖父泰高ト嫡孫政親ト常ニ不快ニ過ケルナリ、

〔康富記〕文安六年元寶德四月八日戊午、六位外記史與藏人所仕人相論冷泉院町細川以四、一條以

御門之内、外記史知行者乾良東堀河、西大宮、南兩町也、元應正中支證分明歟、仕人知行者異坤大宮、南二

條、北冷泉兩町也、右少辨氏房所書出之繪旨正月廿八日、并應永六年八月十二日、鴨社神用用脚、洛

上者堀川大納言當知行不可有相違

〔吉續記〕乾元元年十一月一日庚寅參院今日評定也○略中若松御厨事源氏如相傳證文雖爲分明祖母當時知行領也難告訴歟祖母一瞬之後被付源氏可爲折中儀歟之由一同也未斷之間源氏如補任預所蓋妨庄家及刃傷狼藉之由祖母訴申爲事實者罪科不輕可被尋究也可隨彼左右之由同定申條々不治定之間不及目六人々退出

〔光明寺舊記〕下 檢非違使定興信政

可早致沙汰僧教善與秦宗光相論字古田貳枚間事

右如教善訴狀者任去元弘二年十二月十三日之宮石子處分狀可全知行之處宗光稱有丹後房慶圓之沾券令押領歟彼慶圓全不得宮石子之讓於所相副正中貳年十一月之處分狀者案文云々頗結構之由訴之宗光者相副手繼證文可令放券之由慶圓申之間所令買得知行也而教善於令出對之宮石子之處分狀者年號之違目在之疑殆不少何不差申筆者哉之旨陳之各訴陳之旨趣大概如斯抑教善雖捧元弘二年十二月十三日之宮石子處分之狀件二年改元以後都鄙專正慶元年之條勿論也就中不存知輩在之由遁申之條旁不審多端哉正慶者中間之年號也立歸今不可依用元弘三年之支證哉旁以疑難非無其謂歟次慶圓所相副之宮石子處分狀爲案文之由雖差申沾券之時用案文之條古來之定法也然早停止教善之亂訴宗光任買得相傳之證文可全領知之狀下知如件以下

延元三年十月二日

祭主從三位行神祇權大副大中臣朝臣花押

〔嘉吉三年記請記纂〕嘉吉三年正月加賀國守護職事富樫兄達普廣院殿○是利御意以富樫舍弟鳴令還俗被續彼跡被恩補了當御代○是利管領品山三位入以後令安堵舍兄民部少輔但舍兄尤

左衛門尉致同心事一切無其儀候於當名田者自領家御方拜領仕候之上者爭存不忠可令與力彼等候哉云々舊狀詞如弘安二年二月永茂狀者又九名田內次郎入道跡設就相論雖可成關所爲領家御恩七郎登蒙中分御成敗候叙留上者可致涯分奉公候若不忠事毛候又背御命候者被召上此名候登更不可及訴訟云々以和字換漢字者當職爲御家人役勤仕所帶之由氏澄雖申之於建久寬喜注文者爲案文之間不足證文歟至承久三年御下知者武士朝守濫妨之時就社家之訴訟有其沙汰之間可令安堵下司盛經身之由雖被載之無御家人所見之上依爲案文難指南歟如貞應元年相模國司下知者大嘗會黑木屋材木人夫事被催促國中莊公之間爲荒涼之儀歟如寬元元年九月廿五日六波羅狀者波々伯部利部太郎鴨河防役可勤仕之由雖被載之就難掌之鬱訴先可止當時催促之由同年十一月四日被下知守護代畢爲未斷之議歟如五月二日越後入道狀者造內裏材木採用人夫可雇給之由載之不記年號之間非無不審如寬喜四年二月十九日眞々部左衛門尉狀者官兵并大番役事可任先例之由雖載之云狀中云判所朽損之間難信用歟此外所進之狀等者近年私狀歟仁治以往勤仕御家人役之條無指支證就中如嘉祿三年四月廿八日同十月五日六波羅下知者於當保者可停止守護入部之由被載之畢保內有御家人者豈可然哉加之氏澄一族盛利號之由建治三年裁許之上同一族盛親寂遠永茂對于社家出種々之怠狀畢然則下司職社家一向進止之條無異儀歟於當職者宜爲本所之進退次刃傷狼藉事雖載訴陳之一篇無實證之間非沙汰之限次氏澄父盛澄任名國司事非御家人之上子細同前仍下知如件

正安元年十二月廿三日

右近將監平朝臣 判

前上野介平朝臣 判

〔吉續記〕正安三年十二月六日辛未參院奏事今日評定也○中時常磐井殿炎上之時紛失堀川大納言所帶正文宿所回祿之時燒失之由申之兩方共不帶正文之

河堤事先例百姓等不從下司之間難拿不可遂其節之由依令警申于今不事行先止當時之催促重可相觸云々如建長正嘉正文永弘安正應關東御教書六波羅狀并守護催促狀等者或相催御家人役或可勤仕御公事之旨所見也如寬喜四年百姓等申狀案者自昔御家人役之時百姓等不動之云云如寬元元年領家顯承陳狀案者盛經保爲體非重代御家人盛經始望申之入御家人之刺顯承顯嚴爲神人身入身於御家人之條無謂之間加勘發之處不可有保煩之由歎申之間令寬宥云々如八月廿三日^{年記}顯承狀者前々^毛御家人此役乃候仁被宛百姓^{多留}事哉候後代仁^毛例仁成候^年登無物體候^毛左様仁御家人地頭毛良須滿志幾由乃下知仁天候邊^波難及力候云々^{以和字}如雜掌所進元久二年三月二日院廳御下文者院廳下丹波國在廳官人等可早任久壽宜旨并蒲生坂田兩保例除公田八町六段外自餘田畠爲威神院日別御供保令法橋顯立門弟相傳領掌多紀郡波波伯部村事云々如嘉祿三年八月廿八日六波羅下知者威神院日御供料丹波國波々伯部保守護使亂入事社解遣之如狀者前々守護代之時不申入之處當守護代始令亂入保內令煩土民之間長日御供及闕如云々事實者不便任先例可停止新儀若又有殊子細者可參決云々如同年十月五日同下知者當保訴訟及度々之間下知先舉守去閏三月十七日關東御下知謀叛殺害以下三箇條之外可令停止自由沙汰云々如建治二年七月十七日同下知者丹波國波々伯部保雜掌申當保民盛利假御家人號威神領煩由事就請文重申狀具書如此子細見狀爲有尋沙汰度々遣日限召符之處不參之間重加下知之刻盛利可參上之由乍截去四月十日請文于今遲引之條度々召符違背事已令露顯歎然者假御家人號威神院領煩事停止之後有警訴者可參決之由可被相關彼盛利云々如九月十一日^{付文永}盛親狀者飛會山乃田事就御式條申儀^{仁天}候波須入出舉質^{天候波平毛}久成候^波出舉仁^波牟加波里候^波取返^{天候}多留事仁^{天候}何様仁^毛可爲領家御計候云々如九月十七日^{年記}寂蓮狀者度々申入候寂蓮名田御點定事歎入候依賣買地沙汰事與刑部

〔六波羅御下知〕感神院領、丹波國波々伯部保下司氏澄代良盛、與雜掌親圓相論下司職名田島并刃傷狼藉等事、

右訴陳之趣雖多子細所詮如良盛申者當保者爲氏澄開發私領之間、下司職則重代相傳也、所謂最祖盛助入建久三年本御家人注文之上、寬喜元年六波羅使者、宇間刑部左衛門尉普左衛門尉等、注進御家人交名之時祖父盛經、專入人數畢隨又角戶三郎朝守、當保濫妨之時、盛經可安堵之由所被載關東御下知也、其外守護人越後禪門狀守護代眞々部左衛門尉施行關東御教書六波羅狀以下證文多之、而雜掌致濫妨狼藉之條無道也云々、如親圓申者當保者承德二年本名主等、依舊附于權長吏行圓、即令寄進當社畢仍元久二年被成院廳御下文畢、盛經者承久年中爲社恩始所令恩補也、何可稱開發之領主哉、建久寬喜注文者、爲案文之上、不足證文、越後禪門狀者、爲守護人私狀歟、眞々部左衛門尉狀者、無判形之上、子細同前、於承久三年御下知者、社家不存知縱雖爲實事、無御家人之所見、其外狀者皆以近年狀也、非龜鏡云々、爰如氏澄所進建久三年注文者、丹波國波々伯部保監物守實云々、如寬喜元年注文者、波々伯部保下司刑部丞盛經、往古御家人也云々、如承久三年關東御下文者、祇園社所司等申、爲角戶三郎朝守被濫妨社領丹波國波々伯部保由事停止朝守濫妨、社家如元可令莊務、且又於下司盛經者可安堵其身云々、如貞應元年十月五日相模國司下知者、黒木屋材木事不、漏丹波國莊公、可催其人夫云々、如二月十三日^{不記}越後禪門狀者、丹波國波々伯部保下司盛經折紙如此、於官兵并大番役者任先例勤仕云々、如寬喜四年二月十九日守護代眞々部左衛門尉施行者、官兵并大番役者任先例勤仕之由、御教書十五日所下給也云々、如寬元元年九月七日六波羅狀者、丹波國波々伯部保下司盛保、鴨河防對捍事、何限盛保、寄事於領家方、可令難認哉、不日請取役所可終功也云々、如同月十五日同狀者、鴨河防事、於御家人役者先例以百姓等勤來之旨申之、早催具彼對捍之百姓等不日可令勤仕云々、如同年十二月四日同狀者、丹波國波々可部保鴨

一地頭代官有盛召取公文百姓令書起請文事

右如同解狀者去承元元年金條々訴訟蒙裁斷之間雖不承引成後恐去承元三年二月廿九日召龍公文家長法師并百姓等令責書起請文云々者不召決兩方之間難糾真偽事若實者甚不穩便早可返與件起請文矣。○中略

以前條々具守先御下知狀且任先例可停止新儀非法之狀所仰如件以下、

建保四年八月十七日

案主菅野○以下人名略

〔平戶記〕寬元三年五月一日甲午早旦先日自殿下○藤原實所下給之安守後家遺財相論文書相具申狀返上之其狀在左、

少監物兼俊與左兵衛尉行重相論安守後家遺財家地等事

右如問注記者兩方申狀都以水火也分明之證據共不出來者決斷之裁定可爲難治歟然而法家勤申之旨大概非無其謂以勘據之趣可有量沙汰歟但喪葬令云身喪戶絕無親者所有家人奴婢及宅資四隣五保共爲檢校財物營盡功德其家人奴婢者放爲良人若亡人存日處分證驗分明者不用此令云々卽勘狀所引此令文之心同義解之釋也案此文子孫之外不可有得分之親也而兼俊雖爲子息之儀如正淨法師申狀者長大之後令向背云々兼俊就此狀舉虛誕之儀雖申子細其證難決之上讓得之狀不備進之間亡人存日處分證驗分明之儀猶貽疑義可守此令者頗可乖違哉爲之如何但問注之時兼俊申云以法家勘狀之趣有御尋重村法師之時兼俊申狀與重村法師之陳答無相違云云然者重村法師申狀可謂前後相違歟此趣不審能被尋決歟若猶可依兼俊申狀者件家地後家可領掌之所歟而讓高橋氏女之狀雖載重村相傳之由其以前讓狀手繼文書等不見旁有疑殆又可被尋召歟隨其左右可被決斷哉以此旨可令披露給之狀所請如件經高恐惶謹言、

四月廿九日

民部卿 經高 請文

書正文所申無相違者載于名字可給安堵此上若雖段步以不知行之地寄事於安堵令掠領者隨支證出來可被沒收本領無所帶者可斷罪其身

〔建武以來追加〕伺事條々永正八十二六

一寺社領已下事應安二十二

於帶本文已下證文者雖爲凡人被返下例古今在之然者任證文可有御成敗哉

〔侍所沙汰篇追加〕一諸國關所事應永十五十一三武衛了領新波義教列在之飯尾美澄入道常康奉行

諸人就望申雖被充行或稱本主或號新給帶證文申之輩繁多也因茲參差之沙汰出來之條不可然所詮於向後者關所之段土貫之員數相尋守護就左右可有其沙汰若注進日數過廿々日者以訴人

差申在所可充給御下文矣○又見建武以來追加

〔建武以來追加〕御成敗條々應永廿九七廿六松田丹後入道常胃奉行

一寺社本所領訴訟事

不可依文書年紀但於不帶公驗者非御沙汰之限焉○中略

一紛失安堵事

雖帶文書案文於年紀馳過者不可有御許容至捧當知行并年紀未滿文書案文者非制限焉

〔建武以來追加〕管領壁書

一訴論人文書事永享二八廿一

共以載目錄加判形可令備進矣

〔建武以來追加〕被仰出條々文明八八廿四

一諸人訴訟事兼日難被定欺且隨證文之理非且依年序遠近可有御用捨事乎

〔壬生家文書〕將軍家政所下 若狹國國富庄略○中

意ニハ判形ヲバ本トセズ自筆ヲ以本トス。式目ニハ前判後判ト云前狀後狀ハ公家ノ法前判後判ハ武家ノ法也判ハワカツトヨメリ其事ヲ判斷シテ是非ヲ分テ後ニ判ヲスル也判ヲバ草名ト云名乗ヲ草ニカクモノナリ眞字ハ他人似スル程ニ似セス様ニサウニカクニヨツテ草名ト云故ニ上古ハ名乗ノ下ニ判ヲカク事ナシ名乗ニ判ヲスルハ名字ヲ二ツカイタルモノ也判ヲセバ名乗ヲ略シ名乗ヲカハ判ヲ略スベシ面尙ノモノハ今モ如此カク也武家ニハ名乗ト判トシ付タル事ナレバ今更力ナシ但古キ支證ナドニ面ニ名乗ヲカキテ裏ニ判ヲシタル物多シ然レバ武家ニモ此心ヲ知テ二ツツツケテカハザル歟後代ノ爲ナレバ裏判ヲスル物歟

〔吾妻鏡 三十五〕仁治四年元寛元七月十日己酉諸人訴論事兩方證文分明之時者雖不遂對決可有

成敗之由被仰問注所云云

〔吾妻鏡 四十九〕正元二年元文應八月十二日丁未今日有被仰遣于六波羅事其御教書云

問註以後追進狀事不進證文之外於難陳者不及沙汰之由被定畢而進覽問問註具書之時每度被副進追狀之條違傍例非無沙汰之煩於自今以後者證文之外不可副進訴陳之狀若令備進簡要證文者遂覆問可令副進彼證文之狀依仰執達如件

文應元年八月十二日

武藏守
相模守

陸奥左近大夫將監殿

〔建武以來追加〕東福寺條々應安五十九御沙汰

一當知行地安堵事應安

以一同之法被下宣旨之上者重不及沙汰但依諸人之妨有愁申之輩者尋究當知行之所見被見文

〔師守記〕康永四年○貞和八月二日癸丑今日爲勸修寺前大納言經顯卿奉行被尋下家君○師云關

東將軍并相州子息有事之時難訴停否事先例可被注進給之由被仰下候也云々○右端書云今日評定

延否可治定即必可被注進之而御請文云關東將軍并相州子息有事之時難訴停否事一通跪注申

上候云々關東將軍并相州子息有事時難訴停否事○中

延慶二年十月六日今日御前評定延引是關東相模入道息女滅亡之由飛脚去夕著六波羅之故歟

云々十一日文殿沙汰於今者可申沙汰之由被仰下開闢師顯朝臣依相州禪門息女事五ヶ日被止

奏事并難訴沙汰了

康永元年十月三日被尋下師右朝臣是征夷將軍息女六歲歟去夜他界間難訴停否事也同十四日

今日難訴庭中等事有其沙汰今度難訴七ヶ日被停止之由被下御教書

大外記中原師茂

後聞今日御前評定延引依將軍子息事也開闢師香以下一兩參仕不及著文殿退出云々

證據裁決

〔尺素往來〕本領事○中遂三問三答之訴陳候之處兩方證文前後狀之篇謀實書之段可爲相論肝要

之由就令治定候去十八日互出帶手繼正文於御前對決仕候了如當方相傳之讓狀者遂多年而後

以自筆自判附屬之條歷然露顯仍則蒙御裁許即令安堵候

〔御成敗式目〕一兩方證文理非顯然時擬遂對決事

右彼此證文理非懸隔之時雖不遂對決直可有御成敗歟

〔御成敗式目追加〕一諸人相論事

右證文顯然之時者不及子細若證文不分明者可被敍用證人申狀也○下

〔式目抄四〕一讓所領於子息給安堵御下文之後悔還其領讓與他子息事○中

判者判斷是非注置而已法意ニハ前狀後狀ト立テ親ノ讓リ後ノユヅリ付ク事式目ト同ジ法

前候哉云々、端書云、明日文殿始可爲如定候歟、若可延引候者可相觸衆等候乎云々、○中
今日新大納言觸申云、明日文殿沙汰可延引可被存知云々、可存知之由被出御請文、
今日藏人右衛門佐仲友觸申云、時禮任例可致沙汰云々、則取出御請文了、時禮政始事下知文殿、
入道殿下有事時難訴間事

普光圓院入道殿下

文永七年十一月廿九日薨給_{于時入道關白}

件度難訴沙汰停否無所見、

圓明寺入道殿下

弘安七年七月十九日薨給_{于時入道關白}

廿一日御前評定延引、依入道殿下御事也、

昭念院入道殿下

永仁二年八月八日薨給_{于時入道關白}

今日可有御前議定而殿下無御參上、依入道殿下御事延引、

十一日於記錄所有沙汰事、但今日雖爲議定、式日不被行、

圓光院入道殿下

正和二年七月七日薨給_{于時入道關白}

件度七ヶ日被聞難訴歟、○中

中院入道殿下

建武六年八月廿五日薨給_{于時入道關白}

九月一日御前議定、又有記錄所沙汰事云々、

申之由有勅定^{○中}生心申詞

正應六年八月二日於記錄所愁申

沙彌生心申大神宮領上野國園田御封并伊勢國散在田畠等事頭左大辨^{○平經親時爲奉行緩忘}
之間去六月十日庭中之處件日上卿自前藤宰相家怒可被申沙汰之由雖被申本奉行職事于今不
及其沙汰と申

件子細且被尋奉行職事直被召出正應四年三問三答訴陳可省其沙汰歟

明法博士中原章保

〔花園院御記〕元亨三年七月十九日己酉雜談即語云定資卿訴申小林莊事法皇^{○後}政務之間雖申
入無御沙汰非分被付宣房卿了然而乍含愁訴經年序當時遇善政之最中申入之處兩三ヶ年延引
不及御沙汰或仁私云時宜宣房卿不諧之間有難澀之御氣色以一義可被付宣房之由内々評定歟
然而理非懸隔之間難治之間數度延引而以非分之令文被成此事欲有裁許之由風聞云々此事如
何當時隨分停放中興誠以君臣皆被立中和之道而如此有御引汲事尤以不審但非知之難行之難
也知道之大體之故雖多善政未至體于道者豈無非乎堯舜之朝非無亂政務之法也近日朝議大體
可謂治世莫加吹毛之難而已

〔建內記〕永享十一年六月廿五日辛丑傳聞武家諸奉行入々愁訴雖經數年不及披露近日雖訴之或
稱管領命越次第披露之不可然不依尊卑親疎任次第可伺申由有仰云々又聞諸家被尋有愁訴人
云々

停雜訴

〔節守記〕曆應四年正月十四日壬戌是日新大納言經顯卿^{執權}被尋申云入道關白有事之時雜訴停
止有無并日數事隨所見可注賜之云々端書云前執柄例同可注賜候御返事云入道殿下有事之時
雜訴間事隨所見一通跪注進候每度雖不注置候三ヶ日停止奏事外無異事歟前執柄之時子細同

〔雜筆往來〕勅連署解狀粗所訴申也。訴訟既興盛也。裁許不可遲々。無嚴重刑罰者。彌乘勝歟。各勵微力。可被回秘計也。

〔新編追加雜務〕一鎮西御家人訴訟事。○目錄云。正應三。急可有沙汰。且九、十一、十二、四箇月可被事切歟。

〔吾妻鏡十八〕建仁三年十二月十八日壬子。諸人訴訟是非。進覽文書之後。至三箇日。不加下知者。可被處奉行。人於緩急過之由。儲其法云云。

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年元寛元九月廿五日戊辰。諸人訴訟事有評定。事書入見參。可施行之由。被仰下之御處。成敗遲々。尤以不便。自今以後。付奉行人註事書。早々可成御下知。又御下知與事書於間注所。可令勘合。事云無相違者。可下之由。依仰加賀民部大夫。

〔吾妻鏡五十一〕文應二年元弘長三月五日丁卯。引付沙汰不事行之由。訴人等愁訴之趣。達上聞之間。今日有評議。向後無懈緩之儀。早速可申沙汰也。於徒拘持奉行人等者。頭人就注中。可被處重科之旨。被觸仰引付云云。

〔塵添堦囊抄三〕醒鯁事

訴訟ナンドノ落居ノ遅々スルヲチ、クルト云ハ何ゾ、文選ニ醒鯁チ、ケタリトヨメリ、是ヲ注スルニ小節ト云、論ヘバ線ヲ以テ物ヲ縫ニ、フシニ至リ速カスルガ如シ、

〔建武式目〕政道事

一可被定御沙汰式日時刻事

諸人之愁莫過緩急。又寄事於早速。不究淵底者不可然。云彼云此。所詮無人愁之樣。可有御沙汰也。

〔勘仲記〕正應六年元永仁八月二日乙酉。依記錄所庭中番。早旦參内。○中訴人沙彌生心。上野國園田

御封并伊勢國散在田畠事中之章。保注進申詞付子。森原予付内侍。先所奏聞也。相尋前藤宰相。可

一甲州府中穴山少路に新立寺と申日蓮宗の寺あり、是にわき寺十四五有此十四五の中に、林生坊昌沈坊と云坊主女房をもつ是を近所の町人ぬきな加兵衛、玉越木工左衛門、兩人にてよくとぢめ、女房にぐる事ならぬやうに、隣の方主に手形をさせ、扱訴人岩間大藏左衛門方へつぐる。中
略御分國の本身小身の侍、或は僧侶一切の人の事、惡儀訴人申役を、此岩間大藏左衛門に仰付らる、故右林生坊昌沈坊と申、新立寺の法花坊主、女房持候と有儀を、岩間大藏左衛門悦、二人の町人同道いたし、奉行所へ訴申、則四奉行穴山少路新立寺院主の御坊へ書狀を付、林生坊昌沈坊二人の僧を御藏前へめしよせ、扱大藏左衛門とぬき名加兵衛、玉越木工左衛門二人をよび引合て、對決沙汰ありて、法花坊主兩人ながら負て申やう、我々ばかりにて御座なしとて、法花寺の中をかぞへたて、いづれの寺にも五人六人候と申、

〔沙汰未練書〕一覆問事

問答之後、訴論人共有所存者、重遂問答是覆問云、

〔吾妻鏡四十九〕正元二年元○文應八月十二日丁未、今日有被仰遣于六波羅事、其御教書云、

問註以後追進狀事、略○中

於自今以後者、證文之外不可副進訴陳之狀、若令備進簡要證文者、遂覆

問可令副進證文之狀、依仰執達如件、

文應元年八月十二日

武藏守

相模守

陸奥左近大夫將監殿

〔庭訓往來〕御沙汰事、既嚴密所被執行也、更非停滯預儀之政道、訴訟若有悠悠緩怠之儀者、御在洛之費也、可被用意活持之計略、先被進舉狀於代官者、公所之出仕諸亭經廻可申、圖師也、奉行入賄賂衆中屬託、上衆秘計、口入頭人内奏、最員窺機嫌、可申之、

也、弟ガ申所道理ナリトテ、仍安堵ノ下文ヲ給テ下リス。略下

〔政所内評定記録〕一四月○寛正四年十五日○在廢勘之略内談、○中略

披露

一武田被官與一色左京兆被官相論、舟荷物事、

於舟者、蓋物沽却云々、召上彼訴論人可被遂對決、至荷物者、彼船頭負物在之間、押取云々、所詮之荷船頭之計哉否、自餘之津湊例相尋之、可依左右、

一對決四月廿一日如内談、兼日證人奉行事、以公人相觸、

回文書樣例式折紙

明日廿一午刻於政所武田大膳大夫被官與一色左京兆被官負物相論對決爲證人奉行可有參勤之由候、

齋藤四郎右衛門尉殿

齋藤五郎兵衛尉殿

〔蟪川親元日記〕文明五年八月廿五日甲申、政所對決、於執事代請泉忠所有之、別ニ記之、

〔蟪川親俊日記〕天文七年十月廿五日乙丑、西梅津百姓等與中路被官人對決、又西京服部與古市藤左衛門對決、

〔蟪川親俊日記〕天文七年十一月廿日戊寅、住吉淨土寺之事、雖有對決、無落居之間、可被相口□之由候、兼々爲案内、茨木四郎右衛門野使同進來之獻酒、

〔今川記かな目録追加〕一田畠野山境問答對決の上、越度の方知行三ヶ一を可沒收之旨、先條雖有之、あまり事過たる歟のよし、各訴訟に任問答之傍示境一はいを以、公事理運の方へ付置べき也、

〔甲陽軍鑑十八品第四十八〕甲府法花宗の僧公事之事

〔吾妻鏡〕^三壽永三年○元年十月廿日乙亥諸人訴論對決事相具俊兼盛時等召決之且令注其詞可
申沙汰之由被仰大夫入道善信云云仍就御亭東面廂二箇間爲其所就問注所打額云云

〔沙石集〕^三美言有感事

一下總國ノ或地頭領家ノ代官ト相論ノ事アリテ鎌倉ニテ對決ス泰時ノ御代官ノ時ナリ重々
ノ訴訟ノ後領家ノ方ニ肝心ノ道理ヲ申立タル時地頭手ヲハタト打テ泰時ノ方ヘ向テアラマ
ケヤトイフ時座席ノ人ドモワツトワラヒケル時泰時ウチウナヅキテイミシクマケ給ヒヌル
モノカナ泰時御代官トシテ年久成敗仕ニイマダカクノゴトクノ事ヲ承ハラズアハレマケヌ
ルトキコユル人モカナハヌ物故ニ一言ヲ陳ジ申習ナルニ我トマケ給ヘル事メヅラシク侍リ
前ノ重々ノ訴陳ハ一往サモトモキコユ今領家ノ御代官ノ被申トコロ肝心ト聞ユルニシタガ
ヒテ陳狀ナクマケ給ヘル事返々イミシク聞エ侍リ正直ノ人ニテ御坐ケリトウチナミダグミ
テ感ジ申サレケレバワラヒツル人々ミナニガリテゾ見エケルサテ領家ノ代官モ日來ハ事ノ
子細キホドキ給ハザリケリコトサラノ僻事ハナカリケルニコソトテマケヤウラ感ジテ六
年ノ未進ノ物三年ハユルシテケリワリナキナサケナリ是コソマケタレバモソカチタレノ風
情ニテ侍レ

〔沙石集〕^三一同キ御代官

泰時^{○北條}

ノ時鎮西ニ父ノ跡ヲ兄弟相論スル事有リ父貧クシテ所領ヲウ

リケルヲ嫡子カシコキモノニテマヅシカラヌマニコレヲ買テ還テ父ニシラセケリカヽリ
ケルホドニイカナル子細カアリケン弟ニ迹ヲサナガラ讓ケル兄關東ニテ訴訟ス弟ヲ召レテ
對決ス兄嫡子ナリ奉公有リ申所道理アレドモ弟讓文ヲ手ニニギリテ申上レバ共ニ其イハレ
アリ成敗シガタシトテ明法ノ家ヘタヅチラル法家ニ勘ヘ申テイハク嫡子也奉公有トイヘド
モ父ステニ弟ニ讓ス子細有ニコソ奉公ハ他人ニトリテノ事也子トシテ奉公ハ至孝ノツトメ

將軍座前對決

〔吾妻鏡〕^四元曆二年○文治元年八月廿一日辛未鹿島社神主中臣親廣與下河邊四郎政義被召御前途一決是常陸國橘鄉者被奉被社領訖而政義以當國南郡總地頭職稱在郡內押領伴鄉令讞責神主妻子等剩可從所勤之由取祭文之旨親廣訴申之政義雖伏頗失陳謝爲眼代等所爲歟之由稱之仍停止向後濫妨任先例可令勤行神事之趣神主蒙恩裁退出之後政義猶候御前之間仰云政義向戰場殊施武勇對親廣失度歟尤唆之云云政義申云鹿島者守勇士之神也爭無怖畏之思哉仍雖有所存故不能陳謝云云

〔吾妻鏡〕^八文治四年八月廿三日丙戌波多野五郎義景與岡崎四郎義實於御前途對決是相模國波多野本庄北方者義景累代相承所領也而竊在京之際義實望申之歸參之後義景申云當所者保延三年正月廿日祖父筑後權守遠茂讓與二男義通云云

〔吾妻鏡〕^{十二}建久三年十一月廿五日甲午早旦熊谷次郎直實與久下權守直光於御前途一決是武藏國熊谷久下境相論事也直實於武勇者雖施一人當千之名至對決者不足再往知十之才頗依貽御不審將軍家○源氏有令尋問給事于時直實申云此事梶原平三景時引級直光之間兼日申入道理之由歟仍今直實預下問者也御成敗之處直光定可開眉其上者理運文書無要稱不能左右

絳未終卷調度文書等投入御壺中起座猶不堪忿怒於西侍自取刀除髮吐詞云殿乃御侍登利波云則走出南門不及歸宅逐電將軍家殊令驚給或說指西馳駕若趣京都之方歟云云則馳遣雜色等於相模伊豆所々并宮根走湯山等遮直實前途可止逼世之儀之由被仰遣于御家人及衆徒等之中云云

〔吾妻鏡〕^{十八}建仁四年○元久元年七月廿六日丙戌安藝國壬生庄地頭職事山形五郎爲忠與小代八郎等相論之間就守護人宗左衛門尉孝親注進狀今日於御前被一決遠州并廣元朝臣等被候御前是將軍家直令聽斷政道給之始也

百姓申云六十貫餘之用途事胸臆ニ不覺之由申之仍追可注申上之由被經沙汰畢

申狀一段畢

辨房返送夫廿人責取用途三貫文間事

百姓申詞不違申狀

預所申云此事曾不存知之上ハ可被尋公文之由就載申狀被尋下公文之後可存知之旨申之

申狀一段畢

結句一段事

百姓申詞不違申狀

預所申云此事爲在京之身實否不能治定由申之仍被聞之畢

已上就十月百姓申狀條々問答大概記錄如此

朝廷對決

〔勸仲記〕弘安七年六月廿八日甲戌早旦參院○後深草奏事次參殿下藤原○藤原內覽條々事次歸參院住吉

神主國平與坐摩神主康重相論神事執行於文殿遂對決師顯奉行也一決遂了訴論人起座文殿衆勸決是非問注記并勸決狀等師顯付予宗親朝臣內々奏聞御所爲押小路大納言二品第宗親馳參彼御所勸答云文殿衆師宗一人雖申子細其外一同之上者於神事者國平可施行之由可被仰下之由思食參殿下如何樣可候乎之由被申合於御前讀申問注記勸決狀等其後被仰下是非其趣注折紙付藏部了國平可施行之由被仰下之間即下知社家了終日奔走窮屈無他者也

〔建武年間記〕決斷所條々○建武二年二月日

一召整訴陳狀擬及對決事○付散狀到來
離深至極事

爲正訴人之口留置文書本奉行可令申沙汰經一決是非之後可付渡國奉行方但於篇目者先一國分悉載目六可注進子細

而今又遣船召入常石、於當島籠置之間、雖可加治罰、依爲守護之下人、相觸守護之處、就被申行罪科、畢、而百姓等若依之及逃散者、同意清左近之條勿論也、然者惡黨同意、其科不可通申云々、

百姓申云、清左近男追捕事、於罪科之有無者、不存知、只恐追捕、一向逃散之、由申之、

申狀一段畢

辨房牛二十五疋賣取間事

百姓申云、所存不違申狀云々、但過忘事者、所載後段六十貫用途等、則此等之科料之內也云々、

預所申云、先度御下知之下者、今更不能申子細、過忘事、於後段可申所存云々、

申狀一段畢

辨房若干百姓ヲ召仕事

百姓申詞、不違申狀者也、

預所申云、地頭所務事者、任御下知旨、可召仕百姓等之條勿論也、仍人夫等事、雖加下知、百姓等、稱無

先例、曾不被用者也、此上者、可爲上裁也云々、

申狀一段畢

沙汰用途事

百姓申詞、不違申狀、但地頭此等之非法、依御訴訟被改替上者、御一圓之後、可有御寬宥、由所相存也、

地頭所務之時、致其沙汰之條、本自勿論之次第也云々、

預所申云、此事、存撫民之儀、雖宛十貫文、尙依歟申、五貫文宛之上者、尤可致沙汰之處、取不及沙汰、猶

爭可及訴訟畢云々、

申狀一段畢

辨房三ヶ年中賣取非法之錢六拾貫五百五十文由事

明々日一日刻於政所——與——算用對決爲證人奉行可有參勤之由候、

兩人但依事三人也、

以公人相觸之兩人者一人證人
一人爲右筆也

致算用者御倉兩所ヨリ算置二人召出之置合算也以公人召之略中

文明八年四月十九日

和泉、清
彈正、布施

〔東寺百合古文書 三十八〕寺領伊與國弓削島百姓等就訴訟遂問答條々事

訴人 百姓等則古老
百姓 進士入道 宗太郎

論人 預所略中

常石八郎當島入申間事

百姓申云云責取御年貢員數云入部日限云問答之次第如載十月之申狀無違目者也、

預所申云常石八郎七月七日入部之時者辨房之代官沙汰人相共不可用之由依遂問答同十一日、

退散庄家畢重十九日入部之時者曾辨房之代官等不在庄云々仍如百姓申狀云令參差之旨據所

見之狀地下公文之狀畢此上者於彼年貢者可爲地下之沙汰之由申之、

百姓申云辨房八月ニ下向之時清左近追捕事牛十疋人五人キ又小袖并家内具足等被追捕取畢、

而牛ハ悉返給之人ハ三人ハ被返之二人ハ留之已下ノ物共悉被召之由申之、

預所申云於清左近男者得先年榮實之語所々惡黨亂入之時彼男之許ニ籠置之間武家兩使者令

入部沙汰居難掌之時依彼心操露顯歟於預所不可存不忠之由御使召起請文與預所畢于今帶之、

〔吾妻鏡^四〕建長二年四月二日丁酉諸人訴論事、於引付勘決文書理非之間、加^了見之處、旨趣爲分明者、任先規不能對決、又引付事已剋以前、可始行之云、頭人云、奉行^人莫及遲參、且可進覽時付著到之由被觸仰三方引付云云、秋田城介爲奉行云云、

〔古今著聞集^{十六}〕松尾神主頼安がもとに、たつみの權守といふ翁有けり、わづかに田をもたりけるに、相論の事有て、六波羅にて問注すべきに、定りにけり、其日に成て出ぬ、此ぬしはまうにをこがましき者成ければ、いか成事か、まいでんすらんと、神主思ひゐたるに、晩頭に、この權守、神主が家のまへをとほりけり、神主よび入て、いかに問注はまなしたるぞ、おぼつかなくて待居たるに、なごよそには過侍ぞといひければ、權守居なほりて、過失なげなるけしきに、て、なじかは仕損じ候べき、是程に道理顯然の事なれば、一々つまびらかに申て候へば、敵口をどちて申むねなく候、是程に心地よくつめふせたる事こそ候つれど、あふぎひらきつかひてゆゝしげにいひければ、神主うちうなづきて、さてはこゝろやすく侍り、今は事は定まりぬれば、いかならん世までも、くだんの田は相違あるまじなどいへば、權守とりもあへず、いや田におきては、はやくだらぬといひたりけるを、かしさこそ、さてはさは何事をゆゝ、しういひたりけるにか、ふしぎのをこのもの也、

〔光明寺舊記^五〕權宮掌家助申瀧並所在田地壹段事、就所進之、散狀并申狀、御下知如此、子細見于狀候上者、任其旨來十二日可被遂一決、被對問之由、持參各證文等、可令遂正決口也、恐々謹言、

九月〇延元
四年 歟 八日

信政 花押
春眞 花押

〔政所賦銘引付〕一對決回文折紙

申之歟、自今以後、無隱容可言、上之旨重可被仰遵。

〔新編追加雜務〕一諸國守護人、地頭或正員或代官、依領家預所之訴訟、自六波羅爲遂對決遣召文、爲停止非法、加下知之處、不承引之族有之云々、二ケ度者可相觸、及三ケ度者可注申關東之由、先日被仰下畢、而存優恕之儀、不被申之由、有其間事實者、狼藉爭可相鎮哉、於自今以後者、無容隱可令言上給之狀、依鎌倉殿仰執達如件。

寬喜三年五月十三日

武藏守判

相模守判

駿河守殿

掃部助殿

〔御成敗式目追加〕一對決難澀事

不依御沙汰延否、兩度難澀之時、第三箇度目不及出廻文、以一方可有沙汰之由、被治定之後、貞治治○
恐永以來堅守其法、甲沙汰畢、但以一方沙汰日給人參候之時、雖不遂對決、訴人申所爲之後、依召被

尋問不審篇目事、間有例、

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年元○寬元七月十日己酉、諸人訴論事、兩方證文分明之時者、雖不遂對決、可有

成敗之由、被仰間注所云云。

〔新編追加雜務〕一御家人輩、依本所成敗致訴訟事、於本所遂對決、被裁許之時、有非勘者、就御家人愁尤可申子細、可被存其旨之條、依仰執達如件。

寶治二年七月廿九日

左近將監判

相模守判

相模左近大夫將監殿

〔御成敗式目〕一兩方證文理非顯然時擬遂對決事

右彼此證文理非懸隔之時雖不遂對決直可有御成敗歟

〔新編追加雜務〕

一諸國庄々地頭中致非法濫妨之由訴訟出來之時對決兩方爲是非於京都而沙汰

人預所可遂問注之旨被下知之所稱觸正員地頭代面々對捍不令參決云々事實者甚不當也雖爲代官爭可令難認哉自今以後猶通事左右於不隨催促之輩者殊可有御沙汰也定有後悔歟兼以此旨可令觸知之狀依仰執達如件

嘉祿三年閏三月十七日

武藏守 判

相模守 判

掃部助殿

修理亮殿

〔新編追加雜務〕

一西國莊公新補地頭并本補輩之中依領家預所訴訟或遂一決被裁斷或證文加

下知事等重時朝臣時盛雖令施行正員及代官不承引之族有其數云々且御成敗似不事行且諸人之訴訟不落居之條旁以不便也於自今以後者令下知之上尙不敍用者可被注申也傍輩向後相鎮之樣可有御計定後悔出來歟之由兼逼可觸仰之狀依錄倉殿仰執達如件

寛喜二年十一月七日

武藏守 判

相模守 判

駿河守殿

掃部助殿

〔吾妻鏡二十八〕

寛喜三年五月十三日今日有被定下條々中次同守護地頭有領家訴訟之時不應

六波羅召之由依其間二箇度者可相觸及三個度者可注申關東之由先度被仰之處成優恕之儀不

〔吾妻鏡 十二〕建保四年四月九日壬辰、於常御所南、終日聽斷諸人愁訴給。○源各候于藤御坪、言上子細、義村、善信、行光、仲業等奉行之。

〔吾妻鏡 十二〕建保四年十月五日甲寅、將軍家○源令聞諸人庭中言上事給、海野左衛門尉幸氏、申上上野國三原堺以下事云云、

〔建內記〕應永三十五年○正長五月十四日乙丑、左馬頭殿○足利御判事於御判始者、已御沙汰天下

雜訴、自來月以御判可有御成敗、其間一向管領下知也、管領下知雖承仰、正次御判御成敗事、大樹事宜下以前爲御冥加可有難哉、執柄所存可爲大樹以後條可然云々、

〔秀吉事記〕柴田退治

洛中洛外所成敗者、半夢齋玄以○前也、○中若又法度之外、不決斷理非有之、則秀吉、紕明者也、

對決

〔下學集下〕對論 對決

〔尺素往來〕本領事、近年庶子等成敵人、構種々之奸濫、曲折依奉、掠上聞、及違亂候之間、遂三問三答之、訴陳候之處、兩方證文前後狀之篇、謀實書之段、可爲相論肝要之由、就令治定候、去十八日、互出帶手繼正文、於御前對決仕候了、

〔庭訓往來〕讓狀謀實越境相論、未分甲乙之次第、譜代相傳之武具、重書等者、於引付方可被達御沙汰、頭人上乘、開闔、右筆、奉行人等、爲終日之御評定、雖有窮屈、更無御休息之儀、被勘判之、就問注所賦、闔閣重賦之、執筆書與問狀奉書於訴人之時、及兩度無音者、仰使節被下、召符就違背散狀者、直被下知于訴人、令召進之時者、被封下訴狀、番三問三答、訴陳於御前、遂問答對決、決雌雄是非、奉行人令取捨事書於引付、窺御評定之異見、可令成敗也、

〔雜筆往來〕手繼相傳、全不令牢籠、披見勞契者、不及推量儀理、非分明也、更不能對問、文理顯然也、敢不可及、覆勘證據明鏡也、何無許容哉、理非懸隔也、不可及對決、

右件兩條引勘文簿之處、代々之間、任申請雖被裁許、守源朝臣長俊任申請之時、追可有左右之由、建久五年八月四日被下宣旨、又守中原朝臣師藤任申請之時、先注進子細宜待聖斷之由、正元二年四月十三日被下宣旨之後、詳無所見矣、仍勘申

康永四年十月十九日

右史生安倍久定

紀宣直

左史生中原職有

安倍泰度

〔言繼卿記〕天文十四年十月十一日辛丑

一從勘修寺繪旨到、宿紙拂底之由、被申候間、大澤掃部助持て遣、文言如此、

栗津供御人魚物以下商賈之事、爲諸役免除無別儀之處、應可前關白爲永領可被進退之段、及訴論條可被捧支證之由、數度雖被仰出、終無出帶之上者、任先規構棚、万雜物令商賈可專神役公役等之旨、可令下知給者、

天氣如此、仍言上如件、

天文十四年十月九日

右中辨判表書ハ右申辨晴光ト有之

謹上、山科中納言殿

〔吾妻鏡〕養和二年○壽永元年五月廿五日甲午、相模國金剛寺住侶等捧解狀、詳參營中、是所訴申、古庄

近藤太非法也、彼狀被召出御前、相鹿大夫先生讀申之、

金剛寺住侶等解申請、鎌倉殿御裁定事

請被特蒙慈恩停止古庄郷司近藤太致非例濫行苛法難堪子細狀、副進所課注文一通、○解狀略

○按ズルニ、建久十年源賴家ノ時、直裁ヲ止メシコトハ、幕府吏員條ニ吾妻鏡ヲ引ケリ、

〔建武年間記〕一不遵行勅裁致濫妨事

或號本領、或稱新給、忽諸聖斷者、縱雖募勳功望、恩賞帶證文之相傳、永被弃捐訴訟、召上其身、可被處罪科、

〔建武年間記〕決斷所條々 建武二年二月日

一蒙勅裁輩事

縱雖賜給旨、未帶當所牒狀者、相觸子細於國奉行、可被書入彼目六、於向後者、勅裁日限過三十ケ日、無左右不可成牒狀、宜經奏聞、又無牒者不可遵行之不可沙汰付下地之旨、可仰國司守護哉、此條々不被施行之、訴人邊巡歟、不可說々々々、

〔太平記〕關所停止事

訴認人出來ノ時、若下情上ニ達セザル事モヤアラントテ記錄所ヘ出御○後醍醐成テ直ニ訴ヲ聞召明メ、理非ヲ決斷セラレシカバ、虞芮ノ訴忽ニ停テ、荆鞭モ朽ハテ、諫鼓モ聲人無リケリ、

〔國太曆〕康永四年十月廿一日、亥剋著束帶○中先參仙洞、兼可參之由有召之故也○中次退下參內、

略○中次召官人、仰云、內記、內記宮取之官人示之歟、在顯來取宮退了、次子亦中院大納言相扶所勞參陣、始終奉行無術歟、吉書等事、可被奉行給、大納言諸且此趣兼示之次子起座退出于時、寅剋其後相尋大納言可注置也、又藤長朝臣、實夏等、難陳之趣、可記置之旨示、實夏了、

文殿

勘攝津守從五位下藤原朝臣隆昌申請雜事捌箇條內貳箇條事

一請給官使不論有輸庄園皆悉檢注勘決本免加納且免除且被停止事、

一請任先例被宛行在家役、神社佛寺權門勢家庄園寄人等居住要津不勤國役事、

神崎 濱崎 杭瀬 今福 久岐

之儀先式看三獻荷用人六人^{打_三蓋}三獻之禮畢種々組肴^{心已下}數獻第二獻之時執事起座探酌而令列座衆勸之此時大刀^金一腰宛引之是皆嘉例之儀式也今日一獻要脚者以政所方要脚內被_下行之

一式日內評事

先兼日爲政所廻折紙相觸之其書樣如前無著到孔子之役執事代以下參著則執事出座寄人著座上首次第披露公事於意見者上首發言以衆議被決斷之次奉書事或執事加判或寄人兩判隨于事體聊有差異乎

〔武政軌範^{間注所沙汰篇}〕一內談儀式事

號內評定其儀式與政所之沙汰相同但近代中絶之間不詳雖然至當所執事者于今被定其仁乎〔勸仲記〕弘安九年十二月十三日乙巳今日雜評評定也不出仕^{人治部少輔}○兼仲時爲藏 問十二月四日丙寅參院^{直奏}其次被仰下云神宮雜訴事繁多先々沙汰事等職事得替之間訴人出事等多之此事聖斷有煩於記錄所委有沙汰非據之方文書被加裏書可被下之由思食可申合關白之由有勸定小時退出先參內大臣殿入見參條々事有御談義三ヶ條篇目被注下可注進所存十一日可有御沙汰云々〔勸仲記〕弘安九年十二月廿四日丙辰

於令違犯者可有其科次第^略○中

近日評定衆傳奏職事辨官文殿衆等被召起請且被注下三ヶ條篇目一云不論尊卑觸耳訴訟急速可奏聞事二云不依權勢不肖不存偏頗矯飾可申所存事三云不可耽獻芹賄賂事已上三ヶ條可書載之旨趣也近日德政興行無先規歟一十一廿一日等德政沙汰大臣大納言等評議此外每月六ヶ日雜訴沙汰中納言參議等祗候於件雜訴御沙汰日者被召訴論人於文殿被尋子細於裁許之院宜^山○龜者當座可被書下云々嚴密之沙汰衆庶之大慶乎

鑑造樣其軸頭者四方而本者圓形也其頭書銘一方政所其左一方內評定其次一方著到其
一方年號假令應永十一年如此書之以杉原傳於軸自軸際注月日并名字於軸頭銘并自元日
至廿五日之日付等著座以前鑑役人書之廿六日及執事名字者當座書之

鐵圖

政所

正月

二一
日日

四三
日日

六五
日日

八七
日日

、九
、四

44

• •

廿六

之實也

1

廿六

人實

• • • • •

• • • • •

元兼 永秀 長基 爲貞
|| || || ||

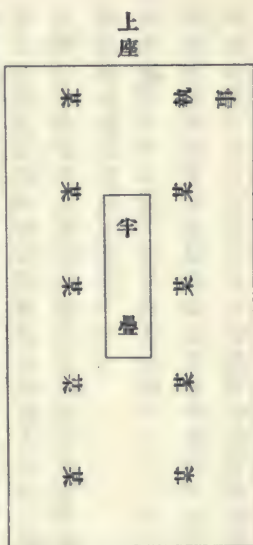
1 1 1 1 1 3 1 1

則書執事之實名。雜仕持硯并籤。自上首次第巡行。而各令載其名。列衆書畢。持籤與硯退。則有勸盃。

某殿

漸及其剋限，寄人參列先執事代差定役者，籤者，右筆之上首奏事者，其次座人著到者，又其次闔者，右筆末座役也，役者既定之後，執事出座，寄人次第著座。

著座次第



先侍雜仕持硯蓋，置于闔役之前，役者則執蓋起座，而至于次座，席盛孔子於硯蓋進于第一座之前，獻之次座人爲禮執孔子披之，令衆人見之，孔子役則退而置硯蓋還著本座。

闔寸法者方二寸，數者二，一者書老字，一者書若字，以老獻一座，若闔者殘置於蓋中也，近年二闔共書老字，雖違舊規，亦有其謂乎，一座人雖執闔，至發言先第一年老人申之，如御前評定之儀式，次侍雜仕捧持硯置于執事前，次奏事役起座，至中座，以奏事詞與扇子，置于半疊上，持目錄進于執事。

目錄應永十一折紙書之式略書

政所內評定著到應永十一年五月廿六日〇姓名略

書畢持之進于執事前獻之，還著本座，次雜仕取著到前硯料紙退，次持硯與籤，置于籤役者之下〇之

脫前字

て被申談、一途候は、可爲御祝著候急事候間如此被仰也近衛殿執御申之云々仍則申合之日行事豆州へも同御使被遣之如此被仰云々

十一日

一大内被申候羅漢寺十方王院住持相論事御談合仍豆州攝州來入於佐方參會申也大内書狀并雜掌僧正法寺申狀并證文等文左改名申所理運也如此の通先度御下知掠給たる住持かたへ一端可被仰聞哉然者正法寺申狀披露させらるべき歟由各申之其段日行事佐手日記如常相調之各稱名を相加之也

十四日

一日行事佐より各へ折紙あり羅漢寺十方寺住持儀につきて正法寺大内雜掌也書狀一彈正方へ被披露之處至于今御返事不申由事也所詮三々日中御返事可申旨以日限奉行へ可申哉次德大寺殿より御申候本役事治部兵衛大夫方へ御尋之處これも御返事於于今日不申候間以日限三々日奉行へ可申歟德大寺殿よりは切々被申條可爲如何哉由申事也各其分可然由事書也仍愚意も其分申也

内評定

〔武政軌範政所沙汰篇〕一内評定儀式事

問注所政所沙汰者被摸御前評定是故號内評定以往者元日以来正月中日々被行之乎仍籤著到者自朔日毎日記之右者年始之執行式日不定應永以後以廿六日被行之先兼日爲政所廻折紙相觸之至評定衆者不載之以使者被觸遣之

明後日廿六午刻政所内評定被始行候有參勤之由候也

某殿

右筆以下悉一紙載之

付勸錄歟、

一内談儀達上聞事

於當所沙汰若有可達上聞之子細者奉行人令參上於御前披露議定之趣或直被成御下知或於引付重被經御沙汰哉爰其奉行人至爲御前御沙汰衆者不能左右於御前未參仕者其手開聞令同道被參殿中代于本奉行人令披露之次諸家兼參之輩亦同之○中略

一訴訟落居及解狀出訴人事、

訴訟事終者奉行人封解狀裏反渡于訴人訴人又書寫解狀封其裏獻于奉行所是規式也、

〔武政軌範政所沙汰篇〕一訴訟次第事

就賦到來書與召文相調訴陳狀於内談之砌披露之其札明之次第同于雜訴之規式仍不及委記

〔大館常興日記〕天文九年三月九日

一攝州來臨大内太宰大貳申豐前國羅漢寺住持事去々年掠申御下知給候僧は大内無許容候然共御下知被成たる事候間被成返候て當住大内さし居置候相定候はゞ可畏存候分國之事にて大内進退之寺之儀也仍其段以松田丹後守申狀在之又以勢州内儀は大内被申之然間各御談合候由承之間其機體兩僧相論之趣古庵方被訪意見候て可被仰出事可然哉之由申之也攝州も其心へ也仍手日記在之間此分にて加稱名也

廿三日

一攝州より各へ折紙在之羅漢寺住持職相論事兩方三問答相そろい候て已後奉行可爲意見候由被仰出候各爲心得申之云々尤心へ存候由申之也此事大内存知事也云々

四月八日

一近衛殿より御使進藤流後守在之大内太宰大貳申羅漢寺住持職事今日雖非式日候各參會候

一諸國御年貢事

已上 實名 奏事之役人名也

還中座向于上座跪而披露奏事詞、

一石清水八幡宮御神樂料足事

任例可被仰付之焉

一北野宮寺御神寶料足事

可被仰付御倉焉

一諸國御年貢事

任例可被成御奉書焉

豎紙書之、但奏事詞等依時有相替事歟、

讀申初條而向畢、發言人開意見詞、請左右之同々畢、向于頭人之時、則頭人發同詞、即合點於目錄

二箇條、三箇條之義式亦如是、三箇條畢、還著本座、雜仕進而執頭人前、硯退、次持料紙與硯、置于著

到役者之前、則書之、

一方內談著到七日 明徳元年二月
姓名略

書畢捧之、獻于頭人、還著本座、雜仕執料紙硯退於茲、頭人退座、而持參著到於御前列衆悉退散之

後頭人以使者各被送、遣一腰一重是恒規也、

一式日內談事 付奉書草

凡大體與前儀式相同、每度兼日開闔以單冊相觸之、○中略

一落居記錄事

內談一決事、於當座申沙汰人記、議定之趣是定法也、及後日有不審事之時、披記錄勘進之、是號引

次今日役者奏事某著到某圖某之由申之還著本座次侍雜仕持硯蓋而置于圖役之前即執之起座至于別座盛圖於硯蓋持之進于頭人自其次第進之列座衆執畢役者跪于末席執已圖入懷中持蓋退于列座置之而進出候于中座雜仕持紙與硯置于中座之半疊則圖役任意見之次第先書題給與一番二番之字見上座此時頭人以下各披圖而令見之則一二之下注其人名座遠而難見圖之時者其人微音告一二之數頭人評定衆者載唐名右筆以下者注名字與官之片字圖役者注實名也當參外之圖者不注之又末座之人執當于一番二番圖之時者持之進于第一二座之人與其人圖替之是則若輩之禮也

意見次第明德元折紙書之

一番 因州 二番 三番 飯加 四番 中書禪 五番 六番 松丹州 七番 八番
九番 清左 十番 齋兵 十一番 十二番 布民大 十三番 十四番 矢縫 十五番
十六番 依新左 十七番 十八番 十九番 貞一 廿番 左兵衛

圖作樣其大者方二寸許書一二字如常其數者不依參不參總寄人之數作之假令寄人有廿人者當參衆雖爲十人可作廿人之圖也圖之出樣最末圖者可出于頭人其前圖者圖役可執之頭人之圖者不混于自餘之圖之樣置之則頭人得其意執之已圖者插大拇指下持之故實也見意見次第而可意得之

書注文畢披之置于半疊之上還著本座次雜仕出而執中座之料紙硯退次捧持硯置于頭人之前次奏事役起座進出于中座先以申詞與扇子置于半疊之上捧持目錄獻頭人

目錄明德元折紙書之

一石清水八幡宮御神樂料足事

一北野宮寺御神寶料足事

二月十日

某殿

實名判

至其剋限、衆中參看、先開闔申合頭人、差定奏事、著到、闔等之役者、奏事者、右筆之上首、著到者、其次座人、闔者、末座人、其右筆之所作也、役者、既定之時、頭人著座、次寄人、次第列座、御座席之中央一間者、徹疊而鋪刺筵其上、鋪半疊、



座定之後、開闔起座而進於中座、披露規式、

一方內談規式

一式日

二日、七日、十二日、十七日、廿二日、廿七日、

一剋限

自巳剋至未剋

一條數

一日廿箇條

以上 堅紙書之、式日者、依其方可相替

內談

〔武政軌範侍所沙汰篇〕一式。日事

每月上旬、中旬、下旬、三々度也。日限者依于時相替乎、或至急事者雖非式日被執行之、

〔政所內評定記錄〕一後內談始同(元正三年三月廿三日)八過 頭人略之姓名

披露

一天龍寺清涼殿申、香嚴院領佐味庄主職事、

依被成五ヶ年之補任、度々過分立御用之處、不能御返辨、背補任之旨、改易之條、不便也、可被遂算用、

之由申候、自管領○細川就被仰候、公方○足利就被披露候處、此分當所、江可申之、由被仰出之、可有如

何候、由披露之、仍不及賦之意見、被成召文、可被遂算用云々、

〔武政軌範引付內談篇〕一分諸國有沙汰事

三方內談之時者、分諸國於三、五方內談之時者、分諸國於五、令沙汰之國者、依其類分配之、東山、東海、山陽、山陰之類是也、至關東、鎮西者、不入之、別奉行人在之、

一式日事

月之上旬、下旬、各兩度也、假令二日、七日、十二日、十七日、廿二日、廿七日、如此一方六箇度宛被執行之、五方之式日相替畢、

一會所事

御代始頭人沙汰始者、於殿上布障子間、或三間御厩等被行之、每月式日內談者、於頭人亭被執行之、○中略

一內談始行事

兼日開闔遺折紙相觸衆中、

明後日十二午剋於殿中一方內談被始行候、可令參勤給之由也、恐々謹言、

上者早被召決就真偽欲蒙御計云々者云山務之非據云閉籠之實否梨下陳謝之趣有子細歟可被召張本之由可被申院宜御返事之旨先日雖有其沙汰於今者不及張本之沙汰只召決兩方任正義早速可有聖斷之由可被申御返事

次教因事隨使節參向之條不可然之由可被仰含教因并青蓮院衆徒使禪淳顯譽也

次信賀事爲御家人子息屬青蓮院令骨張惡事之由負梨下訴之條非穩便之儀早可召下之旨內々可被仰親父氏信歟且信濃判官入道行一康有兩人問答兩方使之後如此可有施行之由評了

評定衆誓狀申加新衆署判可進入之由以平金吾蒙仰了

廿七日評定延引信判入相共出御所評定所問答青蓮院使教因禪淳顯譽梨下使永海賴尋等了

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年○寛元元年

二月廿六日癸酉

諸人訴論事爲無成敗懈緩今日於左親衛○北條經時

御亭有沙汰且被點其日々且被結人數

定

御物汰沙日結番事

一番 三日、九日、十三日、十七日、廿三日、

攝津前司 若狹前司 下野前司 對馬前司 太田民部大夫

二番 四日、八日、廿四日、廿八日、

佐渡前司 太宰少貳 出羽前司 清左衛門尉

三番 六日、十四日、十九日、廿六日、廿九日、

信濃民部大夫入道 甲斐前司 秋田城介 加賀民部大夫

右守次第無懈怠可被參勤之狀如件

仁治四年二月日

以評定落居事書奉行人書御下知案文引付披露是御下知案文治定之後或當奉行或清書奉行書

上時探題探題者關東者兩所京兩御判被成其手頭人封御下知裏召一方得理訴論人於引封御座

直下給之以是事切御成敗云

一覆勘事

如此被成御下知之後訴論人中先御沙汰參差由參差者於頭人方申子細之時所申有其謂者於本

引付以先御下知之下重有其沙汰是覆勘云所申無子細非沙汰之限

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿二年十月九日辛卯有評議駿河前司以下皆參候諸人訴論事被決斷爰尾張國御

家人中民部丞泰貞與駿河前司郎從太屋中太家重泰貞親昵年來所領有相論其事今日被經沙汰

之處泰貞竊廻謀評定所之後竊評議之趣駿河者家重得道理意見之由申訴家重又參其砌元自駿

州之無扶持之旨陳之緯已咄々也兩人共被追出彼所舉 十二日甲午評定之時訴人近々伺候事

向後可被停止云云猶有推參之輩者任法可致沙汰之由尾藤左近將監平三左衛門尉盛綱南條七

郎安東左衛門尉等被仰付是併泰貞依狼藉也彼於所帶理運之間被付家重云云

〔吾妻鏡 三十八〕寬元五年元寶治十二月八日丁亥有評定就諸國地頭等與雜掌相論有被一決之事

所謂有限年貢進濟之外於庄官百姓等名田畠者可進止之由地頭等申之有限給田加徵地頭難免

等外於名田畠下地者自往古本所進止之由雜掌申之任先々度々御下知可守率法之旨被仰出云

云

〔太田康有記〕建治三年七月廿五日評定老

一梨下衆徒使永海賴尋申堂舍閉籠無實由事

座主非據過法梨下奏聞難達之間廢退行徒切塞道路之條者爲達訴訟山門之故實也全非本堂靈

場之閉籠彼五佛實相淨行院等者一門有訴訟之時往古集會之場也可閉籠哉所詮兩方參對之

日面々加名字了、酉刻中御門大納言宣明卿衣冠下、左大辨宰相忠光卿衣冠下、等參著、无出御庭中一々條、岩藏姬宮雜掌申唐橋室町地事爲仙洞御管領之間、難及聖斷之子細先度被仰了、同篇庭中非沙汰限之趣中御門亞相問答被返了、其後傳奏被起座見參書立紙明宗付開闔、開闔内々付上卿進入之也、

四條三位隆右卿雜掌申、眞桑庄預所職事、去十一日對決之時、仁平廳下文不持參之間、不申之、被取具可被經御沙汰云々、不備進訴陳不具對決之時、構簡要執進之條可停止之由、貞和文殿之時被定法了、其上非對決砌落居以後令申之條令參差歟有所存者、可申越訴由面々加問答返了、此事傳奏不被起座以前也、□□合寄人等被問答、

沙汰事

一四座下部等申請年預得分事

宿老參入、中臈申子細不參之間不及沙汰、重可出廻文云々、

一左女牛鳥九屋事

赤田總次郎直代參入而訴人唐松九代加押紙不參之間不及沙汰云々、

〔沙汰未練書〕一評定沙汰事

關東者兩所京都者兩六波羅殿五方引付頭人衆中皆參之時於評定所有其沙汰、先以孔子定意見之次第、其後開闔一人合奉行一人又開奉以文書參評定所向御前各敘引付勘錄事書讀上是讀進

云、非開闔者不讀之、讀進後守孔子次第、面々有御意見引付勘錄有子細者云々、返本引付重可有其沙汰、勘錄無子細者無相違云々、

一同評議緒終後、事書之頭是非被書付、是頭執筆評定衆中、以一人定之、是以爲評定沙汰落居、

一御下知被成事

門中納言家成卿御領所職者俊重子孫可相傳之由成返契狀以來代々無相違且元亨正中記錄所勘狀分明歟藤原氏女爲本主俊重後葉受領度々勅裁并次第又□□等所□□申難被棄捐歟之趣一同了執筆明宗

一大炊寮與一條大副兼前宿禰相論山城國市邊御稻田事

兼前宿禰下向播州之由加押紙不出對仍開闔可伺申由令申之

今日被行難訴沙汰四條前大納言隆蔭卿_{直衣}中御門大納言宜明卿_{衣冠下紙未也}左大辨宰相忠光

卿_{下紙}等參仕職事藏人右中辨行知一身參仕

今日開闔押番文於記錄所與辨官座末長押押之

〔後深心院關白記〕永和二年閏七月廿八日今日德政議定云々

一雜訴事

准后關白前內大臣從一位藤原朝臣長顯等定申云任曆應應安法可被遵行歟議定難訴沙汰守式日不可有闕意奏事

出御剋限可爲午一點且諸人訴訟不依親疏不存私典急速可申沙汰之由可被召仰職事辨官等哉

〔師守記〕貞和三年三月二日乙巳今日家君_右師御參院_光宮殿依御前評定也評定衆久我前相國

洞院前左府日野前大納言資明卿葉室前中納言寄人大夫史匡遠大外記師利大博士師治新大夫

史清澄_{今年始出仕}大外記家君博士大夫判官章有掃部頭師香主稅大夫判官章世等參仕云々

〔師守記〕貞治元年十一月十六日丁巳參記錄所給大夫史大判事自元祇候家君_右予著加之寄人

四位大外記家君_{衣冠上}大夫史量實_{開闔}主稅頭子_{衣冠上紙未也}大博士宗季_{衣冠上紙未也}大判事明宗_{衣冠上紙未也}

端座等著座次明宗直著到日其後面々書名字雜仕依瘡病不參之間著到取傳先去十一日著到書

之先日開闔取落不持參之間以別紙加著到而重加著到了開闔令申之故也次今日分著到明宗直

無其謂上如此下職長官任道理可計成敗之由向後若可被仰下歟、
自御所被下文書
一信壞得業與實壽相論藤原香子山兩庄事、

人數參仕之時有御沙汰可被落居歟、

關白 前右大將 兼

目六付職事俊光朝臣奏聞事畢退出、

〔東寺百合古文書_{山城}三十二之四十九〕建武元年七月廿二日評定

東寺雜掌與小野氏女相論梅小路室町敷地事、

件地事雜掌捧正和二年十二月六日勅裁并正中三年十二月十八日官符文保元年十月日院廳下文元弘三年五月七日給旨等爲勅施入之地、
〔圖太曆〕康永三年二月十七日今日難訴沙汰雖有其催而去夜官奏以外窮屈之上近日難訴有名無實也仍強推參無由之間申所勞之由了、
〔師守記〕貞治元年十一月十一日壬子今朝家君_{右師}以使者今日難訴沙汰延否事被尋問頭右大辨資定朝臣之處一定云々_{略中}
沙汰事

章方_{原中} 章香_{原中} 明成_{上振} 章有_{親町正} 秀清_{原中} 章緒_{倉高} 章興_{泉冷} 章世_四

〔圖太曆〕康永三年二月十七日今日難訴沙汰雖有其催而去夜官奏以外窮屈之上近日難訴有名無實也仍強推參無由之間申所勞之由了、
〔師守記〕貞治元年十一月十一日壬子今朝家君_{右師}以使者今日難訴沙汰延否事被尋問頭右大辨資定朝臣之處一定云々_{略中}
沙汰事

一藤原氏女與四條三位隆右卿相論美濃國眞桑庄預所職事

兩方雜掌出對對決之後退訴論人面々自下薦申意見明宗發言所詮本主中原俊重久安寄進中御

三月十一日甲子參院評定式日也攝政前相國內府吉田納言子等參仕條々有沙汰子書定詞彼狀加評定文書了子細見文書仍重不記之

〔勸仲記〕正應六年

永仁元年

六月四日己丑參內殿下

○藤原家基

前源大納言前右大將○藤原公衡吉田中納言

下官

○藤原兼仲

等祇候有難訴評定一揆之趣予注之

一宜尙申殿村鄉內小田非器甲乙人知行事

祭主在京云委猶被尋究可有沙汰

一相藤與相賢相論松尾社領東鄉庄事

相兼讓相藤之狀雖悔返後日重讓相藤狀父相俊法師加署判上者難被父行事歟於名田者任母

之讓相藤可進退之由可被仰下歟

一忠源法印與真助相論城興寺寺用事

忠源知行之時年貢濟否於記錄所可有沙汰

一左衛門督局申薦坂庄內小田年貢事

以前折中之聖斷不可有相違歟

八月四日丁亥參內雜訴評定殿下前右大將下官參仕頭辨俊光朝臣申出杭庄下司事藏人大進定

房申三寶寺事兩條子發言治定之後又書目六

正應六年八月四日

一稻荷社領杭庄

○上文作出杭庄

下司職事

景實得理之由先度被經其沙汰畢於狼藉之段者以前申旨今更無相替之子細歟

一典藥寮領乳牛牧公文職事

嚴貞以公領私無左右寄附三寶寺之條不可然齋嚴沾却之後子今住侶無申旨之由實家申之非

〔葉黃記〕寛元四年十一月三日戊午、今日於院甲乙訴訟以下事有評定、相國前內府參仕、吉田中納言奉行、每月六ヶ度可有此事云々、其衆太相國實基前內府定通右大將實基吉田中納言爲經予藤原

〔葉黃記〕寛元五年實治正月廿六日庚辰未刻參院嵯峨今日評定式日也、早被始也、予藤原參御

前太相國實基前內府定通內府實基堀河大納言實基吉田中納言實基本自候座、予參以

前事、納言讀文書、或又予讀上之定詞、予書了、總四ヶ條也、

一高野山領名平庄與粉河寺領丹生屋村相論堺事

於武家遂對決、以問注記送關東、而於堺事者可爲公家御成敗相論之間、狼藉出來了於此事者就

被仰下、可致沙汰之由時賴申上之、仍有評定、可被下記錄所之由人々被定申之、予不甘心、如件間

註記者高野所進證文之中、嘉承宣旨案、背正文書入西岸兩字、已招詐僞之科、歟或又應保元年之

證文、改元以前載新年號同以僞書歟、

一大神宮禰宜長光與權禰宜範元相論父永元遺跡事

兄弟共帶文處分狀、一向可用後狀之由內府被執申之、但有子細等、不遑記盡、前狀後狀之用捨、猶

可搜法道歟、無其科者、輒難棄前狀歟、可被下法家之由人々被申之、猶可被下記錄所歟、

一八幡權別當教清與右衛門尉盛範相論周防國得善保事、可被問國司之由人々不同

一賢算律師算明法橋申宿曜道事

宿曜秘法、慶算法印相承之、慶算傳二人之弟子實明、良算傳聖算、聖算於旅館頓滅、今賢算實算弟子算

明等致此相論、又良算實子幼童尼丸帶父讓聖算實子幼童尼丸王憑賢算之扶持、又望申之也、算明

已傳受秘法了子細然者爲器量之仁、可奉御祈歟、後傳尼丸歟之由予發語、人々被同

之、又可被召覽文書正文云々、條々大概如此、不見本文書者、後見難心得歟、然而篇目許也、早破也、

或以孔子被定之乎、

〔武政軌範〕侍所沙汰篇「一賦事

往古者訴人捧申狀之時、頭人加銘、直賦于奉行人之旨、見于古記、近代者開闔申沙汰之、加訴狀銘以

折紙賦于寄人云々、

〔武政軌範〕地方沙汰篇「一賦事

訴狀加銘、頭人以折紙賦于當手寄人、

〔武政軌範〕問注所沙汰篇「一賦事

執事訴狀加銘、以折紙直賦于寄人、近代者內談之儀、雖令斷絕、至紛失訴訟等者、當所執事書與吹舉狀哉、

〔武政軌範〕政所沙汰篇「一賦事

訴狀加銘、以執事之折紙賦于寄人之條、既舊規也、而勢州貞國執事之時、至永享之末、依公儀不得寸暇、申子細於衆中、一旦以政所代于時親當折紙賦之、其以來任彼例用代之一行乎、近年止折紙、只加訴狀

銘、旁以爲新儀者哉、

〔康富記〕嘉吉二年十月十三日庚子、管領畠山左衛門督入道持國、雜訴之賦、自今日被出之、飯尾六郎

左衛門尉木澤左野等三人談合、書出目安之銘云々、每月六ヶ日二七可被出也、廿七日甲寅、管領

畠山亭諸人爲取雜訴賦群參、賦事一日不過廿通於所望之仁者及數百人之間、每日作闔廿賦所望

之訴人、兼令取之充人書給賦云々、此四五日如此云々、此儀元來無事也、雖然爲訴人殊勝々々、

〔甲陽軍鑑〕品第一「甲州法度之次第略中

一公事出沙汰場江後、奉行人之外不可致被露、況於落著之儀哉、若又未出沙汰場江以前者、雖爲奉行人之外不及禁之歟、

一可被書同者署所事

一兩方所進證文等各可對繼目事

一同文書目錄巨細可被注進事

一庄園領家事

雖被載本寺社之名不被注領家之間聊涉不審間注記端作雖不被出之申詞之注ナンドニ可被書載之歟

一可書正地頭交名事

其庄地頭^{某土}載^天不書正地頭之間聊涉不審歟地頭^某代官^{某土}正員代官共以可被書之矣

一條々各別可立篇目事

一段內條々相交之間御忿々之時難得御心一事一段^{仁天}兩方申狀詞別々^仁可被書加也○下

〔建武以來追加〕御成敗條々<sup>應永廿九七廿六
松田丹後入道常胃奉行</sup>

一諸人訴訟事

於或年紀馳過或不帶公驗者不可有御裁許焉

〔建武以來追加〕管領壁書

一諸人訴訟事<sup>永享二九卅正長二
七廿二被仰出之</sup>

以賦日限次第奉行人可伺申之焉

〔武政軌範引付內談篇〕一賦事

右者問注所執事或政所執事奉行之條見于古記近代者爲管領之御沙汰哉至賦式日令持申狀具書於管領渡于賦奉行請取之則伺申無證文以下之相違者加訴狀銘相副吹舉之折紙遣引付之開闔則伺申頭人寄人賦之奉行之仁體者宜隨訴人之所望不差申者或爲頭人相計之被定奉行人

一諸司領并億座懸興行勅裁事無左右不可被下之
一屋地并負物事別當未補之時於文殿可有其沙汰
一勅問文書事送年月之間爲訴人有其愁歎於向後者相違○相恐廿々日可申所存已上
雜訴事堅可被守曆應法可被存知由被仰下之狀如件

十月三日

權中納言忠光

四位大外記啟

〔吾妻鏡二十八〕寛喜四年

貞永元年

五月十四日甲午武州

北條泰時

專政道給之餘試御成敗之式條之由

日來内々有沙汰今日已令始之給云云偏所被仰合玄蕃允康連也法橋圓全執筆是關東諸人訴論事兼日被定法不幾之間於時絳亘兩段儀不一揆依之固其法爲斷濫訴之所起也八月十日武州令造給御成敗式目被終篇五十箇條也今日以後訴論是非固守此法可被裁許之由被定云云

〔御成敗式目追加〕御消息一通

雜務御成敗之間同體なる事をもつよきは申ををしよはきはうづもる様に候を随分精好せられ候へどもおのづから人にえたがうて輕重などの出來候はざらん爲にかねて式目を作られ候

〔吾妻鏡三十〕

寛元三年五月三日丙申今日諸人訴訟事被定其法所謂被仰下問注所之處寄事於

左右當參之輩令難澀之條奉行入催促過五箇度者慥隨被註進交名可被處罪科也亦奉行入訴人參對之時令不參記申詞者可註申交名同可被處其咎云云

〔吾妻鏡四十〕

建長二年九月十日癸酉諸人訴論御成敗事尋守式條不可參差之由今日被觸仰引付

并問注所政所云云

〔吾妻鏡四十〕

建長八年

康元年

十二月廿日丁丑就六波羅問注條々有被仰遣事

日定ムル分者、

祖父 祖母 父母 子孫 兄弟 姊妹 姪 舅 伯叔父 甥 小舅 從母 兄弟 夫妻

退之時可 烏帽子子等也退座スル事モ最良義アラセジ爲又自餘人意見憚アルガ故也強退座

身アラチドモ人語ヒテ最良スル事アリ是政道ヲケガス基ヒ也

〔吾妻鏡四十六〕建長八年元康十二月廿日丁丑就六波羅問注條々有被仰遣事中

一以問注記下沙汰人令勸理非之處其數輩之中於緣者者令起其座畢而其外或號先論人又稱前

前緣者嫌申沙汰人之事御評定之時用捨何樣被定候覽不審事候之間内々尋申候委可蒙仰候焉

〔師守記〕貞治元年十一月廿九日庚午越訴以前中御門大納言著橫敷招明宗去廿〇〇三位雜掌申

就真桑庄預所職事量實退座〇〇被仰勸答被返下申狀明宗賜申狀歸座召仰雜掌了勸答云稱可

退座仁一人相交申亂當所注進之條不可然歟量實退座事尤兼日可申所存歟沙汰落居之後令申

非御沙汰之限之趣也此子細注付庭中目六後〇〇

〔園太曆〕康永三年閏二月一日今日仙洞評定也依兼日催相扶風咳參院略註美和庄金原法花堂以

下并檳石島等事可有沙汰云々美和庄事覺深法印領主也仍予退座事也

〔後愚昧記〕應安四年雜訴條々一通如此可被存知之由被仰下之狀如件

四位大外記殿

一任官敍位雜訴等可被停止近習内奏女房口入事

一近習男女於奏達者雖恐時儀以私會釋受取事

一任官敍位等以女房被傳仰傳奏職事條一切可被停止事

以上堅可被守延慶法

一諸人或號闕所或稱無主強賜他人知行地可向後一切被停止若不隨此制者可被斷朝恩之望

凡奉行人は、天下の公事を執行ふ職たるによりて、政道の善惡もごゝして是によるべし、いかに
も心正直にして、私を不存、黑白をわきまへ、文筆に達し、理非にまかせて、最良をいたさゞらんを
よき奉行とは稱すべし、是によりてあやまりあらん奉行人をば、ながくめしつかはるべからざ
るよし、貞永の式目にのせられ侍り、兩方の支證をこり合せ、究決せられて、理有方へ付られたる
を、もとの給人として、難澀をいたさんば、別て罪科に處せらるべし、いはんや奉行人として存
知ながら、ざりあげ披露せんは、大なる越度なるべし、もし又奉行人として、最良をいたし、かたて
うちになされたる公事たらば、越訴を立て申さん事、其咎有べからず、其方の奉行たる人、傍輩に
かたらはされ、煽をなして理をまげんは、かへす、口惜かるべし、御法にも、奉行をさしをきて、
別人に付て、訴訟をいたす事をば、停止せらるどいへども、時に忘たがひ事によるべし、いかにも
内奏強縁をもてもなげき申べきことなるべし、又諸人の愁は、緩怠に過たるはなし、むなく廿
ケ日を過ば、庭中を出すべき制法ありといへども、理運の訴訟にいたりては、いかにも不日にこ
れを申さたすべし、いはんや一所懸命の地人にさまたげられん輩においては、明日を期せざる
存念也、いかでか慈悲の心をもてあはれみをたれざらんや、所詮親疎を論せず、理非にまかせて、
わたくしの賄賂にふけらず、公方の瑕瑾にならざる様に、正路に申さたせん、奉行人においては、
別て臨時の勸賞もをこなはれて、後昆の忠勤をすゝめらるべきものをや、

退座

〔吾妻鏡 三十三〕延應二年元○仁治四月廿五日己未、被評定之退座分限所謂祖父母養父母養子孫相

舅伯叔父甥從父兄弟小舅夫妻、烏帽子子、簪等、

〔塵添盛抄 三〕退座人數事付定時代事
不可有異事

沙汰ヲ行ニ付テ、タイザノ意見ト云ハ何事ゾ、退座トハザヲシリヅク也、朝廷ノ舊儀イカバ
アリケン、四條院御宇、鎌倉正二位權大納言賴經卿時、平泰時等評定トシテ、延應二年四月廿五

當の奉行と、見禮の奉行とをわかれ、
おのづから其職掌はありしをなわべして、

〔東寺百合古文書二ノ二十六至五十六〕今日對決事、證人奉行。歎樂候條、延引候、定日には可申上候、
謹言、

五月十四年永正 十一日

英致華押
基雄華押

東寺雜掌

〔吾妻鏡十六〕建久十年○正治元年四月十二日癸酉諸訴論事、羽林○源頼家直令決斷給之條、可令偏止之、於

向後大少事、北條殿○時政同四郎主○義時并兵庫頭廣元朝臣、大夫屬入道善信掃部頭親能○宣在三浦介

義澄、八田右衛門尉知家和田左衛門尉義盛、比企右衛門尉能員、藤九郎入道連西、足立左衛門尉遠
元、梶原平三景時、民部大行政等、加談合、可令計成、敗其外之輩、無左右不可執申訴訟事之旨、被定

之云云、

〔吾妻鏡二十九〕貞永二年○天福元年十一月十日、今日有評議及晚事訖、武州○北條泰時令還御亭給之後、招

大和守倫重、玄蕃允康連、民部丞業時等、賜盃酒、公事之間致勤厚、殊神妙之由褒美給云云、是近日難
訴事、相積之間、連々有評議、每度武州早參給人々面々欲倒衣奉先立之、仍此三人令談合曰、夜中參
候于評定所、至翌朝奉待彼御參事、既及五六箇度之間、預此御感云云、

〔吾妻鏡四十〕建長二年九月十八日辛巳、今日雜人訴訟事、被糺決之時、爲辭事者以十貫可被充橋用
途之由、兼召置請文可有沙汰之由被定云云、

〔建内記〕嘉吉三年三月十七日癸酉管領、自今日雜務沙汰可嚴重云々、正月十一日評定始、去月十七
日沙汰始、如式且其後依賀州守護物忿之儀、于今無雜訴諸人嗟歎候處、政道再興、珍重々々、
〔權談治要〕一訴訟の奉行人其仁を選ばるべき事

本奉行。諏信州。

合奉行。治河。

〔武家名目抄^{二十四}〕本奉行 合奉行

按、本奉行、合奉行は、もと一事沙汰の上にてよべる稱呼なれば、全く定まりたる職名にはあらず、鎌倉殿武家中興の初訴訟の事あるに臨みて、家司の内より、專當の奉行を定め、其沙汰を致さしむ、これいはゆる本奉行なり、又政所寄人の内より一人を以て其副たらしむ、これを合奉行といふ、さればいづれも常日の所職にてはなかりしを、引付衆を置れし後、其衆を以て本奉行に定むる事は、臨時の職掌にて、初、格に異ならざりけれど、合奉行に至ては、寄人の内より常に定置る、例となりて、おのづから職名の如くなりしなり、本奉行を常に設置ざりしは、誰を沙汰する職掌たり、但訴訟沙汰の外に、事ありて定めらる、兩奉行は、如此例に准せず、事の大小に従て、人數の多少もあり、又門地階級にもか、はらずして、命せらるればなり、

〔政所内評定記録〕四月〇寛正十五年在盛勤之内談略〇中

披露

一 對決 四月廿一日 如内談、兼日證人奉行、事以公人相觸、

〔武家名目抄^{二十四}〕證人奉行

按、證人奉行は、鎌倉殿の時に所見なければ、きはめて室町家の世に設けたる職號と見ゆ、もとより臨時の所職にして、常日設置る、ものにあらず、何事にもあれ、訴論人等對決すべき事あれば、本奉行、合奉行の外、更に他の奉行、二人もしくは三人をして沙汰の始末を見聞せしむ、證人奉行といふは、即これなり、凡其職分、且は對決の是非曲直を見證し、且は專當の奉行に偏頗なき旨を證すべきつかさなれば、ひたすら證人を以て名とせしなり、鎌倉の世に、其職聞えず、列座の奉行人に、卑

按○中 凡公事奉行人のつかさどる所、一事にとゞまらざるが故に、廣く公事を以て稱せるなり、然れども正しき職名ならざるに依て、常にはひとへに奉行人とのみいへり、後評定引付の兩衆を設け、政所問注所の兩寄人を置く、に及て其輩ひとしく公事を奉行す故に、奉行人の員倍增せり、其内より諸事の奉行に定めらるゝ時、或は恩澤奉行、又は安堵奉行、問注奉行等の稱あり、其以下の諸奉行皆是なり、略○中 なべて公事執行の内に、訴訟裁判の事は、人庶の浮沈にかかり、天下の瞻望する所にして、政務の第一なれば、俗間に公事といへるは、必訴訟の事に限れる辭の如くなりゆきければ、足利殿の時には、奉行人の事を、公事奉行御物沙汰衆などいふ辭は絶たり、然れども公務を執行することは、皆鎌倉の例に倣へり、鎌倉の世に訴訟人を問注す利殿にいたりては、其さなへも絶たり、猶問注奉行條に注せり、かく公事といふことの訴訟に限れること、なりしより、大名諸家にて、公事奉行、公事方など稱する職掌は、すべて訴訟裁判の職となれり、

〔甲陽軍鑑品八第十七〕公事奉行

一 今福靜閑 一 武藤三河守 一 櫻井安藝守

右三奉行 用周公吐握

御陣留主には、御藏の前衆目安をうけとり、目安箱に入置也、

〔御成敗式目〕一 閣本奉行。付別人企訴訟事

右閣本奉行人更付別人内々企訴訟之間、參差之沙汰不慮而出來歟、

〔蜷川親元記〕一 六月四〇寛正 廿六日 内談

一 河道濱平三郎申間事

市座輩、自往古无商賣之政、勿論之由、小串次郎右衛門、南岸坊注進之上者、任舊例可致沙汰、被成奉書、

御評定日々奏事結番 次第不同

一番 三日 十三日 廿三日

尾張入道見西 越前前司時廣 宮内權大輔時秀 伊賀入道道圓 和泉入道行空

二番 六日 十六日 廿六日

越後守實時 中務權大輔教時 出羽入道道空 信濃判官入道行一 對馬前司倫長

三番 十日 廿日 晦日

秋田城介泰盛 縫殿頭師連 小卿入道心蓮 伊勢入道行願

一番衆 一日 十五日 二番衆 五日 廿一日 三番衆 十一日 廿五日

政所問注所及執事、毎日可令參也、且自問注所毎日可差進文士二人也、

〔吾妻鏡十〕建久二年正月十五日甲子、被行政所吉書始、前々諸家人浴恩澤之時、或被載御判、或被

用奉書、而今令備羽林上將賴朝源給之間、有沙汰、召返彼狀、可被成改于家御下文旨被定云云、

政所

別當

前因播守平朝臣廣元 略中

公事奉行入

前掃部頭藤原朝臣親能

筑後權守同朝臣俊兼

前華人佐三善朝臣康清

文章生同朝臣宣衡

民部丞平朝臣盛時

左京進中原朝臣仲業

前豐前介清原真人實俊

〔武家名目抄二、十三〕公事奉行入 又稱御物沙汰衆

〔沙汰未練書〕一所務沙汰者 所領之田畠下地相論事也。○中略
開闢執筆者奉行中之宿老引付細々事記錄仁也。公文トモ云也。

〔武家名目抄職十〕引付衆

按引付衆は評定衆補助の職にして、訴訟はさらなり、其餘の公事、なべてうけ給はり沙汰せる重職なれば、評定衆にさしつぎて、諸奉行の職を帶せるならひなり、これを公家の官職に比するに、參議もしくは左右辨官の職掌に當れり、もと引付といへるは、記錄の名よりいでし名目なり、すべて引付といふ記錄に、さまゝあり、政所にては訴訟の顛末を注記し、其訴を沙汰せる奉行人の姓名を傍書したる記錄をなづけて、賦銘引付といふ、

〔吾妻鏡四十〕建長二年四月二日丁酉諸人訴論事、於引付勘決文書理非之間、加了見之處、旨趣爲分明者、任先規不能對決、又引付事已剋以前、可始行之云頭人云奉行人莫及遲參、且可進覽時付著到之由被觸仰三方引付云云、秋田城介爲奉行云云、

〔關東評定傳〕文永元年甲子

評定衆

前武藏守平朝直○一。番引。付。頭。○中略。五月三日卒、

前尾張守平時章○二。番引。付。頭。○此間。六月十六日爲一番頭。○此間。十二月略之

引付衆

中務權大輔平教時

縫殿頭中原師連○十一。月加評定衆。以下七人略之

〔吾妻鏡五十二〕文永三年三月六日己亥、今曉木工權頭親家爲内々御使上洛、又諸人訴論事被止引付沙汰、問注所召愁訴陳狀、可勘申是非也、前々被記申詞之間、爲被賦九人評定衆、所被結番也、

〔吾妻鏡十九〕承元四年十二月廿一日乙亥今日爲伊賀二郎宗光之奉中民部大夫仲業可相兼問注所寄人之由被仰舍云云是掃部頭能親入道家人也依右筆藝被召仕云云

〔太田康有記〕建治三年八月廿九日自山內殿時北條被召之間馳參之處召御前被仰云武藏守政平

可爲一番引付頭武前司宣時可爲二番頭越後守時平可爲三番頭早以此旨可觸仰彼人々且問

注所公人不足云々先日所舉申之富來十郎光行山名彌太郎行佐藤田左衛門四郎行盛清式部四

郎職定皆吉四郎文盛可召加寄人次山名二郎太郎直康飯泉兵衛二郎祐光岩間左衛門太郎行重

可勤合奉行役之由可召仰云々退出之後及衆燭之期向武州前武州亭觸申仰趣之處各領狀了

九月四日依召參山內殿之處以平金吾被召御前任仰以安富民部三郎入道島田七郎齋藤七郎兵

衛尉長田新左衛門尉已上政富來十郎元合奉行飽田三郎左衛門入道注所公人引付衆了次武州一番

頭前武州二番頭領狀了言上之處仰云武州者元三番頭也相率三番衆可轉一番也越州者元一番

也其衆相共可還三番可相觸其旨云々

〔武政軌範同注所沙汰篇〕一執事仁體事

評定衆中被補之先代以來至當御代多分町野大田族任之是故善家右筆之輩以當所稱本所乎

他家人亦任此職之例在之

〔沙汰未練書〕一賦奉行者

最初本解狀上奉行所也關東六波羅在之

〔關東評定傳〕建長元年十二月始引付諸人訴訟不事行故也

〔沙汰未練書〕一引付沙汰事

頭人衆中皆參之時於引付御座之當奉行人召合訴論人遂問答其後兩方被立御座衆中一同有評議勘錄是非以之爲引付沙汰落居

〔師守記〕貞治六年五月廿六日辛丑

記錄所

定寄人結番事

一番 十一日 廿六日 廿六日

長宗朝臣 奉 師茂朝臣 奉

光夏 奉

二番 十二日 廿二日

廿七日

宣方

時親朝臣

章世

三番 十三日 廿三日

廿八日

資康

在胤朝臣

宗季

四番 十四日 廿四日

廿九日

仲光

師連

明宗

五番 十五日 廿五日

廿五日

宗顯

師守 奉

兼治 奉

右守結番次第毎日無懈怠可被祇候當所於議定廿一日

十一日 庭中 廿六日

十六日 越訴 十九日

九日 廿等日者可有皆參之由所被仰下也各存其旨可被參勤之狀所定如件

貞治六年五月十九日

幕府吏員

〔吾妻鏡〕建久二年正月十五日甲子彼行政所吉書始略中

問注所執事 中宮大夫屬三善康信法師 法名善信

○按ズルニ是ヨリ前元曆元年十月二十日三善善信ヲシテ訴論ノ事ヲ問注セシムルコトアリ前條裁判所ノ下ニ吾妻鏡ヲ引ケリ

民部卿 光緒卿 中御門前宰相 經宣卿 吉田前宰相 資房卿 高倉左少將 光守朝臣 略中

八番西海道 或前、或後、豐前、豐後、肥前、肥後、日向、大隅、薩摩、對馬、

十日、十一日、十九日、廿日、廿一日、廿九日、

侍從中納言 公明卿 四條前中納言 資隆卿 堀河前宰相 光繼卿

職人右衛門從 範國 下

〔建武年間記〕記錄所被定下寄人結番事

一番 一日、二日、十一日、十二日、廿一日、廿二日、

正經朝臣 右少辨 左大史 冬直宿禰

新大外記 師治 佐渡判官代 秀清

清原康基 六位史

二番 三日、四日、十三日、十四日、廿三日、廿四日、

實夏朝臣 權右中辨 清大外記 賴元

大夫判官 明成 時知

三番 五日、六日、十五日、十六日、廿五日、廿六日、

宣明朝臣 匡遠

兵衛大夫判官 職政 兼光

四番 七日、八日、十七日、十八日、廿七日、廿八日、

光守朝臣 大外記 師利

章香 正成

五番 九日、十日、十九日、廿日、廿九日、卅日、

藤長 藏人右少辨 大外記 師右

大判事 明清 長年

右各守結番每日無懈怠可祇候兩所於評定七日、廿一日、廿六日、庭中三十三、越訴日、廿八日、十八、對決日、廿九日、等日者可皆參之由所被定也、各可被存知之狀如件、

建武二年三月十七日

記錄所庭中事、五畿七道被置式日了、一口三ヶ月也

正親町大夫判官
章有

飯尾商
覺民

日、十二日、十三日、十六日、廿二日、廿三日、越月

右大辨宰相清忠類

卷八

十三日十四日廿三日廿四日廿五日隔月

中御門前中經言

六月十五日、越前

五日六日 十四日十五日十六日十七日十八日十九日二十日二十一日二十二日二十三日二十四日二十五日二十六日二十七日二十八日二十九日三十日

日野前宰相

葉室新宰相

葉室新宰相
長光朝臣
略○，中

五

六條
日廿六日廿七日廿八日
隔式月

前宰相

九日、十日、十一日、中十九日、廿日、廿八日

福量實 主稅頭中原朝臣師守 博士清原真人宗季 大判事坂上大宿禰明宗

貞治元年十一月十一日

〔夕拜備急至要抄〕神宮雜訴上卿第沙汰

文治二年

上卿 權大納言 宗家

寄人 大外記清原賴業 大外記中原師尙 大炊頭中原師綱 左大史小槻廣房 明法博士中

原章員○員一
本作員

建久四年

上卿 內大臣 中山

寄人 前隱岐守中原師尙 竿博士三善師衡 左大史小槻隆職 大外記中原師直 河內守小

槻廣房 大外記清原良業 散位中原周業 明法博士中原明基

今度宣下福人方宣下仰同前
竿博士三善朝臣康衡

修理東大寺大佛長官左大史兼備前權介小槻宿禰秀氏 助教中原

朝臣師種 掃部頭兼助教中原師宗 造酒正兼直講中原師冬 修理右宮城判官主殿頭兼

左大史小槻宿禰顯泰 大判事兼明法博士左衛門大尉尾張介中原朝臣章澄 防鴨河判官

明法博士兼左衛門少尉中原朝臣明盛 左衛門少尉中原章繼

左中辨源朝臣雅憲傳宣右大臣宣奉勅件等人宜爲伊勢二所大神宮雜訴評定寄人者

弘安四年九月十九日

左大史小槻宿禰判

〔雜訴決斷所結番交名〕建武元八

一番五畿內山城、大和、河
內、和泉、攝津、

一日、二日、五日、十一日、十二日、十三日、廿二日、廿五日、隔月

にたえたる器量をえらびて補せらるゝ事なり、

〔式目抄〕^四記録所ニハ、上卿辨開闔寄人アリ、

〔師守記〕貞治四年六月五日壬辰、今日法皇寺長老來臨被語云、中御門大納言宣明卿者三日俄薨之間、爲訪向彼第云々、此事更無才學、家君^右師同前仍今朝卜形被載之、以外之内瘡也云々、彼亞相當

時傳奏議定衆記、錄所上卿也、大納言兩三年未申拜賀、然而如記錄所并雜訴連々出仕隨分重臣也、可哀、

〔師守記〕貞治元年十一月十一日壬子、今朝家君以使者今日雜訴沙汰延否事、被尋問頭右大辨資定朝臣之處一定云々、

午斜、家君著朝衣^{玉冠、今}、有同事、予衣冠上結、參記錄所給、先之大判事明宗、大儒宗季未參仕、未敷座

之間、居板雜談、小時大夫史量實參仕、令敷座、仍面々著座、寄人四位大外記家君、奥座大夫史量實^{座端}

國主稅頭予^{衣冠、上結、端}、大博士宗季^{衣冠、上結、奧}、大判事明宗^{衣冠、端}、等參仕、明宗直著到曰、面々自

上首書名字、雜仕被傳之、^{副筆}開闔取怠著到不持參之間、以美紙一枚書之、以外也、依無庭中訴人傳

奏不及著座、雜訴沙汰事了之後、左大辨宰相忠光卿參著當所、真桑庄預所職事對決、其後面々評定、

于時酉斜見參明日可書賜之由、開闔示明宗了、已及黃昏之故也、^{略中}

真桑庄預所職事對決之時、藏人右中辨行知不著座、

^{著到書樣}
十一月

十一日

師茂 量實 師守 宗季 明宗

^{見參書樣、大辨宰相着座之間書立紙、先例也、}
見參

參議左大辨藤原朝臣忠光 右中辨平朝臣行知 大外記中原朝臣師茂 左大史小槻宿

或抄問注トハ問注所ノ事也トヒシルストヨム、訴人ト論人ノ申様ヲトヒシルス所也、昔關東將軍ノ御時ハ町家ガ問注所也、京都ニハ京極、在京時ハ多賀豐後守久奉行處タリ、問注處モ奉行處モ、異名マデ也、同意タリ、問注所ト云ニテハ、奉行人六人集テ、談合スル事ヲ問注所、聞ト云、
 【吾妻鏡 五十二】文永三年三月六日己亥諸人訴論事被止引付沙汰、問注所召惹訴陳狀可勘申是非也、
 略下

【關東評定傳】文永三年三月六日、止三方引付、重事直聽斷、細事被付問注所、

【庭訓往來】問注所者永代沽券安堵、年紀放券奴婢雜人券契和與狀負累證文等之謀實、糾明之、管領寄人右筆奉行人等評判也、

【庭訓往來】抑洛陽靜謐、田舍無爲貴邊御本望也、
 略中 引付問注所上裁勘判之體、異見議定之趣評定衆以下可注給之、御沙汰之法、所務之規式、雜務之流例、下知成敗、傍例納法律令、武家相違、存知仕度候、

【武政軌範 問注所沙汰篇】

一條目事

當所者爲武家之記錄所、仍古今之記錄、細麤之證券等、被納置于此文庫云々、是故文書紕繆、謀實論紛失、證文等、於當所被評判之、先代始比者將軍家年中之家務以下、有其沙汰、中比以來爲政所之沙汰乎、古者諸方賦亦爲當所被奉行之云々、

○按ズルニ此他金穀ノ賃借田畠ノ賣買等ニ關スル事ハ、政所ニ於テ掌リ、強竊盜、鬪傷等ニ關スル事ハ、侍所ニ於テ掌ル、官位部ニ各、其篇アリテ之ヲ具ス、

【百寮訓要抄】記錄所 禁中にて諸人の訴訟を判斷せらるゝ所なり、後三條院延久に殊に興行ありて、天下の政道をなほされし時、才人をえらびて、寄人におかれしなり、上卿辨寄人など、皆世務

一 訴論人參內事

記錄所決斷所沙汰已被定其道々畢諸國輩猥不可參禁中於五畿內訴論人者相觸于押小路京極役所可參入役人又記置面々名字可進著到於記錄所決斷所自餘道々訴論人事子細同前

〔薩藩舊記前集十二比志島氏文書〕薩摩國滿家院內比志島查太郎義範謹言上

欲且達天聽任善政糾賜本物返地事

右壹所者義範重代相傳之所領也○中早任證例可知行之旨下預御牒爲備向後龜鏡恐々言上口如件

建武元年五月日

檢非違使廳下 薩摩國衙

當國滿家院內比志島查太郎義範申山口田壹町并竹中○中下恐敷壹所本物返事

右訴狀如此早令尋成敗有子細者可被注進者

建武元年五月六日

左衛門權少尉□□花押

〔沙汰未練書〕一問注所者 問注諸方沙汰所也關東有之六波羅無之

〔吾妻鏡〕壽永三年元暦十月廿日乙亥諸人訴論對決事相其俊兼盛時等召決之且令注其詞可

申沙汰之由被仰大夫入道善信云云仍就御亭東面廂二箇間爲其所號問注所打額云云

〔吾妻鏡〕十六建久十年元正治四月一日壬戌被建問注所於堺外以大夫屬入道善信爲執事今日始

有其沙汰是故將軍御時營中就一所被召決訴論人之間諸人群集成鼓騷現無禮之條頗爲狼藉之

基於他所可行此儀歟之由內々有評議之處熊谷與久下境相論事對決之日直實於西侍除髮髻之

後永被停止御所中之儀以善信家爲其所今又被新造別郭云云

〔式目抄四〕一遂問注輩不相待御成敗執進權門書狀事

是は先代引付の沙汰の立つ所也、大議にをいては、記録所にをいて裁許あり、略中古の典廢を改めて、今の例は昔の新儀なり、朕が新儀は未來の先例たるべしとて、新なる勅裁漸々きこえけり、
〔諸家文書纂〕雜訴決斷所牒 豐後國銜

資親申當國野上村堤右田兩村地頭職事

牒爲糾決、來十一月廿日以前可參洛之由令下知堤六郎入道道祐可申散狀、仍牒送如件、以牒、

建武元年九月廿九日

右衛門權少尉三善朝臣花押

前筑後守藤原朝臣花押

右衛門少尉中原朝臣花押

〔建武年間記〕於決斷所可有沙汰條々

一 所務濫妨之事

一 領家地頭所務相論并年貢難濟以下之事

一 下職以下開發餘流并帶代々上裁鬱訴之事、自餘者可爲本所成敗、

一 本領安堵事、當所并記錄所可任訴人之心、

一 諸國國司守護注進事

一 關東十ヶ國成敗事

一 所務相論并年貢以下沙汰、一向可有成敗事、

一 所領并遺跡相論、異重事者、執整訴諫可爲注進事、

一 訴論人、或在京、或在國者、就訴人之在所可有沙汰事、

已上被押決斷所也

〔建武年間記〕陣中法條々

寶治二年十一月八日

明法博士兼右衛門少尉中原朝臣章行

已上公文職本所進止所見了

〔西大寺文書〕文殿

秋篠寺越訴申山池等事

右彼寺越訴之趣雖多子細、伴山池等秋篠寺建立以前、爲西大寺領之條、國印流記帳分明也、宜旨等雖無正文、彼流記何不用證文哉、然者就大治宣旨、先度勅裁無相違矣、仍言上如件、

德治二年十一月八日

少判事中原章房 少判事中原朝臣章右 左衛門少尉中原朝臣明治 左衛門少尉中原朝

臣章躬 左衛門少尉中原朝臣章任 明法博士中原朝臣章文 大判事中原朝臣明澄 散

位清原真人俊宜 主計權助中原朝臣師右

著座公卿

法性寺前中納言雅 別當定實左大辨宰相宣房一同被申云、文殿客人申狀無相違、以前勅裁不依

違矣、即左大辨宰相奏聞之處、秋篠寺之越訴可寄置之旨被仰下之、其由被書付文殿畢、

〔師守記〕曆應三年二月廿四日丁未、今日家君右 師令參文殿給依庭中也、著座按察黃門經賴、大宮黃

門隆蔭大藏卿雅仲、前平宰相定經等卿云々、衆中家君中大外記師利、大夫史匡遠、助教師治、大判事

明成博士大夫判官章有、佐渡大夫判官秀清、高倉大夫判官章世等參仕云々、故光福寺內府遺跡事

有沙汰云々、

〔梅松論〕上、いつしか諸國に國司守護を定、卿相雲客各其位階に登りし體實に目出度かりし善政

なり、武家楠伯耆守和 名赤松以下、山陽山陰兩道の輩朝恩に誘ふ事、傍若無人ともいつべし、御

聖斷の趣、五畿七道八番にわけられ卿相を以頭人として、斷決所○斷決所恐と號て、新に造らる、

條々執職事目錄、帥中納言^{○藤原經房}被進之、今日所到來也。^{○中}
一記錄所事

先日被計申之時、被仰攝政^{○藤原實實}詔諸方訴訟尤可被決斷歟、重可有急沙汰之由、被申訖、

〔玉海〕文治三年二月廿八日庚子、召定經仰來月一日直物事、可申沙汰之由、本親經奉行也、而依穢氣改仰之、此日始被置記錄、所以開院亭中門南內侍所南廊爲其所執權^辨、定長也、親經依觸穢不出仕、寄人十二人參入奉行職事定經也、仰詞二通先內覽之、

一通、諸司諸國并諸人訴訟、及庄園券契於記錄所宜令勅決理非、
一通、年中式日、公事用途宜令記錄所勘申式數、

〔東寺百合古文書^{七十二}〕文。殿。勘狀實治二公文式事、寺家進止得理、

實治二年十一月八日文殿勘狀

明法博士章行自筆

東寺中綱與采女播磨相論當寺領攝津國垂水庄公文職事

如采女播磨申狀者、件公文職者友光相傳所帶也、有去壽永元年相副代々御下文、讓與僧憲扶^{播磨金弟}、
憲扶又讓賜播磨於代官者、補任友光致沙汰之處、今年被改易畢云々、

如中綱等申狀者、件職全非重代相傳之職代々爲預所之進止、被成替者先例也、前任之輩稱相傳、更不及訴訟嘉祿三年爲宰相法橋預所之時、成替數輩之間、依友光望申、改易信兼令補其職云々、且建久以後、爲預所之進止、令改補之輩、自久恒至沙彌阿乘十五人云、就之引見播磨所進證文之處、嘉祿三年六月廿日、友光始預補任之下文、其時無相傳之子綱、又建久以後十五人改補之條、友光頗不申子細歟、

中綱等申狀似得其實、凡如此之職者、公廉之寄也、被舉用公平之者事可爲寺家之成敗歟、仍勘注如件、

聽訟

鎌倉室町時代ノ聽訟ハ、朝廷ニ於テハ記錄所、文殿アリテ之ヲ聽キ、幕府ニ於テハ問注所ヲ主トシテ、引付、政所、侍所、地方等ニテモ之ヲ聽ケリ。建武中興ノ朝廷ハ、大業未ダ全ク舉ラザリシカドモ、首トシテ決斷所ヲ置キテ、又訴訟ヲ聽カシメ給フ、

當時法吏ニハ退座ノ法アリ、嫌疑ヲ避ケ情弊ヲ防グ所以ニシテ、祖父母、養父、母、養父、母ノ訴訟ニハ、之ガ子孫タル吏ハ其評定ノ席ニ列シテ、之ヲ聽斷スルヲ得ザルナリ、

訴訟ニハ評定アリ、評定トハ衆議ヲ以テ決定スルコトニテ、朝廷ニテハ或ハ御前ニ於テスルアリ、幕府ニテハ將軍ノ前ニ於テスルアリ、又内談アリ、内評定アリ、内談ハ引付ニ於テスルノ稱ニシテ、内評定ハ問注所、政所ニ於テスルナリ、而シテ内ト云フハ將軍座前ノ評定ニ對シテ云フナリ、皆幕府ノ事ニシテ、並ニ定日アリテ之ヲ行フ、是ヲ式日ト云フ、

訴訟ノ曲直ハ原被兩造ヲ召シテ對決セシムルアリ、又勅裁及ビ將軍ノ親裁ヲ仰グアリ、而シテ對決ニモ將軍座前對決、問注所對決、及ビ政所對決等アリ、

訴訟ニハ文書物品ニ限ラズ、之ガ證憑ニ供スベキモノアリ、或ハ訴訟人ヨリ之ヲ法廷ニ出シ、或ハ法吏ヨリ之ヲ徴ス、而レドモ其證憑タル詐欺ヲ挾ムモノ毎ニ多クシテ、決シ難キアリ、是ニ於テ誓ヲ立テ、之ヲ證スルアリ、是ヲ起請ト云フ、起請ニハ起證文、湯起請等アリ、當時息訟ヲ謂ヒテ、和平又ハ和談ト云フ、而シテ和與ト云フハ、領地田園ニ係レル息訟ヲ云フ、

名稱

裁判所

〔易林本節用集〕左裁許裁斷裁判

〔吾妻鏡〕文治二年六月九日乙卯、去四月之比政道事殊可致與行之趣付議卿令奏聞給了、勅答之

られ候小殿と申強盜こそ思ふやう有て參て候へはやくうけとらせ給へといふ、章久まことしからず覺ながら、おろ／＼子細をとへば、小殿いはく、御不審候事尤其いはれ候へども、先思召候へ、たゞのまら人が強盜とみづから名乗て、命をまかせ參らせて何のせんか候べきといへば、實も理にて、委く問答するに、小殿が云やう、年ごろ西國の方にて海賊をし、東國にては山だちをし、京都にては強盜をし、邊土にてはひきはぎをして過候つる也かゝる重罪の身を受候ぬれば、此世にても安き心候はず、夜も安くねす、晝も心打くつろぐ事なし、世のおそろしく人のつゝましき事かなしき苦患にて候也、扱も一期事なくて有べき身にて候はず、つるには定てからめ出されて、はちをさらし、かなしき目をこそ見候はんすれ、年來の罪をも報はんが爲に、頭をのべて參候といへば、章久あはれに覺て、左右なくも受取べけれ共、其儀なくして答けるは、今は使廳の廳務停止したる也、かつは聞も及らん、年來作置る樓もみな打破て、佛殿に作なほして、一向廳務をどやめて、後世の事をいとなむなり、徳大寺殿に祇候の源判官康仲こそ、當時ことに高名を立んとする人なれ、かしこに行て、此子細をいはゞ、定て悦思はんすらんといへば、左候はゞ、御文を給はり候へ、源判官殿へ參候はんといへば、それはやすき事なりとて、文書とらせければ、則持て康仲がもとへ行て、章久がもとにて、いひつるがごとくに、いひて、若高が一命をいけて、召もつかはれ候はゞ、別の奉公には餘黨其數おほく候を、一々にからめさせ參らせんといへば、康仲與有事に思ひて、受取てつかひけり、給物三十石をとらせて、朝夕めしつかふに、事にきてかひがひ敷、大切な事共多かりければ、大納言家に、此様を内々申入たりけるに、いと與有事にこそ、左様のものは中々さるかたもあるなり、我にえさせよ、召つかはんと仰られければ、參ちせてけり。

永祿七年甲子七月十四日の夜、太郎義信公長坂源五郎御供にて燈籠御見物にこごよせて御城を御出あり忍びて飯富兵部處へ御座なされ候故、亂鳥まで談合ありたる様子を不審に存知奉行御中間頭萩原豐前、信玄公へ申上る、それより不審をたてられ、太郎義信公逆心の事あらはれて、翌年丑の年、飯富兵部部長坂源五郎、兩人御成敗也。太郎義信公を籠へ入まいらせられ、其上義信衆御成敗、或御改易也。御もりの曾禰周防を、則萩原豐前に仰付られ、はなし討に討也。如此御父子の間にて、不審立る事、少かくしなく、目付横目の言上いたすは、何の國にても有間敷事也。是たゞ一偏に信玄公の、人を能召仕給ひ、よく目利なされて、よくさいはいを取、よく仕置の法度、むるいなるゆへならん。

〔尺素往來〕本領事近年庶子等成、敵人構種々之奸濫曲折、中如當方相傳之謾狀者、送多年而後、以自筆自判付屬之條、歷然露顯、仍則蒙御裁許、即令安堵候、敵方猶不得休、雖及越訴庭中、每度停廢、利可有反座科條之旨、法家之輩勘申之候、

〔建内記〕永享十一年二月一日己卯、近日訴人等於文書之理、非不申入之、只指敵方之糺繆、令謾言、仍尋御沙汰之時、爲虛誕之時、結句及反座、先於糺繆沙汰送時日之間、自然延引、爲希代之事云々、每事政道嚴重之處、以惡名謾言之間、或被罪之、或反座者歟、人々邪路之所致歟、

〔御成敗式目追加〕一敵對于祖父母并父母致相論輩事、延應二五十四信州落合後家、尼與子息相論之間、被定之罪、

右告言之罪不輕之處、近日間有此事、教令違犯之罪科是重、自今以後可停止之、若猶及敵對者、慥任本條可被行重科也、

〔古今著聞集〕十二大殿小殿とて、きこへある強盜の棟梁ありけり、大殿は後鳥羽院の御時からめられけり、小殿は高倉判官章久が本へ行ていひけるは、日來年來からめかねて、あなぐりもとめ

殿へ被申之間、則彼輩被召捕畢、廣橋永藤卿所司代等召問之間、刀自^{金澤}申云、刀自三條、年來大覺寺殿爲御師御祈申き、其を金澤有訴訟事、爲蒙勸賞庭中申也、伏見殿御事とは、初より申たる事更更なし、搥而自伏見殿御祈事不奉之間、不存知申之由明鏡ニ申披畢、仍三條ハ永被放刀自不可被召使云々、代官刀自ハ可被追放云々、刀自夫民部少輔重季^{洞院}以下兩三人、侍所ニ召置庭中申金澤をば被籠舍、可被斬歟之由在沙汰、自内裏ハ猶御不審相殘、彼等可被糺問歟、又湯起請可被書歟之由有御沙汰云々、大覺寺殿御事ハ自室町殿以海門和尚被尋申之間、三條ハ年來御師也、便宜御祈など申計也、更々今度就御惱御祈事、不被仰付之由、種々被陳申云々、所詮是之事、忽及生涯處、彼刀自申披之條、併内侍所加護、祖神之冥助也、幸運至極、珍重無極、御惱ハ先御本腹之分也、

〔甲陽軍鑑^八品第十七〕一訴人岩間大藏左衛門とて、御分國中、萬事の儀を申上る侍一人あり、

〔武家名目抄^六名〕訴人又稱目明一

按甲州にて訴人といひし所職は、今いふ目明の類なるよし見聞雜錄にみえたるが、いかにも其いへる所のごとく、常ならぬ事に眼をつけて、窺ひえれるまゝを密告すべきつかさなり、其なかに、他人の陣所もしくは役所などへ差副られて、其勤惰を察するなどやうの人、をも目明といへるは、まさしく目附の職掌に似たるなれど、この所役は、毎事見聞に従ひて、非常の事あれば告申べきいはれなれば、をのづから目明の意なしとすべからず、何事にもあれ、なべて分明ならぬことの驗證となるものをば、^七かよびしとみゆ、

〔甲陽軍鑑^八品第十七〕此横目衆

一 荻原豊前守

一 久保田助之丞

一 志村又右衛門

一 中村彌左衛門

一 河野但馬

一 石坂勘兵衛

一 荻原五左衛門

一 山本土佐

一 久保田監物

略中

古事類苑

法律部二十九

中編

告訴 自首併入

鎌倉室町時代ニハ、告訴ノ制度甚ダ備ハラズ、只上古ノ遺制ニ依リシモノ、如シ、自首ノ制亦同ジ、

告訴制度

〔建武年間記〕雜訴決斷所

一反坐事

告訴例

經告之反坐、文法已稱重、宜任本條被加嚴禁、當所衆并國司守護上使等挾私粹參差者、其科同前、〔看聞日記〕應永卅二年八月廿三日、源宰相以狀馳申云、廿日禁裏へ庭中申物あり、今度御權自利伏見殿被呪咀申之由申さもありぬべきよし、被仰逆鱗、以永藤卿室町殿職持へ被仰之間、事樣不審也、何樣にも申口可召捕之由御返事被申、則所司代召捕尋之間、內侍所刀自三條と云物、彼官人也、彼刀自ガ夫洞院諸大夫民部少輔重季并庭中申男六條中將侍、其外女尼兩三人召捕、被札明之處、非伏見殿御事、大覺寺殿をこそ申て候へと申披之間、此御所之虛名ハ晴畢御幸運珍重之由告申之間、迷惑仰天、先以無爲之條併神慮之至喜悅也、則三條永基ニ尋遣返事云、大覺寺殿御事也、是之御事ハ、無爲落居之由申、安堵畢、二十四日、行豐朝臣參、得度以後初見參、明盛も參、彼庭中事、委細申、刀自三條八十計之、其代官之刀自ガ夫ニ、金澤ト云物、庭中申、此間有訴訟申事、仍爲蒙勸賞、就今參局主上御覽、庭中申、委細載目安、而今參伏見殿御事と披露申云々、以外有逆鱗、仙洞小松室町

朝廷評定	一一二一
御前評定	一一二四
幕府評定	一一二五
內談	一一二八
內評定	一一三三
勅裁	一一三六
直裁	一一三八
對決	一一三九
<small>朝廷對決 政所對決 將軍座前對決 大名對決 問注所對決</small>	
覆問	一一四九
滯訟	
停雜訴	一一五一
證據裁決	一一五三
起請文	一一六四
湯起請	一一六六
鐵火	一一六八
和解	一一六九
雜載	一一七一

古事類苑

法律部二十九

中編

告訴
自首 既入

告訴制度

告訴例

誣告

親屬告訴

○

自首

聽訟

名稱

裁判所

朝廷吏員

幕府吏員

退座

裁判制度

一〇九五

同

一〇九七

同

一〇九七

一〇九九

同

一一〇四

一一〇九

一一一六

一一一七

一神訴等雖爲無理爲神事無爲條々御裁許於善法寺被成御判於社中。被成御判事。無其例。如何。但爲達神事。如此云々。

〔諸家文書集〕駿遠兩國所々當知行分之事
右今度訴人依有申子細既令裁許處信綱申所無紛之條任先例之旨無相違如前々可令知行繼於
子孫親類被官百姓等爲訴人雖有申子細今度遂裁許落著之上者不可許容然者兩國知行之內不
作成之地新田見出於有増分ては速申上隨其分際相當之可令奉公不可有自餘之競望者也仍如
件

天文十三辰甲年閏十一月廿八日

興津彌四郎殿

治部大輔右ニ同判

或可返給之旨、有御氣色之由雖載之、非指奉書、併爲私返事之間、輒難備證據是五者、早停止政俊、非論、且守故大將家御寄進狀、并度々御下文旨、且任右大臣家元久二年下文及承久三年下知狀等、可令政親一向進退領掌、勤行神事之狀、依鎌倉殿仰下知如件、

安貞二年五月十九日

武藏守平花押
相模守平花押

〔朽木文書〕佐々木出羽守氏秀、與稱彌陀院雜掌相論、近江國高嶋本庄內案主名事、

右彼職者氏秀曾祖母尼妙語相傳所帶也、而實子行綱依爲不孝之質、讓與甥佐々木出羽三郎左衛門尉賴信、賴信亦讓渡女子愛壽、彼是給關東安堵下文訖、愛氏秀如訴申者、尼心阿者被義絕、行綱女子也、爭可相傳妙語之所領乎、誤成和與去曆應四年三月十七日雖被下御下知狀、可立還本理、非之旨、寺家捧陳狀之間、有其沙汰之處、既先々被裁許畢、尤可爲越訴歟、雖然未被定置之間、於仁政方札決之、所詮氏秀所出帶、如永仁二年二月五日關東下文者、可令出左衛門尉源賴信領知、近江國高嶋本庄地內案主名并後一條地頭職事、右任伯母妙語正應五年十月廿四日讓狀、可令領掌、如賴信讓狀者、讓渡女子愛壽、一所近江國高嶋本庄內案主名、一所後一條地頭職、如嘉元二年十一月十七日外題安堵者、任此狀、可令領掌云々、愛壽如讓與義信、至于氏秀相續之所見也、如雜掌口口弘安七年十二月廿三日關東下文者、將軍家政所下、可令早領知、近江國高嶋郡內本新兩庄郷々地頭職以下所職散在名田自餘之彼下文口口口口上不書載、案主職號讓狀置文者、爲行綱狀云々、旁以巨足支證之旨、氏秀所申、非無其謂歟者、一旦就和與雖被成敗、今訴論之、是非分明者哉、寺家知行、又心阿爲私寄進、未安堵之地也、然則當職任關東安堵下文等之旨、可令氏秀領掌、仍下知如件、

永和三年十二月廿一日

〔齋藤親基日記〕寬正六年八月十五日、依條々神訴、神幸運々、自申、刻俄大風大雨、山中鳴動、不遑注之、

哉仍政俊申旨聊似有矯飾歟但政俊所進建仁四年二月廿八日下文云可早任傍御神領等例致有
限地頭得分沙汰橘鄉事右當鄉預所政親與政景止種々相論早任當國本神領等例云云所得分云
地頭得分相互可致沙汰云々而又政親所進右大臣家元久二年八月廿三日下文云可令早停止國
井八郎正景地頭職橘鄉事右當所者去治承五年爲故大將殿御沙汰被寄進鹿嶋社之地也其後停
止地頭之妨一向爲中臣親廣沙汰可令勤仕神事之由同以被成度々下文畢就中爲神領之條非新
儀去安元年中停止地頭廣幹可爲鹿嶋社領之由被成國司廳宜畢而左衛門督家御時正景橫申補
地頭職妨神事用途云々者爲神領之上任證文之旨停止正景地頭職一向爲權禰宜政親沙汰可令
勤仕神事云々又承久三年五月卅日下知狀云橘鄉事給故右大將殿御下文之後父祖并政親己三
代相傳知行無相違云々然者成安堵之思可令勤行御祈禱云々者謂故大將家御寄進之始者自治
承五年至于當年四十八年謂地頭停止之事者自元曆元年以降四十五年也而左衛門督家御時政
景一旦雖補地頭職不載指相傳由緒之上右大臣家御時元久二年被停止政景地頭職之後廿四々
年也前後下文重疊之上忽難改本願御素意歟然者依政俊申狀今更不能子細焉是一次政親依令
勿傷大番舍人之罪科改易大禰宜職被補則長之由政俊雖申之如同所進建保四年關白家○藤原家實
政所下文者不被決兩方就則長解狀被成下之由所見也隨又政親無誤之由鹿島郡地頭并神官供
僧連署狀及守護人知重申狀顯然也而政俊以神主則行并當大禰宜則長書狀雖備證文依爲論人
申狀不足證據之由政親申之守護申狀并地頭神官供僧等連署狀與論人則行則長書狀非無用捨
之上爲守護所沙汰札返則長追捕物於政親令取進請文畢其上不及異儀是二次建保五年稱達對
決政俊雖進間注記案就彼狀不蒙裁許空送四五々年之處承久三年政親重給下知狀畢是三次政
親失出來之時可返給之由蒙右大臣家仰之旨政俊雖申之不給指證文之由同申之以胸臆之詞輒
不足信用矣是四次以前信濃守行光法師書狀等政俊雖備證文如此狀等者或申入子細之由載之

福宜則親可令知行云々、又如安元元年國司廳宜者可令停止廣幹妨、大福宜則親訴申、鹿嶋神領橘
 鄉并吉景鄉事云々、同年十二月廳宣云、可令停止廣幹地頭沙汰、札返、鹿嶋社訴申、橘吉景兩鄉損物
 事云々、如此等狀者、停止廣幹地頭職之由、雖有所見、政俊先祖爲地頭職之旨、頗無證據、加之故大
 將家治承五年十月日御寄進狀云、奉寄鹿嶋社神領在常陸國橘鄉右爲心願成就奉寄如件云々、又
 治承七年壽永二年三月十日同狀云、奉寄神領壹處事、常陸國立花鄉右件鄉限永代所奉寄鹿嶋御社
 也、爲大福宜則親沙汰殊可令祈申御息災之由云々、又元暦元年十二月廿五日同御下文云、可早爲
 中臣親廣則親男、政親父沙汰令勤仕神事、橘鄉事、右件鄉、任先例於所當者、一向爲神事用途可令勤仕神事
 也、且又任先例可令停止地頭之妨云々、又元暦二年八月廿一日同御下文云、可早停止地頭妨爲中
 臣親廣沙汰令勤仕神事、橘鄉事、右件鄉、任先例、停止地頭之妨、一向可令勤仕神事之由、先日成下文
 畢、而下河邊四郎政義字、有傳依補南郡地頭號、郡內張行之間、無指由緒、追籠百姓妻子、可隨地頭進止之
 由、取起請畢云々、所行之旨、神慮有恐事也、早任先例停止地頭之妨、一向可令勤仕神事云々、如此等
 狀者、云則親之時、云親廣之時、停止地頭沙汰、一向領知可勤行神事之由具也、而左衛門督家源建
 仁二年五月卅日下文云、補任常陸國橘鄉地頭職事、源政景、右人可爲彼職、但當鄉者、鹿嶋社領也、有
 限所當以下神役、任先例可致其沙汰云々、右大臣家建仁三年十一月十七日下文云、補任立花鄉地
 頭職事、源正景、右於地頭職者、正景先日給御下文畢、而預所正近、寄事於左右、押妨地頭之沙汰云々、
 事實者、自由狼藉也、正近者爲預所、不可相支地頭沙汰云々、政俊所進同口御下文案云、補任立花鄉
 預所職事、中臣正近、右人爲預所職、可致御祈禱、相受地頭沙汰事、可令停止云々、爰政俊申云、故右大
 臣家御時、政親依訴申、重達對決、政俊者、給地頭御下文、政親者、所給預所御下文也云々、如政親陳者、
 虛言也云々、政俊所進建仁三年二通御下文者、已以爲同日之處、如彼狀者、政親寄事於左右、押妨地
 頭沙汰之條、事實者、自由狼藉也云々、遂對決於被成分御下文於兩方者、事實者之由、何可被載其狀

爲三男之流以服臚令恩給由申之條甚爲奸謀歟就中遠重初則不相稽之由稱之後亦令恩給之旨號之先後之詞涉兩端之條又以爲陰謀歟然則於當職者停止遠重濫妨任西信通重讓狀等并安堵御下文可令性運領知次押領科事遠重上取彼所職之條承伏已畢遠重背祖父讓狀并御下文非霄押領剩以胸臆稱恩顧之地濫妨他人所帶之條頗招其科歟然則被注所領可被分召次押領以後得分事可被札返次以不實爲恩給地之由載訴狀之條雖可有罪科依押領之科被分召所領之上不能二罪歟仍不及沙汰焉

一國宗名事

右就訴陳狀擬有其沙汰之處止訴訟之由實重出狀畢此上不及異議矣○
右可被尋成敗之由所被仰六波羅也焉

以前條々、依鎌倉殿仰下知如件、

正應元年六月二日

前武藏守平朝臣 實華 宣押時○北
相模守平朝臣 實華 眞押時○北

裁許狀

〔沙汰未練書〕一御下知者 就訴論人相論事、蒙御成敗下知狀也。云云、義也。

可早停止國井八郎太政俊非論、且守故右大將家頼朝御寄進狀、并元曆度々御下文旨、且任右大

臣家

實C

朝
元

久

—

年御

下

文、及

承

久三

二年

下

知狀

等

令由

平臣

政

稅
一

向

進退

送領

掌、勸

勤行

神

事等

事、

右彼此申詞枝葉雖區々所詮兩方互稱相傳由之處如政俊申者先祖證文者源八政廣政父俊蒙源
守源勤當之刻追捕之庭令紛失畢但國領之時政廣屋敷國役免除外題如此云々如政廣仁安二
年同三年請留守所裁之解狀者可被免除橘鄉屋敷萬雜事之由雖載之爲地頭職之旨無指所見歟
而如政親所進承安四年國司應宜者可令早云々鹿嶋社神領橘鄉事右依宿願奉免日次御供以大

之由存知候之處、去年九月上旬之比、貞安受病候之間、貞重仁不令告知竊讓與後家候之由承及候
氏罷向貞安之許候氏相尋實否候之日、其儀無實也止申候氏內仁讓候氏如此申候之間、無謂之
由於被訴申候、縱雖讓與後家候、後家一期之後者可賜貞重之由於毛戴其狀氏候波、強不及警申候、

右衛門少尉中原明方

承元二年四月三日

明法博士兼少尉中原明政

小尉中原

修理宮城辨明法博士左衛門少尉中原章親

義許命令狀

〔忽那家古文書〕關東御下知并施行

伊豫國忽那島左兵衛尉實重法名性運與同十郎左衛門尉重康今者子息遠重相論條々、

一西浦總追捕使職事

一末重名事

右如訴狀者、於當職者任亡父四郎左衛門尉通重訴狀、給安堵畢、而重康致違亂云々、如陳狀者、至實
重所職者、重康無其辯、而押領之由申之條存外也云々、重訴狀云、承伏之上、欲給御下知云々、重陳狀
云、於彼所職者、恩給通重畢、而死去之後、上取之處、實重依欺申之、又宛給畢云々、爰如性運所進本主
西信實重遺讓嫡子通重亡父性運建長三年四月廿八日狀者、讓與忽那島內處分事、一西浦總追捕使職、
一末重名事、右任相傳之狀子、通重所令處分實也不可、有他妨云々他事之如通重讓性運、建長五年二
月廿九日狀者、一總追捕使職、一末重名事、於龜嫡子仁登羅須留他人乃妨不可有云々和字誤字、以
如性運給同八年七月九日御下文者、將軍家政所下藤原於龜九可令早領知伊豫國忽那島內西浦
總追捕使職并名田島名等事、右任親父左衛門尉通重建長五年二月廿九日契狀、可令領掌云々
者、於件所職者、通重爲本主、西信嫡子得西信讓畢、通重讓性運、性運任彼狀建長給安堵狀畢、而遠重

其庄地頭^{某土}載^天不書正地頭之間、聊涉不審歟地頭^{某代官}正員代官共以可被書之矣、一條々各別可立篇目事

一段內條々相交之間、御忿々之時難得御心、一事一段^{仁天}兩方申狀詞別々^仁可被書起也、

一以問注記下沙汰人令勘理非之處、其數輩之中於緣者令起其座畢、而^其外或號先論人、又稱前緣者嫌申沙汰人之事、御評定之時、用捨何樣被定候覽、不審事候之間內々尋申候、委可蒙仰候焉、
〔東寺百合古文書〕勘申左馬允源貞重與刀自洞院女相論六角油小路地壺所理非事

右被別當宣備件相論事、就問注記並兩方證文、宜令勘申理非者、承元二年二月廿日間注記云、問注左馬允源貞重並洞院女等申詞記、洞院女^{刀八條院}右問云、六角油小路並東山地者、貞重之母入置借

物之質城外之間、經數年之處、貞重之伯父貞安稱致其沙汰、隱貞重讓妻洞院女^{貞安}由所訴申也、件

子細依實辨申如何、洞院女申云、件地者貞安入道之父貞清之私領也、而貞安爲後白河院御使城外之間、父貞清死亡候畢、其間女子清原氏一人彼遺領不令知、貞安取券契入置借物質之處、貞安上洛

之時、悲歎親父之亡命候^氏、不致其沙汰、經年序候之處、貞安依父之遺領沙汰返彼地、二箇所候畢、仍

貞安領知候、今貞安存生之時、依爲多年之夫妻、讓賜洞院女候畢、貞安入道之兄弟姊妹總四人候、弟

二人^波死候畢、止申、貞重問云、就汝訴狀、洞院女申狀如此、件子細依實辨申如何、貞重申云、件地貞清

私領之條勿論候、貞清未處分^{仁氏}死去仕候畢、其間爲後家之沙汰、以彼遺領處分四人子息候、嫡子

貞直分、四條坊門油小路地、次男貞安分、久世并松崎大庭御牧等田、邑三女子分、六角油小路東山地

候、四女子分、四條坊門油小路地、如此候、件處分文^仁貞直貞安加署判候畢、件狀定洞院女之許候歟、

可被召出候、三女子分、六角油小路并東山地入置借物之質候、而貞安申合貞重云、件地可沙汰返也、

汝自幼少成父子之儀、汝之外^仁可領知人無之、此事令和與者可沙汰返之由^於申候^志、其儀^仁候

者不及左右之由和與仕候畢、仍貞安沙汰取候畢、貞安存生之間^波領知候^氏、一期之後者可給貞重

〔鹿嶋社文書〕六雜訴決斷所原 常陸國衙

當國鹿島大神宮大禰宜高親中、同國行方郡內加納十二ヶ郷并內小牧村用重名以下社領地頭等濫妨被下地抑留神用物由事、副申狀

右於神用物者令致其辨、至下地事者相鎮濫妨爲尋問子細來月廿日以前可參洛之由相觸交名人等可被申散狀者以牒、

建武元年十月十八日

散位平朝臣花押

左大史小槻宿禰花押

參議右大辨藤原朝臣花押

〔吾妻鏡十四〕建久五年十月一日戊午、大舍人允三善行倫可記訴論人問注詞之由被仰出之、日來父大夫屬入道善信奉行職也、依他事計會舉申行倫云云、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年正月廿五日庚戌、丑剋町大路東災火、大夫屬入道善信宅災重書并問注記以下燒失云云、

〔吾妻鏡四十六〕建長八年〇康元年十二月廿日丁丑、就六波羅問注條々有被仰遺事、

一可被書同者署所事

一兩方所進證文等、各可對繼目事

一同文書目錄巨細可被注進事

一庄園領家事

雖被載本寺社之名、不被注領家之間、聊涉不審、問注記端作雖不被出之、申詞之注ナンドニ可被書載之歟、

一可書正地頭交名事

右之趣にて、御之字を除て下々へも遣候也、尙口傳多し又百姓等へ直書は如何、若有之ば、右之日限十ヶ日雖有之、國之遠近宜有其沙汰候也。

〔東寺百合古文書 百四十八〕補任若狹國太良庄助國名主職事

國安

右國安、與時守宗氏、眞永三人、當名主職相論、間略○中仍猶爲札明子細、三人百姓可金上洛之由度々雖遣日限之召文、不捧請文又不參洛、略○中違背日限之召文之時、被付論所於訴人之事者、都鄙之通例也、略○中以前三箇條、略○二條國安所立申、非無其謂歟、仍所宛行也、略○中

弘安九年五月日

預所 御判

在御判

〔東寺百合古文書 百三十二〕八條大宮地事

訴人國光

論人姫鶴女

右來十五日可有對問、各帶文書等可被參決狀如件、

延慶二年九月十日

〔市河文書 二〕雜訴決斷所 一宗信濃國守護所

城與寺領當國倉科庄雜掌申、屋代下條一分地頭、查四郎以下輩押領下地、責取年貢由事、

解狀 具書

牒爲札明、宜召進彼輩之狀、牒送如件故牒、

建武元年六月十六日

左太史小槻宿禰 花押

右少辨藤原朝臣 花押

有訴人申旨者雖不伺中之任法可遣召文但依時宜可得上意矣

〔武政軌範引付内談寫〕一訴訟次第事

訴訟人申請賦而付渡于其手之開闔則申沙汰之賦與寄人之時召訴人於内談之砌相尋事由當座披露之至對論事者遣召文召出論人遂札明調訴陳狀令披露之

〔武政軌範引付内談寫〕召文奉書

前大膳大夫代申備前國某庄地頭職事訴狀具書如此不日可被參決之由候也仍執達如件

明德二

三月十一日

實名

備後前司殿

〔書札袖珍寶聞書六〕召文之事

古案

御手前就被官出入從羽田但州目安到來候繼紙二枚條數都合七ヶ條候也加裏判進之候猶理有之者來九日巳午以前御口上可承候

御法雙方當人壹人宛可有御參出候恐々謹言

十月四日

御奉行所名

大崎與左衛門殿

又

手前不相屈働之由中根助左衛門尉以目安致言上候早々可被罷出候必遲參有間敷候若此奉書到來之後遲出之日數十ヶ日過此日限者不謂理非如御法度可被仰付者也任御兼法之旨越度可申付所也謹言如件共又也畢とも留る也

七月九日

御奉行所名

書ノ意得ナリ故ニ如件カ者也留ニテ充所アルベシ依充所而謹言トモ恐々謹言ナドモ可有之、
日ノ下ハ大方御奉行所各ナド可有之依時宜各加名判事モ有之也、

〔吾妻鏡 十八〕建仁三年十二月十八日壬子諸人訴論是非進覽文書之後至三箇日不加下知者可被
處奉行人於緩怠過之由儲其法云云、

〔吾妻鏡 三十四〕仁治二年六月十一日丁卯雜人訴訟事相分國々被付奉行人而度々雖被相觸不事
行之時申御教書之間庭弱訴訟人數反往還經日月事不便自今以後不可申成御教書以奉行人奉
書可加下知之旨被仰出、

○按ズルニ奉書ハ上ノ仰ヲ奉リテ下ニ知スル文書ナリ本書建久二年十二月十九日同三
年三月四日ノ條ニ盛時ガ書ヲ載スルニ其書法ハ同ジ式ニテ一ハ御教書トイヒ一ハ奉書ト
イヘリサレバ鎌倉幕府ノ初メハ御教書トモイヒシナルベシ其後ハ執權管領ノ書出スヲ御
教書トイヒ頭人奉行人ノ書出スヲ奉書トイフナリ、

〔吾妻鏡 三十五〕仁治四年〇寛元年九月廿五日戊辰諸人訴論事有評定事書入見參可施行之由被仰
下之御處成敗遅々尤以不便自今以後付奉行人註事書早々可成御下知又御下知與事書於間注
所可令勘合事云無相違者可下之由依仰加賀民部大夫、

〔吾妻鏡 三十五〕寛元二年六月十七日戊戌於遠國訴人者西收以前不可被成召文御教書之旨被儲
法云云、

〔吾妻鏡 四十一〕建長三年七月廿日戊寅諸國民間訴訟於出來者西收以前召符不可下之旨今日政
所間注所等被仰云云、

〔建武以來追加〕條々永正六
五九

一 召符事

右就三問三答訴陳狀欲尋決之處、去年曆應九月十一日、兩方連署和與狀畢、如彼狀者和與佐々木四郎右衛門尉行綱女子心阿代淨圓與同五郎義信相論、近江國高島本庄內、案主名田島并後一條地間事、右地頭職者心阿帶關東安塔御下文同下知六波羅下知以下、次第手續、口相傳知行之處、去建武四年正月廿日、義信打入當所致亂妨狼藉之山訴之義信示口關東安塔外題證文等知行口口口之既、雖及三問三答訴陳義信爲一族、可和與之由令申之間、以別儀於後一條地頭職者永代所避渡于義信也、至案主名心阿可令領掌云々、如同日義信狀者子細同前就之爲元弘收公地否尋問證人伯耆入道道本、佐々木源三左衛門尉秀時之處、如同十月十日道本秀時請文者、案主名并後一條地頭職事、非元弘收公之地將示和傳當知行無相違云々各起請調載之者、和與之上者、不及異儀歟、然則守彼狀相互可從其沙汰之狀、下知如件、

曆應四年三月十七日

源朝臣華押○足利直義

〔親長卿記〕文明九年六月廿一日、賀茂供僧與別當隆算法師相論、正月三々日修正入用不下行事、御神祭神供闕怠事、三問三答狀奏聞兩條現形之上者、可被改別當職云々、理運之輩可注申之由、可仰云々、

〔親長卿記〕延德四年五月一日、午廻參內、奏鳴社祝職相論事、兩方三問申狀於御前讀進出御二問何樣猶靜被御覽申狀、追可被仰乎、又文書各所持之由申之可召進此申狀內、神前供物、儀樣相違、之由、惟祝、秀盛、訴中祝秀富、以件手文備進之由申之故也、

〔庭訓往來〕執筆書與問狀奉書於訴人之時、及兩度無音者、仰使節被下召符、

〔簡禮記〕召狀ノ事、詔目安時奉行對充狀路次ノ遠近ヲ勘ヘ、何月何日前可到著者也、若及遲參、バ不、論理非越度ニ可被仰付トモ、可申付トモ書出ス狀也、是ヲ召文トモ召符トモ云、問狀召狀等モ奉

一二問狀者 重訴狀也 又重申狀トモ云

一二答狀者 重陳狀也

一三問狀者 三ヶ度訴狀也

一三答狀者 三ヶ度陳狀也

以之謂三問三答訴陳狀也

〔道照愚草〕一訴論人の事 本解狀とは、初の訴狀此答をば初答と云又初陳狀共、二問狀、重訴狀共申之此答をば二答共、重陳狀共云、三問狀、三ヶ度の訴狀也、此答を三答と云、三ヶ度の陳狀共云、

〔簡禮記〕三問三答ノ事、初問初答文書假令バ名字官途名乗謹而言上、

〔花園院御記〕元應三年元亨六月廿一日癸亥今日合田別府可知行之由仰女房左衛門督女房也

此莊長嗣祖母禪尼所領也而公兼卿知行禪尼逝去之刻總領讓長嗣之處此所問公兼一期之後可知行之由書與讓狀了而長嗣先公兼逝去之時公兼一期之後可知行之由仰子息櫛丸了而公兼死去之時讓實秀了仍二所知行也而櫛丸訴申之間三問三答番了長嗣所領皆悉申置口院是朕幼少

之間事也仍朕此間執沙汰此訴陳也依有理欲給櫛丸之處入道相國起執申云廣可有沙汰云々仍鷹司前關白平二條前關白平道左府藤原實季內府藤原師信前大納言俊光等卿令尋所存之處幸

訴櫛丸有理而公兼卿長嗣父也長嗣雖爲長雅卿猶子猶不可離幸生告言之罪科可有沙汰也云々內府可沒收云々就此等子細長嗣息女御九同母給之是長嗣朕自幼少養育其功不可忘仍沙汰此

所領皆悉讓與朕是併爲子孫也而忘源而不可給實秀雖然告言又天下之大法也然者折中所相計也入道相國起雖執申依不忘長嗣舊勞如此治定了

〔朽木文書〕佐々木四郎右衛門尉行綱女子尼尼與同出羽五郎義信相論近江國高島本庄內案主名并後一條地頭職事

有御沙汰歟之由申之、即奏聞然者重可尋長興之由有仰、取兩方申狀、一度可奏聞之由申之、二問之時無不審者可奏聞、若有不審可尋三問、一度可奏聞之由有仰、四日、長興宿禰二問狀遣雅久了、他行之由命之、五日、早旦雅久來、昨日他行、入夜歸宅云々、引見記六可進第二陳答之由申之、十四日、二問狀到來、十五日、依召參內、略註又仰之官務事可被補雅久之由、自武家被執申此間被經御沙汰之處如此執奏如何、明日可持參二問可被仰談云々、十六日、參內直衣、參御前、長興宿禰二問雅久陳答、於御前予讀申、仰云、今度申狀各條目繁多也、雖然有無詮用事等、所要閣上首二代相續事有例、長興宿禰有二代相續之由申之、三代相續之由雅久申之、例各無上首三代相續事、無今度晴富宿禰依長照宿禰讓補、長興宿禰雖爲上首、晴富宿禰被補了前內大臣、執申了、理不盡之儀等有之云々、今度又雅久可相續之條雖無例、又御執奏、略註於申狀者就無其理、以內奏申、入武家歟、答云、無三代相續之例、閣上首可拜任之條如何、殊明年武家若公就御元服佳例可被仰付之由、被申之上者、先被還補長興、來年可被補雅久不背道理歟之由、被思食也、但新大納言廣橋大納言等召之、令見申狀、有被御覽誤事者可依時宜之趣、又無子細者可被申武家、御文案可出進云々、兩卿參入於臺盤所前、令見兩方之文書各讀之、雖枝葉繁多仰之趣尤也、子細見被申狀、可被申、勅定、勅定御文案出進之、猶被加御筆有被直下事、

三問三答

〔尺素往來〕本領事、近年庶子等成敵人構種々之奸、濫曲折、依奉掠上聞、及遠亂候之間、遂三問三答之訴、陳候之處、兩方證文前後狀之篇、謀實書之段、可爲相論肝要之由、就令治定候、去十八日、互出帶手繼正文、於御前對決仕候了、

〔沙汰未練書〕

一本解狀者 最初訴狀也 又申狀トモ云
一初答狀者 初陳狀也 又初陳トモ云

庚永二
七月廿一日

基能 在判
幸員 在判

道後政所殿

〔東寺百合古文書表書一之二十四〕行信重申狀。

若狹國太良庄內時澤名主國廣代行信謹重言上

欲早實圖無極謀陳令露顯上者嚴密被經御沙汰蒙御成敗全御年貢以下御公事當名主職間
事○中

右○中 粗重言上如件

建武元年七月日

〔東寺百合古文書表書十下之十六上〕實圖重陳狀。

若狹國太良庄內時澤名主法橋實圖謹重辨申

欲早被棄置國廣代行信無窮紆訴任代々御下文等并重代相傳知行例不可相違蒙御成敗時

澤名間事○中

右○中 重披陳言上如件

建武元年八月日

〔親長卿記〕文明四年七月二十一日長與宿禰來官務職事可被還補之由可奏聞云々有申狀、廿三

日參內長與宿禰申狀奏聞申狀於御前讀何樣被廻御思案重可被仰下云々、廿六日自鞍馬寺歸畢有召

參內長與宿禰申狀被下之可尋雅久云々退出之時召寄雅久仰了、八月三日參內○中次雅久陳

狀今朝到來奏聞申狀讀進仰云、先可被尋仰前內府歟予申云、此申狀工分更以無人決之儀一向被

盡申狀可被仰歟然者此申狀可談合兩傳奏之由有仰仍令見了各談合兩方申狀被召二三問ヲ可

〔東寺百合古文書〕

山城

〔一之二十四〕百姓等申狀

東寺御領若狹國太良庄百姓等謹言上

略○中

一十禪神福宜藤二郎當社之神田壹段令沽却丹後入道法圓之致謀書之相論番訴陳以二問二答之狀御注進之間訴論人令上洛跡順生房論所之早田作稻被劫取條非法何事過之哉

略○中

以前條々大概如斯

略○中

百姓等一味神水仕恐々言上如件

建武元年八月

〔東寺百合古文書〕

攝津國垂水庄日下部氏

法名證圓今若死去

子息朝倉孫太郎左衛門尉重方謹重言上

欲早被經嚴密御沙汰被停止東寺雜掌祐實押妨任亡母尼證圓讓狀依軍忠篇蒙御成敗當庄下司公文職等事

副進

一卷 本解具書等案

一通 讓狀案

重方相傳所見

右當職等者母堂尼證圓于時日下部氏相傳知行之條所進證狀等分明也而東寺雜掌致押妨之間證圓就訴申之爲安威新左衛門入道奉行被經御沙汰番一問一答訴陳之處不請取二問狀之間去曆應四年十二月以違背之篇被逢御沙汰之剩令出對於御引付請取二問狀訖爰被渡于當御奉行處去年十二月二日不達愁訴證圓他界畢且相副相傳證文讓與于重方之條讓狀分明也且令相續于亡母尼證圓愁訴被召出二問狀任相傳之明證等爲御成敗粗言上如件

康永二年四月日

〔光明寺舊記〕志摩國圓應寺雜掌中山田吹上僧惠觀致海賊之由事爲請取二問狀可出對之旨可被相觸之由候也仍執達如件

科之由、面々可被仰含之云云、太宰少貳爲佐、加賀民部大夫康持爲奉行云云、

〔東寺百合古文書^{表書}エ一之九^{表書}〕初問狀案

若狹國太良庄内時澤名本名主國廣代行信謹言上

欲早任、先御下文旨、如元可知行由蒙御成敗、全御年貢以下御公事間事、

副進

一通 御下文案

一通 預所施行案

右件名下作伊賀房奉向寺家、現不調狼藉之間、被召放舉、愛國廣依有忠節之志、下賜彼名之條、正安四年四月日御下文分明也、雖然不遂、一收納以前當庄地頭職罷成關東領之刻、給主代以權威、件名以下無是非令押領之間、國廣成空手畢、仍如此子細等、寺家御雜掌於關東、雖及御訴訟、依權威不事行之間、空令送年序給之者也、隨國廣成懇訴罷過之處、件伊賀房子息實圓等元自插寺家不忠所存之間、屬寺家敵對地頭誘取宛文、令知行之條、抑非寺家忽諸所存哉、寺家御鬱憤、國廣遺恨無他事之處、關東滅亡畢、仍寺家御所務悉令覆于本給之上者、國廣件名主職可令安堵候條勿論也、然早任先御下文之旨於國廣之重蒙御成敗、至于實圓等者、依寺家不忠重疊罪科爲被處御科粗謹言上如件、
建武元年六月日

○按ズルニ、右表書ニ、初問狀案トアルハ、最初ノ訴狀ニシテ、即チ初問狀ヲ發スル材料ナルガ故ナラン、

〔越川親俊日記〕天文八年七月廿三日戊午、東福寺春暉菴と大同菴相論之儀ニ付而對大同菴被成問狀奉書處、住持江州在周者最前於寺家相果候云、^略下

〔沙汰未練書〕一二問狀者 重訴狀也 又重申狀トモ云 一二答狀者 重陳狀也

任定法被下安堵給旨、於有限之寺用者、不可致懈怠候、寺家又元來非可爭相傳之涇渭候之際、強不可申所存候、歟得此等御意可有洩御奏達候乎、仍言上如件、

閏六月○應安元年五日

左大吏花押

進上 頭中將殿

〔御成敗式目〕一帶問狀御教書致狼藉事

右就訴狀被下問狀者定例也、而以問狀致狼藉事、紆濫之企、難通罪科、所申爲顯然之僻事者、給問狀事、一切可被停止矣、

〔式目抄六〕一帶問狀御教書致狼藉事

訴狀トハ、訴人ノウタヘ申狀也、總ジテハ召文ヲ問狀ト云テモ害ナシ、サレドモ聊差別アリ、召文ハ、其事ヲ明シテ申セトバカリカク也、問狀ハ、子細ヲクハシクカキタテ、但子細アラバ明シテ申セトカク也、以問狀致狼藉トハ、問狀ヲ論人ノ方ヘ付テ、我訴訟ハ、上ニ聞食被キタリトテ所務ヲ妨ル也、

〔新編追加政所〕一人質事、人倫賣買之御制以前、致訴訟於給問狀者、任證文可流質人也、

〔沙汰未練書〕一安堵事

於關東有其沙汰奉行人三方也、隨思々申之、先本御下文并手繼讓狀、先祖相傳系圖等、如此具書調、本奉行所可上之、所申無子細者、其國守護、或一門親類等、以奉行奉書被尋問、當知行有無也、是問狀、奉書云無支申仁之由、請文無相違者、被成安堵、當書者外、關東安堵讓狀、兩所被成御判、若亦有支申之仁者、被成引付、就理非有其沙汰也、又於沽却之地、安堵於問注所有其沙汰、

○按ズルニ問狀奉書トハ、奉行ヨリ發スル問狀ヲ云フ、

〔吾妻鏡 三十三〕延應二年○仁治元年閏十月五日甲子、問狀事、問答訴人等、掠申之旨露顯之時者、可處罪

日令上洛寺務之舉狀。今日付南曹辨宣秀畢。此子細者。彼有官職者。一條二條兩家門當職之時者。偏廣代々令參行之。曾祖父信廣號三加祖父賀守號三加父季廣有京。此三人三代相續之處。近年執柄家僕難波常弘。自應仁亂中。稱有官代令參行之間。爾後即雖訴訟。依爲家僕一條家門。自初度職至再任。以最員偏廣不許之間。今度就寺門企訴認者也。申狀予計遣之畢。略中寺門舉狀云。

就維摩會遂行之儀。有官別當近年其代參向之條。不可然候。隨而無案內之故候哉。勅祿已下。不持參候。爲會式聊爾之至。殊以無勿體之由。及其沙汰候。仍右京亮倫廣理運之由候。然者自當年者。必令直參勅祿等如先規申沙汰候之樣。被仰付候者。可目出候。就會式申子細共候間。令啓候。可得御意候。恐謹言。

後十月十三日

南曹辨殿

寺務喜多院狀歟

空覺

陳狀

〔下學集下〕
應下陳狀

〔沙汰未練書〕一初答狀者 初陳狀也 又初陳トモ云

〔東寺百合古文書二ノ百八十八至二百一〕最勝光院領備中國新見庄事。去貞治四年閏九月廿四日。

故匡遠宿禰所存之趣載狀。可被下安堵勅裁之由申入候之處。同卅日被尋下東寺難掌。而其後不申。

是非候之間。重就申所存。同十一月廿八日。去々年貞治五年三月十八日。任被定置之法。可有其沙汰之

由。兩度猶雖被尋下之。遂不及是非披陳。送旬日候。剩故匡遠宿禰逝去。御沙汰又自然停滯之間。于今

聞愁訴候訖。如曆應難訴法者。陳狀。過廿箇日者。可被止所務。被止所務之後。過十五箇日者。可被付敵

方。但違背至極之後。云被止所務法。云被付知行之儀。任被定置之旨。可有沙汰之由。重被相觸。又過十

ヶ日者。不待訴人催促。任法可有其沙汰云々。三箇度繪旨。違背既至極之上者。御沙汰頗似無盡期候。

之由任意依難申候、乍恐所言上候也、以此旨可令洩御披露給候、恐惶謹言、

八月七日

賴朝

〔吾妻鏡^{四十}〕建長二年四月廿九日甲子、難人訴訟事諸國者可帶在所地頭舉狀、鎌倉中者就地主吹舉可申子細、無其儀者不可用直訴之由、今日被仰遣問注所政所、是爲被禁直訴之族也、

〔東寺百合古文書^{七ノ白}〕號至二十號、上桂庄替吉身庄御舉狀間事、今年二月廿二日成尋狀、同八月十三日令旨、謹下預候舉、彼成尋無故支申御舉狀之條、無道至極候、其故者、德治年中、依有事緣、爲御門徒故喜樂坊少輔法師圓堅口入件門弟成尋之母儀平氏女許入置、彼文書於質券之處、成尋構

無窮今案成永領之思、致問答之間、就訴申使廳、去年^嘉五月十三日同六月六日爲對馬判官重行之奉行、以廳下部雖被付下訴狀於成尋之母儀住宅、涉兩年、于今不及請文散狀、無理之至、顯然候、仍

重訴申之處、重行辭退使廳出仕之間、爲御沙汰被渡下總判官秀清、果、仍聞使廳御沙汰奉掠御門跡可支申本訴御舉狀哉、有所存者、就使廳催促尤可、俾陳狀者、歟併所仰上察也、早任先度旨被申成御舉狀候之様可、有御披露候哉、恐々謹言、

八月十九日

淨顯 請文

大夫阿闍梨御房

舉狀云

上桂取替吉身庄の御舉狀、成尋支申間事、難掌淨顯請文、か様に候、いろい申御さた候べく候、あなかしこ、

八月^三〇^嘉曆 廿二日

宮兒法印御房

王熊九

〔和長卿記〕明應七年閏十月十六日戊申、關右京亮倫廣就、難摩會有官職事、寺門爲訴訟越南郡舉、昨

達如件、

永享十一年六月九日

千代德殿

右京大夫 花押

舉狀

〔簡禮記〕舉狀ノ事はハ權門ノ狀ヲ申請充所ヘ付テ、其權威ヲカリ、願書ヲ相達ス狀也、亦頭人支配ノ狀ヲ取テ、上ヘ訴、其願相達狀ヲモ舉狀ト云、

〔御成敗式目〕一國司領家成敗不及關東御口入事

右國衙庄園神社佛寺爲本所之進止於沙汰來者、今更不及御口入、若雖有申旨、一作不能敘用焉、

次不帶本所舉狀致越訴事、諸國庄園并神社佛寺領以本所舉狀可經訴認之處、不帶其狀者、既背道理歟、自今以後不及成敗矣、

〔沙汰未練書〕舉狀書樣事

何國何所某申何々事、以代官某令言上候、以此旨可有申御沙汰候哉トモ、又可有御披露候哉ト

モ、恐々謹言、

何月日

某裏判

進上 御奉行所 舉狀ニハ年號不書之

〔吾妻鏡〕「建久二年八月七日癸未、幕下報御源御外甥僧任憲、相傳熱田社領内御幣田之處、爲號勝

實之僧、被妨之、勝實已經奏聞之間、任憲勒解狀、又欲奏達、仍望申幕下御舉狀、幕下頗有御猶豫之氣、

爲報、故祐範父任憲之功、縱廻他計、略於此執奏者、難題云云、而是先人亡骨在所也、相構欲達之、他事會

無所據之、由重言上之間、今日相副、惡懇御書於彼解狀、被付高三位奉經高階云云、僧任憲解狀副真謹

進上之、如此事不可執申之、由存候て、大略成憤て、不申上候、而少事には候へども、論人勝負掠申候

之間、當時依一方申狀、被下候歟、勝負帶道理候者、何上西門院御時、不蒙裁許候、更此條難申、披子細

上事は就武藏國足立郡内鳩谷地頭職事、先日出懸物押書訖、緯已明之上、可執申之由、雖之懸望、奉行人不許容云云、有其沙汰可被下問狀云云、八月廿六日己亥、今日武州時經被遣御書於問注所、是武州禪門時有成敗事、訴人不進懸物押書者、縱可達問答之由、雖爲御書下、不可被召決云云、執事加賀民部大夫獻請文云云、

具書

〔沙汰未練書〕一具書者、訴陳狀兩方所進ノ證文等ノ事也

〔丹州書札式〕目安事、申狀共、具書共云、申狀ハ目安ノ子細ノ淺キ物也、

〔吾妻鏡四十九〕正元二年元○文應八月十二日丁未、依御惱事、爲相模太郎殿御沙汰、一日中被造立藥

師傳等身供養導師尊家法印又被始行藥師法、今日有被仰道于六波羅事、其御教書云、

問注以後追進狀事、不進證文之外、於訴陳者、不及沙汰之由、被定畢、而進覽問注記具書之時、每度被制、進追狀之條、違傍例、非無沙汰之煩、於自今以後者、證文之外、不可副進新陳之狀、若令備進簡要證文者、遂覆問可令副進彼證文之狀、依仰執達如件

文應元年八月十二日

武藏守

相模守

陸奥左近大夫將監殿

〔東寺百合古文書百三十二〕東寺領播磨國矢野庄例名役夫工米事、定憲僧正狀副寺解具書如此子細見

狀候、歟、可止其責之由、可被仰武家之旨、天氣所候也、仍言上如件、

延文二
十二月十三日

右中辨時光奉

進上西園寺大納言殿

〔宗像文書〕本間太郎左衛門入道源厚、同三郎詮重等申、佐渡國羽茂郡内宿根本浦事、訴狀具書如此、本間對馬守押領云々、來月十日以前以參洛可明申之旨、相觸之、可被申左右之由、所被仰下也、仍執

處和田左衛門尉足立藤九郎入道等入來義村對之、述此事之始中終、件兩人云、早勸同心連署狀可訴申之。○中略先伺御氣色、無裁許者直可靜死生。

〔應仁略記〕正月十八日御靈神前かせん附たり五月廿六日大亂等の事

御許容の事共一圓貞親勢。○伊私あるによつて、公方義政、御胡亂の次第に落居す、此分にては、かなふべからざるの趣諸大名一同の連署數ヶ條管領に達す、細川元勝尤同心餘義なく披露を致し、條目べし、その體御所卷といはぬばかり也、○又見、初瀬發心略記

〔和長卿記〕明應五年正月八日丁亥早旦傳聞、在數朝臣。○菅原氏、唐揚、昨日七日於九條家門被殺害云々、言語道斷之次第也、凡家禮之事者、内々儀也、任大學頭大内記等顯職、殊者加近臣之列、旦暮咫尺顏、内外奉公勝于人歟、然如此之儀、古今不開其例、當家皆依不肖、恣御沙汰、非沙汰限哉、云不便云、無念、不能言說、准后○前關白九條政基與幕下○向御父子自身之御沙汰也云々、是又聊爾千萬歟、廿四日、癸卯、伯卿未明送使者云、夜前之趣申入之處、然者各所存之分、以一書并連署可申上子細、今日即可被仰、出九條亭云々。○中略其狀云、○中略少納言菅原爲學○五條少納言菅原章長○高辻少納言菅原和長○東城權中納言菅原長直○長父此狀付伯卿○忠富申入之、示送云、今日即可被崇申九條殿之由、被仰出。○中略

後聞九條御返事之樣、尤無骨也、故猶以逆鱗云々。○又見、親續記

懸物狀

〔御成敗式目追加〕一諸人訴訟對決時進懸物狀事。仁治二年八月廿八

右甲乙之輩、訴訟之時、遂對問之處、或未預裁許之族、爲散鬱憤、稱懸物、捧押書、或所申爲非據者、以論人之所領、可宛給敵人、之由、相互戴其狀之間、各任貪欲之心、彌好喧嘩之論、歟、自今以後、進懸物狀之時、於致濫訴者、早以所載懸物之所領、可宛給他人之旨、可令書載也。○又見、吾妻鏡

〔吾妻鏡〕三十四〔仁治二年八月廿八日癸未、今日評議諸人訴訟對決之時、進懸物狀事、定其法云云、

〔吾妻鏡〕三十五〔仁治四年○寬元年三月十二日戊子、被行臨時評定、鳩谷兵衛尉重元參其砌、有庭中書

解狀

〔沙汰未練書〕本解狀トハ、最初ノ訴狀ナリ又申狀トモ云、

本解狀書様事

何國何所地頭某代某謹言上

欲早任傍例急達被經御沙汰同國トモ何所トモ某人令押領所領田畠等罪科難通候子細事

副進一通證文等案

右所領田畠等者、某重代相傳之地也、而某人恣令押領候、無謂之次第也、早被召上某被糾明眞偽任、相傳道理、爲蒙御成敗矣、仍粗言上如件、

縱令以是爲土代理非分明可書之、

本解狀外二問三問狀者重言上ト可書之、謹ノ字不書之、

〔御成敗式目〕一代官罪過懸主人否事

右代官之輩略中若依本所之訴訟若就訴人之解狀、自關東被召之、自六波羅被催之時、不遂參決、猶

令張行者同又可被召主人之所帶、

〔武政軌範引付内談篇〕一訴訟落居反解狀出訴人事

訴訟事終者奉行入封解狀裏反渡于訴人、訴人又書寫解狀、封其裏、獻于奉行所、是規式也、

〔吾妻鏡〕養和二年○壽永元年五月廿五日甲午、相模國金剛寺住侶等捧解狀群參營中、是所訴申古庄

近藤太非法也、

〔簡禮記〕解狀ノ事、是ハ捧目安時、奉行對充所問狀ヲ付ラル、當人捧返答狀ノ事也、

〔吾妻鏡〕十六建久十年○正治元年十月廿七日丙戌、女房阿波局告結城七郎朝光云、依景時○堀讒訴、汝

已擬蒙誅戮略中、則向于義村○中、三亭有火急事之由示之、○中義村云、梓已及重事也、無殊計略者曾

難堪、其吳欺、凡文治以降、依景時讒殞命、失滅之輩不可勝計略中、須談合于宿老等者、詞訖遣專使之

連署

〔白河結城文書〕結城彈正少弼顯朝謹言上

欲早被經御沙汰預重御吹舉於京都達愁訴給安堵御下文令知行顯朝并親父親朝領等事

副進

一通 大將御威御教書案於伊達字津軍致軍忠由事

二通 同御一見狀案于細同前

右如顯朝父子所給康永二年二月廿五日京都御教書者參御方致軍忠者建武二年以前知行地各不可有相違云々就之云先度軍忠之次第云年紀以前之所頒令勸錄之依捧申狀去々年貞和四月七日預御吹舉於京都雖歎申未達上聞之條愁吟無窮者也而去年靈山宇津峯御退治之刻又依致軍忠預御威御教書并御證判畢案文謹備于右親朝者所勞之間差副手者等於顯朝所致戰功也凡顯朝等依參御方奥州及坂東凶徒靜謐之條何事軍忠如之其上於羽州立谷澤城手者松田太郎殞命以來至于今數々度軍忠之上者任御教書旨可預安堵御下文之處不及御沙汰寔經數年之條歎而有餘者也御約束御教書於令相違者當非顯朝不運之至難成諸人安堵之恩歟然者急速被經御沙汰預重御吹舉於京都申子細給安堵御下文彌爲抽忠歎恐々言上如件

貞和四年二月日

〔越川親俊日記〕一松任修理亮和運申狀天文十九年八月十九日

右子細者對大津安田次郎左衛門替領事任德政御法被成下弄破御下知候間相付處投返之刺去年月迫於大坂和運被官人池田彦太郎ヲ留置押令請乞之今度於加州知行分責取條言語道斷狼藉無是非次第也所詮如此爲狼藉人上者可處罪科若令重怠ば隨見合可被加御成敗候旨被成下御下知ば可忝畏存者也仍粗謹言上如件

天文十九年八月三日

申狀

物なきとて、其時十九歳に成下女を、法順取て候へば、總別甲州國習にて、地下も町人も質をこらる、儀を、一向の不覺に存る事昔より作法此通に候へば、彈左衛門が隣の町人共寄合て、彼法順何と申有共女をどめん儀、やすきといへども、彼僧大きなる徒法師にて、たゞはごめらるまじ、とめられねば、打擲いたさずしては叶まじ、さありて、出家をたゞき候はゞ、何と理をもちても、大慈悲心の御屋形信玄公の國法に坊主に杖をあつる事、大方の穿鑿にてもましますまじと、少分なる商人共さへ遠慮して、下女を法順にとられける、かくありて、右の女を二年の間寺にをく、其内に、女父もなきおのこを壹人もつ、町人共の事なれば、彼出家をにくみ、惡名を申事たゞよのつねならぬ批判也、縦訴人にてこれなくとも、此出家の様子、何とやらんあしければ、侍衆の中にて、も、法順が惡名を、わらはぬ人はさのみなし、さて又右の彈左衛門、下女とらる、四年目に、彈左衛門夫婦ながらあひはつる、まかも此者、むすめ一人ありて、別に子とてもたず、扱むすめの男は、八日市とてやがて其つゞきたる町にゐる者に、舅の彈左衛門が家屋敷諸道具とも、むこにくれて死する、聲は八日市、魚屋の甚九郎と云商人なり、此甚九郎、法順所へ右の女を返せと云て使をやり、隣のを頼怱言しても、法順女を返さざる故、目安をまたゝめ、奉行所へ申て公事に成て、跡先の算用をきはむれば、出家金子の方に一度取たると申て女をかへさず、○中 信玄公雙方の目安をよませ、聞召則仰出さる、○下

〔貞丈雜記九〕一申狀と云は、訴訟の事有之、奉行所へ差出す狀の事也、訴狀とも、目安とも云也、相論の時などに出す也、

〔書札集〕申狀調事、杉原一枚ニ書之、秋田出羽守家次謹言上、右子細書之、被成下御下知者、忝可奉存者也、仍粗言上如件、延徳二年八月日、奥ニ御奉行所共、又无所不書事も有之、是ヲ申狀共、訴狀共、目安共申之、

の例在之と云々、

〔太田康有記〕建治三年十二月廿七日、近年使者給事書進入之條、違物儀歟、今度給此目安、以詞可奏、
〔師守記〕貞治三年四月二日丙申

目安

書寫山東圓院院主僧都與凶徒尊雅子息忠律師相論備後國有福庄内、郡戸階見兩郷事、

右當兩郷本訴陳理非懸隔之上、謀書顯然之由、就中口訴道理至極之間、被經文殿一授御沙汰、謀書治定了、○中

右少辨藤原朝臣判

〔蔭涼軒日鑑〕寛正二年八月廿五日、同慶軒珠英首座訴訟之事有目安、建仁寺如是院領押妨之事伺之、命飯尾左衛門大夫也、

〔今川記かな目録追加〕一互遂裁許、公事落著之上、重而めやすを上、訴訟を企る事、證文たゞしき事あらば是非に不及、さもなくして、同口上の筋目申に付ては、罪之輕重を不論、成敗すべき也、

〔甲陽軍鑑品第十八〕山縣同心廣瀬みしな辻彌兵衛武邊公事の事

此度廣瀬みしな兩人にも、小菅兵衛並にざいをゆるし下さるゝは、六年後、百年なり、辻彌兵衛是を聞て、目安をかき、廣瀬みしな兩人をあひ手にて、武邊公事を仕る、

〔甲陽軍鑑品第十八〕甲府淨土宗の僧公事之事

一或年、俗と坊主の公事上、其元を糸て申せば、甲府に三日市場、八日市場とて、日市の立町あり、兩町の内、三日市場に鹽屋彈左衛門と云町人候て、淨土宗の尊體寺と云、わき坊主法順と申出家に、右の彈左衛門金子をかり、年月をへて、彼借金澤山になる、使をやれども、彈左衛門少もなす事なし、法順、殊外がうの強きあら、僧なれば、自身三日市場へゆき、彈左衛門が所へをしこみ、どるべき

〔内宮禰宜荒木田守晨引付〕自愛洲殿可有_レ大湊御發向由_レ愁訴事

抑彼在所者、御鎮座近邊、而久住者各專役人等也、並御膳料調進舟出入之津也、然到口所者必定御供可有_レ懈怠、歟、神難此事耳也、且者一天之凶事歟、以之早被_レ成、御嚴重御下知_レ令爲_レ無爲者、御神忠何事如之、爰元體以_レ内外御廳宣口御申御沙汰之條、不能_レ述索、唯奉_レ憑寬有御助外無他、謹訴狀趣蓋如件、

永正六曆夷則日

目安

〔常照愚草〕ある人訴狀を調しに、いかにもくうすくとしたる杉原に認て、奉行所へ付て、披露候時、申上所の理非は、被打置餘、疎卑麤相なる料紙不可_レ然之由にて、是非を被打置、不及御裁許候由之沙汰有し、也、いかに其身は不肖なりとも、公儀をかりしめたるかたへ相似たる由其風聞也、

〔沙汰未練書〕一目安者 訴陳狀之内肝要之段々目安云也、
〔簡禮記〕目安之事、料紙ハ訴訟人ノ位ニヨル也、堅紙ニテ可調之、發端ニ名字官途名乗マデ書續、其下ニ謹而言上ト書、次ノ行ヨリ其子細ヲ書出ス事モアリ、又發端ニ謹而言上トバカリモ書也、書留ノ前ニ可預御披露候、仍言上如件トモ、仍目安之狀如件トモ書之ベシ、年號幾月日トバカリアツテ大方幾日トハ不可有之、發端ニ名字官途等アラバ、日ノ下名官ニ不可及、若發端ニ謹而言上トアラバ、日ノ下名字官途名乗判形等マデ書之事モアル也、但シ之ハ略法ト知ベシ、其時ハ自然奉行所_レ充所ヲ調ル事モ可有之、本式ニハ充所モ不可有之、總而目安ハ披露狀ノ意得ニテ品々用捨可有儀也、上卷上下ヲ押折、目安ト書之ベシ、尙モ口傳有之、

〔常照愚草〕一公方様_レ訴狀の目安を捧事、武家は杉原也、公家門跡は引合を被用、然に常徳院殿様

裁_○足利 御代、關東管領上杉四郎と仁木兵部大輔_○足利 相論之時、目安何も引合也、汲古_○伊勢常

へ不審申處、古今引合にも被調云々、又杉原も被用也、三職山名なども又一色なども引合に目安

一傍輩罪科未斷以前競望彼所帶事

右積勞効之輩企所望者常習也而有所犯之由令風聞之時罪狀未定之處爲望件所領欲申沈其人
之條所爲之旨敢非正義就被申狀有其沙汰者虎口之讒言蜂起不可絕歟

〔建武以來追加〕一奉行人直請取訴狀披露事正長二八附

論人出帶之時參差之沙汰出來之條不可然向後者上裁并賦別奉行之外所被停止也各可令存知
矣

〔新編追加雜務〕一未處分所領相論配分事

云相論之是非云得分之多少始終於引付可有其沙汰其訴狀等者安堵奉行人可賦之

〔沙汰未練書〕一繼訴陳狀事

究三問三答訴陳狀之後返進訴陳狀之正文於奉行所訴論人共寄合奉行所繼訴陳狀可封裏也
上判下判事正員與代官者正判代官與代官者上下打違領家雜掌與地頭子細同前封裏之後正
文者可進置奉行所御下知者後事切文書云文倉遺之也

〔東寺百合古文書六十八〕六波羅下知狀案文永六年七月五日大番役事

若狹國太良庄雜掌申號大番用途令譴責段別錢之由事

准后御教書副訴狀如此早可被明申仍執達如件

文永六年七月五日

散位在列

陸奥守在列

地頭職

訴狀裏判

南條左衛門尉

河井右衛門尉

高橋右衛門尉

深田兵衛五郎

訴訟文書

鎌倉室町時代ニハ、原告ノ訴狀ヲ、一ニ申狀ト云ヒ、被告ノ答狀ヲ、陳狀トモ云ヘリ、而シテ其訴陳兩狀ヲ、又目安トモ、解狀トモ云フ、目安トハ訴狀ノ中ニ款目ヲ標シ、一見シテ睹易カラシムルヲ云フ、而シテ衆人ニテ訴狀ニ署記スルヲ連署ト云フ、

懸物狀トハ、訴陳ノ間、訴人論人互ニ其說ヲ證センガ爲メ、自己ノ所領ヲ賭スルノ意ヲ記シテ、官ニ上ルモノヲ云フ、

具書トハ、訟庭ニ提出スル所ノ證書類ヲ云フナリ、

舉狀トハ、地頭若シクハ權門勢家ヨリ其訴狀ニ副フル所ニシテ、以テ訴訟ノ便ト爲スモノナリ、

官府ハ、訴人ノ訴狀ヲ受理スルトキハ、問狀ヲ論人ニ發シテ、其答辯ヲ求ム斯クテ訴人論人互ニ狀ヲ以テ訴陳スルコト三回ニ及ビテ止ム、之ヲ三問三答ト云フ、或ハ初問初答二問二答ニテ止ムモアリ、

官府ノ論人ヲ召喚スル書狀ヲ、召文、又ハ召符等ト云フ、召文ノ中ニテ御教書ト云フハ、執權又ハ管領ヨリ發スルモノニテ、奉書ト云フハ、頭人又ハ奉行人ヨリ發スルモノナリ、又裁判上訴人論人ノ言ヲ注スルモノヲ問注記ト云フ、

又裁判著書スルトキハ、裁許狀ヲ與フ、裁許狀ハ略一定ノ書式アリテ、訴訟ノ原因、原被兩造ノ關係ヲ始メ、其辯論ノ要ヲ記シ、證據ノ優劣ヲ掲ゲ、以テ判決ノ理由ヲ示スモノナリ、

〔御成敗式目〕一雖給度々召文不參上科事

右就訴狀、道召文事、及三箇度不參決者、訴人有理者直可被裁許、

石見國

邇摩郡七日、請文十九日、

肥前國

神崎郡八日、請文廿一日、

以上

右訴人の申狀によつて、召文をなさるゝといへども、やゝもすれば令遅參いたづらに日數をへるの間、まゐるしおかるゝ者也、但御用にまがひ差遣飛脚等は、其時儀に望て、早速に往來すべきの條、勿論也、又山口中、人々の事は、五ヶ日中に申あきらむべし、此壁書之次第、若違背せしむる輩におゐては、可被處罪科之由御評定畢、諸人可有存知之由、所被仰出也、仍執達如件、

寛正二年六月廿九日

備中 守奉 秀明

左衛門大夫 奉 正安

〔大内家壁書〕從山口於御分國中行程日數事

周防國

大島郡四日但島末に至りては五日、請文到來日限十五日、

玖珂郡三日但山之庄に至て、請文十三日、

熊毛郡三日、請文十一日、

都濃郡二日、請文十一日、佐波郡一日、請文七日、吉敷郡一日、請文七日、

長門國

大津郡二日、路半、請文十一日、豐東郡二日、請文九日、豐西郡二日但高賀河、請文十一日、原狹

郡二日但津布同坂生至二日、豐田郡二日但神田阿川渠野至テハ、吉田郡二日、請文七日、阿武

郡田ニ至テハ二日、小川至テ二日、路半、請文十一日、厚東郡一日、請文七日、美禰郡一日但厚保一日、路半、請文八日、

豊前國

宇佐郡六日、請文十七日、上毛郡五日、請文十五日、下毛郡五日、請文十五日、京都郡四日、請文

十二日、仲津郡四日、請文十三日、築城郡四日、請文十三日、田川郡四日、請文十三日、規矩郡

三日、請文十三日、

筑前國

怡土郡七日、請文十九日、上座郡六日、請文十七日、下座郡六日、請文十七日、三笠郡五日、請文

十五日、糟屋郡五日、請文十五日、那珂郡五日、請文十五日、席田郡五日、請文十五日、嘉摩郡

四日、請文十三日、穗波郡四日、請文十三日、鞍手郡四日、請文十三日、御牧郡三日、請文十一日、

安藝國

東西條七日、請文十九日、日當島七日、請文十九日、吳島五日、請文十五日、蒲蒨島六日、請文十

七日、能美島四日、請文十三日、

父中內左衛門入道定空、相傳知行之間、讓與子息壹岐三郎入道覺實畢、爰定空爲令遺跡、雖分讓而面子孫彼輩無實子之跡者爲嫡子通房分可領知、又現不調令成他人所領之時者、通房申子細可知、行此兩條者、嫡々相續可致沙汰之旨、文永五年四月十日書置誠狀之處、覺實背彼狀、沾却當名於異姓他人、同國御家人桑原彌四郎入道兼兼之上者、任誠狀可被付總領賴房之由、捧件置文就訴申雖尋下道兼背兩度召文不參之間、延慶元年十二月十七日、以當國御家人陶山小次郎、日奈古孫四郎爲廣等尋問難澀實否之處、如爲廣執進今年二月十九日道兼請文者、當名地頭職者、自本主覺實子息尊智等平道兼子息夜叉丸令相傳領掌之由承伏之上、背度々催促終以不參對之條、云義理云難澀、無所遁歟、然則於彼地頭職者、任定空置文之旨、賴房可令領掌也者、依仰下知如件、

延慶二年六月十二日

前上總介平朝臣 準 押

〔建武年間記〕難訴決斷所

一出對難澀輩事

於在京輩者、及廻文三ヶ度不承決者、就奉行人之注進有評定、被副別奉行人、以召次并兩奉行人之使者、被尋問難澀實否以後、以注進狀重經評議可有裁定、至于在國輩者可被下牒於國司守護、過有限之行程論人不參洛者、評定日召國司守護代官於當所尋執達之實否難澀之有無、則召置注進可有沙汰、

一訴陳日數事

不可及訴陳之由、先度雖被定其法、對問之時或互帶證驗、可審察事理之類、或事涉疑似、旁叵斷後訴之輩、於雜務事者、召然訴陳可有沙汰、尋下訴狀之後、十五ヶ日不辨申者可被點置論所、其後難澀及十箇日者可被裁許訴人之、又逃避重申狀過十ヶ日者、可被弃捐訴訟、至于札斷事者、召置兩方、同時事書可被斷定矣、

於論人出對儀者^{正長十}壁書炳焉也。至訴人解狀。日限者不分明。所詮一問一答之間。可爲七ヶ日。若又於被成答延引奉書者。彼此可爲四十二ヶ日。馳過此日限者。可伺申之矣。

〔室町家成敗寺社御教書〕一論人催促日限事

就訴人解狀雖相觸當知行之仁。經廿一ヶ日不出帶者。以違背之篇可。有御成敗矣。

〔吾妻鏡^{三十八}〕寛元五年^{寶治元年}十二月十二日辛卯。今日被定訴論人參候所^中。

右差定奉行人。召問兩方之後。一方致難。認送日數自對決之日。過廿箇日者。不顧理非。任訴人申狀。可有御成敗者。

寶治元年十二月十二日

〔吾妻鏡^{三十九}〕寶治二年五月廿日丁卯。就難務等事。有被定下之篇目。難人訴訟事。雖下度々奉書。論人不被用。自今以後。召文三箇度之後者。今度令違背者。可有後悔之由。差日數以國難色。可被下遣召文也。此上或捧自由陳狀。令違期者。任訴狀。可有成敗者。

〔吾妻鏡^{四十}〕建長二年十二月七日戊戌。召文違輩罪科事。有其沙汰。三箇度不被用者。以御使可催促之。猶於令難。認者。隨注申之。可有罪科左右之旨。所被觸三番引付以下方也。

〔吾妻鏡^{四十八}〕正嘉二年五月十日己未。鎌倉中并國々難人沙汰事。被定法。是可仰付主人并在地頭事也。其事書樣。

一鎌倉中并國々難人沙汰事

奉行人奉書三箇度不被用者。可被成御教書。又被狀雖及三箇度不事行者。於引付尋明子細事實者。可注申所領之由。可被成御教書。次難治事。同於引付。可有其沙汰矣。

〔諸家文書纂^六〕大和前司賴房申。豐前國田河郡柿原。名地頭職事。

右當職者。賴房高祖父大和前司入道道賢。右大將家^{源朝}御代。爲板井兵衛尉種遠之跡。令拜領迄祖。

右就訴狀遣召文事、及三箇度不參決者、訴人有理者、直可被裁許、訴人無理者、又可給他人也、但至所從馬牛并雜物等者、任員數被糺返之上、可被付寺社修理也、

〔式目抄^五〕一雖給度々召文不參上科事

一度ノ召文ハ、一七箇日ヲモテ限トス、三箇度ノ召文ハ、廿一日也、後悔ノ召文トテ、三度召文ノ外ニ、又一度コレヲ付ク、其マデハ廿八日也、後悔ノ召文ハ、飯尾肥前永昌申沙汰也、^{○中}召文ノ日限國ノ遠近ニ依ルベキ歟、

〔沙汰未練書〕一召符御教書日數事

關東御教書者、美濃尾張、日數三十日也、六法羅御教書者、日數二十日也、國御使催促者、十日也、以上過此日數者、云違背也、^{但依國々遠近、日數遲速有之、}

奉行書下日數事 ^{關東六波羅同前}

訴論人當參之時、注置宿所在所日數十ケ日、以三ケ度可極之、三ケ度之書下者、以奉行使直付之、〔建武以來追加〕御成敗條々 ^{應永廿九、七廿六、松田丹後入道常胃奉行}

一論人催促日限事

就訴人解狀雖相觸當知行之仁、經廿一ケ日不出來者、以違背篇可有御成敗矣、

管領政所壁書

一論人出對事 ^{正長元十十一}

就訴狀觸遣之處、當知行之輩、令難澀之條、且無理歟、且造意歟、其以非正儀、早奉書到來之後、支狀出帶日數可爲十ケ日、次論人奉行請取陳狀證文催促之時、十ケ日間可出帶之、彼是不可過廿ケ日、於其內者不及沙汰、若過此日限者、不謂理非直、可被裁許、訴人至在國族者、隨國遠近、宜有其沙汰焉、〔嵯川親俊日記〕一訴論人日限事 ^{永正七、十二廿七}

終還御相州禪室。○北條時賴自御棧敷令還給之後及秉燭之期伊具四郎入道歸山內宅之處於建長寺前被射殺訖著箕笠令騎馬之人相具下部一人馳過伊具左方自田舍參鎌倉之人歟之由伊具所從等存之落馬之後知中矢之旨云云塗毒於其鎌云云十七日癸巳依伊具殺害之嫌疑廣諏方刑部左衛門入道所被召預對馬前司氏信也平內左衛門尉俊職平判官藤賴入道孫牧左衛門入道等同意令露顯云云是昨日伴兩人會合于諏方終日傾數坏疑開談而諏方伺知伊具歸宅之期自地起當座馳出路次射殺之後又如元及酒宴云云今日被相尋之處差昨日會衆爲證人依論申子細又被問兩人各一旦承伏云云此殺害事人推察不可單之處以諏方舊領被付伊具之間確執未止歟其上云箭束云射機已揭焉頗越普通所爲依之嫌疑御沙汰出來云云

〔建武以來追加〕一文書紛失輩訴訟事貞和二間九廿七評定

可爲內談方所務之由先日雖有其沙汰於建武三年已前分者無事書之間委細之旨趣無據糺明歟任先例尋問當知行之實否於有證人等者須成賜紛失安堵御下文至同年已來分者守舊規於事書在所恩賞方安堵方間注所可有其沙汰焉次不知行地事於內談方且相尋當時之領主糺明證跡可是非子細同前

一方內談武州方奉行行人同門裏左衛門入道寂意

〔建武以來追加〕管領政所壁書

關所證人事長祿四九五

〔關所出來之時就證人注進被恩補者古今例也然本主等無咎旨依歎申之糺明之處無其誤者於知行分者被返付本主至證人者可被處遠流本主又自科乍令露顯或致庭中或屬權家及訴訟者同可被處流刑矣

〔御成敗式目〕一雖給度々召文不參上科事

〔甲陽軍鑑品十七〕第四十七落合彦助と百姓と公事附雜言并に三法印佗言之事

若敵方口をとり候はゞ、そこにては其身も申やみ候はん物を申出さるる以前に、定て大事は有まじきぞ、

〔信玄家法上〕一於于出沙汰輩者、可侍裁許之處、相論半、不決理、非致狼藉之條、非無越度、然者不及善惡、可付論所敵人、

〔御成敗式目追加〕一諸人相論事

右證文顯然之時者不及子細若證文不分明者可被叙用證人申狀也、又證文顯然之時者證人申狀不能叙用歟、又證文與證人其以不分明者可及起請文歟、證文證人顯然之時者不及起請文也、

〔新加制式〕一相論之時出證人事

右雙方共令領解出證人、既糺明之處、无理之一方、重而可出別之證人、旨雖謝申之、不可有舉用、將又件證人以最員掠申之段顯著者、隨其咎或被沒收所領、或可被行死罪、

〔吾妻鏡七〕文治三年三月十日壬子、土佐國住人夜須七郎行宗與梶原平三景時、遂對問、二品源朝直

令決斷之給、行宗壇浦合戰之時、生勝平氏家人周防國住人岩國二郎兼秀同三郎兼末等召進畢、募其功可被行賞之由、日來言上之處、景時支申云、彼合戰之比、全無稱夜須之者、件兼秀等者、自然歸降之輩也、經年序後、行宗廻軒曲申子細之由、訴申之、而行宗彼時者、與春日部兵衛尉令乘同船之由、令陳謝之間、召出春日部被尋問之處、申勿論之旨、已爲分明、證人仍可被加賞之趣、被仰令行宗、景時依議訴之科、可作鎌倉中道路云云、俊兼奉行之、

〔吾妻鏡三十九〕寶治二年五月十六日癸亥、兄弟相論之時、以父母立證人事、天野和泉前司子息兄弟等相論之時、以母堂雖立證人、自今以後、不可被許容之由、今日及評定云云、

〔吾妻鏡四十八〕正嘉二年八月十六日壬辰、將軍家宗尊御參鶴岡宮寺馬場流鏑馬以下儀如例、事

正應四年二月三日

陸奥守 判

相模守 判

尾藤内左衛門入道殿

小野澤亮次郎入道殿

〔建武以來追加〕管領政所壁書

一押領不知行地後經訴訟事永享元十二七

有愁訴者企訴訟可仰御成敗之處、猥先乍令押領致訴訟之條、造意至難、通罪科所詮雖寄事於親類被官人等、不可被敍用、縱又雖爲理運、處彼咎可被付論所於敵人也焉、

〔鶴岡事書案〕應永二年閏七月廿五日

一白山神宮寺免田當作毛事、本主三位アザリ申於身之無罪科之間、難被成公物ニ候、又御沙汰落居已前上御使以當鄉人夫カリオカレ候間、不可被付敵方候、略○下

〔建内記〕嘉吉三年七月廿日癸酉、今日於管領以須田右京亮示建聖院事、訴陳之趣、理非事舊了、去年冬被尋評定衆之意見、各以當方申理運之由云々、此上ハ可爲御計一段歟、若又猶有御不審之子細ば、所詮被任壁書之面管領有壁書、先可有御成敗哉、如壁書ハ不知行之地、不致訴訟令押領ば、可被處罪科、依其咎可被付論所於敵人、由被載候、今此寺院事、不事問押領之條、不便也、尤可被任此大法歟、彼方更不可被恨申事歟、且公方御違例時分、被任道理者可爲御祈禱之至、併以御祈禱之旨可有申御沙汰哉、且來廿四日、開山忌也、其以前被復憑存之由示了、返答云、此事兩奉行披露之趣、委存知候來、廿四日以前可申付之處、公方樣御違例之間、每事先止沙汰候、御本復には最前申談、一途可成敗候、此事雖不承候、遮可申付之處、今時分候之間、無等問之由返答也、且以安堵、一向憑入候由、委示候者也、

違

管領政所壁書

一 訴論人望請權門吹舉事 正長元十十一

任先條之制法堅所被停止也

一 奉行人直請取訴狀披露事 正長二八廿

論人出帶之時參差之沙汰出來之條不可然向後者上裁并賦別奉行之外所被停止也各可令存知矣

一 就諸人訴論僧女 付比口入事長享二五六右筆假尾大和入道宗勝

如近日者得訴論人之語不謂尊卑或執申之或口入之條不可然任先例向後彌可被停止之若背此旨於執申仁者可被召所領無所帶者可被處流刑至訴論人者縱雖爲理運永可被棄置之矣

〔新加制式〕一 改舊境致相論事

右如式目者割分訴人領地之內被付論人云々

〔新加制式〕一 固可有禁止賄貨事

若訴論人密及貨之沙汰者評定衆互逐白狀可有其計

〔吾妻鏡四十〕建長二年十二月七日戊戌召文達輩罪科事有其沙汰三箇度不敍用者以御使可催促

之猶於令難澀者隨注申之可有罪科左右之旨所被觸三番引付以下方也

〔尺素往來〕本領事近年庶子等成敵人構種々之奸濫曲折

〔新編追加雜務〕一 鎮西輩訴訟事

或雖抽軍忠奉行人依有阿黨事令漏注進或所務相論之處令引汲敵人之間不注申之由訴申輩有之如此族訴訟事尋究子細可令注進之狀依仰執達如件

敵人

論人

親前之訴訟の筋目を存、いはれざる事をば相押、加異見により、前後えらざる者を頼み、我道理計を申により、無覺悟なる者共、取次事多也、但寄親道理たゞしき上を最員の沙汰をいたし押置歟、又敵方計策歟又は國のため大事にいたりては、以密儀たよりよき様に可申も不苦也、

〔運歩色葉集^{登ロシ}〕論人

〔建武以來追加〕一近江國船木庄雜掌申一井太郎左衛門尉賴景道園以下濫妨狼藉事^{曆應二十}

凡就院宜無左右被施行者、參差之沙汰可出來歟、任舊規召上論人、可有其沙汰、

〔建武以來追加〕一諸國守護人以下使節緩怠事^{康永三七}

或可沙汰付下地之旨被仰下、或可催上論人之由、嗣遣之處、遵行遅引之條、甚以不可然、向後於難認使者、須被收公所帶矣、

諸國守護人非法條々

一大犯三箇條^{付謂田獵、權、外相、繕所務}以下成地頭御家人煩事

得論人當知行人語、下知遵行難認事、或分取訴論人所領、或押領國中關所構表裏沙汰事、

一寺社本所領事^{觀應三八廿一御沙汰}

先召出守護專使等代、并當參論人兩奉行入、加問答、尋究遵行難認之旨趣之後、尙可施行哉否、可有其沙汰矣、

一寺社本所領事^{文和元十一十五御沙汰}

所詮且取調先日散狀召出守護代并論人等、尋究遵行難認之旨趣、陳謝無謂者、准先例可勘申罪名、

寺社本所領條々^{延文二九十御沙汰}

一非分亂妨輩事

今年七月已後、連々施行之處多未事行云々、云論人、云守護、可處嚴科之旨、其沙汰先畢、今更不可相

道理乎、速可被付訴人、次又訴人乍申請召文、公事式日不參上者、百ヶ日可被押糺明。

〔吾妻鏡〕治承五年

○養和元年

三月十四日庚寅、淺羽庄司相良三郎等事、就一方鬱陶難被處罪科之由、

被仰合于武藤五之處、武藤申云、爲訴彼等奇恠、被進使者之由、披露國中畢、而不蒙裁許、而空令歸國者、其威勢如無歟、後日若聞食虛訴之旨者、可被行使於斬罪者、依之於彼領者、義定主可領掌之旨有、

御消息、但宗信等後日陳謝若有其謂者、還可被處訴人於罪科之趣、被載之云云、

〔吾妻鏡〕三十八、寛元五年

○寶治元年

十二月十二日辛卯、今日被定訴論人參候所其狀云、

一訴訟人座籍事

侍客人座 奉行入召外、不可參後座、

郎等廣庇 召外不可參南廣庇、但陸奥沙汰之時者、隨召可參、那鄉沙汰人者、依時儀可參小樣、

雜人大庭 不應召外、相模武藏雜人等不可參入南坪、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿二年十月十二日甲午、評定之時、訴人近々伺候事、向後可被停止云云、猶有推參之

輩者、任法可致沙汰之由、尾藤左近將監平三左衛門尉盛綱、南條七郎安東左衛門尉等被仰付、是併

泰貞依狼藉也、彼於所帶理運之間、被付家重云云、

〔甲陽軍鑑〕品第十八、甲府淨土宗の僧公事之事

縱訴人にてこれなくとも、此出家の様子何やらんあしければ、侍衆の中にてても、法順が惡名を

わらはぬ人はさのみなし、

〔建武以來追加〕條々 永正六、五九

一付置訴人、申狀以下、屬別人致訴訟事、

任法可被仰裁許焉

〔今川記〕五、かな目録追加、一各同心與力の者、他人をたのみ、内儀と號し訴訟を申事停止之、其謂は寄

訴人代理

仰甲乙之訴訟裁報豈有私而任理致雖有成敗訴人於求與竈之媚或任賄賂之思財有六忤不憚枉法金有四知不愆天地古猶爾今宜禁訴人若致賄者雖抱理訴先抑上裁可減後昆其事爭及天聽哉然而至嚴密之制者誰敢費己財背天命者乎

〔御成敗式目〕起請

御評定間理非決斷事

御成敗事切々條々縱雖不達道理一同之憲法也設雖被行非據一同之越度也自今以後相向訴人并其緣者自身者雖存道理傍輩之中以其人之說致聊違亂之由有其聞者已非一味之義殆貽諸人之嘲者歟

〔建武以來追加〕被仰出條々文明八八廿四

一就當知行申給安堵御判并奉書等事

堅致札明之領知無相違之旨召置訴人請文可伺申之

條々文明九八廿七、于時公人奉、行松正丹後守秀興奉行之

一成懸御教書并奉書等事不及伺申調遣之段先規勿論也雖然於訴人掠申之儀者可御札明

〔建武以來追加〕一當參輩所領事

有訴人雖及訴訟任本法相觸當知行之仁可經次第沙汰

〔新加制式〕一中間狼藉等事

右理非之趣被遂淵底之處其中間致狼藉之條太以濫吹也於論所者可被付訴人訴人無理者可有別御計者乎

一雖給三ヶ度召文不上科事

右式目之趣既顯著也○中將又論人召文三ヶ度之終日適雖令參決不對合裁許所行之企尤非

古事類苑

法律部二十八

中編

訴訟人

訴人

鎌倉室町ノ時代ニハ、訴訟ヲ起スモノヲ訴人ト云ヒ、訴ヘラル、モノヲ論人ト云ヒ、兩者互ニ相謂テ、敵人又ハ敵方ト云フ、訴人若シクハ論人ノ論辯ヲ證言スル人ヲ證人ト云フ、貞永式目ノ制ハ、論人召文ヲ受クル時ハ、七日内ニ參決スルノ制ナリ、參決トハ法庭ニ出デテ對決スルノ謂ナリ、而シテ三回ノ召文ヲ發シ、日數二十一日ヲ經テ、論人猶ホ參決セザルトキハ、更ニ一回ノ召喚狀ヲ發ス、之ヲ後悔召文ト云フ、而シテ猶ホ應ゼザルトキハ、原告人ノ申狀ニ任セテ裁決ス、但シ里程ノ遠近ニ由リテ、日數ニ差アリ、朝廷ノ制ノ如キハ、不明ノ處多キヲ以テ、僅ニ二三ノ例ヲ篇末ニ附記スルノミ、

〔運歩色葉集〕^楚訴人

〔沙汰未練書〕沙汰者

一 訴人者、人ヲ訴ルヲ云也、

一 論人者、人ニ陳ルヲ云也、

以之謂訴訟人ト也、

〔公家新制四十一箇條〕弘長三年八月十三日宣旨○中略

一 可停止上下訴人賄賂事

具書

一〇七二

舉狀

一〇七三

陳狀

一〇七五

問狀

一〇七六

二問二答

一〇七七

三問三答

一〇八〇

召文

一〇八二

問注記

一〇八六

裁許命令狀

一〇八八

裁許狀

一〇八九

古事類苑

法律部二十八

中編

訴訟人

訴人

一〇五一

訴人代理

一〇五三

論人

一〇五四

敵人

一〇五五

證人

一〇五七

參決日數

一〇五八

訴訟文書

訴狀

一〇六四

目安

一〇六六

申狀

一〇六八

解狀

一〇七〇

連署

同

懸物狀

一〇七一

る事に候へば、うへをかねても旁もつて曲淵は事故なく我家に歸る也。

〔見聞雜錄〕甲府奉行所へ、俗と坊主との公事上る、武藤三河守、櫻井安藝守、今福淨閑、此三人奉行故、捌筈なれども、信玄公御念を被入、寺社領之公事出入内證にて不可捌、一國之支置と云内、寺領社領は未代迄殘て何れの代、何れの國主之捌、是非理と古今之評判する物也、然ば奉行の入念候ても、捌損じ有ては、信玄隨分と萬事正敷置ても、九善一惡之失有との被仰付故、三奉行より申上、御前公事ニ成。

〔甲陽軍鑑品第十七〕長沼長助、長八親敵討事、附増城源八郎と、同長助、長八公事之事。

是は只の事にあらず、侍道の事なれば、目安をもつて信玄公の御さばきに仕られ、それにてまけなば、それは兩人次第と、石田矢崎飯室三人、長沼兄弟に異見いたす故、目安あがり御前公事になる。

〔永祿記〕永祿八年五月十九日、清水參詣と號し、早朝より人數を寄せ、其時に當て公方様○足利へ義輝訴訟有よし申觸て、三好○義大訴狀を捧て、條々御點を申請る、其間に御構へ人數を入者也、御母慶壽院殿、御女義たるによりて、訴訟叶へ給ふにおゐては、公方様御恙有べからずと思召て、御點は如何様にも加へ給ふべきよし、啼くごき御意見様々、御申、さりとて、御心中の程察し奉りて、見る人聞もの、袖を濕す計なり。○又見久米田軍記、二分流記、總見記等、一

上意爲然也、

〔多聞院日記〕文明十六年十一月廿日、山城并當國兩國寺社領諸院諸坊領之事、號品山右衛門佐下知、彼被官衆等、或致押妨、或相懸新儀、非分課役、致亂惡事、近年追日而乞増倍之條、非削神國稱號、號寺社滅亡、法會懈怠之至極也、仍學侶評定、而可及訴訟云々、

〔甲陽軍鑑^{品十七}_{第四十七}〕曲淵少左衛門公事負難言仕義櫻井殿訴訟之事、

一甲陽の武田信玄公御一家の板垣信形ざうりごりに、烏若と申者を、後には曲淵少左衛門と申て、かくれなき武邊のほまれの者也、彼者只今四十歳にあまるまで、公事を仕る事七十四五度なり、其内一度勝、一度はあつかひに仕る、殘は皆負候、或時彼曲淵公事を仕負座敷を立ながら、此度の公事は私負まじき公事なれ共、奉行衆へ音信を仕らざる故、負候なり、重て公事をいたし候はば、是非共栗柿を用意し持て參るべく候、ここに我等の在所は、さはし柿の上手にて候へば、重て持參申べく候と難言仕る、四奉行腹立給ふ様に候へ共、三人は遠慮して其挨拶もなし、其中に小身にて候へども、櫻井殿はちかき御親類の事なれば、いひ兼給ふ色もなく、腹をたて御申候は、曲淵殿は、近來勿體なき事を承候物哉、上義をかりしめ申にこそ、左様のさたもあるべきに、是程御法度つよき文武二道のはまれ、誠に近國他國までゆかしくまします御大將のまににて、左様のうしろぐらき事を仕べく候や、重て公事をなされ候は、理究を持參候へ、無理なる事に候は、金銀米錢をたどへば、車につみ持來候とも、其方まけたるべしと御申候へば、曲淵少左衛門座敷をたち、かたなをさし、又奉行所へゆき、奉行衆に向ひ、手をつき謹て申は、櫻井殿には、御位と御出頭はまけ申べく候、切あひぐらは勝申べく候間、これ口惜くおぼしめし候は、只今御出候へ場中にてすかうをきりくだき進すべきよし申て、刀をぬちまはし座敷を立候、さすがに大剛の者なれば、當座に何事もならず、其うへ信玄公のあの様なるおぼえの者を、淺からず御馳走なさる

江 可返置、但依境遠、其理遲延之事、五七日迄者、不可苦歎、

〔沙石集〕淨土門之人經神明蒙罰事

鎮西ニ淨土宗ノ學匠ノ俗アリケリ、所領ノ中ノ神田ヲ檢注シテ餘田ヲトル間、社僧神官等イキ
ドヲリ申、鎌倉ニテ訴訟シケレドモ、餘田ヲトル事、地頭ノ申トコロ一分道理トテ、無沙汰ナリケ
ル間、地頭ニ猶々申トモ、大方ユルサズ、略下

〔吾妻鏡七〕文治三年正月十九日辛酉、文治元年、所被寄附于希義主墳墓之土佐國津崎在家等、爲甲
乙人致濫妨狼藉之間、琳猷上人參訴右武衛能保、仍可停止濫吹之由、被加下知訖、彼上人雖可參訴
關東、行程隔遠路之條、武衛爲二品源賴朝御耳目在京之間、如此云云、

〔吾妻鏡十八〕建仁四年元久五月八日庚午、就國司等之訴、有被經沙汰之事、所謂山海狩漁、可從國
衛所役事、鹽屋所當、以三分一爲地頭分、可止抑留之儀事、節料燒米、可爲國司德分事、以上三箇條、且
隨國宜、且任先例、可致沙汰之旨、被仰付地頭等、左衛門尉義村、左京進仲業、爲奉行云云、

〔康富記〕寶德三年八月十三日己卯、或語云、琉球島船人商去月末、着兵庫津之處、守護細川京兆元早
遣人彼商物撰取、未渡料足之間、先々料足未進物及四千貫無返辨、又賣物抑留、爲島人難堪
之由、申之間、自公方被下遣奉行三人布下野守、飯尾與左衛門同六郎被糺明之處、被押取之物、自京兆未被返、依
之奉行未上洛云々、京兆者、前管領也、希代之所行哉、如何々々、

〔蔭涼軒日錄〕長祿三年十月七日、赤松次郎法師政加賀國半分、以御奉書欲入部、及違亂云々、重可
被成御奉書之由、被仰出也、伊勢兵庫助并布施下野守致被露、可被成奉書之由、被仰出也、十一日、
就賀州赤松次郎法師合戰事、依諸方訴申、以伊勢兵庫助殿、飯尾加賀守、同左衛門大夫、可止國中、恐
劇之由、被仰出也、答謹白、自此方雖不及違亂、自富樫被管岩室率國中、之大勢、寄來于此方、故不能避
之、而合戰、雖然不在次郎法師結構、其支證奉公倉光若狹守兼存知之、竊告之間、可有御尋之由、申之、

之煩更無落居之儀歟者云地頭所從云百姓下人前々事者其以不及沙汰至自今以後者相互可令
糺返早守此旨可被加下知之狀依仰執達如件

寛元二年七月七日

左近將監 判

太田民部殿

〔新編追加雜務〕一奴婢相論事○目錄云、正應四三十六、

右無其沙汰過十箇年者不論理非不及沙汰之旨被裁式目畢而所領知行之間召仕百姓子息所從
之後稱過十箇年永令進退服仕或令他行之時號所從相懸煩云々事實者無其謂付田地召仕百姓
子息所從等事縱雖歷年序宜任彼輩意矣

一難人事○目錄云、寛元三、

兩方御家人事者如關東被定置不論是非限廿箇年可被成敗一方京都一方御家人事者任道理可
被裁許也

〔新編追加政所〕一依不償負累爲質物被押取子息所從等難人事

如式目者奴婢難人事無其沙汰過十箇年者不論是非不及改沙汰云々者被押取質人之後不經訴
訟不致其排空過十箇年者件質人可爲物主之進退也不過十箇年之負物者致一倍之辨可被糺返
質人歟

〔新編追加雜務〕一所從事十二月廿五日、遺六波羅狀也、

武藏前司入道殿在判

雖爲相傳不知行方無其沙汰過十箇年者稱不可沙汰又無指由緒召仕輩經十箇年之後相傳號經
沙汰之條不可然之間自今以後不可及沙汰也

〔信玄家法上〕一奴婢難人之事者無其沙汰過十々年者任式目不可改之

一奴婢之逐電以後自然於路頭見合次第欲糺當主人本主私宅江召連事非法之至歟先當主人方

盲人訴訟
奴隸訴訟

坊田不動堂下地可被返付事、三位禪啓被處重科可被拂地下事等也、伊勢因幡守、以奉書被仰出之間、可成賜之由三方入道申云々、就其目安御書等賜之、廣橋常宗ニ可申之由三位申、嗽訴、驚入者也、
〔親長卿記〕文明四年正月十六日、自廣橋大納言許有使、早水鴨社供僧事就補任料相論六口之內一口未補仍明後日、十八修正可關意御祈禱息轉不可然仍可致無爲之沙汰之由可下知云々、得其意之由返答了、

〔續史愚抄光明〕曆應三年九月四日甲寅、有盲人相論事、於入道內大臣顯通第召決之、通冬續記

〔御成敗式目〕一奴婢雜人等事

右任右大將家賴朝御時之例、無其沙汰過十箇年者、不論理非不及改沙汰、次奴婢所生之男女事、如

法意者雖有子細、任同御時之例、男者付父、女者可付母也、

〔新編追加雜務〕一奴婢雜人年紀事、目明鏡之上、不可子細候、件男子相論事、於先夫同家之子息等

者、不謂年限、男者付父、女者被付母之條、勿論之次第候歟、恐々謹言、

延應〇延應一作正嘉元年三月廿四日

行定判

重佐判

實成判

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年〇寬元四月廿日丙寅、奴婢等事及評定、越堺下人事、地頭等有不知之子細

年來於令留之輩者、不論年紀、今更非沙汰之限、百姓下人者爲十箇年內者可返與云云、十二月廿

二日甲午、奴婢雜人男女子息之事、有其沙汰十歲內可被付父母、十歲以後、就年紀可有御成敗於京

郡族者、不及御口入云云、

〔新編追加雜務〕一越堺下人事、如去四月廿日御教書者、於地頭所從前々事者、不及改沙汰、自今以後、

可令糺返之、至百姓下人者爲十箇年內者可返與云々、而地頭所從與百姓下人令分別者、還有沙汰

等被糺明之時、云船貨、云船等、爲道妙遺物之條、不可有其隱者也、然早至豐後房等者、相觸在所之檢斷、被令處罪科於四艘之船并千餘貫之錢貨者、急速被糺渡于後室、欲訪道妙之後生、菩提矣、仍粗言上如件、

建武四年六月日

伊勢國住尼法宗重申

爲定願并豐後房^{不知實名}等、御使春真雖付渡御下知訴狀等、違背御成敗旨不及是非陳狀上者、於所抑留四艘船并千餘貫錢者、急速被糺渡于法宗、至其身等者、相觸在所檢斷、欲被令糺行、非分抑留科事、

副進

二通 政所殿御下知御使告狀案

右子細先度言上畢、所詮彼等非分抑留、無所于陳謝條勿論也、然早於四艘之船并千餘貫之錢等者、急速可沙汰于法宗之由、重被仰下之、至其身等者、相觸在所檢斷、爲申行罪科重言上如件、

建武四年七月日

伊勢國住尼法宗申、抑留亡夫道妙令出立船四艘、入于船用途千餘貫、稱可令配分、不分御度於法宗由事、政所殿下知訴狀如此、子細見于狀狀、任其旨可被糺返抑留錢貨若所存候者可被辨申候、あなかしこ、

六月九日

阿久志島豐後公御房等中

春真

〔看聞日記〕應永廿六年四月十五日、三位禪啓三方許へ罷出、晚禪啓先歸參申之、三方對面三木訴認事也、所詮載目安條々、訟申之趣、無垢庵并善理善康等宿所可被造返事、名田島年貢可糺返事、兩僧

佛意不憚人謗適乍顯禪徒之名字專是佛法之怨敵也往昔未曾有之重犯者也遂多之造五逆墮三途也未盜佛經兮好不僻沙汰密多之滅佛法破僧坊也未盜內財兮竊不致商賈於惠觀者壞除堂舍之合子而中盜佛經破取僧坊之四壁而外沽內財舉凡言語道斷之梟惡也前代未聞之狠啖者哉惠觀者雖爲故平等長老之門弟存生之間終無被免勘當之也分兮入滅之後未聞會彼追善之由者也邪見放逸不當法師也仍以委細欲記其行儀者薄紙猶狹兮短筆巨覃乎彼上宮太子憲法云懲惡勸善古之良典是以無_因人善見惡必匡云々又云宜明賞罰云々本地大慈大悲救世觀音之垂跡往古之聖代明時炳誠之記文如此文今所訴申更無私曲速至惠觀者可被斷罪者也抑來廿八日可參對由事朝真謝所勞難治之折節也不存自由之儀但惠觀犯科露顯之上者雖不及被召合不可有御不審歟阿月房又難參對之由令言上云々於佛具者忒可被召出之幸爲當卿檢斷之御使如此事雖不申子細尤可被進散狀者哉若被成憚僧體可及罪科豫儀者新古不依有驗高德不論貴賤賢愚有過之徒被辜之例不可勝計者也然則早被召籠惠觀已下之盜人等_{下闕已}

〔光明寺舊記〕伊勢國住尼法宗申

欲早總官御在洛上者任先規傍例蒙御成敗爲駿河國江尻住人定願_{亡夫阿久志左衛門入道}妙舍弟并阿久志

島住豐後房_{不知實名}等抑留亡夫道妙令出立船四艘入于船用途口余貫稱可令配分不沙汰渡

于法宗_{後家名}條猛惡奸謀無比類上者於拘留錢貨并船等者急速被糺渡可口室至其身者相關在

所檢斷欲被令處罪科子細事

右於亡夫道妙者無一子法宗同雖無子令剃髮守志而口在室之間夫妻同財之故彼遺財之船錢貨以下法宗可令得分之條尤法意之所推也爰彼豐後房等縱雖爲道妙之舍弟開後室爭可致非分支配之藝行哉雅意之企猛惡之至也所詮件四艘船頭之中至麻生浦住人刑部太郎者雖令死去於泊浦小里住兵衛太郎_{後道妙}阿久志住九郎三郎_{豐後房}等同住松法師三郎等者令現存之上者召寄彼船頭

狀相折事以三果只可被定宛歟至難物配分事者如最前言上付十町給田定有其難事歟以其由被仰舍有何難哉訴人恣言上一々裁許強不可然只以道理被仰下之條不可有物議凡以前沙汰之分限不知之而始至被作下其法之條者暗以難計申不知食彼時之子細被定仰其員數事總以不可然事歟已皆政途法之故也又相折分可切給田代之由申請之條實齊定貽鬱訴歟但先以此旨被仰實齊可被聞食左右歟實齊難認申者自上猶儘可宛給之由難被仰下歟是公氏卿存生之間沙汰置之趣不可相違之故也若實齊和尙申者勿論歟

人々申旨雖多其詞所詮旨趣大略如此歟相折分可切給田代事被仰實齊可聞食歟之一々經高申狀被同裁否事分明不承之但帥中納言申狀五字不審無指證只疑殆許歟不被糺決者難被定于詐偽歟之由令申歟其外事慥不覺悟可被尋歟吉田中納言申狀五字不審勿論事歟不被糺決者向後世々狼藉人々奇謀不可絕歟被糺決之條可宜歟而其條難叶者難給歟之由令申歟此條者經高已下各存申此由歟其外事慥又不覺悟同可被尋歟但以三果被定宛之條者大旨一同申歟抑配分間事就被仰下之間可分給事分之由先可被仰下歟之由願尙爲景令計申之條者人々一同不可然之儀歟之由令申歟但帥卿存申之旨慥不承也

於當座令書事人々意趣猶有相貽事何況經數日之後隨案出注付之條定有脫漏事歟又慥不覺之由雖申事只隨覺悟猶可注進之由被仰之間隨案出懸注進之也

〔光明寺舊記〕^五妙樂寺別當代朝眞謹言上

欲早被召龍盜人惠觀師弟所從已下輩等云證人云賊物所犯露顯當寺佛具四前內三前者阿月房買得由對御使承伏勿論云々於佛具者先被返付于寺家至其外物等者嚴密被召問成願法師妻子等可有御尋子細事

右惠觀態雖盜取妙樂寺三寶物謗罪科之通々剩捧大犯身自由參對申狀歟奸謀之至極比與之次第也假雖爲無過之禪律僧侶直參之訴訟者當時殊公家武家之嚴制也總經論聖教之禁戒也不恐

ましをあるしをけり、代々の長老、このおもふきをあきらむべし、我すでに春秋ををくる事八十年にみたり、人間の無常いくばくか眼にさへざる、おりにふる、あはれことに身をかへりみるおもひふかし、みづから三寶を供養せん事いまいくほごあらん、ねがはくは生々に佛を見、法をき、僧を供する身とならん、三寶の威力によるがゆへに、あまねく衆生を利益せん

文永九年八月日

〔平戸記〕寛元二年四月十八日戊子今日關白殿

○藤原其

御參内、即還御云々、予

○平

經高參以前大藏卿

略○註

獨參、言談之間、已及申、刻其後帥吉田中納言新宰相等相談參入御禊了、各依召參御出居方、先

之被下文書各見了、是教譽僧都與實齊僧都相論周防國田布勢庄之間也、此事自先年有沙汰、評定

已及度々了、今又無別子細、只被下文書也、仍各強不懸披覽之淵源、此事議定已及度々了、然而

猶有所申之旨

有相折事、今又玉果之由申之、而本者爲三果之由、實齊僧都申之、教譽以三字直五字、仍

重有議定也、記錄所寄人少々被召爲景賴尙兩人參入、勸者宣業雖被召、申障不參云々、各以議定、五

字事旁有疑殆之由、人々申之、但帥卿不被糺決者、暗以難定謀事之由申之、吉田中納言尤可被糺決、

如此事無沙汰者、向後人々狼藉、不可斷歟之由申之、大旨此外人々申狀如此、被糺問事、僧綱已上者、

又不可叶之間、難被決定歟之由、又令申、彼是不落居又被召尋寄人等申狀、五字之疑事勿論就之、只

可給三果歟、五字之疑、至罪科之條歟、可在勅定雜物配分事、當所更難左右之由申切了、廿五日乙

未、午斜參殿下

○二條殿

良久候御前、一日之召田布施議定事等粗注進了

○中

略

田布施問事注進狀

田布施事

件事度々議定之時、所存之趣言上先、詔其外愚慮不及、但五字事所進之狀不審誠貽、非無疑殆、記錄所申狀頗有其謂、尤可被糺決歟、而如今日之議者、其條又難叶事歟云々、然于今、如記錄所寄人等申

注進可早被經次第上奏被破却吉田之今神明於兼俱卿者一段預御札明彌專天下泰平國家安
全御祈禱間事

右大神宮御神體飛御坐吉田之由就兼俱卿注進則迎禁裏有觀覽剩其儀爲勿論之由被成下給旨
勅書等云々爲事實者言語道斷次第也抑天照大神自高天原於下界可有御鎮坐地視給下賜五十
鈴之靈寶則相留當宮今之五十鈴河上如是神代自天上定御坐當宮清淨之靈地也何爲飛御坐下
七社吉田矣神不享非禮者也併彼兼俱卿爲虛言謾奉輕神慮寂慮之條以外子細也然預許容之條
神慮難測者也所詮不日被召返彼給旨勅書等者止神宮愁訴彌可奉抽御祈禱之忠節者也仍注進
言上如件以解

延徳元年十二月日

大内人正六位上荒木田神主定治上

禰宜從四位下荒木田神主守朝

禰宜正五位下荒木田神主守則○下

〔大通寺文書〕本願禪尼自筆記録

記録 遍照心院

條々事○中

一 寺家に訴訟あらん時用意すべき事

世のくだるにまたがひて人の心も正直ならず事にふれてそのわづらひ有べしもし我寺に
うれへあらん時は事のよしを注て將軍家に申べし初度のそ狀にその理非をつくすべしか
さねて訴陳すべからず問注におよぶ事なかれそのゆへこれをあるべし又僧侶は道業に心
をかけて世事をいさふものなりたさい難掌なりといふともこのよしを存知すべし寺門の
安穩ならん事これを思とせりこのゆへにかねてゆくすゑのわづらひをかゝみてそのあら

之間、日中奏聞不可叶職事于今無改補之儀、今日神事、先可遂行歟、之由仰了、及夜陰有召參御前冠御未被召、只今自御、鴨社社務職事、日野前內府光○勝申云、祐尙無誤之處、可被取御關子之由、及御沙汰鴻殿令上給云々、鴨社社務職事、日野前內府光○勝申云、祐尙無誤之處、可被取御關子之由、及御沙汰事、按察張行之故也、愚老前內府執申事、違予所存、如此申行歟、執奏後悔之由申之云々、此申狀言語道斷也、昨日可有清濁能々可被經御沙汰之由、執申間已此間及兩三問猶不一決之間、被尋一社之處、申狀左右也、仍依難被決、可被取御關子之由、被仰定了、此事勸修寺大納言、廣橋大納言、予等兩三人意見之處、何予一人張行之由申之哉、所詮每事御沙汰之事、如仰違背之所存之間、善惡無答事也、不可及是非之由、有仰祐尙申狀奏聞有觀覽被留御前、其後無是非勸答、七月二日、今度兩三卿就意見、可被取御關子之分、叙慮治定之處、按察一身張行事、若有趣旨歟、可召進、祐尙無誤之由、誰人申哉、儲可申之由、被仰前內府云々、入夜所談、每事御政務事、無益之間、可有御隱遁之由、俄被思食云々、女中種々有被申旨、今夜先被略云々、十三日、參內源中納言○雅民部卿○源忠富示云、鴨社社務、疎骨申狀可有勸免之由、頻前內府懸望之間、有勸免之由、可語予之由、有勸定云々、誠可然之由申入了、其次社家事、被打捨之條、不可然之由申入了、十六日、鴨社氏人宿老三人來、當社社務未定不可然、早々可被定仰云々、及晚參內、依召也、鴨社社務、被打捨之條不可然、所詮宜之樣可計申、又被定社務職者可被定、年記之法歟、其謂者、每度依職之望、及訴論不可然、於此段各加談合、可定申云々、廣橋大納言祗候申云、誠被定年限三ヶ年計者可然之由申之、廿二日、鴨社社務、今日奏聞新式書改革、

鴨社條々

一社務職任中爲自由神事日供、及他日他月者、即時可然、社司氏人以連署可注進○中略
一訴論御糺明之砌、可停止內奏、若訴狀有不達、叙聞之間者可申事、

文明六年七月廿二日

〔神敵吉田兼俱謀計記〕皇大神宮神主

以連署可申之由被仰出了、各々所存無謂之由仰之間少々加連署、但不一具云々、裁罰文之處、兩方之是非兩端也、尤不審了奏聞、一社申狀讀進、仰云已裁罰文、申之處、一事見兩樣、以何事可被決實否哉、爰前內府○日野申云、祐尙事、今度就社務相論及御沙汰云々、可有清濁事也能々可被經御沙汰、可畏入之由申之、已及三問三答有申狀、猶就御不審被尋一社之處、有兩樣如此種々被盡事理之處、可然之樣可被經御沙汰之由申之、御不審事也有御心得之由被仰御返事、次仰云、此事可爲如何哉、勸修寺大納言○藤原教秀廣橋大納言、予等可申所存云々、申云、就今度相論事、被尋仰一社之處、兩樣申狀也、猶以難決、殊載罰文之上者、各雖不可有虛言、社司氏人等、兩樣之申狀、不審事也、所詮凡慮難計、事於神前以御圖子可被決歟、殊舊院之御時、就御不審事、被取御圖子了、可爲如何哉云々、兩三卿所存同前、即奏聞、仰云、歎慮ニハ兩人祐尙科條兩端也、只權官之者、可被新補云々、如何、猶可取圖子歟、重可尋之、又仰兩人殿上祇候之也、重申云、此歎慮無餘儀事也、雖然當時各有引汲之方、今日以歎慮被定仰、尤有引汲之儀歟之由、可有疑申之輩、只無私御圖子、可然歟之由申之、重奏聞仰云、然者可被取御圖子、社務祐躬權禰宜等、可召尋寄云々、觸仰之處、祐尙所勞、祐言他行云々、重仰祐尙被仰下子細可參之由申、不可仰子細由有仰、只助所勞、雖爲明日可參之由、可仰、重仰了、祐躬祐言等參仕於祐躬、領狀祐言御圖子事難義之由申之、入夜了、卅日朝間度々雖召社務稱所勞之由、及晚頭、祐尙縣主來云、凡今度之儀存無誤之由、然者可被取圖子之條不便、枉而可被除御圖子之人數云々、予尋云、凡今度兩人訴論事、已及數々條、此內有祐躬誤、有祐尙誤、更以凡慮難計、一社又以罰文雖令言上兩端、也就此儀可被取圖子之處、難儀之由申之、然者辭退職歟返答云、更非職辭退之儀、某有誤者、可有御改替、無誤者、可被取圖子之條、難儀之由申計也、予又云、背歎慮不可取圖子之由、令申之上者辭退歟之由存之、極仰之辭退仕ニテ候ハ可辭云々、予云、更以不及覺悟事也、可爲所存之由仰之、存外之返答也、即參內、欲令奏聞之處、出御御湯殿云々、祐尙又申云、早々可被下一途之勅答、予云、出御御湯殿

祐樹申云自去七月廿日至卅日、日供闕意、祐康過意云々、祐康申、今度神人不隨社司氏人之命之間、任先例退神人等、以社家之難色、可備日供之由、可訴申、然者、定神人可及噉訴、其時若神人等及違亂、可闕意日供神人奉行云々、其時者、不可有社務一身過意之由、各以連署定置了、依可有其過哉、今度又氏人等并秀顯者、於祐樹令被補社務者止、社事可及違亂云々、

仰云、日供十々日闕意事、神人與自兼日有相論、如此強非社務咎、但神用及數日無沙汰之故、神人已及違亂了、依神用未到不叶者、可辭職之由、乍捧請文、無其修之條過意也、今度支狀事、被仰出之處、內伺申入之處、於社務職者、不可有御改替之由、號被仰出候、由難澀虛言第一也、可被改職也、

〔親長卿記〕文明六年後五月廿七日、入夜祐尙縣主三問支狀到來、廿八日、祐躬縣主三問支狀又可一覽之由申之、於三問支狀者、不及拜見事也、無謂之由仰之、雖然頻所望之間遣之、又出書狀、有申子細、可尋祐尙也、六月六日、參內鴨社前社務祐躬縣主與祐尙縣主相論當職事三問、奏聞於御前、

兩方申狀讀進、仰云、新大納言廣橋大納言藤原等相尋所存御沙汰之次第、可意見申云々、于同可申云々、十六日、參內參御前、仰云、鴨社祐躬祐尙等相論事、可被尋社家、但已前如被仰、有條目者可

然也、雖然各被遣文書者、可然之由申意見新大納言、廣橋大納言、子等也、上者可被下文書、但各有引汲之輩云々、然者難申分明如何之由、有仰予申云、誠條目雖可然已及數々條、更以難書盡、可被下文書之條、可然也、

次或引汲祐躬、或引汲祐尙之事在之、雖然被仰總社前官當官氏人等被仰者、更不可有私之由申之、仰云、氏人事、可被尋仰事如何、予申云、先規勿論候、被召宮中、舊院御代有御尋之由申之、仰云、被尋仰氏人之事、無歟之由、被思食畢、然者早社司氏人等以連署、可申之由、可仰予申云、召寄祝權禰宜氏人宿老一老輩、可仰之由申了、十八日、午刻許、祝代實名可尋、祝權禰宜祐言、氏人兩人來、祐躬祐尙相論文書下之、以詞子細條々仰之、遣奉書不可申虛言、若申虛言者、可有御罪科之由、載奉書了、尋一社可申所存云々、廿九日、鴨一社申狀到來、祐躬祐尙相論事也、先日尋仰一社了、各捧申狀廿四、今日

可令早偏○偏字誤止字佐美平次實正地頭職勤仕神宮課役事

右件御厨者謀反人家資知行之所也、仍任前蹤爲令致沙汰、以被實正補任地頭職畢、然而依有神宮訴、所令停止實正之沙汰也、但今雖令改易其職、自神宮令還補本人者、甚以可爲不便之沙汰也、早爲神宮之沙汰、可致有限御上分已下難事之沙汰歟、如件以下、

文治二年六月廿九日

〔百練抄十四條〕文曆二年○嘉祿元年六月三日甲子、武士多發向八幡方、是南都領大住庄與石清水領薪庄

水相論、道實檢使可被裁許之由、被仰下之處、南都惡徒等可燒拂八幡領之由、風聞之間爲防禦、遣勇士也、官軍以前乘徒燒拂八幡領薪園畢、

〔百練抄十六條〕建長二年八月十日癸卯、春日神人三百餘人蜂起、發向吉田中納言爲經、依和泉國

三升米訴訟事也、

〔看聞日記〕應永廿五年八月十五日放生會○石清水神人訴訟之間、無神幸、卅餘ヶ條訴訟、大略雖有裁許、

猶大訴相殘之間、奉留御幸無力延引、可爲來月云々、去々年、如此延引、又如此、神慮如何併社務、無沙汰云々、

〔親長卿記〕文明三年後八月十三日及晚、參內衣冠賀茂社社務職相論勝久縣主、事奏聞、去月八日、公

武御祈禱事、一社一同、可申懇祈之由、被仰出之處、社務貞久依重服不參、不進代云々、陳狀了具訴尋

一社之處、不參云々、土解久者、魚御料備進不如法云々、是又如勝久申狀云々、仰云、例吉凶事者可依

時事也、兩條過怠不可然也、但不致當所務不便之由、內々付女中、歎申、不可依女中祇候、可依道理也、

依一ヶ度過怠、被改社務之先例在之歟、予云、雖一ヶ度過、於有過者被改之條、勿論也、雖有數ヶ過條、被

打捨事在之、可在寂慮之由申入了、此上者可有改替云々、御改易之趣、可仰管領依申也、十七日及晚

參內衣冠祐康縣主與祐樹縣主相論事、奏聞申狀在別、

勇士也、主を扶て一身腹切之條忠功之至、不堪感嘆者歟、既落居之上は、諸軍勢引退管領不能進發、

無爲ニ落居、天下總別大慶也。

〔親長卿記〕文明七年九月廿一日、貞久縣主來、知行越中新保庄并河原八丁半分事、祖父益久父讓後、

家益久後家一期之後、可讓河原內藤今參由有讓狀、雖然益久不存知之間、先年與後家令相論之時、

有中作人於河原八町者遣之、於新保庄者不渡之處、任彼讓狀之旨、今參局可知行之由、今春被申之

間不可叶之由令申了、然今達報聞被勅裁、被仰出廣橋難儀之間可申入云々、給文書可奏聞、奏聞返

答了、

〔吾妻鏡 三十八〕寛元五年○寶治元年十一月廿七日丙子、主從敵對事、不論理非、自今以後、不可沙汰之由

被定云云、

〔新編追加雜務〕一主從對論事寶治二七廿九評定

右去年冬此有御沙汰歟、於自今以後者、不論是非、不可有御沙汰歟、

〔侍所沙汰篇追加〕一諸社神人等訴申之喧嘩事應安五十一十八、松田八郎左衛門尉貞秀奉行、

或帶本所之理、或依不慮之儀、神人等被殺害刃傷者、尤可有裁許之、而近年就所務負物以下、動成奸

謀之金、令軍圖殺之時、致訴訟云々、政道之違亂、諸人煩費也、不可不誠於如然事者、一向非許容限之

上、解却神職、須處其身於罪科、將又社務於非據吹嘘者、經奏聞改所職、可被補器用之仁矣、

〔建武以來追加〕一就諸社祭禮以下、神事訴訟事附法會等准之

於向後者、廿日以前令言上者、可致披露、若此日限之內、反訴訟者、雖爲理運、不可有其沙汰矣、

〔吾妻鏡〕文治二年六月廿九日乙亥、伊勢國林崎御厨事、爲平家與黨人家資跡雖加沒官領注文、就

大神宮訴申之、不可有地頭之旨、被下院宣之間、今日有沙汰、所被停止字、佐美平次實正知行也、略○中

下 伊勢國林崎御厨住人

神官訴訟

主從訴訟

一祖父母父母、就所領有謀書、由其子孫訴申時、依告言科不及成敗、可有罪科否事、去五月十四日、重被定置御式目狀云、敵對子父母致相論之輩、告言之罪不輕之處、近日間有此事、敕令違犯、罪科是重、自今以後、可停止之、若猶及敵對者、隨任本條、可被行重科也、可爲此候候歟、

〔吾妻鏡 二十六〕

承久四年○貞應元年

四月廿七日、以鳥居禪尼所領紀伊國佐野庄地頭職、尼一期之後、子

息長詮法橋可相傳之由、被仰云云、彼禪尼者、六條廷尉禪門○源氏親妹、故右大將家○源朝親、姨母也、仍令避數箇所地頭職給訖、而子息法橋行忠長詮兄、背母命、押領當庄、剩去年兵亂之時候、仙洞致合戰、零落之

後、猶立還當庄之由、長詮就訴申如此、長詮者、抽關東御祈禱之忠云云、

〔吾妻鏡 三十九〕

寶治二年五月十六日癸亥、兄弟相論之時、以父母立申證人事、天野和泉前司子息兄弟等相論之時、以母堂離立申證人、自今以後、不可被許容之由、今日及評定云云、

〔看聞日記〕嘉吉三年正月廿六日、抑富樫兄弟加賀分國相論管領舍兄最員、今日國へ代官被下、管領

取立扶持云々、舍弟ハ公方奉公無子、細於國可有弓箭歟、諸大名兩方最員有物言云々、二月廿七

日、富樫事明日必定云々、世之物、愈仰天無極、番衆共召集、伏見地下人濟々參行、藏菴即成院、具侍者

男共皆祇候、聊有盃酌、暮四辻前中納言參對面物言種々閑談、自大方殿富樫に有御問答子細云々、

所詮山川一人切腹者、可屬無爲歟、今夜は先無爲也、廿八日、篤忠朝臣參、物愈可祇候之由申、抑山

川八郎加賀守腹切之由、風聞、仍騷動、室町殿へ諸軍勢馳參、但管領は致用意不出頭禁裏へも公家

人々馳參門番衆等帶具足候、是にも番衆共皆祇候、上下騷動無云、計聞山河檢見を給て可腹切也、

所詮富樫被助置懸命之地被割分者、家も不可放火、一身可腹切之由訴認申云々、仍奉行三人波多野、二

階堂飯尾殿前入道、被遺被成御教書云々、至夜山川八郎八郎が父、三入庭上にて五人切腹云々、八郎腹切之後、辭

世之歌、以血書扇後聞親を召寄て書云々

あづさ弓五十をこゆる年、浪のまことの道に入にけるかな、後聞八郎が父、後聞八郎以下頭書八郎は大力

云、

〔吾妻鏡^{四十一}〕建長三年六月十日己亥、百姓與地頭相論之事、別差奉行入定、委細尋可被聞食之由

云云、

〔東寺百合古文書^{山城}一之二十四〕百姓等申狀

東寺御領若狹國太良庄、百姓等謹言上、

欲早被改當地頭御代官、^{○脇袋}以正直憲法御使、可有御年貢物御收納由被仰下子細事、

右於當庄御所務者、以往御下知分明之上者、爭百姓等違先例可構申虛言之哉、然而當地頭御代官

者、爲當庄末武名主職之往古御公事通、乍有御存知之、違先規被帳^{○帳恐}行非法之間、百姓等佗際

之條、不便次第也、且當御領御一圓之上者、成百姓等悅喜思、開喜悅之眉處、曾以御寬宥儀無之、凡於

御公事等者、超過往古御例并前代之時、被責仕百姓等條、無術次第也、凡當時望西秋之期、依不絕愁

吟之、勅子細恐々言上、^{○中}

以前條々大概如斯、就中當地頭御代官脇袋殿當庄御所務先例并寬元寶治、永仁御下知狀等及御

和與狀、皆以乍有御存知之、令違往古之御例、將又背前代關東御領之例、悉以被帳行非法橫法之上

者、早被改當地頭御代官之、以御憲法之御使、御年貢物可有御收納之旨爲被仰下之、百姓等一味神

水仕、恐々言上如件、

建武元年八月

〔新編追加^{雜務}〕一敵對于祖父母并父母致相論輩事、^{延應二五十四評}

右告言之罪不輕之處、近日間有此事、致令違犯之罪是重、自今以後、可令停止也、若猶及敵對者、備任

本條可被處重科、

信濃國落合後家尼與子息相論之間被定之畢、

下 丹波國栗村庄

可停止武士狼藉如元爲崇德院御領備進年貢隨領家進止事

右件庄可爲崇德院御領之由被下院宣也而在京武士寄事於兵糧催暗以押領於今者早如元爲彼御領隨領家進止可令備進年貢所當之狀如件以下

文治二年三月二日

〔總見記十〕岡崎三郎殿元服事附禁中御修理同被行善政事

或時堂上ノ人ト上北面ノ侍ト訴論ノ事有ケルニ其理非奉行所ニテ決斷成ガタカリケル故信長公直ニ對決開シメサレ堂上ノ人道理ナリト定ラル北面ノ侍負トナル北面ノ侍安カラズ思テ信長公ノ御一族織田右馬助殿ヲ頼テ色々ニ申カケ密々又御訴訟申ス信長公大ニ御立腹有テ政道明白ニ決ス何ゾ私計ヲ以テ沙汰ヲ可行哉トテ其事執シ申サレケル右馬助殿ヲ却テ御勸氣アラレケレバ其比皆人感心シケリ

縣國司

〔吾妻鏡十九〕承元四年七月廿日丙午上總國在廳等有參訴事是秀康西面北去月十七日任當國守同

下句之比其從者入部國務之間於事背先規致非義在廳等愁歎之刻忽起喧嘩刃傷數輩土民等云云如相州廣元朝臣善信有沙汰是非關東御計早可奏達之由被仰下云云

訴地頭

〔吾妻鏡三十九〕寶治二年後十二月廿三日丙寅今日雜人訴訟事被定其法其事書様

一 雜人訴訟事

百姓等與地頭相論之事時有其謂者於妻子所從以下資財作毛等者可被糺明也田地齊令安堵其身事可爲地頭進止歟

〔吾妻鏡四〕建長二年六月十日甲辰有評定雜人訴訟事被定法儀所謂百姓與地頭相論之時無其誤者於妻子所從以下資財雜具者可被糺返也田地并住屋令安堵其身否事可爲地頭進退之由云

〔政所内評定記録〕一内談四月廿六〇寛正四年中略

披露〇中

一武田被官與一色左京兆被官若州小濱住人等買賣船相論事、

賣主有現在者不日被召上可有札決云々、

本奉行 清泉

合—— 治河

一六月廿六日 内談〇中

一武田被官與一色左京兆被官申船荷物事、

十三九大船事者主各別之上者於小濱立請人先被返渡相論技舟事者仰豐前守護可被召上賣主、

本奉行 清泉

合—— 治河

〔蟻川親俊記〕天文八年六月廿三日己未攝州富田庄新右衛門入道與平塚帶刀左衛門麴賣買相論事、雖及二間閉口候訖、既成就〇成就恐被誤書狀之上者任御法之分對新右衛門入道可被成下御下知候、恐々謹言、

卯月十四日

諏方若狹守殿 御宿所

〔信玄家法〕一定年期田畠限拾年、以敷錢可合請取、彼主依貧困、於于無資用者、尙加拾年可相待、過其期者、可任買人心、自餘年期之積者、可准右事、

〔吾妻鏡〕文治二年三月二日庚辰、今日故前宰相光能卿後室比丘尼阿光、去月進使者於關東、相傳家領丹波國栗村庄、爲武士被成妨、由訴申之、仍早可停止濫吹之趣、被仰云云、

ケ月

一米穀并雜穀等利平同前於約月者可爲七ヶ月如此所定置如件

長祿三年十一月十日

賣買訴訟

〔新編追加^{政所}〕一永年買地事附買券所取施所領事
文永四十二廿六評

於賜御下知及御下文所々者不論年紀遠近可停止本主濫妨不帶御下文等所々者廿ヶ年以後辨
本物直可請取歟

〔建武以來追加〕伺事條々 永正八十二六

一質券賣買地事 文永五七四

給御下文者不及子細雖不給御下文過廿ヶ年者不及沙汰

〔新編追加^{政所}〕一賣買地事 永仁五六一評

可糺返作毛并直錢之旨被裁許之處不敍用之由訴申輩有之云々於作毛者任先下知狀可糺返之
至直錢者准負物不及沙汰次一年作地事被裁許之分者可被施行次構置質券賣買地之米穀錢貨
以下事買主可爲進退

〔建武以來追加〕伺事條々 永正八十二六

一質券賣買地事 正安二

或成給御下文并下知狀或知行過廿ヶ年者不論公私領今更不可有相違

〔建武以來追加〕管領政所壁書

一以御恩地令沽却事 文安元九廿六

此段先條之制禁炳焉也雖然近代如此之類於被成下安堵御判地者今更不能改動沙汰自今以後
者年紀質券等之外被停止永地入流等若猶背規矩令沽却者云賣人云買人共以可有其咎焉

以彼在所之所當年々雖致其沙汰依不辨本錢及多年令佗際之條不便之至極也然早勘度々收納到一倍者可返付所領於本主也。

一諸土倉之事 文安二九廿九

依類火令燒失土倉或入止之或數年之間可被免除公役之由雖歎申族出來向後一切不可被許容德政已後土倉令減少之處猶以寄事於左右雖及訴訟不可有御免之令略本宅若以密々之儀可取高利并日錢等之質物造意欺甚不可然於土倉者雖爲一所至減少者云公役失墜云諸人愁歎旁以就公私非無其費所詮於自今以後者堅所被停止之也若背制禁全訴訟者可被處重科。

〔建武以來追加〕洛中洛外酒屋土倉條々

一質物利平事

絹布類繪衫物書籍屬樂器具足家具并雜具以下可爲五文子盆香合茶椀物花瓶香爐金具等并米穀類等可爲六文子。

長祿三年十一月二日

一洛中洛外諸土倉利平事近年任雅意致其沙汰云々太不可然所詮於高利者爲衆中定置嚴密可被相觸之若有異儀在所者隨注進可被處罪科之由被仰出候也仍執達如件。

長祿三年十一月二日

定置洛中洛外諸土倉質物利平事

一絹布類繪衫物書籍屬樂器具足家具并雜具以下五文子於約月者許置十二ヶ月、一盆香合茶椀物花瓶香爐以下金物武具等者可爲六文子於約月者廿ヶ月但至武具者可爲廿四

之種 飯尾肥前守
于時右衛門大夫

之清 飯尾加賀守

忠行 二階堂山城守
于時政所

奉行保内之狀、依仰執達如件、

建長七年八月十二日

相模守 判

陸奥守 判

伊勢前司殿

〔建武以來追加〕洛中洛外酒屋土倉條々

一 諸土倉沙汰事

所々土倉沙汰人等、犯用本主納物、令居住洛中邊土并田舎云々、自由之至也、於如此之族者、追放在所、可被處盜犯罪、

一 洛中洛外土倉質物事

於絹布類者、十二ヶ月、至武具者、廿四ヶ月之由、所被定置也、若過彼數月、不請出者、爲流物、可致計沙汰之旨、可相觸諸土倉之由、所被仰下也、仍執達如件、

永享三年十月十七日

大和守 飯尾貞連

備中守 伊勢貞國
于時政所

一 衆中

〔政所壁書〕一 諸土倉盜人事 永享十三

取置質物之上者、自今以後、爲倉預辨、於利分上來質者、以一倍、可致其沙汰、至利平巨多札者、假令諸具廿四箇月、武本錢外、以半分、可償之、若無私力、爲藏預者、召進其身、可被處嚴科之、萬一號逐電、令拘惜者、爲本所、可致其辨矣、

〔建武以來追加〕洛中洛外酒屋土倉條々

一本物返質券所領事 永享十二
十廿六

散位藤原朝臣判

沙彌判

〔政所賦銘引付〕清四左一九山掃部助貞泰文明六十

吉田六郎左衛門尉清秀連々借錢卅八貫文事以一倍可返辨之旨堅可預御成敗候云々

〔蜷川親俊日記〕天文七年七月廿二日癸巳

下津屋三郎左衛門信直被申長生軒借錢付而家相論之事對普廣院春首座既被成問狀奉書處不具出帶上意任御法以無音之篇可被成下御下知候由信直請文并御一行得其意候
然日限馳走不罷出儀も在之者爲不便者歟猶以被盡淵底可被成御下知
自

七月廿二日

親俊

諏方神左衛門殿御宿所

〔今川記かなひ〕一借錢の事一ばいになりて後二ヶ年之間は錢主相待べし及六ヶ年不返辨ば

當奉行并領主にことわり可及譴責也米錢共利分の事は契約次第たるべし

〔信玄家法上〕一親之負物其子可相濟事勿論也子之負物親方へ不可懸之但親借狀加筆者可有其

沙汰若又就于早世親至拘其遺跡者雖爲逆義子之負物可相濟事略中

一負物人有死去者正口入之者名判其方江可催促之事

一以連判就子致借錢者若彼人衆之内令逐電者經雖爲走人可辨濟之

質物訴訟

〔新編追加政所〕一鎌倉中舉錢近年號無盡錢不入置質物之外依不許借用甲乙人等以衣裳物具置

其質盜人亦令賣買贓物者所犯忽可令露顯之間竊以贓物入質物令借用之處被盜主見付質物之時錢主等稱世間之通例不知其仁并在所之由申之云々所存之旨甚以不當於自今以後者入置質物之口可令尋知負人交名在所若沙汰出來之時至不引手次者可被處盜人也以此旨面々可相觸

於本人私沈淪者爲請人可致其辨之段、勿論也。至預御罪科輩者、且以折中之儀可、及半分沙汰、但其身令安堵者、云借主、云請人、相共可致其償矣。

一諸人借物事 永享八五廿五

所用之時、令借用之間、借與者芳志隨一也、爰雖致催促、不能返辨之是非、而經年月之條、云不知恩、云無理旁、以背正儀者也、所詮自被定置 永享八五廿五、已後雖及催促三ケ度 日限百、於不能承引者、於政所可訴申之、若糺決之間、不致其沙汰者、本利相當返辨之外、爲過怠分、相副彼拾分、一可被責渡之、但錢主與借主相談之、以利平連々致其償者、非制之限、錢主又相待過怠之御成敗、寄事於左右、不殺用少分辨償者、雖被定置、不可依御法焉。

一負物年紀事 永享九十十三

就先度被定置、經數十ケ年、以古借書等、令催促借主子孫之條、無盡期歟之上者、廿ケ年未滿借書者、以前任被定置法 假令十ケ年者三倍、嚴密可致沙汰、於其以後者、非制之限矣。

一借物年紀事 永享二十廿六

借主等相待十ケ年、令無沙汰之間、爲其誠被年紀以後者、以三倍可返辨之旨、先度雖被仰出於利平者、不過廿一ケ年者可爲一倍、但被如此定置者、借主等亦寄稿於左右、可令難認歟、所詮至其類者、屬政所致訴訟、可究淵底 式目新編追加補、若猶有停滯之儀者、以庭中可言上焉、若不相待盡理、全直訴者可被處罪科 式目新編追加補。

〔新編追加政所〕一石原左衛門五郎高家與鎌倉住人慈心相論腹卷事

右訴陳之趣、枝葉雖多、所詮以件腹卷令入置無盡錢質物之處、慈心抑留之由、高家雖申之一倍已後、經訴訟之間、非沙汰之限矣者、依仰下知如件。

弘安二年十一月卅日

平

判

就訴人之申狀被懸負人在所之間有難認費之時不知子細之領主致非分之辨歟於自今以後者或領主或代官非加署狀者不及尋沙汰

一雜人利錢負物事 弘安七八十七

不經訴訟過十箇年者任式目不及沙汰

一諸人所領百姓等負物事 弘安八四十六

或領主或代官非加署狀者不可及尋沙汰之由去年雖被仰下之自今以後者可被止此儀也

一利錢出舉事 永仁三

右甲乙之輩要用之時不顧煩費依令負累富有之仁專其利潤窮困之族彌及佗保歟自今以後不及成敗縱雖帶下知狀不辨償之由雖有訴申事非沙汰之限矣次入質物於庫倉事不及禁制

〔建武以來追加〕洛中洛外酒屋土倉條々

一借錢事

以巨多要脚令借用之輩寄事於窮困最少分令辨償之可破借書之旨及強談云々結構之趣罪科惟重堅所被制禁也諸人同前將又稱有借書或寄進寺社或語人及譴責之輩近年繁多也於向後者致訴訟可仰御成敗若背此旨者可被處其科矣○將又以下四十七字據政所壁書補

一諸人借物事 永享二十一六

爲政所雜務之法依被定置年紀十箇年錢主等者經年序怖被弃置難認族者○經年序以下十一箇年過十

々年欲不返辨太以背仁政者哉於自今以後者雖及十箇年任本法以一倍可令辨償之於十箇年以後者以本錢三分假令十貫文者三貫三錢也可糺返之但於年來利平等沙汰來輩并以前弃破證跡

者不能左右焉

一諸人借物請人事 永享八五廿二

一父の跡職嫡子可相續事勿論也、雖然親不孝成事なきを親弟に相續すべき覺悟にて、非分の事共申かくる事、太曲事也、時宜により可加下知也、

一庶子割分之事、本知行五分一、十分一程の儀において、大方相當すべき歟、半分三ヶ一にいたりては、總領の奉公迷惑たるべき歟、自今以後、各可有分別也、

貸借訴訟

〔新編追加 政所〕

一借物事、可有其沙汰、但可加利分之由書載證文者不及沙汰、

一可禁斷私出舉利過一倍、并舉錢利過半倍事、

右同狀僞出舉之利、令格相存、而下民之輩、至于過期廻利爲本、過責爲先、未經幾歲、忽及數倍、殆煩王臣家、動妨諸庄園、如斯之漸、責在朝家、且仰京畿諸國等、且任弘仁建久格、雖過四百八十日、不得過一倍、於舉錢者、宜限一年、以半倍利縱雖積年紀、莫令加增、縱雖出於證文、莫令被用、若猶有違犯者、令負人觸訴、使廳札返文書、沒官其物者、以前條々事宜到來之節、下知先畢守狀跡、可令禁斷焉、宜下旨、其篇雖多、於件三箇條者、嚴制殊重、若有違犯之輩者、不日可注進交名之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

嘉祿二年正月廿六日

武藏守平 判

相模守平 判

〔新編追加 政所〕一舉錢利分事、不及私了見、任宣旨之狀、可令成敗給之狀、依仰執達如件、

寛元二年六月廿五日

武藏守 判

謹上 相模守殿

〔新編追加 政所〕一私出舉舉錢利分者、不可過一倍之條、前々令沙汰畢、縱雖積年紀、不可加增、雖出文書、不可被用、若猶有違犯之輩者、就訴訟仰奉行人、可被札返文書、縱雖出證文、勿令被用矣、

○目錄云、
越七、

一諸人所領百姓負物事 弘安七、五廿七、評、

〔攝津親秀讓狀〕讓與

一總領能直分

美濃國臨田郷、一色、三井、大幡、桑瀬、大嶋、土佐國田村庄、伊與國矢野保内八幡濱、備中國船尾郷、伊賀國若林御園但下切尼公、期之間譲之。一和泉國下條郷、上野國高山御厨領家職武藏國重富名南北、加賀國倉月庄、但岩方村半分、比丘尼明丘、一期之程、可被知行之由、裁別紙讓狀、松寺村田内廿町方、女子伊呂一期之後者、阿古丸可知行之由、裁別紙讓狀之間除之、同村十六町方内三分一、大隅五郎親泰讓與之間除之、近江國柏木御厨内木郷、

右所々者、爲能直總領所讓與也、若無子而有早世事者、舍弟松王丸可知行之、委細文別紙注之、於訴訟未落居并讓滿地者、悉可爲總領分狀如件、

曆應四年八月七日

掃部頭親秀 判

〔今川記五

かな目録追記〕

一奉公の者子孫の事、嫡子一人之事は、一跡相續之上、是非に不及、弟共に至

ては、知行をさき分扶持を加るの間、嫡子共に與力すべき勿論也、但割分之上に、給恩を請内の合力にくはへ、總領につき奉公すべき事は、いはれざる也、速給分あけ置、兄一所に奉公すべきなり、兄弟の間、契約の筋目ありて割分に随ひ、人數兄にくはへ、其身は各別之奉公も、隨意たるべき約諾あるにおいては、其儀にまかすべき歟、父祖讓與の所を、總領非分を以押領の上、公事に及裁許を遂、兄の非義爲、歷然者、弟各別之奉公是非に不及ざる也、總別嫡子之外、扶助すべきたよりなき者共、子共おほきま、何も取ならべ、幼少之間、何となく出仕させ置、給恩を望事、甚曲事也、嫡子一人之外は、堅可停止之、但弟たると云共、別て忠節奉公せしむるにおいては、各別として扶助すべき也、又父一代の勞功を以給恩に預りたるもの、子共に割分何様に奉公さすべきのよし内議を得、兄弟共に同然に相ことわり扶助するにおいては、無是非歟、中略

岡村庄證阿養子左衛門次郎ト辨公ト、御蘭ニ反半相論子細可下注之付之法令ヲ問訪程ニ一紙在之、其二云、

大判事明政勘狀云

親子夫婦遺財事

妻有財、其妻亡後、其財可與亡妻之子夫不可領事、戶令應分條末云、妻家所得不在分限、未知妻亡者其財何、答妻之子得耳、未知若夫得乎、答無子者夫得耳、不還妻之祖家也、

案之妻有財、其妻亡後、其財亡妻之子可領之、夫不可領之、若亡妻無所生之子、并養子者、夫可領之、祖父母父母讓可用後狀事、

圖訟律云、子孫違犯教令、徒二年、

又條云、告祖父母云々者絞、

說者云、死生同、

案之祖父母父母救命、死生不異、然則數度雖改易、以最後狀可受領、依無告言理許之道也、以之可依後狀之旨、先達所勘來也、凡子孫雖私蓄財物、可任祖父母之意、若得他人之讓、有財者隨狀行之、不令知行、父母雖有其科、得財之由緒、又不可失之故也、

父處分、母存日可進退事、

不可違犯父母命之由、本文載前、仍父處分、母存日進退之條、其子更不可違犯、又母處分、存日進退同前也、

〔建武以來追加〕一雅樂修理亮持忠所領文書、依爲効可讓與小笠原備前守持長否事、以叔父讓狀持長可相續之條、不可有子細、亦不可依不知行者哉、

永享二年十一月九日

加賀守基貞以下人名略之

〔玉勝間〕御子左二條家冷泉家の事

惺窩文集惺窩先生系譜略曰、先生系出于法性寺攝政道長公第六男長家卿、長家官至權大納言、號御子左、又號三條、長家生忠家、爲權大納言、號小野宮、忠家生俊忠、權中納言、號二條院俊忠、生親家、初爲舅葉室權中納言顯隆子、改名顯廣、後歸本宗、又改名俊成、爲皇太后宮大夫、家居五條世稱五條三位、別賜播州三木郡細川莊、江州坂田郡小野莊、是爲倭歌所奉邑、嫡子世々襲封俊成、生定家、號冷泉、後稱京極、爲民部卿、權中納言、父子相繼善倭歌、永爲世範、定家生爲家、權大納言、兼民部卿、住采地嵯峨中院、爲家有子三人、長曰爲氏、權大納言、號御子左、其後裔稱二條家、又號冷泉、次曰爲教、左兵衛督、號京極、季曰爲相、權中納言、號冷泉、三家鼎峙、各立門戶、正元年中、以書券付播州細河莊於爲氏、爾後爲氏有不孝數事、爲家悔之、文永十年癸酉七月二十四日、十一年甲戌六月二十四日、以文券兩通付爲相、建治元年乙亥五月一日、爲家薨、葬嵯峨中院、爲相尙幼、故爲氏強奪細河莊、爲相母北林禪尼、佛赴鎌倉、訴將軍惟康親王、爲氏亦告其事、獄久不決、爲氏爲世父子、與爲相論爭不已、又訴將軍守邦親王、執權相模守平熙時判曲直、以正和二年癸丑七月二十日、賜公牒一通於爲相、復其本邑、其牒今存于吾家、後住鎌倉號藤谷、薨、葬藤谷岡墳墓猶存、

〔新編追加雜務〕一所領配分事

二宮尼依罪科被召所領畢、而尼死去之後、子息三郎入道申被無過之由所返給也、爰二男左近入道可預配分、由申之處、不相辯訴、訟之旨、三郎入道雖支申之、預配分畢、

永仁二年四番引付

頭人越後入道、奉、行越前右近大夫、

一信濃國御家人赤栖三郎入道遺領事子息孫太郎與孫三郎兄弟論之時、被成未分訖、爰松鶴已下女子等可預御配分之由令申處、依不與訴訟被弃置、然而近年被破後悔法之間、預御配分者也、

〔細々要記四〕觀應二年四月小十八日ノ條中

やうにもおよばず、廿一かでの地さうのひほうをみなごゝめられて候けり、そののち野中の
まみづをすぐとて、

わすられぬもこの心のありがほに野中のまみづかけをだにみじ、ごよまれたるも、そのこし
べのまやうへ、くだられけるごきのうたにて候、新勅撰に入て侍し、

永仁六年三月一日書之

此あふつばうと申人は、定家の息、爲家の室なり、きんだち五人まし、候はりまの國ほそ川の
まやうを爲家よりゆづりおかれ候を爲氏、たふくたるによりて、あふりやう候そまやうのため
にかまくらへくだられ候時の道の日記にて候、爲氏も、ちんぢやうのために、かまくらへ下向、兩
人どもにかまくらにて死去せられし、そまやうは、爲氏のかたへはつけられず候しとかや、あふ
つは安嘉門院の四條と申す人なり、爲相のは、なり、

〔十六夜日記殘月抄〕例言

此日記か、れし時代は、弘安三年にして、關東に下られしは、建治三年十月なり、其證は、この日
記のうちに、年くれて春にもなりてとありて、夏のほどはあやしきまで音づれも絶て、おぼつ
かなさも一方ならず、都のかたは、志賀の浦浪たち、山三井寺のさわぎなどきこゆるも、いとお
ぼつかなしとあるをみれば、帝王編年記に、弘安元年五月十二日巳時、日吉神輿三基入洛、是依
圓城寺金堂供養也、十六日、日吉神輿各歸座とある時の事なるべければ、尼公の下られし年は、
建治三年なる事あきらけし、それより下の條に、爲守の君、ごとしは十六ぞかしとあるにより
て考るに、爲守は嘉暦三年十一月八日逝去終焉歌、ムトセアマリヨトセノ冬ノナガキヨニウ
キヨノ夢ヲミハテヌルカナ、と常樂記にみえて、その十六歳は弘安三年にあたれり、此日記の
長歌に、よとせのはるになりにつけりとあるをみれば、建治三年のくれより四年にあたれり、

自餘御厨口入米所從等不注之、

右件遺財事、依嫡男彦倫次男實彦、女子夫常春長章惟忠、師彦神主等之訴、任次第御下知、於公文所經對決、勸錄各出對文等言上之處、給御外題僭下使眞景等件、彦盛遺財事、如申狀者、云建保四年目錄、云同六年分法不足、證據歟者、雖無年號日月、任自筆處分文、彦倫等令知行、於未分物等者、任法令分行言上、兼至于後家度會氏子者、不可充得分之由、彦盛遺言之旨、良儀宗慶等出誓狀、歟仍不能得財、又長章養子之由、雖債申、無指證據歟、同不可得財也者、任其狀致沙汰之間、所載于彦盛神主自筆處分之除所々御厨御園御上分御酒料糴料米荒廢所等之外、口入米及宿館舍宅畠地所從等、無年號日月、付自筆處分之文、令分行彦倫實彦神主等之間、彦倫之分、廿玖斛五斗餘歟、而任法令、以其半分可爲次男分之處、次男之分、所相當於廿玖斛三斗餘歟、又以彼半分可爲女子分處、如夫米并上絹國絹准布染及自筆處分米等、定陸斛五斗餘歟、而除任職之外、女子一人之分、不及次男實彦之半分、歟、然而隨有令分行女子等畢、仍以自筆處分口入米舍宅等、所分行實彦神主也、若有注漏者、追令注進、可分行女子六人分之狀、如件以解、

承久三年二月廿八日

本宮使
權禰宜度會神主宗兼
總官使
檢非違使新家宿禰眞景

〔いざよひの日記〕のこるよもぎとかこちけるといふ所のうらがきに、くわうたいこぐうの大夫玄ゆんせいの卿の御むすめ、ちのゆづりとて、はりまのくにこしへのまやうといふところをつたへゑられけるを、地頭のさまたげおほくて、むかしむさしのせんじへ、ことなるそまようにはあらでまいらせられけるうた、えんちよくせんにも入て侍とやらん心のまゝのよもぎのみして、といふたをかこちて申されける歌、

君ひとり跡なきあさのみをゑらば、残るよもぎがかすをことわれ、とよまれければ、ひやうち

遺跡并讓與地
訴訟

主職者相尋地下之子細兼早速可申左右之由申返事了、仍長老被歸候、

〔御成敗式目〕一讓與所領於女子後、依有不和儀、其親悔返否事、

右男女之號雖異父母之恩惟同、爰法家之倫雖有申旨女子則憑不悔返之文、不可憚不孝之罪業、父母亦察及敵對之論、不可讓所領於女子歟、親子義絕之起也、既數令違犯之基也、女子若有向背之儀者、父母宜任進退之意、依之女子者爲全讓狀、竭忠孝之節、父母者爲施撫育、均慈愛之思者歟、一得讓狀後、其子先于父母令死去跡事、

右其子雖令見存、至令悔返者、有何妨哉、況子孫死去之後者、只可任父祖之意也、

一妻妾得夫讓、被離別後、領知彼所領否事、

右其妻依有重科於被弃捐者、縱雖有往日之契狀、難知行前夫之所領、若又彼妻有功無過、賞新弃舊者、所讓之所領不能悔還矣、

〔新編追加雜務〕一遺跡相論時、非子息、由稱申輩事、

雖被准惡口、自今以後者、不可有其咎歟、

〔新加制式〕一雖爲父祖之讓狀、依事可有用捨事、

右或及末期或受重病、无本性之時、讓狀者更不足信用、但雖爲末期并重病、在手繼之證文者、可有舉用乎、

〔光明寺舊記^五〕下使其景等件遺財事、任分行之旨、令知行之、

祭主 在御列

使其景等

分行言上、故外二福宜產盛神主遺財事、任次第御下、知令分行間、次男實產得分自筆處分之內、除

御上分御酒料餐料外、御厨御園口入米、并舍宅倉所從等事、

一畠地壹段半、箕曲鄉河邊村所在、
武斗代

開發之領地、而自領家御方被押領之間、任關東度々御教書旨、就御家人等訴申、自六波羅殿執御沙汰之間、故參河僧正御房御時被經重々御沙汰、任相傳文之道理、被付氏仁舉、而去年春、無故被改中原氏、宛給預所下人并乘蓮女子之條存外之次第也、如度々之關東御教書者可興立當國舊御家人領、罷給預所所從快深、并非御家人乘蓮女子之條不可然之次第也、且引入守護使之中、構出無實、以無咎御家人領、罷給非御家人等之條、旁以存外也、非御家人之上は云快深云乘蓮女子、當名爭可令知行哉、是一次守護代并重代御家人に引入守護使之旨申付無實之上は不日有私御沙汰欲被行其科、是次依蒙古國事可致用意之由被下關東御教書之間、有其沙汰處、以御家人名田罷給非御家人之條、無法之次第也、是三次舊御家人之跡可興立之由度々被下關東御教書之處、利被顛倒當名之條、違背關東御教書之故歟、是四次當名爲往古御家人領、非百姓名之處、被罷百姓公事之條、無謂次第也、是五次被付去年九月十九日御教書并御家人等申狀之處、于今不被申陳狀御返事之條、違背武家歟、是六任早任兩度言上之旨被返付于本主氏女、可令勤仕御家人役之由爲被仰下、言上如件、建治二年六月日、

〔師守記〕貞和三年三月七日庚戌、是日若狹國田井保公文職事、圓慶道尊與良成當時相論、兩方參入不及召決、以訴陳有沙汰、圓慶爲道尊子所申、非無其謂之由、面々一同了、

〔師守記〕貞和五年五月十七日丁未、今日攝津國豐島北條下司職事有沙汰、若鶴九與西均相論之、兩方代官被召合之、則不及對決、不審出來時、被相尋許也、若鶴九訴有其謂之由治定、

〔師守記〕貞治六年八月十七日辛酉、今日法皇寺長老來臨鴻臚館下司職并名主職等事、今朝善覺爲家君○師使節向大判事明宗宿所、彼返事善覺語之重爲使節向大判事許、所詮爲理訴歟之間、依相親口入申同候、任文書道理可有成敗之趣也、返事云於下司職者、以方々緣書令申之仁有之、又御口入異他之間、周障無極、然而此間下司暫不可改易之子細有之、今年所務之後、可相計之由存云々、名

云云 仍又不足于所申之證文歟然者彼訴訟之證所申之證雖在兩條康和安貞宣旨其趣如此言上之儀共以相違歟抑件庄之論事情案兩方之訴狀粹頗參差先行人訴申者下司職也如祐繼申者行人全無帶下職之例云々就之行人可勤申帶下司之先例歟而只進寬治定文爲其證爰祐繼申云此定文者皆定置預所職也是謂上司職云々行人所進之寬治定文者誠皆預所職事也仍又難備此證據如祐繼申狀者上司下司等兩職各別事也隨寬治定文之趣於今者多以相違不可必依其狀之由存申歟其趣細具可申狀仍略之日來論申下司事歟之由所思給也又評定之時各存申此旨歟然而件庄上下兩職已以各別云々以寬治定文之旨行人可訴申者是相當預所職歟全非下司職也然者所進之證文非下司事日來可訴申者下司職事也今被尋行人帶此職之例進此證文所申之趣有不審可依寬治定文者可申上司是預所也歟如何之由可被召仰行人歟其時定有申上之旨歟就其狀重可有御計乎但件上司職當時誰人之所帶哉猶付社務歟又各別之人歟可被尋祐繼歟當時不付社務爲他人之所帶者寬治定文之趣爲證文進覽之條彌可有疑殆歟就令辨申之儀日來所申之眞僞定無隱密歟此相論之肝心等所詮不可過之歟短慮之所及大旨如此得此御意可被令申入給歟經高頓首謹言上

十一月六日

民部卿經高請文

〔吾妻鏡 三十四〕仁治二年五月廿三日庚戌肥後國御家人大町次郎通信與多々良次郎通定相論當國大町庄地頭職事以御恩地不可賣買之由治定訖然而爲別御計所賜通信也是其心操無私曲歟之由前武州○北條時義日來內々御覽置之上於被召放當所者可失活計之由依令愁歎殊被申行之云云

〔東寺文書〕若狹國御家人等重言上爲東寺供僧申付無實改易同國太良保內末武名主職依罷給非御家人順良快深并乘蓮女子御家人役闕如聞就訴狀雖被下御赦書不及陳狀上は如元欲被申付中原氏子細事副進一通御赦書案件名者如先度言上當國言上重代御家人丹生出羽房雲嚴先祖

文明元年六月廿一日

左衛門尉貞賴

華人佐任式

式部丞秀數

大和守元運

美濃守貞有

但馬守清基

和泉守貞秀

河內守國道

肥前守之種

丹後守秀興

信濃守忠郷

下野守貞基

所賜既訖

〔平戶記〕仁治元年十一月六日乙未、今日獻土野庄相論之請文、其狀云、

鳴社禰宜祐繼與同社行人相論、但馬國土野庄下司職間事

右兩方申狀、理非之趣評議先了、而取口口口口仕問行人、以件陳狀被召問祐繼之處、陳答水火、如行人申狀者、康和安貞兩度、宜旨爲憑、錢備申證文之旨、非無其謂、證據之條、無異儀、歟之由、思給之處、官注進之康和宜旨狀、以祐繼陳申口祝伊房訴訟被問、禰宜惟季之日、口口口口謂其役之輕重、忌子者、以七歲之者、定補之月、障出來之後、停其職、可謂一旦之職、行人者、限壽命勤仕之由、惟季辨申子細之詞也、全非宜旨仰詞、歟、公家不被定補之職也、仍壽命之限、否狀、非可被定仰事、歟、件宜旨仰詞者、只違寬治五年定文、莫致重訴云々、就之案、彼寬治宜旨狀、依但馬國司訴寄事於神威、勳致國煩、如此輩對決、真偽隨其狀、迹、社司者、解却見任、官使者、可被處重科之由也、是則伊房背社務之沙汰、可自領之、企所被誠仰、歟、如此者、祐繼還本_{○還一可}得所申之理、爲行人已不足于此相論之證文、歟、行人今所申上者、康和宜旨云、於行人職者、永限壽命、令勤仕之由、存仰詞之旨、歟、是不然事也、惟季辨申、彼役輕重之詞、書載宜旨也、可謂勿論、歟、但可謂改否之例者、社務以申狀也、用捨可在時議、至行人存申之儀者、非勅定之間、相違所申之證據、歟、凡至改補事者、且祐繼度々有申旨、歟、件左右可在勅定、歟、又行人申云、安貞宜旨云、補行人職者、以一期爲限、輒無改易之例云々、如此申狀者、又宜旨仰詞、歟之由、思給之處、於官注進狀者、依氏子訴被問、祐高之宜旨也、以一期爲限、無改易例之由、氏子訴申之詞也、全非宜下儀、件宜旨仰詞云、左中辨平朝臣時兼傳宜、權中納言源朝臣具實宣奉、勅宜問諸卿者、歟、_{權中納言問祐高}

州之無扶持之旨陳之，緯已嗷々也，兩人共被追出彼所畢。

〔吾妻鏡四十〕建長三年四月廿日庚戌，國司領家年貢事，殊可致精誠辨濟。若春三月已後，就此事本所訴訟出來者，可被地頭於本所申分之由，被仰出云云。

〔光明寺舊記〕光明寺雜掌行真重申

當寺領內犯科人筑前五郎茂仲跡沒收地，久志本屋敷島等事

副進

二通 以前廳宣案

一通 前祭主家裁判御下知案被弁細白拍子鶴王
子亂訴之條分明也

件久志本屋敷島等者，當寺傳得之條，以前言上事舊畢，而前總官御時，號筑前八郎之女子白拍子鶴王子，稱帶元德二年成阿處分文，雖經亂訴，義理不調，疑殆露顯之間，被弃捐畢，仍全寺家領掌之條，見于副進之裁判御下知也。爰百姓等寄事於左右，令對捍所當物等之間，就訴申子細，被下兩度廳宣之處，字次郎對御使如問答者，筑前八郎之女子方者，給玉丸殿御教書，致其沙汰云々。御教書事，曾未承及之所詮付于彼次郎，被召出稱號御教書，可被經嚴密御沙汰者哉。抑號筑前八郎女子者，何仁哉。若爲鶴王子者，爲前々御弃捐身之上者沙汰外之次第也。但如百姓等申者，非鶴王子云々。然者，依何可致亂妨哉。疑殆多端，然早被下重廳宣，且付次郎并立幾太郎等，召出稱號之御教書，且被尋亂亂妨之女子名字，爲被經御沙汰，言上如件。

興國三年五月日

〔建武以來追加〕意見

一 近年申給神領御判地，依本主訴訟可被返付否事，就訴訟御札明之處，於理運之儀者，雖爲神領被返下凡人之段，先躍在之歟。然者，任證文之旨，宜有御成敗乎。

掠給御下文知行、自今以後雖有文證、批繆守式目之趣、過廿箇年者、不願理、非就知行之年紀、可有御成敗、

嘉禎四年九月九日評定

〔吾妻鏡 三十三〕曆仁二年○延應元年二月卅日庚午、御家人所帶事、知行歷年序之後、猶稱本領有訴申輩

之間、爲斷如此、濫訴、兼造式條之上、今更不及子細之由、有御沙汰云云、

〔吾妻鏡 二〕治承五年○養和元年九月七日庚辰、從五位下藤原俊綱字足利者、武藏守秀鄉朝臣後胤、鎮守

府將軍兼阿波守兼光六代孫、散位家綱男也、領軍數千町、爲郡內棟梁也、而去仁安年中、依或女姓之

凶害、得替下野國足利庄領主職、仍平家小松內府○平重盛賜此所於新田冠者義重之間、侵綱令上洛、愁

申之時被返畢、

〔吾妻鏡 三〕壽永三年○元暦元年二月三十日己丑、信濃國東條庄內狩田鄉領主職、避賜式部大夫繁雅訖、

此所被沒收之處、爲繁雅本領之由、愁申故云云、

〔吾妻鏡 六〕文治二年六月十七日癸亥、梶原刑部丞朝景、自京都進使者、執申內大臣家○藤原實定訴事、是

家領等爲武士被押妨事也、所謂越前國北條殿眼代越後介高成、妨國務、般若野庄藤內朝宗、瀬高庄

藤內遠景、大島庄土肥次郎實平、三上庄佐々木三郎秀能、各或三年、或一兩年、煩所務抑、乃貢云云、二

品○源賴朝殊令驚給、速可止妨之由、面々可被仰舍之由云云、

〔吾妻鏡 二十六〕貞應二年八月三日、今日評議、付所領致訴訟之輩、相語武士寄附事、又出舉利爲多々

利、其沙汰出來事、不能武士口入之由、被仰六波羅云云、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿二年十月九日辛卯、有評議、駿河前司以下皆參候、諸人訴論事被決斷、爰尾張國御

家人中、民部丞泰貞與駿河前司郎從太屋中太家重、泰貞親昵年來所領有相論、其事今日被經沙汰、

之處、泰貞竊廻謀評定所之後、竊評議之趣、駿河者家重得道理意見之由、申訴家重又參其砌、元自駿

本領訴訟

〔今川記かみな目録めき〕一田畠井山野を論ずる事あり、本跡糾明之上、剩新儀をかまふる輩於無道理者、

彼所領の中三分一を可被沒收、此義先年義定畢此條各任訴訟以追加定さる所也○中略

一新井溝近年相論する事、毎度に及べり、所詮他人之知行を通す上は、或替地、或は井料勿論也、然ば奉行人をたて、速に井溝の分限をはからふべし、奉行人にいたりては、以詞文私なき様に可沙汰也、但自往古井料の沙汰なき所においては、沙汰の限あらざる也、

〔御成敗式目〕一雖帶御下文不令知行經年序所領事

右當知行之後、過二十箇年者、任右大將家○源賴朝之例、不論理非、不能改替、而申知行之由、掠給御下文輩、雖帶彼狀、不及彼用矣、

〔式目抄〕一雖帶御下文不令知行經年序所領事

寶治元十二廿八、御教書諸國地頭所務事、押領之後、既過二十年者、不可依年紀、又神社佛寺領、并公家門跡之所領ノ事、年紀ノ法ナシ、ナン十年ノ不知行ヲモ訴訟申ス也、

〔吾妻鏡三十一〕文暦二年○嘉祿元年十二月十一日己亥、宇佐宮神領事、十一箇所爲沒收地、其内四箇所者

被返付之於七箇所者、依無其次未及被返付、今日有沙汰、縱雖過廿箇年、自然便宜出來之時者、不拘式條、可有御裁定之由云云、

〔御成敗式目追加〕一嘉禎三年八月十七日評定云、或構謀書被押領之由訴之、或掠給御下文知行之條、不可依此式目之旨、鬱申輩雖其數在、不論理非之詞、已相忖此儀歟、自今以後、雖有文書之說、謬過廿ヶ年者、守式目之趣、不顧理非、就知行之年、紀可有御成敗云々、

越後國吉田、鯉毛淵沙汰之時、被加之ハケ之追加目録

〔御成敗式目追加〕一廿箇年以後訴訟事

右如式目者、當知行之後、過廿年者、任右大將家之例、不論理非、不能改替、而或稱謀書押領由訴之、或

尼子殿

三澤對馬守殿

神西三河守殿

生尾神五郎殿

生尾族中

〔蔭涼軒日錄〕寬正三年卯月廿日、東福寺領賀州熊坂莊關所與伊勢備後入道訴訟之事、以寺家連判之狀并目安伺之、仍兩奉行布施下野守并備後方奉行飯尾美濃入道、以札決可致披露之、由被仰出、即於殿中命于兩奉行也、

〔蟪蛄親元日記〕寬正六年五月廿二日戊辰、岩堀申奉書遣之、

岩堀伊賀入道方知行分尾州給國領事、就守護違亂重而御成敗候於自然之時、宜令任御奉書之旨、無疎略可有合力彼代官之由候也、仍執——

五廿

親元

蟪蛄川出雲守——貞興

〔蔭涼軒日錄〕文正元年七月四日建仁寺領之事、自吉良西條殿、以訴狀命于飯尾四郎左衛門尉致披露、可仰御成敗之由被望申、即以彼目安渡于四郎左衛門尉也、

〔大内家壁書〕堺目相論之時餘地并餘得之事

諸人知行分堺目相論、自地内及御沙汰以上使被檢地之時、各所給之地、過分限有分土餘地并餘得事者、此餘地餘得之事、以中途之儀、可爲公用之由御定法也、諸人爲存知壁書如件、

延德三年九月十三日

尼子殿

御代官

三澤對馬守殿

就杵築與御崎境相論事、兩度被成奉書之處、無參洛之間、言語道斷次第也、所詮今月中、帶支證有參洛可被明申、万一令無沙汰者可被沙汰付、御崎向以不可有無沙沙由依仰執達如件、

康正二年九月六日

在國

周防守

左衛門 在列

沙彌 在列

沙彌 在列

杵築社 兩國造

按文

召使奉書三度目

雲州日御崎與杵築境相論事、御札明半處候、杵築御崎可有發向之由有其聞事實者、無謂次第也不可然之由、兩國造可被申含若其儀無承引有企不思儀者、不廻時日打越彼在所、堅可被相支若干万有合力人舛者、注交名不日可有注進、然者同前可被處罪科、向以不可有無沙沙由依仰執達如件、

康正二年十二月一日

御代印

豐後守 同

周防守 在列

沙彌 同

沙彌 花押

郎左衛門尉催諸勢寄來之旨相防之處百姓次郎九郎男令打死云々以外之次第也既至故戰之儀ハ御法炳焉之上者於被堤者可被行死罪次當寺承仕參河一類以下令同意寄懸之條有御法旨一段堅可被加下知之由可被仰下也仍執達如件

永享十三年○嘉吉元年六月廿六日

下野守判

美濃守判

東寺雜掌

〔日御崎社文書利〕就雲州杵築御崎堺事自御崎帶支證申之所詮今月中兩國造代令參洛可被明申由可被申付猶以不可有此沙汰由依仰執達如件

康正二年七月二日

左衛門尉花押

周防守花押

沙彌花押

沙彌花押

尼子殿

御代官

三澤對馬守殿

就御崎領事自兩國造種々緩急之子細有之由注進在之言語道斷次第也已前及御沙汰被立置制札處如此狼藉以外所行也所詮於以後者自杵築可令停止候去續由堅可有成敗猶以不可有此沙汰由依仰執達如件

康正二年七月二日

左衛門尉花押

周防守花押

然押領任和與狀同目六蒙御裁許全寺家知行爲令與行佛事勤行重言上如件

嘉曆元年十月日

〔太平記^{三十六}〕仁木京兆參南方事附大神宮御託宣事

近年此人^{仁木}伊勢國ヲ管領シテ在國シタリシニ前々更ニ公家武家手ヲ不指神三郡ニ打入

テ大神宮ノ御領ヲ押領ス依之祭主神官等京都ニ上テ公家ニ奏聞シ武家ニ觸訴フ開闢以來未
斯ル不思議ヤアルトテ嚴密ノ綸旨御教書ヲ被成シカドモ義長曾不承引剩我ヲ訴訟シツルガ
惡キトテ五十鈴川ヲセイテ魚ヲ捕リ神路山ニ入テ鷹ヲ仕フ惡行日來ニ重疊セリ

〔滿濟准后日記〕永享五年四月八日炭山土民等出京處於石田邊伏見土民出逢於五人打之了手負
兩三人在之云々此間與伏見山堺相論事在之伏見申狀無窮之間究明最中也然以此宿意伏見土
民等致噉々儀歟石田小栗栖者其出逢伏見者二人召取了召取二人自小栗栖治部上座方進之間
遣檢斷所了爰山下法師等三人自鳥羽罷歸處於伏見又召籠之云々此子細今日以經祐法眼內々
令申公方了

〔看聞日記〕永享六年四月八日抑定直馳申去六日於山前庄百姓等草薊之處自觀音寺押寄百姓三
人忽打殺其外有手負云々驚入恐可有御成敗之由申公方雖可被申請和院御參籠中也機嫌惡之
間先守護^{木佐々}定直罷向嚴密可下知之由仰去年當月炭山喧嘩出來當年又如此之儀驚入者也

十七日定直參山前與觀音寺山相論事源宰相物詣之間召寄目安事仰談十月廿三日源宰相
歸參三條被喚事山前與觀音寺境相論事也此間山前百姓等觀音寺山木切取云々仍守護公方へ
訴申間奉行飯尾ニ被仰堺令檢知可付理運之由被仰出云々此旨飯尾肥前申間定直地下へ飛脚
下畢

〔東寺百合古文書^{六十九}〕等持院雜掌申今度東寺與朱雀用水相論事於水口令打擲在所糞刺堤三

圓然無理間松木住坊沙汰時吹上畠宇余二橋田事雖申子細三問三答之間終不及陳狀閉口上
今又雖被下御下知不進陳狀上者欲預御成敗事

副進

以前御下知案

件田畠事子細前々言上事舊了而任御下知之旨御使雖致告知不及是非請文陳狀之上者爲蒙御
成敗重言上如件

嘉曆元年十月日

僧惠觀申

欲早任總官御下知旨被差副神宮使被沙汰付吹上畠地二段事

副進 總官御下知案

右惠觀可進退領掌之子細見總官御下知也然則被差副神宮使爲被沙汰付言上如件

嘉曆三年四月日

僧惠觀重申

欲早停止圓然押領蒙御裁許被全佛事勤行法常住院領內吹上畠地二段宇余二橋田地一段間
事

副進

一通 惠觀和與狀案圓然令和與
于惠觀狀也

一通 寺領目六案

右彼畠地二段田地一段間事自最前以降每度言上之處他所未盡之由及御沙汰歟圓然乍令和與
法常住院同寺領等忽違犯其旨令押領件田畠三段之條猛惡之至希代無口之次第也然早停止圓

〔光明寺舊記〕

〔內宮一兩宜總官ノ御返事〕

〔妙樂寺別當代朝眞與僧惠觀所論松木住坊敷地以下等事、相副使等散狀仰給旨謹承候了、圓然不叙用御下知候云々、其上者、神宮成敗、更不可事行候、又如惠觀申狀者、以神人可被追出云々、發神人、非神宮成敗候、只彼等依同心否事候也、無案内輩、依他事、望申此儀事、雖出來候、口及成敗候也、誠恐謹言、

嘉應元年

十月廿九日

內宮兩宜荒木田 在列奉

禮紙云、使散狀具書返上候也、口恐々謹言、

僧惠觀重申

於圓然者、難參對由通申、至阿月阿闍梨者、進請文、由承及上、可被令御沙汰、就訴陳文書等、欲蒙御成敗、松木住坊敷地、并田畠等事、

件久季、於圓然者、稱代官朝眞所勞之由通申參對云々、至阿月阿闍梨者、進請文云々、佛具之段、爲圓然之口入買得之旨申之歟、於令盜賣妙樂寺佛具者、就圓然之口入、豈可成買賣哉、併所仰高察也、此上者惠觀一身參對、無其詮歟、就訴陳證文等、爲蒙御成敗、重言上如件、

嘉應元年七月〇七月〇七日

松木住坊敷地等事、御下知案、儲給了、任其旨、來廿八日、帶文書等、可參對候、恐々謹言、

〔光明寺舊記〕敵方告狀并御下知案文

藏人所供御人、字松王九代久季申、以字吹上畠地二段、稱法常住院領、可壞取在宅由、誓盟申事、御下知申狀具書如此、子細見狀候歟、此事承御所存、可申沙汰候、恐々謹言、

五月十七日

定興 花押

惠觀御房

僧惠觀重申

有御成敗若於存未盡由之族者不可致其相論之旨被仰下云云、

〔吾妻鏡〕二十

建曆二年六月十五日己丑、常陸國吉田庄地下沙汰人等濫妨本所所務、且任去文治二年閏七月廿五日、故右大將家源賴朝御下知爲關東御沙汰、可被付彼下地於本所之旨訴申之間爲廣

元朝臣奉行有評議、謂文治御下文者、可有計成敗之間就被下院宣御沙汰訖、今度無其儀也、且非地

頭輩事、以本所沙汰人等濫吹事、無左右難單御裁許之由治定、仍今日載其趣被出御返事云云、

〔吾妻鏡〕二十八

寬喜四年貞永元年九月一日、畿內近國并西國境相論事、共以爲公領者尤可爲國司成

敗、於庄園者爲領家沙汰、經奏聞可爲聖斷之由被定、且以此趣被仰六波羅云云、

〔平戶記〕寬元三年二月廿三日戊子、今日進狹川庄相論事之請文、其狀云、

狹川庄相論事、延實賢仲訴陳狀雖多旨趣所詮具見于賢仲重申狀、其條々盡子細之中、案此相論

之肝心、延實申狀云、覺胤母自京都取下坊舍資財等、依建立花林院、勝長成悅、件庄永讓與覺胤了、

縱雖思返於後證文者、不可爲證文云々、就之賢仲又陳申云、彼讓狀有僞事之疑、其趣辨申之旨頗

有其謂欺、但件狀眞僞不審候、被召正文可被左右欺誠爲僞事者、凡非沙汰之限欺、兼又延實申狀

云、西北院并領田等事載之、不載件庄之子細云々、如賢仲陳狀者、此條件院家領者、即當庄事也、代

代手繼或載領田之由、或載當庄之號、依時有事樣之不同云々、且田地相承之法爲先、證文被比較

兩方文書之時、不可及一口同日論之由申之、尤可被召覽候欺、相論之決斷可在此等候欺、以此趣

可令披露給經高謹言、

二月廿三日

私申

文書任本數返上之抑見參之時如申候、自去十五日齋籠事候、拘惜事候間見漏事定候欺恐

存候、可令計披露給候也、

存候、可令計披露給候也、

存候、可令計披露給候也、

存候、可令計披露給候也、

存候、可令計披露給候也、

存候、可令計披露給候也、

存候、可令計披露給候也、

存候、可令計披露給候也、

存候、可令計披露給候也、

存候、可令計披露給候也、

存候、可令計披露給候也、

存候、可令計披露給候也、

存候、可令計披露給候也、

存候、可令計披露給候也、

存候、可令計披露給候也、

存候、可令計披露給候也、

存候、可令計披露給候也、

存候、可令計披露給候也、

存候、可令計披露給候也、

土地訴訟

り、京都の御かためたるべきよし望て、無數の圭幣をついやし、丹精を盡しなげき申ければ、諸奉行人も尤と感じ、頻に吹舉申けるが、寶徳元年正月御沙汰ありて、土岐左京大夫持益にあづかれし永壽王殿をゆるし、亡父持氏の跡をたまはり、公方御對面あり、

〔御成敗式目〕一改舊境致相論事

右或越往昔之境、構新儀案妨之、或掠近年之例、擇古文書論之、雖不預裁許、無指損之故、猛惡之輩、動企謀訴成敗之處、非無其煩、自今以後、遺實檢使、糺明本跡、爲非據之訴訟者、相計越境成論之分、限制分訴人領地之内、可被付論人之方也、

〔新編追加〕

雜務

一本所訴訟事、雖蒙裁許、未充給替於當給人之間、不及知行之由、多有其間、預裁許之輩任先下知之旨、可令糺返之、但當給人所領一箇所之外、不知行者、有御許替於當給人之後、本主可、知行之爲二箇所者、速可令糺返也、

〔吾妻鏡〕十

文治六年

○建久元年

四月四日丁亥、美濃國內地頭佐渡前司重隆、并堀江禪尼、妨公領爲令沙汰其事、召使則國入部之處、菊犬丸等公文凌礫之由、依有訴被尋下之間、二品○源朝殊令驚申給、

〔吾妻鏡〕十六

建久十年

○正治元年

十月廿四日癸未、參河國內御寄附大神宮之庄園有六箇所、而守護人藤九郎入道連西代官善耀被押妨之由、自神宮依訴申之、爲廣元朝臣奉行被尋問連西之處、於六箇

所者御奉免之後、更以不交其沙汰之由、善耀内々申之旨、昨日進請文之間、副其狀於御教書被遣本宮、奉免之後者、爭可成其妨哉之由被載之云云、

〔吾妻鏡〕十六

正治二年

五月廿八日壬午、陸奥國葛田郡新熊野社僧、論坊領域、兩方帶文書望總地頭

畠山次郎重忠成敗重忠辭云、當社雖在領内、秀衡管領之時、令致公家御祈禱、今又奉祈武門繁榮之上、重忠難自處者、則付大夫屬入道善信、舉申之、仍今日羽林召覽彼所進境繪圖、染御自筆、令曳墨於其繪圖中央給訖、所之廣狹可任其身運否、費使節之暇、不能令實檢地下、向後於境相論事者、如此可

錯亂セバ、一向御成敗ノ相違ニ可成歟之間、可爲何様哉云々、仍先可被仰付彌五郎由思食云々、此旨且可仰談畠山云々、略中駿河事、畠山計ニ被尋仰了、管領ハ彌五郎事内々取申、山名ハ千代秋事申間、不及御尋歟、廿七日、早旦出京、參室町殿義利駿河國ヨリ富士大宮司注進狀并葛山狀等一見了、國今度不慮物恐事申入了、隨而富士進退等事、可任上意旨、載罰狀申入也、二十八日、令河上總介一跡事、駿河可被仰付嫡子彦五郎由、大略御治定、其旨爲門跡可申遣、今河遠江入道方之由、今朝被仰之間、遣狀了、今河下野守方ヨリ下遣也、彦五郎使者同相副罷下云々、五月九日、早旦出京、參室町殿、自駿河國今度下向上使妙淳西堂注進以下一見申了、爲用意内々被下遣御判、依國時宜楚忽ニ不可渡遣、今河二男彌五郎之由被仰付處、今月三日、既渡遣之由注進之間、以外御腹立也、但國弓矢若火急子細在之歟、曾無其儀、自關東彌五郎舍弟千代秋九扶持之由雜說分計注進申也、十九日、早旦出京、以赤松播磨、自昨日出京事蒙仰了、中自駿河國注進狀等、今度上使妙淳西堂罷上、國人内者等申詞、大略載告文詞申入了、彌五郎今河方へ國御判、去三日渡之了、此事楚忽之儀云云、但西堂御判隨身上者、渡條又存内歟、奉行二人、飯尾肥前守同大和守、兩人自駿河書狀告文等於御前讀進之、昨日悉備上覽云々、今日重讀進、令聞予御用云々、六月廿二日、駿州下向上使星巖和尚、周浩西堂、今晚參洛之由、自路次音信之間、明旦於京都可入見參之由返答了、廿三日、早旦出京、星巖和尚、周浩西堂對謁、今河彌五郎御請并國人内者以下、各載告文詞、捧請文了、每事如上意落居、既爲彦五郎迎、内者十餘人參洛云々、則召寄飯尾肥前、同大和守松田對馬守、上使申詞具錄之、披覽了、先參室町殿、上使申詞大概申入了、今河彦五郎ニ駿河國守護職、並官途民部大輔等事、被仰付管領了、

〔鎌倉大草紙〕爰に、越後の守護人上杉相模守房定、關東の諸士と評議して、九ヶ年が間、毎年上洛して、捧訴狀を、基氏の雲孫永壽王九足利を以、關東の主君として、等持院殿足利の御遺命を守

事、只今ハ器非器難定樣思食也、是モ未來若器用モヤ、人力ニテコン可申付旨ヲバ申ラメト思食也、然者大事國相續仁體於不見定者又難申付歟、然者就母方有緣、關東隣國之間、此者ニ申付儀ト諸人上下可意得條ハ御案内也、然者今河事、此小者母ユヘ歟、關東一體難說之間、及種々沙汰了、且又山名執申入キ、如此處ニ、只今此小生ヲ執別相續ノ仁體ト定條、旁心中非無御不審也、次一色左京大夫子息五郎事、今河上總縁ニ可罷成之由、去年以來申間、不可有子細由被仰出キ、此時ノ申狀モ、以前關東所縁事ユヘ、及難說了、雖然委細以聞食披儀、于今畏存間、彌無二御心安者ト被思食、可致奉公條本意間、一色左京大夫所縁事申入云々、然者已關東有縁小者ニ、國事可申付條又關東ヘ口無二者ト可申哉、所詮旁今河向々不被口御意也、於千代秋丸事者、是非不可叶口口自餘兄弟内、シカト申付趣ヲ重可申入由、能々山名可申付云々、此仰旨召寄山口申付了、今日及夜陰間、明旦可參候云々、六月廿九日、駿河守護今河上總介嫡子彦五郎通世由内々申賜候也、十一月十五日、今河上總守猶子息千代秋丸事、於取立可爲相續仁體之由、以狀又申上由被仰出、以外無正體事、定病狂仕申入歟、由存候、先度堅被仰出候間、千代秋相續事、可略仕由申了、尙々無正體申狀之由存候、早々可申遣云々、五年三月十五日、今河總州駿河國嫡子彦五郎事、器用不便由、今河遠江入道申旨内々達上聞了、四月十四日、山名禪門來中駿河國錯亂事等條々申旨在之、簡要今河上總守二男彌五郎、父上總守當時病床、及鶴林哉之處、父ヲ人質ニ取、任雅意讓與狀ヲサセ、舍弟千代秋丸方者ヲバ、大略打之了、言語道斷次第也、仍狩野富士大宮司兩入方ヘ、今度國次第、具被尋聞食可有、御成敗條尤可然由申入也、中就駿河國事、山名申入旨申處、此事彌五郎申旨自管領申入也、其趣ト只今山名申入旨トハ相違也、彌五郎申入旨ハ、千代秋丸方者共、父ヲ押ノケ、可任雅意所行露顯之間、致其沙汰了、於今者、一迹事可申付彌五郎、早々御判可申沙汰旨、以狀令申管領細川也、次矢部阿佐伊奈者共十餘人、以告文連、畧彌五郎事執申入也、然ニ不被任父讓引、違御沙汰有テ、萬一國

食ノ烟ノ心細サ、只推量リ給ヘト、委ク是ヲ語テ、涙ニノミゾ咽ビケル、斗數ノ聖、熟々ト是ヲ聞テ、餘ニ哀ニ覺テ、笈ノ中ヨリ小硯取出シ、卓ノ上ニ立タリケル位牌ノ裏ニ、一首ノ歌ヲゾ被書ケル、

難波潟潮干ニ遠キ月影ノ又元ノ江ニスマザラメヤハ

禪門諸國斗數畢テ、鎌倉ニ歸給フト均ク、此位牌ヲ召出シ、押領セシ地頭ガ所帶ヲ沒收シテ、尼公ガ本領ノ上ニ副テゾ是ヲ給タリケル、

〔建内記〕永享十一年六月廿五日辛丑、傳聞武家諸奉行、人々愁訴、雖經數年不及披露、近日雖付之、或稱管領僉越次第披露之、不可然、不依尊卑親疎、任次第可伺申由有仰云々、

又聞諸家被尋有愁訴人云々、政道無好惡、被裁許者尤可叶天心、珍重々々、

〔隨意錄^六〕北條泰時、懸一鐘於廳事門而使民之欲有訴者不時撞之、斯乃倣古之登聞鼓與抑由其慮與、

家督相續訴訟

〔滿濟准后日記〕永享四年三月廿九日、今日聞被仰出山名事、駿河守護今河上總守^政相續仁體事、

末子千代秋九之由、内々被聞食及聞此者事、母關東上杉治部少輔姉妹云々、幸ニ嫡子以下兄弟數輩在之、聞此等堅固、幼少七八歲者ニ可申付條、併別心様ニ可罷成歟、不可然由、先度以山名狀上意趣具申下了、此御返事、昨日^日廿八、自山名方同今河方申山名使者山口、今河使者三浦安藝云々、來申旨同、今河罰狀等^{此門跡}持參申趣、嫡子事、如仰可申付處、此者事、以外無正體、始終奉公、且以不可叶條見限了、内者共又同前儀候、仍去年、所勞以外時節、内者共寄合、セメテハ幼少間、未來器用モヤト存間、千代秋ニト申了、已所勞本復、仕上者、相續仁體、先何トモ不被定下者、可畏入云々、且非緩怠別心儀、以罰狀申入候也云々、此旨披露之處、重仰旨、誠於嫡子事者、器用トモ又非器用トモ爲上ハ、難仰出事也、隨逐父非器用之由見限上ハ、勿論歟、末子千代秋九^{七歲}此器用又御不審也、七八歲小者

つりし、いまだ世にやおはすると消息たてまつらん、もてもうで、聞え給へなごいへば、なでうことなき修行者のなによりかはどはおもひながら、いひあはせて、その文をもちて、あづまへ行て、まか／＼ををしへしまゝ、にいひて見れば、入道殿の御消息なりけり、あなまあなまごて、ながくうれへなきやうにはからひつ、佛神のあらはれ給へるかどて、みなぬかをつきてよろこびけり、かやうの事すべて数えらすありしほごに、國々も心づかひをのみしけり、最明寺の入道とぞいひける。

〔太平記 三十五〕北野通夜物語事附青砥左衛門事

西明寺ノ時頼禪門密ニ貌ヲ窺シテ、六十餘州ヲ修行シ給ニ、或時攝津國難波ノ浦ニ行到ヌ、鹽汲海士ノ業共ヲ見給ニ、身ヲ安シテハ一日モ叶マジキ理ヲ彌感ジテ、既ニ日昏ケレバ、荒レタル家ノ垣間マバラニ軒傾テ、時雨モ月モサコソ漏ラメト見ヘタルニ立寄テ、宿ヲ借給ケルニ、内ヨリ年老タル尼公一人出テ、宿ヲ可奉借事ハ安ケレ共、藻鹽草ナラデハ敷物モナク、破菜ヨリ外ハ可進物モ侍ラチバ中々宿ヲ借奉テモ甲斐ナシト怗ケルヲ、サリトテハ日モハヤ暮ハテヌ、又可問里モ遠ケレバ、枉テ一夜ヲ明シ侍ント、兎角云怗テ留リヌ、旅寢ノ床ニ秋深テ、浦風寒ク成儘ニ、折燒草ノ通夜臥怗テコソ明シケレ朝ニ成ヌレバ主ノ尼公、手ヅカラ飯匙取、音シテ、椎ノ葉折敷タル上ニ、餉盛テ持出來タリ、甲斐々々敷ハ見ヘナガラ、懸ル態ナンドニ馴タル人共見ヘチバ、不審ク覺テ、ナドヤ御内ニ被召仕人ハ候ハヌヤラント問給ヘバ、尼公泣々サ候ヘバコソ、我ハ親ノ讓ヲ得テ、此所ノ一分ノ領主ニテ候シガ、夫ニモ後レ、子ニモ別テ、便ナキ身ト成ハテ候シ後、總領某ト申者關東奉公ノ權威ヲ以テ、重代相傳ノ所帯ヲ押取テ候ヘドモ、京鎌倉ニ參テ可訴訟申代官モ候ハチバ、此二十餘年、貧窮孤獨ノ身ト成テ、麻ノ衣ノ淺猿ク、垣面ノ柴ノシバ／＼モ、ナガラウベキ心地侍ラチバ、袖ノミ濡ル露ノ身ノ、消ヌ程トテ世ヲ渡ル、朝

月日にも及ず、右大將殿自筆の御書下されば、子細にやをよぶ、もどのごとく、かの尼領知しけると也、其後右大臣家の時件、の尼が女、この扇の下文を捧て沙汰に出て侍りけるに、年號月日なき由奉行いひけれ共、かの自筆そのかくれなきによりて安堵しにけり、

〔吾妻鏡十〕建久二年十一月廿三日戊辰、以遠江國河村庄本主三郎高政奉寄附北條殿、有愁訴之故也、

〔吾妻鏡十七〕正治三年元建仁五月六日乙卯、昨日佐々木中務入道經連、以子息高重捧一通狀、狀月

廿一日、今日遠州、以善信令披露彼狀給、是於身雖無所犯、依傍人之讒蒙御氣色之條、令愁訴云云、其旨趣初附無科之旨、後載數度勳功、

〔吾妻鏡二十〕建曆二年十月廿二日甲午、下遣奉行人等於關東御分國々々、於其國可成敗民庶愁訴之由、有其沙汰爲被止參行之煩也、

〔吾妻鏡二十一〕建曆三年元建保四月廿七日戊寅、宮内兵衛尉公氏爲將軍家御使、向和田左衛門尉宅、是義盛有用意事之由、依聞食被尋仰其實否之故也、而公氏入彼家之侍、令案内、小時義盛爲相逢御使自寢殿來侍、飛越造會無橋、其際烏帽子拔落于公氏之前、彼體似斬人首、公氏以爲此人若彰叛逆之志者、可伏誅戮之表示也、然後公氏違將命之趣、義盛申云、右大將家頼朝御時、勵隨分微功、然者抽賞頗軼涯分、而薨御之後、未歷二十年、頻懷陸沈之恨、條々愁訴、泣雖出微音、鶴望不達、囑退恥運訴也、更無謀叛之企云云、

〔増鏡九草枕〕時頼朝臣鎌北は、康元元年に、かしらおろしてのち、まのびて諸國を修行しありきけり、それも國々のありさま、人の愁など、くはしくあなぐりみきかんのほかりごとにてありける、あやしのやどりにたちよりては、その家ぬしがありさまをさひきくことわりあるうれへなどの、うづもれたるをき、ひらきては、我はあやしき身なれど、むかしよろしきまゆうをもちたてま

〔建武式目〕一可被聞召貧弱輩訴訟事

殊可被懸御意也御憐愍須有貧家之輩被聞食入彼等愁訴事爲御沙汰專一乎、

〔建武以來追加〕管領政所壁書

一押領不知行地後經訴訟事永享元十二

有愁訴者企訴訟可仰御成敗之處、狼先乍令押領致訴訟之條、造意至難、道罪科所詮雖寄事於親類

被官人等不可被叙用、

〔吾妻鏡〕四元暦二年○文治元年五月廿四日戊午、源廷尉經如思平朝敵訖、剽相具前内府○平參上、其賞

兼不疑之處、日來依有不儀之聞、忽蒙御氣色、不被入鎌倉中、於腰越驛徒涉日之間、愁鬱之餘、付因幡前司廣元捧一通款狀、廣元雖披覽之、敢無分明仰追可有左右之由云云、

〔古今著聞集和五〕鳥羽宮天王寺別當にて、かの寺の五智光院に御座有ける時、鎌倉前右大將○源賴朝

參せられたりけり、三浦十郎左衛門義連、梶原景時ぞ共に侍ける、御對面の後退出の時、庭弱の

尼壹人いで來り、右大將に向てふところより文書を一枚取出して云、和泉國に相傳の所領の候を、人におしとられて候を、御こし候へども、身の庭弱ふぐによりて事ゆかず候、適君御上洛候へ

ば、申入候はんと仕候へ共、申つぐ人も候はねば、たゞ直に見參に入候はんとて參りて候とて、その文書を捧たりければ、大將みづからごりて見給ひけり、文書のごとく、一定相傳のぬしにて有

かとはれければ、いかでか僞をば申上候べき、御尋候はんに更にかくれ有まじと申ければ、義連に硯たづねて參れと仰られて、尋出して參たりければ、墨おしすりて筆染てうちあんどて、わ

が持給ひける扇に、一首の歌を書給ひけり、

いづみなる木のだの森のあまさぎはもとの古枝にたちかへるべし、かく書て義連に、これに判くはへて、尼にとらせよとてなげつかはしたりければ、義連判くはへて、尼にたびてけり、年號

再訴

年曆應三諸官評定文者與福寺爲訴人送兩年無音之條不可然歟但賴英既參訴之上者被召出彼輩等可被尋究矣云々就之寺家重々雖申所存同年五月廿九日大判事明成注進狀云爲無後訴來月二日辰一點召具彼平五郎男等可參對之由可有御下知云々仍爲斷後訴件日當寺雜輩出對賴英已下之輩忽諸皇憲不拘武命亂入不知行之地刺致自刃傷_{立證條々}及謀訴之條罪科尤不輕就中兩年之間違背及度々之上者可被召誠其身之由申披所存畢云當寺當知行所見云自刃傷支證所申無子細之間不及被召出平五郎男則預使廳御注進畢而如今月十二日院宣者平五郎男所犯無子細上者可禁獄其身云々御沙汰參差迷惑失度者也所犯無子細之支證何事乎就一方掠申被罪科之條尤以不便次第也早被召返所掠申院宜於賴英者云濫妨狼藉之兩年違背云自刃傷謀計其科難通之上者欲被處相當之罪科矣

〔御成敗式目〕一右大將家以後代々將軍并二位殿御時所充給所領等依本主訴訟被改補否事

代々御成敗畢後擬申亂事依無其理被棄置之輩經歲月之後企訴訟之條存知之旨罪科甚不輕自今以後不顧代々御成敗狼狽面々之訴訟_{○訴訟一本作訴訟一}者須以不實之子細被書載所帶之證文

〔長曾我部元親百箇條〕捉

一裁許相濟後申殘儀在之付重而言上堅停止之事

〔尺素往來〕諸庄苑年貢半濟事本所愁訴尤有其謂歟

〔新編追加_{雜務}〕一宣旨事

方今四海已定萬方靡然誰輕宗廟社稷之重事誰掠五畿七道之濟物然則一爲休莊公之愁訴一爲優地頭之勤勞旁從折中儀須定_{○中}向後法略

貞應二年六月十五日

左中辨藤原朝臣

大史小槻宿禰

言上

事由

右依定綱濫行自叡山所遣使者所司二人義範辨勝去月卅日到著告狀云依罪科欲預賜定綱并子息三人於衆徒中云云此外子細畫使者之詞仍去一日與返報又相遇愚意所及答云定綱狼逆不能左右爭通重科乎隨風聞之說卽以去月十六日可被行罪科之由兩度達叡聞畢任罪名被仰下歟但存可召賜之儀者不經言上先令觸賴朝者可進止之處今付衆議召渡者恐似輕聖斷又非有私乎交名輩召其身可進院廳也宜令待勅定云云然而衆徒有註申旨者隨重狀可左右之由相存之處以去月廿六日^{辰刻}群參禁闕奉振神輿發聲濫訴奉^{主上三條不}存此義者不可差下使又遣使者可待返事歟而待計下洛之條心與事相違更非本意賴朝苟以忠貞奉公繼家業守朝家衆徒有何意趣強廻奇謀令待計哉鬱望之至啓而有餘配流定綱禁獄下手之由宜下已畢誠是明時之弊範也而衆徒欲背勅裁者本自不可經奏達^{略○中}

建久二年五月三日

賴朝

進上 高三位殿

〔新加制式〕雖无道理無指損之故企謀訴之輩可被懸贖銅事、

右式目之趣炳焉也但或不致奉公或无忠節之輩割分件所領可預新恩之段非無其詮乎自今以後於企謀訴之輩者可^略有贖銅^{○註}則可被付寺社之修理、

〔東寺百合古文書三〕寺家支狀^{平五郎男事}

與福寺難掌賴英掠申刃傷狼藉事

右去々年^{曆應二}九月十九日爲右中辨顯藤朝臣奉行可令尋沙汰給之由被成院宜於別當殿畢而賴英乍爲訴人送兩年出對難濫謀訴無疑之上者任被定置之法可被處罪科之由申子細之處如去

て、かれらが一味の者ども數輩、本領を沒倒せられ、其後和談寬免の間、本領返し可被下由意忠まきりに訴訟申されけれども、成氏御免なかりけり、これにより、皆々分國の一揆被官人等をめし集め、猶以致嗽訴といへども御許宥なし、近年は寺社舊附の庄園ををさへて、家人どもに令恩補さる程に、國々所々より訟止事なく、騒動愈劇關東の大亂と見えければ、成氏より意忠に下知ありて、雖被加折檻、更に是をもちひず、如何様東國の大事、此時にありとやおもひけん。○下

〔御成敗式目〕一右大將家以後代々將軍并二位殿御時、所充給所領等依本主訴訟被改補否事、右或慕勳功之賞或依官仕之勞、拜領之事、非無由緒、而稱先祖之本領於蒙御裁許者、一人縱離開喜悅之肩傍輩、定難成安塔之思、歟、濫訴之輩、可被停止、但當時給人、有罪科之時、本主守其次企訴、訟事不能禁制、歟、次代々御成敗畢後、擬申亂事、依無其理被弃置之輩、歷歲月之後、企訴訟之條、存知之旨、罪科甚不輕、自今以後、不願代々御成敗、根致面々之訴訟。○訴訟一本作濫訴者、須以不實之子細被書載所帶之證文、

〔御成敗式目〕一依無道理、不蒙御裁許之輩、爲奉行人偏頗之由訴申事、

右依無其理、不蒙裁許之輩、爲奉行人偏頗之由、構申之條、太以濫吹也、自今以後、構不實企濫訴者可被收、公所領三分一、無所帶者可被追却、若又奉行人有其誤者、永不可被召仕矣、

〔建武以來追加〕式目 庭中篇目

一本所寺社領事

方々施行停滯、頭人并奉行緩怠、空經廿々日者、任本條宜經直訴、嚴密導運行之、可申左右之由、差日限可仰本引付方、但有限日數已前、諸方難掌、亦猥及濫訴者、暫可被聞彼訴訟也、

〔吾妻鏡十〕建久二年五月三日庚戌、被付奏書於高三位兼經、善信、草之俊兼、清書也、申剋難色成重帶之上洛、其狀云、

強訴

〔吾妻鏡十〕建久二年四月十六日癸巳梶原平三景時爲使節上洛、是延曆寺衆徒、可申請定重黨類之由、及強訴之旨、罪科无所通者、早可被行其科之旨、依被奏聞也、

〔百練抄^{後十}〕

建久二年四月廿六日癸卯天台衆徒、奉昇日吉祇園北野等神輿、參陣頭訴申、字佐々

木太郎定綱於江州去比殺害神人宮仕等、可被處罪科之由也、攝政已下參内、武士廷尉等參陣邊加制止、各奉置神輿、神人等分散了、

〔後愚昧記〕永和三年九月廿七日神木^日

春渡御宇治云々、是依東北院門主^{西園寺}

與西南院相論維

摩講師事、總衆徒者西南院方也、可被退治東北院之由、訴武家之處、軍勢進發遲々故也、

〔看聞日記〕永享五年七月十八日、抑有山訴條々以外及嗽、可奉振神輿^吉

日云々、山上夜々燒篝洛

中物忿云々、十九日、山訴不被聞食入、只可振神輿之由、被仰云々、閏七月廿六日、抑山訴事落居

昨夕管領^{持之}

細川光熙院

猷秀坊へ押寄召捕、土佐國配流、今朝立洛中云々、飯尾肥前爲上意逐電畢、赤松大

河内事、可被預宗領云々、

〔康富記〕嘉吉二年十一月十八日乙亥、就南都興福寺閉籠事、自管領^{島山左衛門}被遣使節於南都被

尋嗽訴事云々、飯野大和入道、松田豐前守兩人、去十五日令下向、今日上洛云々、

〔康富記〕寶徳三年七月廿四日庚申、依招引向飯尾肥前入道許用朝喰語云、山門衆徒、動輒令動座神

輿^吉

日閉籠堂舍致嗽許、剎近日招寄賊徒於山上、於結界地致合戰、企殺害每度御裁許、非無其煩於

向後者、以支證可經訴訟也、若不事問、動座神輿、閉籠堂舍者、尋究張本人、到衆徒者、追捕其身、沒收所

帶、可被付寺社修理也、到地下人者、可被處嚴科也、使節令緩急者、可有其咎之由、去十九日、於管領仰

諸奉行有評定、被載事書一紙、被成遣御教書於山門了、

〔鎌倉大草紙〕管領上杉右京亮憲忠名代として長尾左衛門入道景仲威勢を振、八州彼名字の中三家あり、上州白井の長尾總州佐貫の長尾、越後の長尾等也、先年江の島合戦のとき、成氏へ敵對し

執申人者可御禁制奉行人若令緩急空經廿箇日者於庭中可申之

〔御成敗式目〕一遂間注輩不相待御成敗執進權門書狀事

右預裁許之者悅強縁之方被弄置輩者愁權門之威爰得理之方人者類稱扶持之芳恩無理之方人者竊猜憲法之裁斷頭政道職而斯由自今以後儘可停止也或付奉行人或於庭中可令申也

〔建武以來追加〕式目庭中篇目

一本所寺社領事

方々施行停滯頭人并奉行緩急空經廿々日者任本條宜經直訴嚴密導運行之可申左右之由差日限可仰本引付方但有限日數已前諸方雜掌亦獲及濫訴者暫可被開彼訴訟也

〔建武以來追加〕管領政所壁書

一諸人庭中事永享八六三

致訴訟之輩各申請賦可付奉行所處無左右金庭中之條自由之至也但雖望賦令遲々者申次之族或緩急歟或最負歟屬別人申之尙延引者於庭中可言上之非急事題目等不經次第獲致庭中事一切被停止訖焉

〔吾妻鏡三十五〕寛元二年三月廿八日戊辰武州對面訴人等數輩群集先々依被棄捐訴訟庭中言上

之族也再往聞其理非少々與奪于攝津前司佐渡前司信濃民部大夫入道等方可勸申定云云自當座即相副使者於訴人被送進之平左衛門四郎萬年馬允伊東左衛門五郎等爲御使云云

〔後愚昧記〕貞治五年八月十九日今日武家評定始也引付庭中等同始行之云々大夫入道沒落以後始有此事

〔竹崎五郎繪詞〕十月○建治元年三日、ときの御をんぶぎやう、あきたのまやうのすけどのいりの御ま

へにてていちう申事、ひこの國の御けにん、たけさきの五郎ひやうゑすゑなが申あげ候、○下略

庭中^{六日、十六日、廿六日、}

〔式目抄〕^四一閱本奉行人付別人全訴訟事

永和條々ノ内、延慶二年四月十六日、被下文。殿條々ノ内、一可被置庭中并越訴事。庭中三日、十八日、二十三日^上、一日ノ沙汰不可過三箇條件、日々難訴沙汰、當番傳奏著文殿可問答事。越訴八日、十三日、廿八日^上、沙汰不可過二箇條件、人同可著文殿事。一庭中ノ日、四日、九日、十九日、廿四日、件ノ日、當番傳奏著文殿、可尋聞訴人所申委被札決申沙汰、私曲令露顯者、當非被改奉行、宜被止出仕、將又訴人構不實矯飾、恣及庭中者、永被棄訴訟、至難掌者、可被召出使廳、凡奏事不實、并奸訴罪科同此法。越訴ノ日、十四日、十九日、奉行人被定其仁、可著文殿、人數可爲二人、一訴論人構不實矯飾及庭中者、可有罪科沙汰事、一獻芹賄賂輩、雖爲理訴可被訴訟事。

〔師守記〕曆應三年二月八日辛卯、是日自執權黃門有御教事、來十四日庭中引上、可爲十一日之由尤寺用事、可有其沙汰也云々、則被出廻文了。九日壬辰、今日家君^右。依庭中御定、文殿衆家君、中大外記師利、大夫史匡遠、大判事明成、明法博士景有、佐渡大夫判官秀清、高倉大夫判官景世等、參仕着座、別當資明卿、葉室宰相長光卿等也。

〔沙汰未練書〕一奏事事

引付評定、越訴庭中、以被弁置事、訴論人共歎申之^{是奏事、六波羅無之、}

〔沙汰未練書〕一庭中事^{庭中者、諸事奉、行人不取申事、奉}

引付庭中、於引付御座申之、御前庭中者、於評定御座申之、京都者、定奉行人以申狀申也、^{關東ニハ庭中奉行無之、以詞申之、}

〔御成敗式目〕一閱本奉行人付別人全訴訟事

右閱本奉行人、更付別人、内々全訴訟之間、參差之沙汰、不慮而出來歟、仍於訴人者、暫可被抑裁許至

沙汰被成御奉書畢、

〔假頭屋本節用集〕天庭中直訴

〔式目抄四〕一聞本奉行入付別人全訴訟事

庭中ハ記錄所文殿ニモアリ庭中ノ日ヲ定メ置ル、也當時路次ニ於テ申モコレニ擬スル也、

〔庭訓往來〕寺社訴訟者略○中奏事於庭中、

〔庭訓往來抄下〕庭中ト云事ハ奏者ナシニ物ヲ云樣ナル事也是尤似タリ、

〔尺素往來〕本領事略○中敵方猶不得休雖及越訴庭中每度停廢、

〔勘仲記〕正應六年元永仁八月二日乙酉依記錄所庭中番早旦參内左少辨爲行大外記師顯不參、明

法博士章保一人祇候訴人沙彌生心上野國園田御封并伊勢國散在田畠事申之章保注進申詞付

予子付内侍先所奏聞也相尋前藤宰相可申之由有勅定暫祇候略○中其後退出生心申詞、

正應六年八月二日於記錄所愁申

沙彌生心申大神宮領上野國園田御封并伊勢國散在田畠等事頭左大辨奉行緩怠之間去六月十日庭中之處件日上卿自前藤宰相家急可被申沙汰之由雖被申本奉行職事于今不及其沙汰と申、

件子細且被尋奉行職事直被召出正應四年三問三答訴陳可省其沙汰歟、

明法博士中原章保

〔建武年間記〕記錄所被定下寄人結番事略○中

庭中三十三、

〔師守記〕貞治六年五月廿六日辛丑

記錄所

定寄人結番事略○中

時、誠先度沙汰、眼前有參差之儀者、被下御救書重所被經沙汰也、次第沙汰之體引付同前、

〔簡禮記〕越訴ノ事、是ハ奉行頭人ヲ越而上ヘ訴ヲ申上ル目安ノ事也、調樣二品ノ用拾有之、口傳、

〔北條九代記〕_下 永仁五年丁酉

宗方_{北方十} 修理亮宗頼男、母大友兵庫頭頼泰女、正應五年十二月十八日任左兵衛尉_中 正安

三年八月廿日任駿河守、同廿五日爲越訴頭。

〔北條九代記〕_下 乾元元年壬寅

越訴頭 宗秀 二月十八日引付頭

〔太田康有記〕建治三年十二月十九日、御寄合_{山内殿} 相太守、城務康有被召御前、奥州被申六波羅政

務條々_略、_中 越訴事、下野前司、山城前司、可奉行、

〔北條九代記〕_下 嘉元三年乙巳

宗宣_{從四位下} 母越前守時廣女、正安五年二月廿八日任雅樂允、同三月十三日任式部少丞、同八

月六日發從五位下、同九年六月爲引付衆、同十年十月爲評定衆、正應元年十月七日任上野介、永仁

元年五月爲越訴奉行、同七月爲小侍奉行、同十月止引付執奏諸人訴訟、

〔北條九代記〕_下 永仁五年丁酉三月六日評云、被止越訴、但本所事、一箇度被許之、質券賣買地、可被返

本主、凡下買地不依年紀、利錢出舉不及沙汰云々、

〔北條九代記〕_下 永仁六年戊戌二月廿八日評云、越訴被許之、但宗宣宗秀事切事者不及沙汰、質券賣

買利錢出舉、向後被許之、

〔政所賦銘引付〕土師左衛門大夫秀綱_{文明十六} 窪西七條院町田壹町三段事、譜代相傳私領也、然清

水坂七觀音院_江 九拾貫文入置本物返質券之處、號永代買得地、申給奉書云々、殊被遂御札明之由

有之、歟、秀綱不出帶支證之上者、非御札明云々、越訴也、此事爲飯加_明 去文明十年十一月廿五日申

參議左大辨藤原朝臣忠光

左大史小槻宿禰匡遠

大外記中原朝臣師茂

左大史小槻宿禰重實

主稅頭中原朝臣師守

博士清原真人宗季

大判事坂上大宿禰明宗

貞治元年十一月廿九日

記錄所

貞治元年十一月廿九日越訴庭中條々

被導下、越訴狀可有沙汰

一四條宰相雜掌申、美濃國河崎庄內兩個并忠助名事、

今度越訴之時重可申

一同雜掌申、二條町地事、

被召出、本訴可、有沙汰機

一御房丸申、今西宮神主職事、

着座

中御門大納言

左大辨宰相

〔御成敗式目〕一國司領家成敗不及關東御口入事○中略

次不帶本所舉狀致越訴事諸國庄園并神社佛寺領以本所舉狀可經訴訟之處不帶其狀者既背道理歟自今以後不及成敗矣

〔沙汰未練書〕一奏事事

引付評定越訴庭中以被弃置事訴論人共歎申之是奏事六波羅無之

〔沙汰未練書〕一越訴沙汰事

被成御下知之後不及覆勘沙汰者屬越訴方沙汰參差之由以委細申狀越訴頭人申之所申有

其謂者內談之時先以入門有其沙汰入門者肝要事也先度御沙汰落居事書召渡後越訴申狀勘合內談之

領主可管領之條本文無相違歟、

左衛門少尉中原朝臣章國

〔古簡雜纂〕午內々申

論人者故遊義門院后給字多上臈局云々可被下彼局候也可有御存知候哉殿中奉行者親方朝

臣候同可得御意候歟、

大和國山口庄間事重申狀進上之念可令申沙汰給候恐惶謹言、

六月廿一日

權少僧都俊覺

謹上 右中辨殿略○中

一陳狀云立越訴申披謀書段之條證據何事哉正安御裁許之後越訴申狀令不被下二尊院之上者今案奸曲之申狀不可爲御沙汰哉云々所詮此條凡不得其意候所申披之越訴狀者非構今案之儀早被尋申本所之日不可有隱者哉且又前殿御時同備具書畢不被尋下于敵方之條御意爭知之哉所詮申披之子細相叶理致者可足者哉一切非奸曲之所存披陳之趣過分之申狀也略○中

延慶二
六月廿一日

權少僧都俊覺

謹上 右中辨殿

〔建武年間記〕難訴決斷所

一依訴陳難遊并參決通避被裁許事

本訴雖雖有其理不可聽越訴但其罰不可及嗣

〔師守記〕貞和三年九月十四日癸丑今日越訴式日家君右○師參文殿給

〔師守記〕貞治元年十一月廿九日庚午午斜家君右○師着衣冠上給有同車子衣冠參文殿給可有越訴

沙汰之故也未敷座之間寄人面々居板難談小時難仕敷座寄人四位大史匡遠宿禰衣冠四位大

越訴

〔下學集下〕越訴

〔尺素往來〕本領事略○中

如當方相傳之讓狀者、遂多年而後、以自筆自判付屬之條、歷然嘉顯、仍則蒙御裁許、即令安堵、候敵方猶不得休、雖及越訴庭中、每度停廢、剩可有反座科條之旨、法家之輩、勘申之候、

〔式目抄四〕聞本奉行入付別人、企訴訟事

延慶二年四月十六日、被下文殿條々ノ内、一可被置庭中并越訴事略○中

越訴八日、十三日、廿八日、已沙汰不可過二箇條略○中

越訴ノ日、十四日、十九日、奉行人、決定其仁、可著文殿入數可爲二人

〔建武年間記〕難訴決斷所

一當所論人、無左右不可直訴記錄所事

云、記錄所云當所可有沙汰條々、已被定其法畢、若有參差事者、當所庭中并越訴之時、可申所存沙汰未斷之最中、於令直訴之輩者、注置訴人之名字、於當所難爲理訴、三ヶ月不可及其沙汰乎、

〔建武年間記〕記錄所被定下寄人結番事略○中

越訴八日、十八日、廿八日、

〔師守記〕貞治六年五月廿六日辛丑

記錄所

定寄人結番事略○中

越訴九日、十九日、廿九日、

〔壬生家文書〕□□勘答章國文永五年十二月中略

一越訴事

關訟律云、越訴者、笞卅者、凡諸訴訟、皆從下始、而違令越訴者、可招笞卅者也、

以前兩條文法之所及、注進如此、自餘御問、只同前賈人違法之間、被行罪科之上、不及彼直物沙汰、本

〔康富記〕文安四年六月一日辛酉、參鷹司殿又參文第、令語給云、執柄事一條殿○兼可有御再任之由、武家被執奏申、細川右京大夫元○爲管領職可申入之者也、十五日乙亥、今晚局務令立寄給被示云、只今宣下事可在之由、被相觸兩人之間、可構參之由也、可爲關白宣下云々、近衛殿○房會無御上表之沙汰、雖然大相國先度永享四年不及御拜賀攝政令辭給之間、御再任事、強被申之、仍雖無御辭退、可有推任之由、就室町殿○足利大方殿內々被申候故、自大方殿室町殿之御母堂有御執奏、然間御上表歟否事、自禁裏被尋申近衛殿之所未及御辭退尙暫可爲御當職之由、御返事被申入云々、爲御執奏上者不及是非歟、今及此宣下者也、承及分、自一上兼日連々被申入、其故者陽明若御上表之儀候者、任次第理運可有御拜任之由、被出御所望云々、一條殿者被最員申方々多之間、如此歟、又鷹司殿一代御中絶候間、不可叶之由、於禁裏有申族云々、

〔塞川入道筆記〕一中むかしのことかど、都に公事聞の奉行あり、一段と正路に批判せられたと、
まかしながら女中方より耳に入ることば、皆理になるときに、

かみさまの御前で公事がすむならばまゝのやうなる批判なるべし、とかく女房にはたかき
もいやしきも心がどらるゝと、

〔古文書類纂上見〕後柏原天皇永正十年大友義長條目 伯耆立花寛治所藏

條々○中

一内訴之儀、縱雖爲理運之子細、不可有許容之事、○中

右此條々日夜無忘却堅可被守其旨之事、可爲後孫者也、

永正十二年十二月廿三日

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一公事邊女房衆取次堅停止之事、

義長
花押
大友押
○

奉行人が公事ヲ請取テ廿日無沙汰セバ、庭中ニ申ベシ、庭中ハ記錄所文殿ニモアリ、庭中ノ日ヲ定メ置ル、也、當時路次ニ於テ申モコレニ擬スル也、

〔式目抄〕^四右預裁許者、悦強縁之力、被棄置者、愁權門之威、^略○中

強縁トハ、ヨキ縁也、裁許ヲ蒙者ハ、ヨキ縁以テ申ニ依テ、理ヲウルト悦ブ、棄置セラル、者ハ、權門

ノ書狀故ニ理ヲ失ト愁也、誠ニ非ナル者モ、如此イヘバ政道ノキズ也、得理トハ理アリテ裁許セラル、者也、無理トハ理ナクシテ棄置セラル、者也、預裁許者ノ方人ハ、權門ノ扶持故ト云、被棄

置者ノ方人ハ、權門ノヒイキユヘト云、非ナル者モ如此云テ憲法ニ御成敗アレドモ、猜ヲナス也、

〔平戸記〕延應二年^元○仁治^年二月廿日乙卯、依昨日之召、凌雨參殿下、^{○藤原}

^{兼經}

以勸解由次官兼親入道參

召依召參御前、被仰云、昨日無出行事之間、心閑有可談世事之志、仍示遣了、今日雖物忌不可默止歟、

朝務事、先取要可有沙汰、其條々可有宣下也、諸人訴訟早付職事可奏聞、任道理可有裁報其中又爲

事之成就等、或寄付神社佛寺、或寄付權門、勢家之輩者、永不可有勅許、剩可停、向後訴訟之趣、入道殿

被仰也、至此條者事已一定了、其外事等未落居、記錄所事、大旨先日議定之旨、不可有相違、仍今日可

被宣下也、召集寄人等、今日可被召仰子細也、至宣下之條者、事一定之後、猶可示合也、^{○中}

^予經高申

云、宣下之條々、未知其篇之間、難申左右、臨其期可申子細歟、抑敍位除目仰事、漏此篇歟、未承其事、如

何被行善政之本意、只在此要須也、於他事雖有沙汰、至此一事漏其篇者、自餘事、更不可有詮也、但到

諸訴之決斷、如被仰下、真實可有施行者、又是德政之最要也、所詮其至要、可在任官加價、雜訴已上三

ヶ條^{○雜訴、敍位、敍位、事也、}其外事者、被加行者、神妙、又雖不被行、至此三事有施行者、他事之行、否不可及沙

汰歟、事之大事、只可在此三ヶ條者、

〔豫章記〕此比細川頼春ハ、阿波讃岐土佐ノ事ハ給ル、伊與國ニ望ヲ掛ケ、内訴ヲ申サルレ共、更ニ公

方様御許容モ無リケレバ、下國ノ時ノ事ヲ左右ニ寄セテ被取懸、

ヲ別人ノ恩賞ニ被行、

〔親長卿記〕文明六年七月廿二日、鳴社事今日奏聞、新式書改革、

鳴社條々略○中

一 訴論御糺明之砌、可停止、內奏若訴狀有不達、叙聞之聞者可申事、

文明六年七月廿二日

〔沙汰未練書〕一 內訴事

關東者兩所京都者兩六波羅殿、內々申入之、或直被聞召之、或美者申之、

○按ズルニ、右ノ文ニ、或直被聞召之、或以奏者申之トアルニ據レバ、內訴モ必シモ之ヲ禁ゼザルニ似タリ、

〔式目抄〕一 聞本奉行人付別人企訴訟事

奉行人ハ、公事申シ沙汰ノタメ也、而ヲ奉行ヲ聞テ、內縁ヲ以テ申ハ私曲也、一説ニ、本奉行トハ本ノ字ヲ以テミルニ、內奏ノ事ニハアラズ、其所々々定メヲク奉行アリ、寺奉行神宮奉行ノ類也、其定置本奉行ヲ聞テ別ノ奉行シテ申事也ト云、此義本ノ字ニアタリテ見タリ、尤モ有所據、但次文ニ、內々企訴訟ト云、句アリ、內々ト云ハ、內奏也、別人トハ、近習ノ男女也、永和條々ノ內、一任官敘位難訴等、可被停止、近習內奏口入事、一近習ノ男女於奏達者、雖恐時議、以私會釋、請取訴訟、一切可被停止事、以上堅可被守、延慶法太子憲法云、奏欲明辨訴訟ト云、財アル者ノ訴訟ハ、石ヲ水ニ投ガ如シ、困窮ノ者ノ訴訟ハ、水ヲ石ニ投ガ如シ、此ヲ能辨テ賢不肖ニヨラズ、理ヲ本トスベシ、殊ニ貧賤ノソセウヲ本ニキコシメスベキ也、

右聞本奉行人、更付別人、內々企訴訟之間、參差之沙汰、不慮而出來歟、仍於訴人者、暫可被抑、裁許、至執申人者、可有御禁例、奉行人若令怠緩、空經廿箇日者、於庭中可申之、略○中

大權現〔家康〕利家、秀家、輝元、隆景、德善院、淺野、石田、増田、長束也。十人衆召其甲乙、而可敬聽之。若直訴者、此五人此五人者、所加評議之、而後可達于台聽也。

〔關八州古戦録 二十〕尾藤左衛門尉杉山主水正事

秀吉公ハ、八月○天正十八年十七日會津ヲ發馬シ玉ヒ、歸洛ニ趣カレケルガ、○中豆州三島ノ驛へ著坐

有シニ、杉山主水正ト云渡リ士旅館ノ邊ニ推參シテ直訴ノ旨アルニ依リ、石尾又兵衛治一ヲ以、其所以ヲ尋ラレ、向後仕官ノ事、勝手ニ任ズベキ旨免許セラル、

〔梅松論〕爰に京都の聖斷を聞奉るに、記録所決斷所ををかる、といへども、近臣臨時に内奏を経て非儀を申斷間、綸言朝に變じ暮に改りしほどに諸人の浮沈掌を返すが如し、或は先代滅亡のときに通來る輩又高時の一族に被官の外は、寛宥の儀を以、死罪の科を宥さる、又天下一統の掟を以、安堵の綸旨を下さる、といへ共所帶をめさる、輩恨を含時分、公家に口すさみあり、尊氏なしといふ詞を好みつかひける、

〔太平記 一〕立后事附三位殿御局事

安野中將公廉ノ女ニ、三位殿ノ局ト申ケル女房、○藤原中宮祿子御方ニ候ハレケルヲ、君○後

一度御覽セラレテ、他ニ異ナル御覺アリ、○中サレバ御前ノ評定、雜訴ノ御沙汰マデモ、准后ノ

御口入トダニ云テケレバ、上卿モ忠ナキニ賞ヲ與、奉行モ理有ヲ非トセリ、

〔蔓藁抄 六〕怨深 子推恨ト云ハ何事ゾ

後醍醐院モ、准后ノ内奏ヨリ國亂レテ、天下ヲ失ヒ御座ストゾ、昨日決斷所ニテ得理セシ者、今

日准后ノ内奏ニ依テ敵方ニ付ラレ、朝ニ裁許ヲ蒙ル所暮ベニ棄置セラレケルト申メリ、

〔太平記 十二〕公家一統政道事

或ハ自内奏訴人蒙勅許ヲ決斷所ニテ論人ニ理ヲ被付、又決斷所ニテ本主給安堵、内奏ヨリ其地

付御札明候はん由御返事候つるごて候、彼者からめ候子細は、自然無咎者をうつたへ申事もやこの事也。

〔朝倉敏景十七箇條〕一諸沙汰直奏之時理非少も、被曲間敷候若役人等、私を致す之旨被聞及候は、堅可被處同罪事、

〔信長記十二〕座頭直訴之事

爰ニ攝津國兵庫ノ町人ニ、常見トラ、アクマデ富タノシキ者有ケルガ、一期ノ間、無増減過行ベキヤウヲ計ルニ、檢校ノ數ニ入テ、其配分ヲ取ナバ、何レノ商賣カ如之乎ト、急度案ジ出シテ、則能ニコシラヘ、檢校中ヘ本錢千貫出シツ、其中ニ加テ、檢校職ニ不異配分ノヲリ物ヲ取ケレバ、小官ノ座頭加様ニ法度亂リニ成行ハ、果シテハ町人ヨリ過半檢校職ヲ持行様ニ可成ト連々思ケレドモ、檢校一味シテ相計シカバ、力及パデ既ニ數年ニ及ケルガ、信長公正キ御制斷ニ逢テ、年來ノ愁眉ヲヒラキ、如先規アラント衆口一同ナリケレバ、擬議スベカラズトテ、既ニ直訴ヲ遂タリケルニ、信長公、暫御馬ヲ留ラレ、則右筆ニ仰テ、一々書記サセ、申條ノゴトクンバ、不便ノ次第ナリ、有ノマヽニ計フベキゾトテ、檢校中ヘシカ／＼ノ事キコニアリ、事實カト御尋有ケレバ、サヤウニ候ト答申ス、公曰、法式ヲミダス事、惡行何ゾ是ニ過ベキ、去ドモ盲目ナレバ、斬刑迄ハナシ、檢校何モ解官ニシテ、是ヨリ又昇進ノ功ヲツトメヨ、村井長門守被仰付ケリ、檢校中非義極々シテ陳シ申ベキ様モナケレバ、誤申所千悔スレドモ、其甲斐ナシ、御機ヲ垂ラレテ宥置カレ候様ニト、五山ノ僧侶ヲ頼ミ、歎申ニ依テ、サラバ科意トシテ、黃金二千兩出スベシトノ事也、ケレバ、畏リ悅ンデ奉出之、然バ是ヲ以テ、治橋ヲカケヨト、宮内卿法印山口甚介ニ仰テ、掛サセラレシカバ、翌年六月ニ橋出來シテ、上下ノ往還安ラカニシテ、恩惠ヲタノシミアヘル聲、更ニ洋洋タリ、

〔豐臣秀吉譜〕下秀吉又下九條法制于諸人、○中其六曰、若有持訴書而來告者、則先可問十人衆、十人衆者、

者差符ト云、

〔建武以來追加〕式目庭中篇目

一本所寺社領事

方々施行停滯頭人并奉行緩怠空經廿ヶ日者任本條宜經直訴、

〔吾妻鏡四十一〕建長二年四月廿九日甲子、難人訴訟事諸國者可帶在所地頭舉狀、鎌倉中者就地主吹舉可申、子細無其儀者不可用直訴之由、今日被仰遣問注所政所、是爲被禁直訴之族也、

〔沙汰未練書〕一地頭御家人之外不可及直訴名主庄官以下者、帶在所地頭舉狀及訴訟也、但於西國所務代官者雖不帶舉狀及直訴也、仍所務代官之科者正員雖不存知之懸其科也、

〔建内記〕正長元年五月廿一日、一昨日十九中納言入道豊房口御禮參室町殿義教御對面之處、自懷中取出折紙、彼入道不知行所領書付進入了、言句不聞之退出候處、以申次伊勢加實守被返下折紙、被仰曰、

如此之訴訟、直申入之條、且無先規款付誰人可被申款、直訴爲傍例不可然之趣、以外有御定、中納言入道申云、近習之輩無其緣、外樣經年序之間、存餘申入之、直訴之條、一向可有御免、被仰下奉行入可付其人也、重仰曰、經年序之由令申條、不得其意、勝定院殿足利義持御時付誰人何奉行入申入哉、於其

時之延引者不可有御存知、只今不慮如此御政道、併近日之儀也、而延引之由令申條、不可然者誰人可付人之由、不爲分、明之仰云々直訴出物、又招武人之嘲嘆、公家之瑕、種者畢、歟、字誤

〔走衆故實〕一自然直奏申時、走衆申次樣體申狀を御小者に渡す、御小者請取て、御興きはの走衆に渡すを請取、則申入候、仁體をば繩をかけさせ、かいかう開へ渡候由候其故に必走衆手繩をも

たせ候事故實候、惠林院殿義種御代、飯川能登守職順親父の時直奏候事あり、請取て披露可申

樣體ありしかば、還御ありて可聞召由被仰問、其儘懷中して、彼者をば右に如申、かいかうへ渡還御ありて、以奉行可申入旨申上候處、最前之以筋目披露可申由被仰出被聞召て、かいかうに被仰

〔書言字考節用集八〕公事本朝俗謂之訟

〔師守記〕貞治元年十一月十一日壬子、今朝家君〇師以使者今日難訴沙汰、延否事、被尋問頭右大辨資定朝臣之處、一定云々〇中略

沙汰事

一藤原氏女與四條三位隆右卿相論美濃國真桑庄預所職事、

兩方難拿出對、對決之後、退訴論人、面々自下、薦申意見、十六日丁巳、今日被行難訴沙汰、庭中以前被行之、四條前大納言隆蔭卿直衣中御門大納言宣明卿、左大辨宰相忠光卿等參仕、職事藏人治部少輔仲光一身參仕、

〔沙汰未練書〕一所務沙汰者、所領之田畠下地相論事也

於關東六波羅ノ引付有其沙汰所務相論事出來者、先調訴狀具書所務賦可上之、賦奉行請取之、賦雙紙沙汰篇目書付訴狀加銘、追次第五方引付賦之、其手開闔請取之、於引付御座以孔子定奉行、人奉行、人治定後、御敎書成也、以之爲訴訟之初、又開闔執筆者奉行中之宿老引付細々事記錄仁也、公文トモ云也、

一難務沙汰。

利錢 出舉 替錢 替米 年記 諸負物 諸借物 諸預物 放券 沽却 田畠 奴婢
難人 勾引 以下事也

以是等相論名難務沙汰、關東御分國難務事者、於問注所有其沙汰、又引付所務賦事、於問注所在之、鎌倉中難務事者、於政所有其沙汰、亦將軍家諸色御公事支配之事等、問注所政所在之、

一六波羅難務沙汰事

於五方引付定奉行、人令分充國々引付衆中、共有其沙汰、賦其手頭人訴狀書銘、直奉行方賦之、關東

土地ノ訴訟ハ、當時大ニ意ヲ此ニ用キシモノニテ、鎌倉幕府ノ制ハ、實檢使ヲ遣ハシテ之ヲ檢シ、若シ不實ノ訴ヲ爲ス者アレバ、其地ヲ割キテ被告人ニ附與セシメテ深ク之ヲ誡メタリキ、

本領ノ訴訟ハ、知行ノ年限ニ由リテ裁斷スル例ナリ、例ヘバ乙既ニ甲ノ本領ヲ知行スルニト二十年ヲ經レバ、甲ハ其地ヲ爭フヲ得ザルガ如シ、

讓與地ニ就キテハ、讓狀ヲ基トシテ裁決ス、而シテ其讓狀ハ、父祖ノ末期ニ及ビテ、失神セシ
時ニ成リタルガ如キハ證トスルヲ聽サズ、又女子ノ讓狀并ニ讓ラレタル男子ノ父母ニ先
テ死シ妻妾ノ夫ヨリ讓ラレテ後ニ離別セラレタルガ如キ、各、其制アリ、

賃借ノ利子ハ、年序ヲ經ト雖モ、一倍ヲ以テ制限トス、若シ訴訟ヲ爲サズシテ十年ヲ過グルトキハ、訴訟ヲ爲スコトヲ得ザリシガ、後ニハ此制ヲ改メ、十年ヲ過グルマデ償ハザルモノハ、三倍ノ利子ヲ附セシム、

質物ハ、米穀類ハ七箇月、絹布類ハ十二箇月、武具等ハ二十四箇月ヲ以テ限トス。若シ此月ヲ過グルマデ請ケ出ササルモノハ、流物トス。但シ絹布ノ利子ハ五文子、武具ノ利子ハ六文子ヲ附スル等ノ制アリテ裁決一ニ此制ニ據ル、

土地賣買ノ訴訟ハ、二十年以内トシ、之ヲ過ギタル者ハ裁決セズ。搦紳及ビ神官僧侶ノ訴訟ハ、或ハ朝廷ニテ聽斷シ、或ハ幕府ニテ聽斷シタリ、是其時ニ隨ヘルモノニテ、必シモ一定セズ。守護地頭ト百姓トノ訴訟ニハ別ニ奉行人ヲ定メテ之ヲ聽斷ス。奴婢ノ訴訟ハ、多クハ新舊主ノ爭ヨリ起ル、而シテ新主既ニ使役スルコト十年ヲ過グルトキハ、舊主ハ認メテ己ガ奴婢ト爲スコトヲ得ザル制ナリ、

名稱

下學集 下藝 訴訟

下
態
藝
訴
訟

古事類苑

法律部二十七

中編

訴訟

訴訟ハ鎌倉及ビ足利ノ頃ニハ之ヲ公事又ハ雜訴ナド、云ヒ、聽訟ニ在リテハ、或ハ之ヲ事務沙汰、雜務沙汰ノ二種ニ分テリ、所務沙汰トハ、領地等ノ訟ヲ云ヒ、雜務沙汰トハ、貸借等ノ訟ヲ云フ、而シテ法吏ニシテ久シク其訟ヲ斷ゼザル時ハ、直ニ之ヲ將軍ニ訴フルヲ得、是ヲ直訴ト云フ、豐臣氏ノ如キモ、亦一ニ此制ニ倣ヘリ、又朝廷武家共ニ女謁ニ附託シ、近習ニ資縁シテ訴訟スルヲ内訴ト云フ、政治上、特ニ害アルモノト爲シテ、嚴ニ禁ズル所ナリ、又越訴ハ、古ヨリ之ヲ禁ゼシガ、當時ハ朝廷幕府共ニ事實ニ由リテハ之ヲ許シ、式日ヲ定メテ之ヲ聽斷セリ、又庭中ニ越訴スルヲ許ス、庭中ハ、朝廷ニテハ記錄所及ビ文殿ヲ指シ、幕府ニハ御前庭中引付庭中ノ二種アリテ、並ニ之ヲ受理ス、

當時又寺社豪族ハ、往々多人數、群ヲ成シテ訴フルコトアリ、之ヲ強訴ト云フ、又濫訴アリ、訴フベカラザルコトヲ訴フルナリ、謀訴アリ、詐ヲ挾ミテ訴フルナリ、又愁訴アリ、後世ニ云ヘル歎願ナリ、

訴訟ハ人事百般ノ事ニ關シテ起ルモノナリト雖モ、家督相續、土地貸借、賣買等ノ件ニ關シテハ、其例尤モ多シトス、本書ハ各其項アリテ、之ヲ詳ニスト雖モ、本篇ニ於テモ特ニ當時ノ慣例ヲ知ラシメンガ爲ニ、各少許ノ實例ヲ舉示セリ、

遺跡并讓與地訴訟

一〇一八

貸借訴訟

一〇二四

質物訴訟

一〇二七

賣買訴訟

一〇三〇

摺紳訴訟

一〇三一

訴國司

一〇三二

訴地頭

同

親屬訴訟

一〇三三

主從訴訟

一〇三五

神官訴訟

同

僧侶訴訟

一〇四〇

盲人訴訟

一〇四五

奴婢訴訟

同

雜載

一〇四七

古事類苑

法律部二十七

中編

訴訟

名稱	九七八
直訴	九八〇
內訴	九八二
越訴	九八六
庭中	九九一
強訴	九九四
濫訴	九九五
謀訴	九九六
再訴	九九七
愁訴	同
家督相續訴訟	一〇〇一
土地訴訟	一〇〇四
本領訴訟	一〇一二
所職訴訟	一〇一五

簾中於後、自其内二品御一覽、不被仰是非、定任見此體、顔赫面、景時對長茂云、彼所者、二品御坐間也。云云、長茂稱不存知、起座即退出、其後定任不及執申云云、此長茂實本名者鎮守府將軍維茂貞盛朝男出羽城介繁茂七代裔孫也。

〔吾妻鏡〕二十五承久三年六月廿四日丁丑、相州○北條房武州○北條房等任申請之旨、合戰張本公卿等、

被渡六波羅○中略入道二位兵衛督有雅卿小笠原次郎七月廿九日壬子、入道二位兵衛督有雅卿、

早四十六爲小笠原次郎長清之預、下著甲斐國而依有聊、因緣可被救露命之由申二品禪尼○政間、暫抑

死罪、可相待彼左右之由、雖令懸望、長清不及許容、於當國稻積庄小瀬村令誅畢、須臾可宥刑罰之旨、二品書狀到來云云、楚忽之爲體、定有亡魂恨者歟、

〔多聞院日記略〕天正四年三月十九日

一普廣院殿○足利教之時分、招月と云歌人ありし、定家の後身也と後申せし、實名は正徹と云、將

軍御治世の盛に、

誰も皆見てればやがてかく月のいざよひの空や人の世の中と云歌を讀けるをきこしめし、我身上をかくなんと御腹立にて、都の外へ追出せと、無力高野山にこもり居てあり、數年後に、將軍招月はいまだ世にありやと御尋の時、高野山にありと承よし申に、如何なる歌かよみたると仰に、各申上て、此比あはれる歌を仕りけるとて、京童部扇にも書くちすさまぬものはなしと、中々になき身なりせば此くれに歸らんものをけふの古里、とよみける、七月の末の御尋にかく申上しに、あはれに思召しけるが、さらばよび返せと、則返り御前にめし出され、御盃下さるゝに、やがて〱歌をとせめられければ、

ゑひぬればなほくりことぞ申さるゝ、君は千代ませ君は千代ませ、とよみしに、一段の御威にて、過分の御扶持なりしと、

謹上 右兵衛督殿

〔康富記〕應永二十七年十月十三日戊申、今朝公武僧家、突鼻之輩數十人御免青蓮院殿執御申云々、公家萬里黃門豐房卿、九條三條公與少將二人御免室町殿義利御達例御戒之間、人々御方御所

御大刀進入之、其外諸人令參賀天下大慶何事如之哉、

〔康富記〕應永廿九年正月廿九日丁亥、傳聞今日廣橋亞相兼宜卿出仕事、自武家御免也、

〔看聞日記〕永享十年十二月十一日、關東事、人々室町殿義利參賀、源中納言參、近年御突鼻人數御

免奏、有御對面云々、常磐井宮、九條前關白以下、濟々御免云々、十二日、源三位參、公方御免事、就德

次雖申無御免云々、不便也、十三日、菅三位長政卿參、公方御免之間參云々、十四日夜、葉室中納

言參、是も御免人數也、

〔管見記〕永享十年十二月十二日傳聞昨日前關白、並資廣忠秀宗、豐長政等卿、資宗朝臣、長淳時兼等被免、有對面云々、珍重々々、

〔管見記〕嘉吉元年七月十日甲辰、傳聞此間爲武家勘氣輩、悉赦免、京極前黃門同出頭云々、

〔建內記〕永享十一年二月二日庚辰、相國寺長老下、向關東是猶可攻申武衛足利之由、被仰付上杉

房州憲歎云々、武衛事已除緣、鬚着黑衣之上者、有恩免、於子息者、可被聽相續之由、房州類執申、而

時宜不許、

〔吾妻鏡〕文治四年九月十四日丁未、尊南坊僧都定任、自熊野參向、是年來給置御本尊愛染并御願

畫、御所禱薰修也、二品賴朝偏令侍二世悉地給、而城四郎長茂者、爲平家一族背關東之間、爲四人所

被預置景時也、是又以定任爲師、檢仍以參上之後、有免許可、被召加御家人之由、類執申之間、二品被

仰可召仕之由、今日定任參御所、被召入簾中、談世上之雜事給、御家人等著座待、以東上南一座重忠、

山北一座景時也、爰長茂參入諸人付目、長七尺男也、著白水干立烏帽子、融二行著座中、參著橫敷宛

雜載

不載

ヲ蒙ル事三ケ度、赦免セラル、事三ケ度ニ及ブ、何ノ不義ナク、又何ノ忠モナシ、依之京童監ニ、勘道ニ科ナク、赦面ニ忠ナシト笑ヒケル、

〔鑑川親俊記〕天文十一年三月六日丁亥、細川殿御被官人、眞壁左衛門事、當方被官人生害仕候間御成敗、然處種々眞壁御忤事條、御赦免之、

〔關八州古戰錄ニ〕北畠信雄配流事

信雄ヲバ鳥山城エ押籠メ、剃髮有ベキ由ヲ命ゼラレシカバ、方及バズ入道シテ、德源院常眞ト稱セラル、此後羽州仙乏領秋田ニ遠流ニ處セラレ、翌年辛卯○文祿二年八月秀吉公ノ若子棄君○秀嗣生アリシ大赦ニ遇フテ、勢州朝熊山ヘ來リ寓居セラレケル、

大名赦宥例

〔大内家壁書〕被行常赦事

法皇寺監
御判

爲常德院殿○足利義顯御追善、於御分國中、所被行常赦也、諸人可存知之由、爲令告知、依仰壁書如件、

長享三年四月廿六日

左衛門尉奉武明

前遠江守同正任

左衛門尉同武道

〔吾妻鏡〕文治三年七月十九日戊午、右武衛消息到來、所副進院宣也、是前大藏卿奉去年被處義顯與同之過訖、可被免歸洛之由、就令申給、被免之、而本身依爲近臣、於今者可被聽昵近之趣、被仰下之故也、

泰經卿事、席々被仰二位卿畢、而御返事趣、不分明之間、御猶豫候也、然而近日殊歎申可、然之樣可計仰遣之由、内々御氣色候也、仍執啓如件、

七月一日

左中辨

院殿

足利

廿五年御佛事爲被修之云々、二日今朝出京參鹿苑院御點心料千足持參了、御對面

相國寺僧、去年僧喝食四十餘人被追出了、此事山名并畠山修理大夫申間、今日申處、無相違御免、面

面祝著云々、大外記業忠、治部越前守御賀法師號帥三人、此間御突鼻也、御免事中處無子細、仍三人

相副經祐法眼進了、立阿申次懸御目云々、三日流罪以下御罪科人爲今度御佛事御免、珍重由内

内以立阿申處流罪人ハ誰々哉ト御尋云々、四日流罪人少々御免事名字可注進之由被仰出間、

飯尾肥前守、飯尾大和守、以下奉行ニ仰付可注進旨申、注進到來者、經祐法眼令持參鹿苑院以立阿

可備上覽旨申付了、山法師戒光事、畠山申間令披露處、委細罪科次第被尋問食可有御免云々、

〔建内記〕永享十二年二月廿九日壬寅筑紫御敵小貳萬御免事及御沙汰大内持可和睦彼等之由

被仰出之、

〔新撰長祿寬正記〕同年四年○寬正ノ夏ノ比ヨリ、公方義政ノ御母君高倉殿御不例ノコト有リ、略○中

同八月八日ノ曉、高倉ノ御所ニテ御他界有リ、略○中同月十八日非常ノ大赦ヲコナハレ、罪科人數

多免許セラル、其人數ハ齋藤民部少輔御同朋壽阿彌本阿彌佐々木治部少輔義政觀世座彌三

郎、笛吹又六、日親坊等也、

〔應仁記〕亂前御晴之事

應仁丁亥ノ歲元天下大ニ動亂シ、ゾレヨリ永ク五畿七道悉ク亂ル、其起ヲ尋ルニ、尊氏將軍ノ

七代目ノ將軍、義政公ノ天下ノ成敗ヲ有道ノ管領ニ不任、只御臺所、或ハ香樹院、或ハ春日局ナド

云、理非ヲモ不辨、公事政道ヲモ不知、給青女房比丘尼達計ヒトシテ、酒宴娯樂ノ紛レニ申沙汰セ

ラレ、亦伊勢守貞親ヤ、鹿苑院ノ蔭涼軒ナンド、評定セラレケレバ、今迄最良ニ慕テ、論人ニ申與

ベキ所領ヲモ、又耽賄賂ニ、訴人ニ理ヲ付又奉行所ヨリ本主安堵ヲ給レバ、御臺所ヨリ恩賞ニ被

行、如此ノ錯亂セシ間、畠山ノ兩家義就モ、文安元年甲子ヨリ今年ニ至迄廿四年ノ間ニ、互ニ勦道

行、如此ノ錯亂セシ間、畠山ノ兩家義就モ、文安元年甲子ヨリ今年ニ至迄廿四年ノ間ニ、互ニ勦道

人皆河權六太郎也云云、感其功忽蒙原免、是木曾典厩○義仲專一者也、典厩被誅之後、爲囚人被召預梶原云云、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年正月廿七日壬子、今朝於法華堂、修故右大臣○源實朝第三年追善二品○平沙法也。○中略有施行、乞食千人、人別十疋、亦犯科者三十許輩、原免之、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年六月廿五日戊寅、合戰張本重被渡六波羅、大納言忠信卿○千景八月一日壬子坊門大納言○忠信自遠江國舞澤歸京、是依爲今度合戰大將軍千葉胤綱預之下向、而妹西八條禪尼者、右府將軍後室也、彼舊好申二品禪尼○政子之間、所有也云云、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年八月二日癸丑、大監物光行者清久五郎行盛相具之下向、今日已刻著金洗澤、先以子息太郎通案內前左京兆○北條義時早於其所可誅戮旨、有其命是乍洛關東數箇所恩降參院

中、注進東士交名書、宣旨副本罪科異他之故也、于時光行嫡男源民部大夫親行本自在關東積功也、漏聞此事、可被有死罪之由、泣雖愁申、無許容、重屬申伊豫中將○藤原實雅羽林傳達之、仍不可誅之旨與書狀、親行帶之、馳向金洗澤、救父命訖、自清久手召渡小山左衛門尉方、

〔吾妻鏡脫漏〕元仁二年○嘉祿元年八月廿七日乙卯、今日二品○平政子御葬家御佛事竹御所○源實朝御沙汰也。○中略今日伊賀四郎左衛門尉朝行、同六郎右衛門尉光重、蒙原免自配所歸參、是二位家依御追福、所被恩赦也、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年六月十六日戊辰、將軍家○宗尊親王聊御惱亦炎旱沙日間、爲御所被行赦、及數十人云云、

〔薩戒記目録〕應永三十四年十一月廿七日、赤松左京大夫○滿祐恩免事、十二月十七日、赤松前左京大夫上洛事、

〔滿濟准后日記〕永享四年五月一日、室町殿○足利義教自今夕一七日之間、可有御座鹿苑院云々、故鹿苑

云、仰曰、早所原免也、可令沙汰之者、資賴開愁眉調進之云云、

〔吾妻鏡^九〕文治五年九月十三日庚午、山利八郎預恩免、是依有勇敢之譽也、但不被聽兵具云云、

〔吾妻鏡^九〕文治五年十二月廿八日癸丑、平泉內無量光院供僧一人公號助爲囚人參著是慕泰衡之跡、

欲奉反關東之由、依有風聞所被召禁也、今日以景時被推問子細之處、件僧謝申云、師資相承之間、清衡已下四代歸依、賴佛法惠命也、爰去九月三日、泰衡蒙誅戮之後、同十三日夜天陰、名月不明之間、

昔ニモ非成夜ノシルシニハ今夜ノ月シ疊ヌル哉、如此詠畢、此事更非奉蔑、如當時俄只折節懷舊之所催也、無異心云云、景時頗褒美之、則達此由二品源賴朝還有御威原免其身、剩被加賞云云、

〔吾妻鏡^十〕建久元年八月十六日戊戌、馬場之儀也、先々會日、雖有流鏑馬競馬、依事繁、今年始被分兩日也、二品源賴朝御出如昨日、爰流鏑馬射手一兩人臨期有障、已及關如、于時景能申云、去治承四年所

與景親之河村三郎義秀爲囚人、景能預置之、達弓馬之藝也、且彼時與黨大略預原免訖、義秀獨非可沈淪歟、斯時可被召出哉者、仰曰、件男可行斬罪、由下知畢、于今現存奇異事也、然而優神事、早可召進、

但非指堪能者、重可處罪科者、則招義秀、召仰此旨之間、射之訖、二品召覽其箭之處、箭十三束、鏑八寸也、仰曰、義秀依達弓箭有驕心、與景親之條案先非今更奇怪也、然者猶可射三流作物於有失禮者、忽可行其咎者、義秀又施其藝、始終敢無相違、是三尺手挾八的等也、觀者莫不感二品變鬱陶、住感荷給

云云、九月三日甲寅、大庭平太景能申云、河村三郎義秀於今者可被梟首歟者、仰曰、申狀太不得其意、早可處其刑之由、雖被仰付、景能潛扶之、歷多年也、依流鏑馬賞原免訖、今更何及罪科哉者、景能重

申云、日來者爲囚人之間、以景能助成活命、慙以蒙免許之後、已擬餓死、如當時者、被誅事還爲彼可爲喜歟者、于時二品頗令咲給、可還住于本領相模國河村鄉之旨、可下知者、

〔吾妻鏡^十〕建久三年六月十三日癸丑、暮下源賴朝渡御新造御堂之地、畠山次郎佐貫四郎大夫、城四

郎、工藤小次郎下河邊四郎等、引梁棟中、愛納土於夏毛行、騰有運之者、被尋其名之處、景時申云、因

ラレテ今斯ル身トナレリ、此童ヲ免シ置テハ、定後惡カリナシ、上人ガ奉公其恩忘ガタケレ共、此事ハ難辭也トテ、ツヤノ動給ハザリツルヲ、日比ノ忠共申續ケテ、上人ガ心ヲ破給テハ、鎌倉殿モ爭冥加オハスベキ、此ヲタビタラバ、鑓テ法師ニナシテ佛法修行センズレバ、更ニ後惡事侍ルマジ、若不預給バ、文覺鎌倉ニテ飲食ヲ斷思死ニシテ御子孫ノ怨靈トモ成ベシナド、一度ハ威ヅ、一度ハスカシツ、種々ニ申ツル程ニ、抑維盛卿息ヲバ、頼朝ヲ相シ給シ様ニ、見給フ處アリテ角ハ申請給歟ト、問給ツル間、是ハ其儀ニ不思寄、免方ナキ程ノ不覺ノ人ニテ、聊モ心ニ籠タル事ハ侍ラズ、ワリナキ姿ノ不便サニ慈悲ノ心ニ催サレタトマデ申タレバ、免給スト、ユ、シク氣色シテゾ云ケル、北條ハ承シ日數モ過シカバ、御免ナキニコソト思給ツレバ、罷下ツルニ、賢クゾ悞仕ザリケル、今一時モ遅カリセバ、本意ナキ事モ有ナマシト申ケレバ、上人實ニ日數モ延スレバ、無心元ツルニ、今日マデ別事ナキハ、御邊ノ御恩トゾ悅ケル、

〔吾妻鏡〕文治三年十月四日辛未、千葉新介胤正參申云、重忠被召籠、已過七ケ日也、此間寢食共絶畢、終又無發言語、今朝胤正、盡詞雖勸膳、不許容、顏色漸變、世上事終思切歟之由所見及也、早可有免許歟云云、二品頗傾動給、則以被原免、仍胤正奔歸、相具參上、重忠著于里見冠者、義成座上諸傍輩之浴恩之時者、先可求眼代之器量、無其仁者、不可請其地、重忠存清潔、太越傍人之由、插自慢意之處、依真正男不義、逢耻辱畢云云、其後起座直令下向武藏國云云、

〔吾妻鏡〕文治四年九月廿一日甲寅、岡崎四郎義實依罪科可勤仕鶴岳南御堂等宿直之由、舍命數日、惱丹府、而義實郎從、於宮根山麓、獨進山賊主字王藤次之間、今日所蒙免許也、

〔吾妻鏡〕文治五年正月十九日庚戌、若君頼家御方結構風流、摸大臣襲儀、藤判官邦通爲有禮營此事、而近衛司相交平胡籙差様、丸緒付様、不分明之處、三浦介預囚人武藤小次郎資頼平氏家入、監物、太郎頼方弟彼箭事、得故實之由發言、義澄求次、伺御氣色曰、内々雖可召仰之、若君御吉事也、爲囚人爭役之哉云

了、依武家執奏有、此沙汰云々、

〔梅松論〕爰に京都の聖斷を聞奉るに、記録所決斷所をおかるゝといへども、近臣臨時に内奏を経て非義を申斷間、綸言朝に變じ、暮に改りしほどに、諸人の浮沈、掌を返すがごとし、或は先代滅亡のときに通來る輩、又高時の一族に被官の外は、寛宥の義を以、死罪の科を有らる、

〔太平記十〕金剛山寄手等被誅事

二階堂出羽入道道蘊ハ、朝敵ノ最一、武家ノ輔佐タリシカ共、賢才ノ譽、兼テヨリ寂聞ニ達セシカバ、召仕ルベシトテ死罪一等待サレ、懸命ノ地ニ安堵シテ居タリケルガ、○下

〔吾妻鏡三〕養和二年

○壽永元年

二月二日癸卯、高場次郎郎從、生澤五郎蒙御氣色、被召預小山小四郎朝

政、是神馬進發之前、殊可勞飼之旨、被仰含之處、此男有緩怠事之故也、但生倫神主、如此利罰不可叶、神慮之由、頻依傾申、被原免云云、

○按ズルニ、本條ハ鎌倉幕府創立以前ノ事ニ係レドモ、姑ク此ニ收ム、

〔源平盛衰記四十七〕

六代蒙免上洛、附長谷觀音并稽文佛師事

東ノ方ヨリ墨染ノ衣著タル僧ノ文袋頭ニ歸テ、鞍毛ナル馬ニ乗テ馳來、何者ナラント思ケル程

ニ、上人

○覺

文ノ弟子ニ覺文ト云僧成ケリ、今一足モ急トテ先立テ馳ケルガ、馬ヨリ下ヤ遅キ、高聲

ニ悞チシ給フナ、北條殿トテ、文袋ヨリ二位殿ノ御免シ文取出タリ、北條被見ケレバ、自筆ニテ書レタリケル、其詞ニ云、小松三位中將息、六代高雄上人類ニ申請間所預給也ト書レタリ、北條高

ラカニ讀上ル、戲呼嘻キ者哉トテ打置ケレバ、免シ給ケルニコソトテ、武士共聞テ悅アヘリ、齋藤

五、齋藤六、是ヲ聞ケン心中幾計也ケント難測、サル程ニ上人モ馳來リタリ、馬ヨリ下ヤ、北條

殿、若公ハ申預ヌ、今一足モトテ免シ文ヲ先立テ奉ヌ、定メテ見給ヌラン、鎌倉殿宜ヒツルハ、此重

ハ平家ノ嫡々ノ正統也、父ノ三位中將ハ、初度ノ討手ノ大將軍也、イカニモ難免、賴朝モ幼稚ヲ有

勘文可奏聞之由被仰下、次參院奏聞勘文有御爪點已上九人、上卿中宮權大夫申領狀、即申入了、次參內奏覽勘文、入夜上卿參陣着端座予。經藤原參進膝突進勘文、有貼紙、先例不同、然而免人上卿未參已前予於鬼間召主殿司召硯書合事引墨點。

〔日蓮聖人註畫讀〕赦免狀第二十五

文永十一年甲戌二月八日、相模守

時宗北條

夢赤衣童子來流人僧日蓮御房可赦免三呼矣、翌朝賴綱

來曰、昨夜夢青衣童子來流人僧日蓮御房可赦免三呼矣。中此年二月十四日之赦免狀到來焉、副

元帥之豪族等雖不甘免許、但以時宗一人之嚴命所寬宥也、其狀云、日蓮法師御勘氣事所被免許候

也、文永十一年二月十四日、藤左衛門入道殿行兼。在判、清長在判、行平在判、光綱在判、中同月三十

三日、出塚原著網羅津。中於越府兵士多隨從、故無事而同月二十六日入于鎌倉、

〔公卿補任後二條〕乾元二年卯

前權中納言正二位藤爲兼、閏四月日自關東蒙免除、自佐渡國被召返之、

〔太平記十二〕公家一統政道事

萬里小路中納言藤房卿ハ、預人小田民部大輔相具シテ、常陸國ヨリ被上洛、春宮大進季房ハ、配所

ニテ身罷ニケレバ、父宜房卿悅ノ中ノ悲ミ老後ノ泪滿袖、法勝寺圓觀上人ヲバ、預人結城上野入

道奉具足上洛シタリケレバ、君法體ノ無恙事ヲ悦ビ思召テ、懸テ結城ニ本領安堵ノ被成下輪旨、

文觀上人ハ硫黃島ヨリ上洛シ、忠圓僧正ハ越後國ヨリ被歸洛、總ジテ此君。中後笠置ヘ落サセ給

シ刻、解官停任セラレシ人々、死罪流刑ニ達シ其子孫、此彼ヨリ被召出、一時ニ整懷ヲ開ケリ、

〔後深心院關白記〕永和元年正月十七日、今夜流人歸京事宣下云々、上卿新藤中納言保光卿職事俊

任、仰詞美濃國流人行知卿令召返、上卿召辨。仰詞、同前仰可令作官符之由云々、流人。五人交名、注折紙

下上卿、仍最初人許仰之云々、相尋俊任所記也、兩僧正、赤松兩輩、彼是五人也、儀像ハ於配國令他界

たひ、滿寺なごりをおしみて、萬切の霞よりいで、九重の雲にぞをくりたてまつりける、

〔百練抄^{十二}〕建保五年三月廿二日、被行免者^{廿五}人、依中宮^{〇藤原}御産御祈也、七月十七日、被行非常赦令、依上皇^{〇後鳥羽}御不豫御祈也、

〔百練抄^{十五}〕寛元元年二月廿二日、己巳、後鳥羽院御忌日、有免者云々、

〔葉黃記〕寛元四年六月十七日甲辰、依炎早有免者、

〔葉黃記〕實治二年七月二日丁未、鳥羽院御國忌、任例有免者、兼仰官人章高成勘文、可被免之輩廿八人、^{〇藤原}定嗣^{内々}注進之^人、且^又仰官人^全選之^人、任計申有御點、近年四人、不幾之間、纔被免四五人、當時多其數、仍爲

攘災殊申行之、予參内候、小板敷藏人佐宣下之、予給勘文、下官人章種、次第如例、參仕官人、左尉章種以下七人也、十月十一日、土御門院御國忌也、^{〇中}先爲行免者參内、^{〇註}左尉章宗、以經、章職、章種、

右尉章澄、右志明盛、少志範俊、章高等參陣、予候、小板敷藏人佐下勘文、原免四二十六人、^{〇註}數^{四十三人}也、予下章宗、官人向獄門之間、有無四度計事等、予細後日勘發了、未廻事了、十一月四日丁未、今日

始廳事、^{〇中}覽免者勘文、^{經犯四二人}、^{〇註}輕犯也、仍予合點件、因返給之、

〔新抄〕文永元年十月二日癸卯、小除日、并復任除目侍從中納言爲氏參議、右中將伊頼頭、右大弁雅言以下參入之、次同上卿被行、流人召返、^{〇中}原^{非違使}繼使、

〔吉續記〕文永四年五月廿三日、今日御如法、經十種供養日也、可有免者之由、兼日被仰下之間、着束帶^{唐裝}、先參關白殿内、覽四人勘文、^{自大理去}、^{夜送之}、早可奏聞之、由有仰、次參龜山殿、以權尙書申入之、原免之輩九人、有御爪點、

〔吉續記〕文永四年十月十日、自大理許明日免者勘文、^{別經犯輩一通、加聽候}、以官文送給之、明日免者

上卿一條中納言日來領狀、俄申所勢之由、不參之間、初相催權中納言爲役、夫工奉行上卿明日爲齋日、神事之日、尤可憚之、由被示、然而爲別勅者可令參之、由申、十一日、先參關白殿、^{〇藤原}覽免者

〔法然上人行狀畫圖 三十六〕月輪殿○藤原のおほせをかるゝ趣をもて光親卿たび／＼申入らる

といへども、寂慮なを心よからず、まかるに上皇御夢想の御事ありけるうへ中山の相國公實、嚴親の善知識たりし因縁をわすれず、上人流刑の事をなげきたまひて、念佛興行の事、さだめて佛意にそむかざらんか、門弟のあやまりをもちて、ごがを師範にをよばされ、罪科せらるゝ事、冥鑑はかりがたきよし、まきりにいさめ申付ければ、おりしも最勝四天王院供養に大赦ををこなはれけるに、その御沙汰ありて、同年元十月二十五日改元、十二月八日、勅免の宜旨をくだされけり、かの狀云、

太政官符 土佐國司

流人藤井元彦

右正三位行權中納言兼右衛門督藤原朝臣隆衡宣奉勅件の人、は二月廿八日事につみして、かの國に配流、まかるをおもふどころあるによりて、ごにめしかへさしむ、但よろしく畿の内に居住して、洛中に往還する事なかるべし者、國よろしく承知して、宜によりてこれををこなへ符到奉行、

承元元年十二月八日

左大史小槻宿禰

權右中辨藤原朝臣

勅免のよし都鄙にきこえしかば、京都の門弟は再會をよろこび、邊鄙の土民は餘波をおしむ、よろこびとなげきと、あひななばにぞ侍りける、○中恩免ありといへども、なを洛中の往還をゆるされざりしかば、攝津國勝尾寺に、まばらくすみたまふ、○中勝尾寺の隱居もすでに四箇年になりぬ、花洛の往還なをゆるされざりしに、○中同年○建暦元年十一月十七日、彼卿の奉行として、花洛に還歸あるべきよし、烏頭變毛の宣下をかうぶり給ぬ、則同廿日、上人歸洛し給ければ、一山徳をま

之仰之、

〔吾妻鏡九〕文治五年五月十七日丙子、可召返伊豆國流人前律師忠快之由宣下狀到着、去月十五日、源中納言親通左大辨宰相實親少納言重繼朝臣、左少辨定經等參陣、奉行職事、宮內大輔家實云云、同時被召返流人、前內藏頭信基朝臣備後前中將時實朝臣、但不及二城前兵部少輔尹明入道出雲藤原資定淡路前僧都全真安藝前法眼能圓法勝寺前上前法眼行命熊野前別等也當常陸國等也、

〔玉海〕建久元年十月一日壬午、今日於日吉社、法皇白河後被供養千僧、有敕令非常枝、謂大神宮八幡宮等訴之、外皆赦除云々、

〔百練抄下〕建久元年十月一日壬午、法皇白河後於日吉社、被行千僧御讀經、權中納言通親卿、於仗座被仰敕令事、

〔吾妻鏡十三〕建久四年四月十一日丁未、住吉神主昌助、參鎌倉御留守、以女房申云、去月依舊院白河後御周闕、可被召返之由、被下官符、是去治承三年五月三日、所被配流伊豆國也、日來雖未爲赦身、潛仕將軍家云云、

〔吾妻鏡十三〕建久四年四月廿九日乙丑、去月十二日被召返流人等、佐々木左衛門尉定綱在其中之由、一條前黃門被申送之、又彼弟經高盛綱等同言上其旨、將軍家太歡喜給、治承四年以來、專顯勤功之間、爲殊寵愛之處、依山門訴訟、去々年所被配流薩摩國也、十月廿八日辛酉、佐々木左衛門尉定綱參着、此程薩摩國流人也、去三月十二日、依舊院御一廻御佛事、被免勅勘云云、將軍家日來殊歎息給之處、適逢赦參上之間、甚歡喜給、則召御前云云、近江國守護職事、如元可執行之山云云、

〔百練抄順德〕建曆元年九月七日、山堂衆四百人許、爲院廳沙汰、被居北山妙見堂、是爲令勤行公家御祈也、年來蒙勅勘隱居所々、今蒙寬宥、

〔仲資王記〕承元五年元建曆十月卅日戊申、侍從自今日被召籠內裏、去夜除目役不仕職事二人、殿上人五人如此云々、十一月四日壬子、侍從召籠、今夕被恩免、人々退出云々、

朝廷敕宥例

正月十六日節會於內裏北陣檢非違使官人出獄舍者含宣命追放之是例年之儀也又國忌并武家御追善之時有其沙汰至大赦者召返流刑人放免囚獄者仍每度執行內談召出流帳獄記勘辨其輕重被赦免之流人者對頭人成奉書禁獄者對所司代遣奉書令下知之是則爲開闔之所役乎

〔甲子夜話〕
予○松浦清ガ侍妻ノ中ニ、外山家ノ女アリキ。其父モト公家ナリシガ、年若キトキ身持

コトナラズ、退身シテ隱遁セシ人ナリ。名了圖予其人ト問答セシ中ニ、奇ト覺ユルコト一二記ス

其一ハ刑罰ハジメトカ云テ、其名毎年正月某日、月日何ノ處ニカ、亦罪人ヲ率出シテ、此

云者ハ、此シコトヲカニ出テ勤トシテ、常ハ何カノ業ヲシテ居行ナリ、例年此事行ハル。時ニハ、翠人ノ代トシテ利場ニ出テ勤トシテ、常ハ何カノ業ヲシテ居行ナリ、例年此事行ハル。時ニハ、翠

開
檢非違使正面ニ列シ、ゾノ下ニカノ罪人ヲヒキ出ヅ、其外其事ニ與ル者皆々官服ヲ着セリ

罪人モ亦烏帽子着服アリテ、敷皮ノ上ニ坐ス、時ニ側ヨリ罰文ヲ讀メバ、大刀執モ同ジク服色

シテ其後ニ回リ、大刀ヲ揚テ首ヲ打ツ、其大刀ハ刃ニハアラデ、木ノ其木小杪ヲ執ナリ、罪人ハ

大刀執ノ首ヲ打トキ、彼ノ胃シ鳥帽子ヲ脱ギテ敷皮ノ上ニ置、其身ハ退去ル、時ニ側ノ人其鳥

子ヲ取リテ、檢非違使ニサ、ゲテ事畢ト云、或ホド世ノ俳優ニ類シタレドモ、古政ノ遺レル

ナレバ、
1
我々
の
主
張
は
、
六
月
十
日
作
成
の
文
書
に
示
す
如
く、

安部レニ、五月七日、更ニ安部、主民ヲ匿ミ、之ヲ卑人ニ擬シテ、客列、伏ヲ爲

（註）ニハニ谷母命年正月十日何屬ニテ韃馬ノ仁民ヲ厚シ之ヲ冀メニ撰ミテ處刑ノ見ヲ爲

三月三日 戊辰 旦見區天日乃以次下則中以見區丁示非宮故之日季間又丁亥勿
 二日 上耕者金取篇者金似仙ニフリを看ニヘシ

海文治三年四月三日甲戌旱旦慈觀來申仍以勅令候館以親經可施行非常勅之由奏聞又司被物

聖文治五年五月四日癸亥比日太上皇去建。○後冷日天王寺共差千部共差十日寺屋雪等。○中

中○
 藤原
 召
 河
 方
 四
 天
 王
 三
 伊
 孫
 千
 商
 法
 華
 十
 口
 持
 經
 者
 等
 略

相嘗結厚歟所爲皆此大善也略
 兼實
 召更辨定長章曰
 傳召
 非常熱可通行之由奏事由御

之仰聞食之由卽以同人仰左大將之輩非教限其外皆免云

部二十六 中編 敎宥 九六三

上卿大理上卿之時於小版敘 辦文大理上卿之時於小版敘 檢非違使 官外記 因勘文大理上卿之時於小版敘

仰詞大理上卿之時於小版敘 仰詞大理上卿之時於小版敘 仰詞大理上卿之時於小版敘 仰詞大理上卿之時於小版敘

夕拜備急至要抄大理上卿之時於小版敘 夕拜備急至要抄大理上卿之時於小版敘 夕拜備急至要抄大理上卿之時於小版敘

結願免者 上卿大理上卿之時於小版敘 結願免者 上卿大理上卿之時於小版敘 結願免者 上卿大理上卿之時於小版敘

夕拜備急至要抄大理上卿之時於小版敘 夕拜備急至要抄大理上卿之時於小版敘 夕拜備急至要抄大理上卿之時於小版敘

免者大理上卿之時於小版敘 免者大理上卿之時於小版敘 免者大理上卿之時於小版敘 免者大理上卿之時於小版敘

吾妻鏡大理上卿之時於小版敘 吾妻鏡大理上卿之時於小版敘 吾妻鏡大理上卿之時於小版敘 吾妻鏡大理上卿之時於小版敘

被免至重科之族者大理上卿之時於小版敘 被免至重科之族者大理上卿之時於小版敘 被免至重科之族者大理上卿之時於小版敘

吾妻鏡大理上卿之時於小版敘 吾妻鏡大理上卿之時於小版敘 吾妻鏡大理上卿之時於小版敘 吾妻鏡大理上卿之時於小版敘

一放免事 右於殺害人者大理上卿之時於小版敘 一放免事 右於殺害人者大理上卿之時於小版敘

以別御計不謂年紀大理上卿之時於小版敘 以別御計不謂年紀大理上卿之時於小版敘 以別御計不謂年紀大理上卿之時於小版敘

新編追加大理上卿之時於小版敘 新編追加大理上卿之時於小版敘 新編追加大理上卿之時於小版敘 新編追加大理上卿之時於小版敘

科之外竊盜刃傷博奕謀略以下輕罪大理上卿之時於小版敘 科之外竊盜刃傷博奕謀略以下輕罪大理上卿之時於小版敘

新編追加大理上卿之時於小版敘 新編追加大理上卿之時於小版敘 新編追加大理上卿之時於小版敘 新編追加大理上卿之時於小版敘

於今日以前者不謂年紀遠近可被赦免大理上卿之時於小版敘 於今日以前者不謂年紀遠近可被赦免大理上卿之時於小版敘

武政軌範大理上卿之時於小版敘 武政軌範大理上卿之時於小版敘 武政軌範大理上卿之時於小版敘 武政軌範大理上卿之時於小版敘

侍所沙汰大理上卿之時於小版敘 侍所沙汰大理上卿之時於小版敘 侍所沙汰大理上卿之時於小版敘 侍所沙汰大理上卿之時於小版敘

一赦沙汰事 右於殺害人者大理上卿之時於小版敘 一赦沙汰事 右於殺害人者大理上卿之時於小版敘

以別御計不謂年紀大理上卿之時於小版敘 以別御計不謂年紀大理上卿之時於小版敘 以別御計不謂年紀大理上卿之時於小版敘

新編追加大理上卿之時於小版敘 新編追加大理上卿之時於小版敘 新編追加大理上卿之時於小版敘 新編追加大理上卿之時於小版敘

寶德元年十二月十四日

〔勸仲記〕弘安十年二月十七日戊寅今日後嵯峨院御八講結願也、被行免者、因勘文、予藤原兼仲、善合出、輕犯五人、大理參入着小板敷、予進出自上戸方、懷中勘文、於小板敷取出勘文傳大理、大理置笏、取勘文披見結巾、仰云、今日後嵯峨院ノ聖忌ニ當ル、輕犯因任合點令原免ヨ、大理稱唯、予參御所方、大理出無名門、立中門下北扉召隨身召官人、官人五位尉章保已下十四人、列居床子座立、北扉前西上蒙許之後上、首章保參進、下勘文仰宣下、詞退、官人等左右相分立、四足門下、被勘文次第與奪、次向獄舍、宸儀、多於中門有、觀覽儼然次第、近代頗稀歟、大理參御所、有御對面予歸局休息者也、官人五位尉章保、職降、重友六位十一人參仕、

〔夕拜備急至要抄臨時〕一非常赦天下重事之時、被之

日次 上卿 大內記詔書 中務輔 駁負佐可參 官外記 檢非違使可參 囚人答日可

理、可拘繫大理、可計申之、由可仰、

詔書清書奏聞之時、可有御畫、流人召返事有之者、交名仰官可令注申、

結政請印料、宰相少納言可相催也、

職事仰詞仁安三、入道前太政大臣平清盛、賴忠、顯、殊有思食、天下可大赦、但神社、評、聖、非、赦

業、宣行非常赦、任、永久二年例、令作詔書、此次仰云、詔書施行已前、可免獄、因寬、喜、依、天、變、并、諸、國、異、

損、可、被、行、非常、赦、依、某、年、例、令、作、進、詔、書、常、仰、調、依、其、事、被、行、非常、赦、詔、書、施行、已、前、且、可、免、囚、人、等、

上卿 明日可被行非常赦、可令奉行給者、依天氣言上如件、

廷尉 明日可被行非常赦、可令參陣給者、依天氣執達如件、

明日可被行非常赦、因交名事、可令注進之、由可令下知給者、依天氣上啓如件、

正應奉行之時、如此仰也、

〔夕拜備急至要抄臨時〕一免者

重已發覺未發覺已結正未結正咸皆赦除但犯八虐故殺謀殺私鑄錢強竊二盜常赦所不免者不在此限又復天下今年半饑老人及僧尼年百歲以上給穀四斛九十以上三斛八十以上二斛七十以上一斛庶在饑饉以耀三辰永戢干戈以理萬國普告中外俾知朕意主者施行

〔康富記〕寶德元年十二月十四日今夜朔旦冬至恩詔宣下也上卿權大納言隆夏卿參着仗奧座職事

頭右中辨冬房朝臣進仰勅語次上卿移端座令敷弼次上卿以官人召大內記大內記菅原在治朝臣

參弼上卿仰云依朔旦冬至可被行赦任永仁例詔書令作進與大內記唯退次令少內記中原康顯進

詔書草納宮上卿披見之令持少內記進弓場付右中辨奏聞之即被返下上卿歸着陣內記置宮欲退

之處上卿可成清書之由仰之返給內記給之退入次上卿以官人召檢非違使左衛門大尉坂上明世

東帶帶劔不帶弓箭垂綬直參弼上卿仰免者事仰詞可尋之此後檢非違使出左衛門陣外於門外仰看督長令放

免囚人二〇二一人兼日奉行職事仰明世明世傳仰次少內記清書詔書令持參上卿披見了如先付

弓場奏聞即被加御晝被返下上卿於弓場乍立披見御晝有無歸着仗座內記置宮退出次上卿以官

人召外記少外記清原忠種參小庭上卿仰云中務輔候哉外記申云中務不參次上卿目外記外記趁

進就弼上卿賜詔書納宮仰云可傳給中務輔外記稱唯賜之退出事終上下退出之期中務輔卜部兼

敏雖參陣事終之間空以退出了

詔龜策開先符則軒皇膺天正之期鳳曆頒新朔則漢主享日至之禮咸每敬哲之感必有受命之休朕

登紫極雖垂濟異之尊臨赤縣未施滋涼之化爰有司奏云十一月朔旦冬至尺竿通測景寸管記封陽

惠澤波喧負冰之鱗早洽春德蒼穹風軟縠雲之翅先知南飛時應紀而降佳辰天不言而授延祉聖鑒

古猶希值斯運昧非今何成自娛與衆庶同兆祥爲群臣共相賀自寶德元年十二月十四日昧爽以前

大辟以下無輕重已發覺未發覺已結正未結正繫囚見徒皆以赦除庶答章首珍睨之猷呈乾心資始

之瑞布告遐邇俾知朕意主者施行

古事類苑

法律部二十六

中編

赦宥

赦宥ハ、刑名未ダ定マラザル前ニ於テスルモノト、既ニ定マレル後ニ於テスルモノトアリ、
一兩人ヲ赦スト、數十百人ヲ同時ニ赦ストアリ、其數十百人ヲ同時ニ赦スモノハ、多クハ朝廷幕府ノ禳災追福ニ出デシモノニテ、朝廷ニテハ、詔書ヲ以テ之ヲ行ヘリ、又赦宥奉書アリ、幕府奉行ノ手ヨリ發スル赦令ナリ、

赦宥詔書

〔勸仲記〕正應六年

○永仁元年

八月五日戊子今日改元定也

○中略

大理爲奉赦令事猶祗候、上卿召內記被

仰詔書事、大內記道名持參草

入

上卿令取給有一見大理

予

兼仲

藤原

祗候之間可見之由有仰、予見畢

次第返上大理、申云、此詔書大赦之由、載之如何、兼日申定常赦畢、而大赦之由被載之上者、官人守詔

書可施行者也、赦之次第可相替使廳無量大事之由、大理驚申之間、上卿召頭辨被奏聞子細、且令內

覽執柄

○藤原家基

仰云、大赦之由雖被載之、常赦之條勿論也、頭辨申上卿、此事猶大理有不審之氣、大夫

史顯衡申云、大赦天下之詞爲每度之詞、勿論之由申之、依此沙汰時刻押移畢、大理似不覺悟詔書作

例歟爲之如何

○中略

上卿召中務輔

少輔

被下詔書

次被仰赦事於大理、大理奉上宣於中門下召官人

仰之歟、此儀不見及

○中略

〔迎陽記〕康應二年三月廿六日

○中略

詔

○中略

改康應二年爲明德元年、又仁解却祇禍、卽轉福、大赦天下、今日味爽以前、大辟以下罪無輕

古事類苑

法律部二十六

中編

赦宥

赦宥詔書 赦宥口宣

赦宥法

朝廷赦宥例

幕府赦宥例

大名赦宥例

幕府赦宥摺紳

不赦

雜載

九五九

九六一

九六三

九六八

九七三

同

九七四

同

ふ、

〔伊達成實記〕政宗へ藥院玄意法印、寺西筑後守、岩井丹波四人ヲ以御タヅチニハ、今度關白臣秀謀叛ノ所一味仕鹿狩ノ砌山へ參、談合ノヨシ被聞召候由御意候、政宗御目被下候間、節々罷出候へドモ、左様ノ儀無之候由被仰分候處、重而奥州へ下向ノ時分秀次ヨリ餞ヲウケ候由被聞召候、コレハ何トテ不申上候由御詮ニ候、政宗行當迷惑仕申候、奥州下向ノ時、御イトマ乞ニ罷出候へバ鞍十口、帷子二十、粟ノ木工ヲ以下サレ候由、其時四人衆路次ニテ御談合候而、天道ツキ、此一儀不被申上候由落涙仕申由被達上聞ニ候へバ、子共兵五郎ヲ若君様へ御披官始ニアゲマウサレ候間、兵五郎ニ國ヲ可相渡候、政宗ハ遠島ヘモ可被遣候、在所ニ居申候家老共登セ可申候、其段仰付ラルベク候、誓紙ヲ仕候迄屋敷ニ居可申由被仰出候、四人ノ御使者衆藥院ノ内ヘモ御入ナク、庭ヨリ御前相濟候、心安可被存由、先仰ラレ候後、御詮之通被仰渡候付、聚樂御歸、御閉門ニテ御座候、

○按ズルニ、是ハ閉門シテ謹慎セシナリ、

〔會津陣物語〕政宗自白石城引退、岩手澤事

白石落城ノヨシ景勝

杉上

被聞、大ニ立腹シ甘精ヲヨビ、汝武勇ノ撰ニ違テ、白石城ヲ預ル處ニ

妻女ノ死別ニヨリ、幼少ノ子共ニマヨヒ、途方ヲ失ヒタル上ナレバ、命ノ義ハ赦免候間、私宅ニ

閉門イタシ可罷在ト、被申渡ケレバ、備後守モ籠居シテゾ居タリケル、

〔吾妻鏡 三十四〕

仁治二年十二月卅日癸未、前武州

北條

參、

右幕下

北條

右京兆

北條

等、

法華堂給

又、獄囚及乞丐之輩、有施行等三津藤二爲奉行、

○按ズルニ、是ハ盤居シテ罪ヲ待チシナリ、

〔家忠日記増補〕慶長四年十月八日、増田長盛、長束正家等ガ讒ニ依テ、土方勘兵衛尉ヲ太田佐竹義宣

ニ誦セラレ、今日配所ニ赴ク。○中略淺野彈正少弼、長政ハ、利長田前ガ縁者タルニ依テ、長束、増田等

是ヲ讒シテ巷説止ズ、故ニ甲州ノ府ニ盤居スベキノ由、台命アルニ依テ、大坂ヲ發ス、

〔葉黃記〕寛元五年○寶治元年正月十九日癸酉、近衛前關白○藤原兼經、蒙攝政詔給、二位中納言○實收等參

陣。○中上皇○嵯峨御治世六ケ年執柄改補于今四ケ度希代也、一條殿○藤原實經門々被閉之、北小門許

閉之、庶幾弘景之牛、北叟之馬也、

〔吾妻鏡二十三〕建保五年五月十二日己丑、壽福寺長老莊嚴房律師行勇參御所、是所帶相論之輩事

引汲申之故也、而此儀已及數度之間、將軍家○源朝有御氣色、以廣元朝臣被仰出云、三寶御歸依雖甚

重、政道事類以被執申之、曾非僧徒之行儀、早停止之、可被專修練云云、行勇心中恨之、泣歸本寺閉門

云云、

〔愚耳舊聽記下〕尾崎三目内逆心附今小三郎忠義之事

扱其後小三郎申ケルハ、御敵取籠タル故ト申ナガラ、正敷御坐城ヲ責シ事、ソノ恐ナキニモアラ

ズ、其上尾崎三目内ノ御兩人ハ、正シキ御敵トハ申ナガラ、御家來ニテノ歷々タルニ、此若輩者ガ

討シ事、御機嫌難計、重而御意ノ下ル迄トテ、小三郎ハ閉門シテコソ居タリケル、義嗣卿○足利をめ

し捕奉リ、林光院へ押籠申、

○按ズルニ、此ハ閉門シテ罪ヲ待チシナリ、

〔大友興廢記十二〕三位入道豊後國退散之事

此度丹波守○福備中守○村野が不善をかうぶり、閉門のとき、えひて理り申せしを宥免なかりし

ゆゑ、伊東の家義久のためにやぶられて、天正四年丙子十二月廿八日に、豊後の國へひき越たま

散位前權中納言從二位藤實種 三月日辭籠居、

〔吾妻鏡 二十六〕元仁元年八月廿九日、前奥州○北條時政後室禪尼、依二位家○平政子仰下、向伊豆國北條郡、

可籠居彼所云云、有其科故也、

〔應仁記〕武衛家騷動之事附畠山之事

畠山政長之徒弟右衛門佐義就久シク蒙御勸氣籠居シテ居タリシヲ、山名入道○宗金ノ計ヒニテ、

赦免ヲ蒙リテ上洛ス、

〔松隣夜話中〕越後ノ科人ノ御仕置、一の重科ニハ、刀脇差ヲ召取ラレ、一代身ニ帶ズ○但侍格別以下二番

死罪、三番追出、四番所領沒收、五番與力同心ヲ放サル、六番籠居スル等也、

〔薩戒記〕永享六年六月十二日、抑左相府○足利義教政務之後、遺事之輩、已及數多、

從一位資家卿○該沒收所領入道大納言家俊卿○該止經國盤左中辨資親朝臣○依父事

〔吾妻鏡 十八〕元久二年四月十一日、戊戌、稻毛三郎重成入道、日來有盤居武藏國、近曾依遠州○北條時政

招請引從類參上、怪之人旁有云云、

〔吾妻鏡 二十一〕建曆三年○建保元年四月十五日、丙戌、和田新兵衛尉朝盛者、爲將軍家○源朝御寵愛等倫

敢不諍之、而近日父祖一黨含恨、忘拜趨朝、盛同拋夙夜長番令盤居○下

○按ズルニ、是ハ憤怒ノ餘リ盤居スルナリ、其語ノ刑名ニ同ジキヲ以テ、姑ク此ニ載ス、以下此

類アリ、

〔家忠日記増補〕天正八年五月五日、三浦兵部少輔ハ、松平周防守康親ガ臣、岡田竹右衛門尉元次、是

ヲ擊捕ル、然ルニ一色ノ某大神君○龜川康康ノ御勸氣ヲ蒙テ、周防守康親ガ許ニ盤居シテ、此陣ニ在

リ、竹右衛門尉元次、三浦兵部少輔ガ首ヲ一色ニ譲リ與エテ、其戰功ヲ以テ、一色大神君御赦免ヲ

蒙ラン事ヲ請フ、

放召人

られ候、慮外は大小共によらず、我家^田武の法度に申定候間、其様子さまへあらため、少も依怙のなき様に手をまはして、能々聞候へば、本郷八郎左衛門道理なる故に、其まゝ置候、然れ共相手板垣なれば、仕付のために、彼本郷を座敷籠にいれ置候所に、^{略下}

○按ズルニ、座敷籠ニ入置クトハ、次下ニ列舉スル放召人ノ如ク禁メ置クラ云フナルベシ因禁ノ稍輕キモノナリ、

〔太平記〕資朝俊基關東下向事附御告文事

東使兩人^{南條宗直}資朝俊基ヲ具足シ奉テ、鎌倉へ下著ス、此人々ハ、殊更謀叛ノ張本ナレバ、雖テ誅セラレヌト覺シカドモ、俱ニ朝廷ノ近臣トシテ才覺優長ノ人タリシカバ、世ノ驥リ、君ノ御憤ヲ憚テ、嗾間ノ沙汰ニモ不及、只尋常ノ放召人ノ如ニテ侍所ニゾ預置レケル、

〔太平記〕還幸供奉人々被禁殺事

宇都宮^藤泰ハ放召人ノ如ニテ逃ヌベキ隙モ多カリケレ共、出家ノ體ニ成テ^{略下}

〔甲陽軍鑑〕^{十四品第四十下}一はなしめしうご家の内に居候は、楚忽ニ其居家へ押込べからず、うちに科人いくたりありて、何道具を持たると聞定、其上もし此方にあわてもの候て、敵味方を見さかひず、切つつきつする物なれば、其遠慮尤に候、

籠居

〔易林本節用集〕^{諸語}籠居

〔吾妻鏡〕^五文治元年十一月廿六日乙巳、大藏卿泰經朝臣籠居、是義經申下追討宣旨事、依爲彼朝臣傳奏、源二位卿殊靈申之趣、達叡聞之間、勅定如此云云、

〔増鏡〕^{十四卷}別當^{資朝}藤原は佐渡の國へながされぬ、俊基はいかにしてのがれぬるにか、みやこへ歸りぬれど、ありしやうにはいのでつかへず、こもりゐたるよしなり、

〔公卿補任〕^{後花園}永享四年

〔落穂集前編六〕同月○文祿四年七月八日秀次卿は聚樂の屋形を出十日の曉方高野山へ登山あり、青巖寺へ入て閑居あられ候付古來より殺生禁斷の高野の儀に候得ば、身命におゐては異も有之間敷と諸人積の外、同十五日に至り秀吉公の命として、羽柴左衛門大夫、福原左馬助、池田伊豫守三人登山して、與山上人に逢て其旨を述、秀次卿終に自殺有子時二十八是より已後高野山遁科屋の法式は破れ候と也、

〔武徳大成記二〕慶長五年九月二十四日、今日中納言織田秀信、池田輝政ガモトニ囚ハル、信長ノ嫡孫タルノ故ニ、神君是ヲ殺スニ忍ビズ、高野山ニ蟄居セシム、二十五日、神君増田長盛ガ死罪一等ヲ減ジ、高野山ニ蟄居セシメ、其子兵大夫守次ヲシテ、武州岩築ニ禁錮シ、高力、攝津守忠房ヲシテ是ヲ護セシム、十二月十三日、眞田安房守昌幸降ヲ乞フ、神君許サズ、長男伊豆守信幸己レガ軍功ニ代テ、父ノ死罪ヲ購ハレン事ヲ乞フ、神君是ヲ許ス、昌幸次男左衛門佐ヲ携テ、信州上田城ヲ避ケ、高野山ニ入テ、剃髮蟄居、神君信幸ヲシテ舊代ノ地ヲ領セシム、

社召

〔鶴岡事書案〕佐々目郷當年應永二年所務内々百姓等有強訴事云々、就之爲内談、御内外方於上宮土所會合、所詮先年未辛既有不熟之聞之時、衆中四人下向也、依之所務如形在之、口細不及異儀云々、當年如前々無下向者、不可有正體也、先張本百姓等社召之、應召而參上者、張本之百姓等入置了社家之籠、若無參上者、衆中下向之時、仰了衆中召誠之年、貢請負之式、皆濟之時、可社免出籠舍也、若不然者如此間、所務不可有正體云々、仍政所方書下如左、○中略

當年應永二年就所務如此、以召符佐々目百姓等社召之、使節、宮下部、榎物百文分、衆中二十五人并脇堂十人、各出之、廿五人各參文宛、但上薦二人者、各四文也、脇堂十人者、各貳文宛也、七月廿五日、

〔甲陽軍鑑品十七〕曲淵少左衛門公事、負難言仕義櫻井殿訴訟之事、

一年板垣彌二郎が、本郷八郎左衛門小身とてあなづり、慮外をいたし、本郷八郎左衛門に板垣き

座敷鑑

一前野但馬守

中村式部少輔

同妻子

同人

長子出雲守

同人

玄朔紹巴安志は後に御赦免有しなり、此外は皆切腹被仰付了、

〔新田由良家傳記〕御領之百姓給人_所之百姓と公事

御領之百姓十分勝利有之者、奉行所へ公事代として百石に付永樂錢五百文差上べき事付其所之庄屋三年寺入たるべき事、給所之百姓は庄屋五人組所をはらひ、乃至は所之曲事急度可申付事、

天文五年正月日○節

〔甲陽軍鑑〕十二

信玄公國法背たる者をも、人によりて二度までは御免なされ候事、五ヶ條

は○中

二忠節忠功の武士の子孫ならば、御成敗あるべきをも、いのちをたすけ坂をこさせ、改易の科をば寺入に仰つけられ候、

〔太閤記〕十二氏政氏照兄弟切腹之事

同○天正十

氏直○北高野山へ上可被申旨に因て、供し侍る人々、一門には北條美濃守○氏親同左

衛門佐○中

高野山において、扶持方五百人、其外諸事可入、其々之具不殘注文を以下行有しかば、

略○下

〔太閤記〕十七前關白秀次公之事

秀次公伏見へ至らせ給へ共御城へ入給はず、木下大膳亮宿所へ入せ給ふ將軍○秀吉より御使者を以、御對面にも及ばざる條、先高野山へ急登山可然之旨被仰出しに依て、剃髮染衣の御身とならせ給ひしかば、御供之侍百餘人ひた／＼とかみおろし致し奉りぬ、

〔毛利家記〕今ハ城ヲ抱事不成シテ、氏政○北并弟ノ氏照切腹可仕、諸卒御助候様ニト申セシニ依テ、其分ニ被成御赦免、兩人切腹有テ、殘ル一門悉大名衆へ一人宛御預ケ、○下

〔太閤記十四〕豐後守護大友御折檻之事

覺御使者福原右馬助、熊谷内藏允、

一先手之城々に有之者及難儀之折簡可相救ため、つなきの城々拵置、人數を入置候義、其段何も存知之前也、然るを小西が急難百死一生なりと云共、不及助成、剩平壤之様子を、も不聞合、逃崩候事、前代未聞之仕立、不及是非候事、○中

一其身之事は安藝宰相所に預置候事、○中

文祿二年五月朔日

秀吉在判

高麗陣衆各御中

〔家忠日記増補〕文祿四年七月晦日、關白秀次ニ與スルノ輩、一柳右近將監ハ大神君○德川家康是ヲ預リ玉フ、服部采女正ハ越後ノ宰相○上杉景勝是ヲ預ル、

〔太閤記十七〕秀次公御若君姫君并御寵愛之女房達生害之事

秀次公謀叛に與せしとて遠流の人々には、延壽院玄朔、紹巴法眼、荒木安志、木下大膳亮等也、たごひ秀次公謀反を思召立給ふ事有共、かやうの人々を、其便におぼし寄給はんや、各御反逆之事、聊以不奉存旨申上度思ひ侍れ共、長盛三成が威に恐れて、取次人もなく、奉行人指圖に任せて、配所に赴にけり、又國々へ預られし人々は、

一一柳右近將監

江戸大納言殿へ

一同妻子

伊藤加賀守

一服部采女正

越後宰相

一同妻子

吉田清右衛門尉

一渡瀬左衛門佐

佐竹右京大夫

一明石右近

小早川左衛門佐

即被召進之間、人々ニ被預之。廿日、清水又太郎入道父子三人并若黨二人被召捕之、菊池落人籠置云々、若黨雖及拷訊不及白狀、即被預筑州方畢。四月四日、長門ニハ敵百餘人打取之畢、自餘ハ逐電畢、昨日三日マデハ無別事云々、同日規矩殿自肥後御返、鞍岡山ニテ所取頭三十二、生取二人持參、此外比丘尼一人生取、肥後ニ被預置此ハ大宮司若黨ノ妹也、規矩殿ヲチライマイラセントスル間召捕云々、

〔鎌倉大草紙〕一嘉慶元年丁卯五月十三日、古河住人野田右馬助基等四人一人搦進す、此男白狀申けるは、小田讃岐入道父子、小山若犬丸同意に野心ありて、若犬丸隱置の由申、此小田入道惠尊は、先年小山退治の先手に參り、忠功の人也、何のうらみありて敵と同意有やらむと、たがひながら、六月十三日、小田が子二人被召預、

〔賴印大僧正行狀繪詞〕至德四年五月ノ比、野田入道等忠、古河ヨリ召人一人搦進、子細ヲ尋ラルル處ニ、小山若犬丸惠尊ガ館ニ居住シテ野心ヲナシハサムヨシ白狀隨テ同六月十三日、惠尊并子息二人召籠メラレテ、人々ニアヅケラル、處ナリ、

〔鎌倉大草紙〕同三年永享十三年中略、永壽王殿六歳にて、いまだ東西不覺の體なれば、一命を助、美濃の守護土岐左京大夫益持にあづけらる。中略寶徳元年正月、御沙汰ありて、土岐左京大夫持益にあづけられし永壽王殿をゆるし、亡父持氏利足跡をたまはり、公方御對面あり、御大刀御馬を被下、同二月十九日、關東へ下らる。中略此人五才のとき被召捕、十三にて關東の主となり、致下向事、君恩とは申ながら、偏に鶴ヶ岡八幡宮、荏柄天神の御加護なりとて、略下

〔勢州四家記〕一元龜二年正月、信長公神戶藏人大夫友盛を隠居させられ、日野蒲生左兵衛大夫堅秀に預らる、則三七殿をつぎめに立られ、神戶三七信孝と號せり、

一元龜四年元年天正春、龜山安藝守盛信は、信長公の勘當を蒙り、日野蒲生家に預られぬ、

〔太平記二〕三人僧徒關東下向事

同^{元龜二年}七月十三日ニ、三人ノ僧達遠流ノ在所定テ、文觀僧正ヲバ硫黃ガ島、忠圓僧正ヲバ越後國ヘ流サル、圓觀上人計ヲバ遠流一等ヲ宥テ、結城上野入道^{忠道}ニ預ラレケレバ、奥州ヘ具足シ奉、長途ノ旅ニサスラヒ給左遷遠流ト云ヌ計也、

〔太平記三〕主上御沒落笠置事

同^{元弘元年十月}八日雨檢斷高橋刑部左衛門、精谷三郎宗秋、六波羅ニ參テ、今度被生虜給ヒシ人々ヲ一人ヅ、大名ニ被預、一宮中務卿親王^{其尊}ヲバ佐々木判官時信、妙法院二品親王^{其尊}ヲバ長井左近大夫將監高廣源中納言具行ヲバ筑後前司貞知、東南院僧正^{其尊}ヲバ常陸前司時朝、萬里小路中納言藤房六條少將忠顯二人ヲバ、主上^{醍醐}ニ近侍シ奉ルベシトテ、放召人ノ如ニテ、六波羅ニゾ留置レケル、

〔太平記十〕金剛山寄手等被誅事附佐介貞俊事

阿曾彈正少弼時治、大佛右馬助貞直、江馬遠江守、佐介安藝守ヲ始トシテ、宗トノ平氏十三人并長崎四郎左衛門尉、二階堂出羽入道道繼已下、關東權勢ノ侍五十餘人、般若寺ニテ各入道出家シテ、律僧ノ形ニ成リ、三衣ヲ肩ニ懸、一鉢ヲ手ニ提テ、降人ニ成テゾ出タリケル、定平朝臣是ヲ請取テ、高手小手ニ誠メ、傳馬ノ鞍坪ニ縛屈メテ、數萬ノ官軍ノ前々ヲ追立サセ、白晝ニ京ヘゾ被歸ケル、^中因人京都ニ著ケレバ、皆黑衣ヲ脱セ、法名ヲ元ノ名ニ改テ、一人ヅ、大名ニ預ラル、

〔太平記十七〕還幸供奉人々被禁殺事

主上ヲバ花山院ヘ入進セテ、四門ヲ閉テ警固ヲ居ヘ、降參ノ武士ヲバ、大名共ノ方ヘ一人ヅ、預テ、召人ノ體ニテゾ被置ケル、

〔正慶亂離志〕正慶二年三月十八日、菊池加江入道三十五騎、宰府ニ隱居タルガ、降人ニ江州方ニ參、

給、凡云犯土、云營作、江間殿以下、手自沙汰之、爰納土於夏毛行勝、有運之者、被尋其名之處、景時申云、囚人皆河權六太郎也、云云、感其功、忽蒙原免、是木曾典厩義專一者也、典厩被誅之後、爲囚人被召、預梶原云云、

〔皇帝紀抄七後鳥羽〕建久八年三月之比、藏人大夫桶兼仲并妻女依謀計事、被配流國々、又一心房上人

歎心、依同意事、被召禁武士許前齋院式子內親王後白河院皇女同意此事之間、不可坐洛中之由、雖有沙汰、有議被止了、

〔百練抄十一御門〕正治元年二月十四日、武士等相具左衛門尉中原政經、藤原基清、小野義賢、參院御所、是件三人、可亂世間之由、有其聞之故也、各預賜武士、

〔承久記下〕去程ニ武藏守北條駿河守三浦ハ院ノ御所ヘ參ラントテ、已ニ打立ンズル由一院

鳥羽後被聞召テ、下家司御前ヲ出ナ參ソ、上品ニ於ハケウミヤウヲ註シ可被下ト被仰下ケリ、上ノ

者ヲ以テ重テ此様ヲ被仰ケレバ、御所ニ武士ヤアル見テ參レトテ、力者ヲ一人進ラセケレバ、走

歸テ、一人モ不候ト申ケレバ、サラバトテ、不參公卿六人ノ交名ヲシルシ被下、坊門大納言忠信卿

中御門中納言宗行佐々木野前中納言有雅按察前中納言光親、甲斐宰相中將範義、一條宰相中將

信氏信能爲是等也、何レモ六原波羅ハ被渡ケレバ、坊門大納言ヲ千葉介胤綱ニ被預中御門前

中納言ハ小山新左衛門尉朝長ニ被預按察前中納言ハ武田五郎信光ニ被預佐々木野前中納言

ハ小笠原次郎長清ニ被預、甲斐守宰相中將式部丞朝時ニ被預、一條次郎相中將大源相中將上

ハ遠山左衛門尉景村吾妻鏡作ニ預ケリ

〔吾妻鏡三十六〕寛元三年八月二日甲子、漏刻博士泰繼、大膳權亮孝俊等、爲囚人、各被召預人、泰繼大

藏權少輔景朝預之、孝俊駄三郎八郎入道則俊、曰井九郎等也、泰繼孝俊等者、季尙朝臣舍弟也、而於

爲繼兄之家、去年正月廿日、殺害季尙嫡男右京亮業氏訖、依令露顯、及此御沙汰云云、

にも猶あしき事しいださんする者にて候はなちたてらるまじき也と申ければ、彌おもく成ま
さりにけり、され共番は少もいたます、をのこの身はいつかいかに成べしとて、人わろかるべ
き事はなしとて、物ともせざりけり、かゝる程に、大將康衡○藤原を打とて、奥責を思ひ立て、兵を
そろへらるべき事出来にけり、其時番を召ての給ひけるは、汝をどうにいとまどらすべかりし
か共此大事を思ひて、今日迄いけて置たる也、身の安否は此度の合戦によるべしとて、鎧馬鞍な
ど給ければ、かしこまり悦て向ひけり、誠に身命ををしますゆゑ、しかりければ、勦氣ゆるされて、
本領かへし給りて、二度舊里に歸りき、

○按ズルニ、義經西國へ奔リシハ、文治元年ノ事ナリ、頼朝泰衡ヲ伐チシハ同五年ノ事ナレバ、
本書ニ番ガ十二年ガ間、禁囚セラレシトイヘルハ謬リナリ、

〔古今著聞集馬十〕武藏國住人つゞきの平太經家は、高名の馬乗馬飼なりけり、平家の郎等なりけ
れば、鎌倉右大將頼朝めし取て景時に預られにけり、其時陸奥より大きにしてたけき惡馬を奉
りたりけるを、いかにももの、物なかりけり、聞え有馬乗共に、面々にのせられけれ共、一人もたま
るものなかりけり、幕下思ひわづらはれてさるにても此馬にのるものなくてやまん事口惜き
事なり、いかゞすべきと景時にいひあはせ給ひければ、東八ヶ國に今は心にくき者候はず、但召
入經家ぞ候と申ければ、さらばめせとて、則召出されぬ、白水干に葛の袴をぞ著たりける。○中の
どのごとあゆませて、幕下の前にむけてたてたりけり、見る者目をおどろかさずといふ事なし、
よくのらせて、今はさやうにてこそあらめ、どの給はせける時おりぬ、大きにかんじ給て、勦氣ゆ
るされて、厩別當になされにけり、

〔吾妻鏡十二〕建久三年六月十三日癸丑、幕下渡御新造御堂之地、畠山次郎、佐貫四郎大夫、城四郎、工
藤小次郎、下河邊四郎等引、桑楨、其力已、如力士、數十人可盡筋力事等、各一時成功、觀者驚目、幕下威

〔吾妻鏡〕^七文治三年九月廿七日乙丑、畠山二郎重忠爲四人被召預千葉新介胤正、是依代官眞正之奸曲、大神宮神人長家綱訴申故也。^{〇下略}

〔古今著聞集〕^九

武勇九郎判官義經、右大將^{〇源頼朝}

の勘氣の間、都をおちて西國のかたへ行ける時、わた

なべの駿源次馬允番もどによりて事の由をいひければ、いたう哀みて、道おくりけり、後に其事聞えて、番關東へめされて梶原にあづけられにけり、十二年迄おかれたりけるに、番毎日本鳥をとりにて、今日やきられんすらんどぞまちける、去程に右大將高麗國^{〇吾妻鏡作高麗國、海即鬼界今呼曰黃賀島、實を}責し時の追討使に、あま野の式部大夫遠景むかひけり、大將家のきり物にて、次官藤内といはれし藤内は是也、西國九國を知行の間、そのいきほひいかめし、高麗國打しなへて上洛の時、わたなべにて番が妹にとつきにけり、相具して關東に下向しければ、番が親類郎等共悦をなして、さりとて今は馬殿の召籠はゆるされ給なんと悦あへりけり、遠景も宿縁あさからず、此上はかの御氣色におきては、いかにも申ゆるすべし、御承引なくば遠景申預るべし、といひければ、彌悦事限なし、扱關東に下り着て、いつしか使を番が本へつ、かはしていひけるは、思ひかけず、かゝるゆかりに成參らせて候、今におきてはひとへに親ども頼奉るべし、内外に付て疎略を存べからず、といひやりたりけり、番多年の召人にて、今日切らるべし、といひて、十餘年に及けれど、も、かたうど壹人もなければ、申なだむるものなし、たまゝかゝる縁出來事は、いか計かはうれしかるべきに、番がいひけるは、弓箭とる身のかゝるめに相て、召籠に預る耻にてあらず、さこそ無縁の者なれ共、あながちに其ぬしこひねがふべき聲にあらずとて、返事にいひけるは、よろこびて奉ぬ、誠に傍輩として申承らん、事本意候、またしくならせ給のよしの事、存知がたく候、番はひとり身の物にて候へば、御ゆかりに成參らすべき事候はずとあらゝかにいひたりければ、遠景大きにいきどほり、やすからぬ事に思ひて、どもすれば大將に番はきはめたるまれものにて候、いか

辨俊基并文觀、圓觀等也、

〔太平記〕僧徒六波羅召捕事附爲明詠歌事

二條中將爲明卿ハ、略中指タル嫌疑ノ人ニテハ無リシカドモ、叙慮ノ趣ヲ尋問ン爲ニ召捕レテ

齋藤某ニ是ヲ預ラル、

〔參考太平記〕笠置囚人死罪流刑附藤房卿事

天正本云、具行、源江州栢原へ着給ヒシカバ、道譽佐木ガ宿所ニ禁籠シ奉リテ、關東ノ左右ヲ相待

程ニ、萬情ヲ懸奉リシカバ、今幾程ト思召御命ノ内ニハ有ガタシトゾ仰ケル、

〔太平記〕笠置囚人死罪流刑事附藤房卿事

法印源眞忠ヲバ五條京極ノ籌加賀前司ニ預ラレテ禁籠シ、重テ關東ヘゾ被註進ケル、

〔康富記〕應永二十七年十月廿三日戊午、後聞今日廣橋大納言、源裏松前執權、源日野執權、源勸修寺別當、此

等人々被參室町殿、源足利之處、無故被召籠、

〔承久記〕同二十七日、源承久三院宣御使推松源吾妻源鏡カラフ被戒テ人ニ被預シテ、權大夫源北

時ノ前ニ召出シテ、略下

○按ズルニ、是北條義時陪臣ヲ以テ院宣ノ使ヲ拘繫スルナリ、今姑ラク此ニ附載ス、

〔玉海〕壽永三年源元暦二月九日戊辰、今日三位中將重衡入京、着褐直垂小袴云々、即禁固土肥二郎

實平源賴朝源從許云々、

〔吾妻鏡〕文治三年三月八日庚戌、南都周防得業聖佛依召參向爲豫州源經師檀之故也、日者小山

七郎朝光預置之、今日二品源賴朝有御對面、直及御問答、略下

〔吾妻鏡〕文治三年三月廿一日癸亥、佐竹藏人年來雖列二品門客、心操聊不調度々現奇怪之間、今

朝蒙御氣色爲比、企藤内朝宗沙汰被遣駿河國、所被召預岡邊權守泰綱也、

〔親長卿記〕明應二年閏四月廿五日、或仁云、去夜河州正覺寺將軍、沒落云々、廿七日、今日或仁語云、正覺寺沒落之時、將軍義材、相中○義種、新大納言光忠、妙法院僧正築室一品、田名村刑部已下請降、御小袖八幡殿御具、等被渡之云々、凡如召人、上原豐前守子、上原左衛門大夫丹波守、請取之、御進退不可說也、莫言於城中正覺、生涯之由、風聞之輩、大將軍畠山左衛門督政長、自害子息、尾張守實名、落失云々、七月一日、今日或仁云、去夜將軍義材、當時人々、俄御逐電、不知其行方、去四月自河州陣、御落之後、奉押籠上原左衛門大夫許了、後開落留越中、給云々、

〔足利季世記三高國記〕公方義種ト高國不和之事

カクテイツマデモ京都ハ目出度カルベキラ公方義種公、イニシヘ政元川○細ニヲシ○コメラレ籠ノ中ニ御座アリシトキ、ノ通世者落シ奉リ、御運ノ開カセ給ヒシトキ、御ヤクソクアリテ、カノ通世者ガ子息一人召出シテ畠山式部大夫ト名付萬事ニ權威高カリケル、

〔關八州古戰錄二〕北畠信雄配流附喜連川御所安堵事

北畠内大臣信雄ハ此度ノ一舉ニ指タル軍功モナク、韭山ノ一城ダモ攻落サレズ、剩小田原ノ城中ニ内通ノ子細アル旨、殿下秀吉○豐臣ノ聽ニ達シケル故略○中、信雄ヲバ鳥山城ヘ押籠メ剃髮有ベキ由ヲ命ゼラレシカバ、方及バズ入道シテ、德源院常眞ト稱セラル、

〔大友興廢記三〕義鎮公御行儀老中褒貶之事

爰に老中白杵鑑連、小原右波吉鑑直、吉岡宗秋、田北鑑重、此等の人々一所に在時、鑑連申さるゝは、昨日も小扈從二人、さしたる緩怠もなきに御氣色にちがひ、追込おかせらるゝ、かやうにあしき御心中、やゝもすればまします事、笑止のいたり也と申されける、

〔北條九代記〕元弘元年四月廿九日、京都飛脚下著主上令亂世給、俊基朝臣張行之由、吉田一品定房内々被申云々、依之五月五日、長崎孫四郎左衛門尉南條次郎左衛門尉爲使節上洛爲召禁右中

義景○按ズルニ、其外人々多坐事、

○按ズルニ、吾妻鏡ニハ、但馬前司定員右事出家、秋田城介義景預守、護之トアリ、

〔吾妻鏡 四十八〕正嘉二年八月十八日甲午、諏方刑部左衛門入道被召置之、雖被加推問、敢不承伏所

本執○略下

〔關東評定傳〕文永九年二月十一日、尾張入道見西遠江守教時、誅中御門中將實隆朝臣被召禁、其外遇使人多之、

〔東鑑末記〕文永九年二月十一日、北條遠江守教時、尾張入道見西等鎌倉にて誅せられぬ、同月十五日、鎌倉より北條義宗に下知して、時輔も京都にて討れぬ、又中御門中將實隆も、時輔と同意によりて召籠られぬ、北條長時も吉野の奥へ蟄居せるとなん、

〔椿葉記〕同○應永五年五月六日、じゆこう薨じ給ふ、○義世中は火を消たるやうにて、御あどつぎも申をかるゝ、むねもなし、此若公○義にてやどさたありしほごに、管領勘解由小路左衛門督入道

をしはからひ申て、嫡子大樹○義相續せらる、其後内大臣までなられて出家せられき、此若公は昇進だいなごんまでなられしに、野心のくはだてやありけん、露顯して遁世し給を、たつねいだされて林光院といふ寺にをし○義こめて、つゐにうたれ給にき、○義二十五年正月ノ事ナリ、

〔薩戒記〕應永卅三年九月廿八日戊午、或人云、去年秋所被召籠之内侍所刀子被免除、但不可召仕云云、

〔嘉吉記〕角テ將軍○足利ノ御憤モユルクナリ、金吾○山名御退治ハヤンデ、但馬國ニ在國シテ、上

洛スベカラズ、嫡子守教豊ヲ殘置テ、京都ノ警衛スベシト被仰出、金吾ハ但馬ヘ下リケリ、赤松彦次郎彦五郎ハ、金吾ガ追籠メラレシヲ悦ビ、播州ヘ下向シ、國人ヲ語ラヒ、キツテトラントノ支度也、

越前守殿○又見新編追加

〔吾妻鏡七〕文治三年十月四日辛未、千葉新介胤正參申云、重忠○島被召○、籠已過七箇日也、此間寢食共絕畢、終又無發言語、今朝胤正盡詞、雖勸膳不許容、顔色漸變、世上事終思切歎之、由所見及也、早可有免許歟云云、二品○源朝頗饋動給、則以被原免、十一月十五日壬子、去夜梶原平三景時内々申云、島山次郎重忠、不犯重科之處、被召○、禁之條、稱似被棄、捐大功、引籠武藏國菅谷館、欲發反逆之由、風聞而折節一族、悉以在國、緯已符合、爭不被廻賢慮乎云云、

○按ズルニ本書ノ文ニ據ルニ召籠召禁ハ、只名ヲ異ニスルノミニテ其實皆同ジ、

〔吾妻鏡九〕文治五年十二月廿八日癸丑、平泉内無量光院供僧一人○號助爲囚人參著、是嘉泰衛○藤原之跡、欲奉反關東之由、依有風聞、所被召禁也、

〔新編追加侍所〕一放埒輩令安堵事

草名遠江前司子息次郎左衛門入道法名忍性御勤氣之時、同道干口摺諸國流浪之後、令入院壽福寺畢、子息宮鶴丸、同子喝食、號越一房、而敵仁舍弟三郎左衛門尉、彼忍性出放埒乞食之間、不可爲御家人領之、由訴申之處、爲四番御引付難賀彌四郎入道奉行被沙汰之、依勤氣諸國流浪之間、放埒之條、非沙汰之限、將亦壽福寺入寺事、彼寺者爲將軍家御領之間、被准御家人之條、被沙汰之上者、不及子細、仍忍姓父子共預御裁許畢、加之修行難遁之時、憑諸人之愛顧、助身命者通例也、而無左右稱乞食非人之條、惡口咎依難遁、三郎左衛門尉被召籠之、三郎左衛門尉子息企越訴爲即宮入道奉行、御沙汰最中也、

〔吾妻鏡三十三〕曆仁二年○延應元年六月廿六日癸巳、今日評定犯科人事○中略、次依違地頭之咎、所召置之庄官百姓等事、自今以後、不可誠早可追出居住所云云、

〔關東評定傳〕寛元四年閏四月以後、鎌倉中騷動、越後守平光時有事出家、前但馬守藤原定員召禁之、

一 毆人等事

右被_レ打擲之輩、爲雪其耻、定露害心、歎毆人之科、甚以不輕、仍於侍者可被沒收所領、無所帶者可被處流罪、至于郎從以下者可令召禁其身也。

一代官罪過懸主人否事

右代官之輩、有殺害以下重科之時、件主人召進其身者、主人不可懸科、但爲扶代官無咎之由、主人陳申之處、實犯露顯者、主人難遁其罪科、仍可被沒收所領、至彼代官者可被召禁也。

一 隱置盜賊惡黨於所領內事

右件輩雖有風聞、依不露顯不能斷罪、不加炳賊、而國人等差申之處、召上之時者、其國無爲也、在國之時者、其國狼藉也、云々、仍於緣邊之凶賊者、付證跡可召禁、又地頭等至隱置賊徒者可爲同罪也、先就嫌疑之趣、召置地頭於鎌倉彼國不落居之間者、不可給身服。略

〔吾妻鏡四十二〕建長四年十月十四日乙丑、爲休民間愁訴、今日被定條々、倫長滿定奉行之。略 中

一 殺害刃傷事

可召禁其身、至父母妻子親類所從等者、不可懸答。

〔侍所沙汰篇追加〕一 近年四一半之徒、黨與興盛云々、偏是盜犯之基也、如然之輩、無左右擬召取者、狼藉訴出來、歎於京中者、申入別當、以保官人可被破却其家邊土者、申本所同有沙汰者、定被停止、歎或又於野山中打之云々、隨見及可搦之、凡隨被召禁申給其身、可令下關東也、兼又錢切事、同伺搦可被下、進關東之狀、依仰執達如件。

延應元年四月十三日

前武藏守

修理大夫

相模守殿

如懸網之魚、或落冠云々、仍各訴申、雲客兩三被召籠云々、

〔吉續記〕文永四年八月七日、次參内、有舞御覽、關白殿實經原令參給、吉田社怪異御卜形、猶於本社可

祈禱之由、可宣下歟之由、被仰藏人淳範、自一日殿上、被召籠、依御草鞋事也、今日被免、頭中將承之、

〔梅松論上〕建武元年六月七日、兵部卿親王其大將として、將軍足利の御前に押寄らるべき風

聞しける程に、武將の御勢御所の四面を警固し奉り、餘の軍勢は二條大路に充満しける程に、事の體大義に及によつて、當日無爲になりけれども、將軍よりいさごほり申されければ、全く叙慮にはあらず、護良親王の張行の趣なりし程に、十月廿二日の夜、親王御參内の次を以て、武者所に召籠奉りて、翌朝に常盤井殿へ遷し奉り、武家輩警固し奉る、宮の御内の輩をば、武者の番衆兼日勅命を蒙りて、南部工藤を初として、數十人召預けられける、

〔太平記 十二〕兵部卿親王流刑事附驪姫事

君○後大ニ逆鱗有テ、此宮其護ヲ可處流罪トテ、中殿ノ御會ニ寄事、兵部卿親王ヲゾ被召ケル、

宮○中忍ヤカニ御參内有ケルヲ、結城判官宗伯耆守○名和二人兼テヨリ承勅用意シタリ

クレバ、鈴ノ間ノ邊ニ待受テ奉捕之、則馬場殿ニ奉押籠、

〔神皇正統記 後醍醐〕建武乙亥○年の秋のころはひに、高時が餘類謀叛をおこして、鎌倉に入りぬ、

○中都にもかねて陰謀の聞えありて、嫌疑せられける中に、權大納言公宗の卿めしおかれしも、

このまきれに誅せらる、

〔庭訓往來〕管領執事奉行人、檢斷所司代賦訴狀於右筆之時、以小舍人、或下部等、召出犯人於侍所記、錄申詞、依言色體嫌疑、糾明犯否之時、所犯已無所遁者、則召籠之、

〔御成敗式目〕一惡口答事

右圖殺之基、起自惡口、其重者被處流罪、其輕者可被召籠也、

かに巧める事を語り聞せ、田丸中務少輔が兒小性に出して、奉公させられけり、田丸は氏郷と姻家の親しみあれば、來られん時便を伺ひて刺殺せとの事也、清十郎が父の方へ遣しける書を、關所にて改め見しより事起りて、其謀の泄たりしかば、清十郎を獄におし入、此事を秀吉に告るこいへ共、秀吉遠く慮りて、強て伊達家と和平させられぬ、氏郷清十郎を呼出し、吾過て罪なき義士を獄に入辱を與へたるよ、其君の爲に命を捨て忠を致す事實するに餘り有とく、伊達家に歸るべしと禮儀正しくもてなして歸されけり、記せし書に、清十郎が姓をもらしぬ、なすべき事也、

疏獄

〔百練抄後十鳥羽〕建久四年三月廿五日壬辰、今夜右獄囚十四人切破獄逃出云々、

劫奪囚人

〔吾妻鏡六〕文治二年九月十五日戊午、梶原刑部丞朝景去夜自京都歸參、中今日召御前尋洛中事等給、略申云、春三月之比、召群盜張本平庄司、丹波國住人被禁置左獄、餘人競來、切破彼獄、庄司已下犯人、悉遁出訖、仍別當家通仰、廷尉等雖搜尋諸方、不出來、而八月十一日、朝景弱獲也、同廿一日、將參大理門下、令請取廷尉云云、

召捕

〔百練抄後十鳥羽〕建久四年二月廿九日丙寅、藏人忠綱與外記清光兼業、於陣口有喧嘩事、依互無禮也、而藏人以吉上令擊外記、仍兩局五位以下參、關白家訴申之、忠綱除籍、清光兼業被召籠畢、

〔百練抄後十鳥羽〕建久五年五月十五日乙亥、左大臣房以下參入、被定申賀茂神人與鞍馬寺住僧關諱事、今夕史遲參之間、外記可勤掌燈之由、上卿仰之、而背上宣之間、外記偷直被召籠了、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年五月十五日、京都飛脚下著、申云、昨日十四暮下、公藤原并黃門實氏仰二位法印尊長被召籠弓場殿、

〔承久記上〕巴ノ大將公藤原忽チニ被失ベカリシヲ、德大寺公藤原被申候ニヨリテ思召ナダメ

ラレテ、サラバ召籠ヨトテ、被召ケル、中馬場殿ニ奉押籠子息ノ新中納言氏同被召籠ヌ、

〔百練抄後十三堀河〕安貞元年三月九日、臨時祭調樂之間、陪從參集之、輒近習雲客見物之、剽押倒帷輒、各

〔新撰長祿寛正記〕同年寛正二年十一月八日、千葉介ガ許ヨリ、法花ノ僧徒日親上人ト云法師ヲ召進ス、是ハ方々ニ横行シテ、法花經ヲ談シ、諸宗ノ佛法ヲ嘲リ及宗論ソノコロ無雙ノ惡比丘也、殊ニ妙嚴庵ノ雪庭ノ門徒爭論有之、徒黨ヲ結テ、亂ニ惡口ヲ基トシテ出家ノ法ニ背キ、人ヲス、メ非法ヲ積リ、細川右馬頭ニ預ラレ、禁獄セラル、

〔碧山日錄〕寛正三年十一月十四日、小童周勤之伯父某、誤通德政之賊、下刑官之獄、其屬求余之救之、乃說春公、公又說刑官、豐州守某、彼暫緩其刑以還之云、然而一二日際有之、則衆因心動、且俟十數日云、十二月二日壬戌、勤童叔父某、以春公之救、是日出刑官之獄、

〔甲陽軍鑑〕品十下第三十三、永祿八年乙丑正月、飯富兵部少輔御成敗被成候子細は、中義信信若氣故恨なき信玄に逆心をくわだてさする談合相手の棟梁に、兵部成候事、此五ヶ條御書立を以て飯富兵部御成敗也、太郎義信公其年廿八歳に成給ふ、御成敗なさるべく候へ共、信玄公よりは御慈悲を加へられ、籠舎させ御申なさるゝ、

〔勢州軍記〕諸國退治

其後信雄品、北以下山品、甲被預本田方禁獄之、又秋山家之侍上津江之新坊者、彼下山之聲也、爲一、味蒙疵、新坊同第三十郎共秋山承誅之下、山於獄中自止食事、廿八日而未死、本田憐而諫、甚進酒食、雖然不死、下山遂喰斷舌頭死去云々、

〔家忠日記増補〕天正十八年六月十四日、北條陸奥守氏輝、板部岡江雪齋ヲ以テ、憲秀品、松ガ隱謀ヲ敵ヨリ告ル者ノアリ、其信否ヲ糺明スベシト云々、中此ニ於テ、憲秀陳スル處ナシ、是ニ依テ、憲秀ヲ禁獄シ、彼ガ役所ニ軍士ヲ入替へ、堅ク是ヲ警衛ス、

〔常山紀談〕九伊達政宗、蒲生氏郷の威に壓るゝ事を、心中に深く憤りて、氏郷を殺すべき事を思案して、數代家に仕へし者の子に、清十郎といへる十六歳に成ける者容貌勝れて、艶なりしに、ひそ

仍武士等馳向是去年七月傳法院法華三昧之間爲吳院惡黨被破損道場件下手三人或遣配所或禁獄舍、

〔徒然草〕^下遍昭寺の承仕法師池の鳥を日ごろかひつけて堂のうちまでゑをまきて戸ひとつをあけたれば數もゑらす入こもりける後をのれも入てたてこめてどらへつゝころしけるよそはひおごろしく聞えけるを草かるわらは聞て人に告ければ村のをのこどもおこりて入て見るに大雁どもふためきあへる中に法師まじりて打ふせねぢころしければ此法師をさらへて所より使廳へ出したりけりころす所の鳥を頸にかけさせて禁獄せられにけり基俊大納言別當の時になん侍りける、

〔元弘日記裏書〕建武元年十一月十五日兵部卿護良親王被禁囚仰尊氏配鎌倉、

事府因禁例

〔吾妻鏡〕^{五十二}文永三年四月廿一日甲申甲乙人等數十人群集于比企谷山之麓自未刻至酉刻向

飛磯爾後帶武具起鬪諍夜廻等馳向其所生虜張本一兩輩被禁籠之所殘悉以逃亡關東未有此事京都飛磯猶以爲狼藉之基固可加禁遏之由前武州禪室^{○北條時}執權之時有其沙汰被仰六波羅畢

況於鎌倉中哉可奇云云、

〔康富記〕應永廿七年九月十日丙子今朝室町殿^{○足利義持}醫師高天被禁獄父子弟等三人也云々此間

仕狐之沙汰風聞然而昨日於御臺御方仰驗者被加持之處二足自御所逃出則被縛件狐之後被打殺此事高天ガ狐ヲ奉祖付之條露顯云々仍今朝被召取云々、

〔康富記〕嘉吉三年四月廿日乙巳依招引參文亭大學忠行窪田等自丹州水所今晚上洛云々彼木伐之張本九郎五郎八郎三郎等召捕之間令召上京可令禁獄之由本所被存之處九郎五郎者領家方之供御人也被謀繼可被召上京之條爲地下同隸爲瑕瑾之由地下一揆申請之間被囚兩人者被預置地下中云々頗似嗷訴、

れける、かくありて右の女を二年の間寺にをく、其内に女父もなきおのこを壹人もつ、町人其の事なれば彼出家をにくみ、惡名を申事たゞよのつねならぬ批判也。○中 右の彈左衛門下女とらる、四年目に、彈左衛門夫婦ながらあひはつる、まかも此者むすめ一人ありて、別に子とてももたず。○中 翌は八日市魚屋の甚九郎と云商人なり、此甚九郎法順所へ右の女を返せと云て使をやり、隣のを頼侘言しても法順女を返さざる故目安をまた、め、奉行所へ申て、公事に成て、跡先の算用をきはひれば出家金子の方に一度取たると申て女をかへさず。○中 信玄公常々の御仕置なれば奉行則屋形へ申上らる、故御前さばきに罷成諸人の批判に、彼出家子を持て、其上少つゝも物をば取下女をば返さず、奉行之扱もきかず、旁以の事なれば見こりの爲にあぶらるべしと申人多。○中 此公事此出家の理なりとて尊體寺法順おもふさま、公事にかついはれは、彼町人出家を侮理もなき公事を仕候間科錢の上に三十日籠舍を仰付らる、

〔百練抄後十五〕建久二年四月卅日丁未權中納言泰通卿參入被定流人。○中 定綱郎等三人被禁獄云々、

〔吾妻鏡十〕建久二年五月八日乙卯、佐々木左衛門尉定綱等事、依山門訴所被下之。○中 院宣云、○中 遠流之罪不再歸禁固之法滿徒年者雖非死罪更無勝劣歟、仍以遠流比死罪、以禁固代斬刑、但遠流之條、裁報尙不足者、雖禁固隨申請可被行歟、

○案ズルニ禁固之法滿徒年トハ、類聚三代格ナル罪人配役年限ノ官符ヲ指スナラン、官符ハ上編徒刑篇ニ收メタレバ、就テ看ルベシ、

〔百練抄後十五〕仁治三年六月十四日乙丑、祇園御靈會也、藏人佐經俊馬長舍人男於祇園園靜被刃傷之間、拜殿砌血氣散云々、下手人社家之下部也、被禁囚云々、

〔百練抄後十五〕仁治三年七月十三日癸巳、今日申刻高野傳法院并僧房等爲興院亞徒被燒拂云々、

たし、井のもごとにて手水をつかひ、衣をとりてきんとする。女房は御房のはやく御越とて、いそぎおきて髪を取あげ、いまだ手水もつかはず、窓よりそをのぞきながら、御僧さま早々ましますところばをかくる所へ男もごりあたる。此僧あわて、衣のひばを結ぶ男大きにいきなり、總別にくしと存するに、如此の模様共更に聞えぬ事なりとて、様々口説を申かけ、おさへて坊主を縛ひ、ごつの宗旨の僧達、近郷よりあまたきて、重ての爲なりとて、めやすかきて、所の守護へあぐれば、假初ながら出家の儀は、私さばきならずして、代官衆の人をそへ、甲府の四奉行へあぐる。奉行きき給ひ、出家の非におとさんとすれば、何にても證據なし、百姓無理と申さんには、様子あやうし、是程少分なる義に、鐵火をば、みたけの鐘と申にもあらず、色々批判せらるれ共、奉行四人の分別に不叶して、無據上へ披露いたさるゝ。信玄聞召、則時に被仰出。○中 彼百姓狼藉なりとて、頸を切なば相手出家なる故、其慈悲かくる間、此百姓百日籠舎なる。

〔甲陽軍鑑第十八品第四十八〕甲府淨土宗の僧公事之事

甲府に三日市場、八日市場とて、日市の立町あり、兩町の内、三日市場に、鹽屋、彈左衛門と云町人候て、淨土宗の尊體寺と云わき坊主法順と申出家に、右の彈左衛門金子をかり、年月をへて、彼借金澤山になる。使をやれども、彈左衛門少もなす事なし、法順殊外がうの強きあら、僧なれば、自身三日市場へゆき、彈左衛門が所へをしこみ、どるべき物なきとて、其時十九歳に成下女を、法順取て候へば、總別甲州國習にて、地下も町人も、質をどらるゝ儀を、一向の不覺に存る事昔より作法此通に候へば、彈左衛門が隣の町人共寄合て、彼法順何と申有共女をとめん儀やすきといへども、彼僧大きな徒法師にて、たゞはとめらるまじ、とめられねば打擲いたさずしては叶まじ、さありて出家をたゞき候はゞ、何と理をもちても、大慈悲心の御屋形信玄公の國法に、坊主に杖をあつる事、大方の穿鑿にてもましますまじと、少分なる商人共さへ、遠慮して下女を法順にとら

〔新編追加^{侍所}〕一重科輩被放免事

右於輕罪之輩者被行赦免之時、縱雖被免之、至重犯之族者可有御計歟、所以者何、傍輩無懲肅者、惡黨増入數歟、自今以後族盜並重科之輩雖被禁獄、申出其身可被進關東之狀、任仰執達如件

延應元年七月廿六日

前武藏守判

修理權大夫判

相模守殿

越後守殿

〔式目抄^三〕一謀書罪科事

一謀書其犯令露顯者諸大夫以上者准贖銅儀可被收公所領、於無知行地之輩者可被解却官職、至侍以下及諸難掌者可被禁獄其身^略○下

〔新編追加^{侍所}〕一殺害刃傷打擲事^{元二六十二、略云、乾}

被載式目之上者不及子細、至凡下之輩者殺害者被處斬罪、刃傷者被遣伊豆大島、打擲者禁獄可爲六十日歟

〔甲陽軍鑑^{品十八}〕信州岩村田法花宗の僧公事之事

一信濃國岩村田に、いかにも少分なる百姓あり、此者男は淨土宗、女房は法花宗にて、男は女をわが宗になさんと云、女は男を法花に成給へと申、何もかたつかず、後は此儀に付て、夫婦の中あしくなる、然れば男父母の爲に一月に兩度づ、淨土の出家を申うくれば、女房かはさがをなす、女母のために、法花坊主をよびまいらすれば、男殊外腹たつる、夏の頃にてこそありつらぬ、男馬の草をかりに曉罷出折節女房母の日にあたる、出家も其日をばかならず存じ、いつもまいる、此坊主も温天にて日をいとし、早朝に罷越衣をぬぎて垣にかけせ、なぎの傍に立寄、小便の用所を

〔日蓮聖人註畫讃〕龍口頸座難第十六

文永八年辛未九月十二日、遣平左衛門尉賴綱狀略云、○中其日爲副元帥平時宗之使者賴綱以下數百人武士等來名越小庵、擄取聖人、○日聖人曰、日者存知是也、自弘始此法門、命奉法華經、名可流十方世界、諸佛淨土、幸哉爲法華經被刻、臭頭可沙易金、石質玉焉、出草庵而向南立時、伊和瀬大輔、惡口荒曳、衣袖諸人又集曳、張身體本間、排擲石打、是卽罵詈之難、瓦石之難也、賴綱者瞋眼而呪荒聲、而叱聖人咬齒而高聲諱曰、日蓮者日本國之棟梁也、失予倒日本國柱也、只今百日之内、自界叛逆難共打可起、其後他國侵逼難、此國人々不被打殺、而已多可被爲生取、燒拂建長寺、壽福寺、極樂寺等念佛者、禪宗之寺塔、彼等之頸由井濱悉可切失、不然者日本國必可亡也矣、三諫國家是第二度也、草庵安釋迦置藏經、群輩亂入、毀室像經、蹈入糞泥、賴綱郎從小輔取出聖人懷中十卷法華經、以第五卷打顚三、是卽面打擲之之難也、餘九卷武士雜人等蹈足纏身、緣下壘上二三間、無不散處、聖人又出大音聲念佛真言、禪律謗法特良觀、不雨事譏言樣具宣、或笑或瞋焉、日朗者雖望爲與師同罪、不許之、脫肘入宿谷土樓、樓者都六人也、三位公日眞與俗四人、俗四人皆奪取刀入樓、其餘檀越等各被預于、人、總弟子檀那三百餘人、處々同時來出、勇健志各值難、

○案ズルニ、土樓ハ、土牢ノ假音ナリ、

〔太平記十二〕兵部卿親王流刑事附驪姬事

五月○建武元年三日、宮○護王親王ヲ直義朝臣ノ方へ被渡ケレバ、以數百騎軍勢路次ヲ警固シ鎌倉へ下シ奉テ、二階堂ノ谷ニ土籠ヲ塗テ置進セケル、

〔愚管抄七〕百川の宰相○中桓武をばたておほせまいらせたれど、あまりに沙汰しすこして、井上内親王を穴をゑりて獄を作りて、こめまいらせなんごせしかば、現身に龍に成りて、つひに蹴殺させ給ふと云めり、

〔尺素往來〕野心隱謀之族追伐事官軍合戰依得其利張本之輩者悉令誅候、至其餘黨者、一々搦捕、歸洛之間首被懸獄門棟、至虜者先暫被禁。獄候了、

〔難筆往來〕謀叛、狼藉爲宗、刃傷殺害爲業、圖諍無間、若干人陵礫、打擲傍輩、蹂躪諸人民家放火勾引衆人夜討強盜之倫、竊盜海賊之族行左遷流罪、可及禁。獄死罪、

〔吾妻鏡〕^六文治二年九月十五日戊午梶原刑部丞朝景去夜自京都歸參^{○中}申云、春三月之比召群盜張本平庄司^{住人波國}被禁置左獄、

〔仲資王記〕建久五年五月十二日壬申、今日東西獄強盜人卅餘人被下遣關東也、

〔吾妻鏡〕^{十七}建仁二年三月八日癸丑、入御于比企判官能員之宅^{○中}爰有自京都下向舞女^{○中}申云、去建久年中父右兵衛尉爲成、依人議爲宮人被禁獄、而以西獄囚人等爲給奥州夷被放遣之、

〔職原抄〕^上囚獄司^{○中}略

近代不必任此司、若憚名號歟、

〔新編追加〕^雜一獄舍事^{○中}略

以上三箇條爲守護役可致沙汰、

〔長興宿禰記〕文明十三年四月廿六日賀茂氏人^{高彦}被渡大路於六條河原被切首、弟男^不同被切首、去年十一月晦日、忍入將軍御所、御重寶^二銘^一以下御劔等盜取露顯、自去年被置所司代^{浦上}籠舍、今日被誅者也、

〔太平記〕^二長崎新左衛門尉意見事附阿新殿事^一

是コソ中納言^{○藤原}資朝^ノオハシマス籠ノ中ヨトテ見ヤレバ、竹ノ一村茂リタル處ニ、堀ホリ廻シ、

屏塗テ行通フ人モ稀也、

〔庭訓往來抄〕獄ハ、土ノ穴ヲ堀テ押入ル也、

囚禁

凡ソ死罪流罪等ノ罪人ヲ處刑ノ前ニ於テ禁獄スルハ從來ノ制ニシテ鎌倉室町ノ時代ニ在リテモ亦異ナル所ナシ但シ獄ニハ一種土牢ト稱スル者アリ山腹ヲ穿チ罪人ヲ其内ニ拘禁スルモノニテ牢獄ニ似タルヲ以テ亦牢ト名ヅク

召禁トハ一處ニ拘置スルヲ云フ召籠押籠追籠ナド云フ皆同ジ又武士預寺預社召等アリ武士預トハ其部下ノ士ノ家ニ附シテ禁錮スルコトニテ許多ノ罪人ヲ數箇ノ大名ノ家ニ分置セシ事モアリ亦其刑名ノ定マルマデ拘留スルコトハ常ニアリ寺預ハ寺入トモ云ヘリ即チ高野山ニ放ツノ類ニシテ社召ハ社家ニ召禁ズルヲ云フ又座敷籠アリ本人ノ家ニ一所ヲ點ジテ之ヲ拘置シ外出スルコトヲ得ザラシムルナリ又放召人トハ往昔ノ散禁ノ如シ其禁ノ嚴ナラザルモノナリ又召籠ト云フハ其處ニ拘置スルコトナレド頗ル寛ナルモノニテ他郷ノ人ヲ鎌倉ニ留メテ歸ラザラシムルノ類アリ又殿上ニ召籠ムルガ如キハ朝廷ニテ行ヒシ所ニシテ官人ノ殿上ニ在ル者ヲ一時拘留シテ家ニ歸ラザラシムルナリ又籠居アリ整居モ同ジ俱ニコモリキト云ヒシガ後ニハ字音ヲ以テロウキヨチツキヨト云ヘリ即チ家居シテ外出セザル事ナリ是ハ上ヨリ令シテ出仕ヲ停ムル事モアレド自ラ家居シテ罪ヲ待ツコトモアリ亦意ニ不平ヲ懷キ自ラ籠居スルモノモアリ其語ノ刑名ニ同ジキヲ以テ此ニ併載セリサテ此籠居ハ朝廷ニモ幕府ニモアリ閉門ト云フモ大カタ同ジ

名稱

〔運歩色葉集應〕禁獄

〔庭訓往來〕可斷罪者被誅之可誠者禁獄之

等、廿九日壬子淡路守藤原秀康、擲進東寺盜人宇大夫房、三月九日壬戌、佛舍利道具等自院高院

殿被奉返納東寺寶藏、一長者以下僧綱參集寺家、藏人頭右大辨定高朝臣爲院司行事、今夜淡路守

秀康兼右馬權助、擲進東寺盜人、藏人、

〔源平盛衰記四十七〕北條上洛尋平孫、附獨體尼御前事

平家ハ一間廣カリシカバ、彼等ガ子孫定テ京中ニ多ク有ラン、尋搜テ可誅ト源二位朝○輒北條時

政ニ被仰含ケレバ、時政上洛シテ平家ノ子孫尋得タラン者ハ、訴訟モ勸賞モ可依請ト披露シケ

レバ案内知タルモ不知モ賞ニ預カラントテ上下男女伺求ケレバ、多ク尋出シケルコソ人ノ心

ウタテケレ、

〔吾妻鏡三十七〕寛元四年三月廿日己酉、有臨時評定、市河次郎左衛門尉、擲進強盜海賊等賞事、及度

度高名畢、有御成之由可賜御赦書、且御恩沙汰之時、戴加注文、可被申旨云云、

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一走者之事其身者不及是非類親までも可成敗可走者仕舞兼々可相知之間其在所之者又者傍輩聞立於言上仕者一稔可褒美若存不申上者可爲同罪付普請材木出等之時罷出奉行へ不相屆歸候者知行可召放直他國へ走候者親類共可成敗同被官共走候者其主人三増倍之可懸科事

捕嫌疑者

〔新編追加雜務〕一惡黨由有其間輩事

追捕行賞

一人を斬走科事則はつつけにかけべし其在所爲地頭庄屋近所之もの即時追捕可言上捕捕儀不叶者則可相果若にげぬかし候者在所可懸科彼親類之儀始末毛頭も於存者可爲同罪不存所於分明者可有其沙汰并同座在之者不及其氣遣者可處罪科事付親類者可寄遠近哉事

所犯之條雖無分明證據有風聞之說者相尋地頭御家人之處聞及之由差申者於御家人者可令召進六波羅至非御家人凡下輩者同可令計沙汰

〔玉海〕文治二年六月六日壬子光長參上申數々條事其中可討義行之宣旨事申院之處早可宣下之由有仰言其宣旨狀令見之

宣旨

文治二年六月六日
謀反者前備前守源行家前伊豫守同義行等敗奔之後不成歸降之思詔有偶語之間廣仰都鄙尋搜之間行家已伏誅義行獨逃脫雖歎戮口猶欲擴充重仰五畿七道國々司等慥令搦進義行身若有殊功賞以不次

藏人頭左中辨藤原光長奉

〔仁和寺日次記〕建保四年二月五日戊子今夜竊盜入東寺寶藏弘法大師請來之佛舍利以下靈寶道具等悉盜取之九日壬辰東寺盜人搦進之輩可行不次賞之由被下宣旨五畿七道國々諸寺諸山

捕逃亡者

頭、三人職衆に指添、彦介をからめとり候へ。若又傍輩共など、其邊に見舞のために居とも、それをもおさへて搦捕申べく候。まして落合事は中に及ばずこの御意にて、足輕衆職衆、廿人頭、各落合彦介宿をとりまき申され候。彦介はやく聞付にげてきけん寺へ走籠奉頼に付而、先命に大事はなし、然れ共七十にあまる母を籠舎に被仰付候。

〔新編追加侍所〕一所預置召人令逃失罪科事嘉祿三廿評

右預置謀叛人之處、其召人於令逃失者、依爲重事、可被召所領也。其已下者、不可處重科。隨輕重可被行過意也。所謂寺社修理等是也。但逃脫之後爲令尋求三箇月者、可被延引。若三箇月之内不尋出者、隨事體可有其沙汰歟。

〔新編追加雜務〕一令逃難人咎分限事

右拘置人下人之所、本主人與難人遂問注之日、地頭爲難人方人、以代官雖遂對決、任相傳可召渡之由、蒙御成敗、本主人行向欲請取之處、乍有其庭、自後園被奴令逃失畢、仍差日限不尋出于其内者、可有咎之由。雖被仰令、予今不尋出之咎分限傍例不審候。本主人有道理者、辨其代之外、不可有別科候。本主爲顯然之僻事者、不及沙汰候歟。

〔新編追加侍所〕條々

一召人逃失預人咎事隨罪科之輕重於六波羅可有其沙汰中

弘長二年五月廿三日

武藏守 判
相模守 判

陸奥左近大夫將監殿

〔今川記五〕な目録一被官人喧嘩并盜賊の咎主人かゝらざる事は勿論也。雖然未分明ならず子細を可尋など號し物おくうち、彼者逃うせば、主人の所領一所を可沒收無所帶は可處罪過。

〔東寺執行日記〕嘉吉三年十月二日、勸修寺宮御方、今度大内焼亡者、此宮御存知申聞有之ヲ、當職參向申テ、召取奉テ、京都へ御出テ、御坊人十六人召トル、二人ハ當座死亡、已上十八人申之、慈尊院報恩院ハ、先落ラレ畢、四日、僧類藏主流罪相國寺宮僧、山門ニテ召取奉云々、攝州太田ノ邊ニテ奉切之、切手ハ原林申者也、

〔太閤記〕秀吉公賊人を捕給ふ事

信長公は在々所々のこらす放火し、すでに歸陣し給ひけるが、藤吉郎○豐臣秀吉四人を執て涙をながし、道の側に踞りしを見給ひて、此罪人は何ものぞ、何故ふかう歎ぞと御尋有し時、秀吉謹て、されば其事にて御座有ける、先夜巢候にして、福富平左衛門が面さし失候しを、皆人某をうたがひ名をさ、ぬ斗に見えしに因て、其翌朝御暇をも不申上、津島の富家に參り、金龍のかうがい質に置ものあらば告知せよ、褒美として、黄金十兩出し候はんと、津島の富家どもに、かたく約しつゝ、堀田孫右衛門尉所に宿をかり、件の盗人を待申所に、案のごとく彼かうがいを質に置候はんとて參けるを、難なくとらへ申候諸人某をうたがひ申せしつらうち、陣中を引めぐり、其後引張切にいたさんと存、是まで召連參て候なり、たゞかやうの疑にあひ申事も、偏に身の貧なる故と存候へば、覺す涙もそゞろなりしよし申上しかば、信長公もあはれみ給ふて、日來之指出をもゆるしおぼさる、

〔甲陽軍鑑品十七〕落合彦助と百姓と公事、付難言并に三法印、佗言之事、

抑曲淵○少左衛門を赦免の事は、旗本家中によらず、我等分國中の諸侍へ禮義のために、成敗赦免せしめてあり、それになんぞ彼落合彦介、いつもかくの分に有べきと存、奉行共に難言仕る事、たゞおほかたに申付候はゞ、明くれ藏前にて惡事有べく候、早々からめとり、かみの城戸にて、みごらしみのため、彦介をいりころしあるべく候とおほせいだされ、あしがる大將二かしらに、廿人衆

〔看聞日記〕永享七年二月四日、今朝人々奏賀之時分、山門使節四人被召捕二人名國明・同宿禰・葉蓮・以爲三於御

所召捕二人金輪院人於管領召捕自兼管領出拔令參洛者可被成安堵之由令申猶恐情
猶豫之處管領書告文遣之間令參洛之處召捕則於悲田院四人刎首其間之式言語道斷云今

〔看聞日記〕永享八年十一月二日、抑聞金商人被召捕、二人被刎首云々、自公方金千五百兩被召之處、不所持之由申、其罪科云々、有德之者也、

〔看聞日記〕永享九年七月十四日、抑聞大覺寺門主○足利義隆弟義隆、逐電云々、室町殿○足利義教、御連枝也、御意

不快之間、野心之企、歟、候人共被召捕、被_レ札明云々、朝日若君上臚も、逐電、被_レ尋云々、南方祇候人も、逐電云々、爲世恐怖、但實說不審也、十六日、聞大覺寺逐電、實說也、玉川謹正院候人共、兩三人逐電、依

之彼方樣女中共皆逐電云々、廿日抑大覺寺門主天王寺落下、僧坊一宿、彼坊主相伴被出、不知行方云々、仍彼僧坊追捕法師一人召捕管領預置被尋、更不存知之由申云々、南方宮同御還電、叛逆之企露顯歟、

〔建內記〕永享十一年六月六日壬午、後關北畠中將持康朝臣爲伊勢國司略。○註御退治進發勢州云々

實否可尋記後聞非其儀大覺寺嚴○足利御坐勢州仍爲被退治中被仰彼所了顯雅朝臣自和州同
向云々長野同向云々十八日甲午周全侍者入來自勢州去十三日還向云々○中彼言談條々

略○
中

一伊勢國中大覺寺前門主可被奉搜索云々和州吉野奥先可有搜索自其陣直可令發向伊勢國守

井國勢州司分領之內由有聞云々、棚橋衆徒可屬長野手、可致忠節之由被仰出云々

一北畠中將持康朝臣，是又爲搜索向伊勢，令月七日出京都，去十日着侍者於路次見物，中將十德之體着塗笠，一向旅姿也，其勢着小具足，五十騎許也，步兵及三百餘人云々。

る體にて、輿に被昇上洛、神人大勢相辛、公方へ訴申、室町殿〇足利因幡堂御參籠之間、彼へ參て庭中申、就飯尾加賀八幡奉行也ニ可申之由被仰、仍加賀宿所へ罷向、神人百人許、淨衣下ニ着腹卷、致其用意以外及、嗽訴其間ニ室町殿可召捕神人之由、侍所并問注所奉行加賀等ニ被仰付、今日晝程京橋ニ侍所問注所二頭大勢加賀宿所へ押寄、加賀於家中致用意待儲之處、侍所問注所勢共門前より責入之間、神人等家内へ逃入之處、自内加賀勢責合、自内外取卷、欲搦捕間、神人自元存儲致用意之間、散々合戰、神人廿七人人云々、矢庭ニ被打殺、其中大將ハ腹切云々、生捕神人五十人許、悉手負、其中一人不負手云々、侍所問注所勢手負數多、死人少々有之、加賀勢も數多手負、加賀も蒙疵云々、神人死骸車七輛に積て、五條河原捨之、合戰之式驚目、言語道斷事云々、此夏神人嗽訴動天下之處、屬無爲了、今不慮事出來、神人數輩墮命了、彼等若違神慮滅亡、歟不審神慮難測者也、八幡にも騷動、神人與黨猶可致惡行歟之間、諸大名ニ被仰、勢共馳下社頭奉警固云々、權別當坊にも用心、勢共相語、東竹田向緣者之間、有善以下地下輩五六十人爲合力、自田向道之騷動、不思議事也、十五日、昨日合戰謳歌之說同前也、召捕神人大略可被斬云々、抑神人東竹坊へ欲押寄之時、放生川邊集會評定之處、鹿三頭走出、神人馬武者懸出と心得て、右方左方へ逃散、兵具を捨云々、而鹿三頭馳通問、其々神人逃散不押寄云々、併神慮歟生捕共手負四十人許死云々、張本輩於河原今朝被刎首了、昨日空死神人は、輿より出て逃走、侍所於九條邊切殺云々、

〔看聞日記〕永享五年十二月廿日、抑聞相應院新宮南方上野宮御子、自公方侍所ニ被仰付、搦申、門主ハ御室へ被入申、其間ニ侍所門跡へ參取申、懸繩云々、御形儀惡物之間、公方へきこえて被搦申云々、委細事未聞、希代不思議事也、廿三日、大教院隆經法印參對面、相應院新宮事、語有隱謀之企、仍被搦申云々、侍所日野家へ渡申、彼ニ御坐云々、廿七日、行豐語世事、相應院新宮事、隱謀之企、虛名也、更々無其支證云々、而自門跡密々被告申、隨而日野中納言事々、敷申之間、被搦申、有御後悔、雖然管領細

守護人無緩怠可令沙汰於御使者明春可令歸國也就白狀相觸子細於地頭之處兼日逐電之由依令申不及其科歟此日來經廻之惡黨令逃散云々其所地頭致清廉沙汰者何可令退散哉是又領主雖難遇其科自今以後者至此所者地頭可有罪科

〔吾妻鏡 三十六〕寛元二年八月廿四日壬辰伊勢國阿曾山并熊野山惡黨蜂起之間今日有臨時評定被經御沙汰爲征伐可行向之由被仰地頭御家人等訖

〔東寺百合古文書〕山城國守護使不入所々盜賊事

或居住地下或自他所落來者可被進其身之旨可被相觸當所代官名主沙汰人等若令遁避者任大法不謂寺社諸權門領可被搦捕之有異儀者可被沒收所帶之旨候也仍執達如件

寶德二
六月廿一日

永祥
性通

〔葉黃記〕實治二年七月一日參院南都榮圓玄藝等今日被召渡武家前相國○實氏仰遣長持進使者佐治

左衛門尉重家真木野左衛門尉茂綱高橋左衛門尉時光等云々各着白直垂小袴即等不及甲貫云々於御所門前可渡之由相國被計申之仍予○藤原定

仰官人畢不辨可不武士等候冷泉西門外檢非違使左尉章種右尉章澄已上引立烏帽子帶等相

具彼兩人參上官人宿所爲高倉面咫尺也仍不及乘物不及付繩但有衣長叙放免等持參之友景相國後見武家事問答之仁歟候門下

又有問答事等歟武士於門外請取之兩人令乘馬向六波羅云々於六波羅又預他武士歟

〔後愚昧記〕永和三年七月十八日今夜止宿侍所山名勢寄佛覺寺此叙擲取惡黨等強盜等云々或自殺或

打死四五人云々或又擲取了云々

〔看聞日記〕應永三十一年十月十四日抑八幡神人騷動不思議又出來去十一日權別當坊號東竹庭前

木を栽其前を神人無禮罷過之間若黨共咎之神人立歸惡口結句腰刀拔て懸之間若黨共神人打

擲了然間與黨神人等彼坊へ欲押寄社務中ニ入無爲之處神人鬱憤猶不散歟彼被打擲神人死す

修理權大夫判

相模守殿

越後守殿

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年正月十九日戊申、去年十一月一日、可相鎮洛中群盜間事、有評定被仰相州、

重○北條時相州就被申之公家、被仰付使廳等云云、彼狀等到來、

群盜可相鎮間事、任關東申狀、可致其沙汰之由、可被仰遣武家之旨、攝政殿御消息候也、仍上啓如件、

十二月十三日

右大辨經光

謹上 堀河中納言殿

群盜可被相鎮間事、給旨如此、殊可致其沙汰之由、被仰使廳候畢、可令存其旨給之狀、所被仰下候也、仍執達如件、

十二月廿三日

權中納言親俊

相模守殿

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年十月十日丁巳、被行評定六波羅檢斷等事、有其沙汰令召出彼祇候人佐治

入道爲使節於當座、被仰云、強盜人事、無地頭權門領以下所々、自守護所隨相觸、可被召出之、不然者、

可被追放彼所、無其儀者、可補地頭之由、兼可被申本所、次自地頭補任所々、不被召出強盜人者、可被改易彼地頭職之旨、相觸之後、可被註申之、

〔侍所沙汰篇追加〕一惡黨張本事

殊於乘人口之輩者、隨聞及可召進其身於關東也、

〔侍所沙汰篇追加〕一遠江國佐渡兩國惡黨事

うけたる者共つゝきて入て、安くからめてけり、十郎あはれやすからぬもの哉、腹くろきむしにくらはれぬぞいひける、則、康仲が家へぐして行たれば、康仲悦思ふ事かぎりなし、康仲が第一の高名にて、ゆゑ、しくのゝ、しられるは、併小殿が忠節也、

〔勤仲記〕弘安七年九月七日壬午、自院民部卿奉書到來、東大寺衆徒申、興福寺衆徒焼失、手搔郷張本深慶被召之處、不應其召、可被下衾宣旨、急可宣下之由、被仰下、即所書口宣也、

弘安七年九月七日宣旨

近曾興福寺衆徒等爲發凶器於多武峯、令宛兵糧於手搔郷、稱對捍此儀、既焼失彼所、張本深慶、淨顯等、雖召其身於寺門、早晦其跡於帝都、梟惡之企、狼戾、抄、冀皇化陵夷、職而由斯、宜仰五畿七道諸國等令、擧進其身、

藏人治部少輔藤原兼一奉

〔勤仲記〕弘安十年九月廿一日己酉、章澄追捕賞事、去月頃、歟、或僧（就律師、中將顯成朝臣子）推參花園殿依謀反事、可申請院宣之由、令披露歟事之樣、驚思食之間、被召章澄、被擧取之、其後被渡武家云々、件僧去十五日於桂川、令誅之由有其說、

〔吾妻鏡 三十二〕嘉禎四年（元暦七年）十月十二日癸丑、今日畿内西國中庄園郷保住人、好以強竊博奔、刃傷殺害爲業、輩事不嫌禪（恐禪）社佛寺權門勢家、領不相觸、召取其身、且可注進在所之由、被仰含守護人等云云、

〔新編追加（侍所）〕一、武士召所犯人住宅事

爲鎮狼藉、雖被召取其身、至住宅資財者、別當殿觸申、可爲保官人沙汰、於邊土者、相觸本所、可爲被沙汰也、（○中略）

延應元年四月十三日

前武藏守判

ならせおはしまし候て、御みづから御をきての候つる事、忝も可申上には候はね共、船のかいは、はしたなく重き物にて候を、扇などをもたせ候様に、御片手にとらせおはしまして、やすくごさかく御をきて候つるを、少みまゐらせ候つるより、運つきはて候て、力よはくご覺へ候て、いかにものがるべくも覺へ候はで、からめられ候へぬるご申たりければ、御けしきあしくもなくて、をのれめしつかふべき事也とて、ゆるされて、御中間になされにけり、御幸の時は、烏帽子かけして、くゝりたかくあげてはしりければ、興ある事になんおぼしめされたりけり。

〔古今著聞集^{卷十二}〕其木島の十郎といふ強盜の張本有、年比使廳武家うかゞへ共、いかにもからめえざけるを、康仲^源○此小殿に云やう、汝がはじめより約束偽所なくば、彼十郎からめさせよと云、小殿則承伏しにけり、小殿が云く、十郎はゆゑしきつは物也、たやすくからめらるべからず、すぐやか成人を三十餘人給りて向侍べし、又何にても臧物を一給らんといへば、云がごとくにさたして鞆一かけをとらせてけり、件の鞆をふどころに入て卅よ人の輩あひぐして、まきの嶋へむかひぬのがれ逃んする道々を教へて、みなそこぞこに分てたてつゝきていらんものなど、其器りやうをはからひて定つゝ、近邊にかくし置つゝ、扱をのが身ひさり入て、いだきてえい聲を出さん時續て早く入べしといひをしへて、日暮て行ぬ、則十郎が家の門をほくごさた、く、十郎内よりたぞご問ければ、平六が参りたるぞ、あけ給へといへば、十郎何心もなく小袖打かけ、烏帽子引入て、其用意もなく出たり、小殿ふどころより鞆を取出し是あづけ参らせん、只今外へ罷通にといふ、十郎鞆を取て、いづこなりける鞆ぞご問ば、夜部あそびをしてまうけたる也と答て、通りなんごしけるを、十郎さるにても入給へ、酒すゝめんどいへば、よき事と思ひて内へ入ぬ、見れば又男もなし、女の獨有つるをば酒たづねにやりて、たゞはしりむかひ居たり案じすましたる事なれば、むかひざまにおざりかゝりて、いだきてけり、則えたりやくくと大聲を出す時、ま

古事類苑

法律部二十五

中編

追捕

捕犯人

追捕ハ王朝ノ制ニモアリテ、上編既ニ之ヲ言ヘリ、鎌倉幕府ノ中葉ニ及ビテハ、京中捕盜ノ事モ、幕府ニ委任セリ、而シテ懸賞シテ犯罪者ヲ捕ヘシムルコトハ、朝廷幕府共ニ行ハレタリ、又預ケ置ク所ノ囚人逃脫セシ時ニ、其預人ヲシテ日ヲ限リテ捕ヘシムルコトアリ、

〔仲資王記〕建久五年九月十七日甲辰、今日爲召廣田社神官能基惡僧四人、檢非違使章廣、看督長放免等下向云々、但相具本宮使一人、廿三日庚戌、裏書云、廿三日、廣田社前禰宜能基并惡僧四人逃隱了之由、使廳使歸洛所申也、是可禁獄所之由、被宣下之間、見知件宣旨之故云々、十月廿一日戌寅、廣田社前供僧官舜長寫小被召取使廳了云々、是依去春神輿事也、奉行檢非違使章廣

〔古今著聞集^{十卷}〕三御鳥羽院御時、交野八郎云、強盜の張本ありけり、今津に宿したるよしきこしめして、西面の輩をつかはして、からめ召れける、やがて御幸成て、御船にめして御覽せられけり、彼奴は究竟のものにて、からめて四方をまきせむるに、ごかくちがひて、いかにもからめられず、御船より上皇みづからかいをどらせ給ひて、御をきてありけり、そのとき則からめられにけり、水無瀬殿へ参たりけるに、めしすえて、いかに汝程のやつが、これほどやすくは溺られたるぞと御たづね有ければ、八郎申けるは、年來からめ手向ひ候事、其數をえらす候、山にこもり水に入て、すべて人をちかづけず候、此度も西面の人々向ひて候つる程は、物の數共覺へず候つるが、御幸

劫奪囚人

九四〇

召籠 事府召禁招紳

同

武士預

九四六

寺預

九五三

社召

九五四

座敷籠

同

放召人

九五五

籠居

同

蟄居

九五六

閉門

九五七

難載

九五八

古事類苑

法律部二十五

中編

追捕

捕犯人

九二一

捕逃亡者

九二九

捕嫌疑者

九三〇

追捕行賞

同

囚禁

名稱

九三二

獄舍 土牢

九三三

囚禁法

九三五

囚禁日數

同

朝廷囚禁例

九三七

幕府囚禁例

九三八

大名囚禁例

九三九

破獄

九四〇

却の爲體あさましかりしふるまひなり、

打八十餘人同道して諸國に分れゐて、天竺冠者がかく嚴重なるよしを人にかたり、或は人にもいはせてわ、くりたりけるが、あまりにこと過ぎて京まできこえて、かゝる目にあひにけり、

〔塵塚物語〕^五軍中博弈之事

建武以後軍戦うちつゞき、武士立身の最中なれど、此砌武藝の達人、天下にござしきいはれはいかにござ簡するに、博弈ゆへにござきこえ侍る、群卒帷幕の中のなぐさみは、大將より下つかた興力、足輕の者共にいたるまで、彼博弈をこのみて、あるひは一たてに五貫十貫、沙金五兩十兩をたてつゞけ侍る間、山をあざむくほどの金銀も、暫時のほどに負侍る者、後は博弈のたからも懸て、あるひは武具馬具の品ことゞくざられて、おもはぬ辛勞しけるもあり、といひつたふ、畠山某が手のもの、ある戦場へむかひけるに、甲ばかり着て直肌の武者もあり、よろひ着ながら大刀甲に拂底したるものもあり、中下の士卒の出立は、大方不具にことやうなり、されどその時の高名、おほくは彼不具の者にあり、といへり、是博弈にうち入て困窮至極の仕合なれば、此度一定必死、そこゝろへ、此所をすゝがんとの一心によりてなるべし、中昔徳政といふ、その起り、おほくは彼たはぶれが本元なり、といひ侍る、應仁文明の比の博弈には、人もさかしくなりけるにや、武具馬具に不具はなし、はじめのほどは金銀もたてつれど、次第に一錢の所持もなくなり侍れば、京の町人のそれがしが土藏を、いま博弈のたて物にする人も、有寺僧神主の藏などを立たる物もありけると也、勝たる時は、藏代いかほど、つもりて金銀をうけとり、又負たる時は、いつの夜、彼藏々のたからをうばひて遣す、しとさだめあひたるほどに、後は其座に錢といふものは一錢もなく、唯こゝ葉のみにて勝負をまける、といひつたへたり、是則二六時中の慰みなり、末代といひながら、かゝるふるまひも有事にや、おかしといふも餘あり、かやうのたはぶれに心おくれ、第一の家業をわすれはれゝとして、人にあざむかれ、疲のうへのつかれとなりて、前後忘

文明十年六月廿日

〔長曾我部元親式目〕掟

博奔、かるた、諸勝負、令停止、附其外、不作法令禁制事、

〔太閤記〕秀吉卿輕一命、於敵國、成要害之主事

掘堀普請に悉く懸て、急がせ給ひける程に、是も程なく出来しければ、武具兵糧等入置れ、藤吉郎に番手の士共相添すへ置給ふ、其制書に云、

定○中略

一 諸勝負堅く可令停止之事○中略

右條々相守此旨、可勤寛容大成之功者也、

虛判例

〔吾妻鏡 三十四〕仁治二年四月廿五日癸未、以田地爲博奔賭事、於件所者可被召放之由被定、是大宮

三郎盛員與豐島又太郎時光相論武藏國豐島庄犬食名大宮有忠打四一半事起也、各相互難訴申、

遂被收、公彼所領云云、對馬左衛門尉仲康爲奉行、

〔吾妻鏡 三十四〕仁治二年五月廿九日丙辰、有評定鶴岡職掌常陸國國井住人惡別當家重、依博奔之

科被解神職、會合衆飯野兵衛尉忠久并五郎三郎孫三郎等、可處罪科之旨被仰、合彼等主人國井五

郎三郎政氏那珂左衛門入道道願云云、

〔武政軌範 侍所沙汰篇〕檢斷條目事

雜載

一 博戲論事○中略

如此之刑法皆以爲當所○侍所之沙汰者也、

〔古今著聞集 博奔〕後鳥羽院御時、伊豫國おふてうの島といふ所に、天竺の冠者といふものありけ

り、○中この男もと伊豫國の者なりけり、高名のふるばくちにて、打ちはうけてすべて負け博奔

○按ズルニ、同前トハ、上文可計沙汰ノ言ヲ承ク、

〔新編追加侍所〕一博奔事

於侍者可斟酌歟、至凡下者、一二箇度者被切指及三箇度者可被遣伊豆大島也、

〔侍所沙汰篇追加〕一博奔事

右任御禁制之旨、一向可停止之、若有違犯之輩者可召進其身計不可及、妻子所從等煩況不可抑留田畠資財雜物矣、

〔建武式目〕一可被制群飲佚遊事

如格條者嚴制殊重、剩耽好女之色、及博奔之業、此外又或號茶寄合、或稱連歌會、及莫太賂其費難勝計者乎、

〔建武以來追加〕禁制略○中

一バクエキノ事付スラ六○中略

右條々カタク可被止也、若違犯ノ事アラバ、可處罪科之狀、依仰下知如件、

應安二年二月廿七日

左馬助源朝臣判

〔東寺百合古文書七十四〕一寺中公人等雙六打事、不可就於自今以後者、堅可被禁制、若猶無承引者、於其宿所者可被闕所於其身者、寺家可被追放、由寺家可被相觸、由評定畢、

同○長祿四年十二月廿日 連署除之

〔大内家壁書〕安藝國西條鏡城法式條々略○中

一博奔堅固可停止事

以上

右於背此旨之輩者、可致御成敗之由、所被仰出也、仍壁書如件、

觸之狀如件。

寛元二年十月十三日

武藏守

備後守殿。又見吾妻新經追加。

〔吾妻鏡^{三十七}〕寛元四年十二月十七日壬寅今日被下御教書於諸國守護地頭等云云其狀云、

籠置惡黨并四一半打所領可被召事

右近日國々夜討強盜蜂起之由普風聞是偏所々地頭等籠置惡黨并四一半打等致無沙汰之故歟、

然者或籠置惡黨於所領内或於四一半之所者早可被注進交名可被改易所職也以此旨可令下知

其國並知行所々給者依仰執達如件。又見御成敗式目追加。

〔吾妻鏡^{四十}〕建長二年十一月廿八日己丑放遊淨信之士寄事於雙六好四一半博奔爲事就中陸奥、

常陸下總此三箇國之間殊此態盛也隨有風聞之說今日有驚御沙汰於自今以後者圍非之外至博

奔者一向可停止之由所仰出也陸奥國留守所兵衛尉常陸國宗戸壹岐前司下總國千葉介等可加

制禁之由各含仰旨云云、

〔吾妻鏡^{五十}〕文應二年^{弘長元年}二月廿九日辛酉關東祇候諸人家屋之營作出仕之行粧以下事可令

停止過差之由被定之云云此外嚴制數箇條也後藤壹岐前司基政小野澤左近大夫入道光蓮等爲

奉行。略中

一可停止博奔事。略中

〔新御式目〕弘安七五廿七詳。略中

博奔事

爲守護人御使沙汰可加禁遏有違犯之輩者於御家人者可被召所領也非御家人凡下輩之事同前

○又見新編追加侍所沙汰續追加。

橫大路已下、固方々途路、有犯科者、否可、搜求其內家々、由被仰下之間、諸人奔走、而名越邊或男洗直垂袖、其滴血也、成恠岩平左衛門尉生虜之、相具參御所、推問之、刻所犯之條、無所遁、是博奔人也、仍殊可停止其業之由、下知云云、

〔吾妻鏡 三十二〕嘉禎四年元曆七年八月十九日辛酉、可止雙六之由、被仰下云云、

〔侍所沙汰篇追加〕一近年四一半之徒、黨與盛云々、偏是盜犯之基也、如然之輩、無左右擬召取者、狼藉訴出來、歟、於京中者、申入別當以保官人、可被破却其家邊上者、申本所、同有沙汰者、定被停止、歟、或又於野山中打之云々、隨見及可、搦之、凡隨被召禁、申給其身、可令下關東也、兼又錢切事、同伺搦、可被下進關東之狀、依仰執達如件、

延應元年四月十三日

前武藏守
修理大夫

相模守殿

越前守殿

〔侍所沙汰篇追加〕一雙六、四一半目○新編追加目
錄、目下有勝字、以下博奔事、延應二年
元年三十八

堅可停止之

〔吾妻鏡 三十四〕仁治二年四月廿五日癸未、以田地爲博奔賭事、於件所者可被召放之、由被定、

〔吾妻鏡 三十四〕仁治二年十一月三日丙戌、畿內西海惡徒蜂起之間、可禁遏事、諸國可停止博奔事、及

評議云云、

〔侍所沙汰篇追加〕一博奔事

侍雙六者、自今以後、可被許之下、庸者永可被停止也、四一半錢目勝負以下品態、不論上下、一向可被禁制、於違犯輩者、任法有其沙汰、可被召所職所帶也、至下賤之族者、可被處遠流也、以此旨普可被相

右馬權頭、相模式部大夫、周防前司長井左衛門大夫、毛利藏人、駿河大夫判官、同四郎左衛門尉、隱岐式部丞、佐原新左衛門尉等祇候、

〔看聞日記〕應永二十六年正月廿一日、前源宰相參賀、則有樂○中略樂了三觴祝着三位以下候、夜於臺所博奔密會、侍臣張行云々、前宰相不交事也、祇候之折節、枝葉事歟、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿二年正月廿六日壬午、以田地領所雙六賭博戲事并出舉利過一倍、及舉錢過米錢事、任宣旨之狀一向可禁斷、有違犯輩者、可注進交名之旨被仰下云云、

〔新編追加侍所〕一可停止博戲輩事嘉祿二

右同狀○嘉祿元年十月廿九日宣旨近年遊蕩之輩博戲之處、不限度數、暗以宅財勝負之間、喧嘩殊甚、與宴之思、變及鬪殺、難律之文、已准盜論、宜仰檢非違使、且搦進其身、且令處其科、抑意錢之好者、餘戲之內也、當時濫吹起從斯事、一切加禁、退同令斷罪者○又見侍所沙汰篇追加

〔侍所沙汰篇追加〕一以田地所領爲雙六賭事

右博戲之科、禁制惟重、而近年非背背制符剩以田地爲賭之由、有其聞、自今以後、可被停止、若猶令違犯者、早可被處重科、可令沒收其賭矣、

寬喜三年六月六日

武藏守

相模守

駿河守殿

掃部助殿○又見即成敗式日追加

○按ズルニ、新編追加ニハ年月文曆ニト註セリ、

〔吾妻鏡二十九〕貞永二年○天福元年八月十八日、早旦武州爲奉幣于江島明神出給之處、前濱有死人是被殺害者也、不遂神拜、直參御所給、即召許定衆、被經沙汰、先令御家人等、武藏大路、西濱、名越坂、大倉、

博 弈

鎌倉幕府ノ時ニハ博弈ノ類ニ、雙六ノ外四一半、目勝ナドノ名アリ、共ニ幕府ノ禁ズル所ニシテ、士タル者此罪ヲ犯シタル時ハ、所職ヲ召上ゲ、所帶アル者ハ之ヲ奪ヒ、下賤ノ者ハ、指ヲ截リ、家ヲ毀テ、流刑ニ處セリ、足利氏ニ至リテハ其制漸ク弛ミ、殆ド其禁ナキガ如シ、

〔古今著聞集傳十二〕花山院右のおとゞのとき侍共七半。といふ事を好て、ありとしある物ども夜る晝おびたゞしく打けり、

〔嬉遊笑覽雜四〕著聞集に七半といふことあり、中略是今のちよほいち類にや、是また雙六より出たる戯なり、

〔侍所沙汰篇追加〕一近年四。一。半。之徒黨興盛云々、偏是盜犯之基也、

〔玉勝間四〕四一半

同書妻鏡に打四一半といへることあり、博弈の名と聞ゆ、

〔吾妻鏡三十六〕寛元二年十月十三日庚辰、爲備後守奉行、博弈等事被經沙汰。雙六者、於侍者可被許之、至下臈者、永可令停止之。四。一。半。錢。目。勝。以下、種々品態不論上下、一向可被禁制之由、被仰出云云、
○又見二新編追加

〔嬉遊笑覽雜四〕四一半錢、目勝は二色なり、是また今のちよほ一、今のことだに知らざれば、古への重半の類なるべし、今のことだに知らざれば、古へのさま考ふべき由なし、されども采を戯とするは、みな雙六の變じたる物とは知らる、

〔吾妻鏡二十七〕安貞三年元喜五月廿三日、今日評定以後、相州、武州、駿河前司、後藤判官、信濃民部大夫入道等、被參御所將軍家賴經、召出、扇令置于彼人々中、給、各以目増勝、負、賜之、當座興也、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎三年正月六日戊午、堀飯以後、出小御所有目勝、御勝負、以女被出、賭物、二條侍從、

種類
七半

四一
半
目勝

行博
弈

一他人女ぬすむ事縱雖爲歷然男女共同前不相果者可_付行死罪_付親類令同心討事非道之上可爲曲事若其男ふがひなく又者留守之時外聞相洩於狼族者在所中として可相果候事_付一先虛名之女契約停止事

僧徒犯姦

〔皇帝紀抄_七御門〕承元元年二月十八日源空上人_{然號法房}配流土佐國依專修念佛事也近日件門弟等充滿世間寄事於念佛密通貴賤并人妻可然之人々女不拘制法日新之間擄取上人等或被切羅或被禁其身女人等又有沙汰且專修念佛子細諸宗殊鬱申之故也

〔建內記〕永享十二年三月十二日傳聞六條宰相中將_{有定}女室町殿若君_{朝日養}上臈也而於朝日宿所與遁世者_{十七}密通露顯之間於上臈者被流刑至遁世者被切首了近日事也云々父卿心中察存者也

阿、鎌田三郎入道西佛等爲御使可加檢見之由云云、是市河掃部允高光法師見法名訴申藤原氏云、密通泰宗之由云云、女論申之間及此儀云云、八月三日辛未、市河女子藤原氏事、於在柄社、不密通落合藏人泰宗之由書起請文令參籠之間、以御使寂阿西佛被加檢見之處、七日七夜、無其失之由各申之、仍市河掃部助入道見西所訴申之信濃國船山内、青沼村伊勢國光吉名、甲斐國市河屋敷等者、可令氏女領掌之、至市河屋敷者氏女一期之後、可賜見西子孫之由、今日被定之、氏女者見西舊妻也、令相嫁之始若離別者、可知行件所々之旨成契約之間、任契狀可充賜之趣、有氏女訴訟之時、令密通泰宗之旨見西申之、依難被聞之及起請參籠等沙汰云云、

〔大内家壁書〕寄事於左右、猥殺害人之間、御定法之事、

飯田大炊助貞家郎從石川助五郎爲長門國三隅庄平氏左衛門三郎男去十七日夜、被殺害之事、右意趣者依助五郎密懷左衛門三郎妻才松母也云々、猥殺害人之條、其科難通者乎、所詮當家分國中士民等事、或案内を領主にへ、或於庭中子細を申は可加下知也、殊更家中等事申旨あらば、其實否にまかせ可成敗之處や、もすれば宿意をさんする間、還而失其身條、且は忠孝をおもはざるにあらざるや、且は傾城として身を損するたぐひ、嗚呼のものにあらざるや、自今已後は、此下知をまもり、敢て定法を違失する事なかれ、若違犯之輩あらば、たとひ雖爲異類の身、雖爲重代相傳之忠臣、永子孫をたやし、罪科に處すべき也、仍此趣諸入に告知せしめんために、左衛門三郎男并才松母事においては、貞永式目之旨にまかせ、流刑に一定せしめ、訖者、早件之兩人を長門國見嶋に可送遣之狀如件、

寛正三年八月晦日

内藤下野守殿 盛世也

築山殿 御判

〔長曾我部元親百箇條〕掟

犯過事、先度被定大法畢、而無御沙汰之條如何、先可被止出仕之由被申、自元御氣色不快之間、嚴密

被申、難被止出仕云々、實犯之條勿論也、以告文可諫申云々、不便不便、室町殿仕女少納言はせ川有

申次之誤、被打擲、忽切髮之間、被成尼衆、法花寺へ被追下云々、父はせ川、其所領則被召放云々、驚耳

事共也、十日、四辻宰相中將生涯事、季俊朝臣訟申云々、湯起請など有沙汰、兩人安否未落居云々、

〔時慶卿記〕文祿二年十一月四日、太閤秀吉豐臣臣ニ被召置候女房、御暇不申出候男持候、仍罪三條ノ橋

ノツメニシテ、子ト乳ハ煮殺候親二人ハ土へ堀入、首ヲ出シテ、首ヲ七日ニ、竹ノコギリニテ被引

ト也、

有夫姦

〔御成敗式目〕一密懷他人妻罪科事

右不論強姦和姦、懷抱人妻之輩、被召所領半分、可被罷出仕、無所帶者、可處遠流也、女所領同、可被召

之、無所領者、又可被配流之也、

〔吾妻鏡 四十二〕建長四年十月十四日乙丑、爲休民間愁訴、今日被定條々、倫長、滿定、奉行之、中

一密懷他人妻事

名主百姓等中、密懷他人妻事、訴人出來者、召決兩方、可尋明證據、名主過料三十貫文、百姓過料五

貫文、女罪科事、以同前、

〔新編追加雜務〕一密懷他人妻罪科事 正應四三十六

右同所被裁式目也、但名主百姓等中、密懷人妻事、風聞之時者、不札明實否、無左右處、罪科之條甚不

可、然若訴人出來者、召決兩方、尋明證據、無所遁者、名主輩者、過料錢拾貫文、百姓者、五貫文、可宛行之、

女罪科、以同前、

〔吾妻鏡 三十六〕寛元二年七月廿日戊午、今日落合藏人泰宗、并市河女子藤原氏等、見西舊妻七箇日參

籠在柄社壇、可書進起請之由、爲對馬前司河勾平右衛門尉等奉行、被仰付之、此上平右近入道寂

戮如何之間、可被流罪之由被申、猶只可被討之由、重被申之間、其上事可爲時宜之由被申云々、仍十七日、被劾首畢、公家御沙汰以外事云々、

〔看聞日記〕應永三十二年六月二日、抑聞醫師鄉成朝臣子息保成、禁裏昵近、晝夜奉公、而此間蒙勸逐電云々、主上光○稱御寵愛女官密通露顯之間、有逆鱗失生涯、鄉成ニ被懸罪科云々、

〔看聞日記〕永享二年五月十一日、仙洞○後女房一條局日野中納言令懷妊云々、是三條中將實雅朝臣所犯也、自仙洞室町殿○是利被訟仰之間、洞院中納言事有傍例、以准據之例、可有御免之由被

申、御使四辻中納言也、時宜猶不許之間、以外腹立、有扶持之子細執申入之處、無御免其以前洞院事

同罪、一々可處罪科也、向後院參○可斟酌之由被申之間、無力御免、向後事、堅被置嚴法之由被仰云

云、其大法以宸筆被遊、諸家公卿殿上人醫陰輩不限老若、悉可相觸、面々可進請文之由、廣橋中納言

爲奉行被仰出、仍自廣橋源宰相ニ此旨申送、可被進請文云々、折紙云宸筆

於禁裏仙洞之間、若有女犯之輩者、不依上中下臈之勝劣、可被處罪科事、

一遠流事

一被召放所帶、或被返付由緒之仁、或可被施行便宜之輩事、

雖爲女公人、有犯過之儀者、同可及所帶之沙汰者也、

右條々嚴法、令申談室町殿所定置也、

永享二年五月七日

請文之旨、大略一同云々、於禁裏仙洞之間、女中不依上中下臈、至女公人、有女犯之儀者、可被處罪科

之由謹奉畢、其旨可存知之由也、

〔看聞日記〕永享四年八月六日、四辻宰相中將○藤原有生涯事、仙洞○後侍女大納言局甘露寺放

令密通之由室町殿○是利へ女房參、以落文巾云々、依之萬里小路廣橋兩使にて仙洞へ被申、女中

令密通之由室町殿○是利へ女房參、以落文巾云々、依之萬里小路廣橋兩使にて仙洞へ被申、女中

犯姦

鎌倉幕府ノ法、所領アル者、有夫姦ヲ犯ストキハ、所領ノ半ヲ沒收シテ出仕ヲ止メ、所領ナキ者ハ遠流ニ處シ、女モ亦同罪トス、而シテ名主百姓ニ在リテハ、過料錢ヲ出サシムルコト等差アリ、又強姦スルトキハ、家人ハ出仕ヲ停メ、郎等以下ハ片鬘ヲ髡スルナリ、室町時代ニ至リテハ、其制極メテ詳ナラズ、僅ニ時ニ臨ミ宜シキヲ權リテ、處分スルコトアルノミ、

〔尺素往來〕夜討強盜、放火、刃傷打擲、蹂躪捕女○中等、此間聊蜂起事於京都者、侍所於國郡者、守護可被致嚴密檢斷、歟、

〔御成敗式目〕一密懷他人妻罪科事

右○中於道路辻捕女事、於御家人者、百箇日之間、可止出仕、至郎從以下者、任右大將家○源御時之例、可制除片方之鬘髮也、但於法師之罪科者、當于其時、可被斟酌、

〔式目抄五〕小路大路ニテ、女ヲトラヘテ強姦スル事也、此法モ如此定メラレタルバ、カリニテ、カヤウニ行ハレタル事ハミヘズ、關東ノ記ニモ不見也、

〔武政軌範侍所沙汰篇〕檢斷條目事

一路邊捕女事○中

如此之刑法、皆以爲當所之沙汰者也、

〔看聞日記〕應永二十八年九月廿日、押問仙洞御所○小松侍去十七日、於六條河原被刎首畢、此御所侍、

院御氣色快然、傍若無人也、而女官密通懷妊畢、露顯之間、夫婦被追出了、一兩年御所侍籠居之間、御

免事、就内外連々、雖欺申、無勅許之處、去十六日、仙洞へ推參直奏申、只今無御免者、生涯可存定之由、

嗽々申之間、門番衆被仰、被召捕畢、以廣橋室町殿○足利へ可被討之、由被申、然而公家御沙汰、誅

シ、尤世ノ費ナリ、唯信長ガ手ニ懸リ、其後神變通力ヲ以テ再生シテ見セヨトテ引ハラセ、向ヨリ
引刀ニテシヅカニ殺ワラセ給ヘバ、神變通力ノ事ハイザ知ズ、弓手妻手ヘ分レタリ、此僧一人ヲ
害シ給ヒシハ、吁億兆ノ惑ヲ解ニアラズヤ、

付搦捕申候、御奉行被下、様子可被聞召届候、關白様○豐臣秀大還御次第得御掟可相濟候、爲御届如此候、恐惶謹言、

後九月廿四日

駒井○重勝

益菴

新庄駿河守殿

人々御中

一高島之内、於池村小兵衛此方兩人も下代と偽枿を郡中へ遺禮を取申由候間、召籠有之事候、御奉行被下而様子可被聞召候、關白様還御次第得御掟可相究候、先爲御届如此候、恐々謹言、

後九月廿四日

益庵

駒井

長尾殿御代官中

妖書妖言

〔信長記^{十三}〕賣子僧無邊蒙斬刑事

其比無邊ト云、廻國ノ客僧有ケルガ我ハ生所モ父母モナシ、一所不住ノ僧ナリ、我ニ不思議ナル秘法アリ、是傳受ノ人々ハ、於現世ニ無數ノ患難ヲ遁レ、於來世ハ、無量ノ罪障ヲ滅スト披露アリケレバ、在々所々ノ男女甚以信仰セリ、丑ノ時ノ受法ト云ケレバ、夜中ニ群集スル事限ナシ、散錢散米被物祿物等席上ニ充滿スレドモ、サヤウノ物ヲバ、塊視シテ其儘捨置キ、一紙半錢モ曾以私欲トセズ、一郷一村ニ二三日宛滯留シ、夕ベニ來リ旦ニ過ギ、更ニ三宿ノ暮ナシ、或時安土ノ東石場寺鶴龜坊ガ所ヘ廻リ來ル、三月廿日夜、御前ニシテ此沙汰アリケレバ、其客僧コソ聞及ビタル者ナレ、少見セヨト楠長庵ニ被仰ケレバ、承テ鶴龜坊ニ同心シテ登城アレト使ヲ遣ケレバ、則具シテ參リタリ、○中略カヤウノ賣子、恣徘徊サセバ、諸人ミダリニ佛神ヲ祈リ筋ナキ福ヲ願フベ

〔吾妻鏡〕^十文治六年[○]元久[○]六月廿三日丙午、去年令入奥州給[○]源朝之時、稱姬宮女姓出來、令尋問給之處、答申云、母者九條殿官女也、吾彈箏之間、且就母之好、爲聞食其藝、暫在彼院中、後日有不慮之次、下向奥州云々、雖可疑之、肥後守資隆入道母、爲宮條勿論之由、令申之上、奥州住人、一同存其儀、將又秀衡賞飯之餘、雖欲令出家、不免云云、於爲一向狂人者、秀衡爭令賞哉之由、二品[○]賴朝有御猶豫、仍爲王胤者、令居住田舍之條、稱可有其恐被送進京都、付廷尉公朝、被申此子細訖、而無實之旨被下院宣、今日所到來也、則被奉御請文云云、

院宣云

稱宮人事無實也、全非王胤、如聞食者、不善人歟、在京不可、然早可返遣之由、内々御氣色候也、仍上啓如件、

參議

六月九日

稱宮修狂盛事子細謀以承候畢、本自難信受候、然而爲承實否、令召進候之處、猶以返預候事可存其旨候、任御定召下關東、雖可誠候、今年不可犯殺罪候、然者いかにも御計候^天、面顔に疵をも被付て、可被追放候歟、不然者、經高居住阿波國候者に候、件男に可預給候歟、關東へ可召下之由の御定を申返候、依其恐候、如此言上子細候也、以此旨可令申上給候、賴朝恐惶謹言、

六月廿三日

賴朝

〔水戸本北條五代記〕關東にて升に大小あり^略、^中武藏上總は大かたはい原升也、件の升北條氏直時代まで、安藤豊前守と云者作り出す故に、安藤升共名付伊北彌五右衛門と云者、安藤升の大小を作る、其科に依て、天正十二年十月、小田原蘆子河原に、はたものにかけられたり、

〔駒井日記〕文祿二年後九月廿三日

一高島之内下北川藤右衛門入道、桃之儀かり言仕、郡中より禮を取、此方兩人之下代之由申觸候

〔書言字考節用集八〕謀書 謀判謀判

〔倭訓栞前編二十八〕保ばうはん 律の八虐に、謀反謂謀危國家と見えたり、今いふは謀判と書く、

判は判形にて、印章を指り、甚其罪を重しとするは、偽に従ふのみならず、謀反より轉説せるなるべし、

〔御成敗式目〕一謀書罪科事 付以論人所帶證文一稱謀書事

右於待者可被沒收所領若無所帶者可被處遠流也、至凡下輩者可被捺火印於其面也、執筆者又與同罪、次以論人所帶之證文、爲謀書之由、多以稱之、被見之處、若爲謀書者、尤任先條、可有其科、又無文書之証、謬者、仰謀略之輩、可被付神社佛寺之修理、但至無力之輩者、可被追放其身也、

〔吾妻鏡四〕元暦二年○文治元年三月三日丙戌有左馬頭義仲朝臣妹公、是先日武衛○源朝御臺所有御猶

子之契、而自美濃一村有御志、同、在國上洛、慕御息女之威、在京之間、奸曲之輩多以屬之、捧往日棄捐古文書寄

附不知行所々於件姬公之後、又稱其使節、押妨權門莊公等、此事當時人庶之所愁也、既達關東、御遠聞之間、號之物狂女房、且停止彼濫吹、且可獨進相顧族之由、今日被仰遣近藤七國平并京畿内御家人等之許、但於御一族之中、奸濫人相交之條、依耻世謗、給於御書之面、雖被載物狂、潛有憐愍、御志可參向關東之趣、内々被諫仰云云、

詐欺取財

〔建武年間記〕

一詐欺官私輩事

或以不知行之地、稱當地行、或冒名當給人、號關所掠賜之、皆是朝議之煩、諸國之奸、職而由斯、不可不誠乎、如此之族、有所領者、勘合所掠賜之分限、可被收、公本知行之所、領於無所帶輩者、任本條、可有科坐之沙汰乎、○中

建武元五十八治定畢

古事類苑

法律部二十四

中編

詐偽

鎌倉幕府ノ法、謀書ノ罪ヲ犯セルモノ、其家人ニアリテハ所領ヲ沒シ、所領ナキモノハ遠流ニ處シ、其郎從以下ニアリテハ、火印ヲ面部ニ捺シ、執筆者モ亦同罪トス、又詐欺取財ノ罪ヲ犯セルモノハ、所領アルモノハ掠取スル所ノ多少ニ從ヒテ領地ヲ沒收シ、所領ナキモノハ本條ニ任セテ處分セリ、

詐爲詔書

〔諸家文書纂三四三刀見〕

難訴決斷牒、出雲國上使盛倫所三刀屋郷地頭諏方部三郎祐重申、當國牛藏寺住僧榮空朝豪令

謀作繪旨濫妨三刀屋郷事、

右止彼輩濫妨沙汰居祐重代於三刀屋郷至謀書人榮空朝豪者爲有尋沙汰不日可令召進其身者、

以牒、

建武元年五月十三日

主税頭中原朝臣花押

左少辨藤原朝臣

〔建武年間記〕口遊去年八月、二條河原落書云々、元年歟

此比都ニハヤル物、夜討、強盜謀、繪旨、

〔易林本節用集保言謀書保言謀判〕

謀書
謀判書

種類七
目半
四一
半

行博
弈

九一
三
同

禁博
弈

九一
四

處刑
例

九一
八

雜載

同

古事類苑

法律部二十四

中編

詐僞

詐爲詔書

謀書 謀判

詐欺取財

詐稱人名

贋造度量

妖書妖言

犯姦

強姦

和姦

有夫姦

僧徒犯姦

博弈

九〇三

同

九〇四

九〇五

同

九〇六

九〇八

同

九一〇

九一二

罪訖、

〔宣胤卿記〕長享三年○

延德元年

五月一日戊午、傳聞其曉資敦廿二歲歟爲夜討被殺、青侍一人、雜色一人、僧屋

也、以上三人被殺云々、言語道斷事也、與冬光知行相論定其故歟云々、希代之沙汰世間之謳歌、唯此

事也、依一向無足、借不思儀之小屋正觀町爲丸、甘露寺中納言寮所之東、堪忍不及出頭之處、逢此災、不便々々、此資敦

ハ故益光卿實子也、依腰痛入釋門猪熊、益光卿薨去之後、入道儀同資任、存生之間、以勝光公子爲養

子、是冬光也、儀同薨之後、經年、資敦依腰痛本復出釋門、去年元服叙爵ハ及廿年、知行可割分之由、自東山殿、

義政有仰、冬光難澁云々、就此事沙汰無疑之由、世以所定也、勿論之莫言々々、

一喧嘩口論堅停止之事善惡手初謹而可堪忍背此旨互及勝負者不寄理非雙方可成敗若一方手出於仕者雖爲如何様之理其者可_レ行罪科事_略○中
一諸奉行儀者不及言上下共大酒禁制之事付醉狂人之事輕者科錢三貫重者可_レ成敗人を害打擲仕類者可_レ斬頸事

幼者犯罪

〔今川記_{かな目録}〕一わらはべいさかひの事童の上は不及是非但兩方の親制止をくはふべき所あまつさへ鬱憤を致さば父子共に可_レ爲成敗也

〔吾妻鏡〕文治六年_{元久}七月廿日壬申營中有雙六御會佐々木三郎盛綱候御合手子息太郎信

實_五年十在父之傍而工藤左衛門尉祐經追參加依無座懷取信實令居傍候其跡此間信實頗變顔色

退出持來一礫打祐經之額其血流降水干之上二品_源太有御氣色仍信實逐電父盛綱則起座雖

追不知行方云云廿一日癸酉信實遂出家逃亡云云可_レ召進其身之旨雖被仰盛綱更無所于求之

依永令義絶訖不可_レ讓與立針地之由言上

雜載

〔古今著聞集_十〕天福元年祇園十列に院の左將曹秦久治母の服にて出仕せざりけるが忍びて

車に乗てろじをうかゞひ見けるに大殿の雜色長府生秦兼友おなじく車にのりて見ける程に

はからざるに久清にさんぐにかけられたりけるよしうれへ申ければ久清を召て御尋有け

れば久清申けるは思ひかけぬ物にのりて候てかゝるふしぎを引出してさぶらふいかやうに

も御かんだう候べしと申たりければおもひかけぬ物にのりての申やう興ありてさたなくな

りにけりまことにすい人ののり物に車はおもひかけぬ物也

〔吾妻鏡三十〕嘉禎二年七月十七日壬申高信_佐并欲奉防留神興之勇士等者就衆徒訴即被處

流刑訖九月九日癸亥京都使者參著是去年七月廿三日日吉神興下洛之時欲奉防留之武士右

衛門尉遠政并喧嘩本人近江次郎左衛門尉高信等事宜下之上爲關東御計爲慰山門鬱胸被處流

中間罷越、足料申懸之六十錢事爲御法問、一貫二百文可取之由云々、存外なる申事不及覺悟、亭主雖申之種々惡口、家具拂罷出之間、其町人出合打擲仕之、其旨被入上意聞、彼宿亭當方被官人堤三郎兵衛次申爲此方、如御法可成敗之由御申、御代々御判被成下之、當方被官人爲上意不可有御成敗之由、三管領同前也、右筆かたへ御尋之處、近年事不存知候申之、然者御判證文等被御覽度之由、細川伊豆守、本郷常陸介兩人にて被仰出之、只今則可備上覽之處、此一亂已來、口口預ヶ置候間、向後召寄可懸御目之。略下

〔今川記五目録〕一喧嘩に及輩、不論理非、兩方共に可行死罪也、將又あひて取かくるといふども、令堪忍、剥被疵においては、事は非儀たりといふども、當座おんびんのはたらき理運たるべき也、兼又與力の輩、そのしばにおいて疵をかうぶり、又は死するとも不可及沙汰のよし、先年定了、次喧嘩人の成敗當座その身一人所罪たる上、妻子家内等にかゝるべからず、但しより落行跡においては、妻子其咎かゝるべき歟、雖然死罪迄はあるべからざるか。

一喧嘩あひての方人よりとりぐに申、本人分明ならざる事あり、所詮其しばにおいて喧嘩をとりもちはしりまはり、剥疵をかうぶる者、本人の成敗におよぶべき也、猶以後本人露顯せば、主人の覺悟に有べき也。

〔信玄家法〕一喧嘩之事不及是非、可加成敗、但雖取懸、於令堪忍之輩者、不可處罪科、然以最負偏頗、令合力族者、不論理非、可爲同罪、若不慮犯殺害刃傷者、妻子家内之事者、不可有相違、但犯科人令逐電者、縱雖爲不慮之儀、先召置妻子當府、可尋子細。

一被官人喧嘩并盜賊等之科、不可懸主人之事者、勿論也、雖然欲札實否之處、件主無科之由、荐陳申、相拘之半、令逐電者、主人之所帶三ヶ一可沒收、無所帶者可處流罪者也。

〔長曾我部元親百箇條〕掟

抄例
小林小次郎時重、與本庄四郎左衛門尉時家相論、所從藤平太男、妻女馬二疋、一疋在馬口付男、小次郎於路頭被擄取事、

仁治二年五月六日評定昨日依御神事延引之故云、依狼藉之科、可被召所領一所云々、外記左衛門尉後平奉行

〔看聞日記〕應永卅一年三月十四日、抑後聞今日前管領細川屋形有喧嘩事、爲節養赤松一黨招請有大飲、而安東口口近習醉臥之處、赤松左馬助安東を差殺了、令逐電云々、仍安東傍輩等赤松へ欲押寄、雖然自公方被制、左馬助可切腹之由被仰、然而已逐電之間、先無爲云々、

〔常樂記〕應永三十一年五月安藤被殺害、於右京大夫入道亭酒宴座、敷人裏壁切腹、主人逐電了、代官還可切之由父子論之、親兄切之、其子又可切之由堅中、仍二人不可然之間、親ヲ留也、諸人泣血云々、此子未及前冠、腹切機又、大強之者也、諸人哀憤之云々、安藤近習者也、仍小番衆已下堅中、體面仍令切

○案ズルニ、此事看聞日記ニハ三月十四日ノ條ニ載セ、常樂記ニハ五月ノ條ニ載セ、且ツ安東ヲ安藤ニ作ル、

〔看聞日記〕永享三年六月十九日、抑聞去五月十四日、相國寺沙彌頂沙彌定院被打擲、鹿苑院僧所行云、云、依之沙喝蜂起、僧堂ニ閉籠寺ヲ欲燒鳴鐘、寺中騷動之間、諸大名馳集云々、自公方被有仰先退散、此間猶有御札明、鹿苑勝定、僧四十餘人被召捕、侍所赤松被預云々、後聞張本僧三人被流罪、自餘被追放云々、

〔看聞日記〕嘉吉元年二月十八日、明日伯三位公方上様入申云々、十九日、公方女中伯許へ入御、丁事御儲云々、後聞今夜右舞人忠右被討、借物大法事ニ伊勢と確執、忠右惡口之間、公方被聞食被召捕、則被刎首云々、胡飲酒舞曲相傳者也、被經御沙汰被討、天王寺有舞曲之間、不可斷絶云々、廿二日聞昨日忠右妻自害、家放火、然而家ハ打消無爲、妻ハ死云々、

〔嵯川親俊日記〕天文八年八月三日戊辰、去晦日室町土御門三福寺地子錢未進爲催促、大館兵庫殿

〔建武以來追加〕東福寺條々（應安五十十九御沙汰）

一諸社神人等訴申喧嘩事（應安五十一）左衛門尉貞秀奉行

或帶本訴之理、或依不慮之儀、神人等被殺害刃傷者、尤可有裁許、而近年就所務負物以下、動成奸謀之企、令算闖殺之時、致訴訟云々、政道之違亂、諸人之煩費也、不可不誠於如然事者、一向非許容之限之上、解却神職、須處其身於罪科、將又社務出、非據吹噓者、經奏聞、改所職、可被補器用之仁矣、

〔吾妻鏡十一〕建久二年九月廿一日丁卯、爲歷覽海濱、出稻村崎邊給、（中）秉燭之程、令歸給之間、雜色

澤重與盛時所從有喧嘩、各被疵義盛郎從等、搦進之、殊有御勘發、則自此所被流遣伊豆國、而可被窮科、輕重歟、爲楚忽御沙汰之由、盛時屬義盛（田）頻愁申之、於所犯者相互難通旨、直御覽訖、非他所、正

於御興遊砌、忽現奇怪、糺斷之篇、何期後日乎、汝乍接公事、欲申行非據、不當之由、御氣色及再三、盛時閉口逐電云云、

〔吾妻鏡二十〕建曆二年六月七日辛巳、於御所侍所、宿直田舍侍起、闖亂、即時死者二人、刃傷者二人也、鎌倉中鼓騷、御家人等馳參、佐々木五郎搦進之、和田左衛門尉卒數輩、子孫僕從等、令參入、搜求與黨之輩、糺斷其罪、違也、八日壬午、其夜闖亂者、宿直之間、起於枕相論、刃傷二人者、伊達四郎、获生右馬允等也、死者兩方郎從也、今日各配流、伊達佐渡國、获生日向國云云、御所中狼藉、殊依有其符、及急速沙汰云云、

〔吾妻鏡二十三〕建保六年九月十三日辛巳、鶴岳宮騷動、（中）尋子細之處、宿直之輩、候廻廊、而兒童若

僧等徘徊明月、被宿直人見、無禮之故、起闖諍、爲少生被打擲云云、十四日壬午、件宿直人者、右大將家御時、敬神之餘、以恪勤（號）等結番之、每夜所被警固宮中也、其儀子今不怠之處、蓬耻辱之間、向後

可停止此事之由、被定下、

〔新編追加（侍所）〕一依狼藉科、被召所領事、（目録云、仁治二五六、仁）

故戰之輩依刃鬪殺悉被收公所帶者於防戰之族者任先例可分召所帶半分若又被行故戰之本人於死罪者至防戰者被關所永不可被免許矣

〔侍所沙汰篇追加〕二合戰答事觀應三九十八右筆飯尾大和守賴國

帶御下文施行輩尤可相待使節遵行處恣亂入所々之間本主依支申多及合戰之由有其聞甚不可然自今以後者不論理非至故戰之輩者悉可收所帶亦於防戰之仁者可分召所領半分但非領主者可準故戰也〇又見建武以來追加

〔新編追加社〕一西國住人等號神人構事於左右好寄物功物之沙汰致狼藉間守護所地頭代等及相論之時者忽及喧嘩云々不致沙汰者定彌乘勝欺甚不便也神人於致狼藉者可解却神職若非職之輩寡神威令濫行者可被處罪科之由可被觸申別當貫首也〇中略

天福二年三月一日

武藏守 判

相模守 判

駿河守 殿

〔新編追加社〕一諸社神人狼藉事就甲乙之訴訟糾明之後罪科難遁之時雖相觸本訴不事行之間有煩于成敗云々尤不便也狼藉輩無遁方者解却其職隨召給其身可被進關東也凡三箇度相觸之後猶不殺用者可令注進給依他事雖訴訟出來永不可有御沙汰也者可被存其旨之狀依仰執達如件

延應元年四月十四日

前武藏守 判

修理權大夫 判

相模守 殿

越後守 殿

〔新編追加〕侍所一殺害刃傷打擲事○目錄云、乾元二六十二、

被戴式目之上者、不及子細、至凡下之輩者、○中打擲者禁獄可爲六十日、歟、

〔建武以來追加〕一故戰防戰事

其以雖有其科、殊故戰防戰之咎難通歟、然者依輕重可被處罪科也、仍於防戰之科者、札明子細、宜任時儀、可有其沙汰哉、

〔建武以來追加〕一故戰防戰事貞和二二五
實錄四郎兵衛入道主男奉行

縱雖有確論之宿意、可仰上意之處、任雅意及圖殺之條、罪科不輕、所詮於故戰者、雖有理運、不可有御免者也、至防戰者、若有道理者、可被免許者哉、於無理之輩者、可被行故戰之同罪歟、

〔建武以來追加〕諸國狼藉條々貞和二十二二十三沙汰

一故戰防戰事

縱雖有確論之宿意、經上訴宜仰裁斷之處、任雅意及圖殺之條、雖通其科、所詮於故戰者、雖懷本訴之道理、不可通濫吹之罪責、何況於無理之仁哉、自今以後、堅可令停止之、若尙違犯者、准本條悉召上所傾、可處遠流焉、次與力人事、可召上所傾、無所帶者、可處遠流也、子細同前、至防戰者、爲非領主者可爲故戰同罪、若爲理運之仁者、隨事體可有其沙汰矣、

〔建武以來追加〕伺事條々永正八十二六

一故戰防戰事永正十一四十
具考

於故戰者、雖有確論之宿意、可經上訴之處、及圖殺之條、被收公所帶之段、度々制炳焉也、然今度被定置故戰之儀、尙被停止畢、有不敏用之輩者、可被行本人於死罪、若令逐電者、尋搜同意之族、可處罪科、次防戰事、被遂御札明、隨事體可有其沙汰也、

〔侍所沙汰篇追加〕一故戰防戰咎事永正十三

ば、仰いだされ候はんするもさぞ存候、但いまの准后と故内府と、いろ／＼の相論の事ども候し故、在治卿准后の御使として、種々舊院へ御申の事ども、又御官位の事ども、數年運空○親長申つかわし候しかども、なにとも在治卿申旨も候はざりし故、關白のをきぶみにまかせて、前内府家門をはからはれ候し事、ちとなんじう候しほどに、准后の十五歳の御時、御つゝ候て、故内府は隠居候しと存候、もし大やうなる事などにて、それにかゝりてとかく申され候はゞ、さいわうの御かんだうにおよび候はゞ、正たいなくなり候ては、曲も候まじき當座の儀と申、後代のためと申、あまりおんびんならぬにつきて、一段叙慮として仰出されべきかと存候よし、御心え候て、御ひろう候べく候、かしこ。

廿五日、自伯二位許有使、在數事、昨日被仰九條之處、被申子細、猶可被計申之由有仰云々注折紙 御圖菅氏之輩訴狀寫留之在別

在數朝臣殺害事、以外之次第、不可然之由、條々被仰之處、准后申詞、彼朝臣事、依緩意、自去年十月不可向顔之由申合候之處、押而令經廻候之間、如此令沙汰候、於巨細者、追可申入之由被申候、此上事、可被如何候哉、又菅氏輩申狀如此、猶可被計申事、即參長橋局下要招出伯二位申云、此仰更以無覺悟候間、不載申詞、尋申候、其謂於道理、非者大概無其隱候歟、於攝家准后并大將重職之人、乍云家禮之者、殺害之條、就不穩便、可有罪科歟、否事、御尋事、舊了在數朝臣科條、無極者、殺害事、爲沙汰之外事、不可及是非之叙慮事歟、其段被治定、爲有御罪科之分治定者、被定其科可爲分歟之由、被仰下之、其時可申所存爲私なにとやうに罪科あるべきなどは、難申之由申了、

事所行判

〔御成敗式目〕一、毆人答事

右被打擲之輩、爲雪其耻、定露害心歟、毆人之科、甚以不輕、仍於侍者可被沒收所領、無所領者可被處流罪、至于郎從以下者、可令召禁其身也、

散以後也、折節太無骨、然間十九日三寶院門徒又蜂起、切鐘本佛座主、金剛王院座主衆徒又如元鈞之、忽猶欲及鬪亂、仍差遣武士被守護之、實逼即召進之、賜武士口三寶院張本三人被責催之間、面々難澁、今召僧綱等憲深法印以下也、被仰含子細、遂隨勅定、可召進之由申之、但座主條々非法等註申之、於其條退可有沙汰、又座主方張本可注進之由申之、子細等猶多、然而不遑委記、

〔親長卿記〕明應五年正月十日、昨夕聞在數朝臣原爲准后九條前關白政沙汰被打了、即及死門云々、不便也、後聞准后并左大將經倫等、自身令沙汰給云々、無骨事歟、准后幕下等御振舞希代事歟、末代之儀莫言之、廿四日、自内裏有女房奉書、昨日仰在數朝臣事也、

昨日兩人して御だんかう候へる事、かすながのあそんにしよぞん御たづね候へば、かんけの物を御ざいくわ候れい候はぬとて、めんせられ候れいども、候事候、又こ前内ふありはるの卿にたちをぬきてむかはれ候つる、まかるべからぬ事とて、そのちはならへ御いんきよしけるなど申候はごに、さやうの事よきれいにて候はごに、一がきにし候て、れんしよしてまいり候へど、おほせられまいらせ候、それをつかはされてきと申され候はんずるとおぼしめし候、たゝなにへんのまさいにてかやうにせられ候ぞとは申ばかりにては、ゑん所の事にて候に、さいわうしまいらせ候、たゝめしこめられなごきこえ候、御つかいの事中御かごの大納言けらいにて候とて候はごに、それにはくをそへられ候はんずるとおぼしめし候よし申候べく候、かしこ、

明應五正廿四

大納言入道ごのへ

内裏への返事

たゝいま御文下され、ちと物詣仕候て御返事申入候は、でおそれおぼへさせをはしまし候、昨日兩人して仰合られ候儀につきて、故前内府所行の事、まことに其儀たしかなる事にて候は

左衛門尉源定綱薩摩國、左兵衛尉廣綱四岐國、左兵衛尉定重對馬國、同小三郎定高佐國、

禁獄五人

堀池八郎實員法師、井伊六郎真綱、岸本十郎遠綱、源七真延、源太三郎遠定、

〔吾妻鏡十六〕正治二年四月八日癸巳、佐々木左衛門尉廣綱飛脚自京都參著申云、去月廿九日、白晝、

於六條萬里小路、若狹前司保季、犯掃部入道郎等吉田右馬允親清之妻、親清自六波羅歸之處、有此

事、即取大刀追之、入于六條南萬里小路西、九條面平門之內斬伏之、十日乙未、今日掃部頭廣元朝

臣、申送江馬殿○北條義時云、去月令殺害若狹前司保季之男、束手來、可爲何樣哉、隨御意見、可披露云云、

御返事云、付是非可被披露云云、江馬太郎主被仰云、爲郎從身殺害諸院宮昇殿者、於武士又非指本

意、白晝所行罪科重哉、直召進使廳、可被誅者歟云云、

〔皇帝紀抄八順德〕建保二年十二月卅日、中宮大進藤原兼高、被配流土佐國、是去比於殿上打藏人勘解

由次官宗宣之科也、

〔皇帝紀抄八後堀河〕寛喜元年六月十九日、有流人宣下事、武士左衛門尉三善爲清流日、前左兵衛尉大

江貞知流大隅、是四月日吉神人等圖譴輩也、

〔葉黃記〕寶治元年七月廿四日乙亥、參院醍醐寺僧綱等列喧嘩事、有御問答、予申次之、僧綱候西中門

廊、上皇密々於寢殿間、食之、予仰含之趣、返々神妙、定不耻累祖、歟之由、再三有御感、存外之面目也、

喧嘩根元事

寺領越前國牛原庄預所金剛王院、依殺害地頭代、件庄大略被押領課役省略、經年而當寺上座法橋

藏嚴知行之間、僧前調論講不法之由、實賢僧正門徒、去十三日、伐藏嚴住房、衆徒三寶院門忽蜂起、正

員三綱者十僧之中也、依少事忽不及與耻辱、可出件張本之由、觸座主之處、藏嚴房人也不可及衆徒

之由、令申返答之、憤此事衆徒寄向實逼寶賢門徒之首云々、經坊之間、忽合戰、被下制止之院宣了、然而已事

關殿

鎌倉幕府以後ハ、關ヲコトヲ喧嘩ト云ヒ、殿ツコトヲ打擲ト云フ、打擲ハ所領ヲ沒收ス、但其罪ノ輕重ニ由リテ土地ヲ收ムルニ廣狹ノ差アリ、所領ナキ者ハ流ニ處シ、郎從以下ハ禁獄トス、而シテ其殺傷ニ關スル制度ハ、殺傷篇ヲ併セ看ルベシ、

足利幕府ニ至リ、故戰防戰ノ名アリ、故戰ハ所領ヲ沒シテ遠流ニ處シ、與力者ハ所領ヲ沒シ、所領ナキハ遠流ニ處ス、後ニハ故戰ヲ死罪トセリ、防戰ハ、其理由ニ由リテ罪ヲ免ル、コトアレド、故戰ヲ死罪トスルトキハ、防戰ハ爲ニ領地ヲ收ムベシト云ヒテ、其制ヲ立テシコトモアリ、

朝廷行判

〔吾妻鏡十〕建久二年四月五日壬午、大理能保并廣元朝臣等飛脚參著、各被獻書狀、去月比佐々木

小太郎兵衛尉定重、於近江國彼庄、木庄刃傷日吉社宮仕法師等、仍山徒蜂起、所司捧奏狀參洛可

賜定重身上之由申之、又可差進延曆寺所司等於關東之由風聞、朝家大事忽然出來之、卅日丁未、

延曆寺所司辨勝義範等參著、先徘徊橫大路、營南門前申事由、仍點基清之家被招入、彼二人先賜酒肴、次

遣俊兼盛時等令問答給獻上衆徒狀、可給定綱父定重父子身之由、所載之也、亦彼父子之外稱下手人、

注進交名、是去三月、於佐々木庄、凌轢山門使、其張本之所、岸本十郎遠綱、源七真延、源太三郎遠定等、

也、而無召渡其身於敵讐例之由仰及再三云云、五月二日己酉、大夫尉廣元飛脚自京都參著、大理

被獻書狀、去月廿六日、山門衆徒爲訴申左衛門尉定綱、頂戴八王子客人十禪師、祇園北野等神輿參、

開院皇居之間、則有群議罪名、減死罪一等、可被處遠流云云、八日乙卯、佐々木左衛門尉定綱等事、

依山門訴所被下之、去月廿六日口宣、同廿八日院宣案文等到著、又同廿九日被定定綱等罪名訖、去

一日神輿御歸座云云、流人、

〔康富記〕寶德二年七月十九日辛酉、或語云、和泉守護細川兵部大○大、下文輔、去年被誅、山臥之間、都鄙山臥楯籠新熊野社頭呼集諸國山伏率大勢、一昨日可押寄兵部少輔屋形○屋形、小、路、萬、且新熊野神輿可振入之由、令支度之事、可及大儀之間、自兵部少輔方被出下手人、○又科料、料足百二十貫、田地十六町、神馬等出之、被懇望之間、昨日屬無爲云々、

〔康富記〕寶德三年七月廿八日甲子、後聞今夕山名被官人大田垣內者、殺害細川京兆被官人豐田出雲內者○侍云、仍自細川被申送子細之處、差違而自山名方召具下手人、有使節、即屬無爲云々、九月九日甲辰傳聞分、此四五日之前當管領畠山○持國、被官人木澤捕京極○持清、召仕目付不及、一往相尋誅了、仍自京極方遣使者可有成敗之由、令申之處、無體返事之間、京極自身可罷向管領亭之由、支度之間、細川右馬頭入道馳向制止之、猶不休之處、自管領被遣下手人了、此下手人如常免而可歸之處、兼依無返事、無一途京極令腹立切棄件下手人云々、兩方共希代所行也、但不知實說傳聞分如此如何々々、

〔親長卿記〕文明十二年九月廿四日、詣右大將許、先日青侍男小寺殺害、予今不休可寄之由、有其沙汰之間、驚入由令申、大略無爲、本人爲小寺中間男、可切之由申之云々、此間者侍之間、可切侍之由令申候、雖然本人○殺害人、中間之間可切云々、大略可爲其儀之由被命、廿五日、右大將送使者、夜前小寺爲下手人來之間、事屬無爲、昨日來臨爲悅之間、送使者了、

赤松統官

承引之條以外之次第也。傍輩等可及生涯事、無覺悟事也。任法令申之處、致新儀之違亂者、無力次第也。此上者不及是非之由、可被返答也。及噉々之儀者、可爲其時沙汰之由申了。此上者可被如何哉之由、及御沙汰源大納言申云、又或仁申者、以女房奉書被仰宥者、可爲無爲云々。但被出女房奉書事者、可爲陵遲歟。予申云、此段可然。其謂者、一昨夜已可及一段御成敗之由被仰了。被遣奉書於源大納言、申遣之趣者、可然歟。仰云、然者、早可被出女房奉書、可書其案云々。略中

一昨日のぎにつきて、いかにもかの物たづねいだすべきよし、民部卿にかたく仰いだされ候へども、さう／＼落所たづねいだし候はぬよし申候ほどに、このうへは下しゆ人をいだし候て、法のごとくにさしたし候へど、仰られ候も、それにてはかなる候まじきよし申候、とてもどもかのもの、事は、御所にてくわんたいをいたしたる事にて候ほどになきまでもたづねいだし、出しだいにさしたし候べきうへは、ふゐに候やうに仰つけられ候て、めでたく候べく候このよしつたへ仰られ候べきよし申候べく候、

源大納言どのへ

廿四日、及晩民部卿來、昨日事、依予意見、屬無爲、祝着云々、

〔建内記〕永享二年二月廿三日、一乘院雜掌、柚田大輔、法眼信賀來。略中信賀相語云、畠山左衛門督入

道被管齋藤榎本、於南都轉害宿藤丸、先日被殺害了、是日來逗留藤丸宿之處、伊勢詣旅人、可來此宿

之由、有其約、仍示子細之間、移宿他所、畢爰彼參詣人、過期未來、仍依不受令改宿、由齋藤榎本、插讐憤

拔大刀來藤丸宿、亭主折節、他行之間、下女馳出尋子細之處、令刃傷彼下女了、仍轉害大路主地人、押

寄彼在所。同轉害大路島令誅彼榎本了、而畠山及訴訟之間、可弼進彼藤丸亭主。與和寺承仕法師也運渡彼宿、

於大路可燒却之由、可被仰惣寺之由、信賀罷下、可申一乘院家之由、以松田對馬守、飯尾肥前守、於室

町殿被召仰之間、去十六日、馳下申寺務相觸、同十七日、滿寺致發向了、

被打畢、其後は一向無法、然而解死人ヲ切事之法にも不定、又きらざるにも不定候也、

〔新編追加傍例〕一故大將家源朝御時、梶原之郎等、依令取澀谷次郎乘馬口之咎、賜彼下手人二人澀

谷次郎、則斬首畢、

傍例一故修理亮殿北條時氏

在京之御時、野本四郎右衛門尉之郎等、四方田左衛門尉、依自馬引落之咎、雖

給下手人、猶貽鬱訴、不請取之間、野本四郎左衛門尉、彼下手人行斬罪、然而四方田左衛門尉、猶依令

憤申、野本四郎左衛門尉、被召攝津國守護之上、被召預其身於肥田八郎左衛門尉畢、

傍例一當御代、澀谷小平太子息二人、相共罷行萩野之處、稱令乘被盜馬之由、本間左衛門尉、後見一人、本

間御母之郎等一人、而小平太自馬令引落之間、依彼咎、賜件下手人於小平太之間、即令斬首畢、

〔太田康有記〕建治三年十月十四日、遠江十郎左衛門尉與杉本六郎左衛門尉、等淨澤左衛門尉云々於建長

寺前乘合之間、十郎左衛門尉、下人殺害淨澤左衛門尉、仍十郎左衛門尉、相具下手人、參山内門前之

處、被召預于武藏守殿宗政云々、

〔親長卿記〕文明十四年三月廿一日、今日於内裏有手猿樂、内藤云々

七子、刺許、俄有召參内、有喧嘩事、民部

卿被官殺害、手猿樂衆一人、被引出於門外死去云々、合手逐電、其儀可被如何哉之由、有仰、予申云、合

手逐電之時、其法爲何樣哉、可有其法事、可被申武家歟云々、可被申武家暫追之儀也、先民部卿高忠、被

官人之上者、爲私可尋其法樣、於武邊依其是非、可爲公儀御沙汰歟、其身逐電之上者、對父可令生涯

歟、是又子之罪、可及父事、當座無覺悟、何樣可有法事也、以私之儀、可被尋聞食之由、申入、誠所予申、有

其謂之由、有仰、即被召民部卿、被仰了、廿三日、依召參内、中予在庭上、仰云、一昨日事、自民部卿許、

可遣下手人之由、種々雖申遣無承引、一段可有御成敗之由、一昨夜已被仰下之由、申之云々、若下手

人事、不願狀者、傍輩等、令生涯、可出事歟、就是等之儀、可爲何樣哉云々、勸大納言不申、是非、暫思案歟、

何樣之由、重有仰之間、予申云、本人逐電之上者、方々雖尋求、未尋出之間、可遣下手人之由、申之處、不

一人 平七頼母

所在 疵

一所額左寄 具六分 口三分 贈寄定

右件所在疵任見在實檢言上如件

文永二年七月廿九日

道使小典上野爲末

貫首源 押花

貫首源

貫首丹治

貫首源 押花

執行代權少監惟宗朝臣 押花

御使

左兵衛尉藤原

右兵衛尉藤原 押花

沙彌 押花

付下手人於前
害者

〔異本式目〕一解死人ヲ引事總而むかしより在之法也然而上杉防州と甲斐武田と喧嘩之時防州ヨリ解死人ヲ引處武田ガ内之者此解死人をきり候處上杉殿ヨリ武田方へ勢遣ヲ有ベシトテ諸勢を打寄乍去防州之被仰事には武田解死人をきる事子細有ベシ暫勢遣を可相待之由被仰出之處に彼武田烏帽子上下ニテ防州江走り入申事者みれんの者共めしつかひ候之間解死人を我々に不聞切リテ候然間其主をからめとりおきて候生涯させ候はんするや此事東八ヶ國の御法に定まるべきにて候と被申候處に防州思案して無餘儀候東八ヶ國達上聞可定候とて

仰處、繪所土佐將監ガ甥也、車ニ乗タル人ノ、我ヲ具シテ、此所ニテ暫相待候ヘト被申間、如此候ト申キ、サテハトテ世間病ヲ大事ニ沙汰々々候テ、○サテハ以下悉有誤脱後ヨリ以外狂氣ニ罷成間、籠ヲ造テ入置處、何時ニテカ候ツ、竝此一兩日間籠ヲ押破罷出候間、方々相尋處、サテハ言語道斷候、無是非次第候由申入間、狂人之上ハ不及力トテ、此男ヲ土佐將監ニ被預遣也、誠以外不思議併天魔所行歟、自來廿六日五墳併此御祈候歟ト、希代々々不思議候、誠王位零落體也、驚入外無他、予兼テ此事觸、多分此狂人御帳ノ内ニテ、高聲ニ車寄候ヘト申テ、花頂ヨリ花山ヘ罷ベキ由申キト、其聲ヲ内裏様聞食ツケラレテ、被遣人被見ケルト云々、聊相違如何、

檢使

〔深江文書〕實檢

言上肥前國高木東郷深江村小地頭安富□□三郎入道心空□□□□爲□□□□中□左衛門□□□□今月十一日□□□□村内大□□□□□□□□等被打擲□□□由事

被疵人

一人 大窪太郎吉行

所在 疵

一所烏帽子結緒左寄打目長九分 口三分
惣寄定

一人四郎太郎近信

所在 疵

一所項打目長九分 口二分
惣寄定 一所左耳打目長八分 口二分
惣寄定 一所烏帽子結緒打目長八分 口一分
惣寄定

一人彌太郎貞兆

所在 疵

一所左耳上打目長五分 口一分
惣寄定 一所同膊打目長八分 口四分
同

〔吾妻鏡 四十三〕建長五年二月廿五日癸酉先日評定間、有御不審事、被問法家云、小童部二人致諍論、令打合之處、十二三歳之童部爲一方之方人、刃傷候也、可有罪科否事、保惠打者、如大伴刃傷人被定咎者、諍論根本之童部、可爲同罪否事、式條之趣、可注給候、如此事、關東被定置事候ハス也、式目之外者、法意ヲ守天、又時儀ニヨリテ御計候也者、今日彼御返事被覽評定砌云云、法意ニ十六以下者收贖云云、彼刃傷童十二三歳云云、可被處科料、不可被收其身歟、根本圖諍童、隨所犯之輕重、同可被處贖銅歟、同罪勿論者、

〔今川記^{かみ}五^目〕一童部あやまちて友を殺害の事、無意趣の上は不可及成敗、但十五以後の輩は、其どがまぬかれ難歟、

〔信玄家法^上〕一童部誤而殺害朋友等者、不可及成敗、但於十三以後之輩者、難通其咎、

〔親長卿記〕文明十五年五月一日、後聞、鳴前彌宜祐久縣主、依^近狂^也、切走中間男、打害繼母云々、

十四日、忠久來、鳴前彌宜祐久縣主、近日物狂、太以不可然、切走中間男、打害繼母之由、風聞難說云云、所詮令在國祐久被下祐長安堵之様可奏聞云々、彼忠久祐久弟也、諸住爲日野諸大夫、雖然爲眞實之間、令申云々、廿日、祐長申、祐久縣主事、奏聞進退驚思也、早令隱居祐久縣主、祐長可被下安堵云々、廿一日、祐久事、仰祐長了、

〔滿濟准后日記〕應永卅四年正月廿二日、今日宰相中將季保參詣次、立寄雜談次、相語云、サテモ去十七日、於内裏狂人、不思儀振舞仕事、定聞食及候歟ト云々、予云、其事候、但不分明、何様次第哉、具可相語由申處ニ、十七日如法晚陰頃、勾當内侍爲朝餉飯參候處、清涼殿之内ニ、人聲シテ或ハ高聲或ハ密々ニ物ヲモ申聲スル間、不審ヲナシ、勾當開朝餉飯間障子見之處、更ニ人モナキ間若ヤトテ御几帳之内ヲ被伺見處ニ、日御座上ニ、髻放タル男ガ、駒犬ヲ打タフシ、枕ニシテ臥タリ、仰天無極シテ、此由奏スル間、主上^光出御アテ、内被御覽處、以外之體也、仍事子細以人被尋

郎從事爲武州御領可被流津輕之由評了、

〔看聞日記〕應永廿九年三月八日、今夜兼英朝臣○藤逢横死云々、不思儀事也、十日、抑聞兼英朝臣楊梅中將

横死事、敵人不知、只夜討ニ差殺云々、子息兼興手負、死生未定也、若兼豐朝臣所行歟、兄弟不快、如中

違云々、世人推量、彼朝臣所爲云々、六月卅日、抑聞今日楊梅兼豐朝臣被召捕云々、是兼英朝臣横

死事、兼豐所行露顯之間、自公方被召捕可被流罪云々、

○按ズルニ、兼豐ハ兼邦ノ子ニシテ兼英ノ兄弟ナリ、系圖ニ其人ヲ載セザルハ、蓋シ流刑セラ
レシヲ以テ之ヲ除カレシナラン、

〔齋藤親基日記〕寛正七年○文正元年四月十六日、日吉樹下修理大夫殺害事、於殿中異見有之、既殺害之

段證人分明之上者、於張本人者、爲社家尋搜之、加討罰、至社司給者可被改之旨、各御返事申之、

〔大内家壁書〕御勘氣之仁不可有方人事

蒙御勘氣之族事、卽時可被追放御分國中、也、然者古敵當敵當堪之諍論、配狂已下、雖爲如何體之子
細、令殺害彼御勘氣之仁、時其討手并與類等、不可行其咎之由、被仰出之上者、雖爲親子兄弟從類一
家緣者、不可有鬱憤之沙汰也、若猶含意、趣爲御勘氣之仁方人、有及訴訟輩者、可爲御勘氣之仁同罪
之由、所被仰下也、此旨爲諸人存知、壁書如件、

明應四年卯乙八月日

沙 彌 奉 正任
左衛門尉 同 武明

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一 刃傷之事、雖爲如何様之子細、爲傍輩打聽於仕者可成敗、但奉行人可爲各別事、

一 無故人を害科事、猶糺明之上を以則可行死罪、品可有輕重事、附類親成敗之儀者、時々以聞合、分

明可沙汰事、

其神役、件神領自專事、不可勝計者哉、以之存之、殺害之咎、不可及、其子孫者乎、

八月九日

吉田 從二位兼俱

〔吾妻鏡〕三十、文曆二年○嘉祿元年七月廿三日甲申、被仰六波羅條々事、先京都刃傷殺害人事、爲武士輩

於○於下、新編追加、有不字、相交者、可爲使廳沙汰○下略

〔御成敗式目追加〕一殺害人事

右雖爲使廳沙汰、至于重犯輩者、申給之、可行所當罪科之由、御下知先畢、早任被狀、可被申沙汰也、仍執達如件、

仁治二年六月十日

前武藏守判

相模守殿

越後守殿

〔新編追加侍所〕一刃傷殺害人禁斷事

右先相觸所在之庄、公糺明犯否、任實令搦出之時、可請取之、無左右使者亂入事、可停止、兼又國司一所之中、檢非違所別當爲宗所職也、而守護人令管領之間、云盜犯放火、云勾引人、如此犯人不及成敗云々、早停止守護人之妨、任先例、可爲檢非違所之沙汰、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿三年○安貞元年六月十八日乙丑、卯刻武藏二郎時實武州當腹二男、年十六爲家人高橋二郎高橋

京住人也、被殺害給傍輩雨三人、同被害畢、此間、明日依可爲丈六堂供養、成群御家人等競走、爰伊東左衛門尉祐時郎從、件虜進於高橋、卽日於腰越邊被處斬刑、

〔太田康有記〕建治三年十月十四日、遠江十郎左衛門尉與杉本六郎左衛門尉等浮澤左衛門尉云々於建長寺前乘合之間、十郎左衛門尉下人殺害浮澤左衛門尉、仍十郎左衛門尉相具下手人、參山內門前之處、被召預于武藏守殿云々、十二月廿五日、評定老、略、遠江十郎左衛門尉殺害杉本六郎左衛門尉

故圖謀罪三罪、法意ニハ聊輕重アリ、式目ニハ差別ナケレドモ、死罪流罪、所帶沒收ノ三載之ハ、殺害ノ輕重ヲ立タリ、然ラバ法意ノ故圖謀ノ三ノ心、攝此中歟。○中 刃傷モ殺害ト同罪トス、死罪、流罪、所帶沒收ノ三罪ニ處スベキ也、父子ノ咎モ、不相交者互不可懸之等也、法意ニハ、刃傷ハ徒罪也、殺害ヨリ輕シトス、而ヲ式目ハ同罪トス、但當時ノ處斷ニ輕重アル歟、

〔新編追加侍所〕一殺害刃傷打擲事元二六十二、目録云、乾

被載式目之上者、不及子綱、至凡下之輩者、殺害者被處斬罪、刃傷者、被遣伊豆大島。○下

〔新編追加侍所〕一殺害付刃傷人事

右如式目者、依口論犯殺害者其父子不可懸咎云々、而如風聞者、寄事於左右、至于親所從等、稱殺害被官令處罪科云々、所行之企、甚濫吹也、然者於刃傷殺害人者可召禁其身許也、至父母妻子所從等者、不可懸咎、如本可令安堵也、

〔新加制式〕一號咎人不究事由而令殺害事

右於咎者對其主令一決、而可誅戮、只令自專者敢非正義、但咎人及其庭、致勇血之働、不及力而於令殺害者、聊可有差別乎。○中

一號咎人追來之時、自他方令出合殺害事、

右號咎人以刀兵追來之時、近所之人民等令出向、不日令殺害云々、其公事者追來人可爲所行、至出向之人者、不可有別子綱、

〔侍所沙汰篇追加〕一神職輩自身殺害事永正七八九

制戒勿論也、但爲他有取懸之儀者爲拂災、臨期及不慮之殺害事者、不可爲自科之由、先段事舊訖、神道者以道理爲正直之謂、將亦仰他人致其沙汰事、古今不及猶豫者也、就中父雖有自身殺害儀、其子補神職例連綿哉、奉公外様、諸國御家人等、乍居大社神職、致合戰并自身殺害事、眼前哉、然以代官勤

古事類苑

法律部二十三

中編

殺傷

鎌倉幕府ノ制ハ、殺害、刃傷、共ニ其罪ノ輕重ニ依リテ死又ハ流ニ處シ、所帶ヲ沒收シ、其罪ヲ親屬所從ニ及ボサズ、他人ノ職又ハ他人ノ財ヲ奪ハントシテ殺害スル時モ、犯人ノ父之ヲ知ラザレバ、緣坐ニ處セズ、但父祖ノ仇讐ヲ殺害スル時ハ、父祖ハ知ラズト雖モ、其事ノ己ニ由レルヲ以テ、罪ヲ免ル、コトヲ得ズ、而シテ京都ニテノ犯罪ハ、武士ノ干預スルヲ除ク外ハ、檢非違使廳ノ沙汰ナリシガ、後ニハ然ラズシテ、重犯ハ六波羅ニテ之ヲ處斷セリ、足利氏ニ至リテハ、幕府專ラ之ヲ處置シ、其犯人ニ由リテハ、朝廷ニテ之ヲ行ヘリ、而シテ下手人ヲ被害者ニ付スルコトハ、鎌倉幕府ノ頃ヨリ行ハレテ、朝廷ニテモ之ヲ用キタリ、又幼者、狂者ニ向ヒテ其刑ヲ寬クスルコトハ、王朝ノ制ニ異ナラズ、

幕府行刑

〔御成敗式目〕一殺害刃傷罪科事 付父子咎相互被懸否事

右或依當座之諍論、或依遊宴之醉狂、不慮之外若犯殺害者、其身被行死罪、并被處流刑、雖被沒收所帶、其父其子不相交者、互不可懸之、次刃傷科事、同可准之、次或子或孫、於殺害父祖之敵、父祖縱雖不相知、可被處其罪科、爲散父祖之憤、忽遂宿意之故也、次其子若欲奪人之所職、若爲取人之財實、雖企殺害、其父不知之由、在狀分明者、不可處緣坐、

〔貞永式目抄〕一殺害刃傷罪科事 附父子咎相互被懸否事

古事類苑

法律部二十三

中編

殺傷

幕府行刑

大名行刑

幼者犯罪

狂人犯罪

檢使

付下手人於被害者

鬪毆

朝廷行刑

幕府行刑

大名行刑

幼者犯罪

雜載

八八一

八八四

八八五

同

八八六

八八七

八九一

八九四

八九九

九〇〇

同

一放火事

准強盜宜禁遏

〔百練抄^{十一}〕承元四年五月六日、強盜六十三人、放火者少々、被追關東於二條河原、武士請取之、上

皇^〇後^{鳥羽}有御覽

關違物

〔新加制式〕一失物隨見出可返本主事

右件失物爲本主至令取返者、有何妨乎、先可尋究出所、若其人或令死去、或令他出云々、縱雖爲不知身之過、聊盜類難通之條、相計賣之員數可出一倍贖銅、若於遠國他境土倉等、買得之段分明者、可有差別乎、但難及盜賊之沙汰、於其人體者、非制之限

〔今川記^五〕一駿遠兩國浦々寄船之事、不及違亂船主に返へし、若船主なくば、其時にあたり

て、及大破寺社の修理によすべき也

一河流の木の事、知行を不論、見合にとるべき也

〔信玄家法^上〕一河流之木并橋之事、於于木者、如前々可取之、到于橋者、本所江可返置也

〔吾妻鏡三十九〕實治二年六月五日辛巳、人勾引事、有其沙汰、兄弟者不可爲人勾引之儀、以他人可爲人勾引也、其科准盜犯云云、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年十月十四日乙丑、爲休民間愁訴、今日被定條々、倫長滿定奉行之、

一牛馬盜人人勾引事

此犯及三度者、妻子不可通其科、

〔新編追加侍所〕一牛馬盜人勾引人事建長四十四、倫長滿定奉行、

右罪科是重、雖可令處重科就寬宥之儀、可召禁其身計也。○中次勾引人事、於親子兄弟等者、非勾引

之儀、不可懸其咎焉、

〔新編追加侍所〕一勾引人事乾元二

爲賣買專其業之輩、准盜賊可有其沙汰、向後守此法、可被施行。○下

〔新編追加侍所〕一侍所政所勾引人々賣事

件族任本條可處罪科也、而鎌倉中并諸國市廛間多有專此業之輩云々、至諸國者、仰守護地頭等、儘

可斷罪、於鎌倉中者可被捺火印於其面、

〔總見記十九〕攝州伊丹城賣事

廿八日○天正七年九月、中略、爰ニ下京馬場町門役仕候者ノ女房、アマタノ女ヲ迷ハセ、日來泉州堺津ニ至

テ賣候由相聞エ、今度村井長門守ヨリ召捕、彼女房糺明ヲ遂候處ニ、只今マデ八十人餘賣タル由

白狀ニ及ブ、卽今日彼女房誅セラレ候、

〔御成敗式目〕一強竊二盜罪科事付放火人事

右既有斷罪之先例、何及猶豫之新儀哉、次放火人事、准據盜賊、宜令禁遏矣、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年十月十四日乙丑、爲休民間愁訴、今日被定條々、倫長滿定奉行之。○中

放火

阿波前司殿

〔新編追加侍所〕一國々惡黨令蜂起全夜討強盜山賊海賊之由有其間狼喫之甚不可不誠不可見隱聞隱之旨度々被仰下畢早可加警固也於實犯之族者可令召進其身且雖爲權門勢家之領背守護人下知於拘惜惡黨者隨注申可被處其科也以此越觸廻淡路國中可令致沙汰之狀依仰執達如件

正嘉二年九月廿一日

武藏守 判

相模守 判

淡路四郎左衛門尉殿

人勾引

〔運步色葉集賀〕勾引カサリ

〔庭訓往來侍所〕謀叛殺害略○中勾引コウイン路次狼藉圖諍喧嘩等也

〔庭訓往來抄下〕勾引コウインハ人カドイ也

〔新編追加侍所〕一可令獨禁勾引人并賣買人輩事

右嘉祿元年十月廿九日宣下狀僞略人之罪和議之科條所差拾恰不輕兩事之禁相犯之輩時俗積

習於今未懲改憾仰京畿諸國所部官司等令獨進彼輩知而不糾與同罪者仁○島津本吾妻鏡係三冊

〔吾妻鏡三十三〕延應二年元仁治十二月十六日乙亥就地頭所務以下事被定條々略○中

一人偷賣買事

勾引中等者可被召下關東被賣之類者隨見及可被放其身只可觸路次關々也

〔新編追加侍所〕一勾引人事

千代田判官代入道達性與市村小次郎景家相論以達性爲人勾引由事平內左衛門尉

寛元二年六月五日評定云景家罪科難通歟仍可互橋一所歟云々

帶以此旨可令下知信濃國中給者依仰執達如件

寬元四年十二月七日

左近將監 判

〔新編追加侍所〕一奥大道夜討強盜事近年殊蜂起之由有其間是偏地頭沙汰人等無沙汰之所致也早所領內宿々居置宿直人可警固且有如然之輩者不嫌自領他領不可見開隱之由召取住人等之起請文可被致其沙汰若猶背御下知之旨令緩怠者殊可有御沙汰之狀依仰執達如件

建長八年六月二日

相模守 判

陸奥守 判

下野前司殿

小山出羽前司

阿波前司

周防五郎兵衛尉

氏家余三跡

壹岐六郎左衛門尉

同七郎左衛門尉

出羽四郎左衛門尉

陸奥留守兵衛尉

宮城右衛門尉

和賀三郎兵衛尉

同五郎左衛門尉

葦野地頭

福原小太郎

澀江太郎兵衛尉

伊呂字又次郎

武藏平間郷地頭

清久左衛門次郎

鳩井兵衛尉跡

那須肥前前司

宇都宮五郎左衛門尉

岩平左衛門太郎

岩平次郎

矢古字左衛門次郎

已上廿四人被下之同御教書

〔新編追加侍所〕一近日出羽陸奥國夜討強盜蜂起之間往還之輩有其煩之由風聞尤不便是偏郡鄉地頭等背先御下知無沙汰之所致也甚無其謂早柴田郡內知行宿々遣宿直屋令結番殊可令警固也且籠置惡黨之所々不可見開隱之旨可被召沙汰人等起請文者依仰執達如件

正嘉二年八月廿日

武藏守 判

相模守 判

大藏少輔

〔今川記五かな目録追加〕一少身の者、盜人にあひ取るゝ所の財寶、纔の事たりと云共、其身においては進退さしかさる由を存、彼盜人尋出す所に、目代之手へわたるか、或は不入之地たる間、雜物出間數由先規より申と云共、無力の者においては、不便の儀たる間、贓物一色、惡黨に付置、其外はぬしに可、還附也。

計贓

〔吾妻鏡二十八〕寛喜三年五月十三日、今日有被定下條々中竊盜事、假令於錢百文已下之小犯者、以一倍令致辨償、可令安堵其身略下

〔侍所沙汰篇追加〕一盜賊贓物事四月廿日評定〇嘉祿三年

右依贓物之多少、被定罪科之輕重、詔縱令錢三百文若二百文以下之輕罪者、以一倍令辨償、可令安堵其身、三百文已上之重科者、假雖行一身咎、更莫及三族之罪者、於親類妻子并所從等者、如元可令居住也、次同宿所家主懸罪科否事、不知其意者、不及家主之科之由度々經其沙汰之。

〔新編追加侍所〕一竊盜事〇目錄云乾元二

右錢三百文以下者、任御式、目以一倍致其辨、可令安堵、三百文以上、五百文以下者、可爲科料錢貳貫文也、但於贓物者可被返與被盜主、至六百文已上重科者、可爲一身之咎、不可及親類妻子所從等之咎、背此儀致過分之沙汰者、頗非撫民之法、須改所職、但雖爲少犯、及兩度者可準一身之咎矣〇又見侍所沙汰篇

舊法

〔新編追加侍所〕一竊盜并博弄人等事

於今日以前者、不謂年紀遠近、可被赦免、且依贓物、且隨事體、可被用捨、

〔新編追加侍所〕一近日國々、夜討強盜蜂起之由、昔風聞是偏所々地頭等、罷置惡黨四一半打等、無沙汰之所致也、然者或罷置惡黨等於所領中、或於令打四一半之所者、早可被注進交名也、可被改易所

盜犯者停止

〔尺素往來〕夜討強盜放火刃傷打擲蹂躪捕女山賊海賊勾引辻斬追落等此間聊蜂起事於京都者侍所於國郡者守護可被致嚴密檢斷歟

〔政所賦銘引付〕清原州一伊勢七郎左衛門尉貞照文明六知行分備後國志摩利庄代官備中國荏原地下

人守護被官平井安藝守號有過上去々々年極月於路次押取荷物之間度々被成召文畢不日被召上彼者可預御下知候云々

〔下學集下應龜〕盗物也

〔新編追加侍所〕一竊盜事〇目錄云乾元二

右錢三百文以下者任御式目以一倍致其辨可令安堵〇中但於賊物者可被返與被盜主

〔大内家壁書〕盜物御定法之事

又盜物之事難賀飛驒入道妙全當所在國之時御尋被申分聞書

一ぬす人の取物之事どまる所よりいだすべし

一罪科之事は本々へたゞしてうり主をひきつけざる仁もぬす人の準據に罪科有べし

一失物質物に置時其盗人くらへ持來ておく事は不能左右若人をやどひておかば其人體を倉

へめし具して申時質物をいだす請錢不可入也

寛正二年七月八日

〔大内家壁書〕盜物御定法之事

右彼盜物之事或持出市町或於置店屋之時號盜物押取有及喧嘩事剽賣主者不知盜物間買置而

又賣之由申事每度也然者兩方於其場理不盡之口論也所詮彼盜物之事預置其所之役人可批判

若有背此旨族者可被處嚴科也仍執達如件

長享三年五月日

左衛門尉

〔新編追加傳所〕

一重犯山賊海賊輩事○目錄云建

夜討強盜 五十一

右彼輩者重科也、不可不禁、須處罪科、但重犯者、贓物令露顯證據分明之族事也、以嫌疑无左右、網捕其身、及拷訊責取壓狀、稱白狀、令斷罪之條、甚不可、然若背此儀、致理不盡之沙汰者、云、地頭代云、沙汰人可令改易所職也、

〔建武以來追加〕一山賊海賊事

尋究出入之在所、若領主有同心之儀者、令改替地頭職、可被入守護使歟、

〔吾妻鏡 二十二〕建保四年六月十四日丙申、去比佐々木左衛門尉廣綱使者相具、所參上之東寺凶賊

已下、強盜海賊之類五十餘人、事今日有沙汰、可遣奥州之由、被仰下云云、是爲放夷嶋、去四月廿八日、給廣綱云云、於一條河原、自廷尉之手、請取之云云、此東寺賊徒者、同月十八日、秀能相具之、自三條坊

門東洞院家向大理之正親町西洞院門前、

路次自東洞院北行至西洞院南行、

一次禁獄舍、見物者如堵、上皇被立

御車於大炊御門東洞院覽之云云、

〔百練抄後堀河〕

安貞元年七月廿一日、於關白直廬、有議定事、左大臣已下參入、去年對馬國惡徒等、向

高麗國全羅州奪取人物、侵陵住民事、可報由緒之由、牒送太宰少貳資賴、不經上奏、於高麗國使前捕

惡徒九十人、斬首、偷送返牒云々、我朝之耻也、牒狀無禮云々、

〔豐臣秀吉譜中〕

天正十五年五月、阿蘇山中者、地形險窄也、故群盜多保此山、而傷害人民、秀吉欲攻之、

阿蘇群盜聞之、來謝曰、自今之後、不可爲濫惡、秀吉宥之、西州平、

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一山賊海賊之事、如先例其所近き所へ相懸本人糺可出、若於不糺付者、可懸在所科事、

〔建武式目〕一可被鎮獵藉事

晝打入、夜強盜、所々之屠殺、辻々之引剝、叫喚更無斷絕、尤可有警固之御沙汰乎、

總官御返事

〔光明寺舊記〕五志摩國惠止圓應寺領掌圓實申伊勢國吹上光明寺僧惠觀致海賊由事相副守護代義重狀令申給之旨披露之處於守護方被番二問答訴陳經其沙汰歟此上口於本所始可致執沙汰哉由口祭主三位殿仰所候也恐々謹言

康永四年七月十三日

常陸介判奉

謹上 道後政所殿

〔新編追加雜警〕一鈴鹿山并大江山惡賊事爲近邊地頭之沙汰可令相鎮也若難停止者改補其仁可有靜謐計也以此趣相觸便宜地頭等可被申散狀者依仰執達如件

延應元年七月廿六日

前武藏守奉時判

修理權大夫時房判

相模守殿

越後守殿〇又見侍所沙汰篇

〔御成敗式目追加〕一就犯人在所可斟酌事於本所一圓之地者可召渡犯人之由可相觸彼所若不敬用者可注申事由云々弘長新制云可仰諸國守護地頭等令禁斷海陸盜賊山賊海賊夜討強盜類事諸國守護地頭等可致其沙汰之仔細被載式目訖而無沙汰之由依有其聞如此惡黨等不可見隱聞隱之旨雖被召起請文於御家人等猶以不斷絕云々早仰國々守護所々地頭殊可被加懲肅此上猶惡黨蜂起之由於有其聞所々者云守護云地頭可被改補其職矣

〔新編追加侍所〕一夜討強盜山賊海賊等事乾元二六

彼輩可被斷罪之旨被定置歟而大略被處流刑之間或於配所致惡行或歸本國犯重科依之預人等重者被分召所領輕者被行過怠匪管惡黨等倍增剝御家人佗際歟至無所通之輩者可處斬罪之旨可被仰下歟但於御家人者經評議可有斟酌歟

はれ候はゞ、別の奉公には、餘黨其數おほく候を、一々にからめさせ參らせんといへば、康仲與有事に思ひて、受取てつかひけり、給物三十石をもらせて、朝夕めしつかふに、事におきてかひく敷、大切の事共多かりければ、大納言家に、此様を内々申入たりけるに、いと興有事にこそ、左様のものは、中々さるかたもあるなり、我にえさせよ、召つかはんと仰られければ、參らせてけり、侍ゆるされめし仕けり、康仲が恩の上に、五十石の給物をたまはせたりければ、小殿悦て、今はかくて一期身やすくてやみなんすれば、思ふ事候はず、祗候の間には、いかに御所中、并御近邊には、狼藉の事あらすまじく候とて、一向に御どのゐして奉公をいたしければ、誠にかひく敷、其あたりに夜るの恐なかりけり、

共盜

〔親長卿記〕文明十六年十一月四日、下京邊、土一揆出現物恐、五日、土一揆蜂起、被仰細川九郎可罷事云々、已指遣軍勢畢、六日、土一揆東寺取陣、九郎勢、六角堂、因幡堂等取陣、已及合戰、及曉、土一揆大將金崎被、打取、其外餘黨七八輩、被打取畢、各殘黨退散、天氣大慶也、

〔宜胤卿記〕文龜二年四月六日戊申、早旦告來云、去夜神樂岡茅屋、盜人數十人亂入、衣服雜物等取之、宰相盜人一人打留也、死而有山中云々、言語道斷次第也、

海山賊

〔下學集〕上人、山賊、日本、世話、山賊、人云也、海賊、

〔運歩色葉集〕佐、山賊、白波、同、海賊、

〔尺素往來〕夜討、強盜、放火、刃傷、打擲、蹂躪、捕女、山賊、海賊、勾引、辻斬、追落等、下

〔建武以來追加〕諸國狼藉條々、貞和二十二十三沙汰、

一山賊海賊事

札明出入之在、所有領主同意之儀者、於其所者、永可令改補地頭職、至本所寺社領者、靜謐之程、可被補地頭哉否、可經奏聞焉、

此趣雜人奉行等可令存知歟○又見三

〔新編追加傳所〕一竊盜事

或配流或禁獄爲御家人之煩條同前仍於初度者可捺火印於其身面及三箇度者可被誅歟但至侍者雖爲一箇度可被處遠流歟

〔古今著聞集卷十二〕大藏小藏とて、きこえある強盜の棟梁ありけり、大殿は後鳥羽院の御時からめられけり、小殿は高倉判官章久が本へ行ていひけるは、日來年來、からめかねてあなぐりもどめられ候、小殿と申強盜こそ、思ふやう有て參て候へは、やくうけどらせ給へといふ、章久まことしからず覺ながら、おろ／＼子細をとへば、小殿はいく、御不審候事、尤其いはれ候へども、先思召候へ、たゞのまら人が強盜とみづから名乗て、命をまかせ參らせて何のせんか候べきといへば、實にも理にて委く問答するに、小殿が云やう、年ごろ西國の方にて海賊をし、東國にては山だちをし、京都にては強盜をし、邊土にてはひきはぎをして過候つる也、かゝる重罪の身を受候ぬれば、此世にても安き心候はず、夜も安くねす、晝も心打くつろぐ事なし、世のおそろしく、人のつゝまじき事、かなしき苦患にて候也、扱も一期事なくて有べき身にて候はず、つゝゐには定てからめ出されてはぢをさらし、かなしき目をこそ見候はんすれ、年來の罪をも報はんが爲に、頭をのべて參候といへば、章久あはれに覺て、左右なくも受取べけれ共、其儀なくして答けるは、今は使廳の廳務停止したる也、かつは聞も及らん、年來作置る樓歌○牢も、皆打破て佛殿に作なをして、一向廳務をとめて、後世の事をいとなむ也、徳大寺殿に祇候の源判官康仲こそ、當時ことに高名を立んとする人なれかし、こに行て、此子細をいはゞ、定て悦思はんすらんといへば、左候はゞ、御文を給はり候へ、源判官殿へ參候はんといへば、これはやすき事也とて、文書とらせければ、則持て康仲がもとへ行て、章久がもとにていひつるがごとくにいひて、若萬が一、命をいけて召もつか

新熊野午枕菴而悉奪其儲、廿五日、盜燒京城、四邊鳴鐘鼓吹筒角、大騷動、細川之兵守城北門、山名一色、土岐之兵備南路之盜、京極赤松之兵禦東道而大退盜、盜寇掠邊境不獲城也、廿六日、官軍與盜攻戰、蒙難者多矣、盜漸沮云、廿七日、盜欲破本寺、行力之徒急防之、盜乃退矣、廿九日、官軍愈熾、群盜稍弱、其潛亡不過一二日云、三十日、有號荷田者、群盜魁者也、聚凶徒保守於東寺、以官兵稍強、盜咸逃散、荷田乘浣河舟而竄於紀南云、十一月十^〇日^{十字}、一日、群盜逃散諸路已通天下喜之、三日、本寺之東班、以官命捕門前之行力、與盜同惡者斬其首而出之於官、又逃惡者、火其家者六七也、伏見里竹田村、其令咸出賊首也、四日、官捕盜人之魁首號荷田者斬之、以其首梟六條河原也、

〔長興宿禰記〕文明十三年四月廿六日庚午是日賀茂氏人^{高彦}被渡大路於六條河原被切首^男弟男^不路^大同被切首去年十一月晦日忍入將軍御所^〇足利御重寶二銘^藏以下御劔等盜取露顯自去年被置所司代^{浦上}籠舍今日被誅者也

〔今川記^{かみな}〕^五被官人喧嘩并盜賊の咎主人かゝらざる事は勿論也雖然未分明ならず子細を可尋など號し拘おうも彼者逃うせば主人の所領一所を可沒收無所帶は可處罪過

〔信玄家法^上〕一被官人喧嘩并盜賊等之科不可懸主人之事者勿論也雖然欲糺實否之處伴主無科之由荐陳申相拘之半令逐電者主人之所帶三ヶ壹可沒收無所帶者可處流罪者也

〔新田由良家傳記〕盜人は其品を以穿鑿をとけ可申付子細により主人に御かゝり可有之事、

〔長曾我部元親百箇條〕旋

一盜賊之事即時搦捕奉行方迄申届於歷然者可斬頭事勿論也若搦捕事於難成者則可相果右此旨猥申付候者在所庄屋可爲曲事、

〔新編追加^{侍所}〕一盜人罪科輕重事^{寶治二七^十事書内、}

先日被安置畢而守被狀稱爲小過致一倍之辨後猶以企小過之盜犯者准重科可被行一身之咎以

於在々所々畫強盜ヲ致ス間所誅也トゾ被書タリケル^{○下}

〔建内記〕嘉吉元年九月六日庚子、今夜時聲響河東終夜物恐、言語道斷事也、土一揆桶籠洛中洛外堂舍佛閣、不被行德政者可燒拂之由訴認之、今所稱之德政者其名尤珍重、其實者只無理、可被借書無謂可返質物、蓋此儀也、甚以背德政之稱者也、於利々倍々者可被破之條可爲德政、未及有限之利、悉本利可破之條不仁之至哉、

〔管見記〕嘉吉三年二月九日、抑塔森船渡代官山本彌次郎依爲德政張本人、[○]代治却地云々爲管領成敗澤井新藏人搦捕之、昨日誅之云々、仍彼在所代官職事、片岡次郎三郎望申之間、今日與補任了、鳥羽邊德政張本輩皆以逐電云々、

○案ズルニ、當時土一揆、或ハ德政ト稱スル者ハ、多クハ強竊盜ノ徒ナリ、故ニ此ニ收ム、

〔新撰長祿寬正記〕寬正三年九月十一日、都ニモ土一揆ヲコリ、所々寺社領、其外富タル人民ノ家ヘ亂入、放火シテ財寶ヲウバヒトル、大將ハ蓮田兵衛ト云、牢人ノ地下人也、^{○中}廿二日、七條禪佛寺

ヘ土一揆蜂起シ、亂防スト注進シケレバ、畠山中務、大輔ニ被仰付、猶大名ヘ觸ツカハシ、是ヲ退治セラル、御請申人々ハ、京極衆、武田衆、赤松次郎法師ガ勢等也、則赤松出勢シテ、相國寺ヘンニテ、

一揆ノ大將蓮田ト赤松衆ト合戰ヲハジメケル、蓮田大勢ナレバ、赤松勢進兼テミヘケル、同二十
八日、赤松浦上ヲハジメ大勢引率シ、土一揆ト合戰ス、一揆打負テ、中加茂ノ林間ニ引退ケケル、赤
松方ヨリ追カケ、殘少ニ打トリケル^{○中}同年十月朔日、土一揆ノ大將蓮田終ニ通ル、所ナクシ
テ、淀ニテ誅ラレケリ、殘黨ドモ丹波國須智村ニテ皆被誅<sup>○又見二條
源軒日錄</sup>

〔碧山日錄〕寬正三年十月廿一日、德政之盜復起、自城外鼓躍而攻洛官兵禦之、廿二日、邊民鳴鐘伐
鼓、而在木幡、德政之盜、自宇治縣出者、攻木幡御堂、修行某房遂破之、以火之爲焦土也、爲德政之聚道
路不通、商估咸止、天下爲之憂、廿四日、余自間道歸靈隱、盜大聚攻洛洛兵固禦之、盜死者無數、盜破

押紙云、武家不相交者難事行歟、隨被仰下可有沙汰也、

〔侍所沙汰篇追加〕守護人并御使可存知條々

一夜討強盜、山賊海賊、殺害罪科事、

於御家人者、召進其身於六波羅、可令注進所領、至非御家人凡下輩者、隨所犯輕重可有罪科淺深也、

兩人相議、可令計沙汰之、○又見御放
貳式目追加

〔吾妻鏡〕文治四年八月十七日庚辰、右兵衛督保能消息到來、路邊群盜蜂起、事至疑貽分者相觸所々、

畢、就中叡山飯室谷竹林房住侶來光房永實同宿、號千光房七郎僧招卒惡徒浪人等、令夜討已下惡行之由、風聞之間、經奏聞畢、仍仰法印圓良被召之處、去四日召進彼僧之由、所捧請文也云云、

〔都玉記〕建久二年十一月廿二日丁卯、今日京中強盜等所被遣前大將許也、於六條河原官人渡、武士云々、見在十人也、於死罪者停止畢、年來官人下部等有容隱之時、雖強盜頗加寬宥、敕令特原免、如本又犯之、仍遣關東可遣夷島云々、永不可歸京、是又非死罪、將軍奏請云々、人以甘心、

〔仲資王記〕建久五年五月十二日壬申、今日東西獄強盜人卅餘人被下、遣關東也、於四條河原將軍家使請取云々、但檢非違使等着河西堂、以看督長放免等渡之云々、

〔百練抄十一御門〕承元四年五月六日強盜六十三人放火者少々、被遣關東、於二條河原武士請取之、上

皇○後有御覽

〔太平記十二〕兵部卿親王流利事附驪姫事

抑高氏卿○足利今迄ハ隨分有忠仁ニテ、有過分ノ弊、不聞依何事、兵部卿親王○護ハ是程ニ御憤ハ

深カリケルゾト根元ヲタヅスレバ、去年ノ五月○元弘ニ官軍六波羅ヲ攻落シタリシ刻、殿法印

○真ノ手ノ者ドモ、京中ノ土藏共ヲ打破テ、財寶共ヲ運ビ取ケル間、爲鎮賴足利殿ノ方ヨリ是

ヲ召捕テ、二十餘人、六條河原ニ切テゾ被懸ケル、其高札ニ、大塔宮ノ候人、殿法印良忠ガ手ノ者共

大にあさみて、則官人に仰て白晝に禁獄せられける。

〔御成敗式目〕一諸國守護人奉行事

右右大將家○源頼朝御時所被定置者、大番催促謀叛殺害人付夜討、強盜、山賊、海賊、等事也。

〔新編追加侍所〕一強盜殺害人事、於張本者、被行斷罪、至餘黨者、付鎮西御家人在京之輩并守護人可下道鎮西也、兼又盜犯人中假令錢百文若者、二百文之程罪科事、如此之小過者以一倍可致其辨也、於重科之輩者雖召取其身、至于不同意縁者親類者不可及致煩費者、依仰執達如件。

寛喜三年四月廿一日

武藏守 判

相模守 判

駿河守殿

掃部助殿○又見、吾妻鏡。

〔新編追加侍所〕一犯人斷罪事

右爲夜討強盜之張本、所犯無通方者、可行斬罪也、是則爲相鎮傍輩向後也、其外至枝葉之輩者、可召進關東、可被流道夷島也、以前條々存此旨、可令致沙汰之狀、依仰執達如件。

文曆二年七月廿三日

武藏守 判

相模守 判

駿河守殿

掃部助殿

〔新編追加侍所〕一京都強盜殺害人事

右此條可爲使廳沙汰之由、去年被仰下候畢、而猶武士相供可致沙汰之由、自殿下被仰下候、何様可候哉、

おほせん事かたく覺えければ、かくまじはりて、物わけん所に行て、強盜の顔をも見又ちりゝゝにならん時に、家をも見入んと思ひて、かくはかまへけり、扱どもなひて、朱雀門の邊に渡ぬを、物を物わけて、此男にもあたへてけり、強盜の中に、いとなまやかにて、こゑけはひよりはじめて、よに尋常成男の、とし廿四五にもやあるらんと覺ゆる有どう腹巻に左右ごてさして、長刀を持ちたりけり、びをぐゝりの直垂はかまに、ぐゝりたかくあげたり、諸の強盜の主とおぼしくて、ことをきてければ、みな其下知にゑたがひて、主のごとくになん侍りける、扱ちりゝゝに成ける時、このむねどの者のゆかん方を見んと思て、尻にさしさがりて見がくれゝゝ行に、朱雀を南へ四條迄行けり、四條を東へくしげ迄はまさしく目につけたりけるを、四條大宮の大理の亭の西の門の程にて、いづちかうせにけん、かきけすがごとく見へす成にけり、さきにもそばにもすべて見へす、此築地を越て内へ入にけりと思ひて、そこより歸りぬ朝にとく行て跡を見れば、件の盜人、手を負て侍けるにや、道に血こぼれけり、門のもとにてとゞまりければ、うたがひもなく、此内の人、也けりと思ひて、立歸りて此やうを主に語りければ、大理の邊に參り通ふ者なりければ、則參てひそかに此様を語り申ければ、大理聞おどろかれて、家の中をせんぎせられければ、其更にあやしき事なかりけり、件の血、北の對の車宿迄こぼれたりければ、つばね女房の中に、盜人をこめ置たるゑわざにこそとて、みな局共をさがされんする儀に成て、女房共をよばれけり、其中に大納言殿とかやとて、上臈女房の有けるが、此程風のおこりて、えなん參らぬよしをいひけり、重てただいかにもして、人に成共かゝりて參り給へとせめられければ、のがるゝ方なくてなまじゐに參りぬ、其跡をさがしければ、血付たる小袖有あやしくて、いよゝゝあなぐりて、板板を上て見るに、さまゝの物共をかくし置たりけり、彼男が云つるに、たがはず、びをぐゝりの直垂袴なども有けり、面形一有けるは、其ふるき面をして、顔をかくして、夜なゝゝ強盜をゑけるなりけり、大理

古事類苑

法律部二十二

中編

盜犯

人勾引 放火
開遺物 保入

強竊盜ノ罪モ亦王朝ノ制ニアリ、鎌倉幕府ノ法、強盜ノ主ハ斬ニ處シ、從ハ流ニ處ス、竊盜ハ、其贓物三百文以下ハ、一倍ヲ以テ辨償セシメ、三百文以上ハ、之ヲ緝捕スレドモ、其累妻子ニ及ボサズ、足利氏ノ時ニ至リ、三百文以上、五百文以下ハ、科料二貫文ヲ出サシメ、贓物ヲ被害者ニ返付シ、六百文以上ニ至リテハ、其刑ヲ科ス、但シ贓物ノ多寡ヲ論ゼズ、再犯者ハ總テ其罪ヲ重クス、

山賊海賊ハ、其住所ヲ以テ名トシ、引剝追落ハ、其所爲ヲ以テ名トス、皆強盜ナリ、

人勾引ハ、即チ略人ナリ、是モ王朝ノ制ニアリ、鎌倉幕府ノ法ハ、此罪ヲ犯シタル者ハ、盜犯ニ准ジテ處刑シ、再ビ此罪ヲ犯シタル者ハ、其罪妻子ニ及ブ、

放火ハ、必ズシモ盜犯ナラザレドモ、鎌倉幕府ノ法、強盜ニ准ジテ處刑ス、

下學集人亀強盜

〔庭訓往來〕山海兩賊、強竊ニ盜徒黨令、橫行于所々、奪取諸人之財產、

〔庭訓往來抄〕下強盜トハアラキ、盜人ナリ、竊盜トハホソル、盜人ナリ、名ヅケテシノビト云也、

〔古今著聞集〕十三、隆房大納言、檢非違使別當のとき、白川に強盜入にけり、其家にすぐやか成者有て、強盜とたゝかひけるが、なにとなくて強盜の中にまぎれまじはり來ける、うちあはんには、ま

強盜
竊盜

古事類苑

法律部二十二

中編

盜犯

人勾引
遺物
竊入
放火

強盜
竊盜

八六五

屢盜

八七〇

共盜

八七二

山賊
海賊

同

引剝

八七四

追落

八七五

贓物

同

計贓

八七六

盜犯者容止

同

○

人勾引

八七八

放火

八七九

關遺物

八八〇

申云、二三尺許、等如圓坐、東西南北動搖云云、忠尙以下六人、全不動之旨申之、賁俊頗有離伏之氣、仍一可被召怠狀之旨、各雖訴申之、於關東無例之上申狀之趣、不能其沙汰之由、武州令申給云云、

去一日節會不着外辨怠狀

右左大臣宣奉勅去一日節會無故不着外辨宜令辨申子細者依無所通申進怠狀謹解

承久二年正月五日

右少辨正五位下藤原朝臣

八日己亥申刻許頭權亮信能朝臣來於公卿座謁口口官怠狀等仰可返給之由又云來十一日可被行除目可候執筆者申承由即退出了予書消息副怠狀遣大外記師季許畢須召下之也而今日諸卿仍遣之也意其書樣

宣旨

左中辨藤原朝臣家宣右中辨藤原朝臣資賴右少辨藤原朝臣成長去一日節會無外辨怠狀事仰誠將來可返給

右可被下知之狀依左大臣殿仰執達如件

正月八日

前甲斐守兼教奉

大外記殿

〔百練抄後十三〕寛喜元年八月廿五日御方遠行幸也還御之間於錦小路大宮邊御與鳳落地後日有

沙汰裝束可進怠狀云々

〔宜胤卿記〕永正四年八月十三日今日上邊猶物急六郎細川今日已可下西國之由申之大樹利義足

還御出御留云々は被官三好〇之任雅意京中狼藉之間所詮可下本國之由申之三好令怠狀被官

梶原令生涯云々

〔吾妻鏡三〕文曆二年〇嘉祿元年十月二日辛卯相州〇北條時房武州〇北條泰時參御所令候小侍所給去月廿

三日五更乾星動事司天之所申不一准之間日來有其沙汰今日召聚忠尙親職以下被尋問之責俊

怠狀之中、資經朝臣未進、仍遣使者畢云々、頃之到來、以基邦覽之、入言引禮紙、卷中、不結之申云、先例先可辨申子細之由仰候、其後陣申所存旨御覽畢返給之時、被仰可進怠狀之由也、而事急速也、直可進怠狀之由、頭權亮内々被觸之、仍如此云々、此間頭權亮信能朝臣送書狀云、怠狀之中、資經朝臣不可召者、仍則返給彼狀於外記畢、書消息、相副怠狀等、三通卷一、禮紙、結中、入消息、禮紙、中、便遣頭權亮許須召寄付之、然而途遠之上、今日叙位奉行職事也、仍隨宜以書狀奏之也、其狀云、

獻上

去一日節會辨官等、無故不着外辨座事、

右可被奏聞之狀如件

正月六日

左大臣云

頭權亮殿

怠狀三通

修理右宮城使正四位下行左中辨藤原朝臣家宣解申進去一日節會無故不着外殿怠狀、

右大外記中原朝臣師季傳宣、左大臣宣、奉勅去一日節會無故不着外辨、宜令進怠狀者、依無所通申、

進怠狀謹解

承久二年正月五日

修理右宮城使正四位下行左中辨藤原朝臣家宣

從四位下行右辨兼春宮亮藤原朝臣資賴解申進怠狀事

去一日節會不着外辨怠狀

右左大臣宣、奉勅去一日節會不着外辨、宜進怠狀者、依無所通申進怠狀謹解、

承久二年正月五日

從四位下行右中辨兼春宮亮藤原朝臣資賴

右少辨正五位下藤原朝臣成長解申進怠狀事

口宣一枚

權右中辨光繼朝臣怠狀事

右職事仰詞如此早可被下知之狀如件

文保二

十月四日

春宮大夫判事

大外記局

付怠狀於職事一獻上

權右中辨藤原光繼朝臣去二日不從事早出怠狀

右進上如件

文保二

十月五日

春宮大夫判

頭修理大夫殿

返怠狀於外記狀職事仰詞略之也

權右中辨光繼朝臣進怠狀事仰宜懲將來返給

右宜旨可被下知之狀如件

文保二年十月六日

春宮大夫判

大外記局

延慶二四廿七、大外記師宗吉田繁奉行變怠之時怠狀宣旨被下第二外記清大外記真扶了

〔玉海〕文治三年四月廿九日庚子午刻親經來申條々事○中

進軒廊御卜不參陰陽師等怠狀上編通

取進其狀載不過之由凡怠狀之習依過怠難通申其怠之儀也已顯無過失之狀全非過狀之本意已

是陳狀也仍仰書改可奏之由返給了

〔玉葉〕承久二年正月四日乙未口口云元日外辨無辨官一人仍中少辨皆悉可令進怠狀六日丁酉

一依無道理不蒙御裁許之輩爲奉行人偏頗之由訴申事

右依無其理不關裁許之輩爲奉行人偏頗之由構申之條太以濫吹也自今以後構出不實企濫訴者可被收公所領三分一無所帶者可被追却若又奉行人有其誤者永不可被召仕矣

幕府停權紳出仕

〔薩戒記〕永享六年六月十三日抑左相府殿○足利教

政務之後遣事之輩已及數多○中略

權中納言實種卿被沒收所領被止出仕○中略

權中納言義資卿被沒收所領不出仕、爲被討被得首○中略

左中將持和朝臣被止出仕

右少將持季朝臣不能出仕○中略

散位行康被止出仕

停權過

〔薩戒記〕永享六年六月十三日抑左相府殿○足利教

政務之後遣事之輩已及數多○中略

入道前關白被止出仕○中略

故入道前右大臣被原領家被止出仕、所領實種卿達以莫、

前關白被止出仕○中略

入道前內大臣被原領一兩宛行○中略

故入道前右大將通宜卿不被許

入道大納言家俊卿被止出仕、所領實種卿達以莫、

權大納言俊輔卿被止出仕○中略

權中納言經成卿被沒收所領被止出仕○中略

權中納言雅世卿被沒收所領一ヶ所被止出仕○中略

權中納言繼長被沒收所領被止出仕○中略

前參議經良卿被止出仕○中略

少納言繼長被沒收所領被止出仕○中略

〔庭訓往來〕先被進舉狀代者公所之出仕諸亭經廻可申圖師也

〔後深心院關白記〕應安六年正月廿一日甲子傳聞南都事書又到來云々旨趣者○中略清水寺敷地替早速以有沙汰事可被停止京都之經廻就中無南都之許可者不可有勅免之由可被下院宜於南都

附 怠狀

怠狀トハ謝罪輸誠ノ書ニシテ、譴責スベキ者ヲシテ、上ラシムルナリ、

〔傳宣草上〕怠狀事

怠狀

路ノ家ヲ義敏ニ渡スベシトノ上使、頻波ナリケリ、

〔親長卿記〕文明十七年十二月廿六日、傳聞布施下野守英基去五月廿三日亂逆之後、止出仕之處、今

日已出仕、入東山殿足利見參、次參室町殿足利之番奉公之輩於御所中令沙汰布施下野守、布

新右衛門、同又三郎四人止命希代之亂逆也、飯尾新右衛門、同又三郎等、此間布施別而申通之由、今更難見放

云々、仍同事死了、御所中不穢云々、不審事也、

〔江濃記〕佐々木兩家わかりの事

根本は兄弟にて、兩流ともに關東の賢佐、武備の大名なり、奉公他に異なり、されば元弘の亂にも、總領の六角方は、六波羅の催促にまたがひ、山門の合戦に手をくだき、其外戰功粉骨を盡し、馬場が峠の戦場より、京都の降人に參られしかば、其身は出仕を止められ、子息氏頼幼稚より名代として京都へ指上られける、

〔大内家壁書〕蒙御勸氣之仁、御定法之事

被放御家人之輩雖爲暫時、可止出仕、歟、事被殺害、刃傷或逼、耻辱橫難、縱又雖有如何體之子細、既蒙

御勸氣之上者、可爲公界往來之準據之間、其敵不可有御罪科之由、被定御法畢、尤孝寺殿島山、管領

職之御時、御成敗如斯、御分國中、之仁、可守此旨之由、所被仰出、壁書如件、

延德三年十一月十三日

〔吾妻鏡〕建長二年十二月廿七日戊午、近習結番事治定、自今已後、至不事輩者、削名字、永可止出

仕之由、嚴密被觸廻之云云、

〔御成敗式目〕一、構虛言致讒訴事

右和面巧言、掠君損人之屬、文籍所載、其罪甚重、爲世爲人、不可不誠、爲望所領止讒訴者、以讒者之所領、可宛給他人、無所帶者可處遠流、又爲塞官途、構讒言者、永不可召仕彼讒人、

存之由申之、小番番頭事結改事、可相觸之由申了、
〔御成敗式目〕一密懷他人妻罪科事

右不論強姦和姦、懷抱人妻之輩、被召所領半分可被罷出仕。○中次於道路辻捕女事、於御家人者、百箇日之間可止出仕。

〔吾妻鏡十八〕建永二年○承元八月十七日庚申、放生會御出之時、申障之輩事、相州武州廣元朝臣、善

信、行光等參會有其沙汰之處、或輕服、或病痢云云、而隨兵之中、吾妻四郎助光、無其故不參之間、以行

光被仰云、助光雖非指大名、實爲累家之勇士、被召加之訖、不存面目乎、臨其期不參、所存如何者、助光

謝申云、依爲晴儀所用、意鏡爲鼠致損之間、失度申障云云、重仰云、依晴儀稱用意者、若新造鎧、太不

可然、隨兵者、非可飾行粧、只爲警衛也、因茲右大將軍○源賴朝御時譜代武士、可候件役之由、所被定也、武

勇之輩、兼爭不帶鎧一領焉、世上狼喉者、不圖而出來、何閤重代兵具、可用輕色新物哉、且累祖之鎧等、

似無相傳之詮、就中恒例神事也、每度於令新造者、背儉約儀者、歟、向後諸人、可守此儀者、助光者、所被

止出仕也。

〔吾妻鏡三十三〕延應二年○仁治元年三月十二日丙子、當番無故不事輩五人、被止出仕、所謂宇都宮五郎

左衛門尉廣澤三郎兵衛尉鹽谷四郎兵衛尉結城上野十郎、海老名左衛門尉等也、陸奥掃部助奉行

之。

〔吾妻鏡三十六〕寛元二年七月十六日甲寅、今日有評定。○中日野六郎長用與平五郎季長法師、○法名妙蓮

相論伯耆國日野新印郷同下村得分物事、六月廿日掠給御救書之條、難通罪科之由、有其沙汰、長用

所被止鎌倉出仕也、兩條共對馬前司爲奉行云云。

〔應仁記〕武衛家騷動之事、附畠山之事。

文正元年ノ夏ノ比、頻リニ貞親○伊勢申ニヨリテ、義廉○斯波無罪而出仕ヲ可被停止、剩へ勘解由小

〔公卿補任〕正親町永祿十一戊辰年

關白從一位藤前久被違武命出奔十一月日止職、

憑權

〔公卿補任〕後堀河嘉祿二年戊戌

非參議從三位源雅行八月日恐懼被出雍州外、依害子息親行罪也、中略

藤長季六月六日恐懼以尊隆偽任權律師罪也、

〔公卿補任〕後二條嘉元四年丙午○德治元年

參議從三位藤實香右中將三月卅日備後權守四月日恐懼同月日恩免、

〔式目抄〕四一閱本奉行人付別人企訴訟事

永和條々ノ内延慶二年四月十六日被下文殿條々ノ内、○中略庭中ノ日、四日、九日、十九日、廿四日、

停出仕

件ノ日當番傳奏着文殿、可尋聞訴人所申委被糺決申沙汰、私曲令露顯者當非被改奉行宜被止出仕、

〔勘仲記〕弘安十年三月十一日辛丑、今夕祗候、北面重兼下人、着腹卷罷向女房侍從局々、大番武士搦捕之、而彼局以藏人親雄問答門守護武士、然而一切不叙用女房召當番小舍人秀任、稱御使差遣武士正員佐々木備中前司頼綱、可先進之、由示遣頗稱勅定之由歟、此事達叙聞歟之間、被召子有被仰下之子細等、所召仰大番武士也、召小舍人間答子細、驚思食之體也、可慎々々、十二日壬寅、參院○山奏事、以頭辨去夜狼藉人間事被訴申院御所事之次第尤驚思食藏人親雄被止出仕、小舍人秀任被除月奏、北面重兼同被止出仕、所令頭辨也、奏事之後歸、

〔親長卿記〕文明十一年後九月廿二日、參内番也、仰云、小番事、冷泉大納言爲富可被除小番、恐可結改番頭、一條中納言○冬可成小番番頭云々、其故者今度兩度在國如申暇、其上拾遺本可寫進之、由被

仰之處、爲秘本之間難書進上之、由申切旁以緩怠無極之間、被止出仕、可被解官、可被申武家云々、驚

し城普請等、夜を日につぎ成就のうへ、鍋島へ相わなし歸朝し。○下

〔清正記〕一御政所松之九殿より主計正所へ御使あり、主計頭御勘氣の義はや相濟候なり、さ

りながら主計程の者の御勘當を御うちつたひにてめしなをさるゝ事は、世間の批判もいかゞ

に思召され、御表向にて、家康利家などとりなしを以て召なをされ候はんどの儀にて。○中家康

利家より使として榑原式部大輔參申候は、唯今太閤御廣間へ出御なされ主計事仰出さるゝに

より、御取合申上候へば、夜前早速罷出候段、神妙におぼしめされ御前を御免なされ、委は治部少

輔○石田三成右衛門尉○増田盛田德善院○前田以より申來るべしとの儀なり、案のごとく三人より三使

きたり、口上に主計頭數ヶ度不屈の儀これありといへ共、夜前早速登城、神妙におぼし召、御勘氣

を御ゆるしなさるゝ條、早々登城いたすべしとの上意の旨也、

〔大内家壁書〕蒙御勘氣之仁御定法之事

被放御家人之輩雖爲暫時可止出仕、然被殺害刃傷或逼耻辱橫難縱又雖有如何體之子細既蒙

御勘氣之上者可爲公界往來之準據之間、其敵不可有御罪科之由被定御法畢、

〔天文記〕天文六年十二月、小弓上様義明○古河公方高基様御連枝也、先年御父政氏様御勘當奥州

御下向有之、

〔新田由良家傳記〕今井出雲守、一風流者にて、刀の柄を壹尺四五寸計仕候て指申候。○中成繁公の

御不與被成、向後御前へ罷出申間敷と御勘當被仰付候、

〔大友興廢記〕數條の言上御承引の事

義鎮公。○中前方御勘氣かうふりたる侍をもことくくめし出され、御懇の御ことばをくだし

給ふにより、日比の不足をわすれ、みな忠節の心懸を含ざるはなし、

〔多聞院日記〕永祿十一年十一月廿二日、近衛殿○關白は、上意御勘當、薩摩國へ御下、

〔新編追加傍例〕一放埒輩令安堵事

華名遠江前司子息次郎左衛門入道法名忍性御勘氣之時同道于口摺諸國流浪之後令入院壽福寺畢、

〔應仁記〕武衛家騷動之事附畠山之事

政長畠山述懷シテ申シケルハ申バ此四五年、八ケ度ノ大儀ノ御晴ヲ第一ト勤メ奉公他ニ異ニ

令存ノ間別テ御威ニコソ預ザラメ何事ノ蒙勘道ゾヤ更ニ心得ガタシト宣ヒケル、

義就政長闖亂之事

右衛門佐義就畠山是ヲ聞テ大ニ悅テ政長既ニ蒙御勘氣上ハ一日片時モ在洛セラレジ、イザヤ

彼館ハ元來我等ガ館ナレバ移ラン假令今夕忍テ有トモ御勘道ノ身トシテ否トハヨモイハジ、

義就馳向テ政長ヲ追出シテコソ累年ノ鬱憤ヲ散ズル所ナレ面々如何カ思ト云ケレバ遊佐モ、

畠田隅屋甲斐庄尤々ト申シケル、

〔鎌倉大草紙〕關東の様體嚴密の不及御沙汰利たゞ成氏足利が私の宿意を以憲忠上杉を討殊に不

得上意して關東の大亂を起す條不儀のいたりなりとて終に御勘氣を蒙り成氏退治可有由被

仰出ける、

〔勢州四家記〕一元龜四年元正春龜山安藝守盛信は信長公の勘當を蒙り日野蒲生家に預られ

ぬ、

〔總見記二十〕佐久間信盛御勘氣事

八月天正八年〇十二日大臣家織田信長御動座宇治橋御覽有之其後御船ニ召サレ直ニ大坂へ御著有

之是ニ於テ佐久間右衛門尉信盛同甚九郎御勘氣ヲ蒙ル罪科ノ儀御自筆ニ書付ラレ仰出サレ

候畢又略下

〔清正記〕一主計頭清正は太閤の御勘氣をかうぶり日本へめさるゝをもくやみなく仕かゝり

ト申シケレバ、江所モエトリ給ハズ、

〔沙石集〕^六爲母有忠孝人事

一鎌倉ノ故相州禪門^{○北條}ノ中ニ祇候ノ女房有ケリ、腹アシクタテ、シカリケルガ、或時成長

ノ子息ノ同ジクツカマツリケルヲ、イサ、カノ事ニヨリテ、腹ヲ立テ打タントシケルホドニ、物

ニケツマヅキテ、イタクタフレテ、イヨ／＼ハラヲスエカチテ、禪門ニ、子息ソレガシ、ワラハヲ打

テ侍ト、訴申ケレバ、不思議ノ事也トテ、彼ノ俗ヲ召テ、實ニ母ヲ打タルニヤ、母シカムト申也ト

問ル、實ニ打テ侍ト申、禪門返々奇恠ナリ、不當也トシカリテ、所領ヲ召シ流罪ニ定ニケリ、事ニガ

ニガシクナリケル上、腹モヤウヤク居テ、淺猿ク覺エケレバ、母又禪門ニ申ケルハ、腹ノ立マヽニ、

コノ俗ワレヲ打タリト申、上テ侍リツレドモ、マコトハサル事候ハズ、ヲトナゲナク彼ヲ打タン

トシテ、タフレテ侍ツルチタサニコソ申候ツレ、マメヤカニ御勘當候ハン事ハアサマシク候、ユ

ルサセ給ヘトテ、ケシカラズウチナキ申ケレバ、サラバメセトテ、召テ子細ヲタヅチラル、實ニハ

イカデカ母ヲ打候ベキト申ス、サラバナドハジメヨリアリノマヽニ申サバリケルト禪門申サ

レケレバ、母ガ打タリト申サン上ハ、我身コソトガニモシヅミ候ハメ、母ヲ虚誕ノ者ニハイカヽ

ナシ候ベキト申ケレバ、イミジキ至孝ノ志フカキ者也トテ、大ニ感ジテ別ノ所領ヲソヘテ給ハ

リ、コトニ不便ノ者ニオモハレケリ、末代ノ人ノ心ニハ有難コソ、

〔後深心院關白記〕貞治元年七月廿九日、傳聞、去廿四日、相模守清氏朝臣、^{○細川}於讃岐國被誅伐云々、

自去年九月之比、^{○足利}之勘氣、^{○義隆}逃下若狹國、官軍發向之間、不能防禦、逃隱山門云々、

〔明德記〕^上山名ノ宮内少輔^{○時}、同右馬頭條々歎申子細ハ、我等野心ヲ存申ササル處ニ、一族等讒

訴ニヨリテ、御勘氣ヲ蒙リ出家遁世ノ身ト成行條口惜キ由重々歎申ベキ所存ニテ、兩人共ニ上

洛シ、内々伺申シ、忍テ清水邊ニ宿居シテ居タリケリ、

各殊奇恠之由、被道御下文於彼輩之中、件名字載一紙、面々被注加其不可云云。○中略

兵衛尉重經御勳當ハ粗被免ニキ、然者可令歸付、本領之處、今ハ本領ニハ不被付申之、

澁谷馬允父在國也、而封平家、今經之、間、本曾以、大勢、政入之時、付本曾留、又判官殿御入京之時、又落參度々合戰ニ心ハ甲ニテ有、免前々御勳當、可被召仕之處、衛尉シテ兼、新頭ズ

ルハ、類玉ニ、能用意類ニ語加、

小河馬允少々御勳當免テ、可有御未惜之由、思食、色、不吉、何様、任官ヤラシ、○中略

馬允有經少々御勳當免テ、可有御未惜之由、思食、色、不吉、何様、任官ヤラシ、○中略

兵衛尉季綱御勳當ス、コシ免テ、有べき處、無由任官、

五月廿四日戊午、源廷尉義經如思平朝敵訖、剝相具前内府宗盛平參上、其賞兼不疑之處、日來依有不儀

之聞、忽蒙御氣色、不被入鎌倉中、於腰越驛徒涉日之間、愁鬱之餘、付因轡前司廣元奉一通款狀、廣元

雖披覽之、敢無分明仰追、可有左右之由云云、彼書云、○中略

義經無犯而蒙答、有功雖無誤、蒙御勘氣之間、空沈紅淚。○下略

〔吾妻鏡六〕文治二年三月九日丁亥、武田太郎信義卒去十九元曆元年依子息忠賴叛逆、蒙御氣色、未

散其事之處、如此云云、

〔沙石集六〕芳心有人之事

一故葛西ノ壹岐ノ前司重○清トイヒシハ、秩父ノスエニテ、弓箭ノ道ユリタリシ人也、○中略故鎌倉

ノ右大將家○源朝御時、武藏ノ江所エ子細アリテ、彼江所ヲメシテ、葛西ニタビケルヲ、葛西ノ兵衛

申ケルハ、御恩ヲ蒙リ候ハ、親キ者共ヲモカヘリミシタメナリ、身一ツハトモカクテモ候ヌベ

シ、江所ハシタシク候、僻事候ハ、メシテ佗人ニコソタビ候ハ、メト申スニ、イカデ給ハラザルベ

キ、モシ給ハラズバ、汝ガ所領モ召取ベシトシカリ給ヒケレドモ、御勘當カウブルホドノコトハ、

運ノキハマリニテコソ候ハ、メ、力オオバズ、サレバトテ給ハルマジキ所領ヲバ、爭力給ハルベキ

除籍

〔公卿補任〕順德建保五年丑

權大納言正二位藤公經 十一月以後依院勘籠居

〔吾妻鏡〕十二建久三年九月五日甲戌右馬權頭公佐朝臣獻書狀去月廿日依令聽口被除籍於身無其科賜一行欲愁申云云仰云雖讒者以一向虛言不可達天聽內々有懈緩事之條無異儀歟以親昵輒不能執申之由云云

〔吉續記〕文永五年六月三日參院御靈會馬散狀并雜事等以二位前宰相奏聞次參殿下○藤原基平內大神宮奉行小舍人奉行職事親朝申事由可召加康次之由欲加下知之處奉行六位親說申子細仍自

上儘可加之由嚴密被仰下然而小舍人事六位進退事自上非可被定下無術訴訟之由申之仍以子○藤原經長細勅定之上不可及子細度々申子細之條太狼藉早可召加之由被仰下猶不承伏非言語之所

單之此上職事直可召付小舍人康次之由被仰下即此趣仰親朝五位職事如此奉行小舍人直召付事且寬元帥中納言職事之時召付之由承及之早可仰出納之由申之馬長事未改六位無故申子細者可被除籍之由可仰之由被仰下下知極薦了

勸當

〔運步色葉集〕勸當勸氣勸當

〔新編追加〕侍所一自今以後有蒙御勸當輩之時追討使蒙仰相向之外無左右於馳向之輩者可被處重科之由普可令相觸御家人等給之狀依仰執達如件

文永元年二月十二日

左京權大夫判

謹上 相模守殿

〔吾妻鏡〕三壽永三年○元曆二月一日庚申蒲冠者範賴主蒙御氣色是去年冬爲征木曾○義仲上洛之時於尾張國墨俣依相爭先陣與御家人等鬪亂之故也

〔吾妻鏡〕四元曆二年○文治四月十五日戊辰關東御家人不蒙內舉無功今多以拜任衛府所司等官

〔百練抄^{十二}〕建曆元年九月七日、山堂衆四百人許爲院廳沙汰被居北山妙見堂、是爲令勤行公家御祈也、年來蒙勅勒隱居所々、今蒙寬宥、

〔關東評定傳〕建長三年十二月廿七日、使氏信景頼召捕了行法師、世間聊騷動翌年光明峯寺禪定殿

下^{○藤原}家御一族僧俗勒勤、

〔看聞日記〕應永卅二年四月七日、抑三條中將實雅朝臣、內裏蒙勅勒籠居云々、御懺法散花役人也、裝束用意之處被止出仕計會云々、其故者去廿九日、彼朝臣內裏へ被進一獻、而大納言典侍殿依醉氣、

早出醉臥之處へ彼朝臣尋行云々、主上^{○稱}狼藉之由被仰逆、麟忽有勒勤、雖此由仙洞へ被申被追

籠更無咎之由父大納言^{○公}陳申之間、同罪之由被仰、然而室町殿^{○足利}被執申、亞相は御免、實雅

朝臣は籠居云々、不便々々、

〔薩戒記〕應永卅二年十一月卅日乙丑、未剋許左中將隆夏朝臣來示曰、月次祭奉行藏人左中辨房長

依勒勤被止職事、仍我^{○藤原}可奉行由被仰下、可賜符案者、

月次祭任例可被申沙汰之狀如件

十一月卅日

十一月卅日

左中將判

藏人中務殿

〔薩戒記〕應永卅三年二月一日丙寅、今夜右大辨宰相宜光朝臣奏慶^{去年六月}之大丞日來依勒勤籠居、然

而母堂病氣危急之間、以別儀申請之、仍被免出仕、但不^{○可}昵近內裏之由被仰云々、有子細歟、履薄氷

之世也、

〔皇帝紀抄^七〕正治元年三月十九日、高雄文覺上人依院^{○後}勘配流佐渡國^{二、度被行}

○按ズルニ院勘トハ、院ヨリ譴責セラル、ヲ云フ、

〔皇帝紀抄^七〕建永元年九月十八日、參議左大辨公定卿依院^{○後}勘配流佐渡國、

責罪過

怠狀附

勅旨

罪過ヲ責ムルニ、勅勘除籍勘當及ビ出仕ヲ停ムル等アリ、勘當ハ勘氣ヲ蒙ル、又御氣色ヲ蒙ルト云フモ同ジ、皆譴責ナリ、故ニ用キル所、極テ廣クシテ、其身ヲ追放スルニモ、所領ヲ召シ放ツニモ用キ、又父ノ其子ヲ義絶スルニモ言フ所ニシテ、公事ニ關セザル事ニモ云ヘリ、

〔吾妻鏡三〕壽永三年

元暦

四月廿一日己丑、自去夜殿中聊物忿、是志水冠者、雖爲武衛

源賴朝御賀亡

父

木曾仲實

已蒙勅勘被戮之間、爲其子其意趣尤依難度、可被誅之由内々思食立、

〔吾妻鏡九〕

文治五年二月廿二日甲午、被發御使

維色時澤

於京師、伊豫守

源經義

逐電之後、御沙汰次第頗以

寬宥之間、人猶可事凶惡、尤可及急速之御沙汰之趣、被申之云云、

略中

一類經卿同意義顯^{義經}之臣也、可被解官追放之由、先度言上畢、而雖有勅勘之號、于今在京營訴相

貽事、

〔吾妻鏡十九〕

承元五年

建暦元年

九月十二日己酉、今曉内藤右馬允盛時御使上洛、是去月廿五日坊門

中納言

忠信賴

依遊放事、勅勘之由、風聞之故也、中將信能朝臣依同事、勅勘云云、十一月四日壬子、

申剋坊門黃門使者參著、是勅勘之時、態預專使事、即雖可賀申、行幸已下公事連綿之間、遲々云云、

略中

此等趣、被載黃門書狀、善信讀申之、

〔梅松論上〕

承久三年の夏、後鳥羽院御氣色として、關東を亡さむために、

略中

官軍關東へ發向すべ

きよし、五月十九日其聞え有間、

略中

同廿一日、十死一生の日なりけるに、泰時并時房兩大將とし

て鎌倉を立たまふ、然に泰時は父の義時に向て曰、

略中

今勅勘を蒙る事、なげきても猶餘り有て、

たゞ天命のがれがたき事なれば、所詮合戦をやめ、降参すべきよしをまきりにいさめける處に、

略○下

〔朽木文書〕和與

近江國朽木庄領家方年貢內、四二寸樽雜掌宥西與地頭佐々木出羽五郎左衛門尉義綱代官祐聖今地頭代豪逼員數相論事、

右訴陳趣子細雖多、所詮地頭代祐聖者、四二寸樽爲二萬寸之由申之、雜掌宥西者四萬寸之由申之、雖番訴陳祐聖爲奸謀不調仁之間令改易代官職以豪逼所令補于地頭代也、○中略

正安元年十一月八日

雜掌宥西寄押

處爲敵欲被襲之由雖申之更無實證所行之金奇怪非一早可達關東之旨及勅命云云上皇鳥羽頻
逆麟云云八月二日乙酉佐々木中務丞經高蒙御氣色淡路阿波土佐以上三箇國守護職以下所
帶等被召放之以其趣所被申京都也是日來聊依罪科雖被經沙汰勳功異他之間暫相宥之處爲洛
中警衛之士令騷京師背寂慮之條難及私寬宥之旨再往被經沙汰如此云云

〔吾妻鏡十七〕建仁三年九月四日己巳島津左衛門尉忠久被收公大隅薩摩日向等國守護職是又依
能員緣坐也

召放代官

〔親長卿記〕傳奏奉書案

由良庄公用就無沙汰之儀貴布禰神事可關怠之由注進之趣令奏聞申之趣被驚思食候于今如此
關怠事實無先規候猶有難澁者可被改代官職之由可被成御下知於社家之由其沙汰候重儲可有
注進之由候也恐々謹言

三月○文明十八年廿七日

親繼

貴布禰兩官御中

〔御成敗式目〕一隱置盜賊惡黨於所領內事○中略

被停止守護所使入部所々事同惡黨等出來之時者不日可召渡守護所也若於拘惜者且令入部守
護使且可被改補地頭代也若又不改代官者被沒收地頭職可被入守護使矣○下略

〔新編追加雜務〕一隱置惡黨於所領內輩事弘安二五

自身者關東參住之間在國事不聞及之由依申之前々遁罪科歟於自今以後者令隱置惡黨於所領
內之由令露顯者自身雖不在國可被召所領三分一也但來住所領百日計居住之族雖爲惡黨不存
知之間鎌倉參住之仁不可及罪科至代官者在國之間依不可遁其咎仍永不可召仕之若猶召仕者
主人可有其科正員又令在國者雖爲百日居住之浪人可被改所帶

駿河守殿

掃部助殿

〔御成敗式目〕一可修造寺塔勸行佛事等事

右寺社雖異崇敬是同仍修造之功恒例之勳宜准先條莫招後勳但恣貪寺用於不勳其役之輩者早可令改易彼職矣

〔新編追加佛令〕一可爲諸寺務者以四ヶ年任限事○目錄云、是、

抑有封之寺已有治爲○爲字疑誤被置執務者爲令莊嚴也起舉日功稱條治力○目以下六字疑有誤脫補任之後更

無其實只犯用資財徒破壞堂塔因茲任貞觀符以四ヶ年爲遷替期若有殊功者可被延任於致緩意者不○不下疑待字秩滿可被改其職

〔建武以來追加〕一山賊海賊事

尋究出入之在所若領主有同心之儀者令改替地頭職可被入守護使歟

〔建武以來追加〕諸國狼藉條々貞和二、十三沙汰

一山賊海賊事

糺明出入之在所有領主同意之儀者於其所者永可令改補地頭職至本所寺社領者靜謐之程可被

補地頭哉否可經奏聞焉

〔吾妻鏡十六〕建久十年○正治元年三月五日丁酉後藤左衛門尉基清依有罪科被改讀岐守護職被補近

藤七國平

〔吾妻鏡十六〕正治二年七月廿七日辛巳六波羅書狀等到來佐々木中務丞經高乍爲帝都警衛人數

奉輕朝威條々也是於洛中稱生虜強盜人以其次追捕近隣民居等加之令守護淡路國之間茂如國

司會妨國務之上去九日催聚淡路阿波土佐等國軍勢各著甲冑令馳騷依奉驚天聽被尋問濫賜之

召放所職

神行及遲々仍社司等有解官旁賴、秀興、祐名、祐松、

〔運步色葉集〕免召放〔同〕改易工改補キ改替キ

〔御成敗式目〕一、搥地頭押妨所領內名主職事

右給地領之人稱所領內掠領各別村事所行之企難遁罪科爰給別御下文雖爲名主職搥地頭若伺
彫弱之隙有限沙汰之外巧非法致濫妨者可給別納御下文於名主也名主又寄事於左右不顧先例
輩違背地頭者可被改名主職也

〔新編追加〕雜務地頭等可存知條々○中

一、未、被補地頭沒收所々爲御使沙汰可注進事

如風聞者去年兵亂之時相從京方輩之所職所領大略雖注進猶爲守護代等隱籠庄公多之云々而
在廳官人等恐守護代詳不注進歟憶任實正可注申之若又本下司雖無其咎沒收之內仁注進之所
所有之者委尋明可注進也

右條々守仰旨可令下知若猶背禁制之旨自由張行自由非法之輩者云守護人云地頭職可被改易
也可存此旨之狀依仰下知如件

貞應元年四月廿六日

陸奥守平 判

〔新編追加〕雜務一諸國庄公預所地頭相論之時札定兩方之處於地頭非法者被處罪科至預所定使

者雖有非據不及別沙汰之間依無所恐國々所務咄々之間異論連々不絕歟然者爲絕向後濫訴預
所定使等有非法之時者可被改易彼職之旨可被兼仰下之由可被言上二條中納言家之狀依仰執
達如件

文曆二年七月廿三日

武藏守 判
相模守 判

時有中作人於河原八丁者遣之於新保庄者不渡之處任彼讓狀之旨今參局可知行之由今春被申候間不可叶之由令申了然今達報開被勅裁被仰出廣橋難儀之間可申入云々給文書可奏聞云々返答了十月六日依召參內貞久縣主與今參局相論新保庄事於叡慮者今參局理運之由被思食也但貞久歎申間於知行分者不被召放也所詮每年二千疋分可加扶持云々有所存予不申子細只貞久佗言分奏聞許也仍件子細仰貞久處猶不可叶只千疋可扶持之由重歎申奏聞之處有逆鱗於貞久御師職被召放也於此事者不可被知食之上摠而賀茂下上事向後不可被聞食云々

〔親長卿記〕文明九年六月廿一日賀茂供僧與別當隆算法師相論正月三ヶ日修正入用不下行事御神祭神供闕怠事三問三答狀奏聞兩條現形之上者可被改別當職云々理運之輩可注申之由可仰云々廿五日供僧等來可被改別當職之條畏存但供僧職同可被改動之由申之子云就別當役兩條闕怠之間不可及供僧之儀書改申狀可給之由仰了

〔親長卿記〕傳奏奉書案

當社領越中國倉垣庄上使職事申村氏人景定之處百姓等令同意有限去年月宛神事定等號損免不致沙汰云々爲事實者太以不可然就中同庄田四ヶ村之內白石名事氏人景盛本役事年々一向不及其沙汰抑留之條言語道斷次第也各放氏人職可處罪科若有子細急度令參洛可明申之由可被下知給之由被仰出之旨候也恐々謹言

十月六日○年
號年

親繼列

鳴禰宜三位殿

〔親長卿記〕延德四年五月一日午剋參內奏鳴社祝職相論事兩方三問申狀於御前讀進出御二問何樣猶靜被御覽申狀追可被仰畢又文書各所持之由申之可召進此申狀內神前供物備樣御對面何手文備進之由申之故也三日參內祝相論事非殊儀不可有改動之由有仰社司等依違亂御蔭山

解却見任、撰人改補兼又有殊功、宜加褒賞但其領不幾、其勤難及者、注損色經言上、課別功令造營、

〔建武以來追加〕東福寺條々應安五十一年御沙汰
松田左衛門尉貞秀奉行

一諸社神人等訴申喧嘩事應安五十一
松田左衛門尉貞秀奉行

或帶本訴之理、或依不慮之儀、神人等被殺害刃傷者、尤可有裁許、而近年就所務負物以下、動成奸謀

之企、令覃闕殺之時、致訴訟云々、政道之違亂、諸人之煩費也、不可不誠、於如然事者、一向非許容之限

之上、解却神職、須處其身於罪科、將又社務出非據吹噓者、經奏聞改所職、可被補器用之仁矣○又見
花卷三

代記

〔百練抄安九〕養和元年正月四日、東大興福兩寺門徒僧綱已下、可解却見任沒收所領之由宣下、

〔勤仲記〕弘安七年八月十四日己未、早旦參院、以吉田黃門奏聞條々事、兩社神人事猶繼執不落居、噉

噉所訴申也、以修理大夫被仰下云、八幡神人申狀、久世庄非鳴社領、南北共爲元興寺領之由申之、此

條先有御不審予○藤原
兼仲申云、社務弘繼狀、鳴社領久世庄神人之由、且申狀如此候爲神領之間、神人

之條、勿論候歟、又被仰下云、稱神人者、无木寄人也、依違勅科、被解寄人職、可被罪科之由、去々年歟、及

其沙汰之由、八幡申之、此條者、無相違候、重勅定云、久世庄事、非社領之由申之、可申所據、稱神人者、无

木寄人也、其身不相替之上者、斷罪不可有子細歟、早可解神人職之由、恐可仰鳴社院宜之趣、可書進

之由、被仰下之間、此趣書案文經叙覽了、大概無相違之由、被仰下之間、即以飛塵仰遣鳴福宣了、

〔增鏡十五〕十月元弘十二月、令旨○光下されて、前の御代○後の人々、大中納言宰相すべて十

人、宜房公明、藤房具行、隆資實世、實隆季房、隆重、忠顯司やめらるゝよし聞ゆるも、昨日まで、時の花

と見えし人々、つかのまの夢かごあはれなり、

〔親長卿記〕文明七年九月廿一日、貞久縣主來、知行越中新保庄、并河原八丁半分事、祖父益久父讓後

家益久母□□一期之後、可讓河原內馬今
局小名由有讀狀、雖然益久不存知之間、先年與後家令相論之

下權大納言了云々

〔足利季世記〕三公方高國記種義ト高國不和之事

大永元年辛巳三月七日、公方細川、御中不和ニ成、京ヲ出サセ給ヒ、淡路ノ武島ヘ御渡海アリケレ

バ、京ニハ細川右京大夫國、同名陸奥守以下評定シテ、故法住院殿足利御子、赤松アヅカリ申

テ、今年七歳ニナリ給フヲ呼上奉リ、七月六日、播州ヨリ御上洛アリ、左馬頭ニ任ジ、御元服アリ、義

晴ト名付奉ル同八月ヨリ三條ノ御所ヲ上京ヘ引、今ノ柳ノ御所ヲ營立ラル、頼テ征夷將軍ノ

勅宣ヲ蒙リ給ヒケレバ、前將軍ハ解官アリテ、將軍職ヲトメラル、

幕府停指紳職

〔薩戒記〕永享六年六月十三日、抑左相府殿足利政務之後、遺事之輩已及數多、中

前左大史爲緒宿禰被止職

前左大史內名宿禰被止職

前大外記師世朝臣被止職

停任

〔公卿補任〕後堀河寛喜二年庚寅

參議從三位藤賴隆 近江權守、閏正月四日辭退實停任、其替不、被下三辭、書、以、調、被、仰、辭、退、之、由、

〔公卿補任〕龜山文永三年寅丙寅

參議從二位藤高定 左兵衛督、別當伊與權守、十二月二日、停督別當等、依山門訴也、

解任職

〔玉葉〕建曆二年三月廿二日 宣旨左大臣右大臣中略

一可令諸寺執務人修造本寺事

抑已上修造之勤、格條炳焉、而社司寺司等、徒貪社領寺領之利潤、不顧本社本寺之破壞、然間最叢祠
雕荒、而秋露空滴、蘭若櫛類、今春雨不留、須隨小破且加修理、而及大損、始經奏聞、頻申請別功、利爲己
忠、僞稱致造畢、偏忘公平、論之政途、殆指○指疑科條、慥令彼司等致連連修造、若背符旨、尙有懈怠者、

朝臣隆經 少內記中原信康

左大臣宣奉勅件等人宜令解却見任者

文治元年十二月十七日

大外記中原師尙奉

〔百練抄^十〕

^{後鳥羽}建久七年四月十五日甲子吉田祭也今日日本宮權大進藤原仲賴被下左衛門弓場是

去比於左兵衛督高能卿家陵辱筑後前司景良之故也先被下解官宣旨

〔皇帝紀抄^八〕

^{順德}建保元年八月三日延曆寺衆徒百餘人集會長樂寺爲燒拂清水寺也是去比清閑寺

領內清水寺住僧爲迎講結構娑婆屋而自山門依令燒件屋清水寺令訴申之被責召衆徒張本之處

依不拘勅制遣武士并西面輩被追散之間兩方及刃傷殺害云々九日被解官左衛門尉中原尙綱

藤原景家同久季左兵衛尉藤原實員平直宗藤原忠村佐伯正任等是去三日於長樂寺依致狼藉也

此外西面無官輩十餘人被下使廳

〔百練抄^{十四}〕

^{四條}延應元年正月七日戊寅於北陣札彈難犯之間使廳下貳搦捕油賣一人稱左府既伺口

被奪返之上奉行官人大志景種被解却見任了

〔勸仲記〕

弘安七年七月廿二日戊戌參殿下^{藤原}官人行廣可解却見任之由爲二條前中納言奉行

被仰下今日所內覽也

〔薩戒記〕

應永卅二年四月二日辛丑頭左中辨宣光朝臣談曰右中將實雅朝臣^{三條大納言}息大與內女房權大

納言典侍^{日野新}一位入道^{女主上御寵也}有密通之儀其氣色已於御前露顯可有罪科之由自內被申院^{小松}上皇

再往雖被宥中無御承引之儀仍解官事可宣下之由被仰下者宣旨云

應永卅二年四月一日

宣旨

正四位下行左近衛權中將兼尾張權介藤原朝臣實雅宜解却見任

藏人頭左中辨藤原宣光奉

古事類苑

法律部二十一

中編

解免官職

解官ハ、王朝ノ制ニシテ、上編既ニ之ヲ解セリ、

所職ヲ召シ放ツトハ、解官ノ類ニテ、守護地頭ナド、毎ニ此刑ニ處セラル、亦所職ヲ收公ストモ、所職ヲ改易ストモ云フ、

代官ヲ召シ放ツトハ、幕府ヨリ地頭ナドヲシテ、代官ヲ黜ケテ用キザラシムル事ナリ、

〔吾妻鏡〕^五文治元年十二月六日乙卯、院奏折紙狀云、^中略

解官

一解官事

參議親宗 大藏卿泰經 右大辨光雅 刑部卿賴經 右馬頭經仲 右馬權頭業忠 左大史

隆職 右衛門少尉信盛 信實 時成 兵庫頭章綱

同意行家義經等欲亂天下之凶臣也、早解官見任可被追却也、兼又此外行家義經家人逆徒勸誘之客、相尋淺深、於官位之輩、一々可被解官停廢也、僧陰陽師之類、相交由有其聞、同可有追却也、

十二月六日

賴朝在判

廿九日戊寅、北條殿御使參著、去十七日、被下解官宜旨、大外記師尙送之、則奉獻其狀云云、^中下

〔玉海〕文治元年十二月十八日丁卯、大外記賴業注送云、昨日被行解官、左大臣^{經宗}原下知師尙云々、

大藏卿兼備後權守高階朝臣泰經 右馬頭高階朝臣經仲 侍從藤原朝臣能成 越前守高階

附怠狀

怠狀

八六〇

古事類苑

法律部二十一

中編

解免官職

解官 幕府停權轉職

八四一

停任

八四三

解職 解任

同

召放所職

八四六

召放代官

八四八

責罪過

怠狀附

勅勘

八五〇

院勘

八五一

除籍

八五二

勘當 幕府勘當權轉

同

恐懼

八五七

停出仕 永停出仕
幕府停權轉出仕

同

停經廻

八六〇

（The main body of the page contains extremely faint, illegible vertical text columns, likely bleed-through from the reverse side of the paper. The text is organized into approximately 15-20 columns, typical of traditional East Asian legal or administrative documents.)

〔關八州古戰錄^二〕小田小山成田等始末事

武州忍ノ城主成田下總守氏長ハ、小田原ノ城中ニ櫓籠レル間ニ、上方一味ノ約有ト云共、秀吉公其罪ヲ宥メラレズ、一命ノ代リニ黄金千枚ヲツグノハルベキノ旨、過意ヲ課セラレシ所ニ、成田ハ千騎ノ大將タレドモ、是ヲツグノフ事叶ヒ難ク、九百枚出シテ誅戮ヲ遁レ野州ノ地ヘ牢浪シテ有シヲ、蒲生氏郷會津ヲ賜リテ後、氏長ニ一萬石、舍弟左右衛門佐ニ三千石合力シテ先隊ノ部將トセラレタリ、

〔豐臣秀吉譜^中〕初秀吉定法曰、凡喧嘩口論不決、理非甲乙共當罪、是欲停喧嘩也、泉塚之富家在茶座、主客論諍、互推刃而同死、秀吉聞之、怒其背法曰、主客罪及三族、泉塚自古富豪多矣、皆大驚、到官叩頭謝之、不聽、於是賸以貨財、秀吉以絞斬有贖銅之法、故遂多取貨財、乃至輕服之親、其賄賂不知數也、自是泉塚衰弊、不能對捍于官吏、

雜載

〔吾妻鏡^{十九}〕承元二年七月十五日壬子、武藏國威光寺院主僧圓海參訴云、柏江入道増西去月廿六日、率五十餘人惡黨亂入寺領、及刈田狼藉云云、増西折節參候之間、被召決之處、圓海之所申無相違、仍可停止、濫妨之由被仰出之上、令勤仕永福寺宿直百箇日、可贖其過云云、圖書允清定奉行之云云、○按ズルニ、僧ハ法ニ於テ財產ヲ有スベキモノニアラザレバ、勞力ヲ以テ其過ヲ贖フ、是亦過意ノ一法ニシテ、令ニ云フ所ノ苦使ナリ、

〔雜筆往來〕抑留年貢、奪取資財、以庭弱身、好過分僻事、矯飾之至、無物取喻、^中假雖不經案內、查被停廢哉、須召出張本、被處過料者也、

過怠辨償

〔吾妻鏡 二十八〕寬喜三年四月廿一日被仰遣六波羅條々○中盜犯人中假令錢百文若二百文之程

罪科事如此小過者以一倍可致其辨○略下

〔新編追加侍所〕一盜人罪科輕重事實治二年七月十日事書

先日被安置畢而守彼狀稱爲少過致一倍辨之後猶以企少過之盜犯者準重科可被行一身之咎賦

以此趣難人奉行人等可令存知也

〔吾妻鏡 三十九〕實治二年七月十日乙卯雜務條々有其沙汰教經等勸申云○中又盜人罪科輕重事

先日被安置訖而守彼狀稱爲小過致辨之後猶以企小過之盜犯者准重犯可被行一身之咎賦以此

趣難人奉行等可存知之由被仰出云云

〔新編追加侍所〕一盜賊贓物事嘉祿三

右已依贓物之多少被定罪科之輕重畢假令錢百文若二百文已下輕罪者以一倍令辨償之可令安

堵其身三百文以上之重科者縱雖行一身之科更莫及三族之罪者○略下

〔侍所沙汰篇追加〕先例條々

一鎌田入道村岡武藤對馬入道田一段十步之咎被付鎌田入道田十町於對馬入道畢

一酒勾太郎入道依新田舍茅田小之咎被付五町於敵人畢

〔致所壁書〕一諸人借物事永享八

所用之時令借用之間借與者芳志隨一也爰雖致催促不能返辨之是非而經年月之條云不知恩云

無理旁以背正儀者也所詮自被安置永享八已後雖催促三箇度日限百尙不承引之者於政所可訴

申之若糾決之間不致其辨者本利相當返辨之外爲過怠分相副被拾分一可被責渡也但錢主與借

主相談之以利平連々致其償者非制限錢主亦相待過怠御成敗舊事於左右不致用少分之辨償者

雖被安置不可依此法焉○又見建武

雖被安置不可依此法焉○又見建武

ヲバ眼前ニ請トリ手ト當知行ノ者ト大ナル訴論ニ及ベシ、濫訴ノ起ルベキ根源是アリ、依之堅御禁制也、請取人ヲバ罪科ニテハ深キホドニ、過料ヲ出シテ、寺社ノ修理ニ付ベシト也、法意ニハ不知行ノ所領ヲモ、他人ニ寄進シテ、文書ヲ寄附スル事禁制ナシ、道理ニヨル也、此狀ハ禁制也、法意ト式目ト相違多シ、賞罰モ淺深カハレドモ、底ハ一ツ也、

〔侍所沙汰篇追加〕就天福元年八月十五日、六波羅御注進十七箇條被加關東押紙内、○中略

一大番衆令逃失召人事

右召人出來之時、令預大番衆又在京輩處令逃失畢、然而其科意輕重依難定申候、于今不致沙汰候之間、或強盜或殺害人大略十之七八令逃失候也、爲自今以後尤可被定下候歟、

押紙云、可令修造清水寺橋也、

〔吾妻鏡 三十四〕仁治二年四月廿五日癸未、若狹四郎忠清依御下知違背之科、可造進安居院大宮簀屋并膳所屋之旨、今日同被仰付是忠清所領若狹國依生庄雜掌成安訴申之故也、

〔今川記 かな日錄追加〕一公事半年出、三年理非を不論、公事をあいてに落著すべしと云云、雖然非義をかまふるの輩、公事をのべ置、手出の咎をねらひ、先三年の所務をする事、大奸曲之至也、手出の越度あるにおいては、其年の年貢を淺間造營に寄附し、後年に至て、公事の是非を可裁許也、

〔島津家本吾妻鏡〕延應二年十一月廿八日丁巳、京都大番勤否事被經沙汰、是有運參不法輩之由、依有其聞也、假令一箇月令運參者、被召過怠用途千疋、可被宛未作籌屋料云云、

〔吾妻鏡 三十四〕仁治二年四月廿九日丁未、○丁未、恐囚人逐電事、預人罪科不輕、召過怠料可被寄進

新大佛殿造營之由、爲清左衛門尉滿定奉行、今日有議定、新田太郎政義分三千疋、毛呂五郎入道連光頼、預召人紀伊國三上庄分五、預召人政所二郎高氏、各來八月中可令辨償云云、是爲孫子深利五郎爲經咎之由、連光

雖訴申被尋下之、連光猶不通之云云、

〔大内家壁書〕身暇日數之事

在山口衆之内、少分限之仁事、年中百箇日可給身暇、由被相定畢、但隨當用不時之儀、可被任申請、旨事常之篇也、然處不申上御暇、以密々或歸宅、或他行、有達上聞事者、十箇日に壹貫文爲過怠、可被掠量也、百箇日者可爲拾貫文、若此御成敗至難澀之族者、可被沒收恩給地也、仍壁書如件、

文明十七年十二月廿六日

過怠墾地大小

〔新編追加雜務〕嘉禎四年九月九日、御評定事書中、嘉藤兵衛入道奉行

一新補并本地頭不敍用、御下知事

右新補地頭者、云本司跡、云新補奉法、不可混領兩樣之由、下知之處、不敍用其狀、猶令違犯者、改易其所、可被充行勳功未給之輩也、

次本地頭之輩、或背先例、或違父祖例之由、訴訟之時、不從御下知者、召其所、可被充行官仕忠勞輩并所知之替也、

次御祈勤仕人之跡事、有如先條之子細者、召其所、可充給御祈勤仕之仁也、但已上三ヶ條、就此式目、訴訟定多出來、歟委細札明、可有御成敗、仁治元十一廿三評云、被召所領者、就之所々訴訟、無盡期、歟仍可被召、舊屋用途也、但隨其所多少、可被召之、假令爲五拾町所者、可被召錢五拾貫文也、但地頭得分也、寄事於左右、不可成土民之煩矣、

過怠課修造

〔御成敗式目〕一以不知行所領文書寄附他人事、附以名主職、不稱本所寄進備門事

右自今以後、於寄附之輩者、可被追却其身也、至請取之人者、可被付寺社修理、略下

〔式目抄六〕不知行ノ所領ハ、其領主理ナキニヨテ、他人知行スル歟、イヅレニモ子細アルベシ、而

ヲ他人ニ寄附スルハ私曲也、故ニ寄附ノ者ノ罪科ニハ、其身ヲ追失ルベシ、追却マデハ、アマリ深キ様ナレドモ、此行末ヲ案ズルニ、寄附ヲ請取人、威勢モアリ公事ヲモスベキ人ナルベシ、而

過意問實富有

れ同罪に馬取上被成候也此後は父子兄弟もたがひにわりくる、事いたさる故老若上下
腰辨當を絶さず持候也

〔新編追加 雜務〕一西國御家人中於所領知行之輩者隨守護所催可勤仕京都大番之處致自由對捍
空涉日月之族有其聞於自今以後者就守護人注申爲償其過意隨彼分限可令召付清水寺橋修理
給之狀依仰執達如件

文曆二年正月廿六日

武藏守 判

相模守 判

〔吾妻鏡 四十二〕建長四年十月十四日乙丑○中

一密懷他人妻事

名主百姓等中密懷他人妻事訴人出來者召決兩方可尋明證據名主過料三十貫文百姓過料五
貫文女罪科事以同前

〔新編追加 雜務〕一密懷他人妻罪科事 正應四 三十六

右同所被載式目也但名主百姓等中密懷人妻事風聞之時者不糺明實否證據不分明之處無左右
處罪科之條甚不可然若訴人出來者召決兩方尋明證據無所遁者名主輩者過料錢拾貫文百姓者
過料五貫文可充行之女罪科以同前矣○本文有脱字以侍

過意問實富有

〔新編追加 雜務〕一京都大番衆事通有限同私作○同私御成敗式目追加
作之一字恐當作之役一寄事於左右僻意之輩者假令

一ヶ月令遲參者爲其過意可被充未作籌用途錢拾貫文其已上日數者以之可被仰充之狀依仰執
達如件

仁治三年十一月廿八日

前武藏守 判

相模守 殿

コハヤトハ思ナガラ、我ガ心ヲモテ思フニ、カレモ愛シ思ラン、爭ナサケナクコフベキト思返テ、日來スグルニ、或時彼ノ僧大ナルトガアリテ、マドフベキ事アリケルニ、藤兵衛尉ナニガシト云テ、檢斷シケル侍ニ仰付テ、此科料ニ七匹四丈ノ絹ヲヤマキラスル、八重ツ、ジヲヤ進スルト云テ、過ニオコナヘトゾ下知シケル、サテ藤兵衛尉行向テ、シカ、トノ仰也トイヘバ、此僧七匹四丈ヲコソマキラセ候ハメ、此ツ、ジヲモテ心ヲモナグサメ候ヘバト申ケルヲ、主ノ心ヲ知テ、絹ヲマキラセテハ、猶御不審ノコルコトアルベシ、タバツ、ジヲマキラセ給ヘト云ケレバ、チカラナクテホリテ奉ル、サテ檢斷ノ職ハ半分ノ得分也、ソノ處ニツ、ジヲオロシ枝一トルベシト云フニ、絹ヲ進スベシトテ惜之ケレドモ、オシテ取テケリ、共ニヤサシクコソ、彼ツ、ジ今ニ有リ、今代ハカ、ル人有ガタクコソ聞ユレ、

〔康富記〕寶徳二年七月十九日辛酉、或語云、和泉守護細川兵部大作○大下文、少、是、輔去年被誅山臥之間、都鄙山臥桶籠新熊野社頭、中可及大儀之間、自兵部少輔方被出下手人、人兩又科貨料足百二十貫、田地十六町、神馬等出之、被懸望之間、昨日屬無爲云々、

〔續撰清正記〕王子御兄弟を追奉り、成鏡道押行時之事

右同成鏡道押行ける時に、ある野の原にて、人馬の息を休め、晝の破籠をとり出し喰けるに、十六七になりける小姓、わりごをもたず、故に諸人の喰ぬるを守なければ、其者の伯父が見かねて、我もちたる焼食を一ツくれけるを、清正御覽有て、小姓の御車だても、時により所による事也、今此時に花奢風流は不都合なり、惣而老若によらず、其時其事に隨て、一守る事を忘ざるが武士のたしなみと云物なりと仰られ、今日わりご持ざるはふたしなみの志輕からず、過代として馬召上られたり、又焼食くれたる伯父も同罪也、甥が若輩なる故軍の様子しらすは、万指南して心がけあるやうにこそ致すべき事なるに、今清正が見る前にてわりごくる、事一入不屈なりと仰ら

弓、鏑、諸道具ども悉きらびやかに誘給へ共皆町人百姓に借物の利錢或諸侍の過怠錢などに
し給ひ。略下

〔新加制式〕一雖无道理無指損之故、企謀訴之輩、可被懸贖銅事、

右式目之趣柄焉也、但或不致奉公、或无忠節之輩、割分件所領、可預新恩之段、非無其詮乎、自今以
後於企謀訴之輩者、可有贖銅假令田畠一段、可爲錢一貫、但家財牛馬車船等、可爲則可被付寺社

之修理。略中

一失物隨見出可返本主事

右件失物爲本主至令取返者有何妨乎、先可尋究出所、若其人或令死去、或令他出云々、縱雖爲不
知身之過、聊盜類難遁之條、相計賣之員數、可出一倍贖銅、若於遠國他境土倉等、買得之段分明者
可有差別乎、但難及盜賊之沙汰、於其人體者、非制之限、

〔吾妻鏡四〕建長二年十二月廿八日己未、下野國大介職者伊勢守藤成朝臣以來至小山出羽前司

長村十六代相傳、敢無申儀、絕中絕儀絕儀之虞、依大神宮雜掌訴所被改補也、於被訴訟事者、以來銅

以下贖令解謝訖、被行二罪之條、殊含愁訴之由、長村連々言上之間、可被返之旨及評儀云云、

〔吾妻鏡十〕文治六年元建久二年二月六日庚寅、辰刻奥州飛脚參著申云、去月廿三日出彼國訖、其日未無

下著之軍兵、爰兼任等逆賊群集如蜂云云、略中 共有兼任同意之罪科、無左右雖可被誅、暫被預葛西

三郎清重、可召甲二百領之過料云云、

〔沙石集六〕芳心有人之事

一尾張州ニ山田次郎源重忠ト云シハ、承久ノ時、君ノ御方ニテ打レシ人也、弓箭ノ道人ニユルサ
レ、心モタケク、器量モ人ニスグレタリケル者カラ、心モヤサシクシテ、民ノ煩ヒヲ思ヒ知リ、ヨロ
ヅ優ナル人也ケリ、所領ノ内ニ山寺法師アリケリ、八重ツ、ジヲモチタリケルヲホシク覺エテ、

一 諸奉行儀者不及言上下共大酒禁制之事付醉狂人之事、輕者科錢三貫、重者可成敗、人を害打擲仕類者可斬頭事。略中

一 課論之事、如何様も檢地帳次第たるべし、雙方共ニ違言上、沙汰分明上、非分者ニハ爲過怠五百貫文可出之、但雙方申分於不聞分者、論所之地可召上事。略中

一 本道六尺五寸間、可爲二間、同道事在々山里浦々共、庄屋堅可申付、若道惡時者、其地頭百姓より科錢壹貫爲庄屋取集奉行中へ可相渡事。略中

一 横道堅停止之事、押而通もの於有之者、科錢可爲壹貫事。略中

一 竹子折事堅停止若於相背者、壹貫可爲過怠事、見付申上者、右壹貫爲褒美可遣事、

一 牛馬者、四季共放事可停止、此上猥在之者、科錢百文、若立毛於損者、作主へも百文可出事。略中

一 惡口咎之事、依題目輕重可爲成敗、題目輕者、科錢三貫之事。略中

一 火事、常々火用心專一也、類火於在之者、火本者其身應じ科錢あるべし、火本迄之火事は可逐電事、并つけ火は、つけて爲歷然者親類迄も堅可成敗事、

〔鶴岡事書案〕當郷百姓淨阿彌已下五人逃下候條、罪科難通者也、所詮於淨阿彌宗同者、所被召上氷河宮免田也、至祭禮等者、先可被申付、宮大夫也、於性法妙吾三郎次郎者、爲科料分拾貫文、年内可被取進之狀如件、

應永五年十二月廿一日

〔妙法寺記〕天文十八年西 此年霜月、武田殿、小山田殿談合被成候而、地下ニ悉過料錢ヲ御懸候、殊更寺々、禰宜、如何様成者ニモ押並デ御懸候、去程ニ地下衆欺事無限、

〔甲陽軍鑑四 第十二〕利根過たる大將の事、附北條家上杉家并川中島合戰物語の事、
一 第二番には利根過たる大將也。略中 早合點なる儀は、ひだちうたれぬやうにと思召、武具、馬具、

神社佛寺之修理若不出過錢者可被召放割分所領

〔信立家法上〕

一米錢借用之事至一倍者頻可加催促此上猶令難誑者可有過怠自然地下人等借錢之處輕不輩負物人令無沙汰者可披露是亦右同前略中

一百姓有隱田者雖經數拾年任地頭之見聞可改之然者百姓有申旨者及對決猶以不分明者遣實檢使可定之若地頭有非分者可有其過怠矣

〔甲陽軍鑑品十五〕於陣所制札略中

一牛馬取はなし候ば夫馬は見出し候者とる乗馬ハ過錢三百疋上様御既衆とる事略中

一不淨これあらば繩を張其陣の近き所より過錢五十文是も新衆とる事

〔甲陽軍鑑品十九〕過錢の事

一高坂彈正存生の時定置候諸奉公人の科穿整なされ御ゆるしの時過錢其分領によつて出す事あり法職へあがり御中間御小人或は新衆などの給分になる又御陣にての過錢をば目付横目衆あらため取て御武者奉行御旗奉行へ上る是も御中間御小人御道具衆も給るさて又侍衆我所領の百姓年貢諸役等に付て惡儀あるは過錢をもつて地頭へ佗言可仕候但御國法相背者ハ大形の科にてゆるし過錢出し候はゞ是も御職へさしあぐべく候かならずわたくしあるべからざるものなり如件

天正五丁丑年十二月吉日

高坂彈正書也

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一知行役乍勿論不寄大小事堅固可相勤若材木出普請等於運參仕者日數一倍可爲科役并賄已下無沙汰候者は又一倍にて可有運上事略中

〔新編追加^{傳所}〕一所預置召人令逃失罪科事^{嘉祿三}

^{七廿評}

右預置謀叛人之處其召人於令逃失者依爲重事可被召所領也其已下者不可處重科隨輕重可被行過怠也所謂寺社修理等是也但逃脫之後爲令尋求三箇月者可被延引若三箇月之內不尋出者隨事體可有其沙汰歟

〔新編追加^{佛會}〕一勝長壽院僧房連々有圖亂事度々及殺害云々武士之郎從猶以不及如此之狠藉

何況僧徒之從類哉則好而召壯武勇不調之輩專不加禁遏之所致也加之三昧僧等偏好事酒宴併疎其節之由有風聞非管破戒行刺背尋常之法自今以後僧徒之兒共侍中間童部力者法師橫雄劍差腰刀一向可停止之若猶不拘制止及刃傷殺害者宜被處主人於過怠堅存此旨更不可違犯之由各可令相觸給之由所候也仍執達如件

仁治三年三月三日

前武藏守 奉時

謹上 大藏卿僧正御房

〔新編追加^{傳所}〕一夜計強盜山賊海賊等事^{乾元}

^{二六元}

彼輩可被斷罪之旨被定置歟而大略被處流刑之間或於配所致惡行或歸本國犯重科依之預人等重者被分召所領輕者被行過怠匪管惡黨等倍増刺御家人佗僚歟至無所遁之輩者可處斬罪之旨可被仰下歟但於御家人者經評議可有斟酌歟

〔新加制式〕一可崇神社敬寺塔事

右^中有封社不致陵夷而可加修造專祭祀恒例神事之時神役公人等依令懈怠下行物延引式

日神慮尤有恐自今以後其日勿闕怠於彼公人者後日以此科可令出一倍過錢^略^中

一改舊境致相論事

右如式目者割分訴人領地之內被付論人云々當時不合期然則隨成論之分限令出過錢可被付

過怠

過怠トハ、原來過失ノ事ナリ、而シテ其過失ヲ罰スルガ爲ニ錢財ヲ收ムルヲモ亦過怠ト云フ、過怠錢、過料、過料錢、過錢、贖銅、贖財、辨償等ノ名アリ、贖銅ハ、律令ノ制ノ名ヲ取リタルモノナリ、凡テ過怠ハ錢貨ヲ收ムル外ニハ、兵器ヲ徵シ、布帛ヲ徵シ、又ハ馬匹ヲ徵スル等ノ事アリ、又其錢貨ヲ以テ簿屋ノ用途ニ充テ、神社、佛寺、橋梁、道路ノ修繕ノ用ニ充ツルアリ、此餘貧富ノ差ニ由リテ、錢數等ヲ異ニスルアリ、例ヘバ名主ヨリハ三十貫文ヲ收メ、百姓ヨリハ五貫文ヲ收メ、若シクハ其分限ニ隨ヒ、橋ヲ修セシムルガ如キ是ナリ、又日數ニ由リテ差ヲ立ツルアリ、大番ニ遲參シ、及ビ告グズシテ休假スルガ如キ是ナリ、又所領ヲ召シ放ツベキニ、之ニ代フルニ過怠ヲ以テシ、或ハ詐僞ヲ以テ人ノ田畠ヲ爭フ者ニ、贖銅ヲ科スルガ如キハ、其多寡並ニ地ノ大小ニ從フ、

過怠ニハ、又官ヨリ令シテ私人ニ納レシムルアリ、亦辨償トモ云フ、刈田ノ罪ニ由リ、多ク田地ヲ加ヘテ被害者ニ入レシメ、竊盜ノ僅ニ百文二百文ニ止マレル者ヲシテ、一倍ノ錢ヲ以テ被盜者ニ納レシメ、借貸返辨ノ期ヲ愆ツ者ヲシテ、過怠分ヲ加ヘテ還サシムルガ如キ是ナリ、

名稱

〔下學集〕下註、過怠

〔運步色葉集〕タ過怠 科料 過當 過貸 科怠

過過怠之罪

〔御成敗式目〕一所領得替時前司新司沙汰事

右於所當年貢者、可爲新司之成敗、至私物雜具并所從馬牛等者、新司不及抑留、況令與耻辱於前司者、可被處〇處一作行別過怠也、但依重科被沒收者、非沙汰之限矣、

放與力同心

去程に右三人の者共^{○矢部左近}を鐵炮にて殺したるを公廣^{○四家}の聞え口惜とて、其討手の者三人は切腹し、殘る者は扶持をはなされしよし聞ゆ、

〔松隣夜話^中〕越後ノ科人ノ御仕置、一ノ重科ニハ、刀脇差ヲ召取ラレ一代身ニ帶ズ^{○中}五番與力同心ヲ放サル^{○中}長尾右衛門佐ト云侍大將聊カ無沙汰ノ行跡アルニ依テ、謙信公大ニ咎メ給ヒ、與力同心ヲ召放サレ、所領ヲ取上^{○下}

〔甲陽軍鑑^{品上}第三十〕一板垣彌二郎御旗本前備四手の内にて候へ共、時田合戰にて手に合ざるゆゑ、信玄公御腹立ましゝて、御書立を被成、板垣彌二郎方へ被指下候^{○中}

一諸傍輩に緩怠仕る事と七ヶ條あそばされ、原隼人佐^{○胤}市川宮内助兩人を以て被仰、同心召上られ候、

放家人體

〔吾妻鏡^{十九}〕承元四年六月三日己未、昨日於相模國九子河土肥小早河之輩、與松田河村一族有喧嘩事、兩方郎從被疵、其後相互籠城之由依令風聞、爲相鎮之義、盛義村奉命行向畢、今日入夜歸參件輩納涼逍遙之間、頗及難談、就論先祖武功之勝劣、雖有此圖諍、應御使諷諫早成和平、與力衆等退散云云、勇士者收其身、可奉護國家之虞、近代諍私武感動起、鬪亂不忠之至、不可不誠之由、如相州有其沙汰、向後於巧此義者、召所帶永可被放、御家人之號旨、以今夜中被下、御書於難色、可付土肥松田等云云、

〔大内家壁書〕蒙御勘氣之仁御定法之事

被放御家人之輩^{離レ爲ニ暫時可止ニ出仕候、事被殺害刃傷或逼耻辱横難、○下}

〔松隣夜話^中〕越後ノ科人ノ御仕置、一ノ重科ニハ、刀脇差ヲ召取ラレ一代身ニ帶ズ^{但侍以二番死}罪三番迫出、四番所領沒シユ、五番與力同心ヲ放サル、六番籠居スル等也、

禁帶刀

ニ屬シテ忠アリシカバ、義興モ定テ其舊好ヲ忘レジトゾ思ハルラン、サレバ此人ヲ僞テ討ンズル事ハ、御邊ニ過タル人不可有、何ナル謀ヲモ運シテ、義興ヲ討テ左馬頭殿○足利ノ見參ニ入給基氏ヘ、恩賞ハ宜依請ニトゾ語レケル○中。竹澤翌日ヨリ宿々ノ傾城共ヲ數十人呼寄テ、遊ビ戯レ舞歌、是ノミナラズ相伴フ傍輩共、二三十人招集テ、博弈ヲ晝夜十餘日マデゾシタリケル、或人は是ヲ畠山ニ告知セタリケレバ、畠山大ニ僞リ忿テ、制法ヲ破ル罪科非一○中。此時緩々ノ沙汰致サバ、向後ノ狼藉不可斷トテ、則竹澤ガ所帯ヲ沒收シテ、其身ヲ被追出ケリ○中。竹澤潛ニ新田兵衛佐殿○義興ヘ人ヲ奉テ申ケルハ、○中世ノ轉變度々ニ及デ、御坐所ヲモ更ニ存知仕ラデ候ツル間、無力暫クノ命ヲ助テ御代ヲ待候ハン爲ニ、畠山禪門ニ屬シテ候ツルガ、心中ノ趣氣色ニ顯レ候ケルニ依テ、差タル罪科トモ覺エス事ニ、一所懸命ノ地ヲ沒收セラル○中。某ガ此間ノ不義ヲダニ、御免アルベキニテ候ハバ、御内奉公ノ身ト罷成候テ、自然ノ御大事ニハ、御命ニ替リ進セ候ベシト、苦ニゾ申入タリケル○中。兵衛佐殿モ竹澤ヲ異于他思ヲナサレ、傍輩共モ皆是ニ過タル御要人不可有ト悦バヌ者ハ無リケリ○中。竹澤我力ニテハ尙討得ジト思ヒケレバ、畠山殿ノ方ヘ使ヲ立テ兵衛佐殿ノ隠レ居ラレテ候所ヲバ委細ニ存知仕テ候ヘ共、小勢ニテハ打漏シヌト覺ヘ候、急一族ニテ候江戸遠江守ト下野守トヲ被下候ヘ、彼等ニ能々評定シテ、討奉候ハントゾ申ケル、畠山大夫入道大ニ悦テ、繼テ江戸遠江守ト、其甥下野守ヲ被下ケルガ、討手ヲ下ス由兵衛佐○新田義興傳聞カバ、在所ヲ替テ隠ル、事モ有トテ、江戸伯父甥ガ所領稻毛ノ莊十二郷ヲ闕所ニナシテ則給人ヲゾ被付ケル、江戸伯父甥大ニ僞リ忿テ、繼テ稻毛ノ庄ヘ馳下リ、給人ヲ追出、城郭ヲ構ヘ、一族以下ノ兵五百餘騎招集テ、只畠山殿ニ向ヒ一矢射テ討死セントゾ伺リケル。

〔大友興廢記十六〕矢那刑部丞御勘氣蒙事 附相撰仕并誅せらるゝ事

雜載

右宜任民意之由被載式目畢、而或稱逃毀抑留妻子資財、或雖有負累以強緣沙汰取其身代之後、如相傳令進退之由有其聞事實者甚以無道也、若有負物者遂結解無所遁者任員數致其辨、不可成其身以下妻子所從等煩焉、

〔吾妻鏡〕^三壽永三年^{○元}二月三十日己丑信濃國東條庄內狩田鄉領主職、選賜式部大夫繁雅訖、

此所被沒收之處爲繁雅本領之由愁申故云云、

〔玉海〕文治元年十月十七日丙寅、早旦大藏卿泰經爲院^{○後}御使來門外云、^{○註}去十一日義經奏聞

云、行家已反賴朝了、雖加制止不可叶爲之如何者仰云、相構可加制止者同十三日又申云、行家謀叛、雖加制止敢不承引、仍義經同意了、其故者奉身命放君、成大功及再三皆是賴朝代官也、殊可賞貶之由、令存之處適所浴恩之伊豫國皆補地頭、不能國務又沒官所々廿餘ヶ所、先日賴朝分賜而今度勳功之後、皆悉取返、充給郎從等了、於今者生涯全以不可執思、何況遣郎等可誅義經之由、慥得其告、雖欲遁不可叶、仍向墨俣邊射一箭可決死生之由所存也云々、

〔吾妻鏡〕^{十八}元久三年^{○建永}正月廿七日己酉、故將軍^{○源}御時拜領地者不犯大罪者、不可召放之

由被定之、行村爲奉行云云、

〔新編追加^{雜務}〕一爲守獲人、就犯科人跡沒收所領田畠事

右此條自右大將家^{○源}御時至于當御式目守護成敗條條^仁雖不被載之、勅令沒收事云、本沒收云、

新沒收其訴訟連々出來候歟、謀叛人之跡猶以不可有守護進退候歟、況於其以下犯科人跡哉、然者令沒收之後、何十箇年以前事者、非御沙汰トモ、又何樣可候トモ、尤可被定下歟、

押紙云、自關東下給者可停止掠領也、

〔太平記〕^{三十三}新田左兵衛佐義興自害事

畠山入道道督^{○中}或夜潛ニ竹澤右京亮ヲ近付テ、御邊ハ先年武藏野ノ合戰ノ時、彼ノ義興ノ手

〔家忠日記増補〕慶長四年八月十八日、今年ノ夏ヨリ朝鮮ノ目代評論アリ、甲方ハ竹中貞右衛門尉、毛利民部大輔、乙方ハ福原右馬介、太田飛騨守垣見和泉守、熊谷内藏介、早川主馬助等也、各伏見ノ城ニ登テ是ヲ訴論ス、徳善院立以、淺野長政、増田長盛、長束正家等、大神君○徳川家康ノ前ニ列座シテ是ヲ聞ク、五人ノ訴ヘ非義タルニ依テ、各改易セラル、

〔建武以來追加〕御成敗條々應永廿九、七廿六、松田丹後入道常實奉行

一役夫工米以下段錢京濟事

差日限乍捧請文於不致其沙汰在所者可被關所矣、

〔侍所沙汰篇追加〕一故戰防戰答事永正十三

故戰之輩○中略被行故戰之本人於死罪者、至防戰者、被關所、永不可被免許矣、

〔甲陽軍鑑十七品〕長沼長助、長八親敵討事、附増城源八郎、と同長助、長八公事之事

去々年○永祿元年長沼兄弟にも心のむさき事を申かけ、無理なる公事をいたす、又今度もかくの分

なれば、諸侍へ見ごりのために、かり坂をこさせよと仰出され、右廿人衆頭笠井平兵衛、三津四郎

兵衛、坂本武兵衛、相州甚五兵衛、甘利左衛門丞衆をめしつれ、右増城源八家を關所仕り、其上源八

にかり坂をこさするとなづけ、坂のきはにて搦捕諸侍へのために逆機さかばねにあげよとある、

〔新編追加政所〕一取流土民身代事正應六、五廿五、同廿日、以奉行入豐州被仰下事

右對押有限所當公事之時、爲令致其辨取身代之條定法也、而或依少分之未進、或以吹毛之咎、取流

身代之條尤不便也、縱雖經年月償其負物、請出彼身代之時者、早可返與之、無力于辨償可令流失之

旨、其親其主令申之時、相計身代之分限、談傍例於近郷之地頭代、給與彼直物、取放文之後、可令進退

之矣、

〔新編追加政所〕一土民去留事

寛元二年八月三日

謹上 相模守殿

武藏守判

〔御成敗式目追加〕一所領年貢事、遠國者翌年七月以前、令究済可、遂結解、近國者同三月中、可、遂結解、雖無未進期日以前、不、遂其節者、別納之地者、可、落政所於例郷者、可、令改易所帶也、

弘安元年

〔足利季世記三好記〕畠山ト山ノ事

今年天文三甲午ノ三月ヨリ、紀伊國ノ住人野邊六郎左衛門ト云者有、是モト山畠山ノ命ニ背

シカバト山大ニ怒リ、北國ニ改易スベキト議セラレケル間、野邊一揆ヲ語ラヒ、己ガ城ニ楯籠ル、

〔甲陽軍鑑品九下〕晴信公山本勘介問答并信州戸石合戦之事

三月○天文五年十一日に、御馬入略中其後、教羅石民部を馬場民部に被成、馬乗五十騎預下され、工藤

源左衛門を内藤修理になされ、馬乗五十騎預被下、浅利馬乗九十騎預下さる、秋山伯耆に馬乗五

十騎、是は甘利備前組の衆、戸石合戦にて、様子悪き人々御意に背き、改易して坂を越侍大將衆の

同心被官共也、

〔甲陽軍鑑品十二〕信玄公國法背きたる者をも人によりて二度までは御免なされ候事、五ヶ

條は、略中

二忠節忠功の武士の子孫などは、御成敗あるべきをも、命をたすけ坂をこさせ、改易の科をば、寺

入に仰付られ候、

〔甲陽軍鑑品十七〕金九平三郎爲落合彦助被伐事并長坂源五郎被誅事

此刻に日向大和と長閑○長と對決ありて、長閑負たる故、久敷改易仕、典厩○武田の御かいほう

にて、日向大和とも中を直候、

一於所々田を畠屋敷仕候事曲事也然上ハ所務水田同前可召上事、

一あたり地家を作罷退時者其年年貢於相澄者板屋萱屋共家主可付但彼家主令成敗時者財賣家共其主人可取賣物付而申事あらば其被官之主人より地頭へ年貢可相立間人成敗之時者其家財賣共可被召上若年貢在之時者賣物ハ上より領主へ可被下事、

〔甲陽軍鑑品十七〕落合查助と百姓と公事附難言并に三法印陀言之事

曲淵が公事のあくる日に御舍弟逍遙軒被官落合查助と申者百姓と公事を仕負て奉行を惡口

申○中信玄公聞食○中其後奉行衆をめして查助仕る公事を委聞召に非公事なり○中足輕衆

職衆廿人頭各落合查介宿をとりまき申され候查介はやく聞付にげてきけん寺へ走籠事頼に

付而先命に大事はなし○中其後仙海法印まつかく山の勝覺院妙王寺の妙音院三法印の御陀

言にて候信玄公御意には仙海法印の事は關東川越よりはる○中よひこし奉る間不及是非國

家の仕置の事をもかへりみず三法印へ對し奉り命をば助置申べしとて五六十日有てたすか

る被查介罷出るさりながら家屋敷知行共にことごとくめし上られ候、

幕府沒收摺紳
家財

〔薩戒記〕永享六年六月十三日抑左相府殿○足利政務之後遺事之輩已及數多○中

前施藥院使季長朝臣被取家并屋敷地逐電散位雅長朝臣與季長同事

〔下學集下〕改易言

〔運步色葉集實〕改易言

〔新編追加雜〕一諸國御家人跡爲領家進止之所々御家人役事御家人相傳所帶等雖爲本所進退無指誤於被改易者任先度御教書之旨可被申子細也其上不事行者可被注申關東候若又當知行之輩於其各出來者以御家人役勤仕之仁可被改補之由可被執申候至所者任先例不可有懈怠之由可被催沙汰之由可令申沙汰給之狀依仰執達如件、

右博戲之科、禁制惟重而近年、非當背制符、剩以田地爲賭之由、世間有其聞自今以後、可被停止、若猶令違犯者、早被處重科、可令沒收其賭矣、

〔建武以來追加〕近追

定

一セイセンノギ、京錢ウチヒラメヲノゾク、其外ノトクウ錢、渡唐 永樂エイラク、洪武コウフ、宣德セントク、ワレ錢但ザルトナラ、以下トリ合テ、百文ニ三十二錢分一可ニヤウ三、在之於向後トリワタスベキ事、
一アク錢賣買儀、一切可停止事、

右條々堅被制止訖、若背此旨族アラバ、權門勢家ノヒクワンライハズ、於其身者處嚴科至私宅者、被官關所ニヲコナハルベキ由所被仰下也、仍下知如件、

永正五八七

沙 彌 信 祐

近江守三善朝臣貞運

〔看聞日記〕永享九年三月九日、抑關山法師戒淨、有罪科事被召捕、筑紫へ被流罪云々、八十餘老法師也、有德者也、家財質悉被關所家ハ宗一檢按ニ被下、財寶ハ正實土藏ニ被預置云々、藏預持俊朝臣有所操、被家ニ同宿之間、家具等悉被點散々式云々、

〔蔭涼軒日錄〕永享十二年九月廿一日、津州罪科人家財、御寄進于寺家之由被仰出矣、十一月廿日、攝州多田關所平瀬入道家財貳千貫文、被寄進于當寺爲東廊造營也、廿一日、多田平瀬入道關所文書、悉正實方贈之、地門切石分二百貫文、御寄進于當寺、鎮守社遷宮來十二月廿七日、自八幡而可奉移其神之由被仰出、即命于飯尾肥前守平瀬跡當年買、即御寄進于寺家、

〔信玄家法上〕一藏主就于逐電者、以日記相調、至于錢不足者、其田地屋鋪可取上之、

〔長曾我部元親百箇條〕掟

〔御成敗式目〕惡口咎事

右圖殺之基起自惡口中問注之時吐惡口則可被付論所於敵人又論所事無其理者可被沒收他

所領若無所帶者可處流罪也

一改舊境致相論事

右或越往昔之境構新儀案妨之或掠近年之例捧古文書論之雖不預裁許無指損之故猛惡之輩動企謀訴成敗之處非無其煩自今以後遺實檢使札明本跡爲非據之訴訟者相計越境成論之分限割分訴人領地之內可被付論人之方也

〔新編追加傳所〕一武藏新羽鄉地頭大見肥後三郎二郎定村遺領事

定村嫡子又次郎賴村與後家平氏賴村相論之時賴村申云定村之中陰追出龍僧打留念佛之條違罪也云々平氏可被處惡口罪科之由依令訴申被付論所於氏女畢

正應三

三番引付奉行島田民部大夫行兼

頭人遠江入道道四條

〔新編追加雜務〕一西國海賊事

右國々被下知之趣尤神妙件兵士事者有對捍之輩者爲守護人之沙汰可被注進交名也於同船事者依其咎令沒收令擲進之輩可充給也其子細被仰合清賢也

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年四月廿五日癸未以田地爲博奕賭事於件所者可被召放之由被定

〔新編追加政所〕一可禁制絹布類短狹事弘長奉行政所

近年以來絹布類狹織短裁猥充足段之間併以寸法不足商人等猛惡也不可不誠自今以後短狹物等不可賣買之若猶背禁遏之法者仰奉行人等殊被加懲肅可被沒收其物

〔新編追加傳所〕一以田地所領爲雙六賭事文曆二

とて、新役望訴者無界限といへども許容せざる也、自今以後、ク様之訴訟取次者においては、知行十分一を沒收すべき也、知行なくば給恩と雖可改易也、

一田畠野山境問答對決の上、越度の方知行三ヶ一を可沒收之旨先條雖有之、あまり事過たる歟のよし、各訴訟に任問答之傍示境、一はいを以、公事運之方へ付置べき也、

〔信長記^{十五上}〕信長公東國御進發并勝頼父子討死之事

其子勝頼^{田武}亦、忠功ノ家臣モ祿重ケレバ其領地ヲ取上、近習公事ヲ取次事アレバ、理非混亂シ、政ヲスル者ト云ヘバ、欲深ク威ノタクマシラン事ヲ強テ好シ也、

〔建武式目〕政道事

一京中空地可被返本主事

如當時者京中過半爲空地、早被返本主可被許造作哉、如巷說者、今度山上臨幸^{〇後}、扈從之人、不論

上下、不謂虛實大略被沒收云々、如律條者謀反逆叛之人、協同與、驅卒、罪名不同歟、尤被尋究可差異

哉、凡承久沒收之地有其數歟、今又悉被召放者、公家被官之仁、彌可牢籠乎、

〔看聞日記〕永享四年六月八日抑裏辻大納言入道^{〇藤原}

一兩日逝去云々、室町殿^{〇足利}御意不快、

家領等被召放令牢籠、大略餓死歟、不便々々、

〔薩戒記〕永享六年六月十三日、抑左相府殿^{〇足利}政務之後、遺事之輩、已及數多、

從一位有光卿、所沒收所領不知其行方、^{〇中}從一位實秀卿、被沒收所領遂以逝去了、^{〇中}入道前

內府被止經廻所領一兩所相違、^{〇中}前權中納言義資卿所領悉以被沒收、被止官職、遂以爲夜討

被得其首、前權中納言通淳卿、被沒收所領一所、被止經廻權中納言經成卿、被沒收所領被止經廻、

飛鳥井中納言、被止經廻、被沒收所領一ヶ所、然而被免許、近日出仕無相違、^{〇中}四辻宰相中將季

保卿、被沒收所領、但於出仕者無相違、

被付寺社修理也、到地下人者可被處嚴科也、使節令緩怠者可有其咎之由、去十九日、於管被仰諸奉行有評定、被載事書一紙、被成遣御教書於山門了、件事書奉行頭人所令評議也、

〔關八州古戰錄二〕白河義親新國上總介等事

奥州盤瀬郡長沼ノ城主新國上總介ハ、蘆名盛氏以來、武名馨シキ老武タル故本領ヲモ與ヘラレ、眞田ニモ列セラルベキ内存ニテ招呼レ、會面シ給フ處ニ、新國嬉シサノ餘リニヤ、近習京家ノ輩ニ向テ、前後不合期ナル事共ヲ、田舎ノ訛タル詞ニテ周諒ニ申ケルヲ、殿下○豐臣聞召シ不興有テ、聞シニ劣レル倅ツバ侗者ナリトテ、是モ亦采地ヲ收公セラレ浪人ト成シガ、後ニ氏郷家人トシ、二千石ノ食邑ヲ授ケラレケリ、

〔奥羽永慶軍記三十五〕和賀薩摩守滅亡附嫡子又二郎二男又四郎事

カクテ又四郎緣ヲ求メ、同國江刺ノ郡水澤ノ城主白石若狹守ヲ頼ミ、政宗ノ方ヘ訴ケルハ、某累代和賀ノ郡主タリトイヘドモ、先年父ニテ候薩摩守ガ代ニ、太閤秀吉公ノ命ニ背キ、所領沒收セラレ、夫ヲ南部信直ニ賜リケレバ、年久シク牢浪ノ身ト成テ、爰彼ニ蟄居致シ候、

〔松隣夜話〕越後ノ科人ノ御仕置、一ノ重科ニハ刀脇差ヲ召取ラレ一代身ニ帶ズ但侍以下各別二番死罪、三番追出、四番所領沒收

〔今川記かな目録追加〕

一出陣の上、人數他の手ヘクハ、り高名すと云共、有法度之間、不忠之至也、知行を沒收すべし、無知行は被官人を相放すべき也、軍法常の事ながら猶書載也、

一各困窮せしむるにより、徳政の沙汰にあらずといへども、或年期をのべ、或以連々辨濟之事、誠に非分之至也、如増善寺殿○今川氏親時かたく停止之、如此相定上、訴訟のよし取次申出る者において、知行三分一を可沒收、訴訟人之事は、一跡を改易すべき也、

一分國中諸商賣の役之事、自先規沙汰し來る事は、乍不便了簡に不及也、今に至てのがれ來る事

〔關東評定傳〕建治二年千四

評定衆 左衛門尉藤原時盛法師 建治二年九月遁世、偷入壽福寺、同十五日所帶悉收公、

〔太平記 三十六〕頼宮心替事附畠山道誓事

去々年ノ冬、畠山入道○道 南方退治ノ大將トシテ上洛セシ時、東八箇國ノ大名小名數ヲ盡シテ

ゴ上リケル、此軍勢長途ニ疲レ、數月ノ在陣ニクタビレテ、馬物具ヲ賣位ニ成シカバ、掠兼テ畠山

ニ暇ヲモ不_レ乞、拔々ニ大略本國ヘ下リケル、遂ニ程經テ畠山關東ニ下向シテ、彼等ガ一所懸命ノ

所領共ヲ沒收シテ、欺ケ共耳ニモ不聞入、適披露スル奉行アレバ、大ニ鼻ヲツカセ追込ケル間、訴

人徒ニ群集シテ、愁ヲ不懷ト云者ナシ、

〔太平記 三十九〕諸大名讒道朝事附道譽太原野花會事

此遊洛中ノ口遊○口ト成テ、管領○足利ノ方ヘ聞エケレバ、是ハ只我申沙汰スル將軍家ノ花下ノ會

ヲ、カハユ氣ナル遊哉ト欺ケル者也ト安カラヌ事ニゾ被思ケル、乍去是ハ心中ノ憤ニテ、公儀ニ

可出咎ニモアラズ、哀道譽○佐木何事ニテモ就公事犯法事アレカシ、辛ク沙汰ヲ致サント心ヲ付

テ被待ケル處ニ、二十分一ノ武家役ヲ道譽兩年マデ不沙汰間、管領スハヤ究竟ノ罪科出來スト

悅テ、道譽ガ近年給リタリケル攝州ノ守護職ヲ改メ、同國ノ舊領多田庄ヲ沒收シテ、政所料所ニ

ゾ成タリケル、

〔建内記〕永享十二年三月十七日、赤松伊豫守義雅○總領大膳大夫所領悉所沒收、被宛行含兄入道并

細川右馬助○領小屋野拜赤松伊豆入道等、

〔康富記〕寶德三年七月廿四日庚申、依招引向飯尾肥前入道許用朝倉、語云、山門衆徒、動狠令、動坐神

與閉籠堂舍、致嗽訴、刺近日招寄賊徒於山上、於結界地、致合戰、全殺害、每度御裁許、非無其煩、於向後

者、以支證可經訴訟也、若不事問、動坐神與、閉籠堂舍者、尋究張本人、到衆徒者、追捕其身、沒收所帶、可

被召之處稱亂入領內乃御使而縛云云仍罪科重疊之間被召放所帶等之上早可進件難色之由今日被仰下云云

〔吾妻鏡^七〕文治三年九月廿七日乙丑、畠山二郎重忠爲囚人被召預千葉新介胤正、是依代官真正之奸曲大神宮神人長家網訴申故也代官所行不知子細之由雖謝申之可被收公所領四箇所云云、

〔吾妻鏡^九〕文治五年十月廿八日甲寅、景時[○]楓申云、安藝國大名葉山介宗賴依伊澤五郎僅爲奥州御下向御供卒勇士參向之處於駿河國藥科河邊聞已御進發之由、自其所歸國訖自由之至也無誠御沙汰者、自今以後傍輩之所思如何云云仍可被收公宗賴所領等之由被定云云、

〔吾妻鏡^{十三}〕建久四年六月三日戊戌御狩之間常陸國久慈輩候御供之處怖祐成[○]會等夜討逐電畢、仍被收公所帶等云云、

〔吾妻鏡^{二十六}〕貞應三年[○]元仁閏七月廿九日伊賀式部丞光宗坐事改政所執事職被召放所領五十二箇所、

〔關東評定傳〕正嘉元年^{已丁}

評定衆 式部大夫藤原光宗法師^{法名光四正月卒} 伊賀守朝光男、任式部丞、元仁元年六月坐事隱岐入道行西預之止政所執事所帶五十二ヶ所收公嘉祿元年免許所帶八ヶ所被返之、

〔新編追加^{侍所傍例}〕

一紀伊七郎左衛門尉重經所領丹後國之地頭得分物、以同所領夫令運上鎌倉之處、件夫丸下著鎌倉於米町之邊見付彼持逃夫丸擬召捕之處夫丸逃走之間重經下人追懸之刻入將軍御所御臺所重經下人猶以追懸之間晝番已下人々群集云重經下人云夫丸召取之申事由之間御尋之處子細無相違但主人重經雖不知此子細追入御所之條緯已爲勝事之間主人猶難通其科之由有御沙汰即被召重經丹後所領畢、

此事寬元中之比武藏前司殿御時事、
歟云所領主名字云年月委可尋記也、

於死罪者至防戰者被關所永不可被免許矣、

〔新加制式〕二相論之時出證人事

右雙方共令領解出證人既札明之處、元理之一方重而可出別之證人旨雖謝申之不可有舉用將又件證人以量員掠申之段顯著者隨其咎或被沒收所領或可被行死罪、

一被官人罪科懸主人否事

右被官人重科之時猶於拘惜者主人可懸咎仍三ヶ年可被沒收所領半分但爲決實否暫相拘其人者非主人之過然者犯科治定之時隨咎之輕重爲主人可加成敗若及其期咎人逃脫之旨雖申之主人可懸其咎也、

一以御恩地入質物事

右要用之時以給地入質物事雖爲制禁无力之族失述口之條以憐愍之儀限三ヶ年而可有有恕哉然者借用人錢主人過此年紀而互於申合者可被召放彼所領次其主三ヶ年中不慮令斷絕者可爲錢主之費但最前對其主人違案內者可爲錢主之計、

一結黨類互令盟誓事

右令群集結黨類者違背上強張下之謂也、不可不誠若有結黨盟誓之儀沒收面々之所領可被追却分國、

一被官人及攻戰其咎懸主人否事

右件被官人違札明令成敗者主人不可懸其科但无咎之旨主從同心陳申之處犯科露顯者主人可懸其科也仍三ヶ年中可被沒收所領半分就中被官人之科內々雖令札明依不一決暫雖申其旨主人无私曲之段分明者難謂同科乎然者主人果而被被官行重科以一禮可散其憤、

〔吾妻鏡〕治承五年

○養和元年

三月廿七日癸卯片岡次郎常春依有謀叛之聞遣難色於彼領所下總國

者不能改補。前後年貢可避渡下地於本所之子細同前焉。若背此法於割分之地。領主等致違亂者。任先例可被収。公彼所領矣。次依他罪科被召所領事。未進相積之由。難掌經訴訟之刻地頭等。不應被沒收件所領者。新給人治定之時。可分付下地之子細。相同初段焉。

〔建武以來追加〕諸國狼藉條々貞和二十二年
十三沙汰

一亂入他人所領致非分押領輩事

不帶補任裁判公驗。不待使節之進行。無左右致亂入狼藉之條。造意之企太以無道也。不可不誠。向後堅可停止此儀。若有違犯之族者。云本人云與力人。可收公所領三分一。無所帶者可處流刑也。

一蒯田狼藉事

任先例爲檢斷之沙汰。加嚴制可注進子細所犯治定者。可被分召所領五分一也。無所帶者可處流刑焉。次與力人事子細同前矣。

一號一揆衆致濫妨事

近年或押領他人之所領對專使妨進行。或爲散私宿意率黨類及合戰云々。造意之企難違重科。所詮就守護并使者注進。須處罪科。但隨事體可有輕重焉。次使節難濫咎事。可被分召所領五分一也矣。

〔建武以來追加〕一寺社本所領事觀應二六十三御沙汰

諸國地頭御家人以下輩押領所々之條。濫惡之至不可不誠。所詮嚴密可停止其妨。若不敍用者。可被收公所領半分押領已後得分物同。可返進之無所帶者可處遠流焉。次武家輩所領事子細同前。次使節事。守御敍書日限沙汰付下地。可執進請取狀令遲怠者。於守護人者改補其職。至御家人者可被分召所領三分一矣。

〔侍所沙汰篇追加〕一故戰防戰咎事永正十三

故戰之輩依刃闕殺悉被收公所帶者。於防戰之族者任先例。可分召所帶半分。若又被行故戰之本人

〔御成敗式目追加〕一關東御領知行後家并女子事

右後家女子令在京之條不可然之間向後可停止若於背制法者可被收公所領也

〔新編追加雜務〕一隱置惡黨於所領內輩事弘安九
二五

自身者關東參住之間在國事不聞及之由依令申之前々通罪科歟於自今以後者令隱置惡黨於所領內之由令露顯者自身雖不在國可被召所領三分一也但來住所領百日計居住之族雖爲惡黨不存知之間鎌倉參住之仁不可及罪科至代官者爲在國之間依不可通其咎仍永不可召仕之若猶召仕者主人可有其科也正員又令在國者雖爲百日居住之浪人可被改所帶

〔式目抄三〕一謀書罪科事

一謀書其犯令露顯者諸大夫以上者准贖銅儀可被收公所領於無知行地之輩者可被解却官職至侍以下及諸雜掌者可被禁獄其身

〔建武以來追加〕一諸國守護人以下使節緩怠事康永三
四御沙汰七

或可沙汰付下地之旨被仰下或可催上論人之由觸遣之處遵行運引之條甚以不可然向後於難違使者須被收公所帶矣

〔建武以來追加〕一蒔田狼藉事

爲檢斷方沙汰可有札明之所犯令露顯者可被召放所領三分一歟

〔建武以來追加〕一國司領家年貢對捍地事貞和十二
十三沙汰

就貞永式目有其沙汰地頭以下領主不應裁許之日雖改補所職本所年貢失墜之條背理致歟仍自今以後及下知違背之期者收公被職補新司之時可分付前司未濟五分一相應之地於本所也次後年年貢事無同時之裁斷者相論亦不可休之間勘合每年分限彼是其限永代分付下地於本所之後一向止地頭之所役相互可全知行但於今年以前分者近年擾亂諸人窮困之間以寬宥之儀至所職

一依無道理不蒙御裁許之輩爲奉行人偏頗之由訴申事

右依無其理不關裁許之輩爲奉行人偏頗之由構申之條太以濫吹也自今以後構出不實企濫訴者可被收公所領三分一無所帶者可被追却

一密懷他人妻罪科事

右不論強姦和姦懷抱人妻之輩被召所領半分可被罷出仕無所帶者可處遠流也

一關東御家人申京都望補傍官所領上司事

右右大將家朝源御時一向被停止舉而近年以降企自由之望非當背禁制令覃噴嗟歎自今以後於致濫望之輩者可被召所領一所也

〔式目抄〕五嘉禎元年七月二日癸亥所職所帶并境相論事非據者可被召所領無所領者可被處罪科之旨兩方召取請文之後可札明之由被定且被仰六波羅了

〔新編追加〕政所一凡下輩不可買領賣地事延應二四四廿五同日

右以私領令沽却事爲定法之由先度雖被書載自今以後者縱雖爲私領於賣渡凡下之輩并借上等者任近例可被收公彼所領也又雖爲侍已上非御家人者不及知行

〔吾妻鏡〕三十四仁治二年六月十六日壬申諸人預置謀反人之時令逃失者依爲重科可召放所領以其所持物等可被付寺社修理之由有議定但逃脫之後三箇月者可延引過其期者隨事體殊可有其

沙汰之由仰侍所司普可被相觸云云

〔御成敗式目追加〕一依當知行仁罪科被召所領事文永一六一

右一期知行之輩依罪科被召所領之間未來之領主雖無其誤永佗條之條爲不便歟若繼母兄弟并他人等爲一期之領主有罪科被召彼所領之時者可充給向後之領主但祖父母父母之後子孫可知行之所者雖爲一期知行之仁罪科可被收公也

廿八日、鳴前祐宣、福宜、信祐等、祐躬孫事不可有相違云々、此趣可申室町殿云々、六月二日未廻許、參室町殿、祐躬孫事申、勅答之趣申次大館、無相違之條、相畏申、御申之旨、被心得申候、由有御返事、

申詞

祐躬縣主孫事申之上者、可被加社司於知行分者、被付造營候間、難被返下、已後不可成就望之由、可被召進請文云々、

〔御成敗式目〕一依夫罪科妻女所領被沒收否事

右於謀叛殺害并山賊海賊夜討強盜等重科者、可懸夫咎也、但依當坐之口論若及刃傷殺害者、不可懸之、

一代官罪過懸主人否事

右代官之輩有殺害以下重科之時、件主人召進其身者、主人不可懸科、但爲扶代官、無咎之由、主人陳申之處、實犯露顯者、主人難通其罪科、仍可被沒收所領、至被代官者、可被召禁也、兼又代官或抑留本所之年貢、或違背先例之率法者、雖爲代官之所行、主人可懸其過也、加之代官若依本所之訴訟、若就訴人之解狀、自關東被召之、自六波羅被催之時、不遂參決、猶令張行者、同又可被召主人之所帶、但隨事體可有輕重也、

一承久兵亂時沒收地事

右致京方合戰之由、依開食及被沒收所帶之輩、無其過之旨、證據分明者、充給其替於當給人、可返給本主也、是則於當給人者、有勳功奉公之故也、次關東御恩輩之中、交京方合戰事、罪科殊重、仍即被誅其身、被沒收所帶畢、而依自然之運、通來之族、近年開食及者、緯已違期之上、尤就寬宥之儀、割分所領內、可被沒收五分一、但御家人之外、爲下司庄官之輩、交京方之咎、縱難露顯、今更不能改沙汰之由、去年被議定畢者、不及異議、

伊勢可申付奉行云々、

〔親長卿記〕文明十年八月廿二日、重則申祝職事尋重脩縣主

重則父也、北小路殿被執申也

難辭退之由申之、仰假殿

用脚未進緩意之間、以次可被改替歟、但父職被召放、可被補子之條如何、但彼用脚致其沙汰者、只今

事者可被指置、不然者重則可致其沙汰歟、可相尋云々、鳴社前社務祐躬縣主先度社務職競望之時、

假殿用脚萬疋、可進上由申之、不致其沙汰、殊三月三日神事閑怠之間、被改職了、競望之時、請文若致

無沙汰者、私領等、可被召放云々、其後度々雖及御沙汰、不便之間、予無沙汰、今日又有仰、無力事

也、可加下知之由申入了、九月四日、及晚參內北小路殿御申賀茂祝事、可被任補重則事假殿用脚事、無所

帶、去々年社司致約諸社頭及回祿、依其科條、可被召所帶之由、被仰出之處、欺申之間、然者年々造營

中、私領之內、依分限、可進公用之由、被定仰了、其內祝重脩于今一錢不及其沙汰、仍被改祝職也、且重執申之故也於重則者、非其人數、雖任祝於所帶者、非知行只渡領許也云々、申所有其請然者、先可被

任祝於重脩者、猶其用脚不致沙汰者、可被召所帶之由、可仰云々、

祐躬縣主所帶事、去年就望禰宜職之時、造營用脚萬疋、可進濟、去年當若有無沙汰者、可被召放、私領

之由進請文、去年當年一向不及沙汰、結句去二月晦日神事閑怠了、其時被改職了、任請文之旨、同可

召放所帶之由、去三月被仰出了、予申令無沙汰、重去月被仰出之間、去二日申付禰宜祐香三位了、申

畏存之由、

〔親長卿記〕文明十八年三月十六日、依召參內、仰云、昨日自室町殿

○足利義倫

被申、故祐躬遺跡事、先年祐

躬就有不義事、被處御罪科了、今度申狀、故祐躬就申之儀、故梨木祐香、掠申之間、可申披云々、其時已

被經御沙汰、就有過被罪科之處、今可申披何事哉、御不審也、於知行分者、被付造營之間、被返遣之由

可申云々、又可仰本人、有可申子細者、何不申此御所之御執奏哉、五月廿五日、參內、○申先仰云、昨

名稱

沒收領地

〔運步色葉集〕毛沒收

〔式目抄〕曆應三年符云、以不知行地稱當知行、掠給院宜輩ノ事、此罪條准贖銅、可被分召所領、

〔勘仲記〕建治二年十一月七日丁酉、後聞雅憲朝臣、自南都上洛之間、於小山邊、衆徒譏岐房辨尹抑留

權尙書至東大寺手攝門上、歸於此所、自馬引下、可召出院雜色、由譴責云々、辨再三固辭之處、辨尹可

與耻辱之由示之、其後雅憲朝臣遣使者、召出院雜色包弘、其後雅憲朝臣得身暇上洛、包弘爲辨尹被

打擲蹂躪、大略及死門、此事之濫觴、宿院領松武名主職一條、於殿御時、南曹辨定藤朝臣、成敗辨尹

而改彼、又成敗賴實院雜色包弘者、彼名奉行者也、爲散此宿意及狼藉歟、不知子細也、雅憲朝臣逢不

慮之歟、思遠定藤朝臣之條、可謂不便歟、件之狼藉、先規頗希、朝威之輕忽、其恐不少者也、十日庚子、

參殿下、○藤原辨尹狼藉事、院雜色等列訴、捧申狀所歎申也、被召定藤朝臣、此事有御問答、以雜色等

申狀可奏聞、由被仰下畢、辨退出、十一日辛丑、參殿下、終日祇候、定藤朝臣參、申辨尹狼藉勸答、可有

計御沙汰之趣也、可召進三人輩、由可仰寺家云々、予○藤原書御教書所給定藤也、件狀云、

辨尹并舜長宗圓等、不日召進其身於所領者、盡可沒收、由可被仰遣寺家者、依殿下御氣色、執啓如

件

十一月十一日

治部少輔兼仲

謹上 右中辨殿

〔親長卿記〕文明八年八月廿三日、拂曉軍勢等徘徊、尋子細之處、發向賀茂、在京社司氏人等張行云々、

午刻許社頭放火、氏人數十人被殺害、自去年度々雖及大變、社頭放火之條不可然之間種々御下知

等令猶豫之處、不及御下知社司氏人等令發向社頭成亡所之條存外事也、廿四日、參內召勸修寺

大納言廣橘大納言等談合賀茂事、依仰也、先被申武家、追可有御沙汰之由申之子細、被改社務職、於

在京社司氏人者、各被召放所帶一所、可被付造營云々、此趣被進、今又勸修寺大納言御使此子細仰

古事類苑

法律部二十

中編

沒收

放扶持 放與力同心 放家人號
禁帶刀 罪人

沒收ニ領地ヲ沒收スルト、田宅資財ヲ沒收スルトノ別アリ、領地ヲ沒收スルヲ召放所領トモ、收公所帶トモ、改易所帶トモ、關所トモ云フ、收公トハ之ヲ朝廷ニ收ムルヨリ出デ、廣ク政府ニ收ムルヲ云フ、所帶トハ官職ヲモ云ヘド、多クハ領地ヲ云ヘリ、改易トハ甲ノ所有ヲ以テ、乙ニ與フル事ヨリ出デ、多ク沒收スル事ニ用キタリ、關所トハ主ナキ地ヲ云フ、而シテ此頃ハ所領ヲ沒收セラル、ヲ被關所被行關所可關所ナドモ云ヘリ、サテ領地ヲ沒收スルニハ、一分、五分、全分幾所ナドノ別アリ、又年限ヲ立テ、其間沒收スル事アリ、代官ノ罪過ニ由リ、其主ノ地ヲ沒收スル事アリ、而シテ領地ヲ沒收シテ遠流ニ處スルコトハ、流罪ニ管國ヲ追却シ若シクハ所職ヲ奪フコトハ、追放篇解免官職篇等ニ載セタリ、參看スベシ、田地ヲ沒收スルモ、家財ヲ沒收スルモ、亦領地ヲ沒收スル類ナリ、身代召取ハ平人ニ科スル刑ナリ、

要スルニ、沒收ハ、其所有ヲ奪フニ外ナラズ、其所有ヲ奪フニハ、又扶持ヲ放ツアリ、俸祿ヲ與ヘザルナリ、與力同心ヲ放ツアリ、與力同心ヲ放ツトハ、武士タル者ヲ罰シテ、其部下ノ士卒ヲ奪フナリ、帶刀ヲ禁ズルアリ、帶刀ヲ禁ズトハ、武士ノ資格ヲ褫フモノニシテ、上杉氏ニ於テハ、之ヲ以テ武士ノ極刑ト爲シ、此ヲ死罪ノ上ニ置ケリ、今ハ此類ヲ沒收ノ下ニ收ム、

名稱	八二九
過過怠之罪	同
過錢	八三〇
贖銅	八三三
過料物	同
過怠隨貧富有差	八三五
過怠隨日數有差	同
過怠隨地大小	八三六
過怠課修造	同
過怠料處分	八三七
過怠辨償	八三八
過怠例	八三九
雜載	同

古事類苑

法律部二十

中編

沒收 放扶持 禁帶刀 併入 放與力同心 放家人號

名稱

沒收領地 幕府沒收搦紳領地 收領地付錢主

八一〇

沒收田宅資財 幕府沒收搦紳家財

八二一

改易

八二三

關所

八二五

身代召放

同

雜載

八二六

○

放扶持

八二七

放與力同心

八二八

放家人號

同

禁帶刀

同

過怠

加へられ籠合せ御申なさるゝ、其後長坂長閑子息長坂源五郎御成敗也、義信公御乳母曾根周防横目の萩原豊前に被仰付然も放し討に御成敗也、此外太郎義信公の衆八十騎餘あるを御成敗候て、其外は他國へ追はらひ給ふ中に、雨宮十兵衛と云侍小田原へ走三年罷在、内七度大剛なる武簀仕略中、三年目卯の年の暮に召返さるゝ、

〔甲陽軍鑑品第十八〕信州岩村田法花宗の僧公事之事

經文相違の出家を、其儘おかばいかなり經に背ざる様に心ざし、他國へまゐり出家を立べし、我分國をはらへどて、青沼介兵衛、市川宮内助兩人に被仰付、其遠國をたゞし、能登國へぞ送られる。

〔最上義光物語二〕惡屋形光安滅亡事

加様の惡行をなす事、前代未聞の曲者也、然共武田兵庫子前、去年兼山にて討死しける、其忠義有

之、間命之段者免し置なりとて、國中を追放被成也、無是非庄内へ遁行惡屋形光安を頼けるに、光安

も備前が田武、右之様子を委く聞くに、山形へは二度歸る者にあらずとて、則近習に召仕給ふ、

〔甲陽軍鑑品第十二〕國法軍法に背心むさく、善惡の辨もなく、後關して諸傍輩善惡の儀、わるく

證據もなきにそしり、能證據もなきにほめ、人の足本を守、輕薄なる奉公人の役、にたゞざる者をば、戲者拂ひに被成候は、御道理至極なり、必主君の國法軍法そむく輩は、臆病なる人也、

ぞ流しける、

〔大内家壁書〕御勘氣之仁不可有方人事

蒙御勘氣之族事、即時可被追放御分國中[○]也、[○]此旨爲諸人存知壁書如件、

明應四年乙卯八月日

〔今川記^{かな目録}〕一夜中に及他人の門の中へ入、獨たたずむ輩或知音なく、或は兼約なくば當坐搦捕又ははからざる殺害に及ぶとも、亭主其あやまりあるべからざる也、兼又他人の下女に嫁す輩、かねて其主人に不届、又は傍輩に知さず夜中に入來ば、屋敷の者其咎かゝるべからず、但糺明之後、下女に嫁す儀於顯然之、分國中を追却すべき也、

〔松隣夜話^中〕越後ノ科人ノ御仕置、一ノ重科ニハ刀脇差ヲ召取ラレ、一代身ニ帶ズ、^{伊待以下}二番死罪、三番追出、

○按ズルニ、是亦領國外ニ追放スルナラン、

〔甲陽軍鑑^{品四}〕利根過たる大將の事

永祿十一年辰の暮に、信玄公駿河へ發向まします、さて右申利根の過たる大將、大方義信公^{○武}にて御座候子細は地下へも種々貪たる事を仰られ、古屋惣二郎と申者を、惣算用聞になされ、さまざまの事有て、百姓町人のよめ子共まで、在々所々に隠置、無行義千萬の儀共有て、古屋惣二郎を始、義信公の衆廿八人首をきらる、其外は皆他國へはらはる、是も永祿八年飯富兵部少輔切腹の時如此、

〔甲陽軍鑑^{品十下}〕

第三十二、一永祿八年乙丑正月、飯富兵部少輔御成敗被成候子細は、^{○中}義信^{○武}田若

氣故恨なき信玄に逆心をくはだてさする、談合相手の棟梁に兵部成候事、此五ヶ條^{○諸條}御書立を以て飯富兵部御成敗也、太郎義信公^{○中}御成敗なさるべく候へ共、信玄公よりは御慈悲を

追放無所帶者

〔御成敗式目〕一謀書罪科事

次以論人所帶之證文爲謀書之由、多以稱之、披見之處、若爲謀書者、尤任先條、可有其科、又無文書之批繆者、仰謀略之輩、可被付神社佛寺之修理、但至無力之輩者、可被追放其身也、

一依無道理、不蒙御裁許之輩、爲奉行人偏頗之由訴申事、

右依無其理、不蒙裁許之輩、爲奉行人偏頗之由構申之條、太以濫吹也、自今以後、構出不實企濫訴者、可被收公所領三分一、無所帶者可被追却、

〔大内家壁書〕鷹餌龜龜禁制事

爲鷹餌不可用龜龜并蛇也、既爲氷上山仕者儼然之處、不存其惶之族、忽神罰不可遁也、於自今以後、堅固所加制止也、鳥屋飼以下之時、以禽獸計不飼得者、鷹不可所持也、若猶背此禁制、有求龜龜之族者、至侍者可被收公恩給地、無所帶者則可被追放也、至凡下之輩者、隨見出聞出、即時於其塙或留置其身、或隨事之體、可討戮之由、所被仰出也、仍壁書如件、

長享元年九月日

幕府追放摺神

〔親長卿記〕文明二年九月八日、右少辨資基朝臣

前内府御光公男

有子細自武家有追出、可及生涯之由、前内

府申之、死罪事有申宥人云々、無先規歟、朝家零落了、

大名城下追放

〔愚耳舊聽記〕尾崎三目内逆臣之事

逆心に組し打死仕たる者共の妻子男子は十三以上を斬罪に被仰付、十二より七つ迄は、御領分御追放、七つより下は、男子たりといふ共、御城下計の御追拂女子に至ては、御城下に罷在共不苦と被仰出たりければ、御敵をなしたる者共の子共なれば、乳ふさはなれぬもの迄も死罪とこそ被仰出べきと、各々覺悟せし處、十三以下御追拂と被仰出し事、難有御芳情とていづれも涙を

見スルノ處、武田衆堅ク守ルヲ以テ、早々引取其時、青沼新九郎ト云、謙信寵愛ノ小性、遠簡ニ當テ疵ヲ蒙リ、翌日前橋ニ於テ死ス。○中略謙信公佐渡ヨリ御歸城坐シ、新九郎御暇ヲ申サズ、忍テ在所ヘ罷歸リ、剩ヘ多日逗留致シ、是非ニ及ヌ由、大ニ怒リ給ヒ、堀埋タル新九郎ガ屍ヲ引出サセ、首ヲ斬リ獄門ニ掛ケ、父子兄弟悉ク御追放アリ、

〔總見記二十〕佐久間信盛御勘氣事

八月○天正八年十二日、大臣家○織田信長御勸座、宇治橋御覽有之、其後御船ニ召サレ、直ニ大坂ヘ御着有之、是ニ於テ佐久間右衛門尉信盛、同甚九郎御勘氣ヲ蒙ル、罪科ノ儀、御自筆ニ書付ラレ、仰出サレ候畢ス。○前條略ス御使楠長詣齋宮内卿法印、中野又兵衛三人ヲ以テ佐久間右衛門父子方ヘ遣ハサレ、父子トモニ早々遠國ヘ退出仕ルベキ旨仰渡サレ、御知行已下悉ク召上ラレ候、

〔信長公記十三〕天正八年八月十七日、信長公大坂ヨリ御出京、京都ニ而御家老林佐渡守、安藤伊賀父子、丹羽右近、遠國ヘ被追失、子細ハ先年信長公御迷惑の折、節、含野心申之故也、

〔總見記二十〕林佐渡守追放并自諸國注進事

同月○天正八年八月十八日、大臣家○織田信長大坂ヨリ御歸洛、京都ニ於テ御逗留中、御家老林佐渡守、西美濃ノ安東伊賀守父子御知行被召上、其身御追放仰付ラレ候、此ノ佐渡守、去ル弘治年中、末大臣家御若年ノ刻、弟ノ美作守一味シ、謀叛ヲ企、敵對申候譜代ノ老臣、似合ザル惡逆、雖然降參ノ上、赦免セラレ、天下漸治ルマデ召仕ハレ候、今度此罪科ヲ以テ御糺明ノ上ハ、一命ヲ失ハルベキ儀、本意ニ候ヘドモ、先年謀叛ノ節、美作守宅ヘ大臣家御來臨ノ處ニ、美作守ハ是ヲ伐奉ルベキ由申ス、佐渡守其儀ニ不認、諫爭シテ伐奉ラズ、終ニ以テ御安全ト云々、是ニ依テ今度御仕置ノ節、佐渡守一命相助ラル、者ナリ、安藤伊賀守ハ濃州西方三人衆ノ隨一トシテ、度々軍忠アリトイヘドモ、先年甲州武田信玄ニ内通シ、密々逆意ヲ挟ムノ儀、其紛ナキニ依テ、今以如斯追放セラレ候畢ス、

應永二年七月廿三日

○按ズルニ、本文及ビ次下二條ハ、足利氏ノ時、鎌倉ニテ處刑セシナリ、

〔鶴岡事書案〕野村頓學坊分百姓了道以無理強訴上於下地之間、任衆中一同之法可拂彼在所之由落居候、努々不可有緩怠之儀之狀如件、

應永四年十二月日

法印

佐坪政所殿

〔喜連川判鑑〕應永二十二年四月、常陸越幡六郎在鎌倉病氣間出仕ヲ止ム、近臣ノ讒ニ依テ領知ヲ沒收シ、其身ヲ被追放、管領上杉氏憲入道禪秀諫レドモ無御許容、自是禪秀所勞ト稱シテ籠居ス、〔大内家壁書〕諸人之被官公役被定御法事

就御動座

○足利義種ノ近江ニ赴キ、角高瀬ヲ擊ツナ云フ、

依去年御上洛、任先例、於赤間關御座船之事、被仰付之處、以浦

役錢可致進調之由、地下仁申請之間、被任懸望畢、然間彼等以相談令支配當關地下中之處、或號寺僕、或號武家、被官令難澁出錢候事、地下愁訴一同云云、所詮如此之族、於令違背公役者、可被相支當關住居之由、被仰出、若及違亂者云云、在所云交名、隨注進之左右、殊可有殊御成敗之、總別於所々先御代以來、此御定法歷然之處、動假其主之號令、輕御下知、爲道公役、申亂子細之輩、自今以後、可令追放其所也、右御定法事不可限當關一所、可爲御分國中此準據之由、堅固所被仰下也、仍執達如件、

延德四年○明應元年五月二日

遠江守前司判正任

木工判助弘依

三河守前司判重行

杉信濃守殿

〔松隣夜話中〕同七月○永祿七年、柿崎和泉、北條丹後、上州下分ニ働キ、毛作ヲコテ、夫ヨリ和田へ取詰、邀

事府管國追放

〔吾妻鏡〕三十八 寬元五年六月廿五日丙午若州以下亡卒後家等可有活命御計之由、及御沙汰且不
可居住鎌倉中之旨可召仰被輩云云信濃民部大夫入道行然平左衛門尉盛時等爲奉行、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿三年元安貞三年三月十九日戊辰去九日謀反人事有評議或是不足言事也、造意之金
還不能信用且物狂之所致歟關東御分郡鄉可被追放之由、有意見或民間野心殊以難被有刑法爲

所住地追放

向後懲累可被行斬罪之旨申之、遂罪名落居之間二位家源朝第三年之御佛事以後可有沙汰云云、
〔新編追加〕錄移一依違背地頭符所召置庄官百姓等事、

於自今以後者不及召誠其身所詮罪科無所通者不可居住其所、早可追出之由、可被下知之狀依仰
執達如件、

延應元年七月廿六日

〔政所壁書〕洛中洛外酒屋土倉付地下條々永享二年

一諸土倉沙汰人等事

所々土倉沙汰人恣犯用本主納物令居住洛中邊土并田舍云云頗自由之至也、於如此族者追放
有所加○建武式目追所可被處盜犯罪焉

〔吾妻鏡〕文治六年元久正月廿四日己卯去年合戰以後預恩赦安堵私宅許之族、金剛別當郎等
以下悉以可追放之由、可被仰遣于奥州居住御家人等中也、

〔鶴岡事書案〕佐坪鄉一野村當年年貢事、百姓等有強訴之聞、仍上使可被下之由、同落居云々、態以飛
脚申下候、抑就府中國廻近鄉惡黨等令居住於當鄉之由、其間候若然者無勿體次第也、有札明可被
拂於鄉內候、及異儀之輩者急々可有注進候、以府中使可執進之次、可被尋問食子細候、當鄉百姓十
五人突名在二別紙今月中可被召進候、於有難澁之族者、可有殊罪科沙汰候、努力不可有緩意之儀之狀如

件

前武藏守判○又見三

追放御教書

訴申社司之條爲曲事之由有仰之旨趣了、廿一日早旦參内出御御學問所奏勸修寺前大納言意見之趣所詮爲一社訴申之上者可被改爲氏人滿退社司不可仰云祝職事一社一同訴申之上者可被改補所詮先年モ社司數輩切殺了每度爲氏人進退社司不可然爲向後氏人張本可注進隨又自氏人直任祝事可注進例今度祝方氏人四人可任祝之由注進之此内モ自然有張本人歟何様注張本人之後依例可被仰下、五月十七日賀茂社申張本人事更雖無其仁隨仰一人追放云々、

〔細川勝元記〕一同年文正元年武衛義敏新走北國伊勢守貞親賜追放御教一書

〔應仁外記〕武衛家騷動之事

同九日文正元年九月惣大名連判ニテ條々伊勢守貞親不儀之通リ訴申サル生涯セサセラレズバ各

不可致出仕ノ由被申ノ條貞親ヲ追放ノ御教書出ニケリ、

舊中追放

〔吾妻鏡〕二十七、寛喜二年五月五日子刺盜人推參常御所盜給御劔御衣等不知行方武州北條時依

令聞此事給則被參、六日武州未退出給去夜盜人事殊被驚憤之故也於待召集自去夜參候之輩被札彈其中格勤一人美女一人有疑殆分仍參籠子鶴岡八幡宮可書進起請文之由被仰含畢、十四日先日嫌疑格勤美女依有起請文之失被札明子細追放御所中件美女引級彼男令盜條令露顯云云、

舊府所在地追放

〔新編追加侍所〕一可禁斷勾引人并人賣事

件輩任本條可被斷罪且人商人鎌倉中并諸國市間多以在之云々自今以後鎌倉者仰保奉行人隨注申交名可被追放至諸國者仰守護人可令科斷、

〔新編追加佛舍〕一念佛者事

於道心堅固輩者不及異儀而或喰魚鳥招寄女人或結黨類恣好酒宴之由逼有聞於件家者仰保奉行人可令破却之至其身者可被追却鎌倉中也、

追放

追放トハ其所ヨリ擯出スル事ニテ、幕府ニテハ營中ヲ追放シ、幕府ノ所在地及ビ分國ヲ追放スルアリ、大名ニテハ城下及ビ分國ヲ追放スルアリ、又其身ノ所在地ヲ追放スルコトモアリ、又罪狀ニ由リ、神社佛寺ノ修理ヲ命ジテ贖ハシムルコトアレドモ、無力者ニ至リテハ、此刑ニ處シテ之ニ代フルアリ、サテ當時ノ書籍中ニ、追却ト云ヒ、追出ト云ヒ、追拂ト云フ、皆追放ノ事ナリ、

名稱

〔伊呂波字類抄疊字〕追放

〔運步色葉集津〕追放べつ

〔倭訓栞部前編十六〕つゝはう 追放の字を用う、割據の世の事也といへど、神代より逐之をやらひ

きとよみたるは今の追放の意成べし、

〔庭訓往來〕管領執事奉行人、檢斷所司代、賦訴狀於右筆之時、以小舍人或下部等召出犯人於侍所、記錄申詞、依言色體嫌疑、糾明犯否之時、所犯已無所遁者、則召籠之、○中 此外火印追放以下、隨事輕重、其人是非可被行之、

〔雜筆往來〕抑留年貢奪取資財、以庭弱身、好過分僻事、矯飭之至、無物取喻、騷動嗷々、更無寬宥之恩、剩點定作稻沒收、所帶、募權門之威、以企押領、僞慢甚於先暴、惡盛于今、凡罪科之至、責而有餘、民烟衰微、人屋荒廢、土民佗儻、職而由斯、無禁制者、難落居者、歟、擄取其身、追捕家內召籠妻子、封納住宅、改定所職、可被追拂也

朝廷行刑

〔親長卿記〕延徳三年四月十六日、詣勸修寺前大納言許、談賀茂祝與氏人相論事、見申狀、尋歎慮之趣、爲衆中申之上者、可被改祝、但氏人直任祝例、并張本人一兩人可有罪科者、可有御沙汰、每度爲氏人

雜載

ハ尙坐セルガ如シ。

〔吾妻鏡^{十七}〕建仁二年三月八日癸丑、御所御鞠人數如例、此會連口儀也、其後入御于比企判官能員之宅、庭樹花盛之間、兼啓案内之故也、爰有自京都下向舞女^源、^盛盃酌之際、被召出之、歌舞盡曲、金吾

頼家頻感給之、廷尉申云、此舞女依有愁訴之旨、凌山河參向早直、可被尋聞食者、金吾令尋其旨給之

處、彼女落涙數行、無左右不出、詞恩問及度々之間、申云、去建久年中、父右兵衛尉爲成依人、譴爲宮人被禁獄、而以西獄囚人等爲給、與州夷被放遣之、將軍家雜色請取下向畢、爲成在其中、母不堪愁歎、卒去、其時我七歲也、無兄弟親昵、多年沉孤獨之恨、漸長大之今、戀慕切之故爲、知彼存亡、始憤當道而赴東路云云、聞之輩悉催悲涙、速遣御使於與州、可被尋仰之由、有其沙汰、盃酒及終夜、雞鳴以後、令還給

八月五日丙子、所被遣與州之雜色男歸參舞女父爲滅亡云云、彼女涕泣悶絕、躡地云云、

〔太平記^二〕長崎新左衛門尉意見事附阿新殿事

執事長崎入道ガ子息新左衛門尉高資進出テ申ケルハ、^略中大塔宮^略不返遠流ニ處シ奉、俊

基資朝以下ノ亂臣ヲ、一々ニ誅セラル、ヨリ外ハ、別儀アルベシトモ存候ハズト、憚處ナク申ケ

ルヲ、^略下

たりし也、まばしは人信せざりけれど、よしやすの中納言出家する程に、一定死なんするにて有ける。ころすまじと云て生にけるに、あだに信じたりけるに、後のたび又さやうに云ければ、申やうに沙汰有べしなど、淨土寺の二位人○後白河宮高階榮子申などしけるを、七日呼取て置て、一定事がらの眞そら事を見んとて入道よびとれと云事にて七日おきたりけるに、むげに、云事もなく、まゐるしだちたる事のなかりければ、正體なき事かなとてやがて猶惑になりて流されにき。

〔碧山日錄〕長祿三年正月十八日壬寅、以事問春公、春公語余曰、大相公○足利義政之妻某氏、曾司室家

之柄、其氣勢焰々不可近焉、其所爲殆如大臣之執事者、而貪戾而憚民、又多所妬忌、竟爲陰事、而殃其

室家之夫人、其事遂發、相公大怒、命大夫持清○京極俾竄貶之海外之隱島也、曰彼若司室家之權、有累

年積歲者、其禍可及天下也、而今有此貶所、天之罰也、予曰古史曰婦人預外事、非國家之福云々、相公

付此蒼生所欲、而天下安全之端也、可以喜矣、

〔太平記〕長崎新左衛門尉意見事附阿新殿事

君御謀叛ヲ申勸ケルハ、源中納言具行、右少辨俊基、日野中納言資朝也、各死罪ニ行ルベシト、評定

一途ニ定テ、先去年ヨリ佐渡國へ流サレテハ、ハスル、資朝卿ヲ斬奉ベシト、其國守護本間山城入

道ニ被下知○中略五月○元弘元年二十九日、事程ニ、資朝卿ヲ籠ヨリ出シ奉テ、遙ニ御湯モ召レ候ハス

ニ、御行水候ヘト申セバ、早斬ルベキ時ニ成ケリト思給テ、○中略今朝迄ハ氣色シホレテ、常ニハ泪

ヲ押拭給ケルガ、人間事ニ於テハ、頭燃ヲ拂如ニ成ヌト覺テ、只綿密工夫外ハ、餘念有トモ見ヘ給

ハズ、夜ニ入バ興サシ寄テ、乘奉、爰ヨリ十町計アル河原ヘ出シ奉、與昇居タレバ、少モ臆シタル氣

色モナク、敷皮上ニ居直テ、辭世願ヲ書給フ、

五蘊假成形 四大今歸空 將首當白刃 截斷一陣風

年號月日下ニ名字ヲ書付テ、筆ヲ閣給ヘバ、切手後ヘ回ルトゾ見ヘシ、御首ハ敷皮ノ上ニ落テ、質

重可被罪科兩人緣者之由訴之、頗難爲、遇會次第、不遂行佛事、徒送年月之條爲長者殊被欺思、召問不及是非沙汰、又順弘、堯弘兩人早可被配流之由、有其沙汰、且順弘即被召度武家畢、於堯弘者依構所勢危急之由、暫被尋其體之處、爲寺之訴訟、何可及子細哉之趣、學侶重中之、仍付氏院雜色等被致嚴密之譴責任申請、如此有其沙汰上、理不盡及閉門之條、頗以物忿爲學侶之身、似忘寺社事、所詮於宗兼事者、被仰關東可有其沙汰、順弘已被遣配所畢、堯弘今日令上洛云々、若又猶有子細者、嚴密加其沙汰、可令上洛之由、被仰含御使畢、此上有何不足可貽訴訟、早速開寺社門戶、可令遂行佛神事、如此趣殊可被仰含學侶、又可加教訓之由、可仰僧侶等、且見寺社同行可歸洛之旨、被仰御使畢、

廿六日丁巳、着束帶參殿下、南都承遍法印參、申南都事、堯弘昨日已前參洛也、老體病體之間、昨今兩日所入洛也云々、御問答承遍之間、南都飛脚到來、昨今衆會雖相催學侶、逐電云々、重可被下委細長者宣之由、申之、予仰遣別當法印并定藤許畢、其趣云、

學侶訴事、委細之趣、昨日以御使被仰下畢、堯弘已參洛之上、可被處流刑之條、不可及子細、而武家近日無便宜之口節也、其條定令披露、欺其間於堯弘者、任學侶之由申請、可有其沙汰、此上何可及子細哉、不日開門戶、可遂行佛神事之由、不廻難可被下知之由、殿下御氣色如此、仍執達如件、

九月廿六日

治部少輔兼仲

謹上興福寺別當法印御房

○按ズルニ、興福寺ノ僧徒ヲ、藤氏ノ長者宣ヲ以テ處刑セシナリ、

婦人處刑

〔愚管抄六〕後白河院うせさせ給ひて後に、建久七年の比、兼中と云、公時二位入道がうしろみにつかひける男有き、それが妻に故院つきしませおはしまして、我いはへ、社作り國よせよなど云ことを云い、だして沙汰にのりて、兼中妻夫妻は安房、夫は讃岐へ流罪せられなどしたる事のいき

應安五年正月廿二日○中

一乘院門主 後堀川關白經忠卿息

實玄僧都 伊豆 路峯常

大乘院 九條前關白經教公息

教信禪師 土佐 礪部濱行

安養院

賴乘僧正 應岐 池田浪滋 覺成僧都 佐渡 岸田門里 善覺法師 常陸 原坂遠 憲實法師 安房

春野小道 懷實法師 周防 高林永材

〔勸仲記〕建治二年八月三日己丑參殿下○藤原兼平中略於御出居學侶訴訟事有御沙汰大府卿祇候宗兼不出來者彼儀者堯弘順弘兩人可被罪科然者可遂行佛神事之由載會議狀申之仍可被罪科云々堯弘備中順弘伊豫如此被定以此趣可被仰武家之由付大理可奏聞之由大府卿書本責仰遣定藤朝臣許廿一日癸未參殿下與福寺僧侶數輩列參祈年穀奉幣御神事當日僧侶群參不可然但爲急事者於庭上可申之由被仰下氏院并參會以予傳申之僧侶等問答予無問答頗不分明之故歟順弘堯弘兩人事雖片時忿可被處流刑九月十七日參殿下南都寺社并七大寺閉門之由尊清僧都申之宗兼緣者順弘今日遣配所之由武家申之廿四日乙卯參殿下依南都寺社閉門行事勅使并長者御使明日可被下遣左少辨忠世含勅語南曹辨奉長者宜忠世參奉其趣予申次也委細之趣又仰遣定藤朝臣許也其趣予注遣如此

學侶訴訟問事度々御問答之間被懸御所存之淵底畢然而于今不存靜謐剩及寺社之閉門之上者委細御問答暨被閱之所詮訴訟之根元起自宗兼之所行雖訴申彼之罪科其身已逐電之間緣者三人可被處流刑之由申之仍三人輩即被遣配所畢其上早遂行佛事可相待宗兼左右之處猶

〔太平記〕三人僧徒關東下向事

同二年元德

七月十三日、三人ノ僧達遠流ノ在所定テ、文觀僧正ヲバ硫黃ガ島、忠圓僧正ヲバ越後

國ヘ流サル、圓觀上人計ヲバ、遠流一等ヲ有テ、結城上野入道宗ニ預ラレケレバ奥州ヘ具足シ奉、長途ノ旅ニサスラヒ給、左遷遠流ト云ヌ計也、

〔圖太曆〕康永四年四月廿六日、今日別當卿入來、謁南都形勢爲尋聞所招引也、中好專流罪事、又勸

勸之由、雖被仰下實無恐怖、宮彌誇張上者可被處遠流不可叶可有勸、勸之由、最前令申者未及神訴之上、爲有迷達行於今者速可被處遠流之刑云々、六月十二日、好專法眼事勸、勸之由、先度被仰了、而學侶猶申子細候之間、所被處流刑也、子息好淳山門跡給仕、可召放恩願、優神訴如此、其沙汰候由、可被仰一乘院僧正之旨、院御氣色所候也、以此旨可令申入給、依執達如件、

六月十二日

大藏卿雅仲

右少辨殿

〔後愚昧記〕應安五年正月廿二日、今夜流入宣下也、上卿土御門中納言定具、流入宣下次第事、藤中納

言忠光尋送之間、借遣了、彼上卿黃門忠光卿親類也、佗便宜事加扶持云々、

太政官符治部省

應令還俗前僧正法印大和尚賴乘權大僧都法眼和尚位覺成權少僧都法眼和尚位實玄傳燈大

法師位教信、善寬、憲實、懷實等事

右正三位行權中納言源朝臣定具、宣奉勅件賴乘等坐事、遠流、宜仰彼省、先令還俗者、省宜承知、依宣行之符到奉行、

左大史小槻宿禰

權右中辨藤原朝臣

用御齒之僧侶二人淨或道前國件輩可處遠流而東大寺上人申請配知行國

〔仁和寺日次記〕建保二年二月廿九日乙丑清水寺住侶能臣運俗名坂高里誦土佐國以堂寺可爲延曆寺

末寺之由令書寄文之科云々○又見皇紀抄

〔皇帝紀抄八順德〕建保四年五月九日有流人宣下事僧盛圓道常陸國長源同國堪重伊豆國仙秀佐渡

國覺秀出羽國仙幸越後國延應隱岐國禪定上總國安意安房國勝圓下野國觀賢能登國增秀越前

國幸秀遠江國實幸下總國義國信濃國是安樂寺惡徒十七人內也六月十八日有流人宣下事宇

佐公妙被配佐渡國本名公方也

〔仁和寺日次記〕建保四年五月九日辛酉鎮西原山惡僧十五人處流刑遠流九人近流六人刀傷官使之上依安

樂寺別當法眼定圓之訴訟也

〔皇帝紀抄八後堀河〕安貞元年七月六日有流人宣下事立念佛別宗以諸宗稱雜行之輩依山門訴申張

本三人被處遠流

〔百練抄十三後堀河〕安貞元年七月七日專修念佛者配流官符請印

隆寬律師運俗名山達里配陸奥後日被改改名原空阿彌陀佛改名原薩摩成覺改名柱重壹岐島

〔日蓮聖人註畫讚〕伊東左遷第七

以弘長元年辛酉五月十二日四十歲謫于豆州伊東浦諸餘弟子皆不相伴唯日朗一人隨從

〔日蓮聖人註畫讚〕赴依智第十七

同日賴綱送重迎狀云日蓮房佐渡國江被遣候兩三年毛候者可有御免候○中恐々謹言九月○文

年十四日○中

佐渡流刑第十九

爲知行佐渡島武藏前司預故爲其被官等沙汰同十日○十出依智趣彼島

〔吾妻鏡 二十六〕貞應三年^{元仁}十月廿九日、宰相中將^{實雅}於京都解官、配越前國云云、

〔吾妻鏡 二十七〕安貞二年五月十六日、後藤左衛門尉基綱申云、去月廿九日、前左宰相中將^{實雅}於越前國薨^{三十}、是去元仁元年、被配流彼國、訖基綱者守護人也、

〔北條九代記〕元弘元年四月廿九日、京都飛脚下著主上^後令亂世給、後基朝臣張行之由、吉田一品定房内々被申云々、依之五月五日、長崎孫四郎左衛門尉、南條次郎左衛門尉爲使節上洛爲召禁、右中辨俊基并文觀圓觀等也、六月此輩等被召下及拷問、同月中圓僧正知教、遊雅等被召下、八月六日、典藥頭長朝朝臣、前宮内少輔忠時朝臣、長崎三郎左衛門尉高賴、工藤七郎右衛門入道等被召捕、各被配流、依有陰謀之企也、

〔太平記〕資朝俊基關東下向事、附御告文事

去程ニ俊基朝臣ハ、罪ノ疑シキヲ輕シテ赦免セラレ、資朝卿ハ、死罪一等ヲ宥メラレテ、佐渡國ヘゾ流サレケル、

〔太平記〕笠置囚人死罪流刑事、附藤房卿事

笠置城被攻落、被召捕給シ人々ノ事、去年^{元弘}ハ歲末ノ計會ニ依テ、暫ク被開ヌ、新玉ノ年立

返レバ、公家ノ朝拜、武家ノ沙汰始リテ後、東使工藤次郎左衛門尉、二階堂信濃入道行珍、二人上洛

シテ、可行死罪人々、可處流刑國々關東評定ノ趣、六波羅ニシテ被定^中、尹大納言師賢卿ヲ下

總國ヘ流シテ、千葉介ニ被預^略、^中東宮大進季房ヲバ常陸國ヘ流シテ、長沼駿河守ニ預ラル、中納

言藤房ヲバ同國ニ流シテ、小田民部大輔ニゾ被預ケル^略、^中按察大納言公敏卿ハ上總國東南院

僧正聖尋ハ下總國峯僧正俊雅ハ對馬國ト聞ヘシガ、俄ニ其議ヲ改テ、長門國ヘ流サレ給フ、第四

ノ宮ハ但馬國ヘ流奉テ、其國ノ守護大田判官ニ預ラル、

〔大日本史 九十九〕皇太子恒良^略、^中北條高時遷、恒良于但馬、囚於守護太田守延家、^本書大平記、笠置囚人條、流、第

之春三月八日、復詔黃門定資放師。○中應長元年辛亥三月七日、師承赦牒入于洛中。○中正和二年癸丑之春、師北野之傍、說法七日。○中由是洛中之化亦不爲少、頑雲滅月、譏諛隔明、元亨元年辛酉十月二十五日、官復勳洛中、同年十一月八日、元應上皇詔日野亞相特旨賜環焉。○中應長辛亥之敕、元亨辛酉之勅、同年隔月之敕、謂之龍華三勅、故曰勳書、曰、加之割地於御溝之傍、於神創之功、無不實、達其迹者相似也、高祖者、兩度配流、我師者、三度演出矣、聖旨懇至也、

〔花園院御記〕元亨二年三月廿四日癸巳、今日爲基朝臣申上、大納言入道爲兼、法名靜覺去廿一日薨之由傳聞彼卿者、右兵衛督爲敕卿息也、自幼日昵近祖父爲家卿、和歌口傳等悉受之上、天性得風骨拔萃之堪能也、伏見院在坊之時、令好和歌給之粗至、政道之口入仍有傍輩之譏、關東可被退旨申之、仍解却見任、籠居之後、重有讒口、頗巧陰謀事、依武家配流、佐渡國、經數年歸京、又昵近如元、愛君之志軼等倫、是以有寵正和朕加首服之時、爲上壽任權大納言、無幾舊院見○伏御出家之時、同遂素懷了、於上皇并朕爲乳父妹大納言、又爲和歌之堪能、祇候永福門院、延慶褰帳典侍也、兄弟其頗有權威而入道大相國○藤原實兼、自幼年扶持之、大略如家僕、而近年以舊院之寵、與彼相敵、互切齒、至正和口年、遂依彼譏關東重配土佐國、近年卿有優免之儀、移和泉國、

〔武家年代記〕永仁六年正月、權中納言爲兼卿被召置六原、三月被遷佐渡國、依隱謀也、

〔東寺王代記〕正和四年十二月廿八日、爲兼被召取土佐國遠流、

〔徒然草〕爲兼大納言入道めしとられて、武士ども打圍て六波羅へゐて行ければ、資朝卿一條わたりにてこれを見て、あなうら山し、世にあらん思出、かくこそあらまほしけれとぞいはれる、

幕府配流増補

〔百練抄十三條堀河〕元仁元年十月五日、參議左中將實雅卿被配越前國、但不及官符、武士沙汰也、一昨日被解官了、

一年板垣彌二郎が、本郷八郎左衛門小身にてあなづり、慮外をいたし、本郷八郎左衛門に板垣
 きられ候、慮外は大小共によらず、我家の法度に申定候間、其様子さまへあらため、少も依怙
 のなき様に手をまはして、能々聞候へば、本郷八郎左衛門道理なる故に、其まゝ置候、然れ共相
 手板垣なれば、仕付のために彼本郷を座敷籠にいれ置候處に、本郷を御成敗なき事は、板垣を
 ば信玄が殺候て、曲淵それがしをねらひ候事、其かくれなし、其刻流罪にもおこなふべき事
 なれども、義理を存知、如此の段、千萬にすぐれてやさしき覺悟を感じ、様々申なだめ、略下

〔高祖遺書三〕妙法比丘尼御消息

今日本國已ニ大謗法ノ國トナリテ、他國ニ破ラルベシト見エタリ、此ヲ知ナガラ申サズハ、縦ヒ
 現在ハ安穩ナリトモ、後生ニハ無間大城ニ墮ベシ、恐テ後生ヲ申ナラバ、流罪死罪ハ一定也ト思
 定テ、去康元ノ比、故最明寺入道殿○北條ニ申上ス、サレドモ用事ナカリシカバ、念佛者等此由ヲ
 聞テ、上下ノ諸人ヲ語ヒ、打殺ントセシ程ニ、叶ハザリシカバ、長時武藏ノ殿ハ極樂寺殿○北條ノ
 御子ナリシ故ニ、親ノ御心ヲ知テ、理不盡ニ流伊豆國給ス、サレバ極樂寺殿長時ト彼一門皆亡ル
 ラ各御覽アルベシ、其後何ク程モ無シテ召返サレテ後、又如經文彌申ツヨル、又去文永八年九月
 十二日ニ、佐渡國ニ流サル、日蓮御勸氣ノ時申セシガ如ク、ドシ打始ル、其ヲ恐ル、カノ故ニ又召
 返サレテ候、○中

弘安元年戊寅九月六日

日蓮在御判

〔本化別頭佛祖統紀十〕勅賜四海唱導師華洛妙顯寺開山口俊尊者世家

永仁五年丁酉四月二十八日、立城東門向于朝日、高聲唱南無妙法蓮華經、迄夕不止、○中又都下し
 道各立石廟、大書首題、以供逆緣、信者亦多矣、其後諸宗之徒屢訴朝焉、德治二年丁未之夏五月二
 日、詔亞相宣房、逐師、師即答宣旨、其理甚盡焉、識者以爲爾因、玆延慶二年己酉、得赦而還矣、三年庚戌

俊經朝臣ハ於秋野道場出家云々是等皆狐仕之輩也

〔看聞日記〕永享六年六月十七日庭田歸參藤宰相事裏松被討事公方○足利御沙汰之由申依其忽被罪科赤松大河内ニ被仰於四塚可處死刑之由被仰付然而餘不便之由大河内申宥被遠流大河内代官安富ニ被仰油○或黃島○或黃島○或へ被流召捕事も大河内宿所へ喚て召捕非指重科公方御事依荒言申如此被處重科前世宿業無力事歟

〔東下野守益之墳記〕先公諱益之京人姓平其先千葉之族○中永享十二年庚申公年六十五爲讒者所劾相公○足利不辨問其誣遂黜於周防州

大前行刑

〔大内家壁書〕寄事於左右猥殺害人之間御定法之事

飯田大炊助貞家郎從石川助五郎爲長門國三隅庄平氏左衛門三郎男去十七日夜被殺害之事右意趣者依助五郎密懷左衛門三郎妻才松母也云々猥殺害人之條其科難通者乎所詮當家分國中土民等事或案内を領主にへ或於庭中子細を申は可加下知也殊更家中等事申旨あらば其實否にまかせ可成敗之處やもすれば宿意をさんする間還而失其身條且は忠孝をおもはざるにあらざる也且は傾城として身を損するたぐひ嗚呼のものにあらざる也自今已後は此下知をまもり敢て定法を迷失する事なかれ若違犯之輩あらばたとひ雖爲異類の身雖爲重代相傳之忠臣永子孫をたやし罪科に處すべき也仍此趣諸人に告知せしめんために左衛門三郎男并才松母事におゐては貞永式目の旨にまかせ流刑に一定せしめ訖者早件之兩人を長門國見島に可送遣之狀如件

寛正三年八月晦日

内藤下野守殿盛世也

龜山殿御判

〔甲陽軍鑑十七〕曲淵少左衛門公事負難言仕義櫻井殿訴訟之事

三ヶ所、公田六十餘町、一族百四十餘人、舊領迄被收公^略。○中承久ヨリ奥州平泉ト云所ニ流サレ
轉テ出家シテ觀光ト云シガ、貞應二年癸未五月十九日逝去畢、

〔吾妻鏡二十六〕貞應三年^{元仁}閏七月八日於二品^{源賴朝}御前世上事、及御沙汰相州^{北條}被

參又前大膳大夫入道覺阿^{大江}扶老病應召關左近將監實忠、注記錄云云、光宗等令宰相中將實

雅卿、欲立關東將軍、其奸謀已顯露訖、但以卿相以上、無左右巨處罪科、其身於京都可伺奏罪名事、至

奥州後室^{北條}義時、平光宗等者可爲流刑、其外事縱雖有與同之疑、不能罪科、由云云、

〔吾妻鏡四十八〕正嘉二年九月二日戊申、平内左衛門尉牧左衛門入道等流刑就中俊職爲公人、與此

巨惡之條、殊背物義之間、被配流碓^黃島云云、治承比者祖父康賴流此島、正嘉今又孫子俊職配同所
定是可謂一業所感歎、

〔沙石集六〕爲母有忠孝入事

一鎌倉ノ故相州禪門^{北條}時頼ノ中ニ祇候ノ女房有ケリ、腹アシクタテ、シカリケルガ、或時成

長ノ子息ノ同ジケツカウマツリケルヲ、イサ、カノ事ニヨリテ腹ヲ立テ打タントシケルホド

ニ、物ニケツマヅキテイタクタフレテ、イヨノハラヲスエカチテ禪門ニ子息ソレガシ、ワラハ

ヲ打テ侍ト訴申ケレバ、不思議ノ事也トテ、彼ノ俗ヲ召テ、實ニ母ヲ打タルニヤ、母シカムト申

也ト問ル、實ニ打テ侍ト申禪門返々奇恠ナリ、不當也トシカリテ、所領ヲ召シ流罪ニ定ニケリ、^略

〔保曆間記下〕粵ニ元德二年秋ノ比、高資儒ノアマリニ、高時ガ命ニ不隨乍亡氣奇怪ニ思ヒケルガ、

長崎三郎左衛門尉高頼以下ノ者共ニ云付テ、高資ヲ討ントシケルホドニ、事顯テ高時ガ身モ危

ケレバ、我ハ不知ト申ケレバ、高頼ガ不思議ノ企ナリトテ、奥州ヘ流罪ス、餘黨ハ國々ヘ遣レケリ、

〔康富記〕應永廿七年十月九日甲辰、後聞囚人高天昨日被流讃岐國、後經朝臣同國被流之云々、但先

〔吾妻鏡^{十四}〕建久五年六月廿五日甲寅獄囚數輩自京都被召下、其身可流遣奥州之由、被仰左近將監家景眼代之、是強盜之類云云、

〔愚管抄^六〕其頃^{十年}建久不可思議の風聞有き、能保入道高能卿などが、跡のためにむげにあしかりければ、その郎等どもに基清政經義成など云、三人の左衛門尉ありけり、頼家が世に成て梶原が太郎左衛門尉にのぼりたりけるに、此源大將が事などをいかに云たりけるにか、それを又かく是等が申候也と告たりける程に、ひしと院の御所に参り籠りて、只今まかり出では殺され候なんすとて、なめならぬ事出きて、頼家が、又廣元は方人にて有けるして、やう／＼に云て、この三人を三左衛門とぞ人は申し、是等を院の御前わたして、三人の武士給りて流罪してけり、さて頼朝が拜賀のともまたりし公經、保家おひこめられにけり、能保ことにいとをしくして、左馬頭になしたりし高保と云し者など流されにけり、

〔吾妻鏡^{十七}〕建仁三年九月三日戊辰、被搜求能員^金。比餘黨等或流刑或死罪多以被執、斷妻妾并二

歳男子等者、依有好召預和田左衛門尉義盛配安房國、

〔吾輩鏡^{十八}〕建仁三年十一月七日辛未、入道左金吾^源近習之輩、中野五郎以下、可被處、遠流之由、

有其定云云、

〔吾妻鏡^{二十}〕建暦二年六月八日壬午、其夜鬪亂者、宿直之間起於枕相論、刃傷二人者、伊達四郎、获生右馬允等也、死者兩方郎從也、今日各配流、伊達佐渡國、获生日向國云云、御所中狼藉殊、依有其咎、及急速沙汰云云、

〔仁和寺日次記〕承久元年八月十六日己卯、前左兵衛尉紀宗光配流對馬島。^{依照野山、訴也、三山神奥、兼治之由、兼御參上之間、}

所被急行也、

〔豫章記〕承久兵亂事、弑君之儀ナレバ、不義ハ不及言者歟、通信モ君ノ御運被引、當國他國領所五十

罪ニ可行山ヲ公家へ奏聞シ、武家ニ觸レ訴フ、此門主ト申モ、正キ仙院（光嚴、亮性ノ連枝ニテ御坐有レバ、道譽ガ翔無念ノ事ニ憤リ思召テ、アハレ斷罪、流刑ニモ行セバヤト思召ケレ共、公家ノ御計トシテハ、難叶時節ナレバ、無力武家へ被仰處ニ、將軍（足利モ、左兵衛督（足利モ、飽マデ道譽ヲ被量負ケル間、山門ハ理訴モ疲テ、歎狀徒ニ積リ、道譽ハ法禁ヲ輕メ奢侈癩恣ニス、依之、吸儀ノ若輩、大宮、八王子ノ神興ヲ中堂へ上奉テ、鳳闕へ入レ奉ント、會議ス、則諸院諸堂ノ講筵ヲ打停メ、御願ヲ停廢シ、末寺末社ノ門戸ヲ閉テ、祭禮ヲ打止、山門ノ安否、天下ノ大事、此時ニアリトゾ見エタリケル、武家モサスガ山門ノ吸訴難默止覺エケレバ、道譽ガ事死罪一等ヲ減ジテ、遠流ニ可被處歟ト奏聞シケレバ、則院宣ヲ成レ、山門ヲ宥ラル前々ナラバ衆徒ノ吸訴ハ是ニハ惣テ休ルマジカリシカ共、時節ニコソヨレ、五刑ノ其一ヲ以テ、山門ニ理ヲ付ラル、上ハ、神訴眉目ヲ開クルニ似タリト、宿老是ヲ宥テ、四月十二日（延元三年）ニ三就ノ神興ヲ御歸坐成シ奉テ、同二十五日、道譽秀綱ガ配所ノ事定テ、上總國山邊郡へ流サル、

〔後深心院關自記〕應安六年十一月十三日己卯、今夜流人宣下云々、性準（赤松肥前入道）下野國、範顯（同兵庫關）越後國云々、上卿平中納言親顯卿參陣宣下云々、

〔花營三代記〕應安七年五月廿六日、赤松兵庫助範顯（越後國同遠江入道）性準（上總國）爲流人出京、依

南都訴訟也、六月十二日、大乘院教真禪師出京（爲土佐國配流）、依南都大乘訴訟云々、十一月十日、光濟（三寶院俗名、禪師、宋錄僧正、元王院俗名、原平宰相行知、美濃國元奇、越後入道）配流事落居訖、

〔吾妻鏡十三〕建久四年八月十七日辛亥、參河守範賴朝臣被下向伊豆國狩野介宗茂、宇佐美三郎祐茂等所預守護也、歸參不可有其期、偏如配流、當麻太郎被遣薩摩國、

〔吾妻鏡十三〕建久四年十一月廿三日丙戌、上總國小野田郷住人本權太國康、依刃傷姨母之罪科被召之、可遣伊豆大島之由、北條殿令奉給云云、

忠職直配流土佐按察使資平、中院中納言具房流刑宣旨

〔太平記二十〕佐渡判官入道流刑事

此比殊ニ時ヲ得テ榮耀人ノ目ヲ驚シケル佐々木佐渡判官入道道譽ガ一族若黨共例ノバサラニ風流ヲ盡シテ西郊東山ノ小麿狩シテ歸リケルガ妙法院ノ御前ヲ打過ルトテ跡ニサガリタル下部共ニ南庭ノ紅葉ノ枝ヲ折セケル時節門主○高性親王御簾ノ内ヨリモ暮ナントスル秋ノ氣色ヲ御覽セラレテ霜葉紅於二月花ナリト風詠聞吟シテ興ゼサセ給ケルガ色殊ナル紅葉ノ下枝ヲ不得心ナル下部共ガ引折リケルヲ御覽セラレテ人ヤアルアレ制セヨト仰ラレケル間坊官一人庭ニ立出テ誰ナレバ御所中ノ紅葉ヲバサヤウニ折ゾト制シケレ共敢テ不承引結句御所トハ何ゾカタハライタノ言ヤナンド嘲哂シテ彌尙大ナル枝ヲ引折リケル折節御門往ノ山法師アマタ宿直シテ候ケルガ惡イ奴原ガ狼藉哉トテ持タル紅葉ノ枝ヲ奪取散々ニ打擲シテ門ヨリ外ヘ追出ス道譽聞之何ナル門主ニテモオハセヨ此比道譽ガ内ノ者ニ向テ左様ノ事翔ハ者ハ覺ヌ物ヲト忿テ自ラ三百餘騎ノ勢ヲ率シ妙法院ノ御所ヘ押寄テ則火ヲゾ懸タリケル折節風烈ク吹テ餘煙十方ニ覆ケレバ建仁寺ノ輪藏開山塔并塔頭瑞光庵同時ニ皆焼上ル門主ハ御行法ノ最中ニテ持佛堂ニ御坐有ケルガ御心早ク後ノ小門ヨリ徒跣ニテ光堂ノ中ヘ逃入セ給フ御弟子ノ若宮ハ常ノ御所ニ御坐有ケルガ板敷ノ下ヘ逃入セ給ヒケルヲ道譽ガ子息源三判官走懸テ打擲シ奉ル其外出世坊官兒侍法師共方々ヘ逃散リヌ夜中ノ事ナレバ時ノ聲京白河ニ響キ渡リツゝ兵火四方ニ吹覆在京武士共コハ何事ゾト遽驅テ上下ニ馳セ達フ事ノ由ヲ聞定テ後ニ馳歸リケル人毎ニアナアサマシヤ前代未聞ノ惡行哉山門ノ嗟訴今ニ有ナント云ヌ人コソ無リケレ山門ノ衆徒此事ヲ聞テ古ヨリ今ニ至マデ喧嘩不慮ニ出來ル事多トイヘドモ未門主貫頂ノ御所ヲ燒拂ヒ出世坊官ヲ面縛スル程ノ事ヲ聞ズ早道譽秀綱ヲ給テ死

山次官宗宣之科也

〔吾妻鏡 二十二〕建保四年六月十四日丙申、去比佐々木左衛門尉廣綱使者相具所參上之東寺凶賊已下強盜海賊之親五十餘人事、今日有沙汰、可遣奥州之由被仰下云云、是爲放夷島去四月廿八日給廣綱云云、於一條河原自廷尉之手請取之云云、此東寺賊徒者、同月十八日秀能相具之、自三條坊門東洞院家向大理之正親町西洞院門前（路次自東洞院北行、至一折西折至西洞院南行）、一次禁獄舍見物者如堵、上皇被立御車於大炊御門東洞院覽之云云、

〔皇帝紀抄 八〕（後堀河）寬喜元年六月十九日有流人宣下事、武士左衛門尉三善爲清（流三日）、前左兵衛尉大江貞知（流六）、是四月日吉神人等圖證輩也、

〔吾妻鏡 四十八〕正嘉二年八月十七日癸巳、依伊具殺害之嫌疑、虜取方刑部左衛門入道、所被召預對馬前司氏信也、平內左衛門尉俊職（平判官康賴入道孫）、牧左衛門入道等同意令露顯云云、九月二日戊申、平內左衛門尉牧左衛門入道等流刑、就中俊職爲公人、與此巨惡之條、殊背物義之間、被配流硫黃島云云、治承比者、祖父康賴流此島、正嘉今、又孫子俊職配同所、寔是可謂一業所感歎、

〔新抄〕文永元年二月廿八日癸酉、山門訴訟猶與盛云々、仍訴訟內於越前國者、被付熊野造營事、已被停止之、（元日吉修造被密也）而室町前大納言（實藤原）被配流於社本庄、預所左衛門尉有使者已被禁獄之處、奉行檢非違使章繼有置他所之上者、章繼可被禁獄之由云々、

〔新抄〕文永元年三月十日乙酉、今日流人宣下、（檢非違使中原兼繼、由、雖有御沙汰、大連被申有云々）中宮權大夫隆顯卿參行之、

〔新抄〕文永四年八月十三日丁卯、今日流人（左衛門尉重之被配流安木國、是鴨社供於作路切落、依社家訴申也）、藤大納言爲氏口、宰相時繼卿已下參行之、

〔一代要記 後宇多〕弘安五年十二月十四日、依南都訴訟噉噉、因幡守賴重配流越後國、廿六日、彈正

前內大臣實宗也、任大臣而現存達此愁憂喜同境此謂歟、官符史成弘注遂之、本書爲與家誤

太政官符式部省

應除名造東大寺長官參議正三位行左大弁兼勘解由長官備前權守藤原朝臣公定事

右從二位行權中納言藤原朝臣資實宣奉勅件公定坐事配流佐渡國仍除名如件者省宣承知依宣行之符到奉行

右少辨正五位下藤原朝臣修理東大寺大佛長官正五位下行兼主殿頭左大史但馬權介小槻宿禰

建永元年九月十八日

太政官符刑部省

應除名造東大寺長官參議正三位行左大弁兼勘解由長官備前權守藤原公定事

右從二位行權中納言藤原朝臣資實宣奉勅件公定坐事配流佐渡國仍除名如件者省宣承知依宣行之符到奉行

右少辨

修理

同年同月同日

太政官符左京職

應除名正三位藤原朝臣公定位記事

右從二位行權中納言藤原朝臣資實宣奉勅件公定坐事配流佐渡國宜仰彼職令追位記者職宣承知依宣行之符到奉行

同辨

同史

同年同月同日

〔皇帝紀抄八順德〕建保二年十二月卅日中宮大進藤原兼高被配流土佐國是去比於殿上打藏人勘解

原經 卽依被奏聞翌日及此御沙汰於兩國事者明春可有沙汰之由云云

〔吾妻鏡〕文治六年八月十三日乙未右武衛使自京都參著去月卅日被下流人官符重隆前案渡守

兼信坂垣三郎重家高田四郎等也別當通親參陣右少辨親經朝臣奉行之藤宰相中將於結政請

印云云件輩違勅重疊之間就被仰下其罪名可在聖斷山二品源被中切訖仍及此儀云云

〔吾妻鏡〕建久二年五月八日乙卯佐々木左衛門尉定綱等事依山門訴所被下之去月廿六日口

宣同廿八日院宣案文等到著又同廿九日被定綱等罪名訖略○中院宣云略○中縱不行斬刑於給其

身之條者同死罪仍都以不可裁許凡於件刑法者嵯峨天皇以來停止之後多經年代仍不致裁報之

間奉振神輿卽以歸山違勅之上彌添驚天聽之科滅法之餘更招忘神鑒之咎就中恭敬當社歸依當

寺超過餘社卓躒餘寺雖背佛勸令蔑如王事若仰聞子細乎不停自由遠流之罪不再歸禁固之法滿

徒年者雖非死罪更無勝劣歟仍以遠流比死罪以禁固代斬刑但遠流之條裁報尙不足者雖禁固隨

申請可被行歟

〔都玉記〕建久二年十一月廿二日丁卯今日京中強盜等所被遣前大將源許也於六條河原官人渡

武士云々見在十人也於死罪者停止年來官人下部等有容隱之時雖強盜頗加寬宥赦令時原免如

本又犯之仍遣關東可遣夷島云々永不可歸京是又非死罪將軍奏請云々人以甘心

〔皇帝紀抄後七鳥羽〕建久八年三月之比藏人大夫橋兼仲并妻女依謀計事被配流國々

〔帝王編年記土御門〕正治元年五月廿一日前左馬頭源隆保依謀反事配流土佐國

〔三長記〕建永元年九月十八日丙申遣東大寺長官參議正三位兼行左大弁勘解由長官備前權守藤

原朝臣公定坐事配流于佐渡國入夜上卿藤中納言參仗座藏人頭親國朝臣宣下召右少辨盛經被

仰官符事等如例官符請印宰相不參藏人少納言宗行參行之云々檢非違使中原景職宣下了向其

家卽下向公定卿着淨衣乘車云々問科子細見于昨日記但定說可尋記嚴親前內大臣興家○據公卿代

朝廷行刑

籠ヨリ出シ奉^レ、遙ニ御湯モ召レ候ハヌニ、御行水候ヘト申セバ、早斬ラルベキ時ニ成ケリト思給テ、嗚呼ウタテシキ事カナ、我最後ノ様ヲ見^ン爲^ニ、遙々ト尋下タル少キ者ヲ、一目モ見ズシテ終スル事ヨト計リ宣テ、其後ハ曾テ諸事ニ付テ言ヲモ出給ハズ、^{○中}切手後ヘ同ルトゾ見ヘシ、御首ハ敷皮ノ上ニ落テ、質ハ尙坐セルガ如シ、此程常ニ法談ナンドシ給ヒケル僧來テ、葬禮如形取營ミ、空キ骨ヲ拾テ、阿新ニ奉リケレバ、阿新是ヲ一目見テ、取手モ撓倒伏、今生ノ對面逢ニ叶ズシテ、替レル白骨ヲ見ル事ヨト、泣悲モ理也、

〔源平盛衰記^{四十六}〕尋害平家小兒附闕官恩賞人々事

同日^{○文治元年十月十七日}任源二位^朝申狀大藏卿泰經、右馬權頭經仲、越中守隆經、侍從能成、少内記信

康被解官ケリ、上卿左大臣經宗、職事頭辨光雅朝臣成ケリ、大藏卿父子三人被解官ケル事ハ、義經

以彼卿每事奏聞シケル故トゾ聞エシ、^{○中}同晦日解官并流入被下宣旨ケリ、參議親宗、右大辨光

雅刑部卿賴經、右馬權頭業忠、大夫史隆職、兵庫頭範綱、左衛門尉知康、同尉信盛、同尉信貞、同尉時盛

被解官ケリ、光雅朝臣隆職ハ、官符成下シケル故トゾ聞エシ、泰經卿ハ伊豆賴經朝臣ハ安房ヘ配

流ノ山被宣下ケリ、

〔吾妻鏡^六〕文治二年二月七日乙卯、北條殿^{○時}使者到來關東、去月廿三日前中將時實朝臣被下配

流官符、改周防國可被配流上總國之由云云、

源二位^朝書狀返獻之時、實被配上總國畢、可令得此御意給之狀如件、

正月廿五日

右中辨兼忠

〔吾妻鏡^八〕文治四年八月十七日庚辰、藤原宗長依石清水之訴、去五日被下配流官符上佐云云、

〔吾妻鏡^九〕文治五年十二月廿六日辛亥、奥州降人等被配流事、今日十八日所被宣下也、職事藏人大

輔家實上卿別當^房辨權、右中辨棟範朝臣云云、自是所被進之飛脚、去十七日辰廻入洛、帥中納言^藤

母ニ御暇ヲゾ乞レケル、母御頻ニ諫テ、佐渡トヤランハ、人モ通ヌ怖シキ島トコソ聞レ、日數ヲ經道ナレバ、イカントシテカ下ベキ、其上汝ニサヘ離テハ、一日片時モ命存ベシトモ覺ヘズト、泣悲テ止ケレバヨシヤ伴ヒ行人ナクバ、何ナル淵瀬ニモ身ヲ投テ死ナント申ケル間、母痛ク止バ、又目ノ前ニ憂別モ有スベシト思忖テ、力ナク今マデ只一人付副タル中間ヲ相ソヘラレテ遙々ト佐渡國ヘゾ下ケル、路遠クレドモ乗ベキ馬モナケレバ、バキモ習ヌ草鞋ニ、菅小笠ヲ傾テ、露分ワクル越路、旅思ヤルコソ哀ナレ、都ヲ出テ十日餘ト申ニ、越前敦賀津ニ著ニケリ、是ヨリ、商人船ニ乗テ、程ナク佐渡國ヘゾ著ニケル、人シテ右ト云ベキ便モナケレバ、自本間ガ館ニ到テ、中門前ニゾ立タリケル、境節僧有ケルガ立出テ、此内ヘノ御用ニテ、御立候カ、又何ナル用ニテ候ゾト問ケレバ、阿新殿、是ハ日野中納言一子ニテ候ガ、近來切レサセ給ベシト承テ、其最後様ヲモ見候ハンタメニ、都ヨリ遙々ト尋下テ候ト云モアヘズ、泪ヲハラ／＼ト流ケレバ、此僧心有ケル人也ケレバ、急此山ヲ本間ニ語ニ、本間モ岩木ナラネバサスガ哀ニヤ思ケン、懸テ此僧ヲ以テ、持佛堂ヘイザナヒ入テ、踏皮行經解セ、足洗テ、疎ナラヌ體ニテゾ置タリケル、阿新殿、是ヲウレシト思ニ付テモ、同ハ父卿ヲ疾見奉バヤト云ケレ共、今日明日斬ルベキ人ニ是ヲ見セテハ、中々ヨミ路ノ障トモ成ヌベシ、又關東聞モイカバ有ランズラントテ、父子對面ヲ許サズ、四五町隔タル處ニ置タレバ、父卿ハ是ヲ聞テ、行末モ知ヌ都ニイカバ有ラント、思ヤルヨリモ尙悲、子ハ其方ヲ見遣テ、浪路遙ニ隔タリシ、鄙ズマキヲ想像テ、心苦ク思ツル、泪ハ更ニ數ナラズト、袂ノ乾ヒマモナシ、是コソ中納言ノヲハシマス、籠中ヨトテ見ヤレバ、竹一村茂タル處ニ、堀ホリ廻屏塗テ、行通人モ稀也、情ナノ本間ガ心ヤ、父禁籠セラレ、子ハ未稚シ、纔一所ニ置タリトモ何程怖畏カ有ベキニ、對面ヲダニ許サデ、マダ同世中ナガラ、生ヲ隔タル如ニテ、ナカラシ後苦下、思寢ニ見シ夢ナラデハ、相見シ事モ有ガタシト、互ニ悲ム恩愛ノ、父子ノ道コソ哀ナレ、五月元弘二十九日ノ暮程ニ、資朝卿ヲ

市のごとし或は邪見放逸の事業をあらため或は自力難行の執情をすて、念佛に歸し往生を
ごぐるものおほかり、

〔日蓮聖人註畫讃〕佐渡流刑第十九

爲知行佐渡島武藏前司預故爲其被官等沙汰同

年○文永八

十日出依智趣彼島其夜宿武州來日河

略○中

經十二日著越後州寺泊津同二十二日○中

略○中 彼津乘船○中

風止波恬征帆如飛著眞崎浦被預

于本間重連國人集而嘯眉差指配處者當國新穗鄉澤深草茂野中如洛陽蓮臺野捨死人之處名塚
原塚上有小堂黃葉埋軒青苔纏柱無佛無僧小堂十一月一日移此三昧堂

流人不赴配所

〔吾妻鏡〕

文治二年正月五日甲申前中將時實朝臣爲流人不赴配所剩同道豫州義經源之間已有重

疊之過仍令生虜被召下在美濃藤次安平西御門家爰被問子細之處無分明陳謝承伏之故歟然而

於關東依難被定刑今日可被返進京都之由治定云云亦帥中納言

藤原爲房

爲御使可有參向之由有

其聞非指子細者可令留給歟又去冬註折紙被申條々所詮可在聖斷之旨所被示遣也二月七日

乙卯北條殿使者到來關東去月廿三日前中將時實朝臣被下配流官符改周防國可被配流上總國

之由云云

源二位書狀返獻之時實被配上總國畢可令得此御意給之狀如件

正月廿五日

右中辨兼忠

訪流人

〔太平記〕長崎新左衛門尉意見事附阿新殿事

評定一途ニ定テ先去年ヨリ佐渡國ヘ流サレテヲハスル資朝卿ヲ斬奉ベシト其國守護本間山
城入道ニ被下知此事京都ニ聞ヘケレバ此資朝子息國光中納言其比ハ阿新殿トテ歳十三ニテ
ヲハシケルガ公卿召人ニ成給シヨリ仁和寺邊ニ隠テ居ラレケルガ父誅セラレ給ベキ由ヲ聞
テ今ハ何事ニカ命ヲ惜ベキ父ト共ニ斬レテ冥途旅伴ヲモシ又最後御有様ヲモ見奉ベシトテ

應安五年正月廿二日

太政官符安房國司

流入春野小道

使左衛門府生藤井安友

門部貳人

從貳人
從各壹人

右爲領送流入小道差件等人發遣如件國宜承知依例行之路次之國且宜給食漆具馬參疋符到奉
行

權右少辨藤原朝臣

左大史小槻宿禰

應安五年正月廿二日

太政官符常陸國司

流入原坂遠

使左衛門府生藤井安口

從貳人

右爲領送流入坂遠差件等人發遣如件國宜承知依例行之路次之國且宜給食漆具馬參疋符到奉
行

權右少辨藤原朝臣

左大史小槻宿禰

應安五年正月廿二日

流入到配所

〔法然上人行狀畫圖〕

三十四

三月

○承元
元年

十六日に花洛をいで、夷境におもむき給に、○下

〔法然上人行狀畫圖〕

三十五

三月

○承元
元年

廿六日讃岐國鹽飽の地頭駿河權守高階保遠入道西忍が

館につき給にけり、○中

讃岐國子松庄におちつき給にけり、當庄の内生福寺といふ寺に住して、

無常のことほりをさき念佛の行をす、め給ければ當國近國の男女貴賤化導にしたがふもの

〔國太曆〕康永四年

○貞和元年

六月廿五日、抑送官符即下知眼代盛秀法師了、此事近來無異沙汰、依例

宣下云々、近來被仰武家爲彼沙汰、歟云々、

太政官符安藝國司

流人儀部濱方

使左衛門少志藤井安長

門部貳人

從參人

從壹人

右爲領送流人濱方差件等人、發遣如件國宜、承知依例行之路次之國亦宜、給食漆具、馬參足符到奉行、

修理東大寺大佛長官正五位上行左大史兼備前介小槻宿禰

列

修理左宮城使正四位下左中辨兼春宮亮藤原朝臣

列

康永四年六月廿四日

〔後愚昧記〕應安五年正月廿二日、今夜流人宣下也、上卿土御門中納言定具、流人宣下次第事、藤中納言忠光尋送之間借遣了、彼上卿黃門忠光卿親類也、仍便宜事加扶持云々、○中略

太政官符伊豆國司

流人路峯常

使左衛門府生安部時滿

從貳人

門部貳人

從各貳人

右爲領送流人峯常差件等人、發遣如件國宜、承知依例行之路次之國且宜、給食漆具、馬參足符到奉行、

權右少辨藤原朝臣

左大史小槻宿禰



流人發遣圖

法然上人行
狀畫圖所載



右流人元彦を領送のために、くだんらの人をさして發遣くだんのごとし國よろしく承知して、例によりてこれををこなへ路次の國またよろしく食漆具馬參正をたまふべし符到奉行、

建永二年二月廿八日

右大史中原朝臣 判

左少辨藤原朝臣

追捕の檢非違使は宗府生久經、領送使は左衛門の府生武次なり、略○中 官人小松谷の御房にむかひて、いそぎ配所へうつり給べきよしを責申ければ、つゐにみやこをいでたまふ、月輪殿兼藤原御餘波をおしみて、法性寺の小御堂に、一夜とゞめたてまつられけり、

〔法然上人行狀畫圖三十四〕三月○承元年十六日に、花洛をいで、夷境におもむき給に、信濃國の御

家人、角張の成阿彌陀佛力者の棟梁として、最後の御ともなりとて御輿をかく、おなじさまにゑたがひたてまつる僧六十餘人なり、をよそ上人の一期の威儀は、馬車輿などのにり給はず、金剛草履にて歩行し給き、まかれども老邁のうへ長途たやすからざるによりて乘輿ありけるにこそ、御なごりをおしみ前後左右にはしりゑたがふ人幾千萬といふ事をゑらす、略○中 鳥羽のみなみの門より、川船にのりてくだりたまふ、

〔太平記 二十一〕佐渡判官入道流刑事

武家モサスガ山門ノ嗽訴難默止覺ヘケレバ、道譽ガ事、死罪一等ヲ減ジテ遠流ニ可被處歟ト奏聞シケレバ、則院宣ヲ成レ、山門ヲ有ラル、略○中 同年延元三年四月二十五日、道譽、秀綱ガ配所ノ事定テ、上總國山邊郡ヘ流サル、道譽近江ノ國分寺迄若黨三百餘騎打送ノ爲ニトテ、前後ニ相順フ、其輩悉猿皮ヲウツボニカケ猿皮ノ腰當ヲシテ手毎ニ鶯籠ヲ持セ、道々ニ酒肴ヲ設ケ、宿々ニ傾城ヲ弄ブ、事ノ體尋常ノ流人ニハ替リ、美々敷ゾ見ヘタリケル、是モ只公家ノ成敗ヲ輕忽シ、山門ノ鬱陶ヲ嘲哂シタル翔也、フナギ

云々、今日召集大夫史廣房并左衛門府領[○]。送使奉行史等問子細、件流罪去七月晦日宣下、而領送使等、于今未出京云々、大略奉行職事、能不仰之、又官懈怠、歟、是又近代之流例之旨、各申狀進院了、
〔三長記〕建永元年九月十八日丙申、造東大寺長官參議正三位兼行左大弁勘解由長官備前權守藤原朝臣公定坐事配流于佐渡國^{○中}。

太政官符佐渡國司

流人藤原公定

從參人

使左衛門少志清原遠安

門部貳人

從各一人

右爲領送流人藤原公定、差件等人發遣如件國宣、承知依例行之、路次之間宜給食漆具馬三疋符到奉行、

同弁

同史

建永元年九月十八日

〔法然上人行狀畫圖三十三〕罪惡生死のたぐひ愚癡暗鈍のさもがらまかしながら上人の化導によりてひとへに彌陀の本願をたのむところに天魔やきをひけん安樂死刑にをよびてのちも逆麟なをやまずしてかかねて弟子のどかを師匠にをよばされ度縁をめし俗名をくだされて、遠流の科にさだめらる藤井の元彦云々、かの宣下狀云、

太政官符 土佐國司

流人藤井の元彦

使左衛門の府生清原武次^{從二人}

門部二人

從各一人

〔建武以來追加〕同○諸守護人非法條々

一大犯三箇條付田獵藉使節遵行外相續所務以下成地頭御家人煩事

號公役對捍稱凶徒與同無左右令管領同所領與耻辱及牢籠事得論人當知行人語下知遵行難澁事或分取訴論人所領或押領國中關所構表裏沙汰事

一成緣者之契約致無理方人事

一號請所假名字於他人令知行本所寺社領事

一稱國司領家年貢謾納號佛神用途催促放入使者於所々追捕民屋事

一號兵糧米○米一本作并字借用責取土民財產事

一誘取他人借書令呵責負人事

一以自身所課令分配一國之地頭御家人事

一構新關號津料取山手河手成旅人煩事

以前條々非法張行之由近年普風聞雖爲一事有違犯之儀者忽可改易守護職若正員不存知爲代官結構之條蹤跡分明者可召上彼所領無所帶者可處遠流之刑矣

〔侍所沙汰篇追加〕一關所證人事品祿四九五

右關所出來之時就證人注進被恩捕者古今之例也然本主等無咎之旨依欺申糺明之處無其咎者於知行分者被返付本主至證人者被沒收所帶可充給他人無所帶者可被處遠流本主又自科乍令露顯或致庭中或屬權家及訴訟者同可被處流刑矣

流人發遣

〔玉海〕建久元年九月廿七日戊寅自院爲定長奉行被仰下云流人三人兼信、重家、重未赴配所二位卿○源賴朝

上洛以前儘可追下之由可致沙汰者仰官并使廳了使廳申云未承被仰遠國犯人使廳不致沙汰云云廿八日己卯已刻重院宣到來流人事殊可致沙汰件流人赴配所之後可參洛之由賴朝卿令申

右被打擲之輩爲雪其耻定露害心歟毆人之科甚以不輕仍於侍者可被沒收所領○領一作帶無所領者可被處流罪至于郎從以下者可令召禁其身也○中略

一構虛言致讒訴事○中略

爲望所領企讒訴者以讒者之所領可宛給他人無所帶者可處遠流○中略

一密懷他人妻罪科事

右不論強姦和姦懷抱人妻之輩被召所領半分可被罷出仕無所帶者可處遠流也女所領同可被召之無所領者又可被配流之也○中略

一稱當知行掠給他人所領貪取所出物事

右構無實掠領事式條所推難脫罪科仍於押領物者早可令糺返至所領者可被沒收也無所領者可

被處遠流

〔新編追加侍所〕一博奔輩事○中略

四一半雙六目勝以下種々品態不論上下一向可被禁制於違犯之輩者任法有其沙汰可被召所職所帶至下賤之族者可被處遠流也以此旨可被相觸之狀依仰執達如件

寬元二年十月十二日○吾妻鏡
保元三年三月十三日

武藏守判○又見侍所
沙汰篇追加

〔建武以來追加〕諸國狼藉條々貞和二十二年
十三沙汰

一故戰防戰事

縱雖有確論之宿意經上訴宜仰裁斷之處任邪意及圖殺之條難通其科所詮於故戰者雖懷本訴之道理不可遁濫吹之罪責何況於無理之仁哉自今以後堅可令停止之若尙違犯者準本條悉召上所領可處遠流焉次與力人事可召上所領無所帶者可處遠流也子細同前至防戰者爲非領主者可爲故戰同罪若爲理運之仁者隨事體可有其沙汰矣

流鎮

○按ズルニ、八丈島ハ伊豆ノ屬島硫黃島ハ薩摩ノ屬島ナリ、

〔庭訓往來〕管領執事奉行人檢斷所司代賦訴狀於右筆之時、以小舍人或下部等召出犯人於侍所記
錄申詞、依言色體嫌疑、糺明犯否之時、所犯已無所遁者、則召籠之、（中）可流刑者被注流帳、

〔武政軌範侍所沙汰篇〕一赦沙汰事

至大赦者召返流刑人、於免囚獄者仍每度執行內談、召出流帳、獄記勸辨其輪重、被赦免之、

流罪制度

〔御成敗式目追加〕一犯人斷罪事

右爲夜討強盜之張本、所犯無遁方者、可被行斬罪也、是則爲相鎮傍輩向後也、其外至枝葉之輩者、可
召進關東、可被流遣夷島也、以前條々存此旨、可令致沙汰之狀、依仰執達如件、

文曆二年三月廿三日

武藏守 判

相模守 判

駿河守 殿

掃部助 殿○又見吾妻鏡侍所注流篇追加

〔御成敗式目追加〕一殺害刃傷打擲事○新篇追加目錄云、乾元二六十二

右被殺式目之上者不及子細、至凡下之輩者、殺害者被處斬罪、刃傷者被遣伊豆大島、

〔新編追加侍所〕一博奔事○目錄云、乾元二

於侍者可有斟酌、歟至凡下者一二箇度者被切指及三箇度者、可被遣伊豆大島也、

〔御成敗式目〕一惡口咎事

右圖殺之基起自惡口、其重者被處流罪、其輕者可被召籠也、問注之時、吐惡口、則可被付論所於敵人、
又論所事、無其理者可被沒收他所領、若無所帶者可處流罪也、

一敵人咎事

無所帶者處流罪

〔國太曆〕貞和二年八月廿七日、今日進入奏事目六之便宜、有勅問事、請文等續之。略註及此刑之上者、
怒可爲近流候哉、且如此事准據如何候、明日流入宣下配國事、令伺定給、怒可被仰下候、兼爲成儲官
符候也、國事先規不同候、遠流中流、近流可依事候歟、必不被守先規者、以此分可有御伺候、追立官人
事、任例下知了、然而無日數候散狀之後申沙汰可令達之候歟、先怒別可被仰使廳候哉、恐惶謹言、

八月廿七日

匡遠

三流行程 刑部式文

常陸去京一千五百里 安房去京一千九十里 佐渡去京一千三百二十五里 土左去京一千二百二十五里 伊豆去京七百七十里 隱岐去京九百

右六ヶ國擬遠流

伊豫去京五百六十里 信乃取方六十里 右二ヶ國擬中流

越前去京三百十五里 安藝去京四百九十里 右二ヶ國擬近流

被仰下之旨畏奉了、章有康賢配國事、匡遠狀加一見返上候、近流之條勿論候乎、罪科不分、被優神
訴之時儀好專沙汰足准據候歟之旨存思給候、以此趣可被計披露給候也、公賢誠恐頓首謹言、

八月廿七日

公賢上

大宮宰相殿

〔新編追加侍所〕一遣遺源作遺、今拾芥抄改 流人國々

伊豆 安房 常陸 佐渡 隱岐 土佐以上遠流 信濃 伊與以上中流 越前 安藝以上近流

延喜式文

此外近代遣國々 上總 下總 陸奥 越後 出雲 周防 阿波

〔清正記〕はいれくといふころハ、日本にては八丈島ハチ丈島、硫黄島イオウジマなどの様なる、流罪人の居
所也、朝鮮國の内なり、

古事類苑

法律部十九

中編

流罪

流罪ハ鑛倉幕府ノ時ニモ、朝旨ヲ奉ジテ行ヒシモノナレド、其間ニハ朝廷ニ關セズ、自由ニ之ヲ用キ、指紳ヲサヘ流シ、事アリ、足利幕府ニ至リテモ、太政官符ヲ以テ處置セシカド、其季世ニハ、天下ハ、雷ニ四分五裂ノミナラズ、群雄所在ニ割據シケレバ、遠中、近ノ三流モ名アリテ地ナク大名ニテモ此刑名ヲ立ツルニ至ル、而シテ流人ヲ其地ノ守護等ノ家ニ付シテ管守セシムル事アリ、

當時大ニ王朝ノ制ニ異ナルモノハ、所領ノ地アルモノハ之ヲ沒收スルニ、領地ナキモノハ之ヲ此刑ニ處シテ以テ沒收ニ代フル是ナリ、

配流地

〔拾芥抄下本〕
敎令遣流人國々

伊豆 安房 常陸 佐渡 隱岐 土佐已上 信濃 伊豫已上 越前 安藝已上 近流 伴國々載延

喜刑部式神龜元年六月三日定云々

式外近國遣國々

上總 下總 陸奥 越後 出雲 周防 阿波

○按ズルニ、中世以降上總下總等ノ七國ヲ以テ式制外ニ數フレドモ、其實ハ此七國ノミニ止マラザルナリ、而シテ諸國ニ配置セシコトハ、次下ニ列舉スル實例ヲ看テ知ルベシ、

雜載

八〇〇

追放

名稱

八〇一

朝廷行刑

同

追放御敕書

八〇二

營中追放

同

幕府所在地追放

同

幕府管國追放

八〇三

所住地追放

同

追放無所帶者

八〇六

幕府追放搢紳

同

大名城下追放

同

大名管國追放

八〇七

雜載

八〇八

古事類苑

法律部十九

中編

流罪

配流地

七六九

流帳

七七一

流罪制度

無所帶者處流罪

同

流人發遣

七七三

流人到配所
流人不赴配所

七七九

訪流人

七八〇

朝廷行刑

七八二

幕府行刑

七八七

大名行刑

七九〇

屢遭流

七九一

幕府配流
指紳

七九二

僧徒處刑

七九四

婦人處刑

七九八

殺流人

七九九

○按ズルニ、是ハ髡ノ類ニテ、織田信雄ナドノ事モ亦是ニ近シ、今姑ク此ニ附載ス、

〔式目抄〕
ヤウニ行

〔吉野、拾遺上〕
いかなりけ
て後、ひそか
いひこしけ
りけるをも
なんには、ま
てなごいひ
ければ御ふ
て、どもには
るさふらひ
つらがよし
ちまのぶを
にまうでさ
きて、おして
かさまあや
へまいりて
事を申ける
北のかたへ

其人是非可被行之。

〔吾妻鏡〕文治六年^〇建久^〇六月廿三日丙午、去年令入奥州給之時、稱姬宮女姓出來、令尋問給之處

^年

答申云、母者九條殿官女也、吾彈箏之間、且就母之好、爲聞食其藝、暫在彼院中、後日有不慮之次、下向

奥州云云、雖可疑之、肥後守資隆入道母爲宮條勿論之由、令申之上、奥州住人一同存其儀、將又秀衡

賞翫之餘、雖欲令出家、不免云云、於爲一向狂人者、秀衡爭令賞哉之由、一品^〇源^〇賴^〇朝^〇有御猶豫、仍爲王

胤者、令居住田舍之條、稱可有其恐被送進京都、付廷尉公朝被申、此子細訖、而無實之旨、被下院宣、今

日所到來也、則被奉御請文云云、

院宣云

啓如件

稱宮人事無實也、全非王胤、如聞食者不善人歟、在京不可、然早可返遣之由、內々御氣色候也、仍上

啓如件

六月九日

參議

稱宮修枉惑事、子細謹以承候畢、本自難信受候、然而爲承實否、令召進候之處、猶以返預候事、可存

其旨候、任御定召下關東、雖可誠候、今年不可犯殺罪候、然者いかにも御計候天、面顔に疵をも被

付て、可被追放候歟、不然者、經高居住阿波國候者に候、件男に可預給候歟、關東へ可召下之由の

御定を申返候、依其恐候、如此言上子細候也、以此旨可令申上給候、賴朝恐惶謹言、

六月廿三日

賴朝

〇按ズルニ、顔面ニ疵ヲ付クトハ、何ナル方法ヲ以テスルヲ知ラズ、故ニ姑ク此ニ附載ス、

〔御成敗式目〕一密懷他人妻罪科事

於道路辻捕女事於御家人者、百箇日之間可被止出仕、至郎從以下者、任右大將家^〇賴^〇御時之例、可

剝除片方之鬢髮也、但於法師罪科者、當其時可被斟酌、

〔御成敗式目〕一謀害罪科事附以論人所帶證文稱謀害事

右於侍者可被沒收所領若無所帶者可被處違流也至凡下輩者可被接火印於其面也執筆者又與同罪

〔式目抄〕火印ノ事相當ス五刑ノ中ノ墨辟墨辟トハ額ヲ刺デ入墨ヲシテ人ニ知ラスルヲ云、火印ノサシヤウ或ハ字ノ焼付ケト云説アリ假令バ盜ヲセバ其者ノ額ニ盜ト云フ字ヲヤキ付ルト也此義不足信用只墨辟ノ心ナラバ只ヤキ金ヲアツルマデ也平家十二卷主上并ニ三種神器都へ還シ入ラルベキ由西國へ院宣ヲ被下ケルニ院宣ノ御使花形ガツラニ浪形ト云ヤイジルシヲセラレケル異朝ニモ燒金ヲアツル事アリ北齊ノ宋欽道ガ婢ノ名ヲ輕霄ト云本ノ妻コレヲ妬デ宋ノ字ヲ面ニ燒金ヲアテタリ如此文字ヲ燒付ル事モアレドモ此式目ノ火印ハタゞ燒金ニテ文字ニハアラザルナリ

〔御成敗式目追加〕一竊盜事

或配流或禁獄爲御家人之煩條同前仍於初度者可捺火印於其身面及三箇度者可被誅歟至侍者雖爲一箇度可被處違流歟

〔新編追加侍所〕一侍所政所勾引人人賣事

件族任本條可處罪科也而鎌倉中并諸國市廛間多有專此業之輩云々至諸國者仰守護地頭等儘可斷罪於鎌倉中者可被捺火印於其面

〔侍所沙汰篇追加〕一可令禁制人賣事

右稱人商專其業之輩多以在之云々可停止違犯之輩者可捺火印於其面矣

〔庭訓往來〕管領執事奉行人檢斷所司代賦訴狀於右筆之時以小舍人或下部等召出犯人於侍所記錄申詞依言色體嫌疑札明犯否之時所犯已無所遁者則召簡之○中此外火印追放以下隨事輕重

あまり赤口關左衛門寺川四郎右衛門など、官途受領まで仕る侍がいさかひなどあるは、他國の批判もいかゞ、きはめては信玄が家の瑕になる事なりとて、廿人衆小人衆、仰つけられ、兩人ながらめし取耳鼻をかきて諸侍にみせ、かり坂をこさせよと有事にて坂際にてふたりながら頸をきるゝ也、其刻より五十七ヶ條の法度書相定也、

〔源平盛衰記 三十八〕重國花方帶院宣西國下向同上洛奉返狀事

同年二月元暦元年十五日ニ、重衡ノ使、平左衛門尉重國院宣ヲ帶シテ西國へ下向、院白河ヨリハ御壺

召次ニ花方ト云者ヲ被副下ケリ中御壺ノ召次花方ハ、平左衛門尉重國ニ具シテ、院宣ノ副

使ニ西國へ下、タリケレバ、平大納言時忠卿、花方ヲ捕テ、以金燒類ニ波方トゾ燒付タル、其後醫

ヲ切鼻ヲ鑢テ、是ハ己ヲスルニハ非ズトテ追放ケリ、無益ノ院宣御使勤テ、身ノカタワヲゾ付

ニケル、サテコソ花方ヲバ異名ニハ波方トモ呼ケレ、

〔織田信長譜〕天正十年二月、信忠進攻高遠城、先遣使僧持書入城、以告曰、勝頼已去、諏訪雖赴甲府、

將士皆有貳心、則授首在近、日耳汝等爲誰守城、可速降也、城主仁科五郎信盛、與軍將小山田備中

議之、備中曰、是欺我之書也、何爲憤大島飯田之柔弱乎、可一戰而死耳、即捕使僧切其耳鼻、以逐之、

〔美濃國守護傳記〕道三○嘉摩廿日○弘治二年四月ノ暮、方城田寺ヲ指テ落行所ヲ小牧源太道家、長井

忠左衛門道勝、林主水道政、迫カケ攻伏ス、道三ガ首ヲ道政討取後、ノ證據トテ、忠左衛門道三ガ

首ノ鼻ヲソイデケリ、小牧源太土中ニ葬テ、齋藤塚ト云ハ是ナリ、○父見船田亂記、太田牛一續記

〔信長記 七〕長島凶徒被攻于事

八月○天正二年二日夜、雨風甚シウ降ケルニ、大島居ニ籠タル者ドモ、潜ニ忍出ントスル所ヲ追付、

男女二千人計○二千人数、織田信長記作二千計、切捨其耳鼻ヲソイデ、城中へ船一艘ニ入テ、送ラレケル、

○按ズルニ、此四條ハ、罪人ヲ處刑セシモノニアラザレドモ、姑ク錄シテ參考ニ供ス、

奪ヒ私心ヲ快スルノ境ヲ出テズ。豈天罰ヲ蒙ラザラン。然レバ各モ赤心片々トシテ僉議ヲ加ヘ給フベシ。凡生アル者大患死ヲ以テ之ヲ限リトス。今度佐渡庄盜人ノ事此心ヲ以テ評定アルベシ。然シテ死セシ者ハ力及ザル所ナリ。若殺サズシテ事スマバ。人上ノ大幸ナラン。某ハ生得短才ニシテ。治政ノ仕才^{○仕才}。無之ヲ以テ。國郡ノ事。大小トナク。耆老ノ面々ニ任セマイラセ候。委細ハ承ニオヨビ候ハズト仰アリケルヲ以テ。直江山城守。北城伊豆守。河田豊前守相議シテ。晝夜肺肝ヲ傾ケ。盜賊四人ノ内。三人ハ手指三ッ^{○三ッ}。充切テ。境ヲ越シメ。一人切殺ヲ加ヘテコレヲ梟首ス。

〔多聞院日記〕天正十六年十二月十九日。先日伊賀ヨリ來召人。於般若寺坂。竹ノ鋸ニテ左右手ヒキ切了。淺猿敷事也。

〔新撰字鏡〕^{魚反、割} 割^{波奈加久}。

〔類聚名義抄〕^{魚反、割} 割^{波奈加久}。

ハナハシラエル。割ハナキル。

〔同刃〕^{俗正、魚既反、ハナキラル} 割^{俗正、魚既反、ハナキラル}。

〔甲陽軍鑑〕^{品十七} 赤口關左衛門寺川四郎右衛門口論之事

一天文十六年丁未信玄公廿歳にて、五十七ヶ條法度書立なざる、其由來は關東牢人に赤口關左衛門上方牢人寺川四郎右衛門と申仁、兩人の侍口からかひいたし、既に彼雜言に付て、寺川四郎右衛門座を起て赤口關左衛門がむなづくしをとりて、後のかべにをしつくる、赤口關左衛門をしたふされて、おきあがるといへ共、寺川四郎右衛門其比四十餘の盛、赤口關は五十六七の者なれば、をしつけられておくる事ならず、仰に成て居ながら、赤口關左衛門が兩方の足を以て、寺川四郎右衛門が、びばらをあらけなく踏ければ、寺川心に覺ず手をはなして、三間ばかり跡へしさりて、色をわろくして機を取失子細は、いきぶくろをふまれての事也。^{○抑男が四十五十に}

一百文内口さしの分ふるせに十文、洪武二文、宣德二文、永樂六文以上廿文なり、

一地せにの内よき永樂^{五文}、大觀、嘉定以上うらに文字のあるせに、よき錢の内たるべし、

一少分づゝもこれをおふて用べし、

一日本せに、われせにをのぞく、但少かけたるはよき錢の内たるべし、

一口さしの程、うり物をかうちきになす事あらば、罪科同左、

右條々堅被定置訖、若有違犯之輩者、男は頸をきり、女はゆびをきるべき也、恣^あゑり、又ゑらする輩あらば、町人として注進せしむべし、見かくさば同罪たるべし、私けんだん同爲町人可致注進之由所被仰下也、仍下知如件、

永正九年八月三十日

對馬守平朝臣

散位神宿禰

近江守三善朝臣

美濃守藤原朝臣

〔松隣夜話^下〕或時謙信公、諸士ヲ率テ、鳥ノ巢ト云瀑流ニ臨給ヒ、魚ヲ狩セテ御見物坐マス、其折シモ河ノ洲崎ニ當テ、人多ク群集シテ見ユル、謙信公人ヲ召テ、何事ニヤト御尋アリ、梅津左京承テ、是ハ佐渡ノ星熊ニテ酒ヲ盜タル者以上四人、搦捕政所ヨリ今日殺害申付候ト申上ル、謙信公聞召サレ、城州^{○直江}山^{○城守}ノ政務誠ニ當レリ、併今日ハ御心ニ在事候間、延引申サルベキニテ候、去ナガラ期ヲ引テハ叶ザル者ナラバ力ナキ次第ナリ、此旨梅津政所ニ至テ申ベシト仰ラレ、梅津先ヅ太刀取ヲ制シテ早打ヲ以テ城州ニ謁シ、上意ノ旨ヲ申ケル間、城州ソレハ何ニテモ苦カラズ候トテ、其日ノ生害ヲ止テケリ、斯テ謙信公御歸館ノ夜、諸老ヲ會シ仰ラレテ曰、吾國ヲ領セシヨリ以來、人ヲ殺ス事凡九十餘人、理ニ當リ政ニ違ザル者、尤是多カルベカラズ、然則頗ル他ノ一命ヲ

肉刑

宮刑

肉刑ニハ、宮刑アリ、手若クハ指ヲ截ルアリ、劓アリ、劓アリ、宮刑ハ、當時ノ書ニ被劓、羅トアリ、近世ノ俗ニ羅切ト云フモノニテ、蓋シ男勢ヲ割去スルヲ云フナラン、手若クハ指ヲ截ルニ就キテハ、再犯三犯ノ者ニ數度之ヲ施シ、事アリ、劓ハ鼻ヲ鍛グナリ、劓ハ耳ヲ鍛グナリ、又半鬢ヲ剃去スルアリ、火印アリ、肉刑ノ類ナリ、半鬢ヲ剃去スルコトハ、御成敗式目ニ見エタレド、實際之ヲ用キシ事ノ有無ハ未ダ詳ナラズ、

〔皇帝紀抄^七〕^{土御門}承元元年二月十八日源空上人^{號法}配流土佐國依專修念佛事也、近日伴門弟等充滿世間、寄事於念佛、密通貴賤并人妻可然之人々女不拘制法、日新之間、擄取上人等、或被^切羅、或被禁其身、女人等又有沙汰、且專修念佛子細、諸宗殊鬱申之故也、

斷手者指

〔新編追加^{侍所}〕一博奔事

於侍者可^有斟酌^敷至凡下者、一二箇度者被^切指、及三箇度者可^被遣伊豆大島也、

〔吾妻鏡^三〕^{元曆}壽永三年^元六月十七日甲戌、召^被綾島四郎於御前、令^切右手指^給、是昨夕騷動之間、有御方討罪科之故也、

〔吾妻鏡^九〕^{源賴朝}文治五年九月九日丙寅、今日二品^{源賴朝}猶逗留^畠社、而其近邊有寺曰高水寺、^中彼寺住

侶禪修房已下十六人、參訴于此旅店、事其故者、御野宿之間、御家人等僮僕、多以亂入當寺、放取金堂壁板十三枚、畢冥慮尤難測、早可^見明者二品殊驚、歎給則可^相尋之旨、召仰景時、景時尋札之處、字佐美平次、僕從所爲也、仍召進之、於衆徒前加刑法、可^令散彼鬱陶之由、重被仰之間、令^切伴犯人之左右手、於板面以釘^令付其手^訖、

〔東寺百合古文書^{百六十九}〕^定撰錢事

入さうなる女ばうあれば、このくに、かぎらず、いづれの國にても、見立しだいにつれてまいれ
どの仰によつて来るなり、いつはりとおぼしめさば人をつけて殿へうつたへさせ給へと申、柴
田どのき、給ひて、まばらく思案し給ひて、これは姥がいふ所必定なるべし、されども信長公前
代未聞の無道をおこなひ給ふのあひだ、つゐでながら仕付をせばやとおもひ給ひて、いかにう
ば、さてもなんちは横恣のものかな、それ信長公の世の政法をた、しくまたまひ、無道のともが
らをば罰し給ふ事珍しからず、人の妻女を懷抱人をかどへる、その科至極たる事、前代よりの定
法なり、なんぞ信長公の賢君を無道のいたづら者にしなす事、其罪かるからずとて、十餘人舟に
とりのせ、大海へこぎいだし、のみをぬいてぞまづめにける、そのち柴田殿は、信長公へ、かゝる
うばのかどへごとを申て、御名をけがし、國々をまはり候あひだ、それがし曲事に申付候、そも
とにて御吟味あられ、御仕置等あへてまかるべからんよしを申上られければ、信長公あつたら
きようをさまし給ひて、仰らるべきやうあらざれば、柴田に、忠節の仕置、神妙にこそ候へ、向後さ
やうの者あらば、此方へまらせ給へとの御返事にてぞありける、これよりしては、信長公思ひと
まり給ひける、まばたどの、分別たぐひなきよしを沙汰して、萬民よろこぶことかぎりなし、

きあたりより法しをたづね出し、かいをさづけ、かみをそりとし奉り、さてかごをくみて、石をたゝみ入、そのうへにすへて、さうのひざをあみ付て、しづめ奉らんとしければ、いさゝかねんぶつをどゞめて、かくぞ詠じ給ける。

思ひきやこけの下水せきとめて月ならぬ身のやどるべしとは、と詠じて、あづみたまひしが、水底にて、いまだねんぶつしたまふかとおぼしくて、おどのしければ、人々ながめゐる所に、うんといふて、ふんぞり給ふほごに、つきたるつゝ、みやおれて、あさき所にいたり給へば、さうのあしにあみ付たるさしなはきれたり、さいしやう中將大いきつきて、ええなぬぞとのたまへば、又つつみをつきなをし、さしなは二すぢにてひざをゆひつけ、七八人してかしらをさへておはらせ奉るこそ、いたはしけれ、すべて、六人のくぎやうのなきあとのありさまこそかなしけれ。

〔義殘後覺〕六人の妻女を押取事

柴田修理亮

家〇

越州を領し給ふとき、年のころ六十計なる姥の、其體美々敷が人あまためしつ

れ町に宿をとりて、人の妻女を押取京へのばせ、よくすべきよしを云ほごに、大きにおどろき、こはめづらしき事を給ふものかなといへども、まゐらせずば、なんぢら曲事におよばすべしと、何どもめいわくつかまつる者五六人あり、いや／＼これは下にてすむまじきとて、修理殿へこのよしをうつたへければ、めづらしき事を申ものかな、いそぎそのものどもをつれてこよと仰付らるゝうけたまはりて、かのうばがやどへ行て、殿よりの仰なりはや／＼いで給へといへば、うば申やう、修理殿は慮外なることをいふものかな、我にこよといふは、をこがましけれども、ゆきてこそあるべけれど、てのり物にて來りたり、さて修理どのはいであひて、御身は子が町中へ入て、人の妻女を、りふじんととつてゆかんと、いふは、いかなる子細ぞやと仰ければ、うば申けるは、御身は事のやうを去り給ふまじ、我は信長公にめしおかるゝものなり、さればこの、御意に

て、二人ながらおもひ／＼に意趣をこま／＼とかきおきて、さは川の中の瀬へゆき、きしちかくひつくんで河のなかへころびいりて、たつ白なみときえ行を、きせんおしなべて、あはれなりける義死とげぬるものかなとて、ほめぬ人こそなかりけれ、義隆はこの者どもが書おきし文をこまごまど見給ひて、千悔し給へどもかへらず、さへたる女ばうをめし、いだし、てこのもの共が追善にせよとて、中瀬にてふしづけにして、すて給ふとぞきこえにける。

〔源平盛衰記〕^四京中焼失事

四月[○]元[○]治[○]承[○] 廿八日亥刻ニ、樋口富小路ヨリ焼亡アリ、是ハ神輿ヲ奉[○]禦[○]トテ、狼藉ニ及[○]、武士七人

禁獄之内、十禪師ノ御輿ニ矢ヲ射立進セケル、成田兵衛爲成ト云者ハ、小松殿ノ乳人子也、コト

ニ重科ノ者也、衆徒ノ手ニ給テ、唐崎ニ八付ニセン、[○]縣ニセンナド訴申ケレバ、[○]下

○按ズルニ、フシヅケノ名ハ、原ト縣ヨリ出タルナルベシ、新撰字鏡ニ、榛縣同、不志豆介乃木ト

アリ、又倭名類聚抄ニハ、縣爾雅云、縣謂之潁、郭璞曰、積柴於水中、魚寒入其裏、因以薄圍捕取也ト

アリ、柴ヲフシト訓ムハ、神代紀ニ見エ、ツケハ、漬ノ義ナルベシ、罪人ノ身ヲ簀卷ナドニシテ水

中ニ投ズルサマノ縣ニ似タルヨリ、遂ニ此刑ノ名ニ負ハシメタルナラン。

〔承久軍物語〕^五承久三年六月十四日、はう／＼へむけられけるくはんぐん、はいぼくせしかば、[○]中

略かいのさいしやう中將をば、まきぶのせうども時あひぐしてくだりけり、まかるに、五たいふ

ぐのものは、わうじやうにさわりありときけば、みづから水に入たきぞとのたまへば、ども時、い

づれにても御はからひにこそまたがひ侍らめと申てすなはちあしがらのやまをこえ、せきの

もとの宿につく、かのうしろの山にはそき谷川ながれたり、さもあさき川なれば、ふかき所をも

どむれども、なかりけり、むたけさへあらばよがり、なんとて、いしをあつめて、つゝみをつき、なが

るゝ水をせきかければ、ほどなく淵となれり、そのち出家のしたきとのたまふほどに、ちか

罪人ノ四肢ヲ一切斷スルナリ、其狀恰モ鳥類ヲ割割スルニ異ナラズ、

○按ズルニ、是罪人ヲ處刑スル法ニハアラザレドモ、今姑ク此ニ附ケテ參照トス、

〔義殘後覺〕宮部久馬介義死の事

大内義隆のうちに宮部久馬介淺茅鹿馬介とて二人の小性ありけるが、よしとか、このものどもを別て大切におぼしめしてめしつかひ給ふ處に、あるとき女中がたよりのさへによりて、此鹿馬介をうつべきよし義隆より宮部久馬介に仰付らるゝ、宮部うけたまはつて、わが宿にかへり、つらくあんするに、さりとては難狀仰をかうふるものかな、えうせうよりかれと一所に奉公つかまつり、かたときもはなれず、まことに入魂あさからざりしに、かゝる事を一言もまらせずしてむなく討果なば、草のかげにて、さはちざらざりしといかにうらみなん、まらするほどならば、我ももろともにまなではおもしろからず、所詮死ぬるも主のためなれば、くるしからずとおもひ定て、淺茅が部屋へゆきて、さても情なき仰をかうふりてこそ來りたれ、御へんを義隆公よりそれがしにうつてまいらせよとの仰をかうふるなり、されば日ごろそのちなみ他にことなる中にて、一ごんも御身にまらせずして、むなくうちはたしなばめいごにても我をうらみん事必定なり、其うへ傍輩のおもはく、いかんともわきまへがたし、所詮御へんごさしちがへて、までの山ぢにおもむくべしと申ければ、鹿馬介是をきゝて、さてもく日比なをざりの中なりしが、今こゝにあらはれたり、此心底はながく後の世までもわするまじきぞ、又あやまりなきとをりを君へ申ひらきてませんと思へども、女をあひてにとつてろんじてなにかせん、それがしは、まがいをすべきの間御へんかいしやくをたのむべしといひければ、宮部これをきゝて、あざわらひ、申出すよりしては、わが胸中さだめずしてはいかでまらすべき、佛神三ばふも御しやうらん候へ、もろともに相果べきといひければ、あさち聞て、このうへはちからなし、さあらばと

上野までも定あるは、今福澤開工夫の故なり、

〔武野燭談〕本多作左衛門人煎釜碎去事

一東照宮濱松御城に御座の時御討入御歸陣之節阿部川原に人。を煎る釜あり。是を御覽あつて、此釜濱松可遣由奉行ニ被仰付けるゆゑに、彼人承り濱松へもたせ送る道にて本多作左衛門是を見て子細を問に、まかゝの由被仰付、答ければ則人足に申付て打碎捨にけり、授奉行承たる人に申けるは、濱松へ參可申は、天下をも望可有人の人を釜にて可殺罪を犯す様に仕置するにて候や、作左衛門が申て、釜は打碎かせたりと具に申せ、一言にても殘したらば、後惡かるべしと下知しける程に、奉行しける人、ありの儘に申上ければ、東照宮殊に御赤面、頓て作左衛門を召御誤被遊ゆるせよとの上意を承りて、作左衛門泪を流し、君臣合體を人も感じけるとぞ、

〔東遷基業〕^五甲信二州粗定の事

初め神君^{○徳川}甲州の府に入給ひし時、武田信玄、極罪のものを養殺されたる釜也とて、甲州の上の木戸に大なる釜數多ありけるを御覽じて、駿遠參へ一ツづ、遣し置べしと仰によつて、それ運び遣しけるを、本多作左衛門重次、奉行職にてこれを聞、甚怒りて、屋形様には天魔が付てくるわせ申にや、彼信玄が惡政を寫して、諸人に見懲にすべしとて、多の人民を費して、はるばる忌々しきものを越させ給ふこそ心得ねと、留て、其釜悉く打碎き淵に沈めける、此よし目付中具に言上しければ、神君打笑せ給ひ、さてこそ鬼作左なれと仰られけり、

〔日本西教史〕^上關白^{○豐臣ハ、略}

秀次^{○中}

人ヲ殺スヲ嗜シム野蠻ノ醜行アリテ、之ヲ以テ無上ノ樂ト

ナシ、若シ罪人ノ死ニ處セラル、アレバ、自ラ劊手ノ事ヲ行フヲ常トセリ、關白ノ居館ヲ距ル一里許、一ノ高地ニ刑場ヲ設ケ、周圍ニ土塙ヲ築キ、中央ニ一脚ノ大案板ヲ置キ、罪人ヲ其上ニ臥サシメ、之ヲ剉切シテ與トナシ、或ル時ハ之ヲ立タシメ、兩段ニ割下シ、其最モ快トスル所ハ、

おほかたに申付候は、明くれ藏前にて惡事有べく候早々からめどり、かみの城戸にて、みこらしみのため彦介をいりころしあるべく候とおほせいだされ、略下

〔甲陽軍鑑第十八〕功刀小宮山兩人訴の事

猿馬牛の皮はぐ乞食が騎鞍馬にのり、下人をつれ、れんちやくこうち玉屋といふ酒やにて、代物を出して酒をのむさき、おりふし向山同心功刀左大夫と申侍又足輕大將の三枝善右衛門寄子小宮山八左衛門と申、信玄公御持弓の者と、兩人の侍、なにぞ用ありてこそ、これも右の酒やへまいる用所おはりてさかづき出て暫さしつさ、れつ盃をめぐらす所に、彼皮はぎも侍衆の中へまじり、酒すぎて後座を立時刻に、功刀左大夫中間が、今の皮はぎを見しりて、兩人の侍衆へ、此者は是は皮はぎ也とつぐる、八左衛門、左大夫、大きに腹をたて、宿の玉屋權右衛門に取かゝる、權右衛門は件の皮はぎにかゝる、略中皮はぎ乞食侍の雜（雑）富貴なるに任如此候へば、貴賤上下のわかりもなく、さながら侍の作法、何も悉皆いらざる事なりとて、小宮山八左衛門、功刀左大夫兩人書付をもつて奉行衆へ申す、則御藏の前にて侍衆訴、町人の申分、非人の者の言事、公事の沙汰ありて、武藤三河守、櫻井安藝守、今福淨閑、此三奉行の中にも、今福淨閑は、物毎のよき功者なれば、此公事を沙汰いたさる、略中町人には、いかに商賈代物際なりとて、歴々の侍たちに、非人を見そこなふたる科おごしに、兩人の侍衆に、巻物一づ、持て、玉屋權右衛門禮に參べし、さなくば籠舎申つけんと定むる、ことに又彼非人の命は、三奉行が咎言をもつて、兩人の侍衆助給ふ程に、有難存て、おのれが家の皮草履をえた、め、功刀左大夫、殿小宮山八左衛門、殿へ御禮に參、此已後皮剝の道服袖廣帷にも、牛と馬と兩方に、中には草履を付て、かならずきてありくべし、さなくばよき仕合にて、己等はた物にあがらん、さては釜にていらる、と心得候へど申定らるゝに付、それより後は、皮はぎ何とよき馬に騎ても、右のごとくきたる道服帷のかたにてゑる、様に甲州信濃

かなたこなたにして、辻伏追剝、夜ごとにし止事會てなかりし也。

〔時慶卿記〕文祿二年十一月四日太閤○豐臣秀吉ニ被召置候女房御暇不申出候男持候、仍罪三條ノ橋

ノツメニシテ子ト乳ハ養殺候。

〔豐臣秀吉譜〕文祿之比有石川五右衛門者、或穿竈或強盜不止矣、秀吉命所司代○前田等逼搜之、

遂捕石川、且縛其母并同類二十人許烹殺之、三條河原○又見君臣言行錄

〔土津靈神言行錄〕平生

一會津先太守蒲生氏之世○中略作大釜、其蓋穿穴、而置罪人於其中、出頭面及兩手、以木屐着其脚、以

慢火熬之、火氣透釜內、則以膏油澆入於穴、觀者亦甚哀之。

〔太田牛一雜記〕山城○嘉祿秀康ハ小科ノ輩ヲモ或牛割ニシ、或ハ釜ヲ居置、親子兄弟ノ者ニ火ヲタカ

セ煎殺事、冷キ成敗也。

〔信長記十五上〕信長公東國御進發并勝頼父子討死之事

加樣ニ勝頼○武田ガ一門從類、一時ニ亡果テ哀ヲトメシ事ヲ按ズルニ、連々ノ積惡ニ依テ、因果

歴然タル者也、彼祖父信虎、領地ヲ奪取ンガ爲兄弟ヲ殺シ、或祿多者ニハ虛名ノ罪ヲ云カケ、寺社

領等ヲモオトシ取、猶落サレヌ所ヲバ新義ノ課役ヲ當、凡テ不應ノ事ヲ以責ル、問法ヲ犯者多カ

リシ、疲馬鞭箠ヲ不恐シテ罪ヲ犯ス者多シトハ、加樣ノ事ヲヤ申ベキ、厚ク己ヲ責テ、薄ク人ヲ責

ル心非レバ、彌士民ノ科ト心得輕罪ヲバ重クシ、重罪ヲバ簽ニテ煎ル事、毎日五人六人ニ及ベリ、

略○下

〔甲陽軍鑑品第十七〕落合彦助と百姓と公事附雜言、并に三法印陀言之事

抑曲淵○少左衛門を赦免の事は、旗本家中によらず、我等分國中の諸侍へ禮義のために、成敗赦免せ

しめてあり、それになんぞ彼落合彦介、いつもかくの分に有べきと存奉行共に雜言仕る事、たゞ

ナリ、合テ五百十二人ヲバ、矢部善七郎御檢使ニ仰付ラレ、家四ツニ取籠込草ヲ積マセ、悉燒殺サレ候。

〔織田信長譜〕天正十年三月、勝頼殺木曾人質、而後納諸所人質三百餘人於新府城中。○甲以焚殺之、而携己妻兒而首途。

〔總見記 二十二〕甲州慧林寺災滅事

同月同日、○天正十年四月三日甲府惠林寺炎上ス、是關山派ノ禪宗ナリ、今度御敵徒甲州ニ隠レタル佐々

木承禎此比ハ名ヲ隠シテ佐々木次郎ト云、其外前公方義昭ノ上使上福院、大和淡路守、此三人惠

林寺ニ隠シ置ニ付テ、三位中將殿○織田信忠聞召シ及バレ此三人、先年公方ト武田信玄内通ノ使ヲ

仕タル事、具ニ御尋ナサレ度事トモ有之候間、出シ候ヘトノ由、三ク度マデ御使ヲ被立候ヘドモ、

タトヘ一寺滅亡ニ及ビ候トモ、三人ノ者ヲバ出シ申スマジキト申シ、潜ニ三人ヲ逐電イタサセ

候、中將殿御立腹ニテ、御仕置ニハ替ガタク候間、寺中ヲ搜シ、其上ニテ破滅仕ルベキ由被仰付、御

奉行津田九郎次郎、長谷川與次郎、關小十郎右衛門、赤座七郎右衛門、此四人ニ仰付ラレ、今日三日、

惠林寺ヘ押寄セ、右三人ノ御敵尋搜シ候ヘドモ罷アラズ候テ、僧徒老若等、皆山門ノ樓上ニ籠リ

居タルヲ、其下ニ燒草ヲツミ、火ヲ掛候所ニ、惠林寺ノ住持快川大通、智勝國師ヲ始メ、寶泉寺ノ雪

峯、東光寺ノ藍田、長禪寺ノ高山等、長老六人、單寮十二人、其外平僧、兒、小僧等皆悉燒殺サレ畢ス、

〔小田原記〕快川國師、高山和尚、睦庵和尚以下五十人、山門ヘ追上、火ヲ掛テ燒殺ス、

○按ズルニ、是事マタ信長記及ビ太田本信長記ニ見エ、太田本ニハ、四月三日、惠林寺破滅、老若已下百五十餘人被燒殺訖トアリ、又信長譜ニハ被焚殺者八十四人ト見エタリ、

〔太閤記或一問〕或問、秀吉公之時は、都に三奉行有て、法を犯輩をば、或張付、或釜煎などせられしか共、

燒松炙

〔土津靈神言行錄_下〕平生

一會津先太守蒲生氏之世、略作大墳植一木、以首械繫罪人、令兩手抱竹輪、而束麻草、燃之左右前後持之焚之、罪人踴躍而死、名之謂燒松炙。又見二種傳篇

焚殺

〔總見記十九〕荒木村重妻子一類已下刑罰事

十二月_{七年}○天正 十二日ヨリ、荒木方ノ御仕置アリ、其趣先度荒木久左衛門等、人質ノ妻子ヲ伊丹城

ニ指置キ、自身ハ尼崎ノ城ニ行同苗攝津守ニ諫言シテ、尼崎鼻熊ノ二城ヲ指上ベキ由ノ契約セ

シメ、久左衛門等出城シテ尼崎ヘ參著ス、然ル所ニ荒木攝津守、ハヤ此事ヲ悟リ、門ヲ閉テ久左衛

門等ヲ入レズ候、是ニ依テ諫言モナラズ、又伊丹ニハ津田七兵衛殿人數入替リ候間、歸入ルベキ

様モ無シテ、直ニ欠落、久左衛門等忽ニ逐電候、大臣家_{信長}田 聞召サレ、侍ノ妻子ヲ捨テ欠落ノ次

第比與ノ至前代未聞ノ事ニ候、伊丹城中ノ者ドモ點檢セシメ、宗徒ノ者ドモノ人質男女三十餘

人ハ、京都ニ於テ罪科ニ相行ハルベク候、相殘ル者ドモ、人ノ支配ヲモスル程ノ者ノ人質ハ、一人

モ不殘、尼崎ノ近所七本松ト云所ニ張付ニ掛殺スベキ由、山崎ニ於テ仰付ラレ候、是ニ依テ今十

二日ノ晩景ヨリ、三十餘人ノ宗徒ノ人質、終夜京都ヘ被引上、妙顯寺ニ於テ廣籠ヲ拵ヘ入置カレ、

就中伯々下部、吹田、荒木久左衛門子、是三人ハ、村井長門守_家○道 所ニテ籠舍仰付ラレ候、相殘ル者、

諸事頭ヲモスル程ノ者ノ人質、皆々取集メ、都合百二十二人撰出シ、瀧河左近將監_益○一 惟住五郎

左衛門_旁○長 蜂屋兵庫頭三人方ヘ請取り、明日張付ニ掛ベキト、_略○中 翌十三日、辰ノ刻ニ、件ノ女房

百二十二人、各結構ニ出立、尼崎ノ城ノ近所、七本松ト云所ヘ一度ニ引出シ、幼少ナル子共ヲバ母

ニ懷カセ、皆々殘サズ、張付ニ掛ナラベ、警固ノ武士ドモ、鎧長刀大刀ヲ以テ一々刺殺ス、_略○中 此外

女ノ分三百八十八人、是皆召仕ノ下女ナリ、男ノ分百二十四人、是侍ノ妻子ドモニ付置タル若黨

火焙

煮殺ヒツ 投水ヒツ 罪人ハ 臥漬ハ

火焙トハ、火ヲ以テ焙リ殺スコトニテ、此類ニハ燒松ヒツ炙アリ、

煮殺トハ、罪人ヲ釜中ニ投ジテ煮殺スルヲ云フ、或ハ熬殺トモ云フ、

臥漬ハ、罪人ノ身ヲ簀卷ナドニシテ、水中ニ投ズルモノニテ、其狀ノ漁具ノ罾ニ似タル故ニ、此名アルナラン、又單ニ水ニ投ズルコトモアリキ、

名稱

〔勢州軍記〕具教騒動

一生捕傷害事、御本所信雄朝臣〇北、以囚人等被害之、先以峯乙、栗栖二入火焙之、峯出惡口云、是害侍之法乎、見果其因果云々、故尙掛水而又燒殺之、尤哀事也。〇中就中波多瀬三郎、生年十五歲、容顏無雙之美童也、信雄惜之、欲助其命也、波多瀬辭云、三人同罪也、各於被助者尤忝御恩賞也、但我一人於被助者無其面目、諸共蒙害云々。〇中終三人共被害、

〔續武家閑談〕庄内の平賀と云者を頭分とし一揆起り、廿五日の夜、景勝〇上衆島津淡路加勢として籠りし、元來景勝領内大浦の城を圍むよし注進す、則景勝後詰城兵をもみ合て、大に戰て、大將平賀をはじめ、五百七十三級の首を取、貳百計生捕て、宗徒の奴原十七人、大浦河原にて火あぶりにし、殘者は人質を取ゆるし給ふ處に。〇下

〔甲陽軍鑑〕品第四十八、甲府淨土宗の僧公事之事

信玄公常々の御仕置なれば、奉行則屋形へ申上らるゝ故、御前さばきに罷成諸人の批判に、被出家子を持て、其上少づゝも物をば取、下女をば返さず、奉行之扱もきかず、旁以の事なれば、見ごりの爲にあぶらるべしと申人多、

〔甲陽軍鑑〕品第四十八、甲府法花宗の僧公事之事

大辟ノ五ト云ハ、一縷裂世ノ人兩車ノツミト云フ、車裂也、車二兩ニ片足ヅ、結付テ、兩方ヘヤ
リノケテ裂クナリ、

〔立入左京亮入道隆佐記〕天正六年の秋の比より、津國有岡面に難說申出、まきりに信長へ御敵に
罷成由風聞候、さ様には有間敷事哉と、れきく被差下調共依有之、荒木信濃守○村も難說可申
方由申、茨木城まで罷上、則安土へ罷越候處、中川瀬兵衛尉、茨木城守候處、是非共安づちへ御越不
及覺悟候、安土にて腹を可仕より、津國表へ引請及合戰候共、手のためす切崩可申處を、安土にて
いぬ死、さたのかざりと申留、既有岡へ荒木立歸、おもはず不計御敵を仕る。○中天正六年霜月よ
り、七年之十二月までせめつめられ、其内に荒木者、尼崎へ九月比、有岡を忍出候、女子共をば有岡
に置、其身忍出、荒木父子共は尼崎に籠城候、有岡には荒木久左衛門請取籠、城仕候處、惟任日向守、
○光丹波國ことくく切ゑたがへ、荒木新五郎は惟任日向守むこにて候ま、則日向守扱入ら
れ、種々調共にて有岡を明て渡可申に相究、先日向守むすめをうけとられ候、其跡に久左衛門も、
十一月廿八日九日を日限さし、尼崎表へ罷出、荒木攝津守と種々調隆仕、荒攝同心不申、久左衛門
も尼崎をぬけて、あわ路のいはやへ舟にてのき申跡に、信長殿二條之御殿に御座候御息中將殿
○信は、有岡表に御陣をすゑられ、れきくの者共、男女共四百六十計家を二間つくり、二間之家
へ追こみ、裏表よりやきくさをこみ、火懸やきころさる、其刻尼崎表に、久左衛門女房をはじめ、
九十七人はたものにあげられ候。○中かやうのおそろしき御せいはいは、佛之御代より此方の
はじめ也、源平の合戦にも、五人三人のせいはい、腹をきり申など、こそ承及候に、津國にてのせ
いはい、やきうち、はた物京にての事ざき。上下卅六人以上六百計之御成敗候か、

〔勢州軍記下〕諸國退治

〔時慶卿記〕文祿二年十一月四日、大間ニ被召置候女房、御暇不申出候、男持候、仍罪三條ノ橋ノツメ

ニシテ子ト乳ハ煮殺候親二人ハ土ニ堀入首ヲ出シテ首ヲ七日ニ竹ノコギリニテ被引ト也

〔土津靈神言行錄_下〕平生

一會津先太守蒲生氏秀行之世令罪人跨兩牛以燒松入兩牛之間則牛各驚怒而口左右開辟謂之

牛裂○稽又編見

〔太田牛一雜記〕山城○齋藤ハ、小科ノ輩ヲモ、或ハ牛割ニシ、或ハ釜ヲ居置、親子兄弟ノ者ニ火ヲタカ

七煎殺事、冷キ成敗也

〔南海治亂記^七〕阿波屋形長治鷹狩讃州記

元龜三年冬三好長治讃州ニ鷹狩セシガ爲ニ十河ノ城ニ來リ國中ノ諸將來集ス山田郡木太郷ハ深江多クシテ雁鳴多ク群ル所也○中略長治ミヅカラ鷹ヲ肚ニシテ鴨ニ翁セ給フ鷹スナハチ

鳴ヲ爪テ、眞部ガ城内見勇利權之助ガ家ノ前ニ下落ッ、權之助ガ僕若松ト云小童火燒棒ヲ以テ出テ是非トナク鷹鳴トモニ打殺ス、長治怒テ牛割ニセヨトテ、少童ガ兩足ヲ牛ニ疋ニ結附テ、左

ニシテ無道也トテ、國人離心ス、

〔類聚名義抄〕九〔轆〕音患、車製、人ク
ルマザキニス、

〔塵添壺囊抄〕
十一
〔五刑事〕

〔源平盛衰記 二十六〕宇佐公通脚方附伊豫國飛脚事

伊豫國ヨリ飛脚アリテ六波羅ニ着ク、披狀云ク、○中 爰ニ通清ガ子息ニ、四郎通信、高繩城ヲ遁

出テ、安藝國ヘ渡テ、○中 今月○美和元年二月 一日、室高砂ノ遊君集テ、船遊ビスル處ニ押寄テ、西寂ヲ

生虜テ、高繩城ニ將テ行テ、八付ニシテ、父通清ガ亡魂ニ祭リタリトモ申ス、又鋸リニテ斷切ニ

類ヲ切タリトモ申ス、異說雖口多、死亡決定也、

○按ズルニ、右ノ二書ニ據レバ、鋸引ノ刑當時既ニ行ハレタリシモノ、如シ記シテ參考ニ供ス、

〔總見記 十三〕淺井父子自殺事附鯉江城退去善住坊被誅事

同年○天正元年九月 十日、磯野丹波守高島郡江○近ヲ搜シ求テ、杉谷善住坊ヲカラメ取テ進上申ス、信長公

御威有テ、菅屋九右衛門祝彌三郎ヲ以テ、先年千種越ニテ鐵炮ヲ打カケ申タル事、イカナル故ゾ

ト御尋アリ、佐々木承禎ニ被頼、チラヒ申ケルト申ス、ヨシ、誰ニ頼マレタリトモ、此法師ヲバ

立ナガラ地ニ埋テ、七日ガ間竹鋸ニテ首引切レト仰付ラレ、ソノ如クニシテ殺シケリ、○又見信長記

〔家忠日記増補〕天正三年四月五日、大神君○德川家康ノ奴僕、大賀彌四郎ト云者アリ、卑賤ノ者タリト

云ヘドモ、舊功譜代ノ者、ルニ依テ、奥部二十餘郷ノ代官職ニナサレ、家富ミ子孫繁榮シテ、君恩

厚キノ處ニ、不儀ニシテ野心ヲ企、○中 野心ノ本人、大賀彌四郎ヲ召シテ、是ヲ縛シテ、旗ヲサ、シ

メ、其罪ト被レガ姓名ヲ是ニ書テ、遠參兩國ヲ引渡シテ、岡崎ノ町口ノ辻ニ生ナガラ土中ニ埋テ、

竹鋸ヲ以テ、是ヲ截シム、七日ニシテ遂ニ死ス、

〔三河物語 三下〕然間、大賀彌四郎おば岡崎之つちにあなをほり、頭板をはめ、十のゆびをきり、目の

さきにならべ、あまの大ききをきりてほりいけたけのこぎりど、かねのこぎりどを相そへておきければ、どおりゆきの者共が、さても、御主様の御ばかりかな、にくきやつばらめかな



〔鋸挽圖〕
てこくま
物語所載



害又九歳之息女母子共兼捕之、本田方承之、其侍中西甚大夫連行彼息女於木造近邊雲出川端中間往彼宿謀出之時、此息女美麗如玉、殊利根而早悟此事、向母流淚暇乞曰、於來世可奉逢云々、見人無不落涙、中間負之、到彼處中西寄後、以繩懸頸呼聲共縊之、尖大木串指、而向木造城掛張付也、見聞之父母之心中、推量亦尙哀也、

〔勢州四家記〕柘植三郎左衛門、信長家老瀧川伊豫ト云侍ノ所ヘ立入、内通ノ故、三郎左衛門ガ子ヲ、伊勢ノクモヅ河ノ端ニテ、國司具北島ヨリクシザシニナサル、是ハ人質ヲステ、三郎左衛門立身ノ故ナリ、

〔甲陽軍鑑品八〕第十七、伊勢の國司北の家の破るは、國司の甥に本作といふ侍具、則南伊勢の内本作と云處に居城あり、此本作が内者に柘植三郎左衛門と申者あり中、瀧川伊與守益一をもつて信長ヘ内通いたし、永祿十二年正月十日に南伊せほうくみと云處まで信長發向して悉放火せしむるなり、授三郎左衛門ガ子を伊勢のくもづ川のはたにて、國司よりくしざしになさる、

〔言繼卿記〕天文十三年八月十一日戊寅、一武家之四人和田新五郎三好被官爲京兆被申付藥師寺與一、於モドリ橋頭ヲノコギリニテ引云々、先左右手、次頸引云々、前代未聞之御成敗也、

〔平治物語〕三、忠宗尾州逃下事

去程ニ、永曆元年正月廿三日除日被行テ、長田四郎忠宗ハ、壹岐守ニナリ、先生景宗ハ、兵衛尉ニ被成ケルヲ、父子トモニ嫌申ス略中、セメテハ彼所帶ナレバ、播磨國ヲモ給リ、左馬頭ニモナサレンコソ、面目ナラメ、不然バ本國ナレバ、美濃尾張ヲ給テ、コソ勸賞トモ存ゼメト申セバ、筑後守家貞哀レキヤツヲ、甘ノ指ヲ廿日ニ切り、首ヲバ鋸ニテ引切ニシ候バヤ、相傳ノ主ト、正シキムコヲ殺テ、過分ノ望申ス、餘、惡ク覺候、後代ノ爲ニ承リ沙汰シ候ハント申ケレバ略下

母妻子共に七人、秀吉へ上奉り、謀反之様子委しく木村申上しかば、見せしめのためなる條、急ぎ張付に掛て、將監めに見せよと被仰ければ、隼人いさゝ腹あしき人にては、有卯月十六日、柴田陣取ちかう逆張付にかけて、山路これを見よと高聲によばはり、囃と鯨波を擧、どよめきにけり。

雜載

〔氏郷記〕下伊達左京大夫、宗○政如何思ハレケン、私モ各ト相伴テ上洛可仕由、二本松へ被申遣ケレ

バ、兩人ノ人々、一段可然候トテ、淺塲彈正少弼、政○長眞先へ打立タル、其次ニ政宗打立レシカバ、氏

郷生○此上ハトテ、二本松ヨリ彼人質共ヲ被返ケリ、其時政宗ノ風情コソ聞モ恐シケレ、死裝束

ニ出立テ、金箔ヲ押タルハ、タモノ杭ヲ馬ノ先キニ持セテ上洛有シトゾ聞エシ、臣秀吉請

○

串刺

〔家忠日記増補〕永祿五年三月十五日、吉田ノ城主小原肥前守三州ノ諸士ヲ懲サンガ爲ニ、清善ガ娘ヲ始大竹兵右衛門尉淺羽三大夫等ガ子、其外質ヲ棄テ、大神君家○德川ニ忠ヲ盡ス輩ノ妻子十

一人ヲ捕テ、吉田ノ城下龍念寺ニテ各是ヲ串刺ニス。

〔松平記〕上一右家康駿河と御手切有し故、年○永祿五日比は駿河へ付たる岡崎の譜代衆、皆駿河と

手切にて岡崎へ参り忠節仕る、然ども、三河遠州の人質は、大かた駿河方へ越置候中にも、松平備

後守人質に娘を駿河方へ越吉田の城主大原肥前守もとに置たりしを捨て、岡崎へ出仕致し妻

子を岡崎の城へ人質に奉る間、大原是を聞彼松平備後守娘を初として、大竹兵右衛門淺羽三大

夫等ガ子供、其外にも今度人質を捨て家康へ出仕致し忠を成たる、三河侍の證人を十一人、吉田

の城外龍念寺口にて串さしに致す也。

〔勢州軍記〕中勢南兵亂

一木造合戰事、木造家既及義絶、國司家憤之、欲攻木造也、先以彼長者柘植三郎左衛門尉之人質被

華人佑へ茶を申さんと約し用意まきりなり此企は木村を討て柴田が勢を本山へ引入んどの隠謀とかや然るを其夜之子刻計に木村が門を叩く者有誰ぞと番之者共問ければ御本陣より急用之事にて有ぞ先門を啓き候へと云しまゝ華人に其旨告し處に大崎宇右衛門尉聞候へと有しかば即出向ひ何用之御事ぞ承候べしと云し時いや御本陣よりの御用には非ず候伊賀守具臣野村勝次郎是まで參たる由申候へと有に因て大崎立歸り其由申ければさらば内へ入よとて近習十人計野村が左右に随ひ屋裏へ入しかば野村刀脇指を大崎に渡し密かに申上候はんとやはら立寄さゝやきけるは山路將監心變して候明朝御茶を申敷寄屋にて御邊を奉討本山城へ柴田が勢を引入んどの事に相極たる由云ければ木村實左もあらんと覺えたりさらば只今逆寄によせ可討果と有しを野村承り先蒙氣之由被仰遣被相延明朝御仕懸候はゞ同類不殘被打果候はんやと指圖せしかば尤なりとて山路方へ頼に虫さし出痛候間明朝は參まじき旨使者を遣しければ扱は此事推量有し也反忠を無心許思ひ密談之者共誰かれと呼に野村勝次郎ぞ居ざりける反忠此やつなんめり時刻移ればあしかりなると長濱之宿所に母や妻子共しをば山路が甥と舊臣二人つかはし船にて早々退候へ財寶等に少も相かまはず片時もはやく退候へとて出し其身は密談之同類三人同道し難の聲初て聞えし折節落にけり將監が陣所ひそゝとさわぎ出たる由野村が宿より告知せける間即かくと華人佑に申ければ退たる物にこそとてゝと引卷尋ぬれば如案見えざりけり在長濱母などからめに馬上五六騎つかはしみればはや舟にて忍びたりとなん番船之者も熟睡して有しを山路將監が母の乗たる舟之櫓番舟の碇のつなにあたりしかば十艘之番船一度にゆられ出是はいか様舟がどほるにこそとて聲々にのしり出ければ案の如く不知船見えつるに因て追掛舟をどめ見れば山路が母妻子共なり彼是七人番船へ取入こぎもどり華人佐使者共に渡し侍りけり山路が

不依上下成敗重者懸磔。輕者誅殺。人々掉舌恐。

〔關八州古戰錄二〕太田氏房二度目夜討事

關一政ノ手ノ者川井辨之助若黨小塚某ト相俱ニ氏房ノ被官三島文右衛門ト云覺ノ者ヲ生捕テ本陣ヘマイラセケレバ秀吉公有司ニ命ゼラレ城内ノ様子ヲ尋ラレシニ日ヲ追テ士卒一和セズ兵糧亦乏シク成行申トゾ答ヘケル殿下則渠ニ舊ノ幟ヲ差セ小田原ノ城邑ヲ引廻シテ大手松原明神ノ宮ノ前邊ニ於テ磔ニゾカケラレケル

逆張付

〔甲陽軍鑑^{十七}品^{四十七}〕志村金助むかさ與一郎公事之事

彼むかさは侍道の穿鑿もあらず信玄が家におきてもいらざる者なりさありて他所へはらふならば結句手柄をして來るなど口をきかん口をきても左様の者は他所にて又越度おほかるべし越度おほき時は信玄が家にあのやうなるものありやと他所の批判に乗ても詮なし所詮見ごりのためにかみの城戸に逆機物にあげよとて武かさ與一郎武士道無穿鑿故機にあるなり

〔甲陽軍鑑^{十七}品^{四十七}〕長沼長助長八親敵討事附増城源八郎と同長助長八公事之事

去々年^{元永}長沼兄弟にも心のむさき事を申かけ無理なる公事をいたす又今度もかくの分なれば諸侍へ見こりのためにかり坂をこさせよと仰出され右廿人衆頭笠井平兵衛三津四郎兵衛坂本武兵衛相州甚五兵衛甘利左衛門丞衆をめしつれ右増城源八家を關所仕り其上源八にかり坂をこさせるとなづけ坂のきはにて搦捕諸侍へのために逆機^{さかまき}にあげよとある

〔太閤記^五〕柴田伊賀守家來山路將監謀反露見之事

本山之要害に心を變する者有由誰共なしに云出しかば木村小隼人佑を本丸へ入大金藤八郎木下半右衛門尉山路將監を外輪へ出し用心きび敷見えし處に山路卯月十三日之朝^{天正}小

籠城仕候處、惟任日向守○光丹波國ことく切したがへ、荒木新五郎は惟任日向守むにて候ま、則日向守扱入られ種々調共にて有岡を明て渡可申に相究、先日向守むすめをうけとられ候、其跡に久左衛門も十一月廿八日九日を日限さし、尼崎表へ罷出、荒木攝津守と種々調隆仕、荒攝同心不申、久左衛門も尼崎をぬけて、あわ路のいはやへ舟にてのき申、跡に信長殿二條之御殿に御座候、御息中將殿は有岡表に御陣をすゑられ、れきくの者共男女子共四百六十計家を二間つくり二間之家へ追こみ、裏表よりやきくさをこみ、火懸やきころさるゝ、其刻尼崎表に久左衛門女房をはじめ、九十七人はたものにあげられ候、ことくうつくしきいしやうきせられ、めもあてられぬ事無申計候、又京都へは荒木つのかみが女房城の大手のだしにおき申、女房にて候故、名をばだし殿と申候、一段美人にて、いまやうきひと名づけ申候、一條か六條河原へ車十二りやうにてわたされ候、其人數は出殿四年廿だし殿いもうと二人、つのかみ第十九はうかへつのかみむすめ十六御局荒木久左衛門子十四一段の若衆、此外下々衆妙顯寺へこしにてのぼり、自せいをよみ、十二月十六日五ツ時分に車にてわたされ候、上下京の見物ぐんじゆ敷しらす、涙をながし、めもあてられず、かやうのおそろしき御せいはいは、佛之御代より此方のはじめ也、源平の合戦にも、五人三人のせいはい、腹をきり申などゝこそ承及候に、津國にてのせいはいやきうち、ばた物京にての車ざき、上下卅六人以上六百計之御成敗候か○中車に二人づゝ八兩、すいぶん衆、其外は大勢也、

天正七年十二月十六日五ツ時、村井長門守○道奉行、けいごの衆、越前之大名衆也、

佐々藏助殿 金森五郎八殿 前田又左衛門殿 村井専次 村井長門守内衆以上警固衆三千

警固候、

〔播州征伐記〕秀吉近習之人々、分六時三十人、番屋番屋書付名字付、城主人爲、居判形廻若油斷之輩、

シニ馳歸ル、十六日、鳥井長篠ニ至テ城ニ入ラントス、敵ノ圍益嚴シテ入ル事ヲ得ズ、敵ニ紛レ竹東ヲ被テ間ヲ伺フ、甲州ノ士河原彌太郎怪テ執タリ此間ノ甲兵歷中ヲ著ク、鳥井勝頼逍遙軒武田信玄ノヲシテ諭ス、汝吾言ニ從ハバ死ヲ免ルハノミナラズ、厚ク恩賞ヲ與フベシ、汝城下ニ至テ、親者ヲ喚出シテ、信長來リ教フ事ヲ許サズ、早ク降テ城ヲ出ヨトイヘト云フ、鳥井詐テ許ス勇士十餘人ヲ添テ城下ニ至ラシム、鳥井城兵ヲ呼出シテ大ニ呼ハリテ、信長、神君、大兵ヲ率テ來リ教給フ、此城ノ運ヲ開ク事、三日ヲ出ベカラズ、堅ク守リテ懼ル、事ナカレ、此永キ訣ノ言也ト云フ、言未ダ畢ザルニ、衆兵鎗ヲ擡テツキアゲテ、櫓ノ前ニ礮ニス、

〔見聞雜錄〕信長御歸陣之路次、篠原にて武田方より掛置たる鳥井強右衛門ハタ。物を御覽被成て、委御聞届是ハ無雙之忠義の士也、法事を申付よと被仰。○中信長聞給て、否々秋山が事は、當家之怨たり、機物に掛よとて無念哉、伯耆守山。○秋をば長良川端にて機物に掛るどて、伯母岩村殿と一つに同罪と被仰付。○中信忠卿。○機聞給ひ、信長父なれ共信心なし、譜代之逆意には非、流石之勇士を磔に掛給し御無理也と宣、

〔勢州軍記〕具救騒動

一玉井傷害事、天正六年玉井新次郎、又背信雄謀叛之衆也、具親。○北沒落之後、父兵部少輔母儀諸共退落而隱居神戸也、信雄爲小川久兵衛使告之、信孝命侍共被父子三人擄捕之、被遣信雄方也。○小之云々、信雄惡之、三人共於櫛田川原被擄張付也、

〔立入左京亮入道隆佐記〕天正六年の秋の比より、津國有岡面に雜說申出、まきりに信長へ御敵に罷成由風聞候、さ様には有間敷事哉とれき、被差下、調共依有之、荒木信濃守も雜說可申、乃由申。○中天正六年霜月より七年之十二月までせめつめられ、其内に荒木者尼崎へ九月比、有岡を忍出候、女子共をば有岡に置其身忍出、荒木父子共は尼崎に籠城候、有岡には荒木久左衛門請取、

シ時、今ハシヤツ親子ニ軍セサセソ、討セントテト宣ケルガ、軍果テ土肥ニ具シテ歸參ケレバ、今
度ノ舉動神妙也ト聞、約束ノ勸賞取スルゾ、相構テ頭殿ノ御孝養能々申セ、成綱ニ仰含タルゾト
有シカバ、喜テ罷出タルヲ、彌三小次郎押寄テ長田父子ヲ搦捕、八付ニコソセラレケレ、八付ニモ
直ニハ非ズ、頭殿ノ御幕ノ前ニ、左右ノ手足ヲ以テ竿ヲ尋ガセ、土ニ板ヲ敷テ、土八付ト云物ニシ
テ、ナブリ殺ニゾセラレケル平家ノ方ヘモ不落行ザラバ、城ニモ引籠、矢ノ一ヲモ不射シテ、身命
ヲ捨テ軍シテ、ホシカラヌ恩賞哉、是モ只不義ノ致ス處、業報ノ果故也トゾ人々申ケル、

〔源平盛衰記二十六〕宇佐公通脚力附伊豫國飛脚事

同○養和元年二月

十七日伊豫國ヨリ飛脚アリテ六波羅ニ著ク、披狀云、當國ノ住人河野介通清、去年

○治承四年

冬ノ比ヨリ謀叛ヲ發テ、道前道後ノ境、高繩ノ城ニ引籠ル、備後國住人額入道西寂、精

ノ浦ヨリ數千艘ノ兵船ヲ調テ高繩城ニ押寄、通清ヲバ討取テ侍シカ共、四國猶不靜、西寂又伊
豫讃岐阿波土佐四箇國ヲ鎮ガ爲ニ、正二月ハ、猶伊豫ニ逗留ス、爰ニ通清ガ子息ニ四郎通信、高
繩城ヲ遁出テ、安藝國ヘ渡テ、奴田郷ヨリ三十艘ノ兵船ヲ調ヘ、獵船ノ體ニモテナシ、忍テ伊豫
國ヘ押渡リ、偷ニ西寂ヲ伺ケルヲモ知ラズ、今月一日、室高砂ノ遊君集テ、船遊スル所ニ押寄テ、
西寂ヲ生虜テ、高繩城ニ將行テ、^{ハツ}八付ニシテ、父通清ガ亡魂ニ祭タリ共申ス、

〔武德大成記九〕

天正三年四月廿一日、^{ハツ}八付ニシテ、父通清ガ亡魂ニ祭タリ共申ス、

守將與平九八郎信昌、^略○中

衆ヲ集テ告グ、糧食盡テ數日ヲ支ガタシ、誰カ能ク城ヲ出テ急テ我君

ニ告ント云、衆相見テ言ズ、鳥井強右衛門進出テ曰、我能君ガ爲ニ出ント、^略○中

五月十四日夜、潛ニ

園ヲ出テ、^略○中

十五日ノ曉間ニ、鳥井神君ニ謁シ奉リテ、城中ノ形勢具ニ申上グ、神君曰、信長援兵

ノ事ヲ許諾アリテ、去ル十三日、岐阜ヲ出馬アリ、近日長篠ニ着陣タルベシ、余モ亦今日出馬スベ

シ、汝從ヒ行ベシトノ玉フ、鳥井曰サク、援兵ノ事、早速歸テ信昌ニ知セ申タキトテ、十五日夜トホ

〔長曾我部元親百箇條〕捉

一人を斬走科事、則はつつけにかけべし、其在所爲地頭庄屋近所之もの、即時追懸搦捕可言上、搦捕儀不叶者、則可相果、若にげぬがし候者、在所可懸科、彼親類之儀、始末毛頭も於存者、可爲同罪、不存所於分明者、可有其沙汰、并同座ニ在之者、不及其氣遣者、可處罪科事、付親類者可寄遠近説事、

磔死屍

〔總見記二十三〕惟任光秀爲鄉民被害事、并光秀從類滅亡事

同月同日○天正十年六月十四日秀吉兵ヲ進テ、江州三井寺着陣ノ所ニ、小栗栖ノ里民、光秀○明ガ頭ヲ持參

シ、實驗ニ入ル、秀吉大ニ悦ビ、自身杖ヲ持テ、光秀ガ頭ヲ打敵テ、君ヲ弑セシ天罰、ハヤ斯ニ來ルト

云、勿ル、一説ニ曰ク、故村井入道春長軒家○道ガ家人、智恩院ヨリ光秀ガ頭ヲ拾ヒ來リ實驗ニ入レ、

秀吉彼首ヲ打タ、クトモ云ヘリ、其後秀吉、光秀ガ屍ヲ求メ出シ、頭ヲツヅケ縫合サセテ、栗田口

ノ日岡峠ニ張付ニカケリ、

〔惟任退治記〕授齋藤内藏介利三、惟任○光秀被討事不知之、堅田邊賴知音蟄居之處、方便搦捕來寔天

運之盡處也、○略中其後乘車渡洛中、惟任首亦續體於栗田口、兩人共舉機、

〔平治物語三〕賴朝舉義兵、平家退治事

軍中及戰後行利

去程ニ、長田四郎忠宗ハ、平家ノ侍共ニモ惡マレシカバ、西國ヘモ不參角テハ難テ國人共ニ討レ

ントヤ思ケン、父子十騎計リ、羽ヲ垂テ鎌倉殿ヘゾ參ケル、イシウ參タリトテ、土肥次郎ニ被預ケ

ルガ、範頼義經ノ二人ノ舍弟ヲ被差上ケル時、長田父子ヲモ相添ヘ給トテ、身ヲ全シテ合戰ノ忠

節ヲ致セ、毒藥變ジテ甘露ト成ト云事アレバ、勳功アラバ大キナル恩賞ヲ可、行トゾ約束シ給ケ

ル、然レバ木曾ヲ退治シ、平家ノ城攝州一ノ谷ヲ責落、註進ノ度ゴトニ、忠宗景宗ハ軍スルカト問

給ニ、又ナキ剛者ニテ候、向敵ヲ討、當ル所ヲ不彼ト云フ事ナシト申セバ、八島ノ城落タリト聞ヘ

ヲハタ。物ニ可上之由被申ト云々沈思ノ事也無口少々及暮歸了ト種々佗言ニテ春三月迄拘云々付之家別ニハ八百文ヅ、出云々不便事也、

〔甲陽軍鑑品十九第五十一〕一小田原北條家は如此なれども、三河先方の中に、奥平父子信品よりあ

しき故誓紙を仰付られ、其上九八郎内儀を人質に召おかれ候を聞、家康親に九八郎を仕候へど、信長あつかひをもつて、奥平父子逆心仕られ候、それにより奥平九八郎女房衆を機物に、勝頼公

田武より懸なされ候、則長篠城に奥平こもりゐるなり、

〔甲陽軍鑑品十九第五十三〕信長より岩村の城へ扱をいれ、秋山伯耆守伯母むこなれば、たすくべきと

ありてだしぬき、伯耆座光寺をからめ捕機物にあげ、家康の味方に成たる奥平九八郎女房を、勝頼公機物にあげ給ふ、其返報なりと申され候、

〔新田由良家傳記〕籠城の内或時新田へ北條家働はりつけ、木を押立、城を渡し不申候はゞ、國繁顯長をはりつけにあげ、可申旨申候、

〔新田由良家傳記〕一給所之百姓、御領之百姓と公事、給所之百姓十分勝利有之、バ、三年寺入たるべき事、御領の百姓ハ、其當人庄屋五人組ハ所之はり付に可申付、給所之百姓ハ、百石に付永樂錢壹貫文奉行へ可差上事中

天文五年正月日

〔家忠日記増補〕天正三年四月五日野心ノ本人中大賀四郎ガ妻其子四人ヲ捕リテ、三州念志原

ニ磔ニス、

〔家忠日記〕文祿二年三月十六日辛未、先度馬盜人二人、三州ほそ川牢人はり付にかけ候、

〔土佐國高知北村武兵衛所藏文書所引〕文祿五年慶長十一月十五日長曾我部元親控

一雜說之事申出者、即時はたものに可懸事并落書有無不可、正儀書手於露顯者可、行死罪事、

見知タル人更ニ无クテナム止ニケルトナム語ヲ傳ヘタルトヤ、

〔宇治拾遺物語〕件の事共をかたり奉れば別當○檢非遠使 おどろきて、はやく河原に出ゆいてとへといはれければ、檢非遠使ども、かはらにゆいてよせはしほりたて、身をはたらかさぬやうにはりつけて、七十度のかうじをへければ、せなかは紅のねりひとへを水にぬらしてきせたるやうに、みさくとなりてありけるを、かかねて獄に入たり、

〔高祖遺書〕法連慈父十三年供養法華經文字成生身佛事

阿闍世王ハ、集十六大國惡人、語一四天下外道提婆ヲ師トシテ放無量惡人、佛弟子ヲ或ハ罵或ハ打、或ハ害シ、或ハ殺セシノミナラズ、賢王ニテ無失父ノ大王ニ、一尺ノ釘ヲモテ七處マデ打付、ハツケ利ニシテ、生タル母ヲバ玉ノカンザシツカミ、刀ヲ當頸重罪ノツモリ、惡術七處マデ出デ、略下

○按ズルニ、本書ハ僧日蓮ノ著ナリ、

〔豐臣秀吉譜〕中是年○天正十一年、奈良町人借金銀債高利者有之、人競借與之、甲來求利、則以乙金銀加利而返之、乙來又乞利、則以丙丁等金銀倍蓰而附之、遂使金銀積于道路、其徒數十人、富而紛者、然其舉

竟不知爲如何、蓋其實者、得一旦之利、而有後日之害、是與穿窬不異、秀吉聞之、礎奈良町人數十人、且命曰、多財故借盜金、亦與同罪也、有之倍其借數、以使出金銀而入官、

〔豐臣秀吉譜〕先是三十年前、南蠻耶蘇人貢託于商朝、以弘邪法、文祿年中、秀吉怒其惑民、乃捕伴天連六人、伴類二十餘人、渡於京都大坂、送肥前長崎、皆磔之、○又見長崎志

〔多聞院日記〕天正十四年十月二日、

一ヤケアトノ地下人悉次郡山へ被召下ノ子細ハ、クロカチ堺ヨリ盜ミウリニ座ノアルヲ隠シテ、助四郎ト云者仕ヲ糺明之處、一類悉以逐電了、地下許容曲事トノ成敗探ニテ、地下人ヲハタ

磔屍世ノ人ハ張付ト云額左右ノ手足ヲ釘ニテ物ニ打付テ後ウシロヨリ止矢ヲイル磔ノ字ヲ
バ張ト讀也、

〔今昔物語 二十九〕不被知人女盜人語第三

女男ニ云フ様思ヒ不掛ズ徒ナル宿世ノ様ナレドモ可然クテコソハ此テモ御スラメ然レバ
生トモ死トモ我ガ云ハム事ハヨモ不辭ジナト男實ニ今ハ生ムトモ殺サムトモ只ダ御心ナ
リト云ケレバ女糸喜ク思タリケリト云テ物食ヒ拈メナドシテ晝ハ常ノコトナレバ人モ无
クテ有ケル程ニ男ヲ去來ト云テ奥ニ別也ケル屋ニ將行テ此ノ男ノ髮ニ繩ヲ付テ幡物ト云
フ物ニ寄セテ背ヲ出サセテ足ヲ結曲メテ拈置テ女ハ烏帽子ヲシ水早袴ヲ着テ引編テ管ヲ
以テ男ノ背ヲ慥ニ八十度打テケリ、略ニ

〔今昔物語 二十九〕伯耆國府藏入盜人被殺語第十

今昔伯耆ノ守橘ノ經國ト云フ人有ケリ其人ノ伯耆ノ守ニテ有ケル時世ノ中極ク辛クテ食
物无キ年有ケリ其レニ國府ノ傍ニ院ト云フ藏共有リ藏ノ物共ハ皆下シ畢テ物モ无カリケ
ル時ニ人ノ藏ノ邊ヲ過ケルニ藏ノ内ニ叩ク者有リ何ノ叩クゾト聞ケレバ藏ノ内ニシテ云
ク盜人ニ侍リ此ノ由疾ク申上給ヘ此ノ藏ノ餉ノ有シテ見テ少シ取テ命ヲ助ケムト思テ藏
ノ上ニ登テ屋上ヲ穿テ餉ニ落掛ラムトシテ手ヲ放テ落入タレハ餉モ无クテ空ケレバ此ノ
四五日返リ可上キ方モ无クテ既ニ餓死侍ナムトス出テコソ死侍ラメト人此レヲ聞テ奇異
ト思テ守ニ此ノ由ヲ申ケレバ忽ニ在廳ノ官人ヲ召テ藏ヲ開サセテ見レバ年卅許ナル男ノ
糸繩ヲカナルガ水早裝束直クシタルガ色モ无キヲ引出タリ人々有テ此レヲ見テ云フ甲斐
无シ速ニ被追放ヨト云ケレドモ何デカ後ノ聞エモ有リト云テ藏ノ傍ニ幡物結テ張懸テケ
リ然ルハ痛ウ云タル奴ナレバ可免放キニ口惜キ態シタリトナム人云ヒ謗ケル此ノ男ノ顔

磔ハ 串刺ハ 鋸挽ハ 牛裂ハ

磔ハ、機物ハトモ張付ハトモ云フ、機物ハ原ト織具ノ名ナレドモ、今昔物語ニ云フ所ノ幡物ハ、之ヲ治罰ニ用井タレバ、磔ヲ謂ヒテ、機物ニ懸クト云フハ、恐クハ此等ニ本ヅケルナラン張付トハ、四肢ヲ開張シテ、之ヲ十字架ニ縛スルヨリ名ヅケタリ又、逆機物アリ、逆張付トモ云フ、罪人ノ身ヲ十字架ニ倒懸シテ之ヲ刑ス、此刑ハ、王朝ノ盛ナル時ニハ絶エテ無キ所ニシテ、源賴朝ガ長田忠致景宗ノ父子ヲ捕ヘ、之ヲ土磔ニ處セシヲ以テ書籍ニ見エシ始トス然レドモ復讐ヨリ出デタルモノニテ、且土磔ノ名ハ再ビ見エズ、磔ハ實ニ足利幕府ノ末ヨリ大ニ行ハレシモノニシテ、身首處ヲ異ニセル屍體ヲ綴合シテ之ヲ行ヒシ事モアリ、又串刺ト云フモノアリ、磔ノ類ニテ、上世ニ梟ヲクシザシト云ヒシトハ別ナリ、磔ノ類ニハ、又鋸挽牛裂車裂等ノ諸刑アリ、

鋸挽トハ、罪人ヲ土中ニ生埋シ、僅ニ其頭首ヲ露シ、數日ノ間、竹鋸ヲ以テ、漸次ニ之ヲ斷チテ死ニ至ラシムルモノナリ、

牛裂ハ、罪人ヲシテ、兩牛ニ跨ラシメ、火ヲ兩牛ノ間ニ加ヘ、之ヲシテ驚キ奔リテ罪人ノ兩脇ノ間ヲ裂カシムルモノナリ、車裂モ亦之ニ相似タルモノナリ、

名稱

〔運歩色葉集〕機ハ 磔ハ 肆ハ

〔倭玉篇〕石ハ 磔ハ ハツテ サイテ ヒラク

〔新撰字鏡〕石ハ 磔ハ 知格反、磔也、開也、其

〔餓頭屋本節用集〕磔ハ 磔ハ 張付ハ

〔塵添堦囊抄〕五刑事

〔雲錦隨筆〕洛北に獄門寺獄門町といへるあり、則ち近衛通出水通也西洞院の西に入を獄門町といふ、往古斯所に獄舎あり、罪重き者は之を斬て首を獄屋の門外に梟す、倭俗これより梟首を直に獄門と稱す、故に此町の號とす、近世に至るまで、大なる槐の木あり、罪重き者は、此樹下に於て斬り、此所に梟首す、後世まで尙御即位改元等、赦を行はるゝ時、五判官此所に來つて粗其式ありしと也、其獄舎ありし邊に西福寺といへるあり、本尊藥師佛は、聖德太子の御作也、此寺刑戮の場に近きを以て結緣功德の爲に、刑死の人を薦す之に依て、俗に獄門寺と稱す、曾て豊臣秀吉公朝鮮征伐のとき、大佛殿の前に耳塚を築給ひ、西福寺の僧を請して耳塚の供養を遂しめんと欲す、然れども寺僧之を肯ず、秀吉公大に怒り、遂に寺産を沒收し、寺を洛北北野の社の邊に移す、今に獄門寺と號し、本尊を岩藥師といふ、獄舎の邊にありし時は、寺産百石ありしといふ、山號西福

〔甲陽軍鑑〕

品第二十
第五十七一三月〇天正十年十一日に、勝頼公、信勝公の御證シヤレを取都へ上するこて、信長は

道にて此御頭を實檢なされ、則勝頼公御證に向て御申候。其方親父信玄、我等嫡子城介を聲に約束あり。天下を望縁者を變改し、其外度々の表裏いたされ候故、天罰を以て都へきつて上るこて、俄に煩つもの死給ふ。信玄の在世の時類にて成共都へ上り、參内を、逢度とねがはれ候ひつるよしに候へば、勝頼父子、都へのほり參内有て、其後獄門にて京童に見しられ給へ、信長もやがてあとより參るべしと仰られ、勝頼公御證、都へさしのばせ給ふなり。

〔總見記〕二十二自越中、注進事并武田信豐事

授、武田勝頼、同太郎信勝、典脫信豐、仁科五郎信盛以上四人ノ頸、長谷川宗仁ニ仰付ラレ、京都へ上セテ獄門ニ掛クベキ由仰渡サレ、即上京セシメ畢ヌ、

〔家忠日記増補〕天正十年三月十四日信長陣ヲ信州飯田ニ移シ、勝頼武田父子ガ首ヲ此處ニ梟ス、

其後勝頼ヲ首ナ京都ニ置シ、獄門ニ掛ク是ヲ梟ス、

〔柴田退治記〕玄番助、〇佐久、今度矛盾張本人而罪多故、車渡洛中、於六條河原誅之、柴田權六首、同羅

獄門者也。

〔親井家日記〕二栗田口合戰事

津田孫太郎ハ、同〇小野原郎等、金田兵四郎討取候、此孫太郎ハ、箆ヲ負、中刺ニ短尺ヲ付候、

カゾイロノ取傳ヘタル梓弓引シボリテハ、アダ矢ナキ身ヲト書テ葛原後胤、津田資信トシルシタルヲ見テ人々涙ヲ流シ、古ノ忠度ノ跡ヲ慕フ男ニヤト感心スル、小野原情アルモノニテ、首ヲ獄門ヨリ申下シ、葬禮ヲイトナミ、佛事ヲ大事寺ニテ取行申候、弓取ノ嗜ムベキ道ト國衆申候、〔吾妻鏡〕二十五承久三年七月十二日甲午、按察卿光弘去日、出者、爲武田五郎信光之預下向、而鎌倉使相逢于駿河國車返邊、依觸可誅之、由於加古坂、梟之、訖、時年四十六、

獄門ニ掛ケ、父子兄弟悉ク御追放アリ、

〔太平記^{十五}〕將軍都落事附藥師九歸京事

楠判官^成

正 山門へ歸テ翌ノ朝、律僧ヲ二三十人作り立テ京へ下シ、此彼ノ戰場ニシテ尸骸ヲゾ

求サセケル京勢怪テ事ノ由ヲ問ケレバ、此僧共悲歎ノ泪ヲ押ヘテ、昨日ノ合戰ニ、新田左兵衛督

殿^貞 北畠源中納言殿^家 楠判官已下宗トノ人々七人迄被討サセ給ヒ候程ニ、孝養ノ爲ニ其

尸骸ヲ求候也トゾ答ヘケル將軍^{尊氏} 足利ヲ始奉テ、高上杉ノ人々是ヲ問テ、アナ不思議ヤ、宗徒ノ

敵共ガ皆一度ニ被討タリケルサテハ勝軍ヲバシナガラ官軍京ヲバ引タリケル何クニカ其首

共ノ有ラン、取テ獄門ニ懸大路ヲ渡セトテ、敵御方ノ尸骸共ノ中ヲ求サセケレ共、是コソトオボ

シキ首モ無リケリ、餘ニアラマホシサニ此ニ面影ノ似タリケル首ヲ二ツ獄門ノ木ニ懸テ、新田

左兵衛督義貞、楠河内判官正成ト書付ヲセラレタリケルヲ、如何ナルニクサウノ者カシタリケ

ン、其札ノ側ニ、是ハニダ首也、マサシゲニモ書ケル虚事哉ト秀句ヲシテゾ書副テ見セタリケル、

〔東寺執行日記〕文安二年四月四日赤松播州^祐 父子若黨百廿四人頸高辻河原懸之、打手ハ赤松

有馬也、近日稻荷祭之間、高辻懸之也、

〔嘉吉記〕搦手ノ山名^賢

特 滿祐^松 赤ヲ討取、城ヲ屠リシカバ、大手軍兵ハ、播磨路へ一足モ踏入レ

ズ、勿論敵ノ旗ヲモ不見歸陣シケリ、滿祐ガ首ハ獄門ニ被懸、

〔大乘院寺社雜事記〕延徳三年十月朔日、室町殿^{義隆} 自去八月廿七日御出陣、御坐三井寺光淨院

云々、^{光精院}

十一月廿三日、宮内大輔^{政綱} 頸被懸六條河原了、^{及見觀}

〔多聞院日記〕天正五年十月六日、昨日^{五日} 申ノ刻出京、都松永金吾ノ息、十二才、敵人質タリシヲ

車ニテ京中ヲヒキテ令生害云々、

〔織田信長譜〕稻葉^{信長記爲}

稻葉土佐^倉 獻義景^朝 首、信長使長谷川宗仁鼻之於京都獄門、

路被懸獄門之條可有斟酌事也。只々被遺檢非違使於河原請取之。判官卽實檢頸者可足也。○中件
宮去年十二月廿二日於紀伊國隱謀露顯之間奉討之云々。

〔碧山日鏡〕寛正三年十月三十日有號荷田者群盜魁者也聚囚徒保守於東寺以官兵稍強盜成逃散荷田乘淀河舟而竄於紀南云。十一月三日本寺之東班以官命捕門前之行力與盜同惡者斬其首而出之於官又逃惡者火其家者六七也伏見里竹田村其令咸出賊首也。四日官捕盜人之魁首號荷田者斬之以其首梟六條河原也。

〔豐臣秀吉譜中〕千宗易利休精于茶湯者也秀吉嗜嗜茶湯故宗易受其恩眷厚矣世人頗敬之宗易檢宗茶器之新舊可否而決其價數因是家得富贍宗易與大德寺僧宗陳號古相議彫己木像置之于寺

內山門上頃年宗易含私僻之意其見茶器也依與己親疎好惡之異同而或以新爲舊或以否爲可以假爲真高下其售屢多騙人秀吉聞之怒曰是國賊也國賊不禁則予之大過也豈不釀將來嘲乎卽收宗易而誅之。○中其後秀吉梟宗易首於一條反橋下揭彼木像使蹈其首以柱夾立之數日視者如市

〔時慶卿記〕天正十九年閏正月廿五日宗益○千休曲事之由先日被露候逐電候處又今日於一條橋彼木像ヲハツ付ニ被懸候不思儀ノ事也。

〔紀州御發向記〕一授仰天伏地頻成佗言旨蜂須賀查右衛門正勝言上然者扶無過土民撰出有罪惡黨得可誅罰御誡切惡人五十餘人首掛磔召置殘百姓專耕作者也。

梟死屍之首

〔松隣夜話中〕同八〇永緒七月柿崎和泉北條丹後上州下分ニ働キ毛作ヲコチ夫ヨリ和田ヘ取詰巡

見スルノ處武田衆堅ク守ルヲ以テ早々引取其時青沼新九郎ト云謙信寵愛ノ小姓遠筒ニ當テ疵ヲ蒙リ翌日前橋ニ於テ死ス是ハ北條丹後與力青沼勘兵衛三男久敷越後ヘ相詰休息スル爲六月ヨリ父ガ在所ニ有リ謙信公佐渡ヨリ御歸城マシノ新九郎御暇ヲ申サズ忍テ在所ヘ罷歸リ剩ヘ多日逗留致シ是非ニ及ヌ山大ニ怒リ給ヒ堀埋タル新九郎ガ屍ヲ引出サセ首ヲ斬リ

者之間被推問之名。謁申言上總五郎兵衛尉也。爲奉度幕下。數日經廻鎌倉中云云。卽下賜于義盛。和四可召尋同意輩之旨。被仰含之云云。二月廿四日丁卯。於武藏國六連海邊。因人上總五郎兵衛尉忠光鼻首。義盛奉之。日來斷漿水云云。

〔百練抄十一〕建仁元年正月廿三日。今夜越後國住人城四郎平長茂。自關東馳上。申賜宣旨。可征伐將軍賴家之由。上皇鳥羽御幸他所。無返答人。仍逃脫不知行方。二月廿五日。城四郎長茂首并郎從首。生虜五人。給獄所於生虜五人者。召出被梟首。

〔吾妻鏡四十八〕正嘉二年九月二日戊申。今日諫方刑部左衛門入道所被梟罪也。此主從失以遂不進。分明白狀。爰相州禪室被廻實慮。以無人之時。潛召入諫方一入於御所。直被仰含曰。被殺害事。被疑思食之上。所從高太郎承伏勿論之間。難通斬刑之旨。評議畢。然而忽以命不可終其身之條。殊以不便也。任實正可申之。就其詞加斟酌。欲相扶之云云。于時諫方且喜。抑淚果宿意之由申之。禪室御仁。雖難相同于夏禹泣罪之志。所犯既究之間。不行之者。依難禁天下之非違。令糾斷給云云。

〔看聞日記〕正長二年元永享九月廿四日。先日被召捕楠木正光。今夕於六條河原。被刎首。侍所赤松所司代六七百人。取圍斬之。切手魚其體尋常。二被斬。略中

見物人河原充滿。自南都御使立。急可斬之。由被仰。其形僧也。頌歌等天下美談也。楠木首四塚。二被懸云々。

〔建內記〕嘉吉元年五月九日乙巳。鎌倉殿持氏卿子息等首。近日可京着。於彼首等者。可被懸獄門。近之由風聞云々。當時雖無儀式。猶可被守舊儀哉。尤可然事也。彼邊民屋計會云々。

〔康富記〕文安五年正月十日。舊多於紀伊國討南方宮部類。其頸京進自畠山殿被執進之。相當年始御敵之頸到來。爲珍重。二十三日。大判事明世立寄語云。南朝宮御頸自畠山殿被執上之。爲公家可有御寶檢之由。被申問。可爲何樣哉之由。自禁裏以頭左大辨爲御使。被尋申殿下。原關白藤之處。被渡大

○按ズルニ、二ノ木トハ、二段メノ頸臺ニ擬シタルモノヲイフ、是即チ主從ヲ同時ニ梟スル時ノ法ナリ、カ、ル事ヨリ三段ノ法起リシナランカ、

〔榎井家日記〕^十八上秀治同秀尙送安土事附秀治最期事并秀尙與信長公對面問答事秀尙最期事

御首^向○秀ヲバ川原ニ獄門ニシテ候、公卿臺ニ載セテインギンニシテ候、首祭ヲモ結構シ候ト

申シ候、

○按ズルニ、公卿臺ハ、下學集ニ、公卿^也器トアリ、古寫本節用集ニハ公卿ニ作リ、易林本節用集

ニハ供饗トアリ、公卿供饗相同ジ、貞丈雜記ニ、三方ノ穴ナキモノヲ供饗トイフ由ミユ、サテ本

書ノ意ハ、此臺ニ居エタルマ、首板ニ置キシヲ云フナリ、頸實檢ノ時、此臺ニ居ウルハ上輩ノ

首ノミナレバ、是亦貴賤ヲ分チシ一證ナリ、

以斬首陶道路

〔吾妻鏡^{十七}〕正治三年^元建仁三月四日甲寅、京都飛脚參著、去月廿二日、城四郎長茂并伴類新津四

郎以下、於吉野奥被誅畢、長茂先立、遂出家、同廿五日、長茂并伴黨四人首被渡大路云云、

事府行刑

〔吾妻鏡^六〕文治二年二月一日己酉、今日北條殿^時於六條河原、刎群黨十八人首、凡如此犯人者、不

可渡使廳、直可處刎刑之由云云、十三日辛酉、當番雜色自京都參著、進北條殿狀等^略○中正月廿三

日、同廿八日、洛中群盜蜂起、則搦獲之、去一日、十八人梟首畢、經數日者、似刑寬之間、不及召渡使廳、直

致沙汰云云、

〔吾妻鏡^{十一}〕建久二年五月廿日丁卯、於近江國幸崎邊、佐々木小二郎兵衛尉定重止流刑、被梟首、此

事日來可通此難之機、幕下^源雖被廻實慮、山徒鬱胸、遂以無所被有仰云云、^{此事爲景時之奉云云}

〔吾妻鏡^{十二}〕建久三年正月廿一日甲午、渡御于新造御堂地、犯土之間、運土石匹夫等之中、有左眼盲

之男、幕下^源覽、恠之、彼者自何國、誰人進哉之由、被尋仰、仍景時^源雖相尋之不分明、被召寄御前、

佐貫四郎大夫伺御旨、面縛之處、懷中帶一尺餘打刀、殆如寒水、又覽其盲、魚鱗覆眼上、彌知食有害心、

人八幡彌四郎宗安願云々此ハ去廿日御所陣内ニシテ院宜ヲ大友殿ニ奉付之間即召捕之云々、院宜六通帶持之、大友、筑州菊池、平戸、日田三箇所以上六通云々、

〔越後軍記〕景虎問頸實檢之法式事

斯テ景虎米山ノ初陣ニ討勝テ良勝ヲ召レ、略○中未ダ頸實檢ヲ見聞セズ、宜ク執行フベシト宜ヘ

バ、良勝畏テ古代ヨリノ法式ヲ演說シタリケル、略○中

一居頸居物上輩ハ供饗中輩ハ足付下輩ハカンナゲ、或ハ山折敷ナリ、但シ切目ノ方、フチヲ放シ、

首ノ面ヲ角ノ方ヘ向ベキ也、略○中

一頸臺八寸四方ナリ、高サモ同前、是又三品ノ居モノナキ時ハ用ルナリ、是ヲ頸机トモ云フナリ、

略○中

一頸ヲ梟首スル事俗ニ是ヲ獄門ニカクルト云、上輩中輩下輩ノ三段アリ、或ハ公家將軍總テ上

輩ノ頸ヲ懸ルトキ、柱ハ栗横木ハチブノ木、高サ地ヨリ九尺三重中輩ハ七尺二重下輩ハ六尺

一重頸臺ニ居ル時ハ、其中ニ五寸ノ釘ヲ打テ首ヲ指ス、見前三尺バカリ、上輩ノ時ハ、上ノ一重

ニ大將ノ頸ヲカケ、下二重ニハ相共ニ討死シタル士ノ首ヲ段々ニ掛ルナリ、

一中輩ノ頸ハ、梨ノ木、首臺五寸四方ナリ、下輩ノ頸ハ實檢ニ入ズ、竹柱、横木ハ柂櫓ナリ、臺ナシ、

○按ズルニ、此ハ首實檢ノ法ナリ、首實檢ニハ梟首シテ實檢スルアリ、居頸ヲ實檢スルアリ、居

頸云々以下ハ居頸ノ法ナリ、是亦貴賤ヲ分チシ參照トナレバ、姑ク此ニ收ム、

〔嘉吉物語〕さて頸實檢あつてのち則五條河原にかけらるべしとありしかば諸大名達のひやうぢやうには、すでに天下の御敵なるを河原にかけられん事と知るべからずとて、三條の西の洞院に柂櫓の木をほりたて、獄門の形をつくり、一の木には赤松入道満のくび、二の木には安積がくびをぞかけられけり、

〔正慶亂離志〕正慶二年三月十一日肥後國菊池二郎入道寂阿博多ニ付畢同十二日出仕之時遲參之間不可付著到之由侍所下廣田新左衛門尉問答之間及口論畢同十三日寅時博多中所々ニ付火燒拂寂阿ガ筑州江州ニ立使者申云宣旨使ニ罷向候、恐可有御向之由觸廻ル、筑後入道殿ハ、際槽ニテ此使二人ガ頸ヲ切十三日夕方被進匠作方江州ハ可打止之由被仰之間、彼使逐電畢サテ菊池捧錦旗松原口辻堂ヨリ御所ニ押寄之處辻堂ノ在家ニ火付タル間、不及押寄シテ、早良小路ヲ下リニヲメイテ懸、宣旨ノ御使七人、人參テ可付著到之由ノ、シリテ、櫛田濱口ニ打出、錦旗一流菊池旗并一門等旗アマタ捧テヒカヘタリ、爰筑州祇候人、饗場兵庫允相向尋申事子細之處、即兵庫允并若黨一人被討畢、次武藏四郎殿武田八郎以下燒失ハ菊池所行トテ相向息濱菊池宿之處、早ク菊池打出タル間、息濱ノスサキヨリ廻テ、橫田濱口ニ菊池引ヘタル處ニ追懸タリ、即及合戰武田八郎ハ負手竹井孫七同舍弟孫八并安富左近將監等被討畢、サテ御所ニ押寄及合戰菊池入道子息三郎二人ハ、犬射馬場ニテ被討、菊池舍弟二郎三郎入道覺勝以下若黨等打入御所中、既ニ御壺ニ責入致合戰之間、敵七十餘人被打止畢、菊池嫡子二郎并阿蘇大宮司ハ落畢、匠作御方モ或討死、或數輩負手畢、サテ合戰過テ、筑州江州以下、鎮西人々被參御所、即菊池入道子息三郎寂阿舍弟覺勝以下若黨等頸被懸、犬射馬場寂阿三郎覺勝三人ガ頸ハ始四五日ハ不被懸、後ニ被懸之、寂阿并子息三郎覺勝頸ハ、別ニ被懸之、夜ハ取テ被置御所、十ケ日計アテ以釘被打付、札銘ニ云、謀叛人等頸事、菊池二郎入道寂阿子息三郎、寂阿舍弟二郎三郎入道覺勝云々、菊池方手負人等落行之處、國々ヨリ博多ニ馳上ル勢共、行向打取之頸ヲ取進之間、犬射馬場ニ三重ニ被懸之、五所ニ木ヲユイワタシテ被懸、其後亦連々ニ自所々取進落人頸二百餘也、糸田殿即御所ニ御入參州殿、十三日御登アル處ニ、筑後國橫隈ニテ、菊池孫子兒童并若黨十人計行合奉ル間、即被討畢、頸ハ御持參アリ、廿三日院宣所持仁、八幡彌四郎宗安ト云物被切頸、即被懸畢、銘云、先帝醍醐院宣所持

梟首

名稱

梟首法

鎌倉幕府時代梟首ヲ稱シテ獄門ト云フ。獄門トハ首ヲ斬リテ後ニ囚獄ノ門ノ側ノ棟ノ木ニ懸クルヨリ起リテ其事ノ既ニ絶エテ後ニモ尙ホ獄門ニ懸クト云フナリ。足利幕府ノ時ニハ柱ト横木トヲ以テ之ヲ構造シ横木ノ上ニ方八寸ヨリ方五寸ニ至レル頸臺アリ。其中央ニ長サ五寸ノ釘ヲ打チテ首ヲ刺スナリ。是ハ中等以上ノ人ノ事ニテ下輩ニハ臺ナシ、サレドモ原ヨリ故ラニ其法ヲ設ケテ此刑ヲ起シタルニアラザレバ各地盡ク此ノ如クナルニアラズ死シテ後ニ時ヲ經タルヲ尙ホ其首ヲ斬リテ梟セシ事モアリ。要スルニ此刑ハ多クハ交戦ニ關シタル事ニ用キタルモノ、如シ。

〔尺素往來〕野心隱謀之族追伐事官軍合戰依得其利張本之輩者悉令誅候。至其餘黨者一々搦捕歸洛之間。首被懸獄門^{ツツ}棟^{ムササビ}。至虜者先暫致禁獄候畢。

〔書札袖珍寶〕獄門札書様事

斬罪河内國高安郡井田村三右衛門去八月九日之晚一條柳原に人を斬ころし其跡道具等奪取訖如御法度數日たゞしくあきらめたうぞくげせんの上令刎首者也。

永正拾年月日

○按ブルニ此書式ノミニモ限ラザルベシ姑ク附シテ參考ニ供ス。

〔吾妻鏡〕九文治五年九月六日癸亥河田次郎持主人泰衡之頸參陣圖令景時奉之以義盛重忠被加實檢上^略○中被懸泰衡首康平五年九月入道將軍家賴義獲貞任頸之時爲横山野大夫經兼之奉以門客貞兼請取件首令郎從惟仲懸之^{以長八寸鐵釘打付之云々}追件例仰經兼曾孫小權守時廣時廣以子息時兼自景時手令請取泰衡之首召出郎從惟仲後胤七代廣綱令懸之^{釘同二被時例云云}

ハ、御爲ニ能可有之候ト申ケレドモ御承引ナシ、

ニ候ヘバ、タトヘ義景目ノ前ニテ、忠義ノ討死ヲコソ不仕候トモ、敵陣ニ請受テ一命ヲ助ル事思ヒモヨラズ候。賞命ノヲモキニシタガハ、累代ノ瑕瑾當時ノ耻辱、是ニ過タル不覺アルマジ、兵盡矢窮テ生捕トナル事モ、戰場ノ習也。大將ニ先立テ士卒ノ死スルハ、軍ノ道也。厚恩ニハ早々頭ヲハチラレテ給ルベシト云フ前波吉繼イロノニ異見申セバ、印牧眼ヲ怒ラカシテ、汝コソ主君朝倉殿ヲ捨、降人ト成テ、不義ノ舉動、人非人ノナスワザナリ。某ハ汝ガ様ナル不義ノ者ニテハナシト云テ、曾テ以テ同心セヌ故サラバキレトテ、頸ヲ刎ントシタリケレバ、印牧申ス様、凡ソ侍タル者ノ敵ニ逢テ生捕ラル、事古今珍シカラズ、難兵同前ニ頸切ラレン事思ヒモヨラズ只切腹。コソ本意ナレト云フ、信長公被聞召敵ナガラモ志アル者也。繩ヲユルシテ腹切ラセヨト被仰下、檢使ヲ以テ切腹サセラル、即印牧思フマヽニユヽシク腹ヲ切タリケリ。

〔古事談四〕鎌倉ニテ庄司次郎重忠、稻毛入道成ナド被打之時、稻氣之舍弟、由井ノ七郎ト云

者、遠景入道野之許ニ步來云、已被結惡緣、不可免其難。須臾自害。年來有往生極樂之望、自害不臨終正念、恨不如本意。吾傳聞被刎頸之者、不往生云々、依之御房ノミコソ令哀憐給ハメトテ所參向也。可然者向西方合掌唱念佛之間、差殺可給云々、遠景隨喜悲泣申事由濱ニ將行テ差之處、十二刀迄念佛聲不休、于時止念佛云、猶可死心地モセヌ也。心サキヲ可差トテ、又高聲念佛之間、如云、心前ヲ被差之時、聲止氣絕畢ヌ。

〔總見記四〕木下藤吉郎出身山來事

同國美濃、宇留馬ノ城主大澤次郎左衛門ヲ秀吉様々ニタバカリ降參サセ、清洲ヘ同道シ行テ信長公ヘ御目見ヘ申サセケリ。信長公ヒソカニ藤吉ヲ召テ仰ケルハ、此大澤ハ勇者ナレドモ、心ノ變ジャスキ者ナリ。味方ニ頼ム事如何ナリ。今夜汝ガハカラヒニテ腹ヲ切セヨト被仰ケリ。藤吉申上ルハ、御誼尤ニ候ヘドモ、降參ノ者ニ腹ヲキラセ候バ、重テ降參申ス者有間敷候。只御赦免候

多シ、○是恐爲永
 年事

〔大友與廢記 十二〕親成切腹の事

さるほごに生捕の親成持○土は豊後浦部の武士に預け置給ふ、浦部の侍彼は會合の砌の取沙汰に、敵を擒にして殺事なかれと云事あれば、親成も命ばかりはたすけ給はんと云人もあり、又兩葉を載ざれば斧柯を用ゆといふ事あり、御誅伐は多分なるべしなごまぢく〳〵に沙汰しけり、終に切腹仰付らるゝこそあはれなれ、○是恐爲天正
 六年五月事

箇中行利

〔經覺日記〕享德三年四月三日、酉下刻、畠田彌六畠六切腹畢、子細者、畠山德本禪門子息、伊與守義夏、

非禪門實子之由、内者共令内談之由、彼彌六令告知伊與守畢、仍畠田下總守父、同遠江入道父、

令折檻之間、切腹了、如此之間、神保張本之條、伊與守令存知、神保嫡子二郎左衛門尉召屋形令切腹、

了、至神保者、指向軍勢、數刻防戰終、屋形懸火了當座ニ神保子息三人内者五六人、被討了、於本人者、

落之由有其間、於近邊道場令逝去云々、負手故也、

〔總見記 十三〕印牧彌六左衛門被誅事

抑今度諸軍勢ノ討來ル頸ドモヲ、降人前波九郎兵衛吉繼、富田彌六郎長秀、兩人目アカシニ被仰付、一々ニ見セ玉ヘバ、兩人見テ、是ハ誰、是ハ何ト名字名乗ヲ申上ゲ、一々カタレハナカリケリ、就中不破河内守ガ郎黨、原加左衛門ト云者、敵方ノ奉行人、印牧彌六左衛門ヲ生捕來ル、信長公聞召シ、是ハキコユル勇士ナリナリ、引テマイレト御誅ニテ、スナハチ御前ニ引スエル、汝ハキコユル勇士也、何トシテ生捕ラレタリケルヤト御尋有ケレバ、印牧御請申ス、横江北ノ軍急ニシテ、自身數廻敵ニアタリ、息キレ身ツカレ申スユヘ、角トラヘラレ候ト申上ル、信長公被聞召、勇者程アルゾ、正直ナル申シ分也、一命ヲ助ル間味方ニ加ツテ、越前ノ案内仕候ヘト、前波ヲ以テ被仰下、印牧申シ上ルハ、御誕生々世々忝奉存候、併某苟モ朝倉譜代ノ家人ニテ、利國中奉行ノ名ヲ汚セリ、身不肖

軍中行利

ければ、たばかつて小谷の城へ右三人をめされける、三人の者共、何心もなく登城仕ければ、總門の下馬より供の侍を押留め、三人が脇指を雨森彌兵衛、海北善右衛門尉請取亮政の前へ召出し、一々吟味したまへば、肥前守臆する色なく、有のまゝに白狀す。亮政これを聞流石名あるものなれば、少も己が罪をかくさず申條神妙なりとて、神勝寺と云寺へ右三人追込、二三日して切腹を被仰付。

〔大友興廢記〕入田親眞切腹の事附御簾中を御離別の事

去程に入田親眞強いさめ申奉るを、却而御いこんに思召す言葉や有けん、彌御氣色よろしからずして終に天文十九年に切腹仰付らるゝ、玖珠日田の人數入田つかむれの城へ押寄るよし聞えければ、親眞を一門の老若いさめ申やうは、暫肥後の國へ落國をへだて、年月を経るならば、思召わけらるゝ事もやあらん、今早速に切腹あれば、常の罪科人に似たるべしといさめけれども、親眞其儀に同せず、服紂王の賢臣箕子は去ぬ、微子は奴と爲ぬ、比干は諫めて死すと云て、入田つかむれの城を去らず、然に日田、玖珠の人數をさしつかはし、切腹仰付らるゝ、其時親眞の弟右衛門大夫を介錯人に定らるゝ、右衛門大夫愁歎に力もよわりたる故刀きれず、ふてぎわなるところに、内の侍甲斐彌四郎と云者つゝ、とより介錯して、彌四郎も其儘腹切失ぬ、尤神妙なりと人みなかんじけり。

〔松隣夜話〕越後ノ科人ノ御仕置、一ノ重科ニハ、刀脇差ヲ召取ラレ一代身ニ帶ズ（血侍以下格別）二番死罪、三番追出、四番所領沒收、五番與力同心ヲ放サル、六番籠居スル等也、長尾右衛門佐ト云侍大將聊無沙汰ノ行跡アルニ依テ、謙信公大ニ咎メ給ヒ、與力同心ヲ召放サレ、所領ヲ取上、其上ニテ兩腰ヲ帶ザル様ニト仰付ラル、ノ處ニ、親類ヨリ、右衛門親、庵原之介、御家ニ對シ、戦忠之レアリタル義ヲ申立テ、生害ノ佗言申上ルニ依テ、一等ヲ免許セラレ、兩腰ヲ給ハリ切腹ナリ、前後此類

はごのさふらひに、はらをきらせられ候事は、武田の家に、はじめたるべきとおほせ候、然間諸人のをしみ申およばす候、

〔奥羽永慶軍記 三十七〕義光病死見之徒黨等死罪之事

既ニ里見ノ者共、數度ノ忠勤ヲ抽テ候事、四方ニカクレ有ベカラズ、然ルニ御舍兄義安生害ノ時、權兵衛ヲ助ントテ最上ヲ引切里見ガ一族半人セシ其憤ヲ殘シ、御遺言ナシ給フニテヤアラン、其上ノ事ハ何カクルシカルベキトゾ支ヘケル家親尤也トテ、其異見ニ隨ヒ奥ニ入給フガ、此義延引ニ及バマシカルベシト思ヒ案ジテ、同廿五日、小幡播磨守、長尾右衛門尉ヲ召レ、急ギ里見越後入道、同民部、同權兵衛ニ腹ヲキラセ、首ヲ刎テ參レト、旗本澤山伊助、宮野新左衛門ニ足輕百人ヲ差添ラル、小幡長尾ハ里見ニ縁類タリト云ヘドモ、日來中アシキヲ知給ヒテ、討手ニハ遣ハシケリ、ヤガテ此者ドモ里見ガ館ニ入テ里見父子三人ノ人々、咎ハ知ラズ候ヘドモ、腹切ベキノ由御檢使トシテ我々參リ候ト申ケレバ、里見ノ者共聊異義ニ及バズ、家人共ハ如何ト問フ、小幡長尾聞テ家來ハ皆々御免候間トク、除ラレ候ヘトイヘバ、右往左往ニ立除ケル、入道、民部、權兵衛尉、卽座ニ腹ヲ切ニケリ、尤日來剛ノ者トイハレシ程アリ、最期ノ體、切腹ノサマ、勇數ゾ見えニケル、是ヲ聞彼等ガ女房、奥ニ在テ自害ヲゾ遂ニケル、里見ガ譜代ノ侍三人、同ジク腹ヲ切ケリ、アハレ上ノ山ニ在シ時ナラバ、手痛一合戰ハ有ベキニ、今ハカスカノ住居ナレバ、只一時ニ滅テケリ、

〔淺井三代記 九〕今井肥前守同孫左衛門同十兵衛尉切腹の事

今度南北和睦して、亮政江^近北中の侍の忠不忠の輩を正しけるに、忠節の人に感狀に所領を相添給はるも有褒美計を給ふもあり、其品々を糺したもふ、爰に今井肥前守頼弘、同孫左衛門尉、同十兵衛三人は、番場表にて、敵江南定頼卿方へ内通して、亮政を可討計略したる旨、證人出

木食與山上人

○按ズルニ關原合戰誌ニ昔ヨリ未ダ攝録ノ人生害ノ例ヲ聞カズト見エ又落穂集ニ秀吉公ヨリ高野入ノ義被相糾高野迄討手ヲ向ラレ候ニ付秀次公自殺アラレ候是ヨリ高野山遁科屋ノ法破レ候ト也ト見エタリ、

大名行刑

〔清正記〕清正家中江被申出七ケ條

大小身によらず侍共可覺悟條々

一亂舞方一圓停止たり大刀をこれば人をきらんどおもふ然上者萬事は一心の置所より生るものにて候間武藝之外亂舞けいこの輩可加切腹事、

〔妙法寺記〕天文十一年六月信州諏方殿江取懸被食候武田殿切腹被食候而諏方殿ヲ生取ニ被成候而府中ニテ腹ヲ兄弟御切候、

〔諏訪神長守矢氏舊記〕頼重は討死をどげべきとて兄弟三人うちものをとつて切ていでんと仰候所に甲州がたより彼城を御ひらき候はゞ和談なされ歸陣あるべきよし被申候間此方衆何も其いけんを被申候頼重御納徳候て甲州へかうきんいたし武田殿へ人数を申うけ同名信濃殿に腹を切せべき段におぼしめし無相違城をひらき七月五日に甲州へ御越御うんのするに候つる哉同廿日夜坂垣のゑげにて御腹めされ候彼時じせいの歌候、

おのづからかれはてにけり草のはの主あらばこそまたもむすぶめ此のごとくあそはし候てさけさかなをこはせられ候酒はもたせ候肴は無之候と申さては武田の家に腹きる様體は御存ちなきやさかなとはわきざしの事に候とてわきざしをこひ十もんじにきらせられ三刀めに右のちのものもこへつきたててんもく程くりおとしさてうしろへ御ころび候此以前に我等

近習少々同切腹云々天下太平幸甚々々、

〔太閤記^{十七}〕秀次公御切腹之三使登山事

夫惟るに大かた識者ハ智深く才足るものなり、秀次公在世し給はゞ、増田石田が身の上あしかりなにと遠慮し、彌謠言止期なし、將軍^{○豐臣}もあり、しく長盛三成申しがば、げに左も有べしとおぼされにけり、いたはしながら腹^{秀吉}を切[○]せ候へど、福島左衛門大夫、福原右馬助、池田伊與守、檢使として遣されけり、此人々登山之沙汰有ければ、秀次公さては最期近づき侍るなり、此者共は、我に對し恨有者共なり、彼讒人等よきにこしらへ侍るよなと隆西堂に對し笑はせ給ひぬ、西堂はいそぎ下山有て、母瑞龍院殿之事、今後二世よきに計ひくれ候へど仰ければ、是へ御供仕候はんと粟野を以申上候時より萬事相究、東福寺小菴之儀など、よきに沙汰し罷出申候つる、被爲安御心候へ、下山之儀中々思ひもよらず候と足踏實地言上有しかば、秀次公ふかう感じ給ひけり、彼三使木食上人を呼て云けるは、如此關白殿御切腹之儀、奉行人より爲御意書簡有之とてさし出しけり、其狀云、

爲御意申達候、依、秀次公御謀叛之條々少も依、無疑之、可被進御切腹之旨候、其地住山之罪業人、大師被垂御慈悲、助宥之法雖有之、對尊父秀吉公、逆臣極重之罪過、無所容於天地之間、然則大師何以得救之、有誓願之心乎、碩學之人々、行人方、一山へ其旨被相達之、早速可被及其沙汰候、猶三使可有演說之條、令省略畢、恐々謹言、

文祿四年七月十三日

德善院玄以

長束大藏大輔

石田治部少輔

増田右衛門尉

切腹

切腹ハ、獄令ニ云フ所ノ自盡ヲ賜フナリ、唯獄令ハ其死スベキ方法ヲ問ハザルガ如クナレド、此ハ屠腹ニ限レルヲ以テ異トスルノミ、抑此刑ハ武門ノ刑ニシテ武士タル者ヲシテ斬首ノ詬辱ヲ免レシムルナリ、而レドモ多クハ介錯ト云フモノヲリテ其首ヲ斷ツナリ、介錯トハ助手ト云ハンガ如シ、又戰亂ノ世ニ在リテハ、敗將ノ自ラ切腹シテ其部下ノ生命ヲ全クセンコトヲ乞フガ如キコト毎ニ多シ、亦其一斑ヲ此ニ載セタリ、尙ホ切腹ノ事ハ、上編死刑篇自盡條ニ散見セリ、宜シク參看スベシ、

事府行刑

〔建内記〕永享十一年二月二日、日野大納言廣實說傳聞自關東前宮根別當瑞禪、先日上洛、彼自京都爲御勢下向之者也、彼者依違關東之義、自先年在京者也、而有讒者稱可申披之由、參洛之、或說鎌倉武衛持氏御和陸事、房州上杉執申趣被申次、仍被召置伊勢守宿所、以外恐怖々々、一昨日、已下向之、已申披申候故歟云々、所詮無御進發者、鎌倉武衛被切腹候條、無左右難有之由申之歟云々、奇怪之申狀哉、爲實事者無勿體事也、相國寺長老下向關東、是猶可攻申武家之由、被仰付房州歟云々、武衛事已除緣、贅着黑衣之上者有恩免於子息者、可被聽相續之由、房州頻執申、而時宜不許依之不及合戰、御勢相支送日、其故者於野心之軍士者悉被誅了、其外者房州許也、房州多年奉對京都無不忠之儀、今度之義又爲御扶持房州被遣軍勢了、而今武衛依隱遁子息事被執申候、欲屬無爲之處、自京都無御許容依之滯停也、若猶無御許容者、房州可切腹之由申候歟云々、然者可及合戰、歟大事出來難測、事哉之由謳歌早速靜謐、只奉奉下恐耳、或說房州爲申請御和陸事、以無勢之所從、近日可上洛云々、爲被止彼事、被遣相國寺長老云々、十五日關東事已屬無爲、鎌倉左兵衛督持氏卿切腹之由、註進之故也、此事去十日事也、相國寺住持先日爲御使下向關東、管領上杉房州可隨上意之由申之、仍武衛切腹、

今度刎首事、永絕窺覷、不可致之策也、其後警固事有沙汰鎮西撰補守護人器用發遣海邊國々止、
京都大番役被差置在京人、公家武家減省公事、行儉約、休民庶、皆是爲軍旅用意也、

〔關東評定傳〕弘安二年六月廿五日、大元將軍夏貴、范文虎、使周福、樂忠、相具渡來、僧本曉房靈果、通事
陳光等著岸、牒狀之旨等如前々、於博多斬首、

ナシ、扱ハ汝化生變化ノ物カ、イデ試ントテ、馬ノ灸ヲスル鐵ヲ赤ク燒立、面上ニ當ントシ給ヘバ、是ハ出羽ノ羽黒山ノ者ナリト、フルヒ／＼ゾ申ケル、扱コソ生所ハ顯レケレ、誠此比弘法大師ノ再誕也トテ、奇特ヲ多見セタルト也、信長ニモ奇特ヲ見セヨト責ツメテ宣ヘバ、ワタ／＼フルツテ物ヲモ已ニ申シ得ズ、カヤウノ賣子恣徘徊サセバ、諸人ミダリニ佛神ヲ祈リ、筋ナキ福ヲ願フベシ、尤世ノ費ナリ、唯信長ガ手ニ懸リ、其後神變通力ヲ以テ再生シテ見セヨトテ引ハラセ向ヨリ引刀ニテ、シヅカニ截ワラセ給ヘバ、神變通力ノ事ハイザ知ズ、弓手妻手ヘ分レタリ、此僧一人ヲ害シ給ヒシハ、吁億兆ノ惑ヲ解ニアラズヤ、

〔北條九代記〕下今年○建治元年四月十五日大元使着長門國室津浦、八月、伴牒使五人被召下關東、

九月七日於龍口刎首、

一 中順大夫禮部侍郎杜世忠大年四、

作詩云

出門妻子贈寒衣 問我西行幾日歸 來時儻佩黃金印 莫見蘇秦不下機

二 奉訓大夫兵部郎中何文著唐年八、

作頌云

四大元無主 五蘊悉皆空 兩國生靈苦 今日斬秋風

三 承仕郎回々都魯丁回々十二、

四 書狀官薰畏國人杲十年十三

五 高麗諱語郎將徐十年十三

作詩云

朝廷宰相五更寒 寒甲將軍夜過關 十六高僧由未起 算來名利不如閑

〔高祖遺書^八〕延曆寺別院雲居寺

可早禁斷一向專修惡行事

右頃年以來愚蒙結黨奸宄會衆名曰專修[○]

^中

此只爲佛法之怨魔專可謂緇門之天怪是以邪師^源

空存生之貴永沈罪條滅後之今亦刳屍骨其徒住蓮安樂賜死於原野成覺薩生蒙刑於遠流以此現

罰可察其後報

〔信長記^{十三}〕賣子僧無邊蒙斬刑事

其比無邊ト云廻國ノ客僧有ケルガ我ハ生所モ父母モナシ一所不住ノ僧ナリ我ニ不思議ナル秘法アリ是傳授ノ人々ハ於現世ニ無數ノ患難ヲ遁レ於來世ハ無量ノ罪障ヲ滅スト披露アリクレバ在々所々ノ男女甚以信仰セリ丑ノ時ノ受法ト云ケレバ夜中ニ群集スル事限ナシ散錢散米被物祿物等席上ニ充滿スレドモサヤウノ物ヲバ塊視シテ其儘捨置キ一紙半錢モ曾以私欲トセズ一郷一村ニ二日三日宛滯留シ夕ベニ來リ旦ニ過ギ更ニ三宿ノ慕ナシ或時安土ノ東石場寺鶴鷄坊ガ所ヘ廻リ來ル三月廿日夜御前ニシテ此沙汰アリケレバ其客僧コソ聞及ビタル者ナレ少見セヨト楠長庵ニ被仰ケレバ承テ鶴鷄坊ニ同心シテ登城アレト使ヲ遣ケレバ則具シテ參タリ内々此僧思フ様何様殿中カ或殿守ヘトモ被召上佛法商量ノ上ヲモ御尋アラバ俱舍淨實法相三論ノ沙汰顯密兩宗ノ事淨土ノ壓離穢土近求淨土或教外別傳不立文字或孔孟老莊ノ道ヲ以教化シ奉リ御崇敬ニモ預ラント笑フ含ミ居タル處ニ長庵彼客僧具シテ參テ候ト申ケレバ御厩ニ出給ヒテ立ナガラ無邊トハキヤツガ事カト被仰急度瞞玉ヘバ無邊案ニ相違シテゾ見エタリケル客僧生國ハト問給ヘバ無邊ト答中無邊ト云所ハ唐土ノ内カ天竺ノ内カト尋サセ給フニ天ニモ非ズ地ニモ非ズ又空ニモ非ズト答申セバ天地ヲ離レテハ何レノ所ニカ安身立命スト仰ケレバ擬議シテゾ見ヘタリケルニ有情非情ニ至ルマデ天地ヲ離ル事ハ

逍遙生死 四十二年 山河一革 天地洞然

六月二〇元弘十九日某ト書テ筆ヲ抛テ手ヲ又座ヲナラシ給トゾ見ヘシ田兒六郎左衛門尉後ヘ廻カト思ヘバ御首ハ前ニゾ落ニケル、

〔長曾我部元親百箇條〕略中

一出家形儀之事一ニハ不遂上聞落墮於仕者忽可_レ行死罪一ニハ不叶子細無之者夜中出行停止

一ニハ亂行之輩聞立於申上者一稜可_レ褒美右條々於猥者依其輕重可_レ爲流罪死罪事

〔法然上人行狀畫圖三十三〕かくて南都北嶺の訴訟次第にとゞまり専修念佛の興行無爲にすぐるところに、翌年建永元年十二月九日後鳥羽院熊野山の臨幸ありき、そのころ上人の門徒住蓮安樂等のともがら、東山鹿の谷にして別時念佛をはじめ六時禮讃をつとむ、さだまれるふし拍子なく、おの／＼哀歎悲喜の音曲をなすさま、めづらしくたうとかりければ、聽衆おほくあつまりて、發心する人もあまたきこえし中に、御所の御留主の女房出家の事ありける程に、運幸ののちあしさまに譏し申人やありけん、おほきに逆鱗ありて、翌年建永二年二月九日、住蓮安樂を庭上にめされて、罪科せらるゝとき、安樂見有修行起瞋毒方便破壞競生怨、如此生官聞提輩毀滅頓教永沈淪、超過大地微塵劫未可得離三途身の文を誦しけるに、逆鱗いよ／＼さかりにして、官人秀能におほせて六條川原にして安樂を死罪におこなはるゝ時、奉行の官人にいとまをこひ、ひとりの日没の禮讃を行するに、紫雲そらにみちければ、諸人あやしみをなすところに、安樂申けるは、念佛數百遍のち、十念を唱へんをまちてきるべし、合掌みだれずして右にふさば、本意をさげぬと知べしといひて、高聲念佛數百遍のち、十念みちける時きられけるに、いひつるに、たがはず、合掌みだれずして右にふしにけり、見聞の諸人隨喜の涙をながし、念佛に歸する人おほかりけり、

サへ又楚ノ囚人ト成給バ只今マデ命存テ、カ、ル憂事ヲノミ見聞事悲クレバト、一方ナラヌ思
ニ、一首ノ歌ヲ被詠ケル、

長カレト何思ヒケン世中ノ憂ヲ見スルハ命ナリケリ

罪科有モ、アラザルモ、先朝拜趨、月卿雲客或ハ被傳出仕尋桃源跡、或被解官職懷首陽愁、運通塞時
否泰爲夢爲幻、時移事去テ、哀樂互相替、憂ヲ習世中ニ、樂ンデモ何カセン、歎テモ由無ベシ、源中納
言具行卿ヲバ、佐々木佐渡判官入道道譽路次ヲ警固仕テ、鎌倉へ下シ奉ル、道ニテ可被失由兼テ
告申人ヤ有ケン、相坂ノ關ヲ越給フトテ、

歸ルベキ時シナケレバ是ヤコノ行ヲ限リノ相坂ノ關

勢多ノ橋ヲ渡ルトテ

クフノミト思フ我身ノ夢ノ世ヲ渡ルモノカハセタノ長橋

此卿ヲバ道ニテ可奉失ト兼テ定シ事ナレバ、近江ノ柏原ニテ切奉ルベキ由探使襲來シタイラ
デケレバ、道譽中納言殿、御前ニ參リ、何ナル先世ノ宿習ニヨリテカ、多ノ人中ニ、入道預進ヲ今更
加様ニ申候ヘバ、且ハ情ヲ不知ニ相似テ候ヘ共斯身ニハ無力次第ニテ候、今マデハ隨分天下、教
ヲ待テ日數ヲ過シ候ツレ共、關東ヨリ可失進由堅被仰候ヘバ、何事モ先世、ナス所ト思召慰マセ
給候ヘト申モアヘズ袖ヲ顔ニ押當シカバ、中納言殿モ不覺涙ス、ミケルヲ推拭ハセ給テ誠ニ
其事ニ候、此間儀ヲバ、後世マデモ難忘コソ候ヘ命ノ際、事ハ萬乘、君既ニ外土遠嶋ニ御遷幸由聞
エ候上ハ、其以下事ドモハ、中々不及力殊更此程、情色誠存命ストモ難謝コソ候ヘト計ニテ、其後
ハ物ヲモ被仰ズ、硯ト紙トヲ取寄テ、御文細々トアソバシテ、便ニ付テ、相知レル方ヘ遣テ給ハレ
トゾ被仰ケル、角テ日已暮ケレバ、御輿指寄テ乘奉、海道ヨリ西ナル山際ニ、松一村アル下ニ、御輿
ヲ昇居タレバ、敷皮上ニ居直セ給テ、又硯ヲ取寄聞タト、辭世、願ヲ被書ケル、

さすがあはれに思ひまいらせけれども、かくなをらせ給へかしと申ければ、その時、ひさを立なをし、くびをのべ、念佛の聲おこたらず、まゆせうにきられ給ひけり、此卿は、こんどの御むほんに、いんせんをかき給ふ人なれば、そのつみすでにをもしとて、かくまざいにおこなはれるが、後は一ゐんせんかうののち、此卿君をいさめ奉りしかん、狀す十つうのこりとゞまりて出たりしかば、さうしう、ぶしうもこうくわいせられけるとかや、略中一條のさいしやう中將は、遠山さゑもんのせうかげともあひぐし奉り、みのゝくにとを山へくだりて、きり奉らんとす、略中まうんたな引いきやうくんじ、をんがくこううにそうすときこえし程に、終にきられ給ひけり、

〔増鏡十六のさら山〕元亨のみだれのはじめにながされし、資朝の中納言をも、いまだ佐渡の嶋にまづみつるを、此程のついでにかしこにてうしなふべきよし、あづかりの武士に仰ければ、このよしをまらせけるに、思ひまうけたるよいひて、宮古にとゞめける子のもとに、あはれなる文かきてあづけけり、すでにきられる時の願とぞ聞侍し、

〔太平記〕四笠置囚人死罪流刑事附藤房卿事

笠置城被攻落刻、被召捕給シ人々事去年ハ歳末ノ計會ニ依テ暫被關ヌ、新玉年立返レバ、公家朝拜、武家沙汰始テ後、東使工藤次郎左衛門尉、二階堂信濃入道行珍、二人上洛シテ、可行死罪人々、可處流刑國々、關東評定ノ趣、六波羅ニシテ被定、山門南都諸門跡、月卿雲客諸衛司等ニ至迄、依罪輕重禁獄流罪ニ處スレ共、足助次郎重範ヲバ、六條河原ニ引出、首ヲ可刳ト被定、萬里小路大納言宣房卿ハ、子息藤房、季房二人罪科ニ依テ武家ニ被召捕、是モ如召人ニテゾ坐シケル、齡已七旬ニ傾テ、萬乘聖主ハ遠嶋ニ被遷サセ給ベシト聞ユ、二人賢息ハ死罪ニゾ行ハレンズラント覺テ、我身

大納言殿に参りあひしかば、それよりたゞのお卿は都へかへりのぼられければ、あひどもなふてくだり給ふ、あせちの中納言このよしを御覽じて、かへる浪こそうら山しけれといはれければ、大納言、これもゆめにてや候らんと計にて、たがひにわかれたまひけり、中のみかどの中納言むね行卿は、をやまのさゑも、もんども長ぐし奉りてくだりけるが、どをたうみのくにきく川の宿に付給ふ、こゝをばなにといふ所ぞとどひ給へば、きく川と申とこたへければ、中納言、すまゝをこひよせ、やどのはしらにかきつけ給ふ、中御さいこの御事、けふの夕にはすぎさせ給ふまじと申ければ、中納言、うちうなづき給ひて、木せ川の宿に御てうすいの爲とて立より給ひ、かくぞかきつけ給ひける、

けふすぐる身を浮島が原にてぞつゆの命は捨てさだめける、つゐにその日のくれかたに、あひづの原にてちうし奉る、とし四十七、あはれなりしありさま也、又あせちの卿は、ただの五郎のふみつあひぐし奉てくだりけるが、ふじのすそこさかといふ所におろし奉る、のふみつ申けるは、すでに御ことをちうし奉るべきよし、かまくらよりの御つかひ参りて候へば、たゞ今この所にてちうし奉るべし、御さいこの御よういあそばし候へど申ければ、みづちか卿、かねてより思ひもうけられしかども、いまはの時にのぞんでは、さすがこんじやうのなごりたゞ、今ばかりと心ばそくや思ひ給ひけん、まばらくありて、まゆつけせばやどのたまへば、まさい候はじとて、あたりよりそう一人たづね出し、かひたもたせ出家せさせ奉る、中たちごりはたけ田の五郎がらうどう内藤七郎といふものなり、あせち卿のすはり給ふ所山のそばにて、片さがりなれば、かくては御みやつかひあしうや候はんと申せば、あせち卿、ねん佛をどゞめ、うしろを見かへりて、なんちよく聞け、われ年久しく君につかへ奉り、おほくのしざい類ざいのぶぎやうせしむくひに、いまかゝるめにもあふぞかし、あまり心にまかせて申物かな、といはれければ、たちごりも、

〔信長記〕^四延暦寺炎上同僧徒悉被燒殺事

辛未^二元龜^一

九月十一日、信長卿瀬多ノ山岡玉林齋所ニ宿陣有テ、同十三日、比叡山堂舍佛閣悉令

燒失[○]

^中

顯宗秘法聖教、帝都累代記錄、一時ニ灰燼トゾ成ニケル、碩學宏才老僧容顏美麗兒童、或

被刎首或生虜レテ、[○]下

幕府加判信卿

〔承久軍物語〕^五

承久三年六月十四日、はうくへむけられけるくはんぐん、はいほくせしかば、^中

廿日、一院[○]

^{鳥羽}

四つち殿にうつらせ給ふ、すでに相州武州いんざんすべきよしきこしめしけ

れば、さへぎつてちよくしを立られちやうほんの人々におゐては、けうみやうをゑるし出さる

べし、まばらくぶしのさんかうをどめ申べきよし仰られければ、おのく仰に、えたがひ給ふ

ほどに、くぎやう六人のきやうみやうをゑるし、六はらに下さる、ばうもんの大納言たゝのお卿

中のみかどの中なごんむね行きやう中納言ありまさ卿、あせちの中納言みつちか卿、かいのさ

いしやう中將のりよし卿、一でうのさいしやう中將のぶよし等也、^中これによつて、くまの、

法いん、あまの、四郎ざゑもんをはじめとして、いけざりのともがら、ことくく、六條河原に引

出され、くびをはねられけるこそかなしけれ、^中

^中

中にも、後藤大夫はんぐはんもときよをば、ま

そくさゑもんもどつな申うけて、きつてけり、他人にきらせて、けうやうしたらんこそまかるべ

けれ子の身として、まさしく大をんのち、をちうしけるもどつなが心こそ、あさましけれ、その

比、西八でうのにこうと申は、こうふしやうぐん、[○]

^{實朝}

の御こうしつばうもんの大納言のいもう

とにておはします、^中かの大納言は、一方の大將なれば、そのつみのがれがたくおもひまいら

せ侍れども、させる弓やどる身にても候はず、故おほいどの、まやうりやうになだめられ候て、

このたびのいのちたすけさせ給ふべくや候と申されければ、二位どのあはれとおぼしめし、さ

らば大納言をばたすけ奉れどの御つかひをのぼせられしが、ごをたうみのくにまひぎかにて、

貞明元年六月庚寅朔賀德倫帥將吏請晉王入府城慰勞。中晉王下令自今有朋黨流言及暴掠百姓者殺無赦以沁州刺史李存進爲天雄都巡按使有訛言搖衆及強取入一錢已上者存進皆梟首磔尸於市旬日城中肅然無敢喧譁者

〔安齋隨筆前編八〕一一錢切 右同書志望院郡眞里谷村に天寧山眞如寺と云上總曹洞派

總錄ノ寺あり寺領三十石門前に禁勝あり條目ノ文ニ門前百姓於非法有之者可爲一錢切事と按に一錢切詳ならず清正記を考に太閤清正に賜りし高麗陣中ノ制札ニ軍陣於味方地亂妨狼藉輩可爲一錢切とあり戰國の頃普キ詞と見ゆ猶又可考貞丈按一錢切と云ハ犯人に過料錢を出さしむる事ならん切ノ字ハ限なるべし其過料を責取ルに役人を差遣し其犯人の貯へ持たる錢を有り限り取上る譬ば僅に一錢持たるども其一錢限り不殘取上るを一錢切と云なるべし搜し取る事と見ゆ

〔太平記十六〕小山田太郎高家刈青麥事

去年義貞西國ノ打手ヲ承テ播磨ニ下著シ給時兵多シテ糧乏若軍ニ法ヲ置ズバ諸卒ノ狼藉不可絶トテ一粒ヲモ刈探民屋ノ一ヲモ追捕シタランズルモノヲバ遂可被誅之由ヲ大札ニ書テ道ノ辻々ニヅ被立ケル

〔百練抄後十〕文治元年六月廿一日壬申前内大臣宗盛并右衛門督清宗於近江國勢多邊斬首云

云三位中將重衡於南都又斬首法華寺島居前合戰之時

〔吾妻鏡二十一〕建曆三年〇建保閏九月十九日丙戌戊剋土肥先次郎左衛門尉維平被刎首是依爲

義盛田和與力參也而爲囚人送數日之間貽其特之處終以如此云云

〔喜連川判鑑〕應永二十六年五月六日本一授ノ大將榛谷小太郎重氏降參ス木戸相伴テ鎌倉へ歸ル榛谷ヲ由比ノ濱ニテ誅セラル

〔清正記〕定

一軍勢於味方地亂妨狼藉輩可爲一錢切事。○中略

天正廿年○文錄元年正月

御朱印○豐臣秀吉

〔薩藩舊記後集十五〕按

今度大明國御動座付國々海道筋其外軍勢陣取之任々地下人百姓等家を明於逃散者可爲曲事宿々町なみ如有來商賣可住自然陣被往還諸人或押買或押賣或亂妨狼藉之輩者可爲一錢切其外狼儀於有之者如御法度可被加御誅罰者也

天正廿年正月五日

御朱印○豐臣秀吉

〔讀史餘論十二〕秀吉天下の事

此人軍法に因て一錢切といふ事を始めらる、たとへば一錢を盗めるにも死刑にあつ、

〔隋書二十五〕開皇十六年有司奏合川倉粟少七千石命斛律孝卿鞠問其事以爲主典所竊復令孝卿馳驛斬之沒其家爲奴婢鬻粟以填之是後盜邊糧者一升已上皆死家口沒官。○中略是時帝○高祖

意每尙慘急而姦回不止京市白日公行掣盜人間強盜亦往往而有帝患之問群臣斷禁之法楊素

等未及言帝曰朕知之矣詔有糾告者沒賊家產業以賞糾人時月之間內外事息其後無類之徒候

富人子弟出路者而故遺物於其前偶拾取則擒以送官而取其賞大抵被陷者甚衆帝知之乃命盜

一錢已上皆棄市行旅皆晏起晚宿天下懷懾焉此後又定制行署取一錢已上聞見不告言者坐至

死自此四人共盜一棧桶三人同竊一瓜事發即時行決有數人劫執事而謂之曰吾豈求財者邪但

爲枉人來耳而爲我奏至尊自古以來體國立法未有盜一錢而死也而不爲我以聞吾更來而屬無

類矣帝聞之爲停盜取一錢棄市之法

〔資治通鑑二百六十九〕均王後梁

箇中行刑

軍中及戰後行刑

〔言繼卿記〕天文十三年八月十一日戊寅、武家之囚人和田新五郎、三好被官爲京兆○細川被申付藥師寺與一、於モドリ橋頭ヲノコギリニテ引云々、○中今一人若公乳人之官女、是ハ八時分事之上張付、被渡京中、六條河原ニテ被殺云々、是モハダカニテ被渡儀、餘以不可說之儀也、

〔康富記〕享德三年九月十四日壬戌、是日管領細川右京被官人、礪谷四郎兵衛尉兄弟、於管領屋形閉之被誅戮之、是畠山彌三郎沒落之時、寄宿之處、許容引起、今度大儀之間、上意有御憤之、故被仰付管領、爲後昆之懲、被誅之由、風聞矣、

〔光明寺殘篇〕軍中及戰後行刑官軍可存知條々、○中

一路次狼藉事、特可有沙汰、於侍者懸主人、嚴密致沙汰、至凡下輩者、不日可誅事、○中

元弘三年四月日

○按ズルニ、此一條ハ元弘三年四月、後醍醐天皇ヨリ千種忠顯ニ賜ヒタル軍令ナリ、

〔信長記一〕芥川小清水瀧山城開退事

信長卿ハ清水寺ニ在々ケルガ、於洛中洛外上下ミダリガハシキ輩アラバ、一錢ギリト御定有ツテ、則柴田修理亮坂井右近將監、森三左衛門尉、蜂屋兵庫頭、彼等四人被仰付ケレバ、則制札ヲゾ出シケル、

禁制

一當手之軍勢、亂妨狼藉等之事、

一獵山林竹木伐採之事、

一押買押賣、井追立夫等之事、

右條々於違背之輩者、速可被處嚴科者也、仍如件、

永祿十一年十月十二日、

一無故人を害科事、猶札閉之上を以、則可行死罪、品可有輕重事。略○中
一狩山普請場於其外、無體人を射科事、即時可成敗、若意趣遺恨於在之儀、其身行死罪、親類迄可懸科事。略○中

一他人女ぬすむ事、縱雖爲歷然、男女共同前不相果者、可行死罪。略○中

一譜代者定事、男女共主從十ヶ年召遣、其中無理者可爲譜代、同子者有儘可爲譜代、男子者父方へ付、女子者母方へ可付、縱雖令折檻相放與云、證據無之者、他主不可取、若背此旨、主取於仕者、一往相屈、以憲法取戻、又可召遣、歟、可行死罪、歟、其段勿論、本主次第也、若令逐電行方、不知者、雖爲何ヶ年、付屈之上を以、可取歸事。略○中

一不寄給人、百姓隱田仕者、閑立於途、言上者、一稔可褒美、其上を以、奉行中相談仕、檢地帳を以、令沙汰、歷然地頭隱置候者、太以可處罪科、若百姓相隱候者、檢地以來之途算用、以利倍取、皆濟上にて可追失、若令難誑者可斬頭事。略○中

一定飛脚事、其在所之庄屋、遠近可召遣急用之時者、聊運々仕候者、忽可斬頭事、

〔關八州古戰錄〕野州薄茶原合戰、附千本秋蠅齋誅セラル、事

天文二十年ノ春、秋蠅齋、宇都宮家ニ語ハレ、那須高資ニ鳩毒ヲ與ヘ失シガ、久ク露顯ニ及ズ、連々ニ發覺シ、君臣ノ間睦カラズ、黑羽ノ大關高増、鳥山ヘ弓ヲ引、内輪崩ノ最中故、默シテ月日ヲ過シガ、資晴腹黒憎思テ、果テ誅シケリ、

海軍人道路

〔皇帝紀抄後七〕元暦元年正月廿六日、義仲等首義經渡大路、同郎從樋口二郎兼光、爲追討行家遣、

和泉國之間、廿日入洛於七條朱雀合戰、透龍鞍馬寺山、後日捕之、生虜渡大路之後、斬首、

〔親長卿記〕文明十三年四月卅日、今日聞、去廿六日、盜人加茂氏人、室町殿大納言殿重代御大刀、乘雜役馬被渡一條大路、至六條河原被誅云々、

八九人も害しかばねをわか君の上に打かさねければ、不心不心丸毛が女房走りより、關白家之御子之上へ、かくあればとて、かさね侍る物か奉行は何のためぞ、かほどの事をえも制し候はぬかと散々にの、しり侍れば、其よりけしき物ふりて見えにけり、あはれなるかな悲しいかな、かく痛ましくあらんと兼て思ひなば、見物に出まじき物をと千悔の聲々も多かりけり、廿餘人伐かさねければ、河水も色を變じたり、三奉行之人々は強ていためるけしきもなく、おほどかに見え、彌藏人そこをまられけれ、其夜洛之辻々に、何もの、まわざやらむ、

天下は天下之天下なり、關白家之罪は關白家之例を引可被行之事、尤理之正當なるべきに平人の妻子などのやうに、今日之狼藉甚以自由なり、行末めでたかるべき政道に非ず、吁因果のほど御用心候へくと書て、其楮端に、

世中は不昧因果の小事やよしあしどもにめぐりはてぬる

大名行列

〔甲陽軍鑑品第四十下〕一關東の上杉管領花の制札に 此櫻花一枝も折取候はゞ、あたり八間流

罪死。罪に仰付らるべき者也、仍如件と立られたるなり、

〔今川記五かな日録〕一喧嘩に及輩不論理非、兩方共に可行死罪也、將又あひて取かくるといふども、令堪忍刺被疵においては、事は非儀たりといふども、當座おんびんのはたらき利運たるべき也、兼又與力の輩、そのまばにおいて疵をかうふり、又は死するども、不可及沙汰のよし先年定了、次喧嘩人の成敗、當座その身一人所罪たる上、妻子家内等にかゝるべからず、但まばより落行跡において、妻子其咎かゝるべき歟、雖然死罪迄はあるべからざるか、

〔長曾我部元親百箇條〕挖

一盜賊之事、即時搦捕奉行方迄申届於歴然者、可斬頸事勿論也、若搦捕事於難成者、則可相果、右此旨猥申付候者、在所庄屋可爲曲事、事略中

右之奉行は前田德善院以主増田右衛門尉盛長石田治部少輔成三にてぞある、其勢三千何れも兵具を帶し、いかめしき出立なり、同四年文祿八月二日の事なるに三條河原に二十間四方に堀をほり、鹿垣しちかきをゆひまはし、橋の西南に三間に塚をつき、公秀之御頭を西向に居置寵愛二十餘人の女郎達に拜ませ可申旨兼て被仰出しとなり、二日の朝、さもあらけなき河原之者共、具足甲を著し、大刀長刀を拔持、弓に矢をはげ、實凄じき出立にて、聚樂南地門之西、尺地をあまさずなみゐたり、略中二日の朝も、どうかうの、しるうちに日もたけ、れば、追立之官人等、どくどく、と聲々に急きつるあり、さまあはれなり、とても叶ぬ道にせまりし事を各覺悟し給ふて、二十餘人の衆よろほひ出給へば、物のわけをも知ぬ河原之者、小肘つかんて引立、車一兩に二三人づ、引のせ奉るさへに、若君姫君の御事さま授も、と云ぬ者もなく、其身の事は不及申見物の貴賤も、囁と鳴出、まばしは物のわけも聞えざりけり、略中三條河原に著しかば、車よりいだきおろし奉りぬ、各秀次公の御首の前へ、我おとらじとはらとより給ひふしをがみ候しさま、あさからす見えにけり、略中こはいかにと見る處に、五十許なる鬚男の、其さまより心もあらけなく見えしが、さもうつくしき若君を、狗をひつさぐるやうに物し、二刀さし候へば、御母義原女其外一同に鳴立給ひけり、見る人たちの袖も打しほれ、聲を添しもことほりなり、三歳になり給ひし姫君、母上お辰の御かたへ、いだしきつ、我をも害し侍るかとおほせければ、南無阿彌陀ととなへ候へよ、父關白殿にやがてあひ侍るぞとて、念佛をすゝめ候へば、うゐことに十篇ばかり唱給ふうきことのかぎりなるべし、あらけなき河原の者共云けるは、左やうにあこがれ給ひても叶はぬ事なりとて、母上の御膝より奪取て、心もとを二刀さして投すてにけり、いまだひくどし給ふに、母上心もくれまどひ給はん計なるに、左も、としてまづ、我を害し侍れよとて、西にむかひ給へば、御首は前に在、見る目もくれて、中々肝たましゐも消はて、われからなくぞ覺える、はや

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿三年^{○安貞元年}三月十九日戊辰、去九日謀反人事有評議、或是不足言事也、造意之金、還不能信用、且物狂之所致、歟、關東御分郡郷、可被追放之由、有意見、或民間野心、殊以難、被有刑法、爲、向後懲惡、可被行斬罪之旨申之、遂罪名落居之間、二位家^{○源賴朝妻北條政子}、第三年之御佛事以後、可有沙汰云云、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿三年六月十八日乙丑、卯刻武藏二郎時實^{武州常陸二男年十六}、爲家人高橋二郎^{京高橋被住人也}殺害、給傍輩兩三人同被害畢、此間明日依、可爲丈六堂供養成群、御家人等競走、爰伊東左衛門尉祐時郎從、伴房進於高橋、卽日於腰越邊被處斬刑、經最中甚雨、如沃云云、

〔甲陽軍鑑^{品八}第十七〕天正三年五月廿一日に、信長家康に、勝頼公、三州長篠にて負給ひてより、越前も信長手に入、兼て四年以前に、信立公御在世の時、國司^{北畠氏}伊勢使を差上申され候事顯れてあれは、こそ織田掃部と云者を、信長よりお茶せむのおとなに申付られたるを、右のつげ三郎左衛門澁川兵部兩人にて、信長へさへ、織田掃部を、當年四月廿五日に、伊勢田丸と申所にて、ひよき大膳と云伊勢先方の侍に、申付きらする、此科は國司方の親類を、掃部養ひたると云科也、是は天正四年四月なり、其年の霜月廿五日に、三瀬にて、大御所^教に、具腹をきらする、討手はかるの左京とて、國司譜代の衆なり、

〔信長記^{十二}〕浮土宗與、日連宗論之事

同^{○天正七年五月}、中旬ノ事ナルニ、淨土宗與、日連宗ノ宗論ニ及ブ事有^{○中抑此起リハ、建部紹智大膳傳介ガ所爲也シガ、剩無事ノ扱ヲモ承引不申、其罪不淺トテ、二人共ニ頸ヲ被刎、}

〔多聞院日記〕文祿三年八月五日、千人切大逆ノ仁以上十六人、同女房衆召捕方々引セテ可切トテ、郡山ヨリ今日奈良へ引來、京へ上云々、淺猿歟、

〔太閤記^{十七}〕秀次公御若君姫君并御寵愛之女房達生害之事

セルナリ、

〔御成敗式目〕一殺害刃傷罪科事 付父子皆相互被懲否事

右或依當座之諍論或依遊宴之醉狂不慮之外若犯殺害者其身被行死罪并被處流刑○判一雖被沒收所遺其父其子不相交者互不可懸之次刃傷科事同可准之

〔吾妻鏡九〕文治五年九月六日癸亥河田次郎持主人泰衡原之頸參陣岡中以景時原被仰合

河田云汝之所爲一旦雖似有功獲泰衡之條自元在掌中上者非可假他武略忽忘譜第恩鼻主人首科已招八虐之間依難抽賞爲令懲後輩所賜身暇也者則預朝光城被行斬罪云云

〔平家物語十二〕六代きられの事

去程に六代御前盛于維やう／＼おひたち給ふ程に十四五にも成給へばいとゞみめかたちう

つくしくあたりもてりかゞやく計也中去程に六代御前は三位のせんじとてたかをのにおく

におこなひすましておはしけるを、かまくら殿さる人の子なりさるもの覺文のでしなりたど

ひかしらをばそり給ふ其心をばよもそり給はじとてめし取てうしなふべきよし、かまくら殿

より公家へそうもん申されたりければやがてあん判官すけかねに仰てめし取てくはんどう

へぞくだられるするがの國の住人おかへのごんのかみやすつなに仰せてさがみの國たこ

ひ川のはたにてつゐにきらにけり十二のとしより三十にあまるまでたもちけるは、ひとへ

にはせのくわんおんのりしやうとぞ聞えし三位のせんじきられて後平家の子孫はながくた

えにけり、

〔吾妻鏡十六〕建久十年元正治十月廿七日丙戌女房阿波局告結城七郎朝光云依景時原親、讒訴、汝

已擬蒙誅戮其故者忠臣不事二君之由令述懷、謗申當時是何非難敵哉爲懲、蕭傍輩、早可被斷罪之

由具所申也、

文中、腰越邊トアルモノモ亦此ニ外ナラズ、

〔建内記〕嘉吉元年六月十八日癸未、傳聞先日鎌倉故持氏卿子息首京著之時、令供奉、結城ノナニガシトテ、御乳父ト稱シテ奉付テ京著了、此首實否及拷問、申狀之趣不分明云々、又説爲實首、去十四日於河原被切首了云々、

〔碧山日錄〕長祿四年三月廿八日乙巳、南朝將軍之孫楠木某、與其僞竊謀反、既而事發、遂遭囚擒、下於大理、是日於六條河上、吏刎其頭、

〔相州兵亂記〕持氏御出家并憲直以下自害之事

若宮社務尊仲モ被生捕ケルヲ、是ハ亂世ノ張本ナレバ、尋仰ラル、事モアルベシトテ、京都へ上セケルガ六條川原ニテ被誅、

朝廷行判

〔太平記十一〕金剛山寄手等被誅事、附佐介貞俊事

二階堂出羽入道道蘊ハ、朝敵ノ最一、武家ノ輔佐タリシカ共、賢才ノ譽、兼テヨリ數聞ニ達セシカバ、召仕ルベシトテ死罪。一等ヲ許サレ、懸命ノ地ニ安堵シテ居タリケルガ、又隱謀ノ企有トテ、同年建武元年秋ノ季ニ終ニ死刑ニ被行テケリ、

〔神皇正統記後醍醐〕建武乙亥二年の秋のころほひにし、高時が餘類、謀叛をおこして鎌倉に入りぬ、中都にもかねて陰謀の聞えありて、嫌疑せられける中に、權大納言公宗卿めしおかれしも、

このまぎれに誅せらる承久より關東の方人にて七代になりぬるにや、高時も七代にて滅びぬれば、運の然らしむるかどは覺ゆれど、弘仁に死罪をどめられて後、信賴が時にこそ珍らなることに申し侍りけれ、威里の寄も久しくなり、大納言以上にいたりぬるに、同じ死罪なりともあらはならぬ法令もあるに承り行ふ輩のあやまりとぞ聞えし、

○按ズルニ、あらはならぬ法令トハ、獄令ニ七位以上及婦人犯、非斬者絞於隱處トアル文ヲ指

濃守申定るなり、

〔會津家世實紀〕^五正保二年六月十日、鈴木五郎兵衛儀、御法度を相背候ニ付、御普請方割役人吉田五兵衛を以、放討被仰付、

五郎兵衛儀、役名不屋敷裏土手ニむざと道を付候ニ付、何れに罷在候哉不詳、吉田多久系譜に下、邊ニ可、有之候、夜廻り之者斷候得共、承引不致、又御堀ニ而魚を取候間、無用之由斷候得者、案外成申様、御法度を相背候を以、御成敗可被仰付と被仰出、五兵衛に放討被仰付候故、則頭御普請奉

行堀田彈右衛門屋敷ニ而、本町桂林寺、通南側東角五兵衛ニ申付、五郎兵衛を致成敗、世倅長四郎^四二十小傳

五十四兩人をも直ニ五兵衛義五郎兵衛宅へ罷越致成敗候處、長四郎義拔合、五兵衛と相大刀ニ

罷成終に長四郎をば討留候得共、五郎兵衛儀^茂此相大刀ニ而面々一ヶ所かす手を負、所惡之

故か、色々養生いたし候得共、不相叶、同廿六日相果候、依而幼少之世倅兩人有之候間、御情ニ一

兩人扶持米被下度旨申上候得ば、尤ニハ思召候得共、五兵衛事、御普請割杯も致其身利發者之

由、旁以不便ニ被思召候、同日彼世倅御用ニ立候時分迄代をもいたし子供を不便ニ存候様成、

近き親類歟縁者杯候ハ、五兵衛ニ被下之通ニ御扶持切米被下候半と思召候、乍去左様之近

き者無之候ハ、一向之他人ハ成間敷と面々存候ニおゐては、扶持方計兩人分可被下候條、兩

様之内相談之上可申付旨被仰下候處、陣代可致者も無之候間、逆も之御情御扶持旨計被下候

様親類共申ニ付、再言上之上、兩人之世倅彌馬之助^八市十郎^六御扶持方兩人分被下之、

〔喜連川判鑑〕應永二十四年五月二十九日、若松治部大輔、逆心ヲ起シ、禪秀與力ノ殘黨ト入間川ニ

出張、舞木宮内丞、去年禪秀ニ與ミセシ事ヲ悔ミ、若松ヲ討テ罪ヲ謝セン爲メ、入間川ニ出向ヒ合

戰、舞木勝利ヲ得テ、若松ヲ生捕リ、鎌倉ニ參ル、閏五月十三日、於龍口誅ス、

○按ズルニ、鎌倉ノ刑場ハ龍口ニシテ、即チ後條ニ引ケル吾妻鏡脫漏嘉祿三年六月十八日ノ

〔甲陽軍鑑六品第十四〕味方原合戰物語之事

信玄公立腹ましまし略○中

此た、かひ合戰○上田

五左衛門は旗本において我代に今迄幾度のせり

あひ大合戦を責とる時、一度の手柄もなく、諸傍輩の取沙汰仕、人に腹をたゝするは大惡黨人なりとあそばして廿人衆に仰付られ、則からめ取、あひ川のはたにて縛頸しほりをきられ申す、

〔甲陽軍鑑二十品第五十五〕

落合市之丞と申侍は、度々の武功あり、略○中

勝頼公御あてがひ惡故他國仕

たるに、市之丞母を人質に御取候へば、剛の武士なる故歸り申こゝにてよくはなされずして、足輕大將の小幡又兵衛、遠山右馬助兩人に仰付られ、搦とらせて、見ごりのためにまばり頸をきれど、勝頼公仰られ、彼市之丞を御成敗なり、

〔古老物語〕むかしは、侍、徒士、中間を、其主人々々にて成敗するもの度々なり、凡その科人は、略○中

一慮外したるもの侍、中間ども主人の手討多し、またまばり首はねるもあり

右は、誰さだむるとなく、江戸中一同の風儀なり、略○下

〔甲陽軍鑑十四品第四十下〕

一右はなし。うち。の者家の内或はそにても、各懸ぬる所へ、誰にても最前

にかゝつて切むすび懸つ引つみだれて勝負をするに、脇からもうしろからも別人よりて、刀又は長道具弓などにて、そのどが人をころし候はゞ、定てころしたる人、是をまごめてありとあるは、大きに非儀なり、子細は、人のよりかぬるをぬき出かゝる心はすぐれたり、其上人のきりあふ所へ、よこからもうしろからもかゝりては、まよからむ、さるにつき、はじめまづ切あふ人の手柄一なり、二番目にころす人も、はじめ勝負いたす人につゞきての手柄なり、此わかりは、人のかゝらぬに一人勝負をはじむる意地は、人にすぐれてやさし、此者合戦せりあひにも、かくのごとくの上は、定て一番鎗ならん、扱又人にたゝかはせて、仕よき所へ參るは、右の人よりはるゝ間のある心ばせなる故、是をばはそ心ばせと、むかしが今に至るまで、武士の作法にて候と、馬場美

〔吾妻鏡〕^七文治三年正月廿三日乙丑前廷尉知康同意于行家義顯叛逆事露顯之後爲通一旦之難
參向關東訖斷罪之篇二品頼朝願難被決賢慮之間度々雖被伺奏于今依無左右言上事等不預分
明勅裁之條有恐讐之由所被仰遣黃門経房之許也

〔吾妻鏡〕^六文治二年二月一日己酉今日北條殿於六條河原劔群黨十八人首凡如此犯人者不可渡
使廳直可處刻刑之由云云

〔吾妻鏡〕^{二十八}寛喜三年四月廿一日又被仰遣六波羅條々略中次強盜殺害人事於張本者被行斷
罪至與黨者付鎮西御家人在京輩并守護人可下遣

〔太平記〕^{二十}佐渡判官入道流刑事

早ク道譽秀綱ヲ給テ死罪ニ可行由ヲ公家へ奏聞シ武家ニ觸レ訴フ此門主ト申モ正キ仙院ノ
連枝ニテ御座有レバ道譽ガ翔レ無念ノ事ニ憤リ思召テアハレ斷罪流刑ニモ行セバヤト思召ケ
レ共公家ノ御計トシテハ難叶時節ナレバ無力武家へ被仰處ニ將軍頼朝左兵衛督足利
モ飽マデ道譽ヲ被最負ケル間山門ハ理訴モ疲テ歎狀徒ニ積リ道譽ハ法禁ヲ輕ジテ奢侈彌恣
ニス略中武家モサスガ山門ノ嗽訴難默止覺エケレバ道譽ガ事死罪一等ヲ減ジテ遠流ニ可被
處歎ト奏聞シケレバ則院宣ヲ成レ山門ヲ宥ラル

〔松隣夜話〕^上平井ニハ則政公杉氏上出奔ノ後長尾佐次右衛門忠勤ニ依テ中々恙無リケルガ龍若

君政子御乳持ノ一類馬方九里ガ非道ノ仕配ニ依テ佐次右衛門腹ヲ居彙翌年天文七年正月在所
ヘ引込其後ハ通路絶ケルニ依テ守護ノ地侍モ段々分散致シ僅殘留者三十餘人上下四五百人
ニ過ズ此時氏康島左近大道寺ナド云侍ヲ大將トシテ大勢ヲ差向平井ニ於テ其聞ヘ夥シカリ
ケレバ乳母ノ一類馬方新介九里采女等其外相談シ扱モヤ命ヲ助ルトテ龍若殿ヲ取參セ氏康
ヘ降參ス氏康義將タルニ依以ノ外之ヲ惡ミ給フ降參ノ輩彼是八人縛リ略中切獄門ニ掛ラル

近曾山僧神人等寄事於面々沙汰有振於所々風聞其旨趣有由緒經上奏可隨理非而或稱寄附神領押妨甲乙之庄園或號供用物煩遠近之屋舍殆有施耻辱者又有及佗僚輩爲世爲人不可不禁自今以後可令停止若背風衝猶致猖藉者縱雖爲神人宮仕爭遁皇憲朝章令解其職仰有司并武家速札罪過則無禍凡於在家亂責負累物者處々綠林於行路點定運上物者准之白狀早任其愆可行其科者斷罪本主及得語人宜下知本社本寺守此嚴制莫失墮矣

〔御成敗式目追加〕一犯人斷罪事

右爲夜討強盜之張本所犯無道方者可被行斬罪也是則爲相續傍向後也其外至枝葉之輩者可召進關東可被流遣夷島也以前條々存此旨可令致沙汰之狀依仰執達如件

文曆二年三月二十三日

武藏守判

相模守判

駿河守殿

掃部助殿

〔建武以來追加〕東福寺條々應安五十十九御沙汰、執筆布施彈正大大夫入道、

一當知行地安堵事應安

以一同之法被下宜旨之上者重不及沙汰但依諸人之妨有愁申之輩者尋究當知行之所見披見文書正文所申無相違者載于名字可給安堵此上若雖段步以不知行之地寄事於安堵令掠領者隨支證出來可被沒收本領無所帶者可斷罪其身

〔吾妻鏡〕五文治元年十二月廿六日乙亥前中將時實朝臣同意豫州義經赴西海之間於路次生虜之

今日武者所宗親相具所參向也又左府御書到來是故小松內府重盛末子前土佐守宗實者自幼齡當初爲猶子而依餘殃可有斷罪之由風聞枉欲申請之云云可存其旨之趣被報申云云

古事類苑

法律部十八

中編

斬罪

死罪ノ正刑ハ從來絞斬ノ二刑ナリシガ、鎌倉幕府ノ比ニハ絞罪ハ久シク絶エテ、專ラ斬ノ一刑トナレリ、故ニ當時死罪ト云ヘバ斬罪ノ事ナリ、又斷罪ト云フハ、罪狀ヲ判決スル事ナルヲ、此時ニハ斬罪ヲ或ハ斷罪トモ云ヘリ、幕府ニテ斬罪ヲ行フニハ、之ヲ檢非違使ニ付スベキニ、鎌倉ノ初メ、京都ニ於テスラ必ズシモ然ラザル事アリ、其後ニ至リ、テハ益朝廷ヲシテ關涉セシメズ、其刑場ハ、京都ニテハ多ク六條河原ニ於テシ、鎌倉ニテハ龍口ニ於テセリ、足利幕府ノ末ニ至リテハ、斬首ニ縛首ト云フ名アリ、罪人ヲ面縛シテ斬ルヲ云フナリ、鎌倉幕府ノ時ヨリ、罪人ヲ部下ノ士ニ付シテ管守セシメ、而シテ後ニ處刑スルアリ、又下手人ヲ被害者ニ付シテ甘心セシムルアリ、又罪人ヲ馬ニ乘ラシメテ道路ヲ行リ、普ク衆人ニ示シテ、而シテ後ニ刑ヲ行フアリ、夫ノ管領ノ館中ニシテ斬ヲ行ヒシガ如キハ特例ナリ、軍中ニシテ敵ヲ捕ヘテ斬首シ、戰勝ノ後ニ敵ノ首ヲ斬ルガ如キハ刑トハ云フベカラザレド、固ヨリ相離レザルモノニシテ、參考スベキ事モ多クレバ、今此篇ニ載セタリ、幕府ニテ承久元弘ノ間ニ、搦紳ヲ斬リシガ如キ、蒙古ノ使ヲ斬リシガ如キ亦然リ、法律部ニハ此以下ニモ此類多シ、

名稱

〔新編追加〕一宜旨事 寛喜三年六月九日

宮刑

七六一

斷手若指

同

劓刑

七六三

捺火印

七六五

剃半鬢

七六六

磔死屍

軍中及戰後行刑

逆張付

雜載

○

串刺

鋸挽

牛裂

車裂

火焙

糞殺
投水

開入
臥漬

名稱

燒松炙

焚殺

○

糞殺

臥漬

投水

肉刑

七三八

同

七四二

七四四

七四四

七四五

七四九

同

七五一

七五二

同

七五三

七五七

七五八

幕府行刑

七一七

大名行刑

七一九

館中行刑

七二二

軍中行刑

同

雜載

七二三

梟首

名稱

七二五

梟首法

同

以斬首徇道路

七二八

幕府行刑

同

梟死屍之首

七三〇

軍中及戰後行刑

七三一

幕府梟搢紳首

七三二

雜載

七三三

磔

串刺
車裂
併入 鋸挽
牛裂

名稱

七三四

幕府行刑

七三六

大名行刑

七三七

古事類苑

法律部十八

中編

斬罪

名稱

縛首

放打

刑場

朝廷行刑

幕府行刑

大名行刑

徇罪人道路

館中行刑

軍中及戰後行刑

幕府加刑摺紳

僧徒處刑

外國人處刑

切腹

六九五

六九七

六九八

六九九

七〇〇

七〇一

七〇四

七〇五

七〇六

同

七〇九

七一三

七一五

右之條々若於相背者辱茂此靈社之上卷起請文御罰深學可蒙者也仍如件

慶長四年二月五日

長東大藏大輔正家

石田治部少輔三成

增田右衛門尉長盛

淺野彈正少弼長政

德善院僧正法印

安藝中納言輝元

會津中納言景勝

備前中納言秀家

加賀大納言利家

以上

〔豐臣秀吉譜〕文祿四年八月秀吉下六條法令于諸士大權現利家秀家輝元降景加判○中
秀吉又下九條法制于諸人、大權現利家秀家輝元降景復加判

〔翁草百八十七〕或本に白石先生曰、文祿二巳年天下に政令を敷れし時、徳川殿前田利家浮田秀家、毛利輝元、小早川隆景連署せらる。時に五人の大名衆と云し、由北川次郎兵衛秀頼公ノ近臣也、大坂御陣ノ節モ、山川、帶刀ト同ク一が記に有夫を五大老と稱せし事は太閤薨じ給ひし後に、大坂の奉行等が云出せる事にて、徳川殿をも彼家の老と稱し家司也と云ん爲なり。

○按ズルニ、文祿二巳年トアルハ文祿四末年ノ誤ナラン、

〔翁草百八十八〕秀吉公薨去

同年○慶長四正月十一日、大名小名登城して秀頼公を拜し、其后大廣間に別坐、大老奉行出座して、天下之諸法度御先代之條目を讀聞せ、彌違背不可有旨を被示、

〔徳川治世錄三〕慶長四年二月五日、諸將不和ノ事アルニ於テハ、中村堀尾、生駒等、是ヲ和セシムベキノ旨秀吉遺言タルニ依テ、今度公○徳川家康大坂奉行等ト御不快ノ事、堀尾吉晴是ヲ執シテ井伊直政ニ來會シ、和睦ヲ議ス、公是ヲ許シ玉フニ依テ交和成ル、依之加賀大納言利家○中略等連判誓詞ヲ以公ニ獻ズ、

敬白靈社上卷起請文前書之事○中略

一太閤御置目十人連判之誓紙之筋、彌不可有相違若失念有之候而謹々於身上○茂相違於有之者、十人之内聞付次第ニ、一人二人ニテモ互ニ異見可申候、其上同心於無之者相殘衆中一同ニ異見可申事、

一今度雙方へ入魂之通申仁有之候迄、對其者遺恨ヲフクミ存分不被有之候、御法度御置目ヲ背申ニヲキテハ、十人トシテ違穿鑿可被處罪科事、

誠哉、長於人者、晝夜寤寐一生工案、可在此所哉之事。略○中

右十五箇條堅ク守リ、其所ニ心ヲ止可用トテ瀧河ニ被下ケリ、寔君臣合體之御舉動、理世安民ノ御心緒有難カリシ事ドモ也、

〔織田信長譜〕天正十年四月信長信忠定闕。東制法十五箇條以授瀧河一益一益居上州脫橋城以振威於關東、

豐臣氏法令

〔武邊叢書五〕豐太閤大坂城中壁書

御掟略○中

右條々於違犯之輩者可被處嚴科者也

文祿四年八月三日

隆景

輝元

利家

秀家

家康

御掟追加略○中

右條々於違犯之輩者可被處嚴科者也

文祿四年八月三日

隆景

輝元

利家

秀家

家康

○按ズルニ、コノ式目ハ十五條ニシテ、元親百箇條及ビ長曾我部元親式目トハ別ナリ、

〔總見記十五〕越前國御仕置御凱陣事

越前加賀兩國ノ者ドモ或ハ御赦免、或ハ安堵又ハ刑罰ソレトニ御裁許也、御法令ニ曰ク、
掟

一國中ヘ非分課役不可申掛、但著到子細有テ於可申者我々ニ可相尋、隨其可申付事、
略○中

天正三年九月日

○按ズルニ、コノ法令凡テ九箇條アリ、

〔總見記二十二〕諸將恩賞并甲信二州御掟事

今日○天正十年三月甲信兩國ノ御法度書被仰出御仕置有之、
略○中

國掟 甲信兩州

一關役所同駒共ニ不可取之事、
略○中

右定之外於惡敷扱者罷上訴訟可申上候也、

天正十年三月日

○按ズルニ、コノ法度凡テ十箇條アリ、

〔信長記十五上〕信長公東國御進發并勝賴父子討死之事

同年○天正十年四月十一日信長公東國法度仰置レントテ、羽林信忠卿二位法印○武井ニ評議有テ、條子

○于恐書立給ヘリ、

一守國者可撰奉行樞要歟、舉其人則上下因之明也、若非其人則國內爲之暗矣、明者是治安永久之本、暗者是危亂速亡之兆也、豈其輕乎、撰人在己、己正則不招自至、己不正則雖招不來矣、君有其德必也、臣有其道、君雖未有其德、得其臣舉用則亦能安、是其大公無我至虛所致而已、公生明之至言、

字信玄家秘書口傳有

永祿元年戊午卯月吉日

武田左馬助 信繁在判

長老江

長曾我部元親
式目

〔長曾我部元親百箇條〕右條々於國中自今以往可爲龜鑑之條貴賤共令信用全可相守若一言於相背者忽可處嚴科者也依所定如件

慶長貳年三月廿四日

盛親 在判
元親 在判

〔長曾我部元親式目〕右之條數堅可相守此外從先規相定數ヶ條今以不可有相違者也

慶長貳丁酉年三月初日

元親

〔土佐軍記〕元親土佐國政事

或時元親家老ノ面々ヲ呼集テ申シケルハ我幸運ニ依リ國中ヲ掌ニ握トイヘドモ多年ノ兵亂ニ由テ國政廢レ法度狠ニシテ民百姓モ業ヲ失フ今古法ニ新政ヲ相加エ衆人ヲ保ンズルノ政道ニ改ント思ナリ凡ソ古今ノ變化ヲ搜テ情國家ノ興亡ヲ考ルニ上禮ナク下義ナキ時ハ忠賞不行故ニ其國亡ブ下義アリ上禮アル時ハ忠賞相行ル故ニ其國興ル下忠義ヲ存ズトイヘドモ上禮ヲ知ザル時ハ其國變ジヤスシ上能禮賞ヲ知トキハ下忠義ヲ存ゼズト云事ナク其國化シヤスシ是ヲ以テ良將ノ士ヲ致ハ能忠否ヲ察シ能賞罰ヲ正ス賞トハ至忠至義罰トハ不義不忠ナリ賢ヲ進メ佞ヲ退ルノ謂法令ナクンバ不可有トテ數箇條政道ノ式目ヲ出サレケル

一神社佛閣於令被損者兼而訴其所之代官或領主可令加修理并祭禮等不可溢於古法事中

右條々可堅相守者也仍如件

天正二年五月日

土佐守

〔武野燭談東照宮〕一甲州御打入には、武田の家法を以甲信駿へ御掟なされ、中唯年貢を軽く仰付られし而已替たり。

〔甲陽軍鑑品七第十六〕侍大將より武者奉行大切の心持の事附喧嘩の沙汰之事

殊に喧嘩の事は、信玄公廿七歳天文十六年丁未の歳、五十七ヶ條の式目を定て御仕置をなさる。第十七ヶ條に書給ひどかく喧嘩不仕やうにと思召、長坂長閑跡部大炊助、原華人佐、駒井右京進、右四人をめして仰出さるゝは、自今以後喧嘩の事、理非によらず雙方成敗なりと相觸候へと宣ふ。略○中人に慮外仕る者を、御成敗候敷改易と仰付られむかと、先内藤修理は存奉ると申せば、中是より別の沙汰有まじとて、紙面にあらはし、右四人に相渡す。長坂長閑跡部大炊助、駒井右京原華人、此書面を請取て則これを披露す。尤此儀可然と有て、新式條十七ヶ條目に悉く喧嘩の御法度定おかる。是内藤修理正工夫の故なり。

〔甲陽軍鑑品八第十七〕武田法性院信玄公御代總人數之事

新式目三ヶ條目に相そむき、私にて他國の通を仕候へば、大剛の者共をもあらけなく御成敗なり、是又尤の御法度にて候。

〔甲陽軍鑑目一第二〕信玄公合弟典厩子息江異見九十九ヶ條之事。

〔信玄家法〕天地之間有萬物、萬物之中有靈長、名此曰人倫。人倫有司業五常也、六藝也、不可不習。父能傳子、能記、尊武田信繁有文有武、有禮有義、諱其世子而稱長老、敏而好學、如玉走盤、如錐脫囊、孜孜而不倦、誨以九十九件之品目矣。誠韋賢滿羈之訣、孟母斷機之戒、豈遠乎。雷調身與、隆於國家、榮於子孫本也。本立而道生、則運乾坤於掌握、通古今於胷中、不亦道乎。吁、不出巷而知天下、其唯此一簡矣。大矣哉。至矣哉。維時永祿元年戊午、薤實中、龍山子謹誌。

〔信玄家法〕以上九拾九ヶ條多言漫喧他人之耳、事無不往生之書、二五十八八登、二五七八八亦、此六之

〔太閤記〕^二秀吉歳暮御禮之事

信長十六歳之冬、林佐渡守が館へ入まいらせ、各相議して、陳となしに、あまた所の國守の行ひ、其中にて能を語り聞せまひらせける。^{○中}又武田信玄も、治國家唯法度の正しく理に合ふ事肝要なりとて、此事に勞せり。夫治國家の法あしければ、士貧く民疲れぬる物とて、制法あり、左の如し、

定

一 萬事守儉約、驕を去、士之氣味をたしなみ可申事、

一 信仰於佛神事は、心を誠にし神慮にかなはんやうを專にすべし、費金銀建立堂塔事は無益の事、

一 妻子之衣類、一萬石所持之士は京染等之小袖、五千石より下は薄板、五百石より下は袖、百石之内外はぬのこたるべき事、

一 傍輩中、三人寄合雜談等之事くるしからず、其外を過ぎば爲科代木綿甘端出すべき事、

一 親族之間、一とせの内振舞之儀、二度二汁三菜之外可停止之事、

一 武具馬具は、其分限に順ひ嗜可申事、

一 拙僧分國之内、不寄卑俗凡下之輩、得正士之器量、萬之司に成べき者あらば、密に可告知之事、

一 百姓訴等にも限ず、萬事に付て最眞偏頗有之まじき事、

一 喧嘩ハ雙方可爲曲言事、^付能問柄を云妨などいたす者あらば、密々に可告知之事、

一 於戰場破法度候者、可及生害候、雖然十之物十可得勝利、相極候は、可隨其宜、歟之事、

一 賞罰執行候中に、拙僧加私意事於有之者、以書付可告知之、縱未究之儀たり共くるしからざる事、

右信玄制法ヶ條之内也、三郎殿これを見給ふて、御同心の體淺からず見えしとなり、

〔信玄家法〕右五拾五ヶ條者、天文十六丁未六月定置畢、追而二ヶ條者、天文廿三甲寅五月定之畢、
〔甲陽軍鑑〕品九下第二十七、一天文十六年丁未二月二日に、晴信公山本勘介をめして軍法備の立様を
申せどあれば、略○中そこにて勘介申上る、軍法は御法度を能たてなされ候て常にあつかひ、御家
くせの様になく候ては、軍兵の御拵なり兼て、御勝利あやうく候と勘介申上る、晴信公法度の様
子はいかんと仰らる、よき御法度をもつて諸人大小上下の形義作法をよく定なされ候は、
其後諸人よく上中下のさたを存、上から下々に至るまでよき軍法を願申處へ、略○中諸人の是を
よく存する様になさるべきと山本勘介申上る、其年天文十六年丁未六月吉日に、晴信公御工夫
あり、先御持國中諸法度のために新式目をのべられ、五十五箇條の法度あるは、ゆく／＼軍法の
ため也、是晴信公廿七歳の御時、三河牢人山本勘介五十五歳の時申上て如此、右式目、後二箇條入
て五十七箇條也、晴信公仰らる、法度をたて、と申はとをき儀なり、則時に軍法能事はあるま
じきかとおほせらる、能御法度は國持大將の慈悲をもつてなされ候、子細はよき法度にて諸
人の行義作法能々罷成、人行義よければ實なり、作法よければ一切の善惡を分てよく合點いた
す、よく合點いたせば義理を存、義理を存すればうしろぐらき事少もなくして、主君の御ため
を大切に存る主君のためを大切に存すれば法度にそむかず、諸人如此なるときんば軍法よし、
軍法よければ備よし、備よければ味方の諸人勝事疑なし、勝利疑なければみだる、國をきりと
りて大將よくおさめ給ふ、國おさまれば諸人御恩を被下安堵いたす、さてこそ法度は慈悲より
おこると承て候、さりながら慈悲より出るよき法度は、寸善尺魔と申て善には必邪魔出來して、
調兼申物にて候間、せめては十年もならしをなされずして急に仰付られれば、御法度き、かね候
て、結句あしき事になり申べく候と、山本勘介申上る故、晴信公の新式條なり、また御法度背輩こ
れあらば見出し、聞出し申上る、

早雲寺殿二十
一箇條

一於朝倉之家宿老ヲ不可定其身ノ器用忠節ニヨリ可申之事。中
右ノ條々克々服膺シ晝夜相勸メテ永ク子孫ニ貽厥セラルベク候。下

〔北條五代記〕伊豆早雲平氏茂由來之事

早雲とは子細有て若年より名付といへり明應の比はひさがみをおさめて後も伊豆のにら山に在城のゆへ伊豆の早雲とあまねくいひ傳へり仁義をもつはらとしひとへに民をあはれみ給ふゆへ人の國までも思ひふくせすと云事なしむかし關東にをいて早雲寺殿をしへの狀と號し小札あり心をろかなる者はこれをよみならひたりし其文にいはく、

早雲寺殿廿一條

一第一佛神信じ申べき事。中

右の文を愚老見明し事なれば則是にゑるし侍る者也者。下

〔北條五代記〕犬也入道弓馬に達者の事

早雲教の二十一條の内に馬は下地をば達者に乘ならひて用の手綱をば稽古せよとゑるせり、

〔北條五代記〕上杉輝虎武田信玄小田原へ勸事

早雲寺殿二十一條と號し侍一生涯身の行の教をゑるしをかれたる文有其内二十條に武道のさた一言なし終の一一條に文武弓馬の道は常なりゑるすに及ばず左文右武はいにしへの法兼てそなへずんばあるべからずと書とめ給ひぬ、

〔武野燭談〕關東御打入には北條家の法度を御用ひ有り唯年貢を軽く仰付られし而已替たり、

〔甲陽軍鑑〕一品信玄公分國中仕置五十七條之事

候は、同罪に堅可被申付候、まよちうつろをぎんみ申候、沙汰致し候へば、他國之惡黨出ぬものなり、みだりがはまき所とまられ候へば、他家より手を入ものにて候ある高僧の物語せられたるは、人の主人は不動愛染のごとくなるべし、其故は不動の劍を提、愛染の弓矢を被持たる事全くつくにあらず、射るにあらず、ひとへに惡魔降伏の爲にして、内に慈悲深重なる人のあるじもよきをばほめ、あしきをば退治し、理非善惡をたゞしくわくべきもの也、是をぞ慈悲の殺生と申候はんすれ、たとひ賢人聖人の語を學び、諸文を學したるごも、心へんくつにては不可然、論語などに、君子不重時は威なしなど、あるをみて、ひとつにおもきと計と心得てはあしかるべく候、おもかるべき、かろかるべきも時宜時刻によつてふるまひ肝要也、この條々大かたにおもはれては益なく候、入道一箇半身にて不思議に國をとりしより以來、晝夜目をつながす工夫致し、ある時は諸人の名人をあつめ、そのかたるをみ、にはさみ、今にかくのごとくに候、あいかまへて子孫におゐて此條々書をまもられ、摩利支天八幡の御教と被思候は、かろくも朝倉の名字相つゞくべく候、末々におゐて我まゝにふるまはれ候は、たしかに後悔可有之者也

今川了俊歌

子をおもふ親の心のまことあらばいさむる道にまよはざらめや

〔朝倉始末記〕朝倉家由來之事

慈照院義政公ハ、敏景ノ行跡并ニ今度ノ始末ドモ一方ナラズ思召、即文明三年五月廿一日、越前一國始テ敏景ニ賜リツ、御朱印頂戴有ケレバ、同名被官下々ニ至迄目出度御運ノ程ヤトテ、千秋萬歲祝ザルハ无リケリ。○中其ヨリ黒丸ノ館ヲ改テ、足羽南郡一乗ノ谷ニ始テ城郭ヲ築ツ、繁昌申モ愚ナリ、然レドモ金殿玉樓ノ飾リナク、朱甍綠瓦ノ費セズ、家中良卑ノ差別ナク、尊奢侈ナカレトノミ政道アリ、依之御家督氏景ヘモ、萬端心持以下ノ條々ヲ被示置曰

建武式目以來追加

右之書物御尋ニ候間、各被遙吟味、今八ッ時迄之内、有無之返答書付可被差出候、御急候間少茂油斷有間敷候、

正月

新加制式

〔新加制式〕一可崇神社敬寺塔事

右神者天先成地後定、然後化生其中、故曰神國、欽明御宇佛法東漸、上宮太子內教弘道、自爾以來、寺社崇敬是同、就中有封社不致陵夷、而可加修造、專祭祀、恒例神事之時、神役公人等、依令懈怠、下利物延引式、且神慮尤有恐、自今以後、其日勿闕怠、於彼公人者、後日以此科可令出一倍過錢、將又佛寺等事、先不退之勤行可專之、近代僧徒法衣之上帶刀兵、捨經教而專歌舞、若爲一寺住侶、僧者可被停廢彼職也、次寺社領私令沾却、太以零落之基乎、尋究之、速可被召放件地、又林木以私曲有伐取之族者、可糺其趣矣、

〔大日本史二百十七〕僧玄慧列傳

建武中、尊氏服從諸國、開府于鎌倉、因廣詢政事、是圓與玄慧、眞慧等八人議之、參酌古今條件、其尤切于事務者十七事而進之、名曰建武式目、尋又作新加制式二十一條、尊氏大可之、皆施行焉、建武式目

新加制式

大内東壁書

〔大内家壁書〕端闕

中上下人々、可守此旨之由、壁書如件、

長祿三年五月廿二日

左衛門尉奉秀明
右衛門尉奉正安

朝倉敏景十七箇條

〔朝倉敏景十七箇條〕一諸沙汰在所之時、理非少も被曲まじく候、若役人わたくしも致候由被聞及

べきよし、みえたるにや、

〔樞談治要〕一近習者をえらばるべき事

是は建武の十七ヶ條の中にもものせられ侍る題目也、其器用をえらばるべきこと、尤然るべし、

〔宗五大帥紙〕人の召仕れ候仁心得らるべき事

一建武十七ヶ條にも、近習の人を可撰といへり、

〔大館當興日記〕天文九年九月十一日

一建武式目一卷、爲上意昨夕以佐拜見させられ候事在之、仍今朝以佐返上之仕也、忝存候旨申入之也、此儀御内書などに内談衆事を宿老衆と被遊候べき事、此式目に宿老衆と在之間無別儀、由内々被尋下間無別儀旨言上仕也、何にもとくの趣宿老共と被遊て猶可然哉と存候由申入之也、

〔駿府政事録〕一慶長十六年九月十九日、今日建武式目令道春讀之、議論其得失給、

〔右文故事〕御代々文事表一

守重○近案ニ、此歲十六年四月十六日、京師ニ於テ三條ノ御條目ヲ出サレ、天下ノ牧伯ニ盟書ヲ

捧シム、○中略爾來建武式目及ビ延喜式并ニ群書治要貞觀政要續日本紀ノ類常ニ御講究アリ、是

二十年御法令ヲ頒布セラル、ガ爲ノ張本ナルベシ、

〔建武式目抄典書〕右一冊、三好日向守長縁於予○清原大略慍勸令索之、雖不敏、染禿筆、句々文々以假

名顯其意、下其訓、當家秘傳載抄之、妄莫許電覽、冥慮推測者乎、

○按ズルニ、コノ書天文二十三年ノ作ナリ、

〔享保集成絲綸錄三十五〕享保七寅年正月十六日○中略

式目追加三十三ヶ條

建武以來追加

建武式目抄

目ヲバ貞永ノ式目ト云、今ノ御成敗式目是也、コノ式目モ、建武年中ニ作ラレタル書ナレバ、建武式目トモ建武記トモ云也、作者ハ是圓也、評定衆ハ眞惠、玄惠法師以下七人也、奥ニ詳ニミヘタリ、是圓ヲ入テ以上八人也、

〔梅松論下〕一或時兩御所足利尊氏直義御會合在テ、師直并故評定衆を餘多めして、御沙汰規式少々

定められける時、將軍仰られけるは、昔を聞に、頼朝卿略治承四年に義兵を發し、元暦元年に朝敵を平げし、其間の合戰五ケ年也、彼政道を傳聞に、御賞罰分明にして先賢の好する所なり、まかりといへども、尙以罰のからき方多かりき、是に依て氏族の輩以下疑心を殘しける程に、さしたる錯亂なしといへども、誅罰しげかりし事いと不便也、當代は人の歎きなくして、天下おさまらん事本意たるあいだ、今度怨敵をもよくなだめて本領を安堵せしめ、功を致さん輩にをゐては殊更莫大の賞を行なはるべき也、此趣を以面々扶佐し奉るべきよし仰出されし間、下御所直義殊に喜悅有ければ、師直并故評定衆各忝將軍の御詞を感じ奉て涙を拭はぬ輩はなかりし、

〔甲陽軍鑑五品第十三〕弱過たる大將之事附兩上杉并北條家生起合戰物語事

尊氏公天下を取て靜謐に治め、就中源家專の世となる、まかも右大將より以後、公方家代々の式法を取立、まつりごとをよく行ひ給ふこと、中興に尊氏公よりあそばす、

〔新加制式〕一固可有禁、止賄賂事

右憲法云、得利爲常、見賄賂訟云々、建武式目殊立于此一篇、古今制禁不可勝計、

〔樞談治要〕一諸國の守護たる人、廉直を先とすべき事

建武の御法には、守護職は上古の吏務也、國中の治否只此職による、尤器用に補せられれば、撫民の義にかなふべきかと云々、此式條のごとくならば、時にまたがひ人をえらびて、其職に補せらる

新編追加

〔新編追加下〕右追加關東明鏡之式法尤可謂至寶、連々以愚隙之邊、遂書功者也、

于時慶長十一年丙午十月廿一日

梵舜花押

同年六廿一筆立 十廿一日書終

重而大形及校合 同年十一四

〔新編追加上〕右追加上卷 筆立慶長十一同七廿三卷終、同校合朱點同年十月廿三日終、

梵舜花押

建武式目

〔建武式目奥書〕以前十七箇條大概如斯是圖、雖受李曹之餘胤、已爲草野之庸愚、忝蒙政道治否之諮詢、所撫和漢古今之訓、謨也、方今諸國干戈未止、尤可踴躍歟、古人曰、居安猶思危、今居危盡思危哉、可恐者斯時也可、慎者近日也、遠延喜天曆兩聖之德化、近以義時泰時父子之行狀爲近代之師、殊被施萬人歸仰之政道者、可爲四海安全之基乎、仍粗言上如件、

建武三年十一月七日

眞惠
是圓

人衆

前 民 部 卿

是圓俗名道昭

眞 惠

玄 惠 法 印

太 宰 小 貳

明石民部大夫

大田七郎左衛門尉

布施查三郎入道

以上八人

〔建武式目抄〕此式目ハ建武三年十一月七日ニ作ラレタリ、建武トハ後醍醐天皇ノ御時ノ年號也、此時ノ將軍ハ尊氏將軍也、後ニ等持院殿ト申也、執權ハ高師直也、貞永年中ニ作ラレタル式

自第十五至第十七、第廿、第廿四、第廿七、凡十七條與此本○三十箇條符合、但第七條前低書追評定

曰四字、第八條中仁治云ル七十七字分在最後爲第廿二條起請文以下不載、而此本所無四條附

于左トテ、海路往返船之事以下四條ヲ附載セリ、

〔御成敗式目抄〕道本面白沙汰追加ル故、四度之追加也、

〔建武式目抄〕近クハ將軍家トシテ天下ヲ治ラレシバ、北條四郎時政ノ子義時執權ノ時、又義時ノ子泰時ノ時代也、御成敗式目作ラレタリシ人也、其式目追加ノ法ヲ以テ近代ハ師範ニシテ政道ヲオコナハル、也、万人ノアフギ奉ルヤウニ善政ヲホドコサレバ、必天下泰平四海安全ノ基タルベキ也、

〔吾妻鏡 四十八〕正嘉二年十月十二日丁亥、今日評議被仰出曰、自嘉祿元年至仁治三年御成敗事、准三代將軍并二位家御成敗、不可及改沙汰云云、

○按ズルニ、北條泰時嘉祿元年ニ執權トナリ、仁治三年ニ卒ス、

〔吾妻鏡 四十九〕正元二年元文應五月四日辛未、故武州禪門○北條泰時御成敗事不及改沙汰之間、被載式目畢而同時重可有沙汰之由有所見之輩者、不拘此文可有其沙汰、仁治三年以後給御教書遂問答之、疑者非沙汰之限、今日被定之、

〔御成敗式目追加〕自寛元元年○仁治四年至康元元年御成敗事、文永八八十評

右於自今以後者、准三代將軍并二位家御成敗、不及改沙汰矣、

○按ズルニ、寛元元年ヨリ康元元年マデハ、北條經時同時頼ノ執權時代ナリ、〔御成敗式目追加〕自康元元年至弘安七年御成敗事、正應三九廿九

右於自今以後者、不及改沙汰歟、

○按ズルニ、北條時宗、康元元年ニ執權トナリ、弘安七年ニ卒ス、

以寫感情云、

むかしこそみて去のばるれ世の爲に定て置し露の言の葉

耕雲山人明魏拜書

〔式目抄〕^{追加}一弘長新制云可仰諸國守護地頭等令禁斷海陸盜賊山賊海賊夜討強盜類事諸國守護地頭等可致其沙汰之子細被載式目訖、

〔式目抄〕此ニ神社ヲ新シク造レトハ不云修理セヨト云ハ三代格式ヲ始トシテ皆如斯弘安七年ノ追加ニモ見タリ弘安七年六月十二日關東ノ新制十九箇條ノ内自今以後止新造寺社可共行諸國國分寺一宮事云々、

〔式目抄〕^{追加}弘安九年七月廿五日至内々之密儀者雖有風聞之說非沙汰之限由被載式目追加畢依之普雖令現形稱密儀不及其沙汰於自今以後者不致所領之成敗雖不行家中之雜事有不調之間者任本式目可有其科、

〔式目抄〕地頭年貢抑留事建長永仁貞應以下追加ニ見タリ、

〔御成敗式目抄〕^{源書本}追加は誰人の集め加とも不知本條に無き沙汰を添或は本條の沙汰を改めたる所もあり三十ヶ條あり○中又追加は文の大小不定○中沙汰の面白をば追て式目に加る程に、

追加と云也此追加何代誰人が作と云事不知佐々木殿は本條に編添て可誦者にて無とて追加を解去て被棄と云説もあり追加は本は五十一ヶ條々の裏書と可得意故ニ代替リ時異ルニ人ノ心モ奸謀ニ成行ク間沙汰ヲモ正道ヲ行ヒ然モ道ハ不可背代々沙汰出來時は加る間追加は百ヶ條餘り大都爰のせ三十ヶ條分を沙汰可有佐々木殿追加は其文繁多にて更に作者も不知年號も無き首尾なれば式條編制有間敷故に別卷にして被成但部と成事は何比と云に正和元年の初夏上旬有抄寫給正和は花園院の年號也、

○按ズルニ詳書類従本ノ識語ニ舊藏中有略本一冊都廿二條自第一至第八自第十至第十二、

右本書奥書以下尤備證本秋田城介藤原泰盛其後盛忠行貞等以證文令校合其後又行一阿彌行曉以證文令校合又防鴨河判官正五位上行左衛門大尉藤原朝臣行種以自筆寫之訖次二階堂中務大輔藤原有泰所持之本令懸望寫書之訖深重可秘可秘

天文第二仲秋書之

永祿八初冬書之

這一冊端與十枚者實父常眞筆跡也中十枚者予若年之時令書寫候訖尤可停止外覽者乎

于時文祿二年十一月六日

四十八歲如雲

○按ズルニ此書ハ時宗ノ書キシモノニ非ズツハ書中ニ不易法者中略武藏前司入道最明寺殿法光寺殿三代以上御成敗事也トアルニテ明ナリ又執權時代ヲ云ヘル所ニ高時迄代々ノ執權ヲ列舉シタル本モアリ因テ意フニ此書ハ一人ノ手ニ成リシニハアラズシテ弘安比ヨリ漸數人ノ手ヲ經シモノ、如シ

御成敗式目追加

〔御成敗式目追加〕御消息一通

雜務御成敗之間同體なる事をもつよきは申とおしよはきはうづもる、やうに候を随分精好せられ候へどもおのづから人にまたがうて輕重などの出來候はざらんためにかねて式目をつくられ候其狀一通まいらせ候中略これにもれたる時候はゞ追くはうべきにて候也あなかし

貞永元

八月八日

六波羅藤原守重時
駿河守殿于時駿河守誠三條樂寺入道

武藏守判

〔式目抄五奥書〕

右式制者准格條將相御政務之律令也舉世用之行之對追加謂之本條乎下略

〔御成敗式目追加〕此書爲救亂離之餘弊一旦定人心之弱術也今依台命加朱墨點之次詠一首和歌

式目開書

〔式目開書〕于時天文廿四年卯月三日、河州南方椿伯、暫住柴田池坊、好風被札之畢、

○按ズルニ、コノ書作者詳ナラズ、

御成敗式目拔書

〔御成敗式目拔書〕此拔書當家雖令秘之、依村上雲州慇懃之所望、攝拾律令格式之文并追加等注之、聊莫脫漏而已、

正三位清原 判

沙汰未練書

〔式目抄^四〕沙汰未練書ニ當世ハ外道安堵トテ、ユヅリ狀ノ初ニ御判成也、

〔式目抄^五〕沙汰未練抄云、追加ノ申狀トハ三問三答ノ外進訴狀也、

〔式目抄^三〕問注之事^略○中 沙汰未練抄ニ云、問注所トハ關東諸方沙汰所也、

〔沙汰未練書^{奥書}〕一以前條々、關東六波羅御沙汰之次第、就令見聞私記之、自取^取既^恐調練人者皆

以所知也、一向未練若輩者、以是可心得歟、凡於法則者、以貞永御式目可明鏡、至故實者、以古御下知并訴陳狀等案可稽古也、能沙汰人者、勘合根本之理、非可思惟、始終之落居、或耽一旦之利潤、或依當時之確論、無左右不可出沙汰、不謂親疎、不論貴賤、就根本理、非可仰憲法上裁縱、雖存理運至極之由、敵方有寬宥之儀者、聞是非可和談、何況於非據之沙汰哉、能々可思案也、恐權門扶貧賤、負親類、憚他人、就諸事不可好、諍論、偏存穩便之儀、可專正理、如此輩者、預神明加護、叶佛陀冥慮、就諸事不可好、非道之沙汰、所詮故實、沙汰人者、以和與爲本、非據之沙汰人者、以裁斷爲先、沙汰人才覺者、法則多知也、法者雖破御下知、御下知者不破法、則本文云爲一人、不枉其法、其法是寔哉、沙汰者法則爲眼目、沙汰者守益之理也、不可致無益相論、以一人才學不可評大事、就多聞之儀、可定是非也、沙汰者依人之運否、有得失之儀、大小事沙汰落居時者、相構而可祈誓申佛神、努々不可有等閑之儀、仍條々以私愚案注之、不可有外見之儀之狀如件、

弘安元年閏十月日

法光寺時事也

相模守平朝臣時宗

〔辨疑書目録上〕兩名書目

式目諺解六環翠軒作一名式目抄

此ノ書ハ元ハ式目鈔ト云フナリ、植字本ニアリ、後人校正シテ諺解ト號ス、

〔倭板書籍考九傳字諸費〕貞永式目諺解 六卷アリ、正三位清原宣賢入道宗尤ノ作ナリ、宗尤ヲ環翠

軒ト號ス、博識ノ人ナリ、

〔群書一覽二有職〕御成敗式目諺解

六卷 四本

清三位入道宗尤

舟橋環翠軒自序に、此書の起原をくはしくあるされたり、略○中元祿十二年上木す、

○按ズルニ、元祿刊本ノ表題ニハ御成敗式目諺解大成トアレド、毎紙ノ小口ニハ式目抄トノ

ミアリ、ザレバコノ書ハ式目抄ト云フガ原ノ名ニシテ、諺解ト題セシハ後人ノ所爲ナルコト、

辨疑書目録ニイヘルガ如クナラン、

〔式目抄六典書〕以祖父常忠○清原兼忠御説先年令抄出之處局務外史業賢盜取之間、重令抄出之以此本

可爲證、一子之外不可許一覽而已、

天文三年閏正月廿八日終其功

清三位入道 環翠軒宗尤宣判覽○

〔式目抄六典書〕右式制者、准格條將相御政務之律令也、舉世用之行之、對追加謂之本條乎、吾祖環翠爲

愚蒙以假名下注釋畢、一家不出之秘本也、然洛中錯亂之砌失却之、于爰幽齋玄旨、志道遊藝之餘、咸

得此抄索、與書余不及固辭、加證明勿令窓下而已、

天正第十六曆夏五十又三

雪菴道白列

御成敗式目註

〔御成敗式目註改〕右一本先考以足利講席之裏書筆之不幾而失却、或人以其證本寫之、仍備用而重書寫之者也、問注所之一流秘中之秘也、豈容易之哉、天文廿三年甲寅八月中旬、

○按ズルニ、コノ書作者詳ナラズ、

保鶴岡八幡之別當ヨリ相傳シ玉フ、

〔御成敗式目註〕足利治部大夫高氏、同新田義貞竊ニ宗鑑入道ヲ誅セヨトノ勅在其時、新田宰相中將義明ト云者、鎌倉由井濱ヨリ攻破テ宗鑑入道ヲ殺也。其時、町野ノ家ニ有シガ佐々木ノ家ニ傳也。○中其時先代ハ由井ノ濱ニテ大勢打レ、其中ニ奉行人一人此書ヲ以テ當代_利足工相渡也。當代ニ此書用事モ、論語云、舊令尹ノ政ヲ以必以新告令尹ト云心ヲ用也。

〔辨疑書目録下〕名數書目

公家十三部

庭訓往來、明衡往來、尺素往來、式目、和漢朗詠、新撰朗詠、伊勢物語、つれづれ神、古今集、百人一首、大和物語、源氏物語、三十六人歌仙、以上

是圖抄

〔式目抄六〕

法意ト式目ト相違多シ、賞罰モ淺深カハレドモ底ハ一ツ也。コヽヲ是圓ガヨクカキタリ、是圓_{俗名ハ道昭、中原、章職ガ孫ナリ}、此式目五十一箇條ニ、悉律令格式ノ正文引合テカケル物アリ、其奥書ニ

云、格制者是雖破律令皆爲律令之條流、式目者亦雖非法意終歸法意之淵奥云々、言心ハ格ハ律令ノ法ヲ破テ、又別ニ法ヲ立タレドモ、皆律令ノ枝葉末流タリ、本源ハ律令ヨリ出タリ、式目ハ法意ニハチガヘドモ、遂ニ法意ノ奥義ニ皈スト云リ、

唯淨裏書

〔式目抄二〕此式目ハ、五十箇條ニモセズシテ五十一箇條ニスル事、豈其故ナカラシヤ、唯淨裏書ニ

モ此子細ヲシルサズシテ、武州禪門モ大賢ノ人也、筆者モ才學ノ者也、イカサマイハレアラントカイタリ、

〔式目抄一〕撰者、事異義アリ、唯淨裏書ニ云、_略以上六人也、此義出處ヲシラズ、定テ所據アル歟、_中

唯淨ハ六人ノ撰者ヲ記セドモ、東鏡ニハ又別也、

〔式目抄一〕唯淨裏書云、格條律條令條ト云ハ篇目也、總序ノ義ニアラザレバ式目尤宜云々、

式目抄

〔辨疑書目録中〕本朝作者書目

清原宣賢書作_{號、琅翠軒}、式目鈔、三卷

〔沙汰未練書〕一不易法者 就是非不及改御沙汰事也。武藏前司入道時 故最明寺殿時 法光寺殿宗 三代以上御成敗事也。

〔康富記〕寶徳三年七月二日戊戌向飯尾肥前入道許清給事中清原業忠 官務等被座、少納言御式條被讀之、義理少々被談之、肥前頻所望之故也、問注所孫右衛門與三左衛門等在座、自端至十五段有一晝、晚各退歸、三日己亥早朝參大炊御門殿、若公有讀書賜朝浪次參清給事中文第、昨日聽聞御成敗式目之中、不審條々申承、委有庭訓。

〔式目抄一〕此書ヲ講ズル事ハ、舊ハナカリシヲ、寛正六年七月五日、依細川勝元所望於彼亭祖父常忠源忠 初御講說也、泰時狀ニモ、律令格式ハ眞名ヲ知レル人ノ爲、式目ハ假名ヲ知レル人ノタメト云リ、講釋ニ及バザルヨシ、再三御斟酌ナレドモ、堅ク懸望ノ間始テ講ジ玉ヒヌ、是ヨリ以前此書ノ講ナシ、後ノ成恩寺殿一條 御講アリシモ、祖父御講ヨリ後也。

〔式目抄一〕凡制作書事、或奉勅ヲ撰之、或自ラ作後奏之、此式目未及奏、覽依事不可治定、可用捨哉、〔御成敗式目注〕此書五十一ヶ條、十三人ノ評定衆ニ下サル、其事請取出シテ六人シテ天子ノ御目ニカケ申也、町野ニ置ケト御意也、町野ノ家沙汰所成ニ依テ也。

〔式目抄五〕タマス、フカ、モ、 硯蓋抄ナル上ハ、時ヲハナサズ、此書ヲ見ン人ハチツトハ心アルベシ、左様ノ仰ニ從ヒ、コマカニシルシ侍ベリ、

〔式目聞書〕此書を硯蓋の書と名付事は、古今共に沙汰所へ此式條を硯箱の蓋に入て出給ふ也、〔羅山文集六十三〕東鑑考

禪僧義堂在鎌倉時、町野氏來、令義堂見吾妻鏡、此事在空華日工集、然則吾妻鏡者町野家之所讀習也、御成敗式目亦町野之所傳授云、

〔御成敗式目抄〕此書ハ、先代町野家ヨリ鶴岡八幡別當職ニ預置ル、也、當方ニ續傳スル事ハ、安

大永甲申[○]四 冬十有二月良辰

正五位上行左大史兼筭博士小槻宿禰伊治

〔式目抄〕撰者、事異義アリ、唯淨裏書ニ云、清ノ大外記教隆真人、于時三川ノ前司、越前法橋圓全、矢野ノ對馬ノ前司倫重、于時外記大夫、太田ノ民部大夫康連、玄蕃允佐藤民部大夫業時、相模大丞、齋藤兵衛入道淨圓、俗名長定以上六人也、此義出處ヲシラズ、定テ所據アル歟、[○]唯淨ハ六人ノ撰者ヲ記セドモ、東鑑ニハ又別也、古記云、清ノ大外記教隆真人、以儒宗之故、武藏守平、泰時貴重之、仍テ内々密談之間、酌法意之淵源、本制符之先例、作示之云々、或抄ニ此書ノ題目、十三人奉行之内、仁智ヲ兼タル人六人ニ文章ヲカ、ル、事是モ六地藏六觀音ヲ表スル也、後世ノ斷罪ハ六地藏主リ玉ヘリ、現當一致ノ心歟、十三人ノ奉行ハ十三佛ヲ表スル也、[○]或抄ニ以下原無、今據三藤解ニ補、

〔右文故事〕御本日記附注中

左傳

按ニ、本朝通鑑ニ、教隆者清家庶流、久在鎌倉、候幕府列評定衆、預北條氏之咨詢、越後守實時遇之以師禮ト云ヘリ、清原系圖ニモ、關東評定衆、式目作者六人之内隨一也ト見ユ、環翠軒御成敗式目諺解ニモ、撰者ノコト唯淨裏書云、清大外記教隆真人、于時三河前司云々、以上六人也、此義出處ヲ知ズ、定テ所據アルカト云ヘリ、守重今東鑑ヲ取テ檢討スルニ、貞永元年八月御成敗式目ヲ作ラレシニ、教隆ノ名ミエズ、且ソノ時ハ音博士ナリ、疑ハ未ダ關東ヘ來ラザルベシ、又評定衆ニ加ハリシコト、東鑑并關東評定傳ニ見エズ、系圖及通鑑何ノ據ゾヤ、

〔御成敗式目〕此書通万代不易之法也、故加清家點以重鑒諸梓矣、蓋爲夫愚蒙輩易讀也、苟易讀則通理速、通理速則犯法者稍少、豈非師道少補乎、抑鄉有先生、村有夫子、而時習之學日新、予寧爲之哉、博雅君子庶幾諒察焉、

享祿己丑秋八月日

從四位下行左大史兼筭博士小槻宿禰伊治印

ナレバ此文ニ正和元年トアルニモ時代ヨク合ヘリ、サレド是圖ノ抄物今存セザレバ、委ク考フルニ由ナシ、

〔御成敗式目追加〕^{一本}清大外記教隆真人

于時三河前司

越前法橋圓全

矢野對馬前司倫重于時外

記大夫

太田民部大夫康連于時玄蕃九

佐藤民部大夫業時于時相模大掾

齋藤兵衛入道俗

名長家

已上六人、武州禪門御時兼日下給條々之^{〇之悉}私宅注所綴之文章、後日各持參其草、用拾治定之

後、被部類五十一箇條云々被作之時代者、貞永元年八月也、後堀川院御諱茂仁御宇、公家者執柄攝

政、左大臣教實洞院殿、大理右衛門督藤原基氏、前別當右衛門督藤原實有、

武家者

征夷大將軍入道大納言賴經公^{于時倉頭}

執權者

修理大夫平時房^{于時相模守}

入道前武藏守平泰時^{于時當任}

六波羅奉行

入道陸奥守平重時^{于時駿河守}

入道越後守平時盛^{于時攝部助}

〔御成敗式目〕^{大永本跋}制節則不愛私謹度則不論矩蓋君子常也、昔貞永武將以平氏泰時爲良佐也、誠進實賢

哉、於是九重安期、四夷解辨、刷朝之羽儀、保天之性命、遂本律令以定式目、總五十一ヶ條、是豈非理國

之紀綱耶、至矣盡矣、記之者姓名、其說多端、不遑毛舉、然而四位外史清原教隆最爲長焉、既登明經科、

利得儒術譽、誰敢差肩、余因以此書始鑄于板、庶幾上下專祭祀之禮、左右抱勸懲之志、至尋偏傍推點

畫頗施於新學而已、

○按ズルニ、宗五大草紙ニ此文ヲ古人の申ける事トシテ引ケリ、

〔宗五大草紙〕古人の申ける事
近くは鎌倉右大將頼朝卿の北、方二位殿政子と申せしは、北條四郎時政の女にて、二代の將軍の母也、大將薨去の後、一向鎌倉を管領し給ひ、いみじく成敗有し也。○中かくて光明寺殿源道義家のすゑの御子を鎌倉へ申下、養子にし奉り、將軍の宣旨を申なし給へり、七條の將軍頼經と申せし是なり、此將軍の御代、貞永元年に五十一條の式目を定られ侍て、今に至迄武家の鏡とされるにや、されば男女によるべからず、心かるべしからず、正直に道理たしかならん人肝要たるべしと抄物に侍り、

○按ズルニ、抄物トハ一條兼良ノ權談治要ヲイヘルナラン、

〔信玄家法〕上奴婢雜人之事者、無其沙汰、過十ヶ年者、任式目不可改之、

〔泰平年表〕東照宮慶長十六年、是年四月十六日、京師に於て三條の御條目を出され、天下の牧伯に盟書を捧しむ、其第一條に、如右大將家其後代々公方之法式可奉仰之と載らる、是貞永式目の文に據れし處也、

〔御成敗式目追加〕格云、觀時革制爲政之要樞、論代立規濟民之本務、是以明王馭俗、術非一塗、哲后理邦、豈拘膠柱、貞永御成敗式目、蓋此義也、而彼式目者、別立法制、不當律令云々、然案之是雖破律令、皆爲律令之條流、式目者亦雖非法、意終歸法意、淵奧仍就五十一之篇目、悉引律令格式之正文、或因循而加補益、或相反而成文理、但庸淺之性、旁迷比附、銓詣之趣、定多訛謬、歟、雖爲桑門之質、猶携李曹之文、嘲嘲之基、兼以惶惴、時也正和元年初夏上旬、粗終抄寫、即加愚點而已、

○按ズルニ、此文御成敗式目追加一本ノ末ニ附シタレド、同書ノ跋ニハアラズ、今コレヲ式目抄ニ合セ考フルニ、中原入道是圓ノ書キタル抄物ノ奥書ナルガ如シ、是圓ハ建武式目ノ編者

〔神皇正統記後醍醐〕かの泰時あひつぎて徳政をさきとし法ををかくす。中泰時がむかしを
おもふには、よくまことあるところありけむかし、子孫はさほどのこゝろあらじなれど、かたく
しける法のまゝにおこなひければ、およばずながら世をもかさねしにこそ。

〔梅松論上〕治承に右幕下朝草創より以來、天にせく、まり地にぬき足して、上を尊び下を恵み、
政道の法度、騎射の日記を定置て國を治めしかば、狼煙たつ事なく、家々戸ざしを忘れて、樂榮て
久しかりしに、時刻到來にや、元弘三年の夏、時政の子孫七百餘人、同時に滅亡すといへども、定置
ける條々は、今に残り、天下を治め、弓箭の道をたえず、法と成けるこそ目出度けれ。

〔權談治要〕一諸國の守護たる人、廉直を先とすべき事

貞永の式目には、或は國司領家のそせうにより、或は地頭土民の愁鬱につきて、非法のいたり、顯
然ならば、所帶の職をあらためられ、穩便のごもがらに補すべき也。中此式條のごとくならば、
時にまがひ人をえらびて、其職に補せらるべきよしみえたるにや。

〔權談治要〕一訴訟の奉行人、其仁を選ばるべき事

凡奉行人は、天下の公事を執行ふ職たるによりて、政道の善惡もと、して是によるべし。中是
によりて、あやまりあらん奉行人をば、ながくめしつかはるべからざるよし、貞永の式目にのせ
られ侍り。中もし又奉行人として、最良をいたしかたてうちになされたる公事たらば、越訴を
立て申さん事、其咎有べからず。中御法にも、奉行をさしをきて、別人に付て訴訟をいたす事を
ば、停止せらるるといへども、時にまがひ事によるべし。

〔小夜のねさめ〕北條時政より九代たもちたることもすべて才學のすぐれたることはなかりし
にや、わづかに貞觀政要御式條などいふ物ばかりを覺て、私なくをこなひ侍しは、ごはすべて國
もまづかに世もめでたくぞ侍し。

ノ二字ヲ略ス關東ノ二字ヲノスベシトテ巧ニ義ヲ作ル人アリコレヲ依用スベカラズ、

〔吾妻鏡 三十四〕仁治二年三月廿五日癸丑海野左衛門尉幸氏與武田伊豆入道光蓮相論上野國三原庄與信濃國長倉保境事幸氏所申依有其謂任式目加押領分限可沙汰之旨被仰舍于伊豆前司額定布施左衛門尉康高等訖此事確執之餘光蓮含恨相語一族并朋友等對前武州○北條時義欲遂宿意之由巷說出來聞重難及細碎沙汰猶如先前武州被談人々曰願人之恨不分其理非者不可有政道本意怖逆心不申行者定又招存私之謗者歟○下略

〔吾妻鏡 三十五〕仁治四年○寬元年十一月一日癸卯佐々木壹岐前司泰綱相傳近江國散在所領被召放之賜人々は佐々木太郎左衛門尉重綱法師訴申云泰綱輝守護權威潛掠領當國內散在之地等

又背式目之旨引籠犯人跡關所云云仍此御沙汰之間今日泰綱捧歎狀載父祖并兄弟等勳功就中信綱被優承久三年軍忠等又云嘉禎高野山參籠居之比云仁治遁世之時子孫之間事不可有不審不便可被思食之由賜御救書依之彌攘餘執令往生訖而彼領者信綱入道承久之比或以由緒之地彼本主讓狀申賜各別御下文知行或以本所一圓之地就彼和與狀令領掌凡式目者貞永元年也其以後號罪跡不申事由於令領知者尤可爲過忽此散在領者多是承久之比事也式條以前也重綱法師只爲黨泰綱不忘孝令敵對死骸致告言可被處罪科之由云云

〔吾妻鏡 三十五〕寬元二年二月十六日丁亥今日有評定條々被定其法○中略

一西國守護奉行事

於鎮西者任大將家例可致沙汰必不可依式目其外西國者任被定置旨可致沙汰之由可被仰遣六波羅

〔吾妻鏡 四十〕建長二年九月十日癸酉諸人訴論御成敗事專守式條不可參差之由今日被觸仰引付并問註所政所云云

武藏守殿

○按ズルニ、駿河守武藏守殿トアルハ、主客顛倒セシモノナラン、
〔高祖遺書^六〕下山御消息

設ヒ日蓮ハ大過有トモ國ハ安穩ナルベカラズ、見御式目立五十一箇條終ニ起請文ヲ書載ラレ
タリ、第一第二ハ神事佛事乃至第五十一等云々^{○下}

〔太平記^{三十五}〕北野通夜物語事附青砥左衛門事

承久ヨリ已降武家代々天下ヲ治シ事ハ評定ノ末席ニ列テ承置シ事ナレバ、少々耳ニ留ル事モ
侍ルヤラン、夫天下久武家ノ世ト成シカバ、尺地モ其有ニ非ト云事ナク、一家モ其民ニ非ト云所
無リシカ共武威ヲ專ニセザルニ依テ、地頭敢テ領家ヲ不侮、守護曾テ撿斷ノ外ニ不綺斯リシカ
共尙成敗ヲ正クセン爲ニ、貞應ニ武藏前司入道^{○北條}日本國ノ大田文ヲ作テ庄郷ヲ分テ、貞永

ニ五十一箇條ノ式目ヲ定テ裁許ニ不滯サレバ上敢テ不被法、下又不犯禁ヲ^{○下}

〔保曆間記〕泰時モ義時ノ跡ヲ繼テ將軍家ノ執權ス、^{○中}其時泰時天下ノ事ヲ行ニ、此人實人無雙

ニシテ年久シ、武家ノ政道ニ五十一箇條ノ憲法ヲ、貞永元年七月始テ定メ行フ、

〔建武式目抄〕貞永年中ニ作ラレタル式目ヲバ貞永ノ式目ト云、今ノ御成敗式目は也、

〔如是院年代記〕^王第八十六代四條貞永元^{○中略}八月^{○御}

〔御成敗式目〕於先々成敗者不論理非不能改沙汰、至自今以後者可守此狀也、

〔吾妻鏡^{三十一}〕嘉禎三年六月廿五日、甲辰神社佛寺并國司領家祈事、不可依關、東式目之旨被定云

云、

〔式目抄〕題號ニ關、東御成敗ノ式目トカケル本アリ、家ノ本ニハ關東二字ナシ、武州ノ心ニ、面
ニハ關東御家人タル輩ノ爲ニ作ルトイヘドモ、底ニハ廣ク天下ニ行ハント思ヘリ、故ニ關東

書被送遺于六波羅、駿河原左衛門尉爲使者、

〔式目抄〕御成敗候べき條々の事註され候狀をば、目錄となづくべきにて候を、さすがに政の體をも註載られ候ゆへに、執筆の人々、さがしく式條と申字をつけあて候間、その名ことゝしきやうに覺候によりて、式目とかきかへて候也、其旨を御存知あるべく候歟、さてこの式目をつくられ候ことは、なにを本説として註し載られ候由、人々さだめて謗難を加事候歟、まことにさせる本文にすがりたる事は候はねども、たゞ道理のをすところを被記候者也、かやうに兼日にさだめ候はずして、或はこの理非をつぎにして、其人のつよきよはきにより、或は御裁許ふりたる事をわすらかして、おこしたて候、かくのごとく候ゆへに、かねて御成敗の體をさだめて、人の高下を論せず、偏頗なく裁定せられ候はむために、子細を記錄しをかれ候者也、この狀は法令のをしへに違するところなど少々候へども、たとへば律令格式は、まなをしりて候もの、ために、やがて漢字を見候がごとし、かなばかりをまれるもの、ためには、まなむかひ候時は、人の目しいたるがごとくにて候へば、この式目は、たゞかなをまれるもの、世間におほく候がごとく、あまねく人に心えやすからんために、武家の一人の御はからひのがるべきにあらす候也、凡法令のをしへめでたく候なれども、武家のならひ、民間の法、それをうかひまりたるものは、百千が中に一兩もありがたく候歟、仍諸人まらず候處に俄に法意をもて理非を勘候時に、法令の官人心にまかせて、輕重の文どもをひきかんがへ候なる間、其勘錄一同ならず候ゆへに、人皆迷惑候云々、これによりて文官の輩もかねて思惟し、御成敗も變々ならず候はむために、この式目を註置れ候者也、京都の人々の中に、傍難を加事候は、此趣を御心得候て御問答あるべく候、恐々謹言、

貞永元

九月十一日

駿河守 在

〔式目抄〕貞永元年八月八日。武州泰時遣舍弟駿河守重時狀云々。同九月十一日。又狀云。○下
〔御成敗式目追加〕御消息一通

難務御成敗之間同體なる事をもつよきは申とおしよはきはうづもるゝやうに候を随分精好
せられ候へども、おのづから人にえたがうて輕重などの出來候はざらんために、かねて式目を
つくられ候其狀一通まいらせ候かやうの事は宗と法令の文に付てぞ沙汰あるべきにて候に、
ゐ中には其道をうかゝい知たるもの千人万人の中に一人だにもありがたく候、まさしくおし
つむれば忽ちづむ、盗人夜打體の事をだにもたくみ企て、身をそんする輩おほくのみにこそ候へ、
まして子細をあらぬものゝ沙汰しをきて候はむ事を時にのぞみて法令にひき入て勅候はむ
は、穴を堀たる山に入てあらすしておちいらんがごとくに候はん歟、このゆへにや候けん、大
將殿○源朝御時法令をもとめて御成敗なご候はず、代々將軍の御時も又其儀なく候へば、いまも
彼例をまねばれ候也、所詮從者主に忠をいたし子は親に孝あり、妻は夫にえたがは、人の心の
まがれるをばすて、直をば賞て、自土民安堵のはかりことにや候とて、かやうに沙汰候を京邊に
は、定て物もあらぬゑびすごもの書あつめたることゝて、わらはるゝ方も候はんすらん、はゝか
り覺え候へども、兼てさだめられ候はでは、人にえたがふことのできぬべく候故に、かく沙汰
候也、關東の御家人守護所地頭には、あまねくひろうして、此心をえさせられ候べく候也、且書う
つして守護所へ面々くばりて、其國中の地頭御家人どもに、仰ふくめられ候べく候、これにもれ
たる事候は、追くはうべきにて候也、あなかし、

貞永元

八月八日

武藏守判

六波羅御時
駿河守殿于時駿河守就極樂寺入道

〔吾妻鏡二十八〕寛喜四年○貞永元年九月十一日、武州以五十箇條式條○式目抄所引吾妻鏡作五十一箇條相副和字御

ヲ本尊ニカケタル心ハ十三人各一尊宛タノミ申スト也。今生ノ愚癡ヲテラシタマハバ、五十箇條ノ篇目ニ付テ非道ヲ存ジヨラジトタノミ奉リ、サテ又沙汰ニツイテ最負ヲ存ゼ、請ノシツナクバ後生モヲナジ違臺トヲガミ申サレテカクル本尊也。拜殿ノウラニ座ヲコシラヘタルハ、諸沙汰ニウラヲモテナク取ヲコナウベシトノアテガイ也。物ゴトニ萬事表裏ヲエラブベキ事也。

〔覺長見聞集〕湯島天神御繁昌の事

鎌倉殿御成敗の式目のをく書起請文に、諸神をのせらるゝ事、梵天は三界の主也、帝釋は欲界の玄ゆこたり、四大天王は玄ゆみの四州をつかさどる主也、總じて日本國中六十餘州大小の神祇と有は殘さる儀也、殊には伊豆箱根兩所權現三島大明神此三社は關東の總社、八幡大菩薩は關東武士の氏神、天滿大自在天神は鎌倉の鎮守なるが故也、總て起請文に、其所のちん玄ゆ氏神を入事定れる法也。

〔吾妻鏡〕二十八

寬喜四年元永元年八月十日、武州令造給御成敗式目被終篇五十箇條也。

○式目抄所

五十一

今日以後訴論是非固守此法、可被裁許之由被定云云是則可比淡海公律令、歟彼者海内龜鏡是者關東鴻寶也。

〔式目抄〕

凡書ヲ作スルニ名目卷軸ノ數等皆法象アリ。

○中此式目ハ五十箇條ニモセズシテ、

五十一箇條ニスル事豈其故ナカラシヤ、唯淨裏書ニモ此子細ヲシルサズシテ武州禪門モ大

賢ノ人也、筆者モ才學ノ者也、イカサマイハレアリトバカリカイタリ、此義一ノ口傳也、推古天

皇御宇ニ、上宮太子初テ十七箇條憲法ヲ作り玉ヘリ、是日本ニ於テ法令ヲ定ル書ノ初也、律令

格式皆是ヨリ後ノ作也。

○中コノ十七ヲ、天ニ十七、地ニ十七、人ニ十七アテ、五十一箇條トス

ル也。

大田 玄蕃 允三 善康連
 左衛門少尉藤原朝臣基綱
 二階 常民部大夫行盛
 沙彌 彌然
 矢野 對馬前司
 散位 三善朝臣倫重
 町野 加賀守 三善朝臣康俊
 二階 堂隱岐守行村
 沙彌 彌行 西
 中藤 前出羽守藤原朝臣家長
 三浦 前駿河守平朝臣義村
 大外記 攝津守中原朝臣師員
 北條 武藏守平朝臣泰時
 同 相模守平朝臣時房

〔式目抄〕此式目制作始貞永元年五月十四日也、或說曰、貞永元年七月十日己丑、霽爲表政道無私、召評定衆連署起請文、其衆爲十一人、相州^{時房}武州^{時泰}加兩人十三人也、爲理非決斷職猶令加署判於此起請給云々、奥ノ官氏等ハ執筆書之、名字ハ其主自書之、

〔式目抄〕或抄、此式目ノ五十一箇條ノ諸沙汰ヲ始トシテ、モレタル沙汰マデモ、自今以後ヒイキヘム頗ヲ取行フマジキト云起請タリ、サル程ニ、七月^{元貞永}年起請書ヲ、八月ニ式目ヲアマレタリ、起請ノ座ニハ、鶴岡ノ八幡ノ拜殿ノウラノカタニ、アタラシキ座ヲカマヘテ、十三佛ヲ本尊ニカケタマツリ、泰時時房ヲ始テ、アメウシノ血ヲス、ハ、壇ヲバ鳥居ノ外ニツキテ、牛ヲウヅミタリ、カクノゴトクセラレタル子孫トシテ、今モ諸沙汰ニヒイキヲスベキハ神罰ヲソロシキ事也、先々諸侍トシテ、式目ノコトハリヲモ存ゼザルニモ相似タルベシ、^略十三佛

故ハ公家ノ式條ヲ憚ニヨリ也

〔吾妻鏡二十八〕寛喜四年元貞永七月十日爲表政道無私召評定衆連署起請文其衆爲十一人

攝津守中原師員

前駿河守平義村

沙彌行西隱岐寺

前出羽守藤原家長

加賀守三善康俊

沙彌行然民部大夫

左衛門少尉藤原基綱

大和守三善倫重

立善允同康連

相模大掾藤原業時

沙彌淨圓左兵衛尉

相州北條武州北條爲理非決斷職猶令加署判於此起請給云云

〔御成敗式目〕起請

御評定間理非決斷事

右愚暗之身依了見之不及若旨趣相違事更非心之所曲其外或爲人之方人乍知道理之旨稱申無

理○理一作道一之由又爲非據事號有證據爲不顧人之短乍知子細付善惡不申之者事與意相違後日之

批繆出來歟凡御評定之間於理非者不可有親疎不可有好惡只道理之所推心中之存知不憚傍輩

不恐權門可出詞也御成敗事切之條々縱雖不違道理一同之憲法也設○設一作誤雖被行非據一同之

越度也自今以後相向訴人引其緣者自身者雖存道理傍輩之中以其人之說致聊違亂之由有其間

者已非一味之義殆貽諸人之嘲者歟兼又依無道理評定之庭被弄置之輩越訴之時評定衆之中被

書與一行者自餘之計皆無道之由獨似被存之者歟條々子細如此若雖爲一事存曲折令違犯者梵

天帝釋四大天王總日本國中六十餘州大小神祇別伊豆宮根兩所權現三島大明神八幡大菩薩天

滿大自在天神部類眷屬神罰冥罰各可罷蒙者也仍起請狀如件

貞永元年七月十日

佐藤 相模大掾藤原業時
沙彌淨圓
密藤左兵衛尉長定

〔新抄〕文永二年正月十日庚辰有撰格式沙汰

〔弘安禮節〕弘安禮節撰者

一條前關白

花山院前右大臣入道

二條大納言入道資季

意見之人數

右大臣師忠

入道前左府定雅

前右府忠敦

內大臣家基

儀同三司基具

入道大納言資季

大納言定實

前大納言雅言

權中納言實冬

春宮大夫實象

皇后宮大夫公家

民部卿資宣

大藏卿經業

按察使賴親

上北面

近衛殿 宗成朝臣

一條殿 則任朝臣

九條殿 以隆朝臣

弘安八年十二月廿二日定置給非私用云々評定之後大藏卿經業清書之

〔吾妻鏡二十八〕寛喜四年

元永 五月十四日甲午武州

時北條專政道給之餘試御成敗之式條之由

日來内々有沙汰今日已令始之給云云偏所被仰合玄蕃允康連也法橋圓全執事是關東諸人訴論

事兼日被定法不幾之間於時絆亘兩段儀不一揆依之固其法爲斷濫訴之所起也

〔式目抄一〕此ニ御ノ字ヲ置心ハ將軍ノ御成敗ニテ私ノ義ニアラザレバ也實ハ秦時ガワザナ

レドモ臣トシテ法ヲ定ムベキニアラザレバ將軍ノ御成敗ト面ニアラハシテ見センタメニ

御ノ字ヲ置也○中成トハ善ヲナスヲ云敗トハ惡ヲヤブルヲ云善事ヲバ成惡事ヲバ敗ルヲ

成敗ト云也○中略式目ノ式ハ法也尙書ニ百官承式孔曰式ハ法也式目ハノリノ名トヨム法式

ノ名目也目ハ節目條目也五十一箇條ノ條目ヲ指也最初ハ式條ト號ス後ニ式目ト改タリ其

御成敗式目

編追加アリ、コハ御成敗式目追加ノ諸本ニ在ル所ノ法令、及ビ貞永式目前後ノモノヲ分類
彙聚シタルモノナリ、以上ヲ鎌倉時代ノ政書トス、

建武式目ハ、建武三年ニ、僧是圓等足利尊氏ノ諮問ニ答ヘテ制定セシ所ナリ、篇目凡テ十七
條アリ、後世武家ノ法律トシテ、貞永式目ト駢稱セラル、註釋書ニハ、清原良雄ノ建武式目抄
アリ、次ニ建武以來追加アリ、コハ御成敗式目追加ト同ジク、亦御成敗式目ノ追加ニシテ、建
武以來ノ法令ヲ聚メタルモノニテ、建武式目ノ追加ニハアラズ、次ニ新加制式アリ、大日本
史ニハ、建武式目ト同ジク僧是圓等ノ編スル所ト爲シ、尊氏コレヲ施行セリト記シタレド
モ、此說未ダ遽ニ信ズベカラザルガ如シ、以上ヲ足利時代ノ政書トス、

早雲寺殿二十一箇條信玄家法、長曾我部元親百箇條、朝倉敏景十七箇條ハ、皆足利季世ノ亂
離ニ際シ、群雄各自ニ其家法ヲ定メタルモノニシテ、其範圍ハ元ヨリ分國ニ限レルモノナ
レドモ、幕府政令ノ行ハレザリシ時代ニ在リテハ、幕府ノ政令ト相並ベテ、當時ノ法律ト看
做サザルベカラズ、

織田氏ノ關東法令十五箇條、又豐臣氏ノ六箇條及ビ九箇條ノ法令ニ至リテハ、極メテ不完
全ナリト雖モ、亦天下ノ法度ト爲サザルヲ得ズ、

朝廷政書

〔玉葉〕建曆二年三月廿二日、被下新制宣旨廿一條云々、追可尋入有眞名假名新制、可書入、○宣旨并
家中新紙

略

〔續史愚抄龜山〕文應二年○弘長
元年五月十一日壬申、新制廿一箇條或作二
十箇條宣下、享
應類

〔公家新制四十一箇條〕弘長三年八月十三日 宣旨

一可興行伊勢幣事○中

古事類苑

法律部十七

中編

政書

鎌倉足利時代ノ政書ハ、朝家ニアリテハ、建曆宣旨弘長新制弘安禮節等アリ、武家ニアリテハ、御成敗式目ヲ以テ首トス、御成敗式目一ニ貞永式目トイヒ、貞永元年ニ武家成敗ノ憲法トシテ、北條泰時ノ制定セシ所ナリ、條目凡テ五十一箇條アリ、主トシテ武家ノ爲ニ設ケタルモノニテ、守護、地頭御家人等ノ心得、財産相續ノ方法ヲ示シ、訴訟裁斷ノ標準ヲ立テタルモノナリ、此式目ハ、嘗ニ北條氏代々恪守セシ法タルニ止ラズ、降リテ足利氏ノ時ニ至リテモ、猶ホ前代ノ遺法ト稱シ、永ク政道ノ準的ト爲シタリ、特ニ吏曹ノ輩毎ニ之ヲ講ジ、其說ニハ往々秘授口傳ト稱スルモノアリ、徳川氏ノ時代ニ及ビテハ、或ハ之ヲ以テ教訓書ト爲シ、兒童ノ讀本ニ資シタル事アリ、以テ此書ノ當時ニ貴重セラレシヲ知ルベシ、此式目ヲ解釋セシモノニハ、清原宣賢ノ式目抄最モ備レリ、又式目抄ト同名異書ナル、御成敗式目抄ト云フモアリ、其他御成敗式目註、式目聞書等、足利時代ニ成レルモノ甚ダ多ク、徳川時代ニ至リテモ、頭註、拔書、繪抄ナドノ類頗ル夥シ、

御成敗式目ノ出デ、後ニ新式目アリ、弘安七年ノ式目三十八條ヲ載セ、附スルニ式目數十件ヲ以テセルモノナリ、又御成敗式目追加アリ、コハ幕府ガ時々發シタル法令ヲ聚メタルニテ、追加トハ貞永ノ式目ヲ本條トシテ名ヅケタルナリ、諸本アリテ條數同ジカラズ、又新

古事類苑

法律部十七

中編

政書

朝廷政書

六六〇

御成敗式目

是國抄書

唯御淨寫書式目抄書

沙御成敗式目目

六六一

御成敗式目追加

六七八

新編追加

六八一

建武式目

建武式目抄

同

建武以來追加

六八三

新加制式

六八四

大內家壁書

同

朝倉敏景十七箇條

同

早雲寺殿二十一箇條

六八六

信玄家法

同

長曾我部元親式目

六九〇

織田氏法令

六九一

豐臣氏法令

六九二

臣養 爲大將軍欲奉度相州云云、

〔關東評定傳〕正嘉二年八月十六日放生會畢、及昏於建長寺前、射殺伊具四郎入道、依嫌疑、諫方利部左衛門入道被召預氏信、平左衛門尉俊基、康賴法師孫牧左衛門入道等同意露顯、九月二日、諫方斬罪俊基、牧等遠流、俊基者爲公人之間、殊遣硫黃島相州禪門時北條、故令札評給科斷之法、世以爲美談、

〔看聞日記〕應永廿三年十一月廿五日、抑開押小路亞相足利、反逆之企露顯之間、教高朝臣國賀、右

佐入道持光以下三人被流罪、於途中可被誅云々、語阿被、札問之間、武衛管領赤松等與力之由、白狀申、

然而諸大名事、中々不及沙汰云々、廿五年三月十二日、聞日野辨入道持光、去月十三日、於配所加賀被

國被誅、押小路亞相、禪門叛反事、持光書回文、依重科被討云々、山科中將教高朝臣同卅日配所加賀被

斬云々、

二罪俱發

〔後愚昧記〕應安四年

八幡宮造替條々、前內大臣定申云、中

梁清法印罪科事略中

神體奉安置之間、遠例尤多、神寶無左右、焚弃之云々、頗爲重事哉、恰恰不及奏聞、太以自由者、訪之憲章、罪條不輕歟、二罪以上俱發、以重論云々、早課法家可被勘決哉、然者須令解却所職、歟此上宜在勅斷矣、

藏主ヲ既ニ成太上皇帝之位引率囚徒楯籠山中堂同廿五日山徒率官軍攻中堂金藏主日野殿討死矣主上○後移近衛殿寶劔ハ清水堂後門ニ書銘捨之即禁裏ヘ召シテ被崇

〔管見記〕嘉吉三年九月廿八日右大辨宰相○資今日於八條河原被切之子息小冠八歲同被誅云々其外召人四十餘人今日引出六條河原被切之了又開右大辨息誅戮事虛說令安宅云々

〔看聞日記〕嘉吉三年十月二日抑勤修寺門跡ヘ侍所所代大勢向門主坊人等召捕云々此宮小倉殿

息也同意勿論也四條中納言參對面□□開勤修寺ヘ所司代寄來之時坊人等□□坊人數輩被斬門主ハ可被流罪云々

共犯

〔吾妻鏡九〕文治五年二月廿二日甲午被發御使難色於京師伊豫守義經源逐電之後御沙汰次第頗以

寬宥之間人猶可事凶惡尤可及急速之御沙汰之趣被申之云々○中

一類經卿原同意義顯義經之臣也可被解官追放之由先度言上畢而雖有勸勵之號于今在京

鬱訴相貽事

〔吾妻鏡二十〕建曆三年元年二月十五日丙戌千葉成胤生虜法師一人進相州○北條是叛逆

之輩中使也信濃國住人青栗七郎十六日丁亥依安念法師白狀謀叛輩於所々被生虜之所謂一

村小次郎近村信濃國住人龍山次郎同國住人高山宿屋次郎山上四郎上田原平三父子三人田

太郎重親重親北條三郎重親和野小太郎重親和野小太郎重親和野小太郎重親和野小太郎重親

郎兵衛尉義重伊東入郎澁河刑部六郎兼守安達左衛門和田平太金龜兵衛尉磯野小三郎山

左衛門尉之此外白狀云信濃國保科次郎兼澤太郎父子青栗四郎越後國木曾瀧口父子下總國八田

三郎和田與田太同四郎伊勢國金太郎上總介八郎甥白井十郎狩野又太郎等云云凡張本百三十

餘人伴類及二百人云云可召進其身之旨被仰國國守護人等朝政行村朝光行親忠家奉行之云云

此事被尋濫觴者信濃國住人泉小次郎親平去々年以後企謀逆相語上件輩以故左衛門督殿中務

くみし侍しぞあさましき其子右大辨相公○有光は曾存知せざるよしを陳じ申けれどもつゐにうしなはれぬ山上には衆徒使節等各馳向あひだ宮○金以下或はうたれ或は自害すとぞふしきなりし事也

〔東寺長者補任〕嘉吉三年九月二十三日子刻大内悉焼亡東西棟門計殘付火也其夜近衛殿御幸寶劔内侍所ハ三條殿取出被申進上之神聖ハ此時ヨリ不見云々○中三百人計亂入付火之間

其後糺明之時五十三人頸切之殘者共山中堂籠之間山門又押寄大將南方高秀也頸取之其後日野東洞院親子○有擲捕切之同意之人也○又見東寺執行日記

〔看聞日記〕嘉吉三年九月廿三日夜半許狼難焼亡云々有俊朝臣告之予平臥起出之處禁裏云々寢殿へ走出見之已清凉殿炎上仰天失心神大事之本尊樂器等欲運出御乳人走來申惡黨三四十人許清凉殿へ亂入常御所へ入御所様○後ハ未成御寢親長季春御前祇候晝御座御劔被召機仗所へ逃御大納言典侍取劔聖逃出之處凶徒奪取無力被取て女中右往左往へ逃出御乳人も小袖はがれて逃出御所様御行衛も不知之由泣々申心神惘然失東西有俊朝臣忿他所へ可有御出之由申之間乘輿東門より逃出宮御方女房之様にて步行若宮二條奉抱御喝食兩所南御方女中走出男共御共持經朝臣宿所へ行留守之御所にも大勢馳參警固騷動凡無言計廿四日抑南方謀反大將號源尊秀其外日野一位入道○有與力之惡黨數百人山上へ登て奉成臨幸之由披露中堂二閉籠三千之衆徒ヲ相語之由山門使節注進此外公家人諸大名○細川同心廻文ニ加判形云々廿六日資親卿子息小冠も被召捕云々廿七日日野家人其外朝敵共於所々召捕或籠舍或則誅云云世之物言夜々物忿無言計廿八日資親卿於六條河原被刎首其外召人五十餘人被斬○南方於山門召捕者也

〔天地根元歷代圖〕嘉吉三年九月廿三日日野殿○有謀反禁裏へ夜討放火南帝ノ一族取立テ金

召取於伊勢宿所及究問候、雖然同心輩不存知問、不及白狀候、京極加賀入道申沙汰云々、希代題目歟、若又自餘重罪在之歟、不審々々、

〔滿濟准后日記〕永享四年十一月七日、竹田千阿物語云、中條入道去月歟、參洛處、於尾張國被打云々、老體至極、春秋八十五歲云々、於道場自害云々、若黨三人同自害、中間一人同前云々、九歲孫同道、參洛處、祖父自害ヲ見テ、我モ自害セント申間、祖父入道自害ノ刀ヲ與了腹ヲ切ラントスル處、又守護代織田、是マデハ非上意之間、不可然由申止之了云々、見者共流涕云々、此老入道被切腹事、當御代不及參洛子息判官計、在京奉公之間、緩怠心中故云々、自餘儀定在之歟、不分明、

○按ズルニ、是ハ幕府ニテ中條名父子ノ舊罪ヲ追咎シテ、其父ニ死ヲ賜ヒ、其子ヲ逐ハレシナリ、

〔看聞日記〕永享七年五月十六日、抑山門之罪科人座禪院伊勢國隱居、於やう田被召捕京上、昨日被誅云々、二十三日開座禪院事、伊勢國人長野搦取侍所ニ渡、於相國寺延壽堂、一夜被札問、悉白狀申、其後被刎首云々、同宿一人子同明同被召捕被籠舍、依諸大名意見被斬云々、圓明ハ平泉寺隱居之由白狀申、仍甲斐ニ被仰越前下向可退治云々、六月三日、抑座禪院子平泉寺隱居之由先日座禪院被誅之時白狀之間、被仰甲斐討手ニ罷下云々、而平泉寺長吏搦取參洛云々、圓明ハ熊野浦へ落

下云々、又開座禪院子平泉寺長吏不召捕、甲斐召捕上洛、懸於悲田院被斬云々、

〔續神皇正統記後花園〕

嘉吉三年九月廿三日、今夜凶族等内裏に亂入て一手は清涼殿にのぼり、一

手は局町より攻入て放火せしむ、長刀を持たる者、玉體花間を危奉らむとせしが、目もくらみけるやらん、をざりのきてころびたりしひまのがれ出給ふとかや、密々近衛前殿下關の第に行

幸、劔璽は凶徒奪とりたてまつる内侍所御幸櫃は、東門役人佐々木黒田どり出し奉る、これより

凶徒は山門に取上て子細を牒送す、南方宮を取立申儀也云々、

此宮は萬壽寺僧

東洞院一位入道有日光野

來哉未熟時斷命條可宜之由治定仍今日仰安達新三郎令案由比浦先之新三郎御使欲請取彼赤子靜敢不出之纏衣抱臥叫喚及數剋之間安達頻譴責磯禪師○靜殊恐申押取赤子與御使此事御臺所御愁歎雖被有申之不叶云云

〔吾妻鏡七〕文治三年十月五日壬申河越太郎重賴依伊豫前司義顯○義緣坐雖被誅令憐愍遣跡給

之間於武藏國河越庄者賜後家尼之處名主百姓等不隨所勘之由就有風聞之說向後云庄務云雜務一事以上可從彼尼下知之由所被仰下也

〔吾妻鏡十三〕建久四年八月廿日甲寅故曾我十郎祐成一腹兄弟京小次郎被誅參州○源緣坐云云

〔吾妻鏡十七〕建仁三年九月四日己巳島津左衛門尉忠久被收公大隅薩摩日向等國守護職是又依能員○比緣坐也

〔仲實王記〕元久三年九月十八日丙申左大辨宰相○定被配流佐渡國之由有其聞是彼卿息男於嵯峨之邊女事之間有濫行之聞之間有與同之事歟云々

〔西大寺文書五〕定置

西大寺敷地四至內檢斷規式條々

一 殺害事

永追出其身職所帶悉可收公於住屋者取出可燒拂之但當座口論者十々年已後加評定可有沙汰也親類者可懸六親也○六親也○中略

落書起請者嘉元二年雖被制斷之元亨三年亦被行之開制可依時者也

〔滿濟准后日記〕永享三年十一月十四日院廳去十日被召取候子細ハ去三日歟於相國寺東被打土

岐中務大輔○大輔入道息當時遁世僧也一向紙衣體云々此間ハ屬方ニ歟申入最中云々此罪科ハ

勝定院殿○足利御代參關東云々院廳此大輔下母方遠類云々仍此間加扶持子細在之歟依之被

所之年貢或違背先例之奉法者雖爲代官之所行主人可懸其過也加之代官若依本所之訴訟若就訴人之解狀自關東被召之自六波羅被催之時不遂參決猶令張行者同又可被召主人之所帶但隨事體可有輕重也

〔新加制式〕一被官人罪科懸主人否事

右被官人重科之時猶於拘惜者主人可懸答仍三ヶ年可被沒收所領半分但爲決實否暫相拘其人者非主人之過然者犯科治定之時隨答之輕重爲主人可加成敗若及其期答人逃脫之旨雖申之主人可懸其答也○中略

一被官人及攻戰其答懸主人否事

右伴被官人遂札明令成敗者主人不可懸其科但无答之旨主從同心陳申之處犯科露顯者主人可懸其科也仍三ヶ年中可被沒收所領半分就中被官人之科內々雖令札明依不一決暫雖申其旨主人无私曲之段分明者難謂同科乎然者主人果而彼被官行重科以一禮可散其憤

〔御成敗式目〕一依夫罪科妻女所領被沒收否事

右於謀叛殺害并山賊海賊夜討強盜等重科者可懸夫答也但依當座之口論若及刃傷殺害者不可懸之

〔侍所沙汰篇^{追加}〕一親類被官人處同罪事

隨罪科輕重可懸其答之處悉沒收之條爲不便歟於自今以後者有沙汰可被行之矣

〔吾妻鏡^五〕文治元年九月二日壬午平家緣坐之輩未赴配所事若乍居蒙勅免者不及子細遂又可被下遣者早可有御沙汰歟之由被申之

〔吾妻鏡^六〕文治二年閏七月廿九日庚戌靜產生男子是豫州^{○諱}息男也依被待期于今所被抑留歸洛也而其父奉背關東企謀逆逐電其子若爲女子者早可給母於爲男子今雖在襁褓內爭不怖畏將

〔東大寺文書〕記錄 秦增法眼殺害造意體寬禪法橋罪科事

右件寬禪法橋者秦增法眼殺害造意之根本之條勝善法師白狀分明之間爲滿寺一同之群議解三網職所帶之所職悉可被改替之由申入政所上者於住宅者依爲東南院家御隔壁爲院家御進止可被點召之由先日治定事舊畢而若椿若口重披露者寬禪不憚寺勤恣經廻寺邊或稱可申開所存或對遺息等貽鬱結之由有其聞之間非無恐怖云々此條如披露者恩愛別離之歎未休之處刺插阿黨報酬之所存之條心勞之至可足衆察且童形之訴訟難處等閑之上寬禪法橋爲寺官身輕忽寺命於事不宜之間此事披露以前加寺勘之虞重此沙汰出來之上者罪責不輕之條衆中兼皆有知之處童形愁訴猶難散之由見書狀之上者爭無嚴密沙汰哉所詮寬禪法橋并子息等於見懸于寺邊者任法可加治罰其時若有敵對狼藉之子細者縱雖及殺害刃傷等事更不可及罪科之沙汰又云寺中云寺外有容隱同心之輩者可處同過之由依滿寺衆議記錄如件

元弘三年九月十日

年預五師代定尊

緣坐

〔御成敗式目〕一殺害刃傷罪科事付父子皆相互被懸否事

右或依當座之諍論或依遊宴之醉狂不慮之外若犯殺害者其身被行死罪并被處流刑雖被沒收所帶其父其子不相交者互不可懸之次刃傷科事同可准之次或子或孫於殺害父祖之敵父祖縱雖不相知可被處其罪科爲散父祖之憤忽逐宿意之故也次其子若欲奪人之所職若爲取人之財實雖全殺害其父不知之由在狀分明者不可處緣坐

〔御成敗式目〕一代官罪過懸主人否事

右代官之輩有殺害以下重科之時件主人召進其身者主人不可懸科但爲扶代官無咎之由主人陳申之處實犯露顯者主人難遁其罪科仍可被沒收所領至彼代官者可被召禁也兼又代官或抑留本

敎書之由弘武申請之旨大乘院僧正被申入者也

〔滿濟准后日記〕永享三年八月四日、以奉行飯尾肥前守被仰出大和國平田莊一院領去年段錢事、爲總

寺申處萬歲高田以下四莊官及異議、于今不致其沙汰也、仍任寺家申請旨、兩度嚴密御敎書お被成

遣了、雖然彼等曾以不應御敎書聞、寺官令參洛申請樣所詮於今者、御敎書計ニテハ、不可致沙汰條

勿論也、速任先例被召下奉行人相催國中軍勢、可令發向彼在所、若以國中勢計退治不事行者、自京

都速可被下御勢、由可被仰付云々、

〔建內記〕嘉吉元年六月十八日癸未、富樫介如賀守也逐電云々、日來達時宜被仰出事違背申之故云々、

弟兒三寶院也可繼家歟云々、

公事對捍

〔新編追加雜務〕一所當公事對捍輩事

右支配寄子等之處對捍之間總領勳入之訴申之時有其沙汰、或以一倍令辨償之、或依時儀雖被裁許、所詮於前々分者、以一倍可致辨、自今以後、其未濟之條無所通者、以彼所領可被分付總領、但總領寄事於左右致煩者、可被仰付穩便之輩也、依仰執達如件、

弘安七年十月廿二日

左馬權頭平朝臣

陸奥守平朝臣

〔新編追加雜務〕一所當公事對捍輩事

右公事等庶子對捍之時總領得入分以五拾貫可分付田一町之由、先日雖被定下爲總領、無其益之間庶子依不憚難澁之科、急速公事及關如歟、仍任舊例、可致一倍辨之由、可被裁許、令違背者可被分召所領也、且問狀一箇度之後、可被成一倍下知其後令違期者、差日限可被糺返、猶令遲引者可被收公所領之狀、依仰下知如件、

永仁二年七月五日

陸奥守平朝臣判

家歟、勅答云、無三代相續之例、閣上首可拜任之條如何、殊明年武家若公、就御元服佳例、可被仰付之由、被申之上者、先被還補長興、來年可被補雅久、不背道理歟之由、被思食也、但新大納言廣橋大納言等召之、令見申狀、有被御覽誤事者、可口時宜之趣、又無子細者、可被申武家御文案、可書進云々、兩卿參入於臺盤所、前令見兩方之文書各讀之、雖枝葉繁多仰之趣尤也、子細見被申狀、可被申勅定云々、廿四日、日野前內府參內官務事、猶可爲雅久之由、被申云々、被違背勅定、可被補雅久之由、重武命事人々有不審、有莫言事、廿五日、長興宿禰申、今度之子細、已任道理、雖可有勅許、雅久橫入事、武家御執奏之上者、無力、所詮御沙汰之次第、可被下勅裁云々、

〔吾妻鏡〕文治三年八月廿七日乙未、下河邊庄司行平爲使節上洛、又重被申京都條々、中略一所々地頭輩事

以前既面々含子細畢、若於不拘賴朝成敗輩事、隨被仰下、可加治罰事、

〔吾妻鏡〕四十六建長八年○永享元年六月五日甲子、於御教書違背之咎者、爲令召可注進所領之由、可下

知之旨、所被相觸五方引付也、

〔建武以來追加〕一不應御教書輩事

背被仰下之旨之由、使節令注進者、準御定違背咎、可被召所帶三分一、○下略

〔建內記〕正長二年○永享元年七月十七日、興福寺衆徒、豐田中坊與井戶確執事、去十一日、被成制止之奉

書於兩門跡了、而十日豐田中坊已押寄井戶方及合戰、以十一日御教書、自兩門跡被加制止、更不承引之、

〔建內記〕永享三年三月十二日丙子、早旦參室町殿、○足利義教付大河內赤松守也申入多武峯與小川合戰

事、大和國四鄉事、小川弘武知行之處、自多武峯勅致押領、結句去六日、率大軍寄來小川之在所、字多耶云

云及合戰、凡當國合戰、依御制止屬靜謐之處、違背上意候條不可然、所詮先可引退之由、可被成下御

謹上 天台座主御房

〔百練抄^{十二}〕承久三年五月十五日戊戌未刻自一院[○]遣官兵被討大夫尉光季是陸奥守義時朝

臣[○]北[○]背[○]勅命亂天下致可被追討之由有議依爲緣者先被誅光季

〔建武以來追加〕一仰詞

山門公人號負物譴責成洛中所々之煩剩不憚禁裏仙洞咫尺亂入卿相雲客住宅致種々惡行之間被申座主宮嚴密可有誠沙汰會不能叙用彌以狼藉違勅之坐難遁欺於向後者爲武家召捕彼輩等可被處罪科乎

〔集古文書^{三十七}〕元弘軍制條目

入洛輩可有知條々[○]中

一梨本青蓮院兩門跡竹園可奉補之於彼門跡方事者諸事可相問大塔二品親王御下知違勅之北嶺法師等者任被仰下之交名不廻時刻可追罰矣

〔建武年間記〕雜訴決斷所[○]中

一違背勅裁拒捍國司守護上使等構城郭及合戰輩事

守先度御事書固可有遵行之沙汰

〔親長卿記〕文明四年八月十五日依召參內[○]註[○]云官務事可被補雅久之由自武家[○]足利

被執申此間被經御沙汰之處如此執奏如何明日可持參二間可被仰談云々十六日參內[○]直衣

御前長興宿禰二間雅久陳答於御前予讀申仰云今度申狀各條目繁多也雖然有無詮用事等肝要

閣上首二代相續事有例[○]長興宿禰於二代相續[○]三代相續之由雅久申之[○]閣上首三代相續事無今度

晴富宿禰依晨照宿禰讓補長興宿禰雖爲上首晴富宿禰被補了前內大臣[○]勝光執申了理不盡之儀

等有之云々今度又雅久可相續之條雖無例又御執奏[○]和議之於申狀者就無其理以內奏申入武

古事類苑

法律部十六

中編

法律總載

鎌倉足利ノ時代ニ在リテハ、違勅ノ實例甚ダ乏シ、因テ僅ニ違勅ノ語アル若干ノ例ヲ此ニ收ム、又幕府ノ命令ニ背キタルモノハ、枚舉ニ違アラザレド、僅ニ其二三ヲ舉ゲタリ、緣坐ハ、當時ノ法ハ情ヲ知ルト知ラザルトニ由リテ其罪ノ有無ヲ別ツ、即チ情ヲ知ラザルモノハ、其妻子ト雖モ問ハザル例ナリ、

違勅

〔大夫尉義經畏申記〕追捕者武士重代并諸家格勸、○中源平院ノ兵仗ヨリハジメ、院內宮中守護シタマツリ、御八講季御讀經、第一最勝講等ノ時、誓固ヲウケタマハル、三關固關相坂、不違勅追捕ノ者也、

〔吾妻鏡^{十一}〕建久二年五月八日乙卯、院宣云、

被院宣稱近江國住人源定綱、殺害日吉社宮主等之犯、罪科不輕、仍先勘罪名、雖可被行所當之罪科、勘錄可及遲怠之上、且爲增神明之威光、且依優衆徒之訴訟、於定綱者處遠流、至下手輩者可禁獄所之由、欲被宣下之間、尙任奏狀、不申給其身者、不可散鬱結之由、奉振神與、○中濫訴帝關、○中仍不致裁報之間、奉振神與、即以歸山、違勅之上、彌添驚天聽之科、滅法之餘、更招忘神鑒之咎、○中兼又鼻惡之輩、狼戾不止者、各加同心制止之詞、宣廻衆議和平之計者、院宣如此、仍上啓如件、

四月廿八日

大藏卿宗賴 奉

古事類苑

法律部十六

中編

法律總載

違勅

六四七

違幕府命令

六四九

公事對捍

六五〇

僧尼犯罪

六五一

緣坐

同

共犯

六五六

二罪俱發

六五七

罪者不待時、以且斷申、其死罪者、悉待年終斷申、謹請處分者、右大臣宣奉勅依請者、今被右大臣宣稱奉勅於行大辟、秋冬無妨、而頒年有司者、至年終乃奏刑書施行之後、計其行程、令入春月以到遠國、宜自今以後、十月初斷奏訖、但始自十一月一日、至于十二月十日、常行祭事、不得令京官此限內決戮刑、

弘仁六年十一月廿日○又見日本後
紀、政事要略、

〔唐律疏議^{三十一}〕諸獄結竟徒以上各呼囚及其家屬具告罪名仍取囚服辨若不服者聽其自理更爲審詳違者笞五十死罪杖一百

行決

〔延喜式^{二十九}〕凡辨官所下罪人到省付囚獄司司卽易其徽纆其有行決者隨罪輕重於市若囚獄司決之行決之日丞錄各一人引囚獄官人并物部丁赴向市司便令本司喚集市人列立司南門示衆決之於囚獄司決者於廳前決之

〔延喜式^{四十二}〕凡決罰罪人者官人與使相對樓前罰之

〔延喜式^{二十九}〕凡流罪以下隨發且斷其死刑者皆總斷十月四日申官卽斷文令判事屬申送

〔令義解^十〕凡流移人太政官量配^{謂量罪輕重配其遠近故云量配也}符至季別一遣^{謂太政官錄罪流狀}

〔令義解^十〕凡決大辟罪五位以上在京者刑部少輔以上監決^{謂雖是自盡之人亦在其家監決也}在外者次官以上監決

餘並少輔及次官以下監決從立春至秋分不得奏決死刑^{謂奏決者猶云奏而決也}若犯惡逆以上及家人奴婢殺

主者不拘此令其大祀及齋日朔望晦上下弦廿四氣假日並不得奏決死刑在京決死囚皆令彈正衛

士府監決若因有冤枉灼然者停決奏聞^{謂彈正奏聞}

〔類聚國史^{八十七}〕延曆十四年八月甲戌刑部省言斷決囚徒令有正文順時肅殺不合虧違今檢前例

或過秋分節延入立春或輕罪之徒禁經歲月既乖法式都無準的伏請依令條流罪者不待時且斷其

死刑者亦待秋分年終斷奏許之

〔類聚三代格^{十二}〕太政官符

應改申死罪期限事

右太政官去延曆十四年八月十四日下刑部省符得省解僭斷決囚徒令有正文順時肅殺不可虧違今檢承前行事或過秋分節延入立春或輕罪之徒禁經歲月是既乖法式都無準的望請依令條流

勅斷

雲以「一乘妙法奉授公家以菩薩淨戒奉授法皇」○後白河而忽令還俗處流刑之條可及豫議哉宜在勅定
右大臣中宮大夫藤原朝臣定申云大略同長方朝臣定申爲菩薩戒和尚之者處死罪之條爲圓宗如
何冥之照察難量者歟

〔政事要略八十一〕非常之斷人主專之○名例律除名條疏文云如特奉鴻臚總案原放非常私問罪輕重

從勅斷乎答考課令曰官人犯罪勅斷有輕重者皆依勅斷附殿義解曰謂官人犯罪本罪成殿而勅斷
或輕或重者皆依勅斷計殿降考者輕重任叙處

〔三代實錄三〕貞觀元年十二月廿七日戊申太政官論奏言前越後守從五位上伴宿禰龍男令從者

公○公恐彌侯廣野等毆殺書生物部稻吉前者稻吉向太政宮告訴守龍男犯用官物故殺之狀下刑

部省令斷龍男罪省稱會恩赦直從放免前豐後守從五位下石川朝臣宗繼冤奪百姓財物介外從五
位下山口宿禰稻床等證之下刑部省省妄引赦書擅從原免前左馬權少允正六位上清岑朝臣田繼

少允從六位上紀朝臣令名少屬正六位上安倍朝臣有之從六位上麻績部清道史生從六位上田邊
史宅主騎士金廣主恩智貞吉等以私馬換官馬省亦無所考訊皆以赦免刑部大丞正六位上藤原朝

臣飽永少錄從七位下秦忌寸秋野前少輔從五位上源朝臣類大錄從七位上布瑠宿禰道永等從大
丞丹堀真總言放出罪人前日向守從五位下嗣岑王謀殺詔使正五位下田口朝臣房富等須詳加覆

案者也帝特降優詔曰龍男宗繼及左馬寮官人等所犯年遷時變人物改易飽永等罪成自真總情有
可矜宜申優典並從原有但刑部大丞正六位上兼中判事丹堀真人真總確執非法故縱罪人仍官當

解任嗣岑王依先斷官當免爵

宣告

〔令義解〕凡斷罪行刑之日○謂徒以上結獄竟具告罪名是爲斷罪之日已依律結獄竟徒以上具告並

宣告犯狀

〔延喜式二十九〕凡告囚罪名者因獄司引罪人就省版位卽判事屬讀示判狀少判事以上覆問服不

云處以故廢祭事罪身帶五位官當收贖徵銅六斤資清勘云處違勅罪徒二年官當又徵銅六十斤依格科中祓任資清勘文科贖銅并祓兼令祓清社頭上卿藤中納言子宣下大夫史盛仲神祇官刑部省本社本國等給宣旨事依爲辛爾不成左弁官宣旨只給書宣旨神祇官又差進祓使祐伊岐致元大中臣公長等也召致元被仰子細明日早可遂祓節其後可奉幣社家也者預信經日來候本院仍副院事永延雜色等所下遣也依殿下仰又差副馬允友宗半夜出洛云々

〔朝野群載十時〕勘申可着鈇左右獄囚事○中

不知姓王刀九六年廿一和國人

贓物貳種

右一人盜取經典并人物者也勘問之處以伏已了檢名例律云類斷罪而無正條說者之比附之義亦每此彼但除舉輕明重舉重明經之外尙准量科題賊盜律云盜毀佛像者徒三年又條云盜不計賊而定罪名及言減罪而輕於凡盜者計賊重以凡盜論加一等名例律又云二罪以上俱發狀以重者論注云謂非應累者唯具條其狀不累輕以加重者件王刀九已盜人物准賊五端合徒一年○中

永久三年十二月廿日○署名略

〔清觀眼抄〕山座主明雲配流事

後清錄記云安元三年五月廿日己未今日前座主明雲可被配流否事有陣定公卿大相國師○藤右原兼○藤原兼實大納言隆季中納言宗家成實參議朝方實宗等可被流之由令定申了

法家勘申前僧正明雲罪名之事

太政大臣右衛門督藤原朝臣右大辨長方朝臣定申云法家勘所當罪狀畢減一等配流不可及異議歟但其罪涉謀反之由勘申之雖理可然事起自訴訟爲蒙裁報催衆徒令參陣頭其間狼藉事若出不同偏難處謀反歟雖然衆徒騷動被結構之由既以有露顯者豈遁霜○霜下爲脫刑字哉須任法被行之處明

云正輔致經等合戰事不決真僞令勘問各證人申旨不異正輔致經等詞仍各罪科暗難定申但合戰之間兩人隨兵等共犯者先以調度文書令下勘法家可被定行歟左大弁左兵衛督○藤原公成左宰相中將等同余右兵衛督○源賴朝申云事旨同余詞但前日伊勢國司召進證人等不經勘問被返預國司了重召問彼等隨申可被定行歟右衛門督○藤原經道春宮大夫○藤原賴宗右大臣等被申云兩人所爲共以不快召問各身可被定行歟權大納言○藤原長家民部卿○藤原齊信內大臣○藤原教通被申云爲避自罪還露人咎其以不穩但伊勢國司解狀云合戰地隔致經住宅十餘丁云々以之知之致經進戰歟以調度文書令下勘法家可被定行歟左大弁執筆則上奏依及深更不待裁報右府以下退出十月七日辛巳或者云安房守正輔左衛門尉致經等合戰罪名令明法博士并大外記文義朝臣勘申之由前日被下宣旨了而明法博士利業朝臣謗難宣旨文之由依有其聞除利業可令勘申之由重有宣旨云々閏十月廿七日辛未參結政有政○中略次大臣以正輔政經等罪名勘文○如調度文書等授民部卿云可定理非公卿見了次第下見了余申云大外記文義明法博士道成等勘申安房守正輔前左衛門尉平致經等合戰罪名事至于正輔兩人可處絞刑者任勘狀可被行歟於正度致經者所勘申各以不同也先被問相違之由隨各申可被定行歟左大弁左右兵衛督權中納言左右衛門督同之春宮大夫被申云正輔罪兩人所勘申是同須任結被行也而年當朔旦從輕可被行歟但於致經者文義申可處斬罪之由道成自身不行可處疑罪者此事如何已正輔襲來可損已部內之由觸國司何偏謂疑罪哉民部卿被申云兩人勘申兩人罪科須任法定申也子朔旦競到可被行喜慶之期若被尋行歟右府被申云正輔罪任兩人勘申可被行歟於正度致經事者兩人所申共以不同也理非暗難知可從勘定之左大弁書之

〔永昌記〕天永元年三月十七日乙卯早旦參殿下○藤原忠實爲承明日以後雜事也其中春日預信經罪狀今日可決本是於本院殿下政所被問注又法家依殿下仰勘申罪名然而公家可有奉幣又可被宣下罪名仍昨日所下給貫首也隨被持參院即歸參新藤中納言又依召參會予○藤原爲隆讀申勘文信貞勘

右時實亭子院御脫舍人也而今年三月十九日主馬署舍人秦吉繼爲彼院御脫舍人等以他物被打損也者使等檢吉繼疵左頰二分并唇三分被打傷見血又左腋下八分皮傷見血自餘處々有被打腫而間同月廿日自彼院被出件時實仍使等勘問事由時實圖以他物打傷吉繼之由進伏辨過狀已畢白丁縣犬養永基年三十三

左京二條二坊戶主重六位
下縣大發宿願房賀男者

右今年三月七日左兵衛道吉常進愁狀云吉常去年十月廿六日被府使罷向伯耆國而問件永基婚吉常妻國仁町者仁町進申文云己夫吉常被差府使罷去伯耆國之間今年正月三日夜半件永基切破板垣入來寢所強婚實也者使等勘問永基強姦吉常妻仁町之由進伏辨過狀已畢以前獄囚等罪狀勘申如件

延喜十六年七月三日

〇署
名略

〔左經記〕長元四年三月十四日辛酉相府

〇藤原
賴通

被示云安房守正輔前左衛門尉平致經等合戰證人

各進之而正輔所進者二人是大神宮神戶郡司云々仍前日有宣旨可拷哉不之由令問法家官人之

處右衛門志濟通所勘申若有犯過解却郡司職可拷者而別當右兵衛督源朝臣

〇朝任

令奏云明法博

士道成內々令申云雖神郡司有犯過可拷也而件二人者等來會合戰庭依見其事正輔隨證申所召

也專無身犯有行罪過解却所職及拷訊哉云々此事可然歟若不可拷訊免件郡司等可召他證人歟

爲當且拷訊致經所進之者等隨彼申狀可被定行歟可定申者相府并中宮權大夫

〇藤原
能信

侍從中納

言

〇藤原
資平

左大弁

〇藤原
重尹

并余

〇藤原
經賴

等議令申云神郡司依無指犯不可拷之由誠可然早被恩免召他

證人之後相無可被拷訊歟相府召頭弁

〇藤原
任

被奏此旨仰云免神郡司等令正輔進他證人者五月

月八日甲寅參殿講論了入夜退出別當被示云昨日正輔致經等所進之證人令拷問了各所申不異

內問詞并各主申詞但且爲令奏其日記付頭弁了經三度拷之後可申一定歟九月八日癸丑參殿

內等暫右府

〇藤原
實資

被參入

〇中略

右府以安房守正輔前左衛門尉平致經等合戰文書令見下了余申

之狀已畢、而猶遲緩不肯行之、自今以後、宜依前件行其政、不可隔日、又須所行事條目、錄每日申之者、

寬平七年二月二十一日

民部權大輔兼右近衛少將在原弘景奉

〔政事要略八十一〕檢非違使

合犯罪人肆人

織部司物受滋生宿禰峯良年參拾貳

河內國澹河郡人從六位下同春山男

中宮職舍人大初位下津守連梶取年參拾參

攝津國西成郡人從七位下春繼男

酒井乙麻呂年參拾一

大隅國桑原郡人

下村主白子年參拾肆

山城國羅郭郡人

右目錄

一織部司物受滋生宿禰峯良犯狀事

犯用米陸拾斛參斗

充直長年錢捌拾肆貫肆佰貳拾文

准賊布壹佰參拾陸端貳丈

以二五丈二尺爲端

右織部司今年二月七日移書僞件峯良、訐稱司天安三年大糶米之內、度々受盜民部廩院米六十斛

三斗、仍責過狀、副日記移送者、使等熱加覆問、峯良私受取犯用之過、承伏已畢、

一中宮職舍人大初位下津守連梶取犯狀事

闕以他物打傷妃永峯狀

右酒部家子、今年八月十四日愁狀云、以今日酉刻許、東市油廬間、件梶取執永峯髮打伏、以他物打損

者、使等熱加勘問、梶取與永峯相闕、卽以他物打損永峯之意、承伏已畢、

一酒井乙麻呂犯狀事

○此下有脫文

利蔭官當除名宗扶久吉岑二人並近流廣君處斬刑武岡除名近直徒三年府司大盛正六位上平朝臣高平大典正七位上秦忌寸末吉從七位下御船宿禰貞範少典正八位下清科朝臣全棟等追捕罪人拷掠違法放免自由刑部省節級處罪贖銅有差是日太政官奏聞詔曰死罪宜減一等處之遠流自餘依省斷焉

三代實錄

四十九卷

仁和二年五月十二日庚寅先是石見國邇摩郡大領外正八位上伊福部直安道那

賀郡大領外正六位下久米岑雄等發百姓二百十七人帶兵仗圍守從五位下上毛野朝臣氏永館春取印匙驛鈴等授傍吏詔遣式部大丞正六位上阪上大宿禰茂樹推問事由刑部省斷云安道應官當解任當徒二年贖銅十斤岑雄應贖銅九斤自餘人節級處罪延曆寺僧一道右京人正六位上藤原朝臣豐基戶口俗名數直與安道同謀還俗當徒一年又守氏永爲安道等所圍之時逃隱於介外從五位下忍海山下氏則館夜間外有數十人聲氏永意以爲賊欲被害介氏則即同謀也由是以劔殿傷氏則妻下毛野屎子及從女大田部西子即春取屎子所著之大衣一領自被逃去刑部省斷云依律所犯當近流身帶從五位下請減一等徒三年以從五位下當徒二年餘徒一年以六位以下當徒一年仍即解見任職事又氏永殿傷氏則妻之後逃走隱山中據從七位下大野朝臣安雄率郡司百姓三十七人捉獲氏永打縛其身籠閉倉中刑部省斷云安雄應官當解任當徒一年所率郡司百姓節級處斷去年十月四日刑部省斷文進太政官十二月二十七日外記覆勘作論奏請公卿署而正三位行中納言兼民部卿陸奥出羽按察使在原朝臣行平所執狀四條參議右大辨從四位上兼行勘解由長官文章博士橘朝臣廣相所執狀七條並別奏不肯連名其所執狀事多不載二卿別執違不省至是加署即日奏聞詔曰宜依省斷

【政事要略

六十一】

別當中納言兼左衛門督源朝臣光宜備近者囚徒滿獄科決猶遲或所犯是輕禁囚

日久或本罪既重待斷終身獄官之道理不可然因之去年十月五日須定左右論非違使廳每日行政

流

〔三代實錄三十一〕

陽成

元慶三年十二月十五日庚子太政官奏曰右京人大初位下井上伊美吉直真繼以

鉏刃毆殺井上伊美吉真雄紀伊國浪人當麻真人岑吉射殺建部今雄刑部省覆案並當斬刑但馬國

氣多郡人彼國前醫師從八位上日置部是雄無位日置部衣守放火燒不動櫓二千三

○三續案國十史作四字

八斛五斗并倉四依格應格殺佐渡國浪人高階真人利風圖殺難太團權校尉道公宗雄及盜取高階

真人有岑財物加茂郡人神人動知雄道古今人爲國殺之從大田部志真刀自女服半志子女見殺不

救利風當絞刑動知雄道古今人徒三年志真刀自女半志子女當杖一百詔曰死罪宜降一等處之遠

流徒以下罪依去十一月二十五日詔旨免除

〔三代實錄四十八〕

光孝

仁和元年十二月廿三日癸酉先是右京人散位從七位下大石忌寸福麻呂私雕官

印捺僞官符賣官田地子穀一百五十斛欺取其直左兵衛阿刀澤雄錢十二貫文左衛門門部國部禪

師麻呂錢六貫文刑部省斷云福麻呂雕官印捺僞官符其罪當近流欺取直錢當遠流相准輕重雖有

遠近至減一等俱是徒三年也所犯在降前又減一等徒二年半以從七位下當徒一年又以正八位上

當徒一年餘半年徒官當不盡其官留官可收贖銅十斤仍須一年之後降先位一等從正八位上又備

前國上道郡人白丁山吉直同郡人白丁秦春貞圖殺讃岐國鷯足郡人宗我部秀直同郡人建部秋雄

等正五位下行權守源朝臣加斷罪以吉直爲首處絞刑春貞爲從合徒三年又謀首筑後掾從八位上

藤原朝臣近成從少目從七位上建部公貞道左京人大宅朝臣宗永蔭子无位在原朝臣連枝蔭孫大

初位下大秦公宿禰宗吉同謀无加功蔭子正六位上清原真人利蔭无位藤原朝臣宗扶前醫師少初

位上日下部廣君白丁八多朝臣久吉岑同謀不行前掾正六位上藤原朝臣武岡左京人大宅朝臣近

直等率數十人夜圍守從五位上郡朝臣御西館弱殺御西詔遣帶正少卿從五位下安倍朝臣肱主等

於太宰府推問事由刑部省處近成斬刑真道官當除名宗永年七十贖銅百斤連枝宗吉二人並近流

越前國足羽郡人生江恒山、因幡國巨濃郡人占部田主等、毆傷備中權史生大宅鷹取、并毆殺鷹取女子恒山等言、隨私主右衛門佐伴宿禰中庸、教毆殺鷹取女子、圖誣律云、威力使人毆擊、而死傷者、雖不下手、猶以威力爲重罪、下手者減一等、又云、故殺人者斬、恒山田主等、隨中庸教、非因鬪爭殺鷹取女子、須以中庸爲首處、斬刑而身犯大逆、降配遠流、不更斷罪、恒山田主爲從、減一等、並合遠流者、降恩、詔斬刑、減死一等處之遠流、自餘並依省斷、

〔三代實錄^{清和}〕貞觀十年十月廿八日戊子、太政官論、謹奏曰、刑部省斷罪、文云、齋宮寮史生從八位上縣造富世、刃殺助正六位上藤原朝臣豐本伊勢國司從五位上行權守藤原朝臣宜從五位下行權介藤原朝臣^{○宜以下十二字}廣守、斷罪違律、前志摩守正六位上高橋朝臣繼善、犯用官物私營公田、過役難係國掌奏貞雄、毆殺百姓日置福益、法官覆案、富世貞雄當斬、宜廣守贖刑、繼善遠流者、詔富世貞雄減死一等處之遠流、自餘論之如法、

〔三代實錄^{清和}〕貞觀十一年十月廿六日庚戌、太政官論奏曰、刑部省斷罪、文云、貞觀八年、隱岐國浪人安曇福雄密告前守正六位上越智宿禰貞厚、與新羅人同謀反逆、遣使推之、福雄所告事是誣也、至是法官覆奏、福雄應反坐斬、但貞厚知部內有殺人者、不舉訊、仍應官當者、詔斬罪宜減一等處之遠流、自餘論之如法、

〔三代實錄^{清和}〕貞觀十三年十月廿三日乙丑、太政官論奏曰、越前國守從四位下弘宗王、爲百姓所訴、增出舉之數、欲私其息利左京人大初位下佐伯宿禰彌惠、僞造內印、刑部省斷曰、弘宗身卒、不更論罪、彌惠罪應絞刑、詔絞刑宜減一等處之遠流、

〔三代實錄^{清和}〕貞觀十六年十月十九日甲戌、太政官奏、沙彌教豐、俗名^二毛野豐麻呂^一、沙彌善福、俗名水取貞江、於丹波國船井郡率濫僧四十餘人、殺勸學院使日奉全吉、支解其體、行火燒民屋二家、并燒殺一女、下刑部省令覆案、並當斬刑、石見國人若杖部豐見、圖毆殺人、當絞刑、勅宜減死一等、並處遠

日亦皇太子未卽位故延而行之非緩也

〔三代實錄清五〕

貞觀三年十月廿八日戊辰太政官論奏曰

尾張國人敢臣繼吉敢臣宗貞等殿殺宗貞

兄敢臣繼雄信濃國人壬生稻主殿殺妻母刑部子刀自女上野國人神人繼道故殺布師貞談路國浪人物部冬男圖殺錦織廣人遺正六位上行治部少丞安倍朝臣興氏從七位上行勘解由主典伴連貞宗等於上野國推之自餘國司斷而言上法官覆案罪皆當斬詔減死一等處之遠流

〔三代實錄清十〕

貞觀八年十月廿五日丙申太政官論奏曰

刑部省斷罪文云讚岐國浪人江沼美都良

麻呂殺香河郡百姓縣春貞春貞妻秦淨子申訴云美都良麻呂於春貞宅相共飲酒言論相鬪春貞呼曰吾爲美都良麻呂被刺之驚而見之血出自左脇卽死同郡人秦成吉等與春貞美都良麻呂等同飲之人也而相鬪之場雖以言詞相諫而遂不相救助國司斷云鬪毆殺人者絞以刀及故殺人者斬雖相鬪而用兵刃殺者與故殺同准犯據律合斬刑者又捕亡律云隣里被殺人告而不助救者杖一百成吉等在殺人處不助救准律條各處杖一百刑部省覆斷云國斷有失何者案律鬪而用刃卽有苦心仍處斬刑但不同於故殺而引故殺及用兵刃殺等之文此國司之謬斷也又淨子詞云成吉等與春貞美都良麻呂相鬪之場雖以言詞相諫而遂不救淨子聞春貞之叫纔知被刺然則成吉等醉中不覺美都良麻呂害春貞之時非聞告而不助見刺而不救者也仍改斷無罪斷獄律云官司斷罪失於入者減三等名例律云五位及七位以上犯流罪以下各減一等判斷之失旣由判官仍正七位下行據高階真人全秀正六位上行左近衛將監兼權掾藤原朝臣房雄爲首全秀身帶七位例減一等合杖六十贖銅六斤房雄遙授不預其事合免其罪從五位下行介藤原朝臣有年爲第二從減四等合杖六十身帶五位請減一等合笞五十贖銅五斤參議正四位下行右衛門督兼守藤原朝臣良繩從四位上行皇太后宮大夫兼權守藤原朝臣良世爲第三從亦是遙授合免其罪正六位上行大目秦忌寸安統正七位上行少目阿岐奈臣安繼爲第四從減六等合笞四十身帶七位以上例減一等合笞三十贖銅三斤

緣公事致罪，而無私曲者，疏云：私曲相須，公事與奪情無私曲。雖違法式，是爲公坐云々。私罪條疏云：私罪，謂不緣公事私自犯者。雖緣公事，意涉阿曲，亦同私罪者。由此案之，私者不緣公事，自犯之名，曲者雖緣公事，意涉阿曲之謂也。相須則私與曲，二事相待之理。然則無私無曲，可爲公罪。一私一曲，不免私罪。而永直等說云：私曲者，謂私之曲相須者，合私曲兩字爲一義，以連讀之意云々。者文義相錯，公私不分。此說之迂，難可據信。蓋朝臣所執，誠爲允懷。

〔三代實錄清和六〕

貞觀四年八月十七日癸丑，是日從五位下守大判事兼行明法博士讚岐朝臣永直卒。

略○中

承和十三年法隆寺僧善愷，向官告檀越少納言登美真人直名有犯之狀。右少辨伴宿禰善男與

參議右大辨正躬王等執論差踏，善男辨口便候，蒙帝寵遇，遂誣正躬王等，許容善愷違法之訴，免其官爵。先令明法博士等斷正躬等之罪。永直畏憚權勢，不肯正言。然執律私曲相須之義，大忤善男之旨。

〔三代實錄清和七〕

貞觀五年五月癸亥朔，參議刑部卿正四位下兼行越前權守正躬王卒。○中 承和十三

年法隆寺僧善愷，告少納言兼侍從從五位下登美真人直名，爲寺檀越，枉法狀。太政官加訊鞠讞之。而時論縱橫云：正躬等爲善愷成私曲于時，從五位下守右少辨兼行讚岐權介伴宿禰善男執律私曲相須之義不平。正躬等之論此事，分爭遞成矛盾，事下勘解由次官從五位下兼守大判事行明法博士讚岐朝臣永直考之。永直考云：私曲兩字，混處一科，是相須之義也。善男確執以爲私之與曲，明是二也。當時有議式：部少輔從五位下小野朝臣篁，同善男之論，遂緣受推善愷違法訴狀，官當解任削爵一階。從四位下行左中辨兼守大藏大輔伴宿禰成益從五位上守右中辨藤原朝臣豐嗣從五位下守左少辨兼左衛門權佐藤原朝臣岳雄等，共坐此事。解官削爵，前史詳之，故不委載焉。

〔三代實錄清和一〕

天安二年十二月八日乙未，太政官論奏曰：對馬島下縣郡擬大領外少初位下直氏成

上縣郡擬少領無位直仁德等，率部內百姓首從十七人，發兵射殺守正七位下立野連正峯，及從者坂本成岑等罪，皆當斬。詔減死一等。處之遠流，須去十月十日以前，依式奏讞。而奉葬文德天皇，未滿三十

殊明而松長前後殊言公私變斷遂云受推一條當稱誤失自餘諸事應爲阿曲生節目於一事分輕重於同意欲辨公私還增曲直又同答云正躬王等執論曰善愷元進訴狀之日副手實結解就此等狀年月實事既是明白者仍檢諸辨問狀善男問中已有不注指年月實事之條然則正躬王等須當彼時悔悟所受訴狀已違法式而其後明法博士等申返訴狀之日正躬王等猶亦以手實結解執爲明白之證明是故犯何得爲失即是松長自賊夫人之辭也又以同問狀付永直等令決是非其後永直等申云諸辨問狀彼此異執有疑勾勘因依訴狀勘申者然則善男所問因爲先覺何稱勘發之與在永直等乎謬妄如斯準的何據夫理有一途法無二孔今明法之家公私異論輕重殊執各是自心遞非人說遂使視聽多疑取捨無準今之評議實罄愚管謹案名例律私罪謂不緣公事私自犯者雖緣公事意涉阿曲亦同私罪準據此律諸辨等自始受訴狀至于推問之日其所違犯已涉私曲然則處私之斷誠得其情所見如此不敢隱欺者左○左一本大臣宣奉勅依官議行之者仍準所犯以所帶一官當徒二年其餘如半年徒贖銅如件省宜承知依件徵納

〔文德實錄〕仁壽二年十二月癸未參議左大辨從三位小野朝臣篁薨○中承和九年夏六月爲陸奧大守秋八月入拜東宮學士其月兼式部少輔十二年春正月授從四位下于時法隆寺僧善愷告少納言登美真人直名爲寺檀越枉法狀訴之太政官加訊鞠漸將讞斷而世論嗷々爲善愷成私曲由此朝廷更論此事延至分爭名例律私曲相須之二義或以爲一或以爲二辨官上下還羅其網遂令明法博士讞岐朝臣永直考之考曰私曲兩字混處一科是相須之義也當今之事只有一犯不足結罪事未斷畢十三年五月爲權右○右一本中辨新關其事即據律文以爲私與曲明是二也若私若曲有一於此未免其罪而連涉日月不肯決斷仍上請議定私曲律義之表並所執狀以糺法處○處恐字誤之不熟律義明辨官之可處私罪篁初恨此論之不平作傷時詩卅韻寄參議滋野朝臣貞主後重令諸儒傍議其文曰被右大臣宣僞奉勅據參議小野篁朝臣上表及所執律文義定可考申謹依宣旨覆案律文公罪謂

猶不承者自從私罪之法而檢諸所執既無此文又永直等勘僧善愷之訴狀辨官應受推否之狀曰正躬王等執論曰善愷元進訴狀之日副手實結解就此等狀年月實事既是明白也而永直等猶稱不明遂斷違法以此觀之勘發之與唯在永直等非是善男意然則於此一事善男并諸辨俱涉誤失非緣故犯據檢律條可爲公罪但自餘違法之事雖緣公事意涉阿曲准法而論皆是私罪者官議云今案前答皆稱有私加以問僧善愷處答冊之由永直長道等申云猶合處答冊何者案所執辨官申上不令俗形者然則辨官許容不令俗形准律官人百姓共犯罪以官人爲首仍許容之辨官爲罪首合處答五十僧減一等合處答冊者既云許容豈非挾私然則有私之說彼此一同唯以未有所曲猶稱爲公罪仍更詰難公私之律上下失所相須之文龜注倒義之由永直等覺悟更無駁議以此論之既非公罪何者名例律云公罪謂緣公事致罪而無私曲者注云私曲相須卽是欲顯公罪之理更起私曲之文私曲二字其義猶隱故承私曲之下設相須之注然則相待於私曲二事全無一者乃名爲公罪既云無私曲若此之二事互有一者不合入公坐其文已顯明且不公爲私背私爲公是公私之不雜猶白黑之自異然則公坐之中何得有私私罪之中亦宜無公而長道等云有私無曲或有曲無私仍爲公坐者文義俱亂其誣已甚其文云私曲相須乃成私罪者仍案私罪之條終無相須之句何以無據之傳說輒亂不疑之成文上下失所公私混義是亦不通也後經數日永直等更進所答不盡之狀云私曲者謂私之曲也相須之句者合私曲二字爲一義連讀之意也今如此說者私曲是一事若是一事者相須之律終成空文加以衛禁律云弓箭相須若云私之曲者豈是弓之箭乎舉此一誤餘隨可知凡相須與不相須皆是法律之細例且史書之中多有此文彼此同例更無異義忽出新意強亂舊文非但當時之惑當貽後代之疑加以長道等初云私與曲二者相須乃成私罪其後乃變爲私之曲既云明法豈有疑辭而前後殊論向背異執斯而不正者恐涉於弄法又松長所答理不可然何者諸辨所受訴狀多乖法式而復推問之日頻致違犯尋其意緒皆不過資助於訴人以左右其事然則資助之情本來理須一同受推之咎故失復何

檢訴狀直名強賈賤物過取之屋直錢准贓布廿二端二丈

○二丈、頭聚史作三丈、據職制律准枉法論合遠流是

所告之罪圖訟律云告人罪皆須明注年月指陳實事不得稱疑官司受而爲理者減所告罪一等今按諸辨所執彼此異論公私難辨然尋犯山結此緣公事致罪可無私曲仍須從公坐法自流上減一等徒三年身帶五位已上請減一等徒二年半卽罪輕不盡其官聽贖銅五十斤者左大史仲良田連宗斷文云諸辨須議善惡申訴者依令先令着俗衣然後受訴狀而正躬王等所執云僧尼令雖設權俗之法而元來未施行者其庶務皆以法令爲本今既設權俗之法何更釋元來未施行又同執云爲偏禁固處於開奧防其逃逸理非資助者凡禁人之體庶人皆知事處於開奧可謂禁固乎又同執云直名於國爲奸賊之臣於家爲貪戾之子者又云直名爲通發覺望下僧綱自恃利口求當訥舌正躬等審其奸計不許自牒者凡設官分職各有司存理須任法付所司何稱訥舌之有司破法奪他人之職其拘獄之官須置情平直無有愛憎而妄構異端鍛鍊成罪斯所謂屈法申情者又右少辨伴宿福善男出牒具示違法之由而成益等所執云於辨官推訴訟是往古之舊貫非昨今之新意是以申上官蒙處分所問者其稱舊貫事是實也但元不識法意從舊例有違失者須隨教喻之旨改正不可承循違法之舊貫而確執不移可謂知意故犯法名例律云私罪謂不緣公事私自犯者雖緣公事意涉阿曲亦同私罪者理須依涉盜賊五十端已上從加役流上減一等處徒三年身帶五位已上請減一等處徒二年半五位已上一官當徒二年餘徒半年贖銅十斤令解官者彈正大疏漢部松長斷文云今檢成益岳雄等所執事緣公論情無私曲雖所行違法獨是公罪但餘辨所執尋其論緒頗涉私曲稽之律條可謂私坐者以前法家所斷如右左大臣宣奉勅明法博士等斷辨官罪之公私彼此異論科斷不同宜覆問執申者仍覆問永直等皆稱檢諸辨所執可謂有私雖然未有所曲仍處公坐何者准律私曲相須乃成私罪之故者又問松長曰成益岳雄同爲受推之官而爲公坐如何松長申云今加覆勘前斷有失錯之罪更無所避何者右少辨善男牒狀雖論律令數條不合受推之理而無引明注年月指陳實事之律若有引此律諱彼諸辨而

或書云、廿日以前奏年終斷罪事、大臣參上、以斷罪文奏之、勅減死罪處遣流、自餘處有斷_{〇處有斷北}、大臣奉勅依例行之、

〔北山抄_二見_一〕廿日以前奏年終斷罪文事

大臣參上奏之、是論奏也、_{判官以斷文付外記、外記遣論奏、勅減死罪處遣流、自餘依省斷、大臣奉勅依}

例行之、_{注、昔例一、二度只依省斷者、第三度減死云々、死罪三度、斷奏可行也、}

〔文德實錄_三〕仁壽元年十二月壬戌太政官奏刑部省斷罪文、舊例十一月奏之、去月有大嘗祭事、故延

至今月、

〔政事要略_{六十}〕別當宜儻如聞捕禁之徒、日而無絕、末類之者隨亦不少、或待推鞠之間、空送居諸、或

究斷決之程、難堪飢寒、遂令囚禁之輩終身命於夏臺、是則不定使局於一處、往反右_{〇右上下}、衛門府

之所致也、況去寬平七年二月二十一日別當中納言兼左衛門督源朝臣光宣定左右檢非違使廳不

隔日可行政之由、已以明也、而年紀多積、自似解體、方今政貴簡要、還不失仍舊之蹤、事有弛張、亦盡知

推斷之意、加以諸司行務、皆定其廳、至于使政、何在兩府、靜尋由緒、專非穩便、須於左右府停所行之政、

以左政舍便、爲使廳、每日勤行、令無擁滯、然則涇渭之流、自分、輕重之科、早定、但官人相具、一如去寬平

七年二月二十一日奉勅宣旨、

天曆元年六月二十九日

防鴨河使右衛門權佐齋院長官藤原朝臣成國奉

斷罪例

〔續日本後紀_{十六}〕承和十三年十一月壬子、太政官下符所司、令徵前參議左大辨正躬王、前參議右大

辨和氣朝臣眞綱等贖銅、其符爵太政官符、刑部省應徵贖銅事、從四位上正躬王應徵十斤、從四位上

和氣朝臣眞綱身卒、不徵從四位下伴宿禰成益、應徵十斤、從五位上藤原朝臣豐嗣應徵十斤、從五位

下藤原朝臣岳雄應徵十斤、右大判事讚岐朝臣永直、明法博士御輔朝臣長道、勘解由主典川枯勝成

等斷文云、右辨官宣法薩寺僧善愷、以違法訴狀告、少納言登美真人直名并受推官人等罪、勘申者今

〔令義解〕^十凡盜發謂雖不獲盜人而於被盜之家有所損失者亦同斷日月年別摠帳附朝集使申太政官及徒以上四各依本犯具錄發及

〔令義解〕^十凡國斷罪應申覆者謂申覆重也下條云盜發及徒以上附太政官量差使人取強明解法律者分道巡覆見因國斷得伏辨故杖罪以下不入此條也事盡未斷者催斷即覆覆訖錄申若國司枉

斷使人推覆無罪國司款伏灼然謂款誠也服罪亦同也是為款伏即伏辨誠之書合免者任使判放仍錄狀申其使人與國執

見有別者各以狀申若理狀已盡可斷決而使人不斷妄生節目盤退者國司以狀錄申官附使人參其

徒罪國斷得伏辨謂結斷已訖及賊狀露驗者即役不須待使以外待使其使人仍摠按覆覆訖同國見

者仍附國配役

〔令義解〕^十凡犯罪答罪郡決之謂決贖並同其贖物杖罪以上郡斷定送國兩斷決之若杖罪者發及老

也在郡覆審訖徒杖罪及流應決杖徒流加杖又雜戶隸戶犯流決杖之類是也若應贖者謂有贖及老

即決配謂決杖及徵贖其刑部斷徒以上亦准此決贖故云亦准此其死罪應決杖及贖者即准流徒之法刑部亦得

也可准此也刑部省及諸國斷流以上若除免官當者皆連寫案謂凡斷獄官司皆連寫案及伏辨以成一案更

也申太政官按覆理盡申奏即按覆事有不盡在外者遣使就覆謂依國所斷情理不盡則遣專使就覆在京者更就省覆

〔儀式〕^十奏年終斷罪儀

刑部省豫修解文進太政官外記勘定作奏訖大臣持奏文率參議以上昇殿奏刑部省乃年終政書進

止申大臣奉勅語引退即奏文并解文二通尾書勅語云々一通給刑部一通留辦官其奏文收太政官並捺外印

〔延喜式〕^{十一}太政官凡刑部省所申斷罪文者造二通十月四日進辦官即日史讀申外記覆勘造論奏廿日

以前奏聞謂流罪以上及除免官當若有依奏及恩降並具狀錄刑部解後印之訖附辦官一通留辦官一通下刑部

〔小野宮年中行事〕^十月四日死刑斷文申官事

〔令義解〕凡諸司斷事悉依律令正文主典檢事唯得檢出事狀不得輒言與奉

〔令義解〕凡犯罪皆於事發處官司推斷謂事發者已被告官其職三審者初告亦是發訖也官司者受

事發即取紀伊國中估之數准紀伊國上布之估於攝津國斷決之類是爲於事發處官司推斷也在

京諸司人及諸國人在京諸司事發者犯徒以上送刑部省外皆不得斷徒已上刑部凡在京諸司除京職

以上者直送刑部不得斷勾假有甲乙二人共犯一年徒乙是隨斷斷徒已上刑部故略准合收贖者申其

從應減一等決杖一百是猶甲乙共送既不一推斷省從未分故也杖罪以下當司決謂若合收贖者申其

衛府札捉罪人非實屬京者謂文云非實屬京者即如實屬者皆送刑部省

〔日本書紀〕大化元年八月庚子拜東國等國司仍詔國司等曰又國司等在國不得判罪

〔令義解〕凡犯罪事發有贓狀露驗者雖徒未盡見獲者先依狀斷之謂依律共犯罪罪自外從後追究

也謂召徒伴爲追也推事狀爲究

凡因當處長官十五日一檢行無長官次官檢行其因延引久禁不被推問若事狀雖可知支證未盡

重事得實輕事未畢如此之徒檢行官司並即斷決

〔唐六典〕大理卿之職略中若禁囚有推決未盡留繫未結者五日一慮若淹延久繫不被推

詰或其狀可知而推證未盡或証一人數事及被証人有數事重事實而輕事未決者咸慮而決之

〔政事要略〕斷獄律云官司入人罪者謂故增減情狀足以動事者若聞知有恩赦而故論決及示

導令失實辭之類若入全罪以全罪論官司入人罪者謂或虛立證據或妄構異端檢用法示導令或五

唐律疏議有故云之類四字若入全罪謂前人云無實犯虛構成罪道以虛構狂入全罪科入罪但

本應收贖及加杖者止從收贖加杖之法限有入官贖并單丁之人家人合入贖入者亦依贖論或入官

不用官常及配流役身之例此是官司入人之從輕入重以所剩論刑名易者從管入杖徒徒入流亦以所

剩論從徒入流者三流同比徒一年爲剩即從近流入遠流者同比徒半年爲剩若入加役流者各計加

出入人罪

罪ニ就キテ申覆スベキトキハ、太政官ヨリ法律ヲ解セル使人ヲ差シ、徒以上ノ囚ノ情盡キテ、未ダ斷ゼラレザル見因テ巡覆シ、催シ斷ゼシメテ即チ覆シ、覆シ訖リテ錄シテ申ス、但シ徒罪ハ國推斷シテ服辨ヲ得タルト、賊狀露驗ナルトハ、使ヲ待タズシテ即チ役ス、其外ハ皆使ヲ待ツナリ、服辨トハ即チ口供ノ事ニテ、後ニ過狀トモ云フ者是ナリ、答罪ハ郡ニテ之ヲ決シ、杖罪以上ハ郡ニテ斷定シテ國ニ送り、覆審シ訖ルトキハ、徒杖ノ罪及ビ流罪中ニ配セズシテ加杖スベキ人、若シクハ有蔭老少ノ贖スベキハ、即チ決杖、配徒、徵贖ス、刑部省及ビ諸國ニテ、流以上、若シクハ除免官當ヲ斷ズルニハ、皆鞠狀ト服辨トヲ連テ一案ト成シ、更ニ鞠狀服辨ヲ連寫シテ、斷文ト共ニ太政官ニ申ス、太政官ニテ按覆スルニ、其所斷理ニ當レバ申奏ス、即チ事未ダ盡キザルコトアレバ、在外ハ別ニ專使ヲ遣シ、所在ニ就キテ按覆シ、在京ハ更ニ刑部省ニ就キテ覆ス、

結獄已ニ竟リテ其罪名ヲ告グルトキハ、囚獄司、罪人ヲ引キテ刑部省ノ版位ニ就キ、判事屬其判狀ヲ讀ミ示シ、少判事以上、其服不ヲ覆問ス、行決ノ日ハ、刑部ノ丞錄各一人、囚獄司ノ官人并ニ物部丁ヲ引キテ市司ニ赴キ、本司ヲシテ市人ヲ喚ビ集メシメ、市司ノ權前ニテ衆ニ示シテ之ヲ決ス、而シテ囚獄司ニテ決スル者ハ廳前ニテ決ス、年終ニ至リ刑部省ニ斷罪ノ解文ヲ修メテ太政官ニ進リ、外記覆勘シテ奏上ス、

斷罪法

〔令義解一〕刑部省

卿一人、掌鞠、獄、定、刑、名、謂、覆、審、解、部、所、鞠、與、判、事、以、上、共、斷、定、也、依、獄令、在京諸司事發者、犯、徒、以、上、連、寫、案、申、太、政、官、然、則、死、以、下、事、○中、大、判、事、二、人、掌、案、覆、鞠、狀、斷、定、刑、名、判、諸、爭、訟、中、判、事、四、人、掌、同、皆、以、上、皆、合、推、斷、也、○中、略、

〔令集解一〕官位、斷獄律云、凡斷罪、皆須具引律令格式正文、

斷罪

行決（辨入）

罪ヲ斷ズルニハ、具ニ律令格式ノ正文ヲ引クベキコトニテ、官司タル人、無罪ノ人ヲ判シテ有罪トシ、有罪ノ人ヲ無罪トシ、輕罪ヲ重罪トシ、重罪ヲ輕罪トスルトキハ、其故意ト過失トヲ分チテ罪ヲ科ス、是ヲ故人入罪、失出人罪、故出人罪、失出人罪ト云フ、犯罪未ダ發セズ、及ビ已ニ發シテ未ダ斷決セザルニ、朝廷ニテ格ヲ以テ舊法ヲ改ムルコトアレバ、其格重ケレバ犯シ、時ノ法ニ依リ、格輕ケレバ其格ニ從テ處斷ス、又犯人辨證已ニ定リテ後、赦ニ遇ヒテ更ニ辭ヲ翻ストキハ、悉ク赦前ノ辨證ヲ以テ定トス、例ヘバ一夜ニ大祀神御物ヲ盜ミ、并ニ神宮ノ側近ニ於テ人ヲ殺ス事アリテ、官司甲ノ所爲ナリト意ヒテ、捉ヘテ推問スルニ、甲款伏シテ云ク、實ニ神物ヲ盜メリ、サレドモ人ヲ殺サズトテ、乙ヲ引キテ證人トス、乙ノ證分明ナルニ因リテ、官司此辨證ニ據ル、已ニシテ赦アリテ云ク、死罪以下、皆悉ク赦除セン、唯八虐ハ原サズト、常人ヲ殺スモ多ク死罪ナレド、八虐ニハ入ラヌヲ、大祀神御物ヲ盜ムハ中流ナレド、八虐ナレバ甲更ニ辭ヲ翻シテ云ク、實ハ是レ人ヲ殺セリ、物ヲ盜マズト、亦丙ヲ引キテ證人トス、其丙ノ證ハ分明ナリトモ、官司猶前ノ款伏ニ依リテ、後ノ辨證ニ據ラザルナリ、又犯罪人、賊狀露驗ナルトキハ、徒伴ハ未ダ盡キズトモ、見ニ獲タル者ヨリ先ヅ狀ニ依リテ斷ズ、犯罪人ハ皆事發スル所ノ官司ニ於テ推斷ス、例ヘバ甲ノ國ニシテ鹽ヲ盜ミ、乙ノ國ニシテ事發スルトキハ、甲ノ國ノ中估ノ鹽ヲ以テ其上布ノ估ニ准ジ、乙ノ國ニシテ斷決スルナリ、當處ノ長次官ハ、十五日ニ一タビ囚ヲ檢行スルニ、其囚人久シク獄中ニ禁ゼラレテ、推問セラレザル等ノ事アレバ、檢行ノ官司並ニ即チ斷決ス、盜發シタルト徒以上ノ囚トノ事ハ、國ヨリ其發セシ日月ト、斷ゼシ日月トヲ具ニ錄シテ、朝集使ニ附シテ太政官ニ申ス、國ノ斷

置テケリ、

里、三藏房、善行房、觀三房等、ハ候比岐申

以守房申詞問成俊之處、申云、件輩守房難稱申、一人モ不候也、申、

問注

右衛門府生清原季兼

少尉源朝臣近康

左衛門府生佐伯國忠

修理左宮城主典大志中原季盛

少尉橘賴重

藤原惟俊

〔源平盛衰記〕成親已下被召捕事

西光法師ヲ召取テ大庭ニ引居タリ、相國○平清盛ハ素絹ノ衣ヲ著、尻切ハキ、長念珠後手ニ取テ、聖柄

ノ刀サシ、中門ノ縁ニ立テ、西光法師ヲ一時睨テ、嗔聲ニテ、無云甲斐下臈ノ過分ニ成上朝恩ニ誇

ル餘無誤天台座主奉流罪、剩入道ヲ亡サント申行ケル條ハイガニ、アラ希惟ヤ希惟ヤ、因也凶也、

スハハヤ山王之冥罰ハ蒙ヌルハト宣ケリ、○中略入道何如様ニモ謀叛ノ次第委ク相尋テ後、シヤ

口割テ誠ヨト宣ヒケレバ、松浦太郎高俊、拷木ニ懸テ打セタメ、事ノ興ヲ尋ケリ始ハ大ニ不知ト

云ケレ共、惡口ハ吐ヌ、不落トテモ非可、有人ガ云タレバ、コソ、入道殿モ是程ハ知給タルラメ、去ラ

バイハント思ヒツ、休ヨ語ラント云ケレバ、拷木ヨリ下シテ、硯紙取寄テ聞之、西光有ノ儘ニヅ

云ケル、執事別當新大納言殿○藤原親院宣トテ催レシカバ、院中ニ被召仕身トシテ、不叶ト申ベキ

ニアラ子バ、平家ノ一門打失テ、西光モ世ニアラント思テ與シテ侍キ、院宣ノ趣キ誰カ可奉背ト

テ、始ヨリ終マデ白狀四五枚ニ記シテ、判形セサセテ後、高俊、西光法師ガ頭ヲ踏テ口ヲ割重テ誠

恒正申云、召籠快順事實仁候也、何箇日ハ慥ハ不覺候、又妻モ一度召籠天候比岐、日數自不覺候也、日來快順夫妻共被擯籠天欺候ハ志承候比岐申、

以恒正申詞問成俊之處、申云、快順不召籠之由、先條辨申畢、妻於ハ三箇日召籠天候比岐申、

守房

右問守房云、爲成俊被擯之由所訴申也、件子細依實辨申如何、

守房申云、擯快順之間、守房申云、快順妻於離別畢之上、法勝寺末寺内也、荒涼不可擯之由爲加制止、

罷向之處、依其意趣、守房於擯取天、三日三夜凌機仕候比志、也因之從者二人辨畢、又上廿廿頭、斤定

稻三千束、大刀百腰、腹卷廿領、水旱并袴廿具、奈岐刀万柄被取畢、又庄民在家十四字カ内、財物搜取

畢、此外前々被責取物等、注別紙進上先畢、彼在家廿四字内、五字被燒失畢土申、

以守房申詞問成俊之處、申云、守房於ハ更不擯候也、守房カ成俊カ從者於殺害志天候比志、守房カ

舍弟僧五人ガ殺害人也天、擯天成俊仁給天候比志、請取天死人之代下人三人責取天、二人ハ返

畢、一人ハ取天候也、庄民在家十四字の内、財物之事無實也、燒失二字ガ内、財物ハ守房カ運取之後

令燒失候也申、

以成俊申詞問守房之處、申云、守房ガ舍弟仁天、何可擯守房哉、被擯籠之刻、舍弟等成恐逃去畢、必定

仕天候比岐承候比志、只還迹可候也、濫行張本之輩、注進先畢、可被召問彼等也、燒失之在家二字ガ

宅主ハ名東御庄寄人也、依逃去其内財物、爲自彼御庄沙汰運置他所之後、爲成被燒失候也申、

覆問守房云、注進之濫行張本之輩、任交名重辨申子細如何、

守房申云、成高ハ所從眷屬數多之者也、成俊ハ無勢之者也、若干勇堪之輩來集天候比志、成高ガ眷

屬モ思給候也、成高モ候モハ承候比岐、成高ガ男二人之内、字新二郎ハ候比岐、又大二郎紀太、藤大

夫正時六郎大夫藤榮、大夫宗追捕使、凡追捕使三子追捕使、村二郎草二郎追捕使、景口重包、正里行

右問成俊云法勝寺末寺延命院所司等去二月十五日解狀云請殊被裁許爲一宮司河人成高舍弟成俊等以非道今月十四日引率軍兵八十餘人亂入御庄內恣追捕供僧三昧住僧并下司住人等令燒失庄民令逃散子細狀右謹檢案内件成高等不憚寺家之御威私召龍三昧快順致凌轢及數度如此梟惡積習而所致濫吹也而始自供僧三昧住僧下司等迄于住人追捕庄內之間皆悉測散畢因茲爲宗院御祈十二時法花三昧每日最勝講演香花燈明十五日百味供養之勤皆悉斷絕畢爰成高等不顧冥顯之恐罪過不輕責而有餘若無御裁斷者御祈禱斷絕佛事廢亡末寺永失歟者件子細依實辨申如何

成俊申云擲取三昧快順之條全不候事也又擲下司守房事毛凡不候也毛申す

快順

右以成俊申詞問快順之處申云大栗山住人安宗依不慮之事成俊毛口仕之間安宗逃去畢安宗毛快順毛妻乃兄弟也因茲號彼所緣快順之許仁遣從者六人擲快順妻之間快順罷出天候於十三日召龍天剝取衣裳天凌轢仕候比志爲存身命安宗於可尋進之由出請文畢其後安宗令遲進土天快順毛妻於遣下人六人擲取天經九箇日免畢其後安宗所出來也仍成俊安宗毛牛并板等乃解文於自安宗之手責取天免畢因之快順年來之妻於安宗仁相具天追出候畢其故毛此定奈其如此濫吹不可絕毛思給天此女離別畢其後尙快順於安宗毛不見天譴責仕候也成俊毛從者行里於可被召問候也快順毛妻毛共召龍候比志使毛行里也毛申

成俊

右以快順申詞問成俊之處申云快順於全一日毛不召龍候也又妻毛不召龍候也毛申

秦恒正重房從者後與成俊爲誼恒正誼人成俊召進之

右問恒正云成俊擲取快順身并妻等之事依實辨申如何必辨申毛

候度申、

慶智同寺住僧

右以朝順陳狀問慶智之處申云慶智ハ人乃語仁不候須寺乃大衆乃驅立候比罷登天候比也房

一字仁ハ放火天候比岐堂仁ハ字八口度申僧古唐笠仁火於付天自岸上志天堂口狐戶仁投入天

候口度申、

復問云汝爲大衆雖被驅立結構之間定有造意之首歟件子細慥辨申如何、

慶智申云造意之輩ハ小倉乃蓮藏房并石見君等仁候布隨從之者ハ刑部君光南房圓禪房常蓮房

禪門房太郎房正覺房又太郎房小口三郎度申男等候布此外百餘人新羅口度申所仁集會志天候

度比毛か暗夜仁候比分仁分明仁面於不見候僅見知天候者等於所差申候也度申、

復問朝順慶智等云罷登之本意若指中堂可放火之由思企歟件子細以實辨申如何、

朝順等申云中堂於申出者毛不候又不思寄候布只房一字仁揚煙天今生之意趣於散度世上自

僧正下至于小法師原皆申合天候比志也度申、

問注

右衛門府生清原季兼

少尉大江成重

藤原敦口

左衛門府生佐伯國忠

大志中原季盛

〔愚昧記〕久安二年七月十一日問注河人成俊等申詞記、

成俊

參氏候比去、可得名簿之由被申候比去、本主候者波なれ、暇口申比去、古參候波女、申候比去、子共中仁一人ナ波、可得之由被申候比去、於一人者可進止申比去、件刻仁見參仁波進豆候比去、其後波全不見參候也、行真か住所仁、四郎行正三郎宗真波候也、可召遣之由候波、可遣召候但宇治入道殿乃舍人仁比候也、隨件住所波御領仁比候也、

又字與定三郎止申者波、友員か郎等仁候、全行真か從者仁波不候、佐佐木仁比見給候比去、友員死之後仁波在所し不知給候、

又友員か被殺害候之夜相具比候ク留從者、字伊波乃源太ト申男、被夜難蒙班于今存命口比、成勝寺御領伊波庄内仁、字清追捕使安貞之許仁候之由傳承候也、被召問件源太自申事候歟、彼安貞モ友員か從者仁比候也ト申、

永治二年四月三日

〔愚昧記〕康治元年五月八日間注、僧朝順等申詞記、

朝順 三井寺住僧

右問朝順云、去三月中旬罷登天台山之由有其聞、定有由緒歟、件子細以實情辨申如何、

朝順申云、山仁罷登事、實仁候比布房一字二万付火天、三ケ度三井寺於被燒多流、年來之蠶於散比半

滿寺乃僧徒乃申候比去、任愚意天罷登天候比去也度申、

復問云、汝等所思企已希代之犯也、結構之輩、定有其數歟、依實可差申、夾名、兼又汝爲放火之下手歟、

重辨申如何、

朝順申云、造意之首、字石見君、蓮敷房、伊勢君、金藏房等仁候比布一人張本度申事、不知給候比布、彼四

人ハ寺中仁人望候者共仁天、結構志天候也、於朝順者雖爲寺僧、非當住者、離寺口松崎仁十三年居

住志天候於、石見君か相語候比去、當日仁曾可登山之由於、承候比去罷登天房一字仁ハ放火天

圓能之間、有其緣^天。受方理朝臣夫妻之語也。昨辨申^{利世}、若爲文^毛、知此事歟、一々慥辨申如何圓能申云、方理宣旨住所各異侍^{禮所々天}、受此語侍^利、相議^天也。所服符事^{者乎}、令爲侍^{武介}、不知侍亦圓能^毛。互不令知、又源心^者、本自不隔雜事之間、雖有親昵之語、非如此服符之事、又爲文朝臣^{者爾}、雖語雜事件、服符事^者、不示圓能依罷通彼宅^天、方理朝臣^者、招取^天、相語此服符之事侍之也。申^{持舉}、問妙延云、師僧圓能、依方理朝臣夫妻并宣旨等語^天、奉呪詛中宮、若宮并左大臣之由、及服符等^平、埋置所々辨申如何妙延申云、師弟子間^爾、侍^禮、不知何事、去年冬、童子物部糸丸^爾、絹一疋令持^天來侍^者、見侍^支、又圓能源心相語事^者、見侍^支、不知何事、申^{持舉}、問糸丸云、師僧圓能作服符^天、奉呪詛中宮、若宮并左大臣之由、汝爲彼童子^天、可知件事、依實辨申如何、糸丸申云、服符事^者、又不知給、申祓祿^天、從宣旨宅絹一疋^者、持來侍^支、又紅花染衣女^乃、持來^天侍^者、見侍^支、不知何所之物、但去年十二月之間也。申^{持舉}、者先是同四日內問日記依事情同更不注載^略○申

寬弘六年二月八日

從五位上守大判事兼明法博士美麻那朝臣直節
從五位上行勘解由次官兼明法博士令宗朝臣允正

〔愚昧記〕散位源行真申詞

右行真申云、殺害字新六郎友員之事、全不知給候、但自本敵人^仁、前陸奥判官郎等字源七郎道正^波、古曾候^倍、其故^波、友員道正^{止波}、共兄弟之子^仁、友員^仁、道正^波、母并弟道澄等^者、殺害仕畢、其後又道正^波、口口母并兄友房末高等^者、殺害仕候畢、如此之間、日來^毛、敵人^仁、候^比、也、然者件道正^波、所爲^仁、候^比、道正^毛、友員^毛、行真^仁、候^比、也、口口三郎家次^波、道正^波、妹^仁、夫^仁、同意者^仁、候^比、又行真^波、子息^波、四人候^比、也、太郎^波、先年死口畢、次郎守真^波、左大臣殿^{有仁}、御領佐佐木御庄^乃、下司^仁、彼殿^仁、候者也、三郎宗真^波、土佐國司^乃、許口候也、四郎行正^波、去保延五年比、仁陸奥判官下司佐佐木文刺道澄^波、行真^波、御仁^仁、候^比、道澄^波、宅^仁、被到着^仁、候^比、爲見參^仁

〔善庵隨筆〕水獄の事。略頃日落穂集追加を閲せしに。略近年の義は。略件の水牢、木馬等の義も沙汰なく罷り成り候とあるを以て見れば亂世の頃代官名主など、百姓の年貢未進を取り立つる私の刑具にして、公法にはあらず。

〔政事要略七〕勘申散位源朝臣爲文、民部大輔同方理伊豫守佐伯朝臣公行妻及方理朝臣妻、僧圓能等罪名事。

右主税頭兼大外記播磨權介滋野朝臣善言仰儀、大納言兼皇太子傳藤原朝臣道綱宣奉勅散位源朝臣爲文、民部大輔源朝臣方理伊豫守佐伯朝臣公行妻及方理朝臣妻等奉令僧圓能呪詛皇后。一并厭魅敦成親王左大臣。二也、件等人所當罪名宣令明法博士勘申者、今年二月五日勘問僧圓能等日記云、問圓能云、作厭式奉呪詛中宮若宮并左大臣之由、依實辨申如何、圓能申云、依伊豫守公行朝臣妻、宣旨云、人語奉呪詛之由、昨日被勘問之次、依實辨申先了、申復問云、奉呪詛之趣、依實辨申如何、圓能申云、彼越者中宮若宮并左大臣御坐之給間帥殿。三無德御坐之給布、世間聞此三箇所不可御坐之由可奉厭魅之趣也、申復問云、此事相語之人、宣旨只一人歟、重辨申如何、圓能申云、先者民部大輔源朝臣方理。四相語侍之、去年十二月中旬比也、宣旨者同月下旬許、語侍之厭符、二枚也、一枚者度宣旨侍、一枚者爲度方理朝臣持向彼宅而方理朝臣他行、妻具依知其事、天預侍之、錄者紅花染掛、一領、利奈令得侍之、宣旨祿者給者絹一疋也、申復問云、圓能加外、相知此事之陰陽師幾侍之、又有驗之寺社及可然之所、成此厭法乎、重辨申如何、圓能申云、寺社所々、更不成件事、但宣旨宅侍藤原吉道、案內者知天侍、彼宅出納春正者爲使、雖來圓能許、案內者不知也、侍元來僧道滿、年來召仕彼宅之陰陽師侍止己、春正申侍、厭符之事者、相語也、侍止申復問云、方理朝臣宣旨同比、件事相語、辨申、彼二人共相議件事、令爲歟、又僧源心、圓能、常相語件事之由、圓能加弟子妙延、所指申也、又前越後守源朝臣爲文親呢召仕

〔徒然草〕犯人をまもにてうつ時は拷器によせてゆひつくるなり、拷器の様も、よする作法も、今はわきまへられる人なしとぞ、

〔徒然草諸抄大成^{十六}〕此段モ^中皇道スヘニナリテ、惡人ヲホクシテ、古風ノ刑罰ノカロートヤサシキテイスタレハテ、拷器ハ今ノ木馬^{キバ}ノセメニカハリ、又ハリツク柱^{ハシ}ハ昔ノ筥^{ヒツ}トイフモノナラント覺ヘテ、古風ノスタレヲタルヲ歎テカケルヨシナリ、全

〔十訓抄〕成方といふ笛吹有けり、御堂入道^{原白藤}より大丸と云笛を給て吹けり、めでたき物なれば、伏見修理大夫俊綱朝臣はしがりて、千石にかはんと有けるに、うらざりければ、たばかりて使をやりて賣べきよしひけり、そらごとをいひつけて成方を召て、笛えさせんといひける、本意也と悦て、あたひは乞によるべしとて、ひらにかはんといひければ、成方色を失ひて、さる事申さずといふ、此使を召むかへて尋らるゝに、まさしく申候といふほどに、俊綱大にいかりて、人をあざむきすかすは、其咎かろからぬ事也とて、難色所へ下して、木馬^{キバ}にのせんとする間、成方云、身のいとまを給りて、此笛を持て參るべしといひければ、人を付てつかはす、歸來て腰より笛を抜出ていふやう、此故にこそかゝる目は見れ情なき笛也とて、軒のもとにおりて石を取て炭のごとくに打撞つ大夫笛をどらんと思ふ心の深さにこそ、さまゝかまへけれ、今はいふかひなければ、いましむるに及ばずして追放にけり、

〔落穂集追加〕秋先に至り收納の事

總て七十年あまり以前の義諸國共に秋先に至りては、其村名主たる者の家にては、水籠^{ミヅカゲ}木馬^{キバ}杯と申物を仕度いたし、百姓共の中に、私をかまへ、收納いたし兼る者共をば、件の水籠へ入れ、木馬にのせ、責めせたくるゆへ、收納致させ申す様に有之處、近年の義は、在番の百姓までも正路になり、律義に收納をも致と相見へ、件の水籠、木馬等の義も、沙汰無之なるとなり、

〔源平盛衰記十六〕滿仲議西宮殿高明事

冷泉院御位ノ時、覺御心モナク、御物狂ハシクノミ御坐ケレバ、ナガラヘテ天下ヲ知召サン事モイカバト思食ケルニ、御弟ノ染殿式部卿宮平爲ハ、西宮ノ左大臣ノ御聲ニテヲハシケルヲ、能人ニテ渡ラセ給フト申ケレバ、中務丞橘敏延、僧連茂多田ノ滿仲、千晴ナド寄合テ、式部卿宮ヲ取奉テ東國ヘ趣、軍兵ヲ起、卽位進セント、右近ノ馬場ニテ夜々談議シケル程ニ、滿仲心替シテ此由ヲ奏聞シケルニ依テ、西宮殿ハ被流罪給ニケリ、敏延ハ播磨國ヲ賜ラン、連茂ハ一度ニ僧正ニナラントテ、斯ル事ヲ思立ケリ、中僧連茂ヲバ檢非違使召捕テ、拷器ニ寄テ謀叛ノ意趣ヲ責問ケリ、餘ノ難堪サニ、連茂音ヲ上テ、南無歸命頂禮金剛瑜伽秘密教主胎金兩部諸會聖衆傳燈阿闍梨耶龍猛龍智、助給ヘ〜ト唱ヘケレバ、上乘密宗ノ力ニテ、拷器モ笞杖モ折碎テコソ失ニケレ、

〔源平盛衰記五〕成親已下被召捕事

西光ハ、口ハ少モ減ズ、去テ其ハ左ハ無リシ事カ、彼ハ有シ事ゾカシ、哀足手ダニモ安穩ナラバ、報答申シテント云ケレバ、入道清盛何如様ニモ謀叛ノ次第委ク相尋テ後、シヤ口割テ誠メヨト宣ヒケレバ、松浦太郎高俊、拷木ニ懸テ打セタメ、事ノ興リヲ尋ケリ、

〔宇治拾遺物語二〕今はむかし七條にはくうちあり、みたけまうでしけり、参りてかなくづれをゆいてみれば、まことの金の様にてありけり、うれしく思て、件の金を取て、そでにつゝみて家にかへりぬ、中これをはくにうつに七八千枚にうちつ、略別當おごろきてはやく河原に出ゆいてとへといはれければ、檢非違使どもかはらにゆいて、よせはしほりたて、身をはたらかさぬやうにはりつけて、七十度のかうじをへければ、せなかは紅のねりひとへを水にぬらしてきせたるやうに、みさ〜となりてありけるを、かさねて獄に入たりければ、わづかに十日ばかりありて去にけり、

名例律云稱衆者三人以上。○中疏云稱衆者斷獄律云七位以上犯罪不拷據衆證定刑必須三人以上始爲衆證但稱衆者准此文

〔左經記〕寬仁四年五月廿六日丙子、上野前司定輔、上道之間於粟津邊前々司維衛郎等之圖亂、維衛

郎等六人之中、壹人被疵死去、二人被疵未死、一人全被搦、二人脫身逃去、定輔與維衛共有愁、定輔

無故害維衛從者之由有仰云々、六月四日甲申、參內頭中將○源朝任被語云、右衛門尉平時通、上野守

定輔之迎臨、粟津射前前司維衛郎等之由有愁、仍被尋實否之間、時通進無實之由申文、證人有近府

府生時余結伴申文、召右衛門尉紀宣明下給、可令問證人等之由仰了云々及晚歸宅、

〔令義解〕凡杖皆削去節目、謂答杖也亦准此也長三尺五寸、訊囚及常行杖、大頭徑四分、謂雖訊答罪囚、小頭三

分、○中拷訊者背臂分受須數等、謂假型杖九寸、應拷三之類者、

〔明律具問〕訊大頭徑四分五釐、小頭徑三分五釐、長三尺五寸、以荆杖爲之、其犯重罪賊證明白、

不服招承、明立文案、依法拷訊臂腿受、

〔和漢三才圖會〕訊杖以荆條爲之、拷訊臂腿受用竹篴、重過二觔矣、其初制長三尺五寸、大頭徑四分、小頭徑三分五釐

徑分五釐、小頭徑三分五釐、

訊杖



〔西宮記〕臨時與審事附臨時着狀例并放免役畢四人事

或記云、寬和二年五月十七日、着欽政、○中着欽十六人、在八人之中、不計賊盜人、取領宇佐宮神馬之

者也、又決杖原免之者一人、強盜者知主盜賊而藏者也、爲拷伴人立拷器、其儀去版南一許丈立之、第

一尉召看督長仰云、召其姓其九、世召犯人就版、尉召看督長仰云、犯人寄器、與看督長申杖數、尉稱有

給之詞、如應拷儀、看督長隨身長二行陣列如常、

ゾ被流ケリ、ソレハ昔ノ事也、近キ世ニハ無様情ナシトゾ申ケル、

〔日本書紀^{應十}〕九年四月、遣武內宿禰於筑紫、以監察百姓、時武內宿禰弟甘美內宿禰、廢兄卽讓言于天皇、武內宿禰常有望天下之情、今聞在筑紫、而密謀之曰、獨裂筑紫招三韓、令朝於己、遂將有天下、於是天皇則遣使以令殺武內宿禰、時武內宿禰欺之曰、吾無貳心、以忠事君、今何禍矣、無罪而死耶、^{時中}竊避筑紫浮海、以從南海廻之、泊於紀水門、僅得逃朝、乃辨無罪、天皇則推問武內宿禰與甘美內宿禰、於是二人各堅執而爭之、是非難決、天皇勅之令請神祇探湯、是以武內宿禰與甘美內宿禰共出于磯城川濱爲探湯、武內宿禰勝之、便執橫刀以毆仆甘美內宿禰、遂欲殺矣、天皇勅之令釋、仍賜紀伊直等之祖也、

〔中右記〕永久二年六月廿六日、行重資清來、令問親賴從者近安申云、件強盜事、五月中旬、下向攝津之次、親賴申云、本主肥前守所爲歟、申由所承也、卅日、又差資清、遣爲義召公政、事度々在伊豆國之由、雖申上、遂不進、慥可申切之由、仰遣之處、已上洛之由、承候存、^存今七八日可相待者、仰云、然者可相待、歟、親賴從者近安申詞、勘問記讀申之處、仰云、早與武忠三郎男可口對決、

不拷訊

〔法曹至要抄^{理上}〕一不拷訊事

斷獄律云、應議請減、若年七十以上十六以下、及廢疾者、並不合拷訊、皆據衆證定罪、違者以故失論、又條云、婦人懷孕、犯罪應拷及決杖笞、若未產而拷決者、杖八十、傷重者依前人^{○前入下唐律}、^{有不合二字}捶拷法失者、各減二等、^{○失者各減二等、唐律}產後未滿百日而拷決者、減二^{○二唐律}等、刑部式云、僧尼犯罪應訊者、皆據衆證定罪、不須捶拷者、

案之、應議請減以下、自云僧尼以上、其不可拷訊、宜據衆證定其刑矣、然而有官位之者、及僧侶、並位以上子孫、粗有其例、歟、

〔法曹至要抄^{罪上}〕一衆證事

仍奏其由光保注進散禁囚注文覽之次第取上盛兼朝臣取之來予前予取之披見原忠遠○遠一作道去年十二月廿三日夜二條鳥丸邊引利○利字誤嫌疑者予問之季盛申云一度經拷問了不承伏疑乘少拷不滿三者予稱不可免之由近康申云女院捨物五人以不過者也予答云自院給了對問之後今一度經院奏聞左右也無可被免之物者不免常事歟

水責

〔播磨風土記源春部〕中川里彌加都岐原難波高津宮天皇○仁之世伯耆加具漏因幡邑由胡二人大騷无節以清酒洗手足於是朝廷以爲過度遣狹井連佐夜召此二人爾時佐夜仍悉禁二人之族赴參之時屢漬水中酷拷之中有女二人玉簪手足於是佐夜恠問之答曰吾此服部彌藤連妻因幡國造阿良佐加比賣生子宇奈比賣久波比賣爾時佐夜驚云此是執政大臣之女卽還送之所送之處卽號見置山所溺之處卽號美加都岐原

〔保元物語二〕謀叛人各召捕事

皇后宮權大夫師光入道備後守俊通入道能登守家長入道式部大輔盛憲入道弟ノ藏人大夫經憲入道ヲバ東三條ニテ水間セラル内裏ヨリ藏人右少辨資長權右少辨惟方大外記師業三人承テ奉行セリ中ニモ盛憲兄弟前瀧口泰助安等ヲバ駟負廳ニテ拷訊セラレケリ此等ハ左大臣○賴朝長ノ外戚ニテ事ノ起リヲ知タルラン又近衛院并ニ美福門院ヲ呪咀シ奉リ德大寺ヲ燒拂ヒタリシ故ヲ問ハルニ下部先衣裳ヲハギ取テ頸ニ繩ヲ付ケレバ下部ニ向テ手ヲ合セコハ何事ゾヤ我ヲ助ヨト云ケレバ座ニ列ナル官人共目モ不被當覺ヘケリ然レ共刑法限有事ナレバ七十五度ノ拷訊ヲ致スニ始ハ聲ヲ揚テ叫ケレ共後ニハ息絶テ不言日コソ多キニ七月十五日今日シモ懸ル罪ニ被行事コソ無慙ナレ其上五位以上ノ者拷器ニ被寄事先例希也水尾天皇○清和ノ御時貞觀十八年閏三月十日ノ夜應天門ノ燒タリケルヲ大納言伴善男聊造意ノ嫌疑有ケレバ使廳ニテ拷訊セラレケル例トゾ聞ユル彼大納言ハ實犯ニテ同キ九月廿二日終ニ伊豆國ヘ

〔唐六典刑部〕稽諸證信有可徵焉而不首實者然後拷掠二十日一訊之

訊未畢更移佗可仍須拷鞠通計前訊以充三度即罪非重害及疑似處少不必滿三若因因訊致

死者皆與長官及紕彈官對驗其拷囚及行決罰不得中易人

〔令義解〕凡訊囚非親訊司不得至囚所聽聞消息謂其解部訊囚者皆列事得聽自餘不合

〔續日本紀二十〕天平寶字元年六月甲辰從四位上山背王復告橘奈良麻呂兄男諸備兵器謀圍田村

宮七月庚戌分遣諸衛掩捕逆黨更遣出雲守從三位百濟王敬福太宰帥正四位下船王等五人率

諸衛人等防衛獄囚拷掠窮問黃文改名多夫道祖改名比大伴古麻呂多治比賴養小野東人賀茂角足

呂改姓乃等並杖下死

〔日本後紀十七〕大同四年閏二月甲辰從四位下安部朝臣鷹野卒鷹野者從五位下猪名麻呂之子也

有仁慈之性多所汲引侍從中臣王連伊豫親王之事經拷不服嬖臣激帝令加大杖王背崩爛而死

文下缺

〔日本紀略村四〕天德四年五月廿一日己未今日令拷訊式部史生忠雅依帶七位不可拷訊然而依式

部史生山邊履道之口可拷問件履道摺改試詩也九月廿日丁巳式部史生忠雅拷問之間使官人

或陳可脫申之由或申不可脫申之由仍令法家勸申

〔中右記〕永久二年七月二日藏人弁雅兼依御氣色來云宗盛放火女乙牛承伏了彼女美作不承伏但

放火已實事也如何予申云早可被問明法博士也仍召信貞被問之處申云任法可經三度拷也然而

已露驗也勸問記八依不承伏女以難被下只以詞被仰下非無先例

〔公教公記〕保延七年元永治正月五日乙巳今日廳始也去五日即季盛令午時官人等參集左尉盛

光保志季盛府生守利右尉清房兼着座令盛經衣問見參次第申之次予着直衣冠着廳座官人等平

周光國近道參近保府生平伏伏予免物勘文等可覽之由季盛云可被免之物不候也政所到來候御前予披見件到來無可然之物

官在京者與彈正對驗、

〔令集解六〕職見斷獄律、反覆參驗者、卽自鞠、亦云覆故也、

〔法曹至要抄上科〕一拷訊事

斷獄律云、應訊囚者、必先以情審察辭理、反覆參驗、猶未能決事、須訊問者、立案同判、然後拷訊、違者笞五十、若賊狀露驗、理不可疑、雖不承引、卽據狀斷之、又條云、拷囚不得過三度、杖數總不得過二百、杖罪以下、不得過所犯之數、拷滿不承、取保放之、○放之下、唐律有若拷過三度、及杖外、以他法拷掠者、杖一百、杖數過者、反坐所剩、以故致死者、徒二年、三十三字、卽有創作、唐律病、不待差而拷者、杖六十、若依法拷決而邂逅致死者、勿論、刑部式云、犯罪之人、或庭或弱、決杖之時、且寒且熱、重加頓杖、恐致死亡、須量其貌、滿役之間、准折決畢、囚獄式云、司內所須笞杖、每年十一月、役物部丁、令探備之、注云、笞杖各一千枝、

案之官司、拷訊囚人之時、有不如法之事者、隨事得杖笞之罪、又有職有官之人、在○在恐字誤事重任、罪名處贖銅、事輕處勘事、

〔唐律疏議三〕時諸監臨之官、因公事、自以杖捶人致死、及恐迫人致死、死者、各從過失殺人法、若以大杖及手足毆擊折傷以上、減圖殺傷罪二等、○疏略雖是監臨主司、於法不合行罰、及前人不合捶拷、而捶

拷者、以圖殺傷論、至死者、加役流、卽用刃者、各從圖殺傷法、

〔西宮記臨時〕勘申可着、欽左右獄囚事、○中略

菅野並重、○中略

紀重春、○中略

右貳人、強盜之犯、雖不承伏、直賊之物、已以顯露也、檢斷獄律云、應訊囚者、必先以情審察、詞理反覆參驗、若賊狀露驗、理不可疑、雖不承引、卽據狀斷之者、計賊斷罪、具見上條、仍以所得之物、亦論所當之科、依格加罪、徒役六年、

被流ニケリ、然レバ古モ今モ如此ク咎有ラバ、公家必ズ罪ヲ行ヒ給ハ、常ノ事也トナム語リ傳ヘタルト也、

〔春記〕長久元年九月廿四日丙子、日記一通送別當許了、件日記勘問盜取東大寺勅御倉銀等之犯人、文也、僧長久爲首、同類等有其員、件長久去十八日所捕得也、十九日勘問、昨日藏人義綱奏聞也、仰云、同類并賊物、儘可相尋之由、可仰者、昨日被申、其由了云々、仍所遣仰也、廿五日丁丑、右衛門尉季任朝臣令藏人義綱令奏云、東大寺取御倉物犯人同類菅野清延捕得、即出賊銀卅兩者、

〔古今著聞集三〕いづれの年にか白馬節會に、進士判官藤原經仲参りたりけるに、難犯たゝすべき物なかりければ、ちからおよばで、檢非違使ども退出せんとしけるに、なにがし僧正とかやの兒、沓をはきながら木のまたにのぼりて見物しけるを、經仲が下部をもてめしとりてたゞしける詞に、長大垂髪にて皮の沓をはきたかき木にのぼりて宮闕をうかがふ、一身をもつて師のかしをなせるまかるべしや、いかんと勘問したりける、時にのぞみていみじかりけり、叡威ありて女房の衣をたまはせけりとなん、

〔寶物集〕二月○治承二年廿日中御門ノ門ヲ入テ、大膳職、陰陽寮ナドヲ打過テ、大場ノ木ノ本ヲ見ニモ、白馬ノ節會思出サレテ、摺文ナセル衣袴キタル者、勘禁シ事思出サレテ、悔シクゾ侍リケル、坂上允亮ガ夢ニ罪ノ深キ事ヲ見テ、遣非違使ニ成ジトテ、五位ノ官給ハリケルモ理ニゾ侍ルベキ、

〔令義解十〕凡察獄之官、先備五聽、謂五聽者、一曰辭聽、觀其出言、不直則煩、二曰色聽、觀其顏色、不直則不直、則聽然也、三曰氣聽、觀其氣息、不直則喘、四曰耳聽、觀其聽聆、不直則惑、五曰目聽、觀其眸子、不直則眊也、又驗諸證信、事狀疑似、猶不首實者、然後拷掠、每訊相去廿日、若訊未畢、移他司、仍須拷鞠者、因移他司者、連寫本案、謂問囚之文案、即下條、問寫是也、俱移、則通計前訊、以充三度、即罪非重害、謂依律、殺盜、被水火及疑似處、少亦不、必滿三聽、狀重決、不必皆須滿三、若囚因訊致死者、皆具申當處長

拷訊

而死、死未經時、急吳於殿、

〔日本書紀^{二十三}舒明〕

八年三月悉勅、姦采女者皆罪之、是時三輪君小鷦鷯苦其推鞠、刺頸而死、

〔日本紀略^五冷泉〕

安和元年八月廿三日甲戌、大納言在衛參入、可勘問前相模權介藤原千晴、前武藏權

介平義盛之宣旨、仰辨史、九月十四日甲午、被定相模權介藤原千晴、爲武藏權介平義盛被強奸之

由勘問日記、

〔江談抄^二雜事〕善男坐事承伏事

善男坐事之日、大納言南淵年名、參議菅原是善卿等、奉勅於勘解由使局推問之、更不承伏、卽詐令人

謂云、息男佐世已以承伏畢、何獨不然、善男聞之、口惜男カナト云、^天承伏、

〔今昔物語^{二十三}〕平維衡同致賴合戰蒙答語第十三

今昔前ノ一條院天皇ノ御代ニ、前下野守平ノ維衡ト云兵有リ、此ハ陸奥守貞盛ト云ケル兵ノ孫

也、亦其時ニ平致賴ト云兵有ケル、其ニ道ヲ挑ム間、互ニ惡キ様ニ聞カスル者共有テ敵ト成ヌ、其

領各一國ニ有テ、致賴進テ維衡ヲ討罰ムトシテ合戰スル間、其多ノ子孫伴類并ニ郎等眷屬等、互

ニ射殺ス者其員有リ、然ドモ勝負无シテ、維衡ヲバ左衛門ノ府ノ弓場ニ被下レ、致賴ヲバ右衛門

ノ府ノ弓場ニ被下テ、其ニ被勘問ニ、皆進テ答ニ落ニケリ、罪名ヲ被勘ルニ、明法ニ勘ヘ申テ云ク、

壓ヒ討タント爲タル致賴ガ罪ミ尤重シ、速ニ遠キ處ニ可被流ル、諸ケ戰タル維衡ガ罪輕シ、移郷

一年可壬シテ此^テニ^{可壬以下五字、一本作ニバカリシニ}依テ、公家宣旨ヲ被下テ、致賴ヲ遠ク隱岐國

ニ被流ヌ、維衡ヲバ淡路國ニ被移郷ヌ、其後亦藤原致忠ト云者有テ、美濃國ノ途中ニシテ、前相模

守橘輔政ト云人ノ子并ニ郎等ドモヲ射殺テケリ、此ニ依テ父輔政、公ニ訴申スニ、宣旨ヲ被下テ、

檢非違使大夫ノ尉藤原忠親并ニ右衛門志縣犬養爲政等ヲ彼ノ國ニ下シ遣シテ、事ノ發ヲ勘ヘ

被問ケルニ、致忠進テ答ニ落ニケレバ、罪名ヲ被勘テ、明法勘ヘ申スニ、隨テ、致忠ヲ遠ク佐渡國ニ

賊逃散、夜暗冥、不獲追捕者、十月九日壬寅、以從五位下守左衛門權佐藤原朝臣良積爲推問筑後國殺害使判官一人、主典一人、

〔三代實錄四十五〕元慶八年四月廿六日丙辰、以彈正少弼從五位下安倍朝臣肱主爲推問筑後國司殺害使、

〔三代實錄四十六〕元慶八年六月廿日己酉、是日遣彈正少弼從五位下安倍朝臣肱主判官巡察彈正正六位上菅原朝臣宗岳主典左衛門少志大初位下櫻井田部連貞世等於太宰府、推問殺害筑後守都朝臣御西事、太政官下符太宰府、依彼府去六月六日解狀可早追捕射殺筑後守都朝臣御西凶賊之狀、七月十九日下知已了、而絃望屢遷、寂无音驛、論之急務、何其可然、今得大貳從四位上安倍朝臣眞行辭狀、稱八月一日、捕獲賊類、須加覆鞠、具以言上、而所有監典等或奉使未歸、或隨例多事、望請被遣朝使勘糺罪人者、凡凶黨爲害國家所憂、禍數發於匪圖、情何拘其常理、而寄事繁劇、遲留不斷、外朝之謂、豈容如此乎、夫有非常之變、當施一切之議、仍特遣件等人發摘其事、府宜承知、能使處分、七月五日癸亥、推問筑後國殺害使彈正少弼從五位下安倍朝臣肱主奏言、獄令云、犯罪皆於事發處、官司推斷、又條云、犯罪答罪郡決之、杖罪以上郡斷定、送國覆審、訖杖罪及流、應決杖、若應贖者、卽決配、徵贖諸國、斷流以上、若除免官、當者皆連寫案、申太政官、然則推斷之法、皆於犯處、而太宰府解稱、大監平高平等連繫罪人、向府訖者、高平等不請處分、輒捕送府、府司不責其由、輒受拷問、今使等欲向事發處、罪人在府、就罪人居、可乖法意、欲率罪人向事發國、府司且經勘問、略知端緒、使等在彼訊鞠之日、事有失誤、可喚府司、加之罪人數多、率將有煩望、請於府推問使還之日、依法遣返抄并印、署日記、一准諸國之例、右大臣宣奉勅、依請下知、

〔日本書紀十九〕二十三年六月、是月或有譖馬飼首歌依曰、歌依之妻、逢臣讚岐鞍轡有異、既而熟視、皇后御鞍也、卽收廷尉鞠問極切、馬飼首歌依乃揚言誓曰、虛也、非實者是實者、必被天災、遂因苦問、伏地

民被捕獲、被搏打剃髮爲着駄、又安藝守於京中被殺、如此事可謂非常之甚、聖代之昔、猶有此事、何況於宋代哉、但代初天下先示甚惡爲令返善也、仍能々可被行政化者也、以此旨內々可達博陸并天聽者也、予卽退出、

〔日本紀略^二〕天慶三年正月九日乙亥、解却右衛門權佐源俊、左衛門尉高階良臣、勘解由主典阿蘇廣遠等已上三人爲推問東國使、屢申障不發向之故也、

〔行親朝臣記〕長曆元年閏四月十四日、有推問使申請定云々、三ヶ條、一停帥釐務^不、一推問日限府返抄^可、一推問之日無所遁府安樂寺口隨身可參歟、^{斷決、終爲後通者、任法可行}五月十五日

日、今日太宰推問使^{左衛門權佐、右衛門尉}、下向從高陽院殿西御倉町出立有反閉^不、^{會合有少、}如、申刺進發發隨身^{府生番長府門部并五人着冠}、次主典^衣、次判官^{冠布衣、深省、番書}、口^首、^{在後、隨身調度懸掉取出如何例}、

次使^{冠柏夾、直衣、深省、鹿皮、尻稍、着督}、次郎等^不、^{十人無注}、口^陣、路頭見物之者、不可勝計、

〔百練抄^四〕長曆元年五月十五日、遣推問使左衛門權佐^{陸佐藤原}於太宰府、是去年三月曲水宴時

安樂寺與帥實成卿鬪亂、依彼寺訴也、^{又見扶桑略記}

〔百練抄^四〕寬德二年十月六日、遣右衛門權佐實綱於太宰府、爲推問權帥重尹非法也、十二月

廿六日、太宰權帥重尹罪名、下勘法官、不出辨推問使、似有罪科之故也、

〔政事要略^{八十一}〕斷獄律云、官司入人罪者、^中若入全罪以全罪論、^中從輕入重、以所剩論、利名易

者、從管入杖、從徒入流、亦以所剩論、^中從管杖入徒流、從徒流入死罪、亦以全罪論、其出罪者、各如從

輕入重、^註卽斷罪失於入者、各減三等、失於出者、各減五等、若未決放及放而還獲、若因自死、各聽減

一等、^註卽別使推事、通狀失情者、各又減二等、^下

推問殺害使

〔三代實錄^{四十四}〕元慶七年七月十九日癸未、先是太宰府六月六日解僞管筑後國解僞、今月三日夜、

群盜百許人、圍守從五位上都朝臣御西館射殺御西掠奪財物、傍吏聞入叫聲、俄發兵仗赴集之間、群

人望足服焉流讀岐圖

〔日本後紀^{十三}〕延曆廿四年十一月壬申先是伊豆國掾正六位上山田宿禰豐濱奉使入京至伊勢國榎撫朝明二驛之間就村求湯有人與之更復煖酒相飲其後嘔吐至伊賀國堺豐濱從者死豐濱情知毒酒勸加療治至京遂死遣使左兵衛少志從六位下紀朝臣濱公勘問無得

〔三代實錄^{四十六}〕元慶八年六月廿三日壬子遣式部大丞正六位上坂上大宿禰茂樹勘解由主典從七位下凡直康躬等於石見國推訴訟事下知彼國司稱介外從五位下忍海山下連氏則等去六月六日解僞管邇摩郡大領外從八位上伊福部真人安道率部內百姓來圍權守從五位下上毛野朝臣氏永之宅爲政手法仍奪取印匙以授傍吏守氏永以劍擊傷氏則妻下毛野屎子者又守氏永同月十五日奏狀稱傍吏發賊兵擬殺氏永即令囚賊奪取印匙鈴等以杖擊氏永打杭地上張著手足鐐籠倉裏者今如奏解狀事緒各異實情不同非遣朝使何決涇渭仍爲推問其由差遣茂樹等國宜承知聽使處分

〔三代實錄^{四十八}〕仁和元年七月十九日辛丑近江國檢非違使權主典前犬上郡大領從七位上犬上春吉向太政官愁訴權醫師犬上郡少初位下神人氏岳奸盜官物於是遣判事從六位上藤原朝臣棟景少屬從七位上讚岐朝臣勝雄等推問其事

〔三代實錄^{四十八}〕仁和元年十二月廿二日壬申下從四位下行信濃守橘朝臣良基於刑部省令推斷其罪先是彼國百姓辛犬甘秋子向官愁訴爲人被行火燒亡居宅并燒殺家人男女八人詔遣少監物正六位上布勢朝臣敏行推問其事敏行還奏守良基對捍不聽勘事故縱詔使所禁之罪人焉

〔日本紀略^一〕延喜二年九月廿日癸亥遣推問使於越後國彼國守紀有世爲藤原有度落髮着錯之由

〔春記〕長久元年五月一日乙卯參右府○藤原實命云昔聖代有非常事延喜二年越後守有世爲州

案之稱衆稱謀者此律除不證者之外皆須三人二人可謂衆證是三等以上親并可相容隱之人不得爲證之故也

〔類聚三代格〕太政官符

可勘定額寺資財并任三綱事

右被右大臣宣稱奉勸諸國定額寺資財者國司與三綱檀越共檢按處分其任三綱者依檀越衆僧請國司覆勘充任若寺家破壞及有餘犯失者推問所舉衆僧檀越等依法科罪自今以後永爲恒例

延曆十五年三月廿五日

〔唐律疏議〕

〔二十〕若別制下同案推問之案已有告實謂之推

〔令義解〕刑部省

卿一人掌鞠獄定刑名謂覆審解部所鞠與判事以上共斷定也依獄令在京諸司事發者犯徒以上者皆連寫案中太政官然則死決疑獄請也正也依同令國有疑獄事○中大判事二人掌案覆鞠狀斷

以下皆以上皆合推斷也決疑獄不決者議刑部會是也○中略獄事○中大判事二人掌案覆鞠狀斷

定刑名判諸事訟中判事四人掌同大判事少判事四人掌同中判事○中大解部十人掌同窮事訟中

解部廿人掌同大解部少解部卅人掌同中解部

〔令義解〕太宰府

大判事一人掌案覆鞠狀謂案覆審國所中犯狀也斷定刑名判諸事訟少判事一人掌同大判事

〔令義解〕凡鞠獄官司與被鞠人有五等內親謂祖父母及三等以上婚姻之家謂依律同籍爲一家即

連也并受業師謂文不釋見受業師即不同官私學先經受業及有讎嫌者皆聽換推經爲帳內責人

於本主亦同

推問使

〔類聚國史〕

〔八十七〕延曆十四年四月戊戌朔先是信濃國介正六位上石川朝臣清主爲人被射而不中

遣從五位下藤原朝臣都麻呂等勒搜射人不得焉更遣衛門佐大伴宿禰是成推問小縣郡人久米舍

拷訊セズシテ衆證ニ據リテ罪ヲ定ムルコトアリ、即チ應議請減者、若シクハ年七十以上、十六以下ノ人、及ビ廢疾者、若シクハ僧尼ノ如キ是ナリ、サレドモ同居若シクハ三等以上ノ親ノ如キ、律ニ於テ相容隱スルコトヲ聽サル、人及ビ八十以上、十歲以下、若シクハ篤疾ノ人ヲ以テ證トスルコトヲ得ズ、又創病アル者ハ差ユルヲ待チ、孕婦ハ產後百日ヲ待チテ拷ス、
 【令義解】凡間囚辭定訊司依口寫訖對囚讀示、
 凡國有疑獄謂獄有所疑、處斷難明者也、不決者、識刑部省謂此不論本罪輕重、但徒以上者皆是、即與上條本罪應減、其情稍異、若刑部仍疑申太政宣、

【令義解】凡死罪雖已奏報猶訴冤枉、事有可疑、可推覆者、以狀奏聞、遣使馳驛檢校、

【政事要略】八十一、斷獄律、須依所告狀鞠條云、若於本狀之外、別求他罪者、以故入人罪論、

【令義解】凡犯罪須驗位記、若位記失落、或在遠者、皆驗案、

【延喜式】二十九、凡五位以上犯罪、應推者皆設床席、

【延喜式】二十九、凡訊獄認書者、具錄訴狀、其申官解文者、少除繁辭、宜目之、必須委曲、

【延喜式】二十九、凡被告犯罪、推勘、無罪及徒人役滿者、依法合免、其爲人凶惡、衆庶共知者、不須放免、禁固獄中、理應放者、申官免之、

【法曹至要抄】上罪科、一衆證事、

斷獄律云、其於律得相容隱、卽八十以上、十歲以下、及篤疾、皆不得令其爲證、違者減罪人罪三等、疏云、其於律得相容隱、謂同居、若三等以上親、及外祖父、每外孫、若孫之婦、夫之兄弟、及兄弟妻、及家人奴婢、得爲主隱、其八十以上、十歲以下、及篤疾、以其不堪加刑故、並不許爲證、若違律遣證、減罪人罪三等、名例律云、稱衆者、三人以上、略中、疏云、稱衆者、斷獄律云、七位以上犯罪、不拷據衆證、定刑必須三人以上、始成衆證、但稱衆者、准此文、略中、

推鞠

鞠獄ノ官司ハ、鞠セラル、人ノ五等以上ノ親屬、及ビ三等以上ノ婚姻ノ家并ニ受業師、及ビ
嫌疑ナルトキハ、皆換フルコトヲ聽ス、囚人ヲ鞠問シテ其辭已ニ定レバ、訊司ハ其辭ニ依
リテ筆記シ、之ヲ囚人ニ讀ミ示ス、國ノ訟獄ニ疑ハシキ處アリテ決セザルトキハ、本罪徒以
上ハ刑部省ニテ讞ス、刑部省ニテモ仍ホ決セザルトキハ、太政官ニ申シテ、裁ヲ仰グ、死罪ハ
特ニ其獄ヲ慎重ベキコトニテ已ニ奏報アリトモ、猶ホ冤枉ヲ訴ヘ、其事疑フベキコトアリ
テ推覆スベクハ、狀ヲ以テ奏聞シ、朝廷ヨリ使ヲ遣シ、馳驛シテ檢校セシム、又官司本狀外ニ
於テ他罪ヲ求ムルトキハ、故入人罪ヲ以テ論ズ、又察獄ノ官人訊鞠スルニハ、先ヅ情ヲ以テ
辭理ヲ審察シ、案狀ヲ反覆シ、是非ヲ參驗スルニ、事狀疑似ニシテ、猶ホ未ダ實ヲ首セザルト
キハ、案ヲ立テ、長官ノ同判ヲ取り、然シテ後ニ拷訊ス、拷訊トハ、其體ヲ拷器ニ憑ラシメ、杖
ヲ以テ背ト臀トヲ迭ニ打チテ、其實ヲ吐カシムルヲ云フ、訊スルコトハ度ゴトニ二十日ヲ
隔テ、都テ三度ニ過グルコトヲ得ズ、杖數ハ總テ二百ニ過グルコトヲ得ズ、本犯笞杖罪ノ
人ハ、所犯ノ數ニ過グルコトヲ得ズ、即チ本犯笞五十ノ人ハ、訊杖五十ニ過グルコトヲ得ズ、
杖百ノ人ハ、訊杖百ニ過グルコトヲ得ザルナリ、若シ拷數已ニ滿チテ承引セザルトキハ、保
ヲ取リテ之ヲ放ツ、若シ其罪殺害賊盜、及ビ水火ノ損敗ヲ被フルガ如キ重害ノ事ニアラザ
ルト、重害ナリトモ疑似ノ事ノ少キトハ必シモ三訊セズシテ、狀ニ隨テ量決ス、又賊狀露驗
ナルハ、承引セズト雖モ直ニ狀ニ據リテ科斷ス、若シ囚人ヲ訊シテ死ニ致セバ、具ニ當處ノ
長官ニ申シ、在京ハ彈正ト對驗ス、而シテ法ニ依リ拷シテ、邂逅ニ死ニ致ス者ハ其罪ヲ論ゼ
ズ、囚人ヲ訊スル時ニハ、親ヲ訊スル司ノ外ハ、囚人ノ所ニ至リテ消息ヲ聽クコトヲ得ズ、又

和銅五年五月十七日○又見續日本紀

〔延喜式彈正四十一〕凡彈正者、月別三度巡察諸司、糾正非違、若有廢闕者、乃具事狀移式部、考日勸問、

〔日本紀略後十四〕長元三年四月十五日丁酉賀茂祭、今日見物車出紅衣檢非違使源清以下糾彈之、

〔左經記〕長元元年六月廿四日丁亥傳聞去四月廿五日藤原時遠王○王字誤爲行等、於○於字誤肥後守

成章朝臣欲合戰之間、右衛門尉貞重向彼場、爰雖無合戰之實、各帶弓箭、率隨兵之由、普有其聞、貞重

須搦其身言上事由、而不加糾斷、無勳追捕、請取爲行將去已了、因茲可召進件爲行之由、雖令仰下已

有容隱心、專無召進之勳、仍爲勸問其由、再三雖令召稱有身病遂不參、宜令明法博士勸申罪名之由、

右大弁○藤原重尹有勳、仰右府○藤原實家云々、

〔政事要略八十〕闕訟律云、誣告人各反坐、凡人有縱、遂相誣告者、即糾彈之官、挾私彈事不實者、亦如

之反坐、致罪、准前人入罪之法、至死而前人未決者、誣減一等、謂有憎惡前人、或朋黨親戚、挾私誣詐、妄

入人罪之法、至死而前人雖斷訖、未決者、反坐之人、其本應加杖及贖者、止依杖贖法、即誣告人及有誣

者、依常律、

〔延喜式彈正四十一〕凡臺有所犯者、式部省加教正、

權右中辨源朝臣公忠傳宣大納言藤原朝臣恒佐宣奉勅爲令勘札東大寺與福寺雜人等濫行差遣右衛門志比部貞直先了而貞直依身病重未罷向宜以府生若江善邦改遣者

承平五年六月三日

左大史尾張言鑒奉

〔年中行事秘抄正月〕大饗日主人不出客亭例見九條殿御記并外記

李部王記云天慶二年正月四日詣太政大臣○藤原饗所主公稱病不出客亭元日○元日恐有誤道巡察

等於三位已上家札彈他司人集會其間事今案檢非違使向大饗所之始驗

〔延喜式四十一〕凡京中弔以下每月巡察勘彈非違東西市并諸寺非違及客館路橋破損之類

凡巡檢左右京之日量狀決罰

凡喚左右京職云將遣忠以下檢京中非違道橋及諸寺宜嚴仰條令預定便處會集男女亦告諸寺三綱等令辨備如上卽忠以下到彼會所問云有京職官人及坊令等冤枉百姓凌侮長幼耶又有孝子順孫義夫節婦以不又有惡女擾亂閭巷以不又到寺家道條令告三綱卽擊鐘會僧訖條令申云坐定卽忠以下入著座問衆僧云三綱供養衆僧有所闕失耶又有罵辱衆僧并將三寶物餉送官人耶又有三寶燃燈所闕失耶次問三綱云有衆僧乖違法式擾亂徒衆及罵詈三綱凌突長官好小道卜吉凶懷巫術救疾病者耶又有飲酒醉亂及與人鬪亂者耶又有著禁色者耶謂僧尼之類

〔三代實錄二十〕貞觀十六年十二月廿六日庚辰檢非違使起請二條其一應札彈近京之地非違事

謹案使等依舊宜旨巡檢京中之非違由是舒狎之輩好城邊之地遊使等檢察亦頗類應彈之事多在

山崎與渡大井等津頭使等卽事經過那邊目有所見口不能言望請津頭及近京之地○在○在○非法

使等有所看卽便札彈○中望請處分將爲永例

〔延喜式四十一〕凡宮城內外非違及汚穢者每日忠已下札察但禁中者不須

〔類聚三代格十二〕詔彈正者月別三度巡察諸司札正非違若有廢闕者仍具事狀移送式部考日勘問

具官位姓名

謂上文云其司位此云具官位者假令一人兼帶數官在上唯其官之類以此爲別故立文不同也 貫屬

右一人犯狀云

勅上件甲乙事狀如右謹以上聞謹奏

年月日

彈正尹位臣姓名謂若無尹者判官以上亦得奏也

聞御畫

右親王及五位以上

謂一位以下也大政大臣不在此限有犯應須糾劾而未審實者並據狀勘問不須

推拷謂律應推請減者並不合拷訊皆據衆證定罪即其得減之色命不須推拷何說議請也委知

事由事大者奏彈謂解官以上也何者職令云雜犯死罪職成會赦者解見任職事此訖留臺爲

案非應奏謂五位以上不犯杖罪以下及六位以下並糾移所司推判職令衛府糾提罪人非實屬

京者皆送刑部即明實屬京者送於京職其彈正糾移罪人亦須准此故云糾移所司

〔令集解公式〕古記云奏彈式條未知訓方答多多志麻字須

〔令義解一職〕彈正臺

尹一人掌彈正清風俗○註彈正內外非違謂內者左右兩京外者五畿七道也依公式令言官人害政

爲彈奏也事弼一人大忠一人掌巡察內外糾彈非違少忠二人掌同大忠大疏一人少疏一人巡察彈正十

人掌巡察內外糾彈非違○下

〔職原抄〕檢非違使

朝家置此職以來衛府追捕彈正糾彈刑部判斷京職訴訟併歸使廳

〔政事要略六十一〕檢非違使式云推事不論左右雖無佐若尉二人猶得行事

〔政事要略六十一〕檢非違使式云使之所掌准彈正彈事并依臨時宣旨行之

〔朝野群載十一〕令檢非違使糾彈行宣旨

糾彈官吏

〔延喜式彈正〕凡臺開官司枉判及閭里犯法者追所由人勘問其由得實應奏者隨即奏聞

〔延喜式彈正〕凡臺奏彈事者不經太政官而直奏聞將奏事者忠詣開門告大舍人令伺奏事狀有忠

就大舍人處伺奏事狀舍人召置首進前上聞但臨時奏事者忠以上一人詣內侍所令內侍奏聞之

凡記非違者不必封記

〔延喜式彈正〕凡臺彈人者詞容端嚴依理糾彈其受彈者敬慎容止恭聲稱唯乃陳所問違者復彈

凡臺糾彈不當者卽有得彈之官其臺彈不論合不愼須受彈

〔三代實錄清和〕貞觀十二年十二月廿七日甲辰制彈正臺復天長九年十一月二十九日格每月巡檢

京中并勘記諸司諸院諸家及內外主典已上犯狀直移式部兵部二省貶奪考祿

〔類聚三代格十〕太政官符略○中

一應諸司三度以上不參臺喚并不辨申勘事者停給季祿事

右同前○彈奏狀備謹案公式令云親王及五位以上有犯應須糾劾而未審實者並據狀勘問不須

推考委知事由事大者奏彈者然則奏聞之理必在推問之後非經糾劾何輒上奏而今或一司若公

罪若私罪或爲臺所記錄或爲人所告言因茲爲彈其由卽召官人而空設巧詐不曾參到今將錄罪

狀以上奏則全乖令文亦欲對其身定罪名則終無其期又一司四等以上之官罪狀各異至于未經

推彈則首從難辨如此之類品目猥多非張新制何爲懲革望請自今以後諸司三度以上不參臺喚

并不辨申勘事者並移二省以奪季祿

以前事條如件右大臣宣奉勅依奏

貞觀十八年七月廿三日○又見三代實錄政事要略

奏彈式

〔令義解公式〕奏彈式

彈正臺議奏其司位姓名罪狀事

徐嚴
步敬

式部

簪簪

正糺

彈四
正十

而其

大者

部省

1

五
衛

辨姓

彈四
正十

不得

一指其

公七
式

其所
製意

封進

奏聞

隨者、事其

元、明
非案

皆其
喪所

佳所
狀告

議五
員

判官

省之中或朝廷之中其於過失發處卽隨見隨聞無匿蔽而糾彈其有犯重者應請則請當捕則捉若對捍以不見捕者起當處兵而捕之當杖色乃杖一百以下節級決之亦犯狀灼然欺言無罪則不伏辨以爭訴者累加其本罪

〔延喜式四十一〕凡彈正不得彈太政大臣太政大臣得彈彈正其左右大臣與彈正若有非違者各得互彈

〔令集解五〕釋云中凡彈親王諸王諸臣三位已上及參議者就其前坐彈之弼以上官在臺座而遣

忠若巡察等一人就其前座而彈之其坐臨事預仰所司設焉被彈人者初下座稱唯若不下者亦彈之彈竟之後亦下稱唯其彈親王及左右大臣者跪於殿上彈之不得設座若臺座無弼已上官者待弼以上彈之其四位以下不同王臣皆喚於臺彈之五位已上設座其被彈人下座稱唯同上若座無弼以上官者不得輒彈五位已上自餘彈事具見彈例

〔令集解五〕古記云中親王及三位以上者遣大忠以下巡察以上就座昇廳糾彈以下皆於臺追糾正彈但五位以上聽聽下聽字席若彈問有爭者三位以上追家令等問定事猶不明遣大忠以下巡察以上問定

〔令集解五〕古記云中凡有彈事者大忠以下不得輒追彈五位以上必須弼以上判然後彈之

〔政事要略六十一〕彈例云若座無弼已上官者不得輒彈五位已上者若座無佐縱雖有尉至于五位以上猶以不可推勘也已弼無弼已上官也以此佐准弼之由

〔延喜式四十〕凡彈親王及左右大臣者弼以上在臺座而遣忠一人於堂上彈之諸王諸臣三位已上及參議者就其前座彈之預仰所司設座四位已下不同王臣皆喚其身於臺彈之上五位已上設座其被彈人者起座

稱唯彈竟之後亦起稱唯若不起者亦彈之凡彈大納言以下者就第二堂座彈之太政官廳不得

古事類苑

法律部十五

上編

糾彈

糾彈ハ彈正臺ノ職ニテ、左右兩京、五畿七道ノ非違ヲ彈奏ス、而シテ太政大臣ノ外、親王以下罪ヲ犯セルアリテ糾劾スベキニ、未ダ其實ヲ審ニセザルトキハ、並ニ推考セズシテ狀ニ據リテ勘問シ、委ニ事ノ由ヲ知リテ後ニ、官人ハ解官以上ニ當リ、無品親王ハ徒罪以上ニ當レバ奏彈ス、無品親王杖罪以下、及ビ五位以上解官ニ至ラザル犯罪若シクハ六位以下一切ノ犯罪ハ、並ニ彈正臺ヨリ、斷罪スベキ所司ニ移シテ推判セシム、然レドモ彈正ハ太政大臣ヲ彈ズルコトヲ得ズ、太政大臣ハ彈正ヲ彈ズルコトヲ得、但シ左右大臣ト彈正トハ、互ニ彈ズルコトヲ得、又封事ヲ上リテ官人ノ政ヲ害スルコトヲ告ゲ、或ハ抑屈セラル、コトヲ訴フルコトアレバ彈正之ヲ少納言ヨリ受ケテ推問シ、理ニ當レバ奏聞シ、否ラザレバ彈劾ス、又官司ノ枉判、閭里ノ不法ヲ聞クトキハ、彈正ハ所由ノ人ヲ追喚シ、案覆シテ實ヲ得レバ奏聞ス、凡テ彈正臺ノ奏彈ノ事ハ、太政官ヲ經ズシテ直ニ奏聞ス、彈正ハ又毎月左右京ヲ巡察シ、東西市并ニ諸寺ノ非違、客館路橋ノ破穢ヲ勘彈シ、狀ヲ量リテ決罰シ、月別ニ三度、諸司ヲ巡察シテ非違ヲ糾正シ、又毎日禁中ヲ除クノ外、宮城内外ノ非違、及ビ汚穢ヲ糾察ス、サテ糾彈ノ事ハ後ニ檢非違使ニ歸セリ、因テ今使廳糾彈ノ事狀ノ顯レタル者、二三ヲ附記セリ、

〔日本書紀二十九〕十一年十一月乙巳、詔曰、親王、諸王及諸臣至于庶民、悉可聽之、凡糾彈犯法者、或禁

不拷訊

六一三

拷器

六一四

口供

六一七

斷罪

行決 併入

斷罪法

六二六

出入人罪

六二七

斷罪申覆

六二九

奏斷罪文

同

斷罪例

六三〇

勅斷

六四三

宣告

同

○

行決

六四四

古事類苑

法律部十五

上編

糾彈

糾彈制度

五九五

奏彈式

五九八

糾彈官吏

五九九

糾彈官巡察

六〇〇

糾彈例

六〇一

糾彈官犯法

同

推鞠

鞠問制度

六〇三

鞠獄官

推問使
推問殺害使

六〇四

鞠問例

六〇七

拷訊

六〇九

水責

六一二

對訊

六一三

過三日此等抄寫程既云案成以後諭令成制勅案不別給程即是當日成了過令八十二字限日皆是
有積稽而自舉者同官文書法仍爲公坐亦作四等科斷者以所由爲首若涉私曲故稽亦同私坐之法
〔法曹至要抄上科〕一覺舉事

名例律云公事失錯自覺舉者原其罪應連坐者一人自覺舉餘人亦原之疏云謂長官以下主典以上
在案同判署者一人覺舉餘並得原上文疏云謂緣公事致罪而無私曲者事未發露而自覺舉者所錯
之罪得原覺舉之義與自首有殊自首者知人將告減二等覺舉既無此文但未發自言皆免其罪

按之職制律云被詔書有所施行而違者徒二年失錯者杖八十者假令官人詔勅施行未曉勅意失
錯無私曲之類自覺舉免其罪又假令刑部省斷罪失錯同判一人人覺舉者連判官皆可原之類也
又云斷罪失錯已行決者不用此律疏云謂死罪及笞杖已行決訖流罪者至配所役畢徒罪役訖此等
並爲已行決者官司雖自覺舉不在免例各依失入法科之故云不用此律

按之假令官人依失錯斷已行決者雖覺舉不原若失而斷徒二年已役一年畢一年未役者從事免
既役一年者減本罪三等可科之類按斷獄律官司入人罪條云斷罪失於入者減三等之故

又云其文書稽程連坐者一人覺舉餘並原之主典不免若主典自舉並減二等

按之公式令云公案小事五日程中事十日程大事廿日程徒罪以上辨定後卅日程者過此日限是
稽程也假令長官以下判官以上一人覺舉者餘人可免主典不免何者職員令神祇官條云大史一
人掌受事上抄勘署文案檢出稽失緣主典之故若主典自舉並減二等可科若長官以下連署舉者
判官以上並得免罪主典尙減二等科之

陳首能悔過主者謂減本罪三等既云參之自依下例即財主應坐者減罪亦准此前受財枉法不枉法受所監臨及坐贓與財人罪三等既云參之自依下例即財主應坐者減罪亦准此

【政事要略八十】自首覺舉事

圖訟律云犯罪欲自陳首者皆經所在官司申牒犯罪未發皆許自新其有犯罪欲圖訟律云犯罪欲自陳首者皆經所在官司申牒

捕者仍依前條承告之法謂謀反逆叛為有支黨事須掩捕仍依前條承告之法謂若竊牛日下掩還同知而不告之罪謂謀反大逆不告令死謀大逆謀叛不告令流

【法曹至要抄上科】一自首事

名例律云犯罪未發而自首者原其罪

按之過而不改斯成過矣今悔過來陳首可原其罪

又云輕罪雖發因首重罪者免其重罪

按之假令盜牛事發自首鑄錢鑄錢罪得原盜牛之犯仍坐之類也

又云因問所劾之事而別言餘罪者亦如之

按之假令犯罪事發被推鞠之時更言餘罪亦得免其餘罪之類

又云遣人代首若於法得相容隱者為首及相告言各聽如罪人身自首法

按之假令甲犯罪遣乙代首不限親疎可原之同律云同居若三等以上親等為相隱之親家人奴婢

為主隱者也此等親為首并告言亦可原又謀反大逆及謀叛之○之器未字誤上道大逆未行之類二等親

捕送官司亦同

一不自首事

名例律自首條云於人損傷即事發逃亡若私越度關及奸并私習天文者並不在自首之例疏云謂犯

罪之人聞有代首為首及得相容隱者告言於法雖復合原追身不赴不得免罪謂止坐不赴者身首告

之人及餘應緣坐者仍依首法

〔政事要略八十四〕自首覺舉事

又覺舉ト云フコトアリ、官人自ラ其罪ヲ覺リテ舉劾スルヲ云フ、即チ自首ノ類ナリ、公事ニ因リ失錯シテ、自ラ覺舉スルトキハ其罪ヲ免ズ、長官以下、主典以上ノ内、一人覺舉スルトキハ餘人モ其罪ヲ原サル、コトヲ得、但シ斷罪失錯シテ已ニ行決スル者ハ、此律ヲ用キズシテ失入ノ法ニ依リテ之ヲ科ス、凡テ所司事ヲ受ケテ文書ヲ勘フルニハ、大中小事ニ隨テ各日限アルヲ、其程マデニ畢ラザルヲ稽程ト去フ、文書稽程シテ連坐スベキニ、一人覺舉スレバ、餘人ハ原サル、コトヲ得レドモ、主典ハ原サレズ、主典自ラ覺舉スルトキハ罪二等ヲ減ズ、

名例律云、犯罪未發而自首者、原其罪、過而不改、則成過矣、今能改過、來首其罪、皆合得原、若有文據言

成、正賊猶微、如法、稱正賊者、謂盜者自首、不微、倍賊、稱如法者、謂未自首前法、微、謂官主、微、謂官主下、唐

輕罪雖發、因首重罪者、免其重罪、即因問所効之事、而別言餘罪者、亦如之、之、別名推鞠、即遣人代首、假有

罪、但道代首、即是不隱、若於法得相容隱者、爲首及相告言者、各聽如罪人、自首法、此謂據得、告隱、各、罪

減、凡人身首之法、其四等五等親相隱、既緣坐之罪、及謀殺以上、二等親、雖捕告、俱同、自首、謀殺反大逆及謀

逆、已上道者、並合緣坐、及謀殺以上者、謂非緣坐者、如未上、其聞首告、被迫不赴者、不得原罪、謂止坐、不

赴者、身不赴、謂犯罪之人、聞首告、及得相告隱者、各言、於法雖復合原、自首、仍依自首、即自首不實及不盡者、以

不實不盡之罪罪之、至死者聽減一等、科罪之類、及不盡者、謂枉法、取財、一十五端、罪首十四端、餘一端、

是爲不盡之罪、稱罪之者、不盡者、止計不盡之數、科之、仍依首盜十端、止首五端、五端不盡、

者減一等、其知人欲告、及亡叛而自首者、減罪二等坐之、即亡叛者、雖不自首、能還歸本所者、亦同、

司首陳、歸初過、所亦同、自首之法、減罪、其於人損傷、損、見血爲傷、雖家、同、犯殺傷、而自首者、

得免、所因之罪、仍從故殺傷法、本應過失者、聽從本、假有因盜殺傷、罪仍科、若過失殺傷、仍從過失本、

自首 覺舉 研入

自首トハ、己ガ所犯ノ罪ヲ以テ自ラ官司ニ訴フルヲ云フ、犯罪未ダ發セザルトキ、過ヲ改メ自首スルトキハ其罪ヲ原シ、正賊アレバ之ヲ徹ス、若シ其罪ヲ告言スル者アリテ、官司已ニ判シテ三審スルトキハ、三審ノ事ハ、告其文牒ハ未ダ曹司ニ入ラズトモ、其事已ニ彰レタレバ、本人ハ首ヲ成スコトヲ得ズ、又輕罪ノ已ニ發スルニ因リテ、重罪ヲ首スル者ハ、其重罪ヲ免シ、推鞠セラル、ニ因リテ、自ラ餘罪ヲ訴フル者ハ、其餘罪ヲ免ス、又人ヲ遣シ代リテ首セシメ、若シクハ三等以上ノ親屬ノ如キ、相容隱スルコトヲ得ル者之ガ爲メニ首シ、及ビ同類互ニ訴キテ告言スルトキハ、罪人自首ノ法ニ同ジ、若シ犯罪人、其黨類ノ首告スルヲ聞キナガラ、追喚セラル、ニ赴カザルトキハ、止、其赴カザル者ノ身ヲ坐ス、又自首スレドモ實ヲ吐カズシテ、強盜シテ賊ヲ得タルヲ竊盜シタリト云フガ如キハ、是不實ノ罪ナリ、即チ強盜不得財ヲ以テ科斷ス、或ハ盡クハ自首セズシテ、枉法取財十五端ナルヲ、十四端ナリト云ヒテ、一端ヲ匿スガ如キハ、是不盡ノ罪ナリ、即チ枉法取財一端ヲ以テ科斷ス、又人ノ告ゲント欲スルヲ知リテ自首シ、及ビ逃亡シ、若シクハ叛人已ニ上道シテ自首スルトキハ、本罪ニ二等ヲ減ズ、但シ人ノ身體ヲ損傷シ、私家ニ有スルコトヲ得ズシテ、備償スベカラザル禁兵器、禁書ノ類ヲ毀失シ、及ビ犯罪ノ事、已ニ發シテ後ニ逃亡シ、若シクハ關ヲ私度シ、越度シ、及ビ良人ヲ姦シ、并ニ天文ヲ私習スル者ハ、自首ノ例ニアラズ、又犯罪ノ人、已ニ逃亡シタル後ニ輕罪ノ人能ク同伴重罪ノ人ヲ捕ヘテ首シ、及ビ同伴ノ罪、輕重相等シキニ、半以上ノ人ヲ獲テ首スルトキハ、其罪ヲ除ク、又強盜竊盜シ、或ハ詐欺シテ人ノ財物ヲ取リタル者、財主ニ首露スルトキハ、官司ニ自首スルト同ジ、

〔令集解職五〕關訟律云、監臨主司條云、卽同伍保內、在家有犯、知而不糾者、死罪徒一年、流罪杖一百、徒罪杖七十、注云、犯百杖以下、保人不糾無罪、

府男醍醐に任觀阿闍梨と申人候件人ハ三宮御持僧也件人申云去九月比に世間事相待間已遲
遲此事無術然者參内ふ可奉犯之申候也仍兩三度參内して候ふも無便宜天罷歸了申仍
醍醐を固天件阿闍梨任觀を師醍醐座主勝覺に仰天召問先檢非違使重時爲守護道々行向之間
件阿闍梨去房間行向天盛重獨取了廿二日庚申今日被行任觀罪科上達部兩三人參陣有定被
行之任觀配流伊豆大島千手丸佐渡國皆暫候檢非違使許

〔百練抄五鳥羽〕永久元年十一月廿二日諸卿定申阿闍梨仁寬罪名配流伊豆國黨類同處流罪是去四
日院御所有落書仁寬相語勝覺僧都大童子千手丸欲危國家事依露顯道檢非違使盛重所獨取也
〔玉海〕壽永二年九月四日丙寅前源中納言雅賴卿來余餘○藤原依疾隔簾謁之世上事等多以談說其
中爲余有無用事等去比義仲之許有落書即義仲所行不當非法等悉以注載其次余不被登用尤不
便爲朝之重器之由具以載之云々此事余邊事不快存之輩所爲歟云々誠此事甚無由事歟

推問密告使

〔三代實錄十八〕

貞觀十二年十一月十三日辛酉筑後權史生正七位上佐伯宿禰直繼奉進新羅國牒

即告太宰少貳從五位下藤原朝臣元利萬侶與新羅國王通謀欲害國家禁直繼身付檢非違使十

七日乙丑勅太宰府追禁少貳藤原朝臣元利萬侶前主工王家人浪人清原崇繼中臣年麻呂與世有
年等五人以從五位下行大內記安倍朝臣興行爲遣太宰府推問密告使判官一人主典一人

不舉劾

〔法曹至要抄上〕一不舉劾事

關詠律云監臨主司知所部有犯法不舉劾者○者字原無今減罪人三等即同伍保内在家有犯知而

不札者死罪徒一年流罪杖一百徒罪杖七十其○一本家唯有婦女及男年十六以下者皆勿論又

見法曹類
林令抄

案之里長以上知所部之人有違犯法令格式之事不舉劾者減罪人罪三等假有人犯徒一年不舉
劾者得杖八十之類也

今日議人非墨客

去年補者半田翁

外論向背詞雖怨

內接心情契自通

實物來時唇更咬

訴言到處耳初聾

招留割屋美簾出

厭却爐抱閉戶籠

棄耻形容常失理

顧私行摸豈思忠

登高只是銅山動

在下猶因金穴空

不信宜尼貧樂道

祇看後輩富成功

宛如宿福裁縫女

其奈朝臣造作工

爲眼群飛分母子

磨牙并走決雌雄

普藏不住名先改

櫻笠長居命可終

人與新研珠不羈

我將古弊瓦相同

還慙因倍於原憲

唯庶饒多自石崇

開霧昔期攀曉桂

戴霜今款類秋蓬

三千人裏頭梳雪

數十年前淚拭紅

色冷蒼蒼盈朔月

聲寒札々繞床虫

悲哉柳市老無價

早晚此身欲奉公

〔日本紀略〕村七天德三年七月十八日辛酉今夜仁壽殿前落書云金鏤井寒近時人爲奇

〔小右記〕萬壽五年元長八月十八日庚辰去五日落書關白賴通出云々有天下事道俗事上達部

以下惡事皆注載云々往古來今未有如此之落書云々

〔中右記〕康和四年十月十九日末時許爲御使參院河白令申給事院重可三助當事抄書此次從院令申

御事明年主上(堀河)御懷能々御用心其文云佛法ハ以火可滅王威ハ以軍可亡其期十月十七廿五

十一月五日也但伊勢大神宮八幡等可被祈者若被祈申者主上御平安者此事雖不可信受落書

之體非凡人手跡又不記世間人惡甚不得心件皆可三

〔殿曆〕長治二年十二月廿七日庚寅於鬼間頭弁重資云仰事也下侍戶掖ニ有文其字云備後介九惡

也件事藏人仲光所爲云々可有沙汰也余申云能々可沙汰也

〔殿曆〕永久元年十月五日癸丑去三日皇后宮御方有落書件書云主上鳥羽奉犯ニ有構人件事ハ或

人乃醍醐座主勝覺許ニ千手丸云童フト童ハスカシテ構事也書也件書ハ自皇后宮院ハ

令奉給也仍有沙汰雖落書可被尋由有御定件千手丸被搦了被問件童申云件事實事也事ハ左

唐ノケサウ文谷傍有欠飲日本返事

木頭切月中破不用

一伏三仰フキニハ、コニヒマタル、カキセリ、アモフナシ、ヒク、セシ、知此讀不來待書暗降雨暮漏寢云々

栗天八一沼加坂

戒令爲市ニハ有砂々々

又左繩足出志女繩與都

〔政事要略八、十四〕古老云昭宣公○藤原基經於堀河院被行大變日漸及昏黑有束帶六位以袖掩面插書

於書刺直地走寄突入主人御前逐電逃去公取其書不揭其人王卿以爲可何爲哉須之召燭之者於

庭中令燒不開彼書不知何事匿名之書可從燒却憲法之旨存其意歟先賢之行爲後記之

〔將門記〕以去承平八年春二月中武藏守興世王介源經基與足立郡司判官代武藏武芝共各爭不治

之由如聞國司者无道爲宗郡司者正理爲力○中仍國書生等尋越後國之風新造不治悔過一卷落

於廳前事皆分明於此國郡也

〔本朝文粹十二〕櫻島忠信落書依此落書拜二在落書大隅守云々

今春詔勅多哀樂

半盡開眉半叩頭

官爵專非功課賞

公私寄致贖勞求

除書久待貢書致

直物遲期獻物收

右大閤賢歸衆望

左丞相倭損皇飲

初逢魚水恩波濁

共見駿河成淚流

不動和風櫻獨冷

被霑暖露橘先抽

內臣貪欲世間歎

外吏沈淪天下愁

招集金銀千萬兩

沾亡山海十二州

秋夜書懷呈諸文友兼南隣源處士

藤原衆海貴居老生

見說北堂商賈隆

東西交易甚忿忿

文章博士儒宣下

太上天皇葬禮中

一院舉哀憂未盡

兩家沾職悅無窮

三教泗水忘恩澤

橘使槐林損舊風

疏議曰、匿名之書、不合檢校、得者即須焚之、以絕欺誑之路、得書不焚、以送官府者、合徒二年、官司既不合理、受而爲理者、加二等、處徒二年、被告者、假令事實亦不合、坐若是首、不原事、以後別有人、論告還合得罪、輒上聞者、合徒三年、若得告反逆之書、事或不測、理須聞奏、不合燒除、

問曰、投匿名書、告人謀反大逆、或虛或實、捉獲所投之人、未知若爲科罪、

答曰、隱匿姓字、投書告罪、投書者既合流坐、送官者法處徒刑、以塞誣告之源、以杜姦欺之路、但反逆之徒、蠱深夷族、知而不告、即合死刑、得書不可焚之、故許送官聞奏、狀既是實、便須上請、聽裁、告若是虛、理依誣告之法、

〔法曹至要抄上科〕一落書事

關詠律云、投匿名書、告人罪者、徒三年、○中

案之匿名成落書、立簡札之者、可處徒二年也、且見付之輩、早可燒弃之矣、

〔續日本紀十七〕天平勝寶元年二月丙辰、以朝廷路頭屢投匿名書、下詔敕、誠百官及大學生徒、以禁將來、

〔類聚國史八十七〕延暦十二年三月己酉、正親大令史正六位上多治比真人、彌高散位從六位上、櫻島部石守並除名、以彌高監主取官物、石守投匿名書也、

〔江談抄三〕嵯峨天皇御時、落書多々事

嵯峨天皇御時、無惡善ト云落書世間謂多々也、篁讀云、无惡クバガナ善ヨカシト讀云々、天皇聞之、給

天篁所爲也ト被仰天、蒙罪トスル之處、篁申云、更不可作事也、才學之道、然者自今以後、可絕申云々、

天皇尤以道理也、然者此文可讀ト被仰、令書給、

十廿卅五十海岸香有怨落

二門口目ハ三中トホス市中用二

〔政事要略八十四〕圖詔律云告祖父母父母者絞父為子天有隱罪無犯如有違失理須諫諍故謂非緣坐之罪及謀殺以上而故告者緣坐謂謀反大逆及謀殺若故告者父祖得同告例子孫處以絞刑下條准此故云准此若因推事不獲免圖解注引不當告坐即嫡母繼母殺其父母及所養者殺其本生並聽告○本書有誤脫一處

又云告二等尊長外祖父母夫之祖父母雖得實徒一年依名例律並相容隱被告之其告事重者減

所告罪一等假有告二等尊長從布十五合從二年半之類同所犯罪不合論告之者猶坐以下二等尊長

十以上十歲以下若為疾痴狂即誣告重者加所誣罪三等告三等尊長各減一等四等五等減二等

誣告重者各加所誣罪一等即非相容隱被告者論如律若告謀反逆叛者不坐謂二等尊長以下犯謀

反逆論告其相侵犯自理訴者聽身之類得自理訴非緣犯不得別告餘事下條准此謂下條告五

等尊長又云告五等四等卑幼雖得實杖六十相隱既得減罪即得此坐三等以上遞減一等誣告重者二等親

減所誣罪二等三等親減一等四等以下親以凡人論即誣告子孫外孫子孫之婦者各勿論誣告子孫

主亦同其有告得實者亦不坐被告得相容隱者同自首之法

〔裁判至要抄〕一處分外孫財不悔還事

圖詔律云告外祖父母徒二年疏云或侵奪財物或毆打其身之類得自理訴

〔續日本紀淳仁〕天平寶字四年五月戊戌右大舍人大允正六位下大伴宿禰上足坐記災事十條傳

行人間左遷多嶺島據告人上足弟矢代任但馬目

〔政事要略八十四〕圖詔律云被囚禁不得告舉他事其為獄官酷已者聽之人有犯罪身在囚禁唯為獄

不得告發即流囚在道徒囚在役身嬰絛枷或有授人元板事刻唐律疏議作授人亦同被囚禁之

色不得告舉他事又准獄令囚告密者禁身鎖送即明知明知下唐律疏議有謀無以上聽告餘律不

得告舉即年八十以上十歲以下及篤疾者聽告謀反逆叛子孫不孝及同居之內為入侵犯者餘並不

切害者不在此例其前人合禁告人亦禁辨定放之注云切害謂殺人賊盜逃亡若強姦良人及有急速之類義解云若其已然之後不須更復爲切害雖即已行而餘緒侵淫猶應爲害者亦爲急速也又條云告密人皆經當處長官告受告官司准法示語確言有實即禁身據狀檢校義解云密者謀叛以上又云准三審之法示語虛得反坐之狀但事意急切○急切令義不可延時日故即立○即立令義示語至三而止是名○名令義准法示語其解有三字示既訖事如經妄即反坐之科當依恒法者據此文告謀叛以上者當經三示科其反坐至于切害稱非三審之例者即爲事依急速不致延緩也所謂告切害之輩非必急速或名是切害非登時事或雖犯急速既經年月而偏依切害之名不行三審之法事不穩便亦乖令條今須告切害之中有可依法爲急速者更不經三審若不○不恐可爲切害者必經三審同科反坐但先追前人後禁告人若或經○經恐告者聞前人既被追禁之由有隱遁者雖所告虛妄而反坐誰人中○中恐然則追禁之旨將據本法又依臨時宜旨追勘之中若有可令三審之色猶經三審有誣告者隨即反坐是依三審之中有更悔者亦无罪法之文也又被殺被盜之類雖虛不反坐者是彼侵犯有實告言之旨相誤之謂也若故誣告者同處反坐如此則法令之旨不失其宜推類之理亦无所滯仍錄事狀謹請處分者左大匡○大匡宣奉勅依奏但記勘之法欲得其中先追前人後禁告人須任寬平七年十二月二十二日符旨行之者便宜承知依宣行之符到奉行

延長七年九月十九日

圖訟律云告小事虛而獄官因其告檢得重事及事等者若類其事則除其罪離其事則依本誣論○告小而職官因其告檢得重事○事下唐律疏議有實字者假有告人盜布檢得盜絹其價又實是爲得重事及事等者假如告盜甲家馬檢乃盜乙家牛其價相似是爲事等者類其事謂約布絹絹及馬牛等色目相類所告雖虛除其妄罪若告人私有所藏獄官因告乃檢得其類者不得爲類類者謂其形體雖異而類同非類所以得除其罪然每告人具裝離同禁兵論其形體也類全別事非疑似元狀是語如此之流不得爲類類其事者謂告人盜馬檢得緹綠之類是類其事此下唐律疏議有則依本誣論五字仍得圖告盜馬之罪此條爲依告狀檢得生文不同職官狀外求罪之例

加增告狀

〔政事要略八十四〕圖訟律云爲人作辭離加增其狀不如所告者告冊○謂爲人羅情作辭若加增罪重減

常律當禁拷反坐不可習臺事因斯言之所掌相兼執行亦多是則爲早札人犯忽決其罪也而今或使
 等論云既云○云下恐彈正事者愛知不可反坐誣告之人比年所行亦復如之者方今嫌惡之輩爲報
 私怨僞誣死犯告使所隨卽追禁犯人推鞠之間久苦禁獄遂不承伏之日僅及問告人于時所告之事
 是既虛也須依法反坐而偏稱准彈正事直從放免无更反坐因茲檢非違使之職還正事○正事二爲
 招誣之府非據行法令何以絕此亂計檢獄令云告言人罪非謀叛以上○此下令皆令三審若事有切
 害者不在此例其前人合禁告人亦禁辨定放之注云切害謂殺人賊盜逃亡若強姦良人及有急遽之
 類圖誣律云誣告人各反坐注云反坐致罪准前人入罪之法又條云被殺被盜及水火損敗者雖虛告
 不反坐斷獄律云拷囚限滿而不首者○若字據唐律疏議補反拷告人其被殺被盜家口親屬告者不反拷注云
 被水火損敗者亦同者按此等文告謀叛以上及切害者不令更三審卽禁告人前人推勘之日若誣告
 者隨卽科反坐除此以外必令三審若誣告者亦同處反坐但被殺被盜之家口親屬非故誣告不可反坐
 今使等多紕切害之事非有宜旨无理訴訟之輩仍告切害之日不令三審卽以禁推前人若有誣告者
 須依反坐而專稱准臺之詞道不坐誣告之人准檢法意理不可然望請處分自今以後若有誣告者將
 處反坐然則妄惑自絕使務亦正但无禁告人者恐告實之輩有所憚亦望若有告切害者依舊例先追
 前人後禁告人又依臨時宜旨追勘之中若有可令三審之色不更三審速以禁推若有誣告隨卽反坐
 其不可反坐之類雖有對問不更禁告人者大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傳民部卿陸奥出
 羽按察使源朝臣能有宣奉勅依奏者命○命恐誤按內年來誣告依舊濫訴猶多非行反坐何絕虛妄
 而件官符被下之後未有遵行今欲據用頗乖法意何者所司引法式之文與申請之旨相違也謹按獄
 令云告言人罪非謀叛以上者皆令三審應受辭職官司並具曉示虛得反坐之狀每審皆別日受辭官
 人於審後署記○記下令有然後推斷義解云告言人罪皆當依實若其虛妄者自得反坐故令其反覆
 前人合禁告人亦禁欲其自盡從初至三故謂之三審其未至三而有更悔者亦无罪法同條云若事有

〔續日本紀^{三十一}〕實龜二年八月辛酉毀外從五位下丹比宿禰乙女位記初乙女誣告忍坂女王、縣犬養姉女等厭魅乘輿、至是姉女罪雪故毀乙女位記。

〔續日本紀^{三十八}〕延曆四年十一月庚子能登守從五位下三國真人廣見坐誣告謀反合斬滅死一等、配佐渡國。

〔三代實錄^{十六}〕貞觀十一年十月廿六日庚戌太政官論奏曰、刑部省斷罪文云、貞觀八年、隱岐國浪人安曇福雄密告、前守正六位上越智宿禰貞厚、與新羅人同謀、反逆遣使推之、福雄所告事是誣也、至是法官覆奏、福雄應反坐斬、但貞厚知部內有殺人者、不舉訊、仍應官當者、詔斬罪宜減一等處之、遠流、自餘論之如法。

〔三代實錄^{三十八}〕元慶四年十月廿六日丙午、太政官論奏曰、安倍吉岡誣告大逆罪、當斬刑、詔減死一等處之、遠流、配佐渡國。

〔政事要略^{八十四}〕太政官符檢非違使、應依法反坐、誣告人事。

一右彼使別當中納言從三位兼行右衛門督藤原朝臣恒佐奏狀稱、太政官去寬平七年十二月廿二日、給使等符、稱檢非違使別當中納言兼行左衛門督源朝臣光奏狀、稱檢非違使式云、凡使之所掌、准彈正彈^{○彈字檢本書六十一}事、並依臨時宣旨行之、又條、諸司諸衛、及諸家官人以下、雜色以上等、若有犯過者、禁其身、經本司、又條云、盜人不論輕重、停移刑部、別當直着、馭配收所^{○收所恐}令驅使女^{○恐如官當爲收字誤}贖各依本法、自餘犯^{○普恐}從常律、臺式云、聞官司枉判及閭里犯法者、追所由人勘問、其由得實、應奏者、隨即奏、公式令奏、彈式云、親王及五位以上、有犯、應須^{○並原作}糾劾、而未審實者、並據狀勘問、不須推拷、事大者奏彈、非應奏及六位以下、並^{○並原作}糾劾、糾移所司、推判義解云、凡彈正是糾劾之職、非糾斷之官、即不限有位无位、皆不須得^{○得字}推拷者、按是等文、使等文^{○使等文}三、字恐衍、使等所掌、非管准彈正之事、兼行追禁推拷之法、然則至^{○補字}准彈正、須自見及風聞、即糾彈其犯、但不可禁拷反坐、於從

人入罪之法、至死而前、前人原作能字、今據唐律改、雖斷訖、未決者、反坐之人、聽減一等、若國人反逆、雖復未決、引違不合、減罪、其本應加杖及贖者、止依杖贖法、即誣官人及有監者、依常律、若告二罪以上、重事實及數事等、但一事實除其罪、重事處反其所剩、即罪至所止者、所誣雖多不反坐、其告二人以上、雖實者多、猶以虛者反坐、謂告二人以上、但一人不實、罪雖輕、反其重、若上表告人、已經聞奏、事有不實、反坐、罪輕者、從上書詐不實論、

〔法曹至要抄上科〕一反坐事

名例律云、稱反坐及罪之坐之、與同罪者止坐其罪者、並不在除免、倍贖加投流之例、

案之、誣告人者、以其罪可反坐者、前人拷滿不首、亦可反坐者、可依聽贖并加杖之法、若官人雖告白、丁於除免罪告者、還不可得除免、倘依常律可減贖、凡本條稱反坐罪之坐之、與同罪之類、不在除免加投流之例、亦無倍贖、又假令彈正臺斷人有私、不以實者、亦可反坐之類也、

〔唐律疏議六〕諸稱反坐及罪之坐之、與同罪者止坐其罪者、已止

疏議曰、稱反坐者、圖惡律云、誣告人者、各反坐及罪之者、依例云、自首不實不盡、以不實不盡之罪、罪之坐之者、依例、

〔政事要略八十四〕圖惡律云、誣告人流罪以下、前人未加拷掠、而告人引虛者、減一等、誣告死刑、未決、即經拷掠、無問杖數多少、全移反坐、文官拷掠、為有損傷者、未經拷掠、雖斷訖、亦依減科、流罪以下、死罪以下、原書為本文、今據唐律改、事經奏訖者、則不減、若已經計與拷掠、不釋亦非、減限、即拷證人亦是、雖不拷、被告之人、再誘證之、其誣告二等、尊長外祖父母、夫之祖父母及家人奴婢、誣告主之二等、親外祖父母者、雖引虛、各不減、

〔續日本紀九〕元正、養老六年正月壬戌、正四位上多治比真人三宅麻呂坐、誣告謀反、○中處斬刑、而依皇太子奏、降死一等、配流三宅麻呂於伊豆島、

〔唐律疏議二十三〕諸誣告謀反及大逆者、斬、從者絞、若事害不審、原情非誣者、上請、若告謀大逆、謀叛不審者、亦如之、

宮御宇橘豐日天皇明皇子久米王之後也天平十八年授從五位下寶字八年任少納言授正五位

下于時高野天皇遣山村王收中宮院鈴印大師押勝○仲遣兵邀而奪之山村王密告消息遂果君命

天皇嘉之授從三位薨時年四十六

〔續日本紀三十〕寶龜元年八月壬子是日授從四位上坂上大忌寸勘田麻呂正四位下以告道鏡法師

姦計也

〔續日本紀三十三〕寶龜六年五月己酉從四位上陰陽頭兼安藝守大津連大浦卒大浦者世習陰陽仲

滿甚信之間以事之吉凶大浦知其指意涉於逆謀恐禍及己密告其事居未幾仲滿果反其年授從四

位上賜姓宿禰拜兵部大輔兼美作守

〔續日本後紀十三〕承和十年十二月丙子散位從五位上文室朝臣宮田麻呂之從者陽侯氏雄告宮田

麻呂將謀反戊寅禁告者氏雄于左近衛府發未告者陽侯氏雄特授大初位下任筑前權少且以

所告有端也

〔三代實錄十八〕貞觀十二年十一月十三日辛酉筑後權史生正七位上佐伯宿禰直繼奉進新羅國牒

即告太宰少貳從五位下藤原朝臣元利萬侶與新羅國王通謀欲害國家禁直繼身付檢非違使十

七日乙丑勅太宰府追禁少貳藤原朝臣元利萬侶前主工王○主工王一本主土上一家人浪人清原崇繼中臣年

麻呂與世有年等五人以從五位下行大內記安倍朝臣興行爲遣太宰府推問密告使判官一人主典

一人

〔日本紀略十一〕長德二年十一月十一日丁丑今日依密告前帥○藤原入京之由有叙位從五位上平

下平

〔政事要略八十四〕關詔律云誣告人各反坐凡人有嫌遂相誣告者即糾彈之官挾私彈事不實者亦如

之反坐致罪准前人入罪之法至死而前人未決者聽減一等謂有憎惡前人或謂誣告或挾私誣告

誣告

其犯死罪囚及配流人告密者並不在送限。謂依律囚告密者禁身領送即知謀無以上得告餘即不應須檢校及奏聞者准前例奏聞等類皆准上文放云准前例

〔金玉掌抄〕一八虐罪事

一曰謀反。○中緣坐人知反情圖設律云知謀反大逆不告隨近官司被

〔唐律疏議二十三〕諸知謀反及大逆者密告隨近官司不告者絞知謀大逆謀叛不告者流二千里知指斥乘輿及妖言不告者各減本罪五等官司承告不即掩捕經半日者各與不告罪同若事須經略而違時限者不坐

〔北山抄拾遺雜抄〕貶退事

密告之人進其告狀先閉諸陳左衛門陳諸衛佐等候殿上之者服布衣帶狩胡簪若有禁固之人左右大辨就左衛門射場勘問令進過狀之後任法行之除目例等見記文也告人追○追原作還賜賞二以檢非違使佐令退出洛外以左右衛門尉據事者令送配所昌黎例檢非撰日告諸社又告諸陵

〔懷風藻〕河島皇子一首

皇子者淡海帝○天之第二子也志懷溫裕局量弘雅始與大津皇子為莫逆之契及津謀逆島則告變朝廷嘉其忠正朋友薄其才情議者未詳厚薄然余以為忘私好而奉公者忠臣之雅事背君親而厚交者悖德之流耳但未盡爭友之益而陷其塗炭者余亦疑之位終于淨大參時年卅五

〔續日本紀二〕天平寶字元年七月辛亥授從四位上山背王巨勢朝臣堺麻呂並從三位從八位上上道臣妻太都從四位下正七位下縣犬養宿禰佐美麻呂從八位上佐味朝臣宮守並從五位下並是告

密人也又上道臣妻太都賜姓朝臣

〔續日本紀二〕神護景雲元年七月丁巳初近衛從八位下物部藏浪寶字八年仲滿春鈴印時疾走告急至是授外從五位下十一月癸亥參議從三位治部卿兼左兵衛督大和守山村王薨池邊雙槻

成不憚朝制擅養鷹鶴遂令當郡少領尾張宿衛宮守六齋之日疊於寺林因奏鷹進勅須有違犯先言其狀而凌慢國吏輒奪其鷹宜特決杖解却其任

〔政事要略八十四〕勘申甲告言乙未定可召迺告狀問乙亦告申甲收其告狀同共召問否之由事

右被別當宜倘甲告言乙使等未定可召之由迺見告狀之間乙又告申甲依告狀先後亦召問乙乎爲當收乙告狀同共可召問甲乙哉宜勘申其由者謹檢圖詔律云被囚禁○因禁二字不得告舉他事說

者云被囚禁者斷罪之間也不得告舉他事者被禁日始至子役畢決畢不得告舉夫○天字下本書下文作天下人民犯狀者據檢此文被囚禁不可告他事然則未禁之間可無其制方今甲告言乙使等未定

可召之由迺見告狀之間乙告申甲既是非被禁之乙依律論之收其告狀同共召問可無妨難仍勘申

延喜廿二年九月一日

在宗家勘草

告密

〔令義解〕凡告密人皆經當處長官告謂密者謀叛以上依律律謀反逆叛等事而妄言有密故其

也長官有事經次官告謂若無次官若長官次官俱有密者國相知者所在國司准狀收掩也任經比界

論告受告官司准法示語謂准三節之法示語處得反坐之狀但事知意切欲不延時日故立即示語至

密而妄言謂之律也非確言有實即禁身據狀檢按而論檢按若須掩捕者即掩捕人兵如此經略多須待

一日者各與不告即同若事須經略而進時限者不也掩捕經與餘國相知者所在國司准狀收掩

亡告云云若力不告制者謂事當謀叛以上雖檢按仍馳驛奏聞之狀其承告之處依捕亡令唯奏聞發兵

也指斥乘輿及妖言惑衆者檢按訖總奏謂依律指斥乘輿與情理切害承告掩捕者若無別狀不須別奏

更別奏若得謀大逆者仍合別奏之類也其有雖稱告密示語確不肯導謂直云是密不吐事狀即依

云事須面奏者受告官司更分明示語謂先已三分後亦三分示乃過恒例也虛得無密反坐之罪謂無密

非密而妄言有密是也反坐者又不肯導事狀者禁身馳驛奏聞餘狀奏聞也若直稱是謀叛以上不吐

事狀者謂雖是謀叛以上而不導給釋差使都領送京若勘問不導事狀因失事體者與知而不告同

右云々仍謹請官裁

以前云々謹請官裁謹解

承和元年十一月五日

承和二年五月廿九日一審

右少辨藤原朝臣當道

同年六月二日二審

右少辨藤原朝臣當道

同年六月四日三審

判右中辨藤原副宗

已上三審例

左少史坂本鷹野

左少史坂本鷹野

左少史坂本臣鷹野

辨官記云、訴人進訴狀者、先由國郡司本司本屬、不理之由、愷加勘問、若日記在別紙從返却、判訴人申第一審例、其國其郡百姓其姓名申、久所愁申事、无所可悔申、辨命之、云命之恐命、某九訴人稱唯命之若遣使勘問、給半一事有誤違者、任法勘給、半宣訴人、余等恐稱唯退出、登時聽審之官判署曰、記申第二第三審判之候之、凡在廳坐、非公事不言語、縱雖公事、不得高聲、先後咳嗽、廳上有失禮、與靴爲聲、

〔政事要略八十四〕關訟律云、告人罪、皆須明注年月、指陳實事、不得稱疑、○中違者笞卅、但違一事、即若

此即官司受而爲理者、減所告罪一等、若官司若受疑辭爲推、並推所告之狀、減罪一等、即以受辭者爲首、唐律、即被殺被盜及水火損敗者、亦不得稱疑、雖虛皆不反坐、被殺被盜爲害特甚、或疑人決、水縱火、源疑者、皆須明注年月、不得稱疑、推問雖虛、不反坐、若稱疑者、官司亦不合受理、官司並得免科、

〔日本後紀八〕延暦十八年五月己巳、尾張國海部郡主政外從八位上刑部梗虫言、權掾阿保朝臣廣

弘仁十年十一月十一日

一審

讀申右少史媛女副雄

右中辨大伴宿禰國道

少辨藤原朝臣村田

弘仁十三年七月廿二日

二審

記右少史媛女副雄

右少辨藤原朝臣村田

同月廿五日

三審

記右少史媛女副雄

右中辨大伴宿禰國道

少辨藤原朝臣村田

同月廿六日

〔政事要略八十四〕佐渡國三郡百姓等謹解申請官裁患狀事

合若干條

一守嗣根○下文作「嗣根」爲求餘利捨舊館而更造新館之狀

右云々仍謹請官裁

一守副根獨貪○演上恐山澤之利之狀

告訴處分

得ズ、又年八十以上、十歳以下、及ビ篤疾ノ者ハ、反逆等ノ外ハ亦告グルヲ得ザルナリ、
又己ノ名ヲ隱匿シ、若シクハ人ノ姓字ヲ假リ、潛ニ之ヲ街衢ニ棄テ、或ハ之ヲ街衢ニ置クア
リ、之ヲ匿名書ト云ヒ、又ハ落書ト云フ法律上ニ禁ズル所ニシテ、其書ヲ得ル者ハ即チ之ヲ
焚クヲ以テ法ト爲シ之ヲ以テ官司ニ送リ、及ビ官司ノ受理スルトキハ、俱ニ罪アリ、
人罪ニハ、舉劾セザルヲ得ザルモノアリ、監臨主司ニシテ、所部ニ犯法ノ人アルヲ知レルガ
如キ、同伍部内ニ犯罪ノ人アルヲ知レルガ如キ是ナリ、

〔令義解〕凡告言人罪、非謀叛以上者、皆令三審。謂凡告言人罪、皆當依實、若其虛妄者、自得反坐、故今有罪誣者、亦應受辭牒官司上是也。並具曉示、虛得反坐之狀、每審皆別日。謂可以一文、隱告言、不日、告、受辭官司人、同牒後、別日、署記也。受辭官司人、於審後、署記審訖、然後推斷、若事有切害者、不在此例、切害

謂殺、人、賊、盜、逃亡、不問賊者、劫囚之類、其殺人者、不論先後、盜及逃亡者、若強奸、罵人、及有急遽之類、謂假決堤坊、及欲放火、以機、彈、人、家之類、事情急遽、應追捕者、皆是、凡此二事、欲其未行之前、以時、助退、故爲急遽、若其已燃之後、不須更復爲切害、應即已行、而餘捕獲、淫、騙、壓、辱、害者、亦爲急遽也、其前人合禁告人、亦禁、謂伍告者、無心、陷人罪、唯告事發、狀故、不在禁例、辨定放之、

〔唐六典〕利六、凡告言人罪、非謀叛以上者、皆三審之、

應受辭牒官司、並具曉示、虛得反坐之狀、每審皆別日、受辭、若有事切害者、不在此例、

〔政事要略〕八十四、伊賀國百姓解申進難愁文事、外題云、右大臣奏、左大史、住吉氏繼、三月十三日、

合若干條

一、高年民賑給類、平給氏、即折留之、民到致字、候愁狀、

右云々望請官裁

一、官○官下器仗修理料遣不給愁狀、

右云々望請官裁

古事類苑

法律部十四

上編

告訴

人ノ罪ヲ告言スルニハ、明ニ年月ヲ注シ、所犯ノ實狀ヲ指陳スルコトニテ、疑辭ヲ用キルヲ得ズ、若シ其事ノ誣告ニ出ヅレバ、反坐セラル、反坐トハ被告ノ受クベキ刑ヲ、告人ニ加フルヲ云フ、故ニ辭牒ヲ受クベキ官司ハ、初ニ虛妄ナラバ反坐スベキ狀ヲ曉示シ、而シテ後ニ三審ス、若シ審スルコト未ダ三ニ至ラズシテ、訴人自ラ其非ヲ曉リ、悔イ改ムルトキハ、反逆ノ外ハ罪セズ、然レドモ被殺被盜、逃亡、犯姦ノ如キ、已ニ切害ナルモノハ、其訴ノ過誤ニ出ヅルモ反坐セズ、而シテ被告人ノ囚禁セラルベキ時ハ、告人モ先ヅ囚禁セラル、ナリ、

誣告反坐ニハ、比徒、比笞ノ法アリ、平人ニシテ官人ノ除名、免官、免所居官ニ當ル罪、及ビ僧尼ノ還俗、苦使ニ當ル罪ヲ誣告スル時ハ、之ヲ用キル、卽チ此等ノ刑ハ平人ニハ加フルヲ得ザレバ、杖笞ノ刑ニ比シテ處斷スルナリ、

人罪ヲ告言スルニ、最モ重キモノヲ告密トス、密トハ謀叛以上ヲ云ヒテ、乘輿ヲ指斥シ、妖言ヲ以テ衆ヲ惑ハスモ、亦密ノ例トス、此告人モ亦其身ヲ禁固シテ後ニ勘問シ、更ニ罪人ヲ掩捕スルナリ、

人罪ニハ、訴フベカラザルモノアリ、三等以上ノ親ノ罪ハ、容隱スルコトヲ得ル法ナレバ、祖父母、父母ノ罪ハ、訴フルコトヲ得ズ、又囚人ハ獄官ノ己ヲ慮スル時ノ外ハ、人罪ヲ告グルヲ

自首處分

五八九

自首例

五九二

○

覺舉

五九二

古事類苑

法律部十四

上編

告訴

告訴處分

五七〇

告密

五七三

誣告

五七五

加增告狀

五七九

教人告

五八〇

比徒比管

同

告親屬

五八一

囚人告訴

同

告赦前事

五八二

投匿名書

同

推問密告使

五八六

不舉劾

同

自首

覺舉
研入

（The main body of the page contains extremely faint, illegible vertical text columns, likely bleed-through from the reverse side of the paper. The text is organized into approximately 15-20 columns, typical of traditional Chinese legal or historical documents. Due to the low contrast and fading, the specific characters and their meaning cannot be transcribed accurately.)

勅裁

權右中辨藤原朝臣在判

〔愚管抄四〕さて又當時三〇後氏三の長者にては、大二條殿〇藤原〇おはし召けるに、延久の比、氏寺領國

司と相論の事有けるに、大事に及て御前にて定めありけるに、國司申かたに裁許あらんと云

ければ、長者の身、面目をうしなふ上に、神慮又はかりがたし、たゞ壅斷を仰べし、伏て神の告をま

つとて、すなはち座を立れにけり、藤氏の公卿舌をまき口をこちてけり、其後山科寺に、もとの如

く裁許有ければ、衆徒さらに又長講初めて國家の御祈しけりと、親經と申中納言、儒卿にてこそ

さいがくの者にて語りけれ、

滯訟

〔中右記〕永久六年〇元永正月十五日戊戌、參院〇白候院北面間、依仰參御前、密々被仰云、大神宮神

人等訴申違江國司事不裁決、及數月甚恐思之、由可云關白也、如此事恐其咎及高仍只任理可決斷

者、申承之由退出、

不理訟

〔續日本紀十二〕天平七年九月庚辰、先是美作守從五位下阿倍朝臣帶麻呂等故殺四人、其族人詣官

申訴、而右大辨正四位下大伴宿禰道足、中辨正五位下高橋朝臣安麻呂、少辨從五位上縣犬養宿禰

石次、大史正六位下葛井連諸會、從六位下板茂連安麻呂、少史正七位下志貴連廣田等、六人坐不理

訴人事、於是下所司科斷、承伏既訖、有詔並宥之、

嫡不行

○行恐所字誤

分者縱兼

○兼下恐脫政字

所分雖有其實於兼俊領非歟

○歟取字誤

返限歟能可被操

○操字誤

也左兵衛督右衛門督

○源雅定民部卿忠教

同右宰相中將

新大納言同下官內大臣

○源有仁

申云大略同

右宰相中將定申但件盛範之所進兼政契狀且諸卿可一覽也兼政之所爲不落居上

○取子所領恐返事也

手跡

已他筆草名也又相違其旨已顯然也者盛範結構已以顯然也先於兼俊自領兼長領知可不有其妨

歟此後遞證文等比較處其名已相違人々雖被稱其由於下官不令申左右明法定勘申歟未書定文

先以左兵衛督申所勞由於內府退出

〔久志本常辰反故集記〕左辨官下伊勢大神宮

應任本領主散位源朝臣義國起請并源義清陳狀以權禰宜荒木田神主範明如元爲口入神主二

所大神宮御領下野國築田御厨事

右得彼範明去平治元年十二月九日陳狀稱今月七日宣旨同九日到來稱去月十一日義清陳狀稱

今月三日宣旨同日到來稱得範明去十月九日解狀稱件御厨義國雖有領知之理故利光神主同意

家綱不承引之間義國致訴訟經年序之間以親父元定神主永相傳于子孫可爲口入人之由依令起

請以件起請上分口入料之由元定又分與外宮一禰宜故產忠神主之由起請畢以義國之寄文請聽

判元定今渡與義國其後義國經院奏之刻論人利光同以言上聞食兩方之理非義國得理畢仍任起

請元定備進二宮御上分之間義國卒去義康相傳御厨元定又卒去凡所預置于範明文書等舍兄氏

定盜取之間彼御厨沙汰文書掠取畢以件文書可致橫妨由依令風聞相觸子細於義康之處且任義

國之起請御厨上分口入料敢無相違範明所致沙汰也

○中略

權中納言藤原朝臣雅教宣奉勅宣任本領主義國起請并義清陳狀以範明如元爲口入神主者宮宜

承知依宣行之

永曆二年五月一日

大史小槻宿禰 在判

外已後爲法內自茲已後諸訴訟者內決已事不敢公庭

〔中右記〕大治二年六月十六日左少弁實親右大史中原兼孝於一本御書所問注彌勒寺講師寬嚴并散位國兼是依字佐大官司并鎮西受領訴也

〔長秋記〕長承元年五月十五日甲戌大臣仰官人召取文云次第申之乘燭大弁開文讀之略中

一進士盛範與兼長相論所領三箇所

兼長解云件論地三ヶ所中於二所親父兼俊始所買得也於今一所祖兼政所讓父兼和和字誤也隨

以件三ヶ所兼俊所分兼長次第公驗顯然也而伯父盛範兼俊兼政死去後構謀書欲妨件領三ヶ所

其所進文書狀云嫡子兼俊不慮外死去須令嫡孫領知嫡子分也然而孫兼長心操不落居者立二男

盛範爲嫡子可令行所分者件文非兼政手跡非兼政草名何讓時書自筆改時用他筆又件改易又

字誤兼政病期書自筆更有何煩哉又改所分而取返中已有兼俊私領二所於件所不叶返取文者範

口作盛範解狀云兼政已以盛範立嫡可行所分之由契狀顯然也付彼契狀盛範可行所分者明法勘

申云付財主兼政契狀盛範可行所分但所被下勘證文遞案書也給正文可勘見者件文於御前御覽

合處其文無相違仍重不可被下勘由頭弁源云上卿院宜云々右宰相中將定申云如法家勘申被

下正文重勘狀後可被裁許歟左大弁實光申云被下正文事同右宰相中將定申但件所領中兼俊

之所儲相交由前年所定申關白殿藤原也者兼長所申有其實隨尋問彼是依實可被裁許歟右兵

衛督顯類同右宰相中將左宰相中將宗能申云盛範所進證文其疑尤多一以嫡子私儲所領取

返由載契狀一改契狀時於兼政無所勞而借他筆令書條非無疑一盛範之所進公驗二通中其草名

相違如此疑殆端多者被下正文可被勘也改所改分事證署灼然時議也件證文多其疑何忽一決

哉中宮權大夫忠宗申云返取以恐以兼俊私領分地子條雖祖兼政所爲尙爲孫訴也其由儘可被

相尋於文書重可被下勘歟下官師申云同中宮權大夫父祖所行於子孫雖不可違兼政之契狀立

聽訟法

延喜十四年四月廿八日從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事

〔令義解〕

凡察獄之官先備五聽謂五聽者一曰辭聽觀其出言不直則煩二曰色聽觀其顏色不直則

曰目聽觀其眸子又驗諸證信事狀疑似猶不首實者然後拷掠

〔唐六典〕凡察獄之官先備五聽

一曰辭聽二曰色聽三曰氣聽四曰耳聽五曰目聽

〔周禮註疏〕三十小司寇之職掌外朝之政以致萬民而詢焉

○中以五聲聽獄訟求民情疏以五至

惟聽有五事惟辭聽一是聲而以五聲日之名四事雖不是聲亦以聲爲本故也案呂利云一曰辭聽

註觀其出言不直則煩疏註觀其至則煩釋曰直則言要理二曰色聽註觀其顏色不直則煩

疏註觀其至則煩釋曰直則言要理二曰色聽註觀其顏色不直則煩

疏註觀其至則煩釋曰直則言要理二曰色聽註觀其顏色不直則煩

疏註觀其至則煩釋曰直則言要理二曰色聽註觀其顏色不直則煩

疏註觀其至則煩釋曰直則言要理二曰色聽註觀其顏色不直則煩

疏註觀其至則煩釋曰直則言要理二曰色聽註觀其顏色不直則煩

疏註觀其至則煩釋曰直則言要理二曰色聽註觀其顏色不直則煩

疏註觀其至則煩釋曰直則言要理二曰色聽註觀其顏色不直則煩

疏註觀其至則煩釋曰直則言要理二曰色聽註觀其顏色不直則煩

疏註觀其至則煩釋曰直則言要理二曰色聽註觀其顏色不直則煩

疏註觀其至則煩釋曰直則言要理二曰色聽註觀其顏色不直則煩

疏註觀其至則煩釋曰直則言要理二曰色聽註觀其顏色不直則煩

疏註觀其至則煩釋曰直則言要理二曰色聽註觀其顏色不直則煩

疏註觀其至則煩釋曰直則言要理二曰色聽註觀其顏色不直則煩

一請停止依諸國小吏并百姓告言訴訟差遣朝使事

右臣伏以牧宰者分萬乘之憂受一方之寄守六條之紀綱爲兆民之領袖故漢宣帝云與朕共理者其唯良二千石乎必須擇用其才尊崇其職重官威而厭民心捨小瑕而責大成而比年任用之吏或結私怨以誣告官長所部之民或矯公事以怨訴國宰或陳犯用官物之狀或訴政理違法之由此等條類千緒萬端於是朝家收其告狀發遣使人使人到國未問事之虛實不辦理之是非偏依使或每事准擬傾其印鑑嚴其禁錮即以官長之貴與小吏賤民比肩連口受其推鞠若辭對之間纖芥有違則立加縲繼便填牢拷若亦雖告訴之旨事皆不實而威權已廢政令不行爰隣境百姓轉相見聞即各輕侮其官長不肯服從其政致傷化之源無甚於此況亦理劇之任庶務多端曉夕僣倦猶有不遑而今朝使推問之間被停釐務多歷旬月空廢治政縱雖免賊吏之名而猶成任中之意秩滿之日遂拘解由如此則多致公損徒滅良吏助此訴人報彼私怨也前年阿波守橘秘樹肅清所部底慎貢勤王之誠當時第一必須殊加獎擢以勵俊良而依小民之誣告降朝使之廉問雖事皆虛詐告人逃亡已而秘樹之身亦爲廢人如此則知耻之士誰冀爲吏乎方今時代澆季公事難濟故國宰之治不能事々拘牽正法故或有枉尺而直尋者或有失始而全終者昔者龔遂爲渤海守奏曰請勅丞相御史且勿拘臣以文法令得便宜從事又本朝格云國宰反經制宜動不爲己者將從寬恕無拘文法者伏望此等告言訴訟除謀反大逆之外一切停止朝使專附新司若實有犯過者具載不與解由狀勘判之後卽下刑官論其罪科或難云凡厥貪吏之盜官物宜速加糾察也若待其任終恐倉庫無餘答云假令有人告申吏盜賊愛太政官卽馳輕騎晝夜兼行禁遏其姦者事若可爾而今訴人告狀歷三審之程得奏下之比擇定使人之間裝束行程之限事自彌留度歷年紀其間若有心盜犯者豈遑遺一粒乎然則與彼附後司有何分別況此牧宰等身出帝簡志報朝恩非唯求立績於明時亦皆念垂名於後代者也故比年陷此罪者皆爲公謀功未成之間俄被告言而已未會有自犯入己之人焉靜尋其意誠是公罪也伏望覽寰天施照其可否○中

帥一人掌略○中縣訟略○中大判事一人掌案覆犯狀○謂案覆管國所申犯狀也○斷定刑名判請爭訟○少判事一人掌問

大判事大令史一人掌抄寫判文○少令史一人掌同大令史

〔令義解職一見〕大國

守一人掌略○中縣訟

〔職原抄下〕檢非違使

此云使廳本所乃叙負廳淳和天皇御宇天長年中初置之略○中朝家置此職以來衛府追捕彈正糾彈

刑部判斷京職訴訟併歸使廳仍爲國家之樞機歷代以爲重職者也

〔文德實錄七〕齊衡二年閏四月丙午太宰府馳驛言日向守從五位下嗣峯王發兵將殺推訴○刊本作

國史改使正五位下田口朝臣房富有司奏謝詔免官爵

〔類聚三代格七〕太政官符

定詔使官使事

右頃年之間爲推民訴遣使四方或國司等對捍使者不承勸問捍侮之辭觸類多端遂乃使旨不展徒

然引歸冤屈之民累年懷愁路次之驛空疲迎送稍尋其由緣無使威詔使臨界豈如此乎左大臣宣奉

勅度時立制古今攸貴宜定使色以肅將來其巡察覆問○問政事要略作因檢稅交替畿內校班田間民苦并訴

等使並准詔使之例賑給檢損田池溝疫死等使猶爲官使但遣使之旨出於勅語卽是等所謂詔使而

已不可更限事之輕重

天長二年五月十日

〔三代實錄二〕貞觀元年三月四日庚申遣左衛門少尉正六位下紀朝臣今影右衛門大志從六位上

櫻井田部連貞雄麻呂於河內和泉兩國辨決陶山之爭

〔本朝文粹二〕意見十二箇條

善相公清行

推訴使

聽訟

上古ノ訴訟ハ、刑部省并ニ左右京職、攝津職、及ビ國司等ニテ之ヲ聽ク例ナリ、後檢非違使廳ニテモ、亦之ヲ聽ケリ、而シテ當時聽訟ハ、最モ慎重ヲ尙ビ、五聽ノ法等アリキ、猶ホ訴訟ノ條ト參照スベシ、

聽訟官衛及吏員

〔倭名類聚抄五〕刑部省字多倍佐須都加佐

〔令義解一〕刑部省管司二

卿一人、掌勅、獄定、刑名、謂覆審解部所判、與判事以上共斷定也、依獄令、在京諸司事發者、犯徒以上、遂連寫案、申太政官、然則死、決、疑、獄、謂獄精也、正也、依同令、國有、真、賊、名、籍、謂真、賊、賊、訴、其、判、因、禁、債、實、以下皆以上皆合、推斷也、疑獄、不決者、獻刑部省、是也、謂其、斷、審、是、爲、名、籍、也、六賦之類、及諸合、沒宣者、此皆掌事、大輔一人、少輔一人、大丞二人、少丞二人、大錄一人、少錄二人、史生十人、大判事二人、掌案、覆勅狀、斷定、刑名、判諸爭訟、中判事四人、掌同、大判事、少判事四人、掌同、中判事、大屬二人、掌抄寫、疑判文、謂唯爲抄寫、別注、其餘檢、出、稍、失、等、者、一、准、神、祇、史、少、屬、二、人、掌、同、大、屬、大、解、部、十、人、掌、同、府、爭、訟、中、解部廿人、掌同、大解部、少解部卅人、掌同、中解部、省掌二人、使部八十人、直丁六人、

〔令義解一〕治部省

大解部四人、掌鞠問、諸第爭訟、謂窮問諸第之爭訟、定其族姓也、次、少解部六人、掌同、大解部、序、其、解、部、是、爲、別、司、不、在、同、員、也、

〔令義解一〕左京職此、管、同、一、

大夫一人、掌略中、訴訟、謂凡、訴訟者、皆自下始、故、先、由、京、國、而、後、至、官、省、也、

〔令義解一〕攝津職帶、津、國、

大夫一人、掌略中、訴訟、

〔令義解一〕太宰府帶、筑前國

〔台記〕久安三年七月四日丙寅頭弁持來史注進感神院濫訴文。仰曰今日廢務明日可奏。弁曰廢務日無憚奏文。廢朝憚之余。藤原長賴曰廢務奏文未曾聞事也。猶明日可奏。弁出。後日責問廢務奏文之證。弁無所陳。或人語云。史具注感神院事。持向頭弁。資信朝臣許。頭弁曰。如此注文者。忠盛朝臣罪過尤重。卽令書改。道感神院所司等所司等不知書改。加判返上云々。

〔源平盛衰記〕^四豪雲僉議事

抑豪雲ト云ハ、二品中務親王具平七代ノ孫、民部大輔憲政ガ子也ケリ、訴訟ノ事有テ後、白河法皇ノ御所ニ參ス、折節法皇南殿ニ出御有テ御坐ス、イカナル僧ゾト御尋アリ、山僧攝津暨者豪雲ト申者ニテ侍ト奏シタリ、法皇被仰下ケルハ、實ヤ和僧ハ山門僉議者ト聞召己ガ山門講堂ノ庭ニテ僉議スルラン様ニ、只今申セ、訴訟アラバ直ニ可被裁許ト、豪雲蒙勅定、頭ヲ地ニ傾畏テ奏シケルハ、山門ノ僉議ト申事ハ異ナル様ニ侍、歌詠スル音ニモアラズ、經論ヲ說音ニモ非又指向言談スル體ヲモハナレタリ、先王ノ舞ヲ舞ナルニハ、面模ノ下ニテ鼻ヲニハムル事ニ侍也、三塔ノ僉議ト申事ハ、大講堂ノ庭ニ三千人ノ衆徒會合シテ、破タル袈裟ニテ頭ヲ裹、入堂杖トテ三尺許ナル杖ヲ面々ニ突、道芝ノ露打拂、小石一ツ、持、其石ニ尻懸居並ルニ、弟子ニモ同宿ニモ聞シラレヌ様ニモテナシ、鼻ヲ押ヘ、聲ヲ替テ、蒲山ノ大衆立廻ラレヨヤト申テ、訴訟ノ趣ヲ僉議仕ニ可然ヲバ尤々ト同ズ、不可然ヲバ、此條無謂ト申、假令勅定ナレバトテ、ヒタ頭直面ニテハ爭カ僉議仕ベキト申上ケレバ、法皇先興ニ入セ給、早々罷歸テ、山門ニテ僉議スルラン様ニ出立テ、急參テ僉議仕レト被仰下、豪雲宿坊ニ歸、同宿共ニハ袈裟ニテ裹頭、童部ニハ直垂ノ袖ニテ頭裹セテ、三十餘人引具シテ、御前ノ雨打ノ石ニ尻係テ並居タリ、豪雲己ガ鼻ヲ押テ、大衆立廻ラレヨヤト云テ、我訴訟ノ趣ヲ事ノ始ヨリ終マデ、一時ガ程コソ申タレ、同宿共衆テ存知ノ事ナレバ尤々ト訴訟其謂アリ、道理顯然也、早可被經奏聞、聖代明時之政化、爭カ無御裁許哉ト申タリケレバ、法皇御興有テ、則被仰付タリケルトカヤ、

○按ズルニ、山門僧徒ノ訴訟ニハ、多クハ日吉祇園等ノ神興ヲ奉ジテ、毎ニ朝旨ニ抗セリ、故ニ白河天皇モ、賀茂川ノ水雙六ノ簞、山法師是ゾ朕ガ心ニ隨ハヌ者ト御歎息アリシナリ、豪雲ノ訴訟ハ以テ其一斑ヲ知ルニ足ル、故ニ錄シテ參照トス、

公卿怖畏右大臣并時光俊賢等退出之間、於櫛笥少道、鳩飛渡上達部首上、於宇佐神人宿所左近府南門間失疑是大菩薩御變現、歟俊賢卿獨定申不可、遣推問使之由、人々尤爲奇、十二月廿八日、太宰權帥平惟仲、勤罪名停任、依宇佐宮訴也、

〔日本紀略後一條〕長元元年十月十三日甲戌、金峯山僧百餘口、參陽明門院、恐行院訴申大和守保昌苛法之由、

〔百練抄五〕嘉保二年十月廿四日、天台衆徒爲訴申美濃守義綱殺害山僧事、相具神與參陣之間、中務丞賴經相禦之射殺神人大衆、件事依爲赦前犯不被裁許、十一月、山僧行五壇法、奉呪詛國家之輩、注進交名并日吉神與、可奉迎取本社之由宣下之、

〔源平盛衰記四〕加賀國溫河燒失事

同帝河○堀、御宇嘉保二年ニ伊豫入道源賴義ガ子ニ美濃守義綱朝臣、當國ノ新立ノ庄ヲ倒シケル故ニ事出來テ、山門久住者圓應被殺害ケリ、此事訴申サシ爲ニ同十月廿四日山門衆徒社司寺官等ヲ以、捧解狀三十餘人下洛之由風聞アリ、武士ヲ川原ヘ被差向テ禦ケレ共、押破テ陣頭ヘ參ル、中○大衆ハ、神明モ力ヲ合給ニコソトテ、離山ヲ止テ、七社ノ神與ヲ莊奉テ、根本中堂振上奉リ、關白殿ヲ呪詛シケルコソ恐ロシケレ、神與ノ御動座是ゾ始也ケル、

〔百練抄五〕寛治七年八月廿六日、興福寺大衆、學春日神民集會勸學院、捧鋒神木隨身鏡鈴、神人所持之鏡於案上放光耀、自然鳴動、本宮御笠山上同時有光耀云々、是依訴申近江守爲家朝臣凌礫神民事也、是日左大臣後房○源、內大臣藤原○藤原、已下殿上人諸大夫等多參關白殿下、藤原○藤原、被申事之由於院、

院河○白、廿七日、內大臣已下參著仗座、被定近江守高階爲家朝臣罪名事、依春日神民訴申事歟、廿八日、內大臣以下參入、被行爲家朝臣罪名事、除名配流土佐國、又緣座輩或解却見任、或贖銅大衆等蒙裁許歸去、

與神解小路邊宇佐宮下部月來訴人也作他人就取申文一人著衣冠進寄御與右方舉音致訴訟之間希有之事也而右將等不追却不覺者等也予令追却了須搦捕也然而行幸新所之間左右有憚之故不令搦也事尤非常也先蒙罪歟又右將等不追却事重可被勘仰也尤有其恐也返々不便事也關白今夜被問仰此由予具申進子細命云非常々々又非常也右將等極愚者也予高名無極云々

〔春記〕長曆四年

○長久元年

十二月廿五日丙午平野行幸日也

○中略

今夕還御間於東洞院二條邊和泉國

百姓捧文舉音成愁訴此日者有此愁也自有陳所參進也行經不令追却如何此事及度々猶可被召禁也定爲弑攘歟可忍

〔玉勝間〕六天皇の御前に直に訴を申せし事

いともかしこき御前にたゞにうたへごと申せるはいとめづらし長曆は後朱雀天皇の御世也春記は春宮大夫資房卿の日記也

〔公教公記〕保延七年正月十九日己未先是參鳥羽之間於大宮七條坊門程自院羽

○鳥羽

有御消息善白

之輩有數十人泉國被見了處時信奉書云和泉國召次申文遣之列參御物詣道雖令訴申還御之時可有御沙汰之由被仰候了而昨日所參洛也伴召次等遣之召問子細任法早可令沙汰給候歟依御氣色上啓

如件者

〔唐律疏議〕

二十四

諸違車駕及隨登聞鼓若上表以身事自理訴而不實者杖八十

即故增誠情狀有

上書詐不實

論○疏議略自毀傷者杖一百雖得實而自毀傷者笞五十即親屬相爲訴者與自訴同

〔日本書紀〕

二十九

十年五月己卯詔曰凡百寮諸人恭敬宮人過之甚也或詣其門謁己之訟或捧幣以

媚於其家自今以後若有如此者隨事共罪之

〔百練抄〕

一覽

寛弘元年三月廿四日宇佐宮神人五百餘人參陽明門外訴太宰帥惟仲事去年十一月

離岸之後六箇日著河尻依神感也云々廿七日諸卿定申宇佐宮訴事僉議之間陣座南方有雷電

徵訴

内訴

捕百姓來左衛門陣放呼言云々、廿一日丙午、丹波守賴任來云、依令弼立公門之百姓、入道殿○入道

長環政殿○藤原勸當殊重、是慮外事也、所辯太多、到左衛門陣頭外記局等放呼言了者十餘人、仰檢

非違使被召候云々者、但國司所辯似無所避、九月廿四日丁丑、從去廿二日、丹波國百姓立公門申

善狀、去七月申惡狀未得其情、今夜善狀、自宰相許傳送、

〔日本紀略十三一〇一〇〕萬壽三年四月廿三日己巳、左中弁經賴、令問伊勢國在廳并百姓等訴事、守親任、非

道事也、

〔大神宮諸雜事記〕長元四年五月日、伊賀守從五位下○下字下有脫文朝臣先清被配流伊豆國發○發上恐脫事

字彼國神戶御酒田一町、莉取了、因之二所大神宮御神酒已以闕意、仍神戶預注子細訴申於大神宮

司、隨則且牒送國衙沙汰、且上奏於公家之程、訴神民之中仁、偷爲國司被殺害之由具也、依彼訴天國

司所被配流也、

〔中右記〕永久六年○元年永正月十五日戊戌、與左大弁參院○白

候院北面間、依仰參御前、密々被仰云、大神宮神人等訴申遠江國司事、不裁決及數月、甚恐思之、由

可云關白也、如此事、恐其各及高、仍只任理可決斷者、申承之由退出、

〔百練抄八〕治承元年三月廿一日、天台大衆可參陣頭之由、風聞之間、內大臣已下參內、可差遣武士

之由、被仰下、其根元加賀守師高目代、燒拂白山之間、彼山大衆相具神輿、向天台訴訟故也、廿八日、

院武者所藤原師經加賀國日代、國司錄者也、配流備後國、依天台訴也、

〔類聚國史百九十〕弘仁七年八月甲午朔、勅夷俘之性、異於平民、雖從皇化、野心尙存、是以先仰諸國令

加教諭、今因幡伯耆兩國俘囚等、任情入京、越訴小事、此則國吏等撫慰失方、判斷乖理之所致也、自今

以後、篤加訓導、有如此者、專當國司准狀科處、

〔春記〕長曆四年○長久十月廿二日甲辰、今日初遷御內大臣二條第○中、今夕行幸間、於東院東大路

越訴

直訴

彼小路云々、宜仰檢非逆使加殿制云々、天德元年十一月十日、問河內守從四位上藤原朝臣忠幹、新司從四位下同、國舅曰日記云、問左少史小槻茂助云々、

問受領之時、辨以下著官東廳、辨問四位、吏問五位以下、或於別所問之、隨時儀或召膝突間、或召藏人所被問、隨時定依事之輕重、

〔續日本紀三十八〕延曆三年三月丙申、先是伊豫國守吉備朝臣泉、與同寮不協、頻被告訴、朝廷遣使勘問、辭不敬、不肯承伏、

〔日本後紀二十四〕弘仁五年閏七月壬午、散位正四位上吉備朝臣泉卒、泉者、右大臣從二位真備之子也、孔門童子、頗有所聞、性殊褊急、多忤於物、延曆初出爲伊豫守、被僚下告遺詔、使勘問、辭涉不敬、

有司執法、請真恒科詔曰、其父故右大臣○眞○往學盈歸、播風弘道、遂登端揆、或翼皇猷、宜有泉辜、令

思後善、但解見任、以懲前惡、後復以譴貶、佐渡權守、歸居本縣、鬱々不得志、大同之初、以賢臣之後、徵爲觀察使、試于政事、處置無紀、剛戾之性、老而不移、卒時年七十二、

〔日本紀九〕永祚元年二月五日丙辰、定尾張國百姓愁申守藤原元命、可被替他人之由、

〔尾張國解文〕尾張國郡司百姓等解、申請官裁事、請被裁斷、當國守藤原朝臣元命、三箇年內責取非法官物、併濫行橫法、卅一箇條愁狀、○中略

以前條事、爲知憲法之貴、言上如件、○中略今須郡司百姓、早錄守元命朝臣不治之由、蒙官裁者也、而郡司之職、不遑公事、百姓之身、被絆國役、爲劇外國四度之務、難侍中華萬機之底、爰纔離己國陪官底、猶

若祖上之魚、移於江海、刀下之鳥、翻於林河、望請停止件元命朝臣、被改任良吏、以將令他國之牧宰、知治國優民之褒、賞方今不勝馬風、鳥枝之愁、歎宜、衛龍門鳳闕之給、旨仍具勒、三十一箇條事狀、謹解、

〔日本紀略〕寬仁三年六月十九日甲辰、今日丹波國水上市百姓、於陽明門愁申廿四條雜事、後一條廿日乙巳、丹波守藤原賴任取摺之、

〔小右記〕寬仁三年六月廿日乙巳、頭弁經通示送云、○中略丹波國百姓立公門訴訟、而國司以騎馬兵追

靈臺之圉而賢者進也此故聖帝明王所以有而勿失得而勿亡也所以懸鐘設匱拜收表人使憂諫人納表于匱詔收表人每旦奏請朕得奏請仍又示羣卿使使勘賞庶無留滯如羣卿等或懈怠不勲或阿黨比周朕復不肯聽諫憂訴之人當可撞鐘詔已如此既有民明直心懷國士之風切諫陳疏納於設匱故今顯示集在黎民其表稱緣奉國政到於京民官官留使於難役云々朕猶以之傷惻民豈復思至此然遷都未久還似于賓由是不得不使而強役之每念於斯未嘗安寢朕觀此表嘉歎難休故隨所諫之言罷處々之難役昔詔曰諫者題名而不隨詔命者自非求利而將助國不言題不諫朕廢忘又詔集在國民所訴多在令將解理諸聽所宣其欲決疑入京朝集者且莫退散聚待於朝

〔續日本紀二十〕稱德天平神護二年五月戊午大納言正三位吉備朝臣真備奏樹二柱於中壬生門西其

一題曰凡被官司抑屈者宜至此下申訴其一曰百姓有冤枉者宜至此下申訴並令彈正臺受其訴狀

〔三代實錄六〕清和貞觀四年三月十九日丁亥從五位上行上總介伴宿禰龍男到任交替稱官物多欠禁

固前司介從五位上和氣朝臣豐永訟冤太政官處分遏其禁

〔類聚三代格上〕太政官符

合裁下觀察使起請事十六條○中

一 割斷合理獄訟無冤條

右同前奏○山陰道觀察使菅野真道 僞今案條意人無冤訴即令褒擢若有冤枉一人即入違乖之科仍案考

課令處斷乖理爲下上降考下上隨有犯科處不必解官若今所冤事輕罪杖以下猶解見任恐涉

刻薄伏望定犯輕重以擬褒貶者今宜絕無冤訴即令褒擢如有違乖准犯處罪並依使奏○中

以前被右大臣宣僞奉勅使所起請事條宜依前件諸道使等亦宜准此

大同四年九月廿七日

〔西宮記臨時六〕一 依訴人愁問人事延喜十四年三月宣旨訴人等可留勞勞恐罷職者左兵衛府四小路以東南方者中御門大路以南之由上宣免了而近代任意越渡

家請諸院諸宮諸司諸寺諸王臣家使其所遣之使已非其人專施威勢恣行狂暴不辨是非濫論無道國郡司官不堪凌辱又亂入部內好行濫惡以舊歲之中○中一作本實勘多年之息利百姓被冤盡頭逃散郡司恐威吞舌不訴吏民之煩莫大於斯焉伏案去寬平八年十一月廿日下當道諸國符旨只停止爭田宅等不被禁訟難事望請官裁依准彼符同以禁制然則國郡无騷擾之憂吏民斷威劫之恐者左大臣宜依請諸國准此

延喜五年十一月三日

五世王辭訟

僧尼訴訟

引證僧尼

訴冤枉

〔續日本紀文武〕大寶二年五月辛未勅若五世王自有辭訟須受理者特給坐席而與所○所疑分

〔令義解僧尼〕凡僧尼有私事訴訟來詣官司者權依俗形參事謂依俗形者既爲俗形即須稱俗姓其佐錄事也以上及三綱爲衆事謂衆僧之事也若功德須詣官司者並設床席

〔令集解僧尼〕刑部省例云大寶三年三月九日太政官處分訴訟人等引證僧尼者解部就於當寺定問虛實也

〔日本書紀二十〕大化元年八月庚子是日設鐘匱於朝詔曰若憂訴之人有伴造者其伴造先勘當而奏有尊長者其尊長先勘當而奏若其伴造尊長不審所訴收牒納匱以其罪罪之其收牒者昧且執牒奏於內裏朕題年月便示羣卿或懈怠不理或阿黨有曲訴者可以撞鐘由是懸鐘置匱於朝天下之民咸知朕意

〔日本書紀二十〕大化二年二月戊申天皇幸宮東門使蘇我右大臣詔曰明神御宇日本倭根子天皇詔於集侍卿等臣連國造伴造及諸百姓朕聞明哲之御民者懸鐘於門而觀百姓之憂作屋於衢而聽路行之謗雖獨堯之說親問爲師由是朕前下詔曰古之治天下朝有進善之旌誹謗之木所以通治道而來諫者也皆所以廣詢于下也管子曰黃帝立明堂之議者上觀於賢也堯有衛室之間者下聽於民也舜有告善之旌而主不繁○繁恐作蔽也禹立建鼓於朝而備訊望也湯有總術之廷以觀民非也武王有

對者、即須檢發判決、而不聽越次上陳、即爲推治、檢決、故聽其越次上陳也。

〔令集解〕三十一式六、釋云、追擬引持曰攝、俗曰召和那賀須、

〔令義解〕三十一凡訴訟、謂財物其訟諸第之類、事起十月一日、至三月卅日、檢按以外不合、若交相侵奪者、謂損於人也、奪者強取財物、不在此例、

○按ズルニ、雜令告密ノ條ノ義解ニ云ク、檢按猶勘問也ト、此ニ舉タル檢按モ亦同義ナルベシ、

〔類聚三代格〕十二太政官符

應禁斷諸院諸宮王臣家相代百姓爭訟田宅資財事

右問山城國民苦使正五位下守左中辨平朝臣季長奏狀、僞得諸郡司解狀、僞諸院諸宮及諸王臣家、或爭百姓戶田、或奪浮浪財物、不據國宰無牒郡司、闖入部內、遞相壓賂、專擅威權、不辨理非、田園因斯荒廢、財產爲之空竭、望請裁許被停止者、伏檢案內、訴訟皆從下始、若有越訴、法設科條、今愚昧百姓、不悟此理、告人囑請甲宮而乘威前人、媚託乙家以挾勢、國郡官司無力禁止、望請自今以後、相爭財物田宅之輩、假勢王臣、不由國郡者、不限土浪、不論蔭贖、決杖一百、所爭之物皆悉沒官、諸院諸宮王臣家許容者、別當并家司科違勅罪、如此則窮民再蘇、勢家弭害、謹勒申聞、伏請處分者、大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傳民部卿陸奥出羽按察使源朝臣能有宜奉勅依請、諸國准此。

寬平八年四月二日

〔類聚三代格〕十二太政官符

應禁制諸院諸宮諸司諸寺王臣家依土浪人道俗等私遣使者辨定訴訟事

右得參河國解僞謹檢令條云、訴訟皆從下始、又云、犯罪皆於事發覺官司推斷、然則土人浪人及僧尼等若有訴訟者、須先陳於事發覺官司、官司不斷若所斷違理者、隨即越訴於上官、而愚暗道俗屬託勢

以次上陳若經三日內不給聽訴人錄不給官司姓名以訴官司准其訴狀卽下推不給所由然後斷決至太政官不理者得上表者當今官司不勞給不理狀訴人無錄官司姓名雖含冤越訴而非合勘問窮弊之民徒疲往返疑滯之獄遂無取決右大臣宣一依令條給不理狀若習常不給更致冤滯及越訴之輩妄告虛誣並依法科罪者今神郡百姓等或告強盜竊盜或陳強奸和奸除此以外笞杖罪多既不科決安可肅清未辨真僞之意何勞不理之狀者

以前得國解僭○中仍請處分者令神祇官卜食依國解可行被中納言兼左近衛大將從三位春宮大夫陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣奉勅依卜

弘仁八年十二月廿五日

〔令集解三十三〕關訟律越訴條云可受抑不受笞五十三條加○以下缺

〔唐律疏議二十四〕諸越訴及受者各笞四十若應合爲受推抑而不受者笞五十三條加一等十條杖九十

疏議曰凡諸辭訴皆從下始從下至上令有明文謂應經縣而越向州府省之類其越訴及官司受者各笞四十若有司不受卽訴者亦無罪若應合爲受謂非越訴依令聽理者卽爲受推抑而不受者笞五十三條加一等謂不受四條杖六十十條罪止杖九十若越過州訴受詞官人判付縣勘當者不坐請狀上訴不給狀科違令笞五十

〔令義解七〕凡受事一日受二日付畢○中其判召者限三日若不至判待後廿日不至主典檢發量

事判決謂假令有甲注乙事已財物官司判召乙三日不至更判待廿日遂亦不至者主典卽事有期限者不在此例謂假令有人以身事申訴而卽此人要籍驅使而其所驅使亦有期限若有官司依常法待限內不赴對者亦同此法也

〔令義解七〕凡訴訟須有追攝對問者若其人延引逃避兩限不赴對者謂依上條判召三日判待廿日是爲兩限也言其人不兩限不赴

財物良賤譜第等ノ等ハ十月一日ヨリ三月三十日マデノ間ノミ檢校シ其餘ハ檢校セズ、
孝德天皇ノ大化元年鐘區ヲ朝ニ設ケ憂ヲ銜メル人ヲシテ伴造及ビ尊長ニ由リテ牒ヲ區
ニ投ジテ直ニ訴ヘシム而シテ所司或ハ懈怠シテ理セザル或ハ阿黨シテ曲アル或ハ天皇
肯テ諫ヲ納レタマハザルトキハ訴者ヲシテ鐘ヲ撞カシム二年又其身ニ私セズシテ心專
ラ國家ノ爲メニスル者ニ限リ諫疏ニ題名セズシテ區ニ投ゼシム稱德天皇ノ天平神護二
年吉備眞備ノ奏ニ依リテ二柱ヲ中壬生門ニ樹テ官司ニ抑屈セラル者ト百姓ノ冤枉
アル者トヲシテ柱下ニ至リテ申訴セシム

名稱

〔類聚名義抄〕五 訟アラソフ ヲツマフ

〔字鏡集〕十四 訟アラソフ

〔萬葉集〕十六 有由緣難斷 頃者之吾戀力不給者京兆爾出而將訴

訴訟法

〔令義解〕七 凡訴訟皆從下始 謂被告官曰訴爭財曰訟從各經前人本司本屬官人經本司白丁經本

者自依職令經所在官司告訴其上條判召者亦依此條若路遠及事礙者若宮衛令下番兵衛及斷職
經本司本屬者有侵損者亦依職令告訴發之官司也
律移四條皆以一日程可爲遠故也事礙者皆是也經隨近官司斷之斷訖訴人不服欲上訴者請不理狀判官司
者礙止也不問公私但有事礙者皆是也
得之其理而訴人不服以爲不理判文以次上陳若經三日內不給不理狀判官司者非也
之外更與不理狀聽訴人之上陳也
也聽訴人錄不給官司姓名以訴官司准其訴狀即下推不給所由然後斷決至太政官謂至辨不理者
得上表

〔類聚三代格〕太政官符

應多氣度會兩郡雜務預大神宮司事〇中

一應決百姓訴訟事

右同前解〇伊 僭案太政官去大同元年八月十一日符僭檢令條云訴人不服欲上訴者請不理狀

古事類苑

法律部十三

上編

訴訟

訴訟ハ皆下ヨリ始メ次第ニ上ニ至ルコトニテ、官人ハ先ヅ被告人ノ本司ニ經、白丁ハ先ヅ被告人ノ本屬ニ經ル、本屬トハ、京ニテハ京職ヲ指シ、京外ニテハ郡司ヲ指ス、若シ其路一日程以上ナルト、事ノ礙アルトハ、隨近ノ官司ニ經ル、コトヲ得ルナリ、而ルニ訴人其處斷ニ服セズシテ、上訴セントスルトキハ、官司ハ判文ノ外ニ更ニ不理狀ヲ與ヘ、訴人ノ上陳スルコトヲ聽ス、訴人ハ此不理狀ヲ齎シテ、次ヲ以テ上陳ス、卽チ郡司ヨリ與ヘタル不理狀ナラバ、之ヲ以テ國司ニ訴フ、而ルニ國司ノ處斷郡司ト同ジケレバ、國司ノ不理狀ヲ請ヒ、刑部省ニ訴フ、訴人刑部省ノ處斷ヲ以テ、尙ホ不當トスルトキハ、其不理狀ヲ請ヒテ太政官ニ至リ、辨官ニ訴フ、辨官ニ至リ、訴人其處斷ニ服セザルトキハ、又不理狀ヲ請ヒテ中務省ニ至リ、上表ズ、而シテ不理狀ヲ請フト雖モ官司故ラニ延引シテ三日ヲ經ルマデ給セザルトキハ、訴人ハ其官司ノ姓名ヲ錄シテ其上ニ在ル官司ニ訴フ、上ノ官司ハ其訴狀ニ准ジテ、給セザル所由ヲ前ノ官司ニ推問シテ然シテ後ニ斷決ス、サテ此秩序ニ循ハザルヲ越訴ト稱シテ、訴フル者モ受クル者モ罪アリ、又被告ノ人ヲ追攝シテ對問スベキ時ニ、其人延引逃避シテ三日マデ至ラズ、更ニ判シテ待ツコト二十日ニシテ、尙ホ赴キ對セザルトキハ、次ヲ越エテ上陳スルコトヲ聽ス、凡テ訴訟ハ人ヨリ侵損ヲ被リタルト、財物ヲ強取セラレタルナドノ外、

聽訟法

五六四

聽訟例

同

勅裁

五六七

滯訟

同

不理訟

同

古事類苑

法律部十三

上編

訴訟

名稱

訴訟法

五世王辭訟

僧尼訴訟

引證僧尼

訴冤枉

訴國司

越訴

直訴

內訴

嗽訴
濫訴

聽訟

聽訟官衙及吏員
推訴使

五五〇

同

五五三

同

同

同

五五四

五五六

同

五五七

同

五六一

雖圖殺至用刃者爲故殺若然常赦不可免之而稱廳例免之其來尙矣近年京師往往有殺害之聞是用輕典之所致歟願任律文拘之以懲將來勅曰所奏可然但任年來例從輕法赦之有何事乎謹從詔命不復諫

右得刑部省解僞去正月廿七日詔書僞不遣巡察使時世久矣國郡司等怠緩入罪者衆泣辜之仁特從矜免者夫宣導之吏猶被恩免所攝之民何不赦除唯舉國郡司而成辭此則舉重包輕之義或論曰既指云國郡司不可及百姓其疑一也普天之下共是皇民就愛就憎恩澤之覃應一霑焉然則詔前所犯國司勘發亦可會赦或論曰詔旨別云巡察使明是國司所勘不可關之其疑二也兩論有疑不得一決謹請官裁者大納言正三位兼行右近衛大將良岑朝臣安世宣奉勅同從矜免

天長五年八月九日

〔權記〕長保六年

元○寬弘

九月廿日辛丑參衙有政源中納言勘解由相公

○後

就廳南所物忌左大臣

長原道

於陣被定申諸卿分配亦被定申放免可着本貫之事畿外者各尋附貫外國之輩可追至于京戶

者可如何哉諸卿定申云不可追者京戶者新改居附貫外國但此事可違法放免之後各還本貫爲平民勤役而逢恩原免者改京戶貫外土可入移鄉之例歟但放免猶成事仰使廳能可被誠歟云々

〔百練抄四〕

後冷泉

康平三年六月十一日諸卿定申伊勢守義孝燒亡大神宮御厨并祭主永輔目代大中

臣賴經殺害大神宮託宣者守時事去五月廿一日於使廳勘問件賴經三ヶ年被召置射樣而四年東北院供養會赦猶暫不被免而遂恩免事

〔中右記〕永長二年

元○承徳

二月八日早旦行向源中納言

○後雅

許六車庄住人爲神民雖成濫行可會赦

由法家所申也仍可原免由所被仰下也上宣云重猶可被問法家上總國雜掌申文神民成非法由也任傍例可停止非法由可給上宣符者

〔本朝世紀〕

久安五年三月廿日壬寅今日有御願延勝寺供養事

○中略

檢非違使等爲免囚向獄門而西

獄囚等兼存可有赦之由皆悉將出近邊之小屋又去去年殺害左兵衛尉重俊之犯人武士來迎取之

事々如忘朝憲

〔台記〕久壽元年十月廿八日丁未今日改元

○中略

光賴召殿上仰赦事先是余奏法皇

○鳥羽

曰如律文者

徒、但於海賊黨類并中原弘景者、非赦限者、佐徹稱、率他檢非違使等向獄所、

〔台記〕久壽元年九月九日己未、晚頭大內記、遙明內覽詔書草、是去月九日詔書被加入觸大神宮訴者、及日吉社訴申、光家不在赦限之由也、光家去月九日赦免、而延曆寺衆徒強訴申、故可還禁于獄云々、保延三年、依石清水訴、被改詔書之例也、此事不穩、

受後會赦

〔日本紀略續〕弘仁十年三月己亥、詔、朕有所思、宜復、故皇子伊豫、夫人藤吉子等、本位號、

〔文德實錄〕嘉祥三年五月壬辰、追贈流人橘朝臣逸勢正五位下、詔下、遠江國歸葬本鄉、略○下

〔扶桑略記二〕延喜三年四月廿日、前右大臣菅原朝臣、詔賜本職、兼增一階、略○中一云、延長元年閏

四月十一日、贈本大臣位、

○按ズルニ、歿後赦ニ會ヒテ、官位ヲ追贈セラル、コトハ、官位部贈官位篇ニアリ、

雜載

〔日本書紀九〕二年二月己酉、立忍坂大中姬爲皇后、略○中初皇后隨母在家、獨遊苑中、時園雞國造、從

傍徑行之、乘馬而莅籬、謂皇后嘲之曰、能作園乎、汝者也、略○此云、那且曰、壓乞戶母其蘭一莖焉、

月母、此云、親自、皇后則採一根蘭、與於乘馬者、因以問曰、何用求蘭耶、乘馬者對曰、行山撥蠟也、略○此云、摩時皇

后結之意、裏乘馬者辭无禮、即謂曰、首也、余不忘矣、是後皇后、登祚之年、覓乘馬乞蘭者、而數昔日之罪、

以欲殺、爰乞蘭者、類搶地叩頭曰、臣之罪實當萬死、然當其日、不知貴者、於是皇后赦死、刑貶其姓、謂稻

置、

〔政事要略八〕圖詔律云、以赦前事、相告言者、以其罪罪之、官司受而爲理者、以故入人罪論、

〔續日本紀十三〕天平十一年二月壬辰、勅二月二十六日、赦云、以赦以前事告言者、以其罪罪之、宜暫

可停、若百姓心懷私慙、欲被陳者、悉聽之、巡察使宜隨事問知、具狀錄奏、勿依赦書罪告人、

〔享祿本類聚三代格十〕太政官等

應免國郡司勘發犯罪人之罪事

王日奉弟日女石上乙麻呂奉禮大野中臣宅守飽海古良比不在赦限、

〔續日本紀^{十七}〕天平勝寶元年閏五月癸卯詔朕以寡薄恭承寶祚恒恐累二儀之覆載虧兆庶之具瞻徒積憂勞政事如闕神之貽咎實由朕躬比者時屬炎蒸寢膳乖豫百寮煌灼左右勩劬今欲克順天心消除災氣乃求改往之術深謝在予之德則宜流渙汗之恩施蕩滌之政可大赦天下自天平感寶元年閏五月十日昧爽已前大辟已下咸赦除之但殺其父母及毀佛尊像者不在此例、

〔續日本紀^{三十一}〕寶龜四年四月壬戌勅曰朕君臨四海子育兆民崇德忘飡恤刑廢寢而德化未洽災

異屢臻與言念此自願慙愧設法雖期無刑觀華猶有垂泣宜因生長之時式弘寬宥之澤可大赦天下自寶龜四年四月十七日昧爽以前大辟罪已下罪無輕重已發覺未發覺已結正未結正繫囚見徒常赦所不免者咸赦除之寶字元八兩度逆黨遠近配流亦宜放還但高元度及強竊二盜不在赦例普告遐邇知朕意焉、

〔日本後紀^{十二}〕延曆廿四年三月丙申詔曰解網泣辜哲王嘉訓滋環蕩穢列聖通規朕君臨區宇子育黔黎念彼流移久陷刑憲情深惻隱無忘寢興思播凱澤令彼改且其延曆廿四年三月以前犯謀反大

逆及自餘緣犯已配流及移鄉者不論道俗悉赦除之若身先亡恩渙不逮者原其妻子但惡逆造畜蠱毒殺人會赦猶合移鄉之色及犯盜者不在赦限普告遐邇知朕意焉、

〔扶桑略記^{二十九}〕後冷泉^治康平八年^元十月十八日供養法成寺金堂藥師堂觀音堂未剎行幸彼寺大赦天下但繫神社之訴并放火之輩非赦限、

〔長秋記〕保延元年四月廿二日乙丑天下大赦軒廊御卜^{森雨}參內着陣以官人告藏人弁^{藤原}廳參

由乃來着座下仰云天下不靜上天變恠異頻仍可被行天下大赦但海賊黨類并中原弘景^{母弟}非赦限以其由可令造詔者下官重相尋在民身調庸物可被免何年歟以何年可爲例哉弁云承德三年例相叶可被免五ヶ年^中以外記召右衛門權佐重隆乃着弒仰有天下大赦不待詔書施行直可免因

〔續日本紀^{二十}〕天平寶字八年九月壬子、軍士石村村主石楯斬押勝傳首京師。^{○中}押勝衆潰、獨與妻子三四人乘船浮江、石楯獲而斬之、及其妻子從黨三十四人、皆斬之於江頭、獨第六子刷雄、以少修禪行、免其死、而流隱岐國。

〔文德實錄^九〕天安元年十月辛卯、群臣奏曰、檢非違使奏言、犯死罪者二人、請誅之、詔減死一等處之遠流。

〔三代實錄^四〕貞觀二年閏十月廿五日辛未、太政官論奏、美濃國惠奈郡人、縣萬歲麻呂、殺百姓三人、法官斷罪、當斬刑、詔減死一等處之遠流。

〔日本書紀^{三十}〕三年三月丙子、大赦天下、唯常赦所不免不在赦例。

〔日本書紀^{三十}〕五年六月己未、大赦天下、但盜賊不在赦例。

〔日本書紀^{三十}〕六年七月乙未、大赦天下、但十惡盜賊不在赦例。

〔續日本紀^一〕三年十月甲午、詔赦天下有罪者、但十惡強竊二盜不在赦限、爲欲營造越智山科二山陵也。

〔續日本紀^{十一}〕天平六年七月辛未、詔曰、朕撫育黎元、稍歷年歲、風化尙壅、圜圉未空、通旦忘寐、憂勞在茲、頃者天頻見異、地震動、良由朕訓導不明、民多入罪、責在一人、非關兆庶、宜令存寬宥、而登仁壽、薄瑕穢而許自新、可大赦天下、其犯八虐、故殺人謀殺殺訖、別勅長禁、劫賊傷人、官人史生枉法受財、盜所監臨、造僞至死、掠良人爲奴婢、強盜竊盜及常赦所不免並不在赦例。

〔續日本紀^{十三}〕天平十二年六月庚午、勅曰、^{○中}宜大赦天下、自天平十二年六月十五日戌時以前、大辟以下咸赦除之。^{○中}其監臨主守自盜盜所監臨、故殺人謀殺人殺訖、私鑄錢作具、既備強盜竊盜、并

他妻及中衛舍人左右兵衛左右衛士衛門府衛士門部主帥使部等不在。^{○在}原赦限、其流人穗積朝臣老多治比真人祖人名負東人久米連若女等五人、召令入京、大原采女膳部鳥女還本鄉、小野

限若入死罪者同降一等

〔續日本紀聖九〕神龜二年十二月庚午詔曰死者不可生刑者不可息此先典之所重也豈無恤刑之禁

今所奏在京及天下諸國見禁囚徒死罪宜降從流流罪宜從徒徒以下並依刑部奏

〔續日本紀元九〕養老六年正月壬戌正四位上多治比真人三宅麻呂坐誣告謀反正五位上穗積朝臣

老指斥乘輿並處斬刑而依皇太子奏降死一等配流三宅麻呂於伊豆島老於佐渡島

〔續日本紀聖十二〕天平七年五月戊寅勅朕以寡德臨馭萬姓自暗治機未剴寧濟適者災異頻興咎徵仍

見戰戰兢兢責在予矣思緩死惡窮以存寬恤可大赦天下自天平七年五月二十日〇實作二昧爽已

前大辟罪已下咸赦除之其犯八虐故殺人謀殺殺訖監臨主守自盜盜所監臨強盜竊盜及常赦所不

免並不在赦限但私鑄錢人罪入死者降一等其京及畿內二監高年鰥寡惻獨篤疾等不能自存者量

加賑恤百歲已上穀一石八十已上穀六斗自餘穀四斗諸國所貢力婦自今以後准仕丁例免其房徭

并給田二町〇訂刊本作野以充養物

〔續日本紀聖十六〕天平十七年四月甲寅詔依巡察使上奏原免天下諸國去年田租又緣有所念大赦天

下其自天平十七年四月二十七日昧爽以前大辟罪已下罪無輕重已發覺未發覺已結正未結正繫

囚見徒咸悉赦除但犯八虐入死者免死長禁私鑄錢及從者着鉢長役鑄錢司強盜竊盜常赦所不免

不在赦限其流人到配所者准此簡擇特令會恩

〔續日本紀聖十八〕天平勝寶二年四月辛酉勅〇中可大赦天下并免今年四畿內調其私鑄錢及犯八虐

故殺人強盜竊盜常赦所不免者不在赦限但入死者降一等又中臣占部紀與平麻呂減配中流

〔續日本紀聖十九〕天平勝寶六年正月辛丑勅曰初元啓曆獻歲發春天地行仁動植霑惠古昔明主應此

良辰必布時和廣施慈令朕雖薄德何不由茲可大赦天下其八虐故殺人私鑄錢強盜竊盜常赦所不

原者不在赦例但入死者皆減一等

填役畢乃聽放還者如件式者無恩赦時徵物之法隨欠負多少明立其程限訖復經恩之後准事給程而令檢內外官不與解由狀并交替實錄勘帳等天長以往者赦後在任之○之下恐赦前難意皆令會赦承和以降寬平以往者或赦免或拘煩勘判之旨頗爲不定自寬平末至于近年全以拘留不令會赦爰受領之官赦前遷替其不與解由狀所注載之難意會赦放勘免已了其後任用之吏赦後在任或經三四月或七八月秩滿去任仍寫彼不與同任長官解由狀之目錄言上卽僞赦後在任勘負件會赦免除之難意上下國司遞亦如此凡恩詔之旨是一拘放之間何異遂使赦○赦下恐在任吏更糾累代之意往古欠損獨負一人之身稽之法條事無所據方今欲勘免之則近年之例不令會赦將因循之則勘判之旨既涉苛酷望請赦前所言上不與解由狀難意更亦注載不與赦○赦下恐在任吏解由狀者准據前件法式隨欠負多少計辦濟日限明以拘放爲判例但赦前之罪首露有期仍須同任之一官三百六十日內若被勘發赦前意者後年秩滿解任之輩依件入原例不得爲蔽匿然則渙汗所調自無榮枯勘判所決必有准的謹請處分者從三位守大納言兼行右近衛大將春宮大夫藤原朝臣忠平宣奉勅奏狀之旨雖守法式勘判之吏有煩拘放何者少負債者依日數近未脫拘留多欠失者爲程期遠自可放免況限以味爽何責往過恩詔所指似有偏頗今須赦後在任之吏赦前難意皆悉原免立爲判例者使宜承知依宣行之符到奉行

右大辨橘朝臣澄清

左大史酒井宿禰人真

延喜十三年二月廿五日

〔日本書紀三十一〕二年六月戊戌詔令天下繁囚極刑減本罪一等輕繫皆赦除之其令天下皆牢入今年

調賦

〔三代實錄四十一〕元慶六年正月七日庚戌天皇御紫宸殿賜宴群臣○中宣制曰○中元慶六年正月

七日午時以前大辟罪已下罪無輕重同降一等但犯八虐及私鑄錢強竊二盜常赦所不免者不在赦

〔日本書紀持統〕十一年七月辛丑夜半赦常鑠盜賊一百九人仍賜布人四常但外國者稻人二十束

〔續日本紀聖武〕天平三年十一月辛酉先是車駕巡幸京中道經獄邊聞囚等悲吟叫呼之聲天皇憐愍

遣使覆審犯狀輕重於是降恩咸免死罪已下并賜衣服令其自新

〔續日本後紀仁明〕承和九年七月辛亥是日掃獄免前年罪人又於東市樓前脫盜人鉗各給糧放却

〔小野宮年中行事〕臨時免者事

貞御記延長元年閏四月十一日改元詔書出左右弁向衛門府廳召囚人等各加教督令得自新各賜

調布一端可被免之狀仰了如此事依
活有記之

〔扶桑略記朱實〕二十五萬書〕延長八年十月二日見徒罪人皆悉放免人別給錢云々左右衛門尉監之

〔政事要略五十九〕太政官符勘解由使

應原免赦後在任吏赦前雜怠事

赦後免前罪

右彼使去延喜十一年口口廿三日奏狀稱檢雜律云負債違契不償一端以上達廿日管廿廿日加一等罪止杖六十卅端加二等百端又加三等各令備償注云負債者謂非出舉之物依令合理者或欠負公私財物乃違約乖期不償者若延日及經恩不償者皆依判斷及恩後日科罪如初又名例律云會赦應改正徵收經責簿帳而不改正正徵收者論如本犯律又云有程期者計赦後日爲坐注云赦出後日仍遠程期者即計赦後遠日爲坐赦後並須准事給程以爲期限者此等更計赦後遠日科罪並赦後准事給程期之文也又獄令云欠負官物經赦降令免別勅遣推徵者依赦降例執聞義解云欠負官物已經赦降應須赦免若有別勅遣推徵者錄會赦狀奏聞者是經赦降之也色字誤必可令會赦之文也亦交替式云前司犯用欠損官物徵物之法其程差役今文云五十端以上百日既稱已上無有其限欠物雖多其期百日物則難填罪則易科仍加寬恕隨物增日五十端以上二百日百端以上三百日二百端以上四百日三百端以上五百日四百端以上六百日五百端以上七百日不滿五十端以下自依常例物

出入、隨事拘放然而別有所念、直以放免、汝等重有所犯、後日曾不寬宥者、罪人等共稱唯、或伏地鳴咽、或仰天嗟歎、勅使府官道路見聞、不勝感泣、拭淚而歸、臣某頓首頓首、死罪死罪、伏錄事狀謹奏、

寬平八年七月

中納言

〔朝野群載〕十一勸申未斷左右獄囚事

合貳人

左一人

佐賀名昨丸

依圖亂禁

六月十五日
左權少尉藤原賴信禁

右一人

伴支助

依竊盜禁

六月十日
右大尉藤原枝忠禁

以前獄囚勸申如件

寬仁三年七月十七日

左衛門少志尾張如春

右衛門少尉豐原

左衛門少尉縣犬養

被別當宣稱佐賀名昨丸有可令辨申之事、所召禁也者、尋其由緒、可謂小僂、宜從寬免、殊給身暇者、

寬仁三年七月十七日

防鴨河使判官右衛門少尉豐原

新任別當時

注未斷囚可原免之輩、進勘文也、

法師童女之類不注

別當相計被行免物、但件別當宜、有用意可

書也、若注依病給假者、避其口口偏原免者、頗似無理、仍依圖亂所召禁也、而其事辨決已了、宜從原

免云々、

〔扶桑略記〕三十一寬治七年六月廿七日癸酉、抽出赦免左右獄徒各三人、又流人前加賀守藤原爲房、有

勅召返赦免、

告遐邇令知朕意。

〔日本後紀^二〕弘仁元年九月戊申正四位下藤原朝臣眞夏從四位下文室朝臣綿麻呂等被召自平城宮來禁綿麻呂於左衛士府^略○中田村麻呂奏請綿麻呂武藝之人頻經邊戰募將同行即授正四位上拜參議以遣之歡喜踊躍即駕兵馬。

〔日本後紀^二〕弘仁五年八月甲子免囚人日下部土方補木工長上土方者攝津國武庫郡人以私鑄錢著鎮役於堀河頗善工巧棄瑕取才。

〔續日本後紀^九〕嘉祥二年閏十二月己未乘輿巡省京城以餓米賑給窮者比至囚獄司前天皇問曰是爲誰家右大臣藤原良房朝臣奏言囚獄司於是殊降恩詔皆免獄中罪人群臣欣悅俱呼萬歲。

〔續日本後紀^二〕嘉祥三年三月甲午左右非違獄中人除盜之外悉從放免。

〔帝王編年記^三〕仁壽元年十二月某日天皇乘輿巡幸京職^略○中兼赦免獄囚。

〔管家文草^九〕復奏囚人拘放狀

右臣某月十三日謹奉口勅云去十日令檢非違使別當從三位中納言兼行左衛門督源朝臣勘錄左右獄中繫囚之數十一日錄奏既訖須朕親到獄對放遣而德不及古事未宜今汝者朕之近習也大師也列見罪人依實拘放令如朕之所念者臣伏奉勅旨十三日早朝率從五位上守左少辨源朝臣囑大外記正六位上多治有友左大史正六位上大原史氏雄等會集右衛門府升殿于時左右檢非違使佐以下召列罪人等祇候南門外大路臣召使等先令辨申所犯輕重使等勘會日記過狀一一執申其犯重其罪明者十六人^{左十一人右五人}二人先死其遺十四人即加防援各還本獄其犯有疑其罪未定者四十六人^{左二十八人右十八人}令使等計列南門之前臣率辨以下及檢非違使等著門中壇上胡床即日宣曰奉勅罪人汝等或被疑殺人傷人強盜竊盜或被告僞印強姦投石放火如是等罪科法有限今如聞有司搜實情之間空送二三年獄官尋證驗之內縱經五六月須雖累年序雖積旬月愷定其犯明立其罪任理

特敘

事同不覺可尋先例、

〔本朝世紀〕康和元年十月廿四日壬戌赦免左右獄囚四十餘人依中宮○顯河不豫也、

〔吉記〕壽永二年二月廿九日甲子依御作善有免者云々、

〔續日本紀九元正〕養老六年四月辛卯詔曰朕遐想千載旁覽九流詳思布政之方莫先仁恕之典故振恤

之惠無隔遐方撫育之仁普覃寓內今者有司奏言諸國罪人總四十一人准法並當流已上者每聞此奏朕甚慙之萬方有辜在余一人宜所奏罪人并從坐者咸皆放免勿案檢焉、

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜元年十一月乙酉勅先後逆黨一切皆從原有其情願留住配處者宜悉聽之如

窮乏之徒無資歸鄉者路次諸國量給食馬、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年八月丁酉大和守從三位大伴宿禰古慈妻薨飛鳥朝常道頭贈大錦吹負之孫平城朝越前按察使從四位下祖父麻呂之子也○中略勝寶年中累遷從四位上衛門督俄遷出雲

守自見疎外意常鬱々紫微內相藤原仲滿誣以誹謗左降土佐守促命之任未幾勝寶八歲之亂便流土左天皇有罪入京以其舊老授從三位、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年九月丙寅內大臣從二位勳四等藤原朝臣良繼薨平城朝參議正三位式

部卿太宰帥馬養之第二子也天平十二年坐兄廣嗣謀反流于伊豆十四年免罪補少判事、

〔續日本紀三十六光仁〕寶龜十一年二月甲子勅去天平寶字元年伊刀王坐殺人配陸奥國久在配處未蒙

恩免宜宥其罪令得入京、

〔日本後紀八祖武〕延曆十八年六月丙申詔曰朕祗纂丕業撫臨黎元刻已勤躬不遑事處思欲輯熙四海期之刑措弘濟百姓致之壽域而近巡京中過堀川處鉗鐐囚徒暴體苦作興言於茲愀然于懷雖生民之愚自招罪惡而爲彼父母寧不哀愍其在役見徒及天下見禁囚等罪無輕重並宜赦除令得自新但私鑄錢謀殺故殺及被問民苦使推訪諸國郡官吏百姓等不在赦限其謀殺故殺配役者停役配流普

因卽原免^{廿人、殺害、強竊、盜等}、非是赦令臨時宜旨也。先例抽輕法者、依宜旨原免、而被免重犯者如何、宜旨趣依天變怪異。

〔法成寺攝政記〕寬弘三年八月廿六日丙申、右頭中將^{○藤原實成}來仰云、依大星事、申可有免者、由而未被行、今日可行者、申承由召別當被成勘文被免云々、着欽者九人、^{二年者、三年者、六年者、遺二年、遺一年、未斷者九人、}

〔扶桑略記^{二十八條}〕長元九年四月十六日、不論輕重、原免未着欽囚人、

〔中右記〕寬治七年十一月五日、今日伊勢公卿勅使、參宮之日也。^{○申}入夜有臨時免者、^{未斷輕犯聊依者、州三人}

有所思食有此恩赦、也是右相府^{○源房}之所惱、猶以無減氣、大概此恩赦依件事歟、抑如此大神宮公卿

勅使參着之日、有免者之例、先被相尋、或被問外記、或被問民部卿并別當、但憶先例未見歟、人々所被

申不有一定、但依無日次、推今夜有此事歟、藏人兵部大輔沙汰件事、

〔中右記〕嘉保三年^{○永長元年}三月七日丁酉、今夕有臨時免物廿五人、別當依所勞不被出仕、左右佐以下

沙汰歟、

〔中右記〕元永元年閏九月六日、有臨時免者云々、九十餘人、是依上皇^{○白河}御熊野詣云々、先例雖無如

此事、寬宥之思、何事之有哉、

〔殿曆〕元永元年閏九月六日乙卯、入夜參內、有免物、余^{○藤原實原}合點於鬼間、別當^{○藤原忠教}相共令沙汰、以

爪合點、別當返給、余合點事密々儀也、及亥刻五位藏人實光參內、付件人奏、於朝干飯御覽、余主上

羽^{○鳥羽}御代、以墨合點下給、其儀主令合點給、而如然事未練、仍余合點也、免物儀^{去廿八日頭弁^{○藤原顯}}

院^{○藤原顯}御熊野詣也、而別當着束帶、以免物勘文參內、候小坂敷邊、實光依五節宇佐事、令參鳥羽殿間遲々、

仍余密々召別當於鬼間、見勘文、可被免人、合點八十餘人、^{疑盜刃傷、等物也}返給勘文於別當了、而實光

歸奏、別當以勘文付件人奏、聞於朝干飯方、內侍取之奏聞、御覽了後、返給別當、申云、可被合墨點、余於

〔^{○於下恐}〕干飯以墨合點了、返給職事實光勘文端、^{被免物數}書付、其書樣不覺可尋、又以墨合點

德偏是垂法皇之慈悲也然則恩澤露新永措刑鞭於黃砂之外禪林風靜遙獻寶算於碧洞之中仍件等之輩宜從原免者

久安四年五月廿五日

右衛門少尉源朝臣近康奉

〔百練抄^{高八}〕安元元年五月廿七日建春門院^后○^{高倉母}百箇日御儀法結願被免輕犯者

〔續日本紀^{文一}〕三年三月甲子河內國獻白鳩詔^略○^中赦畿內徒罪已下

〔續日本紀^{文二}〕大寶元年九月丁亥太上天皇^統○^特幸紀伊國十月戊申從官并國郡司等進階并賜

衣衾及國內高年給稻各有差勿收當年租調并正稅利唯武漏郡本利並免曲赦罪人

〔續日本紀^{元六}〕和銅六年十二月乙巳近江國言慶雲見丹波國獻白雉仍曲赦二國

〔續日本紀^{聖十}〕天平四年十一月丙寅曲赦京及畿內二監天平四年十一月二十七日昧爽已前徒罪

已下其八虐切賊官人枉法受財監臨主守自盜盜所監臨強盜竊盜故殺人私鑄錢常赦所不免者不

在此例

〔續日本紀^{聖十}〕天平六年十月辛卯曲赦京中死罪

〔續日本紀^{稱德二}〕天平寶字八年十月甲申勅曰在京見禁囚徒大辟已下悉皆赦除但逆賊仲麻呂及

淡路公^仁○^淳船王池田王等與黨不在赦限

〔貞信公記〕天慶元年四月廿四日左右獄所囚口口者卅人殊可免狀仰檢非違使別當緣地震也

〔日本紀略^{村上}〕天曆元年六月廿二日乙亥今日免左右獄囚人十一人是則日來霖雨不霽損害多煩

故也

〔貞信公記〕天曆二年五月十一日乙未祈雨宣命使奉遣五陵中使公輔朝臣來有賜未斷囚人勘文強

竊二盜嫌疑者圖亂等難犯者口十七人可免事

〔小右記〕寬弘二年四月廿六日癸卯左衛門權佐允亮來云忽依宣旨^{右衛門督}令勘申左右獄

曲赦

臨時赦

人被免之、先以勘文頭弁被申殿下、○藤原忠通次令予奏聞之後、書合點數於其緣被下奉別當別當召檢非違志成國於和德門下給勘文、被仰云、太上天皇○鳥羽千體觀音造給有所思食之由可爲仰詞者、

〔本朝世紀〕康治元年二月廿八日壬辰、是日依臨時御祈被免未斷輕犯者、

〔本朝世紀〕久安四年五月廿五日壬午、權中納言藤重通卿參仕仗座被免未斷輕犯之者七十二人、法

皇○鳥羽依有所思食被免之、

原免未斷囚人事

合七十二人

左獄十四人

政所二人

右獄十二人

政所二人

便所四十二人

別當從二位行權中納言兼皇太后宮權大夫左兵衛督藤原朝臣重通宣奉勅、夫政異弛張者、明時之化也、法分寬猛者、聖代之仁也、爰禪定仙院○鳥羽殊有翫念之所存、欲解冤結之所告、卽主施君王之惠

印之、中人等、不被免云々、

教流以下

〔日本書紀^{二十九}〕十三年十二月庚寅、除死刑以下罪人、皆咸赦焉、

教徒以下

〔日本書紀^{二十九}〕五年八月壬子、詔曰、死刑沒官三流並除、一等、徒罪以下、已發覺未發覺悉赦之、唯既

配流、不在赦例、

〔日本書紀^{二十九}〕十三年四月丙辰、徒罪以下、皆免之、

〔日本紀略^二〕天慶八年十二月七日己巳、依天變赦徒罪已下、

教輕犯

〔日本書紀^三〕十六年二月乙卯、詔刑部省赦輕繫、四月庚申、詔曰、凡繫囚見徒、一皆原散、

〔左經記〕寬仁四年十二月十九日乙未、賜六齋日、可禁殺生、官符於諸國、又可免輕犯者之旨、被仰別當

公信原云々、

〔左經記〕長元四年九月六日辛亥、頭弁^{○藤原經}御消息云、依天變霖雨等、被免輕犯者云々、

〔百練抄^四〕後冷泉、康平二年十月十二日、法成寺無量壽院供養、五大堂同有佛開眼、去年失火之後所造

立也、被免輕犯之者、

〔本朝世紀〕康和元年三月廿七日庚子、今夜被原免輕犯囚左右九十人、依疾疫旱災也、

〔殿曆〕天永三年七月五日庚申、今日依旱魃有免物^{○藤原忠實}余^{○藤原實}可沙汰之、由自院河^{○白}有仰仍召

別當、余着直衣冠等、於出居方合點^{以墨}、別當頭弁^{實行}着束帶、余合點了、以頭弁奏院別當頭弁參

內於殿上、小板敷邊給勘文、卅三人免了、但勘文端ニ以頭弁注數^{廿三}、抑今日余參內して於宿所可

致沙汰也、而依小所勞奏事由於院之處、於里亭可沙汰、由有御定、仍如此行之也、

〔中右記〕永久二年十二月卅日辛未、輕犯者一人免了、是歲末齊日之故也、近代囚人不幾、仍不及數人

也、

〔時信公記〕天承元年十月十日、入夜別當^{○源}定并頭弁^{○藤原賴}被參、有免物事未斷輕犯者左右五十一

已上、永萬元年八月十二日配流、與力僧正惠信、

最慶薩摩 玄榮豐岐 玄延大隅

已上、同年九月六日配流、延曆寺惡僧、

實勝羅岐 敎中周防 良運豐前 圓慶筑前

已上、同二年五月十七日配流、同寺惡僧、

宗賢薩摩 玄信壹岐 覺賢對馬

已上、仁安三年五月三日配流、高野僧、

長息下野 良惠周防 圓喜阿波

同年、六月廿六日配流、興福寺惡僧、

〔玉海〕承安五年○安元 七月廿八日丁未、此日有改元事、○中 光雅歸來、仰左大臣云、○中 改承安五年、

可爲安元元年、依嘉保元年之例、令作詔書者、○今案彼年常敎也、觸神社之盟、悉被物、物恐免字、遷之、今度又同前、

〔玉海〕安元三年○治承 八月五日壬申、未刻大夫史隆職、注進、改元詔書、

其狀如此

詔○中 略 改安元三年爲治承元年、大赦天下、今日味爽以前、大辟以下罪無輕重、已發覺、未發覺、已結

正、未結正、及僧俗未得解由者、皆悉赦除、各加敎督、令得自新、但犯八虐、故殺謀殺私鑄錢、強竊之二

盜、常赦所不免者、不在此限、又承安二年以往、調庸未進在民身者、同以免除之、又天下老人、百歲以

上、賜穀三十石、九十以上二石、八十以上一石、鰥寡孤獨、不能自存者、各量給物、庶先者蠅告市之聲、將

來、彩鳳巢閣之翅、布告遐邇、明俾聞知、主者施行、

治承元八月四日

作者大內記業實

〔玉海〕元曆二年○文治 九月六日丙戌、明基參上、昨日被行敎觸大神宮并賀茂社、訴輩并殺害實宴法

内言上、一如貞觀四年七月十五日格、

〔日本紀略一〕延喜五年六月十五日、詔行大赦令、依彗星之象也、

〔日本紀略二〕延長八年二月廿四日、詔大赦天下、依去年風水之災、今春疫癘之患也、

〔續古事談二〕此人源中納言別當ノ時、上東門院、后彰一條東北院ツクリテ供養シ給ケルニ、公家大

赦オコナヒ給ケリ、別當コノヨシヲ聞テ、人ヲツカハシテ獄ニアリケル海賊三人ガ手足ヲキリ

テケリ、時ノ人、赦オコナハレズハ三人シナザラマシ大赦カヘリテ死罪ナリトゾナゲキケル、

〔日本紀略後十四〕長元五年三月五日丙子、詔大赦天下、大辟以下罪、常赦所不免、赦除、又免調庸、老人

僧尼給穀、依攘天下地震雷鳴之怪異也、

〔扶桑略記三〕承暦四年十二月廿四日、天下大赦、依明年辛酉之御愼也、

〔兵範記〕嘉應元年六月廿三日戊申、詔、述父志者孝子之道也、朕雖幼稚仰慕之、崇佛教者哲后之政也、

朕雖庸昧庶幾之、禪定仙院白〇後宿福内催明信外潔機緣有時、新滿定水於汾陽、五十箇日殊殖善根

於焚油、推其歸法之寂慮、定有解冤之慈心、宜施肆皆之深仁、以添十力之加護、其大赦天下、今日昧爽

以前、大辟以下罪無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、繫囚見徒、私鑄錢犯八虐、強竊二盜、常赦所不

免者、咸皆赦除、抑陽光遍照于遠近、霑澤豈別于薰蕕、仍須未得解由徒、不論僧俗、同以原免、庶依蒼生

之歡忻、必彰白業之威應、布告中外、俾知朕意、主者施行、

嘉應元年六月廿三日 御畫三字 廿三日

左獄五十一人 右獄四十二人 無拘者

便所百三十四人 已上二百二十七人

流人中被召返僧侶十五人

僧辨禪後 辨鏡阿波

〔續日本後紀^{十八}〕嘉祥元年六月庚子改承和十五年爲嘉祥元年下詔曰○中自今日昧爽以前大辟以下罪無輕重未發覺已發覺未結正已結正繫囚見徒咸皆赦除但犯八虐故殺謀殺私鑄錢強竊二盜常赦所不免者不在赦例

〔三代實錄^{二十}〕

清和一

貞觀十四年三月九日己卯詔曰酌訓皇源陶風帝籙未有不施厚恩以崇盛德降殊

貨以愍元功者朕外祖父太政大臣藤原朝臣^原○其功蓋三代位極上台仁襟被九州而有餘德水露^露

千里而無盡自朕在襁褓以至今時言其顧復保佐之勤豈以周旦漢光爲伍^略○而今寢瘼私第

日月彌留珪幣相尋祈禱未効朕自鍾此患寢食無安心墮思焦言與淚俱深患救復之方誠無所不到

矣聞諸內經度人歸道之功能救人之厄命又先王德政議獄緩刑矜老養孤若施斯仁貸副厥篤情縱

雖病在膏肓幸使箴藥得其宜賜度者八十人又大赦天下今日昧爽已前所犯大辟已下罪无輕重已

結正未結正已發覺未發覺皆赦除唯犯八虐故殺謀殺私鑄錢及強竊二盜常赦所不免者不在赦限

〔三代實錄^{三十八}〕

開成

元慶四年十二月四日癸未詔曰頃者太上天皇^和○清聖躬乖豫德沼驚定水之波仁

山動愁雲之色朕以菲虛恭承洪緒薄禮敬於六宗禱冥護於三寶而精誠未達感激猶遲思懃肆眚之

恩更致延祚之慶可大赦天下自元慶四年十二月四日昧爽以前大辟以下罪无輕重已發覺未發覺

已結正未結正繫囚見徒私鑄錢八虐強竊二盜常赦所不免者咸皆赦除之且夫仁風一扇焉有偏枯

惠澤普施實宜滂沛仍須未得解由之徒不論僧俗同皆放免若赤心之不虛庶皇天之可動七日丙

戌左右檢非違使於左衛門府南門出詔獄繫囚左百六人^{着錄八十一人未}右九十四人^{着錄七十九人未}

五總二百人一時放却賜錢各三十文是日太政官頒下詔書於文武百官及五畿內七道諸國符僞今

月四日詔書曰可大赦天下元慶四年十二月四日昧爽以前大辟罪無輕重已發覺未發覺已結正未

結正繫囚見徒私鑄錢八虐強竊二盜常赦所不免者咸皆赦除且未得解由之徒不論僧侶同皆赦免

者今須准承和天安之例已言上未言上原其身犯不得拘責但未言上者後司造會赦帳前後共署限

丕構詢以政塗陰庇生靈期於事濟夫赦令者本稱姦人之幸亦有奔馬之喻朕非不知之但欲令其悔惡自新變舊遷善加之特有所念咸事興懷宜流肆眚之恩式暢作解之典可大赦天下自天長十年六月八日昧爽以前大牌以下罪无輕重已發覺未發覺已結正未結正繫囚見徒咸赦除之唯犯八虐故殺謀殺私鑄錢強竊二盜常赦所不原者不在赦限又去弘仁元年坐事配流者雖自陷朝憲而久憐淪窮安倍朝臣清繼百濟王愛答故藤原朝臣仲成男等並量徙入近國從五位下藤原朝臣貞本殊放還京遠告赤縣莫後青衣敢以赦前事告言者以其罪罪之己巳罪人安倍朝臣清繼元配伯耆國今移美作國百濟王愛答元安房國今移參河國辛未罪人藤原永主同山主藤主等天長二年從日向國還配豐前國今移備前國永野淨津元配越前國伊勢安麻呂元配能登國今並移若狹國閏七月癸未勅弘仁年中犯罪僧藥師寺良勝被配多嶺島西大寺泰山隱岐國興福寺康信石見國元興寺永繼信濃國今並特放還入京都

〔續日本後紀^{仁明}〕承和八年十一月丁酉朔旦冬至也公卿上表慶賀丙辰詔曰賦象不忒九玄施仁與物爲春一人救世故能功高振古軒黃之化允諧事美遐年助華之業逾岐朕以寡昧忝臨黎苗撫事思愆每深懷抱適者有司奏言今年十一月朔旦冬至當天統之嘉數發無賜之不基歷駕說而希聞忤上德而演貶夫乾鑿玄遠必感聖基願朕非虛何入靈聰故今思與天下共斯休祉自承和八年十一月廿日昧爽以前徒罪以下不論輕重一從免除但八虐故殺人謀殺人強竊二盜私鑄錢常赦所不免及欠負官物之類不在赦限若以赦前事相告言者以其罪罪之

〔續日本後紀^{仁明}〕承和九年八月庚寅太宰府言豐後國言前介正六位上中井王私宅在日向郡及私營田在諸郡任意打損郡司百姓因茲吏民騷動未遑安心又本自浮宕筑後肥後等國威陵百姓妨農害業爲蠹良深中井尙欲入部徵舊年未進兼徵私物而調庸未進之代便上私物倍取其利望請准據延曆十六年四月廿九日格旨令還本云^{○云云}太政官處分罪會去七月十七日恩赦宜身還本鄉

不免者不在赦例、

〔續日本紀^{三十}〕延曆元年七月丙午詔曰朕以不德臨取寰區憂萬姓之未康憫一物之失所況復去

祖武

歲無稔懸磬之室稍多今年有殘天殍之徒不少朕爲民父母撫育乖術靜言於此還愆於懷又顧彼有罪責深在予若非濫蕩何令自新宜可大赦天下自天應二年七月二十五日昧爽已前大辟已下罪無輕重已發覺未發覺已結正未結正繫囚見徒悉皆赦除但犯八虐及故殺人私鑄錢強竊二盜常赦所不免者不在赦限若入死罪者並減一等鰥寡惻獨貧窮老疾不能自存者量加賑恤

〔續日本紀^{四十}〕延曆九年閏三月壬午詔曰朕以寡德臨取寰區哀相尋災變未息轉禍爲福德政居

祖武

先思布仁恩用致安穩宜可大赦天下自延曆九年閏三月十六日昧爽已前大辟已下罪無輕重已發露未發露已結正未結正繫囚見徒私鑄錢八虐強竊二盜常赦所不免者咸皆赦除其延曆三年以往天下百姓所負正稅未納言上及調庸未進者咸免除之縱未言上無由徵納者亦免之神寺之稻宜准此例焉

〔日本後紀^{十二}〕延曆廿三年十二月丁卯詔曰朕有所思欲施恩澤宜赦天下自延曆廿三年十二月廿

祖武

六日昧爽已前大辟已下罪無輕重皆咸赦除但強竊二盜及私鑄錢常赦所不免者不在赦限敢以赦前事相告言者以其罪罪之普告天下知朕意焉

〔類聚國史^{百六十五}〕天長三年十二月壬戌詔曰朕○淳和以味德忝纂君臨乘奔軫懷納隍銷志分育廢

祥瑞

寢憂萬方之未安興晨忘食懼八政之或殊近有非雲見諸内外公卿表賀辭不敢當尙亦頻奏推之不得誠如來表豈謂在己此則七廟之靈感恩如在二儀之感微祥自臻今欲報德蒼天寄彼祖宗播惠黎烝共此嘉貺可大赦天下自天長三年十二月卅日昧爽已前大辟以下罪無輕重未發露已發露未結正已結正繫囚見徒咸皆赦除但犯八虐故殺謀殺私鑄錢強竊二盜常赦所不免者不在赦例

〔續日本後紀^二〕天長十年六月甲子詔曰雲行雨施穹蒼所以宣慈含垢覆瓿元后於焉播澤朕肅承

仁明

申勅曰在京見禁囚徒大辟已下悉皆赦除但逆賊仲麻呂及淡路公仁○淳船王池田王等與黨不在赦限

〔續日本紀二十〕天平神護二年四月丁未勅比日之間緣有所念歸依三寶行道懺悔泣罪解網先垂

仁迹冀施恩恕盡洗瑕穢宜可大赦天下自天平神護二年四月二十八日○恐當作二十二日昧爽已前大辟已

下罪無輕重已發覺未發覺已結正未結正繫囚見徒私鑄錢及八虐受財枉法監臨自盜盜所監臨強盜竊盜常赦所不免者咸悉赦除但先後逆黨不在赦原普告天下知朕意焉

〔續日本紀三十〕寶龜元年六月壬辰朔勅曰朕以菲薄謬承重基撫育羣方黎首失所顧念泣罪情慘納

隍屬有所思欲流渙汗可大赦天下自神護景雲四年六月一日昧爽以前大辟罪無輕重已發覺未發覺已結正未結正繫囚見徒及強竊二盜咸赦除之其八虐私鑄錢常赦所不免者不在赦限但前後逆

黨緣坐人等所司量其輕重奏聞普告天下知朕意焉 七月癸未太政官奏奉去六月一日勅前後逆

黨緣坐人等所司量其輕重奏聞者臣曹司且勘天平勝寶九歲逆黨橘奈良麻呂等并緣坐總四百四十三人數內二百六十二人罪輕應免具注名簿伏聽天裁奉勅依奏但名簿雖編本貫正身不得入京

〔續日本紀三十二〕寶龜四年正月辛未勅曰朕以寡薄忝承洪基風化未洽恒深納隍之懷災祥屢臻彌

軫臨潤○潤發之念今者初陽啓曆和風扇物天地施仁動植仰澤思順時令式覃寬宥宜可大赦天下

自寶龜四年正月七日昧爽已前大辟已下罪無輕重已發覺未發覺已結正未結正繫囚見徒咸皆赦除但八虐強竊二盜私鑄錢常赦所不免者不在赦限

〔續日本紀三十三〕寶龜四年十二月乙未勅增益福田憑釋教之弘濟光隆國祚資大悲之神功是以比

日之間依藥師經屈請賢僧設齋行道經云應放雜類衆生朕以雜類之中人最爲貴至于放生理必所

急加以陽氣始動仁風將扇順此時令恩施霈澤可大赦天下自寶龜四年十二月廿五日昧爽以前大辟已下罪無輕重已發覺未發覺已結正未結正繫囚見徒咸皆赦除其犯八虐故殺人私鑄錢常赦所

赦除之。但八虐故殺人謀殺殺訖私鑄錢強竊二盜常赦所不免者不在赦限。

〔續日本紀^{十七}〕天平二十年三月戊寅宣勅朕以薄德君臨四海夙興夜寢憂勞兆民然猶風化未洽犯

禁者多是訓導之不明非黎首之愆咎萬方有罪在予一人咸洗瑕穢更令自新宜大赦天下自天平二十年三月八日昧爽已前大辟已下咸悉赦除。

〔續日本紀^{十七}〕天平勝寶元年四月乙未大赦天下自天平二十一年四月二十一日昧爽已前大辟罪已下咸悉赦除。

〔續日本紀^{十九}〕天平勝寶六年十一月戊辰勅朕以至款奉爲二尊御體平安寶壽增長一七之間屈四

十九僧歸依藥師琉璃光佛恭敬供養其經云懸續命幡然四十九燈應放雜類衆生竊以放生之中莫若救人宜依慈教可大赦天下但犯八虐故殺人私鑄錢竊盜強盜及常赦所不免者不在赦限若入死罪並減一等。

〔續日本紀^{二十}〕天平寶字四年十一月壬辰勅先歲逆徒家掛羅網今年巡察人畏憲章古人有言盜

窺財主有自來焉撫躬自訟責歸元首靜言與念憂心如灼書不云乎德惟善政政在養民今陽氣初萌日南既至地惟育物天道更生思承地施仁順天降惠俾茲黔庶與時競新其自天平寶字四年十一月六日昧爽已前天下罪無輕重已發覺未發覺繫囚見徒并通租調官物未納已言上者悉赦除之但犯

八虐故殺人私鑄錢叛徒隱不首者不在免限前年已赦今歲亦除竊恐人習寬容終無懲改冀合悉停前惡皆從後善。

〔續日本紀^{二十}〕天平寶字八年十月己卯勅曰朕忝臨萬邦軫慮一物昧旦思治夕惕兢兢而賊臣仲

麻呂昏囚狂悖作逆遭亡天網高張咸伏誅戮朕念黎庶洗滌舊惡遷善新美宜大赦天下自今月十六日昧爽已前大辟已下罪無輕重未發覺已發覺未結正已結正皆赦除之但仲麻呂與黨及常赦所不免者不在赦限亦頃年水旱荐失豐稔民或飢乏仍以軍興宜免天下今年租布告遐邇知朕意焉。甲

平九年五月十九日昧爽以前死罪以下咸從原免其八虐劫賊官人受財枉法監臨守主自盜盜所監臨強盜竊盜故殺人私鑄錢常赦所不免者不在赦例

〔東大寺正倉院文書二十九〕但馬國天平九年正稅帳

依天平九年五月十九日恩勅賑給高年及鰥寡惻獨之徒合壹仟貳佰壹拾壹人穀肆佰捌拾捌斛肆

斗九十十歲十人一人別八斗八十歲以下

賣免罪赦書來驛使單壹拾伍日從五日將

丹後國史生正八位上前村主稻麻呂將從

二人合三人經二日別給米五升酒一升從

從二人合三人經三日別給米五升酒一升將

賣免罪并賑給赦書來驛使單壹拾貳日從五日將

丹後國目正八位上薩摩寸國使將從

人合三人經二日別給米五升酒一升從

從二人合三人經三日別給米五升酒一升將

〔續日本紀十三〕天平十年正月壬午立阿倍內親王○孝爲皇太子大赦天下但謀殺殺訖私鑄錢強竊

二盜不在赦限若罪至死降一等

〔續日本紀十四〕天平十三年九月乙卯勅以京都新遷大赦天下天平十三年九月八日午時以前天下

罪人大辟已下已發覺未發覺已結正未結正無問輕重咸釋放却其流人未達前所已達前所及年滿

已編附爲百姓亦咸釋放還其在流所生子孫父母已亡無可隨還者亦○原書作前不限年之遠近情

願還皆錄名聞奏但不願還者悉聽之又緣道人廣繼入罪者咸從原免

〔續日本紀十六〕天平十八年三月丁卯勅曰興隆三寶國家之福田撫育萬民先王之茂典是以爲令皇

基永固寶胤長承天下安寧黎元利登仍講仁王般若經於是伏聞其教以慈爲先情感寬仁事深隱惻

宜天平十八年三月十五日昧爽以前大辟以下罪無輕重未發覺已發覺未結正已結正繫囚見徒咸

輕重已發覺未發覺已結正未結正繫囚見徒沒爲奴婢及犯八虐常赦所不免者成赦除之其私鑄錢及竊盜強盜並不在赦限但鑄盜之徒合死坐降罪一等諸老人歲百以上服穀伍斛九十已上叁斛八十已上壹石孝子順孫義夫節婦表其門閭終身勿事鰥寡惻獨篤疾重病之徒不能自存者宜令所司量加賑恤

〔續日本紀元七正〕養老元年十一月癸丑天皇臨軒詔曰朕以今年九月到美濃國不破行宮留連數日因覽當者郡多度山美泉略○中美泉即合大瑞朕雖庸虛何違天貺可大赦天下改靈龜三年爲養老元年

略○中亡命山澤藏禁兵器百日不首復罪如初

〔續日本紀元六明〕靈龜元年正月癸巳詔曰今年元日皇太子武○聖始拜朝瑞雲顯見宜大赦天下但犯八

虐私鑄錢盜人常赦所不原者並不在赦限

〔續日本紀元七正〕靈龜元年九月庚辰受禪即位于大極殿詔曰略○中粵得左京職所貢瑞龜略○中其改和

銅八年爲靈龜元年大辟罪已下罪無輕重已發覺未發覺已結正未結正繫囚見徒成從赦除但謀殺殺訖私鑄錢強竊二盜及常赦所不原者並不在赦限

〔續日本紀元九正〕養老六年六月丙子詔曰陰陽錯謬災旱頻臻由是率幣名山奠祭神祇甘雨未降黎元

失業朕之薄德致于此歟百姓何罪燠萎甚矣宜大赦天下令國郡司審錄冤獄掩骼埋胔禁酒斷屠高

年之徒勤加存撫自養老六年七月七日昧爽已前流罪以下繫囚見徒成從原免其八虐劫賊官人枉

法受財監臨主守自盜盜所監臨強盜竊盜故殺人私鑄錢常赦所不免者不在此例如以賊入死並降

一等竊盜一度計賊三端以下者入赦限

〔續日本紀元十二武〕天平九年五月壬辰詔曰四月以來疫旱並行田苗燠萎由是祈禱山川奠祭神祇未得

効驗至今猶苦朕以不德實致茲災思布寬仁以救民患宜令國郡審錄冤獄掩骼埋胔禁酒斷屠高年

之徒鰥寡惻獨及京內僧尼男女臥疾不能自存者量加賑給又普賜文武職事以上物大赦天下自天

之徒、不論僧侶、同以原免、若有天心之答、丹誠何無、萬壽之增、玉體普告、中外俾知朕意、主者施行、

仁平三年九月廿三日

大内記遠明作之

〔百練抄^{六七}〕仁安三年二月十六日、依入道太政大臣病^{○平}、被行非常赦、

〔百練抄^{七八}〕嘉應元年六月廿三日、依上皇^{○後}、御逆修初七日、被行非常赦、并被召返、流入十五人、但

興福寺前別當惠信、長谷寺前別當宗覺等、不被召返、依本寺訴也、

〔吉記〕安元二年六月十八日辛卯、依同御備^{○高倉母}、今日被行非常赦、觸大神宮訴者之外、皆以赦、如

輕犯之輩、定百五十餘人云々、頭弁奉院宣參内仰上卿三條大納言、不待詔書施行、且可令原免之由、

召左衛門權佐光雅、被仰之、奉官人等向南門^{○中}、敕事昨日雖有沙汰、依公家御衰日延引、今日所被

行也、詔書奉行中務權大輔經家云々、

〔吾妻鏡^五〕文治元年十月十六日乙丑、豐後國住人白杵二郎維隆、緒方三郎維榮等、去年合戰之間、破

却宇佐宮寶殿、押取神寶、依之、雖被下配、流官符去四日、遂非常赦云云、

〔百練抄^{後十}〕文治元年九月四日甲申、被行非常赦、依東大寺大佛開眼也、

〔古事談^二〕非常ノ赦ハ、爲人極悅事ナレバ、九條殿^{○藤原}御流ハ、詔書ノ草ヲ奏時、清書以前召仰

其由也、

大教
常教

〔日本書紀^{十五}〕元年正月立皇后、難波小野女王、赦天下、

〔日本書紀^{二十}〕白雉元年二月戊寅、穴戶國司草壁連醜經獻白雉、甲申詔曰、四方諸國郡等、由天

委付之故、朕總臨而御宇、今我親神祖之所知、穴戶國中、有此嘉瑞、所以大赦天下、改元白雉、

〔日本書紀^{二十}〕十年正月甲辰、東宮太皇弟奉宜^{○或本云、大友}、施行冠位法度之事、大赦天下、

〔日本書紀^{二十}〕十九年八月己丑、勅爲日高皇女^{○更名新}、之病、大辟罪以下男女并一百九十人、皆赦

之、

今夜還宮之後、左近衛大將源雅定卿、留仗座行詔書事、大內記長光持參詔書草、欲令內覽之處、攝政○藤原於不誤坐禁中給御座、近衛殿仍以藏人令奉往反之間、天明畢、晝口後、下中務省抑如此之時、先例攝政候禁中給歎座里第給之間、事及遲々似無用意歟。

詔懲惡勸善者、明王之彝範也。君道所以稱美、綏刑宥過者、賢哲之芳躅也。民心所以誇仁、隨時之義、長傳令典、朕謬以童稚之身、忝膺皇圖之運、馭俗化薄、未施南薰之風、歸佛志深、將弘東漸之教、爰白河之名區者、赤縣之勝地也。四代賢主之仁祠矣。接簷連甍、諸宗名德之行業焉。積功累德、就此吉土、建以梵宮、當輪奐之甫就、安諸尊容、定門々額之新題、號延勝寺。方今擇三月之良辰、設一日之齋會、廻駕輿而助軌儀、禮烏瑟而抽懸篇、倩思黔首之勤勞、廻省金科之刑法。其大赦天下、今日味爽以前、大辟以下、罪無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、繫囚見徒、私鑄錢犯八虐、強竊二盜、常赦所不免者、咸皆赦除。但觸神社訴之輩、不在赦限。又陽輝所照、一天悉受其明、霈澤所覃、四海同得其潤。仍須未得解由者、不論僧俗、同以原免。庶依伽藍之護持、繼重華之聖德。普告遐邇、明俾聞知。主者施行。

此詔書文、後日有被改事、但觸神社訴之輩、不在赦限。被改云石清水宮寺訴申、射損肥後國藤崎神馬神人、并賀茂社訴申、土佐國在廳官人殺害神人黨類、日吉社訴申、於越中國殺害神人者等、不在赦限云々。此事不被仰上卿只藏人權右中辨光賴仰內記令改加之、密々有御盡口事云々、已背先例也。

〔本朝世紀〕仁平三年九月廿三日己酉中納言公能卿著仗座、有非常赦詔書事、依一院○鳥羽御儀也。

詔禪定仙院、聖躬乖和、痊愈是遲、旬日漸過、德山之上宿霧、暗兮未晴、定水之間、大風扇兮不靜、朕承龍圖以降、隔鴻化仰蒼穹、以將延松等、救療之懷至深、感應之道盡達、夫百行之本、無先於孝、肆皆之思、既出于仁、宜解禁網於一面、專獻仙齡於萬年、可大赦天下、自仁平三年九月廿三日味爽以前、大辟以下、罪無輕重、已發覺未發覺、已結正○已結正下恐未結正三字繫囚見徒、私鑄錢犯八虐、故殺謀殺強竊二盜、常赦所不免者、咸皆赦除。但觸神社訴之者、不在赦限。抑大陽所照、何論窪窪、霈澤攸霑、無別蘭艾、仍未得解由。

實、先申、錄參之由、
歟。○又見殿曆。

〔殿曆〕永久元年六月廿三日壬申、辰刻許、五位藏人雅兼來云、今日可被行非常敕者、予申云、謹承了、依詔書事可參內之由仰雅兼了、申刻許參內依御物忌有宿所上卿別當參陣以雅兼敕之由予調云、依主上御儀、又有院、仰下了、詔書內覽雅兼清書持來、予書御晝日了、今夜侍宿雅兼來仰云、非常敕事也、件事昨日以別當被仰也、事趣行非常敕之後、南京大衆猶可發歟將不可發歟予申云、被行敕事、誠可然候也、但大衆發否之條、極難量思給候也、其後又歸來云、先陸觀經覺兩人可掃寺中、其後於敕者思量、天可被仰、仍其由昨日仰下寺家了、

〔中右記〕大治四年六月七日、今夕有非常敕、上卿別當右衛門督實行卿、是依女院○鳥羽后、後院璋子御產御祈被行也、無被物者云々、大內記宗光作詔書也、

〔中右記〕大治四年七月十九日、頭弁雅○源來膝突云、依禰定法王河○白崩給、被行非常敕、詔書令作與予

召大內記宗光仰件趣被○召、也持來草、入以大內記令內覽、返給令清書依幼主御時不、院○鳥羽仰云、去七

日早旦、欲行此敕之處、法王崩給了其後早々欲行依日次○次下恐、宜引及今日也、件敕已無先例、但

三條院初、依冷泉院崩給被行云々、不似今度例、仍只有議禰定法王八、朕曾祖父也、被作也、近有非

常敕、在民調庸未進欠不載歟、

〔中右記〕保延三年十月十五日、鳥羽御堂供養非常敕被行之上○神廟伊通、神宮八幡、日吉社訴者非免限、內記不

候、仍大學頭時登草之、今年非常敕三ヶ度、希代之例也、

〔台記〕康治二年五月十四日庚午、不他行依庖瘡并公家御儀、有非常敕云々、

〔本朝世紀〕久安五年三月廿日壬寅、今日有御願延勝寺供養事、○中藏人頭左近中將經宗朝臣自法

皇羽○鳥御所方來、公卿座上頭仰左大將雅定卿云、可有非常敕、但觸神社訴之輩等不在敕限云々、雅

定卿起座、召大內記長光仰詔書事、又召左衛門權佐光賴、被仰詔書施行以前、可免囚人之由了、○中略

藏人弁顯隆奏聞御晝日了二字六日也返給歸着本座召外記尋中務參否外記申云少輔弁丞只今俄難催遣或以故障或又不申返事已及夜半但錄參陣頭者大略實雖不參氣色許歟以外記傳給予入寫依召參御直廬被仰云多武峯興福寺闖亂之輩已以逢恩赦不可有沙汰故御寺智尊律師以下勘當輩早可免給也其由召弁別當爲隆相共議定可下長者宜者則於御前與爲隆共相議下御教書於多武峯御寺了及鷄鳴歸家

〔中右記〕天永二年九月廿三日早旦參一條殿晚頭歸家之間從內有召着束帶入夜之後參仗座頭弁○藤原實行來仰云公家依有御慎可被行非常教但觸伊勢大神宮八幡宮訴者非赦限者予○藤原宗忠尋申

云如此事多可依其年例之由所被仰下也然者如何頭弁答云取御氣色可仰者則參御前之間予移着端座令官人敷膝突頭弁來云依天仁二年例可行者件年依御慎被行非常赦也次令官人召大內記敦光內々先大內記上官等被召儲也敦光來予仰件旨早可作詔書之由仰下之處敦光陳云如此赦令之事雖被秘密同先內々奉行職事被告送事也今度全不然只依召馳參也草詔書之間定遲令歟所陳尤理也如此大事猶內々可被告上卿并內記許歟大內記奉仰於陣腋作詔書之間予召外記可催中務輔丞間一人之由仰含了不經幾程大內記持來詔書草寫入披見之處無殊難歟敦光早筆終功可謂文之事隨手人歟仰可內覽之由返給今間殿下御于直廬也則歸來云又不可內覽及深更之故也早仰可清書之由草清書共可內覽奏聞也大內記歸入之後令外記召右衛門權佐重隆則來膝突東帶野側但不付平予仰云公家依可有御慎被行非常赦詔書施行以前且可原免囚人等但觸伊勢大神宮并八幡宮訴者非免限重隆奉仰引率檢非違使等行向左右獄門歟左衛門權佐實光依服假不參也仰只仰右佐許也清書以前免囚人是家之習也大內記持來清書寫入見了令持大內記渡南庭行東中門下離弓場殿也付頭弁奏聞則返給下令書初晝日給也返給之間先披見御晝有無後給內記歸着陣座內記置座前召外記尋中務輔丞等參否申云依事俄皆以他行或申障但錄候陣頭者仍以外記傳給予入寫其後退出錄必不參陣頭大略爲故

兩文章博士至江中納言大江匡房勅文者令朝永長被撰上也江中納言被勅中後大內記俊信有
附藏人宗仲被奏從御所下給左大臣○源俊房永長被撰上也江中納言被勅中後大內記俊信有
障不參仕奏事由以左少弁有信令作詔書詔書草付藏人弁時範被內覽并奏直下御清書又如此大
外臣乍在仗下已發覺未發覺已結正未結正未得解由并私鑄錢八虐未得解由出恐解其一皆被
原免但謀殺故殺強竊二盜不在免限者又在民身調庸未進限某年以往雖可被免去八月已被行非
常赦故今夜無件事只復今年半循者○中今度有可被行非常赦云々一年之內兩度被行非常赦之
例被尋問大外記定俊真人憶不申仍行常赦後開承曆元年之中之後定俊真人申有例由寬弘八年
也承曆元年依隨者被行其冬十八日參殿下藤原付惟輔以詞令申事役夫工使間爲神人成濫
行者可會夜前赦哉否事上卿被詔文觸神祇訴者無左右詞但故殺謀殺強竊二盜者不被免也又至
八虐者被免了依件事數度往反江中納言宅被仰云今明日次不宜來廿一日付時範可令申以職事
可被問法家之義歟

〔本朝世紀〕康和元年七月廿五日丙寅左大臣源參入被行非常赦令天變地震疾疫等也神宮住吉
○藤原伊勢太
訴者藤井範忠
○藤原伊勢太
○藤原伊勢太

〔中右記〕天仁元年十月六日壬午藏人弁藤原仰云近日天變頻示恠異屢侵依如此事可被行非常
赦早可令作詔書但觸伊勢大神宮并八幡宮訴者非免限者予宗忠藤原答云依何年例行哉多依其
年例行之由被仰或又僧侶未得解由輩可原免歟但長元五年承保四年依如此事被行非常赦重可
取御氣色歟藏人弁重來云依承保四年例行可行者藏人弁談云今日敕令依千僧御讀經被移着端座
令敷膝突以官人令召大內記兼曾被大內記敦光參之敕令之趣下知了頃而草持來付大內記令內
覽殿下御子仰云重又不可奏早々可令清書仰其旨了又雖可奏攝政時草清書二被省略常事歟
此間召右衛門權佐實光仰敕令趣詔書施行以前且又可免囚人之由仰下了頭相分遣東四獄門了
藏人弁兼左衛門權佐同可仰下也而依沙汰職事留禁中也清書持來紙黃見了返給暫立小庭予進弓場殿付

給湯藥、僧尼亦同、布告天下、知朕意焉。

〔百練抄〕

一、長德三年四月五日、前帥、

○藤原伊周

出雲權守

○藤原隆家

等、可召返之、由宜下、去月廿五日、依東

三條院

○藤原賴子

御惱非常、敕可潤恩、詔哉、否、令諸卿定申、遂有恩免也。

〔法成寺金堂供養記〕治安二年七月十四日壬午、左大臣

○藤原賴通

奉勅語、臨於堂東南、檼召大外記清原

真人賴隆、被仰云、可召內記檢非違使者、賴隆稱唯退出、即令參大內記菅原朝臣忠貞、左衛門權佐大

江朝臣保資、各承宣旨退出、是依前大相國有被奏、被行非常大赦也、大臣又召賴隆真人、被仰云、大赦

詔早可下、給可、令試候緣事、諸司者、各召使部召仰了、其詔書曰、

詔朕以薄德、謬承洪基、愧君臨而及七年、思子育而慎口、爰外祖前大相國

○藤原道長

營道場於城東

之地形、設供養於珪白之秋禮、聽善根之至焉、廻翠華而臨矣、新見土木之壯麗、更知人民之勤功、禪

慮所請、唯施仁之情而已、大赦天下、今日味爽以前、大辟以下、罪無輕重、已發覺未發覺、已結正未結

正、繫囚見徒、私鑄錢、八虐、強竊、二盜、常赦所不免者、咸皆赦、又薰風者、應口扇惠露者、欲普霑、仍須未

得解由之徒、不論僧俗、同以原免、庶因功德之兼、二世將顯威勳之在一、天、布告中外、俾知朕意、主者

施行、

〔小右記〕萬壽四年十一月十三日己酉、民部大外記賴隆來云、今日被行非常赦、依前太政大臣

○藤原道長

病、按察大納言行成

○大內記作部

右衛門權佐爲善奉宣旨、先是別當經通卿來、簾下訪所勞、又陳可有赦令

之由、

〔中右記〕寬治四年九月廿五日、有非常赦、是依主上

○堀河

御厄年、并今年近日疾疫發聞也云々、

〔中右記〕永長元年八月二日己未、今夜被行非常赦、上卿治部卿是依女院都芳門院媿子內親王御惱

也、但願伊勢大神宮并八幡宮訴者、不被免也、藏人并時範奉行、

〔中右記〕永長元年十二月十七日癸酉、秉燭之程、左大弁

○藤原季仲

被參入、以藏人并時範被下、年號勅文、

說及身死者亦餘皆徵之○疏者倍備若計庸貨為贓者亦勿徵會教及降者盜詐枉法猶徵正賊疏略

餘贓非見在及收贖之物限內未送者並從赦降原疏略
〔令義解〕凡犯罪及欠損官物經赦降合免別勅遣推徵者依赦降例執聞已前假令免罪及欠損官私物經赦降應須赦免若有罪狀未聞也

〔令集解〕七尼和銅元年正月廿二日太政官處分僧尼犯徒以上還俗應從會教免者聽為僧尼也

〔類聚三代格十二〕太政官謹奏

赦書出三百六十日後不可原免事

右謹案名例律凡略和誘人若和同相賣及略和誘家人奴婢若嫁賣之即知情要買等雜類赦書到後

百日內首略中

弘仁四年三月廿日

〔續日本紀〕元明慶雲四年七月壬子天皇即位於大極殿詔曰略中大赦天下略中亡命山澤挾藏軍器

百日不首復罪如初

〔續日本紀〕元正養老元年十一月癸丑天皇臨軒詔曰朕以今年九月到美濃國不破行宮留連數日因

覽當耆郡多度山美泉略中美泉即合大瑞朕雖庸虛何違天貺可大赦天下改靈龜三年為養老元年

略中亡命山澤藏禁兵器百日不首復罪如初

非常教

〔續日本紀〕元正養老二年十二月丙寅詔曰朕虔承寶位仰憑霄構君臨天下四年于茲上則昊穹下字

黎庶庸愚之民自挂疎網有司之法實于常憲每念於此朕甚慙焉思欲廣開至道遐屆淳風為惡之徒

感深仁以遷善有犯之輩遵令軌以靡風但自昔及今雜言大赦唯該小罪八虐不需朕恭奉為太上

皇元明思降非常之澤可大赦天下養老二年十二月七日子時已前大辟罪以下罪无輕重繫囚見徒

私鑄錢并盜人及八虐常赦所不原咸赦除之其廢疾之徒不能自存量加賑恤仍令長官親自慰問象

承保四年五月四日

左衛門權佐藤原朝臣敦宗

〔柱史抄_下〕敕令事

當日隨職事告即以參陣上卿召內記仰云依其事被行敕令詔書可草進者內記問可被用何年例哉上卿被示者非其限不然者相逢職事可尋者尋問子細之後內記成詔草入宮持參之內覽奏下如恒即清書清書之後覆奏如例必有御書返給上卿乍居座召中務輔若丞給之輔丞若不參召外郎外郎記於宣仁門外召錄給也次召檢非違使可免囚人之由被仰之但九條殿師輔原流召內記仰詔草之後不待詔書之施行可免之旨召廷尉仰之是即雖一時不可逗留可免赦給之故云々抑常赦其例非一改元朔旦冬至御即位御元服等多是常赦也其詞云今日味爽以前大辟以下罪無輕重已發覺未發覺已結正未結正繫囚見徒皆以赦除或依先例有高年者賑給事大赦大辟以下八虐故殺人等咸皆赦除但常赦所不免者不在赦限者大赦絕而不被行常時所被行者常赦非常赦也非常赦臨時被勅定也常赦之外犯八虐故殺謀殺強竊二盜常赦所不免者悉皆赦除之字可加也或依先例調庸未進在民身者同以免除件調庸今年以往四箇年之外免之故實也或被免徭役半徭并未得解由者也

〔禁秘御抄_下〕一敕令

世大事殊御祈之時被行恒免者別當給勘文下檢非違使或別當則爲上卿召檢非違使於祇下之

〔類聚三代格_十〕太政官謹奏

敕書出三百六十日後不可原免事

右謹案名例律○中又條云凡會赦應改正徵收經責簿帳而不改正徵收者各論如本犯律○中

弘仁四年三月廿日

〔政事要略_{五十九}〕名例律云會赦應改正徵收經責簿帳而不改正徵收者各論如本犯律

〔唐律疏議_{名四例}〕諸會赦應改正徵收經責簿帳而不改正徵收者各論如本犯律謂以贓爲盜以盜爲竊以竊爲盜以盜爲盜竊盜法義于私入道

〔北山抄六〕赦免事

仰辨但非常大赦者詔書未施行間且可免事召檢非違使佐若尉仰之釋案有仰志例自餘辨史傳宣

常赦者
別當奉

〔江家次第十八〕改元事

若有赦之時

非常赦者大臣召檢非違使佐以下一人仰詔書施行以前可免見徒由佐召檢非違使等相分向左右獄佐或帶胡篳乘馬立於獄門召出囚等仰之看督長作法佐仰云依其事變若其殊以免給各罷還本貫重犯不奉仕爲公御財御調物備進禮看督長曰乎吉囚等稱唯佐仰曰早欽取禮常赦者別當奉之令道志勘申可會赦之輩後免之

〔左經記〕寬仁四年四月廿六日丁未傳聞赦免詔出之後未被仰可免囚人等之由仍獄囚等之多愁歎云々關白殿藤原通聞食此由令頭中將間中宮大夫大夫齊信被申云大赦之時召使官人仰可免

囚人之由恩赦之時不可仰下是詔書施行之後諸司知此由自可免也雖然有仰須令奏其勘文也者後日中宮權大夫能信於里亭令頭中將奏可免除犯者勘文入道殿藤原道長聞食此由被仰云自一

上之外於里第專不可奏文者甚違例事也云々

〔朝野群載十一〕赦免宜旨仰

別當正二位行權中納言兼右衛門督藤原實季宣奉勅近者乾坤屢呈變動之異華夷間有疾疫之憂消其災疹不如肆告仍可大赦天下今日味爽以前大辟以下罪無輕重已發覺未發覺已結正未結正繫囚見徒犯八虐故殺謀殺私鑄錢強竊二盜常赦所不免者咸皆赦除者蓋除刑法於三木之下拂禍殃於萬柳之外也而所司懈緩領下稽留強達明息皇字誤之心已非味爽之義宜不待施行之符早以隨原免之例者

座主僧正仁覺權僧正隆命參朝于飯方令祈申又在陣外讀經法花參入渡殿僧侶濟々參入奉祈玉體河○晚頭中宮大夫師忠卿參仗座行非常赦依御藥也付藏人少納言成宗被奏詔書草但伊勢大神宮訴者并八幡宮訴者非免限又寛治五年以往調庸未進悉以原免者御晝日玉體乖例之間相替殿下師○藤原令書給也又詔書未施行前且可免囚人之由上卿或進被申請或又從御所進所被仰下也者今度無左右仰又上卿不被申請只上卿且可被仰左衛門權佐有信有信向獄門原免囚人云々續日本紀文武大寶元年十一月乙酉太政官處分承前有恩赦罪之日例率罪人等集於朝庭自今以後不得更然赦令已降令所司放之

〔三代實錄六清和〕貞觀四年七月十五日壬午下知五畿七道諸國進會赦帳程准不與解由狀之期

〔延喜式二十九刑部〕凡犯罪會赦及降合免者並據赦降出日免罪

〔延喜式二十九刑部〕凡罪人會赦合放者省即免之不可申官

〔新儀式五臨時〕恩赦事

會赦原免者見詔書條也又臨時或依旱雨或有事故冤獄之者未斷囚人間有原免之恩其時先召仰檢非違使謂佐已上令進勘文按其罪名計其輕重下宜旨於有可免之或參議辨官等奉仰各就左右衛門府廳免之

〔小野宮年中行事〕免者事 非常赦詔書下給了即詔書施行以前可原免常赦所不免者之由仰檢非違使

常赦免者事 詔書出後詔書施行以前任詔文可免輕犯者之由被仰別當有宜旨書
臨時免者事 別當依宜旨上奏輕犯者勘文依宜旨原免有宜旨書

○按ズルニ此說常赦ヲ以テ輕犯ニ止マルト爲ス金玉掌中抄二中歷拾芥抄柱史抄等ノ諸書ト合ハズ

日壬申酉刻右大臣令奏去五月十八日詔草昧文削之改爲薄德大外記宣義下給之

〔春記〕永承七年五月十六日庚申督殿命云頭弁經家含關白藤原賴通命來云非常敕詔文無故殺謀殺

之文若書落歟將有先例歟若落失者命書載如何者令申云先例詔書字落事是常也後日更加入奏

之清慎公實賴原被行行恐落施行行字後日入之又九條殿藤原師輔被行之時落二ヶ字後日注入

之是等例也但此度詔文不載故殺謀殺之文是尋先例所不載也非落失古昔之例多不載此文或又

載之仰內記令勘先例令奉覽其後可隨御定也者頭弁云經成卿以忠方說所申云々奇怪事也未代

愚者難先實之所爲太希有事也者今以大內記廣經可令勘注也者十七日辛酉督殿命云大內記

持來詔書等自天應以來有非常赦卅餘度也廿度不載故殺謀殺就中延木臨時時下恐載詔書已

不載此文已是施行之詔也淺學人不得法心加難太以不足言事也者十八日壬戌右府及金吾拾

遺納言信長二品納言俊家中宮權大夫經輔左兵衛督左大弁經長宰相中將能長右兵衛督經成等

參入督殿命云詔書事大略而申執柄已了延木臨時格載詔施行已了其詔文不載故殺謀殺以之可

爲規模何況此外詔書非常赦自天應以來卅餘度也廿度不載故殺謀殺今十一度載之此由具申了

又明法博士成道云以不入可爲吉也又以載此文不可爲難者也大肆死罪也無輕重免之故殺謀殺

籠此中又八虐中有故殺謀殺仍不注載也未代淺學之人不得法心忝加謗難太不足言事也可彈指

可彈指者忠方所疑以之經成卿申關白云々不覺者等也云々廿一日乙丑督殿命云頭弁書云詔

書勘文今明覽關白命云先例多不載故殺謀殺之文又延喜臨時格已不載此文全是明鏡也仍不可

載此文者督殿命云可載故殺謀殺等之事別當經成卿以源大納言令申殿下云々太不覺者等也以

不足言而已者明法博士成道云不知法心之者致荒涼難是忠方所爲云々七月廿五日大赦詔書

女院御今日持來加署名可被施行之故也件詔不載故殺謀殺之由經成卿所難也然而不被用也

〔中右記〕嘉保二年九月廿一日御物忌也奉幣後是日伊勢齋僧侶參上之例有度々者仍此曉天台

往難交易等之未進並皆停留莫責輸實但其本物隨色檢納國司實錄則自言上朕聞於舊事訪之遺
塵恩雖無涯赦亦有限而今日之所行先皇所不赦既不依祖業豈須貽孫謀後代之論者亦將知乎此
誠念欲令一蹟之曠更展足於長途再汚之婦復無心於佳會布告遐邇俾知朕意

承和九年八月廿七日

○又見續
集國史

〔本朝世紀〕天慶八年十二月七日己巳今日依天文變異有赦宥詔書先是去二日右大臣藤原實相三
次文家類奉聖典密奏先例如此之時有大教天下詔書大臣召小內記省原文時仰云依延喜五年六
歲宣勅申者並老六年七月延喜五年六月等例已了大臣召小內記省原文時仰云依延喜五年六
月例成詔書草可奉者

〔權記〕長保二年五月十八日甲午酉刻右衛門督○藤原
公任令奏未斷四人勸文依外書以詞奏之合廿九

人之中左廿三人之中八人依殺害強竊盜呪詛之者重其外或嫌疑之輩輕失田部有延疑殺害者右
者云々輕也不承伏六人殺害者二人重光緒御垣丸可免其外強盜等嫌疑刃傷之輩輕右大臣藤原
光緒被奏赦免例勘文

仰云依長德二年例可作詔書亦未斷四人之中右衛門督令申依詔可赦免之者非幾隨定可免犯狀不分
明者等歟仰云所申可然相計可原免○中
藤原戊刻右大臣藤原
光緒於便所令奏詔草詔云母儀仙院○一
藤原

藤原
餘子綺縠乖味戒席不閑惠露光危下藥之方無驗定水聲明上池之術未施朕以草昧忝承鴻基欲
痊之懷雖凝於方赤若祈之感難達於彼蒼思解般羅之斯設以獻胡福而永全可大赦天下自長保二

年五月十八日申時以前已發覺未發覺已結正未結正繫囚見徒強竊二盜咸赦除之但犯八虐故殺
謀殺強竊二盜私鑄錢常赦所不免者不在赦限布告中外普俾聞知主者施行仰云依草廿三日己

亥右大臣參入被奏云大辟以下之句欲令書載詔書其字已多重承仰事將以左右又草昧事恒衛朝
臣有所申云々若以其旨且問作者為政且問宜只今候座參議中儒者等如何仰云依天曆六年例可

加入不可改書草昧事可問暫之被奏云草昧事為政申有例之由所指已明之由式部大輔普原朝臣
忠輔朝臣等申云為政申已有例者有何難乎十二月十五日戊午此日於陣有草昧定云々廿九

〔文獻通考百七十三〕宋朝赦宥之制其非常覃慶則常赦不原者咸除之其次釋雜犯死罪以下皆謂之大赦或止謂之赦雜犯死減等而餘罪釋之流以下減等杖笞釋之皆謂之德音亦釋雜犯罪至死者其恩需之及有止於京城兩路一路數州一州之地者則謂之曲赦

〔北山抄六〕詔書事

改元改錢并敕令等類也臨時大
事爲詔尋常小事爲勅○中略

免物詔今日味爽以前或其時以前云々天皇崩時指其時其外不然者近例不定可尋舊跡舊例又不
定但有天

敕時必指其時依御藥等忽被行時又有指時之語云々檢例貞觀元慶御元服詔指時又有非常赦者即凶事有不指時之語今按不論善惡有指事被行事可指其時歟非常赦多指之云々

下詔書後召左右檢非違使仰施行以前可免獄囚之由若佐不參仰尉無并史傳宜希有例也尉以

上不參時有仰志例其時可用此例延長元年閏四月十四日左右大辨向
左右廣四人各給花一塔加一教喻免之至于常赦勸可會赦之者免

之仍別當可承也免年租稅調庸等未進之時其年限不定或當年以往四箇年之外免之或五年外免

之或去年以往或三年以往或前帝御宇以往免之以除五年免之可爲善歟今年任終國司不可濟之

年也或又免當年半徭至于正稅非免死逢赦之例然免往年未納希有恩也依元詔皆五年外免之
依瑞成時或免當年調庸

等又告諸神但
代始元免物等

〔享祿本類聚三代格十七〕詔百城煙峙振綱紀者歸乎牧千里風行班章條者存乎宰是以懸衡御辨握

鏡臨闕欲廣此慈照之功必資循良之吏朕以虛寡懋惟帝績剏珪符以責成分憂之望所馮紆銅墨以

推最求瘼之寄斯在而朝章難副國憲易纏躬不率正私顧之累方滋職乖恪居公方之節已鑒單父之

民未咸絃歌清河之吏屢陷微譴勅狀皆聞已溢斷文載車不勝近緣大行天皇○繼聖躬不豫敷暢鴻

恩洗滌群穢而有司執奏不在赦限朕悲夫春枯之樹雷蟄之蟲或身歸農野撫花髮而惕慮或志在名

節望榮路而絕思此之可愍畜于素懷宜承和九年八月廿七日以前外吏秩滿未得解由者已言上未

言上咸悉原免其未言上輩所有欠負并自借判署之類後司據實造會赦帳前後官司共署言上及未

請返抄者亦同令辨申且專有前人還累後吏論之治道誠非平適其承和二年以往雜米穀及五年以

非常赦

大辟以下八虐故殺人私鑄錢常赦所不免者皆咸除

〔二中歷_{刑注}〕三等赦書狀

常赦

大辟以下罪無輕重已發覺未發覺已結正未結正咸皆赦除但犯八虐故殺謀殺私鑄錢強竊二盜常赦所不免者不在赦限

大赦

大辟以下罪無輕重已發覺未發覺已結正未結正犯八虐故殺謀殺私鑄錢強竊二盜咸皆赦除但常赦所不免者不在赦限又老人及僧尼年百歲已上給穀人別四石九十已上二石七十已上一石

非常赦

大辟以下罪無輕重已發覺未發覺已結正未結正繫囚見徒私鑄錢犯八虐故殺謀殺強竊二盜常赦所不免者皆悉赦除謂常赦者勘可會赦之者免之仍別當奉之大赦者犯八虐故殺謀殺等不在赦限非常赦者免調庸未進之年限不定也或當年以往或去年以往或三年以往或先帝御字以往但免五年之外云々

〔拾芥抄_{下本}〕赦書云大辟以下罪咸皆赦除但八虐故殺人常赦所不免者不在赦限者此常赦也又云

大辟以下八虐故殺人等咸皆赦除常赦所不免者不在赦限者也是大赦也又云大辟以下八虐故殺人私鑄錢常赦所不免者皆赦除是非常赦

凡赦書大旨者人生_{主字}之所命命有議云々人問答云問赦書有幾種答大理可有三種以前三種三赦是也但隨人主之命可有時宜者四種以上亦令有耳云々

者ハ之ヲ原スナリ、又嫡ヲ以テ庶ト爲シ、庶ヲ以テ嫡ト爲ス類、會赦以後、簿帳ヲ責メラレテ改正セザルトキハ、本犯ノ罪ヲ科シ、人ヲ略シ和誘シ若シクハ、和同シテ相賣ルガ如キノ類、赦書到リテ後ニ、百日内ニ首セズシテ故ラニ蔽匿スルトキハ、初犯ノ本法ニ從ヒテ論ズ、而ルニ此餘ノ難犯ハ、自首ノ日限ナキヲ以テ、嵯峨天皇ノ弘仁四年ニ、三百六十日後ハ、原免スベカラザルノ制ヲ立テタリ、強盜、竊盜、詐欺、取財、枉法、贓ハ、赦降ニ會フトモ、正贓ヲ徵シ、餘贓ノ見在ニアラザルト、收贖物ノ日限内ニ未ダ送ラザルトハ、並ニ赦降ニ從ヒテ免シ、赦後ニ至リ人ノ赦前ノ罪ヲ告言スル者アレバ、其罪ヲ以テ之ヲ罪シ、受理スル官司ハ、故人ノ罪ヲ以テ論ズ、罪ヲ犯シ、及ビ官物ヲ欠損セシ人、赦宥降罪ニ會ヒテ免スベキニ別勅ヲ以テ推徴セシムルトキハ、赦降ノ狀ヲ錄シテ奏聞ス。

名稱

〔伊呂波字類抄通字〕恩赦〔同疊字〕赦免

〔年中行事歌合〕四十八番 左持 恩赦

二位中將

みことのりくだしもあへすゆるすなり罪有をたに捨ぬめぐみに

恩赦といふは、囚人の獄舎にあるを取出して免せらるゝ也、ゆるし者ども是を申にや、然べき御祈、又御佛事などに行るゝ事、常の事也、大赦とは、殊に天下の重事などにつきて俄にをこなはるゝされば、詔書の執行をまたずして、且免せらるゝ心、を此歌にもいへるにや。

〔金玉掌中抄〕赦書狀

常赦

大辟以下咸皆赦除、但八虐、故殺人、常赦所不免者、不在赦限。

大赦

大辟以下八虐、故殺人等咸皆赦除、但常赦所不免者、不在赦限。

古事類苑

法律部 十二

上編

赦宥

赦ハ、又ハ免物トモ、免者トモ云ヒテ、常赦、大赦、非常赦ノ別ハアレドモ、何レモ大赦トモ、赦ト
ノミモ云ヘリ、常赦ハ大辟以下ヲ赦シテ、八虐、故殺等ハ原サズ、大赦ハ八虐、故殺等ヲモ赦シ、
非常赦ハ有罪者ヲ悉ク赦スナリ、後ニハ非常赦ノミニテ大赦ハ行ハレズ、又臨時赦アリ、輕
犯ノミヲ赦スヲ云フ、又曲赦アリ、一地方ノ罪人ヲ赦スヲ云フ、又囚人ノミヲ放ツコトアリ、
流以下ヲ釋スコトアリ、徒以下ヲ釋スコトアリ、特ニ一二人ヲ赦スコトアリ、後ニハ大赦ト
恩赦トヲ分チテ、恩赦ハ輕犯ヲ赦スヲ云ヘリ、又恩降アリ、赦ノ類ナリ、全國ノ死囚ヲ一等降
スアリ、死流ヲ各、一等降スアリ、特ニ一二人ノ死罪ヲ降スアリ、而シテ赦降ハ祥瑞ニ由レル
アリ、慶賀ニ由レルアリ、疾病ニ由レルアリ、災異ニ由レルアリテ、其由ル所一ナラザルナリ、
又赦ヲ行フニ就キテハ、或ハ重罪ノ人ヲ宥サズシテ、其ノ罪ヲ降シ、高年ノ人ニ殷ヲ賜ヒ、孝
子、順孫、義夫、節婦ノ門閭ニ旌表シテ、終身ヲ復除シ、鰥寡、惇獨、廢疾ノ人、及ビ僧尼ヲ賑恤シ、租
調ヲ蠲キ、欠負ヲ免ス事アリ、又赦降ニ會ヒテ罪ヲ免スベキハ、赦降ノ出ル日、太政官ニ申サ
ズシテ、刑部省ニテ直チニ放免スル制ナリシガ、後ニハ檢非違使ニテ、詔勅ノ施行ヲ待タズ
シテ、釋ス事ト爲レリ、流配人已ニ上道シテ、路ニ在リテ赦ニ會フトキハ、行程ヲ計ヘ、日限ニ
過ギザル者ハ赦シ、過ダル者ハ赦サレドモ、行程ノ日限未ダ滿タザル内ニ配所ニ至リシ

赦後免前罪

五四一

恩降

五四二

不赦

五四四

赦後會赦

五四六

雜載

同

古事類苑

法律部十二

上編

赦宥

名稱

赦宥詔書

赦宥法

會赦處分

會赦自首日限

非常赦

大赦 常赦

赦流以下

赦徒以下

赦輕犯

曲赦

臨時赦

特赦

放囚賜物

五〇八

同

五一三

五一五

五一七

同

五二三

五三四

同

同

五三六

同

五三八

五四一

過一兩日優免何事之有哉然者早明日可免給也者官申狀頗無謂然而先如此之時或一兩日或兩三日不過此日數然者自本明日明後日之間存可免之由今寄事於公事依有其便所免行也但今日被免者頗可謂輕々去夜召籠之者翌日優免不可然之故與仍明日仰可免之由者也

〔古事談〕

享六

幸宅 諸道

伶人助元

助種 父歟

依府役懈怠事被召籠左近府下倉此下倉ニハ蛇蟻ナル物ヲト怖

畏之間夜半計大蛇出來

略 中

大口ヲアキテ已欲威害助元心神如無雖然ヲナ、クワナ、クワナ、クワナ

拔出テ吹還城樂破爰大蛇來留テ頸ヲ高クモチアゲテ有聞笛之氣色暫聞テ攝歸去畢云々

雅事不可爲例。應和中少將四五人伺見除目。仍令召籠左右近陣。近代地下者召籠陣。殿上人者只候禁中也。藏人或召籠橫敷仲資百日候。橫敷藏人頭私召籠恒事也。又瀧口所衆等或召籠御所中。或召籠于殿上口。片時不許。殊重時也。召籠人不從御膳。不參御前。

〔貫首秘抄〕不仕之瀧口召籠。本所ニハ不令著到。是第一之勘當也。相傷之事也。下馬寮并陣事ハ奏事由所許也。於召籠者頭任意也。

〔中右記〕寛治八年○嘉保元年十二月二日。今日頭弁○源井一膳式部丞定仲恐懼是五節之間舞姬入之後。開帳代戸萬人見了。奇怪者依件事從院○河白被仰被召問彼兩人無所陳歟。仍以勘事。頭弁縱不知。

故實雖表奇怪。職爲貫首被恐懼事如何爲藏人頭者勘事近代頗所不聞也。六日癸酉。有賀茂臨時祭○中陪膳宗忠頭被被召不該參之營也。

〔本朝世紀〕康治二年十一月廿四日丙子。今日內大臣○藤原長參入。不堪田申文。次有官奏事。右大史忠行被召籠陣。持參奏報於內大臣里第之間。聊有失錯之故云々。十二月七日己丑。右大史忠行被免召籠了。

〔本朝世紀〕仁平二年四月八日壬申。平野祭也。分配上卿參議雅通朝臣遲參。仍左少辨範家爲上代行事。後日左府○藤原長勤實行事。外記大江以陸被召籠於腋陣。是入雅通朝臣於見參奏聞之故也。

〔山槐記〕應保二年三月廿九日。有名謁○中略瀧口又名謁如去夜。召籠藏人。今夜不役。又不名謁。候橫敷。〔玉海〕安元二年五月十五日己未。此日軒廊御卜也。○中略行事史并官掌等。暫可召籠陣之由仰了。今日

事致懈怠之故也。十六日庚申。申刺許兼光送書於光經之許曰。當時六位史六人。或他事奉行。或所勞故障。仍祐重雖候陣。明日仁王會定事。令情勤如何。自官所申上也。諸司不具之責者兼光難遵。然而官申上事。依不可默止所申上也云々。仰云。早可令情勤。但乍召籠奉行之條。何必可然哉。明日只可被仰免給之由也。凡者他史等之中何無可奉。行仁王會事史哉。不可寄事於左右。然而祐重又非強重科。

之患、繁昌之故、歟、顯公文辛、概送市事、以囚人爲擔夫、恒例也、而依無禁獄之囚、積難役事云々、

〔法成寺攝政記〕寛弘二年二月二日庚辰、初東三條修善慶圓大僧都、四日壬午、至東三條召獄囚等、令移各賜布、

〔宇槐記抄〕仁平二年五月十二日丙午、酉刻、歸土御門、召左衛門志兼成^{明法博士}仰曰、可禁斷京中殺害之由、可示別當、其次加仰曰、近年獄囚不禁獄中、在下部家之由、有其聞、兼成付封於獄門、不可令出之、

〔源平盛衰記〕新帝御即位、同崩御、附郭公并雨禁獄事、

今年^{元永萬}ノ夏、郭公京中ニミチ^テ頻ニ群リ啼ケリ、此鳥ハ初音ユカシキ鳥ナリトテ、スキ

人ハ深山ノ奥ヘモ尋入例多キ事ナルニ、今ハケシカラヌ事ナリトテ、入耳ヲ時ル程ナリケルニ、二羽ノ郭公空ニテ食ヒ合、殿上ニ飛落タリケリ、野鳥入室、主人將去ト云本文アリ、此怪異ナリトテ、二羽ノ郭公ヲ捕テ、獄舍ニ被禁ニケリ、白川院御時、金泥ノ一切經ヲ被書寫、法勝寺ニテ御供養ト被定、其日時ニ及ンデ、甚雨有ケレバ延引ス、又日時ヲ被定タリケレバ、甚雨ニ依延引ス、又日時ヲ被定タリケレバ、甚雨ニ依延引ス、既ニ三箇度マデ延引アリ、第四箇度ニ適御供養有ケル日、空攝曇リ雨降テ、俗モ僧モシホ^トシテ、法會ノ儀式最興醒タリケレバ、天氣逆鱗有テ、雨ヲ器ニ受入テ、獄舍ニ被入タリシヲコソ、珍キ事ニ申シ、ニ、郭公ノ禁獄先例ナシ、位ヲ去セ給フ事、今ニ不始事ナレ共、六月ニ御座ヲスベラセ給テ、何シカ七月ニ崩御^條ニ、怪鳥殿上ニ入ケル故ニヤ、本文モオモヒシラレ哀ナリ、

○

召籠

〔禁秘御抄下〕召籠事

侍臣已下有咎之時、召籠、或令候殿上、藏人頭召籠、非普通事歟、近公雅被召籠、師賴爲頭之時、與藏人定仲、伺見五節帳臺^{手時無}有沙汰、師賴恐懼卅日許籠居、爲頭人勸事不聞事也、時人驚耳目云々、公

〔中右記〕永久二年五月十六日庚寅巳時着東帶參院未斷輕犯勘文夜前送頭弁○藤原許以件勘文實行付頭弁奏聞左右獄政所散禁合百廿餘人除著狀因外皆注入大略可被免者六十九人之中有被尋仰之事強盜殺害輩不被免此外多被免也法師女盜類所被免也已御合點了頭弁持參殿下○藤原忠實但京極殿穢氣之間於門外申入云々

〔百練抄近七〕仁平元年七月十四日左衛門督家成卿雜色九人禁獄去十二日依弼取左大臣○藤原賴長下部也

〔百練抄高八〕嘉應元年十二月廿三日延曆寺衆徒奉具日吉神輿參大內是權中納言成親卿知行尾張國目代右衛門財政友與神民不慮闖亂事出來爲訴申也於院召公卿議定政友可候獄所之由雖被仰衆徒猶不承引叫喚廿四日權中納言成親卿解官配流備中國政友賜獄所衆徒成悅奉迎神輿歸山

〔百練抄高八〕治承元年四月廿日加賀守師高配流尾張國射神與下手人六人禁獄

〔源平盛衰記十三〕高倉宮信連戰事

大將宗盛彌腹立シテ兎角ノ陳答ニ及バズ疾々川原ニ引出シテ首ヲ刎ヨト宣ケリ信連重テ申ケルハ是ハ命ヲ惜答ヲ申ヒラカントニハ非ズ○中略唯有ノ儘ノ事ニ侍ト云ケレバ平家ノ侍共ガコレヲ聞テゲニモ道理ナリ○中略ナド人々申合ケレバ大將ゲニモトヤ覺シケン死罪ヲバ宥テ且ク左ノ獄ニ被入ケリ

〔吾妻鏡三〕壽永三年○元暦元年二月廿三日壬午前右馬助季高散位宗輔等依同意于義仲朝臣被召禁之被下使廳云云

〔西宮記臨時〕與森事附臨時着狀例并放免役畢四人

宗金記云長久五年五月廿五日使廳政也○中略同日小日記云今日見物車馬總以不來是京中疾疫

雜載

濫不張禁網何過烏冀宜改決杖從禁法禁固之間卅日之內定其狀迹然後原免者兵仗之制自古及今其來尙矣或設八十杖之科或定三十日之禁尋此弛張之意皆是懲肅之法也抑五刑之與五行爲本杖自六十止於一百徒自一年止於三年所衆有限非可依違彼決杖之文比附所取但彼禁身之戒准的有疑何則徒者半年爲一等以三十日爲何等乎已乖條章不便遵行停件禁固所帶之仗早從破却所違之罪處杖八十者同宣奉勅依請者以前條事所仰如件使宜承知依宣行之符到奉行

從五位下行左大史小槻宿禰泰親

參議從三位行左大辨兼勘解由長官藤原朝臣忠輔

長保三年閏十二月八日

〔本朝世紀〕長和二年四月九日庚午前大和守朝臣云一夜左府牛尾被切以使官人被札問之處傍牛童相挑所切也被禁固圍

〔百練抄後朱電〕長曆三年二月十九日有司召取山僧出雲等院禁獄依濫行也

〔春記〕長久元年六月十一日甲午藏人公基云四衛府狩取等七八十人許自昨日候北陣有訴訟事是件供御所下人與按察大納言○藤原長家庄司鬪亂之間供御所下人被打調也卽捕狩取禁獄所云々彼

庄司所爲云々仍所愁申云々然而未有裁報者

〔百練抄後冷泉〕永承二年十一月太宰府追捕大宋商客宿房放火者禁獄

〔百練抄細五河〕康和二年六月廿八日甲斐守惟信大膳亮仲範可贖銅左近府生秦武忠可禁獄之由宣下是去三月伊勢大神宮神人於途中遇前大相國○藤原實原致無禮之間武忠搦取神人依神宮訴也

〔中右記〕永久二年三月廿六日說兼明兼經則等來於法勝寺四至內鴨川邊取魚犯人說兼召取將來是今朝從法勝寺付資清訴申之犯人也暫仰可令候散禁之由了

檢校有人持炭火插東十四間長殿東面長押且撲火且出物僣塞三人藏部一人親入盜物即著緝優婆塞一人先申云已等所謀騷動之間難兼取物去十月廿日夜失火亦已等所爲至明朝勅使左右近衛少將推問或爭避或吐實依事未盡優婆塞降非違禁固藏部降囚獄着鉢于時攫集大庭五位已上尤勇士入賜物

〔續日本後紀〕^{十二}承和九年七月己酉是日春宮坊帶刀伴健岑但馬權守從五位下橘朝臣逸勢等謀反事發覺乙卯直曹前右兵衛陣下張帳一字散禁坊司及侍者帶刀等於其中自餘雜色諸人散禁於左右衛門陣

〔續日本後紀〕^{十三}承和十年十二月丙子散位從五位上文室朝臣宮田麻呂之從者陽侯氏雄告宮田麻呂將謀反遣內豎喚宮田麻呂即副使奏於藏人所即禁宮田麻呂于左衛門府戊寅禁告者氏雄于左近衛府

〔文德實錄〕天安元年正月乙卯前讚岐守正五位下弘宗王前日向守從五位下嗣岑王散禁右京職先此讚岐國百姓等訴弘宗王仍遣詔使推問虛實伏辨已了使等爲囚付國禁固而弘宗王脫禁逃亡入京故今重禁又嗣岑王先被告將殺詔使而竊輒入京故亦禁固

〔文德實錄〕天安二年閏二月甲寅前越後守從五位上伴宿禰龍男被告故殺下獄
〔新抄格勅符抄〕太政官符檢非違使

雜事伍箇條^{○中}

一應非色輩帶兵仗罪停卅日禁固如舊處杖罪事

右同前^{○檢非}奏狀僞寬和三年正月卅日宣旨云別當正三位行中納言兼左衛督^{○督上下源朝}

臣重光宜奉勅非色輩帶兵仗之制前後重疊去永觀二年停禁其身可決杖八十之由依檢非違使申請仰下先了而今如聞者不善之者無畏禁鍵好著弓劍街路之間屢成其犯者制法之嚴爲施行

囚人死亡

仰事仍暫給其假可加療治之由遺事任朝臣許已了

〔延喜式四十二〕凡罪人死亡者具注姓名年居并入徒年月日申省

〔令義解十〕凡囚死無親戚者謂並無二親者皆於閑地權埋立勝於上記其姓名仍下本屬即流移人在路及

流徒在役死者准此

〔唐書五十六〕凡囚已刑無親屬者將作給棺瘞于京城七里外城有輓銘上揭以榜家人得取以葬

〔日本書紀仁賢〕四年五月見此的臣蚊島穗瓮君有罪皆下獄死

〔日本書紀天武〕十九年閏四月乙巳坐飛鳥寺僧福揚以下獄庚戌僧福揚自刺頸而死

囚人自殺

〔續日本紀聖武〕天平元年二月辛未左京人從七位下漆部造君足无位中臣宮處連東人等告密稱左

大臣正二位長屋王私學左道欲傾國家發酉令王自盡中乃悉捉家內人等禁著於左右衛士兵

衛等府

〔續日本紀孝德〕天平勝寶八歲五月癸亥出雲國守從四位上大伴宿禰古慈妻內豎淡海真人三船坐

誹謗朝廷無人臣之禮禁於左右衛士府丙寅詔並放免

〔續日本紀孝德〕天平寶字元年七月乙卯遣中納言藤原朝臣永手左衛士督坂上忌寸大養等就右大

臣藤原朝臣豐成第宣勅曰汝男乙繩闕兇逆之事宜禁進者即加肱禁寄勅使進

〔萬葉集六〕神龜四年丁卯春正月勅諸王諸臣子等散禁於授刀寮時作歌歌

右神龜四年正月數王子及諸臣子等集於春日野而作打毬之樂其日忽天陰雨雷電此時宮中無

侍從及侍衛勅行刑罰皆散禁於授刀寮而妄不得出道路于時悒憤即作新歌作者未詳

〔日本後紀八〕延曆十八年二月乙未贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻

呂中長子廣世起家補文章生延曆四年坐事被禁錮特降恩詔除少判事

〔類聚國史百七十三〕弘仁十四年十一月壬申亥刻巡大藏舍人等呼失火於大藏省左右大辨等奔波

〔左經記〕長元四年六月廿七日癸卯左兵衛督○藤原公成申云賴信朝臣賞事同下官○藤原賴朝申旨但於常昌等事者常安降伏頗見男等降歸氣色之中忠常於途中死去獄禁者遭父母喪之時給其假云々況未被禁者哉被優免有何事哉新中納言以上被申之趣大略同余詞

〔令義解〕凡獄囚有疾病者主守申牒謂主守者主當獄囚之物部也判官以下親驗知實給醫藥救療病重者脫去枷杻仍聽家內一人入禁看侍其有死者亦即同檢若有他故者謂非法第死及令自死之類隨狀推科

〔唐律疏議二十九〕疏議曰準獄官令因去家縣遠絕餉者官給衣糧家人至日依數徵納囚有疾病主司陳牒請給醫藥救療○中準令病重聽家人入視

〔唐書五十六〕諸獄之長官五日一慮囚夏置漿飲月一沐之疾病給醫藥重者釋械其家一人入侍

〔延喜式二十九〕凡緣看侍獄囚及餉衣食家人入禁所者搜盤錐刀及他物以堪自害并文書筆墨等類

〔朝野群載十一〕進物所請膳部多治忠岑

右忠岑以去正月廿五日備雙六座居被禁固矣而從今月二日本病發動煩苦爲彼病所請如件進勸問

貞觀十八年二月七日

膳部大春日茂蔭

頭大膳亮藤原氏助

別當左近衛少將兼近江介藤原朝臣

內藏頭藤原朝臣安世

掌侍從五位上賀茂定子傳宣奉勅件人治病之間暫給假者

貞觀十八年二月八日

左衛門權佐從五位下惟範奉

〔春記〕長久元年六月十三日丙申觀壽九母女從一日令召禁獄所政所而日者煩厭物之由從督殿有

殺罪仍依殺人者皆斬謂因劫因而有殺但劫即畢不須得因合此坐不須在得因者即若竊因而亡者首從科斷殺人者皆斬謂因劫因而有殺但劫即畢不須得因合此坐不須在得因者即若竊因而亡者
與囚同罪謂竊死囚得死罪竊他人親屬等因故云他人親屬不許竊而未得減二等謂竊計已行未
竊囚罪二等謂未得死囚者徒三年之類以故殺傷人者從劫囚法殺祖孫據律劫囚者道流傷人及劫死囚者
年未得流囚者徒二年半之類意本為殺傷人者有誤殺傷人者下條云因盜而過失殺傷人者以圖
於劫囚者既新誤而殺須依過失之法其因竊因過失殺傷人者下條云因盜而過失殺傷人者以圖
殺傷人者既新誤而殺須依過失之法其因竊因過失殺傷人者下條云因盜而過失殺傷人者以圖
從加殺傷人者既新誤而殺須依過失之法其因竊因過失殺傷人者下條云因盜而過失殺傷人者以圖
者竊因而亡者依下條竊盜發覺奔財逃走者即從重科又有竊因而亡者依下條竊盜發覺奔財逃走者即從重科

〔日本紀略四〕上 天德二年四月十日辛酉夜強盜打破右獄奪取囚人九人之中一人於獄門前打殺
十一日壬戌召六衛府兵庫等官人固道々可追捕之由被宣下 十四日乙丑去十日逃脫右獄囚人
八人於攝津國追捕籠本禁了此中二人射殺了

〔日本紀略十三〕 萬壽四年正月七日己酉節會檢非違使等取雜犯之間有鬧諍事內大臣○藤原 隨
身口安武等可捕進之由下知了彼隨身等奪取犯人之故也 八日庚戌昨日犯人大友延國禁獄了

〔本朝世紀〕久安三年十月八日戊戌是日叡山所司等依院宣欲揭捕切拂座主房之張本僧重雲字周
衆徒等大怒凌轢所司等重雲又逃脫了所司口口所捕獲之犯人重雲從爲衆徒被奪取了自八月之

比仙院仰檢非違使令譴責法印相命同最雲等給件兩人弟子爲張本切拂座主房之由風聞故矣重
雲是其一也

〔本朝世紀〕仁平三年六月五日癸亥今日左衛門尉賴方於陣邊揭犯人籠置近邊小屋而檢非違使義
康奪取之可合戰之由有其聞然而後朝且又自院有禁制之故也云々

〔令義解〕凡犯死罪在禁非惡逆以上遺父母喪婦人夫喪及祖父母喪承重者謂依假事令養父母與
喪者亦依七日法也皆給假七日發哀流徙罪廿日上謂其在役在禁輕重不同故上條給五十日此條唯給廿日遺

禁道喪者亦與俗人制同 悉不給程

囚人遺喪

〔西宮記臨時書〕於市行事

勘申逃亡囚藤井忠茂捕得後、如本着鉢兼可加亡罪哉否事、

右強盜藤井忠茂去五月廿一日斷徒六年着鉢配役、而八月四日脫禁逃亡、十月廿六日適以捕得、如本着鉢兼可加亡罪哉否者、捕亡律云、流徒囚役限內而亡者、一日笞卅、三日加一等、過杖一百、五日加一等、名例律云、稱加者就重大不得加、至於死疏云、雖無罪止之文、唯合加至遠流、不得加至於死、又條云、犯罪已配而更爲罪者、各重其事、若更犯流徒罪者、准加杖例、累決笞杖者、不得過二百、其應加杖者亦加之、疏云、准犯三流亦只杖二百、今年九月八日詔書、大辟以下罪無輕重盡赦除、但八歲故殺人、謀殺人、強竊二盜、常赦所不免者、不在赦限、弘仁刑部格云、難犯會赦可免者、赦書出後三百六十日內首訖、名例律云、赦書到後限內事發、雖不首非蔽匿者、計忠茂逃亡之日數、始自八月四日、至于十月四日、總五十九日、罪合處遠流、累加本罪、理以無疑、何須如本着鉢令滿役限之內、唯亦逃亡之科、可決二百之杖、然而今遇恩詔事發限內、偏從本犯之徒、可寬加杖之議、仍勘申、

長保四年十二月十日

右衛門大志縣犬養爲政

少尉伴忠信

右衛門少志豐原爲時

大志惟宗博愛

〔中右記〕永久二年七月六日、巳時許參院殿下民部卿參給付宗實奏事、○中近日囚人多逃去、惡僧辨

實逃去了、是獄直看督長廳下部諸檢非違使召仕之故也、於當番間者、令不召仕由欲下知事、仰云、尤

可然、件旨先日二七被仰下之樣思、食小事雖不可美、近代作法雖小事必可出美故也○中略重時行重明兼等來、獄直檢可令勤

之由仰了、令逃去囚人下部等給獄了、

〔律疏賊等〕凡劫囚者遠流、謂犯罪之人、身被囚禁、因徒黨與、來相劫奪者、傷人及劫死囚者、絞、死、因而不傷人者、各得三

劫奪囚人

即須遣使速報應減之處有驛處共發驛報之若稽留使人令唐律無常謂不得減者以入人罪故失論減一等○又見令集解政事要略

按之令逃囚之罪隨囚罪之輕重又有令逃人罪之輕重又故縱者事重失逃者事輕隨形處流徒或令候散禁但杖罪以上禁獄政所管罪以下令候便所為使廳之例但失囚給捕日限

〔西宮記臨時〕於市行事

勘申逃亡囚藤井忠茂捕得後如本着鉢兼可加亡罪哉否事○中略

捕亡律云流徒囚役限內而亡者一日笞卅三日加一等過杖一百五日加一等

〔唐律疏議二十八〕諸流徒囚役限內而亡者犯流徒罪配及移那人未到配所而亡者亦同一日笞四十三日加一等過杖一

百五日加一等○疏主守不覺失囚減囚罪三等即不滿半年徒者一人笞三十三人加一等罪止杖

一百監當官司又減三等故縱者各與同罪

〔唐律疏議二十八〕諸被囚禁拒捍官司而走者流二千里傷人者加役流殺人者斬從者絞若私竊逃

亡以徒亡論亡事發未囚而亡者亦同

〔三代實錄清和〕貞觀五年七月廿六日丙辰囚獄司着鉢囚人嚴傷防援右兵衛百濟豐國于時以左兵

衛二人右兵衛二人為左右囚人防援囚人等私發憤悲遂成此亂廿九日己未囚獄司着鉢囚三十

人脫禁逃竄八月三日癸亥下知五畿內七道諸國追捕逃走着鉢囚三十人

〔三代實錄清和〕貞觀七年五月廿四日甲辰遣諸衛府官人已下大搜於東西京先是左衛門獄中着鉢

囚六人穿獄垣逃去仍以搜索廿五日乙巳大搜京邑

〔三代實錄光武〕仁和三年五月十九日壬辰石見國司言上犯罪人前掾正七位上大野朝臣安雄脫禁

逃亡元慶八年推訴使式部大丞正六位上坂上大宿禰茂樹禁固安雄付國司訖今依國司解狀下符

山陽道諸國搜索焉

右檢案內件峯良并津守連梶取酒井乙廣下村主白子等犯狀使局以去貞觀二年閏十月八日勘奏已畢卽其奏給辨官下省亦畢而有稱事不盡返上遂依无失錯亦更返下仍禁送峯良身如件但白子以同三年正月廿七日其身死亡梶取乙廣等其犯會於彼同二年十一月十六日恩詔仍從放免不勞禁送今錄事狀移送如件移到准狀故移

貞觀四年二月廿三日

正六位下行左衛門少志讀岐朝臣時人

正六位上行右衛門大尉藤原朝臣好行

〔續日本紀二十四〕天平寶字七年十月乙亥左兵衛佐正七位下板振錄東至自渤海以擲人於海勘當下獄八年之亂○惠美押勝亂獄囚充滿因其居住移於近江

〔中右記〕永久六年○元永二月五日丁巳今日申刻許下總守源中正擲常陸國住人將參院陣郡人檢

非違使重時盛通康季依仰於三條鳥丸辻東御門南邊請取給左右政所云々件犯人稱故義親法師雇置宅主云々仲正去年越渡常陸國追捕之間械亡此國也被問犯人之處雇宿義親事見無實之由申云々事體非重犯歟今日中宮初行啓日也其前依仰將參院御所邊被渡北御門前御覽世人頗有不甘心氣歟或人云去年件仲正相具數百人兵士廿餘日越來常陸國亂入百姓宅萬物推取了件國八々郡其後人家煙亡云々此事如何誠不可爲其功之人歟

〔法曹至要抄上〕一失囚故縱事

捕亡律云主守不覺失囚者減囚罪二等若囚拒捍走者又減二等皆聽一百日追捕限內自捕得○捕得下

唐律有及他人捕得者除其罪即○卽下唐外捕得及囚已死者自首者各又追減一等監當之官各減

主守三等故縱者不給捕限卽以其罪罪之未斷決間能自捕得及他人捕得若囚已死及自首各減一

等除條監當官司及主司各准此謂此篇內監當主司應坐當條不立捕訪限及不覺故縱者並准此法

略○中斷獄律云縱死罪囚令其逃亡後還捕得及囚已身死若自首應減死罪者其獲囚及死自首之處

囚人逃亡
失囚處分

國轉牒送囚之國依法推動者

〔令集解^{三十二}〕斷獄律云、鞠獄官停囚待對問者、雖職不相管、皆聽直牒追攝、追攝注云、雖職不相管、皆聽不緣所管上司直牒所管追攝

〔唐律疏議^{二十九}〕諸鞠獄官停囚待對問者、雖職不相管、皆聽直牒追攝、^{雖下司}牒至不卽遣者、笞五十、三日以上杖一百

〔延喜式^{二十九}〕凡彈正臺移送罪人、若有事不分明者、遣刑部錄判事屬就臺諮問、若明知臺之所枉、乃追就省勘問、其檢非違使所送罪人、亦准此

〔類聚三代格^{十二}〕太政官符

應錄犯罪人貫屬移送事

右得刑部省解僞案、公式令奏彈式云、親王及五位以上有犯、應須糾劾、而未審實者、並據狀勘問、不須推拷、委知事由、事大者奏彈、訖留臺爲案、非應奏及六位以下、並札移所司推判、義解曰、札移所司推判、謂應判罪之司也、案獄令云、衛府糾捉罪人、非貫屬京者、皆送刑部省、卽明貫屬京者、送於京職、其彈正札移罪人、亦准此、故云、札移所司者、今案之犯罪人、須依被本貫京人、送京職、外國人送刑部省、而彈正臺所移送犯人、不朗其貫屬、固稱有臺式、彼此執論、既致延引、望請蒙官裁以爲長例者、今案彈例云、彈官人及雜色人者、具錄犯狀、移刑部省、令斷罪者、右大臣宣京人之罪、依法移京職、可令斷然而彈正臺元來移刑部省、行來年久、何輒改後、仍須仰下彼省據舊令斷者、自今以後、記貫屬移之

嘉祥二年十二月十六日

〔政事要略^{八十}〕檢非違使移刑部省

禁送犯罪人事 ^{實屬年紀具請奏狀}

織部司物受滋生宿禰峯良

〔政事要略〕八十四 斷獄律曰囚在禁妄引人為徒侶者以誣告罪論即本犯應死仍准流徒加杖及贖法

〔令義解〕凡囚誘引人為徒侶者謂假盜賊類人為同盜之類也皆審鞠由狀然後追攝若追而雪放又更妄引謂已處

〔令義解〕凡囚誘引人為徒侶者謂假盜賊類人為同盜之類也皆審鞠由狀然後追攝若追而雪放又更妄引謂已處

〔令義解〕凡囚誘引人為徒侶者謂假盜賊類人為同盜之類也皆審鞠由狀然後追攝若追而雪放又更妄引謂已處

〔令義解〕凡囚誘引人為徒侶者謂假盜賊類人為同盜之類也皆審鞠由狀然後追攝若追而雪放又更妄引謂已處

〔令義解〕凡囚誘引人為徒侶者謂假盜賊類人為同盜之類也皆審鞠由狀然後追攝若追而雪放又更妄引謂已處

〔令義解〕凡囚誘引人為徒侶者謂假盜賊類人為同盜之類也皆審鞠由狀然後追攝若追而雪放又更妄引謂已處

〔令義解〕凡囚誘引人為徒侶者謂假盜賊類人為同盜之類也皆審鞠由狀然後追攝若追而雪放又更妄引謂已處

〔令義解〕凡囚誘引人為徒侶者謂假盜賊類人為同盜之類也皆審鞠由狀然後追攝若追而雪放又更妄引謂已處

〔令義解〕凡囚誘引人為徒侶者謂假盜賊類人為同盜之類也皆審鞠由狀然後追攝若追而雪放又更妄引謂已處

〔令義解〕凡囚誘引人為徒侶者謂假盜賊類人為同盜之類也皆審鞠由狀然後追攝若追而雪放又更妄引謂已處

〔令義解〕凡囚誘引人為徒侶者謂假盜賊類人為同盜之類也皆審鞠由狀然後追攝若追而雪放又更妄引謂已處

〔令義解〕凡囚誘引人為徒侶者謂假盜賊類人為同盜之類也皆審鞠由狀然後追攝若追而雪放又更妄引謂已處

〔令義解〕凡囚誘引人為徒侶者謂假盜賊類人為同盜之類也皆審鞠由狀然後追攝若追而雪放又更妄引謂已處

〔令義解〕凡囚誘引人為徒侶者謂假盜賊類人為同盜之類也皆審鞠由狀然後追攝若追而雪放又更妄引謂已處

〔令義解〕凡囚誘引人為徒侶者謂假盜賊類人為同盜之類也皆審鞠由狀然後追攝若追而雪放又更妄引謂已處

〔令義解〕凡囚誘引人為徒侶者謂假盜賊類人為同盜之類也皆審鞠由狀然後追攝若追而雪放又更妄引謂已處

〔令義解〕凡囚誘引人為徒侶者謂假盜賊類人為同盜之類也皆審鞠由狀然後追攝若追而雪放又更妄引謂已處

〔延喜式二十九〕凡禁囚之處當宿官人恒將物部并物部丁等每夜巡檢從三月至七月別三度、從八月至二月別四度、

〔令義解十一〕凡囚當處長官十五日一檢行無長官次官檢行其囚延引久禁不被推問若事狀難可知支

證未盡謂支證者支舉也、或告一人數事謂假有甲云乙是殺犯人、強奸盜馬、即官司禁甲之類、其乃被告人有數事者、重事得實輕事未畢如此之徒檢行官司並即斷決

〔唐六典大理寺〕大理卿之職掌邦國折獄詳刑之事○中若禁囚有推決未盡留繫未結者五日一慮

若淹延久繫不被推詰或其狀可知而推證未盡或訟一人數事及被誣人有數事重事實而輕事未

決者成慮而決之凡中外官吏有犯經斷奏訖而猶稱冤者則審詳其狀

〔日本書紀十五〕四年八月癸丑天皇親錄囚徒

〔續日本紀六〕和銅七年二月壬寅遣使于七道諸國錄囚徒焉

〔續日本紀九〕養老六年七月丙子詔曰○中宜大赦天下令國郡司審錄冤獄

〔類聚國史百七十一〕天長五年七月壬子詔曰○中其天下羣狂有冤滯者有司覆審情狀令得申理

〔正字通心部〕慮屋韻音錄詳審獄囚而平反之謂之慮囚今作錄音同也唐百官志大理寺掌

折獄詳刑凡繫囚五日一慮五代唐明宗天成二年初令長吏每旬慮囚漢書雋不疑行縣錄囚徒師

古曰省錄之知其情狀有冤滯與不也義與慮同○中書康誥丕蔽要囚蔽斷也呂刑其審克之言當

盡其心也慮囚即蔽審之義師古所云省錄猶蔽之審之也

〔政事要略八十四〕圖訟律曰被囚禁不得告舉他事其爲獄官詰已者聽之人有犯罪、在囚禁、雖爲二獄

不得告舉即流囚在道徒囚在役口缺、物或有、援人、亦同、被囚禁之色不得告舉他事又准獄令囚告密者禁身領送、即明知、

○按ズルニ疏ノ即明知ノ下當ニ唐律疏議ニ據リ謀叛以上聽告餘準律不得告舉ノ數字ヲ補

フベシ獄令告密人ノ條ノ義解ニ謂依律囚告密者禁身領送即知謀叛以上得告餘罪不聽告舉

也トアリ謀叛以上云々ハ律疏ニ據リテ文ヲ成セルナリ

固獄中理應放者申官免之。

〔令義解〕凡五位以上犯罪合禁在京者皆先奏謂驛被八職擊折傷以上若盜禁後奏並聽別所坐婦女有位者亦同謂婦女帶五位以上者亦准上文男位以上也若犯死罪及在外者先

〔令義解〕凡婦人在禁皆與男夫別所

〔唐書百官〕獄丞二人從九品下掌率獄史知囚徒貴賤男女異獄○下

〔令義解〕凡婦人在禁臨產月者謂家女及婢亦准黃保聽出禁所也死罪產後滿廿日流罪以下謂支

日並即追禁不給程即追禁即知杖罪以上也問流移之人當上道時妻妾隨產月如何答案上條流移囚在路有產後滿卅日並即追禁不給程

〔令集解〕斷獄律云因應請給衣食醫藥而不請給及應聽家人入看而不聽應脫去枷紐等而不脫

者笞五十以故致死者杖一百即減竊囚食笞卅以故致死者加役流者

〔令義解〕凡獄皆給席薦其紙筆及兵刃杵棒之類並不得入

〔唐律疏議〕諸以金刃及他物可以自殺及解脫而與囚者杖一百若囚以故逃亡及自傷傷人

者徒一年自殺殺人者徒二年若因本犯流罪以上因得逃亡雖無傷殺亦準此

〔令義解〕凡獄囚應給衣糧薦席醫藥及修理獄舍之類皆以贓贖等物充謂以贓贖物屬里中贖今據

物充為在無則用官物

〔延喜式〕凡獄囚應給衣糧薦席醫藥及修理獄舍之類用贓贖物者申官聽裁然後給之在外者

先用後申

〔貞信公記〕延長三年正月廿五日戊午外記政始米鹽魚類等令給左右獄所

〔令義解〕凡在京繫囚及徒役之處恒令彈正月別巡行有安置役使不如法者隨事糾彈

〔延喜式〕凡臺官等檢按獄中非違謂杖笞大小安置罪人及給

給物

給四

〔三才圖會 器用十二〕刑具說

鐵制以鐵爲連環其重三觔犯徒罪者帶鐵工作山海經曰山有木名楓蚩尤所棄桎梏也桎足械梏手械蓋此械已出黃帝時矣

脚 鐐



〔類聚名義抄六〕縲力佳反 縲纏キツナ 縲音菲又與ツナヤカケナハ和節キツナ 縲縲縲縲縲縲

同ツナヤ

掌獄司

〔令義解一〕囚獄司

正一人掌禁囚人謂衛府執從罪人及諸司囚徒役功程及配決事佑一人大令史一人少令史一人物部卅人謂此件部之色故式部補掌主當罪人決罰事物部丁廿人謂諸國仕丁帶仗守獄任其衛門府門部亦司也

〔大內裏圖考證二十五〕占地 都城諸國囚獄司近衛南西洞院西一町

〔延喜式左右衛門〕凡捉人防援火長七人三人守獄所未彈四人領者欽囚

〔延喜式左右兵衛〕凡捉人將領兵衛二人每番移送京職

〔倭名類聚抄七〕囚人 東宮切韻云囚止似由反和名繫禁罪人也一云人囚在獄也

〔類聚名義抄七〕囚似由反コモル和シユ囚人 トヲヘビト

〔日本書紀二十五〕大化二年三月辛巳獄中囚一皆放捨ヒトヤノヲヘモ

〔唐六典刑部〕覆定使人至日先檢行獄囚枷鎖鋪席及疾病糧餉之事有不如法者皆以狀申

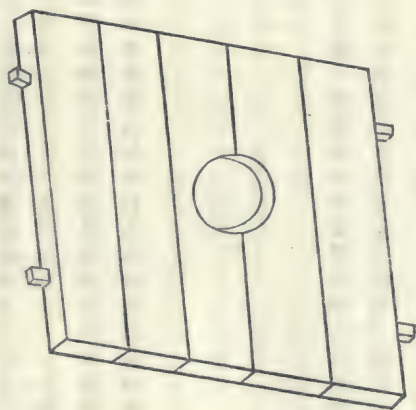
〔令義解十〕凡流徒罪居作者皆着鈇若盤枷謂流徒通着鈇若盤枷非云

〔明律具圖〕枷長五尺五寸頭闊一尺五寸以乾木爲之死罪重二十五斤徒流重二十斤杖罪重

一十五斤長短輕重刻誌其上

〔三才圖會器用〕刑具說

枷制長五尺五寸頭濶一尺五寸以乾木爲之死罪重二十五觔徒流重二十觔杖罪重十五觔蓋舊有長短而無輕重其輕重自宋太宗始也今從之



〔新撰字鏡金〕枷手加

〔倭名類聚抄刑十三〕具桎

玉篇云桎械也說文云桎音手械也漢語鈔云桎夫加今按桎又木名也以音

西曆燒亡了、予忽向獄門令緋連自○自惡人等召付看督長國守等、獄中難人等入亂、敝人自得隙有
插逆心事、歟旁非無疑心、以國守等○天雜人等令押出了、他官人一人不馳參、尤以不便事也、雖須參大
理○平一人參、依見苦思留了、六日甲午參大理、昨夕炎上之間、申上子細退出之後、有此仰、

覽可令候給之、由被仰而早出如何、但去夜獄邊炎上、諸官一人不向其所以、身令向給之條返々感
思食候者也、禁獄之固者、君重誠御者也、若燒死逃脫者以外事也、而一身令向其處返々傾感不少、
如此事欲被仰之處、早出無御本意之由、別當殿仰所候也、仍以執達如件、

四月六日

盛頼 奉

謹上 清志殿

謹請

獄舍近隣燒亡馳向事

右謹所請如件、抑向炎上所々救火者是、存知事候、就中獄舍近隣旁非無所思候、今如此被仰下候、
專奉公可致忠勤候歟、以此趣可然之樣、可令洩言上給候、某誠恐謹言、

四月六日

左衛門少志清原某光○

囚禁具

〔倭名類聚抄十三〕盤枷 唐令云、若無鉗者著盤枷加日本紀私記云、久比

〔箋注倭名類聚抄五〕按古蓋以木加囚人頸、故謂之加、後從木、會意也、與枷、梶字自別、

〔類聚名義抄三〕枷 音加、クビカシ、盤枷クビカシ 大枷クビナ

〔日本書紀七〕二十四年九月、百濟則捉奴須久利、桎械枷鎖而共新羅圍城、

〔日本書紀二十五〕大化五年三月庚午、種積臣噉捉聚大臣○蘇我倉伴黨田口臣筑紫等著枷反縛、

〔令義解十〕凡覆囚使人至日、先檢行獄囚、枷桎謂在頸曰枷、鋪席及疾病糧餉之事、○注有不如法者亦

以狀申附考、

〔續日本紀十四〕天平十四年十月癸未禁從四位下鹽燒王并女孀四人下平城獄、

〔袋草紙三〕昔ハ獄前ニ裁菊云々、藤六輔相中納言長孫也過獄前子時獄囚一人走出テ抱之入獄門内云、

朝ノ歌仙之由承之爲題此菊可令詠一首云々、輔相卽詠云、

人やうゑしおのれやおひしきくのはなまもとにうつるいろのいたさよ獄囚感歎シテ免之云々、甚以無益歟、

獄舎遺火

〔十訓抄十二〕後冷泉院御時、源中納言經衡卿檢非違使別當にて、十五年まで使廳を行はれけり、或時左獄近く炎上ありて、火すでに獄舎にうつりなるとまける時、檢非違使の犯人を可出の由申ければ、別當のたまひけるは、帝のあたたる犯なす間、其罪によりて禁蒙る事人のあたふるにあらず、天のまらしむる所なり、いかでか其せめを逃れん、許し出すべからずといはれければ、火近づくにまたがひて、犯人音をあげてをめきさけぶ、天にも聞え地にも動くばかり也けれども、終に出ずして、さながらやけ死けり、其後別當被失にける時、かの獄囚の音耳にあるがごとくに聞ゆるとて、臨終も心よからず有けり、其上重資師資とて中納言までなりたるおはせしかども、其末絶にけり、是又法の理といひながら、無下に慙愧なき心の程、罪ふかく覺ゆ、坂上允高○允高實允亮、後惟宗が廷尉の職を辭してかうぶりを給けるは様かはれりけり又大理誰とかや、犯人のおのづから獄舎の下を堀て、にげ出る事あらせしがために、四面に土の底を板をほり入て立られたりけり、此奉公の忠なる事なれども、かやうまでの思はかりは罪業の因にもやとよしなくおぼゆ、

〔山槐記〕治承三年四月五日癸巳、子刺東獄西方小屋焼亡、

〔清經眼抄公事〕一獄舎近隣焼亡事

後清錄記云、治承三年四月五日癸巳、亥時許、自近衛南、自刀帶町東、近衛西中許焼亡、起東至獄政所

範守、善府生朝忠、清府生季道、此等ヲ始メテ、檢非違使八人行向テ、西洞院ヲ上リニ渡シ、左ノ獄門ノ櫛ノ木ニゾ掛タリケル、

〔百練抄^{二七}〕永曆元年正月九日、前左馬頭義朝并郎從正清等首、廷尉請取懸東獄門前樹、

〔吾妻鏡^二〕治承五年^{元○美和}二月九日丙戌、去年冬於河內國爲平家所被殺害源氏前武藏權守義基

之首、今日渡大路懸獄門之樹^{○中}、義基弟石河判官代義資、紺戶先生義廣被生虜之間、相具兄之首、被遺左獄舍云云、

〔水左記〕康平六年二月十六日戊子、早朝參殿下、前鎮守府將軍源賴義朝臣所進浮囚、貞任、重任、經清等首并降人夾名解文右大弁令進覽之^{○中}、從四條西行朱雀大路、至于西獄櫛樹鼻之云々、

〔中右記〕康和四年三月廿九日、或人來談云、一昨日內大臣^{○源}隨身番長近時給西獄政所云々、是御賀後宴之日、彼大臣被參院之間、依拂人打破院廳官大膳屬重則面事云々、

〔百練抄^{二七}〕平治元年十二月十七日、少納言入道信西首、廷尉於川原請取、渡大路懸西獄門前樹、信西於志加良木山自害、前出雲守光保所尋出也、

〔菅家文草^九〕復奏囚人拘放狀

右臣某月十三日謹奉口勅云、去十日、令檢非違使別當從三位中納言兼行左衛門督源朝臣、勘錄左右獄中繫囚之數、

〔百練抄^八〕治承四年正月廿七日、今日左右獄囚人十五人、於山科斬首、

〔續日本後紀^二〕嘉祥三年三月甲午、左右檢非違使獄中人除盜之外、悉從放免、

〔三代實錄^十〕貞觀七年五月廿四日甲辰、遣諸衛府官人已下、大搜於東西京先是左衛門獄中、著欽

囚六人、穿獄垣逃去、仍以搜索、

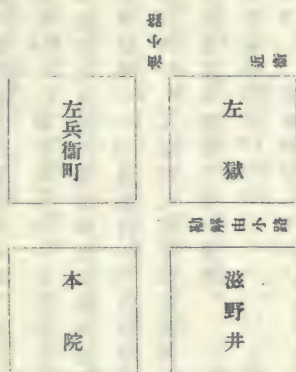
〔續日本紀^{十四}〕天平十三年三月己丑、禁外從五位下小野朝臣東人下平城獄、

被談云、匡房仕帝王至、納言ハ、始祖音人卿爲檢非違使別當之時、奉爲國家能致忠之故、必仕帝王也云々、予問、其由緒如何、被答云、音人卿爲檢非違使別當之以前、獄所在長岡京、件所ニテ獄所極以荒涼、囚人動逃去、仍音人卿改立此獄門之後、無逃、刑人還又重恩也、修善根之人與饜、稱施饜、是彼時始也、仍音人卿最後被談ケルハ、我子孫ハ依國家致忠、必仕帝王可至太位也、但刑人其罪尤重之者、此依囚獄門無輒逃之者、又路次往行之者、動與食物、依別法之目、不能輒入獄門、依其報定子孫ニアラン云々、此事尤理也、○下

〔拾芥抄〕宮中末、諸司厨町

左獄近衛南、西洞院、四、

〔大内裏圖考證〕二十、五、都城諸圖



〔平治物語〕三、長田義朝討六波羅馳參事、附大路渡被掛獄門事

翌日○平治二年、尾張國住人長田四郎忠宗子、息先生景宗上洛シ、前左馬頭義朝并鎌田兵衛政家ガ頭ヲ持參シテ、不次ノ賞ヲ可蒙由望申ケリ、○中、同九日、平大夫兼行總判官信房、青侍義守、忠目

繫于牢是也。人之在獄不能出。如牛馬之在牢。故又謂之牢。所謂轉注也。○中又按說文。圜。獄也。圜。守之也。又云。圜。所以拘罪人。知。圜。皆守禁之名。月令。鄭注。圜。所以禁守繫者。若今之獄矣。正義引月令章句云。圜。牢也。圜。止也。所以守出入。釋名。圜。領也。圜。繫也。領。錄囚徒禁繫之也。太平御覽引風俗通云。圜。令也。圜。與也。言令人幽閉思愆。改惡爲善。因原之也。

〔釋名五〕釋宮宅。獄。確也。實。確人之情。僞也。又謂之牢。言所在堅牢也。又謂之圜土。土築其表。牆其形。圜也。又謂之圜。圜。領也。圜。御也。領。錄囚徒禁御之也。

〔唐律疏議二十九〕疏議曰。中。答。錄造獄。夏曰。夏臺。殷名。桀里。周曰。圜土。秦曰。圜。漢以來名獄。

〔唐六典六〕刑部。凡京都大理寺。京兆。河南府。長安。萬年。河南洛陽縣。咸置獄。其餘臺省寺監衛府。皆不置獄。

〔類聚名義抄三〕獄。音。玉。ゴ。ヒトヤ。〔同六〕石。確。正。確。俗。ア。ヒトコロ。〔同七〕口。圜。圜。二。正。牛。呂。反。ヒトヤ。コ。メ。カ。フ。

〔音零〕ヒトヤ。圜。音。玉。ゴ。ヒトヤ。〔同〕ヒトヤ。圜。音。玉。ゴ。ヒトヤ。〔同〕ヒトヤ。圜。音。玉。ゴ。ヒトヤ。

〔運步色葉集四〕籠。音。玉。ゴ。ヒトヤ。〔同〕籠。音。玉。ゴ。ヒトヤ。

〔拾遺和歌集十九〕人のめし侍けるを。とこの。ひとやに侍て。めの。この。もの。と。につかはしける。

よみ人。ま。ら。ず。

まの。びつ。よる。こそ。きしか。唐衣。ひと。や。見ん。とは。おも。は。ざりし。を。

〔宇治拾遺物語四〕東北院の菩提講は。じめける。聖は。も。とはい。み。じ。き。あく。人。にて。人。屋。に。七。度。ぞ。入。たりける。

〔八雲御抄三〕屋。音。玉。ゴ。ヒトヤ。〔同〕屋。音。玉。ゴ。ヒトヤ。

〔日本書紀九〕神功五年二月己酉。襲津彥。〔同〕中捉新羅使者三人。納檻中。以火焚而殺。

〔江談抄二〕雜事。音人卿爲別當時長岡獄移洛陽事。

論ズ、囚ノ徒伴他所ニ在ルトキハ、後ニ發スル囚ヲ移シ、先キニ繫ガレタル囚ノ處ニ送り、併セテ論ズベキニ囚リテ、死囚ヲ遞送スルニハ、專使ノ外ニ道次ノ軍圍ノ大毅親ヲ部領シ、死囚ニアラザルハ少領部領ス、並ニ防援ヲ差シテ付領ス、又彈正臺檢非違使ヨリ刑部省ヘ罪人ヲ移送スルニ、其事分明ナラザルアレバ、刑部錄判事屬ヲシテ臺使ニ就キテ諮問セシム、衛府罪人ヲ札シ捉ヘタルトキハ、京ニ貫屬セル者ハ京職ニ送り、其餘ハ刑部省ニ送ル制ナレバ、彈正臺ニテ罪人ヲ札シ移ストキモ之ニ依ルベキニ、文德天皇ノ嘉祥ノ比ハ舊習ニ依リテ都テ刑部ニ送ルコトトセリ、又囚ヲ錄スルコトアリ、獄囚ヲ詳審シテ平反スルヲ云フ、又凶徒共ニ來リ劫シテ囚人ヲ奪ヒ、或ハ私ニ來リテ囚人ヲ竊ムアリ、囚ヲ竊ムニ囚リテ人ヲ殺傷スルトキハ、囚ヲ劫スノ法ニ從ヒテ論ズ、而シテ監當ノ官人典獄ノ人囚ヲ失スルコトアレバ、百日内ニ追捕スルコトヲ聽シ、限内ニ捕フルトキハ失囚ノ罪ヲ除ク而ルニ故ラニ囚ヲ縱シテ逃亡セシムルトキハ捕限ヲ給セズ、即チ囚人ノ罪ヲ以テ罪シ、死囚ヲ縱セバ死刑ニ處シ、徒流ノ囚ヲ縱セバ徒流ニ處ス、又囚人死亡スルトキハ、囚獄司ニテ具ニ姓名年齡并ニ徒ニ入リシ年月日ヲ注シテ刑部省ニ申ス、但シ親戚ナケレバ皆權リニ開地ニ埋ミ、防ヲ其上ニ立テ、姓名ヲ記シ、仍ホ其本屬ニ下ス、又囚人、父母及ビ夫等ノ喪ニ遭フトキハ、假ヲ給シテ發哀セシム、又召籠アリ、囚禁ノ類ナリ、侍臣以下失錯アル時、殿上及ビ近衛陣等ニ禁ズルヲ云フ、猶ホ放囚ノ事ハ、敎有篇ニ見エタリ、

獄會

〔伊呂波字類抄卷七〕囚獄

〔倭名類聚抄十三〕獄刑罰具 四聲字苑云、獄語獄反、和名比度夜、牢罪人所也、唐韻云、圜、音語、秦獄名也

〔箋注倭名類聚抄五〕刑罰具 按比度夜、人屋之義、○中 說文獄、確也、从尗、从言、二犬所以守也、釋名、獄、確也、實、確人之情、偽也、又謂之牢、言所在堅牢也、按說文、牢、閑養牛馬之圈也、周禮、充人、祀五帝之牲、牲

囚禁召籠 係人

囚人ヲ邦語ニトラヘビト云ヒ、獄ヲヒトヤト云ヘリ、囚人ヲ禁ズルニハ、罪ニ因リ人ニ因リテ其輕重ヲ異ニセリ、枷シテ且ツ桎スルアリ、桎セズシテ枷スルアリ、枷ハ即チ盤枷ニテ邦語ニクビカシト云ヒ、桎ハ手械ニテ邦語ニテカシト云フ、桎禁アリ、桎ハ即チ桎ナリ、枷禁アリ、索ヲ以テ兩脇ヲ繫グナリ、散禁アリ、刑具ヲ加ヘズシテ囚禁スルナリ、而シテ議請減贖及ビ初位以上ノ外ハ皆巾ヲ脫ス、刑具ニハ又桎、錠、鎖、鉗、鈎、桎ヲ邦語ニアシカシト云ヒ、錠ヲカナホダシト云ヒ、鎖ヲカナツカリト云ヒ、鉗モ鈎モ俱ニカナキト云フ、又長禁アリ、終身獄ニ在ラシムルヲ云フ、後世ニハ禁獄ヲ以テ一ノ刑名トセリ、五位以上ノ人京ニ在リテ罪ヲ犯シテ禁ズベキトキハ、皆先ヅ奏シテ後ニ禁ズ、其京ニ在リテ死罪ヲ犯セルト、京外ニ在ルトハ、先ヅ禁ジテ後ニ奏ス、並ニ六位以下ノ者ト其居ル處ヲ異ニス、因リテ衛府ニ禁ジタルコトアリ、婦人禁ニ在ルトキモ、男夫ト所ヲ異ニシ、其產月ニ臨ムトキハ保ヲ責メテ出ヅルコトヲ聽シ、產後ニ至リテ復禁ズ、囚人ニハ官ヨリ席薦衣食ヲ給シ、疾病アルトキハ家人ノ禁ニ入りテ看侍スルコトヲ聽ス、而シテ紙筆、兵刃、杵棒ノ類ハ入ル、コトヲ得ズ、又囚人ヲ巡檢シテ安置等ノ不法ヲ糾スコトアリ、在京ハ彈正月朔ニ巡行シ、事ニ隨テ糺彈シ、囚獄司ノ當直ノ官人、恒ニ物部并ニ物部丁ヲ將キテ毎夜巡檢シ、在外ハ當處ノ長次官十五口ニ一タビ檢行ス、其因久シク禁ゼラレテ推問セラレザルガ如キコトアレバ即チ之ヲ斷決ス、捉人ニハ將領アリ、防援アリ、防援ハ未彈ノ人ヲ守リ、將領ハ著鈐ノ囚ヲ領ス、囚人ハ獄官ノ己ヲ虐待スルト、謀叛以上トノ外ハ、他事ヲ告グルコトヲ得ズ、若シ他人ヲ逮引シテ徒侶トスルトキハ審ニ由狀ヲ鞠シ、然シテ後ニ徒侶ヲ追攝ス、若シ妄引ニ係レバ誣告罪ヲ以テ

大膳職

少進正六位上平朝臣村連

天永三年三月二日

〔長秋記〕天永四年元久三月十四日、今日依弼夏燒大夫、左衛門尉平忠盛、敍從五位下、院武者所宗

友任、左兵衛尉伴夏燒大夫、神仁與同心穿、蘭林坊御藏取御物云々、仍一昨日左衛門志明兼、欲追捕

之間、得其告逃去、明兼郎等追得桂河邊合戰、隱入松尾山、郎等蒙疵空歸、其後伴男出京都寄宿、聞此

旨押寄追捕、其間郎等二人、蒙疵及死門云々、

〔中右記〕保延元年八月十九日、備前守忠盛朝臣、擧進海賊廿六人、檢非違使等於河原受取云々、廿

一日、備前守忠盛朝臣、追捕海賊賞被行、右兵衛少尉平惟綱元久從四位下平清盛元久兵衛佐、

〔玉海〕仁安三年二月十九日壬子、今日有御讓位事六條中略、今夜無尋、遂可有云々、只頭信範朝臣

○中六位中略、錄資、刪此人去、

〔百練抄九〕壽永元年十月九日、群盜入勘解由次官惟基宅、惟基蒙疵十一日死去入道、惟方十七

日、殺害惟基犯人、廷尉盛綱、擧取之、持參上皇門前渡之、有御覽召取彼犯人之者、可有不次賞之、由先

日被仰下之、八條院侍二勞不知實名、所爲也、

〔百練抄十〕元曆元年五月十一日戊戌、權中納言家通卿參入、被行擧盜內印犯人之賞、以藤原孝

久任左兵衛尉、散位從五位下孝實孝久父也一陪事追可申請、

也、並計所得正賊謂假知盜布十端、札告之日、五端見在者、唯贖准爲五分、以二分賞札捉人、即官人非
因檢校而別札捉謂官司於其所部、非因檢校而別自札捉者、若掩捕贖錢、仍得盜賊者、並共盜及知情其事相因、不合與賞、其非所部官司者、一同凡人之例、不依官司之法、
主人首告者、亦依賞例、

〔侍中群要七〕追捕官人等給祿事

可然之時、於殿上口給祿各一疋不詳、志府生、但或尉二疋、志府生一疋、各可隨議、

檢非違使事

從追捕歸參、帶弓箭直以參入、若給祿者、不拜舞、

天德四年、不論尉志府生等各給祿一疋、

天祿四年、尉一疋、志府生各給一疋此不詳例

〔日本書紀三十三〕三年七月辛未、流僞兵衛河內國澁川郡人柏原廣山于土左國、以追廣參授僞兵衛

廣山兵衛生部連虎、

〔日本紀略十三〕一、寬仁元年正月廿三日癸亥、去夜竊盜入御所、而宿直瀧口二人經南殿庭東走射之、

瀧口內舍人藤原長輔攝政藤原長原、隨身同良孝等射取之、即有勅祿、禁偷兒於獄、外記云、今夜諸陣直

官人、不祇候輩宜令進怠狀者、廿四日甲子、今夜內舍人長輔任大舍人、允良孝任修理進依、昨日賞也、

〔中右記〕天永三年三月二日、頭弁實行藤原、送書云、入夜程可參內、俄依有可被宣下事也者、秉燭之後參、

仗座、右大弁長忠同參着、頭弁來仰下云、以正六位上平村連、可任大膳少進也、是院武者所去二月行、

幸院之日、於六條殿內捕盜犯者賞者、予宗原、移着端座、令敷膝突、召外記候、小庭仰云、硯折、硯紙可、

持參、此間右大弁移着端座、外記以硯篋置右大弁座前、予令書除目、

太政官謹奏

〔本朝世紀〕天慶五年六月卅日壬戌今日左右檢非違使自曉園守故致仕大納言藤原扶幹卿家是爲
搜求駿河掾橘近保也但季子內親王眞領件家自去年移住又本主故大納言室家未移去猶在同家
件近保之妻與故大納言家元有因緣近保逐便隱居彼家云々仍所搜求也于時季子內親王忽然畏
縮與數兒共乘一車馳移於左大臣仲平家依內親王與大臣在因緣爰檢非違使令奏云是已內親王家也被下
宣旨將以搜求云々爰遣勅使藏人兵部大丞平時經共令搜求彼內親王并故大納言室家之居處而
遂不得其實日晚解園散去但近保奪取駿河國進官調物藏召勸其由
〔日本紀略朱二〕天慶二年四月廿九日庚子有盜搜事
〔日本紀略三〕天曆二年六月十五日壬辰定明日搜索事十六日癸巳分諸衛官人於京中令搜索
奸犯之者

〔日本紀略四〕天德元年二月廿八日丙戌有大索事

〔日本紀略四〕天德四年十月九日乙亥有大索事

〔日本紀略五〕康保四年九月十六日有大索事

〔日本紀略五〕安和元年九月十六日丙申京邊東西山野可索捕奸盜之由被定行之

〔日本紀略六〕天延元年四月廿四日丁未今夜前越前守源滿仲宅強盜繞園放火于時越後守宮道
弘氏相圖之間中盜人矢卒去餘煙及三百餘家今夜殊有宣旨堪武藝之輩可召候陣頭者廿六日

己酉有被搜盜人之事

〔日本紀略九〕正曆五年三月六日戊午召武勇人源滿正朝臣平維時朝臣源賴親同賴信等差遣山

山令搜盜人

追捕行實

〔令義解九〕凡糾捉盜賊者謂糾告及捕捉其糾告親屬律有糾告者既所徵倍謂依令

無財以備者官役折謂折廣若所徵倍理謂理皆賞糾捉之人家貧無財可徵及依法不合徵倍謂依賊者謂依律免

夜盜穿大藏省東長殿壁竊取施布等不知幾匹端、辛亥遣六衛府大索城中、

〔續日本後紀九〕明承和七年二月己未、殊令六衛府夜行京城、緣群盜逼起也、庚午、勅如聞奸宄之賊、

定蕃有徒、或暗夜放火、或白晝奪物、靜言流弊、情切納隍、宜下知左右京職五畿內七道諸國、嚴加督察、

搜認閭里、隨獲且進、莫作留連、三月壬午、分遣六衛府、搜捕京中盜竊、○又見類聚三代格

〔續日本後紀二〕明嘉祥三年正月乙巳、勅如聞頃來盜賊爲群、聚貳被害、或暗中放火、或白晝掠人、宜令

左右京職及五畿內諸國司、申明舊章、速搜捕、若致稽儒準、法科責、二月壬子、分遣六衛府佐已下、覘

捕京中群盜、又令左右近衛各十人、巡檢東西、

〔文德實錄七〕齊衡二年正月癸卯、時京師多盜、掠奪人物有詔搜起、自宮中及於京中、

〔三代實錄十〕清和貞觀七年三月廿七日戊申、有勅搜於宮中及諸司東西京、

〔三代實錄十四〕清和貞觀十五年六月廿一日甲寅、武藏國司言、新羅人金連安長清信等三人、逃隱不知

在所、令京畿七道○七道下日本紀搜捕金連等、貞觀十二年自太宰府所遷配也、

〔三代實錄五十〕光孝仁和三年二月乙巳、朔、大藏省奏言、昨夜偷兒穿正藏院庫壁、盜取官物多少難記、遣檢

非違使索焉、

〔本朝世紀〕天慶二年四月廿八日己亥、諸卿就日本紀講所、此間大納言伊望卿依召參入、召外記仰云、

京中搜求盜人例如何、申云、近則延長三年也、差文等在別紛失、仍召賑給定文、被定之、其後召諸衛左

右馬寮等、仰明日可搜求京中盜人之由、不依口口次第任參入、遲速仰之、廿九日庚子、卯刻、諸卿參

入、被定京中盜人可搜嫌疑、索下手者之由、仍先召左右檢非違使等、密々仰可、固會坂龍花越、大枝山、

山崎、淀等道之由、次召諸衛仰之、已刻、東西各分、手率隨兵、隨差文罷出、搜索京中、又有勅藏人仰、小舍

人左右近番長已下等、搜索宮中司々、申刻、使々申返事、京條宮中無殊事、○中條々差文手々次第委

見記、

召使使仰可搜捕嫌疑者之由事旨可懸仰事但京中搜捕者可懸索其方山云々五位以上者服尋常必依次一府有手者仰其上滿面々々不仰或又藏人頭奉仰差藏人所雜色以下左右近番長以下令近例五位以上著布衣袴帶弓箭參入奉之搜檢宮中諸司所々有院宮御領處者召院司宮司等令仰可搜索之由使等歸參各申返事五位著朝服布袴帶弓畢上卿令奏其由退出此日厨家健小親

〔北山抄〕九オホナリ大索天曆二年例奉仰之時尋常裝束申返事時帶弓箭等彼間左大臣上卿藤原公家爲左右大將

次將依召參入候膝著尋常裝束而近例朝服布袴袴帶著申嫌疑者之有無先朝外記可參進歟著申嫌疑者之有無先朝外記可參進歟

〔榮花物語〕浦五の別内には陣に左衛門尉惟時肥前前司頼光周防前司頼親などいふ人々みなこれ滿仲貞盛がむまごなりおの／＼つはものどもかすえらすおほくさふらふ春宮の帶刀や瀧口やなぎいふものどもよるひるさぶらひ關をかためなどしていこうたてあり世にはおほあなぐりといひつくるもいとゆゑし

〔侍中群要〕京中大索事

奉仰上卿仰外記當日早旦書分條々手當大辨上卿一々召陣仰之五位帶衛府者布袴裝束上帶弓箭六位布衣但著冠腰召武名五冠或烏帽也藏人頭召仰藏人所雜色等大索宮中瀧口若不分諸條者差副藏人所云々諸衛等申返事同於陣申之但著狩衣

〔類聚國史〕八十七延暦十二年八月丁卯是夜內舍人山邊真人春日春宮坊帶刀舍人紀朝臣國共謀殺帶刀舍人佐伯宿禰成人明日事覺春日等即逃隱帝大怒募求天下後伊豫國捕之以聞道左衛士

佐從五位上巨勢朝臣島人格殺或曰春日等承皇太子密旨

〔續日本後紀〕六承和四年十二月辛卯是夜盜開春興殿偷取絹五十餘匹宿衛之人不得見著甲午夜分女盜二人昇入清凉殿天皇愕然命藏人等告宿衛人逐捕之繼獲一人其一人脫亡庚子是

仰曉更可牽御馬之由或仰東宮主馬署并公但秘其事不令洩當日曉更上卿召諸衛佐已下分遣兩

京條々令搜求之又藏人所難色已下令帶弓箭差分宮城中閑寂諸司令搜求之晚頃條々使還參後

上卿奏事由又或檢非違使并諸衛尉已下結番給御馬每夜令巡檢京中矣或加遣瀧口武者

〔西宮記臨時〕搜盜事

卷縷著絛帶獮胡籙著布袴革襪等皆有副兵隨上卿之仰向條々搜求嫌疑者歸參申其由舊例五位

已上申返事帶弓箭

天德四年十一月十四日仰左大臣實賴原云近來京中盜起云々須檢非違使之外差副諸衛官人

勤夜巡事云々申云余檢非違使馬寮官人等之外宜給寮馬巡行仰依請

應和元年十一月十五日給右大將藤原尹檢非違使勤申相共可搜求京中盜諸衛馬寮兵庫等

官人又仰下宣旨又仰左右馬寮每夜引夜巡料御馬各三疋

應和三年九月廿二日民部卿藤原朝臣在令申檢非違使可下知左右京職令諸條保長刀禰勤

行部內夜行事依請仰令諸卿定申云十月九日令仰云依諸卿定五位以上及諸司主典已上良

家子姪不動者錄名奏聞

〔北山抄四〕大索事

前一日上卿奉勅仰外記召賑給使差文令參議書近例不召六府馬寮等官人并今日不參諸卿家司

各一人令外記仰諸衛以明日卯一點佐以下官人率舍人等帶弓箭可參候之由天曆二年六月十五

明日俄可行無須藉事依會幸當日可給料物但令仰馬寮御馬各廿疋置鞍官人相具可奉建禮門前先

給賜給使料云々或稱可有諸卿家司馬隨身可牽進之由同令仰之又密々仰檢非違使差遣官人各

二人於會坂龍華山崎大枝宇治淀等道々令固衛矣當日卯時以前上卿參入令改書盜案差文以下

預之或加瀧口武者又召諸司官人又仰外記令分給寮及諸家所進馬依分配覽上卿即外舉上卿

疑而賴賁有阿容之氣若早不左右者可處重科也予以此由含賴賁已了

〔中右記〕永久二年四月十三日戊午、資清來云、於京極二條邊引劊疑者二人、一人院下細工、一人將參院仰

云早可沙汰者、所指申者等、在法興院中早觸別當法眼、可弼由仰了、廿日參院○中次奏云、一夜二

條朱雀邊、法勝寺小綱下女、被引劊疑者一昨日令勘問處、大略戲事歟、就中彼小綱、不爲愁由所申也、

仰云聞食了、然者可免給之、

〔朝野群載延十〕左衛門權佐宣備近來強盜之徒、連夜成犯、侵害之訴、逐日無絕、斯乃有司懈緩、不加禁

遏之所致也、各仰當保、且令尋召嫌疑之者、且可令致夜行之勤焉、

天承三年五月十六日

小志惟宗成國奉

〔吉記〕壽永元年二月九日庚戌、傳聞藏人強盜、爲檢非違使信盛沙汰、已被召出了、件男者土佐守俊兼

曾孫進士能兼故口兼勅、孫高松院藏人大夫清俊男、皇嘉門院非藏人俊長也、民部大輔兼定乳母子、

仍付兼定、被召出畢、件事去年十二月故前加賀守師高後家之強盜也、先捕嫌疑入彼戶部難色也、件

男彼藏人爲張本之由指申、其同類同舍弟并戶部侍等云々、於侍一人自害、實未曾有事也、件藏人、昨

日廷尉持參院有御覽云々、

〔法曹至要抄罪科〕一追捕事

捕亡律云、捕罪人、而罪人持仗拒捍、其捕者格殺之、及走逐而殺若追窘而自殺者、皆勿論、即空手拒捍、

而殺者、徒二年、已就拘執、及不拒捍而殺或折傷之、各以鬪殺傷論、用刃者從故殺傷、法罪人本犯應死、

而殺者、遠流、即拒毆捕者、加本罪一等、傷者加鬪傷二等、殺者斬、

〔延喜式四十一〕凡犯重應捕而拒捍者、發當處兵捕之、若犯狀灼然不肯伏、辨事爭訴者、累加本罪、

〔新儀式五〕搜盜事

若有京中強盜蜂起、仰下諸衛府有令搜求、前一日上卿事勅先差遣可守要害諸關之使、或仰國司、或仰守之、又

犯人拒捕

搜索犯人

捕逃亡者

〔延喜式刑部二十〕凡罪人逃亡者申官追捕。
〔延喜式刑部四十〕凡犯人逃走令檢非違使追捕。

〔令義解捕九亡〕凡囚及犯人防人衛士仕丁流移人逃亡謂囚者不限有罪無罪但依狀態解者其散禁及亦同也流移人逃亡者此據在逃未配所也及

欲入寇賊者謂依律是爲叛人其叛人捕亡已在獄令更制此文者故令檢非違使經隨近官司申牒謂在亡故云近官司謂司獄司及國司也已到即告亡者之家居所屬及亡處比國比郡追捕承告之處下

配所謂所流移人逃亡者申司獄司及國司也即告亡者之家居所屬及亡處比國比郡追捕承告之處下

其鄉里隣保令加訪捉捉得之日送本司依法科斷謂征防及防人司流移人逃亡者配國司並皆依法科斷

〔日本紀略後十四〕長元六年正月廿六日癸巳今日檢非違使等於廳勘問犯人之間刑人一人逃入宮

城之間於陣捕取了謂其防人逃亡罪至徒以上者不可更送初向之時犯徒以上者差警故也其失處得處並申太政官

〔日本紀略村四〕天德四年四月十八日丁亥式部大輔橘直朝朝臣自省退出之間於美福門前爲難人

被毆損公家令召捕嫌疑者彼省史生奈癸忠雅十九日戊子捕獲直朝朝臣所指申下手人省史生

奈癸忠雅

〔春記〕長久元年五月廿二日丙子今夜戌時許依召參御前仰云吾在夜大殿南戶外女房等又在之然

間竊盜入夜大殿中取御衣御衣三領女房等相對見之處驚而自東渡殿遣戶逃去御衣等落失板

敷下其盜人下女體也瀧口等候本陣女房告此由然而不得捕云々侍掌下曹司之路也彼從者非

無其疑也仰藏人賴資令追而又不得也此由等可示關白藤原也者予資藤原即參彼殿進御所面

申此由被奏云太不便事也驚申不少早愷可尋捕嫌疑者之由可仰賴資資檢非違使也者即參內奏此旨了

賴資依仰少將從女二人令捕禁了今夜開左衛門陣云々廿三日丁丑仰云瀧口定清去夜不得盜

人太以別樣也其罪如何中參高陽院一夕申此實被奏云定清事非有指過只至愚之甚也只可恐

中也中仰云竊盜事少將從者二人嫌疑仍去夜所捕也而今一人依無其疑優免了今一人已有其

捕嫌疑者

仁安二年五月十日 宣旨

如聞近日東山驛路綠林之景競起西海洲渚白波之聲不靜或奪取運漕之租稅或殺害往來之人民論之朝章如無皇化宜仰權大納言平卿○重令追討東山東海山陽南海道等賊徒

藏人頭權右中辨平信範奉

〔百練抄九〕壽永二年七月卅日先日有議京中追捕自人家及公卿家又及神社云々

〔壬生家文書〕太政官符 山陰道諸國司

雜事拾貳箇條○中

一應慥擄進陸海盜賊放火輩事

右同宣奉勅近年盜賊之類結黨成群充滿郡鄙殺害人民放火家宅就中近日所犯連夜不絕宜下知諸國隣里與力擄進其身者○中

以前條事如件諸國承知依宣行之符到奉行

修理左宮城判官正五位下行左大史兼播磨介小槻宿禰

正四位下行左中辨兼紀伊權守藤原朝臣

治承二年七月十八日

傍人追捕

〔法曹至要抄上〕一追捕事

又云○律捕被人毆擊折傷以上若盜及強姦雖傍人皆得捕繫以送官司若餘犯不言請而輒捕繫者笞

卅

挾詐捕人

〔法曹至要抄上〕一詐稱官所遣擄人事

詐僞律云詐爲官及稱官所遣而捕人者徒二年

案之人詐或稱使廳使或號所司恣擄取人之時所設之文也

行來仰橫山黨廿餘人常陸相模上野下總上總五ヶ國司可追討進之由可宣下者直雖下同亦彼弁猶示可下大弁之由依事道理召右大弁下之如此凶事必所下右弁官也四月十二日左府仰云坂東橫山黨可追討之由宣下而追捕後不中上子細別催檢非違使請取條尤不似先例事也者

〔中右記〕永久二年八月十六日南海道海賊近日亂發盜取諸國運上物也而熊野別當俗別當等給宣旨可尋進由申之旨風聞如何仰云早給使廳下文可尋進由可仰則下知明兼了此間重時忠盛重方資清明兼所祇候也午時退出了

〔朝野群載十一〕檢非違使移山陽南海兩道國衙欲被令備前守忠盛朝臣搦進海賊事

右院宣稱如聞者頃日海路之間凶賊滋蔓乘數十艘之船浮百萬里之波或殺略往返之旅客或劫奪公私之勝載積惡彌長宿暴日成寔惟諸國司等各憚驍勇無心捉搦之所致也宜令忠盛朝臣搦進件輩者欲被早任院宣令搦進被賊徒之狀依別當宣移進如件乞也衙察狀故移

大治四年三月日

正六位上行右衛門尉明法博士中原朝臣明兼
從五位下行左衛門少尉源朝臣輔遠

〔中右記〕長承四年

元保延

四月八日辛亥殿下

忠實

被仰云近日海賊競發上下船不通仍可追討之

由雖給宣旨於國司等于今不叶何樣可被行哉人々相議可被申者顯賴發語云海賊首所々庄々住人者被仰本所被召進由可被仰者人々同之予申云備前守忠盛朝臣檢非違使爲義等可追討由被仰下何事之在哉以藏人弁資信被奏院仰云道爲義者路次國々自滅亡歟忠盛朝臣且爲備前國司可有便宜也早可追討由被仰下忠盛朝臣可宜者仍被下件旨宣旨了本上卿大宮大夫可奉行者及亥時人々退出六月八日庚戌海賊首僧源智備前守忠盛所搦取也此旨只今所聞也

〔兵範記〕仁安二年五月十日丁未今日依院宣仰海賊追討事先注仰詞內覽殿下

經原

左府經宗原亭奉下之即被返給下官下官下知大夫史了

基原

次院奏次詣

〔日本紀略六〕貞元元年三月廿八日乙未、西京邊土有搜查事、四月十一日丁未、去夜得強盜嫌疑
人、有贓物并承伏輩、

〔日本紀略八〕寬和元年四月五日己卯、依刃傷播磨介藤原季孝朝臣、彈正少弼大江匡衡、可追捕左

兵衛尉藤原齊明等者、臣衛左手指切落也

〔扶桑略記二十九條〕治曆五年元久八月一日、令前駿河守平維盛、檢非違使左衛門少尉源家宗等、追

捕大和國釜摩多山強盜、

〔永左記〕承曆三年八月廿一日、前下野守義家朝臣爲追討兵衛尉重宗之使、下向美濃國云々、廿九

日未刻許、檢非違使季衡來語云、兵衛尉重宗已以逃隱云々、昨日義家朝臣進件旨解狀云々、

〔永左記〕承曆五年元保九月廿四日丁未、或人云、爲令追捕籠牛尾山三井寺惡僧、遣前陸奥守源賴

俊云々、廿九日壬子、早旦向土御門未時許、拾藏人并伊家付去十七日陣定文伊家下近江國食馬

宜旨、下同并了、是檢非違使等、爲令追捕三井寺俗兵士、明日下向彼國之料云々、十月四日丁巳、傳

聞檢非違使等、燒拂近江國高島郡人宅云々、是與三井寺大衆合力、攀登台岳之輩多在彼郡之由、已

有風聞、被追捕云々、

〔中右記〕寬治八年元嘉保正月七日己卯、天皇河出御、中觀族拜之間、檢非違使等於陣外、二條也、

陣難犯間、內府師通原小大夫君政家、雜色等與廳下部等、有鬪亂事、雖不及巨害、又以拔刀、此中右衛

門督車副男、濫行無極、檢非違使等、搦車副男、入自右衛門陣、欲觸案內於別當、源處、今日不被參內、

左佐有信在床子座、兼右少先觸案內、引參關白殿、師通原御直廣申事之由、但節會之間、不及奏聞者、

〔中右記〕嘉承二年十二月卅日、今夜晦、御執使非藏人實兼、具御衣、行向河原之間、於五條坊門富小路

邊、中雜人打逢、已破御衣蓋了、是馬允繁時宅前云々、仍遣檢非違使、被追捕云々、

〔長秋記〕天永四年元久三月四日、橫山黨依殺害內記太郎、被下追捕、宣旨左府源仰云、頭并原實藤

崎村海賊群居掠奪尤切公私海行爲之隔絕凡可捕件賊之狀頻繁仰下督促懲勸其後播磨備中備後阿波等國相尋言上獲賊之狀而今寇盜難休流聞如此實是國司等欲消一境之咎不慮天下之憂無盡謀略不精搜捕之所致也夫海賊之徒萍浮南北唯殉其利不恤其居追捕則鳥散寬縱則鳥合仍須緣海諸國勦力同謀具記往來之船航動詳去就之人物僞聞有奸謀則彼我相移差發人兵招募俘囚搜其屋穴尋其風聲窮討盡捕令無遺類

〔三代實錄

三十九

元慶五年五月十一日戊午太政官下符山陽南海二道諸國情如聞近者海賊成群

殺略諸人公私之物多致掠奪往歸之輩頻被侵害斯則國宰不勤督察之所致也宜早追捉之十三日庚申勅遣左衛門少志從六位下紀朝臣貞城府生正七位上穴太日佐門繼右衛門府生從七位上善友朝臣益友從八位下阿刀連良繩左右火長十人向山城攝津播磨等國追捕海賊

〔貞信公記

承平元年十二月二日乙卯招左大弁扶杖仰淀山崎等五道仰山城守事又結保道守等

事依群盜橫行也十二日群盜籠故式部大輔菅根朝臣家檢非違使并諸衛官人舍人等終夜圍護比明奉號矢請降仍捕縛下獄召左金吾於殿上令行事十三日請右軍告昨夜圍護群盜諸衛官人舍人等可賜祿狀

〔貞信公記〕承平二年四月廿八日仰追捕海賊使可定行事

〔扶桑略記

二十六

天德五年元和中五月十日壬申夜強盜入前武藏權守滿仲之宅爰滿仲躬留類人

倉橋弘重弘重指申中務親王

式

第二男及宮內丞中臣良材土佐權守蕃基男等所爲也檢非違使

左衛門志錦文明參內奏聞中務親王家人申云件孫王今晚入親王家其同類紀近輔中臣良材等可有此家仍以事由告親王親王令申云男親繁日來重煩痼病在此家內不堪起居待平復時可進者依宣旨使官人等令搜求同類人親王家內遂不捕獲戊子同親王家捕獲紀近輔申云親繁爲首入滿仲家實也賊物可有彼親繁孫王之許勅云依不進男忽科親王家猶伺親繁之出外可召捕者

遣六衛府舍人等於平城捕群盜。

〔文德實錄^十〕天安二年二月乙酉遣左近衛少將從五位下坂上大宿禰當道右近衛少將從五位上藤原朝臣有貞等卒左右馬寮官人并近衛搜捕京中群盜。

〔三代實錄^六清和〕貞觀四年五月廿日丁亥近者海賊往々成群殺害往還之諸人掠奪公私之雜物備前國言進官米八十斛載於一船差綱丁進上而遭海賊悉被侵奪所殺百姓十一人是日下知播磨備前

備中備後安藝周防長門紀伊淡路阿波讚岐伊豫土佐等國差發人夫追捕海賊。

〔三代實錄^{十二}清和〕貞觀八年四月十一日乙酉下知攝津和泉播磨備前備後安藝周防長門并南海道諸國曰去貞觀四年五月二十日七年六月二十八日宣告應追捕海賊之狀而今有聞賊黨群起掠奪無息是則國司不勤肅清也若不追捕猶致殘暴科罪牧宰曾無任無宥其捕獲之數具狀言上。

〔三代實錄^{十四}清和〕貞觀九年二月十三日癸未是年內外儉乏人庶阻飢就中畿內特甚盜賊群起或遮道路而脅人掠奪或窺屋舍而行火入盜仍下知國司每鄉結保督察奸盜。

〔類聚三代格^{十二}〕太政官符

應勤施方略早斷盜賊事

右被大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣氏宗宣稱頃年搜捕海賊督察奸盜之狀數度下符警告稠疊而今如聞凶徒不絕竊盜尙繁水浮陸行皆憂賊害實是國司遮莫符旨不勤肅清之所致也夫五家相保一人爲長以相檢察載在法條又容止盜賊科罪非輕然則事須隣伍之內必置保長察以行來詳以去就亦其市津及要路人衆猥雜之處多施方略動設偵邏募以捕獲之賞示以容舍之事使奸濫徒無所留跡若不加慎行重致解體者必處重責不曾寬宥。

貞觀九年三月廿七日代實錄^三又見三

〔三代實錄^{十四}清和〕貞觀九年十一月十日乙巳下知攝津和泉山陽南海道等諸國曰如聞近來伊豫國宮

〔唐律疏議^{捕亡}〕諸罪人逃亡將吏已受使追捕而不行及逗留^{謂故方}雖行與亡者相遇人使足數

不闕而退者各減罪人罪一等闕而退者減二等即人仗不敵不闕而退者減三等闕而退者不坐^疏

略^謂即非將吏臨時差遣者各減將吏一等三十日內能自捕得罪人獲半以上雖不得半但所獲者最

重皆除其罪雖一人捕得餘人亦同若罪人已死及自首各盡者亦從免法不盡者止以不盡人爲聖

議^疏限外若配贖以後能自捕得者各追減三等即爲人捕得及罪人已死若自首各追減二等^{已詳}

^{者不在追減之例}
^{餘條追減準此}

〔法曹至要抄^{罪上}〕一追捕事

又[○]捕云追捕罪人而力不能制告道路行人其行人力能助之而不助者杖八十勢不得助者勿論

〔令義解^{凡五位以上}〕犯罪合禁在京者皆先奏[○]註若犯死罪及在外者先禁後奏並聽別所坐婦女

在位者亦同[○]註若五衛府志以上及兵衛犯罪須追者並聽鞠獄官司經本府追掩本府即奏執遣^准

唐令^{上番入宿衛者其下番者能主帥本府不發直追皆}明獄官追捕對問者本府不發直追得罪狀辦定^{獄官更以狀牒報本府即奏許也}其主帥及衛士者本

府即依執送^{依法禁送}

〔續日本紀^{文一}〕四年十一月乙未天下盜賊往往而在遣使追捕

〔續日本紀^{文三}〕慶雲三年閏正月庚戌是日令掃淨諸佛寺并神社亦索捕盜賊

〔續日本紀^{文三}〕慶雲三年二月庚子京及畿內盜賊滋起因差強幹人悉令逐捕焉

〔續日本紀^{文十}〕聖武^武天平二年九月庚辰詔曰京及諸國多有盜賊或抵人家劫掠或在海中侵奪害百姓

莫甚於此宣令所在官司嚴加捉擄必使擒獲

〔日本紀略^{恒武}〕延曆十五年五月甲午遣吉備魚主於山陽道諸國索捕賊

〔續日本後紀^{仁七}〕明^明承和五年二月庚子勅旨曰分遣左右衛門府生看督等於畿內諸國追捕奸盜云々

〔文德實錄^九〕天安元年三月癸丑遣左右近衛左右兵衛及檢非違使左右馬於京南捕群盜乙卯亦

賊國郡軍圍皆附考謂不必降考

〔法曹至要抄禁制〕一兵仗事

擅興律云擅發兵二十人以上杖一百五十人徒一年五十人加一等若有逃亡盜賊權差人夫足以追捕及公私田獵者不用此律

〔唐律疏議十六〕諸擅發兵十人以上徒一年百人徒一年半百人加一等千人絞謂無警急又不先言言上而不待報發兵者雖即書施行即坐○疏議略給與者隨所給人數減擅發一等亦謂不先言上不待報者其寇賊卒來欲

有攻襲即城屯反叛若賊有內應急須兵者須便調發雖非所屬比部官司亦須調發給與並即言上各謂急須兵不容得先言上者○疏議略若不即調發及不即給與者準所須人數並與擅發罪同其不即言上者亦準所

發人數減罪一等若有逃亡盜賊權差人夫足以追捕者不用此律

〔令義解〕凡告密人皆經當處長官告謂密者謀叛以上○中略長官有事經次官告○註若長官次官俱有密者○註

任經比界論告受官司准法示語○註竊言有實即禁身據狀檢按○註若須掩捕者即掩捕謂若

衆多須告人兵如此時○註不即掩捕故云云應掩捕者即掩捕謂依律官司承應與餘國相知者所在國

司准狀收掩謂論亡令云若力不能制事當謀叛以上雖檢按仍馳驛奏聞○註指斥乘輿及妖言惑衆

者檢按訖總奏○註承告掩捕者若無別狀不須別奏謂假承告追捕謀叛而實是謀叛者不可其有雖

稱告密示語確不肯違○註仍云事須面奏者受官司更分明示語○註虛得無密反坐之罪○註又

不肯導事狀者禁身馳驛奏聞○註若直稱是謀叛以上不吐事狀者○註給驛差使部領送京若勘問

不審事狀同失事機者與知而不告同其犯死罪囚及配流人告密者並不在送限○註應須檢按及奏

聞者准前例

〔令義解〕凡奉使有所掩攝謂依律將吏受使皆告本部本司不得徑即收捕若急遽密者且捕獲取本

司公文發遣謂凡掩攝罪人皆先經罪人本部本司若急遽密者不經本部本司徑即追捕然後始告

〔朝野群載〕^{十一}右辨官下 大和國

應勤行檢非違使供給事

左衛門權少尉藤原顯輔 從三人 火長二人

大志栗田豐道 從三人 火長一人

府生船保重 從二人 火長一人

右少志安倍守長 從一人 火長一人

左右看督長二人

右權中納言藤原朝臣長家宣奉勅爲令追捕犯人差件等人充使發遣如件國宜承知依宣行之使者經彼之間依例供給官符追下

年月 日

左大史

右少辨藤原朝臣

〔令義解捕亡〕凡有盜賊及被傷殺者謂依律盜賊者猶云盜以其有所賊害故曰盜賊即強盜等也傷殺者不勝三書即明三書者不依此條而三書之後乃得追捕也即告隨近官司坊里聞告之處率隨近兵及夫謂兵者兵士也夫者人夫也從發處

尋蹤登其追捕若轉入比界須其比界追捕若更入他界與所部官司對量蹤跡付訖然後聽比界者還

其本發之所使人須待蹤窮其縱緒盡處謂賊跡窮盡處無追尋也官司精加推討若賊在甲界而傷盜乙界及屍在

兩界之上者兩界官司對共追捕如不獲狀驗者謂非賊狀露驗不得即加徵拷

〔令義解捕亡〕凡追捕罪人所發人兵謂人夫及兵士也皆隨事斟酌使多少堪濟其當界有軍團謂當部之內即

與相知隨即討撲謂撲者若力不能制者即告比國比郡得告之處審知事實先須發兵相知除翦仍馳

驛申奏謂得告之處錄發兵狀申奏即本發之處依獄令申奏也依律盜賊卒來欲有若其遲緩逗留水

告之處謂攻襲即反叛若賊有內應急須兵者得便調發故知曉驛之色據此爲限也若其遲緩逗留水

廢失機也謂不赴機急致使賊得逃亡及追討不獲終不獲賊也者當處錄狀奏聞謂依律驛奏聞也其得賊不得

名稱

捕犯人

繫スル事ヲ得ルナリ、又追捕スル時ニ、罪人兵器等ヲ持シテ、拒捍スル時、捕人格殺シ、或ハ逃走セルヲ追ヒテ之ヲ殺シ、或ハ犯人ノ追窘シテ、自殺スル事アルモ、皆罪ヲ論ゼザレドモ、空手ニテ拒捍スル者ヲ殺シ、或ハ已ニ執ハレタルト、拒捍セザルトヲ殺傷スル等ハ、各、罪アリ、

〔伊呂波字類抄都疊字〕追捕

〔運歩色葉集津〕追捕

〔大鏡ハ〕大炊御門よりにしざまに、人々のさゝどはしれば略○中さはおほきなるつゝゐふゝかなと、かたゝゝにこゝろもなきまでまごひまかりしかば、

〔北山抄六〕追捕使事

〔増鏡二新島七〕類朝略○中この時ぞ諸國のそうついふくしといふ事うけたまはりて、地頭職に我家のつは物どもなしあつめける、

〔職原抄下〕檢非違使

朝家置此職以來、衛府追捕、彈正札彈、刑部判斷、京職訴訟、併歸使廳、

〔續日本後紀八〕承和六年六月乙卯、勅彈正臺及檢非違使、雖配置各異、而札彈違犯、彼此並同、但至犯人逃走、姦盜隱遁、彈正之職不堪追捕、自今以後、緣札違犯、有可追捕者、臺使相通、道檢非違使長等隨事追捕、立爲永例、

〔侍中群要七〕陣中非違事

陣中雜犯、藏人召看督使、令捕之、或以小舍人搦之、召檢非違使、給之、若藏人尉候者、出陣外、勸札之、

〔侍中群要七〕檢非違使奏事

別當有闕之時、廳底可然人奏事由、行于例事、依可下給也、有名犯人并有宣旨追捕者、得之時、參藏人所奏、其由

或有輪轉之時、各正絹也、佐若有此中、藏人所授、於六位官人出納、有何事、乎、藏人尉可有任心也、

〔侍中群要七〕檢非違使奏事

別當有闕之時、廳底可然人奏事由、行于例事、依可下給也、有名犯人并有宣旨追捕者、得之時、參藏人所奏、其由

或有輪轉之時、各正絹也、佐若有此中、藏人所授、於六位官人出納、有何事、乎、藏人尉可有任心也、

古事類苑

法律部十一

上編

追捕

追捕ハ衛府ノ掌ル所ナリシヲ後ニ檢非違使ニ屬セリ、凡ソ盜賊ニ遇ヒ、或ハ傷殺ヲ被リタル人アル時ハ、隨近ノ官司坊里ニ告グ、其官司坊里ハ、直ニ兵士八夫ヲ率キテ、蹕ヲ尋テ追捕ス、若シ罪人轉ジテ、比界ニ入ラバ、比界ノ人ト共ニ追捕シ、若シ更ニ他界ニ入ラバ、他界ノ官司ト追捕シ、比界ノ人ヲシテ還ラシム、賊ノ跡ノ窮リ盡キテ尋スルニ由ナキニ至リテ、本發ノ使人ハ、還ルコトヲ得ルナリ、若シ甲ノ界ノ賊、乙ノ界ニテ盜シ、或ハ人ニ傷ケ、及ビ其屍甲乙兩界ノ間ニ在ル時ハ、兩界ノ官司共ニ追捕ス、而シテ賊ト狀ト露驗ナラザル時ハ、即チ拷訊スルコトヲ得ズ、凡テ罪人ヲ追捕スルニ、其發スル所ノ兵士人夫ノ多少ハ、事ノ大小ニ從テ、當界ニ軍團アラバ、即チ之ト共ニ追捕シ、其力制スルコト能ハザレバ、比國比郡ニ告グ、告ヲ得タル處ハ、審ニ事實ヲ知リ、兵ヲ發シテ剿除ス、而シテ擅ニ兵二十人以上ヲ發スルハ、律ニ禁ズル所ナレドモ、若シ追捕ノ爲ニスル者ハ、此律ヲ用キズ、又使ヲ率リテ追捕スルニハ、皆罪人ノ本部本司ニ告グベキ法ナレド、若シ事ノ急速ナル時ト、密ニスベキ時トハ、追捕シテ後ニ告グルコトアリ、罪人ヲ追捕セントシテ、其力制スル事能ハザル時ハ、道路ノ行人ニ告ゲテ助ケシム、他人ヲ毆撃シテ折傷セシメ、若シクハ盜シ、及ビ強姦ノ罪ヲ犯ス者アル時ハ、傍人ト雖モ捕繫シテ、官司ニ送ル事ヲ得レドモ、其餘ノ犯人ハ、傍人ハ言請シテ後ニ捕

囚人

四八九

囚禁法 給物

四九〇

檢囚

四九一

錄囚

四九二

囚人告訴

同

移送囚人

四九三

囚人逃亡

四九五

失囚處分

劫奪囚人

四九七

囚人遭喪

四九八

囚人疾病

四九九

囚人死亡

五〇〇

囚人自殺

囚禁例

同

雜載

五〇三

○

召籠

五〇四

古事類苑

法律部十一

上編

追捕

名稱

捕犯人

傍人追捕

挾詐捕人

捕逃亡者

捕嫌疑者

犯人拒捍

搜索犯人

追捕行賞

囚禁
召籠 囚人

獄舍 獄舍遭火

囚禁具

掌獄司

四六二

同

四七〇

同

四七一

同

四七二

同

四七六

四八〇

四八五

四八九

今世之人多不務經術好翫博弈廢事棄業忘寢與食窮日盡明繼以脂燭當其臨局交爭雌雄未決專精銳意神迷體倦人事曠而不修賓旅闕而不接雖有太牢之饌韶夏之樂不暇存也至或賭及衣物徒基易行廉耻之意弛而忿戾之色發然其所志不出一枰之上所務不過方罫之間

賊害自今以後宜仰隣保檢察非違一如令條其遊食博戲之徒不論賒贖決杖一百放火劫略之類不必拘法懲以殺罰勤加捉搦遏絕奸宄主者施行

延曆三年十月廿日○又見續日本紀

〔延喜式四十一〕凡雙六者無論高下一切禁斷

〔法曹至要抄中〕一雙六事

案之雙六者律令格式共以嚴禁六位以下成此犯者可決杖一百但五位以上可奏聞事由有司若糾得者先可申別當矣

〔新抄格勅符抄〕太政官符 神祇官

雜事拾壹箇條○中

一應重禁制諸司諸衛官人饗宴非手盞事

右饗宴之制明在太平寶字二年勅書貞觀八年昌泰三年格延喜六年天曆元年延長三年永觀二年符綸旨頻降炯誠重疊而年來典法設而不張時俗習而不謹有力者盡善盡美自得衆望無賴者若存亡○亡上恐脫若字獨苦一身世之靈害尤在此事同宣奉勅自今以後全以停止若乖違有犯見聞不糾之人

非可寬恕罪同先格○中

以前條事下知如件方今號令之道內外雖分遵行之旨遠近何異同宣奉勅若乖新制無改舊弊隨其狀迹將加科斷者官宜承知依宣行之事出綸旨不得違失符到奉行

正五位下守右中辨源朝臣道方

正五位下行左大史多米朝臣國平

長保元年七月廿五日

〔中右記〕永久二年二月十四日仰云近日京中著摺衣者并博戲輩滿道路儘可禁制則仰盛道定實等

得罪重於杖一百者各依已分準盜論謂賭得五匹之物合徒一年

註云輸者亦依已分爲從坐謂輸五匹之物爲徒一年從坐合杖一百贓多者各準盜法加罪若贏衆人之物亦須累而倍論輸衆人物者依已分倍爲從坐若倍不重一人之贓卽各從一人重斷其停止主人及出玖若和合者各如之賭飲食者不坐

疏議曰停止主人謂停止博戲賭物者主人及出玖之人亦舉玖爲例不限取利多少若和合人命戲者不得財杖一百若得利入己並計贓準盜論衆人上得者亦準上例倍論故云各如之賭飲食者不坐謂卽雖賭錢盡用爲飲食者亦不合罪

〔類聚三代格十二〕太政官謹奏

禁斷雙六事

右頃聞官人百姓不畏憲法私聚徒衆任意雙六至於淫迷子無順父終亡家業亦損孝道望請遍仰京四畿內七道諸國固令禁斷其六位已下無論男女決杖一百不須蔭贖但五位者則解却見任及奪位祿位田四位已上停廢封戶職國郡司阿容不禁亦皆解見任若有顯申廿人已上者無位鉞位三階有位賜物施十匹布十端其所賭資財皆悉沒官臣等商量如前伏聽天裁謹以申聞謹奏奉勅依奏

天平勝寶六年十月十四日○又見續日本紀二

〔雲州消息下末〕近來側聞被淫雙六之由禁制綸旨先後重疊六位以下決杖一百五位者則解却見任奪位田位祿四位已上停給封戶其由具見弘仁格句合出九誰人所爲乎早々可被停止也又文選博奕論無益之由已以分明也於基琴者有何事乎不貪爲寶聖人炳誠也穴賢々々謹言

月日

左京大夫

主殿頭殿

〔類聚三代格十二〕勅如聞比來京中盜賊稍多掠物街路放火人家良由職司不能肅清令彼凶徒生茲

宿上下船之者謂之濫纖亦稱出遊得少分之贖爲一日之資爰有娼伎繡紉之名舳取登指皆出九分之物習俗之法也

〔令義解^二僧尼^七〕凡僧尼作音樂及博戲者謂雙六、樗蒲之類也百日苦使^謂非琴不在制限

〔令集解^{七下}尼^七〕釋云音樂謂不相須也博戲者武習力競之類亦不聽與俗人異也告博戲盜賊之類雖有報給之文於僧尼告者止沒官耳不許畜財故古記云音樂謂不相須與律作樂少義異也博戲謂武習力競之類亦不聽與俗人少異也博戲者雖不賭亦苦使雜戲皆是在席所有之物并句合出九得物爲人私告者依實賞例并沒官輸物僧并容止僧尼私告者亦沒官爲不聽畜財物故唯與俗人相戲者俗人私告者依實例非財賭過多亦同也宋云習武爭力又削弓作箭之類亦不聽今案此等之類爲苦使條制外所犯不至還俗上條釋云殺食者還俗無疑者此等爲條制外至還俗之罪可謂博戲者停止主人及出九句合等亦同

〔令抄〕僧尼令第七

非琴 道俗格曰作音樂及博戲者百日苦使其相取財物者還俗道士女官非琴不在制限梵網經云佛子不得聽吹貝鼓角琴瑟乃至伎樂之聲不得○得本作聽樗蒲圍碁一作碁一々不得作若故作者犯輕垢罪

〔金玉掌中抄〕一博戲罪事

捕亡令云雙六樗蒲之類也雜律云博戲賭財物者杖一百賭重者各依已分準盜論注云非射雖賭亦無罪

〔唐律疏議^{二十六}律^{二十六}〕諸博戲賭財物者各杖一百賭博爲例是賭重者各依已分準盜論論者亦依已分爲從生

疏議曰共爲博戲而賭財物不滿五匹以下各杖一百
注云舉博爲例餘戲皆是謂舉博爲名總爲雜戲之例弓射既習武藝雖賭物亦無罪名餘戲計賊

りければ、在地の者共たふとみて、かつは夢なども見たりけるにや、面々に歸依してけふの齋料をばわれさせん、とあらそひ結縁しければ、預けたりつる兩町の十貫錢もことごとくもいらす、家のあるじの所得に成にけり、かくて往生の期ちかく成にければ、兼て其期を知て仁和寺の妻が家に行向ひて、いどなやむ事もなくして正念に住して高聲念佛おこたらず、端座合掌して終りにけり、善知識大成因縁なれば此妻はゆゝしき善知識かな、これも阿彌陀如來の御方便にや、

〔愚昧記〕仁安三年五月十一日壬申傳聞、此間院中博奔之外無他事云々、下臈皆參上、與上皇奉博奔云々、或事負獻種々珍寶、或又奉勝預様々給物云々、左衛門尉某奉負獻腹卷而異體物云々、仍上下各爭給、以件物被投庭中、

禁博奔

〔日本書紀〕三年十二月丙辰、禁斷雙六、

〔續日本紀〕二年七月乙丑、禁博戲遊手之徒、其居停主人亦與居○考證云、同罪、

〔續日本紀考證〕珠璣載云、居停主人以第宅假人也、案唐律疏議、停止主人謂停止博戲賭物者主人亦此、

〔令義解〕凡博戲賭財、謂博戲者、雙六、博、博之屬、即、在席所有之物、謂官物者、非其、雖、而在外者、是非在席之色、而見在、及、句、合、出、九、謂和合兩人、令相敵對、是爲句合也、舉九、得物爲人札告、其物悉賞、賂人、即輸物人、及出九、句合容止主人、能自首者、亦依賞例、官司捉獲者、謂監臨官司、非因私、減半賞之、餘沒官、唯賭得財者、已依例賞、而所犯之罪亦准法坐、即其所得利物、亦不在沒限、自首不在賞限、其物悉沒官、

〔朝野群載〕遊女記

所得之物、謂之團手、及均分之時、廉耻之心去、忿勵之色興、大小評論、不異鬪亂、○中其豪家之侍女

傍輩共女牛に腹つかれたる心地してありけれど、今かくかひ付て後をこそなど思ひゐたり、去程に此ぬし其夜やがて仁和寺の妻が本へ此錢をもたせて行にけり、次のあした家にて妻にいひあはせてゆゝしくこそして長櫃のあたらしき兩三合たづねて、誠にきらくしくまたて、第二日の朝とくかゝせて参たり、先起請文一紙を書て侍の柱におしてけり、其起請文に書様今日以後ながく博打仕べからず、過にしかたも仕らぬ事なれど、諸衆の御供して此度始て此事仕りの自今以後もし又斯様の事仕らば、現當むなしき身と成べしと書ておしたりけり、傍輩どもかたへはやすからぬことにいひ、かたへは感ずるも有けり、事はて、妻が本へ行て云やう、今三十貫有十貫をば汝にとらせん、かくまうけたる併汝が恩なればすべて皆とらすべけれ共我既によはひたけて殘の年いくばくならず、年頃出家の志あれども一日の齋料のたくはへなし、是に思ひわづらひつるなり、此二十貫の錢を持て、齋料にして、念佛申て後生たすからんと思ふなり、とし頃の志わするべからず、いとひ給はん迄は時時は参りて見奉るべし、又やれ衣きよむることなどはとぶらひたまへかしといへば、妻返返目出たく思ひとりたまひたる、誠に此世はつねならねば左様に思ひとりたまへる事、わがためもうれしき事なりとてゆるしてければ、悦て則出家をとげて廿貫の錢を先十貫もちて、四條町にいたりぬ、ある小家に至りて云やう、是十貫の錢有奉らん、我を一月に十五日此家に晝ばかり宿して、その程一日に二たびの齋料をこの錢にてまてたまへ、さて用途つきなんのちはとゞめたまへといへば、家のあるじよき事と思ひて事うけしてけり、かく商賣たまふ所なれば、家せばくて所なし、屋のうへにゐたらんはいかにといへば、それは心にまかせたまへといへば、悦て家の上にのぼりて下見さげて、世の人のさはしるさまを見て、世間の無常をさとりて念佛して、上十五日をすぐしけり、今十貫を持て又七條の町に行て此定にして、下十五日をすぐしけり、去程に念佛の功つもりて運心としをおく

いへば、同こゝろに思けるにこそ、女のならひは何事をいはず、博奔する事をば腹たつことなるに、ありがたくものたまふ物かな、去ながらもこゝろにくき事なし、何としてはげまんどてかくはの給ぞといへば、妻なにしに其事をばいふぞ、今あけんをまでといふ、さる程に夜明にければおのれが一つ著たりける衣をぬぎて、人の錢五百文かりてげり、男のもこへもて來ていふ様、この錢にて心ゆるし給へ、人の十廿貫にてうたんも、又此少分の物にてうたんと心をやる事はおなじ事なり、我こゝろに又おもしろし共思はぬ事なれば、あながちにおほくうち入てもせんなしといへば、男ありがたくうれしく覺て、其あしたやがて此錢ふところにひき入て殿へ持て參ぬ例の事なればあつまりてのゝ、ゑる中にまじりぬ心中に思ふやう、すべてこの事いまだせぬ事なり、朝夕見きけ共、我ど手をおろしてゑたる事なれば、さいの目の勝まけもはかん、敷ゑらず、唯人にまかせんと思てかたへの者に其よしをいへば、さしもはやりたる事に唯獨まじり給はざりつれば、賢人だてかとおもひて侍けるに、いかにしてかくはなごいへば、其ここに候、今日よりくはゝり候べしとこたへて、此錢わづかに五百なれば、あまたたびに出さんも見苦たゞ一度におし出して打とられなば、さてこそあらめと思て、よき程つゞきてまはる所におし出してかきたりければ、はやくかきおほせて一貫になりぬ、我はいまだ一度もゑり候はねば、どうをば人にゆづり申候はんとて、まはらん所をかきおとさんと思て、又よき程に一貫をおし出してかくに、又かきおほせて二貫に成ぬ、其時思ふやう、五百をばとりはなちて本をうしなはで妻に返しとらせんと思ひて、ふところにおさめてけり、今一貫五百をとてこれは思ひの外の物なり、おもふさまにせんとと思て、又おし出したるに、かきおほせて三貫に成てけり、其後は或は一貫二貫よき程程におし出すに、おほやうはかきおほせて三十餘貫に成にけり、此上は今手あらに振まはじと思ひて、よき程にしてゑばしやすみ候はんとて三十餘貫の錢取てゑりぞきにけり、

者勝少至十籌或七八籌皆臨局計議

〔水鏡^下〕寶龜三年にみかど井上の后と博奔したまふとて、たはふれ給ひて、我負けなばさかりなる男を奉らむ、后負け給ひなば色かたちならびなからむ女をえさせ給へとのたまひて、うちたまひしに、みかど負け給ひにき、后まめやかにみかどをせめ申給ふ、

〔日本紀略^{十三}〕萬壽四年七月廿日戊午、從三位道雅卿於帶刀長高階順業宅博奔之間、道雅卿取賭歸去之處、順業令郎從、令剪車與之縛繩、視者如堵、

〔古今著聞集^{十二}〕花山院右のおとゝのとき、侍共七半といふ事を好て、ありとしある物ども夜る晝おびたゞしく打けり、おとゝ制し給へ共用す、其中にいとまづしき格勤者一人有もちたる物なれば、其人數にもれてうたゞりけり、大納言定能卿の家の難仕を妻にて、よな／＼は仁和寺へかよひけり、或夜このぬし妻と合宿またりけるが、大患打つぎてねもいらすして夜もすがら物を思ひたるけしきなり、妻あやしみて其こゝろをどひけれ、其何事もなきぞ、只身の程の今更思ひまられてねもいらぬはなとばかりいひけれど、いかにもたゞごとにあらずと思てまひて聞ければ、其時男の云様、實は何事もなし、今更身の程のうきといふは、此程花山院殿の殿原わかきも老たるも七半を打て、毎日にことしてこゝろをゆかしあそびあひたるに、我其中に有ながら一文半錢だにも持ねば、其人數につらなる事なし、大かたそのゆくへまらぬ身なれば、此事のこのもまう打たきにては更になし、唯是程にもてなし興じあへるに、身のちからなくてそこばく多かる殿原の中に、我ひとりよそなるが思ひつゝくれば、是ならぬ、まして大事にもさぞかしと思ふに、今更身の程うたてくて、かくてはなにに人に交るらんとおもふなりと打くどきいへば、妻打なきて、の給はすること尤そのいはれ有誠にさる事なり、人に交るならひは、よき事にもあしき事にも、其事にもるゝは口をしきなり、明ん夜を待たまへ、わらはかまへて奔走せんこ

宿^{シヨク}○下

〔古事記^中〕故茲神^天之女名伊豆志袁登賣神坐也故八十神雖欲得是伊豆志袁登賣皆不得婚於是^有二神兄號秋山之下氷壯夫弟名春山之霞壯夫故其兄謂其弟吾雖乞伊豆志袁登賣不得婚汝得此娘子乎答曰易得也爾其兄曰若汝有得此娘子者遊上下衣服量身高而釀酒亦山河之物悉備設爲字禮豆玖云爾

〔古事記傳^{三十四}〕字禮豆玖^中豆玖^中は今世に云賭豆玖^{ナリ}なり此^今人^は加氣呂久^云云呂久豆久^云云古うつは物語初秋卷に^{仲忠が事と春を打て上興ありとおぼしめして早う賭物}豆玖の事はと仰せらる云々仲忠身に堪ぬべき事ならば仕奉り堪ぬ事ならば其由をこそ奏し侍らめ^{春の買わざをせよと}遊仙窟に賭酒また賭宿^{チツツク}とあり契冲豆玖^{チツツク}は都具能比の略語なりと云り然もあるべし即下文に不償其字禮豆玖之物とあり^{中略}金づくな^{今世俗言に}カブる其らも皆豆久の意の轉れるなり

○按ズルニ伊呂波字類抄ニスクトアルハツクノ轉ニシテ遊仙窟ノ傍訓ニサカツクチツクトアルツクト同言ナルベシ又古事記ニ^{字禮豆玖}空穗物語ニのりものづくナドモ見エタリサヲツトスト相通ズルコトハ次ヲスグトモツグトモ消ヲケツトモケストモイフガ如シ

〔伊呂波字類抄^能〕賭^ノ博^リモ

〔書言字考^{節用集}七〕賭^{カサ}取^{カサ}財^{カサ}也^{博奔}

〔倭訓栞^中編十八〕のりもの賭物の義かけ物も同じ増鏡に拵の賭物は鏡なりすべて昔よりのり物かけ物皆鏡也と院仰られしと見えたり

〔讀雙^五〕賭賽

北人以金銀奴婢羊馬爲博^以所獲男女或買貧者以杯酒勝負不問局數多者以十五爲率先滿

論七盜、八害、無所缺乎。

〔倭訓栞波前編二十四〕ばくち 新猿樂記に博打と書り、今ばくちうつといふは重言也、其人をば

くちとのみいへること、うつば物語に見えたり。

〔雅言集覽波五〕ばくち ばくうち博打者をいふ、

〔菅家後集〕戀少男女詩 五言

往年見窮子、京中迷失據、裸身博弈者、道路呼南助。〔中略〕南大納言〔南淵年名〕子内

〔宇治拾遺物語〕今一は昔丹後國に老尼ありけり、〔中略〕博打のうちほうけてゐたるが見て、尼公は

寒きに何わざゑたまふぞといへば、〔下略〕

〔宇治拾遺物語〕昔ばくちの子の年若きが、目鼻一所に取り寄せたるやうにて、世の人にも似ぬありけり。

〔徒然草〕博弈の負極りて、残りなくうち入れんとせんにあひてはうつべからず、立ち返りつゝけて勝つべき時のいたれると知るべし、その時を知るをよき博弈といふなりと、或者まうしき、

〔東北院職人歌合〕九番 左

博打

おぼつかなたれにうちいれて月影の雲の衣をぬきてみゆらん
わがたてゝきはひはてたるいりかねのあはじとすまふ戀もするかな〔中略〕

左わが身をつみて誰に打入てとよめる心ざしはなくなきこえてこれらもひとつの姿なり

博弈術

〔伊呂波字類抄天事〕行博テボテ

〔倭訓栞波前編十七〕てだて 碁にいふは、史に博爭道と見えたり、

〔伊呂波字類抄雜物〕賭博スロ

〔遊仙窟〕且取雙六局來共少府公賭酒、僕答曰、下官不能賭酒、共娘子賭、宿十娘問曰、若爲賭、

戲耽素有藝名債者聞之而不相識謂之曰卿當不辨作袁彦道也遂就局十萬一擲直上百萬耽投馬絕叫探布帽擲地曰竟識袁彦道不其通脫若此

〔和漢三才圖會卷十七〕擲蒲

按擲蒲其製古今不同今所用者本出於南蠻矣用厚紙作之外黑內白而有畫文略下

○按ズルニ此ニ擲蒲トアルハカルタヲ云ヘルナリカルタノ事ハ下編ノ博奔篇及ビ遊戲部ノカルタ篇ヲ參看スベシ

〔安齋隨筆前編十四〕一チヨボイチ 下賤の者の博奔をうつ事をチヨボイチと云は擲蒲打の訛なり雙六を打ツ事を擲蒲の戲といふ也スゴ六は博奔の本也故に古是を禁制せられし也

〔倭名類聚抄四〕擲蒲采 陸詞云模音軒模子擲蒲采名也

〔伊呂波字類抄雜加〕擲蒲采カリ

〔伊呂波字類抄波〕擲蒲采ハナチ

○按ズルニ博治ハ博徒ノコトニシテ即チ博打ヲ云ヘルナルベシ

〔空穂物語藤原の君〕此みこよろづに思ほしさはぎておんみやうしかむなぎはくち京わらへお
うな、おきなめしあつめての給

〔空穂物語思こそ〕世の中にかしこきばくちのせまりまどひたるをめして略下

〔空穂物語思こそ〕こおさの御をひすけむねといひて少將にて有ける心よろしからずばくち
ふかうの物にて身のまやうぞくなごはみなうちいれてせんかたなくこもりわたるを略下

〔新猿樂記〕大君、夫者高名博打也簡父擲傍鑿目任意語條盡詞謀計究術五四尙利目四三小切目鐘

微一六難吳流レリ叩子平塞鐵塞要筒金頭定筒八破唐居ヒキ垂品態鑿論猶勝宴九道弘即四三一六豐

藤太五四街四竹藤掾之子孫也字尾藤太名傳傳治目細鼻鴈宛如物核一心二物三手四勢五力六

〔古今著聞集^{十二}〕天武天皇十四年、天皇御大安殿、喚公卿等有博奕、まかれどもそののり物をいましむるが故に、憲章その咎を設く、専ら禁すべきことにこそ、

〔倭名類聚抄^四〕檮蒲 兼名苑云、檮蒲一名九采、内典云、檮蒲、和名加利、字知、

〔箋注倭名類聚抄^二〕按、檮字、說文新附、玉篇廣韻皆從手、作搏、山田本蒲作播、注同、與玉篇廣韻合、然說文無搏、蒲字、唐代國長公主碑、作檮蒲、蓋檮蒲本胡語、無其字、故古借用檮蒲字、後人從手以別、檮蒲字蒲蘭字也、○中 皇國所爲檮蒲、雖不能得其詳、然其采蓋用四木、故萬葉集折木四、切木四並訓加利、借搏蒲爲雁也、

〔伊呂波字類抄^加〕檮蒲カリワチ

〔嬉遊笑覽^四〕檮蒲といふものは和名抄にも出、令などにもあれど、こゝには盛りに行はれたるものとも見えす、されども萬葉集に、是を假名に用ひたる事見ゆれば、稀に此戲したる事なきにはあらず、

〔和漢三才圖會^{十七}〕搏蒲

五雜俎云、博戲自三代已有之、穆天子與井公博、三日而決、莊周曰、問穀奚事、則博塞以遊、今之搏蒲、是其遺法也、但所用之子、隨時不同、

〔檮蒲經略〕投五木瓊梳玖骰

博之流爲檮蒲、爲握槊、爲呼博、爲酒令、體製雖不全同、而行塞勝負、取決於投則一理也、

〔閑田耕筆^四〕博奕^{○中} 袁彦道が一擲號叫は檮蒲にて、博物志に老子入胡作五木也、今人擲之爲戲といふものも、とぞ、こなたには傳はれりやいなや、いまだかうがへす、

〔晉書^{八十三}〕耽氏^{○袁} 字彦道、少有才氣、倣儻不羈、爲士類所稱、桓溫少時游于博徒、資產俱盡、尙有負進思自振之方、莫知所出、欲求濟於耽、而耽在艱、試以告焉、耽略無難色、遂變服懷布帽、隨溫與債主

〔箋注倭名類聚抄二〕按、大和物語所云波久衣字、即博奔之轉、即謂雙六也、故源君謂雙六爲博奔是也。

○按ズルニ、大和物語ニハハクヤウトアリ、博奔ノ音便ナリ、此書ニ波久衣字トアルハ一本ニ據レルモノニテ、恐クハ誤ナラン、奔ハ羊益切ニシテ吳音ヤクナリ、ヤクヲヤウト轉ズルコトハヤクナシ益ヲヤウナシト云フガ如シ、而シテエキヲエウト轉ズルコトハ未ダソノ例ヲ見ズ、

〔大鏡六〕内大臣道隆、この御はくやうはうちた、せ給ひぬれば、ふたどころながらはだかにこしらませ給ひて、夜半曉まであそばす、

〔雅言集覽五〕ばくやう博奔也、奔の吳音ヤクなる、

〔薩戒記抄〕一博奔二字事

二字ヲワケテ意得ル子細モアリ、但世俗ニハバクチト云、其外ニ別ニ訓之事不分明、ヨノツチ云ナラハス所、只博奔ハッセントノミ申來候歟、

〔隨意錄七〕博奔之稱、博局、戲、弈、圍、碁、也。圍、碁、則、古、今、無、異、焉。局、戲、則、其、術、不、一。古、博、以、五、木、爲、子、有、鼻、盧、雉、犢、塞、云、其、法、不、傳、漢、以、來、所、謂、博、者、似、今、之、雙、陸、然、其、方、亦、不、同、焉。歟、我、方、今、之、俗、賭、錢、投、骰、子、以、爭、得失者、都、稱、博、奔、非、也。斯、所、謂、博、者、歟、今、我、國、法、禁、此、技、也、嚴、矣、然、奴、隸、役、夫、好、而、爲、之、竟、不、可、止、也。〔閑田耕筆四〕博奔といふは、本朝も漢土もともにもろゝの勝負の都名なるを、こなたにては殊に雙六をいへる歟、建保の職人盡歌合に、腹うちひろげて雙六うつさまを畫けり、

初見

〔日本書紀二十九〕十四年九月辛酉、天皇御大安殿、喚王卿等於殿前、以令博戲、是日宮處王、難波王、竹

田王、三國真人、友足、縣犬養宿禰、大侶、大伴宿禰、御行境部宿禰、石積、多朝臣品治、采女朝臣竹羅、藤原朝臣大島、凡十人、賜御衣袴、壬戌、皇太子以下、及諸王卿并四十八人、賜藤皮山羊皮、各有差、

博 弈

博弈ハ局戲ナリ、古ハ錢財ヲ賭シ、輸贏ヲ爭フモノヲ概言セシガ如シ、而シテ此戲ノ國史ニ見エシハ、天武天皇ノ十四年、大安殿ニ御シ、王卿ヲジテ博戲セシメ、御衣袴、獸皮ヲ賜ヒシヲ以テ始ト爲シ、之ヲ禁ゼシハ、持統天皇三年ニ、雙六ヲ禁斷セシヲ以テ始トス、大寶ノ初二、律令ヲ定ムルニ及ビ、嚴ニ之ガ制ヲ立テシヨリ以來、屢、制禁アリシガ、其間自ラ弛緩ノ時ナキニアラズ、且ツ博弈ノ種類ニ由リ、賭物ノ品類ニ從ヒテ、必シモ之ヲ禁ゼズ、公卿モ公然之ヲ翫ビシ事アリ、而シテ博弈ノ種類ニハ、雙六、意錢、樗等アリ、遊戲部ニ各、其篇ヲ載セタリ、

名稱

〔釋日本紀^{二十}〕令博戲^{私記}

〔史記^{三十}〕富人或圖鷄、走狗馬、弋獵博戲亂齊民、

〔史記^{百二十九}〕博戲惡業也、而桓發用之富、

〔倭名類聚抄^四〕雙六 兼名苑云、雙六子一名六采、^{今按、雙六是也、舊音}

〔箋注倭名類聚抄^二〕按、博六、博、弈、圍、碁、二物不同、^{○中國俗併、弈爲雙六、名非、}

〔段注說文解字^五〕博、局戲也、六、箸十二、碁也、^{古數、今不得其真、舊傳非、所謂博、箸、從竹、博聲、切、五}

部、經傳多、^{假博字、}古者烏曹作博、

〔段注說文解字^三〕上、禽、圍、碁、也、从、卂、亦、聲、^{音在、五、部、論語曰、不有博弈者乎、說文、博、}

〔伊呂波字類抄^八〕博、弈、ハ、ク、エ、キ、一、心、二、物、三、上、四、勢、五、力、

〔牛馬問^四〕いにしへ所謂博弈とは今卑俗のいふものに非ず、今下賤のなす所のものは益變じて益いやし、心あらん人の可愧可恐の事也、或草紙を見れば、曰博弈に一心、二物、三上、四性、五力、六論、七蓋、八害といふ事、一心とは心を押柄に持也、二物とは金錢を澤山に持て一兩負は貳

監守內姦

雜律奸父祖妻者徒三年注云妾減一等疏云其奴及家人奸主妻及主親妻亦減一等又條云其家人及奴奸主者絞

〔律疏名例〕凡應議者○中監守內奸他妻妾○中不用此律

〔律疏名例〕凡犯八虐故殺人反逆緣坐○中監臨主守於所監守犯奸盜賂人若受財而枉法者亦除

名奸謂犯其妻妾

〔唐律疏議二十六〕諸監臨主守於所監守內姦者謂犯其妻妾加奸罪一等

僧徒犯姦

〔令義解僧尼〕凡僧尼○中殺人奸盜謂若殺及奸家人奴婢並依下條也並依法代付官司科罪

〔令抄僧尼〕奸盜名例律云凡僧尼犯奸盜者同凡人義解云僧尼犯奸盜於法最重故雖犯當寺家人

奴婢奸盜即同凡人謂三綱以下犯奸盜得罪無別其奴婢奸盜一准凡人得罪○又見小野宮年中

〔類聚國史八十七〕弘仁十四年二月庚戌流興福寺僧中源廣信元興寺僧永繼等於遠江國並緣姪犯

也

〔扶桑略記字多〕寬平八年九月廿二日陽成太上天皇之母儀皇太后藤原高子與東光寺善祐法師

竊交通云々仍廢后位至于善祐法師配流伊豆講師

〔律疏名例〕凡犯姦謂姦他妻妾及與和者○中 免官

〔日本書紀二十五〕大化二年三月甲申詔曰○中 復有廢嫌已○已下恐脫妻字 姦他好向官司請決假使得明

三證而俱顯陳然後可諧詎生浪訴○中 如是等類愚俗所染今悉除斷勿使復爲

〔續日本紀十三〕天平十一年三月庚申石上朝臣乙麻呂坐姦久迷連若賣配流土左國若賣配下總國

焉十二年六月庚午勅曰○中 宣大赦天下○中 姦他妻○中 不在赦限其流人穗積朝臣老多治比

真人祖人名負東人久迷連若女等五人召令入京○中 石上乙麻呂○中 不在赦限

〔日本書紀九十三〕二十四年六月御膳羹汁擬以作冰天皇異之下其所由下者曰有內亂蓋親親相姦乎

時有人曰木梨輕太子姦同母妹輕大娘皇女因以推問焉辭既實也太子是爲儲君不得罪則流輕大

娘皇女於伊豫

姦父祖妾

〔律疏名例〕八虐

七曰不孝謂○中 姦父祖妾

〔唐律疏議名例〕十惡

十曰內亂謂姦小功以上親父祖妾及與和者

疏議曰父祖妾者有子無子並同

〔法曹至要抄上〕一八虐事

七曰不孝○中 雜律云姦父祖妻者徒三年妾減一等

〔唐律疏議二十六〕諸姦父祖妾謂曾經有父祖姦者○中略絞

〔令集解七下〕雜律姦官私婢者杖六十姦他人○據唐律他人下恐脫家人妻三字及官戶陵戶婦女者杖七十

姦婢

〔金玉掌中抄〕一八虐罪事

七曰不孝○中

和姦

〔百練抄後四冷泉〕康平三年十二月十一日、宰相中將俊房、被免勅勘、依前齋院、補子強姦事、此一兩年籠居、

〔令集解七〕尼雜律云、凡姦者、徒一年、有夫者、徒二年、官戶、陵戶、家人姦良人者、各加一等、又條云、凡○凡姦良人者、徒二年半、又條云、和姦本條、無婦女罪名者、與男子同、

〔日本書紀十四〕二年七月、百濟池津媛、遠天皇將幸、姪於石河橋、舊本云、石河、股合、首相、橋、天皇大怒、詔大伴室屋大連、使來目部張夫、婦四支於木、置假版上、以火燒死、百濟新撰云、己巳年、重國王立、天皇遣阿禮、來連、使來目部張夫、婦四支於木、置假版上、以火燒死、案、女即、百濟莊、華尼夫人、女曰、通、婦、女、即、貢、連、於、天皇、

〔日本書紀十四〕九年二月甲子朔、遣凡河內直香、賜與采女、祠胸方神、香賜與采女、既至、壇所、香賜此云、及將行事、姦其采女、天皇聞之、曰、祠神祈福、可不慎歟、乃遣難波日鷹吉士、將誅之時、香賜即逃亡、不在、天皇復遣弓削連豐穗、普求國內縣、遂於三島郡藍原執而斬焉、

〔日本書紀十四〕十三年三月、狹穗彥玄孫、齒田根命、竊姦采女山邊小島子、天皇聞以齒田根命、收付於物部目大連、而使責讓、齒田根命、以馬八匹、大刀八口、祓除罪過、既而歌曰、耶麼能謎能、故思麼古喻衛爾、比登涅羅賦、宇麼能耶都擬攝、鳴思稽矩謀那斯、目大連聞而奏之、天皇使齒田根命、資財露置於餌香市邊、橋本之士、遂以餌香長野邑、賜物部目大連、

〔日本書紀二十〕八年三月、悉劾姦采女者、皆罪之、

〔續日本紀三十三〕實龜三年十月壬子、中務大輔從五位上、兼少納言信濃守、菅生王、坐姦小室內親王、除名、內親王削屬籍、

〔法曹至要抄上科〕一、強和姦事、

雜律云、姦者、徒一年、有夫者、徒二年、

〔唐律疏議二十六〕諸姦者、徒一年半、有夫者、徒二年、

有大姦

夜半伴永基切被板垣入來寢所強婚實也者使等勘問永基強奸吉常妻仁町之由進伏辨過狀已畢

以前獄四等罪狀勘申如件

延喜十六年七月三日

右衛門府生竹田貞主

道守峯成

權少志錦春蔭

少尉藤原忠見

權佐橘朝臣公佐

左衛門府生國口恒世

高志常直

大志伴高成

權少尉源中正

東市正兼大尉常世基宗

權佐兼春宮大進平朝臣伊豆

別當參議右衛門督兼近江守源朝臣常時

〔左經記〕寬仁四年閏十二月廿六日壬申故常陸守惟通朝臣妻強奸彼國住人散位從五位下平朝臣爲韓緣惟通母愁被召日來候弓場而今日於檢非違使廳爲問之令召稱病由不出向云々

〔左經記〕長元四年六月五日辛巳右府實○藤原御消息云彈正忠大江齊信強奸齊院長官以康朝臣女

子之事於臺可令召問之由有宣旨大臣彈正式部官人於里第賜宣旨是恒例也然者召里第可仰下歟如何令申云臺官人於里第被仰更不可有傍難者

犯姦

姦ニハ、夫ナキ者ヲ姦スルアリ、夫アル者ヲ姦スルアリ、官戸、陵戸、家人、奴ノ良人ヲ姦スルアリ、良人ノ官戸、陵戸ノ婦女ヲ姦スルアリ、官吏ノ監守内ニ於テ姦スルアリ、親族相姦スル等ノ數種アリテ、罪ニ輕重アレドモ、強和ノ二姦ニ出デズ、和姦ハ彼此と同スルヲ云ヒテ、多クハ男女同罪ナリ、強姦ハ和セザルヲ姦スルヲ云ヒテ、男子ハ其罪和姦ヨリ重ク、婦女ハ罪ナシ、

強姦

〔法曹至要抄^{上科}〕一強和奸事

雜律云、姦者徒一年、有夫者徒二年、強者各加一等、又云、和姦本條、無^{〇無、判本作、有、雜集解、改、}婦女罪名者、與男夫同、強者婦女不坐、

案之、強姦無夫之女徒一年半、強姦有夫之女徒二年半、若和姦者、女人同可得罪之、

〔唐律疏議^{二十六}〕

諸姦者、徒一年半、有夫者徒二年、部曲、雜戶、官戶、姦良人者、各加一等、即姦官私婢者、杖九十、^{〇疏議略、姦婢亦同}姦他人部曲妻、雜戶、官戶、婦女者、杖一百、強者各加一等、折傷者、各加鬪折傷

罪一等、

〔日本後紀^八〕

延暦十八年六月丁丑、遣左衛士志矢田部常陸麻呂於平城、捕内豎雀部廣道、決杖一百、以強姦法華寺尼也、

〔政事要略^{八十二}〕檢非違使

白丁縣犬養永基、年三十三、^{左京二條二坊、戶主正六、位下、縣犬養宿禰房、實男、}

右今年三月七日、左兵衛道吉常、進愁狀云、吉常、去年十月廿六日、被^{〇被下、恐}府使罷向伯耆國、而問件永基、婚吉常妻國仁町者、仁町進申文云、已夫吉常、被差府使罷去、伯耆國之間、今年正月三日

〔續日本紀元七〕

靈龜二年五月丙申、勅太宰府百姓家、有藏白鎖、先加禁斷、然不遵奉、隱藏賣買、是以鑄

錢惡黨多肆奸詐、連及之徒、陷罪不少、宜嚴加禁制、無更使然、若有白錫、搜求納於官司、

〔本朝文粹二〕意見封事、意見十二箇條

善相公清行

一請禁諸國僧徒濫惡及宿衛舍人凶暴事○中

諸國百姓、逃課役、逋租調者、私自落髮、猥著法服、如此之輩、積年漸多、天下人民、三分之二、皆是禿首者、也、此皆家著妻子、口喚、腥膻形似沙門、心如屠兒、況其尤甚者、聚爲群盜、鑄錢貨、不畏天刑、不顧佛律、若國司依法勘糺、則霧合雲集、競爲暴逆、

敘免

坐降罪一等

〔類聚國史八十六〕大同四年四月癸卯詔曰○中宜可大赦天下○中私鑄錢強竊二盜及常赦所不免者咸皆赦除

〔日本後紀二十四〕弘仁五年八月甲子免四人日下部土方補木工長上土方者攝津國武庫郡人以私鑄錢著鐸役於堀河頗善工巧仍棄瑕取才

〔續日本紀六〕靈龜元年正月癸巳詔曰今年元日皇太子始拜朝瑞雲顯見宜大赦天下但犯八虐私鑄錢盜人常赦所不原者並不在赦限

〔續日本紀七〕靈龜元年九月庚辰受禪卽位于大極殿詔曰○中大辟罪已下○中咸從赦除但謀殺殺訖私鑄錢○中並不在赦限

〔續日本紀八〕養老二年十二月丙寅詔曰○中朕恭奉爲太上天皇○元思降非常之澤可大赦天下○中私鑄錢并盜人及八虐常赦所不原咸赦除之

〔續日本紀十三〕天平十二年六月庚午勅曰○中宜大赦天下○中私鑄錢作具既備○中不在赦限

〔續日本紀十六〕天平十七年四月甲寅詔○中大赦天下○中私鑄錢及從者著鈇長役鑄錢司強盜竊盜常赦所不免不在赦限

〔類聚國史八十六〕延暦十八年六月丙申詔曰○中其在役見徒及天下見禁囚等罪輕重並宜赦除令得自新但私鑄錢謀殺故殺○中不在赦限

〔令義解九〕凡糾捉盜賊者○注所徵倍贖○注皆賞糾捉之人○中即官人非因檢按而別糾捉○中其所部○中非因檢按而別自糾捉者○中若捕盜錢○中仍得盜賊者○中其事○中并共盜及知情主人首告者亦依賞例

〔律疏名例〕凡彼此俱罪之贓謂計贓爲罪者○疏及犯禁之物則沒官○疏若盜人所盜之物舊贓亦沒○疏宣○中略若有犯告之人○中應賞者○中依令與賞○中若私鑄錢○中事發所獲作具及錢銅○中或鑄法殺馬牛等肉○中如此之宣○中律令無文者其肉及錢私案○中含有准如律令○中不合沒官○中作具及錢○中不得仍用毀訖付主罪依法科

雜載

不敘免

〔類聚三代格^八〕太政官符

應沒私鑄錢者田宅資財事

右檢非違使起請僞議案法條無可沒入私鑄錢者財物而使等或必沒其舍宅資財雖非法意行來成例望請編之朝章嚴遏其奸者右大臣[○]藤原基經[○]宣奉勅依請

貞觀十六年十二月廿六日[○]又見三^{代實錄}

〔西宮記^{臨時}〕成勸文事^{附四名} 役學勸文

檢非違使式云私[○]私下[○]錢之輩停送鑄錢司者着鈔與盜人同令沒入資財田宅

〔延喜式^{刑部二十九}〕凡私鑄錢其作具并錢銅等物皆沒官

〔唐律疏議^{錢二十六}〕諸私鑄錢者流三千里作具已備未鑄者徒二年作具未備者杖一百[○]疏略若磨鑄

成錢令薄小取銅以求利者徒一年

〔續日本紀^{二十^八神護景雲元年十一月丙寅}〕私鑄錢人王清麻呂等四十人賜姓鑄錢部流出羽國

〔三代實錄^{清和二十九}〕貞觀十八年六月廿七日壬申元興寺僧德操元右京人長背村主與日奉春岑同謀

私鑄錢推問事迹德操不承伏雖然衆證灼然須依格著鈔役使有勅曰村主本是緇徒殊處中流是故

配流伊豫國

〔續日本後紀^{仁八}〕承和六年四月癸丑遣右近衛將監正六位上阪上大宿禰當宗近衛及俘夷等於伊

勢國索捕名張郡山中私鑄錢群盜凡十七人進鑄錢作具及錢等

〔三代實錄^{清和二十七}〕貞觀十七年十二月庚戌朔大和國私鑄錢者往々而在令國宰追捕

〔續日本紀^{元五}〕和銅五年九月己巳詔曰[○]中宜大赦天下其強竊二盜常赦所不免者並不在赦限但私鑄錢者降罪一等

〔續日本紀^{元六}〕和銅七年六月癸未大赦天下[○]中其私鑄錢及竊盜強盜不在赦限但鑄盜之徒合死

又銅錢並行比奸盜逐利私作濫鑄紛亂公錢自今以後私鑄銀○銀字錢者其身沒官財入告人行盜逐利者加杖二百加役常○常徒知情不告者各與同罪

〔續日本紀五〕和銅四年十月甲子勅曰○中凡私鑄錢者斬從者沒官家口皆流五保知而不告者與同罪不知情者減五等罪之其錢雖用悔過自首減罪一等或未用自首免罪雖容隱人知之不告者與同罪或告者同前首法

〔類聚三代格八〕太政官符

定私鑄錢首從并家口罪名事

首處遠流從處徒三年家口處徒二年半

以前得明法曹司解僞被右大辨官宜僞刑部省解僞和銅四年格云私鑄錢者斬從者沒官家口皆流者天平勝寶五年官符僞奉勅私鑄錢人罪致斬刑自今以後降一等處遠流者今首已會降從并家口猶居本坐首從之法罪各合減降輕重相倒理不可然謹請官裁者宜定罪法申上者謹案賊盜律云謀反者皆斬父子沒官祖孫兄弟遠流名例律云共犯罪者以造意爲首隨從減一等又云二死三流各同爲一減者今比校輕重仍從者減首一等處徒三年家口減徒一等處徒二年半

寶龜十一年十一月二日○又見三錄日本紀

〔續日本紀二十〕天平神護二年是年民私鑄錢者先後相尋配鑄錢司驅役並皆著鈴於其鈇以備逃走聽鳴追捕焉

〔類聚三代格十〕太政官符

應定罪人配役年限事○中

其私鑄錢不論首從令鑄錢使終身役之

弘仁十三年二月七日

行人間、左邊多嶺島操、告人上足弟矢代、任但馬目、

〔日本紀略桓武〕延曆十四年五月己巳、右京人上毛野兄國女、流土左國、以自稱諸天妖言惑衆也、

〔日本後紀桓武〕延曆十八年二月乙未、流陸奥國新田郡百姓弓削部虎麻呂妻丈部小廣刀自女等於日向國、久住賊地、能習夷語、屢以謾語、騷動夷俘心也、

〔中右記〕嘉承元年十二月七日、早旦檢非違使資清爲別當使、入來云、近隣可有追捕之事、可用意者、乍驚閉東門、相待之處、富小路東小屋也、是年來居住老女、或稱祭蛇、或稱祭狐、好色諸女、深信此事、誠以成市、詐取人寶貨、聞已及高、今日已被追捕云々、

〔日本書紀孝德〕大化二年三月甲申、詔曰、中復有見言不見、不見言見、聞言不聞、不聞言聞、都無正

語、正見巧詐者多、中如是等類、愚俗所染、今悉除斷、勿使復爲、

〔日本書紀天智〕九年正月戊子、宣朝廷之禮儀、與行路之相避、復禁斷誣妄妖僞、

附 私鑄錢

錢ハ必ズ官ニテ鑄ル所ニシテ、私ニ鑄造スルコトヲ許サズ、故ニ之ヲ鑄ントシテ、作具未ダ全備セザルモ、猶ホ罪アリトス、故ニ私鑄ノ者ハ、天下ニ大赦スル時モ多クハ原サレズ、サテ私鑄錢ノ罪ハ、唐ノ雜律ニ載セタレド、我邦ニテハ雜律ノ傳ハラザレバ、其輕重ヲ知ルニ由ナケレドモ、元明天皇ノ和銅二年ニ法ヲ立テ、私鑄錢ノ者ヲ沒官シ、四年ニ更ニ其禁ヲ嚴ニシ、首ハ斬シ、從ハ沒官シ、家口ハ皆流スル制ヲ立テ、孝謙天皇ノ天平勝寶五年ニ、首ハ一等ヲ減ジテ、遠流ニ處シ、從ト家口トヲ舊ノ如クシ、光仁天皇ノ寶龜十一年ニ、從ヲ徒二年半トセリ、而ルニ嵯峨天皇ノ弘仁十三年ニ、私鑄錢ノ者ヲバ首從ヲ論ゼズ、著欽シテ、鑄錢司ニ於テ長役スル事トセリ、

〔續日本紀元明〕和銅二年正月壬午、詔國家爲政、兼濟居先去、虛就實、其理然矣、向者頒銀錢、以代前錢、

妄認奴婢及財物

武勇奉付之但小鴨基康不從云々又美作國小々打取了昨日上使者於京都爲入院見參云々奉仰源氏相俱可伐平氏云々事次第奇異也仍爲後記之

〔法曹至要抄中〕一妄認公私田并良人家人奴婢及財物等事

戶婚律云妄認公私田若盜貿易賃租者一段以下答五十二段加一等過杖一百五段加一等罪止徒二年半疏云謂妄認公私田稱爲己地詐僞律云妄認良人爲奴婢家人妻妾子孫者以略人論減一等妄認家人又減一等妄認奴婢及財物者准盜論減一等

按之妄認公私田並良人家人奴婢及財物等之類者改正其賊宜被行所當之科

妖書妖言

〔律疏賊盜〕凡造妖書及妖言遠流道謂自造休咎及鬼神之言妄說吉凶涉於不順者謂妖書及妖言者

詐爲鬼神之語休咎說他人及己身有休咎者謂妄言國家有咎惡災禍說災祥妄陳吉凶並涉於不順者傳用以惑衆者亦如之妖書以惑衆者以上者傳謂傳言用謂用書其不滿衆者減一等之限此外一人以上雖不滿衆合徒三年人言理無害者杖六十謂雖說變異無損於時者即私有妖書雖不行用杖八十謂前人舊作與私相傳非已言理無害者答四十謂妖書言理無害者

〔續日本紀十〕天平元年四月癸亥勅略中妖詛書者勅出以後五十日內首說若有限內不首後被札告者不問首從皆成配流其札告人賞絹三十匹便徵罪家

〔續日本紀十〕天平二年九月庚辰詔曰中安藝周芳國人等妄說禍福多集人衆妖祠死魂云有所祈又近京左側山原聚集多人妖言惑衆多則萬人少乃數千如此之徒深違憲法若更因循爲害滋甚自今以後更勿使然

〔續日本紀二十〕天平實字元年七月甲寅勅曰比者頑奴謂實玉等潛圖反逆皇天不遠羅令伏誅民間或有假託亡魂浮言紛紜擾亂鄉邑者不論輕重皆與同罪普告遐邇宜絕妖源

〔續日本紀二十〕天平實字四年五月戊戌右大舍人大允正六位下大伴宿禰上足坐記吳事十條傳

得此坐也

〔唐律疏議^{二十}〕諸詐疾病有所避者杖一百若故自傷殘者徒一年半有雖無避等雖不足為殘

其受雇借為人傷殘者與同罪以故致死者減圖殺罪一等

〔法曹至要抄^上〕一八虐事

七曰不孝中

詐僞律云詐稱祖父母父母死以求假及有所避者徒一年半

〔唐律疏議^{二十}〕諸父母死應解官詐言餘喪不解者徒二年半若詐稱祖父母父母及夫死以求假

及有所避者徒三年伯叔父母姑兄姊妹一年餘親減一等若先死詐稱始死及患者各減三等

〔日本書紀^{三十}〕三年七月辛未流僞兵衛河內國澁川郡人柏原廣山于土左國

〔唐律疏議^{二十}〕諸詐假官假與人官及受假者流二千里謂僞奏及詐為官司判補或得其於法

不應為官謂有罪未而詐求得官者徒二年疏若詐增減功過年限而預選舉因之以得官者徒

一年流外官各減一等求而未得者又各減二等下條

〔續日本紀^{二十}〕天平神護二年四月甲寅有一男子自稱聖武皇帝之皇子石上朝臣志斐臣之所生

也勘問果是誣罔詔配遠流

〔續日本紀^{三十五}〕寶龜十年六月辛酉周防國周防郡人外從五位上周防凡直葦原之賤易易一公

自稱他戶皇子誑惑百姓配伊豆國

〔玉海〕壽永三年元曆二月二日辛酉傳聞伯耆國美德山有稱院白河後御子之人生年廿歲未元服云

云伴宮資隆入道外孫云々幼稚之時九條院近衛后被奉養育其後依無兼生在外祖父家然間生

年十五之年無音遂電人不知其意趣即向大和國暫隨逐石川冠者其時已成親其後先到伯耆大山

詐稱人名

詐稱官名

詐稱親屬死

有勢國

〔法曹至要抄刑科〕一謀害事

詐偽律云詐爲官私文書增減以求財貨者準盜論

案之詐作諸司諸國并私家返抄者最可準盜論之

〔唐律疏議詐偽二十五〕諸詐爲官私文書及增減文書謂勢抄及諸領之類求財貨及避沒入備償者準盜論賊輕者從

詐爲官文書法若私文書止從所欺妄爲坐

〔政事要略六十〕詐偽律云詐欺官私以取財物者準盜論注云詐欺百端皆是若○詐偽以下七半監主

詐取自依盜法疏云○疏云二字有官者除名倍贓如法未得者減二等○又見類聚三

〔唐律疏議詐偽二十五〕諸詐欺官私以取財物者準盜論詐欺百端皆是若監主詐取者自從盜知情而取

者坐贓論知而買者減一等知而爲藏者減二等

〔三代實錄四十八〕仁和元年十二月廿三日癸酉先是右京人散位從七位下大石忌寸福麻呂私離官

印捺僞官符賣官地子穀百五十斛欺取其直左兵衛阿刀澤雄錢十二貫文左衛門門部國部禪師麻

呂錢六貫文刑部省斷云福麻呂離官印捺僞官符其罪當近流欺取直錢當遠流相准輕重雖有遠近

至減一等俱是徒三年也所犯在降前又減一等徒二年半以從七位下當徒一年又以正八位上當徒

一年餘半年徒官當不盡其官留官可收贖銅十斤仍須一年之後降先位二等敘正八位上

〔政事要略二十九〕詐偽律云詐爲瑞應者徒一年瑞應錄流者大瑞及上中下瑞今但云詐爲瑞應即明

實論詐不以若災祥之類而所司不以實對者加三等吳謂輕沙祥謂休徵所司不以實對者謂應凶吉之事

實對者亦加三等

〔續日本紀光仁三十三〕寶龜三年七月辛丑上總國獻馬前二蹄似牛以爲祥瑞視之人功之所刻也國司介

從五位下巨勢朝臣馬主等以下五人並坐解任本主天羽郡人宗我部虫麻呂決杖八十

〔令集解八〕詐偽律凡詐疾病有所避杖一百詐疾病有所避杖一百自身傷殘在安反徒一年注云有所避無所避等但傷殘

捕及詐追攝人者徒一年^{未執捕者各減其應捕攝無官及官卑詐稱高官者杖八十卽詐稱官及冒官人姓字權有所求爲者罪亦如之}

〔文德實錄〕^十天安二年四月癸巳先是刑部大丞正六位上石川朝臣宗主大錄正七位上難波連清宗等詐稱官宜作省符放免罪人佐伯官人等是日下兩入於刑官鞠定其罪也

奏事不實

〔法曹至要抄^{罪上科}〕一奏事不實事

詐僞律云奏事上書詐不以實者徒二年

案之奏事不實之科徒二年者也^{○又見金王掌中抄}

〔唐律疏議^{二十五}〕

諸對制及奏事上書詐不以實者徒二年非密而妄言有密者加一等^{對制謂親見而陳若附奏亦是上書謂書奏特達詐謂知而隱欺及有所求避之類○疏議略}

若別制下問案推^{無罪者謂之問未有告言謂之推}告上不以實者

徒一年其事關由所司以奏聞而不實者罪亦如之未奏者各減一等

〔文德實錄^九〕天安元年七月甲辰河內越中等國司言上不堪佃田依不據實下秋官而斷罪也九月

辛亥大和國司等言上不堪佃損田據不實下秋官而斷罪

〔百練抄^{四一}〕長元四年十月十七日出雲國言上去八月十六日子刻杵築社無故顛倒之由

或記云閏十月三日有御卜兵革疫疾者寶殿中奉納御正體篋出頗自寶殿御坐顛倒大殿上云々

五年九月廿日出雲守橘俊孝勘罪名配流佐渡國是杵築社顛倒并有神託由奏聞仍遣實檢使之處

皆無實之故也

或記云稱託宣授官位於人云々

〔政事要略^{八十一}〕詐僞律有詐病條云若實病死及傷不以實驗以故入人罪論

〔唐律疏議^{二十五}〕諸有詐病及死傷受使檢驗不實者各依所欺減一等若實病死及傷不以實驗者

以故入人罪論

檢使不實

詐爲官文書

〔法曹至要抄上科〕一作官文書事

詐僞律云詐爲官文書者杖一百注云符移解牒之類

案之詐作官文書之時律設杖一百之科矣

〔唐律疏議二十〕諸詐爲官文書及增減者杖一百準所規避徒罪以上各加本罪二等未施行各減

一等○疏略即主司自有所避遠式造立及增減文案杖罪以下杖一百徒罪以上各加所避罪一等立

坐即若增減以避稽者杖八十

〔續日本紀三十九〕延曆七年五月庚午中務大錄正六位下中臣九連淨兄詐作印書請受庫物前後非

一事已發露欲加推勘聞而自經矣

〔三代實錄三十九〕元慶五年四月廿八日乙巳先是去年四月八日大膳史生矢田部氏永奸私作諸司

收文偷取淡路國鹽代米五十斛餘自此奸作備前讃岐等未收文之事發露出納諸司坐此事下獄者

衆而十二月四日大赦天下皆得出獄少監物從六位下藤原朝臣安養今年二月十五日左遷備後權

掾民部大錄正六位上國潮十一也○國以下五字恐有誤同日左遷安藝權掾主計大允正六位上水口宿禰康

宗三月八日左遷越中權掾中務少錄從七位下大石林繼成同日左遷豐前權大目中務史生從八位

下坂本臣勝守爲下總史生民部史生大初位下船連福雄爲紀伊史生大初位下珍努縣主三津雄爲

參河史生主計史生從八位上置始連繩繼爲隱岐史生從六位下膳臣常道爲伊豆史生皆是同坐左

降大膳史生正八位下矢田部氏永赦前死於獄中被月不責故追記之

詐稱官會捕覓人

〔法曹至要抄上科〕一詐稱官所遺擄人事

詐僞律云詐爲官及稱官所遺而捕人者徒二年

按之人詐或稱使廳使或號所司恣擄取人之時所設之文也

〔唐律疏議二十〕諸詐爲官及稱官所遺而捕人者流二千里爲人所犯害親其前及家人而詐稱官

偽造神璽內外印

〔續日本紀〕^{二十}天平寶字三年七月庚辰、左京人中臣朝臣根取、詐造勅書、誣誤民庶、配出羽國棚戶、

〔律疏〕^{名例}八虐

六曰、大不敬、^中略、^中盜、及偽造神璽內印、^{神璽者、謂依令、神之日、中臣奏、}

〔法曹至要抄〕^{罪科}一八虐事

六曰、大不敬、^中略、詐僞律云、偽造神璽者、斬、造內印者、絞、

○按ズルニ、此ニ謂フ所ノ神璽ノ事ハ、帝王部即位篇ニ詳ニセリ、

〔唐律疏議〕^{二十五}諸僞造皇帝八寶者、斬、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子寶者、絞、皇太子妃寶、流三千里、^{偽造不錄所用、但造即坐}

疏議曰、皇帝有傳國神寶、有受命寶、皇帝三寶、天子三寶、是名八寶、依公式、令神寶、寶而不用、受命寶、封禪則用之、皇帝行寶、報王公以下書、則用之、皇帝之寶、慰勞王公以下書、則用之、皇帝信寶、徵召王公以下書、則用之、天子行寶、報蕃國書、則用之、天子之寶、慰勞蕃國書、則用之、天子信寶、徵召蕃國兵馬、則用之、皆以白玉爲之、寶者印也、印又信也、以其供御、故不與印同名、八寶之中、有人僞造一者、即斬、其太皇太后、皇太后、皇太子寶、僞造者、絞、皇太子妃寶、僞造者、流三千里、太皇太后以下寶、皆以金爲之、並不行用、

注云、僞造不錄所用、謂寶既金玉爲之、僞造者不必皆須金玉爲之、亦不問用與不用、造者即坐、

〔續日本紀〕^五和銅四年十二月壬寅、大初位上丹波史千足等八人、僞造外印、假與人位、流信濃國、

〔續日本紀〕^{三十三}寶龜三年十月庚午、左大舍人從六位下石川朝臣長綱等、僞造外印、行用、並依法配流、

流、

〔三代實錄〕^{二十}貞觀十三年十月廿三日乙丑、太政官論奏曰、^中左京人大初位下佐伯宿禰彌惠、僞

造內印、刑部省斷曰、^中彌惠罪應絞刑、詔絞刑宜減一等處之、遠流、

古事類苑

法律部十

上編

詐僞

神皇內印ヲ偽造スルハ、詐僞中ニ於テ殊ニ重罪トシテ、八虐ノ大不敬ニ屬ス、其餘詐リテ詔書ヲ爲リ、或ハ虛僞ヲ以テ自ラ官ヲ假リ、人ニ官ヲ假シ、及ビ詐假ノ官ヲ受ケ、又面リ事ヲ奏シ、及ビ上書スルニ、事ノ不實ナルヲ知リテ隱欺ヲ爲シ、或ハ妄リニ功賞ヲ求メ、罪戾ヲ廻避シ、官ノ文書ヲ詐爲シ、自ラ官人ナリト詐リ、及ビ官ヨリ遣ス所ナリト稱シテ人ヲ捕ヘ、官私ヲ詐欺シテ財物ヲ取り、官私ノ券抄ヲ詐爲シ、簿帳ヲ増減シ、妄リニ錢財賞物ヲ求メ、詐リテ瑞應ヲ爲リ、疾病ヲ詐リテ事ヲ避クル等ノ類、皆詐僞ノ罪トス、又妖書妖言アリ、亦詐僞ノ類ナリ、即チ恠異ノ書ヲ構成シ、詐リテ鬼神ノ語ヲ成シ、妄リニ他人及ビ己ガ身ノ休戚、及ビ國家ノ咎惡ヲ説キ、或ハ其妖言ヲ傳ヘ、妖書ヲ用キテ衆ヲ惑ス等ニテ、國ノ大禁タリ、猶ホ神祇部神託篇ヲ參考スベシ、

詐爲諸書位記

〔法曹至要抄^上科〕一作詔書并位記事

詐僞律云、詐爲詔書者、遠流、說者云、太上天皇宣亦同、詐僞律又云、詐假與人官及受假者、近流者、

案之、詐爲宣旨、院宣之者可處遠流、又作位記之人并受之人、共可配近流矣、

〔唐律疏議^{二十五}〕

詐僞爲制書、及增減者、絞、^{口詐傳及口}未施行者、減一等、^{施行、謂中書覆奏及已入}

詐傳增減、前人已承受者、亦爲其收捕謀叛以上、不容先聞而矯制、有功者奏裁、無功者流二千里、^{施行、餘條施行準此、○疏議略}

名稱	初見	梏蒲	博徒	博弈術	行博弈	禁博弈	處刑例	雜載
----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	----

四四四	四四六	四四七	四四八	四四九	四五一	四五四	四五八	同
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	---

妖書妖言

四三三

雜載

四三四

附私鑄錢

處刑

四三四

減刑

四三六

赦免

四三七

不赦免

同

雜載

同

犯姦

強姦

四三九

和姦

四四一

有夫姦

同

親屬相姦

四四二

姦父祖妾

同

姦婢

同

奴姦主

同

監守內姦

四四三

僧徒犯姦

同

博弈

古事類苑

法律部十

上編

詐僞

詐爲詔書位記

四二七

偽造神璽內外印

四二八

詐爲官文書

四二九

詐稱官命捕免人

同

奏事不實

四三

檢使不實

同

謀書

四三

詐欺取財

同

詐爲瑞應

同

詐稱疾病

同

詐稱親屬死

四三二

詐稱官名

同

詐稱人名

同

妄認奴婢及財物

四三三

政請印左大弁動之右兵衛尉光保解却見任、

〔百練抄近七衛〕久安六年四月十五日、賀茂祭、內大臣源棧敷與家成卿棧敷闕亂、

〔百練抄近七衛〕久壽二年二月一日、左大臣藤原於途中爲左衛門尉信兼被射危咎無禮之間、及闕亂

也、

〔吉記〕安元二年六月七日庚辰、後聞、官史生等於土御門萬里小路邊會合、飲酒之間、以礮數度打之、是民部大夫忠光所爲也、彼住宅對也、史生等爲陳不誤之、由行向之間、各被陵礮、此中大夫史雜色久信父子被殺害了、官文殿久高被陵礮、希存命云々、其後彼忠光所從等追捕會合宅、取雜物云々、久信依爲厨家氷沙汰人、殿下已下所々氷關忘之、自官訴申、仍被仰使廳有沙汰、近代狼藉、雖其儀異、晝夜不絕歟、

ヅキヲ文行ニナゲカケタリケレバ、文行タチヲスカントシケルヲ、河内前司重通ガ父大力ニテスカセザリケリ、正輔ガ一族三人文行ヲトラヘントシケレバ、文行庭ヘヲドリオリタリケレバ、文行ガ郎等君醉給ニケリトテ、矢ヲハゲテ向ヒケレバ、正輔ガ方人エトラヘズ、文行ヤナグヒオヒテ、法住寺ノ内ニテ馬ニノリテイデニケリ、別當マキリテ申ウケラレケレバ、タビテケリ、三日政所ニ候テユリニケリ、文行イヒケル、坂東ノマウザナリセバ、カクハイタサバラマシ、京ハクチヲシキ所ナリト云テ、東國ニクダリケル、其時コノタスケタリシ郎等ヲコロシテケリ、彼日ノ事ヲ東國ノ人ニキカセジトナルベシ、コノ事ヲヨノ人ヨシアシハイマダサダメズトゾ、

〔中右記〕大治五年十一月十三日壬子、去夜夜半騎兵廿人許、步兵四五十人許、亂入前對馬守源義親宿所鴨院南町也、殺害了、但死其庭者十三人、逃脫者廿人許云々、件義親去年九月從坂東國參洛、而依院河○白御氣色所、祗候大殿忠○藤原也、仍寄宿鴨院中也、於京中有如此事、誠可謂濫惡欺、不知誰人所爲、但件義親口生未有一定也、後朝見物者千萬種氣、依件事爲有其定、依有召上達部參集院殿上、予口召有所勞不能馳參也、關白殿不令參給云々、十五日裏書

下人云、一夜殺害義親事、已以發覺、是檢非違使大夫尉光信所爲云々、仍付檢非違使盛道被召、下人者、此事如何不知、內心凡本非敵人、又無相論事、是何故哉、但先日與大津義親合戰、件光信四條大宮宅門前也、若思件事、企此濫惡欺、或人云、光信去年十一月十二日亂入山階寺中、追捕上件僧房、今年十二月十二日亂入殿下、御領鴨院中、殺害義親、情思兩度之惡事、自及罪過之我身也、

十九日戊午、大夫史政重談云、昨日右大臣家忠○藤原被下宣旨也、傳宣頭辨也、宣旨詞云、左衛門尉源光信、於洛中稱義親者并郎從殺害了、宜令明法博士等勘申其罪名者、光信身爲檢非違使、本又非敵人、是先日於光信四條大宮門前、義親與大津義親成亂、亂之故云々、依一旦之事、及罪名之咎、爲我身誠無益、廿三日、今夕有流罪事中、納言師類行云々、源光信從類三人、伊豆藤原通親、安房不知、則有結

出了、後開被行流罪、源明國佐同從、不知姓永澄左、同從紀實安豆伊

〔百練抄五〕永久四年三月十三日大學助高行配流安藝國於途中刃傷參議信通從者之故也、

〔百練抄八〕嘉應二年七月三日、越前守資盛於路頭遇攝政○藤原及耻辱攝政賜下手輩於檢非違

使、十月廿一日、依御元服定攝政參內之間、於路頭勇士有狼藉事、切前驅等本鳥是先日資盛之會

稽也、依此事定延引○又見玉海源平盛衰記平家物語、

保辜

〔法曹至要抄上科〕一保辜事

關設律云、保辜者、手足毆傷人限十日、以他物毆傷者廿日、以刃及湯火傷者卅日、折跌支體及破骨者五十日、限內死者各依殺人論、其在限外及雖在限內以他故死者依本毆傷法、註云、他故謂別增餘患而死者上文註云、毆傷不相須餘條毆傷及殺傷各准此、

按之毆傷殺傷之類、無問故圖謀殺皆囚之可禁、保辜若限內死者、各可依殺人之本法其保辜之間

可禁見上若限內平復者、以毆傷罪可論、

〔清律例會通新纂刑律〕保辜限期以保養已之罪也、中毆凡毆人傷重或可醫治平復或即因傷而死、及成殘廢、傷疾俱不可定、官司雖明受傷之處或手足他物、或金刃湯火、鞠問明白將被傷時刻、明立文案、勒限保辜、責令下手犯人延醫調治、俟限滿之日、定罪發落、故曰保辜、

〔貞信公記〕延長二年十一月四日、依仰定受領到任事、未有可許、春日祭中宮使師國朝臣馬寮當季朝

臣家走馬乘人等到淀與津人有鬪亂事、事及太夫、往古所未聞也、令奏事由、遣檢非違使、

〔日本紀略村上〕天德三年三月十三日戊午、同日感神院與清水寺鬪亂、遣檢非違使制止之、十四日

己未、賭弓之間、左右兵衛鬪亂、廿二日丁卯、彈正巡檢京中之間於修理職邊與飛驒等鬪亂、

〔日本紀略十一〕寬弘三年六月十六日丙戌、帶刀正輔與左衛門尉文行有鬪爭事、仍令捕擄之間、正輔

逃去、文行犯八虐之由、法家所勘申也、

〔續古事談五〕齊信民部卿別當ノ時、法住寺ニテ、文行正輔先祖ノ事ヲ云テイサカヒテ、正輔サカ

雜載

〔本朝世紀〕久安五年十二月廿二日庚午、今夜可遷御東三條也。○中行幸以前於四條內裏被行軒廊御占、占形八通也。○中此間於腋陣、少外記成重、與陰陽頭賀茂憲榮、有圖亂事、憲榮書寫勘文之間、欲挑燭之處、誤以油器落懸成重之袖、成重大怒、以油器打懸憲榮、成重之所爲、尤非常也、廿七日乙亥、今日少外記三善成重、被下解官宣旨、依去廿二日圖亂事也。○中

少外記大江成重

正二位行權大納言兼侍從藤原朝臣成通宣奉勅、件成重、去廿二日於脇陣、爲陰陽頭憲榮朝臣、依致非常事、宜令解却見任者、

久安五年十二月廿七日 大炊頭兼大外記主稅權助助教加賀介中原朝臣師業

〔百練抄八〕嘉應二年七月廿一日於院中務權大輔經家與周防守信章、圖證及擊攘、後日信章解官經家除籍、

路上圖殿

〔中右記〕天永二年十一月四日、酉時許頭弁實行送書云、只今可馳參院、是依急事、聊有會議事者、着

直衣馳參也、及乘獨於北渡殿方、有被議定事、殿下忠實民部卿俊明源子忠實別當能修修理權大

夫爲房皆着直衣參仕、被仰下云、下野守明國爲成要事、密々下向美乃國之間、於途中爲答無禮者、與

往反人成圖亂、切三人者首了是信乃守廣房耶等、并左衛門尉爲義郎從其後歸京、參所々畢穢氣遍滿天下之山旁、有其

歎、仍召取明國郎從、令檢非違使勘問之處、每事實也、八日晚頭依召參院、殿下忠實別當新宰相

爲於殿上人々被定明國穢氣事、最前所召進之舍人男菊成、申穢之由、次侍男申無穢之由、未切之間、

此夜半夜廻檢、非違使盛重行一條邊之間、搦袋持下人成、奇見袋中、有綴牛皮一領、已直付也、問本主

是下野守明國、一日所殺之男物者、仍自然穢氣之由、顯然也、仍人々穢不可歎申、十九日、民部卿移

着端座、以官人令下膝突、於次間內府供被着一召大外記仰云、下野守源明國、可解却見任者、次召頭

弁被下罪名勘文、遠流國々、先可令注、則注一紙頭弁奉、上卿又件國々之事、被申院、予此間申、上卿退

殿庭圖

ハ不鳴ト云レタリケル時、人々笑之云々、仍頭中將成怒、以笏打頭辨、依之頭中將被除籍云々、宇治殿○藤原通聞此事、御堂ノ○藤原通子孫未被除籍トテ、申サントテ、令參內給タリケレドモ、被除之後ナリケレバ、不申出令退出給云々、七日出御之比、經長卿少納言之時、主上○藤原通被仰云、件事非經輔之耻、吾耻也、吾運已盡也トテ、令涕泣給云々、經輔卿只今候殿上之由、經長奏シケレバ、天氣快云々、

〔法曹至要抄上罪科〕一禁中圖亂事

圖訟律云、於宮內、忿爭者、笞五十、聲徹御在所及相殿者、杖一百、以刃相向者、徒二年、殿內○內下、唐律有違字、加一等、傷重者、各加圖傷二等、疏云、謂大極等門爲殿門、忿爭杖六十、聲徹御在所及相殿者、合徒一年、以刃相向、徒二年半、若宮內忿爭、杖七十、聲徹御在所及相殿者、徒一年半、以刃相向者、徒三年、

按之禁裏之圖亂者、自凡處是重之條、見于此律、

〔權記〕長保六年○寬弘元年正月十四日己亥、此日內論義○中瀧口藤原道紀、紀武忠、小論掣握聲及御所、

被下獄云々○又見日本紀略二

〔日本紀略十一〕寬弘三年五月十日辛亥、右少辨藤原廣業、於內裏爲藏人式部丞藤原定佐、打○打上損面了、十一日壬子、除定佐籍、近日天文道、依變異頻、奏近臣內亂之由、蓋其微歟、六月十三日

癸未、今日定佐被原免、復○又見法成寺攝政記本職

〔本朝世紀〕康和元年三月十八日辛酉、是日陸奥守從五位上源朝臣國俊卒○中、白河天皇御宇、侍殿

上有圖亂事、即被削殿上籍、矣、

〔中右記〕保安元年七月廿一日、侍從宗成、籠內御物忌令退出談云、少將實衡與兵部大輔資信、於小板敷有圖亂事、互以扇打合者、實衡年少者、資信餘卅之人也、資信之所爲、可謂至愚、歟、件圖亂從內被申

院云々、後聞、實衡朝臣除籍、資信恐懼云々○又見日本紀略一

可令申闕白殿原也者、良久之參右府○藤原實資之間、於途中能季來云、示藏人雅樂助已了、但件下手

男權弁被請了、即令出見請文、即彼弁從者加其名于云、令請他人、事不可然事也、藏人今日申闕白殿、隨仰旨之間、如可搦得也、今先令請他人之事、極無由事也、至于今者何爲乎、有召之時、早可請度也、

〔百練抄五〕鳥羽天永三年六月四日、攝政○忠實過大納言經實門前之間、闕亂、大納言侍刃傷攝政、雜色、上

皇河○白遣檢非違使、責召下手人、後日召進散位源家俊、被下左衛門府、

〔百練抄八〕高倉承安四年正月七日、節會檢非違使、執雜犯之間、中宮侍與右少將隆房朝臣雜色、闕亂、件

雜色刃傷宮侍政友、走入南庭、大夫尉盛國郎從、搦取之、

〔三代實錄三〕貞觀元年十二月廿七日、戊申、太政官論奏言、前越後守從五位上伴宿禰龍男、令從者

吉彌侯廣野等、毆殺書生物部稻吉、前者稻吉向太政官告訴、守龍男犯用官物、故殺之、狀下刑部省、令

斷龍男罪、省稱會恩赦、直從放免、○中略須詳加覆案者也、帝特降優詔曰、○中略宜申優曲、並從原宥、

〔三代實錄二〕貞觀十三年十月廿五日丁卯、太政官論奏曰、刑部省斷罪文云々、越前國足羽郡人生

江恒山、因幡國巨濃郡人占部田主等、毆傷備中權史生大宅應取女子、恒山等言、隨私主右衛門佐伴

宿禰中庸、致毆殺應取女子、圖訟律云、威力使人毆擊而死傷者、雖不下手、猶以威力爲重罪、下手者、減

一等、又云、故殺人者、斬、恒山田主等、隨中庸、致非因圖爭殺、應取女子、須以中庸爲首、處斬刑、而身犯大

逆、降配遠流、不更斷罪、恒山田主爲從、減一等、並令遠流者、降恩詔、斬刑減死一等、處之遠流、自餘並依

省斷、

〔唐律疏議二十〕威力使人毆擊而致死傷者、雖不下手、猶以威力爲重罪、下手減一等、

〔百練抄後四〕長元九年正月二日、二宮大饗間、頭中將俊家朝臣、令人打頭左中辨經輔、

〔古事談王道后〕經輔卿被打事ハ、寛德二年正月三日、殿上淵醉間ノ事也、頭中將俊家大宮被放

屁、人閉口、其後頭中將橘ヲトリテナラサント被食ケルガ、ナラザリケレバ、頭辨經輔微音ニ是

〔古事談〕

王道后

〔後〕

朱雀院御誕生、五夜產養之時、左少將伊成

入道中細言

被陵礫之間、不堪其責、以

笏毆右兵衛佐能信之肩、仍藏人定輔伊成ヲ自緣突落、召集能信之家人、執髮蹈臥、以續松令毆、云、

依之伊成、後日出家云々、

〔台記〕康治二年正月十二日庚子法皇

羽鳥

幸鳥羽、行心經會之間、少將成雅朝臣、山城前司賴輔、闕諱、

相共取本鳥、成雅自拔劒切被賴輔面血流云々、于時申刺殿上人成群見物云々、古今未曾有云々、被

切後賴輔尙取付、搔損成雅面云々、傳聞成雅先切賴輔二度賴輔取付成雅相共、入渠中良久不放乍

兩人本鳥亂如重云々、如此品秩人刃傷人、我朝未曾有事也、師安曰、日記等全不見事也、

〔古今著聞集〕十五保延六年夏の比、瀧口源の備宮道惟則いさかひをして備ころされにけり、帶刀

先生源義賢惟則をからめて後に義賢犯人と心をあはせたるよしきた出來て、義賢帶刀の長を

とられにけり、又犯人にとはれけれ共承伏せざりけるは、いか成ける事にか、別功にもよく

はからふべき事也、

〔日本紀略〕五冷安和二年二月七日甲寅、是日右大臣師尹家人、與中納言兼家卿家人、圖亂、大臣家舍

人一人被殺、大臣家人數百人出來、打破中納言家、此間中納言家爲

五人出來、大臣家射留一人、

〇又見
百練抄

〔日本紀略〕十長德二年二月十一日壬午、仰明法博士、令勘申内大臣

伊藤原

并中納言隆家卿家人

與華山院人圖亂事、

〔春記〕長曆三年十一月十四日辛丑、巳時瀧口能季來云、昨日中務内侍爲使參大原野、能季在其共於

途中下人來向、與内侍從者圖亂、下人一人拔刀走向車前、仍令搦之間、能季從者頗刃傷、雖然所搦得

也、件下手權弁之從者也、彼弁消息云、可然者可優免者、予卽令答云、事已非私難自由、又被内侍及奏

聞歟、以件旨可傳權弁之由、示能季已了、小時能季來云、弁返事云、尤道理也者、予仰云、早觸行事藏人

〔小野宮年中行事〕雜穢事

寺家人奴婢於三綱與主之二等親同疏云其當寺家人奴婢於三綱有犯與俗人二

餘僧尼與主之五等親等條殿云五等親家人奴婢主傷以上各減殺一傷凡傷人家人奴婢一二等云

若毘尼等折一箇、即徒二年、奴婢毘尼又加一等、徒二年半、等

凡家人奴婢鬻舊主者徒一年半毆者徒三年

按圖說律原本部五位以上長官條五位行六位長官者猶可利聽五位長官罪故但六

伯等五任長官者非也。或謂長官謂事務所長宜非罪人長官

人參圖利月經服官圖作官是治云表名爭美國管君之養

亦是常司司原作時

所統屬官監三官長同異故也

然則律令立文、隨事輕重、常條見義、不必一見也、

〔書律疏義卷二十二〕諸監臨官司、於所統屬官及所部之人有高官、而殺之、及官品同自相殺者、並同凡

圖法、

〔令集解官一位〕或云、此令非爲任用相當也、唯爲示官位同階相次耳、假令屬訟律、官位同自相毆者、並同

凡圖法也

〔扶桑略記二十六〕天德四年四月十九日、戊子、檢非違使右衛門府生穗積良氏、石生秋鄉等、參内、令藏

人雅材奏直幹朝臣申詞日記又令申損所甚多辛苦無極且捕獲所指申下手人等勅曰未嘗聞殿集

四位以上如此之事，早隨直幹申旨，可勘糺。又仰雅材以醫藥下賜直幹朝臣，令加救療。

官人關

〔法曹至要抄上科〕一八處事

五曰不道

闕訟律云、中妻妾毆夫之父母者、徒三年、

〔政事要略八十二〕闕訟律云、毆兄之妾及毆夫之弟妹、各加凡人一等、

〔令義解凡〕毆妻之祖父母、父母、中及妻毆詈夫之祖父母、父母、為義絕也、中略乃及欲害夫者、註雖

會赦、皆為義絕、

〔法曹至要抄上科〕一殺子孫并家人奴婢事

闕訟律云、子孫違犯教令、而祖父母毆殺者、徒一年半、以刃殺者、徒二年、故殺者、各加一等、即養父

母殺者、又加一等、過失殺者、各勿論者、

案之祖父母父母有所教令、而子孫違背之時、父祖毆殺之者、徒一年半、以刃殺者、徒二年、又非違犯

教令、故殺者、徒二年半也、又養父母者、為情疎易遺、故加一等可科罪也、

〔政事要略八十二〕闕訟律云、子孫非違犯教令而殺、徒二年、

〔令義解凡〕闕訟律云、祖父母父母、為人所毆、擊子孫、即毆擊之、非折傷者、勿論、

〔金玉掌中抄〕一八處罪事

八曰不義

殺受業師、闕訟律云、毆見受業師、

〔小野宮年中行事〕雜穢事

名例律云、凡僧尼、中於其弟子、與兄弟之子、同、中略依闕律、毆殺兄弟之子、徒二年、賊律云、有所親求、

〔令集解僧尼〕闕訟律云、凡家人毆傷良人者、加凡人一等、奴婢又加一等、良人毆傷他人家人者、減凡人

代親屬反毆
師弟闕殿

其時闕殿

人大宅朝臣宗永蔭子无位在原朝臣連枝蔭孫大初位下大秦公宿禰宗吉同謀无加功蔭子正六位上清原真人利蔭无位藤原朝臣宗扶前醫師少初位上日下部廣君白丁八多朝臣久吉岑同謀不行略○中詔遣彈正少弼從五位下安倍朝臣肱主等於太宰府推問事由刑部省處近成斬刑貞道官當除名宗永年七十贖銅百斤連枝宗吉二人並近流利蔭官當除名宗扶久吉岑二人並近流廣君處斬刑略○中是日太政官奏聞詔曰死罪宜減一等處之遠流自餘依省斷焉

〔金玉掌中抄〕一八處罪事

四曰惡逆

謀殺祖父母父母圖說律云、毆祖、父母、毆父母者皆斬

〔法曹至要抄上罪科〕一八虐事

五曰不道

圖說律云、毆兄姊者徒一年半、伯叔父姑外祖父母各加一等、

〔令抄備見〕圖說律云、凡毆兄姊者徒一年半、傷者徒二年折傷者近流、刃傷及折支若瞎一目者絞、死者皆斬、言者杖八十、伯叔父加一等、即過失殺傷者各減本殺傷罪二等、

〔令集解十〕圖律妻毆夫者徒一年、

○按ズルニ、唐律ニハ、諸妻毆夫徒一年、若毆傷重者加凡圖傷三等須大告乃坐、死者斬トアリテ、令集解ニ同ジ、然ルニ法曹至要抄ニハ、圖說律云、○中妻毆夫杖一百、妾犯加一等トアリテ、政事要略亦之ニ同ジ、

〔法曹至要抄上罪科〕一八虐事

五曰不道

圖說律又條云、毆傷妻死者、以凡人論、疏云、死者以凡人論、合絞以刃及故殺者斬、

曰、吾爲美都良麻呂被刺之、驚而見之、血出自左脇、卽死、同郡人秦成吉等、與春貞美都良麻呂等同飲之人也、而相鬪之場、雖以言詞相諫、而遂不相救助、國司斷云、鬪毆殺人者、絞、以刃及故殺人者、斬、雖相鬪、而用兵刃殺者、與故殺同、准犯據律、合斬刑者、又捕亡律云、隣里被殺人、告而不助救者、杖一百、成吉等在殺人處、不助救、准律條、各處杖一百、刑部省覆斷云、國斷有失、何者、案律、鬪而用刃、卽有害心、仍處斬刑、但不同於故殺、而引故殺及用兵刃殺等之文、此國司之謬斷也、又淨子詞云、成吉等與春貞美都良麻呂相鬪之場、雖以言詞相諫、而遂不救、淨子聞春貞之叫、纔知被刺、然則成吉等、醉中不覺、美都良麻呂害春貞之心、非聞告而不助、見刺而不救者也、仍改斷無罪、

〔三代實錄清和二十〕貞觀十六年十月十九日甲戌、太政官奏、略石見國人若杖部豐見、鬪毆殺人、當絞刑、勅宜減死一等並處遠流、

〔三代實錄清和二十九〕貞觀十八年十月廿二日乙丑、太政官奏、甲斐國都留郡人當麻部秋繼、鬪殺同郡百姓丈部鷹長、罪當絞刑、勅宜減一等處之遠流、

〔三代實錄關成三十六〕元慶三年十二月十五日庚子、太政官奏曰、右京人大初位下井上伊美吉直繼、以鉏刃毆殺井上伊美吉真雄、紀伊國浪人當麻真人岑吉射殺建部今雄、刑部省覆案、並當斬刑、略中佐渡國浪人高階真人利風、鬪殺雜太閤權校尉道公宗雄、及盜取高階真人有岑財物、賀茂郡人神人勳知雄、道古今人、爲鬪殺之從、大田部志真刀自女服半、○一本志子字志子女、見殺不救、利風當絞刑、勳知雄、道古

今人、徒三年、志真刀自女半志子女、當杖一百、詔曰、死罪宜降一等處之遠流、徒以下罪、依去十一月二十五日詔旨免除、

〔三代實錄光孝四十八〕仁和元年十二月廿三日癸酉、備前國上道郡人白丁山吉直、同郡人白丁秦春貞、鬪殺讃岐國鶴足郡人宗我部秀直、同郡人建部秋雄等、正五位下行權守源朝臣加斷罪、以吉直爲首處絞刑、春貞爲從、合徒三年、又謀首筑後掾從八位上藤原朝臣近成、從少目從七位上建部公貞、道左京

勘奏之後，徒罪以下於使廳可決，死罪以上可送刑部省也。然而此事近代皆以絕畢，至于及流徒罪之者，禁獄舍相重杖笞之者，禁獄政所或禁便所，是使廳積習之例也，非法條之所指。

〔貞永式目抄〕^三一殿人答事

打擲ノ咎也。闕訟律云：凡闕毆人者，笞四十，相爭爲闕，相擊爲毆，謂以手足擊人者。舉手足爲例，以頭上擊之類，亦以他物毆人者，杖六十，非手足者，其餘皆爲他物，卽兵不用刃亦是。

〔政事要略〕^{八十一}方寸

闕訟律曰：拔髮方寸以上，杖八十者，方寸之文出於此律，俗人以傷損稱方寸者，誤也。

〔貞永式目抄〕^二一殺害刃傷罪科事

闕訟律云：闕刃傷及折人肋，眇其兩目，墮人胎，徒二年。注云：刃トハ謂金鐵無大小之限，堪以殺人者又墮胎者，謂辜內子死乃坐。若辜外死者，從本毆傷論。

〔金玉掌中抄〕^一刃傷罪事

闕訟律云：以兵刃斫射人，不著者，杖一百。

〔唐律疏議〕^{二十一}諸闕以兵刃斫射人，不著者，杖一百。

兵刃謂刀槍矛鏃之屬，卽若刃傷，無大小之限，堪以殺人者，及折人肋，眇其兩目，墮人胎，徒二年。墮胎者，謂辜內子死乃坐。若辜外死者，從本毆傷論。

〔文德實錄〕^六齊衡元年十月甲戌，公卿奏：識伊豆前守外從五位下百濟宿禰康保，毆殺部下百姓數人，康保罪當死，詔減死一等，處之遠流。

〔三代實錄〕^五貞觀三年十月廿八日戊辰，太政官論奏曰：尾張國人敢臣繼吉，敢臣宗貞等，毆殺宗貞兄敢臣繼雄，信濃國人壬生稻主，毆殺妻母刑部子刀自女。

○中淡路國浪人物部多男，闕殺錦織廣人。

〔三代實錄〕^{十三}貞觀八年十月廿五日丙申，太政官論奏曰：刑部省斷罪文云：讚岐國浪人江沼美都良麻呂，殺香河郡百姓縣春貞，春貞妻秦淨子申訴云：美都良麻呂於春貞宅相共飲酒，言論相闕，春貞呼

闕毆

闕毆ニ種々アリ、髮ヲ拔キ、齒ヲ折リ、耳鼻ヲ毀缺シ、眼ヲ眇瞎シ、或ハ支體ヲ折跌シ、内損吐血セシメ、孕婦ノ胎ヲ墮スル類是ナリ、而シテ之ヲ毆ツニ手足ヲ以テスルアリ、兵刃ヲ用キルアリ、其傷クルト然ラザルトニ由リテ、笞杖徒刑ノ別アリ、傷トハ血ヲ見ハスヲ云ヒテ、死ニ致ス時ハ、闕殺トシテ、絞刑ニ處ス、闕殺トハ、元ヨリ殺ス心ナク、鬭爭スルニ因リテ死ニ至ラシムルヲ云フ、

闕毆モ亦人ニ由リテ其罪ヲ殊ニス、即チ祖父母、父母、師主等ヲ毆ツハ重ク、子弟奴婢等ヲ毆ツハ輕キガ如シ、皆倫理ヲ重クスル所以ニシテ、祖父母、父母ノ人ニ毆撃セラル、時子孫タルモノ其人ヲ毆撃スルモ折傷スルニアラザレバ、其罪ヲ問ハズ、又宮内殿庭ニ於テ忿爭スルハ、其刑凡闕ヨリ重シ、又人ヲ毆傷シタルモノ、爲ニ保辜ノ法アリ、被害者ヲ犯人ニ責付シテ、醫治セシムルヲ云フ、

制度

〔法曹至要抄^上〕闕亂闕殺事

闕毆律云、闕毆人者笞卅、謂以手足擊人者、傷及以他物毆人者、杖六十、謂見血爲傷、非手足者其餘皆爲他物、卽兵不用刃、亦是傷及、拔髮方寸以上、杖八十、若血從耳目出及內損吐血者、各加二等、又云、凡闕毆人折齒^決、^{○決唐律}耳鼻眇一目、及折手足指若破骨、及湯火傷人者、徒一年、折二齒二指以上、及髡髮者、徒一年半、又云、凡闕毆折跌人支體、及瞎其一目者、徒三年、折支者折骨、跌體者骨節差跌、失其常處、辜內平復者各減二等、餘條折跌、平復准之、卽損二事以上、及因舊患、令至篤疾、若斷舌及毀敗人陰陽者、遠流、又曰、凡闕毆殺人者、絞^{謂元無殺心、因相鬭毆而殺人者}、

案之、成闕亂犯使聽任意可、掌依載式條也、是以所當之罪、若爲笞杖者、須立決放、又若及徒流死者、

相殺被殺者、復是本親、一遠、律條、二、親、親、受財一端以上、皆是枉法之賊、賊輕及不受財、各得私和之罪、其間有罪重者、各從重科、又有主殺、人殺、家人奴婢私和受財、不告官司者、家人奴婢身繫於主、主著人殺、侵害極深、其有受財私和、殺不告、金科雖無節制、亦須比附、論利、豈為在律無條、遂使獨為僥倖、然家人奴婢法、為主隱其有私和不告、得罪、罪並同于孫、

〔類聚國史〕風俗百九十延曆十四年五月丙子、配俘囚大伴部阿底良等妻子親族六十六人於日向國、以殺俘囚外從五位下吉彌侯部真麻呂父子二人、

〔類聚國史〕利法八十天長五年閏三月壬子、大中臣朝臣春繼流伊豆國、因射殺萩原王也、

〔類聚國史〕利法八十天長八年十二月庚辰、殺人從當麻旅子女於西市決杖六十、

〔三代實錄〕清和十六貞觀十一年十月廿六日庚戌、太政官論奏曰、刑部省斷罪文云、貞觀八年、隱岐國浪人安曇福雄密告前守正六位上越智宿禰貞厚、與新羅人同謀反逆、遣使推之、福雄所告事是經也、中略

但貞厚知部內有殺人者、不舉訊、仍應官當者、

今昔□□國□□ノ郡ニ住ケル人有ケリ、其家ニ年十二三歳許有女ノ童ヲ仕ヒケリ、亦其隣ニ住ケル人ノ許ニ、白キ狗ヲ飼ケルガ、何ナルコトニカ有ケン、此女ノ童ダニ見ユレバ、此狗昨懸リテ敵ニシケリ、然レバ亦女ノ童モ、此狗ダニ見ユレバ打ントノミシケレバ、此ヲ見人モ極ジク怪ヒ思ケル程ニ、女ノ童身ニ病ヲ受テケリ、世ノ中心地ニテ有ケルニヤ、日來ヲ經ルマヽニ、病重カリケレバ、主此女ノ童ヲ外ニ出サント爲ニ、女ノ童ノ云ク、己ヲ人離タル所ニ被出ナバ、必ズ此狗ノ爲ニ殺サレタリトスル、病无クシテ人ノ見時スラ、己ダニ見ユレバ只昨懸ル、何況ヤ人モ无キ所ニ己重病ヲ受テ臥タラバ、必ズ被サレタリトスル、然レバ此狗ノ知マジカラン所ニ出シ給ヘト云ケレバ、主現ニ然ル事也ト思テ、遠キ所ニ食物ナド皆拈テ密ニ出シツ、毎日ニ一度ハ必ズ人ヲ遣テ見セント云誘ヘテ出シツ、而ルニ其亦ノ日ハ此狗有リ、然レバ此狗知ラヌナメリト心安ク思テ有ニ、次ノ日此狗失ヌ、此ヲ怪ヒ思テ、此女童出シタル所ヲ見セニ人ヲ遣タリケレバ、人行テ見ニ、狗女ノ童ノ所ニ行テ、女ノ童ニ昨付ニケリ、然レバ女ノ童狗ト互ニ齒ヲ昨違ナム死テ有ケル、

〔今昔物語 三十〕尾張守□□於鳥郡野出人語第三十

今昔尾張ノ守□□ノ□□ト云フ人有ケリ、其ノ□□ニテ有ケル女有ケリ、歌讀ノ内ニテ、心バヘナドモ糸可咲クテ、男ナドモ不爲テナム有ケル、尾張ノ守此ヲ哀テ、國ニ郡ナド預ケテ有ケレバ、便リ有テナム有ケル、子二三人有ケルハ、母ニモ不似ズ、極タル不覺ノ者ニテ有ケレバ、皆外ノ國ヘ迷ヒ失ニケリ、其ノ母ハ年老テ衰ケレバ、尼ニ成テケルニ、後ニハ尾張ノ守モ不問ズ成ニケリ、畢ニハ兄也ケル者ニ懸リテ過ケル間ニ、難堪キ事多カリケレドモ、本ヨリ有職ナル者ニテ、弊キ事ヲバ不爲ズシテ、尙身ヲ持上テ、心慥ヲ造テ過シケル程ニ、身ニ病付ニケリ、日來ヲ經ルマヽニ、病ノ甚ニ沈ムデ氣色不覺ニ見ニケレバ、兄有テ家ニテハ不殺ジト思テ、家ヲ出

〔政事要略^七〕出藥病人及小兒事

貞觀九年三月七日、右少史大春日安永仰云、右少辨藤原朝臣千乘傳宣、右大臣宣、京中諸人捨男兒於道路頭、遂爲犬鳥見害、嗟是卽職吏之不治、人民之不仁、宜檢非違使、每見此事、召當條領并町長等重加勸當、俾送居施藥院、唯其狀必申官者、

〔類聚三代格^七〕太政官符

應令左右看督近衛等、每旬巡檢施藥院并東西悲田病者、孤子多少有無安否等事、○中略

須看督近衛等巡檢京中之口、有見路邊病人孤子者、隨便令取送院并東西悲田、又大藏宮內兩省所充綿及古弊帖疊等施藥院、司請納之後、與彼院司共相知、頒給三所病者孤子等莫致疎略、

寬平八年閏正月十七日

〔延喜式^{四十二}〕凡京中路邊病者孤子、仰九箇條令其所見所遇、隨便必令取送施藥院及東西悲田

院、

〔政事要略^七〕出藥病人及小兒事

應收養路頭爲病者事

右左大臣宣奉勅、如聞頃者京中病者多臥路頭、無人收養、誰救其命、宜仰左右京職官人分預口坊令等、每條巡檢取置便所及隨檢非違使看督等、取送同共收養者、兩職承知依宣行之、其食法、大男大女日各米一升、鹽一夕、泔醬一合、小男小女日各米六合、鹽五最泔醬五夕、但米用以義倉科、鹽泔醬請大膳職、鋪設自掃部寮、衣服古暢請自大藏省、事緣濟民、不得疎略、

左中辨紀朝臣

左大史錦部宿禰

延長八年二月十三日

〔今昔物語^{二十六}〕東小女與狗咋合互死語第二十

已知委棄而入而殺者亦得勿論律開格殺之文本防健犯之輩殺令舊知肝膽終是法所不容但夜入人家理或難辨雖令知犯亦為罪人若其殺即加罪便恐長其健暴能同格殺理用無疑况文稱如非健犯而殺傷即明知是健犯其已就拘執而殺傷者各以聞殺傷論拒本罪雖重不合殺傷主人若有殺傷各依調法至死者遠流

〔類聚三代格十二〕太政官符

應禁斷京畿百姓出弃病人事

右大臣奏僞念舊酬勞賢哲遺訓重生愛命貴賤為殊今天下之人各有僕隸平生之日既役其身病患之時即出路邊無人看養遂致餓死此之為弊不可勝言伏望仰告京畿早從停止庶令路傍無天枉之鬼天下多終命之人者被中納言從三位藤原朝臣繩主宜僞奉勅宜早下知令加禁制如不遵改猶致違犯者五位以上注名申送六位已下不論蔭贖決杖一百臺及職國知而不札及條令坊長郡司隣保相隱不告並與同罪自今以後永加禁斷仍榜示要路分明告知

弘仁四年六月一日○又見類聚國史

〔延喜式四十一〕凡部內百姓出弃病人者五位以上取名奏聞六位以下不論蔭贖決杖一百其職司知而不札及條令坊長隣保相隱不告並與同罪

〔類聚三代格七〕太政官符

續命院一處在太宰府南郭○中略

右參議刑部卿從四位上小野朝臣峯守解僞府管九國二島之民或公或私往來相續其求輕者暫經時月其事重者竟歲始還客宿於府倉之下賃寄於閭閻之間若至疾病纏身手足不隨官司督察非養病之處主家爭趁皆忌死之人遂使露臥道路暴死風霜縱有時得痊癒亦以飢寒死者十而七八矣見其如此心深救恤聊建斯處以擬飢病○中右大臣宣○中宜連令所司俾充所請者○中

承和二年十二月三日

三狩之男以宿怨殺父妾婢一人

〔類聚國史八十七〕天長六年十一月丁亥藤原朝臣全雄降死罪一等處之遠流殺妾飛鳥戶造福刀自

賣故也

殺傷主人

〔律疏賊盜〕凡家人奴婢謀殺主者皆斬謂謀而未行但同籍其口含有財謀殺主之二等親及外祖父母者絞已傷者皆斬謂主之二等親別戶籍者

〔律疏賊盜〕凡妻妾謀殺故夫之祖父母父母者徒三年已傷者遠流已殺者皆斬〇註家人奴婢謀殺舊

主者罪亦同〇中舊主謂主放爲耳者中略其家人奴婢自願免脫者亦同主放若轉賣及自理訴得脫即同凡人

〔金玉掌中抄〕一家人奴婢過失殺主罪事

同律〇賊盜云家人奴婢過失殺主者絞傷及詈者流

殺家人奴婢

〔法曹至要抄罪上科〕一殺子孫并家人奴婢事

同律〇圖律云奴婢有罪其主不請官司而殺者杖八十無罪而殺者杖一百家人者各加一等過失殺者

各勿論

案之奴婢賤隸雖各有主至於殺戮宜有承稟而不請官司而輒殺者杖八十無罪殺者杖一百家人

有罪不請官司殺者奴婢加一等杖九十無罪殺者同加一等合徒一年過失殺者各不可有其罪矣

〔三代實錄四清和〕貞觀二年閏十月廿五日辛未太政官論奏美濃國惠奈郡人縣萬歲麻呂殺百姓三人

法官斷罪當斬刑詔減死一等處之遠流

〔扶桑略記三十河〕承保二年八月十一日庚子除名少內記藤原爲定配流常陸國依打開播磨國官倉并

炮殺百姓之罪狀也

殺傷家宅侵入人

〔律疏賊盜〕凡夜無故入人家者笞卅謂知其迷誤或因醉亂及老小疾患并婦人不能健視而殺傷者若殺他人奴婢合徒三年得減二等徒二年之類假有外人來奸主人舊

〔三代實錄三和〕貞觀元年十二月廿七日戊申，太政官論奏言。○中前日向守從五位下嗣岑王，謀殺詔

使正五位下田口朝臣房富等，須詳加覆案者也。帝特降優詔曰。○中嗣岑王依先斷官當免爵。

〔文德實錄九〕天安元年六月庚寅，太宰府飛驒言上，對馬島上縣郡擬主張卜部川知麻呂下縣郡擬大

領直浦主等，率黨類三百許人，圍守正七位下立野正岑館，行火射殺正岑并從者十人，防人六人。七

月辛亥，下制太宰府，免對馬島賊類被劫入賊黨及獄中死亡，實無罪者妻子。

〔文德實錄十〕天安二年閏二月庚申，對馬島百姓殺守正七位下立野連正岑并燒官舍民宅者，下刑官

而鞠讞其罪也。

〔律疏疏〕凡謀殺祖父母、父母、外祖父母、夫、夫之祖父母、父母者，皆斬嫡母、繼母、伯叔父、姑、兄弟姊妹，遠流

已傷者絞，五等以上尊長者，徒三年。已傷者中流，已殺者皆斬，即尊長謀殺卑幼者，各依故殺罪減四等

已傷者減二等。已殺者依故殺法。上文尊長謀殺卑幼，當條無罪者，各依故殺罪，減四等。已傷者減二等。

故殺法，合殺之類。言故殺法者，謂即依故殺法，其首各依本謀論。違意雖不行，仍為首從者不行，減行者一等。倘有伯叔、姪、子、孫，即首合近流，從而加功，合徒三年。從者不加功，徒二年。半從者不行，減行者一等。倘有伯叔、姪、子、孫，即首合近流，從而加功，合徒三年。從者不加功，徒二年。半從者不行，減行者一等。

餘者，不復備文。其應減者，各依本條上減。

〔令義解解〕凡○中殺妻、外祖父母、伯叔父、姑、兄弟姊妹，若夫妻祖父母、父母、外祖父母、伯叔父、姑、兄弟姊

妹，自相殺及○中殺傷夫、外祖父母、伯叔父、姑、兄弟姊妹，若夫妻祖父母、父母、外祖父母、伯叔父、姑、兄弟姊

妹，自相殺及○中殺傷夫、外祖父母、伯叔父、姑、兄弟姊妹，若夫妻祖父母、父母、外祖父母、伯叔父、姑、兄弟姊

妹，自相殺及○中殺傷夫、外祖父母、伯叔父、姑、兄弟姊妹，若夫妻祖父母、父母、外祖父母、伯叔父、姑、兄弟姊

妹，自相殺及○中殺傷夫、外祖父母、伯叔父、姑、兄弟姊妹，若夫妻祖父母、父母、外祖父母、伯叔父、姑、兄弟姊

妹，自相殺及○中殺傷夫、外祖父母、伯叔父、姑、兄弟姊妹，若夫妻祖父母、父母、外祖父母、伯叔父、姑、兄弟姊

妹，自相殺及○中殺傷夫、外祖父母、伯叔父、姑、兄弟姊妹，若夫妻祖父母、父母、外祖父母、伯叔父、姑、兄弟姊

妹，自相殺及○中殺傷夫、外祖父母、伯叔父、姑、兄弟姊妹，若夫妻祖父母、父母、外祖父母、伯叔父、姑、兄弟姊

殺

疏議曰過失之事注文論之備矣殺傷人者各準殺傷本狀依收贖之法注云謂耳目所不及假有投輒瓦及彈射耳不聞人聲目不見人出而致殺傷其思慮所不到者謂本是幽僻之所其處不應有人投瓦及石誤有殺傷或共舉重物而力所不制或共升高險而足蹉跌或因擊禽獸而誤殺傷人者如此之類皆為過失稱之類者謂若其捕盜賊誤殺傷傍人之類皆是

以種々法殺傷人

〔律疏 賊盜〕凡以毒藥藥人及賣者絞即賣買而未用者近流謂以鴆毒治萬病順于之類也以殺用者謂買毒藥而將殺殺人賣毒藥可以療病買者將毒藥人賣者不知情不坐謂雖毒藥可以療病買者未用者其本意而未用者近流雖毒藥可以療病買者將毒藥人賣者不知情不坐專功亦准謀殺已殺論如其藥而不死者並同謀殺已傷之法魚肉有毒曾經病人餘者遂禁之違者杖九十謂曾經人食為魚肉所病者餘故與人食并出賣令人病者徒一年謂知前人病已得病故特更與以故致死者絞即人自食致死者從過失殺人法謂魚肉有餘不遠焚之雖不與人其自食盜而食者不坐謂人盜竊而食以致死傷者魚肉主不坐仍科不遠焚之罪依故殺法心故與尊長食欲令死者亦准謀殺論施於卑賤不遠焚之罪依故殺法

〔律疏 賊盜〕凡以物置人耳鼻及孔竅中有所妨者杖六十謂耳鼻孔竅皆為要所雖以他物置中其故屏去人服用飲食之物以故殺傷人者各以圖殺傷論謂每月厚去人衣服或登高乘馬私去物擊或飢渴之中而殺傷人者若殺凡人或傷尊長應死或於卑幼及婦人雖殺不合償若恐迫人使畏懼致死傷者死及傷尊卑貴賤各有等差須依圖律從本刑科斷故云各以圖殺傷論之若恐迫人使畏懼致死傷者各隨其狀以故圖殺傷論謂恐動逼迫使人畏懼而殺傷者依故殺傷法或因圖殺傷論若恐迫使人畏懼致死傷者以圖殺傷論若恐迫此之類各隨其狀依故圖殺傷法科罪

〔金玉掌中抄〕一射投瓦石罪事

雜律云向官私宅若道徑射者笞五十投瓦石者笞卅因殺傷人各減圖殺傷一等至死者加役流

〔明文抄 地一〕凡向官私宅若道徑射者笞五十放彈及投瓦石者笞卅

〔律疏 賊盜〕凡謀殺詔使若本主本國守及吏卒謀殺本部五位以上官長者徒三年官戶奴婢與吏卒同

餘條准此謂官戶奴婢等與本司五位以上官長者同已傷者遠流殺者皆斬

殺傷詔使本主官長

戲殺

郡人真髮部成道故殺大市貞繼檢非違使覆案奏有常等罪當斬刑詔降死一等處之遠流
〔台記〕久壽元年十月廿八日丁未今日改元○中光賴召殿上仰敎事先是余○藤原賴長奏法皇○鳥羽曰如
律文者雖圖殺至用刃者爲故殺若然常赦不可免之而稱應例免之其來尙矣近年京師往々有殺害
之聞是用輕典之所致歟願任律文拘之以懲將來勅曰所奏可然但任年來例從輕法敎之有何事乎
謹從詔命不復諫

〔政事要略八十二〕圖詔律云戲殺傷人者減圖殺傷二等即无官應贖而犯者依過失法收贖○又見

〔法曹至要抄上科〕一戲殺人事

圖詔律云戲殺傷人者減圖殺傷二等

按之圖殺人者絞刑也而戲殺之減二等徒三年亦圖刃傷人者徒二年也而戲刃傷之減二等宜徒
一年矣

過失殺

〔政事要略八十二〕又○圖詔律云過失殺傷人者各依其狀以贖論

〔律疏名例〕凡應議請減及八位勳十二等以上若官位勳位得減者之父母妻子犯流罪以下聽贖○中

子孫犯過失流類謂耳目所不及思慮所不到之類而殺祖父母父母者不得減贖除名配流如法○中其於二等以上尊長及外

祖父母夫之父母犯過失殺傷應徒

〔法曹至要抄上科〕一過失疑罪事

案之謂過失者耳目所不及假令投磚瓦彈射耳不聞人聲目不見人出而致殺傷其思慮所不到者
謂本是幽僻之所其處不可有人投瓦及石誤有傷殺或共舉重物而力所不制或共昇險而足差跌
或因擊禽獸而誤殺傷人者如此類皆爲過失之罪不同正犯微贖銅可入被殺被傷之家也

〔唐律疏議二十三〕諸過失殺傷人者各依法以贖論謂耳目所不及思慮所不到共舉重物力所不

是類皆

謀殺

スル殺傷ノ事ハ、別ニ其篇アレバ、就キテ看ルベシ、

〔律疏 賊殺〕凡謀殺人者徒二年、已傷者近流、已殺者斬。謂二人以上、若事已彰顯、欲殺從而加功者、加役流、謂同謀共殺、殺時加功、雖不下手、殺人當時共相輔道、由其不功者近流、謂同謀從人、造意者雖過、過算所賊相因、始得殺之、如此經替、皆是加功之類、不功者近流、謂同謀從人、造意者雖不行、仍爲首、仍爲首、謂元謀、屠殺、其計已成、身雖不行、服人殺者亦同、服人殺者亦同、謂同謀從人、造意者雖餘條不行、准此、餘條不行、謂初四傷人、及謀殺五等以上尊長、已傷之類、從者不行、亦減一等、其有殺心謀殺、〔法曹至要抄上科〕一謀殺事

案之雖謀殺未害終其身然而罪法所指事重、須令著欽居作也、雖然依非使廳之所掌、只任例下獄舍畢、是臨時行來例也、

〔百練抄高八〕安元二年正月十三日、雅實僧都、被付使廳使、後見僧延濟、爲綱殺害、嫌機人之故也、延濟爲綱愛妾乳母夫也、密通云々、二月廿日、殺害爲綱者僧宴濟、○上延濟文召出使廳拷問、承伏已畢、同類上西門院前藏人平盛方也、左中將知盛朝臣召進之、依爲一族也、各承伏畢、爲綱密通女房、故顯能女也、伴女宴濟養君也、而密通盛方者、伴女、女弟夫同密通、同意殺害、盛方下手、配流佐渡國、三月十九日、平盛方配流佐渡國、殺害爲綱下手人也、

故殺

〔法曹至要抄上科〕一故殺事

關訟律云、故殺人者斬、疏云、非因鬭爭、無事而殺、是名故殺、

按之罪重、近代之例、依無刑部省斷於使廳禁獄、依爲死罪、不定徒年限、又此間絕無勘奏、甚以不當、仍雖不令著欽、直依別當宣遺獄舍而已、

〔三代實錄五清和〕貞觀三年十月廿八日戊辰、太政官論奏曰、○中上野國人神人繼道、故殺布師貞、○中略

法官覆案、罪皆當斬、詔減死一等、處之遠流、

〔三代實錄四關成〕元慶五年十月十六日辛卯、太政官奏、右京人宮門有常、故殺有道、今出廣備中國窪屋

古事類苑

法律部九

上編

殺傷

殺傷ニハ、謀殺傷故殺傷誤殺傷、戲殺傷過失殺傷アリ、謀殺傷ハ二人以上相謀リテ殺傷スルヲ云ヒ、造意者、加功者ノ別アリ、一人ニテモ、事既ニ露顯シテ殺傷セント欲シタル證據アレバ、亦謀殺ニ屬ス、故殺傷ハ、鬭爭シテ刃ヲ用キ、或ハ鬭爭ニ因ラズシテ故ラニ殺スヲ云フ、人ノ兵刃ヲ用キテ己ニ逼ルガ爲メニ、兵刃ニテ拒ギテ殺傷スルトキハ、鬭法ニ依リテ論ズ、過失殺傷ハ、耳目思慮ノ及バザル所ニシテ、過チテ人ヲ殺傷スルヲ云フ、此中ニテ謀殺ヲ最重シトシテ故殺ト俱ニ死刑ニ處ス、戲殺ハ徒三年ニテ之ニ次ギ、過失殺ハ、最輕キヲ以テ收贖ヲ聽ルス、其他毒藥ヲ以テ人ヲ殺傷スルアリ、人ノ衣服飲食ヲ屏去シ、若シクハ人ヲ恐迫シテ死ニ致スアリ、城内街巷ニテ車馬ヲ馳セ、或ハ家宅道徑ニ向ヒテ彈射シ、瓦石ヲ投ズルニ因リテ、人ヲ殺傷スルアリ、人ヲ殺シテ後ニ、其體軀ヲ支解スルアリ、何レモ其罪ノ輕重ニ從ヒテ刑ニ處ス、又其殺傷スル所ノ人ニ因リテ、其罪ヲ殊ニスルコトアリ、即チ詔使官長ヲ殺傷シ、親屬ヲ殺傷シ、家人奴婢ノ其主ヲ殺傷シ、及ビ主人ノ家人奴婢ヲ殺傷スル類是ナリ、而シテ夜ニ至リ故ナク人家ニ侵入スル者アル時、主人ノ之ヲ格殺スルハ罪ナシ、又其親屬ノ他人ニ殺サレテ私和スルハ罪アリ、私和トハ、讐家ト私ニ和同シテ、其殺サレタルコトヲ隱匿スルヲ云フ、私和セズト雖モ數日ヲ經ルマデ訴ヘザレバ、亦罪ニ處セラル、其他鬭毆ニ關

私和

雜載

四一二
四一三

鬪毆

制度

四一四

鬪毆例

四一五

親屬鬪毆

四一七

代親屬反毆

四一八

師弟鬪毆

同

良賤鬪毆

同

官人鬪毆

四一九

從者鬪毆

四二〇

救人毆擊

四二一

殿庭鬪毆

四二二

路上鬪毆

四二三

保辜

四二四

雜載

同

古事類苑

法律部九

上編

殺傷

謀殺

故殺

戲殺

過失殺

毒殺

以種々法殺傷人

殺傷詔使本主官長

殺傷親屬

殺傷主人

殺家人奴婢

殺百姓

殺傷家宅侵入人

遺棄病者幼兒

多殺
支解

四〇四

同

四〇五

同

四〇六

同

同

四〇七

四〇八

同

同

同

四〇九

四一二

關入例

〔政事要略二十九〕衛禁律云關入山陵兆域門者笞五十。謂周兆故爲聖域者越垣者杖一百陵戶不覺減二等。謂專當者公卿○公卿恐主帥誤又減一等。謂親監當者故縱者各與同罪。

〔日本書紀十八〕元年四月癸丑朔內膳卿膳臣大麻呂奉勅遣使求珠伊其伊甚國造等詣京遲曉時不進膳臣大麻呂大怒收縛國造等推問所由國造稚子直等恐懼逃匿後宮內寢春日皇后不知直入驚駭而顛慚愧無已稚子直等兼坐關入罪當科重譴專爲皇后獻伊甚屯倉請贖關入之罪因定伊甚屯倉今分爲郡屬上總國。

〔文德實錄〕齊衡三年八月己丑狂者藤原朝臣雄犯入禁中近衛陣頭射殺左衛門左兵衛官人見在陣者坐令狂者入宮。

〔日本紀略十一條〕長德二年十一月十二日戊寅今夜左近府生輕部公友入澁口上御廬仍給獄所。

〔日本紀略十一條〕長德四年十月十五日庚子左衛門陣引渡車仍牛童給左獄牛給左馬寮車立御書所西門前。

〔日本紀略十三條〕治安元年六月廿一日乙丑上卿仰外記云昨日亂髮男一人入自北陣渡南殿出左衛門陣狂人云々。

闌入

闌入トハ、唐衛禁律ノ註ニ闌謂不應入而入者トアリテ、故ナクシテ入ルベカラザル處ニ擅ニ入ルヲ云フ、宮門、殿門、開門、御在所、大中小社、山、陵、兆域門等ニ由リテ罪ニ輕重アリ、弓箭刀稍杵棒ノ類ヲ持シテ入ル者ハ、罪更ニ重シ、迷誤スル者ハ上請ス、凡テ闌入スル者ハ、闌ヲ踰ルヲ以テ限トス、而レドモ宮門、殿門等ハ、闌ニ至リテ未ダ踰エザルモ罪アリ、又垣ヲ越ル者ハ、其罪闌入ヨリ重シ、

闌入處分

〔法曹至要抄^上罪科〕一闌入事

衛禁律云、闌入宮門、徒一年、殿門、徒一年半、開門、徒三年、持杖者各加二等、至御在所者、絞、持杖者、斬、迷誤者、上請、即闌入御膳所者、徒二年、又云、闌入者、以踰闌爲限、至闌未踰者、宮門、杖六十、殿門、以內遞[○]

^本說^通字、加^一等、其越闌垣者、絞、殿垣、遠流、宮垣、近流、宮城垣、徒三年、京城垣、徒一年、

案之、禁獄舍之類也、雖不令著鈇、最可禁固、但醉亂迷惑之類、能亂其情事、有實暫禁、便所追放、亦使應之例也、凡件犯非一例、事情有至重、又有至輕、彼此之旨、有司可能慎搜之、

〔金玉掌中抄〕一闌入罪事

衛禁律疏云、以不可入之身、入公門并大社門者也、御在所者、絞、持杖者、斬、迷誤者、不坐、太上天皇門亦同、

〔法曹至要抄^上罪科〕一闌入神社事

衛禁律云、闌入大社門者、徒一年、中社、小社、各減三等、

案之、稱大社者、伊勢大神宮、八幡宮也、中社者、賀茂住吉社之類也、自餘小社也、而闌入之時、皆得、其罪、但中小社有所減而已、

康保三年閏八月廿七日

左衛門權佐大江朝臣澄景

官藏物

〔令義解〕凡於官地得宿藏物者謂昔人以埋沒時代金銀等器於地祕埋及喪亂遺落爲埋入其地者其得之者

子孫仍復認之也謂昔人得之者其子孫仍復認之也皆入得人於他人私地得與地主中分之謂父祖自藏而子孫見其口分墾分皆爲私地也

古器形製異者謂古時鐘鼎之類悉送官酬直謂依律償得者官田宅者以見住及見無人爲主者及

者不施功力而作者謂合與本主中分也得之人既非本主又不施功不合得中也

〔唐律疏議〕諸於他人地內得宿藏物隱而不送者計合還主之分坐贓論減三等謂得古器形亦如之

〔續日本紀〕和銅六年七月丁卯大倭國宇太郡波阪鄉人大初位上村君東人得銅鐸於長岡野地

而獻之高三尺口徑一尺其制異常音協律呂勅所司藏之

〔日本紀略〕弘仁十二年五月丙午播磨國有人掘地獲一銅鐸高三尺八寸口徑一尺二寸道人云

阿育王塔鐸

〔三代實錄〕貞觀二年八月十四日辛卯參河國獻銅鐸一高三尺四寸徑一尺四寸於渥美郡村松

山中獲之或曰是阿育王之寶鐸也

〔日本紀略〕永延元年三月十六日戊寅右大臣以下參仗座定申賀茂上社禰宜賀茂在實

於社頭鳥居側掘往古錢七百八十二文獻公家其文有三和同開珍萬年通寶神功開寶召神祇官陰

陽察令占卜之可通用否事又令下諸道勘申之

〔扶桑略記〕長元十年元月三月一日攝津國獻銅金師子掘出也

疏議曰得關遺之物者謂得實印符節及襍物之類卽須送官滿五日不送者各得亡失之罪賊重者謂計賊重於亡失者坐賊論罪止徒三年私物坐賊論減二等罪止徒二年其物各還官主

〔政事要略七〕檢非違使式云關入宮中及北野馬牛總送馬寮令充公用但彼主申者決笞其關牧者五十然後給了

〔政事要略七〕齊衡三年六月二日宣旨云典侍當麻真人浦虫宣北野關遺馬牛犯一度其牧人決笞五十犯二度加一等經十日不來其主又犯三度者作小印燒額以爲官馬牛若返給其主及斃死者度別錄年月日奏聞但且行且奏立爲恒例者

〔政事要略七〕寬平三年十二月十日宣旨云典侍春澄朝臣給予宣奉勅宮中關遺牛馬隨檢非違使取送於寮檢納若有其主請申者一度者決笞五十免之犯二度者准北野關遺馬牛作小印燒額爲官馬牛充用雜役立爲恒例者

〔政事要略七〕典侍從三位藤原朝臣灌子宣奉勅神泉苑築垣破損放飼馬牛准宮中關遺取送左右馬寮立爲恒例者實印藏人藤原時清

康保三年八月廿八日

左看督使津守忠連奉

〔政事要略七〕典侍從三位藤原朝臣灌子宣奉勅檢非違使今日奏云宮中關畜時而不絕放牧之輩已以數多使等任式文決罰牧人免行其畜至無牧人取送馬寮須守式文體以勸行而畜至○至恐主同屬託之日不辨度數之重疊妄以免行徒有取之名曾無懲肅之實又七十以上十六以下牧人須免行其當依法徵贖而只從赦論立以勸免故實時反不能改行于時追取關畜之日畜至存似申出幼稚之兒釋放牧之豈不加見決忽以原免關畜難絕莫不由斯非蒙勅裁何行將來者所申可然自今以後七十以上十六以下牧人依法徵贖至無牧人令馬寮差申其主但以同畜免行者體銘其驗若及三度奏聞其由實印藏人左近將監藤原信輔

掌關遺物

〔令義解八〕見贓贖司

正一人掌三簿一缺略○中關遺物謂依捕亡令得關遺物事

〔令集解四〕見仲云妄出入爲關也言馬牛自逸也忘落財物爲遺也

關遺物處分

〔令義解九〕凡得關遺物者皆送隨近官司在市得者送市司謂凡關遺之物皆送隨近官司恐在其衛

府巡行得者各送本衛所得之物皆懸於門外有主識認者驗記責保謂記者案記也保者保贖也還之雖

未有記案謂已失之狀未申官司者也但證據灼然可驗者亦准此其經卅日無主認者收掌仍錄物色榜門經一周

無人認者沒官錄帳申官聽處分沒入之後物猶見在謂雖賣實在他處其物見在者亦是即與律正贓義同主來認證據分明者

還之

〔令義解八〕凡國郡所得關畜謂關與關同關妄也言皆仰當界內訪主若經二季無主識認者先充傳

馬若有餘者出賣得價入官謂國郡所得關畜各經二季無主識認者皆出賣得價充當所因其在京經二

季無主識認者出賣得價送贓贖司後有主識認者謂物實見在而識認者其馬牛已死勘當知實還其

本價

〔令義解八〕凡關遺之物五日內申所司謂此縣關遺之物者廣錄畜產及財物等皆是五日之內送其

贓畜事未分決謂六賊馬牛等應入之人未分決者即付京謂在京者付京職斷定之日若合沒官出賣謂

贓贖司也在外者准前條馬之類傳

〔政事要略七〕雜律云得關遺物滿五日不送官者各以亡失罪論謂計贓重於亡失之私物坐贓論減

二等其物各送官主

○按ズルニ政事要略ニ雜律ヲ引キテ各以亡失罪論ノ下缺文アリ今左ニ唐律疏議ヲ引キテ

其全文ヲ知ラシム

〔唐律疏議二十七〕諸得關遺物滿五日不送官者各以亡失罪論贓重者坐贓論私物坐贓減二等

閑遺物

宿藏物 附

閑トハ、牛馬等、其主ノ繫養ヲ脱シ、妄ニ放逸スルヲ云フ、遺トハ、財物ヲ遺失スルヲ云フ、閑遺物ヲ得タルトキハ、皆五日内ニ隨近ノ官司ニ送り、市ニテ得タル物ハ、市司ニ送ル、日限マデニ官司ニ送ラザルトキハ、賊ノ多少、物ノ官私ニ由リテ、罪ニ輕重アリ、而シテ官司ニテハ、其得タル物ヲ門外ニ懸ク、主ノ識認シテ求ムルコトアレバ、或ハ亡失ヲ告ゲタル案記ヲ驗シ、或ハ保證ヲ立テサセテ之ヲ還ス、前ニ未ダ亡失ノ狀ヲ官司ニ申サズトモ、證據灼然タル者ハ、此ニ准ジテ還スナリ、但シ三十日ヲ經ルマデ主ノ來リ求ムルコトナクバ、官司ニテ收掌シ、仍ホ物色ヲ錄シテ門ニ勝シ、一周年マデ人ノ認ムルコトナケレバ、沒官ス、沒官ノ後ト雖モ、物猶見在シテ、主ノ來リ認メ、其證據分明ナルトキハ、返ス、國郡ニテ閑畜ヲ得タルトキハ、皆當界ノ内ニ仰セテ主ヲ訪チシメ、若シ二季ヲ經ルマデ其主ノ識認スルコトナケレバ、先ヅ傳馬ニ充ツ、傳馬ニ充テ、尙餘レルコトアレバ、出シテ賣リ、其價ハ官ニ入レ、當所ノ囚徒ノ衣糧ニ充ツ、在京ハ二季ヲ經ルマデ、主ノ識認スルコトナケレバ、出シ賣リテ其價ヲ贖贖司ニ送ル、後ニ主ノ識認スルコトアリテ、勘當スルニ確實ナレバ、其本價ヲ還ス、宿藏物トハ、昔人鏡劍金銀等ノ器ヲ以テ地中ニ藏埋シ、及ビ喪亂ノ爲メニ遺失シテ土中ニ埋沒シ、時代久遠ニシテ、財主ノ知ラレザルヲ云フ、官地ニ於テ得タル物ハ、皆得タル人ニ入ル、假ヒ埋ミタル人ノ子孫アリテ、鐵券分明ナリトモ、子孫之ヲ認ムルコトヲ得ズ、他人ノ私地ニ於テ得タルハ、地主ト中分ス、而レドモ父祖自ラ藏メテ、其子孫見ニ其地ニ佃シ、若シクハ、其地ニ住メル者ハ、中分スルコトヲ得ズシテ、其子孫ノ所有トスルナリ、又鐘鼎ノ如キ、形製異常ナル古器ヲ得タルトキハ、悉ク官ニ送り、官ヨリ其直ヲ酬ユ、

〔法曹至要抄中〕一渡直半分財物燒亡事

又條○雜律云水火有所損敗故犯者徵償誤失者不償

〔唐律疏議雜二十七〕疏議曰若故燒官府廨舍及私家舍宅財物有所損敗之類各徵償

〔續日本後紀仁明十四〕承和十一年五月辛丑淡路國言他國漁人等三千餘人賣王臣家鰻群集海浦寃凌土民伐損山林雲集霧散濫惡不休又官舍驛家皆在海邊而接居彼間營猶魚鱗縱有火災可難撲滅勤加禁斷國力不足望請官符皆悉禁制官宜嚴加禁止勿令更然如不遵制旨尙致濫猾立加決罰以懲將來但所犯之罪杖罪已上者勘錄所犯及姓名早速言上

かくはするぞといへば、出納いふやう、おれは何事いふぞ、どねりだつるおればかりのおほやけ人をわがうちたらんに、なにごとのあるべきぞ、わが君大納言殿のおはしませば、いみじきあやまちをまたりとも、なにごとのいでくべきぞ、まれ事いふかたゐかなどいふに、舍人おほきにはら立て、おれはなにごといふぞ、わがまうの大納言をかうけにおもふか、おのがまうは、我口によりて人にてもおほするは、まらぬか、わが口あけてば、おのがまうは人にてはありなんや、といひければ、出納は、はらだちさして家にはひ入にけり、このいさかひを見ると、里どなりの人、市をなしてき、ければ、いかにいふことにかあらんと思て、あるは妻子にかたり、あるはつきん、かたりちらしていひさわぎければ、世にひろごりておほやけまできこしめして、舍人をめしてとはれければ、はじめはあらかひけれども、われも罪かうふりぬべくといひければ、ありのくだりのことを申てけり、そのうち大納言もとはれなどして、ことあらはれての後なん流されける、應天門を焼て、まこと信○の大臣におほせて、かのおとゞをつみせさせて、一の大納言なれば、大臣にならんとかまへけること信○のかへりてわがみつみせられけん、いかにくやしかりけん。

○

〔致事要略七〕雜律云、失火、及非時燒田野者、笞五十、注云、非時、謂三月一日以後十月卅日、風前

〔唐律疏議二十七〕諸失火、及非時燒田野者、笞五十、非時、謂二月一日以後十月三十日以前、若鄉土異宜者、依鄉法、延燒人舍宅及

財物者、杖八十、賊重者坐賊論、減三等、殺傷人者減圖殺傷二等、疏○疏其行道燃火、不滅而致延燒者

各減一等、

〔法曹至要抄上〕一、毀燒神社事

雜律云、於官府、麻院、及倉庫、內失火者、徒二年、在宮內加二等、延燒開內宮闕、及大社者、遠流、說者云、故

燒大社者、遠流、若賊滿十端、處絞刑、

中將^{○藤原}馬にのりながらはせまうでければ、いそぎ罪せらるゝ使ぞと心えて、ひと家なきの
のしるに、ゆるし給よしおほせかけてかへりぬれば、又よろこびなきおびたゞしかりけり、ゆる
され給にけれど、大やけにつかうまつりては、よこさまの罪いできぬべかりけりといひて、こ
にもとのやうに宮づかへも去給はざりけり、この事は過にし秋の比、右兵衛の舍人なるもの、東
の七條に住けるが、つかさにまゐりて夜深て家に歸とて、應天門のまへをとほりけるに、人のけ
はひしてさゝめく、廊の腋にかくれたちて見れば、柱よりかゝぐりおるゝものありあやしくて
みれば、伴大納言なり、次に子なる人おる、また次に雑色とよ清といふものおる、なにわざしてお
るゝにかあらんとつゆ心もえで見るに、この三人おりはつるまゝに、はしることかぎりなし、南
の朱雀門さまに走ていぬれば、この舍人も家さまにゆくほどに、二條堀川のほど行に、大内のか
たに火ありとて大路のゝしる、見かへりてみれば、内裏の方とみゆ、走かへりたれば、應天門のな
からばかりもえたるなりけり、このありつる人どもは、この火つくるどてのぼりたりけるなり
と心えてあれども、人のきはめたる大事なれば、あへて口よりほかにいさす、そのち左のお
とゝのし給へることゝて、罪かうふり給べしといひのゝしる、あはれまたる人のある物を、いみ
じきことかなとおもへど、いひいだすべきことならねば、いとほしと思ひありくに、おとゝゆる
されぬときけば、つまなきことはつひにのがるゝものなりけりとなんおもひける、かくて九月
ばかりになりぬ、かゝるほどに、伴大納言の出納の家のをさなき子と、舍人が小童といさかひを
して、出納のゝしれば、いでゝとりさへむとするに、この出納おなじくいでゝ見るによりて、ひき
はなちてわが子をば家に入て、この舍人が子の髪を取てうちふせて、去ぬばかりふむ、舍人おも
ふやう、わが子も人の子もともに童部いさかひなり、たゞさてはあらで、我子をしもかくなさけ
なくふむは、いとあしき事なりとほらだ、しうて、まうとほいかでなさけなく、をさなきものを

并左右樓等不慮之外附忽然燒盡利多因玆日夜無間久憂比念之然比御坐須然間附備中權史生大宅鷹取告言世大納言伴宿禰乃所爲利奈爰或諸人等又並口天無疑倍告言止已在然止件事波世毛不在止思之食毛日月平延引部早罪不賜御坐留而今勅使等約問志奏久初問伴宿禰毛每事固爭天不承伏從者生江恒山伴清繩等平拷訊留伴宿禰身自波不爲志息子右衛門佐中庸等加爲利奈雖然清繩恒山等加所申口狀乎以天中庸加申辭留參驗留伴宿禰乃初所爭言乃殺人留事既知巧詐即中庸波父之敕命乎受天所爲止云事無疑仍與明法博士等勘定附大逆之罪共難可避須同久斬刑附當處止奏聞利然禮別附依有所思毛斯罪平一等滅天遠流罪附治賜布又同謀從者豐城等三人并其兄弟子孫等從遠流倍賜止波久宣天皇我大命平衆聞食止宣廿五日丁卯中庸男元孫年八歲叔孫年五歲並隨父遺配所詔監其幼稚自道召還焉廿九日晦辛未大祓於朱雀門前以配流罪人也

〔宇治拾遺物語〕今はむかし、水の尾の御門和清の御とくに、應天門やけぬ、人のつけたるになんありける、それを伴善男といふ大納言、これは信の大臣のまわざなりと大やけに申ければ、そのおとゝをつみせんとせさせ給ふけるに、忠仁公○藤原世の政は御おとうとの西三條の右大臣○藤原にゆづりて、白川にこもり給へる時にて、この事をき、おどろき給て、御烏帽子直垂ながら移の馬にのり給て、のりながら北の陣までおはして、御前にまゐり給て、この事申人の隣言にも侍らん、大事になさせ給こと、いとことやうの事なりかゝることは返々よくたゞして、まこと空ごと、あらはしておこなはせ給べきなりとそうし給ければ、まことにもとおぼしめしてたださせ給に、一定もなき事なれば、ゆるし給よし仰よとある宜旨うけ給て、ぞおとゝはかへり給ける、左のおとゝ○信はすぐしたる事もなきに、かゝるよこさまの罪にあたるをおぼしなげきて、白の装束して庭にあらごもをまきていで、天道にうたへ申給けるに、ゆるし給ふ御使に頭

有所爲而放火

〔續日本紀三十二〕寶龜四年八月庚午諸國郡司燒官物者主帳已上皆解見任其從政入京及獲放火

之賊功効可稱者量事處分又譜第之徒情挾覲事涉故燒者一切勿得銓擬乃簡郡中明廉清直堪時務者悉令任用當圍軍穀不救火者亦准郡司解却○又見類聚三代格

〔類聚三代格十二〕太政官符

應加禁斷事

右被內大臣○陸原宣稱奉勅水旱不時神火屢發寔緣國郡司等不修職務是以寶字七年九月一日

頒下却抽○抽原作狀用良之格今聞紆枉之輩謀奪郡位○位恐寄言神火多損官物自今以後若有

此類不論首從一皆打殺雖逢恩降勿預赦例苗裔之現永絕譜第其空納還燒加刑亦同

寶龜十年十月十六日

〔三代實錄十三〕貞觀八年八月三日乙亥左京人備中權史生大初位下大宅首廳取告大納言伴宿禰

善男右衛門佐伴宿禰中庸等同謀行火燒應天門四日丙子禁廳取身下左檢非違使七日己卯

勅參議正四位下行左大辨兼勘解由長官南淵朝臣年名參議正四位下行右衛門督兼讚岐守藤原

朝臣良繩於解勘由使局鞫問大納言正三位兼行民部卿太皇太后宮大夫伴宿禰善男廿九日辛

丑禁右衛門佐從五位上伴宿禰中庸於右衛門府是日拷訊殺大宅廳取女子者生江恒山卅日壬

寅拷訊與恒山同謀者伴清繩並是大納言伴宿禰善男之僕從也九月廿二日甲子大納言伴宿禰

善男右衛門佐伴宿禰中庸同謀者紀豐城伴秋實伴清繩等五人坐燒應天門當斬詔降死一等並處

之遠流善男配伊豆國中庸隱岐國豐城安房國秋實壹岐島淨繩佐渡國相坐配流者八人從五位上

行肥後守紀朝臣夏井配土佐國從五位上行下野守伴宿禰阿男○阿男一作河男能登國上總權少掾正八

位上伴宿禰夏影越後國伴冬滿常陸國紀春道上總國伴高吉下總國紀武城日向國伴春範薩摩國

公卿就太政官曹司應會文武百官宣制其詞曰天皇我大命止萬宣久去閏三月十日之夕爾應天門

失火者只奪其年料填之、

弘仁三年八月十六日○又見日本後紀

〔類聚國史八十四〕弘仁七年八月丙辰、公卿奏言、上總國夷瀦郡官物所燒、准額五十七萬九百束、正倉六十宇、刑部省斷罪言、檢燒損使散位正六位上、大中臣朝臣井作等、申稅長久米部、當人臨失火時、逃亡自殺、推量意況、豈無所犯、忽自引乎、可謂當人侵盜官物、謀而放火者、省按律、當人所犯、罪當絞、刑而其身自殺、仍更不論、但新任守小野朝臣眞野介、芥田宿禰文足等、就政日淺、此火之起、不緣不肅、仍按延曆五年八月七日格、不問神災、人火、令當時國司、郡司及稅長等已上、依數填備、然則雖實神災、猶令當時公廩填納、蓋以公廩之設、本爲欠員故也、須在任國司、郡司及稅長等、共填備之者、省斷如此、臣等尋檢法意、外從五位下守大判事物部中原宿禰敏久曰、法家者、如此事類、禁得其身、則自備償、若資財乏盡、役身相折、然而不得過五歲年限、既滿、賊物未填、卽從原免、斯則公家有損無益、是以延曆五年格、令不論神災、人火、以當時公廩填之、良□□負之設、在後人也、前人去職、不更追咎者、官議商事不穩便、所以者、同格云、正倉被燒、未必由神、何者、譜第之徒、害傍人而相燒、監主之司、避虛納以放火、因茲觀之、格之大體、責歸虛納也、又選用郡司、前人之所行、□□司乍到、雜務未分、雖領印鈐、交替未畢、在於□□間、會逢失火、前司則寄言去職、專避其咎、新任則□□當時獨以勞填、夫虛納者、舊時之意也、公廩者、後□之料也、有意則默然免罪責、無意卽每年奉料物、以無意之料、備有意之損、事之爲緒、不近物情、今臣等商量、事有大小、政有閑忙、是以分付受領、既立程期、今前司全成、雖去職、是收納之當時也、後任眞野雖領印鈐、而見災之當時也、驗格意、則疑涉虛納、何者、行火自殺、責以填備、則不緣不肅、何者、到任日淺、凡交替之事、限內未畢、則宜言其由、縱令無故、過百廿日、然後火起、則後任官司更無所禱、而就任以降、十有餘日、歷任不幾、至于獨填、誰甘心前息、後責伏聞、天裁者、奏可、九月丁亥、勅上總國夷瀦郡官物五十七萬餘束、既被燒失、今緣有所念、醫師已上、咸從免除、郡領已下、依例令填、

失官物其郡司者不在會赦之限。八月甲子，勅曰：正倉被燒，未必由神，何者？譜第之徒害傍人而相燒，監主之司避虛納以放火，自今以後，不問神災人火，宜令當時國郡司填備之，仍勿解見任絕譜第矣。

〔新定内外官交替式〕應早作○作字據土屋及被燒損官○官下目稻填納事

右延曆二年九月十九日下符，稱：頃年諸國每有人火詐稱神災，損耗官物，宜仰諸國每郡先作土屋一間，以且收所有穀，如有遺者隨其多少，每年加作者。今被右大臣宣稱奉勅土屋之設，本防火災，如能作了，變了自可無損官物，而今諸國火災其數寔繁，誠由國司怠慢以致此也。宜重作下所遺土屋，限來年內並令作訖，仍至限日遣使巡檢，如有習常緩怠未作了者，專當國郡司必解見任。又屋上塗塗遭雨即剝，仍權塗土蓋草，以蔽風雨，而諸國不練此意，牢固修葺，此則抱薪救火，返招損害，宜先後土屋之上，一皆葺板，僅遭火災，令易壞撤，又正倉被燒，未必由神，何者？諸譜第之徒害傍人而相燒，監主之司避虛納以失火，自今以後，不問神災人火，宜令當時國郡司及稅長等一物已上，依數填納訖，即具狀申上，仍勿解見任絕譜第，其被差宛雜使，不遭火災者不在填限。

延曆五年八月七日

〔類聚三代格〕八 太政官符

應填納燒亡官物事

右檢案內太政官去延曆十二年四月廿三日下五畿內七道諸國符，稱：被右大臣○藤原宣稱奉勅，檢去延曆五年六月一日亦同年八月七日兩度官符，如有燒亡官物以國司公廨填之者，事乖弘恕，宜並停止。但自今以後，有如此類，必據法推決，以懲將來。俾監臨之官勤肅所部守掌之人，填其防衛者，今右大臣○藤原宣奉勅，頃者諸國司等不勤肅清，屢致失火，為避其責，恒稱神火官物之損不可勝計，救弊之道事責改張。自今以後，宜依延曆五年八月七日格，不問神火人火，令當時國郡司及稅長等一物已上，依數填備，其被差雜使，出國境外，不遭火災者不在填限，但國司者以任中公廨填之。若還替年有

以前奉勅如件

寶龜四年八月廿九日

〔類聚三代格十〕勅如聞比來京中盜賊稍多掠物街路放火人家良由職司不能肅清令彼凶徒生茲賊害自今以後宜仰隣保檢察非違一如令條其遊食博戲之徒不論陸贖決杖一百放火劫略之類不必拘法懲以殺罰勤加捉搦遏絕奸宄主者施行

延曆三年十月廿日○又見續日本紀

〔類聚三代格十〕太政官符

應搜捕盜賊事

右檢案內延曆三年十月卅日勅書僞如聞比來京中盜賊稍多掠物街路放火人家良由職司不能肅清令彼凶徒生茲賊害自今以後宜仰隣保檢察非違一如令條其放火劫略之類不必拘法懲以殺罰者又太政官去寶龜四年八月廿九日符僞奉勅如有捕獲行火盜賊勤當得實者宜示衆格殺以懲後惡者被右大臣○藤原三守宣僞奉勅如聞奸宄之賊寔繁有徒或闇夜放火或白晝奪物所由不勤糺捕百姓苦彼凶毒靜言流弊情切納隍宜仰有司嚴加督察搜認閭里隨獲且進莫作留連縱令村邑之中有結黨遊食及賊狀不露景迹可疑者捕身問訊詳盡情理得實之日具狀申送事緣切害不得諱略

承和七年二月廿五日○又見續日本後紀

〔續日本紀三十二〕寶龜四年二月辛亥下野國吳燒正倉十四宇穀糶二萬三千四百餘斛六月壬子

上野國緣野郡吳燒正倉八間穀類卅三萬四千餘束

〔續日本紀三十三〕寶龜五年七月丁巳陸奧國行方郡吳燒穀類二萬五千四百餘斛

〔續日本紀三十九〕延曆五年六月己未朔勅有百姓糺察部內國郡官司同職掌也然則國郡功過共

所領知而頃年有燒正倉獨罪郡司不坐國守事稍乖理豈合法意自今以後宜奪國司等公廩總填燒

日藏人辨爲御使參殿下則歸參其後下宜旨云前下總守宗盛放火欲燒舍弟散位盛基宅宜仰明法博士等勘申可當罪名者則下藏人辨了

〔百棟抄^八〕高倉 永安三年十月九日法眼覺興配流播磨國依燒多武峯也

放火而盜

〔律疏^{賊盜}〕凡故燒人舍屋及積聚之物而盜者計所燒滅價併^賊以強盜論賊人奸詐千端萬緒蓋竊穿及積聚之物因即盜取其財計所燒之物滅價併^賊於所盜之物計^賊以強盜論十五端較若有持^賊人舍宅因即盜取其財或燒傷物主者依雜律故燒人舍屋^賊三年不限強盜之與竊然則持^賊火燒會止徒三年因即盜^賊財物^賊是元非盜意雖持^賊火而行事同^賊先強盜盜計^賊以強盜科^賊火若傷人者同^賊盜傷人注^賊先

○按ズルニ減價ハ左ニ引ケル政事要略ナル厩庫律ノ文ニテ明ナリ

〔政事要略^{七十}〕播磨豐忠問^{寬弘二年二月九日明法博士令宗朝臣允正答}

假令隨近人々之牛相當草干之時不令繫立放飼山野然間二月十六日依例燒掃野爰件人々

牛并豐忠牛都合四頭慮外燒死仍彼牛主等責可辨之由償不之理謹請明判謹問

答厩庫律云故殺官私馬牛者徒一年其誤殺復不坐但償其減價疏云減價謂畜產直布十端殺訖

唯直布兩端即減八端價殺減八端價八端之類^{○下}

〔法曹至要抄^{上科}〕一放火事

雜律云故燒官府廨舍及私家宅若財物者徒三年賊滿五端近流十五端較殺傷人者以故殺傷論

刑部格云寶龜四年八月廿九日官符云如有捕獲行火盜賊勘當得實者宜示衆格殺懲後惡

案之放火之輩依爲死罪須送刑部省令決本罪也然而使廳之流例事輕之輩禁政所事重之者下

獄舍皆依爲散禁欺抑於使廳雖有被行例猶至于死罪囚者別當每度可經奏聞也而近代都無此

事

〔類聚三代格^{十二}〕太政官符

一如有捕獲行火盜賊勘當得實者宜示衆格殺以懲後惡^{○中}

放火 失火 罪人

故ラニ人ノ舍屋及ビ積聚ノ物ヲ燒キテ、卽チ其財物ヲ盜ム者ハ、燒ク所ノ物ノ減價ヲ計ヘ、
 賊ニ併セテ強盜ヲ以テ論ジ、盜マズトモ故ラニ燒キテ、其賊十五端ニ滿ツトキハ、絞ニ處シ、
 人ヲ殺傷スルトキハ、故殺傷ヲ以テ論ズ、減價トハ其直百圓ノ物ヲ燒キタランニ、其燒ケタ
 ル物猶ホ八十圓ノ價アルトキハ、本價ヨリハ二十圓ヲ減ズレバ、其減ズル所ノ二十圓ヲ指
 シテ減價ト云フナリ、光仁天皇ノ寶龜四年ニ、行火ノ盜賊ヲバ衆ニ示シテ格殺スルノ法ヲ
 立テタリ、而シテ官物ヲ燒亡スルニ至リテハ、淳仁天皇ノ天平寶字ヨリ以後、郡司ノ見任
 ヲ解却シ、或ハ公廨ヲ以テ補填セシムル等ノ制ヲ設ケタリ、當時人ヲシテ罪ニ陷ラシメ、之
 ニ代ラントシテ放火シ、或ハ虛納ノ責ヲ避ケントシテ放火シ、之ヲ神火ニ託スル等ノ弊ア
 リ、失火ニモ亦罪アリ、又火ヲ以テ損敗スルコトアルトキハ、故ラニ犯ス者ハ、徵價シ、誤失ス
 ル者ハ、價ハザルナリ、

放火處分

〔三代實錄三十六〕元慶三年十二月十五日庚子、太政官奏曰、略中但馬國氣多郡人、彼國前醫師從八

位上日置部是雄、無位日置部衣守、放火燒不動權二千三十八斛五斗並倉四三、類聚國史、改、依格應

格殺、略中詔曰、死罪宜降一等、處之遠流、

〔續日本後紀七〕承和五年二月丁酉、畿內諸國群盜橫行、放火殺人、下知國司、令以札勸、

〔日本紀略四〕天延三年十一月十四日壬午、丑刻朔平門右衛門陣屋放火、吉上時光禁獄、

〔中右記〕永久二年六月廿一日、巳時許參院、河白召御前宗盛下女放火事、殿下忠實、令申給旨、奏聞、

仰云、召明法博士信貞、內々可尋罪名事、則召信貞尋問、大略流罪者、奏件旨了、此次八幡放火者、問信
 貞之處、如承者、可被免者、歟、奏件旨了、處仰云、猶尋遣八幡、召同類、猶一旦可尋其後、可免歟、七月二

かうの殿父義經の君達おはする物を、まことやらん、ひでひらも、くらまど申山寺に左馬のかうの殿の君達おはしますなれば、だざいの大二清盛の日本六十六か國をまたがへんと常はの給ふなるに、源氏の御君達を一人下し參らせ、いはるの郡に京をたて、二人の子共を兩國のりやうまゆさせて、ひでひら生たらん程は、大炊介に成て、源氏を君とかしづき奉り、うへみぬわしのごとくにてあらばやとの給ひ候物をと云奉り、かどはかし。參らせ、御供してひでひらのげんざんに入引出物取てとく付ばやと思ひ。略下

此ハ何事ニテ取スルニカ有ラムト思フ程ニ、男此ノ物ヲ取ルマヽニ逃ル様ニシテ去ヌ、其ノ後
ニ聞ケバ、早ウ此男ノ謀タル様ハ、此ハ主ノ女ヲ美濃ノ國ニ將行テ賣ツル也ケリ、然テ目ノ前ニ
直ヲ取テ行也ケリ、女此ク聞テ奇異ト思テ、此ハ何カニ我ヲバ然々云テコソ山寺ヘトテ將來タ
レ、何カニ此ハト泣々ク云ヘドモ、耳ニモ不聞入ズシテ、男ハ直ヲ取テ馬ニ遺乗テ馳テ去ヌ、然レ
バ女泣居タル程ニ、其ノ家ノ主、女ヲ置得タリト思テ、女ニ事ノ有様ヲ問ケレバ、女然々也ト本ヨ
リノ有様ヲ語リ涙ヲ流シテ泣ケレドモ、家ノ主モ耳ニモ不聞入テ有ケルニ、女只獨ニテ可云合
キ人モ無ク、可逃キ様モ無カリケレバ、泣悲ムデ云ケル様、我レヲ買取リ給テ更ニ其ノ益不有ジ、
極ク我レヲ殺シ給フトモ、我ガ世ニ可有クハコソト云テ泣臥ニケリ、其後物ナド持來テ食セケ
レドモ、露起上ルコトモナカリケリ、云ハムヤ努々物食フ事ハ无カリケレバ、家主モ思ヒ嫌テ口
有ケルニ、亦從者共然リトモ暫コソ歎キ臥タラヌ、遂ニハ起上テ物モ食ラム、只御覽ゼヨナド口
口ニ云ケレドモ、日來ヲ經テ更ニ不起上ザリケレバ、希有也ケル奴ニ被口テナド思ヒ云ケル程
ニ、此ノ女遂ニ來タリシ日ヨリ七日ト云フニ思ヒ死ニ死ケリ、然レバ家主云フ甲斐无クテ止ニ
ケリ、此レヲ思フニ、尙極ク事吉ク云フトモ、下衆ノ云ハム事ニハ不付マジキ也、此ノ事ハ其ノ家
主ノ京ニ上テ語ケルヲ聞傳ヘテ、糸奇異ク哀レ也ケル事カナト思テ、此ク語り傳ヘタルトヤ、

【義經記】吉次が奥州物語の事

かくて年もくれぬれば御年十六にぞ成給ふ、義經源多門の御前に参りて、しよさしておはしける
所に、其比三條に大ふく長者有其名を吉次のぶたかどぞ申ける、毎年奥州に下る金あき人なり
けるが、くらまを信じ奉りける間、それも多門に参りてねんじゆして居なりけるが、此をさない
人を見奉りて、あらうつくしの御ちごや、いかなる人の君達やらん、まかるべき人にてましまさ
ば、大衆もあまた付参らすべきに、度々見申に唯一人おはしますこそあやしけれ、此山に左馬の

雜載

〔日本書紀三十三〕五年三月癸巳詔曰若有百姓弟爲兄見賣者從良若子爲父母見賣者從良若准賃倍沒賤者從良其子雖配奴婢所生亦皆從良

〔續日本紀三十三〕大寶三年四月戊午安藝國被略爲奴婢者二百餘人免從本籍

〔續日本紀三十三〕天平六年七月辛未詔曰略中可大赦天下○中掠良人爲奴婢略中不在赦例

〔今昔物語二十九〕近江國主女將行美濃國賣男語第廿四

今昔近江國口口郡ニ住ム者有ケリ未ダ年モ不老ヌ程ニ失ニケレバ其ノ妻モ未ダ年卅ノ程ニテゾ有ケル子一人モ不產ザリケリ京ノ人ニテゾ有ケル其ノ夫ノ失タルヲ強ニ戀悲ミケレドモ甲斐ナクテ京ニ上ナムト思ヒケレドモ京ニモ可打憑キ人モ不thinkエザリケレバ思ヒ嫁テ有ケル程ニ年來付仕ヒケル男ノ萬ニ付テ後安ク翔ケレバ夫失テ後ハ此レヲ打憑テ何事モ云合セテ過ケルニ此ノ男ノ云ク此テ徒然ニテ御ムヨリハ此ヨリ近キ山寺ノ候フニ御マシテ暫ク御湯ナドモ浴サセ給ヒ御行ナドモ心靜カニ爲サセ給ヘカシト勸メケレバ女實ニ然モ有ル事也ト思テ然様ニ近キ所ナラバ行ナムト云ケレバ男近キ所ニ候フ何デカ愚ナラムコトハ申候ハムト答フレバ女京ニモ上ナムト思ヘドモ京ニモ祖共モナク類親モ无レバ然様ナラム所ニ行テ尼ニモ成ナムト思フトゾ云ケレバ男然テ御マサム間ノ事ハ己コソハ嫁奉ラメト云ヘバ女只出立ニ出立ツ女ヲバ馬ニ乗セテ男ハ後ニ立テ行ケルニ近キ所トハ云ヒツレドモ遙ニ遠ク將行ケレバ女此ハ何カニ此クハ遠キゾト云ケレバ只御マセヨモ愚ナル事ハ不仕ラジト云テ三日將行ニケリ然テ人ノ家ノ有ル門ニ女ヲバ馬ヨリ下シテ男ハ家ノ内ニ入ヌ女此ハ何カニ爲ルコトヤラムト心モ不得チドモ待立タル程ニ男返リ出テ女ヲ内ヘ將入ヌ板敷ノ有ルニ疊敷タル所ニ居エタレバ更ニ心モ不得テ女見居タレバ此ノ男ニ家ヨリ絹ヤ布ナドヲ取ラス

賊盜律云、略人略賣人、爲奴婢者、遠流爲家人者、徒三年、爲妻妾子孫者、徒二年半、未得各減四等、不和誘者各減一等、又云、略奴婢者、以強盜論、和誘者以竊盜論、各罪止中流、

案之勾引人之罪、若爲奴婢之類者、比強竊盜、若爲凡人者、隨刑可處、徒流之科、如此之類、使應之例、或令候獄舍并政所屋而已、

略奴婢

〔律疏 賊盜〕凡略奴婢者、以強盜論、和誘者、以竊盜論、謂計贓、各依強盜、各依倍備、爲各罪止中流、即奴婢別賣財物

者、自從強竊法、不得累而科、謂奴婢身所著衣服、外乘有財物、自從強竊法、因略者、一尺徒三年、二端加

累併財物同斷、故云、自從強竊法、不得累而科之、其奴婢身家別財、略誘外有財物、止不得誘本罪、贓不

合科、如其知者、財雖奴婢將行、各同強竊法、其略誘買人或家人衣服、外有財物、亦同強盜法、不取入

己買人家合有、若得逃亡奴婢、不送官而賣者、以和誘論、凡捉獲逃亡奴婢、依令五日內合送、藏隱者

贓財不在坐限、減一等坐之、謂減盜罪、即私從奴婢買子孫及乞取者、准盜論、謂盜贓或乞者、平所乞買奴婢之價、計贓

減一等坐之、乞賣者、與同罪、謂奴婢將子孫乞人及賣、雖以爲買亦同、人亦與充贓罪同、

〔壬生家文書二〕太政官符 山陰道諸國司 雜事拾貳箇條、○中略

一應擲禁勾引諸人奴婢賣買要人董事

右同宣、○左大臣藤原經宗奉勅、如聞勾引諸人之奴婢賣買要人之輩、充滿京畿云々、結構之旨、罪科不輕、宜

令諸國擲禁件董事、

以前條事如件、諸國承知、依宣行之符到奉行、

修理左宮城判官正五位下行左大史兼播磨介小槻宿禰、華押

正四位下行左中辨兼紀伊權守藤原朝臣、華押

治承二年七月十八日

〔律疏 賊盜〕凡賣二等卑幼及兄弟孫外孫爲奴婢者、徒二年半、二等卑幼、謂弟、妹、子孫者、徒一年、即和賣

賣親屬爲奴婢

略人

人ヲ略ストハ勾引カドハルノコトニテ、和セザル者ヲ方略ヲ設ケテ誘キ取ルヲ略ト云ヒ、略シテ後ニ之ヲ賣ルヲ略賣ト云フ、又和誘スルアリ、相誘クト雖モ和同ニ出タルヲ云フ、和同シテ相賣ルアリ、賣ル者ト賣ラル、者ト元謀兩和スルヲ云フ、略シ和誘スルニハ自ラ占メ若シクハ人ニ賣リテ、妻妾子孫、弟姪、家人、奴婢トスルアリ、他人ノ奴婢家人ヲ略シ和誘スルアリ、逃亡ノ奴婢ヲ得テ賣ルアリ、藏匿スルアリ、私ニ奴婢ニ就キテ人ノ子孫ヲ買ヒ、及ビ乞取スルアリ、己ガ親屬ヲ賣リテ奴婢トスルアリ、略スルニ因リテ人ヲ殺傷スルアリ、略シ和誘スルヲ知リテ分ヲ受ケ、若シクハ買フ者アリ、是皆盜ノ類ナリ、面シテ十歳以下ノ人ハ、和スト雖モ亦略法ニ同ジ、

略人
略賣人

〔律疏疏〕凡略人略賣人、不和爲略、年十歳以下、雖和亦同略法、爲奴婢者遠流、注云、年十歳以下、和雖下、未有所知、易爲誑誘、爲家人者、徒三年、爲妻妾子孫者、徒二年半、略人爲家人者、或有狀驗可憑、或爲弟姪之類、亦同、未得各減四等、因而殺傷人者、同強盜法、謂因略人拒闕、或殺若傷、同強盜法、和誘者各減一等、若和同相賣、爲奴婢者、徒三年、和同相賣、謂元謀兩和、相賣爲奴婢者、賣人及被賣人、賣未售者、減一等、謂和同相賣、下條准此、謂下條得已、奴婢而賣者、亦減一等、故云、及見即略和誘及和同相賣他人等、未售者、亦發者、家人者、各減良人一等、謂略他人家人、爲奴婢者、徒二年、和誘家人、爲奴婢者、徒三年、略家人、還爲家人者、今徒二年半、爲妻妾子孫、徒一年中、若共他人家人、和同相賣爲奴婢、徒二年半、爲家人者、徒二年、故云、各減良人一等、其略和誘五等以上、親家人、律雖無文、今有任主驅使、不可同於凡人、亦須依盜法、而減五等、親家人、減凡人家人一等、四等親、減二等、三等親、減三等、二等親、減四等、若家人、坐減誘者、即一等、自餘受子孫、律無和同違告者、並合例、律、共犯、即從者、減一等、首、主、受、誘、即當此條、准其罪坐、減誘者、即一等、自餘受子孫、律無和同違告者、並合例、律、共犯、即從者、減一等、首、主、受、誘、即當此條、准其罪坐、〔法曹至要抄〕上、科、一、勾引人事

內必置保長察以行來詳以去就。○中略

貞觀九年三月廿七日。○又見三代實錄

罪人等止

〔法曹至要抄上〕一失囚故縱事

捕亡律云、知情藏匿罪人、若過致資給、令得隱避者、各減罪人罪一等。○捕亡律以下又見僧尼令集解注云、藏匿無日限、過致資給亦同。若卑幼藏隱、匿狀已成、尊長知而聽之、獨坐卑幼家人奴婢首隱、主後知者、與同罪。卽尊長匿罪人、尊長死、卑幼仍匿者、減五等。尊長死後雖經匿、但已遣而事發、及匿得相容隱者之侶、亦不坐。罪四等以下親、亦同減例。若赦前藏匿、而罪人不合赦免、赦後匿如故、不知人有罪容寄後知而匿者、皆坐如律。其展轉相使而匿罪人、知情者皆坐、不知者勿論。又云、罪人有數罪者、止坐所知。

之人配徒之輩，[○]犯徒一年者加半年，犯二年三年者各加一年，若犯三流者各役六年，獄令云，流徒罪居作者着鈇若盤枷，不得着巾，判事式云，平臧布者長五丈二尺，廣二尺四寸，爲一反者，推彼臧布，數不滿十五反，准犯依律，已及流刑，今任刑配徒，早應役六年。[○]_中

長徳二年十二月十七日

右衛門府生飛鳥部好兼署○名以略下

盜犯人容止

〔律疏〕賊盜凡部內有一人爲盜及容止盜者里長管冊謂國盜入鄉里所都管之內百姓有盜劫令坊

長亦同、三人加^二一等、郡内一人答^二廿、四人加^二一等、^三謂郡内一人行盜、郡領合^三答^三廿、有^三五^三人^三行^三盜^三、即^三答^三卅^三之類、郡界内有^三盜^三發及殺^三人者

一處以一人論、殺一人者仍同強盜之法、文謂強盜者、加一等、卽是一部內有一人內有盜、一人處強殺盜者、仍從長一等、若強盜五十、賺非

部內人、但當境強盜、亦准此、
止人、賊者、依強盜之法、
國隨所管郡多少、通計爲罪、各罪止徒二年半、強盜者、各加一等、以官最

爲首佐職爲從但宜風導俗肅清國守郡領闕者以次官當之卽盜及盜發殺人後卅日捕獲他人自捕等士

司各勿論
被劫他部
內事有發
後行盜及
日自當境
獲盜發若
井他部內
獲盜主司
並得免罪
人限外能
捕獲追減
三等外謂
能將日獲

若軍役所有犯隊正以上兩數以下、准部內征人冒名之法、同國郡爲

罪 軍役內有犯罪人謂行軍及領軍國人傷殺等事盜若容止盜者隊有盜以上兩般以若下稱強姦等

及客止強盜若殺一人及強盜事發若被殺之處每事各加一等校尉減正一第兩般准所管校尉
多止強盜若殺一人及強盜事發若被殺之處每事各加一等校尉減正一第兩般准所管校尉
少止強盜若殺一人及強盜事發若被殺之處每事各加一等校尉減正一第兩般准所管校尉
通計強盜若殺一人及強盜事發若被殺之處每事各加一等校尉減正一第兩般准所管校尉

人加一等、旅帥校尉一人答、尉兩般假管三校尉、三人答、尉、
四校尉者、四校尉一人答、尉、尉兩般假管三校尉、三人答、尉、

〔類聚國史八十七卷〕
延曆十七年二月壬子朔、美濃國人村國連惡人、配流淡路國、以停宿羣盜、侵犯百姓。

也、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應勤施方略早斷盜賊事

右被大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣氏宗宣僞○中容止盜賊科罪非輕然則事須隣伍之

贓物壹種

准贓布佰參拾端

右一人知情受盜贓者也臣伏之狀已以露顯也贓盜律云知竊盜而受分者計所受贓准竊盜論

減一等名例律云稱減者就輕次又條云稱准盜論之類罪止遠流者仍從遠流之上減一等合徒

三年尙任格律合役四年

以前今月廿七日可着欽左右獄囚勘申如件

永久三年十二月廿日

右衛門府生內藏經則

以下名略

計贓

〔律疏〕贓盜凡盜不計贓而立罪名及言減罪而輕於凡盜者計贓重以凡盜論加一等從盜大記神例物

立罪名亦有減盜並謂得罪應重故別立罪名若減罪輕於凡盜者各須計贓以凡盜論加一等處徒三年及言減罪輕於

他馬而殺平馬驢直布廿端若計凡盜合二年半徒以盜殺馬故加凡盜一等處徒三年及言減罪輕於

凡盜者上條盜屍柩者徒一年半盜衣服者減一等假有盜屍上衣服直布五端依凡盜法合

徒一年文稱減一等只徒一年故依凡盜加一等合徒一年半之類是名以凡盜論加一等

〔西宮記〕臨時成勘文事附因名帳役畢勘文

勘申可着欽左右獄囚事右志伴忠信成之實左佐惟宗允亮草之○中略

強盜玖人

大春兼平

贓物漆種

准贓布陸端肆丈

岩松

贓物肆種

准贓布拾肆反

○中略

右陸人強盜之犯承伏已畢檢贓盜律云強盜一尺徒三年二反加一等十五反絞刑部格云犯盜

恐喝取財

〔中右記〕元永二年三月廿四日庚午下人云此曉強盜入有經宅殺害下人等盜取綿衣五十餘領了強盜卅人許云々有經朝臣在源大納言○雅家之者也近日大略每夜京中強盜亂入誠以不便也

〔律疏 賊盜〕凡恐喝取人財物者口恐喝亦同准盜論加一等○謂知人有犯欲相告語恐喝以取財物者雖不足畏

忌財主懼而自與亦同○謂亦同恐喝傳言而受財者皆爲從坐若爲人所侵損恐喝以求償事有四緣之類者非縱有甲爲乙賤損而害達恐喝於乙得倍

受財者皆爲從坐若爲人所侵損恐喝以求償事有四緣之類者非縱有甲爲乙賤損而害達恐喝於乙得倍

喝之坐苗外餘物即當非監臨主司因事受財坐國科誦此是事有因緣之類者非恐喝者爲有損苗之由不爲倍

五端首不行不受分傳言者二人一人受財一人不受者律稱准盜須依盜法按下列共盜者併賊論

造意爲從至死減一等從者不行又不行受分首從其首不行又不行受分即取物者專違止者爲首

造意爲從至死減一等從者不行又不行受分首從其首不行又不行受分即取物者專違止者爲首

造意爲從至死減一等從者不行又不行受分首從其首不行又不行受分即取物者專違止者爲首

造意爲從至死減一等從者不行又不行受分首從其首不行又不行受分即取物者專違止者爲首

造意爲從至死減一等從者不行又不行受分首從其首不行又不行受分即取物者專違止者爲首

造意爲從至死減一等從者不行又不行受分首從其首不行又不行受分即取物者專違止者爲首

造意爲從至死減一等從者不行又不行受分首從其首不行又不行受分即取物者專違止者爲首

造意爲從至死減一等從者不行又不行受分首從其首不行又不行受分即取物者專違止者爲首

造意爲從至死減一等從者不行又不行受分首從其首不行又不行受分即取物者專違止者爲首

造意爲從至死減一等從者不行又不行受分首從其首不行又不行受分即取物者專違止者爲首

造意爲從至死減一等從者不行又不行受分首從其首不行又不行受分即取物者專違止者爲首

造意爲從至死減一等從者不行又不行受分首從其首不行又不行受分即取物者專違止者爲首

造意爲從至死減一等從者不行又不行受分首從其首不行又不行受分即取物者專違止者爲首

造意爲從至死減一等從者不行又不行受分首從其首不行又不行受分即取物者專違止者爲首

造意爲從至死減一等從者不行又不行受分首從其首不行又不行受分即取物者專違止者爲首

造意爲從至死減一等從者不行又不行受分首從其首不行又不行受分即取物者專違止者爲首

毆擊取財

〔律疏 賊盜〕凡本以他故毆擊人因而奪其財物者計賊以強盜論至死者加役流○謂本無規財之心乃爲

〔律疏 賊盜〕凡本以他故毆擊人因而奪其財物者計賊以強盜論至死者加役流○謂本無規財之心乃爲

〔律疏 賊盜〕凡本以他故毆擊人因而奪其財物者計賊以強盜論至死者加役流○謂本無規財之心乃爲

〔律疏 賊盜〕凡本以他故毆擊人因而奪其財物者計賊以強盜論至死者加役流○謂本無規財之心乃爲

〔律疏 賊盜〕凡本以他故毆擊人因而奪其財物者計賊以強盜論至死者加役流○謂本無規財之心乃爲

〔律疏 賊盜〕凡本以他故毆擊人因而奪其財物者計賊以強盜論至死者加役流○謂本無規財之心乃爲

〔律疏 賊盜〕凡本以他故毆擊人因而奪其財物者計賊以強盜論至死者加役流○謂本無規財之心乃爲

〔律疏 賊盜〕凡本以他故毆擊人因而奪其財物者計賊以強盜論至死者加役流○謂本無規財之心乃爲

〔律疏 賊盜〕凡本以他故毆擊人因而奪其財物者計賊以強盜論至死者加役流○謂本無規財之心乃爲

〔律疏 賊盜〕凡本以他故毆擊人因而奪其財物者計賊以強盜論至死者加役流○謂本無規財之心乃爲

分賊

〔律疏 賊盜〕凡知略和誘及強盜竊盜而受分者各計所受賊准竊盜論減一等○知略和誘人及略和誘奴

〔律疏 賊盜〕凡知略和誘及強盜竊盜而受分者各計所受賊准竊盜論減一等○知略和誘人及略和誘奴

〔律疏 賊盜〕凡知略和誘及強盜竊盜而受分者各計所受賊准竊盜論減一等○知略和誘人及略和誘奴

〔律疏 賊盜〕凡知略和誘及強盜竊盜而受分者各計所受賊准竊盜論減一等○知略和誘人及略和誘奴

〔律疏 賊盜〕凡知略和誘及強盜竊盜而受分者各計所受賊准竊盜論減一等○知略和誘人及略和誘奴

〔律疏 賊盜〕凡知略和誘及強盜竊盜而受分者各計所受賊准竊盜論減一等○知略和誘人及略和誘奴

〔朝野群載〕十一
藤井久成左京人

存上、但賊盜律云、共盜者併贓論、共強盜者、罪無首從者、今推贓布數、不滿十五端、清澄等犯得分

雖異、併贓論罪、是及流刑、上件二人、應役六年。○中

以前今月〇日、可着鉢左右獄囚勘申如件、

長德二年十二月十七日

右衛門府生飛鳥部好兼以下略

〔西宮記臨時〕於市行事

勘申強盜坂上春丸、可着鉢否哉事

右春丸去年十二月爲主人強盜、長堪從者、被追捕之後、今日勘問之、遮申云、雖有共行之犯、不受得分之贓、又今日過狀、年十七歲者、可着鉢否哉、由宜勘申者、謹檢賊盜律云、共盜者併贓論、造意及從行而不受分、即受分而不行、各依本省從法、疏云、假有甲造意、不行受分、乙爲從行而不受分、仍以甲爲首、乙爲從、行而不受分、仍以甲爲首、乙爲從之類、名例律云、共犯罪者、以造意爲首、隨從者減一等、又云、犯罪時、幼少事發時、長大依幼少論、疏云、十六時偷盜、十七事發、以贖論、此名幼少時犯罪、長大事發、依幼少論、又云、七十以上、十六以下、犯流罪以下、收贖、八十以上、十歲以下、盜亦收贖、疏云、盜既侵損於人、故不許令免、令其收贖、又云、徒二年贖銅卅斤、格云、犯二年三年各加一年者、春丸主人長堪之贓、雖損數種之物、依格相加、當三年徒、仍春丸徒減半年、猶二年半、然而承伏已在今日、犯過先發、去年須依幼少犯、免十七歲之着鉢、以贖法律徵卅斤之贖銅、仍勘申、

長保三年五月廿一日

右衛門大志縣犬養爲政。

少 尉 伴

左衛門少志惟宗

〔續日本後紀仁明〕承和四年十二月甲午、夜分女盜二人昇入清涼殿、天皇愕然、命藏人等告宿衛人、逐捕之、纔獲一人、其一人脫亡、

盜不得財，又不受分，乙、丁等同行，乙為處分方，即是行人專進止者，乙合為首，從者不行，又不受分，管甲不行，為從，其強盜，應至死，死一等，遺流，雖有從名流罪，以下仍不得減。首，從者不行，又不受分，管四十，強盜杖八十者，不行，又不受分者，從。若本不同謀，相遇共盜，以臨時專進止者為首，餘為從，坐，共強盜者，罪無首從，是同強盜，雖本不同謀，但主遣家人奴婢盜者，雖不取物，仍為首，主遣常家人奴婢行盜，雖首為從，家人奴婢若行盜之後，知情受財，強盜竊盜，並為竊盜，從。謂家人奴婢，少有，不與強盜，私有行盜，主遂知情受財，主所受先強盜竊盜得財，主後知情受，受布五端，合杖一百之類，若有人行盜，其主先不同謀，乃遣家人奴婢，隨他盜人而盜者，即元謀為首，家人奴婢為從，主為家人奴婢，從盜者，首出元謀，若元謀不行，即以臨時專進止為首，今奴婢之主，既不同謀，又非行色，但以處分奴婢，隨盜求財，奴之此行，由主處分，然主雖強，使家人不可同於盜者，元謀，既自有首，其主即為從，論計入奴之賊，准為從，坐，假有奴婢，隨他總盜，五十端，奴分得十端，奴婢為五十端從，合徒一年。

〔律疏 賊盜〕凡共謀強盜，臨時不行，而行者竊盜，共謀者受分，造意者為竊盜首，餘並為竊盜從，若不受分，造意者為竊盜從，餘並管五十，假有甲、乙、景、丁，同謀強盜，甲為首，臨時不行，而行者，強盜，甲雖不行，共謀行，又不受分，管五十，若元謀強盜，從不若共謀竊盜，臨時不行，而行者，強盜，其不行者，造意受分，知情，不知情，並為竊盜首，造意者不受分，及從者受分，俱為竊盜徒，同謀行竊盜，臨時有不行之人，而首，其造意者，強盜，受分，不限知情，不知情，並為竊盜首，其造意者，受分，及從者受分，俱為竊盜從。

〔西宮記 臨時 丁 成勘文 事 附 四名 帳 役 舉 勘 文〕
勘申可着欽左右獄囚事 右志伴忠信成之，實左佐 惟宗允英華之，〇中略

強盜拾人

星河清澄 年
物部宮時 年

賊物貳種

准賊布拾參反玖尺

右貳人同謀強盜，共成其犯，爰清澄，早以承伏，專無所避，宮時雖不承伏，已有見賊，科斷之法，章條

〔令義解^九也〕凡官與私交關以物爲價者准中估價即懸評贓物者亦如之^{中略案律監守盜得一匹上}

取^中法^二

〔令集解^二〕問无位人犯監主盜三端或犯凡盜徒以上而獄成會赦全免令以景迹論至下下考未

知解官否答私案合解官免官以上人無賊者計贖銅除考解官如常法

〔續日本紀^九元正〕養老六年七月丙子詔曰^略○中自養老六年七月七日昧爽已前流罪以下繫囚見徒咸

從原免^略○中監臨主守自盜盜所監臨^略○中常赦所不免者不在此例

〔續日本紀^十元正〕神龜五年八月甲申勅皇太子寢病經日不愈^略○中可大赦天下以救所患其犯八虐及

官人枉法受財監臨主守自盜盜所監臨^略○中常赦所不免者並不在赦限

〔續日本紀^八元正〕養老四年六月己酉漆部司令史從八位上丈部路忌寸石勝直丁奈犬麻呂坐盜司漆

並斷流罪

〔續日本紀^九元正〕養老六年四月庚寅詔曰周防國前守從五位上山田史御方監臨犯盜理合除免先經

恩降赦罪已訖然依法備賊家無尺布朕念御方負笈遠方遊學蕃國歸朝之後傳授生徒而文館學士

頗解屬文誠以不矜若人墮斯道歟宜特加恩寵勿使微賊焉

〔日本後紀^{十三}元正〕延曆廿四年十月庚申佐渡國人道公全成配伊豆國以盜官鵜也

〔三代實錄^{四十三}元正〕元慶七年二月廿八日乙丑夜內藏寮舍人津守小吉開御服倉盜取絹四十匹下獄

〔三代實錄^{四十六}元正〕元慶八年六月廿三日壬子夜偷兒入民部裏院倉盜取米一斛五斗爲行夜者所捕

得偷兒引刀自刺不死遺檢非違使送入於獄

〔律疏^{賊盜}〕凡共盜者併贓論造意及從行而不受分即受分而不行各依本首從法^{假有十人同盜得十}

各得^三上端之罪^{若遺意之法止用一人首餘爲從坐假有甲遺意不行受分乙爲從行而不受分仍以甲}

受者^三依^三本首從^三爲法止用^三一人首^三餘爲^三從坐^三假有^三甲遺意^三不行^三受分^三乙爲^三從行^三而不^三受分^三仍^三以^三甲

爲^三首^三乙爲^三從^三之類^三若^三造意者^三不行^三又不^三受分^三即以^三行人^三專進止者^三爲^三首^三造意者^三爲^三從^三至^三死滅^三一等^三假有^三甲遺意^三不行^三者

盜官物

共盜

傷之法，但殺人坐重，雖誤同圖。若有所規求而故殺二等以下卑幼者，絞餘條准此。

律疏 賊盜凡同居卑幼將人盜己家財物者以私輒用財物論加二等謂共居于孫弟姪之類若外人共居卑幼私輒用財者五端等十人減常盜罪一等謂卑幼將人盜物雖多盜止已家財物者按戶婚律同居卑幼私輒用財者五端等十人減常盜罪一等其於首從自依常例若有殺傷者各

依本法，即他故殺傷卑幼法。他人依強盜殺傷法。本他人殺傷，縱卑幼不知情，仍從本殺傷法。坐之役，減之例。若他人誤殺加

并傷尊長卑幼者依本例亦依該法若卑幼共傷他人強盜已家財者加二等此等是盜一罪更無別盜之坐若殺傷罪重從殺傷法科如殺傷人強盜已家財者加二等此等是盜一罪更無別盜之坐若殺傷罪重從殺傷法科如殺傷人

〔律疏名例〕律稱以枉法論監守內以盜論者會赦免所居官會降同免官法

○按ズルニ、我邦ノ律ハ、全篇具ニ存セルモノハ幾モナシ、而シテ賊盜ノ如キハ、終始缺クルコ

トナキニ、唯監臨主守自盜ノ一條ヲ失セリ、然レドモ初メ有リテ後ニ佚セシコトハ、此等ノ文

ニ就キテ知ルベシ、

〔唐〕疏議十卷諸監臨主守自盜及盜所監臨財物者若親王亦同加凡盜二等三十匹絞本錄有

加亦
之果

疏議曰：假如左藏庫物，則太府卿丞爲監臨，左藏令丞爲監事，見守庫者爲主守，而自盜庫物者爲

豎臨主守自盜。又如州縣官人盜部內人財物。是爲盜所豎臨。注云。若親王財物。依令。皇兄弟皇子

爲親王、監守自盜王家財物、亦同官物之罪、加凡盜二等、一尺杖八十、一匹加一等、一匹一尺杖九

十五匹徒二年、五匹加一等、是名加凡盜二等、三十匹絞、注云、本條已有加者、亦累加之、謂監臨主

守、自盜所監主、不計贓之物、計贓重者、以凡盜論加一等、卽是本條已有加於此、又加二等、假有武

軍令自盜禁兵器計賊直朔二十匹凡人盜者二十匹合走二年半以盜不計賊而立罪名註賊重

晉加凡盜一尊徒三年，盜圭又加二等，流二千五百里，如此之類，是本條已有加者，亦累加之。

徵所費之贓各還官主矣。

〔類聚國史八十七〕

〔刑法八十七〕

延曆二十一年九月丙辰流讀岐國鵜足郡人吉師都麻呂分島人伊都甲麻呂等于伊豆國丹波國人秦乙成出雲國人巨勢部益人石見國人弓部鎰主美作國人曾禰繼人等于安房國山城國人若湯坐五月麻呂右京人內藏氏人三國島成阿曇繼成等于隱岐國近江國人秦繼成常陸國人大伴繼守能登國人羽咋彌公等于土左國並以犯強盜也。

〔法曹至要抄上科〕一斫破人宅事

長德元年九月十三日宣旨云應准強盜追捕推斷權門勢家濫惡雜人斫壞人家掠損財物輩事右去

承平三年十二月廿八日下左右京職五畿內七道諸國符簡如聞年來諸衛舍人假名宿衛枉暴是好

招集黨與斫破人家騷動之間或壞財貨奉勅自今以後若致違犯當所主司任加追捕論以強盜計其

損物准賊行之者○中左○右大臣宣奉勅名圖亂實以似強盜如有違犯之輩縱雖無見賊破損明

白財主稱損失之物依賊狀露驗之法須推斷之者

按之令斫破人宅之罪雖未見正條之文給旨明存科坐何疑矣

〔中右記〕寬治八年○嘉保十二月晦日散位從四位下大江公仲流隱岐國是行向散位資俊宅強盜放

火殺害者仍召問件事從檢非違使廳有召及三々度遂不參仍勘罪名處流罪也

〔律疏賊盜〕凡盜經斷後仍更行盜前後三犯徒者近流三犯流者絞行盜之人盜為巨盜謂明盜問在

賊之以法用○三三犯者絞亦謂斷後又為者其去斷經斷後三犯者絞三犯者絞亦謂斷後又為者其去斷經斷後三犯者絞

三犯者絞亦謂斷後又為者其去斷經斷後三犯者絞三犯者絞亦謂斷後又為者其去斷經斷後三犯者絞

三犯者絞亦謂斷後又為者其去斷經斷後三犯者絞三犯者絞亦謂斷後又為者其去斷經斷後三犯者絞

三犯者絞亦謂斷後又為者其去斷經斷後三犯者絞三犯者絞亦謂斷後又為者其去斷經斷後三犯者絞

三犯者絞亦謂斷後又為者其去斷經斷後三犯者絞三犯者絞亦謂斷後又為者其去斷經斷後三犯者絞

三犯者絞亦謂斷後又為者其去斷經斷後三犯者絞三犯者絞亦謂斷後又為者其去斷經斷後三犯者絞

三犯者絞亦謂斷後又為者其去斷經斷後三犯者絞三犯者絞亦謂斷後又為者其去斷經斷後三犯者絞

既有年限、至於役使、豈期終身、靜而言之、事涉深刻、但兩京之內、犯盜者衆、若不折衷、何將懲肅、自今以後、宜犯徒一年者、加半年、犯二年三年者、各加一年、杖罪以下、只徒一年、若犯二流○二流本作三流者、各役六年、其犯死罪、別勅免死、十五年爲限、若役畢之後、不悔前過、亦有犯盜、或爲人凶惡、爲衆人所明知、或量其意、況難恤之色、並是終身配役、不可放免、但女人者、減男之半、○中略

弘仁十三年二月七日

〔法曹至要抄上科〕一強竊盜事○中略

弘仁十三年二月七日格云、犯盜之人、配徒之輩、犯徒一年者、加半年、犯二年三年者、各加一年、杖罪以下、只徒一年者、若犯三流者、各役六年、

按之、盜犯之屬、觸類多端、而或犯罪有故、不承伏、或留身待對、問之間、使廳之例、暫令候便、所若承伏、雖有實、爲輕罪者、散禁、可令候獄舍、政所若事重者、雖散禁、可令候獄舍、是已爲使廳之流例、凡盜犯事、朝家重所誠也、因茲雖嫌疑之者、忽難免之類、又下便所、廻計略、尋訪其狀者也、

〔延喜式二十九列事〕凡斷徒以上、盜人者、必勘前年盜人歷名、然後依法科斷、

〔西宮記臨時事附四名帳〕役畢勘文

檢非違使式云、盜人不論輕重、停移刑部省、別當直着鈇、配役所令駈策、

〔律疏賊盜〕凡山野之物、已加功力、刈伐積聚、而輒取者、各以盜論、謂草木藥石之類、有人已加功力、或刈伐、或積聚、而輒取者、各准積聚之處時

假計、賊依盜法、科罪

〔法曹至要抄上科〕一食瓜菓伐樹木事

雜律云、於官私田園、輒食瓜菓之類、坐賊論、棄毀亦如之、即持去者、准盜論、主司給與、與同罪、強持去者、以盜論、主司即言者、不坐、又條云、毀伐樹木稼穡者、准盜論、

按之、稱瓜菓之類、即雜蔬菜皆是也、若於官私田園之內、而輒私食者、坐賊論、持去者、計賊、准盜論、並

凡此盜法者毀損功庸多者計庸坐論各令修復盜而供養者杖八十盜毀不相須

〔律疏〕賊盜凡發塚者徒三年發掘卽坐已開棺槨者遠流謂有棺有槨者必開棺槨兩開不待取物謂二棺發而未撤者徒二年賊盜

發塚而未發者，其塚先穿及未殯而盜屍柩者，徒一年半。其塚先穿，謂先自穿陷，舊有當殯盜者，謂盜穴者及未殯，謂屍至棺柩者。其塚先穿及未殯而盜屍柩者，徒一年半。其塚先穿，謂先自穿陷，舊有當殯盜者，謂盜穴者及未殯，謂屍至棺柩者。

欲詐代人屍或欲別處收葬之類此文既得未殯明上文發塚瘞而發亦是依律云發塚者徒三年既在

於凡人便減殺罪二等。若發卑幼之姦，須減本殺二等科之。已開棺槨者，遠流。卽減已殺一等。發而未

徒二年。凡人之罪，減死四等。卑坊之色，亦於本殺上減四等。而科若違所指，者仍減五等之例。其於

凡人盜衣服者減一等器物者以盜論

〔律疏〕^男凡盜山陵內木者杖一百草減三等合徒劉而有盜者若誘他人墓塋內樵者杖七十其

毀非_レ盜_二樹_一止_二斫_一伐_二各_一准_二盜_一律_一

〔律疏賊盜〕凡盜官私馬牛而殺者徒二年半。馬牛軍國所用，故與餘畜不同。

〔律疏〕賊盜凡因盜而過失殺傷人者以圖殺傷論至死者加役流謂因行竊不從過失殺傷人者以圖殺傷論

得財不得財，謂得財與不得財，財主尊，遇他死者非，謂財主尊，遇盜物之賊，或墜馬，或落坑，救死之。

其共盜者以強盜論共行竊盜不謀強盜同行而不知殺傷情實上取竊盜去謂同行

其去盜賊時乃有殺傷人者元謀三同利而不矢者元謀三

法爲首役殺傷者自依強法、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應_レ定_ス罪人配役年限事

右檢非違使解僞案賊盜律云強盜不得財徒二年一端及律作一端一本徒三年二端加二等十五端及律

人者殺，殺人者斬。其持仗者，雖不得財，遠流十端。較傷人者，斬。又條云：竊盜不得財，笞五十。一尺杖六十。

一竊加一等、五竊走一羊、五竊加一等、五十竊加受流者、然則強竊二盜、其罪各別、從威多少、復有輕重

一、竊力一等王行一全王竊力一等王一竊力行法未然則引第二道其與各別行則全公相不顧

而去弘仁九年宜旨稱犯盜之人不_レ論輕重皆配役所者僕等促轉此旨夫元年兩男無_レ轉重命赦行

夫絕者難更續死者不再生望請明定節文依限驅使謹請處分者右大臣冬宣奉勅夫配徒之

一年半若盜釜瓶刀匕之屬並從常盜之法謂並不用供神故從常盜之法言之屬謂盤盞雜器之類

〔律疏 賊盜〕凡盜神聖者絞謂錢神之日審置關契內印論鈴者遠流謂食利之而非行用者乘輿服御物者中流

謂供三孝乘輿之物服運委面之屬其副等皆須監當之官部分擬進乃為御物等之屬者既得之類其副謂

副貳其擬供服御及供而廢閱若食將御者徒二年將御謂已呈監當之官而廢閱謂之供用事畢及供

將御者謂御食已呈監當擬供食御及非服而御之物者徒一年半而御之物者謂帷帳凡杖屬若非服

之官擬進而盜及食者各計贓以三等盜贓加一等

〔律疏 賊盜〕凡盜外印及傳符者徒二年餘印者杖一百畜產印杖八十亦謂食利之而非行用者餘印謂

諸司諸國之印皆謂藉以為財不擬行用若將行用

〔律疏 賊盜〕凡盜詔書者徒二年官文書杖一百謂在司尋常施行文書有印無印等重害文書加一等亦謂食利之無所施

用者重害謂徒罪以上職案及婚姻耳賤動置難除授官除免之類律傳文簿帳及戶籍計帳之類若欲

從事盜者自若盜隨身符者加官文書一等即盜應除文案者依凡盜法謂計贓從增減之律

〔律疏 賊盜〕凡盜節刀者徒三年謂皇帝出使難除刀刀信天下宮殿門庫藏及倉廩筑紫城等鑰徒一

年國郡倉庫陰奧越後出羽等櫓及三關門鑰亦同宮城京城及官厨鑰杖一百公廨及國厨等鑰杖六

十諸門鑰笞五十謂內外百司及諸關坊市門等官有禁是亦謂食利之非施行者

〔律疏 賊盜〕凡盜禁兵器者徒一年半督具裝者徒二年若盜罪輕同私造法盜餘兵器及幡幟儀仗者加

凡盜一等餘兵器謂雖是官兵器私案含有者若盜守衛宮殿兵器者又各加一等衛宮殿者即在軍及宿衛相盜還充官

用者各減二等即在軍謂行軍之所若宿衛相盜還充官者各減二等若入私者各同上文盜法

〔令義解軍防〕凡私家不得有鼓鉦弩牟稍具裝大角少角及軍幡謂鼓者皮鼓也鉦者金鼓也所以靜

也具裝者馬甲也幡者旌旗總名也○中略 唯樂鼓不在禁限

〔律疏 賊盜〕凡盜毀佛像者徒三年即僧尼盜毀佛像者徒流為其破毀所事先聖形像故加俗人之法菩薩減一等其非菩薩

古事類苑

法律部八

上編

盜犯

盜ニハ強盜、竊盜ノ別アリ、強盜トハ、劫掠シテ財ヲ取ルコトニテ、威ヲ以テ人ヲ脅シテ兇力ヲ用キザルアリ、威ヲ以テ凌ガズシテ直ニ兇力ヲ用キルアリ、先ニ迫脅ヲ加ヘテ、然シテ後ニ財ヲ取ルアリ、先ニ其財ヲ竊盜シ、事覺レテ後ニ始メテ威力ヲ加フルアリ、此ノ如キ類ヲ俱ニ強盜トス、或ハ人ニ藥酒ヲ飲マシメ、或ハ食中ニ藥ヲ加ヘテ迷謬セシメ、因テ其財ヲ取ル者モ、強盜ノ法ニ從テ處斷ス、竊盜トハ形ヲ潛メ面ヲ隱シテ、人ノ財ヲ取ルヲイフ、又監臨主守自ラ盜ムアリ、監臨スル所ノ財ヲ盜ムアリ、別居親屬ノ財ヲ盜ムアリ、同居子弟等他人ヲ將キテ、己ガ家ノ財物ヲ盜ムアリ、數人共ニ盜ムアリ、一家ノ物ヲ類リニ盜ムアリ、一時ニ數家ノ物ヲ盜ムアリ、科斷ヲ經テ後ニ更ニ盜ヲ行フアリ、盜ニ因リテ人ヲ殺傷スルアリ、他ノ故ヲ以テ人ヲ毆チテ、因リテ其財物ヲ盜ムアリ、凡テ公取竊取ノ別ハアレドモ、皆盜トスルナリ、而シテ器物錢帛ノ類ハ、移シテ本處ヲ離チ、珠玉寶貨ノ類ハ、手ニ入レテ隱藏スルトキハ、縱ヒ携ヘテ行カズトモ盜トス、木石重器ノ類ハ、本處ヨリ移ストモ、未ダ駄載セザル間ハ盜ト成サズ、馬牛ノ類ハ、閑圍ヨリ出シ、繫閉ノ處ヲ絕離シ、鷹犬ノ類ハ、己ガ手ニテ自由ニスルコトヲ得テ後ニ盜ト爲ス、盜ハ凡テ賊ヲ計ヘテ罪ヲ科スルヲ、又賊ヲ計ヘズシテ罪ヲ科スルアリ、即チ大祀神御ノ物ヲ盜ミ、神璽、關契ヲ盜ムガ如キ是ナリ、又盜物ナルヲ知リテ

闌入

闌入處分

闌入例

四〇一

四〇二

略奴婢

三八二

賣親屬爲奴婢

同

知情受分

三八三

知情故買

同

雜載

三八四

放火

失火 併入

放火處分

三八七

放火而盜

三八八

燒官物

三八九

有所爲而放火

三九二

○

失火

三九五

闕遺物

宿藏物 併入

掌闕遺物

三九八

闕遺物處分

同

馬牛闕遺

三九九

○

宿藏物

四〇〇

古事類苑

法律部八

上編

盜犯

名稱

強盜 竊盜

屢盜

親屬相盜

監守盜 盜官物

共盜

恐喝取財

毆擊取財

分贓

計贓

盜犯者容止 罪人容止

略人

略人 略賣人

三六八

同

三七二

同

三七三

三七四

三七七

同

同

三七八

三七九

三八一

かしこにもいみじければ、そちのいそぎたち給へど、大貳○藤原のこのごろすぐしてのぼらせ給へ、みちの程いとおそろしうはべり、御おくり○に参らん下人など、もいとふびんにはべりと申ければ、げにおおぼしめしてこゝろもどなく覺しながら、たちどまらせ給ひて、よの人少やみさかりてのぼらせ給ふ、この程に二位○高階成忠のかさにてうせにけり、いみじうあはれる事どもなり、かくてのぼらせ給も、たゞわか宮の御あるしと哀にうれしうおぼしつゝ、のぼらせ給かちよりなれば、いまはおはしつかせ給ぬらんとのみいつしかとまちきこえさせ給、十一月にのぼりつかせ給ふ、かの致仕の大納言殿○源重光におはしつかせ給へる、うへ○伊周重光女をばじめたてまつりとのゝうちの人々よろこびのなみだゆゝし、

望往生之妙果何必焦肝膽強待歸參之恩詔然而被罪之身猶恐王程之不緩無愆之心深憑朝議之有許嗟呼昔侍鳳闕已爲羽翼之臣今在馬州長作芻蕘之士天性雖愚忝憑龍顏逆鱗之誠地望雖失泣仰鳥頭變毛之恩而已望請天恩殊垂矜恤早賜官符被聽歸京將訪晨昏於六旬之老母令治疾痼於三代之名醫矣隆家誠惶誠恐謹言

長德二年十月七日從三位出雲權守藤原朝臣隆家誠惶誠恐謹言

〔日本紀略十條〕長德三年四月十七日庚戌解陣其日太宰權帥伊周出雲權守隆家被召返之

〔榮花物語五浦〕いままや別即敦康親王御定子所生ことのいたはしければいこやむごさなくおぼさ

るまゝにいかでいまはこの御事のまゐるしにはたび人周隆家伊をこのみおぼしめしてつねに女院どうへの御前一とかたらひきこえさせ給てこの道長原にもかやうにまねびきこえ

させ給へばげに御この御まゐるしはべらんさそはよからめいまはめしにつかはさせ給へかしなごそうし給へばうへ一いみじううれしうおぼしめしながらさはさるべきやうにともか

くもとのどやかにおほせらる四月三長德にぞいまはめしかへすよしの宣旨くだりける中此めしかへしの宣旨くだりぬればみやのおまへ一一條后藤原

夜をひるになしておほやけの御使をもまらすまづ宮の御つかひどもまゐるこれにつけてもわか宮の御さくどよ人めでのゝしる京にはかものまつりなにくれの事どもすぎてつごもり

になりぬつくしには御つかひも宣旨もいまだまゐらぬにたじまにはいとちかければ御むかへにさるべき人々かすもまらす参りこみたりそれもいでや面目あることにもあらねどいと

いどうれしくおぼさるさてのぼらせ給五月三四日の程にぞ京につき給へる兼資の朝臣の家に中納言のぼり給へれど大殿の源中將一道長義

はさらによからぬことに思ていみじうまのびてぞおはしける中かのつくしにはあかまさは

治承三年十一月十五日入道○平盛奉恨朝家由聞エシカ共靜憲法印院宜ノ御使ニテ様々會釋申ケレバ事ノ外ニクツロギ給タリ上下大ニ悅テ今ハサシモヤハト人々思被申レケルニ四十二人ノ官職ヲ止テ被追籠ル○中略當時關白太政大臣基房公松殿ト申ヲバ太宰權帥ニ奉移リ筑紫ヘ奉流ル住馴シ都ヲ別レ悲キ妻子ヲ振捨遠旅ニ出サセ給ケレバ係ル浮世ユナガラヘテ何ニカハセント覺召シツヤ一物モ進ズ御命モ危ク聞エサセ給ケルガ思召シ切セ給ヒ大原ノ本覺坊ノ上人ヲ召レテ淀ニ古川ト云所ニテ御出家授戒アリ御年三十五世中御昌リニテ禮儀ヨクシロシメシ曇ナキ鏡ニテ御坐ツル御事ヲト上下奉惜ル入道ハ出家ノ人ヲバ本ノ約束ノ國ヘハ道ヌ事ニアル也トテ筑紫ヘハサモナクテ備前國湯迫ト云所ヘゾ奉流リケル

〔續日本紀三十七〕延暦二年五月丁亥勅太宰帥正二位藤原朝臣魚名老病相仍留滯中路宜令還京託其鄉親

〔續日本紀三十七〕延暦二年七月戊戌勅石見國介正四位下藤原朝臣鷹取土左國介從五位下藤原朝臣末茂等分得入京

〔日本紀略淳和〕天長元年八月乙酉太上天皇○嵯峨有勅弘仁元年權任流人等皆盡聽入京

〔本朝文粹七〕請被殊蒙哀憐聽歸京且加身病療治且訪老母晨昏狀

藤原隆家高二品(高階成忠)作

右隆家坐事以降離家之後日月多移霧露頻侵山重江複南嶺之藥難採歎深愁切東岱之魂應迷仍爲免遠流無期之科雖仰近代有例之恩玄渙未下抱愁而止隆家生于累葉丞相之家仕於一朝聖主之代年已弱冠未及二九之齡位忽高貴初備十六之臣爲朝爲世雖懸毀謗於萬人之唇吻爲家爲門多施榮耀於一身之面目爰渥沐恩澤只欲仕於君忽忘惠露何不忠於公而無誤坐配流是猶少而先老之過也不犯處重科豈非愚而超賢之意哉天譴俄臻人望早背病還更發命已欲終須只除髮髮偏

量移

〔日本紀略桓武〕延暦十四年十二月癸未佐渡權守吉備朝臣泉移備中國、

〔日知錄 三十二〕量移

唐朝人得罪貶竄遠方遇赦改近地謂之量移舊唐書玄宗紀開元二十年十一月庚午祀后土于肅上、大赦天下、左降官量移近處、二十七年二月己巳、加尊號大赦天下、左降官量移近處、量移字始見於此、○中今人乃稱遷職爲量移誤矣、

〔續日本後紀仁明〕天長十年六月甲子詔曰、○中去弘仁元年坐事配流者雖自陷朝憲而久憐淪黜安倍朝臣清繼、百濟王愛答故藤原朝臣仲成男等并量徙入近國、己巳罪人安倍朝臣清繼、元配伯耆

國今移美作國、百濟王愛答、元安房國、今移參河國、辛未罪人藤原永主、同山主藤主等、天長二年從日向國、遷配豐前國、今移備前國、永野淨津、元配越前國、伊勢安麻呂、元配能登國、今并移若狹國、

〔續日本後紀仁明〕承和十三年八月辛巳散位正三位藤原朝臣吉野冀、○中九年○承和七月緣坐伴健

岑事左貶太宰員外帥、十二年正月遷配山城國、薨時年六十一、

〔榮花物語五浦〕の別、せき戸の院にて帥殿藤原伊周は御心ちあしう成ければ、御どものけびあ

しども、かうくそちはみだり心ちあしとて、ためらひさふらふ、母北の方もやがてつとどらへて、またこゝになんどそうせさすれば、くくその心ちつくろひやめてすがやかにくだすべ

きよし、ならびに母きたのかたすみやかにあけたてまつれとせんじあるに、中納言藤原宮一

原藤原子藤の御ありさまもおぼしやり、かのは、きたのかたをもおぼしやらせ給に、いみじうて女

院藤原註子も内藤原一も、はるかなる御ありさまをいど心ぐるしうおぼして、おほ殿藤原道藤原にも

このことよろしかるべくと、院山花にせちに申させ給て、そちのははりに、中納言はたじま

にとゞまり給べき宜旨くだりぬ、

〔源平盛衰記 十二〕大臣以下流罪事

之給倍然而御心有所思行天。泰殊寬免給止之。坊司并品官乃佐官以上及侍人藏人諸近仕者等又司乃長以上波平皆流罪爾當給不就中爾先有官爾人波皆配所乃員外官爾任給不但品官乃判官以下波不在任限又官無支人等波平絕蔭除位天流罪爾當給倍然而殊懸給止志天其身平乃流太自餘乃屬仕者波平咸寬免給不自今以後波改心天公爾仕津本主爾往仕已度不得之若猶屬仕者法乃隨爾重久罪給止波李宜御命衆聞食止與宜以大進從五位下藤原朝臣高直爲駿河權介大馬正六位上山口宿禰稻床爲安房權目左京大進正六位上紀朝臣貞嗣爲上總權掾少進正六位上橘朝臣末茂爲飛驒權守內舍人正七位上紀朝臣春常爲下野權掾主殿助正六位上橘朝臣清蔭爲加賀權掾主馬首正六位下坂上大宿禰新繼爲能登權掾民部大丞正六位上藤原朝臣岑人爲越中權掾亮從五位下藤原朝臣貞守爲越後權守少進正六位上藤原朝臣貞庭爲佐渡權掾治部少丞正八位上藤原朝臣安成爲丹後權掾少屬正六位下朝野宿禰清雄爲權目兵部少丞正七位上藤原朝臣正岑爲因幡權掾大進從五位下藤原朝臣近主爲伯耆權介少納言從五位下藤原朝臣秋常爲石見權守學士從四位下善道朝臣眞貞爲備後權守刑部少輔從五位下藤原朝臣正世爲安藝權介學士從五位上春澄宿禰善綱爲周防權守民部少丞正六位上紀朝臣永直爲伊豫權掾少屬正六位上滋原宿禰道成爲肥前權少目肥後介從五位下橘朝臣眞直爲筑後權介少判事正七位上丹墀真人時永爲豐前權掾主藏正正七位上坂上大宿禰當岑爲豐後權掾勘解由使判官正六位上藤原朝臣栗作爲日向權掾主殿首正六位下淡海真人豐守爲大隅權掾主膳正正六位上丹墀真人綱足爲薩摩權掾舍人正正六位上廣根王爲壹岐權守主工首正六位上上毛野朝臣眞繼爲對馬權守殿上難色及帶刀品官六位已下相連被配流者總六十餘人同附防授發遣于諸道焉八月壬戌朔改上總權掾正六位上紀朝臣貞嗣爲尾張權掾改對馬權守正六位上上毛野朝臣眞繼爲土佐權掾

〔百練抄五〕

堀河〕寬治六年九月廿八日左少辨爲房左遷阿波權守依山門訴也七年六月召還之

上ノ官筑前守ハ從五位下ノ官ナリ、

又按ズルニ貶シテ國司ト爲シタルハ、前ノ太宰帥ノ條ニ參見セル者多シ、參照スベシ、

〔續日本紀^{三十三}〕寶龜六年五月己酉從四位上陰陽頭兼安藝守大津連大浦卒、大浦者世習陰陽仲滿甚信之、間以事之吉凶、大浦知其指意、涉於逆謀、恐禍及己、密告其事、居未幾、仲滿果反、其年授從四位上、賜姓宿禰、拜兵部大輔兼美作守神護元年、以黨和氣王、除宿禰姓、左遷日向守、尋解見任、卽留彼國、寶龜初、原罪入京、任陰陽頭、俄兼安藝守、卒於官、

〔續日本紀^{三十八}〕延曆四年十月甲子、左降從四位下吉備朝臣泉佐渡守、

〔日本後紀^{二十四}〕弘仁五年閏七月壬午、散位正四位吉備朝臣泉卒、^略中延曆初、出爲伊豫守、被僚下告、遣詔使勘問、辭涉不敬、有司執法、請實、恒科詔曰、其父故右大臣^略眞往學、曾歸、播風弘道、遂登端揆、

或冀皇猷、宜有泉寧、令思後善、但解見任、以懲前惡、後復以譴貶、佐渡權守、歸居本縣、鬱々不得志、

〔日本後紀^{二十一}〕弘仁元年九月庚戌、詔曰、^略中太上天皇^{平城}伊勢^{行幸}多^流志^米諸人等、法之隨^爾罪

賜^{久倍}有止^{所念}有^爾依^{毛氏}奈^{免賜}比^{宥賜}布、壬子從五位上磯野王爲伊豆權守、從五位上、大中臣

朝臣智治麻呂爲武藏介、正五位上、菅野朝臣庭主爲安房權守、從四位下、紀朝臣田上爲佐渡權守、正

五位下、藤原朝臣弟貞爲丹後守、正四位下、藤原朝臣眞夏爲備中權守、從五位下、當麻真人鱧麻呂爲

淡路權守、從五位上、大中臣朝臣常麻呂爲伊豫守、從五位下、田口王爲土佐權守、從五位下、紀朝臣良

門爲肥前權介、從五位上、大伴宿禰和武多麻呂爲日向權守、從五位下、御室朝臣是嗣爲大隅權守、從

五位下、眞菅王爲壹岐權守、

〔續日本後紀^{十二}〕承和九年七月戊午、集廣坊諸人等於右衛門陣庭、詔曰、今詔久不慮外^爾、太上天皇

崩^賜此^隙乘^天春宮^乃帶刀舍人伴健岑^伊與橘逸勢合力^天國家^平傾亡^无謀^利搜求事理

於皇太子^天無所避^之、因茲皇太子^{波平}其位廢退給^不已^畢、相隨人等其罪不輕、理須法^乃隨^爾罪

家翌日發向配所權帥依出家被改官符云々權帥隆家等依病難赴各配所之由領送使申之頭辨行成朝臣勅ヲ奉シ權帥病之間安置播磨國便所出雲權守隆家安置但馬國便所各領國司取其請文可歸參者○中略

同年十月八日權帥密々京上隱居中宮之由自去夜有其聞云々仍差右衛門權佐孝道被申事由於中宮之處已被奏無實之趣孝道朝臣以下使官人等候彼宮差季雅爲信等遣播磨被實檢權帥有無又帥上洛告言既有其人彼宮大進告曰云々帥先日依出家被改官符而尙不刺頭云々播州使等未歸洛以前權帥候中宮之由已露顯八旬母氏乍沈病病懇切期今一度之對面死ヤラヌウへ中宮懷妊今月當產期之間密々上洛云々於今度儲被追遣太宰府ト云々

〔山槐記〕治承三年十一月十八日壬申子終刻前關白（藤原基房從一位年卅五歲被遷太宰權帥下向給中時）

天皇我詔旨止勅大命平親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣從一位藤原朝臣基房坐事天太宰權帥爾退給不天下之人此旨平聞天見懲倍志勅不大命平衆聞食止宣

治承三年十一月十八日

〔百練抄高允〕治承三年十一月十八日前關白基房左遷太宰權帥遣大夫尉康綱令追之卽以出門隨身厚景侍四五人在其難人滿途中見之各叫喚前關白於路頭出家云々前相模守業房配流伊豆國但逐電不逢追使前大納言資賢卿并雅賢資時信賢可追却京中之由被仰下也廿八日前關白文書被召置內裏花山院前大相國藤原雅原進目錄文庫被宿納大內歸京之後返賜之

貶爲國司

〔續日本紀十八〕天平勝寶二年正月己亥左降從四位上吉備朝臣眞備爲筑前守

○按ズルニ續日本紀天平十九年十一月丙子ノ條ニ以春宮大夫兼學士從四位下吉備朝臣眞備爲右京大夫ノ文アリ眞備ハ天平勝寶二年マデ右京大夫タリシナラン右京大夫ハ正五位

をばさしたれど、この御ころにひかれてなみだど、めがたし、

〔古事談二臣一〕儀同三司伊周配流者長徳二年四月廿四日事也、宣命趣罪科三箇條、奉射法皇奉呪

科云々等之左衛門權佐允亮府生苗忠宗等爲追下向其所中宮御在所、入自東門、經寢殿北、就西對

所帥住仰含勅語而申依重病難赴配所之由、差忠宗令申其旨、無許容、載車可追下之由、重有勅命云

云、固關等事、右大將顯光藤原行之、此間仰左右馬寮令引御馬、搆武藝之五位依宣旨令候、鳥曹司云々、

配流

太宰權帥正三位藤原伊周元内出雲權守從三位同隆家元中伊豆權守高階信順元右淡路權守同

弟道順元右兵衛佐木權頭○中略

權帥候中宮之間、不從使催之由、允亮雖再三奏聞、被仰猶慥可追下之由、二條大路見物車如堵、中宮

于○定與帥相雙不離、仍不能追下、由奏之、京中上下舉首亂入后宮中、見物濫吹殊甚、宮中之人々悲泣

連聲聞者、無不拭淚、隆家同候此宮兩人候、中宮不可出云々、仍下宣旨、擬破夜大殿戸之間、不堪其責

隆家所出來也、依稱病由、令乘網代車、遣配所、但隨身可騎馬云々、於權帥者已逃隱、令宮司搜御在所

及所々、已無其身云々、被召問信順等之處、申云、左京進藤原賴行權帥近習者也、以件賴行可令申在所

所者、即召問賴行之處、申云、帥一昨日出自中宮、道順朝臣相共向愛太子山至、賴行者自山脚罷歸了、

其乘馬放弁彼山邊云々、仰云、允亮召具賴行尋跡可追求、若所申有相違者可加拷訊者、仍允亮朝臣

右衛門尉備範左衛門府生忠宗等馳向彼山、尋得鞍馬云々、中宮乘權大夫快義之車出給、其後使官

人等參上御所、搜檢夜大殿及疑所々、放組入板敷等皆實檢云々、奉爲后宮無限之恥也、中宮已落飾

出家給云々、信順等四人籠戸屋、以看督長令守謹之、此間已經十箇日、五月四日員外帥出家歸本家、

尋求之使者尙在西山、左衛門志爲信守、也本所欲令申事由之間、權帥又乘車馳向離宮爲信着、乘資

於清和院邊追留、此間公家差右衛門權佐孝道、左衛門尉季雅、右衛門府生伊達等令馳遣帥所歸本

にうちかこみたり、たちこみたるけしき、みちおほちの四五丁ばかりのほどはゆき、もせず、い
どけおそろしきとの、うちのけしきありさまごいはんかたなくさがしけれど、寝殿のう
ちにおはしましある人々おほかれど、人おはするけはひもせず、哀にかなしきに、かゝるにこの
あやしのものども、殿の内にうちめぐりつゝ、こゝかしこをみさわぐけはひ、えもいはすゆゝし
げなるにもものゝはざまより見いだして、あるかぎりの人々、むねふたがりこゝちいといみじ
どの。○伊いまはのがれがたきことにこそはあめれ、いかでこのみやのうをいで、木轡にま
ゐりて、ちかうもさほうもつかはさんかたに、まかるわざせむとおぼしの給はするに、このもの
どもたちこみたれば、おほろげのとりけだ物ならずはいで給はん事かたし、夜中なりともなき
御かげにも、いま一度参りてこそは、いまはのわかれにも御覽せられめといひつゞけの給はす
るまゝに、えもいはすおほきに水精の玉ばかりの御涙つゞきこぼるゝ、みたてまつる人、いかゞ
はやすからん、はゝ北方宮のおまへ。○中宮御をちの人々、れいの涙にもあらぬなみだ出きて、こ
のおそろしげなる物どもの宮の内にいりみだれたれば、檢非違使ごもいみじうせいすれど、そ
れにもさはるべきけしきならず、かゝる程に、かくみだりがはしき物のなかごもを、かきわけさ
すがにうるはしくさうぞきたる物南おもてにたゞまゐりにまゐる、こはなにしにかごおもふ
程に、宣命といふものよむなりけり、きけば太上天皇。○花をころしたてまつらんとしたるつま
ひとつ、みかごの御は、后をのろはせてまつりたるつまひとつ、おほやけよりほかの人、いま
だおこなはざる太元法をわたくしにかくしおこなはせたるつまにより、内大臣をつくしの帥
になしてながしつかはす又中納言をば出雲權守になして、ながしつかはすといふ事をよみの
のしるに、宮の内の上下聲をこよみなきたるほどのありさま、此文よむ人もあはてにたり、檢非
違使ごも、涙をのごひ、あはれにかなしうゆゝ、しう思ふ、そのわたりちかき人々みなきゝてか

かはおそろしとおぼさゝらん、いとわりなういみじとおぼしめして、院にかへらせ給て、ものもおぼえさせ給はでぞおはしましける、これをおほやけにも殿道原○藤原にも、いさよう申させ給つべけれど、ことごまのものとよりよからぬことのおこりなれば、はづかしうおぼされて、この事ちらさじ、後代のはぢなりとまのばせ給けれど、どのにもおほやけにもきこしめして、おほかた此比の人のくちに入たる事は、これになんありける、太上天皇はよにめでたきものにおはしませど、この院の御心おきてのおもりかならずおはしませばこそあれ、さはありながら、いと／＼かたじけなくおそろしき事なれば、此事かくおとなくて、はよもやまじと、よいいひおもひたり、また太元法といふ事は、たゞおほやけのみぞむかしよりおこなはせ給ける、たゞ人はいみじき事あれど、おこなひ給はぬ事なりけり、それをこの内大臣殿まのびて、この年ごろおこなはせ給ふといふこと、此比きこえて、これよからぬ事の内にいたりたり、又女院の御なやみをり／＼いかなることにかとおほしめし、御もの、けなどいふことゝもあれば、この内大臣どのを、なほ御心おきて心をさなくてはいかゞはあべからんと、かたぶきもてなやみきこゆる人々おほかるべし、

〔榮花物語五〕

浦々の別かくてまつり

年四月

○長徳二はてぬれば、世中にいひさゝめきつる事どものある

略北方○藤原道隆妻賀子、伊周隆家之母也。

の御せうどの、明順道順の辨などいふ人々あな心う、さはかうにこそ

よはあめれいかゞせさせ給はんするなど申しさわけど、つゆかひあるべきことにもあらぬに、この内に曹司して年頃さふらひつる人々、ごありごもかゝりごも君のなくならせ給はんまにこそはごもおもはで、よろづをこぼちはこびごほめきの、しりもていで、はこびさわぐを見るに、いみじうこゝろばそし、されごさなごせいし給べきにもあらず、よろづの人のみ思ふらんことを、はづかしういみじうおぼさるゝ程に、世のなかのある檢非違使のかぎり、この殿の四方

小右記云、出雲權守於中宮捕得遣配所見者如雲權帥出雲權守共候。中宮不可出、仍宜下擬、破夜大殿戸、仍不堪其責、隆家出來、權帥逃隱愛太子山、有司只求得鞍馬歸後、日出家歸本家、母氏同車、六日記云、權帥官符依公家被改云々、

五月一日、權帥出雲權守籠中宮御所不赴配所、仍遣檢非違使追捕宮中、捕得隆家朝臣、權帥逃去、後日於愛太子山捕之、遣配所、今日中宮出家爲尼、中宮定子依帥事出家、六月廿二日入内人、以不甘心、十月十日、前帥偷入京之由、有其聞、仍仰有司、伺之處、在中宮也、仍重令追下、道有司於中宮、令搜出之奏、出家之由、改官符、猶不剃頭、令作僞甚者歟、

〔築花物語見はての夢〕

かゝる程に、一條殿をばいまは女院

○東三條こそは、去らせ給へ、かの殿

原爲の女君たちは、たかつかさなる所にぞすみ給ふに、内大臣どの

伊周原のびつ、おはしか

よひけり、寢殿のうへとは、三君をぞきこえける、おほんかたちも心も、やむ事なうおはすとてちちおどいみじうかしづきたてまつり給ひき、女子はかたちをこそといふ事にてぞ、かしづききこえたまひける、そのまゝ殿の御かたに、内大臣殿はかよひたまひけるになんありける、かゝる程に、花山院この四君の御もとに、おほんふみなごたてまつり給けしきだ、せ給けれどけしからぬ事とて聞かれ給はざりければ、たび／＼御みづからおはしましつゝ、いまめかしうもてなさせ給けることを、内大臣殿は、よも四君にはあらじ、此三君のことならんとおしはかりおぼいて、わが御はらからの中納言藤原に、此事こそやすからずおぼゆれいかゝすべきと聞えたまへば、いでたゞおのれにあづけ給へれど、やすき事とてさるべき人二三人ぐし給ひて、この院のたかづかさどのより、月いどあかき正月十六日に、御むまにてかへらせ給けるを、おどしきこえんと覺しおきてけるものか、ゆみやといふものして、どかくし給ければ、御ぞのそでよりやはどほりにけり、さこそいみじうを、しうおはします院なれど、ことかぎりおはしませば、いかで

多に聞えさせたまふ。

ながれゆくわれはみくづとなりぬともきみまがらみとなりてとゞめよなき事によりかく
つみせられ給ふをかしこくおぼしなげきてやがて山ざきにて出家せしめ給ひてけり、そのは
どきはめてかなしき事おほかり、

○按ズルニ、昔公出家ノ事、大鏡ノ外所見ナシ、恐ラクハ源高明ノ事ト相混ズルナラン、

〔日本紀略^五〕安和二年三月廿五日壬寅、以左大臣兼左近衛大將源高明爲太宰員外帥、

〔百練抄^四〕安和二年三月廿六日、左大臣源高明坐事左遷、太宰權帥依左馬助滿仲等密告也、

〔公卿補任^冷〕安和二年^巳

左大臣正二位源高明 左大將三月廿六日貶太宰權帥、即日入道請留、不許、准俗赴任所、

〔日本紀略^十〕長德二年四月廿四日甲午、宣命、以內大臣藤原伊周朝臣爲太宰權帥、以權中納言同

隆家朝臣爲出雲權守、去正月依奉射危花山院法皇、又奉呪咀東三條院之間也、又緣坐左遷之者有

其數、五月一日庚子、出雲權守隆家卿進發赴任所、勅使相送於皇嘉門下、抑車、奏請聽出家、留京、勅

不許、遂赴調處、又太宰權帥逃脫不赴、仍令尋求之、今日皇后定子^周妹伊落飾爲尼、四日癸卯、權帥自

春日社歸京、即赴調所、勅使相送、廿日己未、大納言顯光仰外記云、去月廿四日、依左遷事、誓固諸陣、

宣令開者、又有大祓事、依左遷也、廿一日庚申、發遣山陵使、被告左遷事、九月十日丁未、右衛門佐

孝道奏云、昨日未刻中宮^子定邊權帥入京之由云々、仍仰府生忠宗令守護之處、已有其實、仰云、定領

送使之間、先以隨兵可遣、山崎者、次右大臣^{顯光}藤原參入、有左遷除目事、大江以言任飛騨權守、高階信

順任伊豆權守、同道順任淡路權守、十三日庚戌、右大臣以下參入、被行權帥追遣官符事、

〔百練抄^四〕長德二年四月廿四日、諸陣誓固、內大臣伊周任太宰權帥、權中納言隆家貶出雲權守、是

依去正月奉射華山院并呪咀^{服物自取}下取^{出云々}東三條院私行太元法事也、去二月、先是令勅申兩人罪名、

給^不是則爲安宗廟社稷以大穀奉修茲衆聞食^{○食下}昌泰四年^{辛酉}正月廿五日三河掾大春日晴

蔭右大史遠江權掾勝諸明駿河權介菅原景行式部丞飛騨權掾菅原景茂^{右斷}能登權掾源嚴但馬

權守源敏相^{□□}伯耆權目山口高利^{右馬}出雲權守源善^{□□}美作守和藥貞世^{少納言}長門權掾良岑

貞成阿波權守源兼則^{前攝津守}土佐介菅原高見^{大學頭}昌泰四年正月廿七日左降除目

〔大鏡^二左大臣時平^一〕左大臣時平のおとゞはもどつねのおとゞの御太郎也御母四品彈正尹人康親

王の皇子のむすめ醍醐のみかどの御時この太郎左大臣の位にて、どしいとわかくておはしき

すがはらのおとゞ^眞右大臣の位にておはします、そのをりみかどおほんどしいとわかくお

はします、左右大臣に世のまつりごとおこなふべき宣旨くださしめ給へりしに、そのをり左大

臣御歳廿八九ばかり、右大臣御歳五十七八にやおはしけん、ごもよのまつりごとをせしめ給

ひしあひだ、右大臣さえもよにすぐれめでたくおはしまし、御心おきてもことのほかにかしこ

くおはしまし、左大臣は御歳もわかく、さえもことのほかにおどりたまへるにより、右大臣御お

ぼえことの外におはしましたるに、左大臣やすからずおぼしたる程に、さるべきにやおはしけ

ん、右大臣の御ためによからぬ事いできて、昌泰四年正月廿九日、太宰權帥になしたてまつりて

ながされ給ふ、このおとゞの子ごもあまたおはせしに、をんなきんだちはむこどりし、をどこ君

だちはみなほど／＼につけて位ごもおはせしを、それもみなかた／＼にながされ給ひてかな

しきに、をさなくおはしけるおとゞ君をんな君たちまたひなきておはしければ、ちいさきはあ

へななどおほやけもゆるさしめ給ひしかば、ごもにゐてくだり給ひしぞかし、みかどの御おき

てきはめてあやにくにおはしませば、この御子ごもおなじかたにだにかはさ／＼りけり、か

たかたにいとかなしくおぼして御まへの梅の花を御らんじて、
こちふかばにほひおこせよむめのはなあるじなしとて春なわすれそ、又ていしのみかど^{○宇}

實龜中至參議從三位、歷彈正尹、刑部卿、天應元年坐事左遷、至是薨於任、所時年六十七。

〔續日本紀三十〕延暦元年六月乙丑、左大臣正二位兼太宰帥藤原朝臣魚名坐事免大臣、其男正四位下鷹取左遷、石見介從五位下末茂土左介從五位下眞鷲從父並促之任、己卯、太宰帥藤原朝臣魚名到攝津國病發不堪進、勅宜待病愈、然後發遣。

○按ズルニ、公卿補任ニ左大臣藤原魚名兼太宰帥免大臣之時任之歟トアリ、或ハ然ラン、

〔續日本後紀十二〕承和九年七月乙卯、遣左衛門權佐從五位下藤原朝臣岳雄、右馬助從五位下佐伯宿禰宮成等、率近衛、喚粹、大納言正三位藤原朝臣愛發、中納言正三位藤原朝臣吉野參議正四位下文室朝臣秋津、幽於院中、各異其處、是日詔曰、略中大納言藤原朝臣愛發、波乎廣職、天京外仁、中納言藤原朝臣吉野、波乎太宰員外帥、仁春宮坊大夫文室朝臣秋津、波乎出雲國員外乃守、爾任賜比宥、賜止不宜天皇、我御命、乎衆聞食止與宣。

〔日本紀略四〕延喜元年正月廿五日戊申、諸陣警固、帝御南殿、以右大臣從二位菅原朝臣眞○道任太宰權帥、以大納言源朝臣光任右大臣、又權帥子息等各以左降、廿六日遣固關使、同日除目、二日一日甲寅、上皇多○字還本宮、今日權帥向任、四日丁巳、奉幣諸社、被申菅原朝臣左遷之事、五日戊午、依同事奉幣山陵。

〔政事要略二十二〕天皇加詔旨、止萬宣大命、乎親王諸王諸臣百官口口天下公民聞食、止宣朕卽位之初、左大臣藤原朝臣平○時等奉前太上皇多○字之詔、天相共輔導、天朝政、乎取持奉止、于今五箇年爾成、或而右大臣菅原朝臣眞○道塞內、與利俄爾大臣上收給利、而不知止足之分、有專權之心、以佞諂之情、欺惑前上皇之御意、然乎恐慎上皇之御情、天萬口奉行、无敢恕御情、天欲行廢立、離間父子之志、淑皮兄弟之愛、詞者辭比順者之心者逆、是皆天下所知、奈利不宜居大臣之位、須法律乃任罪、奈倍給不脫之字、然而殊爲有所念、奈奉停大臣之官、太宰權帥爾罷給不、又右大臣爾者大納言源朝臣平○任

にゐていきたりけるともすけといふをどめて、御心に去たがへといひおきて、我はのばりにけり、はりまにもあるべきさまに去つらひすへたてまつりおきて、御さもの檢非違使どもかへり参りぬ。

〔日本書紀^{二十五}〕大化五年三月戊辰、蘇我臣日向^{日向字}、譜倉山田大臣於皇太子^{○天}曰、僕之異母

兄麻呂、伺皇太子遊於海濱而將害之、將反其不久、皇太子信之、天皇使大伴狛連三國麻呂公穗積

臣於蘇我倉山田麻呂大臣所而問反之虛實、已巳^{○中}、大臣^略開佛殿之戶作發誓曰、願我生生世世

不怨君王、誓訖自經而死、妻子殉死者八^{○中}、是月遣使者收山田大臣資財、資財之中、於好書上題皇

太子書於重寶上題皇太子物使者還申所收之狀、皇太子始知大臣心猶貞淨、追生悔恥、哀歎難休、即

拜日向臣於筑紫太宰帥、世人相謂之曰、是隱流乎、

〔續日本紀^{二十}〕天平寶字元年七月戊午、勅曰、右大臣豐成者、事君不忠、爲臣不義、^{○中}宣停右大臣任、

左降太宰員外帥、

〔續日本紀^{二十六}〕天平神護元年十一月甲申、右大臣從一位藤原朝臣豐成薨、^{○中}其弟大納言仲滿

執政專權、勢傾大臣、^{○中}左降大臣爲太宰員外帥、大臣到難波別業、稱病不去、居八歲、仲滿謀反伏誅、

即日復本官、薨時年六十二、

〔續日本紀^{三十六}〕天應元年六月癸卯、降太宰帥從三位藤原朝臣濱成爲員外帥、^{○中}僚佐之員限以三人、

仍勅大貳正四位上佐伯宿禰今毛人等曰、三考黜陟、前王通典、德惡勸善、往聖嘉訓、帥參議從三位兼

侍從藤原朝臣濱成所歷之職、善政無聞、今受委方牧、寄在宣風、若不懲肅、何得後効、仍貶其任、補員外

帥、宜莫預釐務、但公廡者、賜帥三分之一、府中雜務一事已上、今毛人等行之、

〔續日本紀^{四十}〕延曆九年二月乙酉、太宰員外帥從三位藤原朝臣濱成薨、濱成贈太政大臣正一位不

比等之孫、兵部卿從三位麻呂之子也、略涉群書、頗習術數、以宰輔之胤、歷職內外、所在無續吏民患之、

せ給へる、よのうちに此北野にそこの松をおほさしめ給ひて、わたりすみ給ふをこそは、たゞいまの北野宮と申て、あら人神におはしますめれ、

〔菅家後集〕自詠

離家三四月、落涙百千行、萬事皆如夢、時仰彼蒼、

不出門

一從謫落在柴荆、萬死競々跼踖情、都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲、中懷好逐孤雲去、外物相逢滿月迎、此地雖身無檢繫、何爲寸步出門行、

〔榮花物語五浦五の別〕

そち殿〇太宰權帥藤原伊周

ははりまにおはすとて、こゝはあかしとなん申といふをきこしめして、かくなん、

ものおもふこゝろのやみしくらればあかしのうらもかひなかりけり、いでやものゝおほゆるにやと、わが御心にもにくゝおぼさるべし、中納言殿藤原隆家こどかたへおはすらんを、なかおなじかたにだにあらましかば何事もよからましとあやくなる世を心うくおぼされて、まら浪はたてどころもにかさならすあかしもすまもおのがうらく、といふふるうたをかへさせ給へるなるべし、

かた／＼にわかるゝ身にもにたるかな、明石もすまもおのがうらく、とぞおぼされける中納言殿はたびのやどりの露けくおぼされければ、

さもこそはみやこのほかにたびねせめうたてつゆけきくさまくらかな、かくてたじまにおはしつきぬれば國のかみ公家の御さだめより外にさしすゝみてつかうまつる事おほか、中納言は心のあいぎやうつき給へれば、たれもいみじうぞつかうまつりける、おはしつきぬれば、のぶやす都へかへりまゐるに、いと心ばそげなる御ありさまの心ぐるしさに、わがこをとも

にて、かくやうのうたや詩などをさへ、いさなだらかにゆゑ／＼しういひつゝけたまふと見きく人めもあやにあさましくあはれにもまもりゐたり、物のゆゑをりたる人などもむげにちかくゐよりてほかめせず見きくけしきどもをみて、いよ／＼はへて、物をくりおくやうにいひつづくるほごまことにけうなるや、まげきなみだをのびひつゝけうじゐたり、つくしにおはします所のみかごもかためておはします、大貳のゐどころははるかなれども、樓のうへの瓦などの心にもあらず御らんじやられけるに、又いどころかく觀音寺といふ寺のありければ、かねの聲をきこしめしてつくらせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看瓦色 觀音寺只聽鐘聲

これは文集白居易遺愛寺鐘歎枕聽香爐峯雪撥簾看といふ詩にもまさゞまにつくらしめ給へりところ、むかしのはかせどもは申けれまたかのつくしにて九月九日菊花を御らんじけるついでに、また京におはしまし、時九月のこよひ内裏にて菊のえんありしに、このおとゞつくらしめ給へりける詩を、みかご[○]かしこくかんじたまひて、御衣たまはり給へりしを、つくしまでくだらしめ給へりければ、御らんするにいとゞそのをりおぼしめしいで、つくらせ給ひける。

去年今夜侍清涼 秋思詩篇獨斷腸 恩賜御衣今在此 捧持毎日拜餘香

この詩いさかしこく人々かんじ申されき、この事どもたゞちり／＼なるにもあらず、かのつくしにてつくりあつめさせたまへりけるを、かきあつめ一卷とせしめ給ひて後集となづけられたり、又をり／＼の歌かきおかせ給へりけるを、おのづからよにちりきこえしなり、[○]中また雨のふる日うちながめ給て、

あめのまたかわける程のなければやきてしぬれぎぬひるよしもなきやがてかしこにてう

こゝまではたひらかにまうでつきて侍かひなき身なりども、いま一たびまゐりて御らんせられてややみはべりなむとおもひ給ふるになん、いみじうかなしうはべる御ありさま、ゆかしきなりとあはれにかきつけ給て、

うきことをおほえの山と云りながらいとゞふかくもいるわが身かな、となん思給へるなどかき給へり、宮にはあはれにかなしうよろづを覺しまどはせ給て、物もおほえさせ給はす、略中そち殿はその日のうちに山さき關戸の院といふ所にぞとゞまり給へる、この御どもにはさるべき檢非違使ども、四人ぞつかうまつりたりける、その物の物どもの御車につきてまゐるぞあはれにゆゝしき、中納言の御どもには左衛門尉延安といふ人は、ながたにの僧都のはらからの檢非違使ぞつかうまつりたりける、あさましきことつきもせず、せき戸の院にて、帥殿は御心ちあしうなりにければ、御どものけびるしども、かう／＼そちはみだり心ちあしとて、ためらひさぶらふ、

訓讀所

〔大鏡二左大臣時平、右大臣三菅原の御ためによからぬ事いできて、昌泰四年正月廿九日、太宰權帥

になしたてまつりてながされ給ふ、略中つくしにおはしましつきて、あはれに心ほそくおぼさるゝゆふべ、をちかたに所々けふりたつを御覽じて、

夕されば野にも山にもたつけぶりなげきよりこそもえまさりけれ、又雲のうきてたゞよふを御らんしても、

山わかれとびゆく雲のかへりくるかげ見るときぞなほたのまるゝ、さりどもとよをおぼしめされけるなるべし、月のあかき夜、

うみならずたゞよふ水の底までもきよき心は月ぞてらさむ、これいとかしこくあそばしたりかし、げに月日こそはてらし給はめどこそはあめれ、まことにおごろ／＼しきことはさる物

騎相具次有車一兩近習人歟侍五六人、或着淨衣、或着水干、小袴、騎馬、御櫓臺樓上置屏風二帖、御中持一合、令入宿院、御車副古河宅給云々、令出松殿給之間、見物雜人亂入殿中、在北對緣、女房一昨日大略退出云々、每事如夢、廿一日乙亥、晚頭左衛門權佐光長來曰、前大納言邦綱頻申、勸前關白出家之由、所傳承也者、後聞今日於古河宿出家給云々、廿二日丙子、去夜前關白出古川宅、自院下向令乘昇居屋形船給覆幔、前皇后宮少進仲盛着淨衣、監物家重着直垂小袴、牛童千手九招出納乘、御船入中持一合櫓臺與等、看督長者二人同乘之雜船一艘、武者船一艘、在後云々、今日已刻、令過寺口給、於此所奉逢之人翌日所來談也、即是向福原給云々、廿七日辛巳、後聞今日興福寺衆徒蜂起、其故氏長者配流無例、雖被停所、帶可被歸京之由、可訴申云々、而別當玄縁、權別當藏俊稱、其咎可在身、發方、大衆欲止之處、遂被追散云々、

〔大鏡二大臣時一〕右大臣道實の御ためによりかぬ事いできて、昌泰四年正月廿九日、太宰權帥になしたてまつりてながされ給ふ。略○中ひごろへて都どほくなるまゝに、あはれに心ぼぞくおぼされて、

君がすむ宿の梢をゆく／＼もかくるゝまでにかへり見しかな。○此歌又見拾遺和歌集又はりまの國におはしつきて、あかしのむまやといふ所に御やどりせしめ給ひて、むまやの長のいみじう思へるけしきを御らんじて、つくらしめ給へる詩いどかなし、

驛長無驚時變改 一榮一落是春秋

〔榮花物語五浦々の別〕中納言殿藤原隆家、堅は京いでたまひて、たむばざかひにて御馬にのらせ給ぬ、御車はかへしつかはすどて、どし比つかはせ給けるうしかひわらはに、此うしはわがたた

みにみよとてたべば、わらはふしまろびてなくさままことにいみじ、御車は都にき、御身はあらぬ山路にいらせ給はごぞいみじき、おほえ山といふ所にて、中納言宮藤原一條后に御文かゝせ給

うせきすれば、むげによにいりぬれば、こよひはよくまもりて、あすうの時にとある宜旨あり、されば夜ひとよいもねでたちあかしたり、宮の御まへ帥殿は、北のかたひとつに手をとりかはしてまごはせ給は、かなく夜もあけぬれば、げふこそはかぎりたれも、おぼすに、たちのかんどもおぼさず、御聲もをしませ給はず、いかに、時なり侍りぬと、せめの、しるに宮の御まへは、きたのかた、つとどらへてさらにゆるしたてまつらせ給はず、かゝるよしをそうせさずれば、几帳ごしに宮の御まへをひきはなちたてまつれと宜旨まきれど、げびおしども、人なれば、おはします屋にはえもいはぬもの、其のぼりたちてぬりごめをわりの、しるだに、いみじきを又いかでかみやの御まへの御てをひきはなつ事はあらんど、いとおそろしう思ひまはして、身のいたづらにまかりなりて後はいとびんなかるべし、とく／＼とせめ申せば、すぢなくていでさせ給ふに、松道ぎみ藤原いみじうまたひきこえさせ給へば、かしこくかまへてゐてかくまたてまつりて、御車にかうじ橘こきき誤ひとつばかりをふくろに入て、むしろばりのくるまに乘給、宮の御方をいとかたじけなくおぼせど、宮の御まへは、北のかたも、つきたち給へれば、ちかく御車よせてのらせ給には、北の方やがて御こしをいだきてつゞきてのらせ給へば、母北方そでをつとどらへてやがてのらむと侍りとそうせさすれば、いと便なき事なり、ひきはなちてとあれど、はなれ給べきかたみえず、たゞ山ざきまでいかむいかんと、たゞのりにのり給へば、いかゞはせんすぢなくて御車ひきいだしつ、長徳二年四月廿四日なりけり、帥殿はつくしのかたなりければ、ひつじさるのかたにおはします、中納言殿は、いづものかたなれば、たんばのかたのみちよりとて、いぬゐざまにおはする、

〔山槐記〕治承三年十一月十八日壬申子終刻前關白〔藤原基房〕從一位、年卅、被遷太宰權帥下向給傳聞大夫尉源康綱參入乘八葉車出給御共步行者有廿人許、次看督長二人、次康綱負胡篋郎等五六

にて、うすにびの御なほしきしぬきなどき給ひて、あさましくてゐたまへれば、人々かしこまりてちかうもえまゐりよらぬに、このてのあやしのものどもいりみだれて、えたるけしきどもぞあさましういみじきさてあけたれども、夢におはせぬよしをぞうせす出案したるにか、さるにてもたゞ今は都の内をはなるべきにあらず、よく／＼あされあされと宣旨まきりなり、けびぬしども、かつはなく／＼いみじうおもひながら、宣旨のまゝにするに、おはせねばいとあさましきことにて、すぢなしとてそのあたりさらず、よるまるべきよしの宣旨まきりにあり、かくして今日もくれぬ、いとあさましき事なり、いかゞさるやうあらん、檢非違使どもことあやまちたらば、みなどが有べきよしきくにも、その夜、一夜いもねじとおもひさわぐほごに、鳥の時ばかりに、あやしのあじろ車の、こゝらの人とおちぬさまなるが、二三人ばかりどもにて、このみやをさしてたゞきにくるに、あやしくなりて、この檢非違使どものてのあかぎぬなどきたる物ども、たゞよりによりて、なにの車ぞ、たゞいまかゝるところに、くるはとてながえにさどつけば、あらずや殿のこばたに參らせ給へりしが、いまかへらせ給なりといふをきゝて、このものどもみなさりぬ、御くるまみかどのもにてかきおろして、内大臣殿おりさせ給ぬ、けびぬしどもみな土におりてなみゐたり、みたてまつれば、御年はたゞいま廿二三ばかりにて、御かたらのどゝのほり、ふどりきよげにて、色あひまことにめでたし、かの光る源氏もかくやありけんぞ、見たてまつる、うすにびの御ぞのなよゝかなるみつばかり、おなじ色の御ひとへの御なほしきしぬき同じさまなる、御身のさえもかたちも、此よのかむたちめにはあまり給へると聞ゆるぞかし、あたら物をあはれにかなしきわざかなどみたてまつるに、涙もどゞめがたうてみななきぬ、のりながらもいらせ給はで、宮のおはしませば、われひとりとはなほかしこまり給へるも、いどかなし、さておはしましぬれば、帥伊木幡にまゐらせたりけるが、たゞ今なんかへりて候とそ

せつけたてまつらず、たゞあるがなかのおど、にて、わらはなるきみ賢の殿の御ふところはなれ給はぬぞ、なきの、しりてまごひ給へば、事のよし奏してさばれ、それはとゆるさせ給を、おなじ御くるまにてだにあらす、むまにてぞおはする、十一二ばかりにぞおはしける、たゞ今よのなかになしくいみじきためしなる人のなくなり給、れいのごとなり、これはいとゆゑ、しう心うし、醍醐のみかごいみじうさかしう、かしこくおはしまして、ひじりの御門さへ申し、御門の御一のみこ源氏になり給へるぞかし、かゝる御ありさまはよにあさましくかなしう、心うきことに世に申のゝしる、

〔榮花物語五〕

うるはしくさうぞきたる物南おもてにたゞまいりにまいる、こはなにしにかとおもふ程に、宣命といふものよむなりけり、中内大臣伊藤藤原をつくしの帥になして、なが

しつかはす、又中納言藤原をば出雲權守になして、ながしつかはすといふ事を、よみのゝしるに、中さていまはいでさせ給へ、日暮ぬゝとせめのゝしり申せど、すべてさかくもいらへす

る人なし、うちにもかくいらへする人なきよしを奏せさすれば、なごてさるべきことにもあらず、たゞよくゝせめよとのみえきりに宣旨くだるに、かくてこの日もくれぬれば、中宮には

きのふくれにしことだにあり、今日とくゝと宣旨えきりなり、さても中納言はあるけしきし

侍り、帥はすべてさふらはぬよしをそうせさすれば、あさましきことなり、宮をさるべくかくしたてまつりて、ぬりごめをあげて、くみれのかみなども見よとある宣旨えきりにそふ、御ぬりご

めあけ侍らん、みやさりおはしませと檢非違使申せば、いまはすちなしとて、さるべく木丁など

たてゝ、あさはかなるさまにておはしませ、けびぬしごものみにもあらず、えもいはぬ人ぐして、このぬりごめをわりのゝしるをともあさましうゆゑ、しく心うし、さは世中はかくあるわざにこそありけれと、めもくれ心もまごひてなみだにいで、さす中納言も我にもあらぬさま

て、天の下ゆすりて、西のみやへ人はしりまどふ、いといみじきことかなと聞ほどに、人にも見え給はでにげ出給ひにけり、愛宕になんきよみづになんとゆすりてつひに尋ね出てながし奉るどきくに、あへなしとおもふまでいみじうかなしく、心もどなき御事に、かくおもひまじたる人は袖をぬらさぬといふたぐひなし、あまたの御子ども、源經、房、俊賢あやしき國々のぞうになりつゝ、行衛もまらずちり／＼わかれ給ふめるぞ御ぐしおろしなど、すべていへばおろかにいみじ、大臣も法師になり給ひにけれど、まひて帥になし奉りて、おひくだし奉る、其比ほひたゞ此ことに過ぎぬ、

〔榮花物語月一〕かゝる程に、世中にいとけしからぬことをぞいひ出たるや、それは源氏の左のおとゞ明高の式部卿の宮平爲の御事を覺して、みかごをかたぶけ奉らんとおぼしかまふといふこといできて、よにいとさき、にくゝのゝ、しる、いでやよにさるけしからぬ事あらじなどよ人申思ふ程に、佛神の御ゆるしにやげに御心のうちにもあるまじき御心やありけん、三月廿六日安和二年にこの左大臣殿明高に、けびぬし打かこみて宣命よみのゝしりて、みかごをかたぶけたてまつらむとかまふるつみによりて、太宰權帥になして、ながしつかはすといふことをよみのゝしる、いまは御くらゐもなきちやうなればとて、あじろ車にのせてたてまつりて、たゞいきにゐてたてまつれば式部卿の宮平爲の御心ち、おほかたならんにてだにいみじとおぼさるべきに、まいてわが御事によりて、いできたること、おぼすに、せんかたなくおぼされて、われも／＼いであちさわがせ給北の方の御むすめをどこ君達俊賢、房、俊賢いへばおろかなるどのゝ、うちのありさまなり、思ひやるべし、むかしすがはらのおとゞ眞道のながされ給へるをこそ、よの物がたりにきこしめしゝか、これはあさましういみじきめをみてあきれまどひて、みななきさわ給もかなし、をどこ君たちのかぶりなごし給へるも、おくれじおくれじとまどひ給へるも、あへてよ

〔運歩色葉集佐〕左遷放流事

〔伊勢集上〕かゝるに時の大臣ながされ給むこにて兵衛敏相のすけより但馬介になされてながされ

けるをたゞにてはさしもおぼえてやみにしを、かくとほくながれゆきたるが、あはれなる
事といひたりければ、

かけていへば洞の川の瀬をはやみ心づからやまたはながれん

左遷方法

〔新儀式臨時〕貶退事略中

又或有坐事左遷之者謂式部丞選兵部主計寮官人又追位解官左遷等者懲肅之後經二三年有復
本位本官者延喜□年源稅追位同復本官天慶二年源俊追位天慶□年復本官天慶□年同案頭兼恒遷主
稅頭不復本官卒去助大夫景行已下遷外國據目歷和二年景
行遷主助尤已下拜諸司者或逐有復本官者事見例也

〔職原抄〕諸國略中

納言以上貶謫之時任諸國權守也仍常儀參議兼國任納言之日即止之

〔職原抄〕太宰府 權帥

納言以上若前任之中古以來例於正帥者擬親王官承府務人任權也或又任正依時宜歟爲大臣之

人左遷之時任權帥然而不可知府務也

〔政事要略二十二〕太政官符太宰府

左衛門少尉正六位上善友朝臣益友左右兵衛各一人

右件人爲領送權帥從二位菅原朝臣道發遣如件府宜承知之但任中難俸料并暨從及不預釐務

依前員外帥正三位藤原朝臣吉野例行之又山城攝津等國充給食馬路次國又宜准此

昌泰四年正月廿七日

〔蜻蛉日記中上〕廿五日六日安和二の程に西の宮の左のおと高明流され給ふ見奉らんと

古事類苑

法律部七

上編

左遷

左遷ノ義ハ、正字通ニ、謫官曰左遷、唐謂去朝廷爲州縣曰左遷ト云ヘルガ如ク、内官ヨリ外官ニ貶謫セラル、ヲ云フ、因テ或ハ其人ヲ流人ト云ヒ、其所ヲ配所ト云ヘリ、孝徳天皇ノ大化五年ニ、蘇我日向ヲ太宰帥ニ任ジタリシヲ、時人稱シテ隱流ニ遇ヘリト爲ルモ、左遷ノ類ナリ、次ニ太宰權帥ニ貶セラレタルハ、右大臣藤原豐成ニテ、即チ孝謙天皇ノ天平寶字元年ノ事ナリ、然レドモ竟ニ任ニ赴カズ、光仁天皇ノ天應元年太宰帥藤原濱成ヲ降シテ員外帥ト爲シ、公麻ヲ減ジ、釐務ニ預ルコトヲ禁ゼリ、其後仁明天皇ノ承和九年ニ中納言藤原吉野ヲ貶シテ員外帥トシ、醍醐天皇ノ延喜元年ニ右大臣菅原道眞ヲ以テ權帥ト爲シ、ガ如キ並ニ同ジ、皆府務ヲ知ルコトヲ得ザルナリ、又國司ニ貶セラレタルハ、孝謙天皇ノ天平勝寶二年吉備眞備ガ筑前守タルノ類ニテ、光仁天皇ノ寶龜六年兵部大輔兼美作守大津大浦ヲ日向守トシ、尋テ見任ヲ解キテ、其國ニ留メ、嵯峨天皇ノ弘仁元年ニ、藤原仲成ノ亂ニ因リテ、諸國ノ權官ニ貶セラレタル者多ク、淳和天皇ノ天長元年ニ至リ、入京ヲ聽サル、時ニ、其人々ヲ指シテ權任ノ流人ト云ヘリ、亦流刑ノ類ナルヲ知ルベシ、

又量移ト云フコトアリ、量徒トモ云フ、其罪ヲ降シテ遠國ヨリ近國ヘ移スヲ云フ、

〔伊呂波字類抄左〕左遷シ即

名稱

古事類苑

法律部七

上編

左遷

名稱
左遷方法
發遣
在路
到遷謫所
貶爲太宰帥
貶爲國司
量移
召還

三四一
三四二
同
三四七
三四八
三五一
三五九
三六二
三六三

サセ給テ、御怠狀ヲ遊テ彼等ニタヅ、恐ヲ成テ給ハラザル時ハ、我能思召怠狀也、只給リ候ヘ、一ノ
カミノ怠狀ヲ、以下臣下取傳フル事、家ノ面目ニアラズヤト被仰ケレバ、畏テ給ケルトカヤ、誠ニ
是非明察ニ、善惡無二ニ御坐ス故也、ヨモ是ヲ以テ成シ奉リ、禪定殿下モ大切ノ人ニ思召ケリ、

天曆十年十二月廿日

右衛門府生蜂田平時

〔朝野群載^{十一}〕請申大田國武九申久過狀進事

誤天任愚心^天強盜犯奉仕^{禮利}留^{世利}怠狀

右件犯任愚心^天奉仕^{禮利}因之公家勘給^{布仁}無所避申仍過狀進如件以解

寛仁三年七月 日

大田國武九申^{世利}

外國人意狀

〔本朝文粹^{十二}〕東丹國入朝使裴璆等解申進過狀事

謬奉^臣下使入朝上國怠狀

裴璆等背真向僞爭善從惡不救先主於樽俎之間猥蹈新主於兵戈之際況乎奉陪臣之小使素上國之恒規望振奮而面慙詠相鼠而股戰不忠不義向招罪過勘責之旨曾無避陳仍進過狀裴璆等誠惶誠恐謹言

返意狀

〔日本紀略^五〕安和二年三月二日己卯式部大輔大江重光朝臣權大輔文時少輔雅文等怠狀是去年十二月廿九日郡司召不參之故也四日辛巳被免怠狀

〔春記〕長曆三年閏十二月廿七日癸丑諸衛官人意狀^{竊盜入二女}令申關白^{藤原賴通}早奏聞者即奏聞仰

云歲已暮戒將來可免給之由可仰關白又申關白命云早可返給者即返奉左衛門督已畢

〔類聚符宣抄^四〕大納言正三位源朝臣高明宣奉勅山城介藤原朝臣季方依關去年荷前使召勘之日

進過狀先了然則返給彼彼過狀當年位祿官符不得捺印者

天曆十年七月七日

大外記安倍衆與^奉

雜載

〔保元物語〕新院御謀叛思召立事

宇治左大臣賴長ト申ハ知足院禪閣殿下忠實公ノ三男ニテ御坐マス○中禁中陣頭ニテ公事ヲ行セ給フ時外記官吏等諫サセ給フニアヤマタズ次第ヲ辨申セバ我僻事ト思召時ハ忽ニ折レ

右今月廿六日宣旨稱正二位權大納言兼民部卿皇后宮大夫源朝臣經信宣奉勅檢非違使左衛門權少尉平兼倫右衛門少志中原範政勘問囚人之間狼致爭論宜令進過狀者謹所請如件抑件日兼倫以赦前之犯人可禁獄所之由所仰下之也而範政成赦前犯之者尙有赦後之疑者先散禁探實之後可禁獄由披陳之間兼倫所陳每事違法因茲解示法家之理還放非常之詞返答狀屢及天聽今勘發之處罪責難通仍進過狀謹解、

應德二年二月廿七日

正六位上行右衛門少志中原朝臣範政

宣旨云悉陳也理不似過狀之趣宜令書改進上之、

〔本朝世紀〕康和五年十二月八日癸丑是日右京大夫定實朝臣獻過狀奉幣廻文依書奉字事也、

〔日本紀略一〕延喜六年九月廿日鈴鹿山群盜十六人令進過狀誅殺之、

犯人羣狀

〔西宮記〕臨時丁成勘文事附四名帳事役畢勘文事

勘申可着欽左右獄囚事

合十九人

強盜十二人

竊盜七人

左十人○此下恐有脫文

高田助茂

贓物

紅花染袈一條 鏡二口 合子八枚

右三人犯竊盜者也勘問其由承伏進過狀已畢、

以前今月廿二日可着欽左右獄囚勘申如件、

瀧口內舍人藤原長輔攝政隨身同良孝等射取之、卽有勅祿、禁偷兒於獄外記云、今夜諸陣直官不祇候輩、宜令進怠狀者、

〔左經記〕長元元年十一月廿九日己未、明法博士依知道賴職朝臣等相論、故政職朝臣遣財事、勘落繼嗣令文嫡子條、上達部定申失錯之由、以何罪科、誠其罪哉、抑去七月依改元有恩詔、可會赦歟否哉、如何、右府以下重定申云、略○中明法博士略繼嗣令文之旨、尤可謂失錯、可令進過狀、但會赦否之由不詳、文法之上達部暗難定申、先唯被責過狀博士等定有所申歟、其時可被尋定歟、略○中令明法博士可進過狀者、余奉之仰、大夫史貞行宿禰云々、

〔朝野群載十一〕過狀延財

正六位上行左衛門權少尉平朝臣兼倫解申進過狀事

勘問獄囚間與右衛門少志中原範政致爭論怠狀

右去正月廿六日 宜旨

大外記主稅助助教清原真人定俊

仰云、權大納言兼民部卿皇后宮大夫源朝臣經信宣奉勅、檢非違使左衛門少尉平兼倫、右衛門少志中原範政、勘問囚人間狠致爭論、宜令進怠狀者、今月十一日、依有盜犯嫌疑打訊獄囚二人之時、一人已以承伏所犯、一人只承赦前之犯、不伏赦後之犯、然則範政申云、件犯人可禁何所矣、兼倫答云、禁獄者也、可遣本禁歟者、範政申云、赦前犯人偏可原免也者、兼倫答云、非勘問赦前之犯、可勘問赦後之犯、也、仍僅經一問、未究拷訊之前、何可原免哉、然則貽其疑者也、如此執論之道、範政不顧上下之序、狠放罵詈之言、而可其進過狀之由、今被下宜旨矣、仍進過狀如件、謹解、

應德二年二月四日

正六位上行左衛門權少尉平朝臣兼倫

正六位上行右衛門少志中原朝臣範政解申進過狀事

誤任愚心與左衛門權少尉平兼倫致爭論怠狀

長保二年三月 日

東市佑口

〔日本紀略^十一條〕長保三年五月十三日甲申、外記慶滋爲政、可進怠狀之由、被仰下、去年五月十八日詔書、草昧二字之誤也。

〔日本紀略^{十一}條〕寬弘二年九月六日辛亥、藏人式部少丞藤原朝臣隆光奉勅召檢、非違使右衛門少志林重親於藏人所客座勘問、七日壬子、重親進怠狀、即解却其職、後優免復本位。

〔江家次第^{五七}見〕定賑給使事

寬弘九年五月十一日記行成、被定賑給使、左兵衛尉以道進怠狀者也、然而自藏人所方被責云云、仍差充使、被奏例如此云云、

〔本朝世紀〕長和二年四月廿九日庚寅、藏人辨景理來傳勅云、賀茂祭近衛府使忠經馬寮使保昌、東宮使道雅背宣旨過差、檢非違使不糺行事、可令問者、信經未進申文、早可令進者、五月四日甲午、參內候陣之間、藏人右中辨景理傳仰云、略○中祭使之申文未全、本○全一作進如何、若無所避、可令進過狀者、令奏再三催仰未申左右之由、外記爲長不候杖頭、仍不能重問、七日丁酉、晚頭景理朝臣來、略○中傳勅云、使下人等所申不可然、可令宜過狀、不注細修理所避申已口同、可令進過狀者、使官人申文、給景理朝臣、仰令進過狀之由了、廿五日乙卯、右中辨景理來傳左府消息云、祭使々怠狀可令催進也者、有穢之上、有憚之間、所不相逢、召遣外記爲長、口參來、仰過狀遲々由申云、東宮使怠狀一日進、而其狀非例、今二使怠狀、今日可進者、相加欲進之間、所遲進者、但東宮使怠狀、先可進之由仰之、即進其狀、非申文、非過狀、太奇恠、仍返給了、今日內令改直、可奉之由仰下了、申廻許爲長進使々怠狀之體、太異體、就中保昌怠狀如申文、然而以無所避申文、可爲怠狀之由、歟、依相府催不令改直、可遲引之故也、東宮使怠狀令改直了、即件三枚怠狀、送景理朝所了、有請取之報狀。

〔日本紀略^{十三}條〕寬仁元年正月廿三日癸亥、去夜竊盜入御所、而宿直瀧口二人、經南殿庭東走射之、

望事未決、大納言來入之見、法家勘申伊勢國司罪狀、便仰可令進四等官署之狀、又退罷下、宜勸行齋宮雜事、仰宜衆望朝臣、

〔日本紀略^五〕安和元年八月十八日己巳、昨日省試、不召齋光朝臣之由、被問文時朝臣、依無避由召過狀、

〔日本紀略^五〕安和二年四月二日己酉、藤原千晴配流隱岐國、僧達茂配流佐渡國、廿日丁卯、源連橘繁延、僧達茂等進意狀了、

〔日本紀略^五〕安和二年閏五月廿八日甲戌、左大臣^{○藤原師尹}仰外記云、今年式部省一分召有誤、可令奉其意狀、又大輔大江重光朝臣去任也、任中有過、選他官罪法家令勘申、

〔小右記〕天元五年六月二日壬戌、左府^{源信}被付奏諸儒意狀、

〔日本紀略^十〕長德二年十一月廿六日壬辰、左大臣^{藤原道長}以下奏、有官奏、其次被定文章生試誤事、式部大輔輔正卿所進經典釋文、與文章博士匡衡所進釋文、已有違背、輔正卿所進之文、摺改反音、仍可獻意狀之由、有勅定、十二月廿七日癸亥、左大臣被送匡衡意狀、^{文章生試判、以大輔藤原朝臣不取請申、取之意狀、}

〔本朝世紀〕長保元年三月廿六日己卯、早旦左大臣里第、召大外記滋野朝臣善言、被仰云、下野前司平朝臣維衡、散位同致賴等、於伊勢國成合戰、仍召上其身、下檢非違使廳訊問、維衡朝臣進過狀了、致賴朝臣遁避不進過狀者、使廳日記并維衡朝臣過狀文相副、下給外記、外記給之局參、召明法博士令宗允政、擬勘申各罪名、

〔朝野群載^六〕太政官、東市佑大江^某解申進過狀事、

誤不觸外記服藥意狀

右今月今日、大外記兼助教清原真人^某仰云、權大納言源朝臣^某宣奉勅、宜令進過狀者、被勘仰之旨、無所避申、仍進過狀如件、

事望請悔愧先過自今以後恪勤不怠緩盡奉仕行事夜宿直侍一事以上無漏闕精進奉仕謹以申聞、申聞無別筆○三字

寶龜二年潤三月九日

石川宮衣

大宅童子

勝廣前

金月足

村舉祖繼

壬生廣主

安宿廣成

大友路万呂

他田島万呂

小長谷嶋主

三島子公

沙彌慈緒○四字
別筆

〔日本紀略一〕延喜九年七月十一日下總守景行進過舊

〔貞信公記〕承平二年六月八日己未公忠朝臣來令見讚岐介淑茂臨時交易諸春米達期進納過狀仰云仰官與傍國司過狀取集可令法家勸申所當罪者

〔貞信公記〕承平八年○天慶元年十一月十一日甲寅民部卿來便仰衆望朝臣進過狀所當罪可令勸事又忠舒過限不向任國會赦不事十五日民部卿持來衆望忠舒等法家勸文即仰忠舒赴任可許事衆

應聽諸國官長任中一度入京事

右撰格所起請僞略○中今諸國長官爲申雜務請假入京就官申政官云非可奏玉階前之事何輒入京

責過狀從追却求之政途理不穩便伏望任中一聽入京令申擁政若留連京下久不歸者隨狀勘責中

貞觀十年六月廿八日

〔類聚三代格八〕太政官符

應科責出舉收納之日有犯吏等事

右得因轉國解僞略○中望請若此吏等責其過狀且停釐務具狀言上不更任使謹請官裁者右大臣宣

依請諸國准此

貞觀十二年八月廿八日

〔類聚三代格七〕太政官符

應停止任用之吏忒決郡司及書生國掌等事

右得豐後守從五位下藤原朝臣智泉解狀僞略○中望請任用之官不聽見決若有雜任致忒必可見決

者官長者判過狀而後行之略○中

元慶三年九月四日

〔禁秘御抄下〕召忒狀事

侍臣以下有忒時忒狀召之也免之時返給之

〔續修東大寺正倉院文書十九〕中室淨人過狀解文

中室淨人解申進過狀事附中納言殿使置始連小室万呂○小室訓卿有村主

右淨人之過甚深不能淨輕凡官者先致禮敬於公後及孝悌於親而今淨人在過違禮義以既乖公

款伏
伏辨

徵過狀

服罪輸誠ノ書ナリ、罪ハ輕重トナク、皆怠狀ヲ進メシメテ後ニ科斷スルコトニテ、或ハ一タ
ビ收メテ更ニ返シ、事モアリ、

〔令義解^十〕凡國斷罪應申覆者、謂申猶重也、下條云、盜殺及徒以上、附太政官量差使人、取強明解法律
者、分道巡覆見囚、謂徒以上囚、情盡未斷者也、下文云、徒、罪事盡未斷者、催斷即覆、覆訖錄申若國司枉
斷、使人推覆无罪、國司款伏、灼然謂款誠也、服罪輸誠之書、合免者、任使列放、仍錄狀申、其使人與國執
見有別者、各以狀申、若理狀已盡可斷決、而使人不斷、妄生節目、盤退者、國司以狀錄申官、附使人考、其
徒罪、國斷得伏辨、謂結斷已訖、及賊狀露驗者即役、不須待使、以外待使、其使人仍總按覆、覆訖同國見
者、仍附國配役、

〔類聚三代格^{十六}〕太政官符、

應以閑廢地賜顧人事

右得右京職解稱、略○中謹依符旨、課條驗戶、勤俾勞作、而人稀居少、不事耕營、徒過日月、稍成蕪澤、適或

他人加功營熟、其主吝妨貪此沃熟、因茲人倦競作、无心勤營、荒廢之由、事緣於此、今彈正巡檢之日、恒

加勤當、類責過狀、略○中

天長四年九月廿六日

〔類聚三代格^{十二}〕太政官符

應勘決坊令事

右得右京職解稱、略○中今依太政官去天長五年十二月十一日符、責過狀滿三度、則彈正移刑部令決、

略○中

天長九年十一月廿九日

〔類聚三代格^七〕太政官符

應大帳買調稅帳等使上日數少奪公廩兼不預考事

右得民部省解僑檢案內延曆九年十二月十日左大辨紀朝臣古佐美宣諸國稅帳大帳買調等使上日頃年之間民部漏落不爲充行自今以後宜依舊給之者而今奉使之輩多非其人或稱病避事或肆情徇私曾不參省徒煩雜掌業務關意從此而生望請勘公文間無故不上計其上日不滿三分之二即奪公廩兼不預考仍每年上日移送式部省審加貶降又所奪公廩令與稅帳申然則吏自公勤勘帳無怠謹請官裁者右大臣宣奉勅依請

大同五年三月廿八日

〔類聚三代格〕太政官符

應先勘當任公文次勘前司時帳并科責不勘四度公文府司及管内國島司事○中略

一稅帳大帳朝集帳條

右同前○參議從四位下守右大辨兼行侍從播磨守源朝臣希奏狀條○中略件等帳勘濟之事一准用度帳調帳等之例若有不

勘者抑留府國長官解由但不勘朝集公文者奪公廩四分之一

以前條事如右宜依件行之

寬平九年六月十九日

不給部錄

〔延喜式十二〕凡親王以下次侍從以上闕追催陣者不預元日節祿

〔延喜式十八〕凡諸節會五位已上預參之後不預謝座謝酒之禮及雖本列任意左右者莫給當日祿但

參議已上并當日有職掌者及羸老扶杖之輩不在此限

〔延喜式四十六〕凡行幸之日召集散所衛士令供奉若致闕怠每一日怠奪五斗糧

奪糧

附怠狀

古ニ款伏ト云ヒ伏辨ト云フハ即チ後ニ怠狀トモ過狀トモ云ヘル者ニテ令義解ニ謂ユル

經推彈則首從難辨如此之類品目繁多非張新制何爲懲革望請自今以後諸司三度以上不參臺
喚并不辨申勘事者並移二省以奪季祿

以前事條如件右大臣宣奉勅依奏

貞觀十八年七月廿三日

〔延喜式^{十一}太政官〕凡興福寺國忌并維摩會者藤原氏行事大夫點定氏中無障之輩卽付外記外記申大

臣令參事畢之後錄見參歷名奏聞若有不參者下式兵二省五位已上不預節會六位以下官人奪季
祿王氏參藥師寺最勝會亦同

〔延喜式^{十二}中務〕凡荷前使內舍人有關忌者奪一年季祿大舍人奪夏冬衣服

〔延喜式^{十三}式部〕凡元正之日若有不朝者五位以上莫預三節^{七十以上者}六位以下奪春夏祿^{六位以下者不在此限}

^{者不在}但宮內主殿典藥內膳造酒采女主水等省寮司莫責不參侍醫東宮學士亦同

凡正月十七日五月五日兩度節不參五位已上待兵部移無預新嘗會六位已下官人奪季祿

〔延喜式^{十四}式部〕凡參國忌五位已上待會事訖乃歸却若不然者同不參例其六位已下關職掌者奪季祿

布二端

〔類聚三代格^八〕太政官符

應禁調庸龜惡并便附在京司等事

右被右大臣宣稱奉勅諸國調庸專當歷名附大帳使依例申送而使人預知物龜惡規求遁去遂稱病
故便附在京司等調物濫惡從此而生卽法令雖有科條所在罕能遵奉今須如是之類及在京司并他
使等輒相代奉使者同奪公廩務令懲革

延曆廿一年八月廿七日

〔類聚三代格^七〕太政官符

〔續日本紀九〕神龜元年十月乙卯散位從五位下息長真人臣足任出雲按察使時賄貨狼藉惡其景迹奪位祿焉

〔三代實錄清和〕貞觀七年三月二日癸未制七道貢賦違期國司五位已上奪位祿六位已下折取公廩五分之一自今以後永爲恒例

〔類聚符宣抄四〕散位嶋田朝臣公望 下野守藤原朝臣繁正

權大納言兼春宮大夫右近衛大將藤原朝臣師尹宜奉勅件公望等爲去年十二月荷前使儲使闕怠其事進過狀訖宜免此意依式停當年位祿者

應和二年三月八日

大外記海正澄奉

〔令義解四〕凡應給祿之官若有負犯謂有犯應除免官當被推勅科斷未畢其祿停給待斷訖校定然後

給之前若應當免者依考課令當給之年祿不應當免者仍即給之其私罪下上公罪下中奪半年之祿

〔令義解四〕凡官人有犯私罪下中公罪下下並解見任略即依法合除免官當者略不在考校之

限並奪當年祿前當年者自春至冬即奪事發年祿不可追前年祿假如正月事發者不徵去年祿即停將來祿若秋祿既給後事發者春秋之祿重皆徵還之類也

〔三代實錄清和〕貞觀十二年十二月廿五日壬寅制略中內舍人闕荷前使者奪一年季祿大舍人奪夏

冬衣服

〔類聚三代格十二〕太政官符

一應諸司三度以上不參臺喚并不辨申勘事者停給季祿事

右同前正彈奏狀僞議案公式令云親王及五位以上有犯應須糾劾而未審實者並據狀勘問不須

推考委知事由事大者奏彈者然則奏聞之理必在推問之後非經糾劾何輒上奏而今或一司若公

罪若私罪或爲臺所記錄或爲人所告言因茲爲糾彈其由即召官人而空設巧詐不曾參到今將錄

罪狀以上奏則全乖令文亦欲對其身定罪名則終無其期又一司四等以上之官罪狀各異至于未

奉朝臣安世宣奉勅依請者彼時職司无怠路橋有全而依天長五年十二月十六日格停貶奪科行贖銅法其後職吏不勤諸人更緩遂使京條荒蕪既失花美橋梁破絕屢仍往還是因輕科疎網之所致也望請復舊移送貶奪考祿○中略

以前事條如件右大臣宣奉勅依奏

貞觀十八年七月廿三日

〔延喜式十一式太政官〕凡諸節會日乘輿未出之前諸司每事辦備宸儀御殿之後一々供奉若有致怠者奪祿降考

〔延喜式十八式〕凡諸節會日供奉諸司若有致怠者奪祿降考

〔類聚三代格五〕太政官符

奪位祿

應進會赦帳之後放解由事

右被大納言正三位兼行右近衛大將民部卿陸奥出羽按察使藤原朝臣良房宣僧奉勅如開會去年七月十四日八月廿七日兩度恩赦諸國未得解由之輩或口新司○或以下四字類司本後紀作式部司偏緣洪恩只放解由至于造會赦帳令加其名寄事彼此拒以不署此則乖詔書所指復似隱舊疵須彼帳進官之後乃與解由但後司所勘事有不平准不與解由狀加所執亦前被放許之類奸遁不署錄狀言上其未署之間五位已上不論京官外任及散位總奪位祿六位以下同沒季祿公廨無職之人不預絛用

承和十年七月九日

〔延喜式六式〕凡院裏官舍木工寮修理之日院司臨監若不滿十年令致破損者司官五位已上奪位祿六位已下奪季祿

〔延喜式十八式〕凡闕衙前使之侍從及次侍從者侍中務移無預正月七日節非侍從者奪位祿亦無預同節

當路於人非難，意而不掃過在當處，理須重責其人，職司爲政京國和兼所掌多事，周辦難堪，而以道橋之一失，奪一年之考，祿賞罰之理良近偏頗，宜依請贖銅。

一應皇親准主典奪祿事

右同前解僑被太政官去弘仁十年十一月五日符僑當路不掃清穿垣引水，壅水侵途等，諸司諸家并內外主典已上，移式部兵部貶考奪祿四位五位錄名奏聞，无品親王家及所々院家以其別當官准諸家司亦移省貶奪，其雜色番上已下，不論蔭贖決笞五十者，今案符貫皇親此雜色之內，須不論蔭贖決笞，謹案律條皇親議論人也，論蔭同三位，誠雖被下符，驗理不便，望請准主典移省奪祿者，其前符疎而不勞皇親，今如所請當奏請之，但皇親蕃多事，惟輕碎，宜依請。

以前大納言正三位兼行右近衛大將良峯朝臣安世宣奉勅，宜依件行之。

天長五年十二月十六日

〔三代實錄清和〕貞觀十二年十二月廿七日甲辰制，彈正臺復，天長九年十一月二十九日格，每月巡檢京中并勘記諸司諸院諸家及內外主典已上犯狀，直移式部兵部二省貶奪考祿。

〔類聚三代格十二〕太政官符

一應停京職官人贖銅復舊貶奪考祿事

右彈正臺奏狀僑檢案內，太政官去天長四年九月廿日符僑臺解僑弘仁十年十一月五日格僑左右京職解僑太政官去弘仁六年二月九日下兩職符僑右大臣宣奉勅，如聞頃者京中諸家或穿垣引水，或壅水侵途，宜仰所由成俾修營，不責引流水於家內，准禁露汙穢於牆外者，今案符貫有壅侵之禁，无掃清之誠，因之有勢之家，都无掃清，如此之類，諸家司并內外主典已上，移式部貶考奪祿者，大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣奉勅，依請者，而起請之後，曾無遵行，量其意況，實是同罪，望請同亦移省貶考奪祿者，正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良

開門

〔古今著聞集〕政道忠臣昔は人の装束もなへ／＼としてぞ有ける。されば齋院の大納言の消息に、先代の時節會袍借獻など書れたんなるは、節會の袍とて、ほの／＼とある物の人にかすなどが有けるとぞ。後朱雀院の御時、旬に參たりける上達部を御覽じて、次日資房卿の藏人頭也けるを召て、昨日公卿の装束を御覽せしかば、以外に袖大に成にけり、かくては世のつゐなるべし。いかゞせんすると右大臣實資のもとへいひあはすべしとみことり有ければ、則申されければ、おとゞ申給けるは、みな公卿に此よしを承りて畏り申さば、さすがに右大臣御けしきかうぶりたると聞え、人もなをり侍などとはからひ申されければ、そのさために披露有て、右府閉門して畏のよしをせられければ、人みな聞おそれて、装束の寸法すべられけり。

〔百練抄後七〕後白河保元三年四月廿日、賀茂祭、博陸○藤原忠通於町棧敷見物、宰相中將信賴欲通彼前之間、

雜人闘亂、打破中將車物見、廿一日、依昨日闘亂、執柄家司少納言信範解官、和泉守邦綱除籍、分賜

左馬寮、隨身七人賜、廷尉、博陸閉門、

〔令義解〕凡圖給職田位田人○註若官位之内、有解免者、從所解免、追謂解、解官也、免、免官也、假有正三位、位田、冊町、犯免官者、三載

給、降、先位二等、就正四位上、即依正四位、給、廿四町之類也、若解官者、追、亦如之也、其除名者、依口分例、若有賜田者、亦追謂此、亦爲三、除名者、立文也

〔類聚三代格十二〕太政官符

一應停貶、奪職、吏考祿、依法贖銅、事

右得左京職解僑、太政官去天長四年九月廿一日符僑、彈正臺解僑、太政官去弘仁十年十一月四日符僑、職解僑、不掃清當路諸司諸家并内外主典已上、貶考奪祿四位五位、錄名奏聞者、而起諸之後、會無違行、准之法條、實是同罪、望請同亦移省、貶奪職、吏考祿者、依請者、今檢案内、京中總五百八十餘町、橋梁三百七十餘處、雖勤修造、道橋多數往還不絕、不能无損、年中巡檢十有二度、每度貶奪、徒有俸祿之名、曾无代耕之責、職吏之患、無甚於斯、望請停奪考祿、依法贖銅者、所請可優、何者、掃清

追職田位田

奪祿

又範國爲五位藏人、有奉行事、小野宮右府爲上卿被候陣、下申文之時、弼君顯定於南殿東妻被出于陰根、範國不堪、遂以笑、右府不被知、案內以咎及奏達、範國依此事恐懼、

〔源氏物語十二〕入道〇中は、君にかたらふやうきりつばの更衣の御はらの源氏のひかる君こそ、おほやけの御かしこまりにて、すまのうらに物し給なれ、

〔本朝世紀〕治元年七月十二日癸卯、内大臣〇藤原長元召外記、仰曰、參議藤原公行卿、左馬頭隆季、右中將忠賴、右兵衛佐公重、左兵衛權佐平家盛、可恐懼、不供奉去五日、行幸故也。〇中

左馬頭藤原隆季朝臣

左近權中將藤原忠賴

右兵衛佐藤原公重

左兵衛權佐平家盛

内大臣宣奉、勅、伴人等不參仕去五日、行幸、宜恐懼者、

康治元年七月十二日

大炊頭兼大外記助、敦中原朝臣師安奉

廿五日丙辰、被免右兵衛督公行恐懼、八月三日癸亥、左馬頭隆季、右中將忠賴、右兵衛佐公重、左兵衛佐家盛、被免恐懼、

〔本朝世紀〕久安三年正月二日丙寅、皇太后宮權亮藤爲通朝臣、右近權中將源師仲朝臣、被免恐懼、伴兩人去冬於一院〇鳥御所有聞諍事、仍恐懼云々、

〔百練抄七〕仁平二年八月廿六日、檢非違使爲義、恐懼爲別當、公能依致無例〇例恐也、
〔後拾遺和歌集三〕おほやけの御かしこまりにて、山寺に侍けるに、郭公をきゝてよめる、

一こゑもきゝがたかりし郭公ともになく身となりにける哉

律師長濟

蓋實

〔百練抄近七〕仁平元年八月廿四日付使廳使於伊通卿教長等、誼責信濃阿波雜掌、陵、磔齋院下部之

下手人、

蓋居

〔江談抄二〕四條中納言嘲弼君顯定事

又四條中納言定、爲藏人頭之時、嘲弼君顯定、詐吐虛誕、爲宇治殿通、仰云、某申、宇治殿聞食

被勸發、定類云、攝政關白ナドハ、人ノ嘲哂スル者ニモ非ズ、依此事半年許、執居云々、顯定宇治殿方人也云々、定類二條殿通、方人也、故有意緒歟、古今藏人頭无被處勸例通、事之例云々、

〔今昔物語二〕藤原資業作詩義忠難語第廿九

今昔藤原資業ト云博士有ケリ、鷹司殿ノ御屏風ノ色紙形ニ可被書キ詩ヲ、其道ニ達セル博士共

ニ仰セ給テ詩ヲ作ケルニ、彼ノ資業朝臣ノ詩數ニ入ニケリ、其比齊信ノ民部卿大納言ト云人有

リ、身ノ才有テ文章ニ達ルニ依テ、仰テ承テ此詩共ヲ撰ビ被定ケルニ、資業ガ詩數入タリケルヲ、

其時ニ藤原義忠ト云博士有テ、此レヲ嫌ハシク思ケレニヤ、宇治殿ノ口ニテ御坐ケルニ、義忠申

ケル様、此ノ資業朝臣ノ作レル詩ハ、極テ異様ノ詩共也、他聲ニシテ平聲ニ非ザル字共、有リ、難專

ヲ多シ、然ドモ此資業ガ當職ノ受領ナルニ依テ、大納言其ノ響應有テ被入タル也、其時ニ資業

ハ口口守ニテ有ケル也、民部卿此事ヲ傳ヘ聞テ、攀緣ヲ發シテ、此ノ詩共ヲ皆麗句微妙ニシテ、撰

ブ所ニ私无キ由ヲ被申ケレバ、宇治殿頗ル義忠ガ言ヲ不心得思食テ、義忠ヲ召テ、何ノ故有テ此

ル僻事ヲ申テ、事ヲ壞ラムト爲ルゾト勸發シ被仰ケル、義忠恐レテ成シテ、執リ居ニケリ、明年ノ

三月ニナム被免ケル、

蓋居

〔山槐記〕治承三年四月廿三日辛亥傳聞賀茂祭中宮使藏人大進基親破新制、令着口衣於雜色、仍恐

懼馬寮使爲保同破制、有院勘籠居、

〔江談抄二〕範圍恐懼事

蓋居

にけふのことゝもとはせ給はゞこの女ばうのきぬのかすにより、御。か。ん。だ。う。は。べ。ら。ん。す。ら
んど、おもひ給こそいどくるしうさふらへ、みやゝによきこと候へばうちゑませ給ていと
よしとおぼしめしたり、かやうのれいならぬこと候へば、まづおひたてさせ給に、いときやう
きやうにさふらふなり、おほみや^の新^子姉^姉一^條中^中ぐう^一條^新子^姉後^後は女ばうのなり、むつにす
ぐさせ給はねばいとよし、このおまへなんいどうたておはしますこそそつねに候めれなど
申おかせ給ひていでさせ給、女房たちゐすくみてたつこ、ちいどわびし、おのゝゝさるべき
には陣にゐてさはぎさらぬはつばねゝにみないきてものもおぼえでよりふしぬ、かくて
そのよもふけぬれば、又の日御堂より、關白どのとくまゐらせ給へどあれば、なにごとにかど
ていそぎまゐらせ給へば、せけん^の御もの^のがたりなりけり、つかさめしけふあすになりぬれ
ば、さやうのことゝもなるべし、かうていかにぞやきのふのみやの大饗いかゝありしとどひ
きこえさせ給へば、はべりしやう、まゝといちゝに申させ給へば、いとこゝろよううち
ゑませ給て、さてゝとどひきこえさせ給て、女ばうのなりなごどひかたらせ、ありしことゝ
もをきこえさせ給へば、いみじうはらだゝせ給て、あさましうめづらかなることゝもなりや、
きぬはなゝつやつをだにやすからぬことゝ、おもへば中ぐう大宮などにはみな申しゑらせ
て、いみじきをりふしにもたゝ六とさだめ申たるをあやまたせ給はぬに、この宮こそことや
ふりにおはしませずてゝゝさらにゝうけ給はらじとすぎにたることをのゝしらせ給
も、さすがにをかしとおぼさる、さるにてもおとゝはかうやはいますかるべき、おほやけの御
うしろみはいかなる人のするわざぞ、なでうさることをみて、たゞにある人かあるなど、いと
おどろゝしうむづがらせ給、いとわりなきかんだうなりとぞ申給ふ、かへすゝめづらか
なりし日のありさまで、東宮中宮大夫殿たち^{宗○藤原頼}源^實信^{など}まゐらせ給ても申させ給、

〔春記〕長久元年五月十二日丙寅、右府送給太宰府案、可令覽關白殿○藤原賴通者、入夜持參被殿令覽、命云殊無其難、内々經天覽早可下給也、早速令成官符可下遣者、又參内密々奏了退下、仰云行經朝臣經信勘事可免除之由、明日觸關白可免給者予○藤原實房、仰藏人式部丞基明參關白殿申此仰旨、可召遣件兩人之由也、予明日朝間聊所障不能早參之故也、入夜退出、于時降雨件兩人去月廿七日勘當、今日初被免除歟、

〔春記〕長久元年六月六日己丑、參内良久之有召參御前、仰云經季朝臣爲陪膳、昇御臺盤參進之間、聞朝于餉御膳候之由、即昇御臺盤退歸藏人資成同昇之、未聞之事也、共以不覺者也、早示觸關白可處勘當也者、予即參關白殿○藤原賴通、依御物忌以人令傳申此旨、被申云、事之旨太以違例也、早可被勘當也者、予又參内奏聞了後召件二人○藤原下恐勘當由了、

〔榮花物語二十四〕萬壽二年正月になりぬ○中略、枇杷殿○三條にはことし大饗せさせ給はんといそがせ給○中略、廿三日と定めさせ給て、われもくおどらじまけじといそぎの、しりたり○中略、さて關白殿○藤原賴通、内にいらせ給て御まへ○子に申させ給けふの事すべいと事

の外にけしからずせさせ給へり、この年比世の中いとかういみじうなりにてはべる、またひとせの御堂會の御かたんの女房のなりなどもなごぞ世にめづらかなることゝもにはべりしかど、それは夏なれば、ことかぎりありてすぢなかりけり、なでう人のきぬか、甘きたるやうさふらふ、さらにさらにいどけしからずおはします小野宮のおとゞ○藤原實資、中宮大夫○藤原實信など、いとはづかしきかந்தちめなり、すべてかゝることをなんきゝみざりつるごぞ申されつる、それはさるものにて、みめのおどろくしうきらゝかなることば、また世にめづらかに候つるわざかなど、かへすくおなじことをせさせ給ほどの御けはひ、げちかうあひぎやうづきはづかしうおはします、けふののかみともおばえさせ給はすなん、いま御だう○藤原長

諸衛之人不了之時、藏人召仰本省令勸誠之、諸司官人依過意居客座事、二分以表之

〔源氏物語十〕御はらからのみこたちむつまじうきこえ給し、かんだちめなどはじめつかた

は、どぶらひきこえ給などありき、哀なる文をつくりかはし、それにつけても、世中にのみめでられ給へば、きさいのみやきこしめして、いみじくの給ひけり、おはやけのかうじなる人は、心にまかせて、この世のあちはひをだに、ゑることかたうこそあなれ、

〔日本紀略六〕天延元年九月九日、重陽宴、天皇出御南殿、早出公卿等處勸事、

〔日本紀略十四〕長元四年三月十四日辛酉、式部卿敦平親王停釐務、源良國者、太宰大監大藏種村男也、先年射殺大隅守菅野重忠犯人也、忽改姓名謀計也、前太宰大貳惟憲卿坐此事處勸事、

〔類聚三代格一〕太政官符

應禁制春日神山之内狩獵伐木事

右被中納言從三位兼行左兵衛督陸奥出羽按察使藤原朝臣良房宣稱、中今聞狩獵之輩、觸穢齊場、採樵之人、伐損樹木、中若不遵制旨、猶有違犯者、量狀勸當、不得容隱、

承和八年三月一日

〔延喜式十一〕凡遣賑給使奏國解訖、即仰式部二日之内進擬使文、同日官修符請印、訖五日內使者發去、若致闕意者、尋情勸當、臨時緩急之使亦同、

〔延喜式十一〕凡諸國稅帳朝集等使、向京在路事故延緩過期者、非有當國驗、即依法科處、其所輸贖物、收刑部省、但貢調使者、不得追附在京諸使、若有違越、勸當如法、

〔小右記〕長和二年正月廿五日丁巳、去夜右宰相中將兼隆、俄被叙正三位、奇恠之又奇恠也、月來被勸當之者也、勸當者三人、今年蒙殊賞、所謂宰相中將、左中弁、經通、春宮、權亮、通雅、

〔法成寺攝政記〕寛弘三年十一月十五日甲寅、六位等依美服有勸當、

みて遣しける、

藤原定長朝臣

あしたづの霞をわけてかへるなりまよひし雲路けふやはるらん

此道の御あはれびむかしの聖代にもことならずとなん、時の人申侍けり、○又見古
今著聞集

〔中右記〕元永二年六月六日、藤大納言大夫、宗除院殿上籍、是依辭若宮七瀬御使也、

〔貞信公記〕天慶元年十二月十八日、中使信明來云、去十日、夜、殿上侍臣之中、五位以上一人不候事可

勤者、當番無故障、不參入、准扶好古等、可勤責之狀奏聞、

〔殿曆〕長治二年正月一日庚午、酉刻參、及乘燭入、自右衛門陣、於弓場、殿着靴、此間頭弁來仰云、夜前追

繼上卿不參、仍加催、而各申故障、不參、件上達部可有勤責也、余○藤原忠實申云、大納言經實、分配國信、納中

前同右衛門督雅俊、備蒙不參、右大弁同之、仍各勤責了、

〔侍中群要七〕勤人事

所衆瀧口事

件輩不勤公役之時、令止上日、或先勞三日、可隨事狀、

小舍人仕人等事

小舍人等有可誠之事者、即令恐申恒例也、至于下陣者、近代之事也、仕人者、令押籠所之水棚下、或竿

其頭、○中略

客座事

所有客座、諸司之人、若依懈怠公事、被召勤之時、令居客座、但三分以上、先奏事由之後居之、深誠者、板

上沃水居之、凡勸勤之輩、隨其事跡、件座不論品秩、无謂官位、又有被召問之人者、藏人着所座問之、召

人居客座、

諸衛人事

勤事

勤責

〔平家物語〕殿上のやみうちの事

五節はてにしかば、院中の公卿殿上人一同にうつたへ申されけるは、中たゞもりのあそん、あるひは年ごろのらうまうとがうして、ほういのつはものを殿上の小庭にめしをき、あるひはこしの刀をよこたへさいて、せちゑのざにつらなる雨條き、たい、いまだきかざるらうせきなり、事すでにてうゝせり、ざいくわもつとものがれがたし、はやく殿上の御ふだをけづつて、けつくはんちやうにんおこなはるべきかと、諸卿一ごうにうつたへ申されければ、下

〔兵範記〕仁安元年十一月廿五日乙丑、五節之間、不出仕之殿上人被尋問子細其中六人除籍云々、

中務權少輔 長重

右近少將伊保

中宮權大進光長

前兵衛佐通成

侍從俊定

少納言定宗

〔玉海〕嘉應二年七月廿二日庚子、今日於院中中務大輔經家與周防守信章有口論事及非常信章取經家之烏帽云々、兩人共除籍、

〔玉海〕文治元年十一月廿五日甲辰、傳聞御前試夜、少將雅行與侍從定家有鬭諍事、雅行嘲哂定家之間、頗及濫吹、仍定家不堪忿怒、以脂燭打雅行丁、或云云打依此事定家除籍了云々、

〔千載和歌集十七〕

今上鳥羽御時、

五節の程、侍從定家あやまちあるさまに聞召す事有りて、殿

上のぞかれて侍ける、其年も暮にける又の年の彌生の朔日比、院白河におほんけしき給ふべきよし、左少辨定長がもとに申侍けるにそへて侍ける、

入道皇太后宮大夫俊成

あしたづの雲路まごひし年くれて霞をさへやへだてはつべき

此よしを奏し申侍ければ、いとかしこくあはれがらせおまし／＼て、今ははや還昇仰せくだすべきよし御氣色有りて、心晴るゝよしの返し仰せつかはせと仰出されければよ

はしたなければ、御どもにまゐるうちなり、

〔小右記〕長和四年九月十八日乙丑、昨日本工頭周賴、右衛門尉賴範、被還付簡先日被削簡者等也、

〔扶桑略記^{後二十八條}〕長元六年十二月、藏人式部少丞藤原經衡、於殿上前、無指由緒引落左近少將藤原

資房、仍經衡被削籍了、

〔日本紀略^{後十四條}〕長元九年正月二日辛巳、今夜藏人頭左近衛中將俊家朝臣隨身、毆損藏人頭左中

辨經輔朝臣隨身、先以弓打肩、次雜色以續松打之、三日壬午、除藏人頭俊家朝臣殿上籍、

〔春記〕長曆四年十一月十七日戊辰、今夜右少弁資仲云、御南殿之間、殿上人等於御殿西方遊興之程、

左衛門佐定長、與藏人典藥助信房聊有少論、定長執信房冠踏破之、遁去了、信房脫巾東西奔走、希有

事也云々、左少弁經成云、今夜瀧口并藏人所衆有闘亂事、其事昨夜瀧口衆藤式奉過藏人所前之間、

爲彼衆等被嘲哂云々、依其事今朝於北陣式奉相遇所衆恒定、^{一稿}即打落恒定之冠了、又依其報今

夜瀧口衆等爲成着到向藏人所此間恒定執瀧口衆資高之烏帽子云々、然間狼藉殊甚云々、以此旨

申關白、^{○藤原賴通}命云、能披問子細、明旦可令申者、殿上藏人所瀧口陣有事、太非常事等也、觸事無益代

也、十八日己巳、早旦仰云、信房昨夜有事云々、不聞儘由、^{○藤原資房}申此旨、仰云、太非常事也、去夜

大略含經成了、可仰關白之由也、者午時許經成爲關白使參入、申信房并瀧口所衆等事、仰云、^{予傳}事

之旨共以非常也、只可隨關白定申之由、可仰者予仰了、經成又參了、即歸參奏云、禁中之濫行不可用、

刀劍、只以口論所爲事、何況於執冠事哉、就中出御南殿之間、尤非常也、勘當猶輕、三人共可被除籍歟、

者予奏之、仰云、早可令除籍者、藏人所衆皆原恒定瀧口衆藤原式奉、可除籍之由、仰經成了、定長以藏

人資成令削除了、此罰頗重、但爲被誡將來也、爲善々々、

〔扶桑略記^{後二十九條}〕永承七年三月十八日、戊戌、刺藏人玄蕃助藤原隆成、引率數多從類、於和德門前傷損

藏人右衛門少尉藤原定俊、翌日除隆成籍、停任所職、被下召名宣旨、追捕下手人等、

停朝參

無風情不見天氣閉門之外無他、

〔令義解〕凡犯罪應除免官當者不得釐事及朝會其被勅推雖非官當除免徒以上不得入內謂釐事

亦不可得依律有官犯罪無官事發流罪以下謂以論其三位以上非解官以上者謂雖死罪官故

是爲非官當徒以上其過失疑罪元非正刑不在制限也

〔日本書紀〕二十九四年四月辛巳勅小錦上當麻呂廣麻呂小錦下久奴臣麻呂二人勿使朝參

〔日本紀略〕十一寬弘六年二月廿日丙午前員外帥伊周非有指召不可參內者六月十三日丙申更

聽前太宰權帥伊周朝參○又見百練抄

〔延喜式〕十二凡酒番侍從及次侍從每年定十二人一日爲番番別四人若致闕意封門籍卅箇日上見直二人已其

封籍之間不預節會但中宮東宮賀禮不在制限

〔名目抄〕諸公事言設除籍○又見

〔禁秘御抄〕除籍

侍臣等有罪過之時及除籍頭藏人承仰仰藏人藏人削簡藏人非藏人同之殿上受領在彼簡同削之

應和伊陟依狂病絕入有沙汰仰曰於于齊敏者只病故不仕伊陟病無便近召仕若復本性之時可聽

枉削其籍依不同之疑具注之凡雖下部彼病不能參內事也

〔百練抄〕四寬弘三年五月十日藏人式部丞定佐打損藏人左少辨廣業面定佐除籍

〔法成寺攝政記〕寬弘三年六月十三日癸未民部大輔爲任從去年三月不參內無殊病云々仍被除籍

本○又見二日

〔源氏物語〕十二月まちいでゝいでたまふ御ごもにたゞ五六人ばかりまも人もむつまじきか

ぎりして御馬にてぞおはする○中かのみそぎの日かりの御隨身にてつかうまつりし右近

のぞうの藏人うべきかうぶりも程すぎつるをつひにみふだけづられてつかさもとられて

除籍

封門籍

定にすこしもたがへずおこなひてうけとられけり、

〔長秋記〕長承二年七月廿六日己卯、右衛門督實藤原大炊御門家四門懸、廳下都付門引、義慢、責下

手人云々、事元去比、彼家門侍等出立、見辻祭之間、遇兩馬者、侍等加輕慢詞、其時四位少將公能來合

遞聞諍問、兩方有被疵者、謂件兩方播磨守家成朝臣侍云々、依此事家成以件侍付使廳了、又召金吾

侍於一人進了、又召殘輩、各逃去不知行方之間、蒙此責云々、抑金吾是當今德伯父、仙院同母弟也、

所侵非重過、強不可大責、歟、但家成事、道路以目、不可及沙汰歟、

〔徒然草下〕勅勸の所に叙かくる作法今はたえてゐれる人なし、主上の御儀、大方世の中のは

がしき時は、五條の天神に叙をかけらる、鞍馬にゆぎの明神といふも叙かけられたりける神

なり、看督長の負たる叙を、其家につけられぬれば、人出いらす、此事絶て後今の世には封をつ

くることになりけり、

〔本朝世紀〕仁平元年八月廿六日癸巳、今日大納言伊通卿并參議教長卿宅、檢非違使行向懸、叙木於

門上責申、陵辱齋宮參院召使之濫行下手人云々去四月比、少監物藤原仲盛執、行信、讀圖沙汰之間、

殿大夫行康、藤原被召使云々、付伊通卿、被責、仲盛、付教長卿、責召行康云々、

〔百練抄高八〕治承三年四月廿三日、藏人中宮大進基親蒙勅勸、是祭使之時、破制之故也、

〔平家物語七〕忠のりの都おちの事

俊成の卿略中其後世まづまつて千載集をせんせられけるに、たゞのりのありし有さまいひお

きしことの葉、今更思ひ出てあはれなりけり、件のまき物歌集の中に、さりぬべき歌いくらも

有けれ共、其身勸かんの人なれば名字をばあらはされず、故郷の花と云題にてよまれたりける

歌一まゆぞ、よみ人まらすと入られたる、

〔禁秘御抄下〕勸勸

〔中右記〕長治二年正月朔日、頭弁○源來示云、夜前追儼之間、公卿不參、雖被相催、稱所勞由不參輩、新

大納言、左衛門督○源源中納言右大弁○源不可作、列早可退出者、驚此仰、竊以退出、不見節會儀、

追儼本分配源中納言○源新宰相中將○源必可參勤之由、應之、口夜雖有其催、不參也、今勘發之旨、不可

避申○源從新殿上之昔及公卿之令、廿二箇年、一度未及勅勘、今日已有此事、就中重厄之歲也、

可恐可思、運之所然歟、從今夕閉門籠居、子族又不令出仕、

〔百練抄五〕保安元年七月廿一日、少將實衡與兵部大輔資信於殿上、關諍、實衡以扇打資信、資信取

御椅子、棹追實衡、實衡除籍、資信勅勘、

〔愚管抄四〕知足院殿○源是當時關白なるを、はたと勅勘ありて、十一月十三日○保安元年に内覽と

どめて閉門せられにけり、さて攝錄の臣をかへんとおぼしめしけるに、大方その人なし、花山院

左府家忠、京極殿○源の子にて、大納言大將にて、さもやとおぼしめして、顯隆に仰あはせけれ

ば、稻荷祭のさじきのことはと申たりけりなごきこゆ、家忠の子の忠宗中納言は、顯季卿が子の

宰相がむこなり、かやうのゆかりにて、その時顯季家保などあつよりで、さじきにてさかもりし

てさしかよはされたりなど人そしりけることなり、これは一定はあらねども、かくぞ申める、す

こしもさやうなる人のすべきことにては、この攝政關白はなきなり、さて内大臣にて法性寺殿

○源のおはしけるほかにいさ、かも又々さぞといふ人なかりければ、力およばで親は親、

子は子とこそはげすもいふめれば、執政せよと仰られければ、法性寺殿は此職をつぎ候ばかり

候は、忠通にゆるされ候て、一日父の勅勘を免せられ候て、門をひらかせ候て、代々の例、此職は

父のゆづりを得候て、うけとり候夜、やがて拜賀なごすることにて候を、たがへずし候は、や、職

に居候ばかりにては、父の勅勘え申免せず候はんも、不孝の身になり候は、佛神の御とがめも

や候べからんと申されたりければ、此申さる、旨、かへす、も法かるべしと感思食とて、その

責罪過

怠狀翻

罪過ヲ責ムルニ、勅勘朝參ヲ停メ、門籍ヲ封ジ、閉門、籠居怠狀等アリ、勅勘ヲ蒙リタル人ハ、門ヲ掩ヒテ屏居シ、檢非違使、駁ヲ其門上ニ懸ケ、并ニ人ノ其家ニ來往スルコトヲ禁ズ、後ニハ、駁ヲ懸ケズシテ、但門ヲ封ズルコト、爲レリ、而シテ朝參ヲ停ムト云ヒ、内ニ入ルコトヲ得ズト云ヒ、門籍名籍ヲ宮門ニ著シ、其門ニ出入、ヲ封ズト云フ、門籍コトヲ得、是ヲ門籍ト云フ、ト云フガ如キハ、勅勘ニ由ルモアレド、盡クハ云ヒ、誡責ト云ヒ、蟄居ト云ヒ、籠居ト云ヒ、恐懼ト云フガ如キハ、勅勘ニ由ルモアレド、盡クハ然ラザルナリ、其中ニテ勘事、勘當、恐懼ハ、平人間ニモ常ニ有リシナリ、

又除籍アリ、籍トハ日給簡ナリ、即チ清涼殿ニ置キテ、殿上人即チ昇殿ヲ聽サレタル人ノ名ヲ錄スル所ナリ、而ルニ罪アリテ昇殿ヲ停メラルハ、トキハ其名ヲ削ル、是ヲ除籍トモ、殿上ノ籍ヲ削ルトモ云ヒ、或ハ單ニ籍ヲ削ルトモ云フ、又院太上天皇ノ殿上ノ籍ヲ除カルハ、コトモアリ、

藏人、非藏人等ガ巡侍ニ預リ在官ノ次序ニ因リテ、或ハ餘官ト爲リテ、地下昇殿スルコトヲ得ザルヲ云フニ降ルトキハ、日給簡ノ名ヲ削ル、本朝文粹ニ、大江成基ガ非藏人ヨリ近江掾ニ爲リタルコトヲ歎ジテ、名字已削于仙籍之上トアリ、仙籍トハ日給簡ナリ、是ハ有罪ノ除籍トハ別ナリ、又田祿ヲ奪フコトアリ、罪ノ輕重ニ隨ヒテ季祿ヲ奪フアリ、位祿ヲ奪フアリ、節祿ヲ給セザルアリ、公廩ヲ奪フアリ、職田位田ヲ沒スルアリ、即チ近世ノ罰俸ノ如キ者ナリ、

〔名目抄〕諸公事言説テウワケ勅勘

〔百練抄〕

後冷泉

康平三年十二月十一日、宰相中將俊房被免、勅勘依前齋院

勅子

強奸事、此一兩年籠

居、

〔續日本後紀^{仁六}〕承和四年五月丁亥、贈正五位上伴宿禰益立本位、從四位下、益立實龜十一年爲征

夷持節副使、發京之日、敍從四位下、厥後遭讒奪爵、其男越後大掾野繼上書冤訴久矣、遂明得雪父恥、

〔續日本後紀^{仁十}〕承和八年閏九月乙卯、授无位小野朝臣篁正五位下、下詔曰、篁雖期奉國、猶悔失晨、

朕願惟舊、且愛文才、故降優賞、殊復本爵、

〔續日本後紀^{仁十八}〕嘉祥元年十二月己丑、刑部少輔和氣朝臣齊之、依犯大不敬、當絞刑、勅減一等、流伊

豆國、乙卯、大判事外、從五位下、讚岐朝臣永直坐和氣齊之事、配流土佐國、

〔文德實錄^五〕仁壽三年五月壬寅、復罪人和氣朝臣齊之、讚岐朝臣永直等爵、

〔日本紀略^{十一}〕寬弘二年九月六日辛亥、藏人式部少丞藤原朝臣隆光奉勅召、檢非違使右衛門少志

林重親於藏人所客座、勘問、七日壬子、重親進怠狀、卽解却其職、後優免復本位、

流

〔續日本紀^十〕_{聖武}天平十四年六月丁丑上毛野朝臣宿奈麻呂復本位外從五位下

〔續日本紀^十〕_{聖武}天平勝寶六年十一月甲申藥師寺僧行信與八幡神宮主神大神多麻呂等同意厭魅

下所司推勘罪合遠流於是遣中納言多治比真人廣足就藥師寺宣詔以行信配下野藥師寺丁亥

從四位下大神朝臣杜女外從五位下大神朝臣多麻呂並降名從本姓杜女配於日向國多麻呂於多

檼島

〔續日本紀^{二十}〕_{聖武}天平神護二年十月甲申授無位大神朝臣田麻呂外從五位下爲豐後員外掾田麻

呂者本是八幡大神宮禰宜大神朝臣毛理賣時授以五位任神宮司及毛理賣詐覺俱遷日向至是復

本位

〔續日本紀^{三十}〕_{聖武}延暦元年閏正月丁酉獲永上川繼於大和國葛上郡詔曰_中川繼者宜免其死處

之遠流不破內親王并川繼姉妹者移配淡路國

〔日本紀略_{聖武}〕延暦四年九月乙卯中納言兼式部卿近江按察使藤原種繼被賊襲射兩箭貫身丙

辰右兵衛督五百枝王大藏卿藤原雄依同坐此事五百枝王降死流伊豫國雄依及春宮亮紀白麿家

持息右京亮永主流隱岐東宮學士林寸_{○林下忍}稻麿流伊豆自餘隨罪所流

〔日本後紀^{十三}〕_{聖武}大同元年三月庚辰復五百枝王本位從四位上永上真人川繼藤原朝臣清岡從五位

下辛巳勅緣延暦四年事配流之輩先已放還今有所思不論存亡宜敘本位復大伴宿禰家持從三

位藤原朝臣小依從四位下大伴宿禰繼人紀朝臣白麻呂正五位上大伴宿禰真麻呂大伴宿禰永主

從五位下林宿禰稻麻呂外從五位下

〔日本後紀^{十七}〕_{聖武}大同四年三月丁未前上總介石川朝臣道成、大掾千葉國造大私部直善人並授本位

道成從五位下善人外從五位下在任之日賊汙浪藉並追位記矜有其老舊之勞故付復焉

中務權少輔源朝臣延俊如舊宣令還任、

藏人頭權右中辨平信範奉

藤中納言、仰大外記賴業真人、真人書注宣旨遣本家云々、

解官人非除目、臨時宣下還任、事之例多存由賴業注申近例、

康治二年正月廿四日、右近衛權少將成雅朝臣、依刃傷散位藤原賴輔公被仰解官事、

同三月廿五日、內大臣○藤原實能宣下、

從四位下源朝臣成雅

內大臣宣奉勅件人宣令還任、右近少將者、去仁平元年四月十七日、賀茂齋王御禊、藏人左衛門佐藤原忠親、雖蒙催不勤前驅、依別仰不催代宣十八日、入夜左大臣○藤原賴長召權少外記中原師尙仰云、藏人左衛門佐藤原忠親不勤御禊前驅、仍可解却見任者、師尙書宣旨下知兵部省、

左衛門佐從五位上藤原忠親

左大臣宣奉勅件人依爲巡役雖蒙催促、不勤御禊前驅、闕怠無止神事、所爲之旨豈可然哉、宣令解却見任者、

仁平元年四月十八日

權少外記中原師尙奉

職事宣下此定云々

同年九月十四日 宣旨

左衛門佐藤原朝臣忠親

右大臣宣奉勅件人今年四月十八日解却所帶職、宜如舊令還任者、

仁平元年九月十四日

大外記中原師尙奉

〔續日本紀十〕武〕天平元年二月戊寅、外從五位下下毛野朝臣宿奈麻呂等七人坐與長屋王交通並處

野朝臣氏永散位從七位下大石福麻呂等位記中務式部刑部等省丞錄從事、

〔日本紀略後十四條〕長元四年正月十七日乙丑今日以外記遣式部卿敦平親王家去五日叙位、良國王

叙四位、件人有殺害犯之上、已非王氏、令毀彼位記被問根元、

降官位

〔日本書紀卷二十五〕大化元年八月庚子拜東國等國司仍詔國司等曰、○中違法當降爵位、

〔日本書紀卷三十一〕七年四月辛巳詔內藏寮允大伴男人坐賊降位二階解見任官典鑑置始多久與冤野

大伴亦坐賊降位一階解見任官監物巨勢邑治雖物不入於己知情令盜之故降位二階解見任官然

置始多久有勤勞於壬申年役之故赦之但賊者依律徵納、

〔日本紀略村四七〕天德二年十月十日丁亥今日以左衛門權佐兼明法博士惟宗朝臣公方左貶大藏權

大輔依勸文失錯也、

〔百練抄五〕嘉保元年三月六日諸卿定申前帥伊房卿遣明範法師於契丹交易貨物之罪科、五月

廿五日伊房卿解却降位一等緣坐者多隨法家勘狀所被行也、以前度々有依議

〔中右記〕寬治八年元嘉保五月廿五日、前帥權中納言伊房卿已依契丹國事減一階正二被止中納言

職又依同事前對馬守敦輔追位記云々、廿八日戊辰後聞今朝有政是伊房卿并藤原敦輔弟通之、

各十斤贖銅官符請印等事者、

復官位

〔續日本紀卷二十一〕天平寶字元年七月戊午勅曰、右大臣豐成者事君不忠爲臣不義、○中宜停右大臣任、

左降太宰員外帥、

〔續日本紀卷二十五〕天平寶字八年九月戊申以太宰員外帥正二位藤原朝臣豐成復爲右大臣、賜帶刀

四十人、

〔兵範記〕仁安二年六月十二日戊寅

仁安二年六月十二日 宣旨

〔延喜式十九〕毀罪人位記

內外有位犯官當以上者刑部處斷申官奏聞訖刑部移二省五位以上并申辨官太政官預定其日少納言辨外記史引二省入二省錄各執位記及位案進就版位依次就座並如常儀書毀字捺印訖以次

退出事見儀式并刑部式

〔延喜式十九〕凡諸國不進犯罪人位記移式部省拘留朝集使返抄

凡應毀罪人位記者省收位記申送辨官官以位記返付省更定日申官其日丞錄與中務式部兵部等省共就太政官三省錄各持位案宮刑部錄持位記宮共入列立庭中北面大臣命召稱唯就座辨官申可毀位記之狀訖即刑部錄以位記宮進付外記外記申云毀位記若干枚大臣命毀之稱唯毀畢錄進取位記宮復座訖即退出事見儀式

〔新儀式五〕貶退事

朝士若有罪者隨其輕重或追位或解官大臣奉勅宣下所司令追位記毀之其儀見儀式追位者率使受領吏無故不赴任類也近則延喜四年從四位下源悅不赴太宰大貳之任從四位上源俊天慶二年李推問使不下之類也

〔續日本紀二十一〕天平寶字二年十二月丙午毀從四位下矢代女王位記以被幸先帝武聖而改志也

〔續日本紀三十一〕實龜二年八月辛酉毀外從五位下丹比宿禰乙女位記初乙女誣告忍坂女王王縣犬

養姉女等厭魅乘輿至是姉女罪雪故毀乙女位記

〔續日本後紀十五〕承和十二年十一月乙巳毀越前守從四位下岑成王四位位記緣有犯罪也

〔續日本後紀十七〕承和十四年五月辛卯是日毀前左大辨從四位上正躬王左中辨從四位下伴宿禰成益右中辨從五位上藤原朝臣豐嗣左少辨從五位下藤原朝臣岳雄等四人位記各一階緣受推法隆寺僧善愷違法訴狀也

〔三代實錄四十九〕仁和二年十二月廿八日壬申是日公卿於外記候廳毀罪人石見守從五位下上毛

〔令義解〕^十凡官人因犯移配^{謂離職也}及別勅解見任若本罪不合除免及官當者位記各不在追^{謂若}限^{除免官當法也}

免官當者自依除免官當法也

〔日本紀略十條〕長保元年十二月廿七日丙子從五位上平維衡不追位記移鄉從五位下同致賴藤原

宗忠追位記配流隱岐佐渡國

毀位記

〔令義解〕凡犯罪應除免及官當者奏報之日^{謂猶云奏報之時也依公式令}元任授^{是即奏報之後未授之前}是即奏報之時也依公式令^{元任授}元任授^{其已授}

不可更報也除名者位記悉毀官當及免官免所居官者唯毀見當免及降至者位記降所不至者不

在追限^{謂免所居官者有正七位上犯徒一年半例減一等以一等敘即正七位上亦是為見免也}正七位上更

有歷任位記此犯免官者三載之後降先位二等敘即正七位上亦是為見免也正七位下是為降至者從

等更無降應毀者並送太政官毀式部案注毀字^{謂令元授司以太政官印印毀字上}

〔儀式〕毀位記儀

刑部省預收犯罪人位記申送辨官官以位記返付於省省更定日申官當日申尋常政訖少納言辨大

夫外記史率式部^{武官位記事兵部毀女刑部等省丞錄各一人共就版式部丞錄位記案案刑部}

一^{毀令納}外記史生持印盤立史前^{正當史前立不式部史生持祝宮立於丞後大臣喚少納言已下依次稱}

唯^{但史生等各就座初納言辨就座就外記史生退出式部史生以祝宮禮進置丞前而退出}于時辨大夫

申云其官姓名^我位記可毀事申給止申卽刑部錄以位記宮授之外記外記執而進大臣就于印盤邊

座大臣覽訖外記趨取位記宮就印盤所捧宮而立^{敬持書式部丞申云位記案毀字書久大臣宣書}

介丞稱唯書毀字訖外記唱史生名史生稱唯趨進立盤所式部錄持位案宮趨授於外記史生卽史生

申云毀字^{印捺須大臣宣捺世史生稱唯捺之捺印之間式部史生更捺印已了史生申云印捺}大

臣無答式部錄進而取位案宮復本座外記申云位記若干枚毀^留大臣宣毀^{外記稱唯毀訖刑部錄}

趨進取毀位記宮復本座外記史生執印盤而退出次六位已下自下退出次五位已上退出

起無殊事仍停理務被免身

〔百練抄後四一條〕長元四年三月十四日式部卿敦平親王被止釐務是去正月被位以良國王奉申四位而良國非王氏父先年殺害大隅國菅野重忠犯人也改姓名謀計之故也

〔百練抄六一條〕保延四年五月廿五日祭主公長卿依殺害人罪過沙汰之間停釐務

追位記

〔日本書紀二十九〕四年四月丁亥小錦下文努臣麻呂坐對捍詔使官位盡追

〔續日本紀聖武〕神龜五年四月辛卯勅曰如聞諸國郡司等部下有騎射相撲及臂力者輒給王公卿相之宅有詔搜索無人可進自今以後不得更然若有違者國司追奪位記仍解見任○下

〔續日本紀三十六〕天應元年九月辛巳初征東副使伴宿禰益立臨發授從四位下而益立至軍數倍征期逗留不進○中於是詔責益立之不進奪其從四位下

〔續日本後紀七〕承和五年十二月己亥是日勅曰小野篁內含綸旨出使外境而稱病故不遂國命准據律條可處絞刑宜降死罪一等處之遠流配流隱岐國辛亥追小野篁所帶正五位下之告身

〔北山抄四拾遺雜抄〕收罪人位記事

延喜十一年悅天慶後等例給官符於京職安和二年敏延喜例召京職官人仰之○追位記被非時給宣旨於檢非違使時人難云非例上卿不尋舊例所被行歟但檢儀式刑部式等刑部收之令付檢非違使糾彈之者便仰之非無所據乎近例仰京職復本位之時更以被位新作位記云々不必進位記之實

不追位記

〔日本紀略一〕延喜十三年正月廿八日前太宰大貳源朝臣○悅依不赴太宰府召位記不毀留官底

〔百練抄五〕永保三年五月二日前下野守師季追位記去年正月射殺官使被勘罪當流刑

〔令義解十〕凡犯流以下應除免官當未奏身死者位記不追即奏時不知身死奏後云先死者依奏定○除

免官當並依常法例也

內大臣宣奉勅、件人不參仕去五日、行幸、宜可停任者、

康治元年七月十二日

大炊頭兼大外記助教中原朝臣師安奉

八月三日癸亥、隆敕還任、

停釐務

〔令義解職〕凡犯罪應除免官當者、不得釐事及朝會、其被勅推、雖非官當除免、徒以上、不得入內朝謂釐事並事亦不可得、依律、有官犯罪、元官事發、流罪以下、謂以職論其三位以上、非解官以上者、謂雖犯罪、會赦是爲非官當、徒以上、其過失、雖元非正刑、不在制限也解官者、謂合入內仍應釐事朝會及入內供奉、

〔類聚三代格〕五 太政官符

應申預釐務未得解由人解任事

右得式部省解稱檢案內、被太政官去弘仁十三年八月廿八日符稱、得省解稱去天應二年二月五日、左大臣宣諸司官人兼帶國司、解國司任之後、百廿日內不進解由者、不得預釐務、又未得解由人、任諸司官有宣許釐務者、釐務之後、百廿日內不進解由、宜申送之者、自爾以來未得解由之輩、申官解文注云、應停釐務、○中

天長三年十月七日

〔法成寺攝政記〕寬弘三年六月十六日丙戌、左衛門尉藤原文方

○方字誤來云、申依召、○申依召、○右衛門督召參法住寺、參間爲帶刀正輔、被打申其愁、忽被追捕、爲免身難出、彼寺間騎馬者廿餘人追來射

打間、檢非違使等侍申然、依堪難一兩射答矢參、唯隨仰者、先文行賜隨身所、良久檢非違使等不○不有說、其後云々、文行言使官等圍云々、文行在家、仰遣先可參、由右衛門志重親來申、文行於法住寺與

正輔口論起事、依別當仰捕之處、射矢罷出、而間別當來、仍賜文行賜官人等別當示云、從前付繩可遣者、而命云、無便事、乘馬着衣冠可遣之、遣政所屋云々、十八日戊子、奏事由文行遷渡左弓場、道官人等令勘文行罪名、廿二日壬辰、奏文行罪名、其文云、詔使對捍、無入臣禮者云々、官位解却云々、而事

一軍團之設擬備急事令郡家焚燒曾不禁救自今以後有如此類當團軍親主帳悉解見任以前奉勅如件

寶龜四年八月廿九日

〔百練抄一四條〕寛弘元年十二月廿八日太宰權帥平惟仲勘罪名停任依字佐宮訴也二年四月入關〔日本紀略後一四條〕

〔日本紀略後一四條〕長元六年正月廿六日癸巳今日檢非違使等於廳勘問犯人之間刑人一人逃入宮城之間於陣捕取了二月十日丙午今日停任左衛門官人等依當直不參盜入禁中之過也

〔範國朝臣記〕長元九年十一月八日

請被停近江掾正六位上清原真人信任事

右其年給以信任申任件國掾而依有身病不給官符仍可被停任之狀所請如件

長元九年十一月八日

內大臣正二位兼行左近衛大將藤原朝臣○數

〔百練抄後四條〕寛德二年四月十九日諸卿定申太宰權帥重尹罪科即停任

〔百練抄白五河〕永保二年七月十五日左中辨匡房勘問明法博士定成有真等依遠江守基清罪名勘文

紕繆也十一月廿二日遠江守源基清停止依勘神戶田勘罪名也廿四日明法博士有真停止依

基清罪名之過失令勘罪名

○按ズルニ停止ハ停任ヲ謂ヘルモノ、如シ、因リテ此ニ載ス、

〔百練抄五河〕寛治五年四月十八日停任檢非違使別當俊實是依去三日陵礮檢非違使中原範政也

後日付使廳於俊實宅被召下手人

〔本朝世紀〕康治元年七月十二日癸卯內大臣○藤原賴長召外記仰曰○中左兵衛佐藤原隆教可停任者

左兵衛佐藤原朝臣隆教

參議右大辨平親宗

右中將播磨守源雅賢

右馬頭源資時

肥前守同康綱

伊豆守同光遠

兵庫頭藤章綱

越中守平親家

出雲守藤朝經

壹岐守平知親

能登守高階澄經

若狹守源政家

備中守源資定

左衛門尉平知康

大夫尉

此外衛府廿六人云々

〔源平盛衰記三十四〕法皇御歎并木曾縱逸附四十九人止官職事

廿八日○壽永二年十一月三條中納言朝方卿以下文官武官諸國ノ受領都合四十九人官職ヲ止ム、其内ニ

公卿五人トゾ聞エシ、僧ニハ權少僧都範玄、法勝寺執行安倍モ所帶ヲ被沒官キ、平家ハ四十二人

ヲ解官シタリシニ、木曾○義仲ハ四十九人ノ官職ヲ止ム、平家ノ惡行ニハ超過セリトゾツブヤキ

ケル

〔百練抄後十〕元暦元年九月九日乙未、今日掃部頭安倍季弘朝臣被下解官宣旨陰陽權助不詳之

〔古今和歌集後十八〕左近將監とけて侍ける時に、女のごふらひにおこせたりける、返りごとに、よみ

てつかはしける、

小野春風

あまひこのおとづれしとぞ今は思ふ我か人かと身をたどる世に

〔北山抄六〕停任事

隨管領下二省又御外記

〔類聚三代格十二〕太政官符○中略

停任

〔百練抄^八〕治承三年十一月十五日、今日關白前太政大臣、○藤原基房并權中納言師家解官、十七日、太政大臣師長已下、至于檢非違使信盛、卅九人解官、多是院中祇候之輩也、此中太相國○平清盛可追却關外之由被宣下、

〔源平盛衰記^{十二}〕大臣以下流罪事

治承三年十一月十五日入道○平清盛奉恨朝家由聞エシカ共、靜憲法印院宣ノ御使ニテ様々會釋申ケレバ、事ノ外ニクツロギ給タリ、上下大ニ悅テ、今ハサシモヤハト人々思被申ケルニ、四十二人ノ官職ヲ止メテ被追籠ソノ内參議皇太后宮權大夫兼右兵衛督藤原光能卿、大藏卿右京大夫兼伊豫守高階泰經朝臣、藏人右少辨兼中宮權大進藤原基親朝臣以上三官被止、按察使大納言資賢卿中納言師家卿○左近衛中將右近衛權少將兼讃岐權守資時朝臣、太皇太后宮權少進兼備中守藤原光憲朝臣已上被止、二官ル上卿ハ藤大納言實國、職事左少辨行隆、別當平大納言時忠トゾ聞エシ、

〔玉海〕壽永二年八月九日辛丑傳聞去六日有解官二百餘人云々、時忠卿不入其中、是被申可有還御之由之故也云々、朝務之庭弱以之可察可憐云々、

〔帝王編年記^{二十二}〕壽永二年十一月廿一日、以大納言師家卿任内大臣、即爲攝政、^{十二}當時内大臣實定、解官歟、但暫被借用云々、○又見皇紀、公抄、而係元年誤、

〔百練抄^九〕壽永二年十一月廿八日院○後白河近習人中納言朝方卿以下數十人解官、兼雅卿被止出仕、所領收公、

〔玉海〕壽永二年十一月廿九日己未、晚頭大夫史隆職注送解官等、

解官

中納言藤朝方

太宰大貳同實清

參議右京大夫同基家

大藏卿高階泰經

納言召外記被下知云々

〔兵範記〕仁安三年十一月廿一日戊寅殿上淵醉午刻參內東帶、有所存、不著、直衣也參入左衛門陣之間、伯耆守奉

院河後御敕書到來、可馳參由有仰、卽立歸乘車參院于時藤華王說、自仰云、去夕帳臺試攝政、藤原

被參之間、內大臣雅通左大將師長藤原可相伴之由兼日被定仰、附供奉行啓、而宮入御之後、不願彼尾

從各退出、因茲無尾從之人、及曉更被參帳臺、俄召具新大納言左衛門督藤原等之由、聞食及、遁有

限之公事、爲無極之罪過、早觸攝政可被解官所帶等者、奉仰之後、先大臣解官之條、先例不覺悟、故直

雖可奏達逆鱗之間、乍存心中、周章馳參殿下、申御旨、御返事云、人々事被仰下之趣、畏思給、但大臣解

官事被尋下官、下官引勸文簿申云、

安和二年三月、左大臣源高明、左貶爲太宰權帥、又以右大臣藤原爲左大臣、以大納言藤原在衛

爲右大臣、有宣命除目等、

長德二年四月、內大臣伊周、左貶爲太宰權帥、有宣命除目等、

大臣有事如此、無左右解官事、無所見、廢后廢太子間、有其例云々、

寬平八年九月、皇太后宮高子廢之、無宣命、

殿仰云、大納言并左右大將、不可及沙汰、於大臣者、早伺松容可奏聞者、遂電歸參院奏、子細仰云、於內

大臣一事者、豈可有後沙汰、至于兩人他事者、早可仰下者、又參殿下、申此旨、卽向左大臣藤原亭宣

下云、

右近衛大將源朝臣、大納言兼左近衛大將皇太后宮大夫藤原師長朝臣等、依五節帳臺試不參、各

可解却見任者、

既大事也、於仗座雖可宣下、上皇仰最重、早向一上家、速可仰下之由、且依殿下仰也、卽左府召大

外記賴業被仰下云々、○又見、百緯抄

久安五年十二月廿七日

大炊頭兼大外記主稅權助助敷加賀介中原朝臣師業

〔百練抄^七近衛〕

久安五年十二月廿二日、軒廊御卜之間、陰陽頭憲榮、與少外記三善成重、關諍成重、解官

〔台記〕久壽元年十一月廿六日乙亥、今日右衛門尉爲義^{位五}、解官、依其子爲朝鎮西、濫行事也、

〔保元物語〕新院御所各門々、堅事附軍評定事

爰ニ鎮西八郎爲朝ハ^略○中三年ガ内ニ九國ヲ皆攻落シテ、自ラ總追捕使ニ押成テ、惡行多カリケルニヤ、^略○中同壽○久二年四月三日、父爲義ヲ解官セラレテ、前檢非違使ニ被成ケリ、

〔百練抄^七〕應保二年五月八日、能登守重家朝臣、除籍解官、是去比自院可、攝召雅賴、邦綱等朝臣之

由有誑言、依出於彼人口也、

〔玉海〕仁安二年正月廿八日丁卯、此日朝覲行幸也、^略○中其間於便宜所、謁攝政、^略○藤原被命云、延後解

官、依不供奉行幸也、又少將泰通、恐懼^{爲可引御馬之次}、將而依^{引御馬之次}、退參也、凡近日朝務、不論罪科之輕重、大略解任、未曾

有事也云々、

〔兵範記〕仁安三年七月十八日丁丑、午後爲院^{白河後}、御使參攝政殿、^{○藤原基房}、仰云、去十五日、大僧正房人、

押入白川蓮華藏院、泉御所、彼御堂、執行辨宗法橋制止之間、僧正房人百餘人、兵衛尉知光爲其宗、亂

入御堂、凌磔領預承仕切兵士本島^二人、欲搦辨宗、辨宗希有遁其殃、逃脫了、事發不能左右、早被召下

手人、又可被解、却知光見任者、殿下御報云、件事全不承及、以外濫行候、無左右被仰知光解官事、又可

被召下手候者、歸參之次、參花山院之處、内府^{○藤原忠雅}、他行、仍宣下新中納言^{兼○藤原兼家}、了、參院申、此旨入

夜歸畢、

仰詞

右兵衛尉豐原知光、依蓮華藏院濫行、宜令解官

山發大衆云々事之體誠國之大盜也今被召誠爲世間大慶歟保隆子僧實舉同可追捕由被仰下了

〔台記〕康治二年正月十四日壬寅酉刻藏人左少弁源師能來入令侍示云成雅解官事先向左丞相

仁之處被向仁和寺了因所參也者忽着冠直衣相逢師能仰云去十二日於院陣鳥羽少將成雅朝臣

兼尾山城前司賴輔聞諺成雅拔劔切破賴輔面了所犯不輕之上諸大夫以上品秩者刀傷人古今未

有成雅早可被解官余○藤原承諾之師能語云法皇帝○爲政被加帝宣曰解官停任同事也然而以解

官爲重儘可仰下解官之由也又宣曰被解官之人自然止昇殿然而於此事者未曾有早々可削籍仍

先參內創籍了口乍兩官可解歟答曰攝政○藤原仰云先乍兩官可解之由宣下後重法皇帝可口一

定即遣召大外記師安朝臣仰之師安云普通事不書宣旨此事如何余云希有之事也書宣旨可懲後

代之亂臣賊士者師安即書宣旨下二省余云如古記○備忘者雖管領下二省是外記之外亦下二省歟

師安云是古禮也近代只外記下二省也二省者○武官者仰兵師能送使者云重法皇帝仰云乍兩官可

解官也

從四位下行右近衛權少將兼尾張守源朝臣成雅

內大臣○藤原宣奉勅件人去十二日於太上法皇○鳥御所邊手自刃傷散位藤原朝臣賴輔訪之往

代未曾有之犯也宜令解却見任兩官者

康治二年正月十四日

大炊頭兼大外記助教中原朝臣師安奉

〔本朝世紀〕久安五年十二月廿七日乙亥今日少外記三善成重被下解官宣旨依去廿二日聞亂事也

○中裏書云

少外記大江成重

正二位行權大納言兼侍從藤原朝臣成通宣奉勅件成重去廿二日於掖陣爲陰陽頭憲榮朝臣依致

非常事宜令解却見任者

源方理從五位下高階光子等可解却所帶官位僧圖能當絞罪有本罪可行之高階光子并從類可捕進之

〔朝野群載十一〕解官 宣旨

檢非違使左衛門少尉藤原以親

同 兼 任

府 生 秦 成 隆

右衛門少尉藤原成國

右大臣○藤原教通宣奉勅件等人々宣令解官者

永承四年九月五日

大外記兼周防介中原朝臣長國奉

件四人去四月廿八日闖入感神院追捕嫌疑者仍院內法師首愁申非例之由爲令辨申其旨乎雖推召稱病不參仍下勸罪名於法家所紕行

〔百練抄五〕寛治二年二月一日諸卿定申宇佐宮神人訴申檢按公則盜取黃金并大貳實政射危正

八幡宮神輿事三月廿日諸卿定申大貳實政卿射危正八幡宮之罪依赦前犯可會赦哉否五月

廿日遣推問使於太宰府實政之犯雖爲赦前有議所遣也八月廿五日諸卿定申實政卿罪名諸道

勘申大逆由當不十一月廿九日前大貳實政除名配流伊豆國并緣坐者同流罪依射危正八幡宮

神輿也僉議之間攝政直廬有光耀在陣之公卿一兩見鬼物之靈異十二月廿四日左少辨敦宗解

官實政犯真大逆之由諸卿定申之故也又大判事明法博士有實檢非違使義正除名實政罪名依執

謬案也

〔中右記〕嘉承元年九月十二日去九日大藏少輔保隆解官仰檢非違使追捕了給左衛門府弓場也是件保隆年來爲左大臣○源房家領遠江笠原庄司依不進年貢解却庄司了而爲奪取彼庄近日寄園并

解怠不守法式不參者多事煩尤甚侍從等稱病輩參待賢門之時遣官掌加實檢爰其病雖非顯著依人數已多殊成優容未必解任但爲將來或抑節祿非侍從等雖不預節會未及奪位祿爰積習成常彌致懈怠至于當日依人數不足召求近邊諸司五位已上之間剋限自移物煩彌甚國家大事豈合如此宜仰所司重張嚴制侍從等參待賢門之後令使者加實檢之時自先日有其聞之中彼病顯然者依實可免俄稱本病發動之由事涉虛誕者依式即從解却又令中務移式部不可預七日節至于非侍從解其科法總如式條曾不寬宥者依仰中務大錄大養夏宗了

天曆元年十二月十三日

大外記三統宿禰公忠 奉

從四位上景行王

從五位下有融王

從四位上源朝臣國潤

源朝臣寬信

從五位上小野朝臣道風

藤原朝臣尹甫

已上六人關去十六日荷前使仍有殿上仰解却次侍從職

正五位下上毛野朝臣常行依中宮御消息被免

從五位上藤原朝臣元並依身病顯然被免

從五位上源朝臣就依兄喪被免

天曆元年十二月廿日

〔百練抄四〕長德元年八月廿一日諸社臨時奉幣大內記以言不仰文戴宣命極以爲奇仍令切除之是定內大臣伊藤原所爲歟以言其抑付重須經拷而有所思食只不可爲內記之由有御氣色

〔日本紀略十〕長保元年九月廿四日癸卯今日依淡路國百姓愁申守讀岐扶範解任前司平朝臣文佐任其贊

〔日本紀略十一〕寬弘六年二月廿日丙午內大臣公藤原以下參仗座召善言仰云民部大輔從四位下

置始多久有勦勢於壬申年役之故赦之但賊者依律徵納

〔續日本紀聖武十四〕天平十三年五月丙子讀岐國介正六位上村國連子老越後國掾正七位下錦部連男

笠等與官長失禮不相和順仍解却見任

〔續日本紀孝謙二十〕天平寶字元年八月庚辰勅中納言多治比真人廣足年臨將老力弱就列不教諸姪悉爲賊徒如此之人何居宰輔宜解中納言以散位歸第焉

〔續日本紀桓武三十八〕延曆三年三月丙申先是伊豫國守吉備朝臣泉與同寮不協類被告訴朝廷遣使勸

問辭涉不敬不肯承伏是日下勅曰伊豫國守從四位下吉備朝臣泉政迹無聞犯狀有著稽之國典容

實恒科而父故右大臣備○往學益歸播風弘道途登端揆式翼皇猷然則伊父美志猶不可忘其子慙尤何無矜恕宜有泉辜令思後善但解見任以懲前惡

〔續日本紀桓武四十〕延曆八年九月戊午詔曰○中鎖守副將軍從五位下池田朝臣眞枚○中進退失度軍期毛平關息利今法乎檢中解官取冠久信略○中取冠罪波免賜臣官平乃解賜比○略

○按ズルニ冠ハ位階ヲ云フ

〔日本紀略清和〕貞觀十六年二月十日庚子少納言兼侍從橘朝臣茂生先是關荷前解侍從職是日有勦免罪復本

〔延喜式十二中移〕凡荷前使次侍從已上若有關息者移式部省不預正月七日節兼從解却

〔日本紀略三上〕天曆元年十二月廿日庚子此日關荷前使輩六人解次侍從職

〔類聚符宣抄四〕應依式科責關荷前使侍從次侍從散位等事

右中務式云荷前使次侍從已上若有關息者移式部省不預正月七日節兼從解却又式部式云關荷前使之侍從及次侍從者待中移移無預正月七日節非侍從者奪位祿亦無預同節者今被右大臣宣稱奉勦關使侍從次侍從從解却并不可預節會之由式條已存非侍從事同在彼式而近年之間人情

者解見任職事謂依律雜犯死罪未奏會赦者依令解見任職事如特奉鴻恩總蒙原放非常之斷人主尊之官位勳位並合如初不同較降之例即雜犯死罪別勅放免者亦不須解見任職事○
下略

〔令義解〕^十凡犯罪應除免官當者不得釐事及朝會其被勅推雖非官當除免徒以上不得入內○註其三位以上非解官以上者謂雜犯死罪會赦解任是爲解官其四仍聽釐事朝會及入內供奉

〔令義解田〕^三凡國給職田位田入○註若官位之內有解免者從所解免追三位位田冊町犯免官者三載之後降先位二等敘正四位上即依正四位其除名者依口分例若有賜田者亦追謂此亦爲除給廿四町之類也若解官者追亦如之也

〔延喜式〕^{十八}凡緣隱職事解却國司醫師已上名帳別卷收署

〔新儀式〕^五貶退事

朝士若有罪者隨其輕重或追位或解官大臣奉勅宣下所司令追位記毀之其儀見儀式追位者奉使受領吏無故不赴任類也近則延喜二年奉推問使不下之類也又六位已下依有犯并不上解却本官

補任替人又或有坐事左遷之者謂式部丞選兵部主計察官人選他官官并外國樣目等之類也又追位解官左遷等者懲肅之後經二

三年有復本位本官者延喜四年源悅追位同年復本官天慶二年源俊追位天慶四年復本官延喜四年復本官天慶四年復本官

〔禁秘御抄〕下解官
年同察類業恒遷主稅頭不復本官卒去勅大天景行已下遷外國樣目應和二年景行遷主殿助允已下拜諸司者或逐有復本官者上事見任例也

罪淺深被定有解官停任之由職事仰上卿輕罪時或被止兼官許所謂伊通爲陸口論之時皆止兼官不止參議

○按ズルニ解官ト停任トヲ分チテ犯罪ノ輕重ニ從ヒテ之ヲ科スルハ後世ノ制ニ出タルナリ

〔日本書紀〕^三持統七年四月辛巳詔內藏寮允大伴男人坐賊降位二階解見任官與鎗置始多久與苑野大伴亦坐賊降位一階解見任官暨物巨勢邑治雖物不入於己知情令盜之故降位二階解見任官然

十二等敘其官當及免官免所居官計降卑於此法者聽從高敘前假如勳十二等犯罪免官准法三載後應降先位二等敘而所降既盡故仍從高敘也

〔令義解公式〕凡任授官位者謂太政官任主典以上及中務授五所任授之司皆具錄官位姓名任授時

年月貫屬年紀造簿其任官據除貫屬年紀官人連署印記若有轉任身死及事故以理去任者即於簿

下朱書注之其有考解及犯罪除免者解免之司謂解司者式部免司者刑部但如准考解者式部錄

申官奏報事即遣免簿之類但五位以上式部不狀申官待符報乃遣解簿又犯罪除免者刑部斷定

得定其考第若應考解者亦太政官爲解司也亦錄解免之狀謂用司考太政官更僕任用及

務及式部也除注簿案若除解人得敘用者敘用之司錄報解處所司謂用司考太政官更僕任用及

除免之人限滿應敘者官錄報除簿即未敘之間在本貫身死者申刑部注除謂若未用之間在本貫身

式部式部錄報刑部之類也注除其餘色依職掌應造簿實人簿之類也者並准此

〔日本後紀二十四〕弘仁六年正月癸未刑部省言名例律云除名者六載之後聽敘免官者三載之後降

先位二等敘免所居官及官當者其年之後降先位一等敘公式令云犯罪除名未敘之間在本貫身死

者申送刑部注除者今據此令除免之輩未敘身死不可更敘而本貫主司未嘗言上收敘之官無知存

亡伏請告知職國爲例令言者許之

〔令義解〕凡長上官以理解者後任日聽通計前勢謂其分番亦准此也其考解及犯罪解者不用此例雖以理

解而無故停私過一年者亦除前勢

〔令義解〕凡初位以上謂一品以下也長上官遷代○註皆以六考爲限○中其考未滿而以理解

進限得中上其人以理去官者不可依三考敘一階必須通計後任持滿六考而及考在中下以下者不在

〔令義解〕凡犯流以下應除免官當未奏身死者位記不追即奏時不知身死奏後云先死者依奏定謂

免官當並依其常赦所不免者依常例謂犯流以下未奏身死罪當常赦所若雜犯死罪獄成會赦全原

特許同免官之例收敘免官者三載之後降先位二等敘稱載者理與六載義同亦止取三載之後入四

三位以上及勳位正從各爲一等，假有正四位上免官三載之後，降先位二等；敘，是爲三載之後，得從四位上免官三載之後，免所居官及官常者，非年之後

降先位一等敘吏部四時曰非稱年者以三百六十日從勅出解官日始計若本犯不至免所居官及官當而特免官者敘法同免所居

宣其免官者若有二宣各聽依所降位敘假有正六位上敘勳位降從三等敘此是各聽依所降位敘一犯免官者官位降至從九位即免官免

所居官及官當斷訖更犯餘有歷任位記者各依營免法一官有人犯免官及免所居官或免官當徒各用

官常餘有壓任之位記在者各依上法當免未斷兼有二官者先以高者爲位二官者先以高者爲位若有勤假有官犯通以降至者當之○降下唐律有所不二字

歷任六位及六等勳者先以勳位當若當
不藝亦以次高者當不限勳位官位
仍累降之所降雖多各不得過四等
又犯免官亦降二等故云

律仍累等之至卽離此重犯經三度以上雖多止以依此再降四等類免所居官及犯當斷居官者亦各計

所見降四等敘之故云
各不得過四等
各謂二官各降不在通計之限
官位爲一官所降不得過四等此二官見者各降四等爲注

不在通判之限。若官盡未敘，更犯流以下罪者，聽以贖論。謂後敘合得八位以上者，犯流以下罪者，並免並盡，未敘以前，以贖論。以時

其年未充必有赦法故免決配依贖論本犯不合贖者亦不合贖此自身官盡論以贖論即非用贖之色贖

法司
限各從後犯計年
犯免官及免所居官
依注若犯更犯免官
更三載後赦免所居
官當居官者亦非犯
計年
後

敘其犯徒流不合贖而真配流者卽依令六載徒則不在課役之限雖有歷任之位記不得預朝參之例

不在此限者，謂有敘限，故免其課役。依令初位以上者，被文則守後，明此亦不與。雖有遷任之官者，未敘

預假有一之位例犯當免所居官及歷以任官二位以下官未敘者亦准此

〔令義解〕凡犯除名限滿應絞者三位以上錄狀奏聞聽勅其正四位於從七位下絞從四位於正八

位上錢、正五位、於正八位下錢、從五位、於從八位上錢、六位、七位、並於大初位上錢、八位、初位、並於少初

位下敘若有出身位高此法者仍從高免官免所居官亦准此出身謂籍隸及秀才明經之類謂以父隸及秀才

明經出身。若犯除名者。應卽才優擢授者並不拘常例。

〔令義解五〕凡勳位犯除名限滿應敘者一等於九等敘二等於十等敘三等於十一等敘四等以下於

1870

外實監者五條徒杖一年仍令免名若虛反告人不可止科徒杖一年故反徒二年免所居官者謂告五位於服內事實相違徒杖一年仍令免名若虛反告人不可止科徒杖一年故反徒三年免所居官者謂告五位於服內別籍異財合杖一百仍令免名所居官若虛反判作不可止得杖一明故比徒一年及入出之類謂盜監獄所內物官人枉判作盜所監臨或賣盜監臨官人判作不可不密即舉官司出入除名及入出之類謂盜監獄所內物官人亦依杖二年之法其誣誣罪人者過致責教之所枉重自從重謂誣告及出入之限重於法戒爲保護及故縱等有免除者皆從比徒之例故云之禁也若所枉重自從重徒之法者自從反坐等重法比徒之不復仍若誣僧尼還俗者比徒一年僧尼與人鬪打醉亂及與人鬪打者各還俗假有人誣告其料之比徒之法若誣僧尼還俗者比徒一年僧尼與人鬪打醉亂及與人鬪打者各還俗假有人誣告其應苦使者十日比笞十有人誣告服用錦羅者不得服用達者各十日苦使者既虛反坐第十日苦使假官司出入者罪亦如之謂應格及苦使官司判決或不應誣俗及苦使官司判入各依此反坐徒杖之法故云亦如之失者各從本法

無蔭法謂文云後敘之日卽恐未至之間猶爲有其父祖因犯降敘者亦從後蔭敘
陸是准法資陸已絕卽須從無蔭法也
謂凡除名子父孫於度

凡官人因犯移配，須經監司及別勘解見任，若本罪不合除免，及官當者，並記各不在追列，謂若合除免官

限此條立不追位之法也

諸可無故不上者放還本貫事

還本貫有位爲外散位、無位還從本色、

〔律疏名例〕凡除名者，官位勳位悉除，課役從本色。謂出身以來，官位勳位悉除，無蔭人同庶人，有蔭人從本官，又依令，除名未敘，免役輸庸，不在輕

[illegible]

等於二十一等錢以下於二十二等錢者，未及者不爲三等貨而中賤名者，愈減同貨價值者，情在可貸，酌

法律部六
上編
解免官職

官當等雜制

士有實檢非違使義正除名實政罪名依執謬案也

〔令義解〕考四凡官人有犯私罪下中公罪下下並解見任謂依上條計至公私殿降至此者即解見任其

祿謂當年者自春至冬即春事發年祿不可追前年祿假如正月事發者不徵本犯不至除解而特除解

者不徵其考解者非年聽候謂考解之人不可追位而

凡官人犯罪○中若本犯免官以上謂以上除名也案律雜犯加役流子孫犯過失流並合除及贓賄入

己謂官人受所監臨物恩前獄成者謂別放及降並同恩例其監主犯奸盜而獄成會常赦者免所居官

餘論舉此一端仍以景迹論謂依上條居官過罪及貪濁有狀為下下即贓賄入下下是常當年祿即依此

文合舉議故云考貶考奪祿並依常法即非除免者不解官謂除者除名也免者免官也依上條私罪

者仍須解官故云非除免者不解官也

〔律疏名例〕凡以官當徒者罪輕不盡其官留官收贖官少不盡其罪餘罪收贖假有五位以上犯私罪

不盡其官留官收贖官少不盡其罪餘罪收贖假有五位以上犯私罪

私坐一年半徒以官當徒一年餘罪罪年收贖之類其犯除免者罪雖輕從例除免動位於監臨內及帶

三端本集合杖八十仍須准例除名或受財十五端一尺而不枉枉法本集徒一罪若重仍依當贖法假有

年中亦准例免官或在父母喪兄弟別請喪財合杖一百亦准例免所居官一罪若重仍依當贖法假有

下階當徒一年更無歷任位記及動位不合例減者以流比徒二年徒以正七位上階當徒一年又以從七位

常贖法仍依例免官此

〔令義解〕凡犯罪應除免官當者不得釐事及朝會其被勅推雖非官當除免徒以上不得入內謂釐事

是為非官當徒以上其過失疑罪元非正刑不在制限也其三位以上非解官以上者解任是為解官其

解官者不合入內仍聽釐事朝會及入內供奉

〔律疏名例〕凡除名者比徒三年免官者比徒二年免所居官者比徒一年初位不用此律除名免官免所

大納言位姓

右○中斷流罪以上及除名謂此所司不得專斷事必須議奏者假令職令犯罪應入議議者於略之類是但刑部及諸國斷流以上及除名官當者連寫案中太政官雖是流以上而非可議者故入奏事也而免官以下斷流有疑者職令合議且得入此條議答文云除名不帶免官輕重已累也即須入爲論奏畫聞訖留爲案御畫後注奏官位姓

〔令義解三〕凡除名未敘人免役檢庸願役身者聽之其應收庸者亦不在難條及點防之限謂除名之兵士及衛士也

〔日本書紀二十九〕

四年四月丁亥小錦下久努臣麻呂坐對捍詔使官位盡追

〔續日本紀三〕慶雲三年二月庚寅詔曰略又制七條事略中准律令於律雖有除名之人六載之後

聽敘之文令內未載除名之罪限滿以後應敘之式宜議作應敘之條其三

〔續日本紀考證〕荷田氏曰按選敘令凡犯除名限滿應敘者三位以上錄狀奏聞聽勅其正四位於

從七位下敘云々蓋養老所追增也

〔續日本紀三十二〕寶龜三年十月壬子中務大輔從五位上兼少納言信濃守菅生王坐軒小家內親王

除名內親王削屬籍

〔續日本紀三十八〕延曆四年八月庚寅中納言從三位大伴宿禰家持死略中死後二十餘日其屍未葬

大伴繼人竹良等殺種繼事發覺下獄案驗之事連家持等由是追除名其息永主等並處流焉

〔百練抄一〕正曆二年二月二日有國卿除名大膳屬秦有時殺害之間依爲造意

〔百練抄四〕長曆二年二月十九日諸卿定申法家勘申前帥實成罪名實成卿除名正二位中略法家勘

文云帥故殺死罪略下

〔百練抄五〕寬治二年十一月廿九日前大貳實政除名配流伊豆國并緣坐者同流罪依射危正八幡

宮神輿也十二月廿四日左少辨敦宗解官實政犯真大逆之由諸卿定申之故也又大判事明法博

而獄成者其雜犯死罪二十八字及在禁身死者謂犯法合死在禁身死者謂犯法合死別配流徒之類及背死逃亡者謂身犯死罪背死逃亡者即斷死除名依法奏畫不待身至其下文犯流徒歸成逃走亦准本會降者聽從當贖法在贖限其會依以下未奏畫達降有官者監官當有降者依贖法本注不得降贖者亦不位並合如初不同教降之例若如役流以下五流犯者會教及降者會教猶流常會教所不免雖會教降仍依前除名配流其不孝流反逆違緣坐流雖會教亦除名子孫犯者失流會教猶流常會教所不免雖會教降仍降同免官法自餘雜犯會教從原會降依常贖法凡斷罪之法應例減者先減後斷其五流先不合減者亦不減科後

〔律疏名例〕凡應議請減及八位勳十二等以上若官位勳位得減者之父母妻子犯流罪以下聽贖疏

若應以官當者自從官當法疏其加役流反逆緣坐流疏子孫犯過失流疏不孝流疏及會赦

猶流者疏各不得減贖除名配流如法疏男夫犯此五流俱役一年疏加役流者役三年疏家無兼丁者依

下條疏加杖免除名者免居作疏犯五流之人有官者即本罪不應流配而特配者雖無官亦免居作疏有本犯徒

役故云如法除名者免居作疏配流免居作疏即本罪不應流配而特配者雖無官亦免居作疏有本犯徒

情特配者雖無官之人亦免居作疏其於二等等以上尊長及外祖父母夫夫之父母犯過失殺傷應徒

若故毆人至瘕疾應流男夫犯盜謂徒以上及妻妾犯奸者亦不得減贖疏有官者各從除免官當法

〔令義解公式〕論奏式

太政官謹奏其事疏註

太政大臣位臣姓名

左大臣位臣姓名

右大臣位臣姓名

大納言位臣姓名等言云々疏謹以申聞謹奏

年月日
聞御書

免官

雖於服內而生者不坐縱除服以後始生但計胎是服兄弟別籍異財者免所居官兄弟別籍異財者免所居官兄弟別籍異財者免所居官

【律疏名例】凡犯奸罰野作妻妾及與和者盜略人受財而不枉法枉法者謂監臨外犯受財而不

違謂斷徒以上若犯流徒獄成逃走有犯流徒者謂非徒罪及盜失此外犯流徒者謂成逃走者謂減此仍

實即坐其免所居官之法依律比徒一年此條犯流徒逃走即獲免官之祖父父母父母犯死罪被囚禁而

作樂及婚娶者免官遺人與自下祖父父母父母犯死罪見被囚禁其子孫乃作樂者自作樂人作樂人作樂

以下此色自犯奸盜謂二官應免降所不至者謂留後降先位二等留降所不至者謂二官應免降所不至者

是若會降有餘罪者聽從官當減罪法者

【類聚國史八十四】延曆十四年閏七月丁未武藏國司介從五位下勳六等都努朝臣筑紫麻呂云々等

並免官以隱蔽官物也

【律疏名例】凡犯八虐故殺人反逆緣坐八虐謂謀反以下不義以上者故殺人謂不因鬪鬪而放殺者謀

放者皆准此其家人奴婢等罪案賊律殺一家非死罪三人注緣坐者謂緣謀反及殺害家人得罪者本應

緣坐者亦同謂緣坐之中有年八十及篤疾者免緣坐之罪身有官獄成者雖會赦猶除名獄成

謂賊狀露驗及者斷訖未奏者犯上八虐等罪獄成八虐之賊盜八虐之賊唐律作所犯之賊見本物

刑部覆斷訖雖未經奏亦為獄成此是就後除名及常赦斷不赦者例即監臨主守於所監守犯奸盜略人

若受財而枉法者亦除名奸謂犯其家人妻妾盜及枉法謂盜三端枉法一端者略人者不和為略十端以

稱略人即不限將為真贋若略家人亦合除名依國律贋家人是重明知亦合除名又略一等令略人

不除名已亦是共枉法者無併贋之文唯云官人受財復以所受之財分求餘官元受者併贋贋成會赦者

免所居官此是赦後仍免所居之會降者同免官注科既道級誠原原恐衍文罪不合悉原故降除名之

降後重斷仍未奏更達其難犯死罪即在禁身死若免死別配及背死逃亡者並除名皆謂本犯合死

赦降猶合免所居之官

下忍海山下氏則館夜聞外有數十人聲氏永意以爲賊欲被害介氏則卽同謀也由是以劔殿傷氏則妻下毛野屎子及從女大田部西子卽奪取屎子所著之大衣一領自被逃去刑部省斷云依律所犯當近流身帶從五位下請減一等徒三年以從五位下當徒二年餘徒一年以六位以下當徒一年仍卽解見任職事又氏永毆傷氏則妻之後逃走隱山中掾從七位下大野朝臣安雄率郡司百姓三十七人捉獲氏永打縛其身籠閉倉中刑部省斷云安雄應官當解任當徒一年○中卽日奏聞詔曰宜依省斷

〔政事要略三十〕勘申左大辨正四位下橘朝臣廣相犯罪事

右被上宣僞萬機巨細關白太政大臣之狀詔書下訖而上表固執開退之志爰令作勅答之人廣相引阿衡之文仍令道々人々勘申云阿衡无典職者而廣相猶申有典職不伏仍今年六月七日重下詔書僞詔本意萬政關白欲賴其輔導前詔下也而奉旨作勅答之人廣相引阿衡彼已乖勅本意宜勘申其罪者謹檢詐僞律云詐爲詔書及增減者遠流注云謂因詔勅成文而增減其事名例律云五位以上犯流罪以下減一等又條云犯私罪以官當徒者五位以上以一官當徒二年仍解見任職事又條云以官當徒者罪輕不盡其官留收贖又條云三流同爲一減者今引无典職阿衡已乖勅本意准檢律條不異增減詔書仍從遠流請減一等徒三年身帶正四位下以正四位下一階當徒二年餘一年合贖銅廿斤仍解見任職事仍勘申如件

仁和四年十月十五日

左衛門少志櫻井貞世

右大史兼明法博士凡春宗

勘解由次官兼大判事播磨大掾惟宗直宗

件勘文未進之前有恩詔被免仍不進之

〔律疏名例〕

凡祖父母父母老疾無侍委親之官

老謂八十以上疾謂廢疾並依令合侍今乃不侍委親之

委親之官依法有罪既將之任是與委親及先任父母喪生子及娶妾在父母未亡以前懷胎已任官親後老疾不請解任違科違令之罪

隆寺僧善愷違法訴狀也、

〔續日本後紀^{十八}〕嘉祥元年十二月庚戌勅從四位上^{○從四位上}正躬王、正五位下伴宿禰成益、正

六位上^{○正六位上}藤原朝臣豐嗣等、先罷祿網下于秋官憲法所當理存不忍、今星歷已用恩

波蕩濫、宜修舊典、降先一等、敍之正躬王可從四位下、成益正五位上^{○正五位上}、豐嗣從五

位下、

○按ズルニ、官當ノ者ハ、斷罪後二等ヲ降シ、復敍ノ時ニ、先位ニ一等ヲ降シテ敍スルコト、此文

ト上ニ舉タル岑成王トノ事ニ依リテ知ルベシ、免所居官ノ斷罪後ニ二等ヲ降シ、免官ノ三等

ヲ降スコトモ准ジテ知ラル、

〔三代實錄^三〕貞觀元年十二月廿七日戊申、太政官論奏言、^{○中}前日向守從五位下嗣岑王、謀殺詔

使正五位下田口朝臣房富等、須詳加覆案者也、帝特降優詔曰、^{○中}嗣岑王、依先斷官當免爵、

〔三代實錄^四〕仁和元年十二月廿三日癸酉、先是右京人散位從七位下大石忌寸福麻呂、私離官

印、捺僞官符、賣官地子穀百五十斛、取其直、左兵衛阿刀澤雄錢十二貫文、左衛門門部國部禪師麻

呂、錢六貫文、刑部省斷云、福麻呂、離官印、捺僞官符、其罪當近流、取直錢當遠流、相准輕重、雖有遠近、

至減一等俱是徒三年也、所犯在降前、又減一等、徒二年半、以從七位下當徒一年、又以正八位上當徒

一年、餘半年徒官當不盡其官、留官可收贖銅十斤、仍須一年之後降先位一等、敍正八位上、

〔三代實錄^九〕仁和二年五月十二日庚寅、先是石見國邇摩郡大領外正八位上伊福部直安道、那

賀郡大領外正六位下久米岑雄等、發百姓二百十七人、帶兵仗圍守從五位下上毛野朝臣氏永館、奪

取印匙、釋鈴等、授傍吏、詔遣式部大丞正六位上坂上大宿禰茂樹、推問事由、刑部省斷云、安道應官當

解任、當徒二年、贖銅十斤、岑雄應贖銅九斤、自餘人、節級處罪、延曆寺僧一道、右京人正六位上藤原朝

臣豐基、戶口俗名數直、與安道同謀、還俗當徒一年、又守氏永爲安道等所圍之時、逃隱於介外、從五位

以一官當徒三年、五位以上、以一官當徒二年、八位以上、以一官當徒一年、若犯公罪者、公罪謂緣公事、教罪、而無私曲者、私曲相銜、公事與事、情無私曲、雖違法式、是爲公坐、若謂勸諭各加一年、當謂八位以、徒二年、以官當流者、三流同比、徒四年、八位以上、犯流、以四官當之、無四官者、准從年、當順故云、三流同比、徒四、年、其有二官、謂官位爲一官、勳位爲一官、官位每階各爲一官、勳先以官位當、次以勳位當、謂位記雖多、當次以勳、行守者各以本位當、仍各解見任、但有從五位下、正六位、見二年半、私罪、例減一等、猶徒二、位高者、當行守者各以本位當、仍各解見任、但有從五位下、正六位、見二年半、私罪、例減一等、猶徒二、本位、當徒一年、餘徒數、解五、位職事之類、若有餘罪、及更犯者、聽以歷任之官當、歷任謂降所不至者、若有餘罪、未經科斷者、聽以歷任降所不至位記、以次當之、更犯法、未經科斷者、聽以歷任降所不至位記、以次當之、

〔續日本後紀^{十四}〕承和十一年十二月壬寅^{壬寅}王^寅越前守從四位下岑成王、犯罪官當解任、岑成王、初赴任之後、乞暇入京、隱居不上、所司奏勅之、

〔續日本後紀^{十五}〕承和十二年十一月乙巳、毀越前守從四位下岑成王四位位記、緣有犯罪也、

〔續日本後紀^{十六}〕承和十三年七月己未、授正五位下岑成王正五位上、^{上原作下}岑成王、去年緣犯

罪、毀從四位下位記、今據法條、降一等敘之、

〔三代實錄^五〕貞觀三年二月廿九日癸酉、參議從四位上行太宰大貳清原真人岑成卒、岑成者左京

人、贈一品舍人親王之後也、^中承和元年授從四位下、十一年爲越前守、赴任之後、取暇入京、隱居不

出、所司奏聞、官當解任、免從四位下之階、十三年授正五位上、^{上原作下}今以意改、

〔續日本後紀^{十六}〕承和十三年十一月壬子、太政官下符所司、令徵前參議左大辨正躬王、前參議右大

辨和氣朝臣真綱等贖銅、其符僞、太政官符刑部省應徵贖銅事、^中左大臣宣奉勅、依官議行之者、仍

准所犯、以所帶一官當徒二年、其餘如半年、年徒贖銅如件、省宜承知、依件徵納、

〔續日本後紀^{十七}〕承和十四年五月辛卯、是日毀前左大辨從四位上正躬王、左中辨從四位下伴宿福

成益、右中辨從五位上藤原朝臣豐嗣、左少辨從五位下藤原朝臣岳雄等四人位記、各一階、緣受推法

功過ヲ考ヘ、私罪下中、下下、公罪下下ニ當ル者ノ官ヲ解クヲ云フ、又理ヲ以テ解官スルニ、致仕考滿、廢官省員充侍遺喪、患解ノ七色アリ、致仕トハ七十以上ニテ其官ヲ辭スルヲ云フ、考滿トハ交替スベキ年限ノ既ニ滿タルヲ云フ、廢官トハ其官名ノ廢セラル、ヲ云フ、省員トハ其廳ノ官員ヲ減省スルヲ云フ、充侍トハ父母老病シテ侍養スベキヲ云フ、遺喪トハ父母ノ喪ニ遭フヲ云フ、患解トハ疾病シテ百二十日ヲ經ルヲ以テ解官スルヲ云フ、而シテ犯罪解ト考解トハ法律部内ニシテ、其餘ハ皆法律部外ナリ、

釐務ヲ停ムルアリ、釐務トハ今世ニ云ヘル役所ノ事務ヲ執ル事ニテ、令ニ依レバ、罪ヲ犯シテ除免官當セラルベキトキハ、釐務ニ預ルコトヲ得ザル法ナリシヲ、除免官當ノ法自ラ絶ユルニ至リテ、釐務ヲ停ムルコトモノノ刑名ノ如クニナレリ、

又位記ヲ毀ツアリ、即チ内外ノ有位人官當以上ヲ犯ストキハ、刑部處斷シテ太政官ニ申シ、奏聞シテ罪人文旨ナレバ、式部ニ移シ、武官ナレバ、兵部ニ移シ、五位以上及ビ婦人ナレバ、中務ニ移シ、并ニ罪人ノ位記ヲ收メテ、辨官ニ送り、太政官更ニ刑部ニ還付ス、是ニ於テ中務式部兵部ノ三省ノ錄、各位案ノ宮ヲ持シ、刑部錄位記ノ宮ヲ持シ、其ニ入りテ太政官ノ庭中ニ列立シ、版位ニ就ク、辨官位記ヲ毀ルベキ狀ヲ大臣ニ申シ、刑部錄位記ノ宮ヲ以テ進ミテ、外記ニ付シ、外記取リテ大臣ニ進ム、大臣覽シ訖リ、外記趨リテ位記ノ宮ヲ取リ、捧ゲテ立ツ、式部丞位記ノ案ニ毀ノ字ヲ書キ、外記ノ史生毀ノ字ニ捺印シ、外記乃チ位記若干ヲ毀ラント申シ、大臣ノ命ヲ待チテ毀ルナリ、

又官ヲ降スコトアリ、必ズシモ有罪ニ由ラズ、而シテ位ヲ降スコトハ必ズ有罪ニ由レリ、

〔律疏名例〕凡犯罪以官當徒者、私罪謂私自犯、及對詔詐不以實、受請枉法之類、私罪謂不以公事、私涉阿曲、亦同、私罪對詔詐不以實者、對詔詐緣公事、方便不吐實情、心懷隱欺、放同一品以下、三位以上、私罪受請枉法者、謂受人屬請、枉法申請、縱不得財、亦爲枉法、此例既多、依謂之類、

重犯スルトキハ總テ四等ヲ降ス、後犯ハ多クトモ只四等ヲ以テ限トス、或ハ類リニ免官ヲ犯シ訖リテ、又再ビ免所居官ヲ犯ス者モ、亦各其所犯ヲ計ヘテ四等ヲ降シテ敍ス、若シ免官免所居官當ニ官ヲ用キ盡シテ無位ノ人トナリテ、未ダ敍セラル、時ニ至ラズシテ、更ニ流以下ノ罪ヲ犯ストキハ、後敍ニ八位以上ヲ得ベキ者ハ、敍法アルヲ以テ決配ヲ免ズベケレバ、贖ヲ以テ論ズルコトヲ聽ス、其敍限ノ年ハ各、後敍ノ時ヨリ計ヘテ、其犯免官ニ當レバ、更ニ三載ノ後ニ敍スルコトヲ聽シ、免所居官ハ更ニ其年ノ後ニ敍スルコトヲ聽ス、又流ヲ犯シテ贖スベカラズシテ、眞ニ流ス者ハ六載ノ後ニ敍スルコトヲ聽シ、徒ヲ犯シテ贖スベカラズシテ、眞ニ役滿チテ敍ス、サレドモ滿役ノ期、仍ホ免官ノ限内ニ在ル者ハ免官ノ敍例ニ依ル、而シテ未ダ敍セラレザル間モ後敍ノ限アルヲ以テ其課役ヲ免ズ、而シテ歷任ノ位記アリトモ朝參ノ列ニ預ルコトヲ得ズ、例ヘバ一位ノ人免官ヲ犯シ、仍ホ歷任ノ二位以下ノ官アリトモ、未ダ敍セラレザル間ハ朝參スルコトヲ得ズ、免所居官當ノ人ノ未ダ敍セラレザル間モ皆同ジ、凡テ罪ヲ犯シテ除免官當スベキトキハ、事ヲ理メ朝會スルコトヲ得ザルナリ、又除名ヲ比徒三年トシ、免官ヲ比徒二年トシ、免所居官ヲ比徒一年トスル法アリ、是ハ人ノ輕罪ヲ誣告スル者、及ビ釋スベカラザル罪人ヲ判放シ、無罪ヲ有罪トシテ枉入スル官司ヲ反坐センガ爲メニ制セルナリ、

解官ハ、免官ト其名相似テ大ニ異ナリ、即チ解官トハ、官職ヲ解クヲ云ヒ、免官トハ、位階ヲ褫グヲ云フナリ、而シテ解官ノ者ハ未ダ必ズシモ免官セズ、免官ノ者ハ必ズ解官スルナリ、又解官ト停任トハ其實ハ同一ナルヲ、後ニハ重罪ヲ解官トシ、輕罪ヲ停任トシテ之ヲ別テリ、又一官ノミ解キ、二官俱ニ解クコトモ、官位俱ニ解クコトモアリ、又難犯、死罪ハ處外ノ人、赦死罪ノ人ニ會フトキ解官スルハ律令ノ制ナリ、解官ニハ犯罪解アリ、考解アリ、考解トハ、式部省ニテ

トキハ高キニ從フヲ聽ス、除名ヲ以テ言ヘバ、正四位ノ人ハ從七位下ニ敘スベキニ、一位ノ嫡子ナルトキハ從五位下ニ敘シ、正五位ノ人ハ、正八位下ニ敘スベキニ、秀才上々等ノ出身ナルトキハ正八位上ニ敘ス、免官、免所居官モ此ニ准ズ、又勳十二等ノ人ノ免官スルトキハ、先位ニ二等ヲ降スベキニ、降スベキ位ナケレバ猶十二等ニ敘ス、又除名、免官、免所居官ハ、罪輕クトモ犯ストキハ除免ス、五位ハ官當ニテハ公罪ノ徒三年ニ當ルヲ若シ監臨内ニ於テ布三端ヲ盜ムトキハ、本坐ハ杖八十ナレドモ除名シ、不枉法贓十五端一尺ヲ受クルトキハ、本坐ハ徒一年半ナレドモ免官シ、父母ノ喪ニ在リテ兄弟別籍異財スルトキハ、本坐ハ杖一百ニ當レドモ免所居官ス、又罪重キトキハ更ニ當贖ノ法ニ依リテ、各其所犯ニ准ジ官ヲ以テ流徒ニ當テ、或ハ贖銅ヲ納メシメテ除免ス、例ヘバ正七位上ノ人、歷任ノ從七位下アリテ、除名ノ流ヲ犯シテ例減スベカラザルトキハ、流ヲ以テ徒四年ニ比シ、正七位上ノ階ヲ以テ徒一年ニ當テ、又從七位下ノ階ヲ以テ徒一年ニ當テ、其餘ニ歷任ノ位記及ビ勳位ナキトキハ、銅四十斤ヲ徵シテ二年ノ徒ヲ贖ハシメ、例ニ准ジテ除名ス、若シ其罪免官ニ當ルトキハ、亦此當贖法ニ准ジテ免官ス、免官、免所居官、官當ヲ犯シ斷ジ訖リ、各一官二官ヲ用キテ當免シテ後ニ更ニ徒流ヲ犯シ、或ハ更ニ免官、免所居官、官當シテ尙ホ歷任ノ位記アルトキハ、各上ノ法ニ依リテ當免シ、未ダ斷ゼラレズシテ更ニ犯セバ、通ジテ降所不至ノ者ヲ以テ當ツ、此時ニハ勳位、官位ノ二官アルトキハ、官位勳位ヲ擇バズ、先ヅ其中ノ高キ者ヲ以テ當ツ、例ヘバ歷任ノ六位及ビ勳六等アルトキハ、先ヅ勳位ヲ以テ當ツ、若シ罪ニ當テハ、盡サレバ、亦次ノ高キ者ヲ以テ當ツ、又前ニ免官ヲ犯シテ已ニ位階二等ヲ降セルニ、又免官ヲ犯ストキハ、亦二等ヲ降ス、縦ヒ斷ジ訖リテ更ニ犯スコト三度以上ヲ經トモ敘スル日ハニ只此再降四等ノ法ニ依ル、免所居官、官當斷ジ訖リテ更ニ犯ストキハ、後敘ハ各一等ヲ降シ、四度

ヲテ、降所不至ノ位記ハ留ムルコトヲ聽ス、若シ本犯、免所居官及ビ官當ニ至ラザルヲ、特ニ其情ヲ責メテ免官スルトキハ、其敍法、免所居官ニ同ジ、

除名トハ、官人ノ籍ヲ除クヲ云フ、出身以來ノ官位、勳位共ニ悉ク除キテ、有蔭ノ人ハ蔭ノ例ニ從ヒ、無蔭ノ人ハ庶人ニ同ジ、サレドモ調庸ヲ輸サシメ役ヲ免ジテ、兵士、衛士ニ點ゼズ、除名トナルベキ罪ハ、第一ハ八虐、第二ハ人ヲ故殺ス、第三ハ反逆ノ緣坐ニテ、右ノ三罪ハ獄成ルトキハ、赦ニ會フト雖ドモ除名ス、第四、第五、第六ハ、監臨主守ノ人、監守スル所ニ於テ良人ノ妻妾ヲ姦シ、若シクハ三端以上ヲ盜シ、若シクハ人ヲ略ス、第七ハ一端以上ヲ受ケテ法ヲ枉グ、賊ハ都テ布ニ准ジテ計フル法ナルニ因リ、幾端ト云フ、右ノ四罪ハ獄成リテ赦ニ會フトキハ、免所居官トナリ降ニ會フトキハ、免官ノ法ニ同ジ、第八ハ難犯ノ死罪即チ八虐故殺人反逆ノ緣坐、監守内ノ姦盜略人受財枉法中ノ死罪ニアラザルヲ云フ、第九ハ死罪ヲ犯シ囚禁セラレテ身死ス、第十ハ死罪ヲ免ゼラレテ別ニ流徒ニ配セラル、第十一ハ死罪ヲ犯シ獄ヲ脱シテ逃亡ス、右ハ本犯合ニ死スベクシテ、獄成レル者ニテ、降ニ會フトキハ、當贖ノ法ニ從ヒ、官アル者ハ官當ヲ聽シ、蔭アル者ハ贖法ニ依リ、赦ニ會フトキハ、見任ノ職事ヲ解カシム、此除名ハ六載ノ後、即チ第七年ニ入リテ敍位ス、其敍法ハ三位以上ハ狀ヲ錄シテ勅ヲ聽ハリ、正四位ハ從七位下ニ敍シ、從四位ハ正八位上ニ敍シ、正五位ハ正八位下ニ敍シ、從五位ハ從八位上ニ敍シ、六位、七位ハ大初位上ニ敍シ、八位、初位ハ少初位下ニ敍ス、勳位ノ人除名ヲ犯シタルトキハ、一等ハ九等ニ敍シ、二等ハ十等ニ敍シ、三等ハ十一等ニ敍シ、四等ハ十二等ニ敍ス、若シ本犯免官ニ至ラズシテ、特ニ除名スルトキハ、敍法、免官ノ例ニ同ジ、凡テ罪ヲ犯シテ除免スル人ノアルトキハ、刑部斷定シテ太政官ニ申シ、奏報アリテ後ニ太政官ニテ位記ヲ毀テ、復敍ノ日ニ式部ヨリ刑部ニ報ズ、而シテ出身ノ位、復敍ノ法ヨリ高キ

下ノ人ハ從五位下ノ位記ヲ毀タレ、歷任ノ位記アルトキハ正六位上ノ位記ヲ留メ、正六位下トナリ、其年卽チ三百六十日ヲ經テ、先位ニ一等ヲ降シテ正六位上ト爲ル、立シク本文官事狀ヲ載セタルヲ參考スベシ、若シ官位ノ外ニ勳位アリテ、官當ニ用キザルトキハ、勳位

ハ留ムルコトヲ得ルナリ、又官ヲ用キテ盡シタル者ハ、其叙法免官ト同ジク、三載ノ後ニ先位ニ二等ヲ降シテ敍ス、

免所居官トハ、現在居ル所ノ一官ヲ免ズルヲ云フ、一官ハ官位卽チ通常ノ位階ニテ、職事官卽チ通常ノ官ハ隨ヒテ免ジ、若シ勳位アルトキハ、其勳位ハ留ムルナリ、免所居官トナルベキ罪ハ、祖父母父母老疾シテ侍スル者ナキニ、親ヲ委テ、官ニ之クト、父母ノ喪ニ在リテ子ヲ生ミ、及ビ妾ヲ娶リ、及ビ兄弟別籍異財スルトノ四種ナリ、是モ其年ノ後ニ先位ニ一等ヲ降シテ敍ス、

免官トハ、二官並ニ免ズルヲ云フ、二官トハ官位ト勳位トナリ、免官トナルベキ罪ハ、第一ハ他ノ妻妾ヲ姦ス、第二ハ盜ヲ犯ス、第三ハ人ヲ略ス、第四ハ財ヲ受ケテ法ヲ枉ゲズ、右ノ四罪ハ斷徒以上ニ限ル、第五ハ流徒ヲ犯シ、獄成リテ逃走スルナリ、獄成ルトハ、贓狀露驗ナルト、刑部省ニテ覆斷シテ未ダ奏セザルト云フ、第六第七ハ、祖父母、父母死罪ヲ犯シテ囚禁セラレタルニ、樂ヲ作シ及ビ婚娶スルナリ、免官ハ此七罪ヲ犯セル者ニ限ル、若シ降ニ會シテ餘罪アルトキハ、官當減贖ノ法ニ從フ、此免官ノ者ハ、三載ノ後卽チ第四年ニ入りテ先位ニ二等ヲ降シテ敍ス、例ヘバ正四位上ノ人、歷任ノ位記ヲ有シテ免官スレバ從四位下トシ、三載ノ後ニ從四位上ニ敍ス、勳一等ノ人、歷任ノ位記ヲ有シテ免官スレバ勳四等トシ、三載ノ後ニ勳三等ニ敍ス、此正四位上及ビ勳一等ヲ指シテ見免トシ、正四位下勳二等ヲ降至トシ、從四位上以下、及ビ勳三等以下ヲ降所不至トス、免官ノ時、見免ノ位記ト降至ノ位記トヲ毀

トヲ聽サヌ法ナレバ、先ヅ官位勳位ヲ以テ罪ニ當テ、其餘罪ヲハ銅ヲ出シテ贖フナリ、若シニ官^{勳位}位、ヲ以テ罪ニ當テタル外ニ、仍ホ餘剩ノ徒罪アルト、官當シテ罪ハ已ニ盡キタリト雖モ、更ニ法ヲ犯シテ未ダ科斷ヲ經ザル者トハ、歷任ノ降所不至ノ位記ヲ以テ當ツルコトヲ聽ス降所不至トハ、例ヘバ從五位上ノ人官當スルトキハ、其年ノ後ニ、先位ニ一等ヲ降シテ從五位下ニ敘スル法ナレバ、從五位下以下ヲ指シテ降所不至ト云フナリ、又官當ハ罪輕クシテ其官ヲ盡サバル時ト、官少クシテ其罪ヲ盡サバル時トノ法アリ、罪輕クシテ其官ヲ盡サズトハ、五位以上ハ私罪徒二年ニ當ツベキニ、私罪徒二年ヲ犯ストキハ、請減一等スレド、餘徒一年半ナリ、即チ罪輕クシテ五位以上ノ官位ヲ盡サズ、其時ハ官位ヲ留メテ、徒一年半ノ贖銅三十斤ヲ收ムルナリ、官少クシテ其罪ヲ盡サズトハ、八位ノ人ガ私罪ノ徒一年半ヲ犯ストキハ、八位ヲ以テ徒一年ニ當テ、餘罪半年ハ一官ニ當ツルニ足ラザレバ、徒一年ノ贖銅二十斤ノ半ナル十斤ヲ收ムルナリ、官當ハ元ヨリ徒罪ニ當ツル法ナレバ、流刑ノ爲メニハ別ニ比徒四年ノ法ヲ設ケタリ、徒ハ三年マデニテ四年ハナキヲ、官ヲ以テ流ニ當ツルトキハ、遠中近ノ三流共ニ比徒四年トス、七位以上及ビ勳十等以上ハ、議減請減例減ノ別ハアレドモ、流罪以下ヲ犯ストキハ、一等ヲ減ズル法ニテ、^{流刑ヲ減ズルトキハ、三流ヲ併セテ一等トスル法ナリ、}八虐ナドノ外ハ流刑ニ處セラル、コトハナキヲ、八位及ビ勳十一等十二等ハ流刑ヲ減ズルコトヲ得ザレバ、三流ヲ徒四年ニ比シテ官當スルナリ、例ヘバ正八位上勳十一等ノ人、私罪ノ流ヲ犯ストキハ、正八位上ヲ以テ徒一年ニ當テ、勳十一等ヲ以テ徒一年ニ當テ、歷任ノ正八位下ト從八位上トヲ以テ徒二年ニ當テ、合セテ比徒四年即チ流刑ニ當ツ若シ正八位上ノミニテ歷任ノ位記ナキトキハ、正八位上ヲ以テ徒一年ニ當テ、餘ノ徒三年ハ銅六十斤ヲ納メテ贖フ除名免官ノ中ニテ、其罪特ニ重キ者モ此法ニ從フコトアリ、此官當ノ法ハ、從五位

解免官職

有位ノ人ニ限リタル刑四アリ、官當免所居官、除名是ナリ、其中ニテ免所居官、免官、除名ハ犯シタル罪狀ニ因リテ當テラル、刑名ナリ、官當ノミハ公罪私罪ヲ犯シテ徒刑ニ當テラレタルヲ、官ヲ以テ償フヲ云フ、即チ贖ノ如キ者ナリ、官トハ何レモ官位、勳位ノコトニテ、官位ハ文位トモ云ヒテ、通常ノ位階ノコトナリ、

官當ノ法ハ、私罪ヲ犯ストキハ、四品以上、三位以上、勳二等以上ハ、各一官ヲ以テ徒三年ニ當テ、四位、五位及ビ勳三等以下六等以上ハ、二年ニ當テ、六位以下八位以上、及ビ勳七等以下十二等以上ハ、一年ニ當ツ、又公罪ヲ犯ストキハ、一年ヲ加ヘテ當ツルナリ、即チ五位以上、及ビ勳六等以上ヲ以テ徒三年ニ當テ、六位以下八位以上、及ビ勳七等以下十二等以上ヲ以テ二年ニ當ツ、官位、勳位ノ二官アルトキハ、先ツ官位ヲ以テ當テ、次ニ勳位ヲ以テ當ツ、官位ハ每階一官トス、即チ正從上下ヲ各一官トシテ計フ、勳位ハ正從ヲ各一官トス、例ヘバ勳一等ハ正三位相當ニテ一官ナリ、勳二等ハ從三位相當ニテ一官ナルガ如シ、又行守ハ各本位ヲ以テ當テ、其上ニ見任ノ職事官ヲ解クナリ、例ヘバ從五位下ノ人、正六位上相當ナル大内記ニ任ゼラレタル如キハ、即チ行ナリ、若シ徒二年半ノ私罪ヲ犯ストキハ、請減一等シテモ猶ホ徒二年ニ當レリ、其時ハ本階ノ從五位ヲ以テ二年ニ當テ、大内記ノ官ヲ解クナリ、又正六位上ノ人、從五位下相當ナル侍從ニ任ゼラレタル如キハ、即チ守ナリ、若シ徒二年ノ私罪ヲ犯ストキハ、例減一等シテ殘レル徒一年半ノ内、一年ハ本位ノ六位ヲ以テ當テ、半年ノ分ハ徒一年ノ贖銅二十斤ノ半ナル十斤ヲ納メテ贖ヒ、侍從ノ官ヲ解クナリ、凡テ官當ハ官位、勳位ヲ以テ徒ニ當テ、因テ見任ノ職事ヲ解ク、又贖銅ノミヲ納メテ、官位、勳位ヲ留メ置クコ

豆輔弘佐渡中略○此外宣綱田宅資財奴婢等被沒官了、

〔中右記〕大治四年十一月廿九日癸酉、奈良張本僧侶七八人、被追道諸國舊寺云々、十二月廿一日、左中辨語云、御寺張本十三人、依院宣可拂大和國之由○中略、又惠曉當講所領、可沒官由先日被下長者宣了云々、

○按ズルニ、藤氏ノ長者宣ヲ以テ處分セシナリ、

〔日本書紀二十九〕五年八月壬子、詔曰、死刑、沒官ムツカフ、三流、並除一等○下略、

〔令義解〕凡犯罪被戮其父子應配沒不得配禁內供奉及東宮所驅使
〔古事記〕垂中七天皇詔雖怨其兄猶不得忍愛其後故即有得後之心是以選聚軍士之中力士輕捷而宣

者取其御子之時乃掠取其母王或髮或手當隨取獲而拘以控出爾其後豫知其情悉剃其髮以髮覆其頭亦腐玉緒三重纏手且以酒腐御衣如全衣服如此設備而抱其御子刺出城外爾其力士等取其御子即握其御祖爾握其御髮者御髮自落握其御手者玉緒且絕握其御衣者御衣便破是以取獲其御子不得其御祖故其軍士等還來奏言御髮自落御衣易破亦所纏御手之玉緒便絕故不獲御祖取

得御子爾天皇悔恨而惡作玉人等皆奪其地故諺曰不得地玉作也

〔日本書紀〕十五二十三年八月大泊瀨天皇略崩中是月吉備上道臣等聞朝作亂思救其腹所生

星川皇子率船師四十艘來浮於海既而聞被燔殺自海而歸天皇即遣使噴讓於上道臣等而奪其所

領山部

〔日本書紀〕二十五大化五年三月戊辰蘇我臣日向日向身刺字讚倉山田大臣於皇太子略是月遣使者

收山田大臣資財資財之中於好書上題皇太子書於重寶上題皇太子物使者還申所收之狀皇太子

始知大臣心猶貞淨追生悔恥哀歎難休即拜日向臣於筑紫太宰帥世人相謂之曰是隱流乎

〔續日本紀〕八元養老四年六月己酉漆部司令史從八位上丈部路忌寸石勝直丁秦大麻呂坐盜司漆

並斷流罪於是石勝男祖父麻呂年十二安頭麻呂年九乙麻呂七同言內父石勝為養己等盜用司漆

緣其所犯役遠方祖父麻呂等為慰父情冒死上陳請配兄弟三人沒為官奴贖父重罪詔曰人稟五常

仁義斯重士有百行孝敬為先今祖父麻呂等役身為奴贖父犯罪欲存骨肉理在矜憐宜依所請為官

奴即免父石勝罪但大麻呂依刑部斷發配處七月壬申免祖父麻呂安頭麻呂等從良焉

〔本朝世紀〕康和五年八月十三日庚申左大臣後房內大臣實以下諸卿參入被定申伊勢大神宮前

禰宜荒木田宣綱神祇權大副大中臣輔弘罪科事宣綱放火離宮院并度々落書次有配流事宜綱

沒官物處分

順也。物見在者亦還之。謂未分。若已經其本罪不合緣坐而別勅破家者。謂假有親謀大逆者。律按逆之類也。破家者。資財罪止及一房。財罪惡元非真犯。故唯破沒罪主一家。而不及緣坐之人。其有共田宅並皆沒入也。罪止及一房。財罪惡元非真犯。故唯破沒罪主一家。而不及緣坐之人。其有共若受人寄借及質物之屬。當時即有言請券證分明者。皆不在錄限。其有競財官司未決者。依法檢按。但有贓財判決之日。應罪人得者。監。

〔令義解一員〕贓贖司

正一人掌簿數。謂總、疏也。數、收也。言疏收配沒書者。配圖書財物者。配大藏。送人父子者。配兵部。文也。

〔續日本紀二十八〕神護景雲元年九月癸亥。日向員外介從四位上。大津連大浦解任。其隨身天文陰陽等書。沒爲官書。

〔日本紀略〕天長九年五月庚申。沒官書一千六百九十三卷。賜三品秀良親王。

〔續日本後紀三〕承和元年十月辛巳。以昔被沒官橘朝臣奈良麻呂家書四百八十餘卷。賜彈正尹三品秀良親王。以外戚之財也。

〔三代實錄十三〕貞觀八年九月廿五日丁卯。勅京畿七道。勸錄庶人伴善男等資財田宅。十二月八日

己卯。是日沒入庶人伴善男宅地資財。付內藏寮。佛像經論書籍。付圖書寮。

沒官之人

〔令義解一員〕凡官奴婢。年六十六以上及癯疾者。被配沒爲戶者。並爲官戶。謂下條云。家人奴婢。奸主及子並沒官。是也。至年七十六以上。並放爲良。○下

〔令義解一員〕凡家人奴奸主及主五等以上。親所生男女各沒官。謂若被強姦者。所生男女。即從其人。其主不知之法。自合從其。

〔令義解一員〕贓贖司

正一人掌簿。○中略。送人父子者。配沒官奴司之類也。

有受薪官屬士庶職與或和率欽或監臨官司和市有乘利謀利有乘利下原脫強率欽之類至和市若乞
索之贓並還主稱強乞索和乞索得與不和以下並徵還主即簿敘之物教書到後罪雖決訖未入官司者從赦
原司者雖從大逆人家資合沒官者教書到後其罪人雖已決訖未入官司若罪未處決物雖送官未經分配
者猶爲未入官存者物雖送官但未經分配者雖已斷訖其原即緣坐家口雖已配沒罪人得免者亦免逆人
家口合緣坐沒官罪人後家口既不會教緣坐亦不合原去取之宜皆國罪人爲法其謀叛已上道及罰一
是謀反大逆罪人後家口既不會教緣坐亦不合原去取之宜皆國罪人爲法其謀叛已上道及罰一
家非死罪三人支解人緣坐法及家口既不會教緣坐亦不合原去取之宜皆國罪人爲法其謀叛已上道及罰一
及斷自同五流斷名配流知法自餘緣坐流並不得逆又不除名緣坐流並不得逆又不除名緣坐流並不得逆
同教書若八處又非反逆緣坐人仍從二
恩免以其身非八處又非反逆緣坐人仍從二

【律疏賊盜】凡謀反及大逆者皆斬○疏父子若家人資財田宅並沒官其家人不同資財故特言之年八

十及篤疾者並免祖孫兄弟皆配遠流不限籍之同異即雖謀反詞理不能動衆威力不足率人者亦皆
斬○結謀謀實而不能爲者謂雖謀亂常之詞不足動衆人之意雖結謀謀實而不能爲者謂雖謀亂常之詞不足動衆人之意

述休徵假託靈異妄稱兵馬虛說反由修惡衆人無風狀可驗者自從妖法父子並配遠流資財不在沒
限之須從本宗緣坐刑法惟於開塞一律不可附科執憲屬繩務從折中違法之輩已治朝享應經大恩

法須正之即凡人不得爲親○下略人

【律疏賊盜】凡緣坐非同居者資財田宅不在沒限雖同居非緣坐及緣坐人子應免流者各准分法留還

緣坐人子謂兄弟之各准分法留還緣坐人子謂兄弟之各准分法留還緣坐人子謂兄弟之各准分法留還
留還謂未經分異兄弟之各准分法留還緣坐人子謂兄弟之各准分法留還緣坐人子謂兄弟之各准分法留還

一千分法留還假有一人年八十有三男十孫均分一孫反逆或一男見在者依令作三男分法留還老
即四分若三男俱死唯有一十孫者依令歸于孫均分一孫反逆或一男見在者依令作三男分法留還老

分法

【令義解】凡犯罪資財入官者若緣坐得免謂依律反逆之人父子沒官即年八十及篤疾或依律不坐

弟之子依各計分法還之謂依律准戶內應分人多少人別得准令作三男分法留還老有一人年八十有三
律不坐也各計分法還之謂依律准戶內應分人多少人別得准令作三男分法留還老有一人年八十有三

共三十孫爲二十一分每留一分與老者是也人即別勅降罪從輕謂緣坐人子降配還流祖孫兄弟配徒及

沒官

謀反及ビ謀大逆ノ人ノ父子若シクハ家人資財ノ中ニ攝ス財田宅及ビ彼此俱罪ノ賊及ビ犯禁ノ物若シクハ人ノ盜ミタル所ノ物ヲ盜ミタル倍賊ハ沒官ス彼此俱罪ノ賊トハ枉法賊不枉法賊受所監臨賊并ニ坐賊ノコトニテ取ル者モ與フル者モ俱ニ罪アルヲ云フ犯禁ノ物トハ鼓吹幡幟ノ類ニテ朝廷ヨリ禁ゼラレタルヲ私家ニテ貯ヘタルヲ云フ倍賊トハ取リタル物ニ倍シテ損フコトニテ強盜竊盜ハ賊ヲ其主ニ倍償スベキ法ナルヲ人ノ盜ミタル所ノ物ヲ盜ミタル倍賊ハ還スベキ所ナキ故ニ官ニ沒收スルナリ又別勅ヲ以テ特ニ沒官スルコトモアリ但シ反逆人ノ緣坐ニテモ同居ニアラザレバ沒收セズ又年八十以上及ビ篤疾ノ人ハ反逆ノ緣坐タリトモ免レ若シクハ反逆人ノ兄弟ノ子ハ坐セザル法ナレバ資財ハ一タビ官ニ入ルトモ分法ニ依リテ還スナリ反逆人ノ緣坐ニシテ同居ニアラザル人及ビ緣坐人ノ子ノ流刑ヲ免スベキ者ノ資財モ同ジ又死刑ニ處セラレタル人ノ父子沒官スルトキハ禁内ノ供奉等ニ配セズ此沒官物ハ賊贖司後ニ併スニテ領取シテ更ニ諸司ニ分配シ兵器ハ兵庫ニ配シ文書ハ圖書寮ニ配シ財物ハ大藏省ニ配シ逆人ノ父子ハ官奴後ニ併スニ配スルナリ猶ホ六賊篇ヲ參看スベシ

〔伊呂波字類抄〕沒官

名稱
沒官法

〔律疏〕凡彼此俱罪之賊謂計贓爲罪者與財計法不枉法及受所監臨之財物并坐贓罪者依法及犯禁之物則沒官是名犯禁之物從被此罪罪之類以下并沒官者盜人所盜之物倍償亦沒官但有乙盜賊之被此各有倍償依法並還主令既取乙倍償不合更得家賊乙即元是盜人不可以賊助盜故倍之類沒官者其肉及錢不得仍用強盜付主罪依法律科不取與不和乘利強盜之類有贓和與者無罪而去合沒官作具及錢不得仍用強盜付主罪依法律科不取與不和乘利強盜之類有贓和與者無罪而去

〔日本書紀雄略十四〕十年九月戊子、身狹村主青將吳所獻二鵝、到於筑紫、是鵝爲水間君犬所囓死、別本云、筑紫縣主所囓死、

〔日本書紀雄略十四〕十年九月戊子、身狹村主青將吳所獻二鵝、到於筑紫、是鵝爲水間君犬所囓死、別本云、筑紫縣主所囓死、由是水間君、恐怖憂愁、不能自默、獻鵝十隻、與養鳥人、請以贖罪、天皇許焉、十月辛酉、以水間君所獻養鳥人等、安置於輕村、磐余村二所、

〔日本書紀雄略十七〕二十二年十二月、筑紫君葛子、恐坐父誅、獻精屋屯倉求贖死罪、

〔日本書紀雄略十八〕元年七月辛巳朔、詔曰、皇后雖同體天子、而內外之名殊隔、亦可以充屯倉之地、式樹椒

庭、後代遺迹、適差勅使、簡擇良田、勅使奉勅宣於大河內直味張、更名里檢曰、今汝宜奉進膏腴雉田、味張、

忽然恠情、欺誑勅使曰、此田者、天旱難溉、水潦易浸、費功極多、收穫甚少、勅使依言、服命無隱、閏十二

月壬午、大伴大連奉勅宣曰、中略今汝味張、率土幽微、百姓忽爾、奉情王地、輕背使乎、宜旨、味張自今以

後、勿預郡司、中略於是大河內直味張、恐畏永悔、伏地汗流、啓大連曰、愚蒙百姓、罪當萬死、伏願每郡以

饁丁、春時五百丁、秋時五百丁、奉獻天皇、子孫不絕、籍此祈生、永爲鑑戒、別以狹井田六町、賂大伴大連、

蓋三島竹村屯倉者、以河內縣部曲爲田部之元、於是乎起、

〔日本書紀雄略十八〕元年閏十二月是月、廬城部連枳、營喻女、幡媛、偷取物部大連尾與環瑤、獻春日皇后事

至發覺、枳營喻以女幡媛獻采女丁、是春日部采女也、并獻安藝國過戶、廬城部屯倉以贖女罪、物部大連尾與

恐事由己、不得自安、乃獻十市部伊勢國來狹狹登伊、來狹狹登伊、二邑名也、贊土師部、筑紫國膽狹山部也、

〔政事要略八十二〕太政官符刑部省

應徵贖銅訴人上野國吾妻郡擬口領外正六位上毛野坂本朝臣眞道事

副過狀壹紙

右眞道所進訴狀之內、不指陳實事、省宜承知、依件徵贖符到奉行、

從五位上守右中辨兼行中宮亮藤原朝臣家季、從六位上行右少史人朝臣永繼

貞觀四年四月十日

贖銅入私家

〔令義解^十〕凡傷損於人及誣告得罪其人應合贖者銅入被告及傷損之家即兩人相犯俱得罪^{謂依律}

兩人各徵贖故亦准此其設一家非死罪及同居相犯者^{謂同居共財不限親疎}銅入官

〔三代實錄^{四十八}〕仁和元年十一月十日庚寅右近衛府近衛從七位下刈田首貴多雄過失傷同府

生多春野刑部省斷罪云准律合徵贖銅可入被傷家

〔播磨風土記^{飾應}〕安相里 右所以號安相里者品太天皇^神應從但馬巡行之時緣道不撤御冠故

號陰山前仍國造豐忍別命被蒙罪名爾時但馬國造阿胡尼命申給依此赦罪即奉鹽代田廿千代有

名鹽代田

〔日本書紀^{仁德}〕四十年三月納雌鳥皇女欲爲妃^中愛皇后奏言雌鳥皇女寔當重罪然其殺之日不

欲露皇女身乃因勅雄鯽等莫取皇女所寶之足玉手玉雄鯽等追之至苑田迫於素珥山時隱草中僅

得免急走而越山^中愛雄鯽等知免以急追及于伊勢蔣代野而殺之時雄鯽等探皇女之玉自囊中

得之乃以二王屍埋于廬杵河邊而復命皇后令問雄鯽等曰見皇女之玉乎對言不見也是歲當新嘗

之月以宴會日賜酒於內外命婦等於是近江山君稚守山妻與采女磐坂媛二女之手有纏良珠皇后

見其珠既似雌鳥皇女之珠則疑之命有司問其玉所得之由對言佐伯直阿俄能胡妻之玉也仍推鞠

阿俄能胡對曰誅皇女之日探而取之即將殺阿俄能胡於是阿俄能胡乃獻己之私地請免死故納其

地赦死罪是以號其地曰玉代

〔日本書紀^十〕愛仲皇子畏有事將殺太子^中當是時倭直吾子籠素好仲皇子預知其謀密聚精兵

數百於櫻食栗林爲仲皇子將拒太子時太子不知兵害而出山行數里兵衆多塞不得進行乃遣使者

問曰誰人也對曰倭直吾子籠也便還問使者曰誰使焉曰皇太子之使時吾子籠憚其軍衆多在乃謂

使者曰傳聞皇太子有非常之事將助以備兵待之然太子疑其心欲殺則吾子籠愕之獻己妹日之媛

仍請赦死罪乃免之其倭直等貢采女蓋始于此時歟

赦贖例

外記史生紀親任等參仕各勤所役是則中務大輔平清盛朝臣贖銅官符請印也件清盛朝臣依去六月祇園開亂事被勘罪名也

贖錢

〔延喜式刑部二十九〕凡贖罪無銅准價徵錢

贖布

〔政事要略八十二〕徵贖銅給官符於刑部徵之近代之例官符裁斷罪文若法家勘文等事旨頗愷也又贖銅代錢刑部省贖銅所去天慶三年用途勘文兩別十文也寬和沽價法銅一斤真六十文者隨時沽可徵代又長德二年看督長并囚人等可徵贖銅之輩令勘申罪狀應便徵納隨時之議亦隨形勢耳

〔大館高門所藏古文書〕今五刑贖法定 明法師飛鳥造水長答五答十贖銅一斤布充二丈六尺稻充

十束也答廿贖銅二斤布充二段稻充廿束答卅贖銅三斤布充三段稻充卅束答卅贖銅四斤布充四

段稻充卅束答五十贖銅五斤○此下當補布充五段杖五十束杖八十贖銅六斤布充六段稻充六十束杖

七十贖銅七斤布充七段稻充七十束杖八十贖銅八斤布充八段稻充八十束杖九十贖銅九斤布充

九段稻充九十束杖一百贖銅十斤布充十段稻充百束○中徒五徒半年贖銅十斤布充十段稻充百

束徒一年贖銅廿斤布充卅六段○當作稻充三百六十束徒一年半贖銅卅斤布充五十四段稻充五

百卅束徒二○二下為贖銅卅斤布充七十段○當作七稻充七百廿束徒二年半贖銅五十斤布充九

十段稻充九百束徒三年贖銅六十斤布充百八段稻充千八十束○中五流近流罪限一千里贖銅佰

斤布充百八十段稻充千八百束中流罪限二千里贖銅佰廿斤布充二百十六段稻充二千百六十束

遠流罪三千里限贖銅百卅斤布充二百五十六段稻充二千五百六十束○中死二絞斬贖銅二百斤

布充二百五十六段稻充二千五百六十束

○按ズルニ此書前後闕逸シテ其詳ナルコトハ知ルベカラズト雖モ其載スル所ニ據リテ考フルニ天平年間ノ物タルヲ知ルナリ此書ニ據レバ五刑ヲ贖フニ稻布ヲ以テセシコトモアリシナリ

任及解任卒死等類者兩省實錄報移刑部刑部即依兩省移准例申官但見在之人猶有延怠者重移兩省

天長四年十一月十七日

〔續日本後紀^{十六}〕承和十三年十一月壬子太政官下符所司令徵前參議左大辨正躬王前參議右大

辨和氣朝臣眞綱等贖銅其符僞太政官符刑部省應徵贖銅事[○]仍准所犯以所帶一官當徒二年

其餘如半年徒贖銅如件省宜承知依件徵納

〔百練抄^五〕康和二年六月廿八日甲斐守惟信大膳亮仲範可贖銅左近府生秦武忠可禁獄之由宜

下是去三月伊勢大神宮神人於途中遇前大相國[○]致無禮之間武忠搦取神人依神宮訴也

〔中右記〕永久二年六月廿六日行重資清來令問親賴從者近安申云件強盜事五月中旬下向攝津之

次親賴申云本主肥前守所爲歟申由所承也卅日又差資清遣爲義召公政事度々在伊豆國之

由雖申上遂不進慍可申切之由仰遣之處已上洛之由承候存今七八日可相待者仰云然者可相待

歟親賴從者近安申詞勘問記讀申之處仰云早與武忠三郎男可對決內舍人重貞罪令明兼勘申之

處解官外贖銅十斤者信貞勘文大路同此也但於贖銅刑部省法也使廳之習贖銅之科只令候散禁

許也然者重召出重貞暫可令候也仍云只任法可行歟

〔百練抄^{近七}〕久安三年六月廿八日天台大衆日吉祇園神人等昇神輿下洛訴申中務大輔清盛朝臣

於祇園社鬧亂事七月廿四日於院諸卿議法家勘申請盛朝臣罪名罪當贖銅

〔台記〕久安三年七月廿三日乙酉頭資信朝臣下明法勘申請盛朝臣罪狀文[○]使勘問法記等仰云於一

院[○]爲今日可被議定可參者令奏有故障不能參上之由廿四日丙戌酉刻參院攝政[○]藤原以下

議清盛朝臣及下手人罪名所申繁多不能記之子刻法皇[○]勅云清盛朝臣可贖銅者

〔本朝世紀〕久安三年八月五日丙申權中納言藤原季成卿着官廳聽政少納言成隆少外記三善成重

合杖一百所繫二日者於法元所增減如此之類是名不移前斷也

〔類聚三代格 十二〕太政官符

應移式部省抑未輸贖銅諸國朝集使返抄移大藏省折留位祿季祿事

右得刑部省解僞謹案獄令云凡贖死刑限八十日流六十日徒五十日杖卅日若无故過限不輸者會赦不免雖有被訴據理不移前斷者亦不在免限者今犯罪之輩相續不絕贖未納逐年彌多追徵之吏徒疲催勘負贖之人无心進納既狎前斷不畏後科望請在京官人抑留位祿季祿雜色人等令檢非違使催徵在外諸人抑留朝集使返抄令濟其事謹請官裁者大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣依請宜令刑部省移式部大藏等省其祿物者令大藏省准贖銅數便即折留充刑部省具其字說應抑留返抄諸國及犯罪官人并贖銅數依件移送又下宜旨檢非違使畢又宜同移之

弘仁十一年十一月廿五日○又見政事要略

〔類聚三代格 十二〕太政官符

應移式兵兩省令折留贖銅未輸之人位祿季祿事

右得大藏省解僞檢案內太政官去弘仁十一年十一月廿五日符僞得刑部省解僞謹案獄令云凡贖死刑限八十日流六十日徒五十日杖卅日若无故過限不輸者會赦不免雖有被訴據理不移前斷者亦不在免限者今犯罪之輩相續不絕贖未納逐年彌多望請折留祿物令填贖贖謹請官裁者宜令刑部省移大藏省其祿物者准贖銅數便即折留令充刑部省者脫省字順符旨行來多妨何者被省所移犯罪之人或遷任解官或任中卒死如是等類不預賜祿即是式兵兩省所掌匪此省之所知折留之色臨事難辨隨移強留諠譁寔繁謹請官裁者正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良岑朝臣安世宣宜停移大藏省令移式兵兩省仍須兩省仰犯人之本司折留其祿令送刑部其遷降外

暇今預徵贖物誰用濟使事謹請官裁者大納言正三位兼行左近衛大將民部卿清原真人夏野實宣停隸檢非違使同亦實錄申官隨卽下知本貫令徵納

天長九年七月九日

〔政事要略 八十二〕太政官符檢非違使

應納刑部省徵送贖銅代物事

右得彼省去閏五月十日解脩謹檢案內徵納贖元是司之最也大同三年以贓贖司依併此省備掌此事其後依弘仁十一年十月廿五日格使檢非違使徵送勘納者家隨家官符宜旨充行色々雜用依天長九年七月九日格停隸檢非違使被付省家又貞觀式備凡贖銅錢者收囚獄司省相共出納者然則省徵司納充公用之色也而今囚獄司官舍顛倒无實年久比者亦復始自廳造子門屋頻年顛倒四面露形殆无宿直之居漸爲狐兔之棲因之年來所徵贖物計便宿納數盜失公用之時轉治官人已下要劇田直常以補填如此之漸作料虛耗事之爲煩莫過於斯伏檢式條獄囚應給衣糧薦席醫藥及修理獄舍之類用贓贖物又延長四年五月廿七日宣旨備以贖銅代物充給左右獄囚多時衣服臨時食料并修理獄舍等類是罪人被下囚獄司之時事也宣旨所稱左右獄囚衣服料等今檢非違使之所職也今件贖銅料既无處於檢納謹獄決罪非省之職掌商量事情專不穩便名實相違不可不申望請官裁贖銅申進永依舊省將對

○對下恐
脫諱字

濟納物實放返抄便令檢非違使行者左大臣宣依請者使宜承知依宣行之符到奉行右少辨藤原朝臣右少史山直

天曆四年十月十三日

納期

〔令義解〕凡贖死刑限八十日

各立限，僞如二犯一流罪者，限一百廿日之類也。流六十日，徒五十日，杖卅

日咎卅日若無故過限不輸者會赦不免謂雖會非常恩而非勅損放者亦不在免限也雖有披訴據理不移前斷者亦不在免

限卽披假有官人無故不上已經廿日准律合杖一百官印斷訖撒銅十斤罪人申訴無故不上非是廿日猶亦

〔尙書周書〕呂刑

五刑之疑有赦五罰之疑有赦其審克之簡孚有衆惟貌有稽無簡不聽具嚴天威墨辟疑赦其罰百錢閱實其罪剗辟疑赦其罰惟倍閱實其罪剗辟疑赦其罰倍差閱實其罪宮辟疑赦其罰六百錢閱實其罪大辟疑赦其罰千錢閱實其罪

〔法曹至要抄罪上〕一過失疑罪事

聞詔律云過失殺傷人者各依其狀以贖論斷獄律云疑罪各依所犯以贖論註云疑謂虛實之證等是非之理均

〔令義解一凡〕贖贖司

正一人掌中贖贖非取財曰贖倍贖亦同也出金當罪曰贖人公入

〔類聚國史百七〕大同三年正月壬寅詔曰云々贖贖司併刑部省

〔延喜式二十九〕凡贖銅錢者收囚獄司省相共出納

〔職原抄上〕刑部省

周禮秋官大司寇之職也斷獄刑法及諸訴訟當省所掌也本朝先例如此然而被置檢非違使之後刑部職掌有名無實但行贖銅等罪之時猶移于當省者也

〔類聚三代格十二〕太政官符

應納雜色人贖銅事

右太政官去弘仁十一年十月○十月、本書所載爲十一月廿五日下刑部省符稱大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣雜色人贖物可令檢非違使催徵之宣旨下彼使畢宜移之者今得使解僞使所行之事非唯巡檢京中拷決犯盜臨時勘事例類繁多又去弘仁十一年十二月十一日宣旨備檢非違使所掌之事與彈正同臨時宣旨亦糾彈之者加以看督長左右各二人差科非一无有暫

名稱

〔新撰字鏡〕具 贖古候反、去、贖也、

〔類聚名義抄〕見 贖俗、即アカフ、 贖神燭反、アカフ、ツタノフ、

〔運步色葉集〕罰錢

〔令義解〕一見 贖贖司

正一人掌略 贖中略曰、

〔律疏名例〕答罪五 贖答十、 贖贖四斤、 贖答廿、 贖贖二斤、 贖答廿、 贖贖三斤、

杖罪五杖六十、 贖贖六斤、 杖杖七十、 贖贖七斤、 杖杖八十、 贖贖八斤、

徒罪五徒二年、 贖贖廿斤、 徒徒一年、 贖贖十斤、 徒徒三年、 贖贖六十斤、 徒徒二年、 贖贖卅斤、

流罪三近流、 贖贖一百斤、 中流、贖贖一百廿斤、

死罪二絞斬、 贖贖各二百斤、

〔唐律疏議名例〕答刑五

一十贖一十斤、 二十贖二十斤、 三十贖三十斤、 四十贖四十斤、 五十贖五十斤、

杖刑五、 六十贖六斤、 七十贖七斤、 八十贖八斤、 九十贖九斤、 一百贖十斤、

徒刑五、 一年贖十斤、 一年半贖十斤、 二年贖十斤、 二年半贖十斤、 三年贖十斤、

流刑三、 二千里贖八斤、 二千五百里贖九斤、 三千里贖十斤、

死刑二、 絞斬贖一十斤、

絞斬贖一十斤、

絞斬贖一十斤、

絞斬贖一十斤、

絞斬贖一十斤、

古事類苑

法律部六

上編

贖罪

贖罪トハ、銅ヲ收メテ罪ヲ贖ハシムルコトニテ、管十ハ銅一斤ヲ以テ贖ヒ、管二十ハ銅二斤ヲ以テ贖フ等ノ法アリテ、銅ナキトキハ其時ノ價ニ準ジテ錢ヲ徵ス、朱雀天皇ノ天慶三年ニハ、銅一兩ゴトニ錢十文ニシテ、一斤百六十文ナリ、花山天皇ノ寛和年間ニハ、一斤六十文ナリ、今天慶三年ノ估價ニ依リテ、銅ヲ計フレバ、管五十、贖銅五斤ハ直八百文、杖一百、贖銅十斤ハ直一貫六百文、徒三年、贖銅六十斤ハ直九貫六百文、遠流、贖銅一百四十斤ハ直二十二貫四百文、絞斬、贖銅二百斤ハ直三十二貫文ナリ、凡テ納贖ニハ各、日限アリテ、其限ヲ過ギテ銅ヲ輸サバルトキハ、其間ニ非常ノ恩赦アリトモ、別勅ノ外ハ免サズ、其銅ハ官ニ入レテ獄舍ヲ修理スル等ノ用ニ供ス、兩人相犯シテ俱ニ罪ヲ得タルト、同居シテ相犯セル者トノ贖セラル銅ナドモ、官ニ入ルヽナリ、サレドモ人ヲ傷損シ、及ビ誣告シテ罪ヲ得テ贖スベキトキハ、其銅ハ告ゲラレシ人損セラレシ人ノ家ニ入ル、贖ハ人ニ因リ、罪ニ因レルコトニテ、犯人ノ盡ク聽サルヽコトニハアラズ、即チ議、請、減、贖ノ人、及ビ年七十九以下七十以上、十六以下十以上、及ビ癡疾者ノ流罪以下ヲ犯セル、又ハ八十以上、十歲以下、及ビ篤疾者ノ盜ヲ犯シ、人ニ傷ケタル、或ハ過失ニテ殺傷シタル、或ハ罪ノ疑ハシクシテ決シ難キハ、並ニ收贖ヲ聽ス、猶ホ法律總載篇ノ老幼癡疾犯罪條、六議篇ノ議法、請法、減法、贖法條等ヲ參看スベシ、

雜載

三三九

勅勘

三一四

停朝參

三一七

封門籍

同

除籍

同

勘責

三二〇

勘事

同

勘當

三二一

詰責

三二四

蟄居

同

籠居

同

恐懼

同

閉門

三二六

追職田位田

同

奪祿 奪位祿 奪手祿 奪公祿 不給節祿

同

款伏 伏辨

三三二

徵過狀

同

犯人忌狀

三三八

外國人忌狀

三三九

返忌狀

同

沒官物處分

二七六

沒官之人

同

沒官例

二七七

雜載

二七八

解免官職

官當

二八五

免所居官

二八八

免官

二八九

除名

同

官當等雜制

二九二

放還本貫

二九三

復敘

同

解官

二九五

停任

三〇四

停釐務

三〇六

追位記 不追位記

三〇七

毀位記

三〇八

降官位 復官位

三一〇

責罪過 怠狀附

古事類苑

法律部六

上編

贖罪

名稱

二六六

贖罪法

同

掌贖物

二六七

納贖期限

二六八

徵贖方法

二六九

贖銅

二七〇

贖錢

二七一

贖布 贖稻

同

贖銅入私家

二七二

收贖例

同

沒官

名稱

二七四

沒官法

同

貞觀八年正月廿三日

〔類聚三代格^{十二}〕太政官符

應減定諸衛府舍人等及放縱之輩求酒食責被物事^{三箇條初條}

右檢非違使起請備謹案貞觀八年正月廿三日格諸家諸人神宴之日不依主招求酒食責被物者不論蔭贖坐從髡鉗欲絕後放逸殊設此嚴科使等理須依格旨加科責然而原其罪過實乖盜科髡鉗之事理非穩便憚之不罪則還似無格忍之將行則事涉慘虐疑殆不斷積習更倍望請衛府舍人等准六位已下把笏者從解却自外一依去天平寶字二年二月廿日勅書決杖八十者

以前右大臣宣奉勅依請

貞觀十六年九月十四日

〔漢書^{高帝}〕九年十二月郎中田叔孟舒等十人自髡鉗爲王家奴

〔漢書^{刑法志}〕孝文卽位^{○中}丞相張敖御史大夫馮敬奏言肉刑所以禁姦所由來者久矣^{○中}臣謹

議請定律曰諸當完者完爲城旦^{○中}春^{臣瓚曰文帝除肉刑皆有以易之故以完易髡以髡代劓以劓代左}

當髡者髡鉗爲城旦春當劓者笞三百當斬左止者笞五百當斬右止及殺人先自告及吏坐受賕枉

法守縣官財物而卽盜之已論命復有笞罪者皆棄市^{○註}罪人獄已決完爲城旦春

理被下知仍左尉紀久光左志中原清重清原季光安倍實成向左獄右志中原明基右府生大江經廣右安倍久忠紀兼康向右獄

〔源平盛衰記四十六〕南都御幸大佛開眼附時忠流罪忠快免事

彼時忠ト申ハ出羽前司知信ガ孫兵部權大輔時信息男也○中檢非違使別當ニモ三箇度マデ成

ケリ無先例事也今暫モ平家ノ世ニアラバ大臣ハ疑ヒナカラマシ此人心猛理ツヨニ御坐ケレ

バ廳務ノ時モ様々ノ事張行テ強盜二十八人ガ右ノ手ヲ切リ給ヒケリ昔惡別當恒成ト云ケル

人コソ強盜ノ類ヲバ切タリトモ傳タレ

〔類聚名義抄四〕天泰堅反ヒヨヒキラル元古

〔類聚名義抄七〕固護ヒヨヒキザマル

○按ズルニ易ノ睽卦ノ其人天且劓ノ正義ニ劓額爲天トアリ劓ハ黥ト同字ニテ鄭玄ノ周禮

ノ註ニ先刻其面以墨窒之トアリ

〔日本書紀十〕元年四月丁酉召阿曇連濱子詔之曰汝與仲皇子共謀逆將傾國家罪當于死然垂大

恩而免死科墨即日黥之因此時人曰阿曇旦

〔日本書紀雄略十〕十一年十月鳥官之食爲苑田人狗所嚙死天皇賦諱而而爲鳥養部於是信濃國直丁

與武藏國直丁侍宿相語曰嗟乎我國積鳥之高同於小墓旦暮而食尙有其餘今天皇由一鳥之故而

黥人面太無道理惡行之主也天皇聞而使聚積之直丁等不能忽備仍詔爲鳥養部

○

〔類聚三代格十二〕太政官符

一禁制諸家并諸人祓除神宴之日諸衛府舍人及放縱之輩求酒食責被物事○中

若有犯者不論蔭贖坐從髡鉗○中

肉刑 髡鉗保入

古代ニ於ケル肉刑ニハ、膝筋ヲ斷チ、手足ヲ斷チ、若シクハ面ニ黥スル等ノ事アリ、而シテ髡鉗モ亦此ニ附載セリ、

名

〔塵添壤囊抄〕十 〔五刑事〕

五刑トテ、人ヲ罪スル刑ノ義歟、如何、中墨、劓、剕、宮、大辟也、大辟ノ外ヲバ肉刑ト云フ

〔史記十
支本紀〕十三年五月，齊太倉令淳于公有罪當刑。○中乃下詔曰。○中今法有肉刑三而姦不

止、(中略)孟康曰、竊、刺二、左其咎安在、○中其除肉刑

斷腹篇

〔古事記下〕卷初天皇逢難逃時求奪其御根猪甘老人是得求喚上而斬於飛鳥河之河原皆斷其族之

膝筋以是至今其子孫上於倭之日必自跋也故能見志米岐其老所在志米岐三字以音故其地謂志米須也

斷足

〔類聚名義抄二〕別明音月、キル、タツ、アシキル、削正

〔百練抄六七〕仁安二年六月十七日、去十日殺繼父、殺母之女切足

斷平

〔玉海〕治承三年五月十九日丙子、今日廷尉等群集大理門邊、切強盜之輩、右手云々、十二人

〔百鍊抄高八〕治承三年五月十九日、別當時忠卿切強盜十二人右手懸獄門、希代事也。經成卿廳務之

時有此例云々、四年正月廿七日、左右獄囚人十五人於山科斬首、又廿一人切手

〔山槐記〕治承三年五月十九日丙子今日於大理忠時門前被切強盜十二人宗貳四等也

尉二盛澄不參、
處於近口、
東看督署是左行
右向云、
各十人、
向日獄手
出奔、
犯人持來、
別當門夫
大辱、
不到、
廳任被仰出、
官人云下部

置木也置木其長五尺許口徑五六寸大持來犯人下部乘居犯人上人乘臥斃又下部等結手頸充木

又下部一人打刀充右手頸以槌打切之一度切之者強不痛不口之間兩度切之時有苦痛無術之氣

此內二人無犯就歸其外懸人或點過路之雜役車令乘歸入獄切了後官人相共可罷向獄門之由大

〔唐律御調〕享保十年巳十二月、赦生總七江訂正寫點被仰付候節差出候書付、
右之部曲奴婢之罪、他へ預り不申候罪は、死罪にても主人之心次第死罪を免候事有之候、是又
日本之風俗に合申候、明朝にては此儀無御座候、且又自家之客女婢を姦候は、姦罪に不能成事
相見へ候、客女と申候者、部曲之娘にて御座候、是又我國之風俗に合申候、明律には此儀相見へ
不申候、且亦五品以上之人は、惡逆以上之罪にて無之候得者、死罪の人を斬罪にも絞罪にも不
申付、自分の宅にて自滅爲致候事有之候、是又此方にて切腹申付候儀、此遺風にて御座候、明朝
には此儀無御座候、

不致裁報之間奉振神輿卽以歸山遠勅之上彌添驚天聽之科滅法之餘更招忘神鑒之咎就中恭敬當社歸依當寺超過餘社卓礫餘寺雖背佛勅令蔑如王事若仰聞子細爭不停自由遠流之罪不再歸禁固之法滿徒年者雖非死罪更無勝劣歟仍以遠流比死罪以禁固代斬刑但遠流之條裁報尙不足者雖禁固隨申請可被行歟抑定綱有逐電之間罪科彌以重疊仍仰京畿諸國愜可令窮進其身之由宣下已畢其間暫休讐訴可待裁斷之由皆悉引率門徒僧綱等不廻時刻早企登山可奉迎神輿之由殊可令仰含給兼又鼻惡之輩狼戾不止者各加同心制止之詞宜廻衆議和平之計者院宜如此仍上啓如件

四月廿八日

大藏卿 宗賴 奉

謹上 天台座主御房

〔西宮記臨時十〕成勸文事 附四名帳 役畢勸文

口傳云

一可入死罪之囚者滅賊布數縱雖及百千反不足十五反猶處流刑是應○檢非違使例也舊役畢勸文致此用意是恤十五年役之故也況亦格文云不悔前過亦有犯終身配役不可赦免者二盜者不注其由也但律條所指盜神聖者絞若賊數顯露聞達天聽等之類縱雖入死罪偏稱廳例難進止歟但見舊勸文等無十五年役者隨狀可斟酌也又舊刑官斷罪或注賊色目或止注賊布若干是設合宜仍用件例云々

〔藤原保則傳〕早田畝盡荒百姓飢饉殍相望群盜公行邑里空虛英賀哲多兩郡在山谷間去府稍遠郡中百姓或劫掠相殺或連租逃散境內丘墟無有單丁○備中前守朝野貞吉以苛酷而治之郡司有小罪者皆著鉗飲人民犯纖毫者捕案殺之囚徒滿獄仆骸塞路公到任之初施以仁政有其小過存其大體放散徒隸遍加賑貸

ヲ云フニアラズシテ、一般ニ行ハザリシヲ云フハラン、弘仁ニ刑セラレシ藤原仲成ノ四位ノ階ニ居リテ、公卿ニアラヌニテモ知ルベシ、其間平將門、藤原齊明、平忠常、安倍貞任、平師妙、源義親ノ梟首ヲ被ルガ如キアリト雖モ、死後ノ事ニ係レルヲ以テ、保元ノ議ニハ之ヲ算ヘズ又陸奥守師綱ガ季春ヲ斬セシモ、朝議ヲ經タルニアラズ、國司ノ權宜ニ出ヅルヲ以テ、亦算ヘザルナルベシ、大日本史ノ說恐クハ誤ナラン、其間罪ヲ犯シ死ニ就ク者ナキニハアラザレドモ或ハ拷訊ニ由リ、或ハ傳説ノ誤ニ出ヅルニハアラザルカ、但シ傳説ノ誤カト疑フモノハ、其書ハ皆當時ノ物ニアラザレバナリ、

〔玉海〕建久二年四月廿六日癸卯、法印送書告云、山門衆徒只今下洛之由所聞及也者、乍驚遣入令見、已有其實集會京極寺云々、倒衣營參^{○中}座主云、禁獄之咎更不可叶、兼能々議定畢、是已其內已只猶難無始終、可被仰可召給其身之由也者、余折申、仰下云、再三不經奏聞、無音參洛、亂入陣中、驚聖聽、刃傷官軍、不奉詔旨、條々之科、衆徒爭逃申哉、加之今所申之旨太無所據、死罪之條、我朝不行之法也、唯申重衡等之例已以勿論、召賜其身之條、又無比類、我朝之法莫過遠流之刑、更不可論罪之輕重、何況其身已逃脫、付主人前、右大將召取其身之上沙汰也、暫奉具神與歸本山、可期定綱出來之時歟、裁斷之有無更不可依狼戾者、座主以三綱仰衆徒、

〔吾妻鏡十〕建久二年五月八日乙卯

院宣云

被院宣稱、近江國住人源定綱、殺害日吉社宮主等之犯罪科不輕、仍先勘罪名、雖可被行所當之罪、科勘錄可及遲怠之上、且爲增神明之威光、且依優衆徒之訴訟於定綱者、處遠流、至下手輩者可禁獄所之由欲被宣下之間、尙任奏狀不申給其身者、不可散鬱結之由、奉振神與、濫訴帝闕、縱不行斬刑於給其身之條者、同死罪、仍都以不可裁許、凡於件刑法者、嵯峨天皇以來停止之後、多經年代、仍

ケルコソウタケレ。○又見三調抄二

〔唐六典六刑部〕凡決大辟罪皆於市。

古者決大辟罪皆於市。自今上宗臨御以來無其刑。但存其文耳。

〔源平盛衰記五〕小松殿教訓事

我朝ニハ嵯峨帝ノ御宇、左衛門尉仲成ヲ被誅シ後、死罪ヲ被止シヨリ以來廿五代ニ及シテ、少納言入道信西ガ執權ノ時ニ相當テ、絶テ久キ例ヲ背キ、保元ノ亂ノ時多クノ源氏平氏ノ類ヲ切宇治ノ左府○藤原賴長ノ墓ヲ堀、死骸ヲ實檢セシ其嗣ニヤ、中二年コソ有シカ、平治ニ事出來テ、田原ノ奥ニ被埋タリシ信西ガ被掘起頸ヲ渡シ獄門ノ木ニ被懸キ、是ハサセル朝敵ニアラテ共併保元ノ罪ノ報ト覺テ、恐シクコソ侍シカ、

〔愚管抄手〕此内亂○保元亂たちまちにおこりて、御方ことなく勝て、どがあるべき者ども、皆はどくに行はれにけり、死罪はどまりて久しく成たれど、かうほどの事なればにや、行れけるを、かたぶく人も有けるにや、

〔日本後紀二嵯峨〕弘仁元年九月丁未、兼右兵衛督從四位上藤原朝臣仲成於右兵衛府。戊申、是夜

令左近衛將監紀朝臣清成、右近衛將曹住吉朝臣豐繼等射殺仲成於禁所。

〔大日本史百四十八列傳〕源爲義、平忠正等十八人亦請降、通憲竟以死論。右大臣藤原雅定、大納言藤原

伊通等議曰、嵯峨帝以後、未嘗加死刑於朝臣。奈何今遽論殺之、誠死一等可也。通憲堅執不聽。因奏

曰、臣聞非常事、人主專斷之。今放反徒於郡國、恐遺後患。不如悉斬帝從之。保元亂

〔大日本史利法〕自弘仁誅仲成、三百四十餘年、公卿無一人抵大辟者。至是行之於諒闇世、以爲淫

刑。保元亂

○按ズルニ、保元物語等ノ諸書ニ、嵯峨天皇ノ朝ニ死刑ヲ廢ストアルハ、刑ヲ公卿ニ上セザル

文未犯罪前入道之人犯死罪者先令還俗可科其罪況謀反罪發覺之後斷其罪問入道之人至于還俗可無疑似但科罪之事可有處分

安和二年四月四日依左大丞消息勘送外帥被入道之間事也明法博士惟宗朝臣公方

〔令義解〕^十凡婦人犯死罪產子無家口者謂雖即家人奴婢亦同家口例也付近親收養無近親付四隣有欲養爲子者

雖異姓皆聽之謂近親四隣之外欲養爲子者既非兄弟之子依法不須資隱其本色不同者皆不聽養

〔唐律疏議〕^{三十}諸婦人犯死罪懷孕當決者聽產後一百日乃行刑若未產而決者徒二年產訖限未

滿而決者徒一年失者各減二等其過限不決者依奏報不決法

疏議曰婦人犯死罪懷孕當應行決者聽產後一百日乃行刑若未產而決者徒二年產訖未滿百

日而決者徒一年失者各減二等未產而決徒一年產訖限未滿而決者杖九十即過限不決者依

奏報不決法謂依下條即過限不決者違一日杖一百二日加一等

〔保元物語〕爲義最後事

中院左大臣雅定入道大宮大納言伊通卿東宮大夫宗能卿左大辨宰相顯時卿ナド被申ケルハ昔嵯峨天皇御時左兵衛督仲成ヲ被誅シヨリ以來久ク死罪ヲ被留依テ一條院御宇長徳ニ内大臣伊周公并權中納言高作隆家卿ノ花山院ヲ射奉シカバ罪既斬刑ニ當ル由法家ノ輩勘ヘ申シ

カ共死罪一等ヲ減ジテ遠流ノ罪ニ宥ラル今改テ死刑ヲ可被行ニ非ズ就中故院羽御中陰也

旁被宥ハ可宜由各被申ケル共少納言入道信西内々申ケルハ此儀不可然多クノ凶徒ヲ諸國ヘ

被分遣ハ定テ猶可爲兵亂基其上非常ノ斷ハ人主專ニセヨト云有文世中ニ常ニ不有事ハ人主

ノ命ニ從フト見エタリ若重テ僻事出來リナバ後悔何ノ益アラント申ケレバ皆切ラレニケリ

誠ニ國ニ死罪ヲ行ヘバ海内ニ謀叛者不絶トコソ申ニ多クノ人ヲ誅セラレケルコソ淺猿ケレ

正ク弘仁元年ニ仲成ヲ誅セラレテヨリ帝王二十六代年記三百四十七年絶タル死刑ヲ申行ヒ

知康云々、今日前三位中將重衡於南都須顯云々、是爲御藍○東大寺火災張本之間、衆徒族申請之云々、

〔吉記〕元曆二年○文治元年六月廿二日癸酉、入夜今日前內大臣宗盛首可被渡之由、風聞依爲希代事、駕

敝車遣出於六條高倉云々、黃昏於六條河原延尉等請取之、無左右、午、納桶武士渡延尉之、梓魁首宗

盛卿首也、大臣首渡之、惠美大臣例、誠活代珍事、看督輩紅冠、退圍繞、次前右衛門督清宗首、次延尉七

人府生久忠經弘志明基尉公朝、信盛章貞大夫尉知康、已上、口、將、帶、弓、箭、其路西行六條至東洞院北行至

中御門西行至西洞院北行至獄門云々、

〔百練抄後十鳥羽〕文治元年六月廿一日壬申、今日國忌廢務也、前內大臣○平并右衛門督清宗於近江

國勢多邊、斬首云々、三位中將重衡於南都又斬首法華寺鳥居前合戰之時、廿三日甲戌、前內大臣

并右衛門督清宗等首、檢非違使請取之、懸獄門樹法皇於三條東洞院御見物、可鳥彼首哉否事、被尋

三丞相云々、

大判

〔日本書紀雄略十四〕二年七月、百濟池津媛、達天皇將幸姪於石河橋、舊本云、石河天皇大怒、詔大伴室屋大

連、使來目部張夫婦四支於木、置假廢上以火燒死、百濟新撰云、己巳年、蓋南王立、天皇遣阿禮、來

皇天

〔日本書紀欽明十九〕二十三年夏六月、是月、或有譜馬飼首歌依曰、歌依之妻、逢臣讚岐、鞍轡有異、既而熟視

皇后御鞍也、卽收、廷尉鞠問極切、馬飼首歌依乃揚言誓曰、虛也、非實若是實者、必被天災、遂因苦問、伏

地而死、死未幾時、急災於殿、廷尉收縛其子守石與中潮水、守石、名瀨、將投火中、古之制也、呪曰、非吾

手投、呪訖欲投火、守石之母祈請曰、投兒火裏、天災果臻、請付祝人、使作神奴、乃依母請許、沒神奴、

僧尼處判

〔政事要略八十一〕謀反罪發覺、斷其罪之間、犯人忽入道訖、可科本罪否

右檢僧尼令曰、僧尼有犯、准格律合、徒年以上者、還俗、許以告牒、當徒一年、義解云、徒以上者、死罪以下也、告牒者、僧尼得度公驗也、依律、難犯死罪者、除名、卽知僧尼犯死罪者、亦先還俗、然後處死者、據檢此

其國可有用意於南北西之三方者不可然可被遣東海東山等之遠國也沙汰之趣無難而叶賴朝之雅意歟遣御使徒經數日之條太以見苦歟又事似有私之故也秦經太以甘心五月三日乙酉午刻頭弁光雅朝臣爲院白河後御使來余着直衣謁之間二箇條事中一前內大臣未被下除名宣旨被勅罪名之時被除名了載配流官符之時左遷之條如何大臣之配流被補太宰權帥定例也而今度可被遣關東何東西參差不能右遷准納言以下例左遷權守又無其謂歟左右之間可計奏者申云於權帥者一切不可然權守之條又無謂可爲新儀者只無左遷之儀如何不可似彼高明伊周等之例故也者七日己丑今晚左馬頭能保大夫尉義經等下向東國前內大臣父子并郎從十餘人相具云々是非配流之儀云々

〔玉海〕元曆二年

元文治

六月廿二日癸酉大藏卿秦經傳院

白河後

宣云前內府宗盛并其息清宗三位中

將重衡等義經相具所參洛也而乍生不入洛無音於近江邊可梟首其首可渡使廳哉將可棄置哉可隨院宣之由賴朝卿令申旨義經所申也可計申者但重衡遣南都了云々余申云此事左右只可在勅定者廿

三日甲戌秦經卿又示送云此事難計申由令申太以無本意自今以後如此事不可被仰合歟云々此事勿論也不足言也光長朝臣只今於院定長語天氣之趣卽如此云々不能左右古來備勸問之人若有不思得事之時伏請聖斷已爲流例然而未聞蒙勸責之例凡於事爲法皇不許之身雖一日經廻誠可恐之就中爭於此事者初爲生虜參洛之時所存計申了事宜之由有天氣又人々響應而其事不遂行其後沙汰之趣一切不聞及今又有此問誰人申是非哉可謂嗚呼云々傳聞重衡首於泉木津邊切之令懸奈良坂云々於前內府父子首及晚渡使廳了院有御見物云々は左大臣申行云々

〔吾妻鏡〕

元曆二年

元文治

六月廿三日甲戌前內大臣并右衛門督清宗等首源廷尉經家人等指

向六條河原檢非違使大夫尉知康六位尉章貞信盛公朝志明基府生經廣象康等莅其所請取之懸獄門前樹矣此事頭右大辨光雅朝臣參陣仰別當家通別當仰頭辨頭辨傳大夫史隆職隆職傳廷尉

同○元曆二廿二日、九郎判官義經、大藏卿泰經卿許へ申送ケルハ、前内大臣父子、近江邊ニシテ可切、其頭洛中へ持參シテ可渡、檢非違使歟、將亦多邊ニシテ可棄歟、兩箇趣兼言上、事由可隨勅定之由、賴朝卿所令申之也、又重衡卿ハ可遣、東大寺之由、同令申之間、相具シテ可入洛ト申タリケレバ、泰經彼狀ヲ有奏聞内大臣許ニ被遣テ可計申由、被仰ケレバ、後徳大寺實定被申レケルハ、彼兩人被行斬罪上ハ、被渡首事可有議定歟、凡渡頭事ハ於京師人爲令見實也、而ルニ先日乍生已ニ被渡洛中、今度義經相具シテ上洛行、斬罪之相依何不審、重又可被渡大路哉ト有ケレ共翌日二十三日ニ、檢非違使知康、範貞、信盛、公朝、明基、經弘等、六條河原ニシテ彼兩人首ヲ請取、大路ヲ渡シテ懸獄門左柵木ケリ、京中白川邊上、近國輩就集テ見之法○後、河ハ三條東洞院ニ御車ヲ立テ有御覽謹考故實、三位已上ノ首懸獄門事無先例、稱徳天皇御宇ニ、大師藤原惠美朝臣押勝謀叛、時軍士石村主近江國ニシテ斬押勝首、傳于京師之由、華載國史、渡其頭鼻獄門之由、無所見、近ク平治ニ右衛門督信賴、ナシモ罪深クシテ被刎首タリシカ共、獄門ニハ不被懸、如此例依時儀被始行事ナレドモ、兩度被渡大路之條、刑法甚シトゾ人傾ギ申ケル、

〔吾妻鏡〕壽永三年○元曆六月廿七日甲申、堀藤次親家郎從、被鼻首、是依御臺所御憤也、四月之比爲御使討志水冠者之故也、其事已後、姬公御哀傷之餘、已沈病床、給追日憔悴、諸人莫不驚駭、依志水誅戮事有此御病、偏起於彼男之不儀、縱雖奉仰、内々不啓子細於姬公御方哉之由、御臺所強憤申給之間、武衛不能遁逃、還以被處斬罪云々、

〔玉海〕元暦元年○文治四月廿一日甲戌、以泰經卿密々被尋問事等、○中一前内府○平宗盛事如何、義經申云、相具可入京歟、可留置河陽之邊歟、死生之間事可被仰合賴朝歟、私申遣了飛脚未到、進退惟谷者、此上如何可計申、申云、此事更不可思食煩也、被仰追討之由、可鼻首之由、雖無疑爲生虜參上、其上可賜死之由、雖被仰、我朝不行死罪之故也、保元有此例、時人不甘心、仍今度無左右可被處、還流也、而

以案之平家昨日マデハ、朝家之重臣トシテ雖列卿相、今日ハ國家之逆臣トシテ已蒙勅勘、就中輕命捨身合戰ヲ仕ル事、且ハ奉重朝威、且ハ爲雪父之耻也、舍兄鎌倉頼朝深ク此旨ヲ存ス、而ルヲ且ハ取得ル處ノ平家之首任申請大路ヲ渡サレズバ、向後何ノ勇有テカ朝敵ヲ可誅戮ト殊ニ憤リ申ケレバ、力及バセ給ハデ、終ニ大路ヲ渡シ獄門ニ懸ラレケリ、昔ハ列北關之群臣、足雲上之臺ヲ蹈シカ共、今ハ成西海之凶賊首ヲ獄門之枝ニ懸ラレタリ、京中ノ貴賤多ク是ヲ見ル老タルモ若キモ、涙ヲ流シ袖ヲ不絞ト云事ナシ、

〔源平盛衰記 四十五〕虜人々流罪附伊勢勅使改元有否事

同年○元曆二 廿日ハ、近江國篠原宿ニ著ス、廿二日ニ、勢多ニテ大臣殿○宗 毛右衛門督○宗盛 毛各

別ノ處ニ奉置ケレバ、今日ヲ限ト思給テ、右衛門督ハ、何レノ所ニゾ、一所ニテコソ如何ニモ成果

ント思ツル、生ナガラ別ヌルコソ悲ケレトテ、涙ヲ流シ給ゾ哀ナル、内大臣判官○源 義經ニ被仰ケル

ハ、出家ハ免シナケレバ力及バズ、僧ヲ請シテ受戒最後ノ知識ニ用バヤト宣ヘバ、其邊相尋テ、金

性房滿蒙ト云僧奉請、知識參テ最後ノ事勸メ申ケルニ、○中 内大臣可然知識成ト思召、西ニ向

合掌餘言ヲ止テ念佛三百返計ゾ唱ヘ給橋内右馬允公長、劔引側メテ後ヘ廻ケレバ、大臣殿念佛

ヲ止テ、右衛門督モ既ニカト宣ヒケル詞ノ未終ケルニ、首ハ前ニ落ニケルコソ悲ケレ、彼公長ハ

平家重代ノ家人也、新中納言○知 盛ノ許ニ朝夕伺候ノ者也ケリ、身ヲ願ミ世ヲ渡ラント思フコソ

悲ケレトテ、涙ヲ流シケル、其後上人右衛門督ノ許ニ行向ヒテ奉授戒樣々教訓シ念佛ス、メ

ケレバ、大臣殿ノ最後如何御坐ツルト問給、上人何事モ思召切リ目出コソ御渡候ツレト申セバ、

サテハ嬉敷候トテ、念佛高ク唱ツ、今ハ疾々ト被仰ケレバ、今度ハ堀彌太郎切テケリ、サシモ罪

深ク難離シ給ケレバ、身ヲバ公長ガ沙汰ニテ、一穴ニゾ埋ミケル、

内大臣京上被斬、附重衡向南都被切并大地震事

後皆持向八條河原、大夫判官仲賴已下請取之、各付于長鎗刀、又付赤簡、平某之由、各注付之、向獄門懸樹、觀者成市云々、

〔百練抄^十後鳥羽〕元暦元年二月十三日壬申、平氏等首被渡之云々、權中納言家通卿參入、仰下賊首可懸獄門樹之由、

〔源平盛衰記^{三十八}〕平家首掛獄門事附維盛北方被見頸事

同年二月元 七日夜半ニ、西海ノ追討使源九郎義經飛脚ヲ奉テ申ケルハ、逆徒自去五日、攝津國一

谷ニ上ニハ城郷ヲ構ヘ軍陣ヲ張り下ニハ砂濱ヲ堀テ逆木ヲ立、大將軍前内大臣^{宗盛}○平已下ハ兵

船ニ乗テ海上ニ浮ブ、其勢十萬餘騎也、南濱ノ擊手ハ範賴北ノ山ノ搦手ハ義經、今日辰刻ニ兩方

ヨリ擊襲賊徒之軍、忽ニ敗レ、平三位通盛卿前但馬守經正、前薩摩守忠度、前若狹守經俊、前備前守

國盛、備中守師盛、前武藏守知章、散位業盛、敦盛、郎從前越中守盛俊等討捕畢ヌ、此外斬首者三百八

十人、前左三位中將重衡卿ハ甲冑ヲ脫棄テ上ノ山ヘ遁入トイヘ、其延ヤラズシテ即虜レ畢ヌ、前

内大臣前平中納言教盛以下ハ船ニ乘逃去畢ヌトゾ申ケル、十三日ニ大夫判官仲賴、六條河原ニ

テ九郎義經ノ手ヨリ平氏ノ首共請取テ、東洞院ノ大路ヲ北ヘ渡シテ、左ノ獄門ノ樗木ニ懸ラル、

通盛、忠度、知章、經俊、師盛、經正、業盛已上、大將軍盛俊家貞侍此人々ノ頸也、抑此頸ドモ、大路ヲ渡シ

獄門ニ可被懸之由、範賴義經兄弟兩人奏シ申ケレバ、法皇^{白河後}思召煩ハセ給テ、藏人右衛門權佐

定長ヲ御使ニテ、太政大臣、左右大臣、内大臣堀川大納言ニ有御尋、五人ノ公卿一同ニ被申ケルハ、

此輩ハ先帝^諱○安ノ御時、戚里ノ臣トシテ久ク朝家ニ奉仕就中卿相ノ首、大路ヲ渡シ獄門ニ掛ラ

ル、事未ダ其例ナシ、範賴義經ガ申狀強チニ不可有御許容ト被申ケレバ、渡サルマジキニテ有

ケルヲ、九郎義經重テ奏シ申ケルハ、父義朝ハ、保元ノ逆亂ニ、御方ニ參テ凶徒ヲ退ケ、雖拙合戰之

忠平治ニ惡右衛門督信賴卿ノ語ヒニヨリ、不意蒙勅勘問、其頸大路ヲ渡サレテ、曝骸於獄門、彼ヲ

奉奔院○河後周章對戰之間所相從之軍僅卅冊騎依不及敵對不射一矢落了欲懸長坂方更歸爲加勢多手赴東之間於阿波津野邊被伐取了云々東軍一番手九郎○源經軍兵力ヲ波羅平三云々其後多以群參院御所邊云々法皇及祗候之輩免虎口實三寶之冥助也

〔吾妻鏡〕壽永三年○元曆正月廿六日丙辰今朝檢非違使等於七條河原請取伊豫守義仲并忠直

兼平行親等首懸獄門前樹亦囚人兼光同相具之被渡訖上卿藤中納言職事頭辨雅光朝臣云々

〔百鍊抄後十〕鳥羽元曆元年正月廿六日丙辰鼻伊豫守義仲首新之廿日字九郎義經相具之廷尉於六條

河原請取之懸東獄門樹見者如堵此外字根并今井樋口等雖爲降人渡路頭

〔玉海〕壽永三年○元曆二月十日己巳藏人右衛門權佐定長來仰院○後白河宣云平氏首等不可被渡旨

思食而九郎義經加羽範賴等申云被渡義仲首不被渡平氏之條太無其謂何故被惜平氏之由殊謂

申云々此條如何可計申者申云論其罪科與義仲不齊又爲帝外戚等其身或昇卿相或爲近臣雖被

逐誅伐被渡首之條可謂不義近則信賴卿頭所不被渡也加之神璽寶劍猶在殘之賊手無爲歸來之

條第一之大事也若被渡此首者彼賊等彌令勵怨心歟仍旁不可被渡其首將軍等只一旦申所存歟

被仰子細之上何強執申哉賴朝定不承申此旨歟此上左右可在勅定者定長云被問左大臣○藤原經宗

內大臣○藤原實定忠親卿等各申不可被渡之由一同云々十三日壬申此日被渡平氏首其數十公卿

頭不可被渡之由雖有其議武士猶謂申云々如何通盛卿首同被渡了可彈指之世也

〔吾妻鏡〕壽永三年○元曆二月十一日庚午平氏等之首可被渡大路之由源氏兩將經奏聞仍博陸

基通○藤原基通三公○左大臣藤原經宗右大臣堀川亞相忠親等被預勅問彼一族仕朝廷已年尙可有優恕

沙汰歟將又範賴義經爲果私宿意所申請非無道理歟兩樣之間難決愜慮宜計申之由云々而意見

雖區分兩將強申請之間遂可被渡之由治定云々勅使右衛門權佐定長數度往反云々十三日壬

申平氏首聚于源九郎主六條室町亭所謂通盛卿忠度經正敏經敦盛知章經俊業盛盛俊等首也然

烏帽子懸ニツラスキテ結付タリ、土ノ穴ヲ堀テ云事ダニ漏ト云、マシテ左程ノ座席ニテ、加樣ニヤ有ベキト、後ヲシロシ、石ニ口ス、ギ流ニ枕スト云事有ト思者ハ、偷ニ座ヲ起ツ人モアリケルトカヤ、

〔源平盛衰記 二十六〕義基法師首渡事

同年○養和元年二月九日、武藏權守源氏義基法師ガ首同子息石川判官代義兼生捕檢非違使實俊判官七條川原ニテ武士ノ手ヨリ請取テ、東洞院ノ大路ヲ渡シテ、頭ヲバ獄門ノ左ノ朽木ニ懸ケ、虜ヲバ被禁獄馬車街衛ニ充滿テ、見人幾千萬ト云事ヲ知ズ、此義基法師ト云ハ、故陸奥守義家ガ孫五郎兵衛尉義光子河内國石川郡ノ住人也、兵衛佐賴朝ニ同意ノ聞エ有テ、骸ヲ獄門ニ被掛ケリ、今高倉院崩御、諒闇ノ年ニ首ヲ被渡事如何ガ有ベキト沙汰有ケレ共、諒闇ノ年、賊衆ノ首ヲ被渡事、去嘉承二年七月十九日、堀川天皇隠レサセ給ヒシニ、同三年正月廿九日ニ、對馬守源義親義家一男被渡例トゾ聞エシ、○又見百練抄

〔百練抄九德〕壽永二年十一月廿日、院中輩首百十一、懸五條河原、義仲監臨、軍呼三度、

〔源平盛衰記 三十五〕木曾頭被渡事

二十六日○元暦元年正月ニ、伊豫守義仲ガ首、大路ヲ被渡ル、法皇○後白河ハ御車ヲ六條東洞院ニ立テ被御覽、九郎義經、六條河原ニテ檢非違使ノ手ニ渡ス、檢非違使是ヲ請取テ、東洞院ヲ北ヘ渡シテ、左ノ獄門ノ朽木ニ懸ラル、其首四ツ、伊豫守義仲、郎等ニ信濃國住人高梨六郎忠直、根井四郎行親、今井四郎兼平也、是三人ハ四天王ニ數ヘラレテ一二ノ者ナリケレバ、義仲ト同ク懸ラレタリ、何者ガ所爲ニカ、獄門ノ木ノ下ニ札ヲ書テ立タリケルハ、

信濃ナル木曾ノ御料ニ汁懸テ只一口ニ九郎義經

〔玉海〕壽永三年○元暦元年正月廿日庚戌、卯刻人云、東軍已付勢多、未渡西地、○中略敵軍已襲來、仍義仲

抑昔武藏權守平將門已下ノ朝敵ノ頭共ハ、兩獄門ニ納メラル、文覺爭カ義朝ノ首ヲバ可盜取是ハ兵衛佐源朝頼ニ謀叛ヲ勸シガ爲ニ、奈古屋ガ沖ニ懸タル頭ノ有ケルヲ以テ、假初ニ僞申タリケル也、實ニハ父義朝ノ首、獄門ニ有ヨシ聞給ヒケレバ、世靜テ後、文覺上人ヲ使トシテ、奏聞シテ申賜ハリ給ケリ、彼首ハ東ノ獄門ノ前ノ樗木ニ係タリケルヲ、紺五郎ト云、紺攝ノ有ケルガ、下野守在生ノ時ハ、折々ニ參リテ深ク懇申ケレバ、不便ノ者ニ被思レケルガ、其情ヲ忘レズ、博士判官兼成ニ付テ、年來哀レ不便ト思召ス人也、久ク獄門ニ被梟テ、驢耻給事目モアテラレズ悲シク侍今ハ被納置候ヘカシ、孝養仕ラント申タリケレバ、兼成大理ニ申、御免有テ紺五郎申給テ、左ノ獄門ノ乾ノ角ニ墓ヲ築テ埋タリケルヲ、今度堀起シテ見ケレバ、頼ニハ義朝ト云銅ノ銘ヲ打タリ、正清ガ首モ同ク在ケリ、

〔吾妻鏡〕四元暦二年八月卅日庚辰、二品御素意、偏以孝爲本之處、未盡水菽之酬、而平治有事、嚴閣朝父義朝

天亡給之後、以毎日轉讀法華經被備、沒後追福、而今極榮貴給之故、今被企一伽藍作事、可安先考御廟於其地之由、存念御之間、潛被同奏此由、法皇河後亦敕感動功之餘、去十二日仰判官於東獄

門邊被尋出故左典廐首、相副正清號鎌田二首、江判官公朝爲勅使被下之、今日公朝下著仍二品爲

令奉迎之、參向自稻瀬河邊給御遺骨者文學上人門弟僧等奉懸頸、二品自奉請取之還向于時改以

前御裝束水緑色著素服給云々、

〔源平盛衰記〕四鹿谷酒宴靜憲止御幸事

酒宴ノ人々モ少々座ヲ立ケルニ、瓶子ヲ直垂ノ袖ニ懸テ頸ヲゾ打折テケル大納言見之、戲呼事ノ始ニ、平氏倒レ侍リヌト被申タリ、面々啖壺會也、康頼突立テ、大方近代アマリニ平氏多シテ持醉タルニ、既ニ倒亡ヌ、倒タル平氏頸ヲバ取ニ不如トテ、是ヲ差上テ、一時舞タリ、サテ取タル首ヲバ可懸也トテ、大路ヲ渡スト云テ、廣縁ヲ三度廻シ、獄門ノ樗木ニ係ト名テ、大床ノ柱ニ

去程ニ、舍人成澤同ク都へ歸リケルガ、中出雲前司光泰五十餘騎ニテ、信西ガ行衛ヲ尋來ルニ、木幡山ニテ行逢馬モ舍人モ見知タレバ打伏セテ問ケルニ、中アレコソソヨト教ユレバ、即堀ヲコシテ見レバ、未ダ目ハタラキ、息モ通ヒケルヲ、頸ヲ捕テゾ歸リケル、出雲前司光泰、信賴卿ニ此山ヲ申セバ、同○平治元年十二月十四日ニ別當惟方ト同車シテ、光泰ノ宿所神樂岡へ行向テ、此頸ヲ實檢ス、必定ナレ、中懸テ明ル日大路ヲ渡シ、獄門ニ可被懸ト被定ケレバ、京中ノ上下河原ニ市ヲナシテ見物ス、信賴義朝モ車ヲ立テ是ヲ見ル、中朝敵ニアラザレバ勅定ニモアラズシテ、頸ヲ獄門ニ被懸モ前世ノ宿業ト云ヒナガラ、去ヌル保元ニ絶テ久シキ死罪ヲ申行ヒシ報カトゾ人々申ケル、

〔平治物語^三〕長田義朝討六波羅馳參事附大路渡被掛獄門事

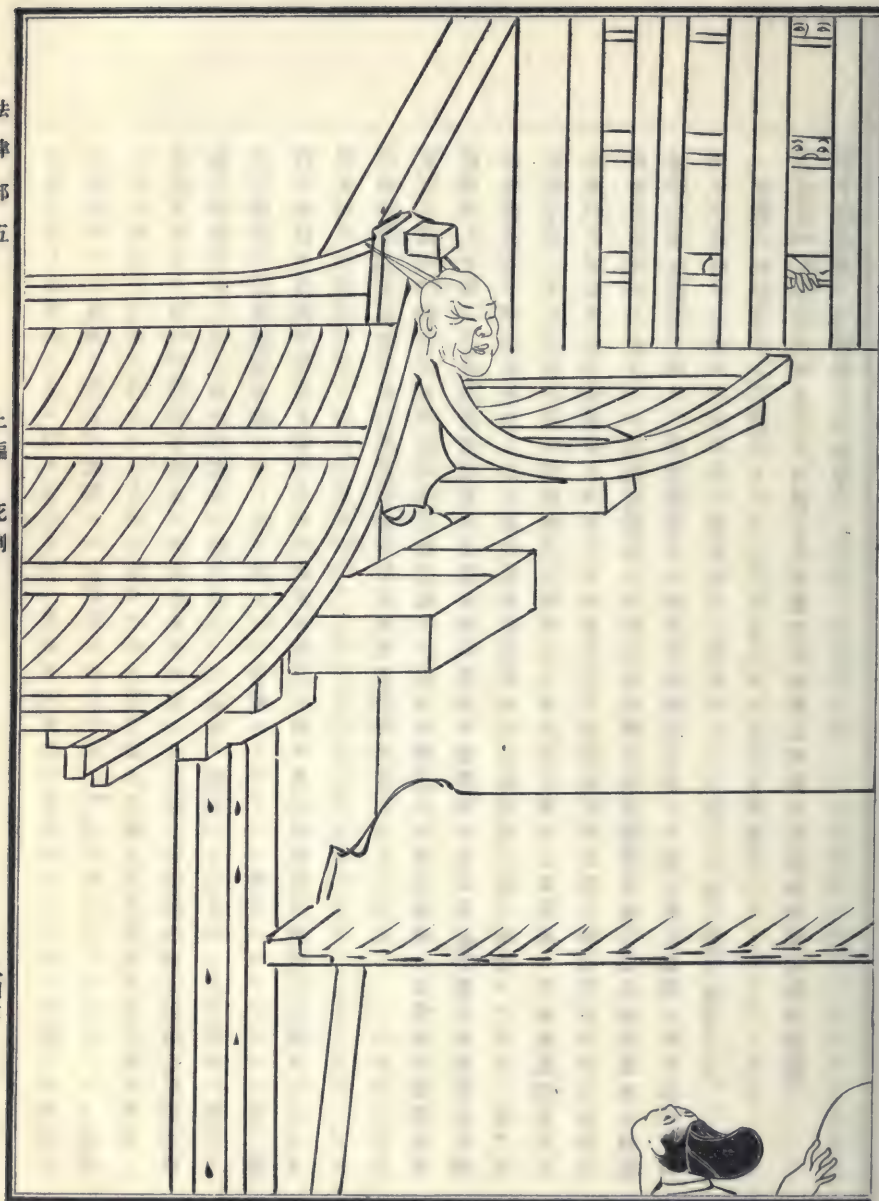
去程ニ、同○平治二年正月六日、一院○後白河仁和寺殿ヨリ出サセ御坐タレ共、三條殿ハ去年焼ヌ、御所ニ可

成所モナケレバ、八條堀河皇后宮大夫顯長卿ノ宿所ヲ御所ニナシテ入セ給、翌日尾張國住人長田四郎忠宗、子息先生景宗上洛シ、前左馬頭義朝并鎌田兵衛政家ガ頸ヲ持參シテ不次ノ賞ヲ可蒙由望申ケリ、是ハ昔ノ平大夫知賴ガ末葉、賀茂次郎行房ガ孫、平三郎宗房ガ子孫也、義朝重代ノ家人トシ、鎌田兵衛ガ舅也、然レバ平大夫判官兼行、二條京極ノ千手堂ニ行向テ、二ノ頸ヲ請取テ、即被實檢、今日ハ重日トテ不被渡、同九日平大夫兼行總判官信房、青侍義守忠目、範守、善府生朝忠、清府生季道此等ヲ始メテ、檢非違使八人行向テ、西洞院ヲ上リニ渡シ、左ノ獄門ノ樗ノ木ニゾ掛タリケル、何ナル者カシタリケン、左馬頭、元ハ下野守タリシカバ、一首ノ歌ヲ書付タリ、

下野ハ紀伊守ニコソ成ニケレヨシトモ見ヘヌアゲヅカサ哉

〔百練抄^七〕永曆元年正月九日、前左馬頭義朝并郎從正清等首、廷尉請取、懸東獄門前樹、

〔源平盛衰記^{十九}〕義朝首出獄事



〔梟首圖 平治物語
繪卷所載〕

三
二



由下知義綱朝臣了、而彼朝臣不趣任國之前先爲相尋、遣郎等字藤別當之處、已切頭了、自餘黨類請降參來、武勇之威、自滿四海之所致歟、後聞故賴義朝臣、去康平五年、自陸奥國所斬進、眞任頭請取之時、先召檢非違使於陣頭、可請取之由職事仰下、仍檢非違使等東帶云々、今日之儀不然、去夕頭弁以書宣旨下左府、○源房左府下弁被仰下檢非違使也、仍不東帶歟、其書宣旨詞至犯人頭者、令檢非違使等請取至降人二人、○某隨義綱朝臣申請、可原免者、右少弁有信被談也、

〔中右記〕天仁元年正月廿九日庚辰、今日但馬守正盛隨身源義親首入洛、仍密々爲見物作女車、午時許行、向先正盛宿久我邊、經鳥羽殿、□御號之於鳥羽作路邊窺見、首指鉾令持下人五人、各付赤比禮書

名、○誠首源義親又從四人首其左右取打物步兵着甲冑者、四五十人許相從、次但馬守正盛、次男降人一人騎馬相

具、次郎等百人許、劍戟曜日、弓馬連、道其路從九條東行、於七條末河原檢非違使等受取、經七條大路

西行、昇自西大宮路懸首於西獄門樹檢非違使大夫尉二人平兼季、○東帶重服、是康平年中、浮四貞任受取之、源光國布六位尉以下布衣冠、○尉盛重親實、季清重時、繁賢、忠實、清行、重、府生忠重、有賢、下藤爲例歟、源光國、○但降人正盛申請歟、見物上下車馬來道、凡京中男女盈滿道路、人々如狂、

凡諒闇之中、雖犯人首入洛事、頗可有議定歟、就中新年祭春日祭以前觸穢、遍天下歟、旁可有用心也、

但於正盛事者、世間氣色、不可論左右、

〔古事談二〕○義親ガ首ヲ被渡ケル時、人々多以見物仍知足院殿、○藤原忠實、實、可見物之由、大殿○藤原二

令申玉ケレバ、仰云、被渡眞任首之時、可見物之由令申宇治殿、○藤原賴通之處、被仰云、死人之首、不能見

物云々、仍不御覽云々、是又不可令見物給云々、

〔百練抄七〕○平治元年十二月十七日、少納言入道信西首、廷尉於川原請取、渡大路懸西獄門前樹件

信西、於志加良木山自害、前出雲守光保所尋出也、

〔平治物語〕信西首實檢事附大路渡被懸獄門事

を以て、斬首を掛ん爲に、此樹を獄門の前に植へたる歟、論語に、栗樹を植て、民をして戰栗ならしめんと云し例もあり、又明朝の田汝成が熙朝樂事に云書に、白柿ツナギを串に貫き、大なる橘に刺て、正月の祝物として供す、白柿大橘を百事大吉と取なし、賀物といへる由見へたり、其物の名を取て、他事に擬へ用ること、他國にも其例なきにしもあらず、

〔箋注倭名類聚抄〕棟 玉篇云、棟、音棟、本草云、阿不知、本草和名木部下云、棟、其子如指頭、白而黏、

可以浣衣者也、說文、棟、木也、郭注、中山經云、棟木名、子如指頭、白而黏、可以浣衣、係、後人訓、

〔扶桑略記〕二十九條、治曆五年元久元年閏十月四日、左衛門尉家宗、梶摩多山強盜致親首、并引率降人等入洛、

〔中右記〕寛治八年元久元年三月八日、已卯、早旦、依、無女房、倍膳參内、源中將、藏人兵部大輔源賴朝治部少輔源賴朝參會共議云、今日陸奥守源義綱朝臣、隨身降人并頭入洛、必可見物者、供御膳後、四人同乘、向二條末河原邊見物、上下車馬、已如盛市、依命立右大將源賴朝御車邊、申時許入洛、先頭二源賴朝同男師源賴朝、妙高

長戟末、付赤小幡、注其姓名、左右捧長劍、步兵卅人許相挾、次義綱朝臣着麴塵襖、袴、款冬衣、乘黑馬、

額白郎等二百人許、玄甲與雲連、白刀向日耀、此中降人二人、貞原騎馬相具、行向四條末、檢非違使等

請取了、又降人等隨申請免給了、由下知云々、請取之後、令持頭於着欽者、自四條鳥丸五條大宮等大

路、鼻頭於西獄門前樹上、檢非違使大夫尉藤經仲衣冠平貞弘以下同爲後、同貞度、志宗綱信良、府生滑

原忠重、文部保成等也、先看督長等二行前行、次頭、次檢非違使、以下膳爲先、人々走車馬、遮道路、又以

見物、或折車軸、或飛鳥帽已多及耻辱者是、雖不勝感興、還表至愚歟、中夜半許、民部卿被參、伏座、有

臨時叙位從四位上源朝臣義綱從四位下藤原朝臣爲房、抑義綱朝臣者、今日搦進犯人等賞尤理也、

爲房朝臣已未功課者、加叙之條甚無其謂歟、并時春日行幸行事賞云々、去年出羽守信明欲上洛間、

件犯人等已燒其館、悉盜財寶、守信明爲免其命、逃散山中、不知在處、謀反之甚、何事過之哉、仍可追討、

[illegible]

〔安齋隨筆〕獄門ノ栲木 古き書共に、首を斬て獄門の栲の木に掛くると云ふことあり、栲の字を用ゐるは誤也、和名抄に棟阿布智とあり、此訓古し、栲は昔此方になき木なれば、獄門に植へべきこと有べからず、獄門に植しアフチハ棟の字也、何故獄門に棟を植しぞと云、理は何の書にも所見なければ、詳に知れず、無證の推量の説は無益なれども、愚私に推量するに、國言に、血穢るゝを血にあへるとも、アヘ血とも云に付て、血にアヘル意にて、棟の名のアフチと云

口市司可懸外樹之事仰、

〔扶桑略記^{二十五}〕

宋雀

天慶三年正月廿四日、一云、東大寺顯宗院後有等身執金剛神之像、頭光右方天衣

切落、古老云、天慶之比、有平將門謀危國家、兵革無絕、公家爲免其難、祈請此寺神像、已隱廿餘日、寺家

稱怪、屢經奏聞、疑合戰之不利、彌以恐怖、不經幾日、像已立本壇之跡、見其天冠之傍、右方已缺落、又其

身濕如流汗、現爲賊被射損之相也、依此祥異、遂梟將門之首、

〔日本紀略^八〕

花山

寬和元年五月十三日丁巳、被定犯人左兵衛尉藤原齊明、并舍弟散位保輔、罪科事、

廿日甲子、犯人左兵衛尉藤原齊明、首令懸獄門、件人有犯過、山陽南海西府等、可追討進之、由給官符、

倫遁身於關東之間、於近江國高島郡、前播磨掾惟文主所梟之首也、可有勳賞之由、被宣下畢、

〔日本紀略^{十三}〕

後一條

萬壽元年三月十日丁酉、京中強盜被追捕之間、犯人逃入散位顯長母尼宅、質尼檢

非違使、捕之梟首懸獄門、

〔日本紀略^{十四}〕

後一條

長元四年六月十六日壬辰、賴信朝臣梟平忠常首入京、件忠常受病死去、但有議定、

給彼忠常從類、依爲降人也、

〔扶桑略記^{二十九}〕

後冷泉

康平六年癸卯二月十六日、鎮守府將軍前陸奥守源賴義、梟俘囚安倍貞任、散位藤

井經清等三人首、傳京師、檢非違使等向東河受取、繫其首於西獄門、見物之輩貴賤如雲、先是獻頭使

者、到近江國甲香郡、開宮出首、令洗梳其鬚、件擔夫者、貞任從者降人也、稱無怖、由使者倭仗季俊仰曰、

汝等有私用、櫛以其可梳之擔夫、則出私櫛梳之、垂淚鳴咽曰、吾主存生之時、仰之如高天、豈圖以吾垢

櫛、忝梳其髮乎、悲哀不忍、衆人皆以落淚矣、

〔水左記〕

康平六年二月十六日戊子、早朝參殿下、○藤原賴通前鎮守府將軍源賴義、朝臣所進、俘囚貞任、重

任經清等首、并降人夾名解文、右大弁令遣覽之、殿下召頭弁、○藤原泰憲給之、被仰可奏之、由頭弁結解文、

退出、余又參大內、頭弁持參經奏聞、以件解文下治部卿、于時卿候、與座、但夾名者、留御所治部卿下、頭

退出、余又參大內、頭弁持參經奏聞、以件解文下治部卿、于時卿候、與座、但夾名者、留御所治部卿下、頭

應加禁斷事

右被內大臣宣稱奉勅水旱不時神火屢發寔緣國郡司等不修職務是以寶字七年九月一日頒下却狀用良之格今聞奸枉之輩謀奪郡任寄言神火多損官物自今以後若有此類不論首從一皆打殺雖逢恩降勿預赦例苗裔之現永絕譜第其空納還燒加刑亦同

寶龜十年十月十六日

〔類聚國史八十七〕延曆十二年八月丁卯是夜內舍人山邊真人春日春宮坊帶刀舍人紀朝臣國共謀殺帶刀舍人佐伯宿禰成人明日事覺春日等即逃隱帝武〇桓大怒募求天下後伊豫國捕之以聞遣左

衛士佐從五位上巨勢朝臣島人格殺或曰春日等承皇太子密旨

集言

〔日本書紀二十一〕二年七月〇用物部守屋大連資人捕鳥部萬萬名將一百人守難波宅而聞大連滅

騎馬夜逃向茅渟縣有真香邑仍過婦宅而遂匿山朝廷議曰萬懷逆心故隱此山中早須滅族可不意歟萬衣裳弊垢形色憔悴持弓帶劍獨自出來有司遣數百衛士圍萬萬即驚匿篁叢以繩繫竹引動令

他惑已所入衛士等被詐指搖竹馳言萬在此萬即發箭無一中不中衛士等恐不敢近萬便施弓挾腋向

山走去衛士等即夾河追射皆不能中於是有一衛士疾馳先萬而伏河側擬射中膝萬即拔箭張弓發

箭伏地而號曰萬爲天皇楯將効其勇而不推問翻致逼迫於此窮矣可共語者來願聞殺虜之際衛士

等競馳射萬萬便拂掉飛矢殺三十餘人仍以持劍三截其弓還屈其劍投河水裏別以刀子刺頸死焉

河內國司以萬死狀牒上朝廷朝廷下符僞斬之八段散梟八國河內國司即依符旨臨斬梟時雷鳴大

雨爰有萬養白犬俯仰廻吠於其屍側遂囁舉頭收置古冢橫臥枕側飢死於前

〔釋日本紀十九〕散梟

〔後漢書七〕延熹二年八月壬午詔曰梁冀奸暴濁亂王室〇中漏刻之間桀逆梟夷梟梟也

〔貞信公記〕天慶三年四月廿五日右大辨來告將門首口來狀五月十日左中辨相辨等有將門首口

同死スル道ナレドモ、合戦ノ場ニ出テ、主君ト共ニ討死シ、腹ヲ切ハ常ノ習ナレドモ、懸ル例ハ未ダナシトテ、譽ヌ人コソナカリケレ、

〔源平盛衰記 四十五〕女院御徒然附大臣宗盛平頼朝問答事

同年元暦五月二十七日、九郎判官義經、平氏ノ虜共相具シテ關東ニ下著シタリケレバ、源二位頼朝源

對面有ケレドモ、最言ズクナニテ打解タル無氣色、義經モ思ヒノ外ニ事違ヒテ、合戦ノ事不及

申出ケリ、前内大臣ハ庭隔タル屋ニ座ヲ儲タリケレバ、被著タリケルニ源二位頼朝廉中ニ座シテ、

比企藤四郎能貞、使トシテ被申ケルハ、於平家人々不奉存私意趣其故ハ、專依清盛神閑平之恩言、

被宥頼朝之死罪、爭忘違恩、忽ニ有反心哉、然而可奉追討之由、今被下宣旨之間、難背敬慮之故、只

隨勅定之計也、是源平兩氏ノ互ニ昔ヨリ今存ル事也、不圖ニ奉見參コソ本意ニ侍レト宣ケレ

バ、能貞大臣殿ノ前ニ進リタリケルニ、居直リ、深敬節セラレケリ、右衛門督ハ不居直、國々ノ武

士多並居タリ、略大臣ノ刎首事、不容易トテ、祖上ニ大ナル魚ヲ置キ、利刀ヲ相具シテ内大臣

父子ノ前ニ被置タリ、自害シ給ヘトノ謀也、大臣ハ思ヒ寄給ハズモヤ有ケン、ソモ不知、右衛門

督宗盛清宗ハサモト思ハレケレ共、境浦ニテ水底ニ沈ミハテヌハ、父ノ向後ノ窘ナキ故也、今更

非可先立トオボシケレバ、自害ナシ待ドモノ、自害シ給ザリケレバ、内大臣ヲバ讃岐權守ト

改名シテ、九郎判官ニ被返預ケリ、

〔類聚三代格 十二〕太政官符

一如有捕獲行火盜賊勘當得實者、宜示衆格殺以懲後惡、略中

以前奉勅如件

寶龜四年八月廿九日

〔類聚三代格 十二〕太政官符

爲他刑殺不如自死即其子孫令服毒藥而絞死畢後親王服藥而自害

〔續古事談五〕

保輔ト云者ハ

元方ノ民部卿ノ孫致忠朝臣ノ子也故國章ノ三位ノ家ニ強盜入

ニケリ略

其後保輔法師ヒソカニ從者左大將ノ隨身忠延トイフモノハモトヘキタリケル

ヲハカリゴトヲマハシテカラメテケリ保輔ニグルニアタハズカタナヲヌキテ腹ヲサシキ

リテ鷹ヲヒキイデタリケリ檢非違使コノヨシ申テ禁獄セラレニケリ此賞ニ忠延左馬醫師

ニナサレケリ保輔次ノ日獄中ニテ死ニケリ

〔保元物語三〕爲朝鬼島渡事并最後事

爲朝略

今ハ思事ナシトテ内ニ入家ノ柱ニ後ヲアテ

腹搔切テゾ居タリケル

中

爰ニ加

藤次景廉自害シタリト見オフセテヤ有リケン長刀ヲ以テ後ヨリナラヒ寄テ御曹司ノ首ヲ

ゾ打落シケル其日ノ高名ノ一ノ筆ニゾ付タリケル

〔安齋隨筆前編十一〕

一切腹日本紀以下國史に自殺したる人見へたれ共皆自ら經死し或は

家に火を放て燒死せし事は見たれども腹を切て死せし事は見へず上古には切腹なし保元

物語に爲朝二十八にて家の中柱に後をあて腹かき切たれども猶死なれず後のほねをふ

つと切てぞ死したりけると見えたり此比より武士勇氣を示さんが爲に腹を切る事始りし

なるべし君命して臣に切腹せしむる事は又遙の後に始る歟

〔保元物語三〕

義朝幼少弟悉被誅事略

中

此君達ニ各一人ゾ乳母共付タリケリ内記平太ハ天王殿ノ乳母吉田次郎ハ龜若佐野源八

ハ鶴若原後藤次ハ乙若殿ノ乳母ナリ

中

内記平太ハ直垂ノ紐ヲ解テ天王殿ノ身ヲ我膚ニ

當テ

略

死出ノ山三途ノ河ヲバ誰カハ介錯可申恐敷思召サンニ付テモ先我ヲコソ尋給ハ

メ生テ思フモ苦シキニ主ノ御供仕ラント云モ不果腰ノ刀ヲ拔儘ニ腹搔切テ失ニケル

中

〔源平盛衰記 三十五〕木曾頼被渡事

伊豫守ノ頼劔ニ貫テ赤絹ヲ切テ賊首源義仲ト銘ヲ書テ髻ニ付義仲左右ノ眉ノ上ニ疵ヲ被リタレバ粉米ヲゾ塗タリケル次ニ降人中原兼光葛紺ノ水干葛袴ノ練色衣ニ引立烏帽子ヲ著ス徒跣ニテ渡ケリ法皇○後御車ノ前ニシテ被召留テ御覽アリ上下市ヲ成テ見物ス兼光死ヲ遁テ降人ト成大路被渡面ヲ曝ス其心勇士ニハアラザリケリ皆人耻シメアヘリケリ度々ノ合戦ニ功有シカバ其名ヲ得タル兵ナリシニ今人ノ嘲ヲ招ケルモ可然運ノ極ト覺タリ

兼光被誅并沛公入咸陽宮事

樋口次郎兼光ハ兒玉黨ガ依嘆申義經被奏聞ケレバ死罪ヲ宥シ大路ヲ渡シ被禁獄タリケルヲ院○後御所法住寺殿ノ軍ノ時然ルベキ上臈女房達ナドヲ捕ヘテ衣裝ヲ剥取裸ニ成テ五六日奉取籠耻ヲ奉見タリケル故ニ彼女房達口惜事ニ思召テカタヘノ女房達ヲ相語兼光男ヲ生置セ給ハバ厄ニナラン御所ヲ出シ淀河桂河ニ身ヲ投シナド様々ニ訴申サセ給ケレバ法皇モ力及セ給ハズ公卿有僉議女房ノ訴訟モ難厭止兼光ハ木曾殿ガ四天王ノ隨一死罪ヲ被宥事有虎養恐ト殊ニ有沙汰テ明二十七日ニ獄舍ヨリ取出シテ五條西朱雀ニ引出テ被斬ケリ

自盡

〔續日本紀十〕天平元年二月辛未左京人從七位下漆部造君足无位中臣宮處連東人等告密稱左大臣正二位長屋王私學左道欲傾國家癸酉令王自盡其室二品吉備內親王及男從四位下膳夫王无位桑田王葛木王鈎取王等同亦自經

〔日本靈異記〕恃己高德刑賤形沙彌以現得惡死緣第一

諸樂宮御宇大八島國勝寶應眞聖武上天皇發大誓願以天平元年己巳春二月八日於左京元興寺修大法會供養三寶勅太政大臣正二位長屋親王而任於供衆僧之司○中遷之二日有嫉妬人譏天皇奏長屋謀傾社稷將奪國位爰天心愠怒遣軍兵陣之親王自念无罪而被囚執此決定死

レバ、先立申候六道ノ衛ニテ必可奉參會候トテ、直垂ノ紐ヲ解頸ヲ延テゾ被斬ケル、其後四人ナガラ被斬ケリ、皆能ゾ見ヘタリケル、次日陣頭ヘ持セテ參ル、左衛門尉信忠是レヲ實檢ス、獄門ニハ不被掛、穀倉院ノ南ナル池ノハタヘゾ被捨ケル、是ハ故院ノ爲御中陰故トゾ皆人申ケル、

〔平治物語〕三、惡源太被誅事

惡源太義平源六波羅ニテ宜ケルハ、我敵ニウカベ寄ムトテ、或時ハ馬ヲ扣ヘテ門ニイミ、或時ハ屋ヲ捧ゲテ縁ニ至テ相近付カントセシガ、運盡ヌレバ本意ヲ達セズシテ、生ナガラ四ル、事、無力次第也、義平程ノ大事ノ敵ヲ暫モ置事不可然、速ニ被誅ヨトテ、其後ハ物モ宜ハズ、難波三郎ニ仰テ、六條河原ニ於テ被誅ケルニ、敷皮ノ上ニナヲリテ、些モ臆セズ被申ケルハ、敵ナガラモ義平程ノ者ヲ、白晝ニ河原ニテ被斬事コソ遺恨ナレ、保元ニ多ノ源平ノ兵共被誅シカ共、晝ハ西山東山ノ片邊ニテ斬、適河原ニテキラル、ヲモ、夜ニ入テコソ被斬ケルナレ、弓矢取身ノ習ハ、今日ハ人ノ上、明日ハ身ノ上ニテ有物ヲ、平家ノヤツバラハ、上下共ニ、都テ無情物モ知ラス者共也、去年熊野詣ノ時、路次ニ馳向テ討ムト云ヒシヲ、スカシ寄テ一度ニ滅サント、信賴ト云不覺入ガ云シニ付テ、今日懸ル耻ヲ見ルコソ口惜ケレ、湯淺藤代ノ邊ニテ取籠テ討カ、安部野ノ方ニ待受テ一人モ不殘討取ベカリシ物ヲト宣ヘバ、難波三郎是ハ何ノ後言ヲイハセ申候ゾト申セバ、惡源太アザ咲ヒ、イシウ云タリ、實我爲ニハ諍ハヌ後言ゾ、ヤレ己ハ義平ガ首討程ノ者カ、ハレノ所作ゾ能クキレ、惡ク切ナラバ、シヤ類ニクヒ付カンズルゾト宣ヘバ、オコノ事ヲ被仰物哉、何條我手ニ懸奉ラン首ノ、爭ツラニハクヒ付給ハント申セバ、誠ニ只今クヒ付カンズルニハ非ズ終ニハ必イカヅチト成テ蹴殺サンズルゾトテ、殊更首高ラカニ差舉給ヘバ、經房大刀ヲ拔後ヘ廻レバ、能切トテニラマレタル眼ザシ、實凡人トハ不見ケリ、

〔百練抄八〕治承四年正月廿七日、左右獄囚人十五人於山科斬首、又廿一人切手、

ラズトモ討セヨカシ、縦綸言重クシテ助ル事コソ不叶トモ、ナド有ノ儘ニハ知セヌゾ又誠ニ助
ケント思ハ、我身ニ替テモナドカ可_レ不_レ申有、義朝ガ入道ヲ憑テ來タランヲバ爲義ガ命ニ替テ
モ助ケラン、○中只ウラメシキハ、此事ヲ始ヨリナド知セヌゾトテ、念佛百返計トナヘツ、更ニ
命ヲ惜ム氣色モナク、程經バ定テ爲義ガ頸斬ル見ントテ、雜人ナドモ立込ベシ、疾疾切レト宜ヘ
バ、鎌田次郎大刀ヲ拔テ後ヘ廻リケルガ、相傳ノ主ノ頸キラン事心憂クテ、涙ニ暗テ大刀ノ當所
モ覺エテバ、持タル大刀ヲ人ニ與フ、其時、願諸同法者、臨終正念佛、見彌陀來迎、往生安樂國ト唱テ、
終ニ被斬レ給ヒニケリ、頸實檢ノ後、義朝ニ給テ、可_レ考養由被仰下ケレバ、正清是ヲ請取テ圓覺寺
ニ納メ墓ヲ建壇ヲツキ卒都婆ナドヲ被造立レテ、ヤウノ孝養ヲゾ被致レケル、此爲義ハ妾
多カリケレバ、腹々ニ男女ノ子共四十二人ゾ有ケル、或ハ熊野別當ノヨメニナシ、或ハ住吉ノ神
主ニ養ハセナドシテ、此彼ニゾ置ケル、昨日官使能景ニ仰テ、多田藏人大夫頼憲ガ正親町富小路
ノ家ヲ被追捕レケルニ、頼憲ガ郎等四五人未ダ家ニ有シカバ、命モ不_レ惜散々ニ戰ケル間、能景ガ
兵多ク討レ、疵ヲ被リテ引退、其間ニ屋ニ火懸、烟ノ中ニテ皆自害シテケリ、今日十九日、○保元元年七月
源平七十餘人、頸ヲキラレケルコソ淺猿ケレ、

〔保元物語〕義朝弟共被誅事

去程ニ、左馬頭○源朝頼ニ重テ宣旨下リケルハ、汝ガ弟共皆尋出シ進スベシ、殊ニ爲朝トヤランハ、實
楚ニ矢ヲ放サンナド申ケル奇怪ノ者也、搦捕テ誅スベシト也、義朝畏テ、方々ヘ兵ヲ差使テ被尋
ケレバ、此彼ヨリ尋出シテケリ、爲朝ハ敵寄スルト見ケレバ、何地トモナク失ニケリ、四郎左衛門
頼賢、播部助頼仲、六郎爲宗、七郎爲成、九郎爲仲已上五人ノ人々、都ヘハ不可_レ入ト被仰下ケレバ、直
ニ舟岡山ヘ率テ行ケル、五人ナガラ馬ヨリ下テ並居タリ、最後ノ水ヲ與ルニ、各疊紙ニテ是ヲ受
ケル中ニ、播部助頼仲、此水ヲ取テ唇ヲ押拭テ申ケルハ、○中又不覺ノ涙ノ先立シモ、無本意、思侍

〔保元物語〕爲義最後ノ事

去程ニ爲義法師ガ類ヲ可剃由、左馬頭○爲義朝義ニ被宣下レケレバ、可右置旨ヤウ／＼ニ兩度迄被奏聞レケレ共、主上○後白河逆鱗有テ清盛既ニ伯父ヲ誅ス、何ゾ緩息セシメン、甥ナヲシ子ノ如シト云ヘリ、伯父豈父ニ異ナランヤ、遂ニ可誅戮若猶令違背メバ、清盛以下ノ武士ニ可被仰付由、勅定重カリシカバ、無力涙ヲ押ヘテ、鎌田次郎ニ宣ケルハ、論言如此、依之判官殿○爲義ヲ討奉デバ、五逆罪ノ其一ヲ犯スベシ、罪ニ恐テ宣旨ヲ背カバ、忽ニ違勅ノ者ト成ヌベシ、可如何ト有シカバ、正清畏テ申ニ恐候ヘ共、愚ナル事ヲ御詮候物哉、私ノ合戰ニ討奉ラセ給ハンコソ其罪モ候ハンズレ、○中是ハ朝敵ト成給ヘバ終ニハ遁ル間敷御身也、縱御承ハリニテ候ハズトモ、可時日退御命ナラスニ取テハ、御方ニ侍ラハセ給ヒナガラ、人手ニ懸テ御覽候ハンヨリ、同ハ御手ニ懸進ラサセ給テ後ノ御孝養ヲコソ能々セサセ給ハンズレ、何カ苦ク候ベキト申セバ、サラバ汝計ヘトテ、泣瀝内ヘ入給フ、即鎌田入道ノ方ニ參リ、當時都ニハ平氏ノ輩權威ヲ執テ、守殿ハ石ノ中ノ蜘蛛○蜘蛛誤字トヤランノ様ニテ御坐マセバ、東國ヘ被下モ給候也、判官殿ハ先立奉ラントテ、御迎ニ進セラレテ候トテ車差寄タレバ、サラバ今一度八幡ヘ參テ、御暇乞申スベカリシ物ヲトテ、南ノ方ヲ伏拜テ、繼テ車ニ乗給フ、七條朱雀ニ白木ノ輿ヲ昇居タリ、是ハ輿ヨリ乗移ノ給ハン處ヲ討奉ラン支度也、其時秦野次郎延景鎌田ニ向テ申ケルハ、御邊ノ計ヒ誤レリ、人ノ身ニハ一期ノ終リヲ以テ一大事トセリ、ソレヲ暗々ト殺シ奉ラン事無情侍リ、只有ノ儘ニ知セ奉テ、最後ノ御念佛ヲモ進メ申シ、又ハ可被仰置御事モナドカナカルベキト云ヘバ、正清尤可然シ、物ヲ思ハセ進ラセジト存テ、加様ニ計ヒタレ共、誠ニ我アヤマリナリト申ケレバ、延景參リテ、誠ニハ關東御下向ニテハ候ハズ、守殿宣旨ヲ奉リテ、正清大刀取ニテ失ヒ進スベキニテ候、再三欺御申シ候シカ共、勅定重ク候間無力被申付候、心閑ニ御念佛候ベシト申タリシカバ、口惜キ事哉、爲義程ノ者ヲタバカ

雄頼田部湯坐^{名國}連^{名國}秦吾寺等凡十四人被絞者九人、被流者十五人、

〔日本書紀^{二十八}〕元年八月甲申、命高市皇子、宣近江群臣犯狀、則重罪八人坐極刑、仍斬右大臣中臣連金於淺井田根、

〔日本紀略^{祖武}〕延暦四年九月丙辰、車駕至自平城云々、種繼已薨、乃詔有司搜捕其賊、庚申、縛粹麻呂等、道就、柩前告其狀、然後斬決、

〔續古事談^二〕^{臣節}コノ人^{經成}納言ヲノゾミケル時、八幡ニマウデ、祈ケリ、獄ヲオサムルアヒダ、死罪ニ行物オボユルトコロ三十人、コレ君ノタメナリ、ソノ事道理ヲ背バ、コノタビノ所望カナフベカラズ、モシコトハリニソムカズ、バカナフベシト申ケルニ、中納言ニ成ニケリ、サレバ、神明道理ヲステ給ハスナルベシ、八幡ノ別當戒信カタリケルナリ、

〔古事談^四〕^{勇七}宗形宮内卿入道師綱、陸奥守ニテ下向之時、^中基衡件郡地頭大莊司季春ニ合、心テ

禦グ處、國司猶帶宣旨、推入之間、已放矢及合戰了、守方被疵者甚多シ、基衡カクハシツレドモ、背宣旨射國司^中依恐存恨、季春云、依無先例、雖追返國司、背宣旨之條、非无違勅之恐、イカハスベキト云云、季春云、今仰衆皆存知ノコト也、主君命依難奉、背於一矢者、射候了、然者君者不知食之體ニテ召已頭可被遣國司之許也、其上ハ定無爲候歟ト云、基衡乍拭淚諾了、基衡申於守云、基衡一切不知事候、郡地頭凡依无先例、致自由之狼藉候、於今者不可及仔細、季春已召取畢、早賜御使於其前、可勿頭ト云、依之國司遣檢非違使所司代云々、季春已將出タリ、四十餘許男肥滿美麗ナルガ、積遠雁水干小袴ニ紅衣ヲ著タリ、打物取タルモノ廿人許圍繞シテ、切手ハ、ケセンノ彌太郎ト云モノ也、出立テ擬切頭之間、大莊司云、切損給ナ、刀ハイヅレゾト問ケレバ、切手云、昆次郎大夫ガ大津越ゾト云ケレバ、サテハ心安ト云テ被切ケリ、部類五人同斬ト、大津越トハ、人ヲ引居テ切ニ左右ノ臂ノ上ヲ乍^中骨不掛切ヲ云也、

開認律云、故殺人者斬、疏云、非因鬭爭、無事而殺、是名故殺、

按之罪重、近代之例、依無刑部省斷、於使廳禁獄、依爲死罪、不定徒年限、

〔日本書紀舒明二十三年〕天皇○推古崩九月十三葬禮畢之、嗣位未定、○中大臣○蘇我將殺境部臣、而與兵

遣之境部臣聞軍至、率仲子阿都出於門、坐胡床而待、時軍至、乃令來目物部伊區比以絞之、父子共死、乃埋同處、

〔日本書紀二十五年〕大化五年三月戊辰、蘇我臣日向日向字諸倉山田大臣於皇太子、○中蘇我大臣、既

與三男一女俱自經死、甲戌坐蘇我山田大臣而被戮者、○中凡十四人、被絞者九人、被流者十五人、

〔日本書紀二十六年〕四年十一月戊子、皇太子○天智親問有間皇子曰、何故謀反、答曰、天與赤兄○我知、吾

全不解、庚寅、遣丹比小澤連國襲、絞有間皇子於藤白坂、是日斬鹽屋連、鰐魚、舍人新田部連未麻呂

於藤白坂、鹽屋連、鰐魚臨誅、言願令右手作國寶器、流守君大石於上毛野國、坂合部連藥於尾張國、

〔續日本紀二十六年〕天平神護元年八月庚申朔、從三位和氣王坐謀反、誅、○中和氣者、一品舍人親王之

孫、正三位御原王之子也、勝寶七歲、賜姓岡真人、任因幡掾、寶字二年、追尊舍人親王曰崇道、盡敬皇帝、

至是復屬籍、授從四位下、八年至參議、從三位兵部卿、子時皇統、無嗣、未有其人、而紀朝臣益女以巫鬼

著、得幸和氣、心挾窺窬、厚賂幣物、○中於是人等心疑、頗泄其事、和氣知之、其夜逃竄、索獲於率河社中、

流伊豆國、到于山背國相樂郡、絞之、埋于狎野、又絞益女於綴喜郡松井村、

〔日本書紀十四年〕九年二月甲子朔、遣凡河內直香、賜與采女、祠胸方、神香、賜與采女、既至、壇所音賜、此云三

及將行事、紆其采女、天皇聞之、曰、祠神祈禱、可不慎歟、乃遣難波日鷹吉士將誅之、時香賜即逃亡不在、

天皇復遣弓削連豐穗、普求國內、縣途於三島郡藍原、執而斬焉、

〔古事記下〕初、天皇逢難、逃時求奪其御糧、猪甘老人是得求、喚上而斬於飛鳥河之河原、

〔日本書紀二十五年〕大化五年三月甲戌、坐蘇我山田大臣而被戮者、田口臣筑紫耳梨道德、高田醜此云

頭相去三許丈，囚人當中間而跪，自兩司南去，物部分陣防護，列北向南，上立定錄進於兩司中間，北面宜

告犯狀，罪名示衆，衆人稱唯畢，還於本列，即丞召兩司仰云：「依例行之。」兩司稱唯，以還本列，轉告物部，物

部稱唯案劔戮之。用刑者其殘骸者，令授近親斂之。若無親者，令兩司埋城外閑地，蒙樹勝示。注國郡姓名

〔延喜式二十九〕凡應戮罪人者，注預事物部歷名進省，即官人共率供事。

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

內外五位不合同等事。略中

外五位

右考限選敍一依令條。略中其有斷罪行刑之日，不得乘馬辭訣，及自盡私家自餘依令。略中

以前。略中奉勅宜依前件永爲恒式。

神龜五年三月廿八日

〔西宮記臨時〕成勘文事附四名錄 役畢勘文

口傳云：「一可入死罪之囚者，減臧布數縱雖及百千反不足十五反，猶處流刑，是廢例也。舊役畢勘文

致此用意，是恤十五年役之故也。況亦格文云：「悔前過亦有犯終身配役，不可赦免者。」二盜者不注其

由也。但律條所指盜神聖者，校若賊數顯露聞達天聽等之類，縱雖入死罪，偏稱聽例難進止欺，但見舊

勘文等，無十五年役者，隨狀可斟酌也。又舊刑官斷罪或注賊色目，或止注臧布若干，是設合宜仍用件

例云々。

一有賊盜人持杖并傷殺人等，只就賊數勘之，不知餘罪，殺人之罪雖重於盜罪，偏依盜罪，不知殺罪，是

使等所行來也。雖乖法意，自爲流例也。但持杖強盜不得財者，猶依本條可處遠流，欺雖無賊，不可默以

免之色也。

〔法曹至要抄上〕一故殺事

〔令義解^十〕凡決大辟罪五位以上在京者刑部少輔以上監決^{謂雖是自盡之人亦在其家監決也}在外者次官以上監決餘並少輔及次官以下監決從立春至秋分不得奏決死刑^{謂奏決者雖若犯惡逆以上及家人奴婢殺主者不拘此令其大祀及齋日朔望晦上下弦廿四氣假日並不得奏決死刑在京決死囚皆令彈正衛士府監決若因有冤枉灼然者停決奏聞^{謂東正奏聞}}

〔唐律疏議^三〕諸立春以後秋分以前決死刑者徒一年其所犯雖不待時若於斷屠月及禁殺日而決者各杖六十待時而違者加二等

疏議曰依獄官令從立春至秋分不得奏決死刑違者徒一年若犯惡逆以上及奴婢部曲殺主者不拘此令其大祭祀及致齋朔望上下弦二十四氣雨未晴夜未明斷屠月日及假日並不得奏決死刑其所犯雖不待時若於斷屠月謂正月五月九月及禁殺日謂每月十直日月一日八日十四日十五日十八日二十三日二十四日二十八日二十九日三十日雖不待時於此月日亦不得決死刑違而決者各杖六十待時而違者謂秋分以前立春以後正月五月九月及十直日不得行刑故違時日者加二等合杖八十其正月五月九月有閏者令文但云正月五月九月斷屠即有閏者各同正月亦不得奏決死刑

〔日本後紀^{二十四}〕弘仁六年十一月丁亥勅延曆格云斷決囚徒令有正文順時肅敬不可虧違或遇秋分節延入立春是既乖法式都無准的宜死罪者年終斷訖者今於行死刑秋冬無妨而頃年有司必至年終乃奏刑書施行之後計其行程合入春月以到遠國宜自今以後十月初斷奏訖但始自十一月一日至于十二月十日常行祭事不得令京官此限內決死刑

〔延喜式^{四十一}〕凡決死囚皆令臺左右衛門府監決若因有冤枉灼然者停決奏聞

〔延喜式^{刑部二十九}〕凡決死囚者省預移送彈正衛門其日會集市司南門其監行決其彈正左衛門官人列門外東^{各四面北上一許大}刑部右衛門官人列門外西^{各東面北上一相去同上}市獄兩司列於南庭^{自衛府南去四許大各北面中上東四牛}

報之日不得馳驛行下謂是獄其遠殺一赦下令馳驛下

〔唐律疏議三十〕諸獄結竟徒以上各呼囚及其家屬具告罪名仍取囚服辨若不服者聽其自理更爲審詳違者笞五十死罪杖二百

疏議曰獄結竟謂徒以上刑名長官同斷案已判訖徒流及死罪各呼囚及其家屬具告所斷之罪名仍取囚服辨其家人親屬唯正告示罪名不須問其服不囚若不服聽其自理依不服之狀更爲審詳若不告家屬罪名或不取囚服辨及不爲審詳流徒罪並笞五十死罪杖一百

〔唐六典六〕若犯惡逆已上及部曲奴婢殺主者唯一覆奏

決大辟罪皆防援至刑所囚一人防援二十人每一人加五人五品已上非惡逆者聽乘車並官給酒食聽親故辭訣宣告犯狀仍日未後乃行刑囚在外奏報之日不得馳驛行下

〔令義解十〕凡決大辟罪皆於市五位以上及皇親犯非惡逆以上聽自盡於家謂令三家人在七位以上及婦人犯非斬者絞於隱處謂不於市隱人衆之中而別死於隱僻之處

〔唐律疏議三〕諸斷罪應絞而斬應斬而絞徒一年自盡亦如之失者減二等即絞訖別加害者杖一百

疏議曰犯罪應絞而斬應斬而絞徒一年以其刑名改易故科其罪自盡亦如之依獄官令五品已上犯非惡逆以上聽自盡於家若應自盡而絞斬應絞斬而令自盡亦合徒一年故云亦如之失者減二等謂原情非故者合杖九十即絞訖別加害者謂絞已致斃別加拉幹折脛之類者杖一百

〔政事要略二十五〕斷獄律云立春以後秋分以前決死刑者徒一年依獄令從立春至秋分不

不待時若於禁殺日而決者杖六十准令犯惡逆以上及家人奴婢殺主者不待時其六祀及當日朔望得決死刑違而待時違者加二等謂秋分以後立春以前於禁殺日而決者杖六十集解云禁殺日疏云每月一日八日廿

三日廿四日又見貞永式日抄

〔唐六典六〕凡決大辟罪在京者行決之司五覆奏在外者刑部三覆奏

在京者決前一日二覆奏決日三覆奏在外者初日一覆奏後日再覆奏縱臨時有勸不許覆奏亦準此覆奏

若犯惡逆已上及部曲奴婢殺主者唯一覆奏

〔唐律疏議三十〕諸死罪囚不待覆奏報下而決者流二千里即奏報應決者聽三日乃行刑若限未滿而行刑者徒一年即過限違一日杖一百二日加一等

疏議曰死罪囚謂奏畫已訖應行刑者皆三覆奏訖然始下決若不待覆奏報下而輒行決者流二千里即奏報應決者謂奏訖報下應行決者聽三日乃行刑稱日者以百刻須以符到三日乃行刑若限未滿三日而行刑者徒一年即過限違一日杖一百二日加一等在外既無漏刻但取日周晷時爲限

〔周禮註疏三十六〕司刺掌三刺三宥三赦之灋以贊司寇聽獄訟中壹宥曰不識再宥曰過失三

宥曰遺忘註鄭司農云不識謂愚民無所識則有之過失若今律過失殺人坐死玄謂識審也不審若今仇讎當報甲見乙誠以爲甲而殺之者過失若舉刀欲斫伐而執中人者遺忘若閭帷薄忘有在焉而以兵矢投射之

〔禮記註疏十三〕大司寇以獄之成告於王王命三公參聽之註王使三公復與司寇及正共平之禮刑也周禮王欲免之乃會公會其期三公以獄之成告於王王三又然後制刑

〔令義解十〕凡死罪雖已奏報猶訴冤枉事有可疑可推覆者以狀奏聞遣使馳驛檢按

〔令義解十〕凡斷罪行刑之日謂徒以上結獄竟具告罪名是爲斷罪之日也依律結獄竟徒以上具告罪名也並宣告犯狀決大辟罪囚皆防援着枷至刑所謂是獄中人其誦請減人及初位也每一囚加五人五位以上及皇親聽乘馬聽親故辭訣謂親親屬也故別也故仍日未後行刑即囚身在外者奏

峻天皇ノ朝ニ、捕鳥部萬ノ屍ヲ斬リテ八段トシ、八國ニ梟セシコトアリ、是、梟首ノ類ナラン
 又光仁天皇ノ朝ニ格殺ノ制ヲ立テタリ、又火刑アリ、火ニ投ジテ殺スナリ、雄略天皇ノ朝ヨ
 リ見エタリ、

名稱

〔類聚名義抄〕ハ刑コロ爪ツミ

〔禮記註疏〕王制三刑者，例也。例者，成也。一成而不可變，故君子盡心焉。註，變更也。刑例音

〔律疏 名例〕死罪二 絞、斬

〔釋名〕八 斫頭曰斬。斬腰曰屢。斬暫也。暫加兵卽斷也。車裂曰轘。轘散也。肢體分散也。

聖人因天秩而制五禮因天討而作五刑大刑用甲兵師尹孫登曰亂以大其次用斧鉞斬也

中刑用刀鋸漢書曰刀也其用讚鑿去其筋骨也鑽利音于壇反價音頻忍反漢續薄刑用鞭朴

〔唐書刑法十六〕自隋以前死刑有五、曰磔、絞、斬、梟、裂、

死刑初見

〔古事記仁下〕爾速總別王、女鳥王共逃退。中御軍追到而殺也。其將軍山部大楯連、取其女鳥王所纏。

御手之玉釧而與己妻此時之後將爲豐樂之時氏氏之女等皆朝參爾大楯連之妻以其王之玉釧

于己手而參赴於是大后石之日賣命自取大御酒栢賜諸氏民之女等大后見知其玉鏡不賜御酒

臣聞於書曰：「時來，即與已至。」方今形勢，
杜乃引，遂召出。其夫大柳，遂以言之。王等曰：「天應而遂，則長才無量。」其夫之婦，平所慕亡君之役，

〔政事要略八十二〕日本記云、秦藍身尊自

行決法

令義解凡決大辟罪謂辟者罪也死在京者行決之司三覆奏決前一日一覆奏決日再覆奏謂依律

決者、聽三日乃行利。是三覆矣。訖更經三日乃聽行利。今案此條、再奏之日、卽得行決。二注不同、遲速

外者，符下日三覆奏，初日一覆奏，後日再覆奏，若犯惡逆以上，唯一覆奏，家人奴婢殺主，不須覆奏，其京

國決囚日、雅樂寮停音樂

古事類苑

法律部五

上編

死刑

死刑ハ五刑中ノ極刑ニテ、又大辟トモ云ヒテ、絞、斬ノ二種アリ、斬ハ首ヲ斬ルナリ、絞ハ頸ヲ縊ルナリ、而シテ斬ヲ特ニ重シトス、凡テ大辟ヲ決スルニハ、在京ハ行決ノ司、決前一日ニ一タビ覆奏シ、決日ニ再ビ覆奏シ、在外ハ符下ル時、初日ニ一タビ覆奏シ、後日ニ再ビ覆奏ス、但シ立春ヨリ秋分マデノ間、及ビ大祀齋日等ニハ、死刑ヲ決スルコトヲ得ズ、死囚ヲ決スル日ハ、囚人ヲ市司ノ南庭ニ跪カシメ、彈正刑部、左右衛門ノ官人暨決シ、物部防援シ、刑部錄犯狀、罪名ヲ宣告シテ衆ニ示シ、物部刑ヲ行フ、但シ絞ハ綱ヲ用キ、斬ハ劍ヲ按ジテ之ヲ戮シ、其殘骸ハ近親ニ授ケテ飲メシメ、若シ親戚ナキ者ハ、市司、囚獄司ヲシテ城外ノ閑地ニ埋ミテ、勝示ヲ樹テシム、又五位以上、及ビ皇親ハ行刑ノ日ニ馬ニ乘リ、親故ノ辭訣スルコトヲ聽シ、其犯罪惡逆以上ニアラザルトキハ、家ニ自盡スルコトヲ聽ス、七位以上、及ビ婦人ノ絞刑ノ如キハ、隱處ニ於テ之ヲ行フナリ、嵯峨天皇ノ朝ニ藤原仲成ヲ誅シテヨリ後、三百四十餘年ノ間、大辟ニ抵ルハナカリシヲ、後白河天皇ノ保元元年ニ、藤原信西ガ奏聞ニ由リテ、源平兩氏ノ人ヲ斬シテヨリ死刑又起レリ、死刑ニハ、又梟首アリ、律條ニハ無キ所ニシテ、首ヲ斬リテ之ヲ矛ニ貫キ、京中ノ大路ヲ行キ、衆人ニ示シテ後ニ獄門ノ前ナル棟ノ樹ニ懸クルヲ云フ、或ハ死屍ノ首ヲ梟スルコトモアリ、梟首ハ邦語ニクシザシト云ヒ、後世ニ獄門ト云ヘリ、崇

名稱

二六二

斷膝筋

同

斷足

同

斷手

同

斷

二六三

○

髡鉗

二六三

古事類苑

法律部五

上編

死刑

名稱

死刑初見

行決法

絞

斬

自盡

格殺

梟首

火刑

僧尼處刑

婦人處刑

停死刑

雜載

肉刑

髡鉗併入

二二八

同

同

二三三

同

二三八

二四〇

二四一

二五六

同

二五七

同

二六〇

〔類聚國史八十七〕刑法延曆十二年八月戊辰、遞送筑前國那賀郡人三宅連真繼於本鄉、莫聽入京、以其在京中屢有濫行也。

〔日本後紀五〕恒武延曆十五年七月辛亥、生江臣家道女、遞送於本國家道女越前國足羽郡人、常於市鄉妄說罪福、眩惑百姓、世號曰越優婆夷。

〔類聚國史八十七〕刑法大同四年七月甲子、因幡國人大伴吉成、浮宕京下、相替御贖官奴大風麻呂爲犯神事、決杖遞送本國、其大風麻呂配對馬島。

か、づらひてだに、おほやけのかしこまりなる人の、うつしぎまにて世中にありふるは、どが
をもきわざに、人の國にもし侍なるを、どを、はなちつかはすべきさだめなども侍るなるは、
さまことなるつみにあたるべきにこそ侍なれに、ごりなき心にまかせて、つれなくすぐし侍
らんもいとは、かりおほく、これよりおほきなるはぢにのぞまぬさまに世をのがれなんと
おもふ給へたちぬるなど、こまやかに、きこえ給略。中あけはてなばはしたなかるべきにより、
いそぎいで給ひぬ。略中御舟にのり給ぬ日ながき比なれば、をひかせさへそひて、まださるの
時ばかりに、かの浦につき給ぬ。

〔權記〕長保六年

○寛弘元年

九月廿日辛丑、左大臣

○藤原道長

於陣被定、申諸卿分配、亦被定、申放免、可着本貫

之事、畿外者各尋附貫外國之輩、可追至于京戸者、可如何哉、諸卿定申云、不可追者、京戸者新改居附

貫外國、但此事可遣

○遣違字誤

法、放免之後各還本貫爲平民、勤役而逢恩原免者、改京戸貫外土、可入移

郷之例、歟、但放免猶成事、仰使聽能、可被誠歟云々、

〔百練抄十四條〕

文暦元年七月二日己亥、花山院侍從入道

故中納言家經

稱念佛上人、舊傾城之類、被行

過法、仍令却離件法師處、遣流餘黨等、可追却於洛外之由、被下宣旨、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應禁制京戸子弟居住外國事

右齊衡二年六月廿五日格、稱延暦十六年四月廿九日、下太宰府符、稱從二位行大納言神王宣奉勅

括責浮宕、先已下知、今聞秩滿解任之人、王臣子孫之徒、結黨群居、同惡相濟、倭媚官人、威凌百姓、妨農

耨業、爲蠹良深、宜嚴檢括、勸還本郷、情願留住、便早編附、若有犯者、不論蔭贖、科違勅罪、移配遠處、土人

容而不申、官司知而不糾者、亦與同罪者。略中

寛平三年九月十一日

勸還本郷

日翌日罷歸之間、按察使相具兩少將各着淨衣折烏帽子騎馬、逢四宮川原之由所申也、太相國同方不可然之由有議、可被追他方云々、

〔源平盛衰記^{十二}〕大臣以下洗罪事

按察使大納言資賢子息左少將通家孫右少將雅賢三人、京中ヲ可追出由、博士判官中原章貞ニ被下知ケレバ、追立檢非違使來テ、運々ト責追ケルコソイト悲ケレ、^略○中三人夜中ニ出給ケル上ニ、落ル涙ニカキクレテ、行先モ見エ給ハズ、心ウヤ配所ヲ何所トダニ定ヌ事ヨト悲クテ、九重ノ内ヲ紛レ出テ、八重立雲ノ外ヘ、足ニ任テ這々彼大江山野ノ道ヲ越過テ、丹波國村雲ト云所ニゾ暫サスラヒ給ケル後ニハ召返サレテ信濃國奥郡ヘ流サレ給ケリ、

〔古今和歌集^{十八}〕

田むら

○文の御時に、事にあたりて、つの國のすまといふところにこもり侍けるに、宮のうちに侍ける人につかはしける、

在原行平朝臣

わくらはにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつゝ、わぶとこたへよ

○按ズルニ、在原行平ノ須磨ニ移リ居リシハ、勅ヲ蒙リテ退キシカ、自ラ避ケシカ、未ダ詳ナラザレドモ、姑ク此ニ載ス、

〔源氏物語^{十二}〕

須磨

世中いどわづらはしく、はしたなきことのみまされば、せめてしらすがほにありへても、是よりまさることもやとおぼしなりぬ、かのすまは昔こそ人のすみかなごもあり

けれいまはいと里はなれ心すごく、あまの家だに稀になご、き、給へど、人まげくひた、けたらんすまゐはいとほいなるべし、さりどて都をどをざからんも、ふる里おほづかなかるべきを、人わろくぞ覺しみだる、^略○中二三日かねておほいどのに、よにかくれてわたりたまへり、^略○中とあることもかゝることも、さきの世のむくひにこそ侍なれば、いひもてゆけば、たゞみづから^略○源のをこたりになん侍る、さしてかく官爵をさらせずあさはかなること

遠使大夫ノ尉藤原忠親并ニ右衛門志縣犬養爲政等ヲ彼ノ國ニ下シ遣シ事ノ發ヲ勒ヘ被問ケルニ致忠進デ咎ニ落ニケレバ罪名ヲ被勒テ明法勒ヘ申スニ隨テ致忠ヲ遠ク佐渡國ニ被流ニケリ然レバ古モ今モ如此ク咎有ラバ公家必ズ罪ヲ行ヒ給ハ常ノ事也トナム語リ傳ヘタルト也

〔續日本紀二十九〕神護景雲三年五月壬辰詔曰不破內親王者○中論其所犯罪合入虐○中仍賜尉真人厨女姓名莫令在京中

〔續日本紀三十七〕延暦元年閏正月壬寅左大辨從三位大伴宿禰家持右衛士督正四位上阪上大忌寸荊田麻呂散位正四位下伊勢朝臣老人從五位下大原真人美氣從五位下藤原朝臣繼彥等五人職事者解其見任散位者移京外並坐川繼事也自餘黨與合三十五人或川繼姻戚或平生知友並亦出京外

〔日本紀略桓武〕延暦十四年十二月乙酉配淡路國不破內親王移和泉國

〔山槐記〕治承二年正月七日壬寅令曉巽方彗星出天文參陣付藏人勘解由次官基親奏之○中彗星年々○中

天仁三年五月見東方○中 同月○中源滿實并男遠光移郷

〔山槐記〕治承三年十一月十八日壬申子終刻前關白〔藤原基恩〕從一位年卅五未被遷牛車之人也被遷太宰權帥下向給○中

正二位行權大納言兼出羽陸奥按察使源資實〔年六十五去月九日任大納言〕

從四位上行右近衛權少將源雅賢〔資賢二男〕

從四位下行右近衛權少將源資時〔已上昨日解官〕

被追掣檢非違使左志清原季光追之向合坂關方云々翌日檢非違使章貞來云追太相國看督長今

坐及移郷者並宜放還

〔日本書紀^{十一}〕三十八年正月戊寅立八田皇女爲皇后、七月天皇與皇后居高臺而避暑時每夜自兔餓野有聞鹿鳴其聲寥亮而悲之共起可憐之情及月盡以鹿鳴不聆愛天皇語皇后曰當是夕而鹿不鳴其何由焉明日猪名縣佐伯部獻菰苳天皇令膳夫以問曰其菰苳何物也對言牡鹿也問之何處鹿也曰兔餓野時天皇以爲是菰苳者必其鳴鹿也因謂皇后曰朕比有懷抱聞鹿聲而慰之今推佐伯部獲鹿之日夜及山野即當鳴鹿其人雖不知朕之憂以適逢獮獲猶不得已而有恨故佐伯部不欲近於皇居乃令有司移郷于安藝淳田此今淳田佐伯部之祖也

〔日本紀略^{十一}〕長保元年三月廿六日己卯召明法博士令宗允正令勘申前下野守平維衛散位同致賴合戰之罪名十二月廿七日丙子從五位上平維衛不追位記移郷從五位下同致賴藤原宗忠追位記配流隱岐佐渡國

〔今昔物語^{二十三}〕平維衛同致賴合戰蒙答語第十三

今昔前ノ一條院天皇ノ御代ニ前下野守平ノ維衛ト云兵有リ此ハ陸奥守貞盛ト云ケル兵ノ孫也亦其時ニ平致賴ト云兵有ケル共ニ道ヲ挑ム間互ニ惡キ様ニ聞カスル者共有テ敵ト成ヌ其領各一國ニ有テ致賴進テ維衛ヲ討罰ムトシテ合戰スル間其多ノ子孫伴類并ニ郎等眷屬等互ニ射殺ス者其員有リ然ドモ勝負無シテ維衛ヲバ左衛門ノ府弓場ニ被下レ致賴ヲバ右衛門ノ府ノ弓場ニ被下テ共ニ被勘問ニ皆進テ答ニ落ニケリ罪名ヲ被勘ルニ明法ニ勘ヘ申テ云ク壓ヒ討タント爲タル致賴ガ罪ミ尤重シ速ニ遠キ處ニ可被流ル請ケ戰タル維衛ガ罪輕シ移郷一年可任シテ此^{○可任以下五字一本作ニイカリ}テユルベキカトイフニ依テ公家宣旨ヲ被下テ致賴ヲ遠ク隱岐國ニ被流ス維衛ヲバ淡路國ニ被移郷ス其後亦藤原致忠ト云者有テ美濃國ノ途中ニシテ前相模守橘輔政ト云人ノ子并ニ郎等ドモヲ射殺テケリ此ニ依テ父輔政公ニ訴申スニ宣旨ヲ被下テ檢非

非

丁例加杖還依本色其婦人犯流者亦留住婦人之法例不配留住不獨居放犯遣畜蟲毒應流者配流如法遣畜

所在不容損之道處絕其根本故雖婦人亦須投厥穠令嫁向中華事發還從配遣竝依流配之法三流俱役一年雖會赦遇恩亦不免免婦人教令違畜者只得教令集不同身自遣畜自依常刑科罪棄賊律遣畜於難戶等留住下令制云遣畜蟲毒者配流但是諸條犯流竝杖以配隨之色若有為婦人生文近流決杖六十一等加廿俱役三年婦人近流決杖六十中流役四八十遠流決杖一百三流俱役三若夫犯流配者聽隨之至配所免居住不在元不合配以夫流故所以聽許其本法無流不得却還不復更合居役即是總更無即有官亦不宜當下若犯八唐五減者各依除名之法若夫犯流工作發婦如聞而故犯流以下一聽從官當流贖法元官之至配所加杖居作

律疏名例凡犯徒應役而家無兼丁者○註妻年廿一以上同兼丁之限婦女家無男夫兼丁者亦同○時徒一年加杖一百廿不居作一等加廿流至配所應役者亦知之中唐流至配所應役者謂流入應此居役家無兼丁丁應加杖者亦准此

律疏名例凡犯死罪非八虐而祖父母父母老疾應侍家無二等親成丁者上請○註犯流者權留養親
開季會教習流者略不在敕例仍准同季流人未上道限內會教者從杖原○註課調依舊○註若家有進丁及親終三月者即從流計程會赦者依常例○註即至配所應侍合居作者亦聽親終三月然後居作

令義解凡犯徒應配居役者畿內送京師在外供當處官役其犯流應住居作者亦准此婦人配縫作及眷

[律疏順望]凡殺人應死會赦免者移鄉殺之人應死而會赦免即而死家者有父子顯孫伯叔兄弟或先他國難戶及陵戶官戶家人奴婢若婦人有犯或殺他主家人奴婢並不在移限家
止移下手者及頭首之人詳黨共殺謂謀殺遣意令斬同謀共圖以下手重者爲重罪合若死家無父子
祖孫伯叔兄弟或先他國難戶及陵戶官戶家人奴婢若婦人有犯或殺他主家人奴婢並不在移限家
人奴婢自相殺者亦同違者徒一年以此上應移不

〔續日本紀四〕慶雲四年七月壬子天皇卽位於大極殿詔曰○中略大赦天下○中略前後流人非反逆緣

隱岐國而彼國僭健岑會赦放免入京勅宣殊從寬有遷配出雲國差充防援遞送前所

〔扶桑略紀二十九卷〕康平七年九月十六日前下野守源賴資配流佐渡國依燒亡上總介橘惟行館并殺

害人民之愁十二月五日賴資改配流土左國其使奏聞雪深路險難達之由仍改流也

〔本朝世紀〕康治二年七月廿五日庚辰權中納言藤公教卿參左仗被仰源賴盛并從三人配流國之事

去比擅興軍兵狠企合戰之故也右少辨藤光賴奉行其事賴盛配佐渡藤季宗配周防國藤國長配伊

豆國藤爲員配隱岐國了廿九日甲申又左衛門督藤原公教卿參仗座流人源賴盛改佐渡國配常

陸國從藤國永配佐渡國參議藤公隆卿少納言源師國向結政行請印事

〔朝野群載十一卷〕從五位下行佐渡守藤原朝臣親賢誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩因准先例被移遣流人源明國於他國狀

右親賢謹檢案內依莫大成功之勞拜最少凋弊之國即召在京之雜掌粗訪彼國之形勢種々所陳一

一難治就中先年配流人源明國貶謫以後吏務多煩驅仕課役之民偏爲奴婢僕從耕作公領之田無

辨調庸租稅逐年滋蔓隨日倍增近來國司爲憚彼武威不奉奏旨趣廢署箝口縣邑以目若猶在國者

何以施政者今就申狀伏尋先蹤下野國流人藤原基宗有妨國務之由守惟宗忠重進解狀之時永保

三年七月早賜官符移遣陸奧國是則下州部狹奧州堺廣之故也情以佐渡比量下野一島所攝可及

一郡彼已不堪是又何爲雜掌所申兼被推察凡流人至配所更犯罪者徒役相加其科彌重憲條明文

法律所指也昔遷三苗於三危天下最泰平今遣明國於他國境內定靜謐望請天恩因准先例被移流

人於他國者試翹翼黃之治術將贖虛白之編戶矣親賢誠惶誠恐謹言

大治三年八月廿八日

從五位下佐渡守藤原朝臣親賢

留住

〔律疏名例〕凡雜戶陵戶犯流者近流決杖一百一等加三十留住俱役三年犯加役流者役四年此等不

外配合近流者決杖一百中流決杖一百三十遠流決杖一百六十俱留住役三年犯加

役流者役四年例云累徒應役者不得過四年故三年徒上止加一年以充四年之例犯徒者准無兼

ケレバ、冬モ深ク成テ年モ既ニ暮、治承モ三年ニ成ニケリ、

〔金葉和歌集建〕あはの守知綱におくれ侍けるころ、ながされたりける人のゆるされてかへりた

りけるを聞てよめる、

藤原知信母

ながれてもあふせありけり涙河きえにしあわをなにしたとへん

放還本編

〔續日本紀三十三〕實龜元年八月辛亥、流道鏡弟弓削淨人、淨人男廣方、廣田廣津於土佐國、

〔續日本紀三十六〕天應元年六月乙巳、勅河内國若江郡人弓削淨人、廣方、廣田廣津等、去實龜元年配

土佐國、宜有其罪、放還本郷、但不得入京、

不赦

〔續日本紀十三〕天平十二年六月庚午、勅曰、略中宜大赦天下、略中其流人穗積朝臣老多治比真人祖

人名負東人、久米連若女等五人召令入京、大原采女勝勝本勝一部鳥女還本郷、小野王日奉弟日女、石

上乙麻呂、牟々禮、大野中臣宅守、飽海古良比不在赦限、

〔三代實錄四十四〕元慶五年七月十三日己未、伴中庸男元孫禪師麻呂遷配石見國、先是因幡介從五位

下是主王言、中庸等自隱岐國致此申牒云、貞觀八年配流隱岐國、會去年十二月四日恩赦、彼國司移、

歸向本貫者、獄令云、流人至配所、六載之後聽仕、注曰、其因反逆、免死配流、不在此例、中庸身犯大逆降

死配流、自非勅喚、何得言歸、隱岐國司不熟法意、輒令放免、勅特降恩、渙便遷石見、下符因幡國、凡流

人到於配所、其附籍帳、刑科究盡、更無會赦、隱岐國司誤從放免、當國抑留錄狀言上、論之朝憲、可謂明

慎、令條譴責、隱岐國司曰、不曉法禁、輒放流人、牧宰之任、委付惟重、既無奉法之能、寧叶分憂之責、特覃

春仁、莫處秋典焉、

〔百練抄八〕嘉應元年六月廿三日、依上皇白河後御逆修初七日、被行非常赦并被召返流人十五人、但

與福寺前別當惠信、長谷寺前別當宗覺等、不被召返、依本寺訴也、

〔三代實錄清和〕貞觀七年五月十三日癸巳、右京職言右京人伴健岑、承和九年七月廿八日謀反、配流

遷配

盛^清ニ被申ケルハ、成經ガ事ヲ宰相ノ痛ク歎キ申サル、コソ不便ニ侍レ、御産ノ御祈ニ非常ノ大赦行ハレテ、丹波少將其中ニ入ラルベクヤ候ラン、宰相ノ申サル、如ク無雙ノ御祈タルベシ、人ノ思ヒ歎キヲ休メ物ノ所望ヲ叶ヘサセ給ナバ、皇子御誕生有テ家門ノ榮花モイヨク開ケメト相存ズ、^略中様々ニ有被申タレバ、入道今度ハ事ノ外ニ和ヒテ、去バ俊寛康頼ハ如何ト宣ケリ、其モ同罪トテ同配所ナレバ、俱ニ御免アラメト申レケリ、^略中七月上旬ニ丹波少將召返セトテ六波羅ヨリ使アリ、入道ノ侍ニ丹左衛門尉基安ト云者也、宰相ノ許ヨリモ私ノ使ヲ相添ラレタリ、

康頼熊野詣附祝言事

六波羅ノ使近付寄テ、是ハ丹左衛門尉基安ト申者ニ侍ル、六波羅殿ヨリ赦免ノ御教書候、丹波少將殿ニ進上セント云フ、人々餘リノ嬉サニ只夢ノ心地ゾセラレケル、成經是ニ侍リトテ出合レタリ、基安立文ニ通取出テ進スル、一通ハ平宰相ノ私ノ消息也、少將バカリ見之、一通ハ太政入道ノ免狀也、判官入道披之讀ニ云、

依中宮御産御祈禱被行非常大赦之内薩摩方硫黄島流人丹波少將成經并平判官康頼法師可歸洛之由御氣色所候也、仍執達如件、

七月三日

トハ有ケレ共、俊寛僧都ト云フ四ノ文字コソ無リケレ、執行ハ御教書取上テヒログツ卷ツ披ツ千度百度シケレドモ、カ、チバナジカハ有ベキナレバ、頓テ伏倒レ絶入ケルコソ無慙ナレ、^略中執行ヲバ打捨テ、少將モ判官入道モ急ギケルコソ悲ケレ、^略中少將ハ九月中旬ニ島ヲ出テ、^略中同廿日餘リニゾ九國ノ地ヘハ著給フ、肥前國鹿瀬庄ハ私ニハ味木庄トモ云ケリ、件ノ所ハ男平宰相ノ知行也、爰ニ暫ク逗留シテ日來ノツカレヲモイタハリ給ヘリ、湯沐髪ス、ギナドセラレ

已上同二年五月十七日配流同寺惡僧、

宗賢薩摩 玄信豐岐 覺賢對馬

已上仁安三年五月三日配流高野僧、

長息下野 良惠周防 圓喜阿波

同年六月廿六日配流興福寺惡僧、

〔源平盛衰記七〕成親卿流罪事

大納言ノ中納言ニテ御坐シ時尾張國守ニテ去嘉應元年冬ノ比、目代ニテ衛門尉政友ヲ當國ヘ被下ケルガ、美濃國杭瀬河ニテ宿ヲ取山門領平野庄ノ神人蕭ヲ賣テ出來レリ、政友是ヲ買ントテ直ノ高下ヲ論ジテ、様々ニナブル程ニ、南ニ墨ヲヅ付タリケル、斯ケレバ神人等憤起テ、山門ニ攀登テ致訴、訟問衆徒及奏聞、壅斷遲々ニ依テ同年十二月廿四日ニ大衆等日吉ノ神與ヲ頂戴シテ下洛ス、武士ニ仰テ被防シカ共、神與ヲ建禮門ノ前ニ奉振居、國司成親卿ヲ流罪ナリ、目代政友ヲ可被禁獄之由訴申ケレバ、成親卿ハ備中國ヘ流罪、政友ヲバ禁獄之由被仰下、即西ノ朱雀マデ被出タリシガ共、同廿八日ニ被召返、同晦日本位ニ復シ、中納言ニ成返テ、嘉應二年正月五日、右衛門督ヲ兼シテ、檢非違使ノ別當ニ成給フ、

〔源平盛衰記九〕宰相申預丹波少將事

中宮○建禮院 五月○治承二年ニテ御帶賜御坐シテ、六月廿八日、吉日トテ御著帶アリ、御懷妊ノ事、定マ

ラセ給ケレバ、御產平安王子御誕生ノ御祈内外ニ付テ頻也、平宰相○敏盛 折節ヲ得テ小松殿○重盛

ニ被參申シケルハ、中宮御產ノ御祈ニ、定メテ様々ノ攘災行ハレズラン、成經ガ事、今度申有ラレ

ナンヤ、何事ニモ勝レタル御祈タルベシ、サラバ御產モ平カニ皇子モ御誕生疑アラジト泣口説

給フ、大臣ハ誰モ子ハ悲シキ物ナレバ誠ニサゾ覺スラン、心ノ及ン程ハ申見ベシトテ、入道殿○平

去程ニ彼人々ノ隱謀次第ニ顯レテ、君モ罪ナキ由被_レ開食_レケルバ、信西ガ子共皆以被_レ召返御政ニ付被_レ仰合方ナキ儘ニ、彼禪門ヲゾ忍バセ給ケル師仲卿モ終ニ通ル、所ナクシテ播磨中將成憲ノ配所室ノ八島ヘゾ被_レ遣_レケル、伏見源中納言_仲師三河ノ八橋ヲ渡ルトテ、

夢ニダニ角ヲ三河ノ八橋ヲ渡ルベシトハ思ハザリシヲ、ト讀レタリシヲ上皇_{白河}聞召シテ、

哀ニ被_レ思召_レケルバ、召返セトゾ仰ナリケル、誠ニ詠歌ノ德ナルベシ、其後新大納言經宗モ阿波國ヨリ被_レ召返テ右大臣ニナル、人アハノ大臣トゾ申ケル、又大宮左大臣伊通公、世ニ住バ與アル事ヲ聞物哉、昔コソ黍ノ大臣有ケンナレ、今粟ノ大臣出來タリ、何カ又稗ノ大臣出來ヌラント笑ハレケリ、大饗行ハルベカリケルニ、尊者ニ此左大臣請シ奉リケルバ、使者ノ聞ヲモ不_レ慚、粟ノ大臣上リテ旅籠振舞セラル、ナ、伊通ハ得參ラジトゾ被_レ申ケル、別當入道_{惟方}ハ御憤深クシテ被_レ召返ル間敷由聞エケルバ、心細クヤ思ハレケン、故郷ヘ一首ノ歌ヲゾ被_レ送ケル、

此瀬ニモ沈ト聞バ涙河流レシヨリモヌル、袖哉、ト讀タリシヲ、聞人哀ヲ催シ、君モ感ジ被_レ思食_レケルバ、終ニ蒙_レ赦免テ被_レ上洛_レケルト也。_{又見續世體抄、今者聞集十訓抄、}

〔兵範記〕嘉應元年六月廿三日戊申、詔_略中其大赦天下。_略中

嘉應元年六月廿三日 御書三字_略廿三日

流人中被_レ召返僧侶十五人

僧辨禪_{越後} 辨鏡_{阿波}

已上永萬元年八月十二日配流、與力僧正惠信、

最慶_{薩摩} 玄榮_{壹岐} 玄延_{大隅}

已上同年九月六日配流、延曆寺惡僧

實勝_{豐後} 教中_{周防} 良運_{豐前} 圓慶_{筑前}

〔類聚國史利法八十七〕延曆二十一年六月丁未勅令伊豫國配流人五百枝王聽居府下、

〔日本後紀恒武十二〕延曆廿四年三月己丑免從四位下吉備朝臣泉並五百枝王、藤原朝臣淨岡、藤原朝臣雄依山上船主等罪入京、

〔日本後紀恒武十二〕延曆廿四年三月壬辰免伊豆國流人水上真人河繼罪、

〔續日本後紀仁明九〕承和七年二月辛酉召流人小野篁、六月辛酉流人小野篁入京被黃衣以拜謝、

〔續日本後紀仁明九〕承和七年二月癸亥勅喚流人伴有仁、刀伎雄真、

〔文德實錄十〕天安二年五月乙亥宮內卿從三位高枝王薨高枝王四品中務卿伊豫親王第二子也、爲

人寬弘頗習文書大同初親王遭害三子遠配辛苦流離不知生計弘仁改曆聖皇踐祚哀親王無辜諸

子窮毒殊降恩赦免罪入京返給前年被沒資財田宅高枝與兄弟相議均分男女時人悲歎之、

〔三代實錄清和二十九〕貞觀十八年六月八日癸丑庶人伴中庸犯大逆罪被配流隱岐國中庸子禪師麻呂

元孫叔孫其禪師麻呂年十二歲身在京師詔遣父配所元孫叔孫二人隨父在配所召還京師、

〔中右記〕大治四年六月廿五日壬申戊刻許別當右衛門督實行卿參仗座可召返流人由被仰下○中

聊依有所念被召返流人等、

〔源明國天永二年十一月十九日流左〕

仁寬伊豆國依無反也經二十七年

大學助源高行永久四年三月十三日配流安藝國依

〔百鍊抄七〕永曆元年二月廿日院白河後仰清盛朝臣擢召權大納言經宗別當惟方卿於禁裏中三

月十一日前大納言經宗入道惟方卿等配流、

應保二年三月七日九日等流人經宗卿已下被召返之、

〔平治物語三〕經宗惟方被處遠流事同被召返事

配流不在赦例、

〔續日本紀^{文武}〕大寶二年四月乙巳、飛驒國獻神馬、^中獲瑞僧隆觀免罪入京、^{流僧幸甚}

○按ズルニ、僧隆觀ハ流人ノ子ニシテ、既ニ貫ヲ流地ニ移シ、ガ赦ニ遭ヒテ京ニ入リシナリ、
流人ノ子モ亦赦ニ遭フニアラザレバ、入京スルヲ得ザリシナラン、

〔續日本紀^{元四}〕慶雲四年秋七月壬子天皇即位於大極殿、詔曰、^中大赦天下、^略前後流人、非反逆緣坐及移郷者並宜放還、

〔續日本紀^{聖十四}〕天平十三年九月乙卯、勅以京都新遷、大赦天下、^中其流人未達前所、已達前所及年滿已編附爲百姓、亦成釋放、還其在流所生子孫、父母已亡無可隨還者、亦不限年之遠、近情願還者、錄名聞奏、但不願還者、悉聽之、

〔續日本紀^{聖十六}〕天平十七年四月壬寅、徵鹽燒王、^配○天平十四年、^略伊豆島、令入京、十八年閏九月乙酉、无位鹽燒王授本位正四位下、

〔續日本紀^{聖三十}〕寶龜元年九月乙丑、徵和氣清麻呂、廣虫於備後大隅、詣京師、

〔續日本紀^{光三十一}〕寶龜元年十一月乙酉、勅先後逆黨一切皆從原宥、其情願留住配處者、宜悉聽之、如窮乏之徒、無資歸郷者、路次諸國、量給食馬、

〔續日本紀^{光三十二}〕寶龜三年十一月丙午、無位安倍朝臣彌夫人、寶字八年告元凶伏誅、以愍衆情、因授從四位下、景雲三年坐縣犬養姉女配流、至是原罪降授從五位下、

〔續日本紀^{聖三十七}〕延暦二年三月丙申、右大臣從二位兼行近衛大將皇太子傳藤原朝臣田麻呂薨、^中略天平十二年坐兄廣嗣事、流於隱伎、十四年宥罪徵還、^中延暦元年進爲右大臣、授從二位、尋加正

二位、薨時年六十二、
〔日本紀略^{聖武}〕延暦十四年十二月壬午、免流人令入京、

以後聽仕謂仕者、仕官、即所實及京師、皆聽通仕、其其犯逆緣坐流、及因反逆免死配流、不在此例、其
謀大逆從者、即本犯不應流而特配流者、謂元非除名之色、故三載聽仕、若應除名者、亦依六載之法、
亦准此也、
故特配流者、謂官位動位、皆悉追收、三載以後聽仕、有蔭者各依本犯收斂法、謂蔭者、父祖之蔭也、其解見任、
及非除名移鄉者、年限准考解例、謂依考課令、考解者、謂年聽斂是也、文云、非除名、
【唐六典六刑部凡略】中 流移之人、○中 至六載然後聽仕、

其犯反逆緣坐流、及免死役流、不在此例、

即本犯不應流、而特配流者、三載以後聽仕、

有責者各依本犯收斂法、其解見任、及非除名移鄉者、年限斂法皆準考解之例、

【拾遺和歌集】ながされ侍ける道にてよみ侍ける

うき木といふ心を

ながれ木もみどせありてはあひみてん世のうき事ぞかへらざりける

放流人

【律疏名例】凡流配人在道會赦、計行程過限者、不得以赦原、五十里、但馬及步人同行、過限日字、七十里、步人

爲限者、謂從上道日、總計行程、有違者、假有配近流、准步程、合四十日、若未滿四十日、會赦不問已、有故者

不用此律、故謂病患死亡、及請假之類、准令臨時應給假者、及前若程內至配所者、亦從赦原、假有人配

所、而過限、教者亦免、逃亡者、雖在程內、亦不在免限、即逃者身死、所隨家口仍准上法聽還、內逃亡、

雖過教不合赦、免即逃者身死、所隨家口、

【禁秘御抄下】召還流人

宣下後觸彼家、差使召返也、

【日本書紀二十五年】大化二年三月辛巳、大赦天下、○中 宜遣使者諸國流人、及獄中囚、一皆放捨、

【日本書紀二十九】五年八月壬子詔曰、死刑沒官三流、並除一等徒罪以下已發覺未發覺悉赦之、唯既

周防國言秋實申云、貞觀八年九月十三日、被配流壹岐島、逢元慶四年十二月四日、恩赦放免歸來秋實、偷脫配所、輒到此土、仍投○投、字誤、恐其身體謹請處分者、至是差宛防援、還著本所

三代實錄四十八仁和元年九月廿一日壬寅、太政官下符五畿內七道諸國、令認索流人楊雄、先是楊雄犯罪、配流安房國、國宰言脫配所而逃亡、楊雄者仲野親王之孫、胤世之男也、

〔本朝世紀〕康和元年五月十八日庚申、權中納言公實卿參入、被行配流事、源除子流人仲宗、追子、

散位惟宗經允陸奥大夫、藤原時永、仲宗、等、同國、除子等相從、仲宗久在配所、今竊上洛、由有其聞、所被

行也、○不、尊、法、家、之、諫、又、無、公、卿、之、食、諫、

〔玉海〕安元三年五月廿二日辛酉、去夜前僧正明雲被配、流伊豆國了、廿三日壬戌、申刻人傳云、前座

主下向之間、大衆於勢多邊奪取登山了、

〔源平盛衰記〕澄憲賜血脈事

去程ニ滿山ノ大衆殘留モナク、東坂本ニ下ツ、十禪師御前ニテ各涙ヲ流シ、食議シケルハ、當山

五十五代イマダ天台座主流罪ノ例ヲ聞ズ、此時始テ顯密ノ主ヲ失ヒ、修學ノ窓ヲ閉事、唯當時ノ

失面目ノミニ非末代マデモ口惜カルベシ、○中、サラバ迎奉レヤトテ、袈裟ヲバ甲冑ニ脱替テ、或

ハ渺々タル志賀唐崎ノ浦路ニ歩引唱衆徒モアリ、或ハ漫々タル山田矢橋ノ湖上ニ舟ニ竿サス

大衆モアリ、角テ國分寺ノ毘沙門堂ヘ參ケレバ、稠ゲナリツル追立ノ官人モ見エズ、兩送使モ失

ヒケリ、座主○明、ハ此有様ヲ御覽ジテ、大ニ恐給被仰ケルハ、○中、昔コソ三千人ノ貫首タリシガ、

今ハ係身ニ成テ、再我山ニ還登事ダニ難有、イカレ無止事修學者、智慧深大德達ニ被昇捧上ベキ、

屢ナンド云物ヲハキテ、同ジ様ニ步連テコソト宣ヘバ、西塔法師ニ戒淨坊相模阿闍梨祐慶ハ三

塔無雙ノ惡僧也、○中、衆徒ノ中ヲ指越指越座主ノ御前ニ參テ、大長刀杖ニ突テ、座主ヲハタト率

睨申ケルハ、加様ニ御心弱渡ラセ給ヘバコソ、係憂目ヲモ御覽ジ、山門ニ様ナキ疵ヲモ付サセ給

トゾ書タリケル。○中略同十七日ニ、所司等ヲ以福原ノ禪門大相國ヘゾ送遣ケル、廿日前座主ノ罪科ノ事可有僉議トテ、太政大臣以下ノ公卿十三人參内アリ、陣ノ座ニ著テ其定有ケレ共、冥ニハ七社權現ノ照覽モ難測顯ニハ三千衆徒ノ鬱憤モ恐シクヤオボシケン、諸卿各口ヲ閉テ申旨モナカリケリ、其中ニ八條中納言長方卿其時ハ左大辨宰相ニテ御坐ケルガ被申ケルハ、法家ノ勘文ニ任テ、死罪一等ヲ減ジテ、雖可被遠流、前座主僧正ハ、顯密兼學淨行持律ノ上、公家ニハ一乘圓宗御師範也、法皇ニハ圓頓受戒ノ和尚タリ、御經ノ師御戒ノ師ニヤ、被行重科事、冥ノ照覽難測、還俗遠流ヲ可被有カト、無所憚ル被申ケレバ、當座ノ公卿各長方卿ノ被申定之義ニ同スト被申ケレ共、法皇ノ御憤深カリケレバ、終ニ流罪ニ定リケリ、太政入道モ此事角ト承ケレバ、申止進セントテ、被參タレ共、御風ノ氣トテ御前ヘモ召レズ、御憤リノ深キヨト心得テ出給ニケリ、廿一日ニ、前座主明雲僧正ヲバ、大納言大夫藤井松枝ト名ヲ改テ、伊豆國ヘ流罪ト定ル、

〔吾妻鏡〕四元暦二年○文治元年七月廿六日丁未、前律師忠快爲流人、一昨日到著伊豆國小河郷之由宗茂申之、是平家緣坐也、

〔後撰和歌集〕十九善祐法師の伊豆のくににながされ侍けるに、

いせ

別てはいつあいみんとおもふらんかぎりあるよのいのちともなし

〔後拾遺和歌集〕十七靜範法師やはたの宮の事にかへりて、伊豆國にながされて又のとし五月に

うちの大貳三位のもとにつかはしける、

藤原兼房朝臣

五月やみこ、ひのもりの子規人まれずのみなきゐたるかな

〔令義解〕十凡囚死无親戚者謂並无有親之親者皆於閑地權埋立勝於上記其姓名仍下本屬卽流移人在路及

流徒在役死者准此、

〔三代實錄〕四十四元慶七年十二月廿六日戊午、勅令周防國司還流人伴秋實於本配所壹岐島、先是

中納言藤原朝臣^宗定申云、大略同長方朝臣議、但大治年中、春日行幸之時、興福寺權別當滿勸實

了、五月之比、彼寺衆徒訴申之、而有仗議、依爲墮卿定申、神今食以後、可有沙汰之由、被仰下、實耐難異、今度射神輿事、解謝本社之後、可有勅定歟、

左兵衛督藤原朝臣^成定申云、同長方朝臣議、尋推據例、可被計行之條、同左近衛中將藤原朝臣定申、

權中納言藤原朝臣^實左近衛中將藤原朝臣^守等定申云、如勘狀者、所當罪科無所遁、任法可被

行歟、但圓宗之教法、是超餘乘、台嶽之護持、久被一天、擇其善德、被補座主、無被行流罪之例、豈無犯法輩之故歟、猶爲苦薩戒和尚之者、還俗之條、可有思慮、尋推據例、可被計行非常之斷、人主專之、輕重之間、宜奉勅定、

皇太后宮權大夫藤原朝臣^方定申云、法家勘所當罪狀了、科斷之條、可在勅定、

右近衛中將藤原朝臣^宗定申云、所當罪科大都見法家勘狀、此上若可被有行者、只可有聽斷、凡謂勅罪而有輕重者、依勅斷而已、是所存弛張之間、只有勅定、

安元三年五月廿日 長方朝臣^{發言執筆}

廿二日辛酉、參大理、去夕前座主明雲被流伊豆國了、進使志重成、自白川房相副、向一切經別所、重成猶相副、譴責云々、

〔源平盛衰記〕^五山門奏狀事

同年^{○安元三}五月十五日、前座主明雲僧正、減死罪一等、可被遠流之由、法家勘申之旨、風聞有クレバ、衆

徒捧奏狀云、

延曆寺三千大衆法師等、誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩、早被停止前座主明雲配流并私領沒官子細事^{○中}

應令還俗前僧正法印大和尚位惠信權大僧都法眼和尚位宗覺傳燈大法師玄明維勝等事
右從二位行中納言兼左衛門督藤原朝臣隆季宜奉勅件惠信等坐事配流國々宜仰彼省先令還俗
者省宜承知依宣行之符到奉行

左少弁爲親大夫史隆職宿禰加判

惠信伊豆宗覺土左玄明維勝佐渡

〔山槐記〕承安五年元安八月廿四日壬申晚頭藏人左衛門權佐光雅奉仰示送曰今聞有可被仰下

事可令參陳懸紙曰流人事也者略延曆寺惡徒大法師辨圓仰治部省令還俗仰本寺令召返度緣

宜處中流者略又曰中流國伊豫信濃兩國注申而伊豫爲院御沙汰信濃可宜歟之由且職事所申

合也如何予曰職事內々被示其旨者早可遣信濃也持來官符入宣一枚配流事予披見之返給外記

伺氣色仰可持向結政之由外記稱唯退是又無內覽奏聞文也

〔清辨眼抄凶事〕山座主明雲配流事

後清錄記云安元三年五月廿日己未今日前座主明雲可被配流否事有障定公卿大相國師右府兼

大納言隆季中納言宗安成範參議朝方實宗等可被流之由令定申了

法家勘申前僧正明雲罪名之事

太政大臣師右衛門督藤原朝臣觀忠右大辨長方朝臣定申云法家勘所當罪狀畢減一等配流不

可及異儀歟但其罪涉謀反之由勘申之雖理可然事起自訴訴爲蒙裁報催衆徒令參障頭其間狼藉

事若出不圖偏難處謀反歟雖然衆徒騷動被結構之由既以有露顯者豈遺霜刑須任法被行之處明

雲以一乘妙法奉授公家以菩薩淨戒奉授法皇而忽令還俗處流刑之條可及豫議哉宜在勅定

右大臣實中中宮大夫藤原朝臣隆季定申云大略同長方朝臣定申爲菩薩戒和尚之者處死罪之條

爲圓宗如何冥之照覽難量者歟

〔百練抄^八〕承安三年四月廿九日、高尾上人文覺、賜檢非違使、依狂氣也。五月十六日被流伊豆國、〔玉海〕承安三年四月廿九日辛卯、高尾聖人文覺、參院中、眼前所望千石庄、依無許容吐種々惡言、殆放言朝家云々、仍北面輩承仰豫捕之、凌礮給檢非違使云々、是又天魔之所爲也。

〔源平盛衰記^{十八}〕文覺流罪事

公卿會議アリテ、此僧^覺○文ヲ京中ニ置テハ、惡カリナントテ、伊豆ノ國ヘ流罪ノ由ニテ、當時ノ國務ナリケレバ、源三位入道ノ子息仲綱ニ被仰附又、

〔百練抄^{十一}〕正治元年三月十九日、文覺上人配流佐渡國、

〔百練抄^五〕永久元年十一月二十二日、諸卿定申阿闍梨仁寬、罪名配流伊豆國、黨類同處流罪、是去四日院御所有落書、仁寬相語勝覺僧都大童子千手丸、欲危國家事、依露顯、違檢非違使、盛重所搦取也、

〔百練抄^六〕大治元年十一月七日、阿闍梨承玄并僧妙心、還俗配流、依有奉呪咀女院^門○待賢之聞也、去四日被追捕之、

〔百練抄^八〕承安三年十月九日、法眼覺興配流播磨國、依燒多武峯也、

〔兵範記〕仁安二年五月十三日庚戌、今夕有陣定、去三月十日夜、興福寺前別當前法務僧正惠信、大僧都宗覺、僧正房僧亮君玄明、肥前君維勝以下、數多惡賊打入興福寺中、燒失喜多院松室圓城房并寺外人家、殺害學衆堂衆寺僧等越宣下法家、令勘申罪名事也、左大臣^經源大納言雅通、按察使公通、皇后宮大夫實定、左衛門督隆季、權中納言忠親、左大弁雅賴、參議親範、家通、會議左大弁執筆云々、十五日壬子、晚頭左衛門督隆季卿、依召參着仗座、藏人右衛門權佐經房宣下流人事、次上卿仰左少弁爲親令作官符、次仰檢非違使等云々、

太政官符^{治部省}

應遺流

〔續日本紀^{三十三}〕實龜六年五月己酉從四位上陰陽頭兼安藝守大津連大浦卒。○中神護元年以黨和氣王除宿禰姓左遷日向守尋解見任即留彼國實龜初原罪入京任陰陽頭。

〔百練抄^七〕應保二年六月廿三日實賢卿通家朝臣時忠範忠之配流不勘罪名人傾之是奉呪咀主上於賀茂社之由露顯之故也。

〔百練抄^七〕永萬元年九月十四日流人時忠召返。

〔百練抄^八〕嘉應元年十二月廿八日權中納言右衛門督時忠別當藏人頭權右中辨信範等解官配

流時忠出雲信範備後是成親卿依衆徒訴配流之間彼兩人有奏事不實之由有御登緣坐輩解官二年二月

六日流人時忠信範可召返又權中納言成親卿可解却見任之由宣下各依山門申請也十二月八

日時忠信範等復本位。

〔百練抄^十〕文治元年五月廿日壬寅權大納言兼房卿參入宣下流人等前大納言時忠卿能登前

內藏頭信基備後

〔吾妻鏡^九〕文治五年三月五日丁未前平大納言時忠去月廿四日未刻於能登國配所薨之由今日

達關東。

〔百練抄^八〕嘉應元年十二月廿三日延曆寺衆徒奉具日吉神輿參大內是權中納言成親卿知行尾

張國目代右衛門尉政友與神民不慮鬪亂事出來爲訴申也於院召公卿議定政友可候獄所之由雖

被仰衆徒猶不承引叫喚廿四日權中納言成親卿解官配流備中國政友賜獄所衆徒成悅奉迎神

輿歸山廿八日藤原成親卿可召還之由宣下時日遷任本官

〔百練抄^八〕治承元年六月一日入道大相國清盛召取權大納言成親右近少將成經左衛門尉師光

法師法名西光禁固西八條亭各上皇○後恩寵之輩也成親卿已下有密謀之由源行綱告言入道相國云

云○中於成親卿者遣備前國二日成親卿送備前國七月九日略

十七日丙寅、常胤相伴一弱冠、進御前○源賴朝云、以之可被用、今日御贈物云云、是陸奥六郎義隆男號毛利冠者賴隆也、著紺村濃直垂、加小具足、跪常胤之傍、見其氣色給、尤可謂源氏之胤子、仍感之、忽謂常胤之座上給父義隆者、去平治元年十二月於天台山龍華越、奉爲故左典、既奔命、于時賴隆產生之後、僅五十餘日也、而被處、件緣坐、永曆元年二月、仰常胤配下總國云云、

〔源平盛衰記二十八〕顯真一萬部法華經事

五月○壽永元年十九日、藏人左少辨光長、宣旨ヲ奉テ、叡山ノ惡徒永雲薩摩國ニ配流、顯真ハ土佐國ヘゾ被遣ケル、是ハ高倉宮仁王ノ御子、并ニ伊豆守仲綱ガ子息ヲ、木曾義仲ガ許ヘ下シ、奉リケル罪科トゾ聞エケル○略下

〔吾妻鏡四〕元曆二年○文治元年六月二日癸丑、去月廿日被下配流官符、上卿源中納言源賴朝、參陣、頭辨光雅朝臣仰之云云、其交名目錄、今日到著鎌倉流人、

前大納言時忠能登 前內藏頭信基備後

前左中將時實周防 前兵部權少輔尹明出雲

法印大僧都良弘阿波 權少僧都全真安藝

權律師忠快伊豆 法眼能圓備中

法眼行明常陸

親流任國

〔續日本紀二十〕天平實字元年七月庚戌詔○中略、信濃國守佐伯大成、土左國守大伴古慈妻二人並便流任國、

〔續日本紀三十四〕寶龜八年八月丁酉、大和守從三位大伴宿禰古慈妻薨○中略、勝寶年中累遷從四位上、衛門督、俄遷出雲守、自見疎外、意常鬱々、紫微內相藤原仲滿、誣以誹謗、左降土左守、促令之任、未幾、勝寶八歲之亂、便流土左、天皇有罪入京、以其舊老、授從三位、薨時年八十三、

正五位下行左衛門佐平業房昨日解官配流伊豆國追使右志中原重成而業房失在所翌日行向仁和寺之由風聞仍重成向彼所云々

〔百練抄八〕治承四年五月十五日法皇○後白河第三宮○三條宮配流土佐國依有謀反之間也按非違使源兼綱右尉源光長等參向御在所追之○中宮密々通出令向園城寺給○下

〔源平盛衰記十三〕熊野新宮軍事

六波羅ニハ公卿殿上人ヒシト並居給タリケルニ入道○平宜ケルハ大方發スマジキハ弓取ノ

青道心ニテ有ケリ永曆元年ニ斬ベカリシ頼朝ヲ宥オキ今係ル大事ヲ被仰下ヨソ安カラテ所

詮東國ノ勢ノ馳上ラヌ前ニ宮○仁王以ヲ取奉テ土佐ノ畑ヘ流シ奉ルベシト被定ケル上卿ニハ

三條大納言實房職事ニハ藏人左少辨行隆別當平大納言時忠卿仰ヲ蒙テ檢非違使源大夫判官

兼綱出羽判官光長博士判官兼成等ヲ召テ以仁王ヲ土佐ノ畑ヘ移奉ベキ由仰含○下

〔平家物語四〕のぶつらかつせんの事

前右大將宗盛の卿大床に立て信つらを大庭に引すへさせ○中よくきうもんして事の子

細をたづねとひ其後河原に引出てかうべをはねよとぞ宜ひける信つらもとより勝たる大が

うの者なりければゐなをりあざわらつて申けるは○中侍ぼんの者一度申さじと思ひきりて

ん事をきうもんに及で申べきやうなしとて其後は物も申さずいくらもなみたりける平家

の侍共あつはれがうの者やこれらをこそ一人當千の兵ども云べけれど口々に申ければ其中

に或人の申けるは○中あつたら男のきられんずる事のむざんさよをしみあへりければ入

道相國いかと思はれけんさらばなきつそとてはうきのひのへぞながされける

〔吾妻鏡〕治承四年八月四日甲申散位平兼隆○山本判官者伊豆國流人也依父和泉守信兼之訴配

于當國山本郷漸歷年序之後假平相國禪閣之權輝威於郡郷是本自依爲平家一流氏族也九月

新大納言

○成親原

ト俊寛僧都トハ宗人ノ事、丹波少將

○成

成親卿ノ嫡子ナレバ罪科實ニ難通

シ、首ヲ切ラレ給ハス事ハ小松大臣

○重盛

平ノ御助ケ也、康頼ガ無類ニナル事ハ何ノ罪ナルラント

無類也、北面ノ輩アマタコソハ被召誠レケルニ、他人ハ指モヤハ有ジ、此事ハ同意ノ輩鹿谷ノ評

定ノ時、瓶子ノ倒レテ類ヲ打折タリケルヲ、平氏既ニ倒レタリ、類ヲ取ニハ過ズトテ様々振舞タ

リケレバ、滿座ノ人此秀句ヲ感ジケルニ、西光法師折タル瓶子ヲ取合セテ、猶平氏ノ首取タリ取

タリト云ケルヲ、入道

○清盛

平聞給テ、カク深キ罪ニハ被行ケリ、契淺カラヌ輩コソ其座ニハ有ケヌ、

何トシテ漏ケルヤラン、後ニコソ行綱ガ讒言トモ聞エシガ、天ヲモ可度シ地ヲモ可度シ、只不可

度ハ人心ト云ヘリ、ヨクノ其ヲ知ズシテ、左右チク人ニハ人ノ打トクマジキ者ト覺エタリ、丹

波少將成經ヲバ福原ヘ召下シ、妹尾太郎

○兼

兼ニ預置キ、備中國ヘ遣シタリケルヲ、俊寛僧都平判

官康頼ニ相具シテ、薩摩方鬼界ガ島ヘゾ被放ケル、康頼ハ都ヲ出テ配所ヘ赴ケルガ、小馬ノ林ヲ

通ルトテ、

津國ヤコマノ林ヲキタミレバ、古ハイマダカハラザリケリ、ト思連ケテ、ヤガテ爰ニテ僧ヲ請

シ、出家入道シテ法名性照トゾ云ケル、髮ヲオロシ袈裟ヲ戴クトテ、

終ニカク背ハテケル世中ヲトク捨ザリシ事ゾクヤシキ、剃タル髮ヲ紙ニ裹ミ、此歌ニ取添テ

故郷ニ遣シタリケレバ、其妻一目見ツ、何トダニモ云ズシテ絶入ケルコソ無類ナレ、

〔玉海〕治承三年五月三日庚申、權中納言忠親卿着仗座、被行流人事、

○中

筑前國住吉社神官三人

昌助伊同昌守

安房

前左衛門尉忠清

○實

弟

仰左少弁兼光

令作

官符

參議實宗卿少納言仲家

向結政請印、

〔山槐記〕治承三年十一月十八日壬申、子終刻、前關白

○藤原基房

從一位

年

廿

被遷

太宰權帥

下向給、

○中

略

實基養君ニシテ都ニ隱シ置ケリ、今一人ノ男子ハ駿河國ニ香貫ト云者搦出テ平家ハ奉レバ希義ト云名ヲ付テ、土佐國氣良ト云所へ被流テ御坐ケレバ、氣良冠者トゾ申ケル、兵衛佐ハ伊豆國兄弟東西へ別レ行ク宿業ノ程コソ悲シケレ、

〔百練抄^七〕

康治元年正月十九日散位源盛行并妻津守島子配流土佐國奉待賢門院^{○鳥羽中宮}

仰依奉呪咀國母皇后宮^{○鳥羽皇后}勸罪名所處流罪也、件夫婦祇候彼院者也、

〔愚昧記〕仁安元年九月廿六日自藏人弁^{○平}示送云、今日可參陣、有可被仰下事、禮紙云、先日所被勸

罪名之義資等可被配流也者、可參仕之由示了、則引檢日記等抄出次第、又自師尙許借送之次第等

了見、乘燭着束帶參內、直着陣外座^{須先着與座也、然}

藏人弁長方下罪狀仰云、依勘申令配流子結之

即返下、仰可令候、官符之由、此間令官人召大外記師尙於賦間可內覽并奏聞哉否事、件事依有說々也、師尙云、所法指外印文不可內覽并奏之由所見文書、上古不奏不內覽也、但又可令從御一家例歟、

予云、故入道殿大治年中行此事、無內覽奏聞、又經信卿度々無之、然者不可奏并內覽由存知也、答云、尤可然、打任^天不可心事也、此後少外記某覽官府、乍宮內見之、有三枚^{一枚爲經}即返給了、次召弁

早仰可追下之、由、次退出、于時亥始、件男等於河內國突後官使、刃傷火長云々、仍件國司所訴申也、被解狀等先日爲藏人弁奉行下、予又返下了、其後又有其期奏事也、

〔兵範記〕仁安三年八月九日戊戌、今日有配流事、大納言大夫定國、去比欲殺害慈母、罪科露顯、被召籠

使廳、法家之所勘處死罪、配流隱岐國、晚頭左衛門督實國候、仗座、藏人少輔兼光仰流人事、次上卿仰并令作官符、次奏議成賴卿少納言定宗、外記等向結政、請印、次召付領送使、次仰檢非違使、令追京中

云々、

〔百練抄^八〕

高倉治承元年三月廿八日、院武者所藤原師經^{加賀國目代}、配流備後國、依天台訴也、

〔源平盛衰記^七〕信俊下向事

父ノ後世弔ラハント被申候シガ痛敷候可然様ニ御計ヒ候ヘカシト申セバ、ソモ頼朝ニ尼ヲ慈
悲者トハ誰ガ知セケル、イザノ故刑部卿^{○平}時ハ多クノ者ヲ申免シ、ガ當時ハ如何侍ラ
ン、扱モ右馬助ニイタク似タラン無慙サヨ、家盛ダニアラバ鳥ニ成テ雲ヲ凌ギ、魚ニ成テ水ニモ
入、誠ニ來世ニテモ可逢クハ、只今死シテモ行ムト思ゾト、切イッ可被斬ニ定マリタルゾト宜
ヘバ、十三日トコソ聞エ候ヘト申セバ、叶ハヌマデモ申テコソ見メトテ、小松殿^{○平}其時ノ勤功
ニ伊豫守ニ成給シガ、正月ヨリ左馬頭ニテンジ給ヘルヲヨビ奉テ、頼朝ガ尼ニ付テ命ヲ申助ケ
ヨ、父ノ後世ヲトハント申ケルガ、餘ニ不便ニ侍ル能様ニ申テ給ヘ、殊ニ家盛ガ幼立ニ少モ不違
ト聞ケバ、ナツカシウコソ侍レ、右馬助ハソレノ御爲ニモ、伯父ゾカシ、頼朝ヲ助ケテ家盛ガ形見
ニ尼ニ見セ給ヘト宜ケレバ、重盛參リテ父ニ此由被申ケリ、清盛聞テ池殿ノ御事ハ故殿ノ渡ラ
セ給フト思奉レバ、如何成アマ逆ノ仰ナリトモ違フベシ、^{○平}恐トコソ存ズレ共、此事ハ由々
敷重事也、伏見中納言^{○源}越後中將^{○源}成親^{○源}ナド、加様ナル者ヲバ何十人助置タリトモ、大事有マ
ジ、大體弓矢取者ノ子孫ハソレニハ異ルベキ上、義朝ナドガ子共ハ幼ケレドモ、可有子細物ヲ、殊
ニ頼朝ハ官加階モ兄ニ超ルハ由々敷所ガアルニヤ、父モ見トガメ侍レバ、コソ重代ノ中ニモ取
分キ、秘藏ノ物具ナド與ヘケメ、傍難助置キ物ヲトテ以ノ外ノ氣色也、左馬頭歸參リテ難叶キ題
目成由被申ケレバ、池殿涙ヲ流シテ、^{○中}哀尼ガ命ヲ生サント思召サバ、兵衛佐ヲ助テ給ヘカシ
ト歎給ヘバ、重盛モ被迷惑ケルガ、涙ヲ押ヘテ、左候ハ、今一度御定ノ趣ヲ申テコソ見候ハメ、同
尾張殿ヲモ添被申候ヘ、諸共ニ仰ノ由委ク語リ候ハントテ、頼盛ト共ニ重テ此由ヲ被申ケレバ、
^{○中}流罪ニゾ定マリケル、

頼朝遠流事附盛安夢合事

兵衛佐殿ハ尾張國熱田ノ大宮司季範ガ娘腹也、男子二人、女子一人ゾ御坐ケル、女子ハ後藤兵衛

憂ニ沉ケリ、略中播磨中將成憲ハ、老タル母ト少キ子トヲ振捨テ遠遠ノ境ニ赴ケル、責テノ都ノ餘波惜サニ、所々ニヤスラヒテ行モヤリ給ハザリケルガ、栗田口ノ邊ニ馬ヲ留メテ、

道邊ノ草ノ青葉ニ駒留テ猶古郷ヲ返見ル哉、角ヲ略中下野國府ニ著テ我住ベカナル室ノ八

島トテ見遣給ヘバ、烟心細ク上リテ折カラ感涙トバメガタク思ハレシカバ、泣々角ヅ聞エケル、

我爲ニ有ケル物ヲ下野ヤ室ノ八島ニ絶ヌ思ハ、愛ヲバ夢ニダニ見ントハ思ハザリシカトモ、

今ハ住家ト跡ヲシメ、習ハヌ草ノ庵譬ヘン方モ更ニナシ、又見ニ

〔平治物語〕三頼朝生捕事附常盤被落事

斯處ニ同二月九日、元永曆義朝ノ三男前右兵衛佐頼朝、尾張守ヨリ丹波藤三國弘ト云小侍一人被付ケリ、既

給同次男中宮大夫進朝長ノ頸ヲモ率ラル、中依テ頼朝ヲバ先宗清ニゾ預置ケル、

頼朝被有遠流事附吳越戰事

去程ニ兵衛佐ハ未宗清ガ許ニ御坐ケレバ、尾張守ヨリ丹波藤三國弘ト云小侍一人被付ケリ、既

ニ今日明日被誅給ベシト聞エシカバ、宗清御命助カラントハ思召候ハズヤト申セバ、佐殿去ヌ

ル保元ニ多ノ伯父親類ヲ失ヒ、今度ノ合戰ニ故父討レ、兄弟皆失ヌレバ、僧法師ニモ成テ、父祖ノ

後世ヲ弔ラハハヤト思ヘバ、命ハ惜キゾト宜ヘバ、宗清モ哀ニ覺エテ、尾張守ノ母池ノ禪尼ト申

ハ、清盛ノ爲ニハ繼母ニテ御坐セ共、重ク執シ給ヘバ、彼方ナドニ付テ申サセ給ハバ、若御命助リ

御坐マス事モ候ベキ物ヲ、彼尼ハ若キヨリ慈悲深キ人ニテ御渡候其上一日盡テ候時己ガ許ニ

頼朝ガアナル、如何成者ゾト問ハセ給シカバ、御年ノ程ヨリ殊外長シヤカニ候、其妻右馬助殿平

家ニイタク似進ラサセ給テ候ト申シカバ、世ニ床シ氣ニ思召タル御氣色ニテコソ候シカト語

申ケレバ、ソレモ誰人カ申テ可給ト宜ヘバ、左モ思召候ハバ、叶ハヌ迄モ某申テ見候ハントテ、池

殿ヘ參リ何者カ申テ候ヤラン、上ノ大慈悲者ニテ御坐ストテ、哀頼朝ガ命ヲ申助サセ給ヘカシ、

御覽セラレヌ者ノ體也、且ハ末代ニ有ガタキ勇士也、哲命ヲ助テ可被遠流ト議定アリシカバ、流罪ニ定リス、但息災ニテハ後惡カリナントテ、肘ヲヌキテ伊豆ノ大島へ被流ケリ、角ヲ五十餘日シテ肩ツクロヒテ、後ハ少シ弱ク成タレ共、矢束ヲ引事今ニツプセ引マシタレバ、物ノ切ル事昔ニ不劣爲朝宜ケルハ、我清和天皇後胤トシテ八幡太郎孫也、爭先祖ヲバ可失是コソ公家ヨリ給タル領ナレトテ大島ヲ管領スルノミナラズ、都テ五島ヲ打順ヘタリ、是ハ伊豆國住人狩野介茂光ガ領ナレ共、聊モ年貢ヲモ出サズ、○中都テ島中ニ我郎等ノ外弓矢ヲ不置ケリ、昔ノ兵共尋下テ付順ヒシカバ、威勢漸盛ニシテ過行程二十年ニゾ成ニケル、

〔平治物語二〕信西子息被定遠流事

去程ニ夜モ漸明ケレバ、公卿僉議可有トテ、大殿○藤原基實關白○藤原基實太政大臣宗輔、左大臣伊通已下各參内シ給ヘリ、是ハ少納言入道○信西ノ子息僧俗十二人ノ罪名定申サレン爲也、左大臣伊通公有被申ケルニ依テ、死罪一等ヲ減ジテ遠流ニ被處俗ハ位記ヲ被留、僧ハ度緣ヲ取テ還俗セサセラル、先新宰相俊憲出雲國播磨中將成憲下野國右中辨貞憲隱岐國美濃少將長憲阿波國信濃守惟憲ハ安房國法眼淨憲ハ丹波國法橋寛敏ハ上總國大法師勝憲ハ安藝國澄憲ハ信濃國憲輝ハ陸奥國覺憲ハ伊豫國明遍ハ越後國トゾ被定ケル、

〔平治物語二〕常盤莊進并信西子息各被處遠流事

去程ニ少納言入道ノ子共僧俗十二人被流罪ケリ、君ノ御爲敢テ不義ヲ不存リシ忠臣ノ子共ナレバ、縱信賴義朝ニ被流テ配所ニ有ドモ、赦免有テ召コソ可被返ニ、結句被處流罪科ノ條何事ゾ難心得シト云ヘバ、此人々元ノ如ク被召仕ハ、信賴同心ノ事共天聽ニヤ達センズラント恐怖シテ、新大納言經宗別當惟方ノ勸メナルヲ、天下ノ擾亂ニ紛テ君モ思召誤テケリト心アル人ハ申ケルガ、虛名ハ立セヌ物ナレバ無幾程テ被召返レ、經宗惟方ノ謀計ハ顯レケルニヤ、終ニ左遷ノ

太政官符

治部省

應令還俗大法師範長事

右正三位行權中納言左兵衛督藤原朝臣忠雅宣奉勅範長坐事配流安藝國宜仰彼省先令還俗省宣承知依宣行之符到奉行

保元元年八月三日

修理左宮城使正五位下行左大史兼算博士

左辨官正五位下藤原朝臣^{略中}

此外國々へ流サル、人十四人トゾ聞ヘシ、

〔保元物語^三〕爲朝生捕被處遠流事

去程ニ爲朝ヲ搦テ參タラン者ニハ不次ノ賞アルベシト宣下クダリケルニ、八郎近江國輪田ト云所ニ隱居テ、郎等一人法師ニナシテ乞食サセテ日ヲ送ケリ、筑紫ヘ可下支度シケルガ平家ノ侍筑後守家貞大勢ニテ登リケレバ、其程晝ハ深山ニ入テ身ヲ隱シ夜ハ里ニ出テ食事ヲ營ミケルガ有漏ノ身ナレバ病出シテ灸治ナド多クシテ温疾大切ノ間古キ湯屋ヲ借リテ常ニヲジユラゾシケル、爰ニ佐渡兵衛重貞ト云者宜旨ヲ蒙テ國中ヲ尋求ケル處ニ、或者申ケルハ、此程此湯屋ニ居者コソ怪キ人ナレ、大男ノオソロシグナルガ流石ニ尋常氣也、歳ハ二十許ナルガ額ニ疵アリ、由々數ク人ニ忍ブト覺タリト語レバ、九月二日湯屋ニ下タル時、三十餘騎ニテ押寄テケリ、爲朝眞裸カニテ合木ヲ以テ數多ノ者ヲバ打伏タレ共、大勢ニ取籠ラレテ無云甲斐被搦ニケリ、季實判官請取テ二條ヲ西ヘ渡ス、白キ水干袴ニ赤キ帷子ヲ著セ髻ニ白櫛ヲゾ指タリケル、北陣ニテ叡覽アリ、公卿殿上人ハ不及申見物ノ者市ヲナシケリ、面ノ疵ハ合戰ノ日正清ニ被射タリトゾ聞エケル、既ニ被誅ベカリシガ、以前ノ事ハ合戰ノ時節ナレバ力ナシ、事既ニ違期セリ、未ダ

實明早可解官二人殿上人也、先快譽勢源等改徒罪可處遠流者、內大臣移着端座召權左中弁時範

朝臣本奉行被仰下、件流人事又召大外記師遠、件子族二人可解官由被仰下、流人符六枚外記師安

覽上卿入官、季仲常陸、賴國、快勢源左、及下、知刑部省、下、知刑部省、之事、近代流罪之時、不被行、今度被、罰、

此官符如何、但抑勢源法師只今被相尋之處、於獄中死去之由、口上仍被留了、自餘僧等在八幡別當

光清之許未進云々、上卿見官符遣左大弁基綱佐政請印、少納言時俊相具也、件由可祈申八幡宮、仍

奉幣日時使內大臣被定申來廿一日、使源中納言國信卿、次官左少弁顯隆、左大弁書定文被奏聞、例也、先

召大內記被仰宣命趣、龜宮事罪過行了由可被告申者、

〔保元物語三〕左府君達附謀叛人各遠流事

同○保元 元 二十五日人々遠流ノ由、宣下セラル、左京大夫入道○教ハ常陸國、近江中將成雅ハ越

後國、盛憲入道ハ佐渡國、正弘入道ハ陸奥國トゾ聞エケル、○中

太政官符

左京職

應追位記事

正二位藤原朝臣兼長

出雲國

從二位藤原朝臣師長

土佐國

正三位藤原朝臣教長

常陸國

右正二位行權中納言兼左兵衛督藤原朝臣忠雅宣、奉勅件等人坐事配流、件國々、宣仰被職令追位

記者職宜承知、仍宣行之符到奉行、

保元元年八月三日

修理左宮城使正五位下行左大史兼算博士

左辨官下正五位下藤原朝臣

權左中弁時範朝臣

本沙汰弁也

參着賦被仰下流人事此中可禁獄之輩或又被免人又可召問人々事同

被仰下可追位記之由可給官符於太宰府者是件人先日雖停任猶在宰府之故也

略○中

外記師安官

符十一枚入宮覽上卿內府見了返給外記予在仗座上卿命云向結政可請印予起座出敷政門少納

言時俊外記師安史生一人相具之予暫立假裝間少納言先入取出印歟頃而與少納言相共着座請

印了返官其後上卿仰弁從類之中在京之輩可追起境之由可下知檢非違使之狀被仰云々如此之

沙汰間已及鷄鳴

〔百練抄五〕

堀河

長治二年十二月廿九日前太宰權帥季仲除名配流周防國緣坐之輩同流罪

嘉承元年二月十七日前帥季仲改周防配流常陸謀大逆者可處遠流而依爲中流也

〔中右記〕

嘉承元年二月十七日

入夜有仗座定內大臣源實賴右大將源實忠治部卿源實賴下官源實忠源

左大弁源實忠

參集之後藏人弁爲隆仰下云流人藤原季仲被配流周防國了而件國非式遠流國可被

改哉否事同子族可緣坐哉否事僧類嚴快譽等去年可禁之由被仰下了而猶可被配流否事條々以

下又官問注大山寺權別當覺清并中原則近等申詞事可定申者被下文書已上四箇條詳議各雖異

大略又同季仲事猶任式條國可被改者子族緣坐條人々被申旨去寬治二藤原實政度謀大逆被配

流之時子敦宗朝臣解官謀大逆雖無緣坐還叙令云父祖被戮者子孫皆不得任侍衛官件文其時被

解官歟季仲又同罪也有依彼例歟治部卿申詞也依此定俄令勘申件罪名博士資清勘申件還叙令文同奏

聞類嚴快譽勢源等改徒罪可被配流哉否事治部卿定申云以告牒當徒年由前日法家勘申是俗令

減贖之義也於類嚴等者已犯八逆是非難犯早被配流何難之有哉群議人同前大山寺權別當覺清

等事諸卿一同定申云本件人々延曆寺張口雖注申於官底勘問之處已無承伏狀仍指申可進之由

雖下知被寺子今不召進重下知寄口證人憶決真僞迫可被量行歟予依上卿命當座書定文依用案

紙付藏人弁被奏聞被申院之間予其口口被仰下云季仲可改配式遠流國子刑部少輔懷季少納言

親配流、法家勘文云、帥故殺死罪源致親依搜取寺中雜物以強盜罪論之、

〔百練抄後朱龜〕長曆三年四月三十日伊勢大神宮有託宣事、祭主佐國停任勘罪名去年遷宮間濫行事、六月廿六日、前祭主佐國配流伊豆國依神事違例也、

〔百練抄後冷泉〕康平三年六月十一日、諸卿定申伊勢守義孝燒亡大神宮御厨中事、八月二日、陣定神宮託宣者事伊勢守義孝事任罪狀義孝遠流、

〔大神宮諸雜事記〕康平三年八月三日、伊勢守義孝被配流於隱岐國已了、事發以去年七月天件守爲檢田、入部一志郡之處、郡司伊元宿禰之住宅燒拂已了、而件宿禰乍爲郡司、豐受大神宮之御願字阿射賀御厨司兼任也、仍供祭物徵納之間、同以燒失了、依卽件訴天被配流也、

〔中右記〕寛治二年十一月卅日、有陣定、依神民憂也、前大貳實政朝臣流伊豆國、目代肥後前司時綱流阿房國、大貳聽官等此外八人配流土佐國、但無宣命云々、此前數度依此事、雖有陣定、不一決也、引及今日也、

〔中右記〕康和四年十二月廿七日、有陣定、藤大納言奉行、公卿濟々、是前對馬守源義親緣坐者前肥後守基實可會赦哉否條被問法家勘文等事群議不可會赦者、以詞付頭中將藤原實被奏、重仰云、件基

實明法博士二人勘申之旨或不隨詔命或違勅者兩方之間付何勘文可被行哉又可定申者群議云、不隨詔命之罪頗難通者聞食了、廿八日今夕被行事前對馬守源義親流罪隱岐國從類二人流罪

周防阿波者又同類前肥後守高階基實除名贖銅上卿帥中納言仲、

〔二所大神宮例文〕依狂病耳聾目盲并神役不仕科被停止所職例

二福宣延綱依大神宮心御柱犯失并神館放火之重科、康和四年七月、被停止、同五年八月十三日伊豆國配流、同年九月五日於伊賀國卒去、

〔中右記〕長治二年十二月廿九日、入夜內大臣源實參仗座及深更藏人并爲隆仰云、太宰前帥季仲卿可除名配流罪過并從類等任、法家勘文可行、仰詞注一紙下申歟、內府起奥座移着端座、令敷弑召并、

二人兼可令作官符等者并奉仰云大夫史貞行宿禰云令作官符渡外記外記入宮令覽相府相府見了召外記給了余○經賴起座經敷政門率少納言外記等向結政所余先着座上數半盤一枚南面一枚其少納言義通着座一枚半盤一枚南面一枚次外記時資着右大史座程次外記史生持印櫃等來置請印筵上退去又持入官符之筥來置外記前長床子上以蓋一枚數辨與史取出印置盤上以辛櫃置并座板敷南端請印官符了取印等退去次外記次少納言立次余立參內着陣座頃之右府被退出次參殿○藤原賴通御宿所御共退出右府先是可令召進相通位記之由令并仰京職云々并仰史令召仰職官人云云又今朝相府被示云寮頭可停任之由不可被仰其故者不取位被取官之時有停任宜旨於相通者已爲配流者官位共可被取也仍仰可進位記之由於寮頭者除目可被任其故也

〔行親記〕長曆元年五月廿日被定明法博士等勘申前但馬守則理朝臣等罪名事右大臣○藤原實實以下

諸卿於左仗被定申書定文奏聞左大辨書之件事去長元八年但馬在任之間依有官物負累口口宿禰衆

長令申其并聞龍停府衆長依爲八幡別宮司以別當神人等爲愁件事率數百人來國府近邊即依有

聞衆長并可入亂館內々造○遣器相防之間有中矢死亡之者因之八幡宮以別當申員有愁申國司

又進國解仍彼年十二月遣右少史高橋文俊令推問彼是所申即歸參口日記等其後宮寺積有所申仍

於京口口口推問召遣在國司等之間先帝○一條後有憂駕之事相次去年有限大小事指合自以延引今

年三月召在國司等於官被勘問任件日記等可勘罪名由前日諸卿有定申仍令下勘罪名隨而法家

進勘文又有可定申之宣旨仍所定申也勘申者十一人之中被處流罪者七人可贖銅者并追可被定

仰者等四人云々抑可配流之口口諸卿又可定申者被定申則理左相奉五位成任佐渡小

野近則六位常陸不知姓重氏六位安房尾張忠親六位奏聞之後令造官符并可召仰檢非違使之由被召仰并定

親檢非違使等奉宣後各向流人處先擲其身持件官符等下向云々

〔百練抄四後朱〕長曆二年二月十九日諸卿定申法家勘申前帥實成罪名實成卿除名正二郎從源致

〔續日本紀^十〕天平勝寶六年十一月甲申、藥師寺僧行信與八幡神宮主神大神多麻呂等同意厭魅下所司、推勘罪合、遣流。丁亥、從四位下太神朝臣杜女外從五位下大神朝臣多麻呂、並除名、從本姓杜女配於日向國多麻呂於多嶺島。^{〇下}

〔續日本紀^{三十}〕神護景雲三年九月己丑。^{〇中}道鏡大怒、解清麻呂本官、出爲因幡員外介、未之任、所尋有詔、除名、配於大隅、其姉法均、還俗配於備後。

〔日本紀略^{祖武}〕延曆四年九月乙卯、中納言兼式部卿近江按察使藤原種繼被賊襲射、兩箭貫身。丙

辰、右兵衛督五百枝王、大藏卿藤原雄依同坐此事、五百枝王降死、流伊豫國雄依及春宮亮紀白麿家持、息右京亮永主、流隱岐東宮學士林寸。^{〇忌}稻麿流伊豆、自餘隨罪所流。

〔日本後紀^五〕延曆十五年十二月戊寅、流出雲臣家繼於土佐國、家繼與叔父乙上不協、謀相傷、事覺及罪、乙上任佐渡權目、不預董務、唯給公廩而已。

〔日本後紀^八〕延曆十八年八月丙戌、豐前國宇佐郡人酒井勝小常依有惡行、配隱岐國。

〔類聚國史^{刑法}〕延曆二十年六月丁巳、流出雲國島根郡人外正六位上大神掃石朝臣繼人、出雲郡人若和部朝臣真常、梶縫郡人品治部首真金等、於長門國、以介從五位下石川朝臣清主共惡行也。

〔續日本後紀^七〕承和五年十二月己亥、勅曰、小野篁內舍給旨、出使外境、而稱病故、不遂國命、准據律條、可處絞刑、宜降死罪一等、處之遠流、仍配流隱岐國。辛亥、追小野篁所帶正五位下之告身。

〔續日本後紀^八〕承和六年三月丁酉、遣唐三个船所分配、知乘船事從七位上伴宿禰有仁、曆請益從六位下刀岐直雄、貞曆留學生少初位下佐伯直安、遣天文留學生少初位下志斐連永世等、不遂王命、相共亡匿、稽之古典、罪當斬刑、勅特降死罪一等、配流佐渡國。

〔左經記〕長元四年八月八日癸未、午刻、右府^{〇藤原實實}被入頭弁^{〇藤原經任}仰云、齋宮寮頭藤原相通、可流佐渡、其妻藤原小忌古曾、可流隱岐者、相府奉勅、仰弁云、仰左衛門府、可令差進、進使府各一人、門部各

〔日本書紀^{二十八}〕元年八月甲申、命高市皇子、宣近江群臣犯狀、則重罪八人坐極刑。^略○中是日左大臣蘇我臣赤兄大納言巨勢臣比等及子孫并中臣連金之子、蘇我臣果安之子、悉配流、以餘悉赦之。

〔日本書紀^{二十九}〕四年四月辛卯、三位麻績王、有罪流于因幡、一子流伊豆島、一子流血鹿島。

〔萬葉集^一〕麻績王、流於伊勢國伊良康島之時、人哀傷作歌、

打麻乎、麻績王、白水郎有哉、射等籠荷四間乃、珠藻荇麻須、

麻績王聞之、感傷和歌

空蟬之、命乎惜美、浪爾所瀝、伊良康島之玉藻荇食、

右案日本紀曰、天皇四年乙亥、夏四月戊戌朔乙卯、三品麻績王有罪、流于因幡、一子流伊豆島、一子

流血鹿島也、是云配于伊勢國伊良康島者、若疑後人緣歌辭而誤記乎、

〔日本書紀^{二十九}〕五年九月丁丑、筑紫太宰三位屋恒王、有罪流于土左、六年夏四月壬寅、材田史名

倉坐、指斥乘輿、以流于伊豆島、

〔日本書紀^{三十}〕朱鳥元年九月丙午、天淳中原瀛真人天皇^武崩、皇后臨朝稱制、十月丙申、詔曰、皇

子大津謀反、誣誤吏民、帳內不得已、今皇子大津已滅、從者當坐、皇子大津者、皆赦之、但彌杵道作、流伊

豆、

〔日本書紀^{三十}〕三年七月辛未、流偽兵衛河內國澁川郡人柏原廣山于土左國、以追廣參、授、促偽兵衛

廣山、兵衛生部連虎、

〔續日本紀^一〕三年五月丁丑、役君小角流于伊豆島、

〔續日本紀^{十四}〕天平十四年十月癸未、禁正四位下^{正四位上}鹽燒王、並女孀四人、下平城獄、戊子、鹽

燒王配、流於伊豆國三島子部宿禰小宅女於上總國、下村主白女於常陸國、川邊朝臣東女於佐渡國、

名草直高根女於隱岐國、春日朝臣家繼女於土左國、

ズ、息止マリ眼閉ニケリ、○中童只一人營ツ、燃藻ノ煙タグヘテケリ、茶毘事終テケレバ、骨ヲ拾テ頸ニ掛、涙ニ咽テ遙々ト都ヘ歸上ニケリ、奈良ノ姫君ニ奉見ケレバ、悶焦テ泣悲事不料、サコン有ケメト想像レテ無慙也、

〔日本書紀九十三卷〕二十三年三月庚子、立木梨輕皇子爲太子、容姿佳麗、見者自感、同母妹輕大娘皇女亦艷妙也、太子恒念、合大娘皇女畏有罪而默之、然感情既盛、殆將至死、爰以爲徒非○非一作空死者雖有罪、何得忍乎、遂竊通、乃悒懷少息、二十四年夏六月、御膳羹汁凝以作氷、天皇異之、卜其所由、卜者曰、有內亂、蓋親親相姦乎、時有人曰、木梨輕太子姦同母妹輕大娘皇女、因以推問焉、辭既實也、太子是爲儲君、不得罪、則流輕大娘皇女於伊豫、

〔古事記下卷〕輕太子者、流於伊余湯也、○詳帝王部皇太子篇

〔日本書紀推古二十二年〕九年九月戊子、新羅之間諜者迦摩多到對馬、則捕以貢之、流于上野、

〔日本書紀推古二十二年〕十六年四月、小野臣妹子、至自大唐國、○中六月丙辰、爰妹子臣奏之曰、臣參還之時、

唐帝以書授臣、然經過百濟國之日、百濟人探以掠取、是以不得上、於是群臣議之曰、夫使人雖死之不失旨、是使矣、何怠之失、大國之書哉、則坐流刑、時天皇勅之曰、妹子雖有失書之罪、輒不可罪其大國客等、聞之、亦不良、乃赦之不坐也、

〔日本書紀孝德二十五年〕大化五年三月戊辰、蘇我臣日向、日向字身刺諸倉山田大臣於皇太子曰、○中己是日

以大伴狛連與蘇我日向臣爲將領、乘使追大臣將軍大伴連等及到黑山、土師連身采女臣使主麻呂從山田寺馳來告曰、蘇我大臣既與三男一女俱自經死、甲戌坐蘇我山田大臣而被戮者、○中凡十四人被絞者九人、被流者十五人、

〔日本書紀二十六年〕四年十一月庚寅、遣丹比小澤連國襲、絞有間皇子於藤白坂、是日、○中流守君大石於上毛野國坂、合部連樂於尾張國、

相ノ許ヨリ一年ニ二度舟ヲ渡シ、也、春ハ秋冬ノ料ヲ渡シ、秋ハ春夏ノ料ニトテ渡シ、ヲ、少將心様ヨキ人ニテ、同島ニ流サレ同所ニ有ナガラ、我一人生テマノアタリ各ヲ無人ト見シ事モ口惜カルベシ、三人アレバコソ互ニ便トモナリ、又ナグサメトテ、一人ガ食物ヲ三人ニ省キ一人ノ衣裳ノ新キヲバ我身ニ著古ヲバ二人ニ著セツ、兎角育シ程ハ、ノ體ニテ有シカ共、去年此人人還リ上リテ、其後ハ事問者モナク情ヲ懸ル人モナケレバ、道ガ甲斐ナキ命ノ惜ケレバ、此人々ノ都ニテ申クツロゲンナント云シヲ憑テ、力ノ有シ程ハ島ノ者ノスルヲ見習テ、此山ノ峯ニ登テ硫黃ヲ取テ商人ノ舟ノ著タルニトラセテ、如形ノ代ヲ得テ日ヲ送り命ヲ續シカ共、力弱リ身衰テ後ハ、山ニ登ル事モ不足叶、硫黃ヲ取事モ力盡ス、サテモアラレテ澤邊ノ根芹ヲツミ、野邊ノ蕨ヲ折テサビシサヲ慰シモ、叶ハヌ様ニ成果テ、今ハスル方モナケレバ、浪タヽヌ日ハ磯ニ出テ、岩ノ著ラムシリテ潮ニ洗テ食物トシ、汀ニ寄タル海松和布ヲ取、和ナル所ヲカミテ明シ暮ス、何ヲ期スル事ハナケレ共、責テノ命ノヲシサニ綱引者ニ向テハ手ヲ合テ魚ヲ乞ヒ、釣スル海人ニ歎テハ膝ヲ折テ肉ヲ貪ル、得タル時ハ慰ム、クレザル日ハ空ク臥ヌ、角シツヽ一日二日トスル程ニ、早四箇年ニモ成ニケリ、サテ生タル甲斐有テ己ヲ見ツル嬉サヨ、若此事夢ナラバ覺テ後ハイカバセント、噓噓モシ敢ズ泣語給ケリ、有王ツラヽト聞之、涙ク乾ク間ヅナカリケル、僧都又宣ケルハ、俊寛ハ懸ル罪深キ者ナレバ、業ニセメラレテ今幾ホドカ存ゼンズラン、己サヘ此島ニテ歎事モ不便也、疾々歸上レト云レケレバ、有王モ尋參リ侍ル程ニテハ、十年五年ト申トモ其期ヲ見終リ進セ侍ルベシ、努々御痛有ベカラズ、但御有様久カルベシ共不覺、最後ヲ見終リ奉ラン程ハ、是ニシテ兎モ角モ勞リ進スベシトテ、僧都ニ被放峯ニ登テハ硫黃ヲ掘テ商人ニ賣リ、浦ニ出テハ魚ヲ乞テ執行ヲ養フ、保リケレドモ日來ノ疲モ等閑ナラズ、月日ノ重ルニ隨テイトハ憑ナク見エケルガ、當年ノ正月十日比ヨリ打臥給ヒヌ、○中日數ヲフル程ニ次第ニ弱テ云事モ聞エ

ヨト思テ、猶深ク山邊ニ尋入タレドモ、我主ニ似タル人モナシ、立歸リ遙々浦路ニ迷出タレバ、磯ノ方ヨリ動來ル者アリ、只一所ニ動立様也、其形ヲ見ルニ、童カトスレバ、年老テ其貌ニ非ズ、法師カト思ヘバ、又髪ハ空様ニ生アガリテ白髪多シ、銀ノ針ヲ立タルガ如シ、萬ノ塵ヤ藻クヅノ付タレ共、不打拂、頸細クシテ腹大ニ脹レ、色黒シテ足手細シ、人ニシテ人ニ似ズ、左右ノ手ニハ小キ生魚ヲ二三ツ、把リ、腰ノマハリニハ荒和布ヲ取纏付テサゲヒキテ、凡力モナゲ也。○申僧都ハ貌コソ衰タリケレドモ、目ト心トハ昔ニ替ラズ、童ヲバ憶我召仕シ有王トゾ被思ケル、

〔源平盛衰記^{十一}〕有王俊寛問答事

有王涙ヲ流シ、老タル母ヲモ捨テ、兄弟ニモ角トモ不申ハル、ト參侍シ事ハ、命ヲ君ニ奉リ、身ヲ海底ニ沈メント思定テ候キ、一度都ニテ捨テ侍ル命ヲ、二度此島ニテ可憎カト申ケレバ、僧都打ウナヅキテ、嬉ゲニタイザサラバ我夜ノ臥所ヘトテ具シテ行ク、住給フ所ヲ見レバ、巖ニツカ迫ニ竹ノ木ノ枝ヲ取渡シ、寄來藻クヅヲ取係タリ、雨露ノタマルベキ様モナシ、僧都一人入リ給ヌレバ、屢ヨリ下ハ外ニアリテ、内ニハ又所モナシ、有王ハアラハニゾ居タリケル、穴心憂ノ御住居ヤ、今ハ申テ甲斐ナキ事ナレドモ、京極ノ御宿所白川ノ御坊中、鹿谷御山莊マデ、塵モツケジトコソ盤立サセ給シニ、何ト習ハセル人ノ身ナレバ、懸ル住居ニモ御坐ケル事ヨ、京童都ガ築地ノ腹ナドニ造タル犬ノ家ニハ猶劣レル物ゾヤトテ口説泣ク、京ヨリ菓子少々用意シテ持タリケルヲ取出テ奉勸ル、僧都被思ケルハ、此等ヲ食タリ共ナガラフベキ命ニアラズ、中々田ナケレ共都ヨリ我爲ニトテ遙々持下タル志ヲ、失テ打捨ン事モ無念也ト覺シテ、食ヤウニシテ、宜ケルハ、此等ハ指モ味モヨカリシ上、世ニ珍ケレドモ餘ニ疲衰タル故ニヤ、喉乾口損シテ氣味モ皆忘ニケリトテ指置給ケルゾ糸惜キ、有王申ケルハ、是程ノ御有様ニテハ日比ハ何トシテ今迄モナガラヘサセ給ケルゾト問ケレバ、僧都ハ其事也、三人被流タリシニ、丹波少將ノ相節トテ、舅門脇宰

ソ聞ケ、御免アラバ幾人モ具シタフコソアレ、サレ共其義ナケレバ不及力、誠ヤ薩摩國硫黃島ト
カヤヘ可被流トキケバ、命ナガラフベシトモ覺ズ、路ノ程ニテハカナクモヤナランズラン、我身
ノ事ハ今ハサテ置、都ニ殘シ留女房少者共ノ心苦キニ、彼人々ニ付テ、朝夕ノ事ヲモ見繼ベシ、我
ニ隨ハンニ露劣ルマヅ、トク歸上レナド泣々宜通ハス處ニ、宜旨御使又六波羅ノ使何事申童ゾ
ト怪ミ尋ケル恐シサニ、龜王名殘ハ惜ケレドモ、泣々都ヘ歸上ケリ、其弟ニ有王ト云ケルハ、僧都
ニ別テ後仕ハント云人在ケレ共宮仕モセズ、大原開原嵯峨法輪貴キ所々ニ迷行テ、峯ノ花ヲツ
ミ谷ノ水ヲ結テ、山々寺々ニ手向奉リ、我主ニ今一度合セ給ヘト、夜晝心ヲイタシテ祈ケルコソ
不便ナレ、角テ三年ヲ經テ少將ト判官入道ト都ヘ還上スト披露有ケレバ、有王我主ノ事何ニ成
給ヌルヤラント、覺束ナク思テ、此人々ノ迎ニ行タリケル、人ニ合テ尋聞バ上リシマデハ御坐キ
二人ニ捨ラレテ歎悲ミ給シ事、二人舟ニ乗給シニ、舳ニ取付テ遙ニ出給タリシ事、陸ニ歸上テ濱
ノ沙ニ倒フシ給事、委ク語答ケレバ、有王涙ヲ流シテ、サテハ未ダ此世ニ御坐ルニコソ、謹育ミ謹
憐ミ奉ラント悲クテ、有王ハ只一人都ヲアクガレ出、未知薩摩方硫黃島ヘ遙々トコソ思立テ、先
奈良ニ行僧都ノ姫ノ御坐ケルニ、角ト申テ御文ヲ賜リケリ、略唐船ノ纒ハ四月五日ニ解習ニ
テ、有王ハ夏衣タツヲ遲シト待兼テ、卯月ノ末ニ便船ヲ得、略鬼界島ニモ渡ニケリ、略去程ニ
島ノ住人ト覺シクテ、木ノ皮ヲハチカワラトシテ、額ニ巻キ、赤裸ニテムツキヲカキ、身ニハ毛太
ク長ク生テ、長ハ六七尺計ナル者ゾ遇タリケル、有王嬉クテ云ケルハ、此島ニ法勝寺ノ執行僧都
ノ御房御坐シ候ナルハ何所ニテ候ヤラント問ケレバ、打見タル計ニテ物モ云ハザリケリ、法勝
寺共執行共爭カ可、知ナレバ、不答ルモ理也、自言事モ有ケレ共、ツヤ／＼不聞知リケレ、パイトド
力ナク覺エケリ、責テハ死給タリトモ其骸骨ハ御坐ラン、彼ヲナリトモ尋得テ形見トモスルナ
ラバ、イカ計限ナク志ノカヒモ有ベキニ、御行ヘヲダニモ知ズシテ、空ク都ヘ歸上ラン事ノ悲サ

衰タル法師アリ、ヨク／＼見レバ大納言入道殿ニテ、ゾオハシケル、下ニハ垢付タル布ノ服、上ニハ袖ヤツレタル墨染ノ衣也、傍ニハ竹ノ杖ヲ立テ、前ニハ繩緒ノ足駄ヲ置リ、是ヤコノ賤ガ伏戸ノ赤土ノ小屋、民ノ住居ノ草ノ戸ザシナルラント、心憂コソ思ケレ、○中今成給ヘル有様ノ悲サニ、目モタレ心モ消テ、前ニ臥倒テ喚叫外ハ何事モ申サレズ、大納言入道モ信俊ヲ見給テハ、墨染ノ袖ヲ顔ニ當給テ、唯サメ／＼トゾ泣給フ、入道良在テ宜ケルハ、多ノ者共ノ中ニ、イカニトシテ是迄尋下ケルゾヤ、餘ニ都ノ戀サニ、夢ナンドニ見ルヤラン、更ニ現トハ覺エズトテ、コボル、涙セキ敢ズ、悲ノ色ゾ深カリケル、信俊泣々申ケルハ、去シ六月一日ヨリ、北御方君達相具シ進セテ、北山ノ雲林院ノ僧坊菩提講行ヒ候所ニ忍ツ、幽ナル御住居若君姫君ノ戀カナシミ奉ル御事、今度罷下ベキ由戀ニ仰ヲ蒙候シ事共細ニ申テ、懷ヨリ文ヲ取出シテ進タリ、○中信俊二三日候テ泣々申ケルハ、○中今度ハ御返事ヲ賜テ、急罷上テ見參ニ入進テ、又コソ罷下候テ奉公ヲモ申終ノ御事ヲモト申セバ、○中剃髮ノ有ケルヲ引褻テ、是ヲ形見ト御覽ゼヨ、ナガラヘテ世ニ聞ハテラレ奉ベシトモヲボエズ、今生ニコソ相見事ノ空トモ、後ノ世ニハ必ナト心細ゲニ書連テタビテケリ、

〔源平盛衰記〕有王渡碓黃島事

法勝寺執行俊寛ハ、此人々ニ捨ラレツ、島ノ栖守ト成ハテ、事問人モナカリケルニ、僧都當初世ニ有シ時、幼少ヨリ召仕ケル童ノ三人、栗田口邊ニ有ケルガ、兄ハ法師ニ成テ法勝寺ノ一ノ預リ也、二郎ハ龜王、三郎ハ有王トテ二人ハ大童子也、彼龜王ハ僧都ノ被流テ淀ニ御坐ス處ヘ尋行テ、最後ノ御供是コソ限ナレバ、何所マデモ參侍ルベシト泣々申ケルヲ、僧都ハ誠ニ主從ノ好ミ昔モ今モ不淺ト云ナガラ多ノ者共其有ツレ共、世中ニ恐テ問來者モナシ、其恨ニアラズアマタノ中ニ尋來テ、角申コソ返々モ志ノ程ウレシケレ、但我ニ限ラズ少將モ判官モ一人一人モ不隨トコ

訪流人

〔文德實錄〕嘉祥三年五月壬辰、追贈流人橘朝臣逸勢正五位下、詔下遠江國、歸葬本郷逸勢者、右中辨從四位下入居之子也。○中 承和九年、連染伴健岑謀反事、掠拷不服、滅死配流伊豆國、初逸勢之赴配所也、有一女悲泣步從、官兵監送者叱之令去、女晝止夜行、遂得相從、逸勢行到遠江國板築驛、終于逆旅、女攀號盡哀、便葬驛下、廬于喪前、守屍不去、乃落髮爲尼、自名妙沖、爲父誓念曉夜苦至、行旅過者爲之流涕、及詔歸葬、女尼屍還京、時人異之、稱爲孝女。

〔源平盛衰記七〕信俊下向事

大納言

成親 藤原

ノ北方、北山ノ栖ヒ只推量ベシ、住馴ヌ山里ハ、サラスダニモ物ウカルベキニ、柴引

結庵ノ内、マダシモ馴ヌ草枕、通行月日モ暮シカテ、明シ煩形勢也。○中 大納言ノ年頃、身近ク召仕

給ケル、源左衛門尉信俊ト云侍アリ。○中 北方御簾近ク召ヨセテ宣ケルハ、ヤ、信俊承レ、大納言

殿ハ、備前國兒島トカヤ云所ヘ流サレ給ヒストハ、聞シカ共、此渡ヨリ尋參人一人モナシ、未生テ

御坐スルヤラン、又堪ヌ思ニ忍煩テ、昔語ニモヤ成給ヌラン、其行末ヲモ不奉知、未生テモ御坐サ

バ、流石此渡ノ事イカバカリカ、聞マホシク覺ヌラン、又少キ人ドモノ住馴ヌ山里ノ栖ヒ、中々申

モ愚也、只推量給ベシ。○中 汝イカナル有様ヲモシテ尋參ナンヤ、御文ヲモ進返事ヲモ待見ナラ

バ、限ナキ心ノ中ヲモ慰事モヤト思ハ、イカバスベキト宣ケレバ、信俊涙ヲ流シテ。○中 御文ヲ給

急尋參ント申バ、北方無限悦デ、細ニ文遊シテ賜ニケリ、信俊給之、泣々小島ヘ下ケリ、既ニ彼ニ行

著テ、預ノ武士ニ申ケルハ、是大納言殿ノ年比ノ侍ニ、源左衛門尉信俊ト云者ニ侍リ。○中 然ベ

クハ蒙御免テ、今一度最後ノ見參ニイリ進バヤト申ケルヲ、始ハ緊ク怪噴テ叶マジト云ケレ共、

泣々攝口説云ケレバ、武士共涙ヲ流シ、最哀ニ思ツ、何カハ苦カルベキトテ終ニハ是ヲ免ケリ、

信俊不斜悦テ、大納言ノ御坐スル所ヘ參テ奉見ニ、淺猿ク悲カリケル事ガラ也、奇氣ナル小屋ニ
垣ニハ土ヲ壁ニ塗廻、戸ニハ藁ノコモヲ懸垂タリ、内ニ差入テ見廻セバ、藁ノ束ト云物ヲ敷テ、瘦

給糧

〔延喜式民部十二〕凡流移人隨到給田比至秋收量給公糧

〔延喜式主稅二十六〕凡諸國流人不論良賤男女大小給糧人日米一升鹽一匁至來年春量給種子一秋之後糧種共停

防援

〔令義解凡〕徒流因在役者囚一人兩人防援謂其囚二人者囚人防援若因在御園者既禁其在京者

取物部及衛士宛謂三府一分物部三分衛士也在外者取當處兵士分番防守謂此亦爲兵士立文

免著鈐

〔西宮記臨時〕與奪事付臨時着鈐例并放免役舉囚人事

宗金記云永承二年十二月廿四日今日渡唐犯人之首清原守武配流佐渡國領送使左衛門府生秦成信府掌日下部信近等也但有可着鈐云々仍乘馬并持弓胡籛參本府是則於左獄門前可行之故也而依大殿令奏給被免着鈐又從類五人任勘文可徒三年宣旨同下了然而依殿下仰不令着鈐只禁獄計也

免課役

〔延喜式主計二十五〕凡勘大帳者○中依符所免爲符損爲見不輸

〔日本後紀五〕延曆十五年十二月丙戌勅免流人永上川繼課役

○按ズルニ永上川繼ハ延曆元年ニ配流セラレシニテ名例律ニ犯流應配者三流俱役一年トアル文ニ據レバ既ニ配役年限ヲ經過シ更ニ課役アリシヲ爰ニ至リ免シタルナラン

流人親屬隨行

〔律疏名例〕凡犯流應配者三流俱役一年○中妻妾從之○註家人不在從例父祖子孫欲隨者聽會高

及支孫以上欲隨
流人去者皆隨

〔續日本紀二十三〕天平寶字五年三月己酉葦原王坐以刃殺人賜姓龍田真人流多嶺島男女六人復令相隨

〔續日本紀三十〕延曆元年閏正月丁酉獲永上川繼於大和國葛上郡○中詔減死一等配伊豆國三島其妻藤原法壹亦相隨焉

モナク、岸打浪ニ思フモ消ザリケリ、判官入道ハ泣悲ミテモ由ナシ、只佛ノ御名ヲモ唱ヘ、神ニモ祈申テコソ、二度都ヘ歸上ラン事ヲモ願ヒ、後世菩提ヲモ助ケメトテ、己ガ能也ケレバ歌ヲウタヒ舞ヲマフテ、島ノ明神ニ手向ケリ、端島ノ者共時々來テ見ケルガ、興ニ入テ舞ナドシケルゾ歎キノ中ニモヲカシカリケル、

〔千載和歌集^八〕^八心のはかなることありて、まらぬ國に侍ける時よめる、

平康賴

居作

かくばかり憂身の程も忘られて猶こひしきは都なりけり
さつまがたおきの小嶋に、我はありとおやにはつげよやへのまほ風

〔令義解^賦〕凡流人至配所居作者並給官糧謂徒四家實餉糧或來或絕不能全給故令二等以上親助二等以上親代備子進人及母改嫁是也代備者五十日內更相備給也謂在禁未斷及亦准此五十日糧隨盡公給若去家懸遠絕餉及家人未知者官給衣糧家人至日依數徵納者不在限也其見因絕餉者斷訖未斷及亦准此

〔唐律疏議^{二十九}〕疏議曰、準獄官令、囚去家懸遠絕餉者、官給衣糧、家人至日依數徵納、

〔令義解^賦〕凡流徒罪居作者皆着鈇若盤枷謂流徒通着鈇若盤枷非有病患聽脫不得着巾帶旬給假一日不得出取役之院患假者陪日謂文云患假即實假旬役滿遞送本屬人流人者非

〔唐六典^六〕凡略○中絕應徒則皆配居作○中

諸流徒罪居作者皆着鈇若無鈇者着盤枷病及有保者聽脫不得着巾帶每旬給假一日臘寒食各給二日不得出所役之院患假者倍日役之

〔延喜式^{二十九}〕凡罪人者隨罪輕重着鈇若盤枷放燒公私會盜私購錢強舒之類居其鈇或四人或

三人爲連至暮着梏明旦脫而役之

宿近クシテ人繁シ、惡カリナントテ、後ニハ難波ト云所へ奉移居リケリ、

〔源平盛衰記^七〕信俊下向事

丹波少將成經ヲバ、福原へ召下シ、妹尾太郎ニ預置キ備中國へ遣シタリケルヲ、俊寛僧都平判官康頼ニ相具シテ、薩摩方鬼界ガ島へゾ被放レケル、

俊寛成經等移鬼界島事

薩摩方トハ總名也、鬼界ハ十二ノ島ナレヤ、五島七島ト名付タリ、端五島ハ日本ニ從ヘリ、康頼法師ヲバ五島ノ内、チトノ島ニ捨、俊寛ヲバ白石ノ島ニ棄ケリ、彼島ニハ白鷺多クシテ石白シ、故ニ白石ノ島ト云フ、丹波少將ヲバ奥七島ガ内、三ノ迫ノ北硫黃島ニゾ捨タリケル、尋常ノ流罪ダニ悲シカルベキニ、道スガラ習ハス旅ニサスラヒテソバロニ哀ヲ催シケリ、^略此島々へハオボロゲナラデハ人ノ通フ事モナシ、島ニモ人稀也、自有者モ此土ノ人ニハ不似、身ニハ毛長ク生ヒ、色黒フシテ如牛、云フ事ノ言モ聞知ズ、男ハ鳥帽子モキズ、女ハ髮モケヅラズ、木ノ皮ヲ剝テサチカヅラニシタリ、ヒトヘニ鬼ノ如シ、眼ニ遮ル物ハ燃上ル火ノ色、耳ニ滿ル物ハ鳴下ル雷ノ音、肝心モ消計リナレバ、一日片時堪テ有ベキ心地セズ、賤ガ山田モ打ザレバ米穀ノ類モ更ニナク、園ノ桑葉モ取ザレバ絹布服モ稀也、昔ハ鬼ノ住ケレバ鬼界ノ島トモ名付タリ、今モ硫黃ノ多ケレバ硫黃ノ島トゾ申ケル、^略此人々始メニハ三ノ島ニ被捨レ所々ニ歎キケリ、^略責テハ三人一所ニダニアラバ、悲シキ事モ憂キ事モ互ニ語テ心ヲモヤリナン、島ヲカヘ海ヲ隔テ、所々ニ歎キケルコソ無慙ナレ、少將ニハ門脇宰相[○]平盛^教ヨリ訪ヒ給ケレ共、二人ヲバ助ル者モナシ、僧都モ入道モ身モ悲ク人モ戀シカリケレバ、後ニハ網舟釣舟ニ手ヲスリ腰ヲカバメツ、俊寛モ康頼モ硫黃ガ島ヘゾ寄合ヒケル、少將ト判官入道トハ痛ク思沈ミタル事ハナシ、浦々島々見巡テ都ノ方ヲモ詠メケリ、僧都ハ強チ歎キ瘦レテ、岩ノ迫ニ苦ノ下ニ倒レ臥テ、浦吹風ニ身ヲ冷セル事

前途事之宣旨歟。至官符重給。流人官符可無便歟。駿河伊豆接壤之國云々。亦不可經他國歟。廿四日辛丑。晚頭。頭辨來傳。示關白御消息。流人逗留事。可給宣旨。駿河國于今不言上事。可追捕犯人。事可達配所事。即宣下畢。

〔百練抄五〕堀河。康和四年十月廿八日。配流前對馬守義親於隱岐國。依太宰府訴也。

〔百練抄五〕鳥羽。天仁元年正月廿九日。但馬守正盛隨身源義親并郎從四人首參洛。延尉於川原。請取義親去年配流隱岐國。而留雲國。劫略人民。奪取官物。仍遣追討使也。

〔令義解十〕凡流移人。至配所付領訖。仍勘本所發遣日月。及到日。准計行程。若領遠使人。在路稽留。謂无留也。不依程限。領處官司。隨事推斷。凡依律。使人於使處。有犯者。所部屬官等。不得即推。但部遠因。仍以此。狀申太政官。

〔律疏職制〕凡在外長官及使人於使處有犯者。所部屬官等。不得即推。皆須申上聽裁。○下

〔唐律疏議三十〕斷獄。諸徒流應送配所。而稽留不送者。一日笞三十。三日加一等。過杖一百。十日加一等。罪止徒二年。不得過二年。人之罪。

〔源平盛衰記七〕成親卿流罪事

大納言○藤原。ハ大物ガ浦ヨリ舟ニ乗リ。鹽路遙ニ漕出シ。浪ニゾ浮ミ給ケル。○中室ノ泊ニ著給

フ。藻懸ノ瀬戸蓬ガ崎ヤヨリノ濱ヲ漕渡。備前國阿江ノ浦ヨリ内海ヲ通テ。兒島ト云所ニ著給フ。都ヲ出給ニシ後。日數フレバ遠ク成行古里ノミ懸シクテ。道スガラ只涙ノミニゾ咽ビ給フ。ハカバカシク湯水ヲダニモ聞入給ハザリケレバ。ナガラフベシトモ覺サザリケレ共。サスガ露ノ命ノ消ヤラデ。此マデ下リ著給ニケリ。民ノ家ノ怪ゲナルニ奉居置ル。彼所ハ後ハ山前ハ磯岸ウツ浪ハ漚々トシテ。音幽ニ。松吹風ハ蕭々トシテ。物サビシ去ヌダニ旅ノウキ子ハ悲キニ。汗ニ諍フ涙ノ色。耳オドロカス波ノ音イト。哀ゾ増リケル。シバシハ兒島ニマシノケルヲ。コハ猶津

衣服臥具醫藥四種功德ト只一時也トモ、觀音ノ名號ヲ念ジテ禮拜セン、功德ト、正等ニシテ異事無シト說レタリ、サレバ大悲無窮ノ菩薩也、廣大圓滿ノ利生也、其ニ己等ガ貪欲ニ住シテ物モモタヌ法師ニ物ヲ乞ヘバ、物持タル觀音ニ物乞ヒ奉テ己等ニ給ハントテ消息ヤルヲ、嗚呼也ト云フハ、サラバサテ有カシ、嗚呼ノ者共トテ又念誦ウチシテ睨ヘタリ、力及バヌ法師哉トテ、鳥羽ノ南門ヨリ船ヲ出ス、事ニ觸テ情ナクコン當リケレ、

〔令義解〕凡流移人在路、皆遞給程糧謂流移之人、所謂由處、每請糧停留不得過二日、其傳馬給不臨時處分、

〔令義解〕凡流移因在路有婦人產者謂配流婦人、并家口、給假廿日、謂流移之人妻妾及從人、在路產皆從產者、停、待、家女及婢、給假七日、若身及家口謂皆據行人、不限其賤也、遇患、或津濟水長、不得行者、並經隨近國司、每日檢行、堪進即遣者、患者件多、不可停待者、謂猶云、患者之徒、件衆多、不待此、唯據流移人、家口前行者、二人疾患、而一人、所遣使人、分明付、屬隨近國司、依法將養、病者、給醫藥、救療是也、傳、損即遣送、軍、餉、領送也、唯、若祖父父母喪者、給假十日、謂從流移人、在路喪父、母、同故也、家口有死者、三日、家人奴婢者、一日、

〔令義解〕凡流移人未達前所而祖父父母在鄉喪者、當處給假三日、發哀、其徒流在役而父母喪者、謂在鄉喪者、其從在、給假五十日、舉哀、謂依律流移人至配所、祖父母、父母、老疾、應侍、舍居作者、雖親終配所喪者、亦同此法、給假五十日、舉哀、三月、然後居作、是即侍老疾者、自依律、而不得之人、亦依此令、立法各異、未、祖父父母喪、承、死者亦同、二等親七日、並不給程、從、喪、即餘條所、不給程者、皆准此例、可同執也、

〔小右記〕長元四年二月廿三日庚子頭辨○藤原賴通傳關白○藤原賴通消息云、流人光清之使、爲甲斐國調庸使、於駿河國射殺之事、于今未言上之間、甲斐國司賴信申上子細案內、件流人使奪取甲斐調物中荷物、制止之間、相論之程、使府生永正、射殺副荷之者後開以此本目矢射、彼子男射殺使永正者、何樣可行哉、報云、駿河國司忠重未經言上、其體難避、待彼言上、居諸彌移、可給且不言上事、且可達流人光清

人也、文様尋常ナルベシト云ケレバ、穴煩シノ御房ヤトハ思ヘドモ、若興アル事ヤ有ト思テ其邊ニ走廻リテ能書ノ人ヲ尋テ出シテ來レリ、文覺ハ手書ヲ近ク呼寄テ、良物語シテ其後放免共ニ、ヤヤ殿原聞給ヘ、木ニ付ク蟲ハ木ヲ嚼リ、萱ニ付ク蟲ハ萱ヲ啄ムト云事アリ能者ヲ請ジテ能ヲ顯スニハ、必酒ヲ進ラセ、引出物ヲスルハ習ヒ也、然モ土產所望ノ文也、乞食ダニモ門出トテ視フ事ゾカシ、虛口ニテハ福樂無シ、先手書ヲ能々翫ナシ奉ベシ、去ズハ書給フベカラズト云、其時下部共定メモナキ事ユエニ、コガマシトハ思ヘドモ、支ヘテハ云人ヲ請ジテ、サスガ片腹痛サニイナトハ云ズ、直垂質ニオキテ、酒肴買ヨセテヨクノ進ラセ、腰刀一ツ引出物ニタブ、手書ノ僧酒飲、引出物懷中シテ後、墨磨筆染テ御文ハ何様ニト申、文覺ガ申サン様ニ少モ違ヘズ書給ヘトテ、爲高雄神護寺修造勸進、於法住寺御所奏聞之處、聊蒙勸勸下向伊豆國候、抑浮雲之身、雖非可惜、朝露之命、猶以難捨候哉、爲旅根所事預之、鸞眼百貫、摩牙百石、付使者可申請候、恐謹言、

月 日

文覺

ト書セテ立文タリ、表書ヲバ誰ト可書候ゾト問ヘバ、文覺打笑テ、清水寺觀音御房ト書給ヘトゾ云ケル、ヨニ可笑フ事ナレドモ、放免共ハ腹ヲ立スヘテ不咲、文覺一人ノミゾ手ヲ扣テ笑ケル、下部共不安思テ、和僧ノサノミ廳ノ御使ヲ可欺キ事ヤハアル、奴原トテダニモ不思議ニ思フニ、紙ゾ手書ゾ酒ヨ引出物ヨトテ、係ル鳴呼ノ事申條後悔シ給ナ、思知ベシト口々ニ伺ケレ共、文覺ハ猶奇異ニヲカシキ事ニ思テ座ニモタマラズ笑飽テ申ケルハ、殿原ヤ中直リシテ物申テ聞セン、サレバ觀音ニ利生ヲ申人ハ鳴呼ノ事ニテアル歟、月詣日疊夜モ晝モ踵ヲ繼テ參ル、上下男女道俗貴賤ハ皆鳴呼ノ事カハ、文覺ヲバ惡口スルト宜ヘドモ、己等コソ増テ惡口ノ者ヨ、法師ハ法皇ヲ惡口トテ伊豆國へ被流レ、己等ハ觀音ヲ惡口スレバ地獄ノ釜ヘ流サルベキ也、抑觀音ノ利生ヲバイカ程ノ事トカ思フ、法華經八卷ニ若有人受持六十二臘恒河砂菩薩名字、復盡形供養飲食

付テコソ自酒ヲモ一度飲事ニテ候へ、去バコソ又折々ニ芳心ヲモ申事ナレ、上人御房程ナラヌ人ダニモ人ニハ訪ヒヲモ乞事ニ候、申サンヤ御房ハ貴キ人ニテ御坐ス上、京白川ニ知人多クゾオハスラン、觸廻ラシテ國ノ土産道ノ糧物ニモ所望シ給ヘカシ、只官食バカリニテハ慰ミモ有マジ、且ハ身ノ計ヒヲモ存シ、又人ノ心ヲモ兼給ヘカシト様々教訓シケリ、文覺思ケルハ、法師ハ上下男女勸進ノ僧也、左様ノ佛物スカシトラント云ニコソト思ケレバ、返事ニハ縁者知音モ身ガ身ニテアル時コソ自芳心モアレ、入道出家ノ後ハ諂心ナケレバ得意取事モナシ、親類骨肉ニモ近ヅク事ナケレバ、同ヒ被問ズシテ十餘年ニモ成ヌ、然ルベキ者アルラン共覺エズ、縦アリトモ有甲斐アラジ、大方ハ我人ニ物ヲ與フルニコソ得意知ル人ハ多ケレ、法師ハ人ヲ勸進シテ人ニ物ヲ乞ヘバウトム者ハアレドモ親シム者ハナシ、

文覺清水狀天神金事

去程ニ東山ニコソ、後生マデモト契リテ、常ニ行昵ブ事ハナケレ共、朝夕ニ難忘ク思ヒ被思タル人ハアレ、縦無間ノ底マデモ身ニ代ラヌ人也、ヨニ憑ム甲斐在テ實ノ詮ニハ叶ヌベキ人ゾ、サラバ實ニ道ノ土産ニモ大切也、殿原ニモ志ヲモ申、吉酒ヲモメサセン、硯紙マウケ給ヘト云フ、下部悦テ硯借リヨセ紙買ヒ儲タリ、文覺紙ヲ取向ケテ見レバ、如法難紙也、見ルマヽニ奇怪ナル奴原ガ紙ノ様カナ、人ノ品ヲバ、消息ニテ知ル事也、吉キ紙ヲ尋テ進セヨ、コレ人ノタメニ非ズ、只今物儲ケテ取センズルゾトテ投返ス、放免ドモ惡キ僧ノ詞バカナ、奴原トハ何事ゾ、イザ咎メント云ケルヲ、其中ニ制シテ暫一天ノ君ヲダニモ惡口申ス物狂也、天狗ノ様ナル者ナレバ何トモイヘ、人々數者ニイハレテコソ耻ニモ及ベ、其上唯今物乞テエサセント云人ニ躍合テ要事ナシトテ、上品ノ紙ノ神妙ナルヲ尋出シテ進スル、文覺申ケルハ、法師ハヨニ腹惡シキ者ニテ惡口申テ候ケリ、中直リシ奉ル、抑我ハ天性筆ヲトラヌ者也、能書ン人ヲ請ジ給ヘ、件ノ人ハ目モ心モ辱シキ

リテ聊モメサレズ、追立ノ官人來テ車サシヨセテトク／＼ト申セドモ、スヽマヌ旅ノ道ナレバ、座ヲ立テ急ギ乗給ハザリケルヲ、御手ヲ取アラヽカニ引立奉リ、ウシロザマニ投ノセテ、車ノ塵ヲ逆ニ懸テ、門前ニ遣リ出ス、大路ニテ先火丁ヨリテ車ヨリ引落シ奉テ、誠ノ楮トテ三枚アテタレバ、次ニ看督長殺害ノ刀トテ二刀突クマチヲシテ、其後山城判官秀助命ヲ含メサセテ、又車ニ押乗セ奉リテ、前後ニハ障子ヲゾ立タリケル。略中此大納言ハ車ノ物見ヲ打塞ギ、前後ニ障子ヲ立タレバ、月日ノ光モ見給ハズ、西モ東モ不知ケリ、加様ノ歎キノ深サニハ、晩ヲ待ベシトモ覺エザリケレバ、難波次郎經遠ヲ以テ、成親縦イカナル浦島ニハナタルトモ、責テハ月日ノ光ヲダニモ免レテ侍ラバ、イサヽカナダサム方モ候ナン、サシモ罪深キ者ト思召ストモ、カバカリノ御誠マデヤ候ベキナント、内府○平重盛ヘ被申タリケレバ、大臣聞給テ、コハ不便ノ事也トテ、月日ノ光ハユルシ給フ。略中備前國阿江ノ浦ヨリ内海ヲ通テ、兒島ト云所ニ着給フ、

〔源平盛衰記十〕略文覺高雄勸進附仙洞管絃事

文覺先獄ヲ出悔、先非後慮リアリテ暫ハ引籠テモ在ベキニ、尙モシヒズ勸進スル事如元、法皇○後河ノ御助成ノナキ事ヲ安カラズ思テ、京中白川大路門人ノ集リタル所ニテハ淺増クイマ／＼シキ事ヲノミゾ云ケル。略中

文覺流罪事

公卿會議アリテ、此僧ヲ京中ニ置テハ惡カリナントテ、伊豆國ヘ流罪ノ由ニテ、當時ノ國務也ケレバ、源三位入道○賴政ノ子息仲綱ニ被仰付レス、仲綱コレヲ召渡シテ、薩摩兵衛省ニ仰セテ下シ遣スベキ支度アリ、院ヨリ廳ノ下部二人付ラレタリ、折節伊豆國ノ住人近藤四郎國澄ト云者年貢運送ノ爲ニ南海道ヨリ舟ニ乗テ上リタリケルガ、下リケル辰舟ニ乗テ、鐘ニ國ニ付ヨト言傳ラル、廳ノ下部放免二人モ下向スベキニテ有ケルガ、文覺ニ語ケルハ、廳ノ下部ノ習ヒ懸ル事ニ

又事同前但後藤上^天前藤下^ス、後^仁向^天乘^留、犯人不脫巾引切繼結等了、車左右轅又輪邊^仁人守
思^{○思}人守等左右圍繞之、遣車下部所作也^{牛飼}、^{不道之}而追出京外了、西國者至于七條朱雀之
邊東國北陸道者栗田口之邊也、此近邊領送使自先^之官符持向、取官符讀聞流人之後、賜官符於
領送使、其大領送使請取流人^了、次廷尉歸^了、抑近代配流之樣人敢以不知、然而爲知故事注載之、

〔保元物語^三〕左府君達附謀叛人各遠流事

八月^{○保元}二年、左大臣殿^{○藤原}長^{○藤原}、息、右大將兼長ヲ始トシテ四人^{○兼長、師長、南都ヲ出テ、山城}

國稻八間ト云所ヘウツテ、是ヨリ各配所ヘ赴カル、死罪ヲ被^宥テ、遠流ニ成ヌルハ悦ビナレ共、猶
行末モ覺束ナカリケリ、檢非違使惟繁資能、二人追立ノ使ニテ、兄弟四人各重服ノ裝束ニテ、御馬
ヲ下下部取テケレバ、押取ニシタル鞍ナレドモウタテグナルニゾ乗給ケル、見ル人目モアテラ
レザリケリ^{○中}、各故郷ヲバ今日ヲ限リト立別レ、東西南北ヘサセンニ赴給フ、心中コソ哀ナレ、

〔源平盛衰記^五〕山門奏狀事

座主^{○明}ノ流罪ノ事、人々諫申ケレ共、西光法師ガ無實ノ議奏ニ依テ、カク被行ケリ、今夜都ヲ出

奉ラント宜旨稠シカリケレバ、追立ノ檢非違使、白河高島ノ御坊ニ參テ責申ケリ、座主ハ白河ノ
御所ヲ出給テ、栗田口ノ邊一切經ノ別所ヘ出サセ給ケリ^{○中}、同^{○安元}五月三十三日ニ、座主一切

經ノ別所ヲ出テ配所ヘ赴給フ、慈覺大師ノ自造給ヘル如意輪ノ御像バカリヲ、泣々御頸ニ被懸
ケ^{○中}、朝夕ニ見馴給ヘル御弟子一人モ不奉付門徒ノ大衆、モ不參御覽ジモ知ヌ武士ニ伴テ、出給

ケル御有様、ヨソノ袂モ絞ケリ、被召タル馬ハ淺猿キ野馬ニ、ケシガル鞍具足也^{○中}、角テ暫ク栗

津ノ國分寺ノ毘沙門堂ニ立入給ヘリ、

〔源平盛衰記^七〕成親卿流罪事

六月^{○治承}二年、新大納言成親卿ヲバ公卿ノ座ニ出シ奉リテ、物進ラセタレ共、胸セキ喉フサガ

召章貞參陣座賜流人交名退出了、

支配廷尉

源資賢前信濃修理大夫從三位

源通家前伊豆右近少將

正時忠前出雲右少辨左衛門權佐

藤範忠前防內匠頭式部餘田大宮司

各存知退出新志基廣依不當座以書狀觸示了書狀常事也參會邇近事也予立烏帽子着毛沓相具

隨兵隨兵四人向流人亭以看督長帶弓觸子細等時忠時忠乘車出門予着胡簾放經先車看督長二人取

松明下部等圍繞流鉢云々次火長取松明次予難人等隨兵如常至于七條朱雀領送使持官符向來

依對面流人令見官符爲領送使歸畢今夜時忠渡吉乘院之邊云々於乘車者下部等取之了是恒例

也抑流人乘車甚以不可然事也然而依事不便不能停止也

今按祖父口傳鈔云向流人亭事廷尉立烏帽子着毛履帶胡簾中黑騎馬火長看督長如常隨兵隨

有相具先以看督長相觸云依其犯天配流其國官人其人爲追使早可令出給爰流人恐罷出候云

云流人出爾時令放免乘直馬逆乘之馬尻方仁向天乘也放免等圍繞馬左右云々

行列次第

先看督長二人取松明卷

次流人括了不說巾着督長引切結引切將

次廷尉細毛沓

次火丁如常取松明流人

次隨兵

衙門府生日下部重遠至維衛朝臣不肱禁云々各令檢非違使追越山城國境云々

〔百練抄後四冷泉〕康平六年十月十七日與福寺僧淨範被流伊豆國依壞山陵也同黨之輩十六人同配

流以參議左大辨經家被告與福寺十二月十八日前下野守賴資依殘虐上野介惟行令勘罪名令遠流之處一季二度不可行流刑之由法家中仍延引有仗議

〔清癡眼抄四事〕一流人事

或記云康平七年十月十六日前下野守源賴資配流佐渡國已畢口應斷而有議延引十二月六日

流人源賴資改佐渡國配土佐國依使等申深雪路近前途難達之故也云々は追使左尉坂上定成申

刺向宿所駐馬立門入看督長相尋有無只今罷出之由返答頃之引寄馬賴資乍騎馬乘出家門定成

暫被駐馬之由下知駐馬立行列

先看督長二人取赤松明卷綴亦衣負穀木

次流人切綴馬著持衣襖奴袴看督長引

次廷尉帶劍帶白綴卷綴帶相副之

次火丁二人取明松

至于七條朱雀人宅仁留領送使持向官符定成取之讀聞流人流歸賜官符了請取流人取進請

文於大理

配流公卿殿上人事

同記後清云應保三年六月廿三日戊子參別當殿鳥羽上莊殺害人盛房行房并高昌殺害人等間

注記以新錄事基廣進覽盛房同類否可被召之處尙以可痛問同類之由所被仰下也未刻退出之間

今朝中志章貞依召參內事依不審參內裏流人事也被秘藏云々は聞密々子細之處當今依奉呪咀

被行流罪比叡巫女可被拷問云々所謂奇異亂天子世歟中志章貞清志能景子徘徊陣屋邊之間依

〔延喜式利部二十九〕凡流移罪人者、省申官、遍請左右兵衛爲部領、即授省符、路次差加防援令達前所、其返抄者從官下省。

〔禁秘御抄下〕配流

先被定罪後、於陣宣下、可然人有詔書、詔書大内記或儒辨草之上、卿奏之、只凡人口宣上卿宣下也、罪沙汰、近流遠流次第有之、檢非違使向彼家或具武士被遣之。

〔續日本紀聖武十四〕天平十三年己丑、禁外從五位下小野朝臣東人下平城獄、庚寅東西兩市決杖各五十、配流伊豆三島。

〔古今和歌集九〕おきのくにながされける時に、船にのりていでたつとて、京なる人のもとに

つかはしける、

小野たかむらの朝臣

わたの原やそ島かけてこぎ出ぬと人にはつげよ蜚のつり舟

〔今昔物語二十四〕小野篁被流、隱岐國時讀和歌語第四十五

今昔小野篁ト云人有ケリ、事有テ隱岐國ニ被流ケル時、船ニ乗テ出立ツトテ京ニ知タル人ノ許ニ此ク讀テ遣ケル、

ワダノハラヤソシマカケテコギ出ヌトヒトニハツゲヨアマノツリフチト明石ト云所ニ行テ、其夜宿テ九月許リノ事也ケレバ、明縣ニ不被寢テ詠メ居タルニ、船ノ行クガ島隱レ爲ルヲ見テ、哀レト思テ此ナム讀ケル、

ホノボノトアカシノウラノアサギリニ島ガクレ行舟ヲシゾオモフト云テゾ泣ケル、此レハ篁ガ返テ語ルヲ聞テ語リ傳ヘタルトヤ、

〔小右記〕長德五年元保十二月廿八日丁丑、昨被行配流事、右大臣源光承行云々、致忠朝臣配佐渡使右兵衛府府下致賴朝臣配、隱岐使右衛門府生致忠致賴二人、肱禁維衛朝臣配、淡路使左

領送使

右左大辨橘朝臣澄清傳宣右大臣○藤原宣彼省去七月五日解僞配流之日檢非違使率罪人等向省之例其來尙矣近則延喜十八年六月廿日左府生國恒世右府生竹田眞主率罪人林勝共等就牒版進之而去年十月廿五日差看督長送罪人等因茲停止彼日之務其後于今未有還向望請被召仰檢非違使依例令進者今依彼省貞觀七年之例行不得違越者延喜廿年十月二日右大史率貞與率

〔伊呂波字類抄利人倫〕領送使リヤワサシ

〔源平盛衰記十八〕文覺流罪事

公卿會議アリテ此僧覺文ヲ京中ニ置テハ惡カリナントテ伊豆國ヘ流罪ノ由ニテ當時ノ國務

ナリケレバ源三位入道ノ子思仲綱ニ被仰付ス仲綱是ヲ召渡シテ薩摩兵衛省ニ仰テ下シ遣スベキ支度アリ院ヨリ廳ノ下部二人付ラレタリ折節伊豆國住人近藤四郎國澄ト云者年貢運送ノ爲ニ南海道ヨリ舟ニ乗テ上タリケルガ下ケル戻舟ニ乗テ隨ニ國ニ付ヨト言傳ラル

文學清水狀天神金事

文覺云ケルハ略○中法師此舟ニ乗ズバ誰カ一人モ助ルベキトテ氣色シテ千手陀羅尼ヲ誦シケレバ其後ハ楫取已下ノ輩手水ヲ捧グ履ヲ取主從ノ禮ヨリモ猶深シテ事外ニゾ敬服シケル領送使國澄モ今コソ始テ貴キ人トモ思知ケレ

流人實道

〔令義解十一〕凡移流人太政官量配謂量罪輕重配其遠近故云量配也符至季別一遣謂太政官議配流狀符刑部及國司也若符在季末至

者聽與後季人同遣謂季末者與四季之末月假有符三具錄應隨家口及發遣日月便下配所謂刑部及流人者太政官差尋使領送也遞差防援專使部領送達配所付領訖速報元送處并申太政官知若

妻子在遠又非牌使預爲追喚使得同發謂雖即在遠而足路便者其妻子未至間因身合役者且於隨近公程仍錄已役日月下配所聽折

〔唐律疏議三〕疏議曰○中其流人準令季別一遣若符在季末三十日內至者聽與後季人同遣

〔拾芥抄〕下本五流

加役流名例律疏云稱加役流者有役三年今案自餘道中近三流者役一年而

反逆緣坐流其父子沒官祖孫兄弟得流罪也今案沒官近代配人

子孫犯過失流不到疏云耳目所不及思慮所

不孝流父母被殺者官親父母

會赦猶流身罪會赦猶流也今案稱教者常教也亦違流斷獄律云殺四等尊屬除名配流如法者

〔律疏名例〕凡犯流應配者三流俱役一年本條稱加役流者配遠處役三年色犯流者非官當收贖老疾之

既重與常流理別例加役流者本法役滿及會赦免役者即於配處從月口例會赦即於配處從戶口例

流及因反逆免死配流者須滿六年故令云流人不應流而特配流者三載以後聽任妻妾從之

依令犯流斷定不得放妻妾若妻犯七出者夫若不放於夫無罪若犯流聽放即假為者多家人不在從

例父祖子孫欲隨者聽欲隨高以下及玄孫以上移鄉人家口亦唯此聽不得棄放妻妾皆准流人故云亦

准若流移人身喪家口雖經附籍六年內願還者放還謂六年一遣申送太政官流移人若到配所六

稱願還即不住即造畜毒家口不在聽還之例依本條道畜毒并同居聽會教諭下條准此流人過者

有准之法家口合還及不合還准此之語下

〔令義解〕凡流人科斷已定及移鄉人皆不得棄放妻妾至配所謂凡流移之人不可棄妻妾以至配所

也如有妄作逗留私還及逃亡者謂此流移人已至配所更妄私還及逃亡者亦准此法隨即申太政官

〔唐六典〕凡略中流移之人皆不得棄放妻妾及私遁還鄉

若妻子在遠預為追喚待死至死同發

〔廷喜式〕刑部二十九凡諸國申送流移人及家口未發遣問固禁獄中其糧以贓贖物給之人別日米一

〔政事要略〕八十一應令左右檢非違使府生將領罪人移送刑部省事

以前被右大臣○長宣稱奉勅自今以後永爲恒例者

神龜元年六月三日

〔延喜式二十九〕凡流移人者省定配所申官具錄犯狀下符所在并配所其人請內印其路程者從京爲計

伊豆去京七百里安房九百一十常陸七十五佐渡一千三百隱岐九百一土佐等國一千二百爲遠流

信濃五百六十伊豫等國五百六十爲中流

越前三百一十五安藝等國四百九爲近流

○按ズルニ令ニ度地五尺爲步延喜式ニハ以六尺爲步トアリ又度地用大

トモアリテ一里ハ大尺ノ百五十丈ニテ今ノ二百五十間ナリ

〔塵添堦囊抄三〕屠刑事附五利有法事(中略)

五刑○中四流配流也日本ニハ伊豆安房常陸隱岐土佐ヲ爲遠流ト云々信濃伊豫ヲ中流ト云云

越前安藝ヲ近流トス此外上總陸奥越後出雲周防阿波等也

〔拾芥抄下本〕式外近代遣國々

上總 下總 陸奥 越後 出雲 周防 阿波

〔律疏名例〕凡應議請減及八位勳十二等以上若官位勳位得減者之父母妻子犯流罪以下聽贖○註

若應以官當者自從官當法○註其加役流反逆緣坐流謂緣反逆子孫犯過失流謂耳目不到之類而殺

父母父不孝流謂告言祖父父母及會赦猶流者按賊盜律云造三番雖會赦并同居家口及教令人

反逆者身雖會赦猶近流此等就是會赦猶流其造三番雖會赦并同居家口及教令人有官無官竝依下文配流如法有官者仍錄名至配所免居作也各不得減贖除名配流如法○詳議請

〔唐律疏議二〕疏議曰加役流者舊是死刑武德年中改爲斷趾國家惟刑是恤恩弘博愛以刑者不

按之。○中流罪者始從近流。竟遠流。以近流中流遠流各爲一等。

〔令義解〕十凡流人應配者依罪輕重各配三流。而近中遠處者從京計之

〔續日本紀九〕神龜元年三月庚申定諸流配處遠近之程伊豆安房常陸佐渡隱岐土佐六國爲遠。諏方伊豫爲中。越前安藝爲近。

〔續日本紀考證四〕狩谷氏曰拾芥抄遣流人國々伊豆安房云々件國々載延喜刑部式神龜元年六月三日定今推支于是月庚申朔不得有二庚申六月戊子朔三日庚寅然則此條錯簡當依拾芥抄移置於六月下庚申改作庚寅案類聚國史扶桑略記並與此同則其誤來亦久矣。

〔拾芥抄下本〕遣流人國國

伊豆 安房 常陸 佐渡 隱岐 土佐已上 信濃 伊豫已上 越前 安藝已上 件國國載

延喜刑部式神龜元年六月三日定云々

〔清齋暇抄凶事〕配流公卿殿上人事○中

流移國々

常陸國去京一千五百七十里 安房國九十里

佐渡國廿五里 土左國廿五里

伊豆國七百里 隱岐國九百里

右六ヶ國遠流

伊豫國五百六十里 周防國五百六十里

右二ヶ國中流

越前國三百五十里 安藝國四百九十里

右二ヶ國近流

赦シテ、既ニ配處ニ至レルハ赦サルアリ、天下ニ大赦シテ其人ニ限リテ赦サルアリ、赦サレテ後復叙スルアリ、此外ニハ又罪人ヲ櫛戸ニ配セシコトアリ、是ハ兵事部ノ城郭篇ニ收メタリ、

移郷ハ流刑ノ類ニテ、本郷ヲ去リテ他ニ移ラシムルヲ云フ、人ヲ殺シテ死スベキガ、赦ニ遣ヘル者ナドヲ此刑ニ處ス、律令ニ流移ト云ヘルハ、配流ト此移郷トヲ合セテ稱スルナリ、マタ京師ノ外ニ放逐スルコトアリ、是モ移郷ノ類ナリ、此餘ニ罪人ヲ本郷ニ還送セシコトアリ、

〔伊呂波字類抄留疊〕流人 流罪

〔古今和歌集十八〕おきの國にながされて侍ける時によめる たかむらの朝臣

思ひきや鄙のわかれにおそろへてあまのなはたざいせんとは

〔政事要略八十二〕罪名并贖銅八匁六議事

流罪略○中

日本紀云、天地初判、陽神陰神共合生、蛭兒已雖三歲、脚猶不立、故載於天磐椽樟船而順風放棄

比象流刑、

〔日本書紀纂疏上四〕以蛭兒載磐船放棄、以進雄尊、遂降於根國、是流之始也、

〔運步色葉集葉〕配所シ流人所也

〔日本書紀二十九〕五年八月壬子、詔曰、死刑沒官、三流並除、一等徒罪以下已發覺未發覺悉赦之、唯既

配流不在赦例、

〔律疏〕流罪三近流贖銅一百卅斤 中流贖銅一百廿斤

〔法曹至要抄罪上〕一五罪事略○中

流罪ニハ又加役流反逆縁坐流子孫犯過失流不孝流及ビ會赦猶流ノ五流アリ、加役流トハ、三流ハ俱ニ配處ニテ一年間役セラル、ヲ、是ハ遠流ニ處セラレテ、三年役セラル、ナリ、反逆縁坐流トハ、謀反、及ビ謀大逆ノ者ノ祖孫兄弟、皆遠流ニ配セラル、ガ如キ是ナリ、子孫犯過失流トハ、過失コテ祖父母父母ヲ殺スガ如キ是ナリ、不孝流トハ、祖父母父母ノ事ヲ訴フル者アレバ首ハ絞トシ、從ハ流トスル是ナリ、會赦猶流トハ、蠱毒ヲ造畜スル者ハ赦ニ會ト雖モ、同居家口及ビ赦令セシ人マデ亦遠流シ、四等ノ尊屬從父兄姉、異父兄姉ヲ殺シ、及ビ反逆セシ者ハ赦ニ會フト雖モ猶ホ近流ス、是等ヲ會赦猶流ト云フ此五流ハ皆重罪ノ人ノ處刑ナリ、又官人流ヲ犯ストキハ、除名シテ配處ニ赴カシメ六載ノ後ニ再ビ仕フルコトヲ聽シ、若シ本罪流ニ至ラズシテ特ニ配流スルトキハ、三載以後ニ仕フルコトヲ聽ス、又僧ノ流刑ヲ犯ストキハ、還俗セシメテ後ニ配所ニ遣スナリ、流ニハ又留住ノ法アリ、雜戶陵戸ナド流ヲ犯ストキハ、近流ハ決杖一百、中流ハ決杖一百三十、遠流ハ決杖一百六十、イヅレモ配所ニ發セズ、當地ニ留メテ三年居作セシメ、婦人流ヲ犯ストキハ亦決杖シテ配處ニ發セズ、衣ヲ縫ヒ穀ヲ舂カシム此留住ノ者ハ凡テ官糧ヲ給セズシテ私糧ヲ食セシムルナリ、日本書紀ニ允恭天皇ノ朝ニ、皇太子木梨輕皇子亂倫ノ行アルヲ以テ、同母妹輕大娘皇女ヲ伊勢ニ流ストアリ、古事記ニハ、允恭天皇崩ジテ後、輕太子弟ノ安康天皇ニ流サルトアリテ、其傳ハ互ニ異ナレドモ、コレ流刑ノ始ナリ、天武天皇ノ五年ニハ、既ニ三流ノ名アリ、其後ニハ一タビ流サレテ後又遷配セシコトアリ、流人ノ課役ヲ免ゼシコトアリ、一季再流スベカラザルノ議アリ、任國ニ便流セシコトアリ、決杖シテ配流セシコトアリ、又流人ヲ赦スコトハ孝德天皇ノ大化二年ヨリ見エテ、反逆縁坐ノ外ハ悉ク放還セシコトアリ、一人ヲ特赦セシコトアリ、赦シテ後京ニ入ルコトヲ許サズシテ、本郷ニ放還セシコトアリ、未ダ發遣セザルヲバ

古事類苑

法律部四

上編

流刑

移郷 放逐 京外
勘還本郷 群凶

流ハ杖ヨリ重キ刑ニテ、罪人ヲ邊地ニ放逐シテ終身還サザルナリ、邦語ニナガストモ、ハナツトモ云ヒ、字音ニテ流罪トモ呼ベリ、流ハ罪ノ輕重ニ因リテ遠中、近ノ三等アリ、是ヲ三流ト稱ス、遠中、近ハ皆京ヨリ路程ヲ計ヘタルナリ、凡テ流人及ビ家口ハ、未ダ發遣セザル間ハ獄中ニ禁ジ、其糧食ハ贖物ヲ以テ充テ、發遣ノ期ハ一年四度ニシテ、發遣セントスル時ハ、太政官ヨリ先ヅ符ヲ下シテ刑部及ビ國司ニ告グ、妻妾ハ必ズ之ニ從ハシメ、父祖子孫ハ隨ハント欲スレバ、ソノ意ニ任セ、家人ハ從フコトヲ聽サズ、刑部及ビ國司ハ、太政官符ニ依リテ隨フベキ家口ト發遣ノ日月トヲ具ニ錄シテ配所ニ下シ、遞次ニ防援ヲ差シ、左右兵衛ヲ部領トシ、途中ハ程糧ヲ給シテ配處ニ達セシメ、既ニ配所ニ到ル時ハ、即チ良賤男女大小ヲ論ゼズ、人ゴトニ日ニ米一升鹽一勾ヲ給シ、又田ヲ給シ、來年ノ春ニ至リ、種子ヲ給シ、秋ニ至レバ糧食種子共ニ停ム、流人ハ凡テ欽若シクハ盤枷ヲ著シ、一人ゴトニ兩人防援シテ配所ニ役セラル、コト一年ニシテ、其間ハ課役ヲ免ジ官糧ヲ給ス、滿役ニ及ビ、若シクハ赦ニ會ヒテ役ヲ免ゼラル、トキハ、配處ノ籍ニ編入シ、課役ハ百姓ト同ジクシ、配所ニテ未ダ六年ニ至ラズシテ死去スルトキハ、家口ハ既ニ其處ニ附籍ストモ、還ラント願フトキハ放チ還ス、

流人逃亡 途中害流人

二一〇

殺流人

二一二

流人自殺

同

流人聽仕

同

放流人 放還本鄉

二一三

不赦

二一九

遷配

同

留住

二二〇

○

移鄉

二二一

放逐京外

二二三

勒還本鄉

二二五

古事類苑

法律部四

上編

流刑

移鄉放逐京外
勒還本鄉群入

名稱

三流

一六九
同

五流

一七一

配役年限

一七二

流人禁獄

同

領送使

一七三

流人發遣

同

流人在路

一八一

流人到配處

居住免著鈐給糧課役防援

一八二

流人親屬隨行

一八五

訪流人

一八六

流刑例

輕流任國屬遣流

一九一

僧徒處刑

二〇七

流人死亡

二一〇





〔著欽政圖
年中行事
繪卷所載〕



也而依大殿○藤原賴通令奏給被免着飲又從類五人任勘文可徒三年宜旨同下了然而依殿下○藤原賴通仰不令着飲只禁獄計也

示送曰、着欽政、雖有兩儀例、如今者甚兩實難叶、歟爲之如何、予答曰、及晩着有其憚、今日被遂行、尤可宜者、予不見物、

〔百練抄^八〕治承三年五月十六日、着欽政、良家子息、多依強盜犯、着欽、希代事也、

〔葉黃記〕寶治二年閏十二月十二日乙卯、着駄政也、右佐着行其儀、如例云々、尉四人^{草宗、草權、草時、草澄}、志三人、

^{相盛、職種、}府生二人^{成向、}等參仕、

〔新抄〕弘安十年五月廿六日丙辰、着駄政也、左衛門權佐經親參入之、

〔鹽尻三十二〕或曰、朝廷の御儀式の中、使廳の判官など列座し、罪人を刑する體あり、白布を縋て

彼者の首に置き、まもどを以て打まねをなす、^{正月七日}此罪人になる者は、鞍馬の民家さだまり

てまゐる、下行三石を拜して歸る、如何なる事ぞ、答、是着欽政也、委しくは延喜式の廿九^四司^獄に見

えたり、^{五月の政なり、正月七日と}昔は實の犯罪の者に、鉗^{クシ}欽亦是盤枷^{ツルギ}を著て、東河原にて行ひし

事也、今は其まねびのみにや、

〔西宮記^{臨時十}〕與春事^{附臨時着欽例并放免役事}四人事

臨時着欽例

雜例云、放免狛吉門丸申云、故安房守泰貞正宿禰轉右衛門尉、未蒙檢非違使宣旨之間、坂上安見入

御垣下曹司、成強盜之犯、邑上帝別仰貞正令求捕件、盜人於攝津國、適以捕得也、于時有別勅、臨時於

右獄前、令着欽、貞正立官人之列、其行其事、依此功蒙使宣旨云々、

〔西宮記^{臨時十}〕與春事^{附臨時着欽例并放免役事}四人事

臨時着欽例

宗金記云、永承二年十二月廿四日、今日渡唐犯人之首、清原守武配流佐渡國、領送使左衛門府生泰

成信府掌日下部信近等也、但有可着欽云々、仍乘馬并持弓、胡籥參本府、是則於左獄門前、可行之故

廿八日己酉今日着欽政也着欽囚三人也雖召難犯只令被却成文衣裳不賜搭依節日也左權佐光賴行之

〔山槐記〕仁安二年五月廿七日今日有着欽政左右權佐左佐藏人右中辨長着行云々

〔吉記〕安元二年五月廿八日壬申今日着欽政也○中安房守兵部少輔宮內權少輔兵衛大夫本光等

裝束也來集先差小僮佐着裝束之間看督長兩三度來告大理車已立了云々諸官又皆着了云々次佐

駕車下布衣白袴門部火長如常雜色六人白襪上下白引倍支刺禮垂襪予逐電向市依無其所觸申

大理立彼車傍頭之右佐光長參着自堀川南行遣出之可隨出立所使歟隨又平三品自七條被出立

之時自南被着之由見仁平記然而自北必可着之由人々有訓加之南有堀地仍自北所着也下車作

法不見及斜日雖欲入猶差扇是依爲家之故實正作法也左手持笏手ナ向外持之即劍柄予當職之

達口傳云々當時頭辨左手ニ如去輦下三許尺納扇正笏徐步順例練不雙足如何難步順引右足爲

例可把笏之由調議右佐云々光雅着之用舊車云々牛童着寄御侍康貞御藏小依日入不差

此頭辨不可練之由執參着之後左佐光雅着之用舊車云々牛童着寄御侍康貞御藏小依日入不差

扇又不練步座事可爲次兩佐已下移着構所此間及乘燭看督長取松明在兩佐前協會各着定之後

大夫尉康綱令置版次覽過狀次着欽次役畢左右各次襟犯一萬判次事了左佐不歸着樓所早出了

次予北轅歸畢

〔山槐記〕治承二年五月廿六日己未有過狀政乘燭之後明基改申文廿九日壬戌午上雨降大風晴

時以後休止今日着欽政也左權佐光長尉源季貞志中原清宣右大夫尉源康綱六位尉中原基廣源

基行狀政今日施行官符也志中原明基府生安陪久忠等所着行也右權佐親口依重服母不着雖有

例猶成憚云々基行依爲初參可被免輕犯者之由付明基令申因合點因注文也一人返給抑左廳初參

之時有免物常例也但又或無之着欽政日初參官人申請免物事非常例云々但應保爲信初參有例

或記云、長久四年十二月 日、着欽政云々、若江信道雖召出市庭、依有身病、不令着欽云々、

〔中右記〕天仁元年五月廿九日、今日着欽政云々、左衛門權佐顯隆新大夫尉盛重着行、有難犯藏人尉尹通與春之由、或人所談也、

〔中右記〕永久二年五月廿六日、今日着欽政、右佐重隆以下之人着行、着欽四十九者、○中重時着欽、勘問忠盛難犯與春藏人判官說雅云々、

〔中右記〕大治五年五月廿三日、今日着欽政、右佐顯能以下着行云々、着欽四州餘人云々、

〔中右記〕天承二年○長承五月十四日、頭中將○藤原公敏送消息云、檢非違使宗重有所勞、不出仕、而雖無

府生可被行着欽政、歟、將又可被補、剩關、歟、兩條之間、可令量申給者、御氣色執啓如件、予進返事云、無府生行着欽政例、不慥覺候、於剩關者、先例多存、被加府生、可宜歟、近代府生只重宗一人也、十九日入夜、俄有小除目、筑前守藤通親公章辭代藤原左兵衛權少尉平維繁、宣旨右衛門府生大江國良、蒙使宣旨、剩關着欽政、依無府生也、上卿源大納言師賴左少辨公行書之、依無宰相、廿七日丙戌、今日有着欽政、囚人幾四人云々、

〔長秋記〕長承元年五月十四日癸酉、檢非違使府生宗重依所勞、不可參市政、近日府生一人也、其間事被問、經別當之人云々、

〔本朝世紀〕久安五年五月廿六日丁未、今日於左衛門府廳有進過狀政、申剩左衛門權佐光賴入自廳後戶着座、尉以下平伏不動座、（座居）一獻、（大夫尉光保、藤行、寄佐左）佐取盃、擬右尉中原季盛、巡行次居汁、（府生季盛取、次二獻、光保同、次撤饌了、次置飯、大夫尉光保召看、次覽囚帳、公文案主實長帶、次左尉、寄申汁、居由、勸如初、次撤饌了、次置飯、大夫尉光保召看、次覽囚帳、公文案主實長帶、次左尉）源宗弘、右尉中原季盛、藤守光等、勘問囚三人如常、（案主渡道志兼成、可持參別當許料也、次覽看）督長等見不參、文佐以下次第加署判了、返給案主、次尉光保召看督長、令取飯、次佐光賴退出、先是府生清原季兼起座、立廳西庇間、佐退出、季兼揖佐、佐答揖、案主等送佐看督拂、雜人如常、

〔西宮記臨時〕與賽事附臨時着欽例并放免役事因人事

雜例云、康保四年五月、村上帝崩、小日記不注着欽政日、彼年五月依御喪不行欽政、或人云、十二月一度行之云々、若有大赦乎、可尋

〔小右記〕天元五年五月廿七日戌午、傳聞着欽政云々、

〔西宮記臨時〕與賽事附臨時着欽例并放免役事因人事

雜例云、永觀二年五月廿一日、着欽政不奉仕供給云々、

又云、正曆五年十三日說〇十三日上、着欽政、此日政死人數多、依在市內儲供給於人家、雖安床子、依

可、有程、以府生西忠宗令申事、由於別當、而依無一定已停止也、以同廿八日擬行之間、伴日大赦仍無

着欽政、

宗阿記云、長德二年十二月十九日、晴着欽政、以在市東邊之人家爲供給所注官云、獨立、

或記云、長保六年元〇實弘十二月十六日、着欽政云々、着欽四十八人亡一人、過注官云、獨立、今月十一日、神今食十二

日大神祭、仍過神事、十三日行政左、當今年不着、右、十四日、成着欽勘文、十五日巡諸宮今日仁

修百講座、百法師過、諸宮、十七日荷前、仍十六日行此政市東十八日當別當御衰日、有節日行例、依遊

彼御衰日、今日所行也、

〔西宮記臨時〕於市行事

雜例云、長保元年十二月十六日、着欽政於東市行先例上十五日於東市行之、下十五日於西市行之、又云、

同四年五月廿一日於東市行着欽政、依無西市年來不向之、

今案使行事、雖於市可行、中古以來、除着欽政之外、殊不行他事歟、

〔西宮記臨時〕與賽事附臨時着欽例并放免役事因人事

准賊布拾壹段參丈

秦興安年卅五
山城國人

賊物壹種

准賊布拾參端壹丈三尺

右貳人天喜元年十二月四日、處徒四年〇四年誤年悉已了、而其役滿畢、宜從原免

藤井俊九年卅
出雲國人

賊物壹種

准賊布捌段貳丈伍寸

右壹人天喜二年五月廿五日、配徒一年半、而所役既滿、得放免矣

高橋金犬九年廿五
加賀國人

賊物壹種

准賊布貳端參丈

右壹人天喜二年十二月廿二日、處一年徒者也、格律所限、役以滿畢、宜從放免

右壹人

藤井翁九年廿五
右京人

賊物壹種

准賊布玖端貳丈參尺

右壹人天喜二年五月廿五日、配徒一年半者也、罪科所指、可從放遣

以前着鉢囚人、勘申如件、

天喜三年十二月廿五日

右兵衛權少尉源文賴

今案件免物、近代向獄門儀不見、只着鉢政次行之、囚人着鉢了後、勘問尉揖佐、喚看督長一會、稱唯立仰云々、取鉢之後、自懷中取出烏帽着之一、拜分散而已、

〔西宮記臨時十〕成勘文事附四名帳 役畢勘文

勘申着鉢囚人役畢事

合竊盜壹人左

內藏久任左年 京人

贓物壹種

准贓布肆端參丈陸尺

右壹人竊盜之犯承伏已畢、仍去年十二月廿八日、處徒一年、即以着鉢而其役已滿、可從原免、以前着鉢囚人役畢、勘申如件、

長久三年十二月十四日官人署同勘文

今案道官人兼日成勘文、先覽別當、有役畢勘文之時同覽了、書見因帳件帳若鉢勘文省略之重卷、以紙一枚封之、令齋政申看督長、令見佐以下、披見之後、如本封之、尉以下加署件勘文帳等、皆有尉以下署所也、諸官見了、不着政官人不披見、又不加、後成勘文、官人返、取着鉢并役畢勘文等奉別當、因帳隨身、於市下公文案主而已、

〔朝野群載十一〕勘申着鉢囚役畢事

合伍人

左肆人

日置成任年惜 起伊國人

贓物壹種

大志 某 姓

權少尉 某 姓

某 姓

某 姓

右衛門府生 某 姓

少志 某 姓

大志 某 姓

權少尉 某 姓

某 姓

某 姓

宗阿記云、如式可有件帳、而年來不造置、仍此度始造之、役畢勘文以之可成、官人署所如着鉢勘文、左右尉以下、注其署所、即着鉢之日、當府見參官人署下公文、所令收、

使役法

〔西宮記臨時十〕成勘文事附四名帳 役畢勘文

檢非違使式云、盜人不論輕重、停移刑部省、別當直着鉢配役所、令驅策、

又云、私鑄之輩、停送鑄錢司、着鉢與盜人同、令沒入資財田宅、

〔西宮記臨時十〕與奔事附臨時着鉢例并放免役畢囚人事

放免役畢獄囚儀

放免役畢獄囚儀

勘問式云、尉乍乘馬、

政佐

之、向獄門前、喚直看督長名、

誠可令帶兵

仰云、某姓某九召、

世有數人者、可稱唯、

召出、令候仰云、某九承、

可仰某九等、依徒役畢、任法免給布、各罷還本貫氏、重不奉仕犯、須爲公御財、

備進御調、

禮止

宣、

他放此、

大召看督長、仰云、取鉢、

奈此云、加、

稱唯、令脫、

脫去之後、

拜、

拜、

天、

唯、

唯、

唯、

唯、

唯、

內藏吉清年十九江國人 一盜

贓物伍種

准布拾肆反漆尺已上貳人同類

金刺今高年廿紀伊國人 一盜

贓物三種

准布七反

右參人賊布不滿十三端准犯依律已及流刑任格配徒役六年

右

大友忠吉年 二盜

五種准布拾肆反漆尺

右壹人左因吉清安助等之同類罪同彼

泰吉行年 二盜

紀安富年 二盜

贓物參種

准布漆端

右貳人左因今高之同類役亦同

右今月十一日着鉢獄囚如件

長保三年閏十二月十一日

左衛門府生某姓

某 姓

少志某 姓

少尉藤原、
平宗實
源家重
宮道賴式
防鳴河判官少尉源朝臣、

〔西宮記臨時〕成勘文事附四名帳 役畢勘文

宗阿記云、長德二年十二月十九日、着鉢勘文、此度新下別當宜旨、斷罪令勘申、志忠信奉仕、余草之、自今而後、如此可勘之、

〔西宮記臨時〕成勘文事附四名帳 役畢勘文

宗阿記云、長保三年閏十二月十一日、着鉢勘文、見參官人云々、自餘官人皆向追捕所、未還向、即以伴尉令成着鉢勘文、無道官人之間、依有朝政、余欲成勘文之處、伴尉以一昨夕、適自大和來也、仍以伴尉令成件勘文、

〔中右記〕永久二年六月四日、明覺來、予問云、着鉢勘文、往古不詳、從何時定、徒年載勘文哉、明覺申云、一條院御時、長德二年十二月、着鉢勘政之時、別當公任卿仰左佐允亮詳着鉢勘文、定入徒年也、其後勘文之體相定、及近代者、此事相尋之處、已以相叶也、昔之勘文、不定徒年云々、

獄因帳

〔西宮記臨時〕成勘文事附四名帳 役畢勘文

左右獄囚帳

合陸人左三人已強盜

左

大中臣安助丹波國人一盜

藤井久成左京人

賊物壹種

准賊布佰參拾端

右一人知情受盜賊者也、目伏之狀、已以露顯也、賊盜律云、知竊盜、而受分者、計所受賊、准竊盜論、減一等、名例律云、稱減者、就輕次、又條云、稱准盜論之類、罪止、遠流者、仍從遠流之上、減一等、合徒三年、尙任格律、合役四年、

內藏安行備年四十六
中國人

賊物二種

准賊布伍拾貳段

右一人運漕官物之間詐稱漂倒之由者也、訊問之庭過狀已了、檢廩庫律云、應輸課稅及入官之物、而迴避詐隱而不輸、或巧僞濫惡者、計所闕、准盜論者、而准賊布、雖及遠流、准據格律、宜役六年、

以前今月廿七日、可着鉢左右獄囚、勘申如件、

永久三年十二月廿日

右衛門府生內藏經則

造東大寺主典少志惟宗、

安倍資清、

藤原、

防鳴河主典左衛門府生伴有貞

明法博士兼少志中原、

少志大江行重

准盜布拾肆端貳丈

右一人強盜之犯呂伏已了科斷之法具注上條准犯依格可役六年

物部重貞年五十一
左京人

高橋延重年五十
左京人

日下部國成年六十一
左京人

賊物壹種

准盜布漆端

右三人共犯強盜過狀早了宜任格律同役六年

竊盜伍人

春日助九年廿四
伯耆國人

賊物參種

准賊布伍拾壹端

右一人竊盜之犯承伏已了科斷之法且注上條任律准格宜役六年

藤井重友年廿六
丹波國人

賊物壹種

准賊布玖端肆丈

藤井國延年廿三
左京人

賊物參種

准賊布伍端

右二人各犯竊盜狀先了而格律所指合役一年

義亦每此彼但除舉輕明重舉重明輕之外尙准量科是賊盜律云盜毀佛像者徒三年又條云盜不計賊而立罪名及言減罪而輕於凡盜者計賊重以凡盜論加一等名例律又云二罪以上俱發狀以重者論注云謂非應累者唯條其狀不累輕以加重者件王力丸已盜人物准賊五端合徒一年又盜經典准布一端合徒一年半然而未見累人物於經典而可併滿科斷之法仍比附盜佛像之法雖須不計賊徒三年尙任格制之旨宜處四年之役

日前金里年十九
居張國人

賊物壹種

准賊布陸端壹丈

佐伯武里年廿七
左京人

賊物叁種

准賊布伍端貳尺

右二人竊盜之犯承伏各畢而准據格可役□□

不知姓太郎丸年廿七
左京人

賊物壹種

准賊布壹端叁丈

右壹人竊盜之犯款狀先了任格新制可役一年

右玖人

強盜肆人

丹治安清年廿三
山城國人

賊物叁種

贓物壹種

准贓布壹端

平群次郎九年廿三
右京人

贓物壹種

准贓布肆端

右二人各犯強盜過狀共了、但同類之徒、彼此未被追究者、檢獄令云犯罪事發者、有贓狀露驗者、雖徒伴未盡、見獲者先依狀斷之者、而推所犯贓布、已以當流刑、准據格條令役六年、

不知姓禪師九年廿二
近江國人

贓物壹種

准贓布壹丈伍尺

右一人強盜之犯、款狀已了、方准格律、可役四年、

竊盜伍人

春日國松年廿五
左京人

贓物參種

准贓布貳拾參端

右一人竊盜之犯、已伏早了、檢賊盜律云、竊盜一尺、杖六十、一端加一等、五端徒一年、五端加一等、五十端加役流者、但推贓布數、不及十端、方今任格律、宜役三年半、

不知姓王力九年廿一
大和國人

贓物貳種

右一人盜取經典並人物者也、勘問之庭、已伏早了、檢名例律云、類斷罪而无正條、說者比附之

直二百五十文 用紙五十帖直五十文

長德二年十二月十七日

件勘文道志爲知賊數所注云々不相副着欽勘文耳計本賊直法隨其高下准定罪之輕重但殺人放火之類爲惡其意況處重科而已古賢之用心也

〔朝野群載十一〕勘申可着欽左右獄囚事

合拾玖人

強盜玖人

竊盜拾人

左拾人

強盜伍人

秦時里年廿五
右京人

不知姓牛九年三十
左京人

贓物壹種

准賊布參端

右二人共犯強盜承伏同畢檢賊盜律云共盜者併贓論註云共強盜者罪无首從又條云強盜一尺徒三年一端加一等十五端絞刑部格云犯盜之人配徒之輩宜犯徒一年者加半年犯二年三年者各加一年若犯三流者各役六年獄令云流徒罪居作者着欽若盤枷不得着巾判事式云平賊布者長五丈二尺廣九尺四寸爲一端者今推彼賊布之口雖及流刑准犯依格應役六年

富成則年六十
紀伊國人

長德二年十二月十七日

右衛門府生飛鳥部好兼

美努伊遠

少志朝原善理

大志伴忠信

權少尉安茂兼

平倫範

大尉藤原慶家

防鴨河主典左衛門府生西忠宗

少志錦爲信

權大尉藤原忠親

大尉藤原季雅

〔西宮記臨時〕成勘文事附四名帳役畢勘文

可着欽左右獄囚贓物事

合貳拾參人

強盜十九人

竊盜四人

左十一人

大春日兼平山城國人強盜

贓物七種直錢七百卅文准贓物布六反四丈流

弓一張直卅文胡籙一腰直五十文

拔出綿一領直卅文麥五斗直二百五十文麻布二反直百五十文手作布三丈五尺

贓物貳種

准贓布拾肆反玖尺

廣井忠助

年

贓物貳種

准贓布陸反漆尺

右參人強盜之犯雖不承伏見贓之數亦及三流徒役之限各以六年

多治比吉助

贓物壹種

准贓布肆丈貳尺參寸

右壹人強盜之犯承伏已畢贓布之數不滿一反准據格律應役四年

竊盜貳人

秦吉信

年

贓物貳種

准贓布玖反伍尺

右壹人竊盜之犯承伏已畢所取之贓當徒一年即依格旨役一年半

石城吉童

年

贓物貳種

准贓布玖反伍尺

九十反五尺餘

右壹人竊盜之犯承伏已畢計其贓布過五十反同前律當加役流更任格旨徒役六年

以前今月日可着欽左右獄囚勘申如件

准賊布拾參反玖尺

右貳人同謀強盜共成其犯爰清澄早以承伏專無所避宮時雖不承伏已有見賊科斷之法章條存上但賊盜律云共盜者併賊論共強盜者罪無首從者今推賊布數不滿十五端清澄等犯得分雖異併賊論罪是及流刑上件二人應役六年

伊勢利永_年

賊物參種

准賊布拾肆反貳丈伍尺

林枝重_年

賊物貳種

准賊布陸反參丈貳尺

紀清忠

准賊布拾貳反貳丈陸尺

秦乙犬丸

賊物貳種

准賊布陸反壹尺

右肆人強盜之犯承伏已畢計賊布之數不及十五反依律論罪共是及流隨格役六年

美努福安_年

賊物貳種

准賊布拾肆反壹丈捌尺

三島重遠_年

津守秋方^年

賊物壹種

准賊布肆丈貳尺參寸

右壹人強盜之犯承伏已畢、檢賊盜律云、強盜一尺徒三年、二反加一等者、今准賊布不滿一尺、據律條、當徒三年、依格加一年、應役四年、

竊盜二人

能登觀童九^年

賊物壹種

准賊布捌拾反壹丈伍尺

大神福童九^年

賊物肆種

准賊布佰貳拾伍反伍尺

右貳人竊盜之犯承伏已畢、檢賊盜律云、竊盜一尺杖六十、一反加一等、五反徒一年、五反加一等十五反、加役流、名例律云、本條稱加役流者、配遠所役三年者、准計賊布過五十反、依律言之、雖當加役流、依格論之、應處役六年、

右拾貳人

強盜拾人

星河清澄^年

物部宮時^年

賊物貳種

准賊布拾肆反參丈

田邊延正年傳
左京人

賊物漆種

准賊布拾肆反參丈

伯耆諸吉年廿七
大和國人

賊物伍種

准賊布拾肆反壹丈貳尺

右陸人強盜之犯承伏已畢檢賊盜律云強盜一尺徒三年二反加一等十五反絞刑部格云犯盜之人配徒之輩宜犯徒一年者加半年犯二年三年者各加一年若犯三流者各役六年獄令云流徒罪居作者着欽若盤枷不得着巾判事式云平賊布者長五丈二尺廣二尺四寸爲一反者推彼賊布數不滿十五反准犯依律已及流刑今任刑配徒早應役六年

菅野並重年、、、

賊物參種

准賊布拾肆端貳丈壹尺

紀重春年、、、

賊物壹種

准賊布拾肆反參丈

右貳人強盜之犯雖不承伏直賊之物已以顯露也檢斷獄律云應訊囚者必先以情審察詞理反覆參驗若賊狀露驗理不可疑雖不承引即據狀斷之者計賊斷罪具見上條仍以所得之物亦論所當之科依格加罪徒役六年

寛和二年五月廿七日

右衛門府生錦略中

件勘文長徳元年以往只注承伏之由並本賊數等不指役舉期之例也爲見其體載之

〔西宮記臨時〕十成勘文事附四名帳役舉勘文

勘申可着鈇左右獄囚事右志件忠信成之實
左佐惟宗允亮草之

合貳拾參人

強盜拾玖人

竊盜肆人

左

強盜玖人

大春日兼平年五十
護岐國人

賊物漆種

准賊布陸端肆丈

岩松年廿八
護岐國人

賊物肆種

准賊布拾肆反

清原延平年廿五
山城國人

賊物貳種

准賊布拾壹反

藤井國成年廿七
大和國人

賊物參種

右五人承伏進過狀了○五人當作六人

清原延高

贓物

褂四領一領青鈍
一領鐵花綾 一領山吹色

竊盜人

清原宗本年六十 左京人

贓物

黑毛牡馬一匹

大中臣氏信年廿 大和國人

贓物

鹿毛牡馬一匹

右二人承伏進過狀了

物部光明

贓物

大幡一流

大中臣市行

贓物

入袋拍一領 手作布襖二領

右二人贓狀露驗者也

以前今月廿八日可着欽左右獄囚勘申如件

白綿褂一領 紅花染綿褂一領

單袴一腰 櫛宮一合 胡籀一腰

赤毛父馬一匹 黑毛父牛一頭

息長直貞

贓物

鹿毛父馬一匹

綾部緣九○此大行當有贓物二字

大幡三流長各五丈

大中臣光忠年廿八 越前國人

贓物

櫻色綾褂一襲 青鈍綿褂一領

葡萄染下襲一領

凡河內時兼年十八 右京人

贓物

手作布九反 白合褂一領

拔出綿一領 手作布帷一領

秦犬重丸年廿 右京人

贓物

絹衫一領 絹製裝一條

誦敷一連 合袴一腰

大刀一柄

六人部法師九

贓物

手作布六丈 同布衣二領

辛鋤鍬一枚 槻弓一枝

穗積貞連

贓物

白衾一領 黑毛母馬一匹 錢一貫文

岡田是本

贓物

手作布一端 黑紅花阿古女一領

單袴一腰 錢一貫文

右五人犯強盜者也、勘問其由、承伏進過狀已畢、

坂本吉連

贓物

銅鐮一枚 燈一懸

右一人犯強盜者也、仍捕其身、紮所取之贓物、令請被盜主秦望明畢、而吉連左右避遁、不承伏盜犯之由、然而贓狀靈驗者也、

錦是長

贓物

表袴二腰 調布三端

中臣茂春

贓物

四五寸木二枝

土師有時

贓物

鹿毛父馬一匹

依智奏松連

贓物

調布二丈 錢六百文

手作布袴一領 信濃布一丈

右四人犯竊盜者也、勘問其由承伏進過狀已畢、

右九人

曰佐吉助

贓物

單袴一腰 柳色合指貫一腰

菱袖直垂一領

文室有直

贓物

手作布狩衣一領 同布袴一腰

贓物

白綿褂一領 承和色阿古女一領

單袴二腰 懸子宮一合

染穀一匹

新飲助連

贓物

鍍一貫文

額田常富

贓物

白單褂一領 基帳帷一條

藤原童子丸

贓物

白阿古女二領 細布袈裟一條

鈍色阿古女一領 黑紅花染單袴二腰

右六人犯強盜者也、勘問其由承伏進過狀已畢、但于常富、去天曆八年十二月廿二日着飲者也、而今年六月十三日逃亡、同年八月九日捕禁逃亡之由、既以承伏、

坂上犬法師丸

贓物

鐵十二廷 衾拔出綿一條

信濃布二丈五尺 綿二屯 白褂二領

右承伏進過狀了

竊盜一人

高田恒枝 年卅二 伊勢國人

贓物

錢十貫文

右承伏進過狀了

右十人

強盜六人

阿刀行忠 年廿 左京人

贓物

百合掛一領 青鈍掛一領

百合拍一領 手作布襖一領

多治近滋 年卅九 筑前國人

贓物

五丈大寶幡三具 各四角付三小幡四流

白綿掛一領 白手作布狩衣一領

高額豐茂

贓物

黑紅花單掛一領 白單小衣一領

文室經忠

勘申可着鉢左右獄囚事

合十五人

強盜十人

竊盜五人

左五人

強盜四人

大原眞犬丸年卅

左京人

贓物

絹衫一領 絹袈裟一條 誦數一連

合袴一腰

河邊延正年卅

伊勢國人

贓物

褂四領一領青鈍
一領花染
一領山吹色

清原宗高年卅二

筑前國人

贓物

櫻色綾褂一襲 青鈍綿褂一領

葡萄染下襲一領

清原德忠年卅

日向國人

贓物

手作布狩衣一領 同布襖袴一腰

左看督長紀高景申^ク、可給鉢^キ犯人左八^ヤ、右七^ナ、合十^カ、五人^イ、令候^シ申、左尉致明朝臣仰云、鉢給^ヘ高景稱唯、右看督長諸帥春明云、共呼事、共稱唯退出、着鉢^{初出時、督長人守官人、無着鉢者、大長、隨身等不、看、長北進、着鉢了、看督長等如初進北、就假左右邊、此間令因近、持柱^{持留、列留在庭中、左以西爲上、右以東爲上、爲見其形、令近進也}、左看督長紀高景等申^久、犯人乃鉢給了^ト申、尉仰云^{ヨシ}、高景稱唯、春明云、共呼事、共稱唯退出、次取版、次起座、出自初入間、各見合着座^{時人云、列立北、繼南庭中、排後各着座云々、無排後也、但可、問故實、居飯并汁物等、次免物、次召名^{不讀唯下矣、是故實也}、事了、各各分散、}}

〔西宮記 臨時十〕成勘文事 附因名朝 役畢勘文

勘申可着鉢左右獄囚事

合十九人

強盜十二人

竊盜七人

左十人

高田助茂

贓物

紅花染衾一條 鏡二口

合子八枚

右三人犯竊盜者也、勘問其由、承伏進過狀已畢、

以前今月廿二日、可着鉢左右獄囚勘申如件、

天曆十年十二月廿日

〔西宮記 臨時十〕成勘文事 附因名朝 役畢勘文

右衛門府生蜂田平時^略下

平緒藏人尉着青色自餘官人用常束帶先着市屋佐藏人尉聞他官人等參集已由後着之其儀於市東彌河西程扣車大夫尉或乘車云云選參官人故及看督長等相率迎來頃之下車西步見物車塞跡以看督長先可令却歟容止進退可用心微令步至下北折

自東路作路着市屋看督長二人以弓褰暢引屋南東左官人經屋東着北座右官人直着南座各至

長押下揖昇膝行着座如常但不取沓案主在左府生下方看督長在西方輭次供給先酒一巡尉勸

盃如廳儀更政左儲之冬次居汁不計各下箸食之次酒一巡了拔箸次左右看督長進展文今日可

夾名也佐料公文案主入覽督佐披見之後入覽督次揖退座着沓又揖如常着樓前輭左官人如

持來尉已下看督長直進之長押從壇上西步出自西道先尉以下退立在西方佐小揖下揖看督長輭如初左右整衣裳正笏

合眼相並至輭下相對入自座末第着之座定小揖佐胡床掩席有文整衣裳正笏案主輭東立胡床居之頃之置版見與審儀還着本座差酒肴尉不勸盃佐執盃巡訖因看督長見不

參帳如常案主取展文令看督長給隨身佐退出案主送之如常府生不下立之

〔西宮記臨時十〕與審事附臨時着欽例并放免役畢囚人事

或記云寬和二年五月十七日着欽政中着欽十六人左八人之中不計賊盜人取傾宇佐宮神馬之

者也又決杖原免之者一人強盜者知主盜賊而藏者也爲拷件人立拷器其儀去版南一許丈立之第

一尉召看督長仰云召某姓某九世召犯人就版尉召看督長仰云犯人寄器與看督長申杖數尉稱有

給之詞如廳拷儀看督長隨身長二行陣列如常

〔天延二年記〕天延二年五月廿三日依政着西市依例不可然依雨濕乘車又其儀先着歸屋依例官人先着

也左南面右北面皆東上依雨脚不降有會議令打例平張二字一字在南政所一字在下左尉以下左尉以下

佐西面○歸屋恐歸屋誤移着輭座酒儀如常尉來仍一雨至後着政座看督長進連立文每人各一校

上相對移着輭座酒儀如常尉來仍一雨至後着政座看督長進連立文每人各一校

數也云々次起座連立夾名取副笏列北輭南庭相對以兩爲上各相分夾屏築垣左右見合到南輭南

砌見合揖着胡床以中央爲佐座左東右西座定看督長紀高景版柱北倚次高景取犯人過狀立佐以

下次覽右尉以下今日右覽了看督長等左右列立各出東西更折進北就版位東西左在東右在四

廷尉佐參行大理相觸之時申沙汰之外無他

〔夕拜備急至要抄上十二月〕一着欽政同五

〔公事根源五月〕着欽政

是は檢非違使以下東京にて制法をおこなふ事也元明天皇の御宇和銅よりはじまる月令の本
文には孟夏の月に有べしとみえたれど四月は齋月にて神事ことあげ、れば五月におよぶ
なり

〔公事根源十二月〕着欽政

五月におなじ

〔禮記月令〕是月夏也聚蕃百藥靡草死麥秋至斷薄刑決小罪出輕繫

著欽式

〔西宮記臨時〕與審事附臨時着欽例并放免役事囚人事

勸問式云與審儀在右尉與審若左尉不左右佐以下着帷輕下如常至于天曆之比着市樓下行此政是

政當上十五日之時於東市行之當十五日之時於西市行之是亦喚集尉喚看督長名稱唯當輕東

市人示衆決之情狀今權已翻倒人衆不集仍輕向東市樓所立觀行之尉喚看督長名稱唯當輕東

居尉仰云置版木取其詞如尋常政稱唯取版去輕南二許丈置之退去以囚過狀入覽宮覽佐以下先覽

生佐左右尉志府訖看督長退出引左右囚人從東西將來因若干取執押地看督長陣於囚北隨身長陣

於囚南去輕前五許丈左右看督長陳列東西列上立輕前左第一看督長就版申云左右看督長某姓

某九等申久可給欽之犯人左若干右若干并若干候止和申尉揖佐命云依例給欽同依例看督長

稱唯訖右第一看督長唱云共呼左右看督長共稱唯退歸令着欽訖列上如初申云左右看督長某姓

某九等申久犯人等爾欽給了止申尉揖佐命云令候本禁引與看督長稱唯右看督長唱呼將囚退去

訖佐以下相揖次第起還着本座勸一盃其五月外夏一種魚物若十二月海風必用之此訖各退出
今按五月十二月擇無障之日可避日時事六日行之當日諸官向市裝束佐如廳政大夫尉必着

仁年間ニ、盜ノ爲メニ特ニ徒六年十五年等ノ法ヲ設ケシハ、著欽政ノ始ナルベシ、因テ著欽政ノ勘文ニハ、毎ニ弘仁ノ官符是モ徒刑ノ引ケリヲ引用セリ、然ルニ公事根源ニ、元明天皇ノ朝ニ始マルト云ヘルハ、恐ラクハ誤ナラン、此政ハ盜犯及ビ私鑄錢ノ徒ヲ著欽シテ、驅役スル爲メニテ、五月十二月ニ日ヲ擇ビテ行フ、村上天皇ノ天曆ノ比ハ、市司ノ樓下ニ就キテ、上ノ十五日ハ東市ニテ行ヒ、下ノ十五日ハ西市ニテ行ヒシガ、後ニ樓覆リテ、再ビ建テザリシ故ニ、偏ニ東市ノ樓ノ遺址ニテ、幄ヲ立テ、行ヒシトナリ、當日ハ衛門佐以下、帷幄ノ下ニ就キ、看督長四人ノ過、狀ヲ以テ、衛門佐ニ呈シテ、後、看督長左右獄ノ四人ヲ將テ至ル、囚ニハ人別ニ防援アリ、既ニシテ衛門佐看督長ニ命ジテ、欽ヲ加ヘテ獄ニ送ラシム、其日罪ニ因リテ、決杖シテ原免スルコトモ、服罪セザル者ヲ拷訊スルコトモアリ、是ヨリ先ニ衛門府ヨリ、著欽スベキ獄囚ヲ檢シテ勘文ヲ上ル、其勘文ニハ、一條天皇ノ長徳元年以往ハ、唯服罪ノ狀ト、贓數トヲ載セテ、役期ヲバ畢ザリシニ、後ニハ律ヲ考ヘテ、役期ヲ載セタリ、著欽畢リテ後ハ、更ニ書ヲ作リテ之ヲ報ズ、又役畢ノ勘文アリ、役期ノ畢リタルコトヲ勘ヘ報ズルナリ、役ノ畢リタル者ハ、著欽政ノ日、衛門尉看督長ヲシテ、囚人ノ欽ヲ脱セシメ、懷中ヨリ烏帽ヲ取り出シテ、之ニ與ヘテ放チ遣ル、又著欽ノ後ニハ、更ニ決杖セシ例ナルヲ、圓融天皇ノ天祿四年ニ之ヲ停メタリ、ナホ徒刑囚禁二篇ヲ參考スベシ、

名稱

日時

〔名目抄 恒例諸公事〕著欽政

〔年中行事秘抄 五月〕着欽政事建武常哀日、佐以下於東市、行之東等

〔年中行事秘抄 十二月〕着欽政事

佐以下着行立春以後有例、

〔夕拜備急至要抄 五上〕一着欽政日、吉

疏議曰、盜及傷人徒以上、並合配徒、不入加杖之例、諸條稱以盜論、及以故殺傷論、以聞殺傷論者、各同真盜及真殺傷人之法、親老疾合侍者、謂有祖父母、父母、年八十以上、及篤疾合侍家、無兼丁者、雖犯盜及傷人、仍依前加杖之法、

〔律疏名例〕凡雜戶、陵戶、略中犯徒者、准無兼丁例、加杖還依本色、

〔延喜式刑部二十九〕凡犯罪之人、或貶或弱決杖之時、且寒且熱、重加頓杖、恐致死亡、須量其貌滿役之間、准折決畢、

〔西宮記臨時〕停止着欽後決杖事

檢非違使式云、盜人雖承伏已了、決背杖七十天祿四年五月廿六日、宣旨云、檢非違使別當中納言從三位兼行左衛門督春宮大夫源朝臣延光、今月三日奏狀、僞強盜竊盜承狀着欽者、更決杖七十、拷掠之間已滿二百着欽之後、何決七十者、內大臣兼通藤原宣奉勅件事、自古行來之例、非隨申請輒可令改、然而如聞者、着欽後決杖事、非律令之所載、是使等所申行也、頗似苛酷、疑僧冤愁、思彼囚人之所歎、欲施仁化而相赦、宜停楚捶於一時、以貽漢德於萬代者、使宜承知、依宣行之、左大史件宿願保在事

附著欽政

欽ハ鉗ナリ、邦語ニカナギト云ヒテ、囚人ヲ連繫スル具ナリ、史記平準書及ビ其註ニ據リテ考フルニ、鐵ニテ造リ、左趾ニ著クル具ナルヲ倭名類聚抄ニハ脰沓也トアリテ、鐵ヲ以テ頸ニ著クル具ト爲シ、類聚名義抄ニハ欽ヲクビカシトモ訓セリ、以上ノ書ハ、四、ナレバ我邦ノ欽ハ、頸ニ著ケタルナラン、日本後紀ニ載セタル延暦十八年六月ノ詔ニ、鉗鎖囚徒暴體苦作トアルハ、引ケリ、徒利篇ニ著欽ノ罪人ヲ指セルニテ、欽ヲ著ケ鐐ヲ用キタルガ如シ、而ルニ年中行事ノ著欽政ノ圖ニハ、索ヲ用キテ衆囚ノ兩臂ト胸背トヲ連繫セリ、後世ニハ此ノ如クナリタルニヤ、著欽長役ノ事ハ、聖武天皇ノ天平十七年徒利篇ニ見エタレドモ、嵯峨天皇ノ弘

問曰：家內雖有二丁俱犯徒坐，或一人先從征防，或沒官，或逃走，及被禁，並同無兼丁以否？

答曰：家無兼丁，免徒加杖者，於其糧餉乏絕，又恐家內困窮，一家二丁俱在徒役，理同無丁之法，便須決放一人，征防之徒，遠從戍役，及犯徒罪以上，獄成在禁，同無兼丁之例，據理亦是弘通，居官之人，雖非丁色，身既見居榮祿，不可同無兼丁。若兼丁逃走，在未發之前，既不預知，得同無兼丁之限。如家人犯徒，事發後兼丁，然始逃亡，若其許同無丁，便是長其姦詐，即同有丁之限，依法役身。

又問：二人俱徒，許決放一人，若三人俱犯徒坐，家內更無丁，若爲決放？

答曰：律稱家無兼丁，本謂全無丁者，三人決放一人，即是家有丁在，足堪糧餉，不可更放一人。若一家四人徒役，決放二人，其徒有年月及尊卑不等者，先從見應役日少者，決放役日若停，即決放尊長，其夫妻並徒，更無兼丁者，決放其婦。

徒一年加杖一百二十，不居作一等加二十。流至配所應役者亦如之

疏議曰：徒一年加杖一百二十，一等加二十，即是半年徒加杖二十，不居作，既已加杖，故免居作。流

至配所，應役者謂流人應合居役，家無兼丁，應加杖者，亦準此。

若徒年限內無兼丁者，總計應役日及應加杖數，準折決放。

疏議曰：徒限未滿，兼丁死亡，或入老疾，或犯罪征防，見無兼丁者，若犯徒一年，三百六十日合杖一百二十，即三十日當杖十。若犯一年半徒，五百四十日合杖一百四十，即是三十八日當杖十。若犯二年徒，七百二十日合杖一百六十，即是四十五日當杖十。若犯二年半徒，九百九十日合杖一百八十，即五十日當杖十。若犯三年徒，一千八百日合杖二百，即五十四日當杖十。若犯三年半徒，一千二百六十日亦合杖二百，即六十三日當杖十。若犯四年徒，一千四百四十日亦合杖二百，即七十二日當杖十。其役日未盡，不滿杖十者，律云加者數滿乃坐，既不滿十，據理放之。

盜及傷人者，不用此律。親老疾合侍者，仍從加杖之法。

免課役

在役死亡

役滿

教徒刑

全備者謂徒內家資、餉糧、或來或絕、不能全給、故令二等以上親、助二等以上親代備、
改嫁是也、代備者、五日內更相備給也、五十日根隨盡公給若去家懸遠絕餉、及家人未知者、官給衣糧、家人至日、依數徵納者、不在徵限、其見囚絕餉者、斷此未斷、及配之類、亦准此、

〔令義解三〕徒人在役並免課役、

〔延喜式主計二十五〕凡勸大帳者○中依符所免爲符損○中徒人○中

〔令義解十〕凡囚死無親戚者謂並無有親之親者皆於開地權埋立勝於上記其姓名仍下本屬卽流移人在路及

流徒在役死者准此、

〔延喜式二十九〕凡罪人死亡者、具注姓名年居并入徒年月日申省、

〔延喜式二十九〕凡徒人年限者從入役日始計其徒役滿者省具錄事狀遞送本鄉、

〔延喜式二十九〕凡徒人役滿具錄役日并作物色目申送於省、

〔延喜式二十九〕凡○中徒人役滿者依法合免其爲人凶惡衆庶共知者不須放免禁固獄中理應放者

申官免之、

〔日本書紀二十九〕五年八月壬子詔曰死刑沒官三流並除○中一等○中徒罪○中以下已發覺未發覺悉赦之唯既

配流不在赦例、

〔續日本紀一武〕三年三月甲子河內國獻白鳩詔○中赦畿內徒罪以下、

〔日本後紀八〕延曆十八年六月丙申詔曰朕祇纂丕業撫臨黎元刻已勤躬不遑事處思欲輯熙四海

期之刑措弘濟百姓致之壽域而近巡京中過掘川處錯錮囚徒暴體苦作與言於茲愀然于懷雖生民

之愚自招罪罟而爲彼父母事不哀愍其在役見徒及天下見禁囚等罪無輕重並宜赦除令得自新但

私鑄錢謀殺故殺及被問民苦使推訪諸國郡官吏百姓等不在赦限其謀殺故殺配役者停役配流普

告遐邇令知朕意、

之謫兼亦致憲法乖謬之咎縱有行來何無改張自今以後全守朝章着欽之前儘注犯贓徒年之數原免之處偏載限滿役畢之狀然則着一孔之理將叶三典之義者左衛門權佐權宗朝臣允亮奉

〔令義解〕^四凡犯徒應配居役者畿內送京師在外供當處官役其犯流應住居作者亦准此婦人配縫作及春

〔令集解〕^四刑部省例依慶雲元年十二月廿六日太政官判役徒人者因獄司率令作路橋及役雜事因獄司例依神龜元年六月四日太政官判每兩落日且引將囚人等使掃除宮闕邊穢陋并東西厠等也

〔延喜式〕^{二十九}凡徒役人者令作路橋及役雜事又司每六日將囚人等使掃除宮城四面其兩後且亦掃除宮內穢污并厠溝等

〔九曆〕天德三年十月廿三日召囚人令掃池井事和古佐密書所
〔日本後紀〕^{二十四}弘仁五年八月甲子免囚人日下部土方補木工長上土方者攝津國武庫郡人以私鑄錢着鐸役於堀河頗善工巧仍棄取才

〔令義解〕^四凡流徒罪居作者皆着欽若盤枷謂流徒過着欽若盤枷也非有病患聽脫不得着巾謂不得着二每旬給假一日不得出所役之院惠假者陪日謂文云惠假即假假旬役滿遞送本屬人謂此唯徒

〔延喜式〕^{二十九}凡罪人者隨罪輕重着欽若盤枷故機公私倉舍盜私鑄錢獲奸之類居其欽或四人或三人爲連至暮着桎明旦脫而役之

〔令義解〕^四凡徒流囚在役者囚一人兩人防護謂其四二人者四人防護若因在側圖者既禁其在京者取物部及衛士充衛士也府一分物部三分衛士在外者取當處兵士分番防守謂此亦爲二

〔令義解〕^四凡在京繫囚及徒役之處恒令彈正月別巡行有安置役使不如法者隨事糾彈

〔令義解〕^四凡流入至配所居作者並給官糧如役流准此若留住居作及徒役者並食私糧即家貧不能

續死者不再生、望請明定節文、依限驅使、謹請處分者、右大臣冬關藤原宣奉、勅夫配徒之輩、既有年限、至於役使、豈期終身、靜而言之、事涉深刻、但兩京之內、犯盜者衆、若不折衷、何將懲肅、自今以後、宜犯徒一年者、加半年、犯二年三年者、各加一年、杖罪以下、只徒一年、若犯三流者、役六年、其犯死罪、別勅免死、十五年爲限、若役畢之後、不悔前過、亦有犯盜、或爲人凶惡、爲衆人所明知、或量其意況難恤之色、並是終身配役、不可放免、但女人者、減男之半、若犯杖罪以下、依法決之、如應官當收贖者、各依本法、自餘犯並從常律、其私鑄錢、不論首從、令鑄錢使終身役之、

弘仁十三年二月七日

〔西宮記臨時十〕成勸文事附四名帳 役畢勸文

今案強竊盜私鑄錢等者、飲事、檢非違使等守式文可行也、至于餘罪科者、須進勸奏被下刑官斷之、仍非別宜旨之外、只爲捉搦不知加○知恐着飲云々、強盜不得財徒二年、一尺徒三年、二端一尺近流、四端一尺中流、自六端一尺至十四端五丈一尺九寸遠流、十五端絞、依格加年、不得財徒三年、一尺徒四年、自二端一尺至十四端五丈一尺九寸役六年、十五端役十五年、竊盜不得財笞五十、一尺杖六十、一端一尺杖七十、二端一尺杖八十、三端一尺杖九十、四端一尺杖一百、五端徒一年、十端徒一年半、十五端徒二年、廿端徒二年半、廿五端徒三年、卅端近流、卅五端中流、卅端遠流、五十端加役流、依格加年、不得財并四端一尺以下徒一年、五端徒一年半、十端徒二年、本罪徒一年、分加二年半、入二年、分加三年也廿五端徒四年、自卅端至五十端役六年、格律所指年限如此、

〔西宮記臨時十〕成勸文事附四名帳 役畢勸文

長德二年十一月十六日別當宣僧、依盜竊之犯人、徒役之輩、貞觀以往、移刑部省、任法斷定、乃是先定罪名、次及決配者也、爰貞觀以後、別當直着飲配役所、須條犯狀、同存恒規、而頃年至于着飲之日、只注服弁之由、雖顯本賊、無指役限、臨于役限畢之期、欲從原免之時、追准彼賊、更明其限、非只招先後倒錯

ナシト雖モ、親ノ老疾シテ侍スベキ人ノ外ハ、此律ヲ用キズ、聖武天皇ノ天平年間ニ、私鑄錢ノ者ハ首從ヲ問ハズ、著鈇シテ終身鑄錢司ニ役シ、嵯峨天皇ノ弘仁九年ノ宣旨ニ犯盜ノ人ハ輕重ヲ論ゼズ、皆役所ニ配スベシトアルニ由リテ、所司終ニ年限ヲ定メズ、皆命ヲ役所ニ畢フルニ至ル、因テ十三年ニ至リ、犯盜ノ人杖罪以下ニ當ルトキハ徒一年トシ、徒一年ニ當ルトキハ半年ヲ加ヘ、二年三年ハ各一年ヲ加ヘ、三流ニ當ルトキハ六年トシ、死罪ヲ犯シテ別勅ヲ以テ有ストキハ十五年ヲ限トス、又人ト爲リ凶惡ナル等ハ終身コレヲ役スルコトトセリ、盜人ハ著鈇後決杖スル例ナツシヲ、天祿四年ニ之ヲ停メタリ、ナホ著鈇政篇ヲ參考スベシ、

〔律疏〕

徒罪五徒二年半贖銅五十斤 徒一年半贖銅卅斤 徒三年贖銅六十斤 徒二年贖銅卅斤

〔法曹至要抄上科〕

一五罪事略○中

按之、

○中 徒罪者始從一年、竟於三年、以半年爲一等、前半年、百八十日也、

〔唐律疏議名例〕

徒刑五

一年贖銅二十斤

一年半贖銅三十斤

二年贖銅四十斤

二年半贖銅五十斤

三年贖銅六十斤

疏議曰、徒者奴也、蓋奴辱之、

〔類聚三代格十二〕

太政官符

應定罪人配役年限事

右檢非違使解僞、案賊盜律云、強盜不得財徒二年、一尺徒三年、一端加一等、十五端及傷人者絞、殺人者斬、其持仗者雖不得財、遠流十端、絞傷人者斬、又條云、竊盜不得財、笞五十、一尺杖六十、一端加一等、五端徒一年、五端加一等、五十端加役流者、然則強竊二盜其罪各別、從賊多少、復有輕重、而去弘仁九年宣旨僞犯盜之人、不論輕重皆配役所者、使等偏執此旨、未定年限、罪無輕重、命終役所、夫絕者難更

徒刑 著 欽政園

徒トハ、罪人ヲ役シテ、罪ヲ償ハシムル刑ニテ、仁徳天皇ノ朝ニ、意伎等ノ五國ノ國造ニ命ジテ、田ヲ營ラシメ、履中天皇ノ朝ニ、阿曇濱子ニ從ヘル海人等ヲ、倭蔭代屯倉ニ役セシ類ハ、徒刑ニ似タル者ナレドモ、未ダ徒ノ名ハアラザリシナリ、天智天皇ノ朝ニ、律令ヲ撰ビシヨリ、始メテ徒ヲ設ケシナラン、徒ハ杖ヨリ重キ刑ニテ、一年ニ始マリ、半年ヅ、加ヘテ、三年マデノ五等アリ、三百六十日ヲ以テ一年トスルナリ、徒刑ノ人ハ、畿内ハ京師ニ送リ、課役ヲ免シ私糧ヲ食セシメ、欽ヲ著ケ三四人ヲ相連テ、若シクハ盤枷ヲ著ケテ、一人ゴトニ兩人、防護シ、路橋ヲ作り、宮城ノ四面ヲ掃除スル等ノ雜事ニ役シ、婦人ハ之ヲ衣ヲ縫ヒ、穀ヲ春クノ役ニ從ハシメ、滿役ノ日ニ至レバ、役ノ日數ト作物ノ色目トヲ錄シテ、囚獄司ヨリ刑部省ニ送リ、刑部省ヨリ事狀ヲ錄シテ、其身ヲ本郷ニ送送ス、若シ親戚ナキ者、役中ニ死スルトキハ、權リニ閑地ニ埋メ、其姓名ヲ記シテ本屬ニ下ス、而シテ徒ヲ犯シテ家ニ兼丁ナキ者ハ、男女ヲ擇バズ、徒ヲ免シテ加杖スルナリ、兼丁トハ丁夫二人ノコトニテ、兼丁ナキトハ其身一人ナルヲイフ、是ハ糧餉ノ乏絶ヲ矜ミ、家内ノ困窮ヲ恐レテ役セザルナリ、但シ家ニ年二十一以上ノ妻アルトキハ、男夫ノ兼丁ト同様ニテ役ヲバ免サズ、雜戶陵戸徒ヲ犯ストキハ、兼丁ナキ例ニ準ジ加杖ス、凡テ徒ヲ免シテ加杖スルトキハ、徒一年ハ加杖一百二十ニシテ、一等ゴトニ二十ヲ加フ、若シ徒ノ年限内ニ家ニ兼丁ナキニ至レバ、役スベキ日數ト、加フベキ杖數トヲ總計シテ、準折シテ決放スルナリ、例ヘバ徒一年ハ杖一百二十ナレバ、三十日ハ杖十二當ル、而ルニ是ノ人既ニ三十日役セラレテ、家ニ兼丁ナキニ至レバ、剩ル所ノ杖百十ヲ加ヘテ決放ス、凡テ此ノ如キ類ヲ準折シテ決放ストハイフナリ、但シ盜及ビ人ニ傷クル者ハ、兼丁

〔三才圖會十二〕刑具說○中略 笞以荆條爲之○中略 杖以大荆條爲之

〔延喜式四十九〕凡司內所須笞杖每年十一月役物部丁令採備各杖一千枝

〔倭名類聚抄十三〕杖刑具 蔣飭切韻云杖官杖名也字亦作梓俗音

〔下學集下〕杖財杖也

〔日本書紀二十〕十四年三月丁巳朔物部弓削守屋大連與中臣勝海大夫奏曰○中略 疫疾流行國民可

絕豈非專由蘇我臣子馬之興行佛法歟詔曰灼然宜斷佛法 丙戌○中略 有司便齊尼等三衣禁銅楚レ

捷海石榴市亭

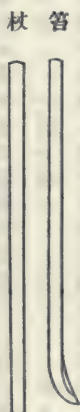
豆木之毛度變也。變訓之毛度見木具圖部氏曰之毛度茂本也以變爲笞故名。變訓須波衣亦楚也。須直生枝之急呼也。

〔類聚名義抄〕^ハ笞^{音習}竹^{刃之反}。

〔萬葉集〕^五貧窮問答一首并短歌。

伊等乃伎提短物乎。端伎流等云之如楚取五十戶良^{長誤}。我許惠波寢屋麻低來立呼比奴。

〔和漢三才圖會〕^{刑罰}二十^二笞杖。笞音知和名之毛度。杖和名豆倍。



〔倭名類聚抄〕^{刑罰}杖。唐令云諸杖^{音仗}名部惠皆削去節目長三尺五寸許^{○許}。

〔令義解〕^十凡杖皆削去節目^{謂此也}。長三尺五寸訊囚及常行杖大頭徑四分^{謂用四分杖也}。小頭三分^{謂用三分杖也}。大頭三分小頭二分。櫛長四尺以下三尺以上。櫛長一尺八寸以下一尺二寸以上。

〔唐律疏議〕^{二十九}疏議曰^{○中}依令^{○職}杖皆削去節目長三尺五寸訊囚杖大頭徑三分二釐小頭二分二釐常行杖大頭二分七釐小頭一分七釐。笞杖大頭二分小頭一分五釐。

〔唐律疏議〕^{名例}笞刑五^{○中}疏議曰^{○中}漢時笞則用竹今時則用楚。

〔明律〕^{器具}笞大頭徑二分七釐小頭徑一分七釐長三尺五寸以小荆條爲之須削去節目用官降較板如法較勘母令勛膠諸物裝釘應決者用小頭腎受。

杖大頭徑三分二釐小頭徑二分二釐長三尺五寸以大荆條爲之亦須削去節目用官降較板如法較勘母令勛膠諸物裝釘應決者用小頭腎受。

杖大頭徑三分二釐小頭徑二分二釐長三尺五寸以大荆條爲之亦須削去節目用官降較板如法較勘母令勛膠諸物裝釘應決者用小頭腎受。

杖大頭徑三分二釐小頭徑二分二釐長三尺五寸以大荆條爲之亦須削去節目用官降較板如法較勘母令勛膠諸物裝釘應決者用小頭腎受。

杖大頭徑三分二釐小頭徑二分二釐長三尺五寸以大荆條爲之亦須削去節目用官降較板如法較勘母令勛膠諸物裝釘應決者用小頭腎受。

杖大頭徑三分二釐小頭徑二分二釐長三尺五寸以大荆條爲之亦須削去節目用官降較板如法較勘母令勛膠諸物裝釘應決者用小頭腎受。

杖大頭徑三分二釐小頭徑二分二釐長三尺五寸以大荆條爲之亦須削去節目用官降較板如法較勘母令勛膠諸物裝釘應決者用小頭腎受。

杖大頭徑三分二釐小頭徑二分二釐長三尺五寸以大荆條爲之亦須削去節目用官降較板如法較勘母令勛膠諸物裝釘應決者用小頭腎受。

〔小右記〕寛弘二年六月廿八日甲辰、昨日左衛門府六月祓間、番長二人爲權佐、允亮朝臣致無禮、仍彈決非違。廿九日乙巳、允亮朝臣來談云、一昨於本府依例行六月祓、以番長案主等可令從尉以下手長役、而佐行酒并手長以府掌令役、以吉上爲志以下行酒、先例不然、仍以非例旨再三仰下、而番長高橋正連、眞髮部忠滿不承從、有如放言事。○中即召出正連、忠滿等、依着美服、細布破衣、決罪。付繩決了、

〔今昔物語 二十四〕大隅國郡司讀和歌語第五十五

今昔大隅國ノ守口口ト云者有ケリ、其ノ國ニ下テ政始メ行ケル間、郡ノ司四度ケ无キ事共有ケレバ、速ニ召シニ遣テ、誡メムト云テ使ヲ遣ツ、前前此様ニ四度ケ无キ事有ル時ニハ、罪ノ輕重ニ隨テ誡ムル事常ノ例也、其レニ一度ニモ非ズ、度度四度ケ无キ事有ケレバ、此レハ重ク誡メムトテ召也ケリ、即チ將參タル由使云ケレバ、前前誡ムル様ニゾウツ臥セテ、尻頭ニ上リ可居キ人可打キ様ナド儲テ待ツニ、人二人シテ引張テ將來タリ、見レバ年老タル翁ノ、頭ニハ黒キ髮モ交ズ、皆白髮也、此レヲ見ルニ打セム事ノ糸情ク思ユレバ、忽ニ憐ノ心出來テ、何ナル事ニ付テ此レヲ免シテムト思フニ、可事付キ方モ无シ、誤共ヲ片端ヨリ問ニ、只老ヲ高家ニシテ答ヘ居タリ、守此レヲ見ルニ、打セムガ糸情ケレバ、此レ何ニシテ免サムト思テ、思ヒ廻ニ无ケレバ、守恩赦テ云ク、汝ハ極キ盜人カナ、但シ汝チ和歌ハ讀テムヤト問ニ、翁墓墓シクハ非ズトモ仕テムト答フレバ、守イデ然ラバ讀メト云ニ、翁程モ无クワナ、キ音ヲ捧テ、此ナム云、

トシヲヘテカシラニ雪ハツモレドモシモトミルコソミハヒエニケレト、守此レヲ聞テ、極ク感シ哀テ免シ、遣テケル、然レバ云フ甲斐无キ下薦ノ田舍人ノ中ニモ、此ク歌讀ム者モ有ル也ケリ、努努不可蔑トナム語リ傳ヘタルトヤ、○又見ニ字拾遺和歌集、

管杖判具

〔倭名類聚抄刑三〕刑三唐令云、音知、和名管之毛度、大頭二分、小頭一分半、

〔箋注倭名類聚抄刑五〕刑五之毛止見拾遺集、孝德紀、答訓保曾幾須波衣、新撰字鏡、械訓志毛止又字

又依上條五位以上受致敬禮然則次官應是致敬者長官必五位以上須知但長官者雖無聽次官應罪人不應致敬仍得決之次官者罪人不應致敬者不得復決是即長官次官之殊別也
致敬者決其諸司判官以上及判事彈正巡察內舍人謂其監物者舉輕明頭亦不可決也大學諸博士文學等謂上學大博士等亦不在決笞之限不在決笞之限

〔令義解六制〕凡帳內資人雖有蔭位不稱本主者杖罪以下本主任決四位以下唯得決笞

〔延喜式二十〕凡違期貢調庸郡司應決罪者徒罪止杖一百杖罪以下各減一等科決但期月後十日教喻不坐

笞杖方法

〔令義解十〕凡杖皆削去節目中其決杖笞者皆受拷訊者皆背分受須數等謂服犯杖九十應拷三度每拷背分決十五之類

〔唐律疏議二十九〕疏議曰依獄官令決笞者腿臂分受決杖者背腿臂分受須數等拷訊者亦同笞以下願背腿分受者聽

〔類聚國史八十七〕天長八年十二月庚辰殺人從當麻旅子女於西市決杖六十

〔類聚三代格十六〕太政官符

應令在宮外諸司諸家掃清當路事

右太政官弘仁六年二月九日下職符僞右大臣○藤原宜奉勅如聞頃者京中諸家或穿垣引水或壅

水浸途宜仰所司咸俾修營不責引流水於家內唯禁露汙穢於牆外仍須每晝置桶通水如有符後卅日不從制諸家司并內外主典已上貶考奪祿四位五位事業及雜色番上已下不論蔭贖當處馬上而決笞五十者今有壅浸之禁无清掃之制仍須自今以後如此之類諸家司并內外主典已上移式都兵部一同前符貶考奪祿四位五位錄名奏聞无品親王家及所所院家以其別當官准諸家司亦移省貶奪其雜色番上以下不論蔭贖決笞一同前符又六位以下官人馬上勘當之者依請

弘仁十年十一月五日

〔日本書紀^{二十五}〕大化二年三月辛巳詔東國朝集使等曰集侍群卿大夫及國造伴造并諸百姓等咸可聽之以去年八月朕親誨曰莫因官勢取公私物可喫部內之食可騎部內之馬若違所誨次官以上降其爵位主典以下決其^{ツバ}笞杖入己物者倍而徵之

〔令義解^十〕凡犯罪皆於事發處官司推斷○註在京諸司人京○京及諸國人在京諸司事發者犯徒以上送刑部省^{謂先申辨官官下刑部凡在京諸司京職外皆不得斷徒已上罪故鳴呼准音狀罪當徒以上者直送刑部不得斷勾但有甲乙二人共犯一年徒乙是隨從應減一等杖一罪云云非實屬京}

斷首從未分故也杖罪以下當司決^{謂若令教讀者申其衛府統提罪人非實屬京者即如實屬京者皆衛府當日決放也}皆送刑部省

〔令義解^十〕凡犯罪皆罪郡決之^{謂決讀並同其讀物}杖罪以上郡斷定送國^{謂斷文并身俱送其兵士答}

也郡覆審訖徒杖罪及流應決杖^{謂徒杖罪及流應決杖徒杖加杖又轉戶隸戶犯流決杖之類是也}若應贖者少之類也

即決配^{謂徒杖及徵贖其刑部斷徒以上亦准此}決贖^{謂依律死罪應決杖及贖者即准流決之法刑部亦得}

此也刑部省及諸國斷流以上若除免官當者皆連寫案^{謂凡職獄官司皆連寫案及伏侍以成一案更}

也申太政官按覆理盡申奏即按覆事有不盡在外者遣使就覆^{謂依國所斷情不盡則遣專使就覆}

京者更就省覆

〔延喜式^{四十}〕凡決罰罪人者官人與使相對樓前罰之

〔延喜式^{二十九}〕凡辨官所下罪人到省付囚獄司司即易其徵纆其有行決者隨罪輕重於市若囚獄司

決之行決之日丞錄各一人引囚獄官人并物部丁赴向市司便令本司喚集市人列立司南門示衆決

之於囚獄司決者於廳前決之

〔令義解^六〕凡內外官人^{謂主典以上其番上既}有特其位階故違憲法^{謂位階者身帶官位及父祖之}

失禮觸忤之類即依^{謂主典以上其番上既}者六位以下及勳七等以下宜聽量情決笞^{謂杖罪以下量其情狀多少}

既云量情決笞^{即知或全決其罪或量減其科若其減決者亦不須依}若長官^{謂本司五位以上長官下}

笞杖法

テ國ニ送ル、又兵士ノ笞罪ハ兩教之ヲ決シ、杖罪ハ所在ノ郡ニ送ルナリ、敏達天皇ノ十四年ニ楚捷ノ事アレドモ、正シク笞杖ノ名ノ始メテ國史ニ見エタルハ、孝德天皇ノ大化二年ナリ、文武天皇ノ二年、始メテ笞法ヲ制セシコトアレドモ、是ハ特ニ逃亡奴婢ノ爲メニ設ケタルニテ、此ニ至リテ笞法ノ始メテ起リシニハアラズ、又嵯峨天皇ノ弘仁年間ニ至リテ、新ニ馬上決笞ノ法ヲ設ケタリ、

〔律疏〕笞罪五笞十 贖銅一斤 笞廿 贖銅二斤 笞三十 贖銅三斤
〔法曹至要抄上科〕一五罪事略中

案之、笞罪者、始從十、竟於五十、以十爲一等、

〔唐律疏議名例〕笞刑五

一十贖銅一斤 二十贖銅 三十贖銅 四十贖銅 五十贖銅五斤

杖刑五

六十贖銅 七十贖銅 八十贖銅 九十贖銅 一百贖銅

〔續日本紀文一武〕二年七月乙丑、以公私奴婢亡匿民間、或有容止不肯顯告、於是始制笞法、令償其功事、在別式、

〔律疏〕杖罪五杖六十 贖銅六斤 杖七十 贖銅七斤 杖八十 贖銅八斤

〔法曹至要抄上科〕一五罪事略中

案之、○中 杖罪者、始從六十、竟於一百、以十爲一等、

〔日本書紀二十九〕十一年十一月乙巳、詔曰、○中 凡犯彈犯法者、○中 當杖色乃杖一百以下、節級決之、

〔唐書刑法五十六〕太宗嘗覽明堂針灸圖、見人之五臟皆近背、針灸失所、則其害致死、歎曰、夫鑿者五刑之

輕、死者人之所重、安得犯至輕之刑而或致死、遂詔罪人無得鞭背、

古事類苑

法律部三

上編

笞杖刑

笞杖徒流死是ヲ五刑ト云フ、笞ハ十ヨリ五十ニ至ルノ五等アリ、杖ハ六十ヨリ百ニ至ルノ五等アリテ、何レモ一等ゴトニ十ヲ加フ、笞ト云ヒ杖ト云フハ、粗細ノ異ハアレドモ、其ニ木ノ細枝ノ小頭ヲ用キテ髀ヲ打ツナリ、因テ邦語ニ笞ヲホソキズバエ、杖ヲフトキズバエトモ云ヘリサレドモ多クハ笞ヲシモトト云ヒ、杖ヲツエト云ヘリ、ズバエモシモトモ木ノ細枝ヲ云ヒ、ツエハ笞杖ノ杖ノ訓ヲ假リタルナリ、唐律疏議ニ、漢時笞則用竹、今時則用楚トアリテ、杖ハ何ノ木ヲ用キルト云フ事ハ舉ゲザレドモ、是モ楚ヲ用キタルナラン、ソレハ明ニテ、笞ニ小荆杖ヲ用キ、杖ニ大荆杖ヲ用キタルニテ知ラレタリ、楚ハ牡荆ノ一名ナリ、本草啓蒙ニハ、今世ニニンジンボクト云フ者ニテ、モト和産ハナカリシヲ、享和年中漢種渡リテ後ニ、世上ニ多クナリシ由見エタリ、然レバ我國ニテ古昔笞杖ニ何ノ木ヲ用キシニカ詳ナラズ、サテ在京諸司ノ人、笞杖ノ罪ヲ犯ストキハ、當司ニテ決シ、衛府罪人ヲ捉ヘタルトキ、京ニ貫屬セル者ハ京職ニ送り、京ニ貫屬セザル者ハ、刑部省ニ送り、市ニテ決ス、又其位蔭ヲ特ミテ、故ラニ憲法ニ違フ者アレバ、六位以下、及ビ勳七等以下ノ内外ノ官人ハ、長官次官決笞シ、帳内資人ハ蔭位アリトモ、本主ニ稱ハザルトキハ杖罪以下ハ本主決ス、四位五位ノ主ハ資人ヲ決笞スルコトヲ得ルナリ、又諸國ニテハ、笞罪ハ郡ニテ決シ、杖罪以上ハ郡ニテ斷定シ

名稱

一三二

日時

同

著欽式
勅文
獄囚帳

一三三

使役法

一五六

放免役畢獄囚儀
役畢勅文

同

著欽例
臨時著欽例

一五九

古事類苑

法律部三

上編

笞杖刑

笞杖法

笞杖處斷法

笞杖方法

笞杖刑具

徒刑
著欽政

徒刑法

使役法
在糧食免課役
在役死亡

役滿

赦徒刑

古代徒刑例

加杖法

決杖法

附著欽政

一一八

一一九

一二〇

一二一

一二五

一二七

一二八

同

一二九

同

一三一

時可見之、

〔山槐記〕治承三年二月廿六日甲寅、春宮大進光長云、東宮殿上簡三界不書之、二界書之由見撰集秘記、又四月、自今月所致其沙汰也、

〔玉海〕文治五年十二月十日乙未、先日所申請之法曹事類草十四合返上院、白河後遣定長許也、

斷獄律，詔勅斷罪，臨時處分，不爲永格者，不得引爲後比。疏云：事有時宜，故人主權斷，詔勅量情處分，不爲永格者，不得引爲後比。

〔法曹至要抄上科〕一違令違式事

雜律云：違令者笞五十，別式者減一等。

〔令抄前尼〕國郡官司，聞詔律云：凡監臨之司，知所部有犯法不舉劾者，減罪人罪三等。注云：謂里長以

上，知所部之有違犯法令格式之事，不舉劾者。○下

〔明文抄二〕凡斷罪，皆須具引律令格式。正文違者笞卅。律

〔令義解十〕凡犯罪未發及已發未斷決，逢格改者，謂依律、官當、赦、贖未斷死，及笞杖未決是也。若格重聽

依犯時，若格輕聽從輕法。

〔延喜式十八〕凡改易常例，及立爲永式之事，非官符不得奉行。

〔延喜式四十〕凡新有立制宣旨者，告示檢非違使。

〔中右記〕康和四年九月十一日，參鳥羽召御前申御返事，仰云：左右可在御定，但淡路事定不足歟。次被

語仰云：中宮大夫屬正則許政事要略云：文候之由風聞，早可召取歟。我朝一本書也。又故季綱所撰之

使廳日記十一卷，令見給，且又可申此旨者。十四日，參鳥羽從內令申給事故，越後守季綱朝臣所撰

之檢非違使廳日記十一卷，可見給者，仍從院伴書持參內。

〔中右記〕長治二年二月三日，叙位次家，依召覽殿下，除目次第，前日進覽了，依○依爲家中

第一秘書，嚴命依難背進上之，但定類遼東豕歟。雖然志之所之也，神妙秘事，大略在此次第之由，所被

感仰也。此後全不可圖外努力々々。

〔台記〕久安四年四月十六日癸卯，亥刻許至和泉木津，着衣冠乘車。○註直詣春日，着禪定院尊經，今

日於舟中見類聚三代格第一，書要文目於別紙。○小今日始見也。如延喜式，漢家學隙及在旅所之

六位以下騎用螺細鞍之輩只破却其橋至于馬者非沒官之例歟則破却其車可返牛於本人

〔百練抄八〕治承三年八月卅日今日被下新制三十二箇條

〔類聚國史百七〕延曆十一年閏十一月壬午朔新彈例八十三條賜彈正裏文多不載

〔日本後紀八〕延曆十八年二月乙未贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂略

呂略中清麻呂練於庶務尤明古事撰民部省例廿卷于今傳焉

〔日本紀略續〕弘仁十二年正月壬寅定十條斷例

〔類聚符宣抄六〕撰式所

請天長格抄一部廿卷

右勘造事類之間爲尋勘年代并體例所請如件

延喜十九年八月十七日

左少史阿刀忠行
大外記葛井清明

右大臣宣宜借行者

同年九月一日

少外記御船有世奉

〔本朝文粹六〕請殊蒙天裁依勳績及儒勞敘從三位狀

右文時略中別蒙詔命撰進敘位略例一帙目錄合十一卷求文籍於公私盡心情於案牘誠雖非驚目

之文猶可爲指掌之備之儒者之忠何勤過此略下

〔律疏職制〕凡稱律令式不便於事者皆須申太政官議定奏聞若不申議輒奏改行者徒二年謂律令及

改張之議奏聞不申太政官直達所見但奏改者徒二年謂律令及即詣闕上表者不坐謂律令及

先達令式而後奏改亦徒二年謂律令及所達即重者自從重斷

〔法曹至要抄續〕一觸穢事可依時議事

任官者同知職掌或病或使有關於事然得知之日和如會議其以非與聞勿妨公務十四日群臣百寮無有嫉妬我既嫉人亦嫉我嫉妬之患不知其極所以智勝於己則不悅才優於己則嫉妬是以五百歲之後乃今遇賢千載以難得一聖其不得賢聖何以治國十五日背私向公是臣之道矣凡夫人有私必有恨有憾必非同非同則以私妨公憾起則違制害法故初章云上下和諧其亦是情歟十六日使民以時古之良典故冬月有間以可使民從春至秋農桑之節不可使民其不農何食不桑何服十七日大事不可獨斷必與衆宜論小事是輕不可必衆唯建論大事若疑有失故與衆相辨辭則得理○本文有本及拾芥抄太子傳等補正

〔扶桑略記推四〕十二年四月太子肇制憲法十七條手書奏天皇大悅群臣各寫一本讀傳天下天下大悅

〔日本紀略平城〕大同二年八月甲戌下十五條憲法

〔日本書紀天武二十九〕十一年八月壬戌朔令親王以下及諸臣各俾申法式應用之事丙寅造法令

〔日本紀略一德〕永延元年三月四日丙寅仰有司立新制十三箇條五月五日丙寅立新制五箇條

〔日本紀略一德〕長保元年十二月十三日壬戌今日新制十一箇條官符

〔權記〕長保二年五月八日甲申右衛門督藤原朝臣任公來訪申云昨以孝標○晉來傳勅命云新制官

符下知之後制法更緩衆人咸嘲云々是使應之不逮行之所致也能仰官人等可令立行者件事尤可然能可被誠仰之事也十四日庚寅申昨日所下給檢非違使廳申請新制官符中候裁定可亂行雜事三箇條文因傳勅旨云件事若下公卿可令定申歟將只可定仰歟此等案內須期參入之日而相定可左右也然而所申請之旨不被懈怠早欲定仰如何即被奏云三箇條事之中一僧侶車宿事先加制止無承引輩注名言上之日可定下一美服事紅紫兩色只禁美麗矣直衣下襲及紫褐退紅等尋常所用之色或載式條或着用作例之類不可制止三幅事所指荒涼以二尺爲其法一六位已下乘車事

十卷內第十三關此一卷秘在九條殿下不能容易啓稟之云々聞尾陽亞相源君按ニ親直卿ナリ書寫

殿下之本屢就余以請之遂達之源君聽而出之於是五十卷全備コレヲミレバ此書慶安ニ至

テ初テ足本トナリシナリ亦以尾陽亞相ノヨク書ヲ好ムデ懿訓ニ則セラレシヲ見ルベシ

〔日本書紀推古二十〕十二年正月戊戌朔始賜冠位於諸臣各有差四月戊辰皇太子〇親筆作憲法

十七條一曰以和爲貴無忤爲宗人皆有黨亦少違者是以或不顧君父乍違于隣里然上和下睦諸於

論事則事理自通何事不成二曰篤敬三寶佛也三寶者佛也則四生之終歸萬國之極宗何世何人非貴是

法人鮮尤惡能教從之其不歸三寶何以直枉三曰承詔必謀君則天之臣則地之天覆地載四時順行

萬氣得通地欲覆天則致壤耳寔以君言臣承上行下靡故承詔必慎不謹自敗四曰群卿百僚以禮爲

本其治民之本要在乎禮上不禮下不齊下無禮必有罪是以君臣有禮位次不亂百姓有禮國家自治

五曰絕養秦欲明辨訴訟其百姓之訟一日千事一日尙爾況乎累歲須治訟者得利爲常見防聽識便

有財之訟如石投水乏者之訴似水投石是以貧民則不知所由臣道亦於焉闕六曰懲惡勸善古之良

典是以無罪人善見惡必匡其誣詐者則爲覆國家之利器爲絕人民之鋒刃亦佞媚者對上則好說下

過逢下則誹謗上失其如此人皆无忠於君無仁於民是大亂之本也七曰人各有任掌宜不濫其賢哲

任官頌音則起姦者有官禍亂則繁世少生知克念作聖事無大小得人必治時無急緩遇賢自寬因此

國家永久社稷勿危故古聖王爲官以求人爲人不求官八曰群卿百僚早朝晏退公事靡盬終日難盡

是以遲朝不逮于急早退必事不盡九曰信是義本每事有信其善惡成敗要在子信君臣共信何事不

成君臣無信萬事悉敗十曰絕忿棄瞋不怒人違人皆有心心各有執彼是則我非我是則彼非我必非

聖彼必非愚共是凡夫耳是非之理誰能可定相共賢愚如環无端是以彼人難瞋還恐我失我獨難得

從衆同舉十一曰明察功過賞罰必當日者賞不在功罰不在罪執事群卿宜明賞罰十二曰國司國造

勿歛百姓國靡二君民無兩主率土兆民以王爲主所任官司皆是王臣何敢與公賦歛百姓十三曰諸

〔右文故事〕御本日記附注上

類聚三代格

同○
所藏院

六冊

駿記上ニ見ユ、書目ニ三十二卷、現存スルモノ、一三五七八十二ノ六冊ナリ、溫古堂收貯ノモノハ、又第二卷一冊アリ、總テ七冊ナリ、

〔國師日記〕慶長十九年五月六日、板伊州五月二日之狀ニ通來、○中追而狀ニ、院御所延喜式御出之由也、南光坊下府之刻、其様子口上ニ而承候へとの書中なり、十月三日、延喜式全五十卷、内三十三四貳冊不足、筈ニ入如本御城へ上ル、

〔右文故事〕御本日記續錄上

延喜式

四十九冊

現存第十三廿四ノ二冊、○中按ニ、本光日記慶長十九年十月三日ノ條ニ、延喜式全五十卷、内十三二十四二冊不足、○中ト見ユ、今鑒定スルニ、慶長十九年ノ御寫本トハ、自ラ別筆ノヤウニ見ユ、○註關卷ノ數モ本光日記ト符合スレバ、此御本ハ、十九年以前ニ書寫セシメラレシナラム、駿府記ニ據ニ、此年四月五日、此書及ビ群書治要、貞觀政要、續日本紀ヲ御前ヨリ出サレ、公家武家法度タルベキ處ヲ書拔ベキ由、五山衆ニ命ゼラル、同十三日、其書拔ヲ奉ルトアルヲ以テ考レバ、四月降サレシ御本ヲ、十月ニ至テ返上シタルト見エタリ、○中又按ニ、日記十月廿四日ノ次ノ條ニ、新寫セラルベキ書目ヲ載セテ延喜格同式トアリテ其分注ニ、十三廿四之兩卷、御前之御本不足トアリ、是此時コノ關卷ヲ訪求セラレシナルベシ、然レドモ現存御本舊ノ如ク缺卷アレバ、當時缺卷ノ處求メ得ルコト能ハザリシニヤ、又御本日記ニ、何故コノ延喜式ヲ遺シタルヤ、是ハ元和二年ノ前ニ江戸文庫へ來リシヤ、

再按ニ、慶安元年戊子新雕延喜式道春ノ跋ニ、頃年中原萃庵職忠使兒孫校讐延喜式一部五

少外記小野美實

右大臣宣件等雜書宣借給者、

同年十月三日

權少外記中臣利世奉

〔愚管抄^七〕律令は淡海公つくらる、弘仁格式は閑院左大臣冬嗣、貞觀格式は大納言氏宗、延喜格式は時平作りさして有けるをば、貞信公作りはてられけり、この外にも官曹事類とかやいふ文もあんなれども、持たる人もなきとかや、蓮華王院の寶藏にはおかれたると聞ゆれど、取出して見むといふ事だにもなし、

〔國師日記〕慶長十九年十月廿四日

日本記録可被爲、寫旨被仰出候、從一ヶ寺、徒書十人宛、南禪寺へ可被越候、○中

十月廿四日

金地院○崇傳

板倉伊賀守○勝重、所司代

天龍寺 相國寺 建仁寺 東福寺 萬壽寺○中

覺

日本後紀、續日本後紀、文德實錄、國史、類聚國史、律令、弘仁格、同式、貞觀格、同式、延喜格、同式、十三兩廿四之

右之外諸家記錄共、何も不殘被爲寫度、由候間可被成御尋候、

〔駿府政事錄〕慶長十九年十一月九日、南光坊傳長老、召奥御座敷御難談、今度諸家記錄就御寫、日本後紀、弘仁貞觀格式、類聚國史、類聚三代格等、仙洞有之乎否、以南光坊被仰遺、記錄書立、則傳長老道春輩之、南光坊院參被奏處、御所持之本可有御書寫之旨云々、十日今日從仙洞類聚三代格、六卷中

略 南光坊爲院使持參、及夜道春於御前讀之云々、

卷第廿九 刑部省 判事 因獄司

卷第卅一 宮內省

卷第卅三 大膳職下

卷第卅五 大炊寮

卷第卅七 典藥寮

卷第卅九 正親司 內膳司

卷第卅一 彈正臺

卷第卅三 春宮

卷第卅五 左右近衛府

卷第卅七 左右兵衛府

卷第卅九 兵庫寮

延長五年十二月廿六日

〔日本紀略^五〕冷泉康保四年七月九日始頒延喜式

安和元年正月十七日辛丑今日諸卿著結政座請印延喜式五十卷

〔類聚符宣抄^六〕撰式所

請代々大嘗會記文雜書并諸節會及諸祭等日記事在外記

右爲宛撰儀式之勘會所請如件

延喜十四年九月廿一日

卷第卅 大藏省 織部司

卷第卅二 大膳職上

卷第卅四 木工寮

卷第卅六 主殿寮

卷第卅八 掃部寮

卷第卅 造酒州 主水司 采女司

卷第卅二 左右京職 東西市司

卷第卅四 騎解由使

卷第卅六 左右衛門府

卷第卅八 左右馬寮

卷第五十 雜式

右史生中臣國繼

式部少錄葛井清明

右大史御船

官曹摭文記於臺閣究本尋源編新隸舊至如祭祀宴饗之禮朝會蕃客之儀大小流例內外常典事存儀式不更載斯我后留情庶官屬想衆務論王道之興衰驗時俗之厚薄屈太陽之洪暉照高間於蜚爍枉溟渤之巨浪酌下言於牛溲有利於人可舉行者有害於物可革去者悉以制置垂範來裔凡起弘仁舊式至延喜新定前後綴叙筆削甫就總編五十卷號曰延喜式庶使百川之流皆歸於海萬目之紀俱理於網臣等勤非簡要道謝清通雖猥銜慈綸陶淳風於甲令然恐僭嚴制致肅霜於秋官謹序

延喜式目錄

- | | | | | | |
|------|-------|------|------|------|-------|
| 卷第一 | 神祇一 | 四時祭上 | 卷第二 | 神祇二 | 四時祭下 |
| 卷第三 | 神祇三 | 臨時祭 | 卷第四 | 神祇四 | 伊勢大神宮 |
| 卷第五 | 神祇五 | 齋宮祭 | 卷第六 | 神祇六 | 齋院司 |
| 卷第七 | 神祇七 | 踐祚 | 卷第八 | 神祇八 | 祝詞 |
| 卷第九 | 神祇九 | 神名帳上 | 卷第十 | 神祇十 | 神名帳下 |
| 卷第十一 | 太政官 | | 卷第十二 | 中務省 | 內記 |
| 卷第十三 | 中宮藏書寮 | 大舍人寮 | 卷第十四 | 縫殿寮 | 典鑑 |
| 卷第十五 | 內藏寮 | | 卷第十六 | 陰陽寮 | |
| 卷第十七 | 匠寮 | | 卷第十八 | 式部省上 | |
| 卷第十九 | 式部省下 | | 卷第廿 | 大學寮 | |
| 卷第廿一 | 治部省 | 雅樂寮 | 卷第廿二 | 民部省上 | |
| 卷第廿三 | 民部省下 | 諸陰寮 | 卷第廿四 | 主計寮上 | |
| 卷第廿五 | 主計寮下 | | 卷第廿六 | 主稅寮上 | |
| 卷第廿七 | 主稅寮下 | | 卷第廿八 | 兵部省 | 軍人司 |

大納言正三位兼行民部卿藤原朝臣清貫

從四位上行神祇伯臣大中臣朝臣安則

從五位上行勘解由次官兼大外記紀伊權介臣伴宿禰久永

外從五位下行左大史臣阿刀宿禰忠行等上表

〔延喜式〕蓋聞著精黃神之聖、觀人文以化天下、伊川媽水之靈、則乾象而垂法度、故百官以理、自有高枕之君、萬民以治、乃見繫壤之叟、弘仁聖主、德照龜圖、化隆鳥運、君唱臣和、風雲之契斯得、上安下樂、魚水之符克諧、爰降綸言、作諸司式冊卷、所謂國之權衡、民之轡策者也、貞觀天朝亦降睿旨、商摧古今、撰式廿卷、新舊兩存、本枝相得、然猶後式攸錄、事多漏略、今上陛下體元履正、御斗提衡、以爲貞觀十二年以來、炎涼已久、文案差積、加以前後之式、章程既同、卷軸斯異、諸司觸事、檢閱多歧、因茲延喜五年秋八月詔、左大臣從二位兼行左近衛大將藤原朝臣時平、遣從三位守大納言兼行右近衛大將春宮大夫陸奥出羽按察使藤原朝臣定國、中納言從三位兼行民部卿藤原朝臣有穗、參議大藏卿正四位下兼行播磨權守平朝臣惟範、參議左大辨從四位上兼行讚岐權守紀朝臣長谷雄、從四位下行式部大輔兼春宮亮備前守藤原朝臣菅根、從四位下行文章博士兼備中權守三善朝臣清行、民部大輔正五位下兼行勘解由次官但馬守大藏朝臣善行、權左少辨正五位下兼行勘解由次官藤原朝臣道明、從五位上行神祇大副臣大中臣朝臣安則、從五位下行大內記兼周防介三統宿禰理平、外從五位下行明法博士惟宗朝臣善經等、准據開元永徽式例、併省兩式、削成一部、撰定未畢之間、公卿大夫頻年薨卒、仍同十二年春二月、勅從三位守大納言兼右近衛大將行春宮大夫臣藤原朝臣忠平、從四位下守右大辨兼勘解由長官橘朝臣澄清等、共隨先業、促其裁成、至延長三年秋八月、重遣大納言正三位兼行民部卿臣藤原朝臣清貫、與前奉詔者大中臣朝臣安則、及從五位上行勘解由次官兼大外記臣伴宿禰久永、外從五位下行左大史臣阿刀宿禰忠行等、同催撰輯、責其成功、爰蒙明制、參詳斟酌、搜符案於

式事間戶部來者仍止、十一月六日、定式、十三日、定式、十四日、定式、十五日、定式、新作式、今日
定了、但有可相定事一兩、

三年三月廿五日、定式、廿六日、定式、八月卅日、新式付久永宿禰送民部卿○藤原清實、○藤原許、九月十日、
定式、十一日、定式、十八日、式事定行、十月八日、定式、十一日、定式事、十二日、定式事、十一
月廿三日、定式、閏十二月一日、戶部有定式事、

〔日本紀略一〕延長五年十一月廿六日癸酉、左大臣藤原朝臣○忠平等表進延喜格十二卷、延喜式五
十卷、

〔延喜式〕上延喜格式表

臣忠平等言、竊以天覆地載、聖帝則之育民、陰慘陽舒、明王象之馭俗、雖則朴畫彫至、馳驚之遠、古今不
同、然而立法垂規、勸誡之道、夷隆一致、嵯峨太上、天皇化周、天壤澤覃、淵泉制格式之明文、貽簡冊於昆
季、六典詳其綱紀、百寮無所依違、斯固納軌之楷模、經國之准的者也、貞觀先帝繼受寶命、誕膺洪基、教
百王之澆醜、導萬民於富壽、意章所以疊矩、凡例由其重規、暨乎年代稍遐、質文遞起、莫不變通之道、南
北分岐、號令之流、浸深別派、皇帝陛下、道四三皇、德六五帝、溫甘雨以遍、普天之澤、肩淳風而拂、率土之
塵、重賞輕刑、雲騰之翮、忘驚省、薄賦野鹿之群、不驚然、猶恐惠化未周、頑民陷法、遂降沖貞、彌稽隄防、
增損往策之科條、裨補前修之殘缺、臣等謹奉綸命、忽履薄冰、於是搜古典於周室、擇舊儀於漢家、取捨
弘仁貞觀之弛張、因修永徽開元之沿革、勅成二部名曰延喜格式、但格十二卷、筆削早成、往年奏御式
五十卷、撰集纔畢、今日上聞、臣等職非老彭、勤在祖逸、聊窺其賡理、事達彼膏肓、伏願洪慈、曲降照鑒、特
垂允容、謹詣闕拜表、以聞、臣忠平等誠惶誠恐頓首頓首謹言、

延長五年十二月一〇二月廿六日

左大臣正二位兼行左近衛大將皇太子傳臣藤原朝臣忠平

今膺千年之期運承百王之澆醜時風加而茂草靡震雷動而蟄虫驚將欲禁淫浪以隄防駭竄以籌策流淳化於比屋之封反薄弊於大庭之俗而制格以來歷年漸久或數代之中弛張屢變或一事之上抑揚遞殊或同本而異末或分源而會流斯乃雖協其時宜匪故相反而綜其事迹無所適從爰詔左大臣正二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣時平故從三位守大納言兼右近衛大將行春宮大夫陸奥出羽按察使臣藤原朝臣定國中納言從三位兼行民部卿春宮權大夫臣藤原朝臣有禮參議正四位下行左兵衛督臣平朝臣惟範參議左大辨從四位上兼行讚岐守臣紀朝臣長谷雄從四位上行式部大輔兼侍從春宮亮備前守臣藤原朝臣管根左京大夫從四位下臣藤原朝臣典範從四位下行文章博士兼備中權守臣三善朝臣清行從四位下行民部大輔臣大藏朝臣善行正五位下守右中辨兼行勸解由次官臣藤原朝臣道明從五位下行大內記兼周防權介臣三統宿禰理平外從五位下守大判事兼行明法博士備後權介臣惟宗朝臣善經正六位下守右大史臣善道朝臣有行正六位上行兵部少錄臣弘世連諸統等憲章前條綜緝此典起自貞觀十一年至于延喜七年其間詔勅官符搜抄撰集除其滋章刪其煩雜若祖述先格事有增損者據而無遺若改張恒規理無補益者廢而不採以官分隸以類相從皆依舊目無加新意亦其條貫糕錯難爲區分者准之雜令便號羅格勒爲十卷曰延喜格又有理非大典政出權時雖不足爲龍鼎之銘而猶可恨難肋之弄如此之類別爲延喜臨時格二卷合爲十有二卷依歲紀而取象法星次而分篇率由前模不敢殊製臣等專存溫故之意願立改弊之文新舊分條縱有吹萬之響先後同法庶成畫一之類但冲旨既邇愚管難單招囑同局之珍懷類類遠家之獻謹序

〔日本紀略一四〕延喜八年十二月廿七日被下可施行延喜格之宜旨 九年十月廿三日今日捺印延喜格

〔貞信公記〕延長二年九月十二日定式 十六日定式事 廿五日定式 十月六日定式 十二日定

位下行大學大屬臣山田宿禰弘宗等尙推古今折衷文武詳其流變補彼舊章設有取捨之宜未知其辨即請雖黃於上台之口中更忝天聽式終筆削然史舊式卷軸前修久爲代典於後以委夷斟益且恐似不奉由故准據其誤謬遺漏及變古宜今者別錄爲二十卷名曰貞觀式方冀新舊兩存本枝相待不掩美於前覺將垂裕於後昆行之可久而無窮猶兩儀之貞觀歷千古而景式至若朝會宴饗蕃客祭禮諸儀注等文繁事碎不載於斯然厥辭意紛錯式妨履行詳加討論用從修正欲其與式參酌雙流於世臣等才非博物業謝通機徒感江籙之從風却慙玉繩之垂象謹序○本文有誤脫據三本及類聚國史補正

〔類聚國史〕文百四十七

貞觀十三年十月廿二日甲子勅頒貞觀式○又見享祿本

〔三代實錄〕三十二元慶元年十一月三日庚子參議從三位行左衛門督大江朝臣音人薨○中有勅與

參議刑部卿菅原朝臣是善撰定貞觀格式其上表并式序皆是音人之辭也

〔三代實錄〕四十九仁和二年五月廿八日丙午前周防守從五位上紀朝臣安雄卒○中貞觀九年授從

五位下轉助教此時有勅擇有識公卿大夫撰格式安雄預之

〔日本紀略〕一延喜元年八月十九日戊戌左大臣○藤原等上延喜格十卷五年十一月某日施行

延喜格

〔類聚三代格〕延喜格序

易曰天垂象聖人則之又曰大人者與天地合其德乃知陰陽寒溫天道所以成歲政令寬猛人君所以導民隨時立教或革或沿觀風制法世輕世重然則金科玉條不可用之於庖厚之俗草經艾耨不能施之於修野之人若不達變通之道則何辨理亂之方者乎我朝家道出混沌境同華胥無爲之功未假號令不言之化豈用章條於是朴往彫來步盡驟至前帝後王雖俱存一面之綱重規疊矩不能廢三章之科故教而不誅制甲令於先誅而不怒張丙律○近者弘仁格十卷貞觀格十二卷亦是聖主降其輪言賢臣施其筆削搜舊章於臺閣擇新制於詔命察此民情適彼俗化垂納軌之弘典立經國之大規方

勅後符、概皆據古之前模、非爲今之新意、唯一部之內、事有兩存、頗涉重構、不以爲例、勘解由使所奏、新定內外官交替式、所載數事、亦復准之前例、不煩取捨、臣等雖非明于溫故博於前聞、猶欲令之必行、禁之必止、賞一人而海內欣、罰一人而天下懼、謹因詔撰貞觀格十卷奏聞、若理輕作格事、不足爲儀、專乘之如遺、兼取之似碎、更撰爲兩卷、同以奏上、准開元留司格、號貞觀臨時格、并一帙十二卷、象十有二月以成歲、但前格存而如舊、後典續而增新、覺古知今、斯焉在矣、猶恐庸心所集、有違戾於宸機、管見攸裁、無協應於敕旨、典章不能自舉、待敕令而舉之、敕令不能自行、待誠信而行之、斯文不墜、百代可知、謹序

○又見三代實錄、本朝文粹、

〔三代實錄〕

清和

貞觀十三年八月廿五日己亥、是日撰貞觀式畢、正三位守右大臣兼行皇太子傅藤原

朝臣氏宗、參議民部卿正四位下兼行春宮大夫近江守南淵朝臣年名、參議正四位下行左大辨兼勘解由長官大江朝臣音人、從四位上行式部大輔菅原朝臣是善、勘解由次官從五位下兼行下野介紀朝臣安雄等、詣闕奉進其都序曰、昔唐虞膺靈、稽古建官、變指龍言、弼予弘化、自後司存、倍百職事、滋事流例、委波政津、難涉雖復、俊德承風、俱才莅事、不緣溫故、難得允釐、夫然、舊儀彰於漢代、要錄著于梁時、事之不以可已、蓋其在此乎、粵若弘仁聖帝、風超踐翼、化軼滋源、憲章日新、文物咸秩、爰降冲旨、以修撰作諸司式四十卷、雖機杼已遠、衣被無窮、然自茲而觀、有不盡矣、况復帝裁彌久、風猷積億、譬夫調琴瑟、有時當改張焉、伏惟今上陛下、函元孕象、迪哲重光、臨衡室而凝神、御法宮而軫慮、思夫所以銜策無闕、璣衡克齊、除梗澁於政途、隆輪奐於堂構、近故右大臣贈正一位藤原朝臣良相、知聖旨欲有興作、與太政大臣從一位藤原朝臣良房定議、奏可撰格式之狀、詔令右大臣正三位兼行皇太子傅臣藤原朝臣氏宗、參議民部卿正四位下兼行春宮大夫近江守臣南淵朝臣年名、參議正四位下行左大辨兼勘解由長官臣大江朝臣音人、從四位上行式部大輔臣菅原朝臣是善、與勘解由次官從五位下兼行下野介臣紀朝臣安雄、右大史正六位上臣大春日朝臣安永、正六位上行彈正少忠臣布瑠宿禰道永、正六

〔三代實錄〕

清和十六

貞觀十一年四月十三日庚子，撰貞觀格畢，大納言正三位兼行皇太子傅藤原朝臣氏

宗、參議民部卿正四位下兼行春宮大夫伊豫守南淵朝臣年名、參議正四位下行左大辨大江朝臣普

人從四位上守刑部卿菅原朝臣是善、散位從五位下上毛野朝臣永世、勘解由次官從五位下紀朝臣

安雄等，詣闕奉進。

九月七日辛酉，新撰貞觀格十二卷，頒行內外。

○又見享祿本類聚三代格。

〔類聚三代格〕貞觀格序

律賦

○斷

云：斷罪須引律令格式正文令賦。

○云：

犯罪未斷決，達格改者，然則格者律令之條流政教之親軌，

君與百姓共之者也。君不可失之於上，臣不可違之於下，出言而千里斯應，含和而萬類曲成，時險則峻

法以取平，時泰則寬，網以將化，我國家遐邇承德，天下無虞，風教大同，車書共道，而未能符破重施無

事於群情，設象除刑，馳不犯於比屋，故擢者弘仁十一年四月廿一日，施行格十卷，此乃公卿百官奉詔

簡舊史之凡要，抄新制之大綱，推民意而分規，量時宜而立範，不刪之典，遵行眇焉，仍舊之圖，蹤跡斯在，

聖上不出戶而知天下，不因教而辨物情，以爲虞夏共有其國，刑德斯殊，秦漢不易其民，弛張非一，俗化

之本理有固然，蓋取義於隨時，匪欲期於相反，如今時歷五代年及六旬，文質暗遷，沿革自至，詔草疊於

臺閣，文案溢於繡囊，非所以法止滋章，令除煩變，即詔故右大臣贈正一位藤原朝臣良相等，令因循舊

格，綜緝新符，未及成功，歲月遷往，大納言正三位兼行皇太子傅臣藤原朝臣氏宗等，前與右大臣共承

冲旨，詳悟深規，仍與參議民部卿正四位下兼行春宮大夫伊豫守臣南淵朝臣年名、參議正四位下行

左大辨臣大江朝臣普人從四位上守刑部卿臣菅原朝臣是善、散位從五位下臣上毛野朝臣永世、勘

解由次官從五位下臣紀朝臣安雄、大外記正六位上臣南淵朝臣興世、正六位上行左少史臣大春日

朝臣安永、正六位上行彈正少忠臣布瑠宿禰道永、正六位下行大學大屬臣山田宿禰弘宗等，上起弘

仁十載之明年，下至貞觀十年之晚節，擇成規於州郡，搜故實於官曹，事與先格異者，舉而取之，理與舊

制同者，推而棄之，凡格者，蓋以立意爲宗，不以能文爲本，故省其繁麗之文，增其精微之典，隨官分類，先

等元與左大臣贈正一位兼行左近衛大將藤原朝臣冬嗣正三位中納言藤原朝臣葛野麻呂參議從三位行近江守秋篠朝臣安人參議從四位下橘朝臣常主等四臣共稟衷詔忝預編修爾來四臣相尋薨卒其存者唯臣等兩人而已以夫鉛槧已下研覈惟究謹詣闕奉進伏望宣布中外盡使遵行制可

十一月丁亥頒行神祇八省彈正左右京奉宮勘解由六衛左右兵庫格式

〔續日本後紀仁明〕承和七年四月丁卯頒行諸司百官改正遺漏批繆格式

〔享祿本類聚三代格十七〕太政官符

頒行改正遺漏批繆格式事

右檢案內太政官去天長七年閏十二月七日下午諸司符僞太政官去十一月十七日符僞被左近衛大將從三位兼守大納言清原真人夏野宣僞奉勅律令之與蓋始大寶懲肅既具勸誡亦頒然律令之與上舉大綱至於體履相須事猶闕如論之政術固有未周因茲修格式以備闕遺宜施之內外盡使遵行者若有與格式相批繆及遺漏者亦宜具錄申者被中納言從三位兼行中務卿直世王宣僞奉勅修撰之後改張諸事宜來年二月以前悉令申宛○宛當作訖批繆遺漏等亦准此如有疎略及過期者依法科處不曾寬宥者今被右大臣宣僞奉勅採拾新修以補闕漏討覈故實以正批繆筆削功成撰錄周備宜早速施行

承和七年四月廿三日

〔類聚符宣抄六〕被中納言宣僞勘解由使只有律令都無格式至辨諸務多攸疑滯宣格式草案授於彼使所者

承和七年七月廿三日

〔類聚符宣抄六〕右大臣宣外記公文隨撰格式所請宛行之者

貞觀五年五月廿七日

大外記清內御圖奉

少外記善淵愛成奉

呂參議從三位行近江守臣秋篠朝臣安人參議從四位上行春宮大夫兼左兵衛督式部大輔臣藤原朝臣三守從五位下守左近衛少將臣橘朝臣常主從五位下守大判事兼行播磨大掾臣物部中原宿禰敏久等上遵敕旨下考時宜探官府之故事擬諸曹之遺例商略今古審察用捨以類相從分隸諸司其隨時制宜已經奉勅者即載本文別編爲格或雖非奉勅事旨稍大者奏加奉勅因而取焉若屢有改張向背各異者略前存後以省重出自此外司存常事或可裨法令或堪爲永例者隨狀增損總入於式若事類班雜不得指附者各爲雜篇次之於末其諸司所行彼此參差或因循雖久不便於事若斯之流難以取則具錄其狀伏聽天裁至如米鹽魚肉兩數紛紜及鋪設雜器功程多少等類事既輕碎臣等商量務從折中不煩上聞其朝會之禮蕃客之儀頃年之間隨宜改易至於有事例具存記文今之所撰且以略諸又交替式者延曆年中勘解由使撰定奏聞遵行已久仍舊而存不加取捨但年代浸遠京都屢遷諸司文案多或墮失雖加探索猶有未備上起大寶元年下迄弘仁十年都爲式冊卷格十卷辭簡而事詳文約而旨暢庶使覽之者易曉施之者易行布之象魏與天地而無窮銘之景鐘將金石而不朽臣等學非稽古才闕當今猥稟明詔敢事銓緝雖罄庸淺恐多錯批凡厥篇目列之如別

○又見三本朝文粹

○按ズルニ弘仁格ハ貞觀格ノ序ニ據ルニ弘仁十一年四月二十一日ニ施行セシナリ

〔類聚國史百四十七〕天長七年十月丁未大納言正三位兼行彈正尹臣藤原朝臣三守等言臣聞劉安有云法者天下之準繩而人主之度量信哉斯言也然則通三建極之后得一居貞之君莫不敷德禮以宣規設法令而裁化世輕世重或沿或革銜勅人倫隄防品彙者也臣竊按昔我文武天皇大寶元年甫制律令施行天下沮勸既頭彝倫式序但律令之典止舉本綱至於體履相須式條猶缺論之政術因有未周所以先朝廷曆年中降綸言於卿相揮折簡於英髦厥後時年漸遷舊例屢改討論取捨勸歷年所至於弘仁乃以絕筆於是分置群官更令摘續欲成之不日而歲月其除伏惟皇帝陛下德參丕偉道契無爲應千載而撰宸區撫萬物而納壽域所謂天地交泰頤符成臻功成作樂之時治定制禮之日也臣

天長十年二月十九日

正三位守右大臣兼行左近衛大將臣清原真人夏野

權中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫臣藤原朝臣吉野

從四位下行右近衛少將兼備前權守臣紀朝臣長江

從五位下行大內記臣春澄宿禰善繩

〔範國朝臣記〕長元九年六月廿五日、依召參殿、令返上內裏式本、御料令書寫也

〔倭名類聚抄地〕柚 功程式云、○中略功程式者、修理筭師山田福吉等、弘仁十四年所撰上也、

〔類聚三代格一〕格式弘仁序

蓋聞、律以懲肅爲宗、令以勸誠爲本、格則量時立制、式則補闕拾遺、四者相須、足以垂範、譬猶寒暑遞以成歲、昏旦迭而育物、有沿有革、或輕或重、憲治國之權衡、信馭民之轡策者也、古者世質時素、法令未彰、無爲而治、不肅而化、暨乎推古天皇十二年、上宮太子親作憲法十七箇條、國家制法、自茲始焉、降至天智天皇元年、制令廿二卷、世人所謂近江朝廷之令也、爰逮文武天皇大寶元年、贈太政大臣正一位藤原朝臣不比等、奉勅撰律六卷、令十一卷、養老二年、復同大臣不比等、奉勅更撰律令、各爲十卷、今行於世、律令是也、故去天平勝寶九歲五月廿日、勅書頒頒、年遷入依格結隨人々高位、不便任官、自今以後、宜依新令、去養老年中、朕外祖故太政大臣、奉勅刊修律令、宣仰所司、早令施行、先帝德合、藻載明齊、照臨四海、有截八紘、無事然而、凝情政體、聘想治術、以爲律令是爲從政之本、格式乃爲守職之要、方今雖律令頻經刊修、而格式未加編緝、稽之政道、尙有所闕、乃詔贈從一位行左大臣藤原朝臣內麻呂、故參議從三位行常陸守菅野朝臣真道等、始令撰定草創、未成、遭時遇密、寢而不爲、天朝以聖承璽、責明繼明、敷景化於寰中、暢仁風於海外、然而、顧先緒之未遂、切堂構於宸襟、爰降諭言、尋令修撰、申詔大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使臣藤原朝臣冬嗣、故正三位行中納言臣藤原朝臣葛野麻

大納言正三位兼行民部卿藤原朝臣清貫

〔內裏式〕蓋儀注之興其所由來久矣所以指曉於與人納于軌物者也皇上雖以斟酌節文未具覽之者多岐行之者滋惑乃詔正三位守右大臣兼行左近衛大將臣藤原朝臣冬嗣中納言從三位兼行左衛門督陸奥出羽按察使臣良峯朝臣安世權中納言從三位兼行春宮大夫左兵衛督臣藤原朝臣三守從四位下行中務大輔臣朝野宿禰鹿取皇后宮大夫從四位下兼行近江守臣小野朝臣峯守文章博士從五位下兼行大內記臣桑原公腹赤從五位下行大內記臣滋野宿禰貞主等令修定焉於是抄並新式採綴舊章類要修輯口斯朝憲取捨之宜斷於天旨起于元正訖于季冬所常履行及臨時軍國諸大小事以類區分勒成三卷庶其升降之序隆殺之儀披文即曉臨事靡滯各修厥職守而弗怠衆矣

一本問書義近於此○中作問

弘仁十二年正月卅日

正三位守右大臣兼行左近衛大將臣藤原朝臣冬嗣

中納言從三位兼行左衛門督陸奥出羽按察使臣良峯朝臣安世

權中納言從三位兼行春宮大夫左兵衛督臣藤原朝臣三守

從四位下行中務大輔臣朝野宿禰鹿取

皇后宮大夫從四位下兼行近江守臣小野朝臣峯守

文章博士從五位下兼行大內記臣桑原公腹赤

從五位下行大內記臣滋野宿禰貞主

內裏式雖指曉之闕往日既定而折旋之儀頃年頗革或有節會供張出入門闕徒記舊時未著新變者聖上鑒其踳雜斯盡會通斟酌隨宜取捨先斷通詔臣等四人令綴緝焉謹稟衷旨詳加增損刊繆補虧繕寫甫就

大同抄一部 十六卷

在外記曹司

右謹檢案內使司依太政官去延喜十一年五月四日符旨修撰交替式而件式所載官符其文多疑案據成煩如今彼本官符等皆在件書中望請被下宜旨暫信行正其紕繆將遂撰定但事畢之後卽將返納

延喜十四年九月十日

主典秦貞興

判官藤原茂幹

右大臣宣件等之書宜隨彼使借申借行者

同年十月十六日

少外記大藏具明

〔内外官交替式〕勘解由使謹奏

內外官交替式事

右交替式者延曆□□□□中所撰其文咸出律令□□□□□□□□□□所以壹吏耳目斷官諍訟也至于貞觀九年續亦抄內後事往々加案解釋疑義改號新定內外官交替式今之所行則斯文焉爾降時更四代歲踰五旬或弛乍張隨事多變加以伏見先後所撰抄略數書混成一部名雖稱式實是似格況一事重出兩案並存又其撰修頗有遺漏披閱之處暗移圭陰行用之間互起管見仍叙由緒先奉處分而後搜集遺文□勒新制准之諸司式每條立凡例約成一軸名曰內外官交替式使等學滯一隅才疎三尺叨備司存敢事筆削還恐丹寸之攸不及猶使黃中而有未通辱以上聞伏俟聖斷謹奏

延喜廿一年正月廿五日

參議左大辨從四位上兼行長官播磨權守橘朝臣澄清

從五位上行次官兼丹波介藤原朝臣久貞

次官從五位下藤原朝臣諸蔭

檢校

中納言從三位兼行民部卿攝津守藤原朝臣雄友
中納言兼近衛大將從三位行造宮大夫藤原朝臣內麻呂

右大臣王○神宣奉勅依奏、

〔三代實錄十五〕貞觀十年閏十二月廿日己酉新定內外交替式二卷撰修甫就勅頒天下並令遵行、
見享祿本類聚三代格

〔類聚三代格〕貞觀格序

勘解由使所奏新定內外官交替式所載數事亦復准之前例不煩取捨、
○又見三實錄

〔類聚符宣抄六〕勘解由使

請被下宣旨借行天長格抄一部卅卷事、
在外記曹司

右謹檢案內使司依太政官去年五月四日符旨修撰交替式而件式所載官符其文多疑案據成煩如今彼本官符等皆在件書中望請被下宣旨暫借行正其紕繆將遂撰定但事畢之後即將返納、

延喜十二年六月九日

主典英保時幹

判官壹志作範

大納言藤原朝臣忠平宣宣依彼使借申借行件格抄者

同年八月廿三日

少外記伴久永奉

〔類聚符宣抄六〕勘解由使

請被下宣旨借行雜書事

官曹事類一部卅卷

〔藤原家傳〕

武智麻呂

二年○大

正月遷中判事公莅官聽事公平無私察言觀色不失其實決疑平獄必

加審慎雖有大小判事其官方无准式文案錯亂問辨不允於是讞事前後奏定條式大寶元年已前爲

法外已後爲法內自茲已後諸訴訟者內決已事不敢公庭

〔續日本紀〕元七正養老元年五月辛酉以大計帳四季帳六年見丁帳青苗簿輪租帳等式頒下於七道諸

國

〔交替式〕勸解由使謹奏

撰定諸國司交替式事○中略

以前從政之方法令爲本守職之道格式爲先是以行違故實向途而迷事乖舊章面墻而礙也方今或人私抄古來勸書官符省例問答等名曰交替式者見有數卷未審誰撰而見聞互異趣捨不同事或既停率爾難悟以此爲政所失寔多國史之迷莫不由矣伏惟聖朝仁逾解網恩跨泣辜明黜陟於群僚顯哀貶於庶類殊置勸解由使令諸冤屈之徒開憤懣於此庭辨是非於正理也然使臣等聽訟之聰遙謝往烈決爭之智寔開當年奉綸旨以屏營荷重任而戰越雖盡忠誠於愚管還懼與奪之有違焉故今撰集法令格式應預交替之事者以類相隨令易披閱但其中承前之格與法抵牾指歸未明并官省處分未經奏畫相承爲例如此之類實難推依是以至有所論殊甘今案以決古今之疑滯矣勒成一軸名曰撰定交替式伏望仰鑒內七道朝集使各寫一本藏之府庫庶令諸國遵奉以不失使司勸據而無疑謹錄事狀伏聽天裁謹以申聞謹奏

延曆廿二年二月廿五日

使正四位下行左大辨兼左衛士督皇太子學士但馬守菅野朝臣真道

次官大學頭從五位上兼行式部少輔和氣朝臣廣世

次官從五位下守大判事兼行造宮大進越前大掾讚岐公千繼

被_二思召_一候_二仰和點_一被_二仰付候_一是もいまだ出來不仕候由に候。○中

十月廿四日

室新助

青地藏人様

格式

〔令義解_二僧尼_一〕凡僧尼有犯准格律。合徒年以上者還俗。許以告牒當徒一年。謂格者隨時詔勅也

〔續日本紀_六〕和銅六年四月戊申。頒下新格。并權衡度量於天下諸國。

〔續日本紀_二孝德_一〕天平寶字元年五月丁卯。勅曰。頃年還人依格結階。人人位高不便任官。

〔日本書紀_二天武_一〕十九年四月辛丑。立禁式。九十二條。因以詔之曰。親王以下至于庶民。諸所服用。金銀珠玉。紫錦繡綾。及氈褥冠帶。并種種雜色之類。服用各有差。辭具有詔書。

〔續日本紀_一文武〕二年七月乙丑。以公私奴婢亡匿民間。或有容止不肯顯告。於是始制答法。令償其功事在別式。

〔令義解_二神祇_一〕仲春祈年祭。○中前件諸祭。供神調度及禮儀齋日。皆依別式。

〔令義解_三田_一〕凡外官新至任者。比及秋收。依式給糧。謂秋前至任。年實未收。故比及秋收量給公額。

〔令義解_六儀制_一〕凡皇后皇太子以下率土之內。○註於天皇太上天皇上表同稱臣妾名對揚異名。下面在君所稱。揚自名者。唯稱某甲。不謂臣某。其太皇太后。皇太后。皇太子。相稱之辭。不見令條。待式處分之。

〔續日本紀_二淳仁_一〕天平寶字三年六月丙辰。正三位中納言兼文部卿神祇伯勳十二等石川朝臣年足

奏曰。臣聞治官之本。要據律令爲政之宗。則須格式。○式字補。金澤本補。方今科條之禁。雖著篇簡別式之文。未有

制作。伏乞作別式。與律令並行。

〔續日本紀_二淳仁_一〕天平寶字六年九月乙巳。御史大夫正三位兼文部卿神祇伯勳十二等石河朝臣年

足薨。時年七十五。○中略。寶字二年授正三位。轉御史大夫。時勅公卿各言意見。仍上便宜作別式二十卷。

各以其政繫於本司。雖未施行。頗有據用焉。

閣了前三河守清原、コレ清原教隆其人ナリ、卷第六ノ末ニ文應元年八月十六日、於鶴岡八幡宮放生會棚所奉、授越州專城尊閣了、凡以見物爲次、以讀書爲先、給好學之志、有所不暇、蓋以此謂而已、直講清原判、コレ教隆ノ子俊隆其人ナリ、東鑑ニ、文應元年八月十五日、鶴岡放生會、將軍家無御參宮、武州爲御使被神拜、十六日、將軍家雖無御出馬場等之儀、棧敷如例ト見エタルハ、コノトキノコトナリ、

御文庫古文書ノ中、松平伊豆守信綱朝臣ヨリ御書物奉行ヘノ書帖ニ、律二卷、令七卷、集解十卷、是は從仙洞御かり被成、御寫被成、度由ニ付請取御前江上申候トアリ、按ニ三雲系圖ニ、寛永十三年、仙洞より律令の書を將軍家に求め給ふ、是によりて松平伊豆守信綱、鈞命をうけたまはり、同十月鎌倉圓覺寺の西堂、其外僧共廿餘人に仰せて、江戸海禪寺に於て、廿一日之間に是を寫し、民部卿法印道春、刑部卿法印永喜是を校す、此時星合伊左衛門具敷、關兵三郎正成、西尾嘉右衛門正信、三雲内記成賢等あづかれり云々トアルハ、此本ニテ寫サレシナルベシ、

〔國師日記〕慶長十九年十一月十七日、從南光坊○天狀來、善行使ニ而院ノ令集解冊二卷持せ、此方ニ類本有之故、則返遣候也、返書遣ス、案在左、

〔尊書忝存候、令集解冊二卷、從院御所樣被仰出持せ被下候、是は此方に類本御座候間、則返遣す、從最前集解は入不申由に候、是は集解に御座候間、返遣申候、尙善行江申渡候、恐惶謹言、

十一月十七日

金地院○崇

南光坊大僧正

〔鳩巢手簡義〕享保六年

人見又兵衛、林又右衛門、人見七郎右衛門三人江者、令義解、令集解、令義解ハ板ニ有之候、集解者板無之候、定而板行可被仰付、

〔右文故事〕御本日記附注上

律御本

二卷

一箱

令内集解十卷

十七卷

按ニ書目ニ律十卷令義解十卷集解三十卷ト見ユ此御本闕アリ律ハ名例賊盜ノ二律僅ニ存セリ世ナホ職制衛禁令義解ハ第一官位令職員第二戸令神祇令僧第三田令賦役令學令律ヲツタフ第四選叙令繼嗣令考課令第五宮衛令軍防令第六儀制令衣服令營繕令第七公式令第八缺版收令倉庫令醫疾令第九關市令假寧令喪葬令第十獄令雜令以上合テ七卷トナス集解ハ現存第一官位第二ヨリ六マデ職員第七神祇僧尼第八僧尼第九ノ十戸令ノ十卷アリ餘ハミナ缺タリ○中略

律令トモ舊志ニ金澤本トアリ然レドモ今謹テ鑑定スルニ金澤本ヲ摹寫シテ料紙標裝トモ原書ノゴトクニ製造セシモノナリ其證ハ奥書ミナ同筆ニシテ越後守三河守等ガ親筆ニアラズ是一ツ花押ヲ手書セズシテ皆判トノミ書セリ是二ツ金澤文庫ノ黒印ヲ捺セズ是三ツ凡金澤卷本ハ紺紙ノ標襖木軸ナリコレハ萌黃金緞ノ標紙ニシテ紫檀軸ナリ是四ツ此四證ヲ得テソノ眞本ナラザルヲ明スニ足レリ是關白秀次ヨリ傳來ノ者ナ將タ他本ナルカ今知ベカラズコニ御本ト云ハ前ノ新寫ノ本ニハアラズシテ前々ヨリノ御藏本ナリト云ヘルコトナルベシ前ニハ冊ヲ以テ記シ此ニハ卷トアルモノハ卷本ナレバナリ律令共ニ每卷奥書アリ又裏書アリ律ノ卷第一ノ末ニ此書先年受教隆眞人之說了而件書回祿成孽化灰燼仍重以俊隆之本書寫校合了于時文永十年九月二十八日越州刺史平判コレ北條越後守實時朝臣ナリ令卷第一ノ末ニ正嘉二年五月十日相傳秘說奉授越州使君尊

七月廿八日

金地院

板伊州様

尊報

猶々律令之儀、御機嫌能候間、早々御上尤存候、可然様ニ可被仰渡候、

八月十三日、伊賀殿八月十日之狀來、後庄三ノ被届、

當月十日之御狀同十三日令拜見候、菊亭殿ノ律令可被成御上之由尤存候、最前其様子申上御機嫌能候間、早々御上候様ニ可被仰渡候、併如御書中拙老近日被指上、於上方記録共書寫申付候様ニ被仰出候、内々廿日比可罷上旨御誼ニ候、相延可申候不存候、於上方何も記録三通寫候様ニ被成御誼候間、右之律令も先其方に可被成御待候哉、御分別次第可被仰渡候、○中恐惶謹言、

八月十四日

金地院

板伊州様

尊報

十九日、板伊賀殿八月十四日之狀來、菊亭殿ノ律令卷物十九卷下候間、則今日十九日披露申候、返書遣す、案左に有、○中

一書令啓上候、律令拾九卷箱ニ入封之儘披露仕候、——板伊州へ之御書於御前讀上申候、一段御機嫌能候間、御心安可被思召候、具之儀板伊州迄申入候間、可被申上候、此由御披露所仰候恐惶謹言、

八月十九日

菊亭右府様

舞文弄法、永言於此、固切宸冲、爰勅在朝、通令討覈稽之於典籍、參之以古今、迄于滯疑、祇嘉聖斷、咸加
辨析、已盡會通、裁爲十卷、名令義解、屈飛龍之妙轡、顧汾陽之官然、未有施行、藏之秘府、朕以寡昧、臨馭
寰宇、思通明謨、導揚景業、宜頒天下、普使遵用、畫一之訓、垂於萬葉、○本文有錢脫、據令義解、類聚國史等補正、

〔續日本後紀^{七十五}〕承和十二年二月丁酉、散位從四位下善道朝臣眞貞卒也、○中天長八年遷阿波守、

是時有識公卿一兩人、依詔旨與諸儒等修撰令義解、眞貞亦參其事、不赴任所、

〔國師日記〕慶長十九年六月 一久右衛門罷下ニ付而六月十六日之尊書同廿二日令拜見候、○中

一菊亭殿^{○右大臣、今川晴季}、律令有之由候、此御本者、金澤之文庫之御本、先年秀次御取上セ候而、立御耳

候、今度記錄共御穿鑿之儀ニ候條、被成御上候様ニ可然候哉、貴様右府ニ無御等閑候者、御内證卒

度可被仰候哉、但御分別次第第二候、○中

六月廿四日

金地院^{○嵯}

板伊州様^{○所司代板倉勝重}

貴報

〔駿府政事錄〕慶長十九年七月廿八日、今日自菊亭殿^{○今出川晴季}於板倉伊賀守^{○勝重}書狀到來、是者律令

金澤文庫本、往昔自關白秀次被進於今出川殿、今又被進于駿府、八月十九日、律令到來、是者金澤

文庫本、關白秀次執之、今出川殿被進之、今日被進之、○令併、內十一卷、有之、不足、律二卷、

〔國師日記〕慶長十九年七月廿七日、板伊賀殿七月廿一日之狀來、菊亭殿^{○中}板倉殿への書中も見せ

來菊亭殿律令上申度との事也、○中

當月廿一日之御狀、同廿七日令拜見候、○中菊亭殿^{○中}律令可被成御上、御内證之由、右府^{○中}貴様

迄御書中、則備上覽候、御機嫌能候間、早々可被指下候、披露可申候、金澤之本ニ候條、尤可有御上

儀と被思召御氣色ニ而候是者貴様へ之内證申事ニ候、○中

得業生大初位下臣漢部松長等。輒應明詔辨論執議。陳家古壁之文。探而無遺。于氏高門之法。訪而必盡。其善者從之。不以人奏言其迂者略諸。不以名取實。一加一減。悉依法曹之舊。言乃筆。乃削。非是臣等之新情。猶有五劔難名。兩壁易似。必稟皇明。長質疑滯。有巢在昔。大壯成其棟宇。網罟猶秘。重離照其個。漁今乃成之聖日。取諸不遠。臣等遠愧阜虞。近慙荷賈。牽拙歷稔。僥倖甫畢。分爲一十卷。名曰令義解。凡其篇目條類。具列于左也。深淺水道。共宗於靈海。小大公行。同歸於天府。謹序。○此下有目錄載在上

天長十年二月十五日 明法得業生大初位下臣漢部松長

從八位上守判事少屬臣川枯首勝成

從六位下行左少史兼明法博士勘解由判官臣讃岐公永直

太宰少貳從五位下臣小野朝臣篁

正五位下行阿波守臣善道宿禰真貞

正五位上行大判事臣興原宿禰敏久

從四位下行刑部大輔兼伊豫守臣藤原朝臣衛

從四位下行勘解由長官臣藤原朝臣雄敏

正四位下行左京大夫兼文章博士臣菅原朝臣清公

參議從四位下守右大辨兼行下野守臣藤原朝臣常嗣

參議從三位行刑部卿兼信濃守臣南淵朝臣弘貞

正三位守右大臣兼行左近衛大將臣清原真人夏野

〔續日本後紀三明〕承和元年十二月辛巳。施行天長年中所新撰令義解。下詔曰。納諸軌物。王道所先。制

以度量。皇猷斯在。故知弼成五教。衙勒萬方。垂拱而理。其法令乎。後太上天皇。○淳和修機玄扈。比德丹陵。

事勳遠圖。慮存長策。以爲法令文義。隱約難詳。前儒註釋。方圓遞執。豈使三家異說。輕重參差。二門殊闕。

士等撰先儒之舊記者彼迂說取此正義勒成卷帙以備解釋庶俾學者易解與奪莫異者省依解狀謹請官裁者正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良峯朝臣安世宣奉勅依請者省宜承知依宣行之

天長三年十月五日

〔類聚國史〕

百四十七

天長十年二月壬申右大臣清原真人夏野中納言直世王源朝臣常藤原朝臣愛發權中納言藤原朝臣吉野參議南淵朝臣弘貞文室朝臣秋津藤原朝臣常嗣侍殿上校讀新撰令釋疑義起請

〔令義解〕臣夏野等聞春生秋殺刑名與天地俱興陰慘陽舒法令共風霜並用犯之必傷蠱炷有爛蛾之危觸之不漏蛛絲設黏虫之禍昔寢繩以往不嚴之教易從畫服而來有恥之心難格隆周三典漸增其流大漢九章愈分其派雖復登車溢閭半市之姦不勝錡鼎銘鑄滿山之弊已甚降及澆季煩濫益彰上任喜怒下用愛憎朝成夕毀章條費刀筆之辭富輕貧重憲法歸賄貨之家嚴科所枉劔戟謝其銛利輕比所假君父慙其溫育故令出不行不如無法教之不明是爲樂刑伏惟皇帝陛下道高五讓動劇三握類金玉而垂法布甲乙而施令芟春竹於齊刑銷秋茶於秦律孔章望斗之郊無復冤牢之氣黃神脫桎之地唯看香楓之林猶慮法令製作文約旨廣先儒訓註案據非一或專守家素或固拘偏見不肯由一孔之中爭欲出二門之表遂至同聽之獄生死相半連案之斷出入異科念此辨正深切神襟爰使臣等集數家之難說舉一法之定準臣謹與參議從三位行刑部卿兼信濃守臣南淵朝臣弘貞參議從四位下守右大辨兼行下野守臣藤原朝臣常嗣正四位下行左京大夫兼文章博士臣菅原朝臣清公從四位下行勘解由長官臣藤原朝臣雄敏從四位下行刑部大輔兼伊豫守臣藤原朝臣衡正五位上行大判事臣與原宿禰敏久正五位下行阿波守臣善道宿禰真貞太宰少貳從五位下臣小野朝臣篁從六位下行左少史兼明法博士勘解由判官臣讚岐公永直從八位上守判事少屬臣川枯首勝成明法

「官分職是有閑繁錫祿命位非無輕重今覽從三位守大納言兼彈正尹神王等所奏刪定令格四十五條事憑穩便義存折衷宥下有司並令遵用」

〔類聚國史百四十七〕延曆十九年二月戊寅右中辨從四位下橘朝臣入居卒云々屢上書言便宜事多補益徵爲右中辨所言政務甚被省納奏撰削定令

〔日本後紀二〕弘仁三年五月癸未是日公卿奏曰臣聞垂範訓人事歸濟世改制易俗理會適時寔知道尙沿革政必裁成苟或未弘豈肯膠柱今此刪定令條是去神謚景雲三年議請刪定而事有不允寢而莫行數十年後乃始頒下自爾以降訴訟逾繁事不便民理難取則今故謹詳可不輒請刊改冀合機宜用遵可久庶望景化風行而革弊群生日用而沐義俗弭奸邪家全緒業者許之文多不載

〔令集解六〕職見穴云禁內禮式謂後宮院中禮式是問有違失儀式之罪科問何答女司決罰故刪定令釋糾正推罰也

〔令義解〕太政官符式部省

應撰定令律問答私記事

右得彼省部式解脩大學寮解脩明法博士外從五位下額田國造今足解脩謹檢舊記律令之興年代浸遠沿革隨時損益因世藤原朝廷御宇正一位藤原太政大臣奉勅制令十一卷律六卷博士正四位下下毛野朝臣古麻呂贈正五位上調忌寸老人正五位下守部連大隅正五位下道公首名從五位上伊吉連博德從五位下伊豫部連馬甘等至于大寶元年修撰既訖施行天下平城朝廷養老年中同太政大臣復奉勅刊修令律各爲十卷博士正四位下大和宿禰長岡從五位下陽胡史眞身外從五位下矢集宿禰虫麻呂外從五位下鹽屋連古麻呂外從五位下山田連白金等也自爾以來諸博士等相承教授文略義隱情理難通卽無不由先儒舊說而彼舊說或爲問答或爲私記互作異同未詳誰作後學者等屬意彼此每有論決難塞夫古之刑書鐘鼎鑄之金石銘之所以塞異端絕異理也望請命當時博

八五

余部連馬養、勤大壹薩弘格、勤廣參土師宿禰、勤大肆阪合部宿禰、唐務大壹白猪史骨、追大壹黃文連備、田邊史百枝、道君首名狹井宿禰、尺麻呂、追大壹鍛造大角、進大壹額田部連林、進大貳田邊史首名山口伊美伎大麻呂、直廣肆調伊美伎老人等、撰定律令、賜祿各有差。○本文有誤脫、據三類聚國史補正。

〔續日本紀二〕大寶元年三月甲午、始依新令改制官名位號。四月庚戌、遣右大辨從四位下下毛野

朝臣古麻呂等三人、始講新令、親王諸臣百官人等就而習之。六月壬寅朔、令正七位下道君首名、說

僧尼令于大安寺。己酉、勅凡其庶務一依新令。○中略是日遣使七道、宣告依新令爲政及給大租之狀、

并頒付新印樣。八月癸卯、遣三品刑部親王、正三位藤原朝臣不比等、從四位下下毛野朝臣古麻呂

從五位下伊吉連博德、伊余部連馬養等、撰定律令、於是始成、大略以淨御原朝廷。○天武爲准、正、仍賜祿

有差。丁未、撰令所處分職事官人賜祿之日、五位已下、皆參大藏受其祿、若不然者、彈正糾察焉。戊

申、遣明法博士於六道除道、深道、講新令、

〔續日本紀二〕大寶二年二月戊戌朔、始頒新律於天下。七月乙亥、詔令內外文武官讀習新令。○令、類聚

國史、日本紀略、並作律、乙未、始講律。十月戊申、頒下律令于天下諸國、

〔續日本紀五〕和銅四年七月甲戌朔、詔曰、張設律令年月已久矣、然纔行一二、不能悉行、良由諸司怠

慢、不存恪勤。○下略

〔續日本紀五〕和銅五年五月乙酉、詔諸司主典以上并諸國朝集使等曰、制法以來年月淹久、未熟律

令多有過失、自今以後、若有違令者、即准其犯依律科斷、其彈正者、月別三度巡察諸司、糾正非違、若有

廢闕者、仍具事狀移送式部、考日勘問。

〔類聚三代格〕格式弘序

養老二年、復同大臣不比等奉勅更撰律令、各爲十卷、今行於世、律令是也。○又見扶桑略記

〔令義解一具〕縫部司略中

制律略下

○按ズルニ弘仁格式ノ序ニ天智天皇元年トアルハ即位ノ元年ニシテ鎌足傳ニ七年トアルハ稱制ノ年ヨリ數ヘタルナリ

〔日本書紀二十〕十年正月甲辰東宮太皇弟奉宣或本云大友皇子宣也施行冠位法度之事大赦天下法度冠位之名新律令具載於新律令

〔續日本紀八〕元正養老三三年十月辛丑詔曰開闢已來法令尙矣君臣定位運有所屬洎于中古雖從由行未彰綱目降于近江天智之世改張悉備迄於藤原武文之朝頗有增損由行無刊本作連改以爲恒法

〔續日本紀二十〕天平寶字元年閏八月壬戌紫微內相藤原朝臣仲麻呂等言中編尋古記淡海大津宮御宇皇帝天智天縱聖君聰明睿主考正制度創立章程

〔日本書紀二十九〕十年二月甲子天皇皇后共居于大極殿以喚親王諸王及諸臣詔之曰朕今更欲定律令改法式故俱修是事然頓就是務公事有闕分人應行

〔日本書紀三十三〕三年六月庚戌班賜諸司令一部二十二卷

〔類聚三代格〕格式弘序

逮文武天皇大寶元年贈太政大臣正一位藤原朝臣不比等奉勅撰律六卷令十一卷又見帝三代實錄清和貞觀十三年十月五日丁未外從五位下守大判事兼行明法博士櫻井田部連貞相議曰中古律同條六議條云議親注云謂皇親及太皇太后皇太后本服七日以上親皇后本服一月

以上親者案此等文除古律三后本服字新律止計等親示蔭法

〔續日本紀一〕四年三月甲子詔諸王臣讀習令文又撰成律條六月甲午勅淨大參刑部親王直廣壹藤原朝臣不比等直大貳栗田朝臣真人直廣參下毛野朝臣古麻呂直廣肆伊岐連博得直廣肆伊

第廿 文部部

第廿一 雜補部

第廿二 版牧部

兵部 兵士防人部

第廿三 雜補部

使事部

第廿四 禁制部

第廿五 彈劾部 利法部

第廿六 吏字部

第廿七 賜物部

第廿八 雜部上

第廿九 雜部中

第卅 雜部下

天長格抄撰日本後紀之次所抄出之例也起桓武天皇延暦十一年正月丙辰迄于後太上天皇十年二月乙亥編次行事成口其臨時小事朝堂大儀入朝出使之類有司所存者文詞繁多不必錄至於事經行用必須爲例一依本案不勞改張但以類相次令便披尋勒成卅卷名曰天長格抄庶令後世無煩遵行目錄如右

○按ズルニ本朝法家文書目錄ハ著作ノ年代ヲ詳ニセズト雖モ亡逸セル官曹事類天長格抄等ヲ始メ政書ノ目錄ヲ具載セルヲ以テ始クコニ掲載シテ參考ニ供フ

〔唐書^{五十六}〕唐之刑書有四曰律令格式令者尊卑貴賤之等數國家之制度也格者百官有司之所

常行之事也式者其所常守之法也凡邦國之政必從事於此三者其有所違及人之爲惡而入于罪戾者一斷以律

律令

〔類聚三代格〕格式^弘序

古者世質時素法令未彰無爲而治不肅而化暨乎推古天皇十二年上宮太子^弘親作憲法十七箇條國家制法自茲始焉降至天智天皇元年制令廿二卷世人所謂近江朝廷之令也

〔藤原家傳^上〕七年秋九月^中先此帝^天令大臣撰述禮儀刊定律令通天人之性作朝廷之訓大

臣與時賢人損益舊章略爲條例一崇敬愛之道同止奸邪路理慎折獄德洽好生至於周之三典漢之九篇無以加焉

〔令集解^{官一}〕問律令誰先誰後答令有律語^略○註律有令語^略○中上宮太子并近江朝廷唯制令而不

上古問答一卷

八十一例一卷

六十二例一卷

十七條憲法一卷 推古天皇十二 years 上宮太子作之

彈例一卷

問答五條

類聚三代格目錄

第一 祭井幣事 序事 神叙位并託宣事 神封井租地子事

第二 神社事 公文事 寶王在諸國神主禰宜事 勅學散事 神部雜務事

第三 佛事 灌頂事 造佛名事 經論并法會諸僧事

第四 度者事

第五 諸佛事 下國分寺事 僧尼禁忌事 家人事 僧綱員位階并僧位階事

第六 加減諸司官供佛事 廢置諸司事

天長格抄卅卷 起桓武天皇延暦十一年正月丙辰、後太上天皇十年二月乙亥、

第一 神事 部上 第二 神事 部下 第三 佛事 部上

第五 佛事 部下 第六 釋教部 國忌部 第七 供御部 上

第九 倉廩賞賜部 第十 租稅部 國忌部 第十一 封戶部

第十三 官位部 考選部 第十四 馬料部 公卿部

第十五 服色部 位部 祿部 第十六 調庸部 要劇部

第十八 春米部 料部 證擬部 把笏部 第十七 糧倉部

第十九 服衣納部 孝義部 婦式部

外官事類目錄十一卷 起自大寶元年盡于延曆廿二年 從五位下行大學助兼越前權介中科宿禰巨郡雄

第一 神祇掌國郡 第二 寺僧尼健兒大帳

第三 調庸士日功養物封戶 第四 田園義田倉庫地給子

第五 正稅 第六 例造物交易解奉使 第七 四度使

第八 官舍工正倉 第九 解下由采相女撰考器課伏 第十 官郡牧司貢起蘇請

第十一 雜事

事抄九卷 自延曆廿三年盡弘仁二年

第一 禁斷儀外議 第二 雜捕 第三 考選

第四 叙位身選叙 第五 同領謀馬料 第六 官廢位任官

第七 郡事 第八 雜事 第九 解由文式國忌

次事抄五卷 自弘仁三年盡天長元年

第一 國忌義彈事 第二 廢置 第三 雜捕

第四 叙位季歷廢馬撰 第五 雜事

新抄五卷 自天長二年盡承和十五年六月十二日

第一 雜儀把笏使彈事 第二 雜捕 第三 廢置

第四 季事錄位錄馬料 第五 雜事

續新抄五卷 自嘉祥元年盡貞觀三年

第一 第二 第三

第四 第五

- 第八國郡部五十條、倉庫部、
第十六封田部、租稅部六十條、
第十三公卿事力部六十條、
第十五要制部八條、月料部十四條、初儀部十七條、銓擢部三條、禮部七條、把箭服色、
第十六調庸部、
第十九交易部十一條、出納部十三條、
第廿一產婦部五條、衣服部五條、禮部九條、
第廿三職牧部五十八條、
第廿四兵器部十五條、兵士防人部五十條、衛士仕丁部、
第廿六蕃客部十一條、
第廿九贈官部廿六條、贈物部、
第廿九十八條、諫官部三條、
第九十六政部十一條、賞賜部、
第十二官位部十一條、錄考選部、
第十四錄法部、
第十八義倉部七條、禮部九條、
第廿二交臂部十九條、
第廿五使事部、
第廿八部例部四條、
第九十六政部十一條、賞賜部、
第十二官位部十一條、錄考選部、
第十四錄法部、
第十八義倉部七條、禮部九條、
第廿二交臂部十九條、
第廿五使事部、
第廿八部例部四條、
- 事類者續日本紀之雜例也、起文武天皇元年歲在丁酉、至聖朝廷曆十年辛未、將一百世曆八朝、行事既多、綜緝稍廣、若夫事合書策、理關垂訓、則備加討論、載之於紀、進諸秘府、以爲彝典、元會之禮、大嘗之儀、隣國入朝、朝廷出使、如此之類、別記備存、爲事煩多、不復於此、至如米鹽碎口、簡牘常語、或文古朴而難解、或理蒙籠而不明、然而既經行用、事須司存、故全取本案、別成卷帙、以類相附、令易披尋、合卅卷、名曰官曹事類、藏之曹司、以備引閱、開卷而了、故事無訪、張純觸類而辨、朝章無待胡廣、疑議無滯、指掌有歸、其目如右、
- 延曆廿二年二月三日
- 勘解由主典賀茂縣立長
- 左大辨兼左衛門督皇太子學士勸解由長官但馬守菅野朝臣真道
- 左中辨兼左近衛少將阿波守秋篠朝臣安人

中卷奏成 七月七日相賀賀茂 祭日誓固式相賀式 七月七日相賀式相賀式 九月九日菊花宴式馬射式 五月一日蓮御曆式馬射式

會式十一月奏御宅田稻敷式十二月十一月大饗式

下卷 叙任叙任 女親王以下式詔書式 任官式

內裏儀式一卷

兵部覆奏式 大駕出雲國造奏神壽圖式 飛騨位式 冊命皇后式 冊命皇太子式 齋內親王參入官上勢
賀表式 五位以上奏式 鳴進式 唐使節刀式 賜將軍節刀式 六賜
鋪井進式 行幸時節井進式 少納言常式 入唐使節刀式 賜將軍節刀式 六賜
宮式 今食祭式 十二月別賀式 六月日進御式 十二月正月同柳拜天地四方屬星及山陵式

交替式二卷

上卷

下卷

新定內外官交替式一卷 由使觀年中奏聞解

內外官交替式 延喜廿一年正月廿五日 解由使奏聞

新定讀式一卷 井序 式部大輔菅清公獨

左右檢非違使式一卷 貞觀十七年四月廿七日 中納言南名等撰

古式廿卷

北堂有司式一卷

一雜

官曹事類目錄一部 卅卷 左大曆廿二年二月十三日

第一神事部 八條

第二齋王部 九條

第三齋王部 九條

第四佛事部 十六條

第五齋會部 十三條

第六網羅部 廿四條 高僧部 九條

第七供御部 十五條

司馬任紀伊國造儀
將軍節刀儀
飛騨縣儀
固關使儀
美年終斷罪儀
賜遣唐使節刀儀
舉哀儀
遣唐使節刀儀

延喜儀式一部十卷

第一 新年祭儀
賀茂春日祭儀
大原野祭儀
奏御
攝井韓仲次祭儀
釋其跡論儀
大原野祭儀
松尾

第二 賤詐大嘗祭儀上

第三 同祭儀中

第四 同祭儀下

第五 即位儀
讓國儀
已上皇后儀
立皇太子儀
皇太子加元服儀
任僧綱儀
叙內親王

第六 元正朝賀儀
元日御豐樂院儀
日儀
禮服正月八日講歌儀
正月二日朝拜皇太后儀
同日女拜賀皇太子

第七 元月十五日宮內省進御
同馬料儀
正月十六日贈歌儀
正月二十日朝拜皇太后儀
同日女拜賀皇太子

第八 元月十五日宮內省進御
同馬料儀
正月十六日贈歌儀
正月二十日朝拜皇太后儀
同日女拜賀皇太子

第九 元月十五日宮內省進御
同馬料儀
正月十六日贈歌儀
正月二十日朝拜皇太后儀
同日女拜賀皇太子

第十 元月十五日宮內省進御
同馬料儀
正月十六日贈歌儀
正月二十日朝拜皇太后儀
同日女拜賀皇太子

第十一 元月十五日宮內省進御
同馬料儀
正月十六日贈歌儀
正月二十日朝拜皇太后儀
同日女拜賀皇太子

第十二 元月十五日宮內省進御
同馬料儀
正月十六日贈歌儀
正月二十日朝拜皇太后儀
同日女拜賀皇太子

第十三 元月十五日宮內省進御
同馬料儀
正月十六日贈歌儀
正月二十日朝拜皇太后儀
同日女拜賀皇太子

第十四 元月十五日宮內省進御
同馬料儀
正月十六日贈歌儀
正月二十日朝拜皇太后儀
同日女拜賀皇太子

第十五 元月十五日宮內省進御
同馬料儀
正月十六日贈歌儀
正月二十日朝拜皇太后儀
同日女拜賀皇太子

第十六 元月十五日宮內省進御
同馬料儀
正月十六日贈歌儀
正月二十日朝拜皇太后儀
同日女拜賀皇太子

第十七 元月十五日宮內省進御
同馬料儀
正月十六日贈歌儀
正月二十日朝拜皇太后儀
同日女拜賀皇太子

第十八 元月十五日宮內省進御
同馬料儀
正月十六日贈歌儀
正月二十日朝拜皇太后儀
同日女拜賀皇太子

第十九 元月十五日宮內省進御
同馬料儀
正月十六日贈歌儀
正月二十日朝拜皇太后儀
同日女拜賀皇太子

第七 儀 三月一日於兵庫寮試生等儀 四月七日
奏成遷短冊儀 四月十五日授位記儀

第八 儀 四月廿八日奉勅儀 五月五日相親儀
四月廿六日奉勅儀 五月廿五日相親儀

第九 儀 四月廿八日奉勅儀 五月廿五日相親儀
四月廿六日奉勅儀 五月廿五日相親儀

第十 儀 四月廿八日奉勅儀 五月廿五日相親儀
四月廿六日奉勅儀 五月廿五日相親儀

第十一 儀 四月廿八日奉勅儀 五月廿五日相親儀
四月廿六日奉勂儀 五月廿五日相親儀

第十二 儀 四月廿八日奉勅儀 五月廿五日相親儀
四月廿六日奉勂儀 五月廿五日相親儀

第十三 儀 四月廿八日奉勂儀 五月廿五日相親儀
四月廿六日奉勂儀 五月廿五日相親儀

第十四 儀 四月廿八日奉勂儀 五月廿五日相親儀
四月廿六日奉勂儀 五月廿五日相親儀

第十五 儀 四月廿八日奉勂儀 五月廿五日相親儀
四月廿六日奉勂儀 五月廿五日相親儀

第十六 儀 四月廿八日奉勂儀 五月廿五日相親儀
四月廿六日奉勂儀 五月廿五日相親儀

第十七 儀 四月廿八日奉勂儀 五月廿五日相親儀
四月廿六日奉勂儀 五月廿五日相親儀

第十八 儀 四月廿八日奉勂儀 五月廿五日相親儀
四月廿六日奉勂儀 五月廿五日相親儀

第十九 儀 四月廿八日奉勂儀 五月廿五日相親儀
四月廿六日奉勂儀 五月廿五日相親儀

第二十 儀 四月廿八日奉勂儀 五月廿五日相親儀
四月廿六日奉勂儀 五月廿五日相親儀

第二十一 儀 四月廿八日奉勂儀 五月廿五日相親儀
四月廿六日奉勂儀 五月廿五日相親儀

第二十二 儀 四月廿八日奉勂儀 五月廿五日相親儀
四月廿六日奉勂儀 五月廿五日相親儀

第二十三 儀 四月廿八日奉勂儀 五月廿五日相親儀
四月廿六日奉勂儀 五月廿五日相親儀

第二十四 儀 四月廿八日奉勂儀 五月廿五日相親儀
四月廿六日奉勂儀 五月廿五日相親儀

第二十五 儀 四月廿八日奉勂儀 五月廿五日相親儀
四月廿六日奉勂儀 五月廿五日相親儀

第二十六 儀 四月廿八日奉勂儀 五月廿五日相親儀
四月廿六日奉勂儀 五月廿五日相親儀

第二十七 儀 四月廿八日奉勂儀 五月廿五日相親儀
四月廿六日奉勂儀 五月廿五日相親儀

第二十八 儀 四月廿八日奉勂儀 五月廿五日相親儀
四月廿六日奉勂儀 五月廿五日相親儀

第九宮內部 彈利正部 京職藏

第十二臨時下

第十雜

第十一臨時上

延喜格一部十卷并十一篇

上起自貞觀十一年五月至延喜七年凡增舊奏進延喜七年十一月十五日左大臣藤原時平等奏進

第一中務部

第二式部上

第三式部下

第四治部上

第五治部下

第六民部上

第七民部下

第八兵部

第九彈利正部 京職藏

第十臨時下 臨時上

已上三代格類聚已了

古格廿三卷

一式

弘仁式一部卅卷 弘仁十一年四月廿二日與格奏進

第一四時祭一

第二臨時祭二

第三大神宮三

第四嘉宮藏四

第五踐跡大嘗祭

第六祝詞藏六

第七神祇一七

第八神祇二八

第九神祇三九

第十神祇四十四

第十一太政官

第十二中務主記 監物

第十三中書大舍人

第十四建殿

第十五內藏主

第十六陰陽

第十七內匠

第十八式部上

第十九式部下

第二十大學

第二十一治部

第二十二民部

第二十三主計上

第二十四主計下

第二十五主稅上

第二十六主稅下

第二十七兵部

第二十八遣兵 鼓吹

第二十九利獄 判事

第三十藏部 掃部

第三十一宮內

第三十二大膳

第三十三工部 大炊

第三十四典藥

義老二年興律並作 天長十年二月十五日右大臣清原夏野等奉勅撰義解令施行
長十年二月十五日右大臣清原夏野等奉勅撰義解令施行
二月八日又令
施行○中略

令釋一部七卷 并篇

第一 官位職員神祇僧尼 東宮職員

第二 賦役田學

第三 選叙錄職

第四 衣服衛營軍防儀制

第五 公式

第六 倉庫藏市牧捕醫亡疾假寧

第七 雜職

令義解一部十卷 并序篇

天長十年二月十五日右大臣清原夏野等奏進略○中

令廿二卷 天智天皇元年作近江令是也 令十一卷 大寶元年不比等大臣興律並作

一格

弘仁格一部十卷 并序五篇

起自大寶元年迄于弘仁十年凡一百十九年弘
仁十二年四月十一日大納言藤原冬嗣等奏進

第一 神祇

第二 式部上

第四 治部

第五 民部上

第六 民部中

第七 民部下

第八 兵部

第九 彈正部京職宮內

第十 雜

貞觀格一部十二卷 并序八篇

上起弘仁十一年迄貞觀十年凡卅九年貞觀
十一年四月十三日大納言藤原氏宗等奏進

第一 神祇

第二 式部上

第三 式部中

第四 式部下

第五 治部上

第六 治部下

第七 民部上

第八 民部下

第一 名例

第二 名例

第三 名例

第四 名例

第五 名例

第六 名例

第七 衛禁

第八 衛禁

第九 職制

第十 職制

第十一 職制

第十二 戶婚

第十三 戶婚

第十四 戶婚

第十五 廩庫

第十六 擅興

第十七 賊盜

第十八 賊盜

第十九 賊盜

第二十 賊盜

第二十一 賊盜

第二十二 圖訟

第二十三 圖訟

第二十四 圖訟

第二十五 詐僞

第二十六 雜

第二十七 雜

第二十八 捕亡

第二十九 斷獄

第三十 斷獄

律疏一部卅卷

第一 名例

第二 名例

第三 名例

第四 名例

第五 名例

第六 名例

第七 衛禁

第八 衛禁

第九 職制

第十 職制

第十一 職制

第十二 戶婚

第十三 戶婚

第十四 戶婚

第十五 廩庫

第十六 擅興

第十七 賊盜

第十八 賊盜

第十九 賊盜

第二十 賊盜

第二十一 圖訟

第二十二 圖訟

第二十三 圖訟

第二十四 圖訟

第二十五 詐僞

第二十六 雜

第二十七 雜

第二十八 捕亡

第二十九 斷獄

第三十 斷獄

律六卷 大寶元年不比等大臣與令進作

一令

令一部十卷 世篇

裁判至要抄 一卷 明法博士坂

朝筆要抄 一卷

上古問答 一卷

六十一例 同

彈例 同

吏途抄 八卷

法家明句抄

以仁和寺宮本書之普廣院殿足利義教被尋之時注文云々此抄入道大納言實冬卿密々所借賜之本也

永正二年八月四日寫之

師名 在列

〔本朝法家文書目録〕

一律

律一部十卷 十三篇

元正天皇養老二年贈太政大臣正一位藤原朝臣不比等奉勅作律令并廿卷天平勝寶九年五月廿日勅令施行中略

律附釋一部十卷

第一名例上

第五月婚

第九詐偽

律集解一部卅卷

令總記

廷尉裝束抄 三卷

八十一例 同

十七箇條憲法 同上宮太

問答五條 御撰

斷罪抄

延久諸司實檢繪旨 三卷 中略

第二名例下

第六控與庫

第十捕亡

第三衛禁

第七賊盜

第四職制

第八關訟

貞觀格 十二卷 大納言藤原氏宗奏進

類聚三代格 卅卷

天長格抄 卅卷 起延暦十一年、盡三

格後抄

格後事類

弘仁式 卅卷 弘仁十一年、大納言冬嗣卿奏進

貞觀式 廿卷 貞觀十三年、大納言氏宗奏進

延喜式 五十卷 延喜五年、左大臣大

弘仁儀式 十二卷

貞觀儀式 十卷

延喜儀式 同

內裏式 三卷 左大臣冬嗣卿奏進

內裏儀式 一卷

儀式 十卷

新儀式 六卷

交替式 二卷 延暦年中、勅解、由使撰奏、開

新定內外官交替式 一卷 貞觀新定、勅解、由使撰奏、開

內外官交替式 五日、勅解、由使撰奏、開

新定酒式 一卷 并序、清公撰

左右檢非違使式 同 貞觀十七年、四月廿七日、中納言南淵名等撰

親王儀式 二卷 延暦中、撰

古式 廿卷

藏人式 同 相橋廣撰

北堂有司式 一卷

刪定律令問答 同 上中下、蓬華、王院、撰

延尉式 同

法曹至要抄 三卷 明法博士坂憲撰

法曹類林 二百卅卷 法曹勳文類集、加通、憲今案、藤原通憲撰

檢非違使私記 五卷

禁法略抄 一卷 右同

類聚檢非違使私記 三卷

檢非違使至要抄 四卷

類聚判集 百卷

類聚檢非違使官府宣旨 廿卷

法意簡要抄 同

類聚律令刑官問答私記 一卷 惟宗允亮撰

一諸雜事

類聚國史二百卷始資日本紀至仁

これ等はみな臣下の必ず學ぶべき物どもなり、

〔本朝書籍目録〕政要

和漢皇代記 各一卷

日本事始 二卷記天皇地草木

別式 廿卷神祇伯石

政事要略 百三十卷記公務交替國文札彈雜事至

柱下類林 三百六十卷朝家有儀集時、仰諸道、中原師安、勅文、

雜例抄 廿卷或記十三卷、大 官曹事類目録 卅二卷延暦二十二年

外記事類目録 六十一卷起自大寶元二年、盡

次事抄 五卷自弘仁三年、 新抄 九卷自延暦二十三年、

續新抄 同自嘉祥三年、 擬潛夫論 一卷

十三箇條意見 同

律附釋 同 律疏 同 同集解 三十卷直木

律疏 同 律大寶 六卷不比等大臣、

令養老二年 十卷與律作 令釋 七卷

令義解 十卷野奏大臣夏 令天皇智天 廿二卷近江令

令集解 卅卷直木 令元大寶 十一卷不比等大、臣、

三十卷抄 卅卷抄、明 弘仁格 十一卷大納言藤原

テ弘仁、貞觀延喜ノ三代ノ格ハ、皆官ニ隨ヒ類ヲ分チテ、神祇、中務、式部、治部等ト敍デタルヲ、後ニ類聚三代格ノ撰アリテ、更ニ此三代ノ格ヲ合セ、事ヲ以テ類聚シ、神事、佛事等ト敍デ、三十卷トス、是格式編輯ノ大略ナリ、此餘ニ彈例、新彈例、八十一例、民部省例、刑部省例、天長格抄、官曹事類、外官事類、敍位略例、大同抄、檢非違使式、勘解由使、勘判抄、政事要略、法曹類林、柱下類林等ノ諸書アリ、皆律令ヲ扶翼スル書ナリ、然レドモ今ハ多ク傳ハラズ、深ク惜ムベキコトナリ、又當時法制ヲ發シテ、其款目ヲ舉ゲザル者アリ、亦此篇ニ附載ス、而シテ警固式、行軍式ノ如キハ、兵事部ニ載セタリ、

政書目錄

〔江入楚桐導いよゝみちゝのざえをならはせ給

秘云、西宮記云、凡奉公之輩可設備文書、

一禮儀事 十一部

江都集禮 百廿六卷

儀式 十卷

沿革禮十卷 已上唐書

內裏式 三卷

式曆

年中行事

外記廳例

辨官記

叙位例

除目例

外記內記等ノ文書目錄

一政理事 十部

群書治要 五十卷

貞觀政要 十卷、已上唐書、但君臣之問事、盡此書也、

官奏報 申文例等

諸司式 延喜式五十卷

三代格 各三十卷、今按或百十一卷、

天長格抄

新定酒式

宣旨目錄

交替式 三卷、但新式一卷、

勘解由使、勘判例

勘解由使、勘判例

一罪法事 三部

律 十二卷

令 十卷、相法政理方也、

類聚檢非違使宣旨

勘札事

抄シテ交替式ト題シタル書アリシカド、政ヲ爲スニ不便ナルヲ以テ、更ニ撰ビタルナリ、是ハ詔勅官符律令ナドヲ難ヘ載セテ、格式ノ體ヲ兼タル者ノ如シ、清和天皇ノ貞觀十年ニ至リ、更ニ内官ノ事ヲ併セ、内外交替式二卷ヲ修セリ、是モ勘解由使ノ奏スル所ナリ、醍醐天皇ノ延喜二十一年ニ、勘解由使又内外官交替式ヲ撰セリ、是ハ詔勅律令ヲ一項ノ文ニ改メ成シテ、全ク式ノ體ヲ成セリ、又嵯峨天皇ノ弘仁十二年ニ、右大臣藤原多嗣等ニ詔シテ、内裏式三卷ヲ修定セシメ、恒例臨時ノ儀式ヲ載セタリ、又弘仁儀式十二卷、貞觀儀式十卷、延喜儀式十卷アリ、亦儀式ノ書ナリ、又弘仁十四年、修理算師山田福吉等ノ撰上セル功程式アリ、是ハ延喜ノ内匠木工ノ二式ノ如クナル者ナルベシ、以上ハ皆格式ノ餘流ニシテ、律令ト並ベ稱スベキ格式ニハアラズ、因テ桓武天皇ノ朝ニ、律令ハ是マデ頻リニ刊修セシカド、格式ハ未ダ編輯ノ舉ノアラザリシヲ以テ、左大臣藤原内麻呂等ニ詔シテ撰定セシム、不幸ニシテ天皇ノ崩御ニ遭テ、中ゴロ寢ミタリシガ、嵯峨天皇ノ弘仁十一年ニ式四十卷、格十卷ヲ撰ビテ施行セリ、格ハ大寶元年ヨリ弘仁十年マデノ詔勅官符ノ後世ノ法ト爲ルベキ者ヲ集メ、式ハ大寶元年以來ノ諸司ノ文案ヲ採リテ綴リ成セリ、何レモ大納言藤原多嗣等ノ勅ヲ奉ジテ撰スル所ナリ、是ヲ格式ヲ撰スルノ始トス、清和天皇ノ貞觀十一年ニ、大納言藤原氏宗等ニ勅シテ、弘仁十一年ヨリ貞觀十年マデノ格ヲ集メテ、貞觀格十二卷ヲ撰バシメ、十三年ニ又氏宗等ニ勅シテ、弘仁式ノ足ラザル所ヲ補テ、貞觀ノ式二十卷ヲ撰バシメ、弘仁式ト並ベ行ハシム、醍醐天皇ノ延喜元年、左大臣藤原時平延喜格十卷ヲ上リ、七年ニ至リ、更ニ撰シテ十二卷ト爲シ、貞觀十一年ヨリ延喜七年マデノ格ヲ收ム、延長五年ニ、左大臣藤原忠平等、弘仁貞觀ノ二式ヲ合セ、延喜式五十卷ヲ撰ス、政事要略ナドニ、弘仁貞觀ノ二式ヲ載セタルヲ觀ルニ、延喜式ト異同アレバ、延喜式ハ、二式ヲ併セテ、更ニ改正刪補ヲ加ヘタルナルベシ、サ

シメタリ、嵯峨天皇ノ弘仁三年ニモ、令條ヲ刊改セシコトアリ、淳和天皇ノ天長三年ニ、額田今足ノ請ニ依リテ令律問答私記ヲ撰定セシメ、同十年ニ右大臣清原夏野等ニ勅シテ令義解ヲ撰バシム、此餘、令ノ注釋ニハ古クヨリ古記、釋、集解ナドノ著アリ、釋ト古記トハ集解ノ中ニ引ケリ、集解ハ惟宗直本ノ撰ナルヨシ本朝書籍目錄ニ見エタリ、律ニモ直本ノ著セル集解ト云ヘル書アリシヨシニテ、政事要略ニ引ケリ、右ハ律令修撰ノ大略ナリ、

格ハ、斷獄律ニ、斷罪須引律令格式正文トアレドモ、此時ニハ未ダ格モ式モナカリシナリ、又同律ニ、詔勅斷罪臨時處分、不爲永格云々トアルト、獄令ニ、犯罪未發及已發未斷逢格改云々トアルトハ、其時ノ詔勅等ヲ云ヘルニテ、弘仁格ノ如キヲ云ヘルニハアラズ、元明天皇ノ和銅六年ニ、新格ヲ諸國ニ頒チシコトアリ、是モ從前ノ詔勅官符ナドヲ集メタルニハアラズシテ、新ニ定メラレタル者ナルベシ、孝謙天皇ノ天平寶字元年ノ勅ニ、選人依格結附ノ語アリ、是モ亦上ニ同ジカルベシ、桓武天皇ノ延暦十六年ニ、神王等ノ刪定セシ令格四十五條トアルハ、令條ヲ指シテ令格ト云ヘルナラン、式ハ、天武天皇ノ十年ニ、禁式九十二條ヲ立ツトアルハ、延喜ノ彈正式ノ如キモノニテ、禁制ノ一邊ニ就キテ設ケタル法ナルベシ、雜律ニ、違令者笞五十、別式者減一等トアリ、職制律ニ、稱律令式不便於事云々トアルモ、此類ナルベシ、神祇令ニ依別式トアリ、田令ニ依式給糧トアルモ、專ラ其一事ニ就キテノ程式ナルベシ、元明天皇ノ養老元年ニ、大計帳、四季帳、六年見丁帳、青苗簿、輸租帳等ノ式ヲ以テ、七道諸國ニ頒下ストアルモ、帳簿ノ書式ニテ、計帳ノ式ハ、延喜ノ主計式ニモアリ、租帳青苗簿ノ式ハ、主稅式ニモアリ、淳仁天皇ノ天平寶字三年ニ、中納言石川年足奏シテ別式ヲ作り、律令ト並べ行ハント請ヒ、各其政ヲ本司ニ繫ケテ二十卷ト成シタリ、桓武天皇ノ延暦二十二年ニ、勘解由使ヨリ諸國司交替式一卷ヲ撰進セリ、是ヨリ前ニ、或人私ニ古來ノ勅書官箱省例問答等ヲ

古事類苑

法律部二

上編

政書

我國、中古ヨリ隋唐ノ制ニ循ヒ、法度ヲ定メ、律令格式ノ四箇ノ書ヲ造レリ、律ハ罪人ヲ罰スル法ナリ、令ハ天下ノ制度ナリ、格ハ臨時ノ制ヲ集メテ、有司ノ參考ニ備フルナリ、式ハ有司ノ心得書ナリ、何レモ治國ノ要書ナリ、推古天皇ノ十二年ニ、厩戸皇太子親ヲ憲法十七條ヲ作レリ、是ハ我國制法ノ始ナレドモ、細ニ其書ヲ觀ルニ、多ク教訓ノ言ヲ難ヘテ、竟ニ律令ノ比ニハアラザルナリ、天智天皇ノ朝ニ至リテ、始メテ令ノ撰アリ、此令ヲ後ニ近江令ト稱シテ、二十二卷アリ、天武天皇ノ十年ニ、律令ヲ定メ、法式ヲ改メンタメニ、人ヲ分チテ行ハシムトアルハ、天智天皇ノ令ヲ刊修セシニテ、持統天皇ノ三年ニ、諸司ニ令一部二十二卷ヲ班チ賜ヒシハ、此刊修ノ令ヲ班チシナリ、其後文武天皇ノ四年ニ、淨大參刑部親王、直廣壹藤原不比等等ニ勅シテ、律令ヲ撰定セシメ、大寶元年ニ至リテ成レリ、律六卷令十一卷アリ、是ヲ大寶律大寶令ト稱ス、元正天皇ノ養老二年ニ至リ、更ニ不比等等ノ諸人ニ勅シ、刊修セシム、律十卷十二篇、令十卷三十篇トス、是ヲ養老刊修ノ律令ト云ヒ、或ハ大寶令ヲ古令前令ト云フニ對シ、是ヲ新令今令ト稱ス、世ニ今行ハルハ、者是ナリ、此後ニモ右大臣吉備眞備、大和國造大和長岡等、律令ノ中ニテ二十四條ヲ刪定セシヲ、桓武天皇ノ延暦十年ニ至リテ行ヒ用キ、大納言神王等ノ奏スル所ノ刪定令格四十五條ヲ、同十六年ニ至リテ、有司ニ下シテ遵用セ

古事類苑

法律部二

上編

政書

政書目錄

律令

格式

雜法令

雜載

六八

八二

九三

一一一

一一三

若乞索之賊並還主強乞索和乞索得罪難殊誠合還主

〔法曹至要抄錄中〕一和與物不悔還事

案之舊病馬牛之類雖有變易之期不限親疎和與之財全無悔還之法只以一與之狀可爲萬與之驗矣

〔令義解九〕凡札捉盜賊者謂札告及捕捉其札告親屬律有科條即有札告者既無財以備者官役折庸若所徵倍贓皆賞札捉之人家貧無財可徵及依法不合徵倍贓者依律免徵也

並計所得正贓謂假如盜布十端札告之日五端見在者唯勘准爲五分以二分賞札捉人即官人非因檢按而別札捉其事相因不合與賞其非所部官印者一同凡人之例不依官司之法并共盜及知情主人首告者亦依實例

〔律疏職制〕凡因官挾勢及豪強之人乞索者坐贓論減一等將以送者爲從謂或有因官人之賊挾勢形索財物者皆累倍所乞之財坐贓親故相與者勿論素是通家或飲風若舊車馬不寄結於相贈之家故謂論減一等若強乞索者加二等

〔法曹至要抄罪上〕一乞索事案之假令鄉間有勢之人除親故之外乞取財物計贓坐贓論減一等若強乞取者可加二等但與財之人減五等可科斷物即可還主

〔日本紀略八〕寬和二年四月廿八日丙寅遣左少史曰佐政文以下令檢封檢非違使左衛門尉藤原爲長等運上物是爲勸札備前國鹿田莊濫吹事下遣之處所徵取雜物之由及天聽也

〔政事要略八十〕雜律市司評物價條云其爲罪人評贓不實致罪有出入者以出入人罪論

〔延喜式二十九〕凡平贓布者長五丈二尺廣二尺四寸爲端

〔唐律疏議四〕諸平贓者皆據犯處當時物賈及上絹估疏略平功庸者計一人一日爲絹三尺牛馬駝驢驢車亦同疏略其船及碾磑邸店之類亦依犯時貨直疏略庸賃雖多各不得過其本價

私借官物

〔政事要略五十九〕既庫律云：監臨主守，以官物私自貸者，貸人及貸之者，無文記以盜論，有文記准盜論減二等。立判案者勿論，所貸之人不能備償者，徵判署之官。

〔延喜式五〕凡監臨主守以官物私自貸若貸人所貸之人不能備償及身死者並徵判署之人卽判署亦死後免。

〔唐律疏議十五〕諸監臨主守之官以官物私自借若借人及借之者笞五十過十日坐贓論減二等

〔律疏職制〕凡主司私借乘輿服御物若借人及借之者徒二年謂乘輿服御物主司持護修整常須如法若有私借或將借人及借之者各徒二年

非服而御之物杖一百在司服用者各減一等
謂離非自帶及借人在司服用者服御物徒二
年上減非服而御杖一百上減故云各減二
等
謂帷帳几杖之屬之屬者謂筆硯香奩及器玩
等是非服之物色類既多

〔類聚三代格〕勅於圖書寮所藏佛像及內外典籍書法屏風障子并雜圖繪等類一物已上自今以後不得輒借親王以下及庶人若不奏聞私借者本司科違勅罪

神龜五年九月六日

彼此俱罪誠
倍與不和誠

〔政事要略〕^{七十} 厩庫律云監臨主守以官奴婢及畜產私自借若借人及借之者皆笞^{所監臨主守之官}。及畜產私自借、謂一人一畜借、若轉借他、計庸重者、以受所監臨財物論、或借數少而日多、或借數多而日少、計庸重者、以受所監臨財物論、其車船、碾、邸店之類、有私自借者、借人及借之者、亦計庸、貸各與奴婢畜產同、律雖無文、所犯相類、雖制律監臨之官、借所監臨及牛馬車船、碾、邸店、碾、磨、各計庸、貸、以受所監臨財物論、計庸、牛車船、碾、磨、之類、此與借畜產不殊、借驛馬加二等、計庸重者從上法、故、此律與借畜產、例爲、參、

〔律疏名例〕凡被此俱罪之賊，謂計賊爲罪者，與受財者，枉法，不枉法，及受所監臨之財，物，並坐贓罪，依法及犯。

禁之物則沒官謂盜賊所獲之貨物及禁書類印之類私家不應有者若鑒人所盜之物一錢亦沒官
丙、下同轉盜之被官者有故告之法並置者依令與實者私鑄錢事更得兼贓乙
勸盜故備贖沒官者有故告之法並置者依令與實者私鑄錢事更得兼贓乙
今內合此之類律令錢無文者其用及錢私家合有准科如律取與不和謂強唱詐欺之強市有難和興者無罪
等肉不合沒官者且錢無文者其用及錢私家合有准科如律取與不和謂強唱詐欺之強市有難和興者無罪
謂去官而利託及疏文令依金或補或屬人面告他郡市得實但是不應有取財而取與名無罪欽之類至
和市有乘利託及疏文令依金或補或屬人面告他郡市得實但是不應有取財而取與名無罪欽之類至

然後更付使局令奏其餘徵物奪祿等皆如舊制省宜承知依宣行之者使宣承知者謹案符旨犯用是自犯官物之名借貸自借官物亦借於人之謂也勅之所指在此等色今擬移送所犯之由上件三事欲載移文頗有疑殆進退之間若爲處分者左大臣宜依件行之者使宣承知依宣行之者使須依符旨勤行事而立制以來未有移斷懈緩之漸犯法者衆今檢年來不與前司解由狀等所注載國儲備用自借判異不動動用穀類糯等費用之數目色目色巨多然而遷代之吏未填欠負偏進解由皆被叙用名實相遠不可不申夫事有弛張政貴簡要若不令知此炯誠造次超行若結怨恐昨日預爵級今日陷罪科望請件三箇條難事重被下知諸國自今而後有違犯者具注其狀移斷刑官雖不救既往之弊永以爲將來之勸者同宣奉勅依請者

從三改大納言兼行民部卿中宮大夫平朝臣伊賀

以前條事如右諸國承知依宣行之符到奉行

右少辨正五位下兼行文章博士伊與介大江朝臣

外從五位下行左大史尾張宿禰

天慶二年二月十五日

〔律疏 賦盜〕凡以私財物奴婢畜產之類竊盜類至多故云之類餘條不別顯奴婢者與畜產財物同謂反逆

實財雖沒官不顯奴婢畜產之類又竊盜律論畜產不以實者一答計即無贖奴婢貿易官物者計其等准盜論謂將私財貿易官物其馬各直布五箇物餘亦如之謂私馬直布十端傳官計所利以盜論謂以私物論其價雖等仍准盜論合從一年謂私馬直布十端傳官計所利以盜論謂以私物貿易官物直布四端即一端是等合准盜論杖六十三端是利以盜論合杖八十有估贖罪併者皆將以盜罪加罪止中流即於此條貿易不可更重故云同和誘法者同和誘法各流以本條和誘奴婢罪止中流即於此條貿易不可更重故云同和誘法

〔三代實錄 三和〕貞觀元年十二月廿七日戊申太政官論奏言略中前左馬權少允正六位上清岑朝臣

田繼少允從六位上紀朝臣令名少屬正六位上安倍朝臣有之從六位上麻績部清道史生從六位上田邊史宅主騎士金廣主恩智貞吉等以私馬換官馬省亦無所考試皆以赦免中須詳加覆案者也帝特降優詔曰中左馬寮官人等所犯年遷時變人物改易中宜申優典並從原有下

者錄下刑官人者○人者二字
恐金字誤 斷其罪者左大臣宣奉勅依請其且徵物役身亦依太政官弘仁十三年八月廿五日符行之不與解由狀或皆名交替欠不顯欠失細由事涉諂詐科附乖實宣欠損犯用色目具錄載申不得隱漏

天長二年五月廿七日

〔類聚三代格十〕太政官符

應禁斷諸國綱領奸犯所領官物事

右左大臣宣奉勅監臨犯物罪科非輕事明法條人亦忌憚如聞比年諸國綱領各爲奸犯或贖勞出身空歸國郡或買宅定居便留京都其所充用皆是官物國用之乏職此之由宣下知諸國嚴加檢察若有斯類捉身言上處之重科斷彼奸徒

寬平三年九月十一日○又見政事要略

〔政事要略五十九〕太政官符五畿內七道諸國司

雜事三箇條

一應下知諸國後移刑官令斷罪前司犯用官物三箇條事

國儲遇用助解由使 置未納受用公麻 無實不動用穀類穢等

右同前解僞謹檢案內件三箇條事太政官去延喜七年七月七日下午使符僞去延喜四年三月廿三日言上解僞太政官去昌泰三年八月十六日符僞太政官寬平六年十一月卅日下午刑部省符僞未得解由內外官人犯用借貸可依法斷罪天長二年五月廿七日式條已立而垂制之後寬縱不行官物減耗大概由斯今諸國不與解由狀所載負累彼此不同或欠失千計物既入已或無實萬數皆在民身尋其犯過輕重相殊而俱拘解由不許叙用論之公途實乖折中左大臣宣奉勅宜仰所司依式行之令彼負累之倫自知廉恥之節者事須內外諸司所申不與解由狀勘解由使勘判訖彼省待使局送以斷其犯

科

延曆十七年十月十九日○又見類聚國史、政事要略

〔新定内外官交替式〕下應徵免前司犯用欠損官物事

右獄令云、應徵官物者、准直五十端以上一百日、卅端以上五十日、廿端以上卅日、不滿廿端以下廿日、若無財以備者、官役折庸其物雖多、限止五年者、被右大臣宣稱奉勅諸國司等遷代之時、受領之日、雖奏欠物之狀、未聞填納之詞、濟政之道、何無終始、宜特加科責、不得更然、但徵物之法、其程差役、增加日數、令堪辨備者、凡國司等不存法令、令致此意、口靜言其由、寔須徵噴、何者在任之吏、只拘解由、無意徵物去職之人、自推難填、不愁拘留官倉罄空、職此之由、今須交替之日、勘定前司犯用欠負損失之物、隨即徵物役身、勿更延引、但有所執者、待報符到、始立徵限、然令文云、五十端以上一百日、既稱以上、無有其限、欠物雖多、其期百日、物則雖填、罪則易科、仍加寬恕、隨物增日、五十端以上二百日、一百端以上三百日、二百端以上四百日、三百端以上五百日、四百端以上六百日、五百端以上七百日、不滿○不滿下延五十端以下、自依常例、物填役了、乃聽放還、如有習常以致闕怠、科違勅罪、不聽減贖、遷代之官拘解由、其徵收物數、役身功程、每年附稅帳使言上、

弘仁十三年八月廿五日○又見類聚三代格

〔政事要略五十九〕交替式云、太政官符、未得解由、内外官人、犯用借貸、依法科罪事、

右勘解由使起請稱、太政官延曆四年七月廿四日、騰勅符僞、夫正稅者、國家之資、水旱之備也、而比年國司、苟貪利潤、費用者衆、官物減耗、倉庫不實、職此之由、自今以後、嚴加禁止、其國司如有一人犯用、餘官同坐、並解見任、永不叙用、贓物令其填納、遞相檢察、勿爲違犯、又交替式云、欠負官倉留連不付、及知情許容、限內無領者、依法科罪、即徵其贓者、今檢格式、犯用之輩、事疑之日、即須論罪、而頃年之間、偏拘解由、不論其罪、事涉疎漏、違犯不絕、大概由斯、望請内外諸司所申、不與解由狀內、若其借貸犯用之徒、

〔日本後紀二十四〕弘仁六年二月辛亥、越中國介正六位上大伴宿禰黑成、據正六位上多治比真人清雄、少目從七位下和邇部臣眞嗣等免、以盜官物也、其守從五位上藤原朝臣鷹養大目正六位上上村主乎加豆良、以身卒死勿論其罪、

犯用官物

〔類聚三代格十二〕太政官符

禁斷犯用官物事

右被右大臣宣稱奉勅夫正稅者國家之資、水旱之備也、而比年國司、苟貪利潤、費用者衆、官物減耗、倉廩不實、職此之由、宜自今以後嚴加禁止、其國司如有_一人犯用餘官同坐、並解見任、永不叙用、贓物令其填納、不在免死逢赦之限、遞相檢察、勿爲違犯、其郡司和許、亦同國司、

延曆四年七月廿四日○又見續日本紀

〔類聚三代格十二〕太政官符

一禁犯用官物名公文乘事

右田租地子、出納有限、正稅雜用、色數非一、如聞_一奸吏之輩、不憚憲章、心挾貪濁、就事截留、至有剽微田租、過取地子、剽取物直、折減糧貨、贓污多端、積習無悛、不設科條、何以懲肅、其來年正月以後、若有犯者、計贓科罪、一同隱蔽出舉之坐、解却見任、永不叙用、

一禁官交易物失時致損事

右時物有貴賤、充價異高下、夏施秋穀、色類既多、如聞諸國交易、先立沽價、貴時強與、賤價賤時詐注貴直、遂事割截、枉規利潤、蠶民害政、莫甚於斯、宜改前過、不得重犯、仍候物賤之時、充和市之價、依實申官、不得_一奸截、如有不悛、罪同上條、

以前被右大臣宣稱奉勅、凡厥具僚、並應簡擇、既居祿位、理合清勤、或有情殉_一贓私、多違憲法、類經誠勵、未聞_一後懲泣辜之仁、雖則切於解網、刑故之典、誠不獲已、而爲宜懸勸誨喻、各令自勵、如猶違犯、必處重

坐贓

乞物、借貸役使、實買有乘利之屬者、各減官人、身自犯二等。官人知情與同罪、不知情者、各減家口罪五等、謂官人不知情者、雖與家口口罪五等、謂准身其在官非監臨、謂里長坊長坊令者、有掌自犯得減二七等、其在官非監臨之屬、此爲在官非監臨、及家口有犯者、各減監臨及監臨家口一等。法曹至要抄罪上科、一枉法、不枉法、受所監臨坐贓事、

雜律云、坐贓致罪者、一、笞十、一端加一等、十二端徒一年、十二端加一等、罪止徒三年、與者減五等、注云、謂非監臨主司、因事受財者、

案之坐贓致罪、假如被人侵損備償之外、因而受財之類、兩和取與、於法並違、故與者減罪五等、

〔唐律疏議〕十九諸監臨主守自盜及盜所監臨財物者、若親王財物、而加凡盜二等、三十四匹絞、有知情者、亦累加之、

監守盜

〔日本書紀〕三十七年四月辛巳、詔內藏寮允大伴男人、坐贓降位二階、解見任官、典鑑置始多久、與苑野

大伴亦坐贓降位一階、解見任官、監物巨勢邑治、雖物不入於己、知情令盜之、故降位二階、解見任官、然置始多久、有勤勞於壬申年役之故、赦之、但賊者依律徵納、

〔續日本紀〕九元正〔養老六年四月庚寅〕詔曰、周防國前守從五位上山田史御方、監臨犯盜、理合除免、先經

恩降赦罪已訖、然依法備賊家無尺布、朕念御方負笈遠方、遊學蕃國、歸朝之後、傳授生徒、而文館學頗解屬文、誠以不矜若人、蓋墮斯道、歟、宜特加恩寵、勿使徵賊焉、

〔類聚國史〕八十七延曆十二年三月己酉、正親大令史正六位上多治比真人彌高、散位從六位上櫻島

部石守、並除名、以彌高監主取官物、石守投匿名書也、

〔類聚國史〕八十四延曆十四年閏七月丁未、武藏國司介從五位下勳六等都努朝臣筑紫藤呂云々等、

並免官、以隱截官物也、

〔類聚國史〕八十四延曆二十一年正月戊寅、免常陸國前司守從四位下勳三等三諸朝臣大原等、隱截

稻廿一萬六千九十束、

例丁 卽役使非供已者，謂在公家驅使者，計庸坐贓論罪，止杖一百，其應供已驅使而收庸直者，罪亦如之。

不得過冊人每人不得過五日每人者指所借使之人縱雖總數層人若於一身借使過五日即仰監臨之罪止合供身罪使使法不令收冊而收之供已求輸冊直者不坐謂有公案若有吉凶借使所監臨者直亦坐贓論罪止杖一百故云亦如之

總數不得過五冊。其於親屬雖過限及受饋乞貸皆勿論。謂親屬別食或有限外臨候及受饋親屬初五等
每人不得過五日。謂財物飲食或有乞貸皆勿論。
以上及三等以上婚姻之家貧役使依法無罪餘條親屬准此。謂三部內屬之親屬悉依五等以上

〔律疏職制〕凡豎臨之官強取猪鹿之類者依強取豎臨財物法謂豎臨之官於所部內強取禽獸及酒食菓菜之類者計贓准枉法論乞取

〔律疏〕職制凡率歛所監臨財物饋遺人者雖不入己以受所監臨財物論謂事人歛物或以身率人以倍取財物饋遺人者雖不入己併取

(律疏)凡貨所監臨財物者坐贓論謂監臨之官於所部貨財物若百日不還以受所監臨財物論謂爲其逐日不還以受所監臨
 財物強者各加二等謂以威若力而強盜者百日內坐贓論加二餘條強者准此謂如下條私役使及借

等但一部律內，本條無強取罪名，並加二等，故於此例，所貸之物，元非輕特入之，雖經恩免，仍減三等，服還纔不經恩，償訖事發亦不，合罪，爲貸時，本許酬償，不立例，悔過還主，故也。若所受之贓，悔過仍減三等，服前費用，准法不減，貸者較賣買有乘利者，計利以之，又盜竊財勿論，謂官人於所部、賁物及屬市者，皆

後仍徵，徵故放，放免罪。若賣買不乘利者，計利以乞取罪，因則物計時估有乘利者，引下未合得罪。法律思時不如然，論故也。所爲市者，雖不入已，既有乘利，誠強賣買，不得無理，舍從不違得爲。五十，謂以威者，力強買物者。有乘利者，計利准枉法論，謂假有官人賣人，或市司而爲市，知乘利之情，及後徵，徵故放，放免罪。若賣買不乘利者，計利以乞取罪，因則物計時估有乘利者，引下未合得罪。法律思時不如然，論故也。所爲市者，雖不入已，既有乘利，誠強賣買，不得無理，舍從不違得爲。

准官人應坐之罪。百杖以下，所市之人從輕答罰；徒罪以上，從重杖八十，仍不得重於官人知情應得之罪。若市易已訖，官人知情，即斷契有數違負不還過五十日，以受所監臨財物論。謂官人於所部市易，斷罪家人所知，知情之法，情斷契有數違負不還過五十日，以受所監臨財物論。謂官人於所部市易，斷罪家人所知，知情之法，情斷契有數違負不還過五十日，以受所監臨財物論。

物只類至多不可具舉故云之屬借經廿日不
還者坐贓論止徒一年服勞

〔律疏〕凡監臨官家口於所部有受乞借貸役使賣買有乘利之屬各減官人罪二等於部內有受財

府史家口及於府史家內取財或折衝府官人唯管衛士若姦衛士家口及於衛士家內取財皆同
監臨之法內外不管家口之司姦及取財皆準此

問曰假有主帥於所部衛士家盜物得同於監臨內取財以否

答曰主帥於所部衛士統攝一身既非取受之財盜乃律文不攝止同常盜不是監臨

稱主守者躬親保典爲主守雖職非統典臨時監主亦是

疏議曰主司謂行案典吏專主掌其事及守當倉庫獄囚雜物之類其職非統典者謂非管攝之司

臨時被遣監主者亦是

〔日本書紀^{二十五}〕大化元年八月庚子詔國司等曰○中○介以上奉法必須褒賞違法當降爵位判官以

下取他貨賂二倍徵之遂以輕重科罪

〔續日本紀^九〕神龜元年十月乙卯散位從五位下息長真人臣足任出雲按察使時贖貨狼藉惡其景

迹奪位祿焉

〔日本後紀^{十七}〕大同四年三月丁未前上總介石川朝臣道成大掾千葉國造大私部直善人並授本位

道成從五位下善人外從五位下在任之日贓汙狼藉並追位記矜有其老舊之勞故忖復焉

受舊官屬饋與

〔律疏^{職制}〕凡去官而受舊官屬士庶饋與若乞取借貸之屬各減在官時三等舊官屬謂前任所僚佐士

役使之類各減在官時三等謂家口未離本任所者若其乞索者從因官挾勢乞索之法

於使所受遠道

〔律疏^{職制}〕凡官人因使於使所受遠道及乞取者與監臨同謂官人因使於所使之處受遠道財物經過

處取者減一等謂非所詣之處因使經歷之所乞取者所糾彈之官不減謂糾彈之官人所長懼雖經過之處

罪之

私用所監臨財

〔律疏^{職制}〕凡監臨之官私役使所監臨及借奴婢牛馬車船碾邸店之類各計庸貨以受所監臨財物

論庸船以下准貨以受所監臨財物論強者加二等其借使人功計庸一日布二尺六寸人有強服力役

〔令集解二十三〕名例律會赦及降者盜詐枉法猶微正賊餘賊非見在及收贖之物限內未送者並從赦降原

〔律疏賊盜〕

強盜賊

〔律疏賊盜〕凡強盜謂以威若力而取其財先強後盜先盜後強等者與人藥酒及食使狂亂取財亦是即得園遺之物賊擊財主而不還及竊盜發覺并財逃走財主追捕因相拒捍如此之類事有因緣者非強盜

○註不得財徒二年一尺徒三年二端加一等十五端及傷人者絞殺人者斬殺傷人者斬亦同雖非財主但因盜殺傷者是○註其持仗者雖不得財遠流十端絞傷人者斬

〔律疏賊盜〕凡竊盜不得財笞五十一尺杖六十一端加一等五端徒一年五端加一等五十端加役流

竊盜賊

枉法賊
不枉法賊

〔律疏職制〕凡監臨之官受財而枉法者一尺杖八十二端加一等卅端絞為曲法處斷者不枉法者一尺杖七十三端加一等卅端加役流

事後受財

〔律疏職制〕凡有事先不許財事過之後而受財者事若枉准枉法論事不枉者以受所監臨財物論司推勘之時有事先不許物事了之後而受財者事若曲法准前條枉法科罪既解准枉法論

以財行求

〔律疏職制〕凡有事以財行求得枉法者坐贓論不枉法者減二等為曲法處斷者坐贓二等即同事共與者首則併贓論從者依已分法謂數人同犯一事出財者依已分法從

〔律疏職制〕凡受人財而為請求者坐贓論加二等謂非監臨之官監臨勢要准枉法論與財者坐贓論減三等謂受他人之財許為屬請未屬事發者止從坐贓之罪若無心屬請聽受財自依詐欺科斷其受所監臨之財為他司屬請律無別文只從坐贓加二等罪止中流即重於受所監臨者未屬事發止同受所監臨財物者若官人以所受之財分求餘官元受者併贓論餘各依已分法謂官人初受初受者併贓論餘各依已分法

〔律疏職制〕凡有所請求者笞五十謂從主司求曲法之事謂凡是公事各依正理即為人請者與自請同謂為人請者雖主司許者與同罪謂然其所主司不許及請求者皆不坐謂主司不許曲法及已施行非已事與自請同

〔律疏職制〕凡有所請求者笞五十謂從主司求曲法之事謂凡是公事各依正理即為人請者與自請同謂為人請者雖主司許者與同罪謂然其所主司不許及請求者皆不坐謂主司不許曲法及已施行非已事與自請同

〔律疏職制〕凡有所請求者笞五十謂從主司求曲法之事謂凡是公事各依正理即為人請者與自請同謂為人請者雖主司許者與同罪謂然其所主司不許及請求者皆不坐謂主司不許曲法及已施行非已事與自請同

〔律疏職制〕凡有所請求者笞五十謂從主司求曲法之事謂凡是公事各依正理即為人請者與自請同謂為人請者雖主司許者與同罪謂然其所主司不許及請求者皆不坐謂主司不許曲法及已施行非已事與自請同

〔律疏職制〕凡有所請求者笞五十謂從主司求曲法之事謂凡是公事各依正理即為人請者與自請同謂為人請者雖主司許者與同罪謂然其所主司不許及請求者皆不坐謂主司不許曲法及已施行非已事與自請同

〔律疏職制〕凡有所請求者笞五十謂從主司求曲法之事謂凡是公事各依正理即為人請者與自請同謂為人請者雖主司許者與同罪謂然其所主司不許及請求者皆不坐謂主司不許曲法及已施行非已事與自請同

〔律疏職制〕凡有所請求者笞五十謂從主司求曲法之事謂凡是公事各依正理即為人請者與自請同謂為人請者雖主司許者與同罪謂然其所主司不許及請求者皆不坐謂主司不許曲法及已施行非已事與自請同

主ニ還ス、倍賊トハ盜賊ニ限ルコトニテ、布一尺ヲ盜ムトキハ二尺ヲ償ハシメテ主ニ還スガ如キヲ云フ、而ルニ人ノ盜ミタルヲ盜ミタル倍賊ハ、盜人ニ償フベキ理ナケレバ、沒官スルナリ、又計賊不計賊ノ別アリ、計賊トハ賊物ヲ計ヘテ、其多少ニ因リテ罪ヲ科スルヲ云フ、不計賊トハ、大祀神御物ヲ盜ミ、禁兵器ヲ盜ムガ如キ、賊物ヲ計ヘズシテ罪ヲ科スルヲ云フ、又賊ヲ併セテ論ズト云フコトアリ、例ヘバ十人ニシテ布十端ヲ盜メバ、一人ゴト二十端ヲ盜ム罪ヲ得ルナリ、又正賊見在スル者ハ官主ニ還シ、已ニ費用スル者死刑ニ遭ヒ、及ビ配流セラル、トキハ徵スルコトナシ、此賊ノ中ニ倍賊ノ事ハ、既ニ孝德天皇ノ朝ニ見エ、坐賊ノ名ハ、持統天皇ノ朝ニ見エタリ、

名稱

〔類聚名義抄三〕賊音カグスカグス

〔令義解一〕賊贖贖見司

正一人掌懲飲略○註配沒略○註賊贖謂非理取財曰賊贖亦同也、出金當理曰贖入公入關遺雜物註

略事、

〔令集解二十〕朱云、問賊賄入已、未知若六、賊、歟、答然也、

〔唐律疏議四〕諸以賊入罪、正賊見在者還官主轉易得他物及生

疏議曰、在律正賊唯有六、色、強盜、竊盜、枉法不枉法受所監臨、及坐賊、自外諸條皆約此六、賊、爲罪、但以此賊而入罪者正賊見在、未費用者、官物還官、私物還主、轉易得他物者、謂本賊是贓、延易得

馬之類、及生產蕃息者、謂婢產子、馬生駒之類、○中

已費用者、死及配流勿徵別犯流及身死者疏餘疏徵之若計庸貨爲賊者亦勿徵疏會赦

及降者、盜詐枉法、猶徵正賊疏餘賊非見在及收贖之物限內未送者、並從赦降原、

〔政事要略八十二〕名例律云、以賊入罪、正賊見在者還官主、已費用、人身死、及配流勿徵、

シテ財ヲ得タルヲ云フ、枉法賊、不枉法賊トハ、監臨ノ官部下ノ人ノ財ヲ受ケテ、是ガ爲メニ法ヲ曲ゲテ處斷スルト、財ヲ受クレドモ法ヲ曲グズシテ處斷スルトヲ云フ、受所監臨賊トハ、監臨ノ官、公事ニ因ラズシテ監臨内ノ財物ヲ受クルヲ云フ、坐賊トハ、監臨主司ニアラズシテ、事ニ因リテ財ヲ受クルヲ云フ、例ヘバ人ノ侵損ヲ受ケテ備償ノ外ニ餘分ノ財ヲ受クルガ如キ是ナリ、監臨主司トハ、唐雜律疏議ニ、謂統攝案驗及行案主典之類トアリテ、統攝トハ内外諸司ノ長官ヲ云ヒ、案驗トハ判官ヲ云ヒ、主司トハ主守ノコトニテ主典ナドヲ云フ、此六賊ノ外ニ、初メハ財ヲ受ケズシテ、事過ギテ後ニ受クル者事アル時ニ財ヲ以テ行求スル者、人ノ財ヲ受ケテ其人ノ爲メニ請求スル者官人受クル所ノ財ヲ以テ、餘官ニ分チテ其事ヲ遂ゲンコトヲ求ムル者監臨ノ官人、私ニ部内ノ人ヲ役使シ、及ビ奴婢牛馬ノ類ヲ借り、猪鹿酒食瓜果ノ類ヲ強取スル者、部内ノ財物ヲ率斂シテ、人ニ饋遺スル者、率斂シテ人ニ饋メ、因テ其餘ノ人ナシテ從テ財ヲ出サシメ、或ハ人ナシテ率先シテ財ヲ出サシメ、監臨スル所ノ財物ヲ借り、若シクハ賣買シテ利利アル者、監臨官ノ家口、部内ニ於テ財ヲ受ケ物ヲ乞ヒ、借貸役使シ、賣買シテ利利アル者、官ヲ去リテ後ニ舊官屬士庶ノ饋與ヲ受ケ、乞取借貸スル者官人其使セル所ニ於テ送遺ヲ受ケ、乞取借貸スル者官人其統攝等ノ勢ヲ挾ミ、若シクハ鄉閭豪強ノ人乞索スル者私物ヲ以テ官物ト貿易スル者官物ヲ以テ私ニ自ラ借り、及ビ人ニ借シ、人ヨリ借ル者ノ如キハ、皆六賊ノ類ナリ、而シテ監臨主守自盜ハ、凡盜ニ二等ヲ加ヘテ處斷ス、又彼此俱罪ノ賊及ビ人ノ盜ミタル物ヲ盜メル倍賊ハ、沒官シ、取與不和ノ賊、乞索ノ賊ハ主ニ還ス、彼此俱罪ノ賊トハ、與フル者モ受クル者モ共ニ罪ヲ得ベキ賊ニテ、枉法賊、不枉法賊、受所監臨賊、坐賊ノ如キ是ナリ、取與不和ノ賊トハ、恐喝シ、或ハ詐欺シテ財ヲ取リ、若シクハ強市シテ利利アルガ如キヲ云フ、乞索ト是トハ與フル者罪ナケレバ、其賊ハ本

之由而尙可開之由依有上官仰令開已畢而今違式早不開之由被勘當無所避申者謹檢弘仁式云、左衛門府注云右衛門府亦准此大儀其日寅二刻云々大伴氏五位一人注云右佐伯氏率門部三人入自掖門居會昌門內左廂貞觀式云左衛門府注右衛門府亦准此尉一人率門部三人尉居門下今案開門畢還本陣下雜律云違令者笞五十別式減一等名例律云同司犯公坐者長官爲一等次官爲一等判官爲一等主典爲一等其闕无所承之官亦依此四等爲法疏云公坐謂无私曲又條云六議六曰議貴注云三位以上又條云六議者犯流罪以下減一等又云五位以上犯流罪以下減一等又條云七位以上犯流罪以下各從減一等之例又條云應議請減者犯流罪以下聽贖又云笞卅贖銅三斤者據此等文於會昌門左右衛門率門部等可開之由式條已存而件府官人執申以府門部不開之由然而依上官仰遂以開門早不開之由進承伏狀畢是尤犯違式罪者也但事无口須依坐法爲等違忤爲首笞卅身帶三位議減一等笞卅合贖銅三斤佐二人爲第二從減一等笞卅各帶五位請減一等笞廿各合贖銅二斤尉五人爲第三從減一等笞廿各贖銅二斤或是五位或帶六位至五位者請減一等於六位者例減一等各笞十合贖銅一斤志五人爲第四從減一等笞十帶六位例減一等可无其罪仍勘申者從二位行大納言兼右近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣師輔宣奉勅宣依件徵納者宜承知依宣行之符到奉行

從五位上守右少辨兼左衛門權佐源朝臣並正六位上行右少史御立維宗

天慶九年八月七日

附六 賊 雜 賊 罪 入

賊トハ、理ニアラズシテ人ノ財ヲ取ルヲ云ヒテ、正賊ハ強盜、竊盜、枉法不枉法受所監臨、及ビ坐賊ノ六色ナリ、其餘是ニ類セル者ハ、皆此六色ニ約シテ罰ス、強盜、賊、竊盜、賊トハ、強盜、竊盜

依此四等爲法。又條云五位已上犯流罪以下減一等。又條云七位已上犯流罪以下各從減一等之例。又條云應議請減及八位已上犯流罪已下聽贖。據檢此等文府司須四月以前貢進而違官符旨延及七月計其日數既過罪止徒一年仍以少貳源朝臣精御室朝臣安常爲第二從杖一百並帶從五位上請減一等各杖九十合贖銅九斤大監平高平少監多治有友爲第三從杖九十高平帶正六位上例減一等杖八十合贖銅八斤有友帶正八位上合贖銅九斤少典清科金棟帶從七位上例減一等杖七十合贖銅七斤豐井安基帶正八位下合贖銅八斤。○本文有誤說今據本及類聚國史補

〔政事要略八十二〕太政官符刑部省

應徵納右衛門府贖銅拾貳斤事

參議從三位兼行督讚岐守源朝臣高明 贖銅參斤

權佐從五位上橘朝臣好古 贖銅貳斤

佐從五位上小野朝臣道風 贖銅貳斤

大尉從五位下藤原朝臣守人 贖銅壹斤

權少尉正六位上源朝臣忠光 贖銅壹斤

少尉正六位上藤原朝臣倫事 贖銅壹斤

少尉正六位上藤原朝臣忠周 贖銅壹斤

權少尉正六位上藤原朝臣助信 贖銅壹斤

右得大判事兼行民部少輔明法博士惟宗朝臣公方等勘申狀稱右少史御立維宗仰云少辨源朝臣俊傳宣大納言藤原朝臣師輔宣奉勅去四月廿八日御卽位。○村右衛門早不開會昌門依之進過狀畢宜仰明法博士等令勘申其罪狀者檢彼府去五月十一日所進過狀稱去月廿八日早不開會昌門狀右會昌門須任式差遣府門部令開而依延長七年正月一日朝拜日記誤一度執申以府門部不開

各從減一等之例此名減章七位以上及祖父母父母妻子女孫犯流罪以下聽贖此名
亦不得減故云從減一等之例此章

【律疏名例】凡應議請減及八位動十二等以上若官位動位得減者之父母妻子犯流罪以下聽贖此名

應議請減者謂議請減三等內人亦若應以官當者自從官當法議請以下人自有官者自從官當其加役

流反逆緣坐流罪反逆子孫犯過失流罪而殺祖父母父母妻子女孫者不孝流罪者殺祖父母及會赦

猶流者案賊盜律云遺者妻妻殺殺井同居家口及殺令入亦遺流其遺畜妻妻殺殺四等罪無官並依下

文配流如法有官者仍各不得減贖除名配流如法贖除名仍配流如法有三品以下及取贖者並不得減

除名至配所免居作也各不得減贖除名配流如法贖除名仍配流如法有三品以下及取贖者並不得減

三年家無兼丁者依下除名者免居作配流之人有官者即本罪不應流配而特配者雖無官亦免居

作加杖免役故云依下除名者免居作配流之人有官者即本罪不應流配而特配者雖無官亦免居

殺傷應徒若故毆人至癡疾應流男夫犯盜罪徒以上及妻妾犯奸者亦不得減贖過失殺祖父母父母

疾應流故云二以上其於二等親尊長及外祖父母夫夫之父母犯過失殺及傷應合徒者故毆人至癡

同及妻妾現奸者並亦不得減贖之義有官者各從除免官當法夫犯盜罪徒以上及妻妾犯奸者並合除名

其於二以上應贖之長更無配役之文即有故贖者凡人至癡疾應流者止如加官流反逆流罪不配流此三

徒以下有應贖之長更無配役之文即有故贖者凡人至癡疾應流者止如加官流反逆流罪不配流此三

流會降並聽收贖其子孫犯過失流罪會降亦不得贖何者文云於二等以上尊長犯過失應徒不得減

贖其子孫會降聽收贖其子孫犯過失應徒不得贖何者文云於二等以上尊長犯過失應徒不得減

會降灼然不免者

【律疏名例】凡婦人有官位犯罪者各依其位從議請減贖當免之律

【律疏名例】凡五位以上妻犯非八虐者流罪以下聽以贖論若犯非八虐流罪以下聽以贖論其贖雖不配

及合贖者亦不在贖限若妻自干孫及取餘親隆者假犯八虐聽依贖例

【律疏名例】凡一人兼有議請減各應得減者唯得以一高者減之不得累減假有身是皇帝故傷合議減

七位合例減此雖三處俱合減罪唯若從坐減減首從者減一等自首減而自首贖減二等故失減判判

兼有議請減

婦人處刑

四曰議能、謂有大才藝、謂能整軍旅、花政事、鹽

五曰議功、謂有大勳功、謂能斬將奪旗、摧鋒萬里、或率衆歸化、寧濟

六曰議貴、謂三位以上、

〔唐律御調〕享保十年已十二月获生惣七エ訂正寫點被仰付候節差出候書付

八議之內議勤、議賓之二條を除而六議に仕候是は日本は百王一姓之國に而國賓と申事無之
故議賓之一條を除き候、其相伴に議勤をも除候と相見へ申候、

議法

〔律疏 名例〕

凡六議者犯死罪皆條所坐及應議之狀先奏請議議定奏裁、此名議、章六議人犯死罪者、皆

〔律疏 名例〕

賢能應議之狀、先奏請議、議者原情驛罪、罪定刑之律、而不正決之、原情驛罪者、謂其本情、謂其親故

〔律疏 名例〕

依令於官集議議定奏裁、議者原情驛罪、罪定刑之律、而不正決之、原情驛罪者、謂其本情、謂其親故

〔律疏 名例〕

之內唯云、准犯依律合死、不敢正言絞斬、故云不正決之、流罪以下減一等、其犯八虐者不用此律、依常斷、其犯八虐者、死罪、不得上

〔律疏 名例〕

罪、故云不用此律、議流罪以下不得減

〔律疏 名例〕

以上犯死罪者上請四位以下及勳四等以上、此請、謂條其所親及應請之狀、正其利名奏請、條其所犯

〔律疏 名例〕

等以上應請之狀、正其利名者、謂條其所犯、律合絞斬、奏請、條其所犯、律合絞斬、奏請、條其所犯

〔律疏 名例〕

人、監守內奸他妻妾盜略人受財枉法者、不用此律、流罪以下減一等、其減訖各依本法若犯八虐及殺

〔律疏 名例〕

奸他妻妾盜略人受財枉法者、此等請人、死罪不合上請、流罪以下減一等、其減訖各依本法若犯八虐及殺

〔續日本紀 二十三年〕

天平寶字五年三月己酉草原王坐以刃殺人賜姓龍田真人流多檄島男女六人、復

〔律疏 名例〕

令相隨草原王者三品忍壁親王之孫從四位下山前王之男天性凶惡喜遊酒肆時與御使連麻呂博

〔律疏 名例〕

飲忽發怒刺殺屠其股突便置竹上而脰之及他罪狀明白有司奏請其罪帝以宗室之故不忍致法仍

〔律疏 名例〕

除王名配流、

議法

〔律疏 名例〕

凡七位勳六等以上及官位勳位得請者之祖父母、父母、妻子、孫、此孫不、及曾玄、犯流罪以下、

ベキニ、又其父三位ニシテ請減スベク、又其身分七位ニシテ例減スベキトキハ議減スルナリ、サレドモ從坐減自首減、故失減、公坐相承減ノ如キハ、議請減ノ類ヲ以テ累減シテ、各又更ニ一等ヲ減ズ、從坐減トハ、其ニ罪ヲ犯シタルトキ、造意者ヲ首トシ、從者ハ一等ヲ減ズルヲ云フ、自首減トハ、法ヲ犯シテ、人ノ訴ヘントスルヲ知り自首スルトキハ、二等ヲ減ズルヲ云フ、故失減トハ、官蔭ナキ人ナド、笞杖ヲ犯ストキハ決スベク、徒流ヲ犯ストキハ配スベキニ、斷罪ノ人收贖ヲ聽シ、又官蔭アル人ナドハ贖スベキニ、斷罪ノ人決配スルトキハ、故ナレバ、故ニ一等ヲ減ジ、失ナレバ、失ニ一等ヲ減ズルガ如キヲ云フ、公坐相承減トハ、公坐ハ公罪ノコトニテ、同司公罪ヲ犯ストキニ、若シ判官ノ斷罪、失出^{失出ハ有罪ヲ無ニ由レバ、五等ヲ減}放チテ後ニ又獲レバ、又一等ヲ減ジ、合セテ六等ヲ減ジ、次官七等ヲ減ジ、官長八等ヲ減ジ、主典九等ヲ減ズルヲ云フ、是等ハ累減スルヲ得ルナリ、

凡テ議請減贖ノ法ハ、贈位外位ハ正位ト同ジク、職事ノ初位ハ八位ト同ジク、父ノ蔭ヲ用キルナドハ、其父ハ已ニ亡セリトモ存生ト同ジ、又婦人ノ官位アル者ハ、男子ト同ジク議請減贖當免ノ法ニ從ヒ、五位已上ノ妾、流罪ヲ犯ストキハ、贖ヲ以テ論ズ、又此議請減ノ人ノ爲メニハ、拷訊セズシテ、衆證ニ據リテ罪ヲ定メ、流以上、若シクハ除免官當ヲ犯ストキハ、貶禁スル等ノ諸法アリ、此外ニ老幼癡篤疾請贖ノ法アリ、

〔律疏〕六議

一曰議親、謂皇親、及皇帝五等以上親、及太皇太后、皇太后四等以上親、^{太皇太后者、皇帝祖母也、皇太后者、皇帝母也、皇后三}等以上親、

二曰議故、謂故舊、^{謂宿得二侍見特蒙二接遇歷久者、}

三曰議賢、謂有大德、行、^{謂賢人君子、言、行、可爲法則者、}

少輔判事、太政官ニ集リ、其犯罪ヲ議定シ、其奏狀ニハ、犯ニ准ジ律ニ依ルニ死罪ニ當レリトノミ記シテ、絞トモ斬トモ正決セズシテ、更ニ上聞スルナリ、カク議定スベキヲ以テ又應議者ト云フ、

請トハ、六議者ノ祖父母、父母、伯叔父姑、兄弟姊妹、妻子、姪、孫若シクハ四位五位及ビ勳一等以下四等以上ノ人ヲ云ヒテ、是等ノ人、死罪ヲ犯ストキハ、乃チ六議者ノ父母ナリ、或ハ四位ナリ等ト條錄シテ、其所犯ハ律ニ准ズルニ絞ニ當リ、斬ニ當レバ、其刑ニ行ハント奏請スルナリ、カク奏請スベキヲ以テ應請者ト云フ、

減トハ、六位七位、勳五六等ノ人、及ビ官位^{四位}、勳位^{四位}以下、ノ應請者ノ祖父母、父母、妻子、孫ヲ云ヒテ、是等ノ人流以下ノ罪ヲ犯ストキハ、例シテ一等ヲ減ジ、三流ハ俱ニ杖一百トシ、杖一百ハ九十トシ、杖九十ハ八十トスルナリ、但シ應議者モ、應請者モ、流以下ハ一等ヲ減ズ、因リテ應議者ノ減罪ヲ議減ト云ヒ、應請者ノ減罪ヲ請減ト云ヒ、是ヲ例減ト云フ、カク減ズベキ例ナルヲ以テ、又應減者ト云フ、

贖トハ、應議請減者及ビ八位、勳七等以下、十二等以上ノ人、若シクハ官位^{六位}、勳位^{五位}等、ノ應減者ノ父母妻子ヲ云ヒテ、是等ノ人流罪以下ヲ犯ストキハ、贖ヲ聽シ、罪ノ輕重ニ因リテ銅ヲ納メシム、但シ官アル人ハ官當ノ法ニ從ヒ、先ヅ官ヲ以テ罪ニ當テシメ、罪輕クシテ、官ヲ以テ當ツルニ足ラザレバ、贖ヲ收ム、

此議請減贖ノ人モ、犯罪ノ狀ニ因リテ、此法ノ如クナルヲ得ザルコトアリ、ソハ應議者ノ八虐ヲ犯シ、應請者ノ八虐、及ビ人ヲ殺シ、監守内ニテ他ノ妻妾ヲ奸ス等ノ罪ヲ犯シ、議請減贖ノ人ノ五流等ヲ犯ストキハ、常律ノ如クスルナリ、又身ニ議請減ヲ兼テ、何レモ減罪ヲ得ベキ人ハ、一ノ高キ者ヲ以テ減ジテ累減スルコトヲ得ズ、即チ其身天皇ノ故舊ニシテ議減ス

〔政事要略八十四〕名例律云同居若三等以上親及外祖父母子○子唐律若孫之婦夫之兄弟及兄弟妻有罪相爲隱同同居謂同財共居不異籍之同異雖非五等以上親並是以上諸親及親俱家人奴婢爲主

隱皆勿論家人奴婢主不爲隱爲主即漏露其事及隨語消息亦不坐爲之通相隱故亦不坐其四等以下親相隱減凡人三等四等五等親俱有死罪隱減凡人二等猶從二年減其罪爲之通相隱故亦不坐其四等以下親相隱減凡人三等四等五等親俱有死罪隱減凡人二等猶從二年減其罪爲之通相隱故亦不坐其四等以下親相隱減凡人三等四等五等親俱有死罪隱減凡人二等猶從二年減其罪

〔論語子路〕葉公語孔子曰吾黨有直躬者其父攘羊而子證之孔子曰吾黨之直者異於是父爲子隱子爲父隱直在其中矣

〔唐律疏議名例〕諸同居若大功以上親及外祖父母外孫若孫之婦夫之兄弟及兄弟妻有罪相爲隱疏議曰同居謂同財共居不限籍之同異雖無服者並是若大功以上親各依本服外祖父母外孫若孫之婦夫之兄弟及兄弟妻服雖輕論情重故有罪者並相爲隱反報隱此等外祖不及曾高外

孫不及曾玄也部曲奴婢爲主隱皆勿論疏議曰部曲奴婢主不爲隱聽爲主隱非謀反以上並不坐

附六議請減贖併入

六議トハ議親議故議賢議能議功議貴ノ六ナリ議親トハ天皇三后ノ親族ヲ云フ議故トハ久シク天皇ニ侍シテ特ニ接遇ヲ蒙レル者ヲ云フ議賢トハ大德行アル者ヲ云フ議能トハ大才藝アリテ能ク軍旅ヲ整ヘ政事ニ蒞ミナドスル者ヲ云フ議功トハ國家ノ爲メニ大勳功アル者ヲ云フ議貴トハ三位以上ヲ云フ此六議者ハ死罪ヲ犯ストキハ刑部省ヨリ太政官ニ申シ太政官ヨリ先ヅ死ニ當レル罪狀ト親故等ニ係レルヲ以テ必ズ其罪狀ヲ議スベキノ狀トヲ錄シ奏聞シテ議センコトヲ請ヒ勅許ヲ得テ後ニ大納言以上及ビ刑部卿大輔

重犯

テ、若其監主爲犯、雖造意仍以監主爲首ノ十五字アリ、

〔律疏名例〕凡犯罪已發及已配而更爲罪者各重其事、訖已發謂已破音言、其依令應三審者、初告亦是發、

而累科之事、卽重犯流者依留住法決杖於配所役三年、依雜戶留住法決杖配所役三年、至前所、而更犯流者、

遠流一百六十、仍各於配所役三年、通前犯流應役一年、若已至配所更犯者亦准此、犯流者亦準上解留、

遠流四年、若前犯常流後犯加役流者亦止總役四年、若更犯流徒罪者准加杖例、徒役三年、

住法決杖配所役三年、通前犯流應役一年、若已至配所更犯者亦准此、犯流者亦準上解留、

遠流四年、若前犯常流後犯加役流者亦止總役四年、若更犯流徒罪者准加杖例、徒役三年、

住法決杖配所役三年、通前犯流應役一年、若已至配所更犯者亦准此、犯流者亦準上解留、

遠流四年、若前犯常流後犯加役流者亦止總役四年、若更犯流徒罪者准加杖例、徒役三年、

住法決杖配所役三年、通前犯流應役一年、若已至配所更犯者亦准此、犯流者亦準上解留、

遠流四年、若前犯常流後犯加役流者亦止總役四年、若更犯流徒罪者准加杖例、徒役三年、

住法決杖配所役三年、通前犯流應役一年、若已至配所更犯者亦准此、犯流者亦準上解留、

遠流四年、若前犯常流後犯加役流者亦止總役四年、若更犯流徒罪者准加杖例、徒役三年、

住法決杖配所役三年、通前犯流應役一年、若已至配所更犯者亦准此、犯流者亦準上解留、

遠流四年、若前犯常流後犯加役流者亦止總役四年、若更犯流徒罪者准加杖例、徒役三年、

住法決杖配所役三年、通前犯流應役一年、若已至配所更犯者亦准此、犯流者亦準上解留、

遠流四年、若前犯常流後犯加役流者亦止總役四年、若更犯流徒罪者准加杖例、徒役三年、

二罪俱發

〔政事要略八十〕名例律云、二罪以上俱發以重者論、若一罪先發已經論決、餘罪後發其輕若等勿論、

重者論之通計前非以充後數、

〔唐律疏議六名例〕諸二罪以上俱發以重者論、罪應重者、唯具條其狀、不累輕以加重、若重、

疏議曰、假有甲任九品一官犯盜絹五匹、合徒一年、又私有稍一張、合徒一年、半、又過失折人二支、

合贖流三千里、是爲二罪以上俱發、從私有禁兵器、斷徒一年半、用官當訖、更徵銅十斤、既犯盜徒、

罪仍合免官、是爲以重者論、

注、謂非應累者唯具條其狀、不累輕以加重、

疏議曰、以上三事、並非應累、斷者雖從兵器處罪、仍具條三種犯狀、不得將盜一年徒罪累於私有禁兵器一年半徒上、故云不累輕以加重、所以具條其狀者、一彰罪多、二防會赦、難犯死罪、經赦得原、盡毒流刑逢恩不免故也、

昌泰三年二月九日

文章博士三善朝臣清行

謹謹上 左相府 殿下 政所

〔本朝世紀〕康和五年十二月廿日乙丑、正四位下行木工頭兼丹波守高階朝臣爲章卒、中寬治七年八月廿八日、親父近江守爲家朝臣、坐凌轢春日神民事、除名配流爲章、依爲長男可有緣坐、然而依臨時之恩、不坐、四男阿波守爲遠一人停見任、非常斷、人主專之義也。

〔百練抄五〕細河長治二年十二月廿九日、前太宰權帥季仲、除名配流周防國、緣坐之輩、同流罪、嘉承元年二月十七日、前帥季仲改周防配流常陸、謀大逆者可處遠流、而依爲中流也、又息男刑部少輔懷季、少納言實明解官大逆者子不可居侍衛官之由、人々定申之故也、主上御藥之間、依有其禁、重有沙汰也。

共犯

〔政事要略六十七〕名例律云、其犯罪而本罪別者、雖相因爲首從、其罪各依本律首從論、

〔唐律疏議五〕名例、諸共犯罪而本罪別者、雖相因爲首從、其罪各依本律首從論、疏若本條言皆者、罪

無首從、不言皆者從首從法、疏即強盜及姦略人爲奴婢、犯闌入若逃亡及私度越度關棧垣籬者、

亦無首從、

〔政事要略六十九〕勘檢非違使於京內城外遇可致致下疑脫致下疑人之時可下馬哉否事、

被仰云、中名例律云、其犯罪者以造意爲首從者減一等、

〔唐律疏議五〕名例、諸共犯罪者以造意爲首、隨從者減一等、若家人共犯、止坐尊長、於法不坐者、歸罪於其次尊長、尊長謂男

夫、

疏議曰、其犯罪者謂二人以上共犯、以先造意者爲首、餘並爲從、家人共犯者謂祖父伯叔子孫弟姪共犯、唯同居尊長獨坐、卑幼無罪、

○按ブルニ、戶令集解ニ、家人共犯、只坐尊長ノ八字アリ、政事要略卷五十九ニ、戶婚律ノ疏ヲ引

〔律疏名例〕卽緣坐家口雖已配沒罪人得免者亦免。謂反逆人家口含緣坐沒官人於後蒙恩得免緣坐免法但是謀反大逆罪極誅夷罪人既不會赦緣坐亦不合與去取之宜皆隨罪人爲法其謀叛上道及殺一家非死罪三人支解人緣坐罪及家口其惡不同反逆又律文特顯反逆緣坐爲與八唐同科不得稍減坐不同教養者八唐不配流如法自緣坐流並得減贖不除名雖云合流得減贖者明卽與反逆緣坐不同教養者八唐不配流如法自緣坐流並得減贖不除名雖云合流得減贖者明卽

〔令抄考課〕緣坐家口 父母妻子并子之妻謂之家口

〔續日本後紀〕仁明嘉祥元年十二月己丑刑部少輔和氣朝臣齊之依犯大不敬當絞刑勅減一等流伊豆國 乙卯大判事外從五位下讚岐朝臣永直坐和氣齊之事配流土佐國

〔三代實錄〕貞觀八年九月廿二日甲子是日大納言伴宿禰善男右衛門佐伴宿禰中唐同謀者紀

豐城伴秋實伴清繩等五人坐燒應天門當斬詔降死一等並處之遣流。中相坐配流者八人從五位

上行肥後守紀朝臣夏井配土佐國。中有異母弟豐城夏井以其放誕數加督責豐城苦之遂託身大

納言伴宿禰善男應天門火善男坐以男中唐行火燒之父善男應知之焉豐城爲善男之從夏井爲豐

城之兄轉相緣坐被處遠流夏井隨使出境肥後民遮路悲哭如喪考妣夏井私歎曰凡法律所謂首從

之坐必有差降子是從之兄亦緣坐也今與善男同配遠流何其無別哉

〔本朝文粹〕奉左丞相時平藤原書

善相公

近日京中大小皆云外帥道眞門弟子在諸司者可被左轉其文章生學生皆被放逐云々由是人々

悲哭踟躕而立伏以此事變轉未必殿下之本意也但外帥累代儒家其門人弟子半於諸司若皆遷謫

恐失善人加之惡逆之主猶處輕科至于門人唯請益受業而已豈有知其謀乎方今紛亂之間擾攘之

會宜立其陰德塞怨門若咎過多則怨門且多若寬宥大則陰德亦大伏望非衛府供奉闕戍兵要之職

家司近親同謀凶黨之人則皆無轉動示以仁厚又式部丞平篤行此後進之英髦也殿下屢稱其才頗

有歲月焉故雖編外帥之門徒常感殿下之知己而今乍聞此語晝夜悲泣若失此人恐墜此文重望賜

其氣色私寬慰聊傳恩裕之旨以繫才士之心謹啓

一子分法。留還。假有一人年八十。有三男十孫。一孫反逆。或一男見在者。依令。作三男分法。添老者一人。即爲四分。若三男俱死。唯有十孫者。依令。請于均分。老人共十孫。爲十一分。每留一分。與老者。是爲各准一分。其出養入道者。並不追坐。出養者。從所養。坐僧尼及婦人。若官戶。隸戶。家人。公私奴婢。犯反逆者。止坐其身。

〔孟子〕二 齊宣王問曰。王政可得聞與。對曰。昔者文王之治岐也。耕者九一。仕者世祿。關市譏而不征。澤梁無禁。罪人不挐。

〔漢書〕二十三 秦用商鞅連相坐之法。造參夷之誅。師古曰。參。夷。三旗。

〔漢書〕九 九年十二月行如雒陽。賈高等謀逆發覺。逮捕高等。并捕趙王。教下獄。詔敢有隨王罪。三族。限晏曰。父母兄弟妻子也。如淳曰。父族母族妻族也。

〔律疏〕賊盜 凡謀反及大逆者皆斬。略 父子若家人資財田宅並沒官。略 年八十及篤疾者並免。祖孫兄弟皆配遠流。不限籍之同異。即雖謀反。詞理不能動衆。威力不足率人者。亦皆斬。略 父子並配遠流。

資財不在沒限。略 其謀大逆者絞。略

〔律疏〕賊盜 凡謀叛者絞。略 已上道者皆斬。略 子中流。若率部衆十人以上。父子配遠流。

〔唐律疏議〕三十 諸緣坐應沒官而放之。及非應沒官而沒之者。各以流罪故失論。

疏議曰。賊盜律。謀反及大逆人子。年十五以下。及母女妻妾。妻妾亦同。若祖孫兄弟姊妹。並沒官。

男。夫年八十及篤疾。婦人年六十及癯疾。並免。出養入道。及聘妻未成者。並不追坐。若應沒而放。應放而沒。各依流罪。以故失論。謂反逆緣坐流三千里。沒官罪重。須用三千里流法。若故同故出入三

千里流。若失同。失出入三千里流。釋放者。應沒遺流。與全放無別。應流遺沒。得罪亦同。

〔律疏〕名例 凡犯八虐故殺人反逆緣坐。八虐。謂謀反。已殺。說亦同。餘條稱以。謀殺。故殺。論及。平從。放殺。法。等殺。說。

人。奴。婢。經放。爲其家人。奴。婢。等。非。案。賊。盜。律。殺。一。家。非。死。罪。三。人。注。云。奴。婢。家。人。非。其。故。殺。舊。家。本。應。緣。坐。老。疾。免。者。亦。同。謂。緣。坐。之。中。有。年。八。十。及。篤。疾。者。免。緣。坐。之。罪。身。有。官。獄。成。者。雖。會。赦。猶。除。名。略 下

一百成吉等在殺人處不助救准律條各處杖一百刑部省覆斷云國斷有失何者案律闕而用力卽有害心仍處斬刑但不同於故殺而引故殺及用兵力殺等之文此國司之謬斷也又淨子詞云成吉等與春貞美都良麻呂相關之場雖以言詞相諫而遂不救淨子聞春貞之叫纔知被刺然則成吉等醉中不覺美都良麻呂害春貞之心非聞告而不助見刺而不救者也仍改斷無罪斷獄律云官司斷罪失於入者減三等名例律云五位及七位以上犯流罪以下各減一等判斷之失既由判官仍正七位下行據高階真人全秀正六位上行左近衛將監兼權據藤原朝臣房雄爲首全秀身帶七位例減一等合杖六十贖銅六斤房雄遙授不預其事合免其罪從五位下行介藤原朝臣有年爲第二從減四等合杖六十身帶五位請減一等合笞五十贖銅五斤參議正四位下行右衛門督兼守藤原朝臣良繩從四位上行皇太后宮大夫兼權守藤原朝臣良世爲第三從亦是遙授合免其罪正六位上行大目秦忌寸安統正七位上行少目阿岐奈臣安繼爲第四從減六等合笞四十身帶七位以上例減一等合笞三十贖銅三斤

〔類聚三代格〕太政官符

應出納官物國司史生已上隨犯科罪事

右得近江介從五位上藤原朝臣春景解狀稱出舉收納并下雜稻等事官長不得獨自巡檢仍分遣史生已上令行其事而或心挾貪濁常事費用或身受賂遺多致虛納格云一人有犯餘官同坐郡司和許亦同國司者今依此文事發之時共陷重罪苛酷之甚更亦何言謹案律條不知情者不入其罪者望請所欠之物相共填納所坐之罪獨科其身然則奸源自絕官物無損謹請官裁者從三位守大納言兼左近衛大將行陸奥出羽按察使藤原朝臣基經宣奉勅表請自餘諸國亦宜准此

貞觀十四年七月廿九日

○又見三代實錄政事要略

緣坐

〔律疏賦〕凡緣坐非同居者資財田宅不在沒限雖同居非緣坐及緣坐人子應免流者各准分法留還緣坐人子謂兄弟之子據律亦不緣坐各准分法老疾得免者各准一分法內應分人多少人別得准留還謂未經二分異犯罪之後並准戶令依分法

〔政事要略六十一〕禮儀非違分別事

名例律曰同司犯公坐者長官爲一等次官爲一等判官爲一等主典爲一等注曰同司者謂連判之官及主典疏云假如刑部省斷事有違卽卿是長官輔是次官丞是判官錄是主典是爲四等

〔令集解四〕見名例律云次官以上異判有失者止坐異判以上官者

〔唐律疏議五〕諸同職犯公坐者長官爲一等通判官爲一等判官爲一等主典爲一等各以所由爲

首○疏若通判官以上異判有失者止其闕無所承之官亦依此四等官爲法卽無四等官者止準見官爲罪○疏略若同職有私連坐之官不知情者以失論卽餘官及上官案省不覺者各遞減一等下官

不覺者又遞減一等亦各以所由爲首○疏減開首減者從檢勾之官同下從之罪應奏之事有失勘讀及省審之官不駁正者減下從一等○疏略若辭狀隱伏無以驗知者勿論

〔類聚三代格十二〕太政官符

禁斷犯用官物事

右被右大臣宣稱奉勅夫正稅者國家之資水旱之備也而比年國司苟貪利潤費用者衆官物減耗倉廩不實職此之由自今以後嚴加禁止其國司如有一人犯用餘官同坐並解見任永不叙用贓物令其填納不在免死逢赦之限遞相檢察勿爲違犯其郡司和許亦同國司

延曆四年七月廿四日○又見續本紀

〔三代實錄十三〕貞觀八年十月廿五日丙申太政官論奏曰刑部省斷罪文云讀岐國浪人江沼美都良

麻呂殺香河郡百姓縣春貞妻秦淨子申訴云美都良麻呂於春貞宅相共飲酒言論相鬪春貞叫曰吾爲美都良麻呂被刺之驚而見之血出自左脇卽死同郡人秦成吉等與春貞美都良麻呂等同飲之人也而相鬪之場雖以言詞相諫而遂不相救助國司斷云鬪毆殺人者絞以刃及故殺人者斬雖因鬪而用兵刃殺者與故殺同准犯據律合斬刑者又捕亡律云隣里被殺人告而不助救者杖

〔令義解^十〕凡婦人在禁，皆與男夫別所。

〔令義解^十〕凡禁囚，死罪枷紐婦女及流罪以下去桎。○中懷孕保儒之類，雖犯死罪亦散禁。

〔令義解^十〕凡婦人在禁，臨產月者。謂家女及婢，亦准責保聽出。所聽也。死罪產後滿廿日，流罪以下，

即追禁，即知杖罪以上也。問流移之人，當上道時，妻妾隨產月，如何養家？上律流移因在路，有產後滿卅日，並即追禁，不給程。

〔律疏^{名例}〕凡婦人有官位犯罪者，各依其位從議，請減贖當免之律。

凡五位以上，妾犯非八虐者，流罪以下聽以贖論。

〔法曹至要抄^上〕一不拷訊事

斷獄律云：婦人懷孕犯罪，應拷及決杖笞，若未產而拷決者，杖八十。傷重者依前人。○前入下唐律有「不合二字」，

法失者各減二等。○失者各減二等，唐律產後未滿百日而拷決者減二律，一作一等。

〔唐律疏議^{三十}〕諸婦人犯死罪，懷孕當決者，聽產後一百日乃行刑。若未產而決者，徒二年。產訖限未

滿而決者，徒一年。失者各減二等。其過限不決者，依奏報不決法。

〔令義解^十〕凡婦人犯死罪，產子無家口者。謂離家口者，亦同家口例。付近親收養，無近親付四隣，有欲養為子者，

雖異姓皆聽之。前近親四隣之外，欲養為子者，既非兄弟之

〔律疏^{名例}〕凡雜戶、隸戶犯流者，近流決杖一百，一等加三十，留住俱役三年。○中

杖還依本色。其婦人犯流者，亦留住。婦人之法，例不罰流，故犯流者，配流如法。在道者，

遺處，經其根本，故雖婦人，亦須投寬縱令嫁向中華，事發還從配遣，並依流配之法。三流俱役一年，設使

遇恩亦不合免。婦人教令遺棄者，只得教令坐不問身。自遺棄，自依常犯科。明家賊律，遺棄妻者，雖會

教，不留同居，不知情，亦流。但是諸條犯流，如杖配，配之以下，有遺棄妻，並須遺放於離近流決杖六十，一

戶等留住，下立制云：遺棄妻者，配流如法。斯乃離戶以下，遺棄妻，不獨為婦人，生文。離近流決杖六十，一

等加廿俱役三年。婦人近流決杖六十，中流決杖八十，道流決杖一百，三流俱役三年。若夫犯流配者，聽隨

之至配所，免居作。婦人元不合，配以身死，婦人不合，從流，既得却還，不復更合居役。即是總更無罪，有官亦

六犯盜今年十七科罪仍依幼少時舊贖放免志博愛成者欽勵文

〔西宮記臨時書〕於市行事

勘申強盜三宅得正可着欽哉事

右得正強盜犯承伏過狀已畢而得正臂已切也可着欽哉者名例律云癘疾犯流罪以下收贖盜亦收贖疏云癘疾爲癘疾收贖盜既侵損於人故不許全免令其收贖不言強竊戶令云一支廢爲癘疾者至于癘疾縱強盜唯徵贖銅不可着欽仍勘申

寬弘四年五月十八日

右衛門少志尾張如春

防鳴河判官右衛門尉豐原爲時

左衛門少尉縣犬養爲政

〔西宮記臨時書〕於市行事

勘申秦安武可着欽哉否事

右別當宣稱安武依竊盜之犯今月廿二日承伏進過狀而其生年十七者可着欽哉宜勘申其由者名例律云七十以上十六以下犯流罪以下收贖疏云盜既侵損於人故不許全免○全令其收贖弘仁格云自今以後宜以十八爲中男者律條贖法以十六爲限格文年限以十八爲法今論安武之年齒須依格文之新判仍徵銅宜相贖偷盜之罪停欽不可配徒年之役仍勘申

寬弘五年十二月廿三日

左衛門少志伴維信

大志尾張如春

右衛門權少尉豐原爲時

左衛門少尉甘南備保資

大尉縣犬養爲政

〔律疏名例〕凡犯罪時雖未老疾而事發時老疾者依老疾論假有六十九以下娶妻年七十事發或無疾

十九以下犯反逆殺人應死八十事發或癡疾時犯罪癡疾後事發依上解收贖之法

事發進入勿論之色故云依老疾論者事發已後未斷然始老疾者應以贖論律以老疾不攝受刑故

節級優異七十者不能從役此後發在六十九至八十止始斷老疾者不可仍舊從役身依此是

內老疾依老疾論假有七十九犯加役流事發至八十止始斷老疾者不可仍舊從役身依此是

罪達格改若格輕聽從人與律及令務從輕法至於老疾者並得配流八十人其事發與斷相連者例從重

斷時成疾者得同疾法若事發時無病斷日加疾若在徒限內老疾亦如之假有六十九以下娶妻年七十

十又有配役時無病斷日加疾若在徒限內老疾亦如之假有六十九以下娶妻年七十

放犯罪時幼少事發時長大依幼少論上請十六時偷盜十七事發仍以贖論此名幼少時犯罪長大事

費依幼少論

〔令義解〕凡禁囚死罪枷杻婦女及流罪以下去桎其杖罪散禁謂不關木索唯禁其出入也案下錄別

市脫年八十十歲及癡疾懷孕侏儒之類雖犯死罪亦散禁

〔唐律疏議名例〕若老小及癡疾不合加杖無財者放免

疏議曰謂以上應徵贖之人若年七十以上十五以下及癡疾依律不合加杖勘檢復無財者並放

免不徵其部曲奴婢應徵贖者皆徵部曲及奴婢不合徵主

〔三代實錄光孝〕仁和元年十二月廿三日癸酉詔遺孀正少弱從五位下安倍朝臣肱主等於太宰府

推問事由刑部省處近成斬刑真道官當除名宗永朝臣宅年七十贖銅百斤連枝宗吉二人並近流中

略詔曰死罪宜減一等處之遠流自餘依省斷焉

○按ズルニ律ニ年七十以上ニシテ流罪以下ヲ犯スモノハ收贖ヲ聽スノ法アルニヨリテ宗

永ハ近流ニ處スベキヲ贖銅百斤ニ處セシナリ

〔西宮記臨時〕與審事附臨時着狀例并放免後罪囚人事

或記云長保三年五月廿二日着欽政見參官人云々着欽囚六人左阪上春丸強盜從者行不受今

一本作分十七去年十

〔影考館採集古文書〕謹言上 抑去歲以書狀令啓達候處則預御芳翰并金子如尊札拜領。頃也載也。再三薰披拜讀卷而懷之畢。仍去年申達候寅龍惡僧之儀當時公文之謀書罪過彌天。前代未聞。衆寮惡僧并信甲之諸會下任僧徒之法度。被仰付可有追放。自然許容之衆寮惡僧落居處有之者。可被處同罪候。關東諸衆寮江茂右之段急度相觸令申候。此等之趣於丈室侍者傳達惟幸。

季夏二日

龍雲寺
衣鉢閣下

永平寺祖球印

老幼癩疾犯罪

律疏 名例

凡年七十以上，十六以下，及癯疾、犯流罪以下收贖，上七及十癯疾爲矜老少疾，故流

當順上條，即言順章，此是罪以下聽順，此條及官犯加役流，反逆緣坐流，會赦猶流者，不用此律，至配所，免居作。

此等三流、特重罪犯，故總不許收贖，至配所免居作者，於其老少不墮服役，故免居作，其婦八十以上，十

歲以下及篤疾、犯反逆殺人應死者上請。此等年雖老少情狀雖累放反逆及殺人准盜及傷人亦收

人及盜既獲損於人故不許全免令其收贖文云盜及傷人收贖盜既不言強竊傷人不顧親疏爲

他人家人奴婢者，不合論罪。奴婢賤隸，唯於被盜之家稱人，自外諸縣不同。真王又例云：殺一家三人，爲

叔婢、明亦不論、其數父母、雖小及疾可矜、敢數者乃爲惡逆、或愚癡而有官者、各從官當余免法、若有官

官當除免之法，不得留官徵贖，致傷伯叔父。合除名，盜五端以上，合免官，貶凡人折支合官當之類。文云：

之文註
股除
免之法
止爲
於其
老疾
非
開故
輕其
罪但
難免
死罪
例不
當顧
雖是
有官
雖合
除名
既死
無

比被之交官有官被之例明其罪免當法止被流罪以下者錄以官折死是律外生文自第3例法則名

賈母見鳳姐兒，已成了十七歲，

以下，仍存配沒，故云不用此律，自有人意，今合主意，今才以所犯之罪，坐所教令，假令教七，盜小

自毆_二打_一及殺_三凡人_一之罪_レ不得_レ以_二犯_レ親_一之罪_一加_中於凡人_上。若有賄_レ賂_レ債_レ受_レ賄_レ者_レ債_レ之或老少自入、或旁人受

故云受國者懷。

1

1

三
三

11

12-4

2

往

公眾

图 2-2-1

— 2 —

1. 100

10

五

案之謂過失者耳目所不及假令投磚瓦彈射耳不聞人聲目不見人出而致殺傷其思慮所不致者謂本是幽僻之所其處不可有人投瓦及石誤有傷殺或共舉重物而力所不制或共昇險而足差跌或因擊禽獸而誤殺傷人者如此類皆爲過失之罪不同正犯微贖銅可入被殺被傷之家也謂疑罪者不用拷法之類證人參差非賊狀露驗難取信者隨其狀可徵贖銅但僧尼元無蓄財物卽過失疑罪俱可放免

不應爲
〔金玉掌中抄〕一不應爲罪事

雜律云不應得爲而爲之者笞卅事理重者杖八十

件罪律令無條理不可爲者○又見政事要略

化外人犯罪
〔法曹至要抄即上〕一化外事

名例律云化外人同類自相犯者各依本俗法異類相犯者以法律論說者云假如百濟同類相犯也又云依其俗法斷之者依本土法制而死刑以下並斷行耳但使還日具狀通告耳又云笞杖爲決徒爲役流留住亦爲決杖釋云卽如與化內人相犯并犯此土制法者皆依法律斷耳說者又云徒役未畢欲發者加杖發遣也

案之假令百濟客同類相犯之類也問彼土制法於此斷決但笞杖者可決徒者可役流者留住亦可決杖卽使還日可條報本國官職之輩可除免官當者且爲追毀位記也又高麗與百濟相犯之類是異類相犯之類也以法律可論也施行法亦以同前

僧尼犯罪

〔令義解僧尼〕凡僧尼上觀玄象假說災祥語及國家妖惑百姓謂天文爲玄象也非真曰假也天反時爲災也吉凶先見爲祥也過誤爲妖也百姓謂國家也言假說之語謂誘人主也妖惑百姓者以假說之言惑一人以上其自觀玄象至惑百姓總是一事相須得罪也若上觀玄象所說有實及非觀玄象說他災祥并難謂玄象而不惑人者并習讀兵書謂難不成業亦是書之而不習殺人奸盜謂若殺及奸盜未得者並依下條並及詐稱

得聖道謂四果聖人之道也並依法律付官司科罪謂不論罪之輕重皆先還俗何者案道僧格犯詐稱得聖道等罪不論成者與否會教續還俗故必先還俗其僧尼還俗猶俗人除

詐僞律云詐稱祖父母父母死以求假及有所避者徒一年半、

〔唐律疏議二十五〕

諸父母死應解官詐言餘喪不解者徒二年半若詐稱祖父母父母及夫死以求假及有所避者徒三年伯叔父母姑兄姊妹一年餘親減一等若先死詐稱始死及患者各減三等、

〔唐律疏議二十六〕

諸姦父祖妾謂曾孫有父祖子者伯叔母姑姊妹子孫之婦兄弟之女者絞即姦父祖所幸婢減二等、

○按ズルニ金玉掌中抄ニ父祖ノ妾ヲ姦スルヲ徒二年半トセリ、

〔律疏賤盜〕

凡謀殺詔使若本主本國守及吏卒謀殺本部五位以上官此者徒三年官戶奴婢與吏卒同餘條准此官長謂官戶奴婢等當條無罪名並與吏卒同已傷者遠流殺者皆斬、

〔唐律疏議二十三〕

即毆傷見受業師加凡人二等死者各斬謂伏脅圖業而非法學名者、

○按ズルニ我國ニテハ私學ノ師モ大學國學ト同ジトセリ事ハ上文名例律八虐ノ條ニ見ユ、

〔吾妻鏡九〕文治五年九月六日癸亥河田次郎持主人秦衡之頸參陣岡令景時奉之以義盛重忠被加實檢上召囚人赤田次郎被見之處秦衡頸之條申無異儀之由仍被預此頸於義盛亦以景時被仰令

河田云汝之所爲一旦雖似有功獲秦衡之條自元在掌中上者非可假他武略忽忘請第恩鼻主人首科已招八虐之間依難抽賞爲令懲後輩所賜身暇也者則預朝光被行斬罪云云、

〔金玉掌中抄〕一疑罪事

斷獄律云疑罪各依所犯以贖論注云疑謂虛實之證等是非之理均或事涉疑似旁无證見或旁有聞

證事非疑似之類○又見政事要略、

〔法曹至要抄罪上科〕一過失疑罪事

鬪訟律云過失殺傷人者各依其狀以贖論斷獄律云疑罪各依所犯以贖論○中又條云應議請減若

年七十以上十六以下及癡疾者並不合拷訊皆據衆證定罪刑部式云僧尼不可拷訊據衆證可定罪

失殺者各勿論、

○按ズルニ此條上ニ引ケル金玉掌中抄ニ在リテ祖父母父母ヲ言ル者ヲ徒三年トス、

〔裁判至要抄〕二處分子孫財子孫死後輒不返領事

戸婚律云祖父母父母在而子孫別籍異財者徒二年若祖父母父母令別籍者徒一年子孫不坐說者云已異後不可悔還、

〔唐律疏議〕^{十二}諸祖父母父母在而子孫別籍異財者徒三年^{別籍異財不相須下}若祖父母父母令別籍及以子孫妄繼人後者徒二年子孫不坐、

〔唐律疏議〕^{十三}諸居父母及夫喪而嫁娶者徒三年^{嫁娶者}妾減三等各離之知而共爲婚姻者各減五等不

知者不坐^{○疏略}若居期喪而嫁娶者杖一百卑幼減二等妾不坐、

○按ズルニ金玉掌中抄ニハ父母ノ喪ニ居リテ嫁娶シ夫ノ喪ニ居リテ改嫁スルヲ共ニ徒二年トス上ニ見エタリ、

〔律疏〕^{職制}凡聞父母若夫之喪匿不舉哀者徒二年喪制未終釋服從吉若忘哀作樂自作遣人等徒一

年半雜戲杖八十^{○疏略}即遇樂而聽及參預吉席者各杖六十^{人謂父母之恩昊天莫報茶毒之極豈若聞喪}

從吉時若匿而不即舉哀者徒二年其嫡孫承祖者與父母同喪制未終^{謂父母及夫喪十三月內}釋

者參預吉席^{謂遇達禮宴之席參預其中者}聞祖父母外祖父母喪匿不舉哀者徒一年喪制未終釋服

從吉杖一百二等以下尊長各遞減二等卑幼各減一等^{謂聞二等尊長喪匿不舉哀者杖九十喪制未}

十^{喪制未終釋服從吉杖六十四等尊長喪匿不舉哀者五十}喪制未終釋服從吉杖八十^{喪制未終釋服從吉杖八十}

喪及釋服從吉各減常色尊長一等其妻既非尊長又殊卑幼在禮及詩比爲兄弟^{謂是卑幼若}

事喪者各從不舉之例又居二等親喪作樂及遣人作者律雖無文不合無罪從三等不應得爲從輕若未舉

〔法曹至要抄〕^{上科}一八虐事^{○中略}

七曰不孝^{○中略}

明法博士等重勘申兼盛罪名事○中

備中權守藤原朝臣○定申云條々疑難之中去年僉議之時八虐大社殿內不同損傷科間事等粗定申訖今辨申之趣還添疑殆先於宗廟寶殿之中傷人稽之典籍未知蹤跡訪之法律不設正條原其情可議罪歟於殿傷之科者起於忿爭雖非謀法至不敬之責者已有制度雖謂告舉此一事猶涉八虐何況流血者污寶殿之階遂及造替御膳者落神座之前不憚弄毀濫惡之甚豈爲難犯哉而殿科之外削而弃之今如辨申者於國有憾心毀壞之時其罪入八虐兼盛於朝廷無其心而光責有敵心縱難致毀壞之正犯猶可入八虐哉否能有議云々此條已起兼盛所犯先論此法之條有恐無益觸宗廟之事致其犯之者先例多難相存向朝廷誰有憾心哉時之碩學道之名儒具勘其罪狀未及此豫議雖無正文就比附因准之儀雖無本條依舉輕明重之法縱所爲重定決斷之理者也但寬治明法博士有真者博覽之儒也而爲實政有私其子細諸家記錄分明歟彼時引山田白金說并唐律釋所立之義是也群卿之僉議及再三諸道之勘文究淵源有真遂處罪科了前事不忘後事之師也今立彼義太無其由歟況又彼有真執論者以神輿或比大幣或比御在所今章久章行所立者雖毀壞寶殿猶可有八虐猶豫歟論其所案猶以懸隔憲章所指具見彼沙汰仍略文法聊引先例之許也世屬饒季人少信心神社之司動致怠慢而今舉正犯猶有其科聞見之者豈有所懼哉非當忘當時懲肅之法已似開向後奸濫之源宗廟安則國安國安則民不亂率由九章之先規宜慎四海之靜謐者歟○下

〔政事要略八十四〕關訟律云告祖父母父母者絞

〔唐律疏議二十三〕諸告祖父母父母者絞謂非緣坐之罪及謀叛以上而即嫡繼慈母殺其父及所養者殺其本生並聽告

〔唐律疏議二十二〕諸嘗祖父母父母者絞謂非緣坐之罪及謀叛以上而過失殺者流三千里傷者徒三年若子孫違犯敕令而祖父母父母毆殺者徒一年半以刀殺者徒二年故殺者各加一等即嫡繼慈養殺者又加一等過

思損議貴。○藤原道長此等罪戾之中、以涉乘輿爲重、即從一罪之例、入八虐之條、不論男女、不辨首從、須各除名、皆處絞刑、至于圖能、尤是加功之者也、依无差別之法、又同上件之輩、更令還俗、全以可坐、就日記檢案內爲文、不知之由、圖能辨申已了、而被下宣旨之旨、猶加犯人之列也、絲綸可有其由、結斷何任其意、仍法條所指、勘申如件、

寬弘六年二月八日

從五位上守大判事兼明法博士美麻那朝臣直節

從五位上行勘解由次官兼明法博士令宗朝臣允正

〔平戶記〕寬元三年四月十四日戊寅、今夕兼盛罪名事、法家陳狀可有仗議也。○中先是殿下○藤原良實御參云々、小時執柄、令出清涼殿、弘庇給頭中將依召參上、頻被催入々之遲參、頭中將來告召由、仍參弘庇、然間吉田中納言參加、聊有被尋仰之旨等、然間召之由、女房告申殿下、仍令參御前。○後給了、其後歸着小板敷、納言已下人々少々參加、不經程左府令參給、仍起此座、迴南殿方、左府令著仗座、給之後、諸卿多參着、召大外記師光有被仰事。○先是微音之間、不聞及師光退下之後、召官人、召文書、即持參、次第見下之如常見、參公卿可見、定文仍不注之、見了之間、仰左大辨召硯、即持參之、先是橫座座狹之間、依一上之仰、予起座、更着沓移着端座末、次依上宣左大辨讀申法家陳狀、太微音也、讀了如元卷之置座前、次依上宣次第定申之、各申詞可見、定文仍略之、取條書予、新相公、明法博士等辨申兼盛罪名事、卜申之、左大辨加申博士名字、納言已上只申兼盛罪名之由、拾遺相公。○藤原實季可入八虐哉、否卜申、八虎卜申之人々或成奇、或含咲、不可說々々々、後日人々云、豫參仗議之人、未知八虐末代之至、歟、虎字似虎字、仍存其由、歟、比興々々、定了一上被仰云、夜深了後、日可言上者、此事今者常儀也、然而端作者、可被書歟、今御所爲如何、世以奇之云々、又一逼定申畢之後、書之、疑難等可有許議事也、而無其儀、無音御早出如何、人々有傾氣、議定之間、恭禮門中數假板敷主上有御聽聞。○被、開闢以來、未有如此事、世以悲之云々、事了人々分散、予歸家、小時雞鳴也、人々申狀多之間、如此經程了、

除名

正五位下大中臣輔弘正神祇權大副

太政官下左京職符僞件人坐事配流佐渡國早仰被職令追進件位記者

從四位下荒木田宜綱

從五位上同清隆

從五位下同宜並

太政官符伊勢大神宮稱伴人等坐事配流伊豆常陸土佐國早仰被宮令取進件位記者

〔政事要略七〕勘申散位源朝臣爲文民部大輔同方理伊豫守佐伯朝臣公行妻及方理朝臣妻僧圖

能等罪名事○中略

謹檢賊盜律云有所憎惡而造厭魅及造符書呪咀欲以殺人者各以謀殺論減二等若涉乘輿者皆絞

疏云謂雖直求愛媚使得罪重於盜服御之物准例亦入八。虐罪無首從栗書云抄云三后不減至尊名

例律云稱乘輿者太皇太后皇太后皇后並同又云八虐一曰謀反注云謂謀危國家唐儒張云謀殺三

后並不得輕於宮闕若未行其三后此求愛媚涉乘輿五曰不道注云謂厭魅又賊盜律云謀殺人者徒

三年已傷者近流從而○而下律有加役流造意者雖不行仍爲首注云人殺者亦同唐儒宋云謀殺皇

親及議貴等無異父令依凡斷又名例律云六議一曰議親注云皇親及皇帝五等以上親及太皇太后

皇太后四等以上親皇后三等以上親六曰議貴注云謂三位以上又條云犯八虐獄成者雖會赦猶除

名注云獄成謂賊狀露驗者又云除名者官位勳位悉除課役從本色疏云謂出身以來官位勳位悉除

又云二罪以上俱發以重者論又云五位以上犯死罪者上請流罪以下減一等其犯八虐者不用此律

僧尼令義解云依律雜犯死罪者除名卽知僧尼犯死罪者亦先還俗然後處死者今件爲文朝臣方理

朝臣并公行朝臣妻等趣厭呪謀在殺害或擬奉危皇后○一原影中宮或似可害皇親○就成兼含惡心

應供奉之物未進御者各圖輕重減一等監當官司又各減一等故云並准此

〔律疏〕凡造御膳誤犯食禁者與膳徒三年謂造御膳者皆依食經有禁忌不得輒造若乾脯不得入黍米中芻菜不得和雜肉之類有所犯者與膳徒三年
若穢惡之物在食飲中杖一百簡擇不精減二等謂蘭米好者不品嘗者杖六十謂醃鹹苦辛之味不品嘗及應嘗不嘗俱得此

〔律疏〕凡御幸舟船誤不牢固者工匠徒三年謂皇帝所幸舟船造作工匠各以所由爲首謂造作以當時所由人爲首若不整飾及闕少者徒一年謂其舟船有不整頓修飾及在船搖撼之

〔律疏〕凡指斥乘輿情理切害者斬謂言議乘輿原情官議政事乖失而指斥乘輿者上請謂論國家法而因涉乘輿者與指斥乘輿情理非切害者徒二年謂指斥乘輿者對捍詔使而無入臣之禮者絞謂精與故律不定罪名臨時上請非切害者非公事詔勅別因他事私自開讀或毀因臣之禮既有所宣告對使拒捍之言者因私事圖競者非公事詔勅不于預詔勅者應從嚴罰本法

〔續日本紀〕元正養老六年正月壬戌正四位上多治比真人三宅麻呂坐誣告謀反正五位上穗積朝臣老指斥乘輿並處斬刑而依皇太子奏降死一等配流三宅麻呂於伊豆島老於佐渡島

〔日本書紀〕二十九四年四月丁亥小錦下久努臣麻呂坐對捍詔使官位盡追
〔萬葉集〕相聞安貴王歌一首并短歌

右安貴王娶因幡八上采女係念極甚愛情尤盛於時勅斷不敬之罪退却本鄉焉于是王意悼但聊作此歌也

〔續日本後紀〕十八嘉祥元年十二月己丑刑部少輔和氣朝臣齊之依犯大不敬當絞刑勅減一等流伊豆國乙卯大判事外從五位下讚岐朝臣永直坐和氣齊之事配流土佐國

〔本朝世紀〕康和五年八月十三日庚申左大臣內大臣以下諸卿參入被定申伊勢大神前禰宜荒木田宜綱神祇權大副大中臣輔弘罪科等件宜綱放火廳宮院并度々食議之旨被處真逆件罪科誣政由實清申所被行緣坐之罪也皆涉斬刑次被下輔弘解官宣旨次有配流事中

真逆由中

〔律疏疏〕凡盜大祀神御之物者中流謂供神御者大社神寶亦同謂供神御者其擬供神御謂營造未成者若養薦之具已饌呈者徒二年養薦謂祭帶酒餅之屬饌呈謂已入祀所經祀官省視者未饌呈者徒一年半若盜釜飴刀匕之屬並從常盜之法謂並不用供神故從常盜之法言之屬謂盤盂等器之類

〔律疏疏〕凡盜神聖者絞謂錢許之關契內印鑰鈴者遠流謂食利之而非行用者乘輿服御物者中流

謂供奉乘輿之物服過衣茵之屬異副等皆須監當之官部分擬進乃爲御物等而下脫眞字謂見服御用之衣副謂其擬供服御及供而廢闕若食將御者徒二年將御謂已呈監當之官擬供供而廢闕謂之爲作已供用事畢若食將御者謂御擬供食御及非服而御之物者徒一年半擬供食御謂未呈監當食已呈監當之官擬進而盜及食者擬供食御及非服而御之物者徒一年半之官及非服而御之物者各計贓以常盜論加一等

〔法曹至要抄上科〕一八虐事○中

六曰大不敬○中

詐僞律云僞造神聖者斬造內印者絞

〔唐律疏議許二十五〕諸僞造皇帝八寶者斬太皇太后皇太后皇后皇太子寶者絞皇太子祀寶流三千

里僞造不錄所里用但造即坐

〔三代實錄清和〕貞觀十三年十月廿三日乙丑太政官論奏曰越前國守從四位下弘宗王爲百姓所訴

增出舉之數欲私其息利左京人大初位下佐伯宿禰彌惠僞造內印刑部省斷曰弘宗身幸不更論罪

彌惠罪應絞刑詔絞刑宜減一等處之遠流

〔律疏疏〕凡合和御藥誤不如本方及封題誤者醫徒三年謂合和御藥須先處方依方合和不得差誤若誤不如本方及封題有誤等但一事有誤發即合徒三年料理簡擇不精者杖六十

類有精者杖六十未進御者各減一等謂應徒者從徒上減是名各減一等監當官司各減醫一等謂依令合

務少輔以上十人共內藥正等監視除醫以外皆餘條未進御及監當官司並准此謂下乘輿服御物但

是監當官司並於已進去進上各減醫理一等

加一等入於死過失殺傷者各減二等略即腰及妾略夫者杖八十若妾犯妻者與夫同腰犯妻者減妾一等略妾犯腰者加凡人一等殺者各斬餘條勝無文

〔法曹至要抄上〕一八 虐事略中

五曰不道

開認律云略中 又條云妻妾毆夫之父母者徒三年

〔唐律疏議開認〕十二 諸妻妾詈夫之祖父母父母者徒三年須男姑毆者絞傷者皆斬過失殺者徒三年

傷者徒二年半略即毆子孫之婦令廢疾者杖一百篤疾者加一等死者徒三年故殺者流二千里

妾各減二等過失殺者各勿論

〔政事要略八十四〕開認律曰告二等尊長外祖父母夫之祖父母雖得實徒一年

〔法曹至要抄上〕一八 虐事略中

五曰不道略中

開認律云略中 又條云告二等尊長外祖父母夫雖得實徒一年名例律贈位條疏云尊長謂伯叔父姑

兄姊是也儀制令五等親條釋云夫之父母爲二等尊者略律文又見

〔唐律疏議開認〕二十四 諸告期親尊長伯叔父外祖父母夫之祖父母雖得實徒二年其告事重者減

所告罪一等告之者親坐即誣告重者加所誣罪三等告大功尊長各減一等小功總麻減二等誣

告重者各加所誣罪一等略即非相容隱被告者論如律若告謀叛逆者各不坐其相侵犯自理

訴者聽下此條

〔政事要略八十二〕六曰大不敬略中

附釋云禮者敬之本敬者禮樂故禮運云禮者君之柄所以別嫌明微考制度別仁義責其所犯既大皆无兩敬之心故曰大不敬

故從放免依律老小篤疾無家口同流者放免其家雖無真口唯有家人口之例即以蠱毒毒同居者被毒之人父母妻妾子孫不知造蠱情者不坐依律被毒之人父母不知情者放免但有親兄弟大男流蠱以毒於知情父母既無不之制不知情者不坐又依律犯罪未發自首合原道蠱毒之家其賤一人先首蠱毒已成自新蠱毒雖會大赦仍從流

律疏賦鑒凡有所憎惡而造厭魅及造符書呪詛欲以殺人者各以謀殺論減二等謂有所憎嫌前人能詳悉或制作人身擊手轉足如此人字惡術厭勝事非一於二等尊長及外祖父母夫之祖父母結魅者或假託鬼神或妄行左道之類或呪詛欲以殺人者各從本殺法欲以疾苦人者又減二等各不減以故致死者各依本殺法謂以厭魅符書呪詛之故但因一欲以疾苦人者又減二等下親及凡人非外祖父母謀殺得子孫於祖父母父母家人奴婢於主者各不減即是二等尊長外祖父母減二等者謂從謀殺上減減四等叔父姑兄姊外祖父母父母夫之疾苦亦同謀殺之法不同減例其於伯叔父姑兄姊父母父母及主直求愛

編而厭呪者徒二年謂子孫於祖父母父母及家人奴婢若涉乘輿者皆絞服御之物准例亦入八虐即無從首

令抄併開訟律云凡毆兄姊者徒一年半傷者徒二年折傷者近流刃傷及折支若瞎一目者絞死者皆斬謂者杖八十伯叔父加一等即過失殺傷者各減本殺傷罪二等

唐律疏議開諸毆兄姊者徒二年半傷者徒三年折傷者流三千里刃傷及折支若瞎其一目者絞死者皆斬謂者杖二百伯叔父母姑外祖父母各加一等即過失殺傷者各減本殺傷罪二等

若毆殺弟妹及兄弟之子孫曾玄孫者各依本服論外孫者徒三年以刃及故殺者流二千里過失殺者各勿論

法曹至要抄上科一八虐事○中

五曰不道

開訟律云○中又條云妻毆夫杖一百妾犯加一等

唐律疏議開諸妻毆夫徒一年若毆傷重者加凡毆傷三等謂夫告死者斬謀略妻及妾犯者各

而祖父母父母毆殺者徒一年半以刃殺者徒二年故殺者各加一等即嫡繼慈養殺者又加一等過失殺者各勿論

○按ズルニ此條上ニ引ケル金玉掌中抄ニ見エテ祖父母父母ヲ毆ツ者ヲ皆斬トシ、言ル者ヲ徒三年トセリ、

〔政事要略八十二〕四曰惡逆○中疏云父母之恩昊天罔極嗣續妣祖承奉不輕梟鏡其心受敬同盡矣至親自相屠戮窮惡盡逆絕人理故曰惡逆穴云梟食母鳥也鏡食母獸也

〔癸聚國史八十七〕大同二年二月壬申左京人調田造庭繼殿父積之法律罪當斬刑而時屬諒闇不忍行誅特宥處遠流配伊豆國

〔續日本紀二十四〕天平寶字七年九月庚申河內國丹比郡人尋來津公開麻呂坐殺母配出羽國小勝柵戶

〔律疏賊盜〕凡殺一家非死罪三人同籍及二等親外祖父母爲一家即殺雖先後事應同斷或應合同斷而發有先後皆是奴婢家人非及支解人者前殺人而支解者皆斬子徒三年殺人之法事有多端但論同籍及二等親爲一家謂同籍不限親疏二等親雖別籍亦是即殺一家三人雖有先後發時應合同斷

非及支解人之事謂合同斷事發乃有先後者皆爲一時殺法應入不道殺一家三人之內兼殺奴婢家人者更支解者年或放燒而殺或殺時即焚燒者文雖不載支解者依例有犯各准其入不道若殺訖絕人後徒三年但有穿人奴婢殺一家三人或支解者依例有犯各准其入不道

〔律疏賊盜〕凡造畜蠱毒謂造合成蠱堪害人者及教令者絞造合成蠱毒謂傳毒可以毒害人故云謂同謀而造律不造畜者同居家口雖不知情者遠流謂所造及畜者不知情者同居家口不隱若里長坊令坊長亦言皆即有首從

同知而不糾者徒三年律文唯顯里長等罪不言國郡知情之法名無節制若知而不糾依國詔設律監臨之官知所部有犯法不舉造畜者雖會赦并同居家口及教令人亦遠流居家口共主其老小及疾不隱自存

八十以上十歲以下及篤疾無家口同流者放免同家口亦配無同居家口共主其老小及疾不隱自存

〔律疏〕 賊盜凡謀反及大逆者皆斬人君者與天地合德實命下臨事主而有較賢凶徒
 以上若事已彰顯一人行二人之法大逆者謂謀殺山陵父子若家人資財田宅並沒官其家人不同
 及宮闈各同正始謀大逆謂二人獨言將者罪無首從父子若家人資財田宅並沒官實財賊特官
 之奴婢各別罰年八十及篤疾者並免祖孫兄弟皆配遠流不限籍之同異即雖謀反詞理不能動衆威
 財故不別罰年八十及篤疾者並免祖孫兄弟皆配遠流不限籍之同異即雖謀反詞理不能動衆威
 力不足率人者亦皆斬謂結謀謀實而不為害者不配職率得人顯有反謀無能為害者亦皆斬故注
 云謂結謀實者若自述休微假託靈異妄稱兵馬虛說反由傳惑衆人無真狀可驗者自從疑注父子並
 配遠流資財不在沒限逆事彰顯之後始說正之須從本宗緣坐刑法從於開坐一律不在緣坐之限若反
 夥從新中違法之輩已誦朝章雖經其謀大逆者絞上文大逆即誦逆事已行此為謀而未謀毀大社者
 大無注須正之即凡人不得為親其謀大逆者絞上文大逆即誦逆事已行此為謀而未謀毀大社者
 徒一年毀者遠流

〔律疏 賊盜〕凡謀叛者絞。謂欲背本朝。將投外國。始謀未行。事發者首處絞。從者遠流。已上道者皆斬。謂臨同謀計乃坐。被驅率者非。餘

條號「驅率」准此。時者和被驅率者不坐。同共作謀計此等各依謀叛之法。被驅率者非謂元本不共知情。但被驅率之人并効因之類。子中流以下合順。若率部衆十人以上父子配逐流所率雖不滿十人以故爲害者以十人以上論。害謂有所攻。靡掠者。上攻。或擊城。固因節拒守。自便。反法。即亡命山澤不從追喚者以謀叛論。謂脅誘之人亡命其抗拒吏者以已上道論。雖身處斬子中流抗拒拒者以已上道論。雖十人。要須有害得罪。方與十人以上同。

[律疏略]凡謀殺祖父母父母外祖父母夫之祖父母父母者皆斬嫡母繼母伯叔父姑兄姊者遠流已傷者絞五等以上尊長者徒三年已傷者中流已殺者皆斬卽尊長謀殺卑幼者各依故殺罪減四等已傷者減二等已殺者依故殺法上文尊品謀殺卑幼當條無罪者各依故殺罪減四等已傷者減二等已殺者依放殺法合較之類言放殺法者謂卑依放殺法其首各依本謀論遺意雖不行仍爲首從者不行減行者一等但有伯叔數人之類殺獨子訖卽首合逆流從而加功合徒三年從者不加功徒二年半從者不行減餘者不復備文其應減者各依本罪上減

〔唐律疏議十二〕諸言祖父母父母者校讞者斬過失殺者流三千里傷者徒三年若子孫違犯敕令

偽造神璽詳律云、偽造神璽者斬

偽造內印同律云、偽造內印者絞

合和御藥誤不如本方職制律云、合和御藥誤不如本方者徒三年

造御膳誤犯食禁同律云、造御膳誤犯食禁者徒三年

合和御藥封題誤職制律云、合和御藥封題誤者徒三年

指斥乘輿情理切害同律云、指斥乘輿情理切害者斬

御幸舟船不牢固同律云、御幸舟船不牢固者工匠徒三年

指斥乘輿情理切害同律云、指斥乘輿情理切害者斬

對捍詔使同律云、對捍詔使無入臣之禮者絞

七曰不孝十一色

告祖父母父母同律云、告祖父母父母者絞

祖祖父母父母職制律云、即於祖父父母直求愛媚而厭視者徒三年

冒祖父母父母同律云、冒祖父母父母者徒三年

祖父母父母在別籍戶婚律云、祖父母父母在別籍者徒二年

祖父母父母在異財同律云、祖父母父母在異財者徒三年

居父母喪嫁娶同律云、居父母喪而嫁娶者徒二年

居父母喪作樂職制律云、居父母喪而作樂者徒一年

居父母喪釋服從吉同律云、居父母喪而釋服從吉者徒一年

匿祖父母父母喪同律云、匿祖父母父母喪者徒二年

居父母喪釋服從吉同律云、居父母喪而釋服從吉者徒一年

詐稱祖父母父母死詐稱祖父母父母死以求假及有所避者徒一年

居父母喪釋服從吉同律云、居父母喪而釋服從吉者徒一年

奸父祖妾雜律云、奸父祖妾者徒三年

算博士在列職制律云、算博士在列者徒一年

八曰不義八色

殺本主賊盜律云、殺本主者徒三年

殺本國守同律云、殺本國守者徒三年

殺受業師同律云、殺受業師者徒三年

殺本部官長賊盜律云、殺本部官長者徒三年

匿夫喪職制律云、匿夫喪者徒三年

夫喪作樂同律云、夫喪作樂者徒一年

夫喪釋服同律云、夫喪釋服者徒一年

夫喪作樂同律云、夫喪作樂者徒一年

居夫喪改嫁已上犯八虐之時本罪雖輕先以除名被行常統之令雖罪當答杖猶以入八虐

名例律八虐注云告伯叔父姑兄姊外祖父母夫夫之父母

開詔律云告二等尊長外祖父母夫者雖得實徒一年

謀殺伯叔父謀殺兄姊謀殺外祖父母謀殺夫謀殺夫之父母

名例律八虐注云謀殺伯叔父姑兄姊外祖父母夫夫之父母賊盜律云謀殺外祖父母夫夫之父

母者皆斬殺嫡母繼母已上二等尊殺伯叔父之姊殺夫之伯叔父殺夫之祖父母殺夫之姑殺繼

父同居

已上三等尊

殺從父兄姊殺異父婦

已上三等長

殺從祖祖父祖之兄弟殺從祖祖姑祖之姊妹殺從祖叔父祖之從父兄弟殺從祖姑

已上四等尊

殺夫之兄姊殺再從兄弟從祖伯叔父之子

已上四等長

殺妻名例律八虐不道條注云殺四等以上尊長及妻賊盜律云謀殺五等以上尊長者徒三年

已殺者皆斬開詔律云毆傷妻者減凡人二等死者以凡人論今案毆傷妻者不可入八虐殺畢後

可爲八虐

六曰大不敬十三色

毀大社賊盜律云謀毀大社者徒一年毀者道流今按謀毀者雜犯也已毀者可入八虐

盜大祀神御物賊盜律云盜大祀神御物者中流

盜神璽同律云盜神璽者絞

盜乘輿服御物同律云盜乘輿服御物者中流

盜內印同律云盜內印者道流

父子賊盜律云謀反者父子沒官年八十及篤疾者並免

兄弟同律云謀反者兄弟配沒官

資財同律云謀反者資財沒官

緣坐人知反情同律云知謀反大逆不告聞近官司被

二曰謀大逆謂謀毀山陵及宮闕賊盜律云謀大逆者絞

件等罪者謀反大逆罪法是同緣坐之文已見上文

三曰謀叛謂謀背國從僞賊盜律云謀叛者絞又云謀叛已上逆者皆斬于中流

四曰惡逆

毆祖父母父母同律云毆祖父母者皆斬

殺伯叔父殺姑姊父之姊殺兄姊

件罪外祖父母以上謀殺者不可處八虐殺訖之時可入八虐惡逆者常赦不免決不待時不道

者會赦合原唯止除名而已

五曰不道

殺一家非死罪三人賊盜律云殺一家非死罪三人皆斬子姪三年注云同籍及二等親外祖父母爲一家奴婢家人非

支解人賊盜律云支解人者皆斬

厭魅厭魅謀殺厭魅欲令疾苦

厭呪求愛媚殺伯叔父殺姑毆兄姊毆外祖父母毆夫毆夫之父母

名例律八虐注云毆伯叔父姑兄姊祖父母夫夫之父母

聞詛律云毆兄姊者徒一年半

告言伯叔父告言兄姊告言姑告言外祖父母告言夫告言夫之父母

祖孫同律云謀反者祖孫配沒官

家人同律云謀反者家人沒官

田宅同律云謀反者田宅沒官

被驅率者賊盜律注云被驅率者非

謀殺祖父母父母賊盜律云謀殺祖父母者皆斬

殺外祖父母殺夫殺夫之父母

造畜蠱毒同律云造畜蠱毒及教令者絞

使無心怨天，唯欲誣構人罪，自及對捍，誣使而無入臣之禮，謂奉詔出使，宣布四方，有人對捍，不恭，謂命依反，皇之法，不入八虐之條，自及對捍，誣使而無入臣之禮，謂奉詔出使，宣布四方，有人對捍，不恭，謂命者是道。

七曰不孝，謂告言祖父母、父母，本條直云告祖父母、父母，此注兼云告言父、母，不問其義一也，祖猶唯祖求愛，始入此條，依駭律，下孫於祖父母，求愛，而祖視者，徒二年，明視雖祖文，理乃祖不重，但祖視凡人，則不入不道，若視祖者，不入八虐，例云，求愛，而祖視者，則舉輕以明重，然視祖是輕，尚入不孝，祖視是重，及祖父母在，別籍異財，謂祖父母在，子孫就養無方，出告反面，無自專之道而有亦入此條，是重，及祖父母在，別籍異財，異財別籍，情無重孝之心，名義以之俱論，情節於持重并極之與禮，罪惡難容，二事既不相須，違者並當八虐，居父母喪，身自嫁娶，若作樂，釋服從吉，其居父母喪，身自嫁娶，皆謂自從得葬者，自嫁娶者，以願主婚不同八虐，故也，其男夫居喪娶妾，合免所居一官，女子居喪為妾，得減妻妾二等，雖不入不孝，若作樂者，自作遺人等樂，擊鐘鼓，奏絲竹，飽樂，鳴歌吹舞，飲樂之類，釋服從吉，謂喪制未終，而不續衣，而著吉服者，謂祖父母父母喪，歷不舉哀，詐稱祖父母父母死，依禮問親喪，以哭答使者，盡哀而殯，死，謂祖父母父母見在，而詐稱死者，若先死而詐稱始死者，非，若祖父母父母在，姦父祖妾，八曰不義，謂殺本主本國守，見受業師，本主者，業令親王及五位以上，得領內資人，於所事之主，名為本先去世，學並同見，吏卒殺本部五位以上，官長，吏卒殺本部五位以上，官長，並入此條，其及聞夫妻，歷不舉哀，受業師之例，見吏卒殺本部五位以上，官長，吏卒殺本部五位以上，官長，並入此條，其及聞夫妻，歷不舉哀，若作樂，釋服從吉，及收嫁，夫者，妻之天也，恩義既隆，喪節欲俱為八虐，其改嫁，居妻者非，赦除之，其八虐之內，已殺訖及強盜竊盜，常赦不免者，並不在赦例。

〔唐律疏議〕名四十惡

疏議曰：周齊雖具十條之名，而無十惡之目，開皇創制，始備此科，酌於舊章，數存於十大業有造後更刊除十條之內，唯存其八，自武德以來，仍遵開皇，無所損益。

〔金玉掌中抄〕一八虐罪事

一曰謀反，謂謀危國家，威律律云，謀反，緣坐。

智○天
二山陵也。

〔續日本紀考證文一武〕十惡唐律十惡、皇朝因用之

〔續日本紀文一武〕四年八月丁卯、敕天下、但十惡盜人、不在敕限。

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年閏十月辛卯詔略○中
犯死罪已下皆赦除十惡及盜不在赦限

〔續日本紀考證八德〕十惡案、大夏定律令、十惡改爲三

〔律疏名例〕八虐

一曰謀反謂謀_レ危_二國家_一心不_二敢_一指_レ斥_二尊_一節而有_二無_一君之

二曰謀大逆謂謀殺三山陵及宮闕

三曰謀叛謂謀_ニ背_レ國從_ニ僞_一謂_レ有人謀_ニ背_ニ本朝_一將_レ投_ニ蕃國_一或欲_ニ以_レ地外奔_一

四曰惡逆。謂毆及謀殺祖父母、父母、殺伯叔、父姑、兄姊、外祖父母、夫、夫之父母、叔。以下即擄殺之者

夫殺合，自常三不道，惡通者，常以不免，決不待時，不道也。殺合，自常三不道，惡通者，常以不免，決不待時，不道也。

五曰不道謂殺一家非死罪三人○人下唐支解人謂一家之中三人被殺俱無死罪者若三人之內有

或殺一人，謂三家，一本條解至死，亦不入，造畜毒厭魅，皆是，即合成，雖不入，造畜者，其多，或殺一人，謂三家，一本條解至死，亦不入，造畜毒厭魅，皆是，即合成，雖不入，造畜者，其多，

可具述、皆謂邪淫不軌、若毆告及謀殺伯叔父姑、兄姊、外祖父母、夫、夫之父母、謀殺伯叔等、殺此

不言故，聞若故，聞殺，亦入不道，舉謀殺未傷，殺四等以上尊長，依今從祖伯叔父姑，及妻

六曰大不敬謂毀大社及盜大祀神御之物、乘輿服御物、神御物者、謂大階上之御物、大社神寶亦同、乘輿服御物者、謂主上服御之物、人主以天下爲家、乘輿服御物

巡幸、不致指斥尊號、故託乘輿以背之、本條注云、服通盜及僞造神璽內印、神璽者、謂依令、錢許之日、牛

重之、合相御藥、誤不如本方、謂合和御藥、雖遵正方、及封臘、誤以丸爲散、令熱之類、若違御膳、誤延

食禁、營道御膳、類食經、而所御幸舟船誤不半周、帝王所之、莫不慶幸、舟船既凝、侯御、故曰御幸舟船

以上三事皆爲因誤得罪設未道制亦同八處如其故指斥衆輿情理切實此謂情有缺誤發言請愛

1. The first part of the document is a list of names and their corresponding addresses. The names are listed in the left column, and the addresses are listed in the right column. The names are: John A. Smith, John B. Smith, John C. Smith, John D. Smith, John E. Smith, John F. Smith, John G. Smith, John H. Smith, John I. Smith, John J. Smith, John K. Smith, John L. Smith, John M. Smith, John N. Smith, John O. Smith, John P. Smith, John Q. Smith, John R. Smith, John S. Smith, John T. Smith, John U. Smith, John V. Smith, John W. Smith, John X. Smith, John Y. Smith, John Z. Smith. The addresses are: 123 Main St., 456 Main St., 789 Main St., 101 Main St., 202 Main St., 303 Main St., 404 Main St., 505 Main St., 606 Main St., 707 Main St., 808 Main St., 909 Main St., 1010 Main St., 1111 Main St., 1212 Main St., 1313 Main St., 1414 Main St., 1515 Main St., 1616 Main St., 1717 Main St., 1818 Main St., 1919 Main St., 2020 Main St., 2121 Main St., 2222 Main St., 2323 Main St., 2424 Main St., 2525 Main St., 2626 Main St., 2727 Main St., 2828 Main St., 2929 Main St., 3030 Main St., 3131 Main St., 3232 Main St., 3333 Main St., 3434 Main St., 3535 Main St., 3636 Main St., 3737 Main St., 3838 Main St., 3939 Main St., 4040 Main St., 4141 Main St., 4242 Main St., 4343 Main St., 4444 Main St., 4545 Main St., 4646 Main St., 4747 Main St., 4848 Main St., 4949 Main St., 5050 Main St., 5151 Main St., 5252 Main St., 5353 Main St., 5454 Main St., 5555 Main St., 5656 Main St., 5757 Main St., 5858 Main St., 5959 Main St., 6060 Main St., 6161 Main St., 6262 Main St., 6363 Main St., 6464 Main St., 6565 Main St., 6666 Main St., 6767 Main St., 6868 Main St., 6969 Main St., 7070 Main St., 7171 Main St., 7272 Main St., 7373 Main St., 7474 Main St., 7575 Main St., 7676 Main St., 7777 Main St., 7878 Main St., 7979 Main St., 8080 Main St., 8181 Main St., 8282 Main St., 8383 Main St., 8484 Main St., 8585 Main St., 8686 Main St., 8787 Main St., 8888 Main St., 8989 Main St., 9090 Main St., 9191 Main St., 9292 Main St., 9393 Main St., 9494 Main St., 9595 Main St., 9696 Main St., 9797 Main St., 9898 Main St., 9999 Main St.

州二嶋中國等皆雖從于平家之方親光猶運志於源家之間不行向仍三箇度被遣追討使所謂高二郎大夫經直種直家子兩度拒押押字誤使宗房種益郎等一箇度也

〔日本書紀三十一〕六年七月乙未大赦天下但十惡盜賊不在赦例

〔隋書利法二十〕齊神武文襄並由魏相尙用舊法及文宣天保元年始命群官刊定魏朝麟趾格中三

年大尙書令趙郡王叔等奏上齊律十二篇中又列重罪十條一曰反逆二曰大道三曰叛四曰

降五曰惡逆六曰不道七曰不敬八曰不孝九曰不義十曰內亂其犯此十者不在八議論贖之限

〔唐律御調〕享保十年已十二月获生惣七エ訂正寫點被仰付候節差出候書付

十惡之内和律には不睦内亂之二條を除き有之候是は朝廷に憚り候所多く御座候によりて内亂之律を除き其相伴に不睦をも除くと相見へ申候但隋大業年中十惡之内二條を除き八惡に致し候先例を用申候事に御座候

〔唐六典六〕乃立十惡以懲叛逆禁淫亂沮不孝威不道其

一曰謀反略註 二曰謀大道略註

三曰謀叛略註 四曰惡逆略註

五曰不道略註 六曰大不敬略註

七曰不孝略註 八曰不睦略註

九曰不義略註 十曰內亂略註

此十者常赦之所不原

初北齊立重罪十條爲十惡一反逆二大道三叛四降五惡逆六不道七不敬八不孝九不義十内亂犯此者不在八議論贖之限隋氏頗有益損皇朝因之

〔續日本紀一文〕三年十月甲午詔赦天下有罪者但十惡強竊二盜不在赦限爲欲營造越智山科

之威勢不遵郡司之差科強加追喚爭致鬪亂公事壅滯無不由斯須科拒捍罪依法決罰而桀黠之徒不伏其罪望請依法決罰以濟公事謹請官裁者右大臣宣徒罪以下國司所決宜早下知任令科決四畿內宜准此

貞觀二年九月廿日

〔扶桑略記二十九卷〕延久三年十二月廿六日僧隆觀配流伊豆國依家地論以對捍檢非違使等下罪名於法家所被行也別仰云放遣別嶋可令守護也

〔朝野群載十卷〕左大辨

道拒捍使

被別當宣稱今日奉勅宣旨稱爲勸糺攝津國正稅成拒捍之輩可遣官一人者宜遣左衛門府生大原忠宗者

承平五年十二月四日

左衛門少志尾塞有安率

〔中右記〕大治四年四月十三日辛酉今朝齋院有奉幣略陰陽察行事并以下相率拒捍使檢非違使等行向一條

〔中右記〕大治五年四月五日丙子今日齋院出車定也略一條拘治橋修理任例可沙汰由仰左中弁

七日史久辰來申云一條大路拘治依無拒捍使檢非違使于今不仰下候如何仰云可申別當也則歸來云申別當之處以檢非違使季盛所補山城拒捍使也早拘治之事可仰季盛者則季盛參逢由面下知了

〔吾妻鏡四〕元曆二年○文治元年六月十四日乙丑參河守範賴并河內五郎義長等受二品○源賴朝命渡使者

於高麗國之間對馬守親光歸著彼嶋云々是去々年自當嶋欲上洛之折節平家零落于鎮西之間路次依不通不能解纜猶以在國之處爲中納言知盛卿并少貳種直等奉行可令參屋嶋之由及其僅九

稱文學等亦不在其間諸司諸博士等亦不在決等之限不在決笞之限

〔延喜式刑部二十九〕凡格式立制不定其罪律有本條依律罪之不緣違式科

〔政事要略六十七〕勸申无位孫王衣服色并著禁色罪狀事

右檢弘仁式云无位孫王准五位其服色者用縹元慶七年五月一日奉勅宣旨云聽二世其實王著青白襖雜律云違令者笞五十別式減一等名例律云六議者犯流罪以下減一等又條云應議者犯流罪以下聽贖又云省冊贖銅三斤者據此等文无位孫王可著縹色自非有奉勅宣旨不可著用青白襖等衣若當色之外著禁色者可謂犯違式罪笞卅者也孫王是入六議之內議減一等猶笞三十須徵贖銅三斤仍勸申

天慶五年二月十日大判事兼勸解由次官明法博士大和介惟宗朝臣公方依陽成院仰勸申

拒公使

〔律疏職制〕對捍詔使而無人臣之禮者校人臣之禮謂奉詔勸使人有所宣告對使拒捍不依因私事聞競者非謂事論競不干預詔勸者並從嚴習本法

〔法曹至要抄上科〕一拒國郡以上使事

關訟律云拒國郡以上使者杖六十疏云稱以上者在京諸司並是

案之雖非宜下之事或依公事有所追捕而對捍使皆得此罪若非見決使靡例散禁可令候便所又對捍詔使之科八虐之絞刑也依注載八虐別不抽注矣

〔唐律疏議二十〕諸拒州縣以上使者杖六十毆者加二等傷重者加關傷一等謂有所微嫌懼時拒捍不從者即被

禁掌而拒捍及毆者各加一等

〔類聚三代格十〕太政官符

應依法見決王臣家人事

右得攝津國解稱此國近京雜務繁多瘦弊未休黎民減少僅所有土人浪人皆稱王臣家人無畏國吏

〔北山抄〕勘會公文所司罪狀

公方在弼相論違勅違式事雖有勅彈公方不進過狀遂左遷畢依重被立行率分事歟今案事意以違
詔勅處違勅科以違奉勅官符處違式理可然乎在弼申云奉勅官符同是稱勅又違官符稱違勅有其
例公方云謄詔勅符移之類處違勅罪也云々公家被問旨者諸司申請可爲永格事等違其符爲違式
起自數慮重被立行事違其趣爲違勅也云々雖非謄勅符違其符之者處違勅之例可尋歟

違令違式

〔法曹至要抄〕上科一違令違式事

雜律云違令者笞五十別式者減一等

案之令有禁制律無罪名之者謂之違令又格式立制謂之違式其得咎罪矣

〔令義解〕凡嫁女奔妻不由所由皆不成婚不成奔所由後知滿三月不理皆不得更論謂所由者上條
祖父母父母等是也後知者既嫁奔之後而知其不由也三月者九十日也不得更論者不由所
由嫁奔已訖而所由後知滿三月不理者不可更追論縱三月內理者科違令罪不可更合離也

〔令集解〕門穴云私案不成婚謂結婚已定未成之間是仍所由悔者不娶耳奔亦云若已成奔者無離

合之文只科違令罪也此亦依法例經祖父母等嫁條記見又不得更論謂問答云如云不得悔者不
而此亦依法例經祖父母等嫁條記見又不得更論謂問答云如云不得悔者不

論爲罪新令問答爲罪生文也所由謂上條所計也假經父不經母爲不由所科違令也問不成婚謂

凡婚娶及奔之法不由不得婚奔以不答婚及奔訖者但科違令更不離及還也三月不理皆不得更

論謂不科違令是也

〔令義解〕六凡內外官人謂主典以上其番上既有特其位謂位座者身望官位及父祖之

也參禮問忤之類即於本司視是者六位以下及勳七等以下宜總量情決謂杖以下量其情狀多少

既云量情決謂即知或全決其罪或量減其科者其減決者亦不須依若長官謂本司五位以上長官下

又依上條五位以上受致敬謂禮然則次官應是致敬者長官必五位以上須知但長官者應無聽次官應

致敬者決其諸司判官以上及判事彈正巡察內舍人謂其監物者舉經大學諸博士文學等明重亦不可決也

用鞍轡及胡錄等之具爲弊尤甚事須禁絕若有違犯科違勅罪主司阿容亦與同罪

延曆廿三年十二月廿一日

〔類聚三代格〕太政官符

應納國庫國分二寺僧尼度緣戒牒事

右得佐渡國解僞被治部省去承和十年六月十四日符僞被太政官今月四日符僞檢案內太政官去弘仁四年二月三日下午同省符僞右大臣宣奉勅僧尼有身死并還俗其度緣戒牒早令進省省卽奉終申官毀之庶令奸人屏跡法流自澄者而今諸國請補僧尼死闕之日不進度緣是猶所司疎略所致也今被大納言正三位兼行右近衛大將民部卿陸奧出羽按察使藤原朝臣良房宣僞補國分二寺僧尼之闕先進度緣然後補之若乖此旨科違勅罪者略中謹請官裁者同宣依請諸國亦宜准此

承和十一年十一月十五日

〔江談抄雜二事〕公方違式違勅論事

問云公方違式違勅論其義如何答云天曆上村御時諸國受領不濟率分之輩勘公文之時勘會諸司文書加署判之者可勘其罪狀之由被問公方公方勸云當違式云々被仰云事出自勅語然則可違勅公方不可然之由執申爰以文範令問之間問云破勅語之起請皆可稱違式之者何故格條中注云若違此格者論以違勅之罪公方答云以此文案之格條事偏皆可謂違勅之者何更令始有違勅之詞矣格條事不可必稱違勅之故新立違勅之文文範又難云格條立違勅文文異陳狀然者今令條稱曰論以違勅之罪此條如何公方無所陳之旨遂依此過及左遷公方卒後子允亮思其父之耻研精此事七八年許遂相具文書向文範亭欲討論之處文範命云令問給之聖皇毛不御坐公方毛其身不存僕毛又老毛是討論以無益也云々允亮懷文書還舉問此論如私曲相須歟被答云私曲相須者及諸道之沙汰矣違勅者只公方一身也

其過品限皆沒入官

〔續日本紀^十〕神龜五年四月辛卯勅曰如聞諸國郡司等部下有騎射相撲及膂力者輒給王公卿相之宅有詔搜索無人可進自今以後不得更然若有違者國司追奪位記仍解見任郡司先加決罰准勅解却其誅求者以違勅罪罪之

〔類聚三代格〕太政官符

督課諸祝掃修神社事

右檢案內太政官去年四月十二日下諸國符稱掃修神社潔齋祭事國司一人專當檢校其掃修之狀每年申上若有違犯必科違勅之罪者今改建例更重督責若諸社祝等不勤掃修神社損穢宜收其位記差替還本即錄由狀便申上自今以後立爲恒例

寶龜八年三月十日

〔類聚三代格^{十二}〕太政官符

應彈正臺所彈移諸司官人准犯貶降事

右檢案內太政官去延曆十九年十二月十九日下式部省符稱得省解僞臺移僞給春秋祿日不參五位及雜任六位已下既違勅例事須准罪附考勘科者今依移狀將科違勅所犯事輕贖銅還重加以六位已下應至解官者宜待後處分者右大臣宣奉勅若科違勅實復過重宜施疎網以存懲肅其犯違法令宜處以恒科若事違彈例即科違式罪

延曆廿一年十月廿二日○類聚國史刑法部大同二年三月辛卯條與此同

〔類聚三代格^{十二}〕太政官符

應禁斷積皮穢事

右被右大臣宣稱奉勅牛之爲用在國切要負重致遠其功實多今聞無賴之流爭事驅修殺剝班積競

之人各杖一百之類、

其者變於先意謂如論八議罪犯先奏請議其犯十惡不用此律之類、

及及者事情連後謂如彼此俱罪之賊及應禁之物則沒官之類、

卽卽者意盡而復明謂如犯罪事發在逃者衆證明白卽同獄成之類、

若若者文雖殊而會上意謂如犯罪未老疾事發時老疾以老疾論若在徒年限內老疾者亦如之之類、

〔法曹至要抄^上科〕一違勅事

職制律云被詔書有所施行而違者徒二年失錯者杖八十、

案之奉詔勅之人故違其旨之時處此科可禁獄但失錯之時得杖罪因茲有位蔭之人至于減贖之科矣、

〔政事要略^{八十}〕問然者依不進過狀可當何罪哉或云違勅之足叶其法乎、

答違勅之科是徒二年也職制律所謂被詔書有所施行而違者條是也但至于不從勅命不進過狀頗涉不恭詔命無人臣禮罪當絞刑亦八虐被問之犯若可輕罪量以可進過狀更不可招重科如此之事須隨形勢、

〔續日本紀^六元明〕和銅六年三月壬午詔曰^{○中}賣買田以錢爲價若以他物爲價田并其物共爲沒官或

有札告者則給告人賣及買人並科違勅罪、

〔續日本紀^八元正〕養老五年三月乙卯詔曰制節謹度禁防奢淫爲政所先百王不易之道也王卿士及豪富之民多畜健馬競求亡限非唯損失家財遂致相爭鬪亂其爲條例令限禁焉有司條奏依官品之次定畜馬之限親王及大臣不得過二十四匹諸王諸臣三位已上十二匹四位六匹五位四匹六位已下至于庶人三匹一定以後隨闕充補若不能騎用者錄狀申所司卽投馬帳然後除補如有犯者以違勅論

定私鑄錢首從并家口罪名事

首處遠流從處徒三年家口處徒二年半

以前得明法曹司解情^略○中謹請官裁者宜定罪法申上者謹案賊盜律云謀反者皆斬父子沒官祖孫兄弟遠流名例律云共犯罪者以造意爲首隨從減一等又云二死三流各同爲一減者今比較輕重仍從者減首一等處徒三年家口減從一等處徒二年半

寶龜十一年十一月二日

〔令集解^{十一}〕案例律云其本應重而犯時不知者依凡論本應輕者聽從本注云或有父不識子主不識奴也即准凡人法合從良也

○按ズルニ唐律疏議ニ主不識奴ノ下ニ毆打之後然始知悉須依打子及奴本法不可以凡屬而論是名本應輕者聽從本ノ三十二字アリ

〔唐律疏議^六名例〕諸本條別有制與例不同者依本條^{○疏}即當條雖有罪名所爲重者自從重^{○疏}其

本應重而犯時不知者依凡論本應輕者聽從本

〔唐律疏議^五名例〕若本條言皆者罪無首從不言皆者從首從法

〔明律^{條例上}〕例分八字之義

以者與真犯同謂如監守貿易官物無異真盜故以枉法論以盜論並除名刺字罪至斬絞並全科

准准者與真犯有間矣謂如准枉法准盜論但准其罪不在除名刺字之例罪止杖一百流三千

里^里皆皆者不分首從一等科罪謂如監臨主守職役同情盜所監守官物併贓滿貫皆斬之類

各各者彼此同科此罪謂如諸邑人匠搬赴內府工作若不親自應役雇人冒名私自代替及替

其罪止有半年徒若應加杖者杖一百應減者以杖九十爲次

〔法曹至要抄^{刑上}〕一加罪事

名例律云稱加者就重次者

案之假令有犯笞十之罪加一等者笞廿又加一等者笞卅又加一等者笞卅又加一等者笞五十又加一等者杖六十又加一等者杖七十又加一等者杖八十又加一等者杖九十又加一等者杖一百又加一等者徒一年又加一等者徒一年半又加一等者徒二年又加一等者徒二年半又加一等者徒三年又加一等者近流又加一等者中流又加一等者遠流又加一等者絞罪又加一等者斬罪也然則笞杖者各以十爲一等徒罪者以半年爲一等三流二死又以如此加罪之法自輕至重只依次第所加也

〔法曹至要抄^{刑上}〕一減罪事

名例律云稱減者就輕次^{○律文又見政事要略}唯二死三流各同爲一減者

案之假令有犯笞五十之罪減一等者笞卅又減一等者笞卅又減一等者笞廿又減一等者笞十也又有犯杖一百之罪減一等者杖九十又減一等者杖八十又減一等者杖七十又減一等者杖六十也又有犯徒三年之罪減一等者徒二年半又減一等者徒二年又減一等者徒一年半又減一等者徒一年又減一等者杖一百也又有犯遠流之罪減一等者須至中流也而至于二死三流者各同爲一減之故更超至徒三年也又有犯斬罪之者減一等者須至絞罪也^{○也下一本有然而二字}於二死三流者依同爲一減更至于遠流者也然則二死三流之罪至加時者次第加之於減時者不依次第多超所減也矣

〔令集解^八〕名例律云罪止有半年徒若應加杖者杖一百應減者以杖九十爲次者

〔類聚三代格^八〕太政官符

案之稱。衆稱謀者此律除不證者之外皆須三人二人可謂衆證是三等以上親并可相容隱之人不得爲證之故也

〔金玉掌中抄〕一舉重明輕罪事

名例律云應出罪者則舉重以明輕疏云夜無故入人家主人格殺者勿論

〔金玉掌中抄〕一舉輕明重罪事

名例律云其應入罪者則舉輕以明重疏云謀殺祖父母父母及外祖父母夫皆斬無已傷已殺之文如有殺傷者舉始謀是輕尙得死罪殺及謀已傷是重明從皆斬之坐

〔唐律疏議名例〕諸斷罪而無正條其應出罪者則舉重以明輕疏其應入罪者則舉輕以明重

〔西宮記〕臨時成勸文事

名例律云稱加者就重次稱減者就輕次唯二死三流各同爲一減加者數滿乃坐假令依賊盜律竊盜

一等爲次一寸止徒一年

〔西宮記〕臨時於市行事裏書

勘申逃亡囚藤井忠茂捕得後如本着欽兼可加亡罪哉否事

名例律云稱加者就重次不得加至於死疏云雖無罪止之文唯合加至遠流不得加至於死

〔唐律疏議名例〕諸稱加者就重次稱減者就輕次疏唯二死三流各同爲一減疏加者數滿乃坐

又不得加至於死本條加入死者依本條加入較者不加至斬者

疏議曰加者數滿乃坐假令犯盜少一寸不滿十匹依賊盜律竊盜五匹徒一年五匹加一等爲少

一寸止徒一年又不得加至於死者依捕亡律宿衛人在直而亡者一日杖一百二日加一等雖無

罪止之文唯合加至流三千里不得加至於死本條加入死者依本條圖詔律毆人折二支流三千

里又條云部曲毆傷良人者加凡人一等加者加入於死此是本條

ヲ犯ストキハ此限ニ在ラズ、

〔政事要略五十九〕名例律云稱「坐及罪之坐之與同罪者止坐其罪稱准枉法論准盜論之類罪止遠流但准其罪並不在除免倍贓加役流之例者」

○按ズルニ唐律疏議ニ止坐其罪ノ下ニ注シテ云ク死者止絞而已ト又倍贓ノ下ニ監主加罪ノ四字アリ加役流之例ノ下ニ稱以枉法論及以盜論之類皆與真犯同ト云フ十六字アリ、

〔政事要略八十〕勸申於稱與同罪可減贓哉否事

右被官宣傳於遠勸罪稱與同罪若可有減贓哉宜勸申者檢名例律云稱與同罪者只坐其罪並不在除免倍贓加役流之例者據檢此文至稱與同罪只可准其罪若有位蔭者无妨減贓仍勸申、

延長六年十二月四日

明法博士惟宗公方

〔令集解九〕穴云○中依律稱孫者曾玄同稱二等親者曾玄非其中、

〔文保記〕無服生三ヶ月以後至七歲謂之

就嘉祿二年八月乃問狀左衛門大志中原名列答云律云稱年者以三百六十日稱入年者以籍爲定

集解云至正月爲一年、

〔唐律疏議六〕名例諸稱日者以百刻計功庸者從朝至暮役時多者雖不滿日皆稱年者以三百六十日稱人年者以籍爲定疏稱稱衆者三人以上稱謀者二人以上謀狀彰明應一人同二人之法

〔法曹至要抄上科〕一衆證事

名例律云稱衆者三人以上稱謀者二人以上謀狀顯彰雖一人同二人之法疏云稱衆者斷獄律云七位以上犯罪不據衆證定罪必須三人以上始成衆證但稱衆者准此文稱謀者賊盜律云謀殺人徒二年皆須二人以上餘條稱謀各准此例假有人持刀杖入他家勸有冤嫌來欲相殺雖止一人亦同謀法者、

失罪是ナリ、又其罪ノ疑ハシクシテ決シ難キモノアリ、此疑罪ト過失罪トハ、死罪ニ當ルト、雖モ其狀ニ依リ、贖ヲ以テ論ズルコトアリ、

化外人ノ如キハ、常律ヲ以テ罰シ難キモノアリ、故ニ同類相犯ストキハ、其國法ニ依リテ處斷シ、異類相犯ストキハ、我國法ニ依ルナリ、

僧尼ノ犯罪ハ、頗ル之ヲ寬優ニセシモノニテ、杖ヲ施スコトナクシテ、代フルニ苦使ヲ以テシ、寫經灑掃等ノ事ニ從ハシメ、其罪徒ニ至レバ、度牒ヲ以テ之ニ當ツルコト、官人ノ官當法ノ如クニシテ、更ニ還俗セシムルナリ、

老者、幼者、若シクハ廢疾ノモノハ、特ニ贖罪ヲ聽シ、極老至幼ハ、死罪ヲ犯スト雖モ刑ニ加ヘズ、婦人ハ獄中ニ在リテハ、舅夫ト別居シ、懷胎スルモノハ、散禁シテ拷決セズ、死罪ヲ犯スモノハ、產後二十日ヲ經テ處刑シ、流罪ヲ犯ストキハ、決杖シテ發遣セズ、

又數人連帶シテ罪ヲ得ルアリ、即チ同司官人ノ中ニテ、公罪ヲ犯ス時ハ、四等連坐ノ法ニ依ルモノニテ、所由ヲ以テ首トナシ、餘ヲ從トナス、例ヘバ主典所由ナレバ主典ヲ首ト爲シ、判官ヲ第二從ト爲シ、次官ヲ第三從ト爲シ、長官ヲ第四從ト爲シ、其等差ニ從ヒテ刑ヲ科スルナリ、又緣坐アリ、親族故舊ノ犯罪アル時ハ、之ガ爲ニ連累セラレテ罪セラル、ヲ謂フナリ、又二人以上其犯スルトキハ、首謀者ヲ首犯トシ、其餘ヲ從犯トシテ、其罪ニ等差アリ、又再犯以上ノモノハ、其數ニ從ヒテ其刑ヲ加フ、又二罪俱發スル時ハ、其重キモノヲ以テ論ズルナリ、

當時ノ法律ハ、特ニ親屬ノ關係ヲ重ンゼシニヨリ、常人ニ在リテハ、知リテ告發セザルトキハ、罪トナルベキ事件ニテモ、同居及三等以上ノ親屬ニ在リテハ、相爲ニ之ヲ容隱スルコトヲ得ルナリ、又家人奴婢モ主ノ惡事ヲ掩ヒテ訴ヘザルモ亦罪ナシトス、但シ謀叛以上ノ罪

古事類苑

法律部一

上編

法律總載

六議 六賊圖

法律ノ事タル、古今ヲ通ジテ一編トスルハ、編輯上頗ル不便ナレバ、今分チテ三編トス、即チ凡ソ神代ヨリ安徳天皇ノ壽永二年マデヲ上編トシ、後鳥羽天皇ノ元暦元年ヨリ後陽成天皇ノ慶長四年マデヲ中編トシ、後陽成天皇ノ慶長五年ヨリ孝明天皇ノ慶應三年マデヲ下編トス、即チ是其上編ナリ、但シ事實ノ貫聯スルモノニ至リテハ、此限ニ拘ハラザルモノアリ、

大寶ノ律ニハ別ニ其用字法アリテ、其意義ヲ定メ、兩解ノ惑ナカラシム、例ヘバ反坐ト云ヒ、罪之ト云ヒ、坐之ト云ヒ、與同罪ト云フハ、其罪ニ坐スルノミニシテ、眞犯ト同ジカラザルコトヲ示シ、皆ト云ヘバ、罪ニ主從ナク、皆ト云ハザレバ、主從ノ法ニ從フナドノ類是ナリ、律ニ明文ナキモ、令ニ違ヒ、格式ニ違フモノハ之ヲ罰ス、違令違式ノ罪是ナリ、而シテ違勅ヲ以テ最モ重シトス、又律令格式ニ明文ナキモ、事ニ於テ犯スベカラザルモノハ、其輕重ニ從ヒテ、答若シタハ杖ヲ科ス、是ヲ不應爲罪ト爲ス、

罪ノ中ニ於テ最モ重キモノハ八虐ト爲ス、因テ之ヲ律ノ卷首ニ掲ゲタリ、初メ十惡ト爲シシガ、大寶令ニ至リ、約シテ八虐ト爲ス、此八虐ハ必ズシモ極刑ニハアラザレドモ、其情ノ殊ニ惡ムベキヲ以テ、常赦ニモ恩宥ニ霑フコトヲ得ザルナリ、又情狀ノ惡ムベキモノアリ、過

法律部二十八

中編

訴訟人

訴訟文書

法律部二十九

中編

告訴

自首併入

聽訟

法律部三十

中編

推鞠

斷罪

中編

詐僞

犯姦

博奕

法律部二十五

中編

追捕

囚禁

法律部二十六

中編

赦宥

法律部二十七

中編

訴訟

沒收 放扶持 禁帶刀 併入 放與力同心 放家人號

過怠

法律部二十一

中編

解免官職

責罪過 怠狀 附

法律部二十二

中編

盜犯 人勾引 放火 附遺物 併入

法律部二十三

中編

殺傷

鬪毆

法律部二十四

法律部十八

中編

斬罪

切腹

梟首

磔

串刺
車裂
鋸挽
牛裂

火焙

煮殺
投水
臥漬

肉刑

法律部十九

中編

流罪

追放

法律部二十

中編

上編

告訴

自首

覺舉
研入

法律部十五

上編

糾彈

推鞠

斷罪

行決
研入

法律部十六

中編

法律總載

法律部十七

中編

政書

犯姦

博奕

法律部十一

上編

追捕

囚禁

召籠
研入

法律部十二

上編

赦宥

法律部十三

上編

訴訟

聽訟

法律部十四

法律部八

上編

盜犯

略人

放火

失火 併入

闌遺物

宿藏物 併入

闌入

法律部九

上編

殺傷

鬪毆

法律部十

上編

詐僞

私鑄錢 闕

流刑 移鄉勒還本鄉 放逐京外

法律部五

上編

死刑

肉刑

髡錯 辟入

法律部六

上編

贖罪

沒官

解免官職

責罪過

忘狀 闕

法律部七

上編

左遷

古事類苑

法律部第一冊目錄

法律部一

上編

法律總載 六議 六賊圖

法律部二

上編

政書

法律部三

上編

笞杖刑

徒刑 著欽政圖

法律部四

上編

法律部一	上編 法律總載	目四
------	---------	----

事後受財

以財行求

受所監臨賊

受舊官屬饋與

於使所受送遺

私用所監臨財物

坐賊

監守盜

犯用官物

貿易官物

私借官物

彼此俱罪賊

乞索賊

評賊

倍賊 取與不和賊

同

同

五四

五五

同

同

五七

同

五八

六一

六二

同

六三

同

共犯

四一

重犯

四二

二罪俱發

同

親族容隱

四三

附六議請
贖併入減

名稱

四五

議法

四六

請法

同

減法

同

贖法

四七

婦人處刑

同

兼有議請減

同

蔭親

四八

議請減者處分

同

徵贖例

同

附六賊 雜賊併入

名稱

五二

強盜賊

五三

竊盜賊

同

枉法賊 不枉法賊

同

古事類苑

法律部一

上編

法律總裁

六議

六賊綱

律文用字例

違勅

違令違式

拒公使

十惡

八虐

過失疑罪

不應爲

化外人犯罪

僧尼犯罪

老幼廢疾犯罪

婦人犯罪

連坐

緣坐

三

七

〇

一

一

三

一

四

二

九

三

〇

同

同

三

二

五

三

六

八

AE
35.
2
K6
1933
V. 23

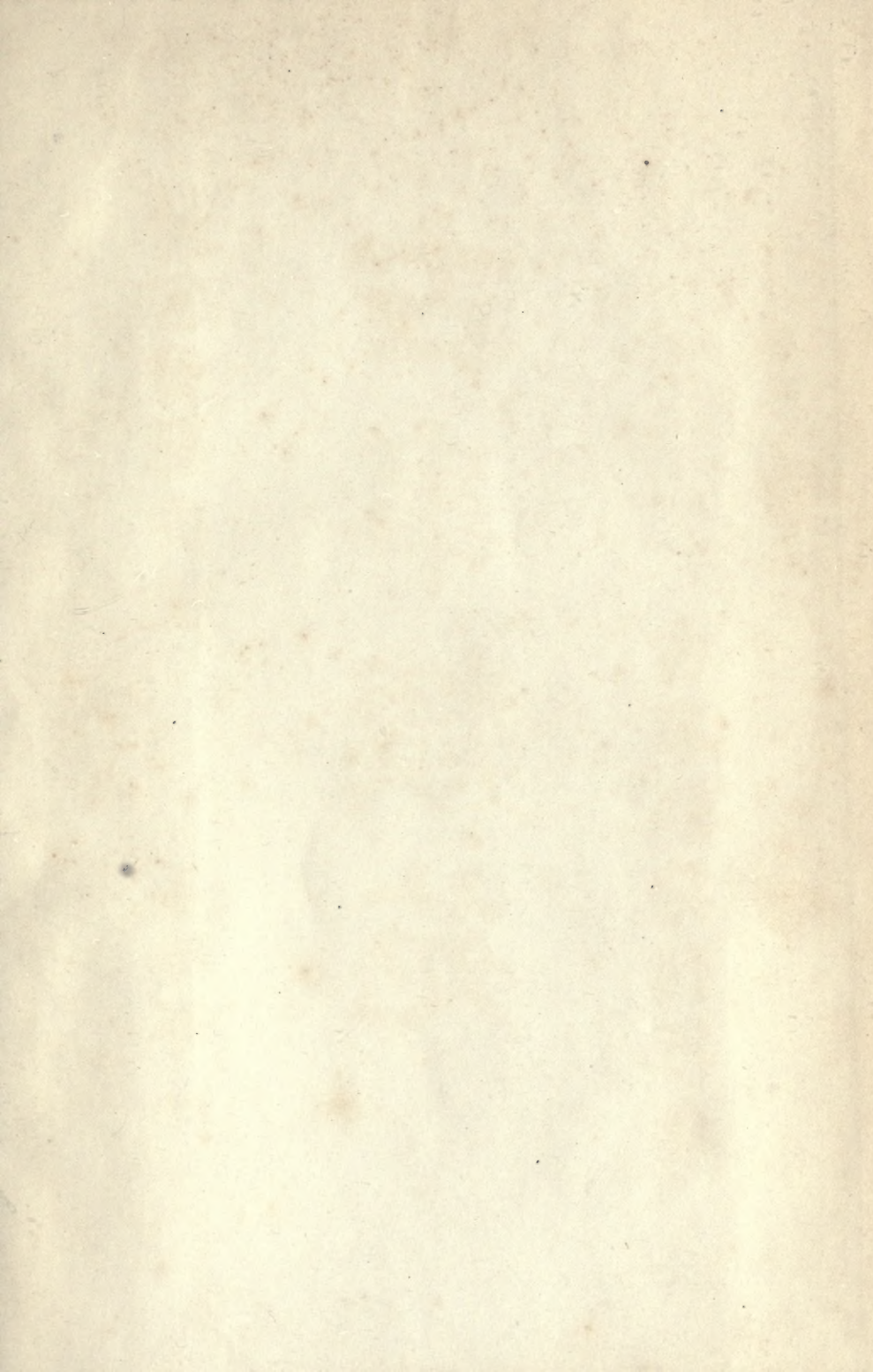


神宮司廳藏版

法律部一

古事類苑

古事類苑刊行會





AE

Koji ruien

35

.2

K6

1933

v.23

East

Asiatic

Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
